

久保園遺跡 4

— 第4次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1148集

<本文編>

2012

福岡市教育委員会

久保園遺跡 4
— 第4次調査報告 —
<本文編>

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1148集
二〇一二年
福岡市教育委員会

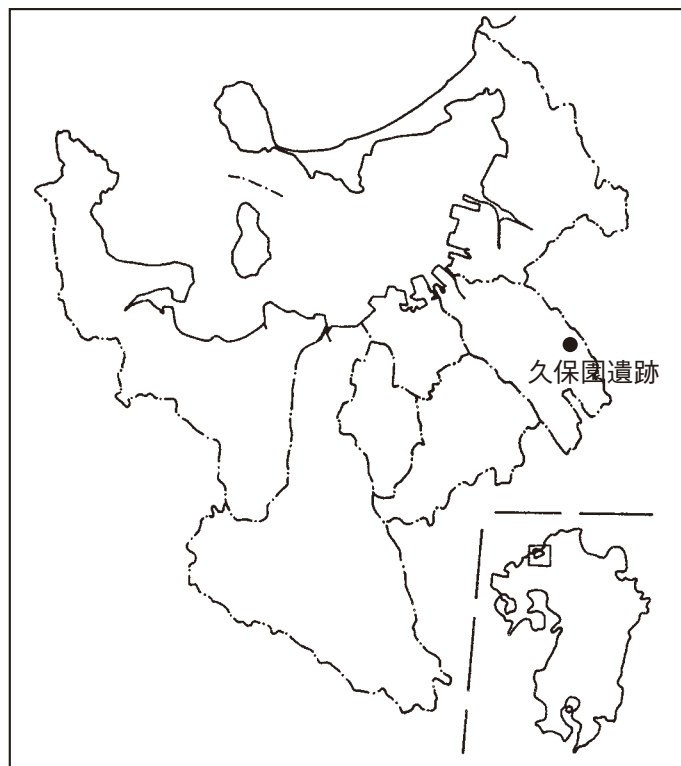
KU BO ZONO

久保園遺跡 4

— 第4次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1148集

<本文編>



遺跡略号 KBZ - 4

調査番号 0827

2012

福岡市教育委員会

序

玄界灘を挟んで、その西を中国大陸、北を朝鮮半島に面する福岡市は、古来より対外交流を基軸とした独特の歴史的発展を遂げてきました。福岡市にはこれを伝える歴史的遺産が多く残されています。これらを多くの人々に知っていただき、後世の人々に伝え残していくことは現在に生きる私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では遺跡の保護に努めていますが、開発事業によりやむを得ず失われていく埋蔵文化財については、事前に発掘調査を実施し記録保存に努めているところです。

本書は、福岡国際空港発着便の過密化による空港設備工事にともない実施された、空港内に所在する遺跡のひとつ久保園遺跡の第4次調査の発掘成果を報告するものです。

遺跡の所在する福岡平野は、弥生時代には「奴国」と呼ばれ、日本における稲作伝来の地でもあります。本調査でも「奴国」の時代から古代に至るまでの稲作に関わる遺構や遺物が数多く出土し、当時の人々の暮らしぶりを知る上で大きな成果を上げることができました。

本書が、市民の方々が文化財に対する理解を深める際の一助となり、また学術研究の分野でも活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の前段階から、発掘調査、本書の刊行に至るまで、費用負担をはじめ多くのご協力をいただいた国土交通省九州地方建設事務所、発掘調査に際し多くの便宜を払っていただいた大阪航空局福岡空港事務所ほか、多くの方々のご協力とご理解に対し、心からの謝意を表します。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡空港施設工事に伴い、福岡市博多区大字東平尾地内(福岡空港内)において発掘調査を実施した久保園遺跡第4次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、国土交通省の受託事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 遺構実測図の作成は、池崎讓二・榎本義嗣・今井隆博・板倉有太・比嘉えりか・奥野正人・角信喜・上方高弘・高赫淳・小嶋麻世・坂口剛毅・白石溪浚・田尻直子・立石真二・中村理・藤野雅基が行った。
5. 遺物実測図の作成は、池崎・榎本・今井・板倉・比嘉・福蘭美由紀・西澤千絵里・朝岡俊也・井上加代子・奥野・平川敬治・山口朱美・米倉法子が行った。また、石器の一部については、株式会社パスコに委託した。
6. 遺構および遺物写真の撮影は、池崎・榎本・今井・板倉・比嘉・力武卓治が行った。また、空中写真撮影およびデジタルモザイク合成は、写測エンジニアリング株式会社に委託した。
7. 挿図の製図は、池崎・榎本・今井・板倉・比嘉・福蘭・朝岡・井上・副田則子・山口・山崎賀代子・米倉・星野恵美・林田憲三が行った。また、石器の一部については、株式会社パスコに委託した。
8. 本書で用いた方位は磁北で、真北より6°40′西偏する。
9. 本書に掲載した国土座標値は、世界測地系(第Ⅱ座標系)によるものである。なお、3級基準点測量については、写測エンジニアリング株式会社に委託した。
10. 遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、溝をSD、井戸をSE、土坑をSK、ピットをSP、水田をSS、その他の遺構をSXと略号化した。
11. 遺物番号は各調査区の通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
12. 出土遺物の保存科学処理は、福岡市埋蔵文化財センターの上角智希、西澤が行った。
13. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、同センターに保管される予定である。
14. 本書の執筆は、付編を除き、池崎・榎本・今井・板倉・比嘉が行い、担当箇所は本文目次に掲載した。
15. 出土試料の自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。出土土器の胎土分析は、石田智子(九州大学大学院比較社会文化研究院)が行った。水田関連遺構の検討は、朝岡俊也(福岡大学人文学部学生)が行った。出土ガラス製品の分析は、西澤千絵里(福岡市埋蔵文化財センター)が行った。出土動物遺存体の分析は、屋山洋(福岡市教育委員会)が行った。なお、これらの分析結果については付編として巻末に掲載した。また、出土木器については山田昌久教授(首都大学東京)、山口讓治(福岡市教育委員会)にご教示を頂いた。
16. 本書の編集は、池崎・今井・板倉・比嘉の協力を得て、榎本が行った。

遺 跡 名	久保園遺跡	調 査 次 数	第4次	遺 跡 略 号	KBZ - 4
調 査 番 号	0827	分布地図図幅名	上臼井22	遺 跡 登 録 番 号	020083
申 請 地 面 積	24,900m ²	調 査 対 象 面 積	6,300m ²	調 査 面 積	5,140.0m ²
調 査 地	福岡市博多区大字東平尾地内(福岡空港内)			事 前 審 査 番 号	19 - 1 - 17
調 査 期 間	平成20(2008)年7月14日～平成22(2010)年8月27日				

本文目次

I. はじめに（池崎）	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	2
II. 遺跡の位置と環境（板倉）	3
1. 調査地点の立地と周辺地形	3
2. 月隈丘陵西麓の歴史的環境	3
III. 調査の記録	9
1. 調査の概要（池崎）	9
2. I区の調査（板倉）	11
1) 概要	11
2) 遺構と遺物	13
(1) 1面の調査	13
(2) 2面の調査	45
(3) 3面の調査	119
3) 小結	141
3. II区の調査（今井）	143
1) 概要	143
2) 遺構と遺物	145
(1) 1面の調査	145
(2) 2面の調査	146
(3) 3面の調査	190
(4) その他の出土遺物	204
3) 小結	208
4. III区の調査（池崎）	209
1) 概要	209
2) 遺構と遺物	210
(1) 1・2面の調査	210
3) 小結	253
5. IV区の調査（池崎・比嘉）	254
1) 概要（池崎）	254
2) 遺構と遺物	254
(1) 1面の調査（池崎）	254
(2) 2面の調査（比嘉）	269
3) 小結（池崎）	300
6. V区の調査（榎本）	301
1) 概要	301
2) 遺構と遺物	302
(1) 1面の調査	302
(2) 2面の調査	320
3) 小結	336

IV. 結語 (今井)	337
付編 1 久保園遺跡第4次調査の自然科学分析 (パリノ・サーヴェイ株式会社)	341
付編 2 那珂川・御笠川流域における弥生土器および粘土の胎土分析 (九州大学大学院比較社会文化研究院 石田智子ほか)	371
付編 3 福岡市の遺跡にみられる古代律令期の灌漑水利 (福岡大学人文学部 朝岡俊也)	377
付編 4 久保園遺跡第4次調査出土玉類に関する保存科学的調査 (福岡市埋蔵文化財センター 西澤千絵里)	379
付編 5 久保園遺跡第4次調査出土動物遺存体について (福岡市教育委員会 屋山洋)	383

挿図目次

第 1 図 久保園遺跡と周辺主要遺跡(1/25,000) … 5	第 25 図 SK0026 実測図(1/30) … 33
第 2 図 周辺調査区と地形(1/5,000) … 6	第 26 図 杭列実測図(1/100) … 34
第 3 図 周辺調査区と地形 (昭和初期)(1/5,000) … 7	第 27 図 SS0056~0060 出土遺物実測図(1/1、1/3) … 35
第 4 図 調査区位置と区・グリッド割り(1/1,000) … 8	第 28 図 SX0027・0061 出土遺物実測図(1/1、1/3、1/4) … 36
第 5 図 I 区 1 面全体図(1/200) … 12	第 29 図 SS・SX 出土石器実測図(1/2、1/3) … 37
第 6 図 調査区壁面土層実測図(1)(1/60) … 14	第 30 図 攪乱・客土出土遺物実測図・写真(1/2) … 38
第 7 図 調査区壁面土層実測図(2)(1/60) … 15	第 31 図 I 区 2 面全体図(1/200) … (折り込み)
第 8 図 SD0001・0002・0022 出土遺物実測図(1/3、1/4) … 16	第 32 図 SB0068 実測図(1/50)および出土遺物実測図(1/3、1/4) … 47
第 9 図 SD0001・0002 出土遺物実測図(1)(1/3、1/4) … 17	第 33 図 SD0005 上層出土遺物実測図(1/3) … 48
第 10 図 SD0001・0002 出土遺物実測図(2)(1/3、1/4) … 18	第 34 図 SX0008・SD0005 上層出土木器実測図(1/2、1/4) … 49
第 11 図 SD0001・0002 出土遺物実測図(3)(1/3、1/4) … 19	第 35 図 SD0003 実測図(1/100) … 50
第 12 図 SD0001・0002 出土遺物実測図(4)(1/2、1/3) … 20	第 36 図 SD0003 出土遺物実測図(1)(1/4) … 51
第 13 図 SD0002 出土遺物実測図(1/1、1/2) … 21	第 37 図 SD0003 出土遺物実測図(2)(1/3、1/4) … 52
第 14 図 SD0022 出土遺物実測図(1/3) … 21	第 38 図 SD0003 出土遺物実測図(3)(1/3) … 53
第 15 図 SD0029 実測図(1/60、1/100) … 23	第 39 図 SD0003・0053 出土遺物実測図(1/2、1/4) … 54
第 16 図 SD0029 出土遺物実測図(1)(1/3) … 24	第 40 図 SD0003 出土石器実測図(1/1、1/2、1/3) … 55
第 17 図 SD0029 出土遺物実測図(2)(1/3) … 25	第 41 図 SD0039・0050・0055 出土遺物実測図(1/3、1/4) … 56
第 18 図 SD0029 出土遺物実測図(3)(1/4) … 26	第 42 図 SD0042・0012 実測図(1/60、1/100) … 57
第 19 図 SD0029 出土遺物実測図(4)(1/4) … 27	第 43 図 SD0042 (西)・0053 出土遺物実測図(1/3) … 58
第 20 図 SD0029 出土遺物実測図(5)(1/2、1/3、1/4) … 28	第 44 図 SD0005 実測図(1/60、1/100) … 59
第 21 図 SD0001・0002・0029 出土木器実測図(1/2、1/4、1/6) … 29	第 45 図 SD0005 出土遺物実測図(1)(1/4) … 60
第 22 図 SX0025 実測図(1/50) … 30	第 46 図 SD0005 出土遺物実測図(2)(1/3、1/4) … 61
第 23 図 SX0025 出土遺物実測図(1/3) … 31	第 47 図 SD0005 出土遺物実測図(3)(1/2、1/3) … 62
第 24 図 SX0025 および 1 面出土木器実測図(1/2、1/4) … 32	

第 48 図	SD0005 出土石器実測図(1/2、1/3) … 63	第 88 図	SX0046 出土石器実測図(1/3) …… 105
第 49 図	SD0005 出土木器実測図(1)(1/4) …… 64	第 89 図	SX 土器群出土石器実測図(1/3) …… 106
第 50 図	SD0005 出土木器実測図(2)(1/4) …… 65	第 90 図	SX0067 出土遺物実測図(1/3) …… 108
第 51 図	SD0005 出土木器実測図(3)(1/4) …… 66	第 91 図	SX0066 出土遺物実測図(1/3) …… 109
第 52 図	SD0005 出土木器実測図(4)(1/2、1/4) …… 67	第 92 図	2面出土石器実測図(1/1、1/2、1/3) … 110
第 53 図	SD0005 出土木器実測図(5)(1/4) …… 68	第 93 図	I区3面全体図(1/200) …… 120
第 54 図	SD0005 出土木器実測図(6)(1/8) …… 69	第 94 図	SD0024 実測図(1/60、1/100) …… 121
第 55 図	SD0032 出土遺物実測図(1)(1/3) …… 70	第 95 図	SD0024 杭列実測図(1/50) …… 122
第 56 図	SD0032 出土遺物実測図(2)(1/1、1/4) … 71	第 96 図	SD0024 出土遺物実測図(1)(1/4) … 123
第 57 図	SD 実測図(1/60、1/100) …… 72	第 97 図	SD0024 出土遺物実測図(2)(1/4) … 124
第 58 図	SD0033 出土遺物実測図(1/3) …… 73	第 98 図	SD0024 出土遺物実測図(3)(1/3) … 125
第 59 図	SD0036・0037 杭列実測図(1/50) …… 74	第 99 図	SD0024 出土遺物実測図(4)(1/4) … 126
第 60 図	SD0036 出土遺物実測図(1/3) …… 75	第 100 図	SD0024 出土遺物実測図(5)(1/4) … 127
第 61 図	SD0034 出土遺物実測図(1)(1/3、1/6) … 76	第 101 図	SD0024 出土遺物実測図(6)(1/4) … 128
第 62 図	SD0034 出土遺物実測図(2)(1/3) …… 77	第 102 図	SD0024 出土木器実測図(1/4、1/8) … 129
第 63 図	SD0034 出土遺物実測図(3)(1/3) …… 78	第 103 図	SX0048 出土遺物実測図(1/4) …… 131
第 64 図	SD0023・0037 出土遺物実測図(1/3) … 79	第 104 図	SD0012・0042(東)出土遺物実測図 (1/4) …… 132
第 65 図	投弾法量散布図および実測図(1/2) … 80	第 105 図	SD0012・0042(東)・SX0049 出土遺 物実測図(1/3) …… 133
第 66 図	SD0036・0034・0023 出土遺物実測図 (1/1、1/2、1/3) …… 81	第 106 図	SD0024・0012・0042(東)出土石器実 測図(1/2、1/3) …… 134
第 67 図	SD0036・0034・0023 出土石器実測図 (1/3) …… 82	第 107 図	SD0054・0043 実測図(1/40) および SD0043 出土遺物(1/3) …… 135
第 68 図	SD0036 出土木器実測図(1/4) …… 83	第 108 図	土層実測地点および東壁・西壁土層図 (1/60、1/1000) …… 144
第 69 図	SD0023 出土木器実測図(1/2、1/4、 1/8) …… 84	第 109 図	調査区横断土層図(1)(1/60) … (折り込み)
第 70 図	SD0007・0010・0051 実測図(1/40、 1/60) …… 86	第 110 図	調査区横断土層図(2)(1/60) … (折り込み)
第 71 図	SD0007・0010・0051・SS0064 出土遺 物実測図(1/3) …… 87	第 111 図	1面畦土層断面図(1/40) …… 145
第 72 図	SX 土器群実測図(1)(1/100) …… 88	第 112 図	1面出土遺物(1/2、1/3) …… 145
第 73 図	SX 土器群実測図(2)(1/100) …… 89	第 113 図	SD0065 杭全体図(1/120) … (折り込み)
第 74 図	SX0021・0040 出土遺物実測図(1/4) … 91	第 114 図	SD0065 東岸杭実測図(1/60) … (折り込み)
第 75 図	SX0046 出土遺物実測図(1/3) …… 92	第 115 図	SD0065 西岸杭実測図(1)(1/60) … (折り込み)
第 76 図	SX0013 出土遺物実測図(1)(1/4) …… 93	第 116 図	SD0065 西岸杭実測図(2)(1/60) … (折り込み)
第 77 図	SX0013 出土遺物実測図(2)(1/3、1/4) … 94	第 117 図	SX0071 実測図(1/40) …… 147
第 78 図	SX0016 出土遺物実測図(1/3) …… 95	第 118 図	SX0075 実測図(1/40) …… 148
第 79 図	SX0017 出土遺物実測図(1/3、1/4) … 96	第 119 図	SD0065 東岸杭(1/80) …… 149
第 80 図	SX0014 出土遺物実測図(1)(1/4) …… 97	第 120 図	SD0065 出土土器実測図(1)(1/3) … 151
第 81 図	SX0014 出土遺物実測図(2)(1/4) …… 98	第 121 図	SD0065 出土土器実測図(2)(1/3) … 152
第 82 図	SX0018 出土遺物実測図(1)(1/3、1/4) … 99	第 122 図	SD0065 出土土器実測図(3)(1/3) … 153
第 83 図	SX0018 出土遺物実測図(2)(1/4) … 100	第 123 図	SD0065 出土土器実測図(4)(1/3) … 154
第 84 図	SX0011 出土遺物実測図(1)(1/4) … 101	第 124 図	SD0065 出土土器実測図(5)(1/3) … 155
第 85 図	SX0011 出土遺物実測図(2)(1/4) … 102	第 125 図	SD0065 出土土器実測図(6)(1/3) … 155
第 86 図	SX0015・0009 出土遺物実測図(1/4) … 103	第 126 図	SD0065 出土土製品実測図(1/2) …… 156
第 87 図	SX0006 出土遺物実測図(1/6) …… 104	第 127 図	SD0065 出土石器実測図(1)(1/1) … 157

第128図	SD0065 出土石器実測図(2)(1/1) …	158	第165図	SD0077・0078・0079 実測図(1/80) …	191
第129図	SD0065 出土石器実測図(3)(1/2、 1/3) ……	159	第166図	SD0077 遺物出土状況実測図(1/40) …	192
第130図	SD0065・SX0075 出土木器実測図 (1/3) ……	160	第167図	SD0077 出土土器実測図(1)(1/3) …	193
第131図	SX0071・0075 出土遺物実測図(1/2、 1/3) ……	160	第168図	SD0077 出土土器実測図(2)(1/3) …	193
第132図	SD0073 出土土器実測図(1)(1/3) …	161	第169図	SD0078・0079 土層断面実測図(1/60) …	194
第133図	SD0073 出土土器実測図(2)(1/3) …	162	第170図	SD0078 出土土器実測図(1)(1/3) …	195
第134図	SD0073 出土土器実測図(3)(1/3) …	163	第171図	SD0078 出土土器実測図(2)(1/2、 1/3) ……	196
第135図	SD0073 出土土器実測図(4)(1/3) …	164	第172図	SD0078 出土木器実測図(1/6) ……	197
第136図	SD0073 出土土器実測図(5)(1/3) …	165	第173図	SD0079 出土土器実測図(1/2、1/3) …	197
第137図	SD0073 出土土器実測図(6)(1/3) …	166	第174図	SD0080・0081 実測図(1/40、1/60) …	198
第138図	SD0073 出土土器実測図(7)(1/3) …	167	第175図	SD0080 出土土器実測図(1/2、1/3) …	199
第139図	SD0073 出土土製品実測図(1/2) ……	167	第176図	SD0080 出土石器実測図(1/1) ……	200
第140図	SD0073 出土木器実測図(1)(1/6) …	168	第177図	SD0081 出土土器実測図(1/3) ……	200
第141図	SD0073 出土木器実測図(2)(1/8) …	169	第178図	3面畦土層断面実測図(1/40) ……	201
第142図	SD0073 出土石器実測図(1/1、1/2、 1/3) ……	170	第179図	SX0085 遺物出土状況実測図(1/30) …	201
第143図	SD0073 出土金属器実測図(1/2) ……	170	第180図	SX0085 出土土器実測図(1/3) ……	202
第144図	SD0066・0067 実測図(1/80) ……	171	第181図	3面出土遺物(1/3) ……	203
第145図	SD0066 土層断面実測図(1/40) ……	172	第182図	その他の出土土器実測図(1)(1/3) …	205
第146図	SD0066 出土遺物実測図(1)(1/3、 1/6) ……	173	第183図	その他の出土土器実測図(2)(1/2、 1/3) ……	206
第147図	SD0066 出土遺物実測図(2)(1/1、 1/3) ……	174	第184図	その他の出土石器実測図(1/1、1/2、 1/3) ……	207
第148図	SD0067 土層断面実測図(1/40) ……	175	第185図	Ⅲ区土層図および調査面の設定(1/60) …	209
第149図	SD0067 出土土器実測図(1/3) ……	176	第186図	Ⅲ区1面全体図(1/150) ……(折り込み)	
第150図	SD0067 出土木器実測図(1)(1/6) …	177	第187図	Ⅲ区2面全体図(1/150) ……(折り込み)	
第151図	SD0067 出土木器実測図(2)(1/6) …	178	第188図	SD0501 土層断面図(1/60)および位置 図(1/300) ……	211
第152図	SD0067 出土部材実測図(1/20) ……	179	第189図	SD0501 出土遺物実測図(1/2、1/3) …	212
第153図	SD0091・0092 実測図(1/40、1/80、 1/100) ……	180	第190図	SD0506、0508、0518 出土遺物実測図 (1/2、1/3) ……	214
第154図	SD0091 出土土器実測図(1)(1/3) …	182	第191図	SD0506 実測図(1/100、断面1/50) …	214
第155図	SD0091 出土土器実測図(2)(1/3) …	183	第192図	SD0516、0517 実測図(1/100、断面 1/40) ……	215
第156図	SD0091 出土土器実測図(3)(1/2、 1/3) ……	184	第193図	SD0508、0509、0510、0511、0512、 0515、0518、0519 実測図(1/100、断 面1/40) ……	215
第157図	SD0091 出土土器実測図(4)(1/3) …	185	第194図	SD0510 実測図(1/20)およびSD0510、 0538 出土遺物実測図(1/3) ……	216
第158図	SD0091 出土木器・石器実測図(1/1、 1/6) ……	186	第195図	SD0518、0529、0530、0537、0538 実 測図(1/60) ……	217
第159図	SD0092 出土土器実測図(1/3) ……	186	第196図	SD0540 実測図(1/60)およびSD0540 出土遺物(1/1、1/3) ……	218
第160図	SX0068・0069 実測図(1/40) ……	187	第197図	SX0505 実測図(1/40) ……	219
第161図	SX0068 出土土器実測図(1/3) ……	188	第198図	SX0503、0507 実測図(1/40) ……	220
第162図	SX0069 出土土器実測図(1/3) ……	188	第199図	SX0503、0507 出土遺物実測図(1)	
第163図	2面出土土器実測図(1/2、1/3) ……	189			
第164図	2面出土石器実測図(1/1、1/3) ……	190			

	(1/4、1/6) ……………	221	第234 図	SB0791・0792 実測図(1/60) ……………	272
第200 図	SX0503、0507 出土遺物実測図(2)		第235 図	SB0790～0792 出土遺物実測図(1/3) ……	273
	(1/3) ……………	222	第236 図	SD0541・0752 土層断面実測図(1/60) ……	274
第201 図	SX0503、0507 出土遺物実測図(3)		第237 図	SD0541 出土遺物実測図(1)(1/3) ……	275
	(1/3、1/2) ……………	223	第238 図	SD0541 出土遺物実測図(2)(1/3) ……	277
第202 図	SX0522 実測図(1/20)および出土遺物		第239 図	SD0541 出土遺物実測図(3)(1/3) ……	278
	実測図(1/3) ……………	224	第240 図	SD0541 出土遺物実測図(4)(1/2、	
第203 図	SX0528 実測図(1/40) ……………	225		1/3) ……………	279
第204 図	SX5028 出土遺物実測図(1)(1/2、1/3) ……	227	第241 図	SD0752 出土遺物実測図(1)(1/3) ……	281
第205 図	SX0528 出土遺物実測図(2)(1/1、		第242 図	SD0752 出土遺物実測図(2)(1/3、	
	1/2、1/4) ……………	228		1/4) ……………	283
第206 図	SB0523、0581 実測図(1/60) ……………	231	第243 図	SD0752 出土遺物実測図(3)(1/2、	
第207 図	SB0582、0583、0584、0585 実測図(1/60) ……	232		1/3、1/4) ……………	284
第208 図	SB0586、0587、0588、0589 実測図(1/60) ……	233	第244 図	SD0759・0760 実測図(1/60) ……………	285
第209 図	SB0590、0591、0592 実測図(1/60) ……	234	第245 図	SD0759・0760 出土遺物実測図(1/3) ……	286
第210 図	SB0593、0594、0595 実測図(1/60) ……	237	第246 図	SD0764・0766、SX0767 実測図	
第211 図	SB0596、0597、0598、0599 実測図(1/60) ……	238		(1/60) ……………	287
第212 図	SB0600、0601、0602 実測図(1/60) ……	239	第247 図	SD0764・0766、SX0767 出土遺物実測	
第213 図	SC0603 実測図(1/60) ……………	241		図(1/3) ……………	288
第214 図	SK0513 実測図(1/40)および出土遺物		第248 図	SK0754・0757・0758・0761・0763 実測	
	実測図(1/3) ……………	242		図(1/40) ……………	290
第215 図	SP0073、0265、0271、0292、0337 実		第249 図	SK0754・0757 出土遺物実測図(1/3) ……	292
	測図(1/40) ……………	243	第250 図	SK0758 出土遺物実測図(1/3、1/4) ……	293
第216 図	ピット内出土遺物実測図(1/1、1/2、		第251 図	SK0765 出土実測図(1/40) ……………	294
	1/3、1/4) ……………	245	第252 図	SK0763・0765・0769 出土遺物実測図	
第217 図	1 面出土遺物実測図(1)(1/2) ……………	247		(1/3、1/4) ……………	295
第218 図	1 面出土遺物実測図(2)(1/1、1/2) ……	248	第253 図	SX0751 実測図(1/60) ……………	296
第219 図	1 面出土遺物実測図(3)(1/2) ……………	249	第254 図	SX0751 および出土遺物実測図(1/60、	
第220 図	2 面出土遺物実測図(1)(1/2) ……………	250		1/3) ……………	296
第221 図	2 面出土遺物実測図(2)(1/2、1/3) ……	251	第255 図	SP0888 実測図および出土遺物実測図	
第222 図	IV区 1 面全体図(1/150) ……………	255		(1/30、1/3) ……………	297
第223 図	SK0543、0571 実測図(1/40) ……………	257	第256 図	IV区 2 面出土土製品実測図(1/4) ……	297
第224 図	SK0543 出土遺物実測図(1)(1/4) ……	258	第257 図	IV区 2 面出土木製品実測図(1/3、1/8) ……	298
第225 図	SK0543 出土遺物実測図(2)(1/3) ……	260	第258 図	IV区 2 面出土石器および玉類実測図	
第226 図	SK0543 出土遺物実測図(3)(1/3) ……	261		(1/1、1/2、1/3) ……………	299
第227 図	SK0543 出土遺物実測図(4)(1/2、		第259 図	V区 1 面全体図(1/150) …………… (折り込み)	
	1/3) ……………	262	第260 図	SB0582 実測図(1/60)および出土遺物	
第228 図	SK0543 出土遺物実測図(5)(1/2、			実測図(1/2、1/4) ……………	302
	1/3) ……………	263	第261 図	SD0501 実測図(1/60)および出土遺物	
第229 図	SK0571 出土遺物実測図(1/3) ……………	264		実測図(1/3) ……………	303
第230 図	SK0579、0580 実測図(1/40)および		第262 図	SD0509・0519・0546・0550 実測図	
	SK0579、0580 出土遺物実測図(1/3) ……	265		(1/40)およびSD0509・0519 出土遺物	
第231 図	SD0542 出土遺物実測図(1/3) ……………	266		実測図(1/2、1/3、1/4) ……………	304
第232 図	IV区 2 面全体図(1/150) ……………	270	第263 図	SD0546・0550 出土遺物実測図(1/2、	
第233 図	SB0789・0790 実測図(1/60) ……………	271		1/3、1/4) ……………	305

第264図	SD0551・0552・0557・0577・0581実測図(1/40)およびSD0551・0552・0577・0581出土遺物実測図(1/3、1/4) ……	307	第278図	SE0803出土遺物実測図(2)(1/3、1/4、1/6) ……	322
第265図	SK0548実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(1/3) ……	309	第279図	SD0804・0808・0809・0811実測図(1/40) ……	323
第266図	SK0548出土遺物実測図(2)(1/3、1/4) ……	310	第280図	SD0809・0811出土遺物実測図(1/3、1/4) ……	324
第267図	SK0548出土遺物実測図(3)(1/2、1/3) ……	311	第281図	SK0801実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3) ……	325
第268図	SK0573・0574実測図(1/30、1/40) ……	312	第282図	SK0805実測図(1/30)および出土遺物実測図(1)(1/3) ……	326
第269図	SK0573・0574出土遺物実測図(1/3、1/4) ……	313	第283図	SK0805出土遺物実測図(2)(1/3、1/4、1/6) ……	327
第270図	SK0576・0715・0717、SP0575実測図(1/20、1/40) ……	314	第284図	SK0806・0807・0810実測図(1/40) ……	328
第271図	SK0576・0715・0717出土遺物実測図(1/3、1/4) ……	315	第285図	SK0806・0810出土遺物実測図(1/3、1/4) ……	329
第272図	SP0575・0611・0614・0625・0643出土遺物実測図(1/3、1/4) ……	316	第286図	SX0802実測図(1/30)および出土遺物実測図(1)(1/4、1/10) ……	331
第273図	SP0660・0691・0696・0704・0710・0712出土遺物実測図(1/3、1/4) ……	317	第287図	SX0802出土遺物実測図(2)(1/3、1/4) ……	332
第274図	1面包含層および1面検出面出土遺物実測図(1/3、1/4) ……	318	第288図	SP0978・1005・1056・1057・1096出土遺物実測図(1/3、1/4、1/6) ……	333
第275図	V区2面全体図(1/150) ……(折り込み)		第289図	2面検出面出土遺物実測図(1/2、1/3) ……	334
第276図	SB0812実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3) ……	320	第290図	第4次調査下面全体図(1/800) ……	339
第277図	SE0803実測図(1/30)および出土遺物実測図(1)(1/3、1/4) ……	321	第291図	第4次調査上面全体図(1/800) ……	340

表目次

第1表	I区1面出土土器・土製品観察表 ……	39
第2表	I区1面出土木器観察表 ……	44
第3表	I区1面出土石器・金属器・ガラス製品観察表 ……	44
第4表	I区2面出土土器・土製品観察表 ……	111
第5表	I区3面出土土器観察表 ……	136
第6表	I区2・3面出土木器観察表 ……	138
第7表	I区2・3面出土石器・金属器観察表 ……	140

付図目次

付図1	II区1面全体図(1/200)
付図2	II区2面全体図(1/200)
付図3	II区3面全体図(1/200)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡空港は1944年(昭和19年)2月、第二次世界大戦中、旧日本陸軍の席田飛行場として建設を開始し、翌1945年(昭和20年)5月に滑走路が完成した。しかし第二次大戦の敗戦により、10月にアメリカ軍により板付基地として接収された。その後昭和26年民間航空路も使用を開始し、さらに航空路線需要の増大により民間路線を中心として現在の姿に至っている。

高度経済成長期以降、各種開発に伴う発掘調査が全国的に行われるようになってきた。市民の埋蔵文化財に対する関心も高まり、遺跡保護のために開発側との調整等の必要性が生じてきた。本市ではその周知化のために、市域内の分布調査によって埋蔵文化財分布地図を作製し、ほぼ市域内の概要が把握できるようになってきている。

しかしながら、広大な空港用地内は分布調査が不可能で、遺跡の空白地帯となっており、長い間空港内遺跡の分布状態については、戦前の地図から推定することしかできなかったのが実態だった。

近年の国際化による航空機需要の増加から、国際線ターミナルの建設など福岡空港西側の整備にともない、平成3年度には試掘調査を実施し、遺跡が確認されたため翌4年度から10年度にかけて13次にわたる発掘調査が行われ、空港西側部分に「雀居遺跡」という弥生時代を中心とした良好な遺跡の存在が明らかになった。

空港南側では調整池建設用地内において遺跡が確認され、平成7年度から14年度にかけて「下月隈C遺跡」の発掘調査が行われている。

このように次第に空港周縁の遺跡の分布状況は明らかになりつつあるが、滑走路周辺部、すなわち空港中央部においても、将来的な滑走路増設等を視野に入れつつ、最終便終了後に夜間土質調査に立会うなど確認調査を進めており、遺跡の分布状況は次第に明らかになりつつある。

福岡空港は中心市街地から至近距離に位置しアクセスがよく、日本国内では利便性に優れた空港の一つである。福岡空港の年間発着回数は14万回を数え、2,800m滑走路1本による運用のため、滑走路1本あたりの離着陸回数が日本で最も多く、混雑時は2分17秒程度毎に離着陸が行われている。空港周辺が市街地化しており騒音問題、周辺への配慮等から、早朝深夜の離着陸が規制されているため、深夜の航空貨物便の就航ができないなどの問題があり、また空港の大規模拡張が困難な為、駐機場の狭さが指摘されていた。

このような状況の中で、駐機場(ナイト・ステイ・エプロン)の増設が計画され、平成19年4月建設予定地内の埋蔵文化財の有無についての事前審査依頼が九州地方整備局博多港湾・空港整備事務所から福岡市教育委員会に提出された。建設予定地は空港東側の南寄りに位置し、月隈丘陵の西端部付近に当たる。周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、これまで3次にわたる発掘調査が行われている久保園遺跡が拡大する可能性が考えられた。そのため両者協議の上、同年5月に試掘調査を行った。その結果、弥生時代後期を中心とした土器、水田、河川、包含層が検出され、久保園遺跡に該当するものと判断された。

その結果を受け、九州地方整備局と福岡市教育委員会と協議し、駐機場の新設工事が地下に包蔵される埋蔵文化財(久保園遺跡)に影響が見込まれるため、文化財保護法に拠り記録保存の措置を執ることとなった。

発掘調査は平成20年度から22年度の足かけ3年をかけて実施し、報告書作成業務は平成22年度から23年度に行い、本報告書の刊行をもって完了する。

2. 調査の組織

調査委託 国土交通省九州地方整備局

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	山田 裕嗣 (平成 20～22 年度)
		教育長	酒井 龍彦 (平成 23 年度)
調査総括	文化財部	部長	矢野 三津夫 (平成 20 年度)
		部長	宮川 秋雄 (平成 21～22 年度)
		部長	藤尾 浩 (平成 23 年度)
	埋蔵文化財第 1 課	課長	山口 讓治 (平成 20 年度)
		課長	濱石 哲也 (平成 21 年度)
	埋蔵文化財第 2 課	課長	田中 壽夫 (平成 22～23 年度)
調査調整	埋蔵文化財第 1 課	調査係長	米倉 秀紀 (平成 20～23 年度)
事前審査	埋蔵文化財第 1 課	事前審査係	星野 恵美 (平成 20 年度)
			阿部 泰之 (平成 21～23 年度)
調査庶務	文化財管理課	管理係	垣替 美香 (平成 20 年度)
	埋蔵文化財第 1 課	管理係	井上 幸江 (平成 21～23 年度)
調査担当	埋蔵文化財第 1 課	調査係	池崎 讓二 (平成 20～21 年度)
	埋蔵文化財第 2 課	調査 1 係	板倉 有大 (平成 20 年度)
	埋蔵文化財第 1 課	調査係	今井 隆博 (平成 21～22 年度)
	埋蔵文化財第 2 課	調査 1 係	榎本 義嗣 (平成 22 年度)
			比嘉 えりか (平成 22 年度)

[調査補助]

中村理 藤野雅基 金宥正 奥野正人 田尻直子 坂口剛毅 上方高弘 立石真二 高赫淳
白石溪冴

[発掘作業]

皆川公 安河内雅代 阿比留一郎 大木孝人 岡崎美奈江 小嶋麻世 豊田俊八郎 森園仁美
安河内健吉 高瀬州 高瀬美代子 原恵子 松岡久行 御手洗あい 山田美恵子 石橋英俊
岩佐克行 小川祐弘 久保田裕子 隈本孝夫 節政将行 節政善憲 垂井鎮 千北秀則 戸山龍男
西宮行輝 平岡富子 水田政敏 近藤澄江 村田敬子 水田ミヨ子 酒井康恵 福島大
安高邦晴 須佐恵司 小島君子 牟田邦博 藤野幸雄 大庭義久 齋馨純子 今村良輔
阿部孝行 花田直文 定直康浩 川田強司 新垣誠 小出義之 静啓子 岩本三重子 藤野幾志
越智信孝 中島道雄 栞野孝子 花田則子 中村幸子 田端名穂子 関哲也 阿部純子 古川晃
崎村雄介 永松弘恵 光安晶子 上之蘭義隆 金民善 鷲崎哲夫

[整理補助]

井上加代子 朝岡俊也 米倉法子 山口朱美 山崎賀代子 平川敬治

[整理作業]

有島美江 田中友香 木本恵利子 松尾真澄 渡邊千香子 柴田加津子 萩本恵子 武田祐子
福松智子 副田則子 藤野静子 坂口龍子 久高教子

九州地方整備局博多港湾・空港整備事務所、福岡空港分室、福岡空港事務所航空管制運航情報官、航空保安防災課、施設課航空灯火・電気技術課の各機関には、発掘調査にあたっての様々な面において便宜をはかっていただいた。ここに謝意を表します。

II. 遺跡の位置と環境

1. 調査地点の立地と周辺地形

調査地点は月隈丘陵から西に派生した舌状台地と沖積低地との境、標高4～6mに位置する。月隈丘陵は、筑豊盆地と福岡平野の間に位置する三郡山地から派生した大城山（四王寺山）から北西に延び、福岡平野と粕屋平野を分断している。月隈丘陵西麓は舌状台地が幾筋も派生しており、後述するように主に弥生時代の遺跡が点在する。丘陵西方には御笠川が博多湾へと北流して、沖積低地を形成しており、弥生時代以降、水田として利用されている。東比恵三丁目遺跡、東那珂遺跡、那珂君休遺跡などで水田遺構が確認されている。御笠川の西側には低平な洪積台地が春日丘陵から北西へ延びており、福岡平野の中心地として弥生時代～古代の遺跡が多数確認されている。洪積台地上の主要な遺跡としては、北から比恵・那珂遺跡群、板付遺跡、五十川遺跡、諸岡B遺跡、高畑遺跡、井尻B遺跡などが挙げられる。この洪積台地西側には那珂川が北流し、その西側には平尾丘陵が北西に延びて、福岡平野と早良平野を画している。

福岡平野で人々の居住が安定するのは弥生時代以降であり、その中心地が中央部に位置する洪積台地上であったとすれば、久保園遺跡はその東側の周辺域に位置する。なお、月隈丘陵は石炭を含む第三紀層で、かつては炭田として利用されていた。本調査区の遺構覆土には大小の珪化木と石英が含まれており、調査地点周辺の地質的特徴をよく示している。

2. 月隈丘陵西麓の歴史的環境

以下では、月隈丘陵西側の遺跡群について通史的に概観し、調査地点近隣の歴史的環境を整理しておきたい。

旧石器時代 貝花尾遺跡、席田青木遺跡第3次調査でナイフ形石器が出土するなど、石器の散布が確認されている。久保園遺跡第4次調査でも剥片尖頭器をはじめとした旧石器時代石器が確認されており、今後まとまった資料の発見が期待される。

縄文時代 上月隈遺跡第4次調査で石鏃・磨製石斧・剥片石器類や、晩期の土器小片が確認されており、その他の遺跡でも少量の縄文時代遺物が出土する状況にある。現在のところ、遺構を伴うような安定した集落遺跡は確認されておらず、キャンプ地的な利用がなされていたと考えられる。旧石器時代とともに、今後の資料蓄積が望まれる。

弥生時代 月隈丘陵の尾根から裾部の丘陵部と、御笠川にいたる沖積低地微高地でそれぞれ集落・墓地・水田の形成がみられる。

丘陵部では、弥生時代前期に宝満尾遺跡・影ヶ浦遺跡・持田ヶ浦古墳群D群第2次調査などで貯蔵穴群が確認されている。下月隈天神森遺跡第3次調査では甕棺墓・木棺墓群が調査されており、この時期の定着的な集落の形成が想定される。甕棺墓群は前期末以降、国指定史跡・金隈遺跡（前期末～後期初頭）・上月隈遺跡（中期）・下月隈B遺跡（中期後半～後期初頭）・席田青木遺跡（中期後半～後期初頭）など20基から100基、350基にいたる大規模な墳墓群が目立つ。また、上月隈遺跡第3次調査甕棺ST007に副葬された中細形銅剣やガラス製管玉（中期後半）、宝満尾遺跡4号土坑墓に副葬された異体字銘帯鏡（後期）も注目される。久保園遺跡と席田大谷遺跡群では、中期以降に竪穴建物・掘立柱建物が確認でき、後期・古墳時代前期にいたるまで継続して集落が営まれていたと考えられる。久保園遺跡では棟持柱を有する8×5間の大型掘立柱建物（第1次調査）や、祭祀土器を多量に含む土器溜まり（第1次調査）、鐸形土製品の出土（第3次調査）がみられる。席田大谷遺跡群では横

帯文銅鐸鑄型（赤穂ノ浦遺跡）、小型鉄斧と青銅製鋤先（第1次調査）、中国鏡片（第2・3次調査）、鐸形土製品と石製銅戈鑄型模造品（第4次調査）などの特殊遺物が出土している。これらの成果から、席田大谷遺跡群と久保園遺跡はこの地域における拠点集落であり、青銅器生産に関係の深い集団が居住したと考えられている。南の上月隈遺跡第4次調査では、自然流路を利用した溜井遺構（中期後半～後期）と、それに伴う祭祀遺物の出土が報告されている。

一方、沖積低地部の雀居遺跡や下月隈C遺跡では、弥生時代～中世の水田跡とともに、弥生時代早期から古墳時代にいたる集落が微高地上で確認されている。集落の遺構は、掘立柱建物・竪穴建物・土坑・溝などで構成され、溝や土坑から各時期の木製遺物が豊富に出土している。雀居遺跡の後期環濠からは、木製の短甲・楯・案（机）などが出土しており、注目される。

古墳時代 月隈丘陵には北ノ浦古墳・貝花尾古墳群・新立表古墳群・席田大谷古墳群・丸尾古墳群・宝満尾古墳・水町古墳・下月隈天神森古墳群・今里不動古墳などの単独あるいは数基からなる5世紀後半～6世紀の古墳が知られている。また、後期群集墳としては、影ヶ浦古墳群・堤ヶ浦古墳群・持田浦古墳群などを挙げられる。これらの古墳には、装身具・鉄製農工具・武器などが副葬されている。前・中期古墳については不明な状況で、今後の調査が待たれるところである。集落については、立花寺B遺跡で5～6世紀の竪穴建物群が確認され、子持勾玉や木製鞍が出土したほか、席田青木遺跡第3次調査で古墳時代後期の区画溝を有する居住地が確認されている。

古代 この一帯は『和名抄』や『延喜式』に記載される「席田郡」にあたり、その西側には大宰府～水城東門～鴻臚館を結ぶ官道（東門ルート）が通る。その東門ルート沿いにあると推定される下月隈C遺跡では、「皇后宮職」銘木簡や人形・斎申などの律令的祭祀具が出土した。また、席田郡の条里制に関連する遺構としては、水田跡（席田青木遺跡第7次調査など）や条里地割に合致する溝（7世紀末頃）が確認でき、「中ノ坪」（東平尾）、「四ノ坪」（下月隈）など条里制に関係する地名を現在にも残している。久保園遺跡第4次調査でも、8～9世紀の水田関連遺構が確認され、墨書・刻書・針書土器、製塩土器、瓦、和同開珎、曲物、荷札木簡などが出土している。

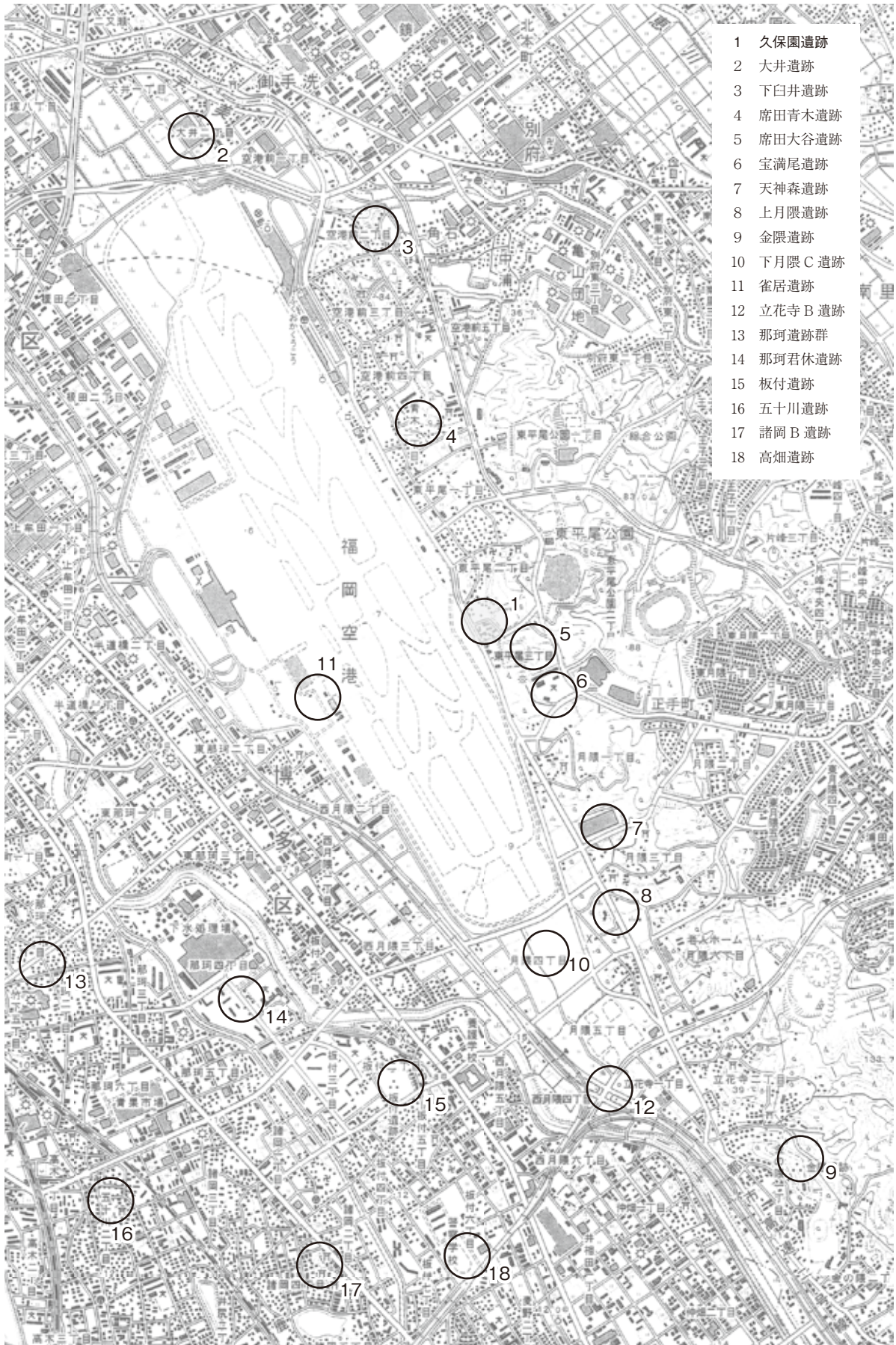
中世以降 集落や水田、山城に関わる遺構（席田青木遺跡第1次調査）が確認されている。太宰府安楽寺所領の席田荘や、立花氏の出城とされる稲居塚城などとの関連が指摘されている。

その後月隈丘陵は、戦前には平尾炭坑が置かれ、戦中・後は旧陸軍・米軍の弾薬庫として利用された。1972年の米軍返還以降、埋蔵文化財の周知・調査が図られて、今日に至っている^{註)}。

註) 月隈丘陵における1972年米軍返還後の、福岡市による開発と埋蔵文化財保護行政の詳細な経緯については、飛高・井沢編（1977）および力武編（1983）の「発掘調査に至るまで」を参照されたい。

参考文献（刊行年順）

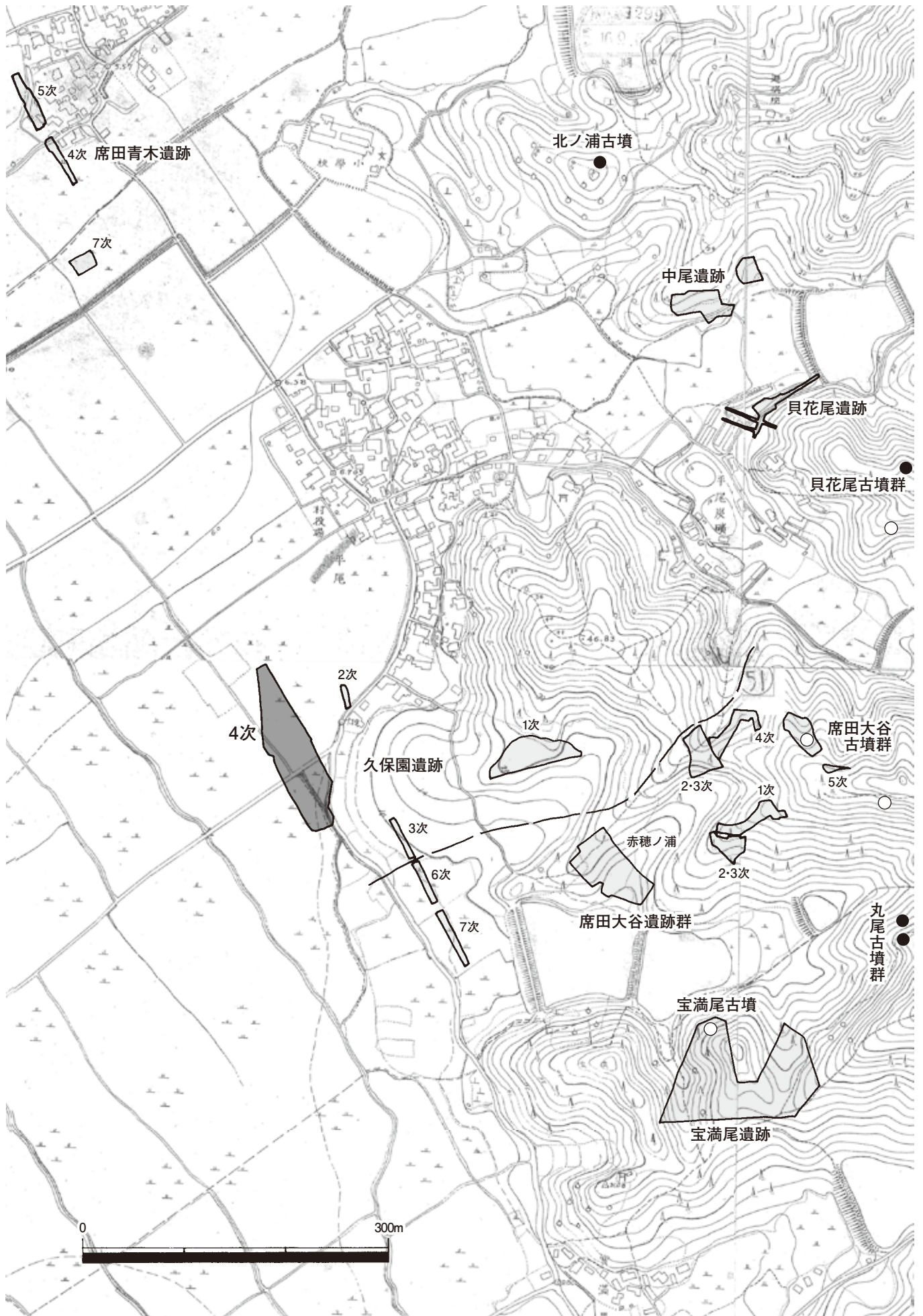
- | | |
|---|---------------------------------|
| 飛高憲雄・井沢洋一編 1977『席田遺跡群（福岡市埋蔵文化財調査報告書（以下福岡市報）第44集）』福岡市教育委員会 | 吉武学編 2005『久保園遺跡3（福岡市報第837集）』 |
| 力武卓治編 1983『久保園遺跡（福岡市報第91集）』 | 山崎龍雄編 2006『下月隈C遺跡VI（福岡市報第881集）』 |
| 宮井善朗 1996『持田ヶ浦古墳群2（福岡市報第445集）』 | 吉武学編 2006『席田大谷遺跡群6（福岡市報第907集）』 |
| 久住猛雄編 1997『席田青木遺跡3（福岡市報第534集）』 | 本田浩二郎編 2011『上月隈4（福岡市報第1112集）』 |
| 力武卓治 2001『雀居遺跡6（福岡市報第677集）』 | 榎本義嗣編 2011『席田青木遺跡7（福岡市報第1120集）』 |



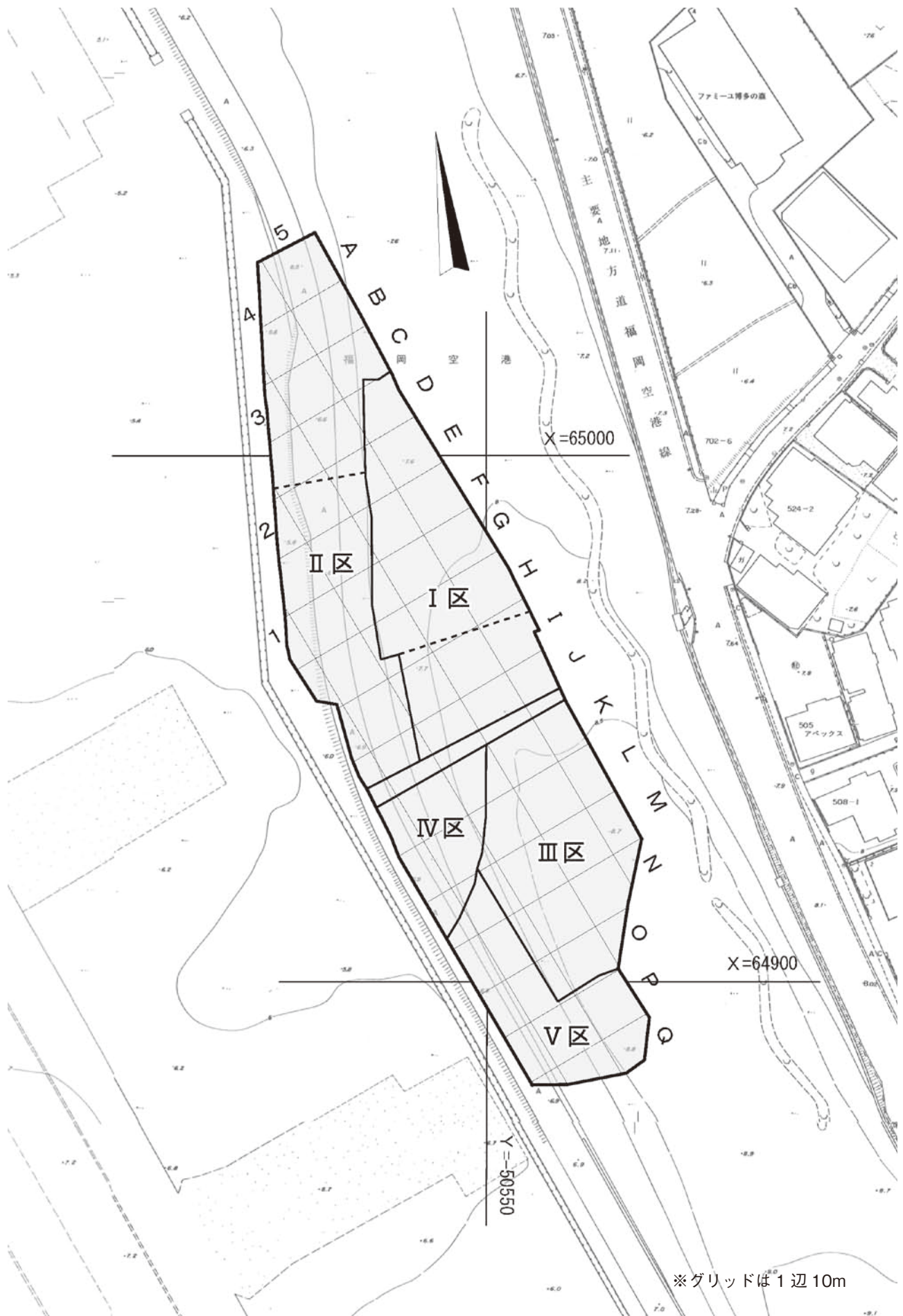
第1図 久保園遺跡と周辺主要遺跡 (1/25,000)



第2図 周辺調査区と地形 (1/5,000)



第3図 周辺調査区と地形(昭和初期)(1/5,000)



第4図 調査区位置と区・グリッド割り (1/1,000)

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の概要

発掘調査の時間的推移はおおむね次のようである。

- ・平成19年4月、ナイトステイエプロン建設予定地内24,900m²の埋蔵文化財の有無についての事前審査依頼が九州地方整備局博多港湾空港整備事務所から福岡市教育委員会に提出された。
- ・同年5月に試掘調査。その結果、弥生時代後期を中心とした土器、水田、河川、包含層が検出され、久保園遺跡に該当するものと判断された。その結果を受け、九州地方整備局と福岡市教育委員会と協議し、駐機場の新設工事が地下に包蔵される埋蔵文化財(久保園遺跡)6,300m²に影響が見込まれるため、記録保存の措置を執ることとなった。
- ・平成20年6月よりプレハブ調査事務所の設置工事を行い7月2日に完成。
- ・同7月4日、福岡空港事務所関係機関にナイトステイエプロンの新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の説明会を開き、発掘調査作業内容を周知し、調査にあたっての諸注意・留意点等を協議。
- ・空港側から提供された既存埋設管図面をもとに埋設管保全を前提に調査区A・B・C区を設定。
- ・7月14日よりA区表土掘削、調査開始、当初調査担当職員1名で対応。A・B・C区の表土は一旦調査区外に仮置きし、空港外に持ち出し処分。A・B・C区の調査で発生した土砂は調査区内で処理。西側場周道路も調査対象区域であるが、調査区東側の迂回道路が完成後21年度にD～F区として着手予定。
- ・10月より2名体制となり、B区とC区の一部の表土掘削、B区調査開始。A・B区間の想定されていた埋設管は既に廃棄されており、これを撤去し、A・B区並行して調査。
- ・12月よりC区の残りの表土掘削、C区調査開始。
- ・平成21年3月24日、福岡空港事務所関係機関に平成21年度埋蔵文化財発掘調査の説明会を開く。
- ・6月、A・B区調査終了。
- ・同時にE・F区表土掘削、調査開始。
- ・7月24日のゲリラ豪雨で空港敷地の大半が冠水し、調査区も水没。
- ・10月D区表土掘削、11月調査開始。
- ・12月C・E区調査終了。
- ・平成22年7月D区調査終了。8月に機材、プレハブ事務所、遺物等撤収して作業終了。
- ・平成24年3月本報告書の発刊をもって完了。

発掘調査を進めている段階では、当初の調査区設定通りA～Fの6区に区分し作業を進めていたが、A・B区を線引きする埋設管が廃止されていることが明らかになり、同一面として調査することが可能であったこと、年度の異動で担当者が変わったこと等により、報告書作成のための整理の便宜上、本報告書ではA・B区をⅠ区、E・F区をⅡ区、C区の旧河川北西部を除く大半をⅢ区、C・D区の旧河川北西部分をⅣ区、Dの旧河川北西部を除く大半をⅤ区として報告する。

また、調査区グリッドは、現地形に踏襲されている条里の軸線を参考に、5mメッシュで設定した。当初Ⅰ・Ⅱ区側と既存埋設管の南側Ⅲ～Ⅴ区それぞれに、グリッド名称を設定したが、南北調査区に同一名称グリッドが存在することや南北に長い調査区のため全体をカバーできるグリッド設定が必要であったことから、報告書作成段階で便宜上10mメッシュのグリッドに再編成し、南北をそれまでの数字からA～P、東西をアルファベットから1～6と呼称することとした。

遺構符号は掘立柱建物をSB、溝をSD、井戸をSE、土坑をSK、ピットをSP、水田をSS、その他の遺構をSXとし、各調査区ごとそれぞれの4桁通し番号(例SK0034)とした。

以下各調査区の概要を記す。

I区概要(調査面積 1,180 m²、出土遺物数 コンテナボックス 460箱)

古代の水路と水田、古墳時代前期の水路と水田、弥生時代考古後半の大溝、弥生時代中期後半の器祭祀跡と溝などを確認した。弥生時代中期・後期の集落の広がりが明らかになり、古墳時代から代に至る水田利用の変遷を追うことができた。また久保園遺跡が月隈丘陵の西側から、低地側(空港滑走路側)へ広がっていることが明らかになった。

II区概要(調査面積 1,760 m²、出土遺物数 コンテナボックス 280箱)

上面で古墳時代後期～古代の水田面、水路を検出した。水路の岸には畦が設けられ大量の杭が打込まれている。下面では弥生時代中期～後期の溝やI区と同一の古墳時代前期の水田面を検出した弥生時代後期の溝の一つは貯木遺構と思われ、長さ3m前後の部材が数本出土した。

III区概要(調査面積 1,290 m²、出土遺物数 コンテナボックス 326箱)

上面に弥生土器を大量に含む整地層があり、弥生時代終末期前後に大規模な造成事業が行われてる事が明らかになった。以前の水路を古代に拡幅した大きな水路が調査区を斜断する。水路と思わる直線的な溝や機能は明確でないが、浅い掘り方の環状小溝が検出されている。下面では弥生時代期を中心とした集落があり、組み合わせ式の礎板・柱を使用した掘立柱倉庫群が検出されている。下面では弥生時代初頭の溝が1条検出された。

IV区概要(調査面積 314 m²、出土遺物数 コンテナボックス 125箱)

東西を古代に整備した2条の大きな水路に区画された狭い範囲であったが、上面で古代の水田面検出、また大量の弥生終末～古墳時代早期の土器を廃棄した土坑が検出されている。下面では古の水路によって分断されているものの、III区の集落につながる弥生時代の集落の一部を検出した

V区概要(調査面積 596 m²、出土遺物数 コンテナボックス 142箱)

III区と同様、弥生時代終末期前後に行われた大規模な造成事業による平坦面で、上面に弥生土器大量に含む整地層がある。同じく浅い掘り方の環状小溝が検出されている。下面では弥生時代の集を検出した。掘立柱建物、溝、井戸、土坑等があり、中期後半から後期後半まで継続して営まれてる。

以上調査総面積は5,140 m²、出土遺物総量はコンテナボックス1,333箱に及んだ。

調査区自体が福岡空港制限区域内にあるために、安全管理上、通常の発掘調査現場に比べ様々な制限、規制が加えられている。作業従事者は事前に登録申請し、腕章を常時着用する。通行許可範囲は調査区内と調査事務所、およびその間の所定の通路だけである。このため作業員は朝空港東門に集合し、登録したジャンボタクシーで事務所にピストン輸送。夕方も同様に、遅刻、早退は勿論出来ない。昼食に外に出ることも出来ない。テントやビニールシートは風で飛ばされた場合、航空機の運航に重大な支障が生じるため使用ができず、真夏の熱暑の中、日陰さえも作れず、また、真冬は遮るもの何もない滑走路越しに吹いてくる北西の季節風吹きすさぶ中で、頑張っていたいただいた作業員の皆さんの苦勞をこの場を借りてねぎらいたい。

2. I区の調査

1) 概要

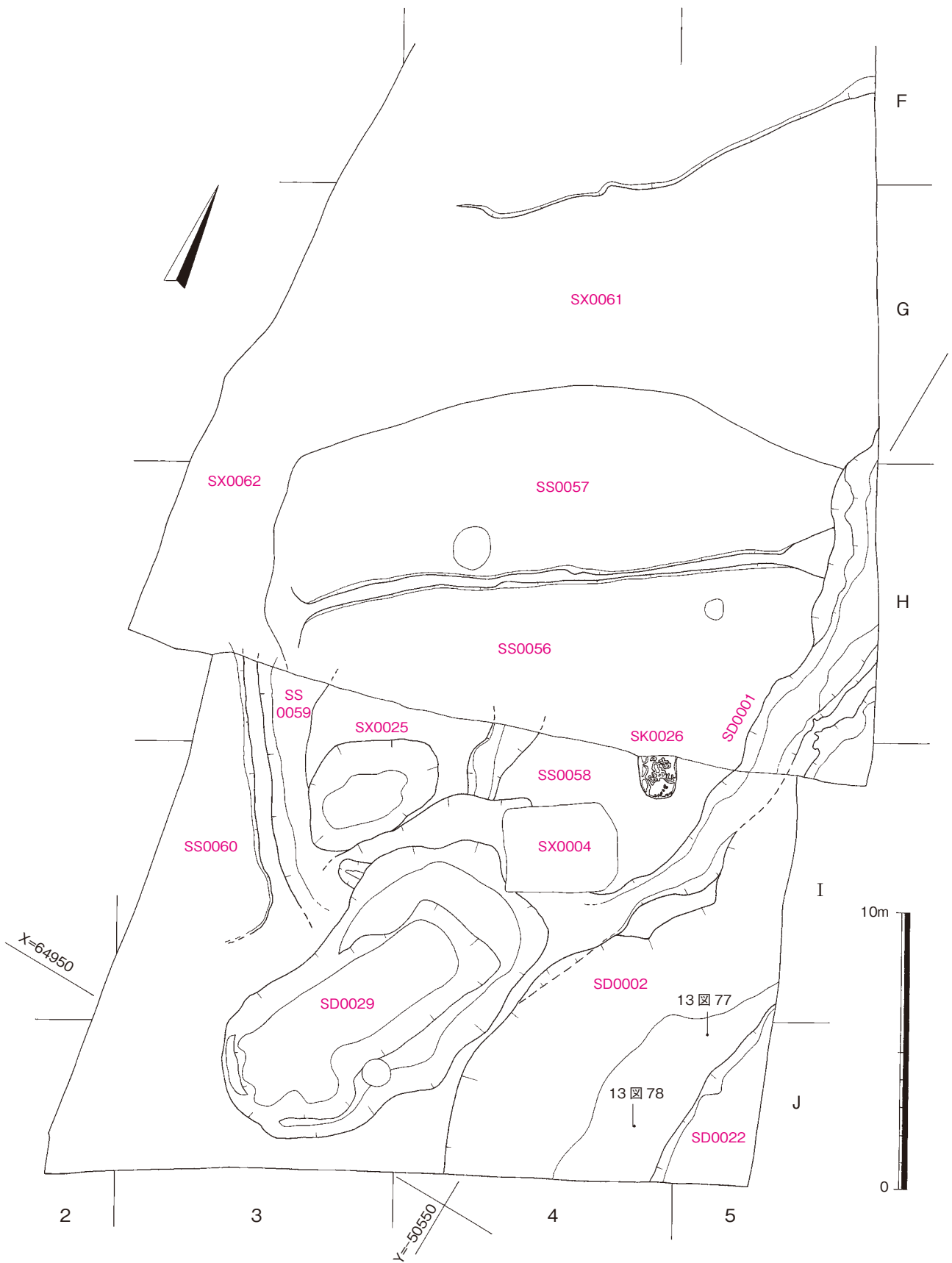
1面 盛土・客土下の粗砂層を除去した面を1面として調査を開始した。検出面は標高約5mで、北西へわずかに傾斜する。遺構の概要は、東側舌状台地の麓を北流する流路SD0001・0002・0022、水溜状の大型土坑SD0029、不成形の窪み状遺構SX0025、長方形土坑SK0026、水田SS0056～0060、包含層SX0027・0061である。SD0029は大型長方形土坑で埋土は砂と暗灰色粘質土の互層堆積を示し、灌漑用の水溜と考えられる。SX0025もSD0029と関連した水溜め-給水の機能を想定できる。SK0026も水田に関わる施設と考える。水田についてはヒトと、ウシなど偶蹄類の足跡が認められ、畦畔および畦畔の補強杭と考えられる杭列を確認した。水田・水路下には遺物小片を多く含む粘砂土が一面に堆積しており、水田構築前の埋立て整地土の可能性もある。遺物は、古代の須恵器・土師器・墨書土器・製塩土器・瓦・鉄鏃・和同開珎・木器・ガラス小玉、弥生土器・石器・鉄斧・青銅製鋤先など、パンコンテナ約140箱分が出土した。時期は8世紀後半～9世紀を主体とする。

2面 1面のSX0061など水田耕作土下の包含層(整地土)を除去すると、灰褐色シルト質粘土層上面で溝を数条確認したためこの面を2面として調査した。遺構の概要は、1×1間の掘立柱建物SB0068、遺物が多量に堆積したSD0003、木質遺物と獣骨が比較的多く出土した黒色粘土を埋土とする溝SD0042(西)・0053・0005・0032、粘土と砂の互層を覆土とする流路SD0033・0036・0034・0023・0037、小型水路SD0007・0010・0051、水田SS0064・0065、土器群SX、包含層SX0066・0067である。SB0068は3つの柱穴すべてに柱が残っていた。SD0003からは外来系土器片や鐸形土製品、線刻土製品、木製紡錘車未成品などの特殊遺物が出土した。SD0005からは多数の木製品が出土した。SD0036・0023からは絵画土器片・線刻土製品・銅鏃・貨泉・線刻布巻具などの特殊遺物が出土した。SX土器群は弥生時代中期中葉の土器が複数器種のセットで投棄されていた。SX0066からは旧石器時代の剥片尖頭器が出土した。遺物は、弥生時代の土器・土製品・金属器・木器・石器など、パンコンテナ約300箱分が出土した。主となる時期は、弥生時代中期中葉～古墳時代前期である。

3面 2面全体に堆積したSX0066に対して、下面確認トレンチを数カ所入れたところ、2条の溝を確認した。また、SD0012・0042(東)は2面で検出していたが、土層観察から、SX0066下位と判断した。これらの遺構検出面である灰青色シルト粘土面(無遺物層・地山)を3面とした。3面については、上層包含層SX0066をバックホーで除去して全面調査とすべきであったが、400～500m³の排土を調査区外に置くことは空港内という制限上許されず、また調査区内で処理することもできなかったため、まずは人力掘削のトレンチ調査を行うこととした。結果として溝以外の遺構は確認されず、トレンチ調査以上の情報収集は望めないと判断して全面調査は行わなかった。遺構の概要は、丹塗土器が多く出土した溝SD0024・0012・0042(東)・SX0048、断面方形の小型溝SD0054・0043である。遺物は、弥生土器、木器、石器などパンコンテナ約20箱分が出土した。時期は弥生時代中期前葉を主体とする。

I区ではパンコンテナ約460箱の遺物が出土した。以下の報告において、遺物の詳細については節末の観察表(第1～7表)を参照されたい。また、木器の樹種記述については、特に断らない限り、パリノ・サーヴェイ株式会社による樹種同定結果による(付編1参照)。石器石材については、ネオジム磁石による磁性測定を参考とした担当者の肉眼観察にもとづく。

なお、I区については平成20年7月から池崎が調査に着手し、同年10月から板倉が補佐に入った。同年11月から板倉が調査を引き継ぎ、平成21年6月に調査を終了した。調査区は北側の710m²を



第5图 I区1面全体图(1/200)

A区として調査を開始し、その後南側の470m²をB区として着手した。本報告ではA・B区を統合してI区とする。整理・報告書作成作業は板倉が行った。

2) 遺構と遺物

(1) 1面の調査

流路・水路(SD)

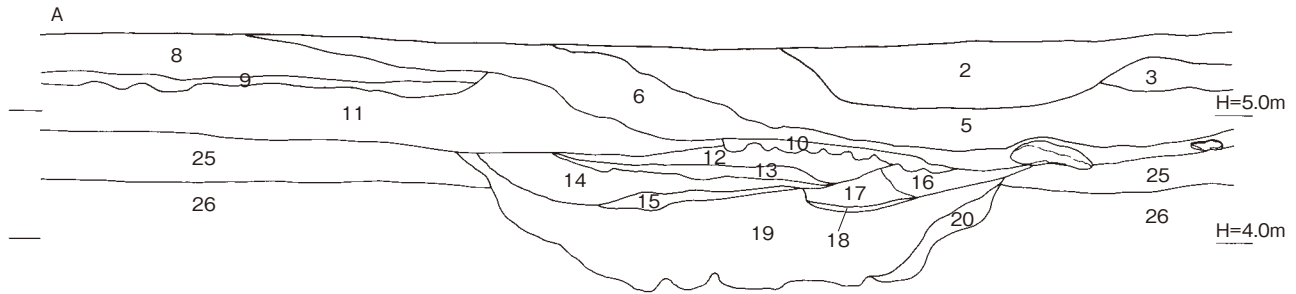
SD0001 (第5～7図) H-5、I-4・5区で確認したわずかに西に振れながら北流する流路である。検出面での残存幅は1～3m、深さは調査区東壁土層で1mを測る。埋土は、灰色系の粘土と細～粗砂が互層をなし、土器・木質・獣骨、径5～20cmの珪化木・石英礫を含む(第6・7図A-B土層2～7層、D-E土層2層)。南端は削平されて不明瞭に終わり、SD0029との切り合いあるいは連結等是不明瞭である。SS0056～0058を切り、SD0002に切られる。遺物は2mグリッド(Ph.1～43)ごとに取り上げたが、切り合い関係にあるSD0002・0003とは粘土・砂の互層からなる流路という性格が類似したため、遺物の分別が徹底できなかった。

出土遺物(第8・21図) 須恵器の坏(1・2)、高台坏(3)、土師器の坏(4・5)、高台付椀(8)、棒材(139)などが出土した。3は高台が低く、径が底径に比べて小さい。8世紀前半と考える。4は胴部下半から底部外面はヨコヘラケズリで仕上げられる。8世紀末～9世紀代であろう。8は底部内外面に墨が残り、硯に転用されている。139はマツ属複雑管束亜属の棒材で、明瞭な加工痕は認められないが、末端が焼かれて炭化している。遺物から遺構の時期は、8～9世紀代と考える。

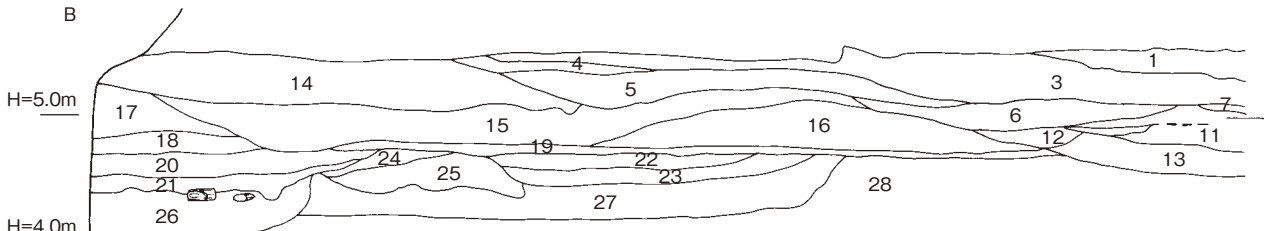
SD0002 (第5～7図) H-5、I・J-4・5区で確認した東に振れながら北流する流路である。検出面での残存幅は5～7m、深さは調査区東壁土層で90cmを測る。埋土は、灰～褐色系の粘土と細～粗砂が互層をなす(第6・7図A-B土層1層、B-C土層14～19層、D-E土層1層、H-I土層15～26層)。最下層の黄褐色砂は固く締まっており、層中に土器・木質・獣骨が多く含まれている。北側は調査区外へ延び、南側はⅢ区の水路に連続する。SD0001を切り、SD0022に切られる。

出土遺物(第8・12・13・21図) 須恵器の高台坏(10・11)・甕(20・21)、土師器の小壺(9)・椀(12・15)・坏(13・14・16)、黒色土器A類の椀(17・18)、製塩土器(22)、平瓦(23・24)、砥石(75・76)、管状土錘(79)、和同開珎(77)、雁又式鉄鏃(80)、イスノキ製の櫛(140・141)が出土した。また、SD0001とSD0002の境界から土師器の坏(6)と高台付椀(7)が出土した。9は胎土に砂粒をほとんど含まない精選土を用い、ロクロで成形する。10・11は高台が低く、径が底径に比べて小さい。8世紀前半と考える。14は底部円盤と胴部の間に段を残し、胎土に角閃石を含む。15は土師器椀で、口縁部と底部は接合しないが同一個体である。高台部は剥落している。焼成は良好堅緻で色調は淡赤橙色を呈し、外面には凹線状の強いヨコナデがみられる。9世紀後半であろう。17は断面方形の高台が付く。8世紀後半と考える。23は平瓦片で、胎土は粗砂を少なく含み、色調は灰色～暗灰色を呈す。凹面はヘラナデ、凸面にはハケメ風の条痕が残る。24は平瓦片で、胎土は粗砂を多く含み、色調は灰色を呈す。6は底部から胴部へは丸く立ち上がる。底外面にはヘラ切り痕が残る。7世紀代と考える。7は外面が回転ケズリで成形される。8世紀後半であろう。77は最下層の黄色砂から出土した(第5図)。140・141は接合しないが同一個体の可能性が高い。遺物の時期は8～9世紀後半であり、9世紀代のSD0001を切る層位関係から遺構の時期は、9世紀後半と考える。

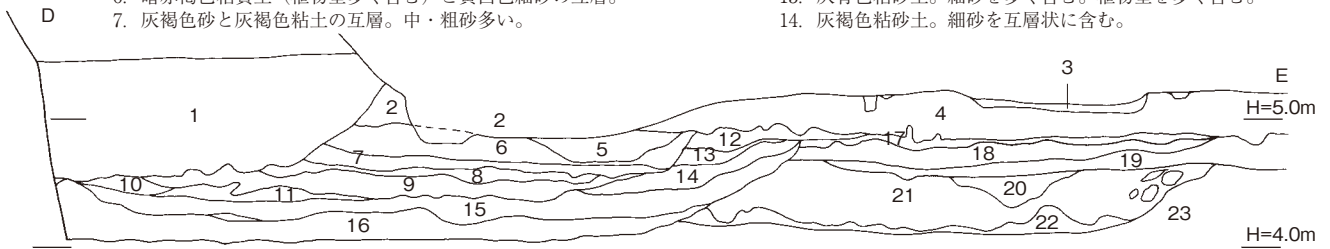
SD0001・0002出土弥生～古墳時代遺物(第9～12図) SD0001・0002からは8～9世紀代の遺物の他に、弥生中期初頭から古墳時代前期の壺(25・26・34・66)・把手(27・51)・丹塗甕(28)・甕(29・30・33・36～45・55・56・62)・丹塗直口壺(31)・小型壺(32)・筒形器台(35)・袋状口縁



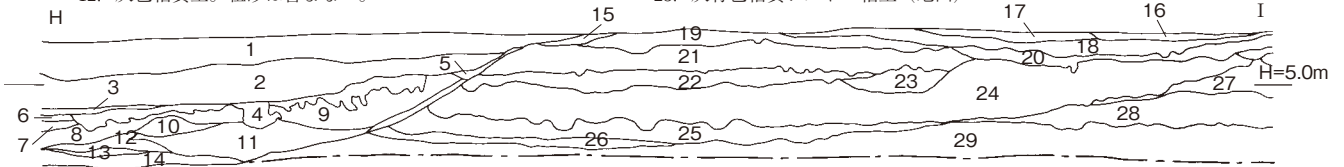
- | | |
|---------------------------|--------------------------------|
| 1. 細砂と暗灰色粘質土の細かい互層。SD0002 | 7. 灰褐色粗砂層。2～7層はSD0001 |
| 2. 暗褐色粘土。灰白色細砂をブロック状に含む。 | 8. 灰白・灰黄色粗砂・中砂互層 |
| 3. 白褐色砂層。中砂・細砂の互層。 | 9. 灰黒色粘土、黄白色中砂の互層 |
| 4. 灰黒色粘土。白色細砂の互層。 | 10. 灰白色粗砂。底面凹凸をなす。帯水。 |
| 5. 灰黒色粘土。灰黄色中砂をブロック状に含む。 | 11. 淡褐色粘砂土。径1mm白色砂・炭を含む。SX0061 |
| 6. 灰褐色中砂層。灰褐色粘土との互層。 | 12. 灰黒色粘土、シルト質。下層に有機物を含む。 |



- | | |
|------------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 黄褐色粘砂土。黄色細砂、白色細砂、白色中砂を含む。しまり弱い。 | 8. 灰黒色粘質土。褐色粘砂質土をブロック状に含む |
| 2. 暗褐色粘砂土。黄褐色粘土ブロック。細砂を含む。 | 9. 淡褐色粘土と灰黄色中砂の互層。しまり強い。 |
| 3. 明黒褐色粘質土。赤みを帯びる。しまり強い。 | 10. 灰黒色粘質土。砂っぽい。 |
| 4. 暗赤褐色粘土。黄色細砂をブロック状に含む。マンガン・鉄分含む。 | 11. 灰黄色細～粗砂互層。中層に灰褐色粘土ブロック。下層は粗砂となる。 |
| 5. 灰褐色粘砂土。砂っぽく、白色粗砂・炭を多く含む。 | 12. 淡褐色粘砂土。黄色細砂を互層状に含む。しまり弱い。有機物含む。 |
| 6. 暗赤褐色粘質土（植物茎多く含む）と黄白色細砂の互層。 | 13. 灰青色粘砂土。細砂を多く含む。植物茎を多く含む。 |
| 7. 灰褐色砂と灰褐色粘土の互層。中・粗砂多い。 | 14. 灰褐色粘砂土。細砂を互層状に含む。 |

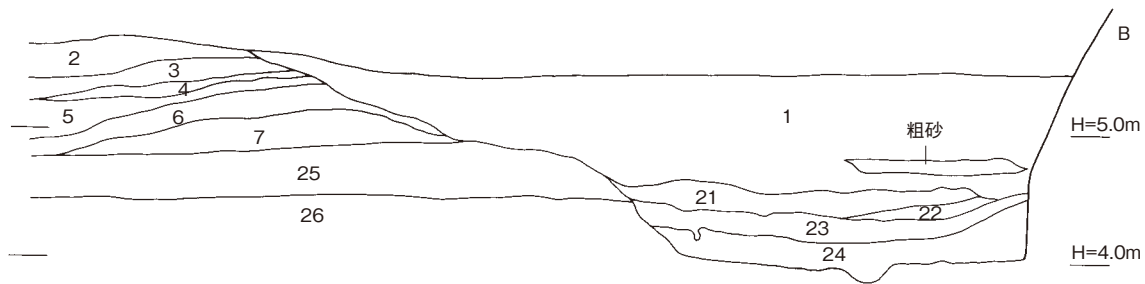


- | | | | |
|--------------------------|---------------------|---------------------------------------|------------------------------------|
| 1. 細砂・暗灰色粘質土互層。SD0002 | 2. 粗砂。SD0001 | 13. 7層より灰色粘質土多い | 14. 灰黒色粘土。中砂層を挟む |
| 3. SK0026 | 4. 水田耕作土。SS0058 | 15. 暗黒褐色強粘質土。木片等多く含む。14～16層はSD0042（西） | 16. 灰色帯びた明黒褐色土、灰青色粘土ブロック混る。木片・骨含む。 |
| 5. 大きな土器細片を多量含む。黄褐色粗砂層。 | 6. 7層に近いが、部分的に細砂混る。 | 17. 径10cm地山ブロック層 | 18. 灰褐色粘質土 |
| 7. 黄褐色粗砂 | 8. 灰褐色粘質土 | 19. 灰褐色粘土。SX0066 | 20. 灰黒色粘砂土。黄褐色細砂との互層 |
| 9. 黄褐色粗砂。下半に灰色粘土ブロックを含む。 | 10. 酸化鉄含む砂と灰色粘質土混り。 | 21. 黒灰色粘土。径1cmの炭をわずかに含む。地山ブロック含む。 | 22. 灰青色粘土。灰黒色粘土を含む。20～22層はSD0012 |
| 11. 10層と同質。粘質土多い。 | 12. 灰色粘質土。粗砂は含まない。 | 23. 灰青色粘質シルト～粘土（地山） | |

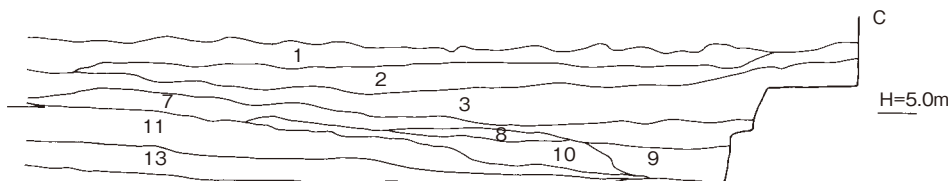


- | | | |
|---------------|--------------------|------------------------|
| 1. 黒褐色粘質砂 | 11. 黒灰粘質砂 | 21. 暗灰粘土と白色細砂の互層 |
| 2. 粘質シルト | 12. 灰白色粗砂 | 22. 暗灰粘砂土と白灰～白黄細砂の混土 |
| 3. 黒褐色中～細砂 | 13. 黒灰色粘質砂質土 | 23. 暗灰粘土と白色細砂ブロックの混土 |
| 4. 薄い黄褐色灰色粗砂 | 14. 黄白色粗砂 | 24. 暗灰粘土と灰色細砂ブロックの混土 |
| 5. 薄い褐色細砂 | 15. 灰褐色粘砂土 | 25. 暗灰粘土。細～中砂を部分的に含む。 |
| 6. 褐灰色砂質土 | 16. 灰褐色粘砂、黄白細砂。互層。 | 26. 黄色中～粗砂、暗灰粘土の混土 |
| 7. 薄い褐灰色粘質シルト | 17. 灰色細砂。粘質強い。 | 27. 灰褐色シルト |
| 8. 黒灰色粘質砂 | 18. 暗灰褐色粘質土。 | 28. 黄灰褐色シルト。10より黄味が強い。 |
| 9. 薄い黄灰白色細砂 | 19. 黄褐色細～粗砂 | 29. 灰青色粘質シルト～粘土（地山） |
| 10. 黄灰白色粗砂 | 20. 淡灰褐色粘質粘土 | |

第6図 調査区壁面土層実測図(1) (1/60)



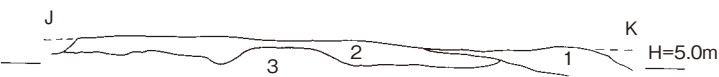
- | | |
|-----------------------------|---------------------------------------|
| 13. 白・黄白色中砂。流路3 | 20. 淡黒色粘土、白色粘土混土。12～20層はSD0005 |
| 14. 灰褐色粘土。炭・有機物を多く含む。 | 21. 酸化鉄含む砂と灰色粘質土混り。SD0003 |
| 15. 黄白色細砂、灰褐色粘土混土。鉄分を含む。流路2 | 22. 21層と同質。粘質土多い。 |
| 16. 淡灰褐色粘土。白色粘土小ブロック、有機物を多い | 23. 暗黒褐色強粘質土。木片等多く含む。23・24層はSD0042（西） |
| 17. 淡黒色粘土。有機物・炭を含む。 | 24. 灰色帯びた明黒褐色土、灰青色粘土ブロック混る。木片・骨含む。 |
| 18. 淡黒色粘土、シルト混土。流路1 | 25. 淡灰褐色。シルト質・鉄分を多く含み、赤みを帯びる。SX0066 |
| 19. 淡黒色粘土。有機物・遺物を少なく含む。 | 26. 灰青色粘質シルト～粘土（地山） |



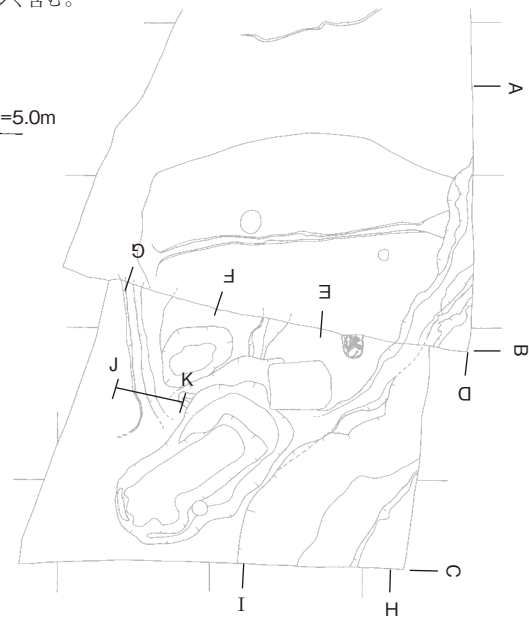
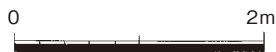
- | | |
|------------------------------------|--------------------------------------|
| 15. 淡褐色粘砂土。細砂をブロック状に含む。 | 22. 暗灰褐粘砂土。鉄分・炭含む。 |
| 16. 淡褐粘砂土。径1-5mmの白色砂、白色細～粗砂、炭、鉄分多い | 23. 22層と黄白細～粗砂の互層。 |
| 17. 暗褐色粘質土。粗砂を多く含む。 | 24. 暗灰褐粘砂土。炭・鉄分含む。 |
| 18. 灰褐色粘土。黄色細砂、鉄分、マンガンを多く含む。 | 25. 24層と黄褐細砂の互層。 |
| 19. 灰褐粘砂土。黄色砂、黄白粘土小ブロック、鉄分、マンガン多い | 26. 黒灰粘土。底面はやや凹凸。SD0042（西） |
| 20. 暗褐粘砂土と黄色細～中砂の互層。 | 27. 暗灰褐粘土。径10cm地山ブロックを粗に含む。SD0042（東） |
| 21. 20層と同じ互層 | 28. 灰青色粘質シルト～粘土（地山） |



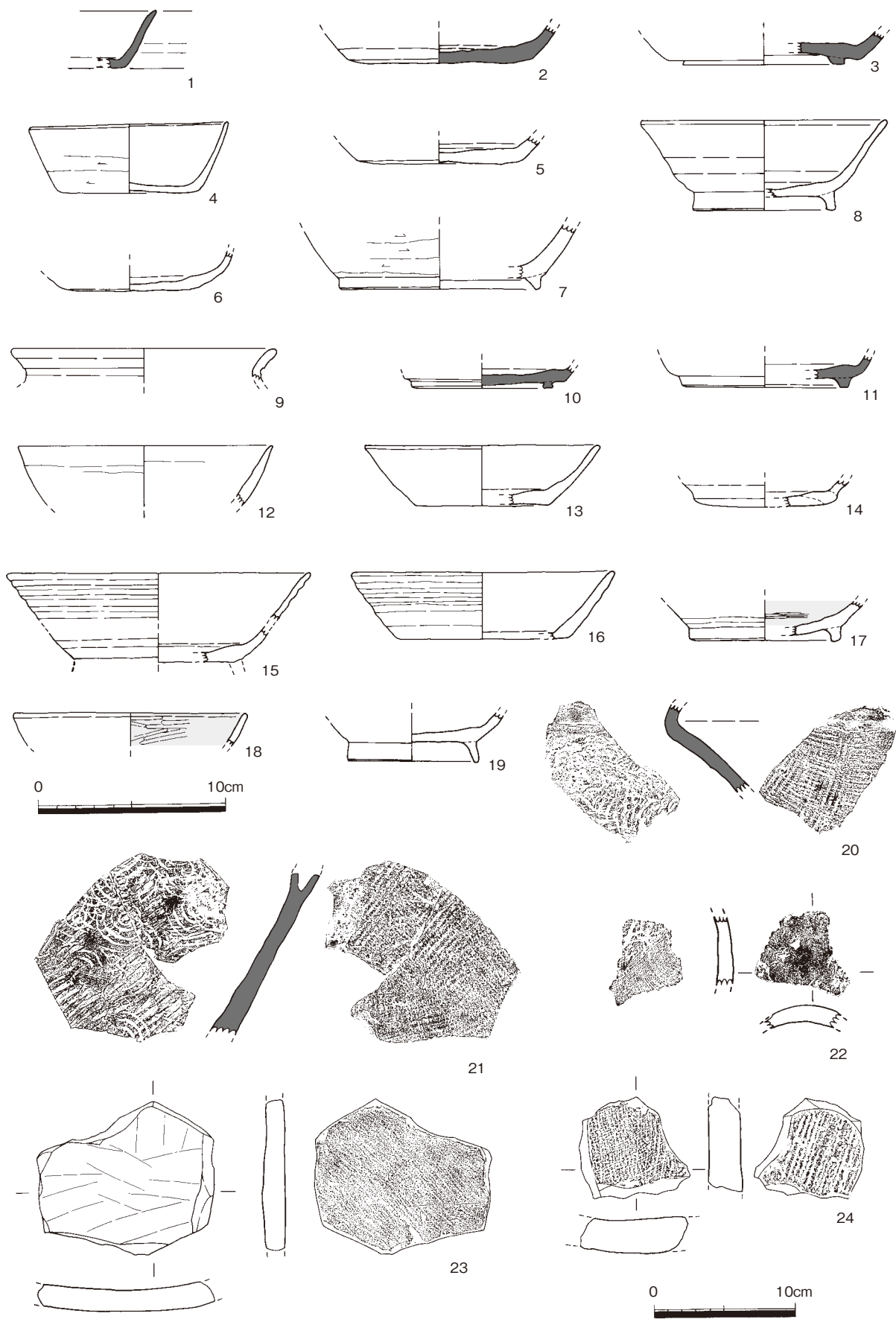
- | | |
|--|--|
| 1. 灰褐色粘砂土。黄褐色・黄白色中砂をブロック状に不均質に含む。炭を多く含む。SX0025 | 3. 淡褐色粘砂土。砂・炭を多く均一に含む |
| 2. 灰黒色粘土と灰白色中粗砂の互層。SS0059 | 4. 灰褐色粘砂土。黄褐色・黄白色中砂をブロック状に不均質に含む。炭を多く含む。 |
| 5. 黒灰色粘質土。灰褐色粘土を細かいブロック状に含む。SX0067 | 6. 灰褐色シルト。SX0066 |



- | |
|--------------------------------------|
| 1. 灰褐粘土。鉄分含む。SD0029 |
| 2. 灰褐粘砂土。黄色中砂、アシ類多い。底面凹凸。SS0059・0060 |
| 3. 灰褐色粘砂土。畦畔 |

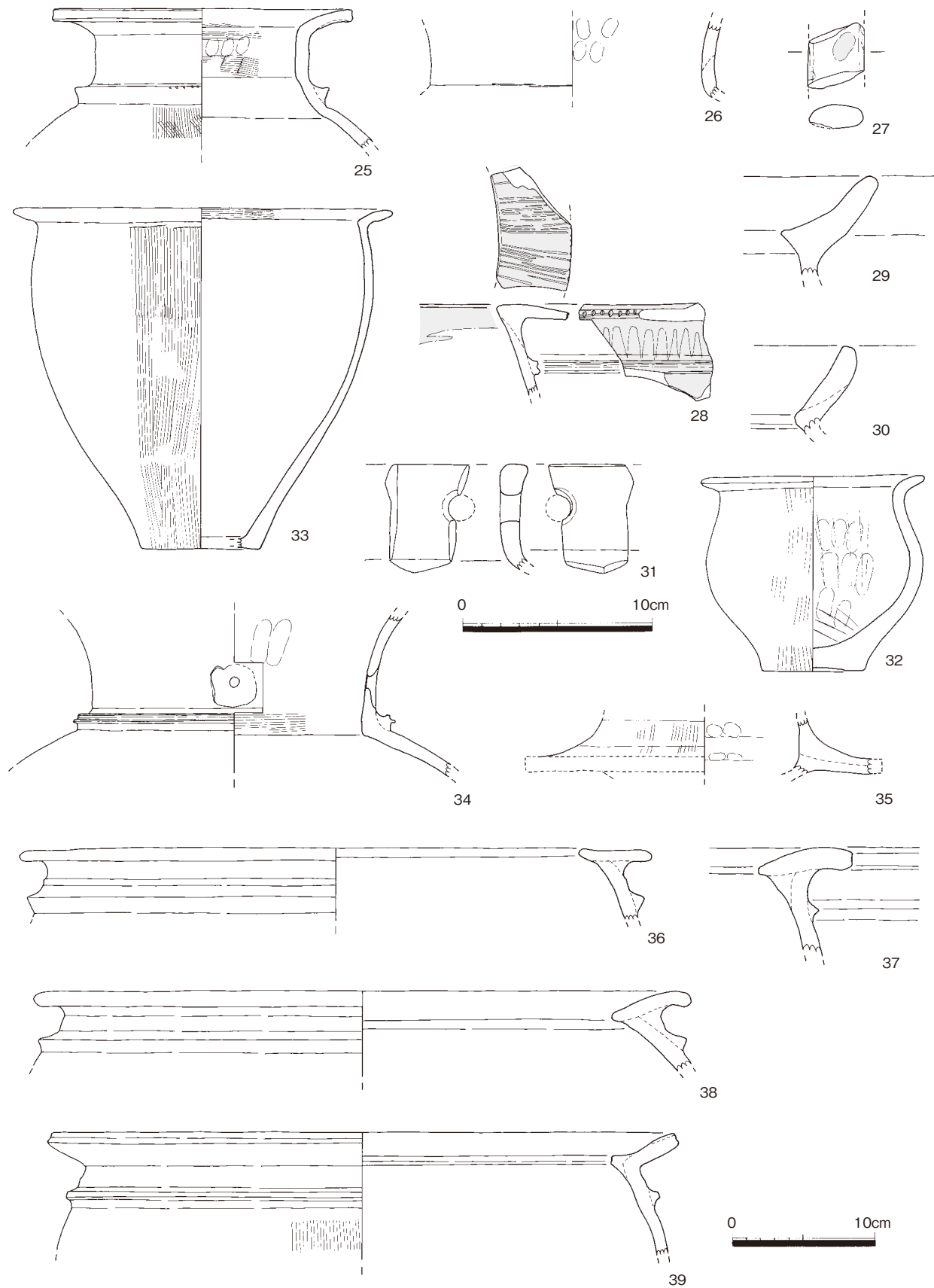


第7図 調査区壁面土層実測図(2) (1/60)

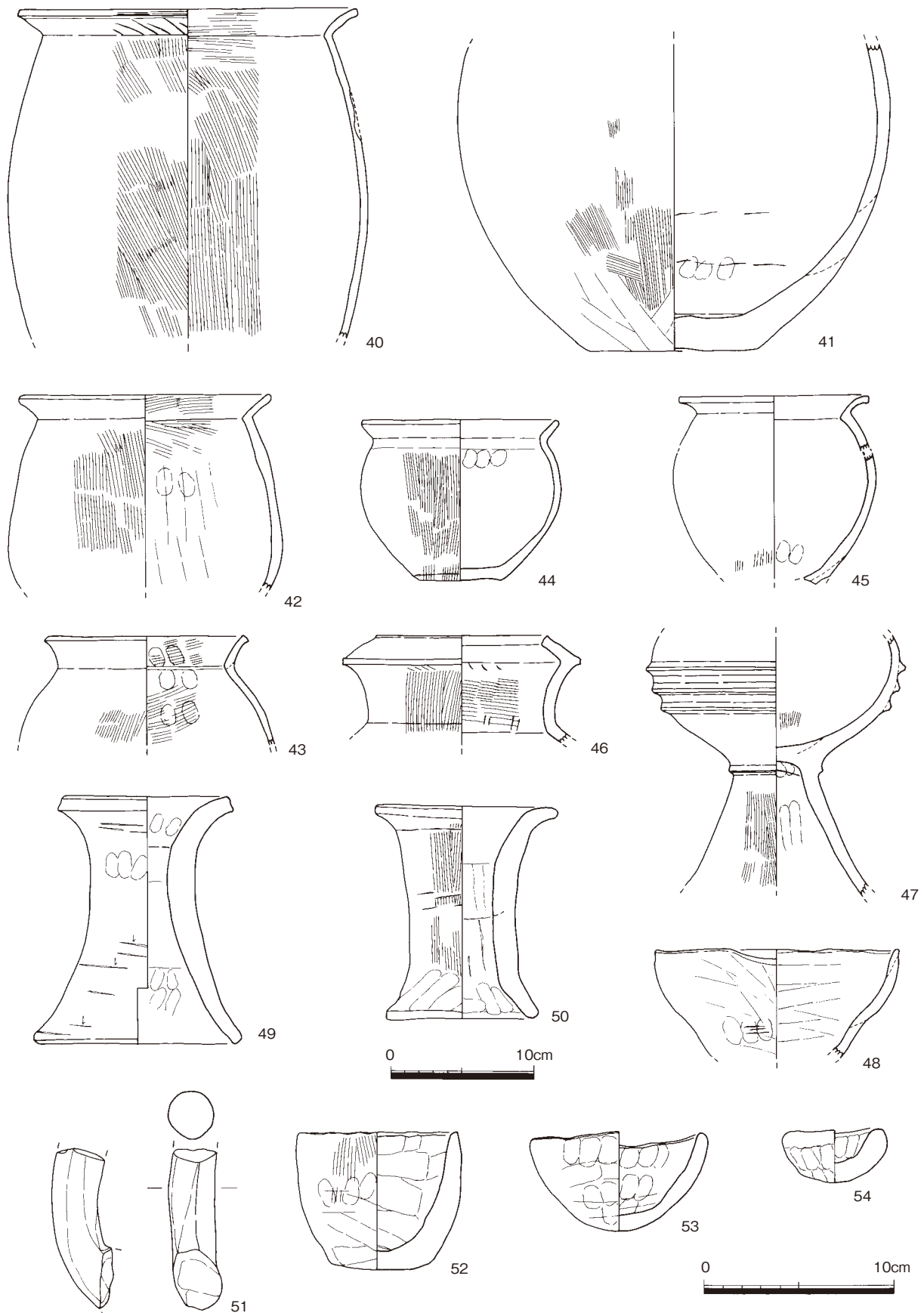


1~8 SD0001 9~18・20~24 SD0002 19 SD0022

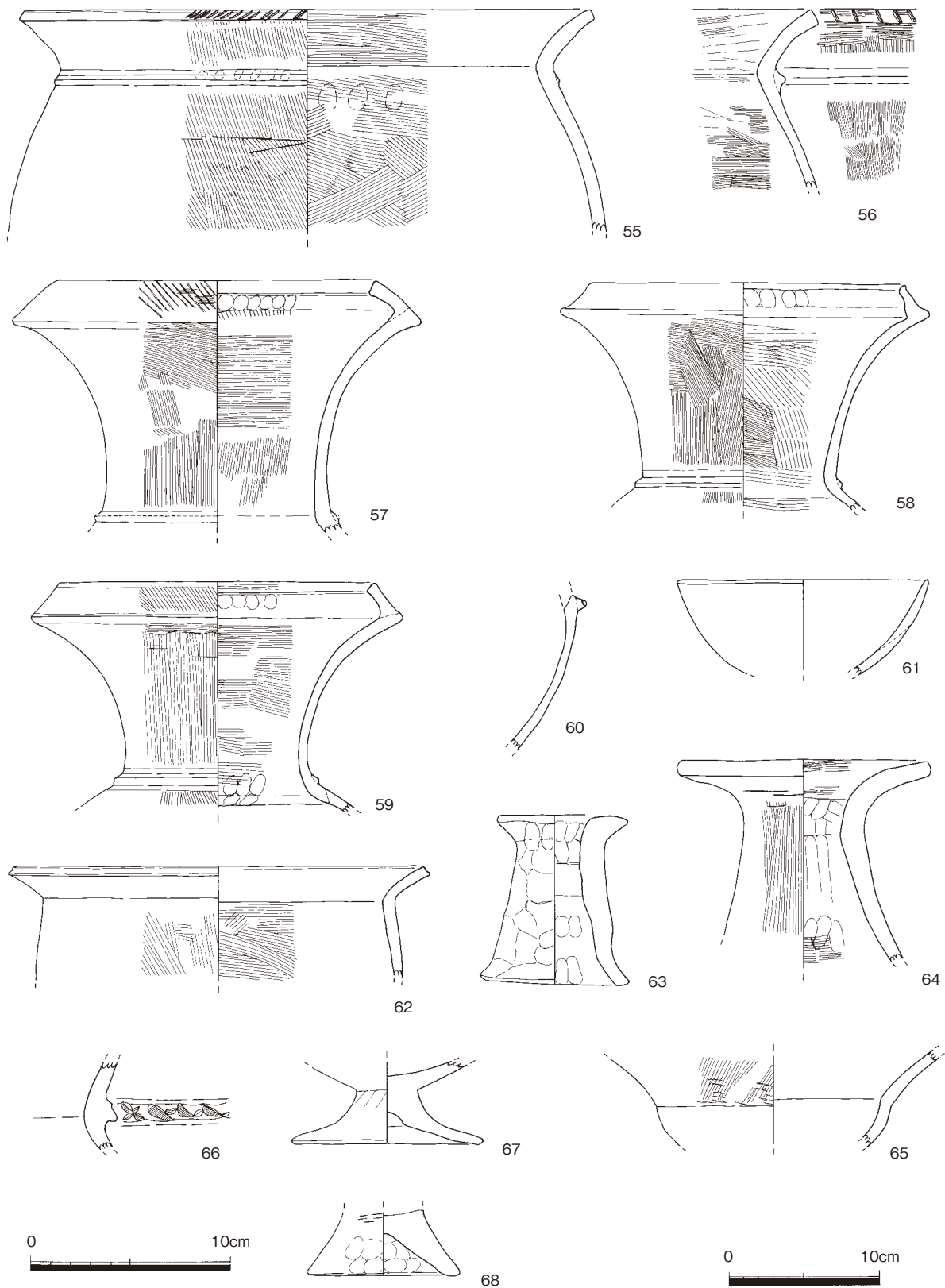
第8図 SD0001・0002・0022 出土遺物実測図 (20~24は1/4、他は1/3)



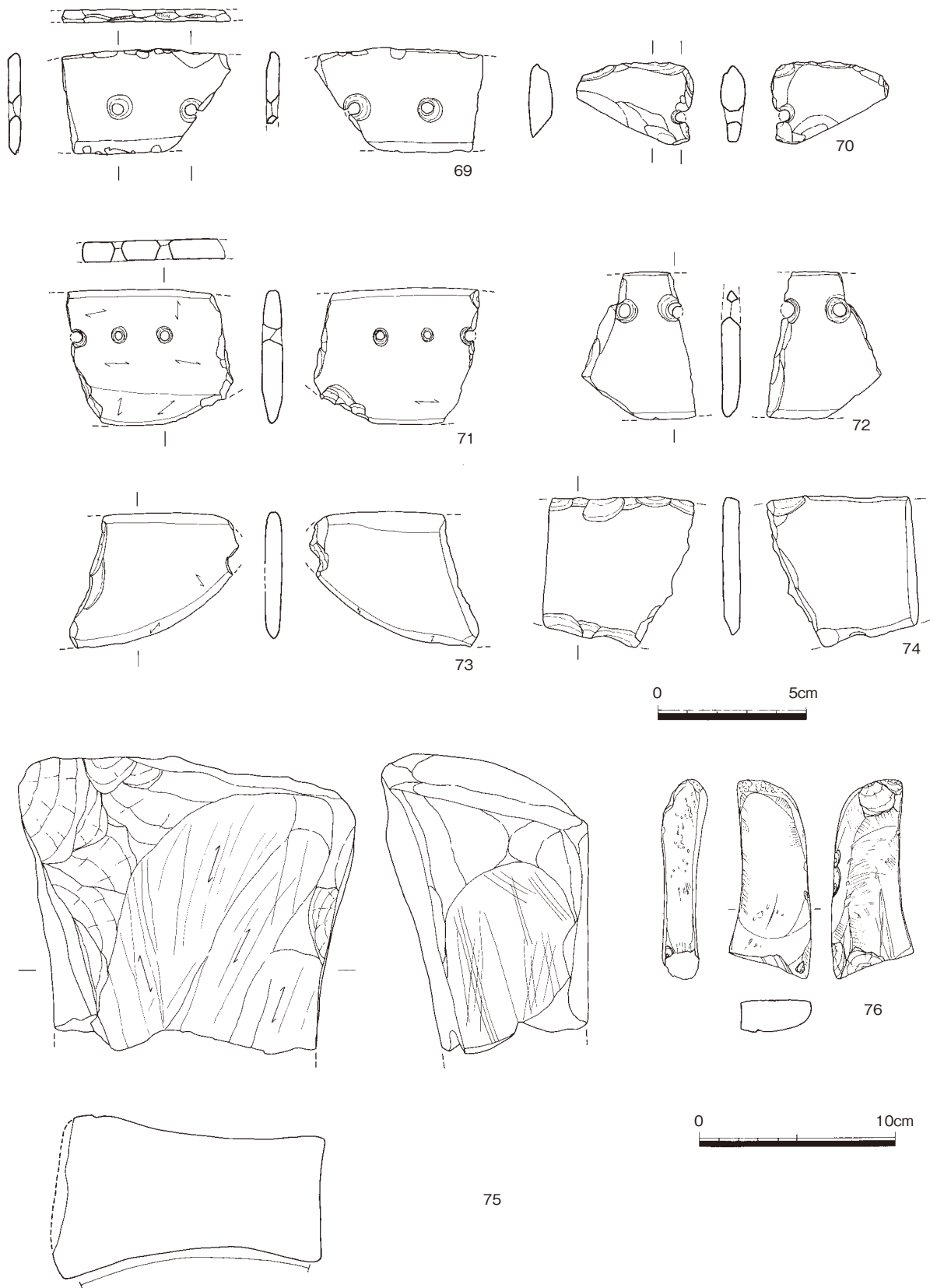
第9図 SD0001・0002 出土遺物実測図(1) (27~32は1/3、他は1/4)



第10図 SD0001・0002 出土遺物実測図(2) (51~54は1/3、他は1/4)

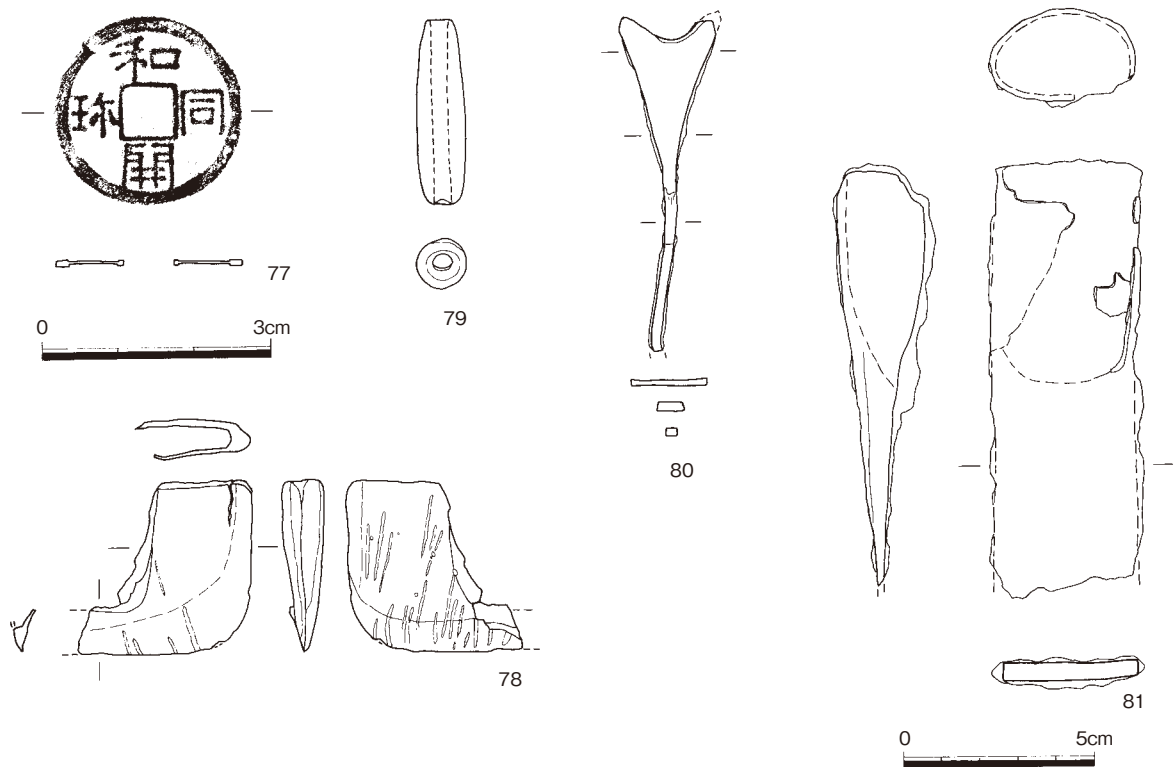


第11図 SD0001・0002 出土遺物実測図(3) (66~68は1/3、他は1/4)

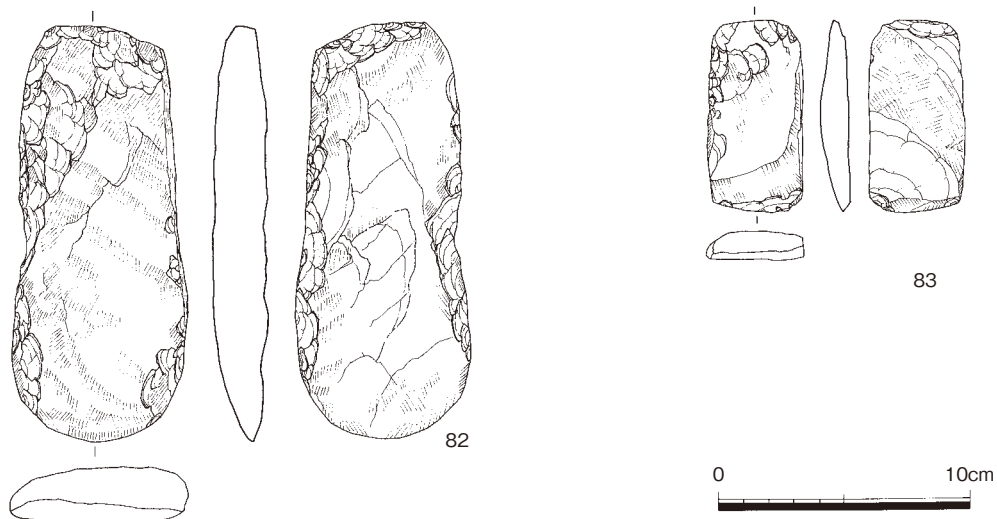


69 SD0001 70~76 SD0002

第12図 SD0001・0002 出土遺物実測図(4) (75・76は1/3、他は1/2)



第13図 SD0002 出土遺物実測図 (77は1/1、他は1/2)



第14図 SD0022 出土遺物実測図 (1/3)

壺 (46・57～60)・高坏 (47・65・67・68)・器台 (49・50・63・64)・ミニチュア鉢 (48・52～54)・鉢 (61)、石庖丁 (69～74)、青銅製鋤先 (78)、鍛造袋状鉄斧 (81) などが出土した。25は頸部突帯に部分的に小さく浅い刻み目が入る。27は丹が部分的に残る。28は丹塗りの甕で、口縁部上面に幅1mm細線12～13本からなる幅2cmの集線暗文が7～8mmの間隔を空けて施される。口縁部と突帯の間には幅0.5mmの細かい波状細線で暗文が施される。31は径1.3cmの焼成前穿孔がみられ、穿孔周辺にわずかに丹が残る。34は胎土に粗砂をあまり含まない精良なもので、全面を丁寧

にナデあげ、突帯の作りも精巧である。頸部に6×7.3mmの焼成後穿孔が認められる。35は砂粒をあまり含まない精良な胎土で丹がわずかに残る。37・38は立岩式である。41は厚手の平底をなす。42はハケメ工具の木目幅が2mmと広い。43は口縁部外面が強くナデられ、口唇部外端が張り出す。45は頸部がしまり、口縁部は外反する。46は口縁部外面屈曲部がわずかに張り出す。47は坏部に3条の突帯を貼り付ける。胎土・調整は精製というほどではない。色調は灰黄色を呈す。49は均整のとれた成形でハケメ・ナデ調整も丁寧である。50は成形が歪み、強いユビオサエを残す粗い作りである。51は胎土に細～中砂を多く含む。ジョッキ形土器の把手の可能性もある。55・56は、口唇部にハケメ工具による斜位の刻み目を施す。60は突帯上にハケメ工具による斜位の刻みが施される。61は素口縁で、下大隈式～西新式である。64は均整のとれた成形でハケメ・ナデ調整も比較的丁寧であるが、63は成形が歪み、強いユビオサエを残す粗い作りである。67は、胎土は砂粒をあまり含まない精選土である。25は城ノ越式、26～39は須玖Ⅱ式、40～54は高三瀧式、55～61は西新式、62～68は古墳時代前期の土器である。70は石庖丁を二等辺三角形に再加工している。71は孔の穿ち直しとみられる3つ目の穿孔がみられる。74は石庖丁未成品である。78は内側にバリを残す。前後面に刃線に対して15～25度で平行する線状痕がみられる。最下層黄色砂から出土した(第5図)。81は腐食が進んでおり、袋部の形状等は不明瞭であるが、斧身は板状で幅3.7cm、厚さ4～7mmを測る。この他、SD0001・0002からはパンコンテナ45箱分の遺物が出土した。

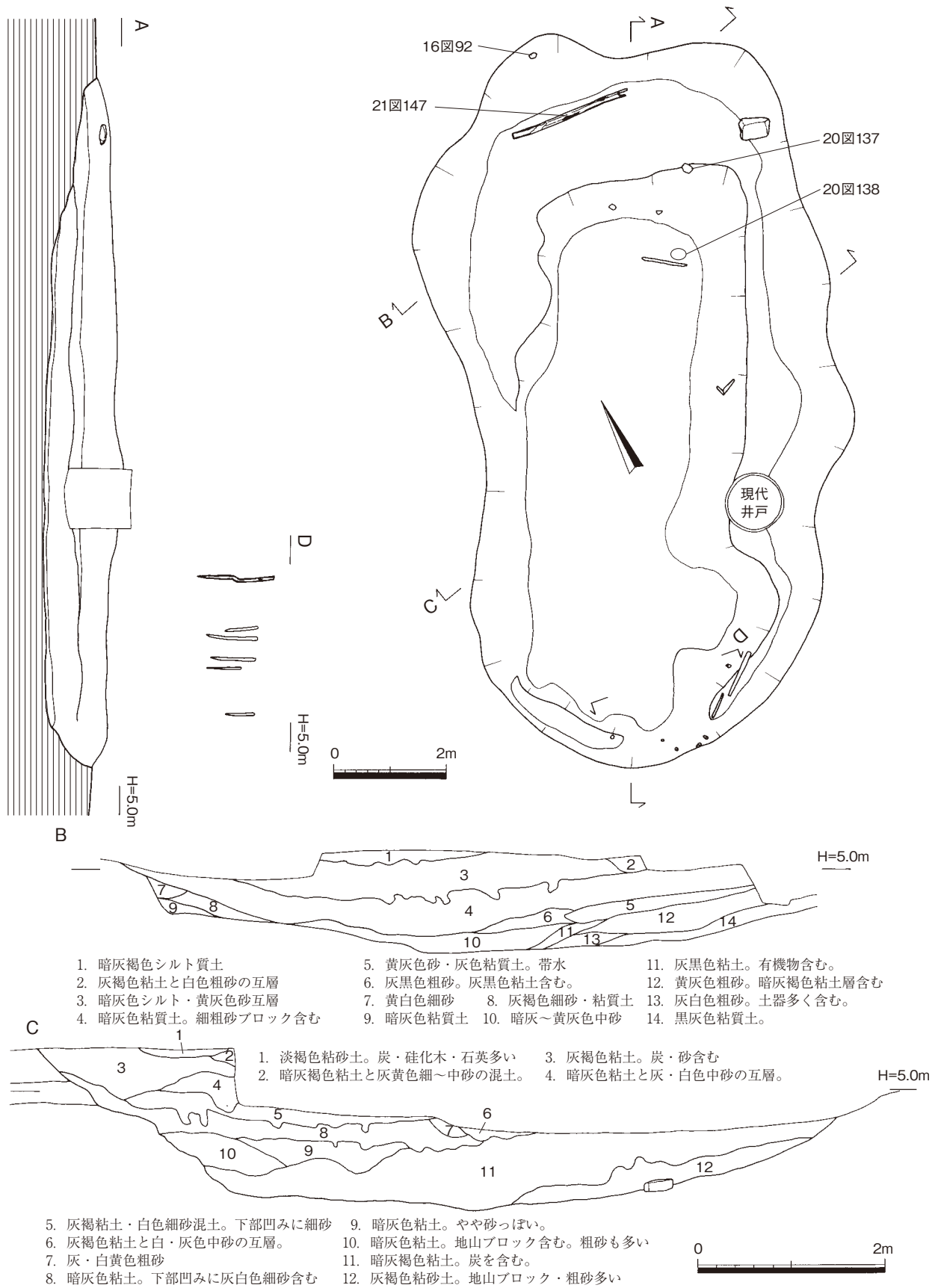
SD0022(第5～7図) J-5区で確認した北流する流路である。検出面での残存幅は3m、深さは調査区東壁土層で1mを測る。北側は調査区外へ、南側はⅢ区の水路に連続する。埋土は、黒色系の粘土と細～粗砂が互層をなす(第6・7図B-C土層1～13層、H-I土層1～14層)。層中には遺物とともに径10～20cmの亜角礫が含まれている。SD0002を切っており、I区で最も新しい時期の遺構である。

出土遺物(第8・14図) 19は土師器の高台付椀である。9世紀後半もしくは10世紀初頭まで下ると考える。82は透閃石岩製の中型石斧、83は凝灰岩製の扁平小型石斧である。この他、弥生時代～古代の土器・須恵器、砥石・石製支脚などがパンコンテナ1箱分出土した。土師器椀19から遺構時期の下限は10世紀初頭と考えられ、9世紀後半のSD0002を切る層位関係とも矛盾はない。

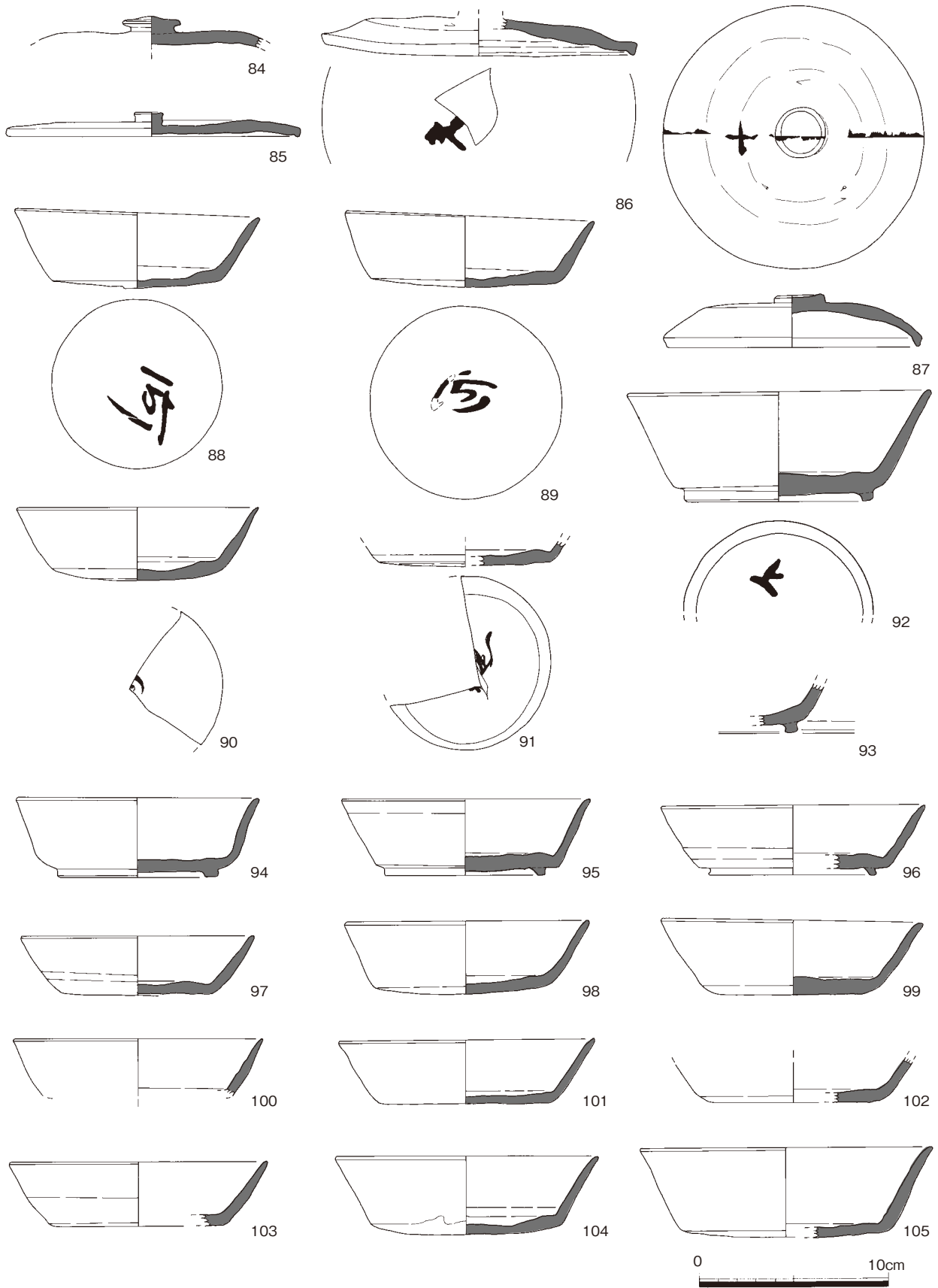
水溜状遺構(SD・SX)

SD0029(第5・15図) I・J-3・4区で確認した北東軸の大型土坑である。上端平面形は楕円形であるが、2段掘りになっており、下の掘り込みは長方形を呈す。長さ12.5m、幅6～7m、深さ1.3～1.5mを測る。南側に杭列を伴う(第15図見通しD)。杭は、径3～5cmの小型丸杭で構成され、うち1点の樹種はサカキである。埋土は、暗灰～黒灰色系の粘土と細～粗砂の互層で流路状堆積をなす。SS0058～0060を切り、SX0025・SD0001との切り合い関係は不明瞭で、連続性があるとみることとも可能である。

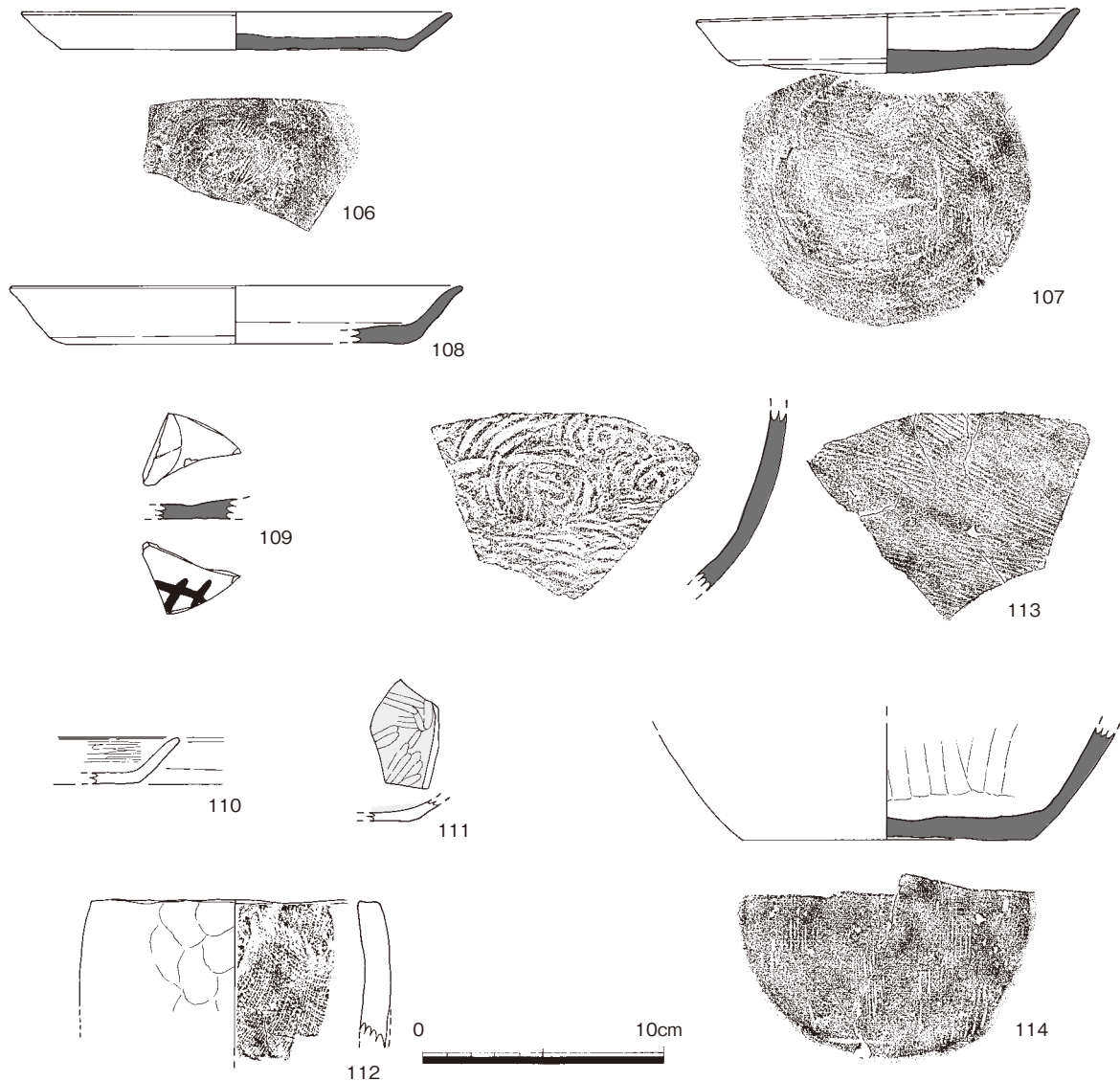
出土遺物(第16～21図) 須恵器の坏蓋(84～87)、坏(88～91、97～105)、高台坏(92～96)、皿(106～108)、甕(113)、鉢(114)、黒色土器A類坏(111)、土師器皿(110)、製塩土器(112)、砥石(136・138)、石錘(137)、曲物(142)、容器脚(144・145)、弓(146)、建築部材(143・147)が出土した。86は、内面中央付近に判読不能な墨書が1字あり、口縁部に3カ所灯芯痕が残る。87は外面に「十」銘と器面を分割するような線が墨書されている。88・89は底外面中央に「向」銘の墨書がある。90・91は底外面中央に判読不能な墨書1字がある。92は高台内に「上」銘の墨書がある。北端最下面から伏せた状態で出土した(第15図、図版12-1)。93は、高台内に墨が付着している。



第 15 図 SD0029 実測図 (平面・断面図 1/100、土層図 1/60)

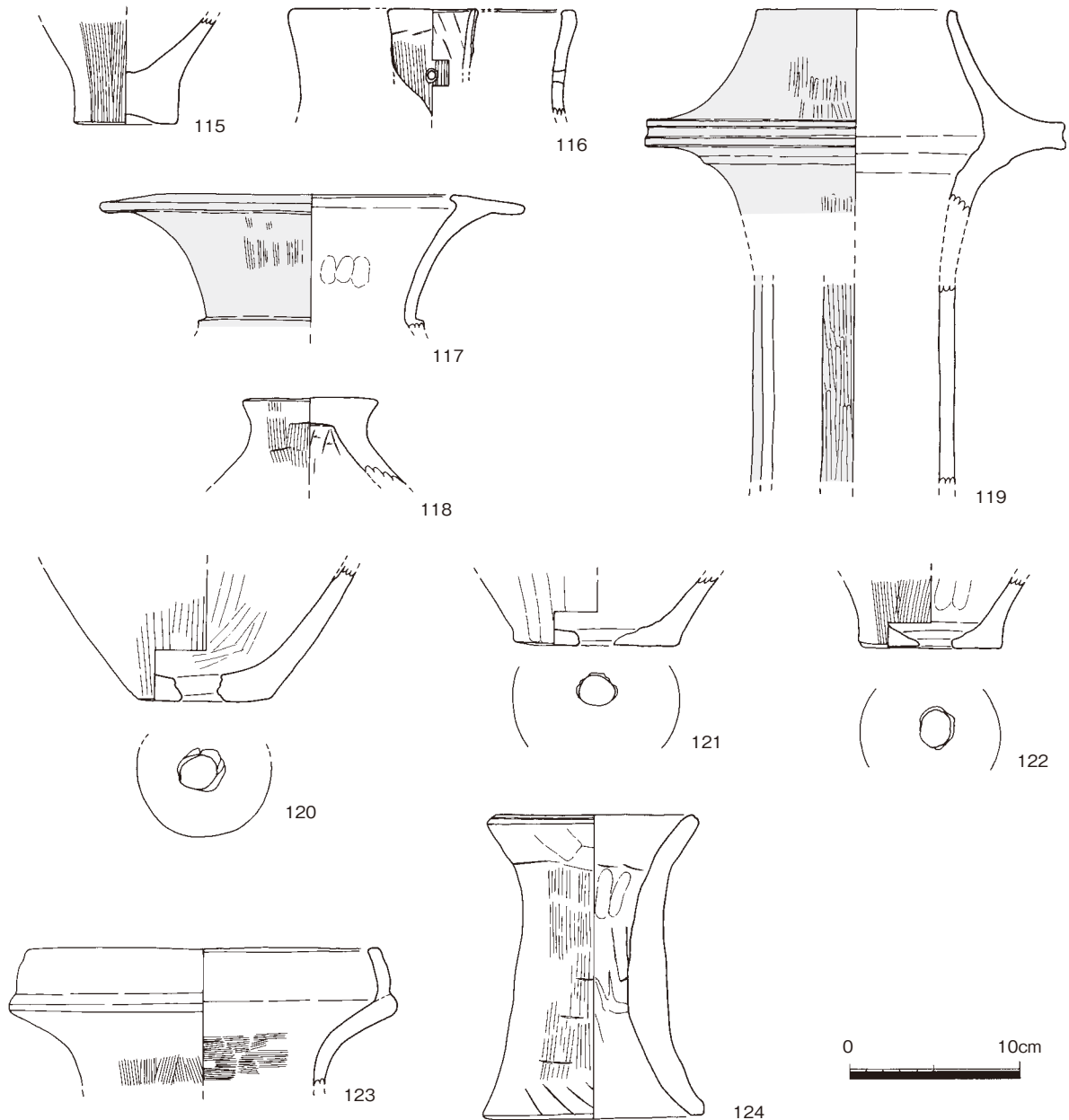


第16图 SD0029 出土遺物実測図(1) (1/3)



第17図 SD0029 出土遺物実測図(2) (1/3)

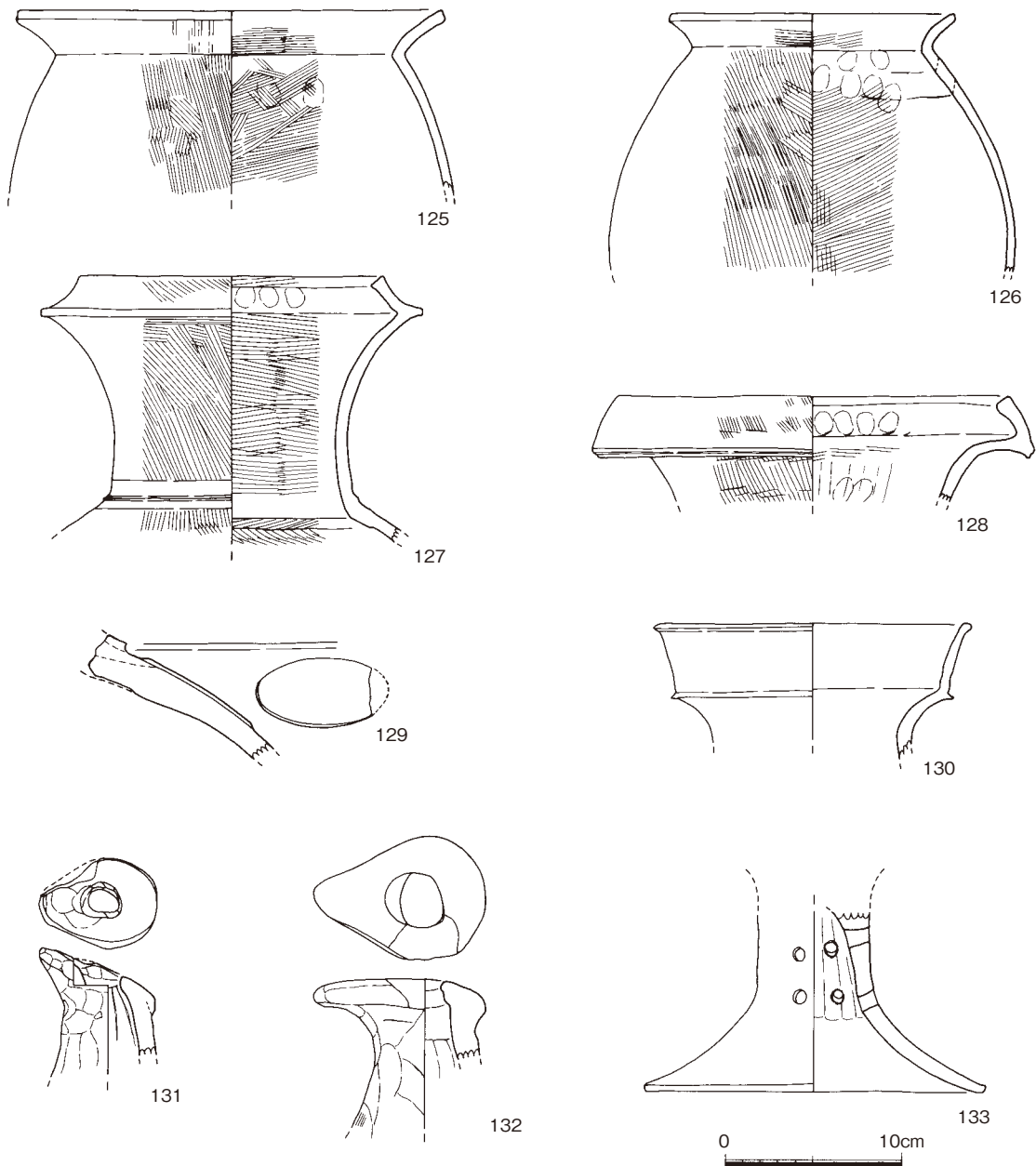
94は、SS0056上面を覆う砂層出土小片と接合した。98・110・114は内面に、101・104は内外面に墨と思われる黒褐色物が付着する。99・107は、内底面中央に焼成後の摩滅・磨痕が残り、内外面に墨と思われる黒褐色物が付着している。転用硯であろう。100・103・105は、88～91と同質の須恵器で、底外面に墨書があった可能性があるが、欠損していて不明である。109は底外面に「井」に類似する墨書がある。須恵器はすべて8世紀後半に収まる。137は花崗岩製で、中央長軸を溝状に剥離・敲打で打ちくぼめている。北側のテラス南端から出土した(第15図)。138は前面から上3.5～5.5cmが被熱黒色化している。また、後面から上4～5cm部分に横位の削り込み・凹みが回っている。底面上10cmから出土した(第15図)。142はヒノキの曲物底板片で、復元径19.1cmを測る。内面に横・縦方向の浅い線状痕が認められる。143はクリの分割材片で、上端から4.5cm下に幅1cmほどの凹みが帯状に回る。147と共に取り上げており、樹種も同じであるため、同一個体(143が147の一部)の可能性もある。144はスギの木製容器の脚で、下面は摩滅している。145はスギの槽脚部で、木取りは不明である。147はクリの建築部材で、断面形は六角形状に面取成形され、貫穴1カ所、ほぞ孔2カ所が残り、下端は一部炭化し変形しつつも、丸みを帯びて収まっている。北側テ



第18図 SD0029 出土遺物実測図(3) (1/4)

ラスの北端から出土した(第15図)。

周辺遺構から混じり込んだ弥生時代の、甕(115・120～122・125・126)、直口壺(116)、丹塗壺(117)、蓋(118)、丹塗筒形器台(119)、二重口縁壺(123・127・128・130)、器台(124)、大甕(129)、杓形支脚(131・132)、高坏(133)、石庖丁(134・135)が出土した。116は口縁部に透かし状の切り込みが入っている。120～123は底部に焼成後穿孔を施す。129は甕棺型式K IV b式の特徴を有し、肩部に径7.5 cm、厚さ2～3 mmの粘土円板を貼り付けている。133は、脚部に二段穿孔を4カ所施しているが、穿孔の上下間は2.5～4 cm、左右の穿孔どうしの間隔は3～5 cmと幅があり、等間隔でない。土器型式としては、115は城ノ越式、116は須玖I式、117～122は須玖II式、120・123・124・129・131・132は高三瀧式、127・128・133は下大隈式、125・130は西新式に相当する。

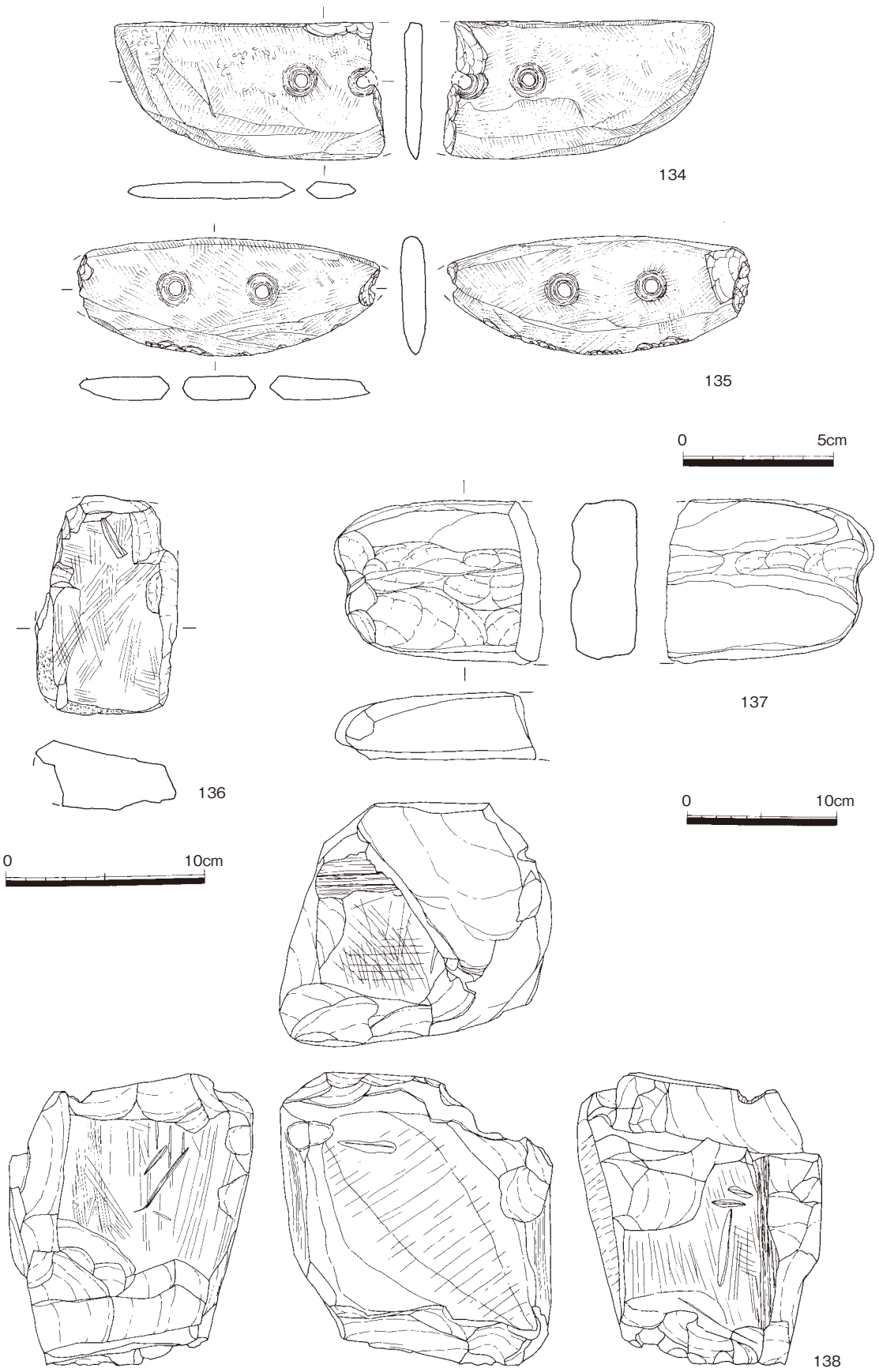


第19図 SD0029 出土遺物実測図(4) (1/4)

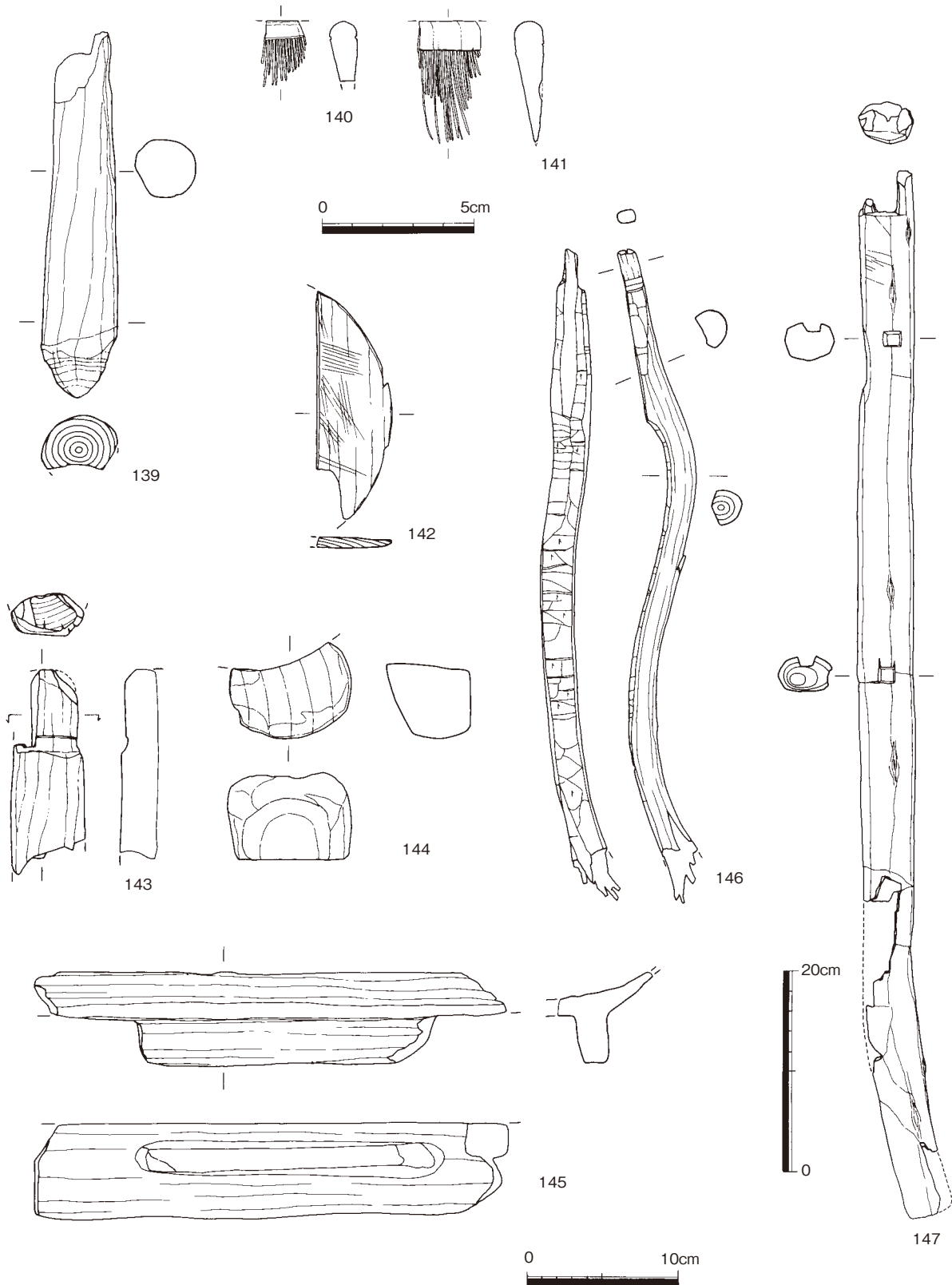
この他、弥生時代～古代の土器・土師器・須恵器、磨石類・石製支脚、黒曜石・安山岩・頁岩・砂岩・玄武岩・花崗岩・軽石片、獣骨などがパンコンテナ 21 箱出土した。遺物の様相から、遺構の時期は 8 世紀後半で、盛んな水の往来によって周辺遺構の弥生時代遺物が流入・堆積したと考える。

SX0025 (第 22 図) H・I-3・4 区で確認した北西軸の流路状遺構である。東側は溝状、西側は窪み状となり、堆積は一連のものである。幅 15 m、深さ 30～40 cm を測る。北側では検出を行っていない。埋土は、灰黒色粘土と中～粗砂の互層で底面は凹凸をなす(第 7 図 F-G 土層 1 層)。西側で SS0059 を、東側で SS0058 を切り、南側では SD0029 と連続性がある。SD0029 との境に長さ約 170 cm と約 80 cm の棒材が出土しており、相互に組み合せて付帯設備をなしていた可能性もある。

出土遺物(第 23・24 図) 148 は須恵器の高坏もしくは浅い椀である。149 は須恵器模倣土師器の坏で、内面黒色である。8 世紀前半であろう。151 は下大隈式の甕である。150 は軽石製の浮子で 4

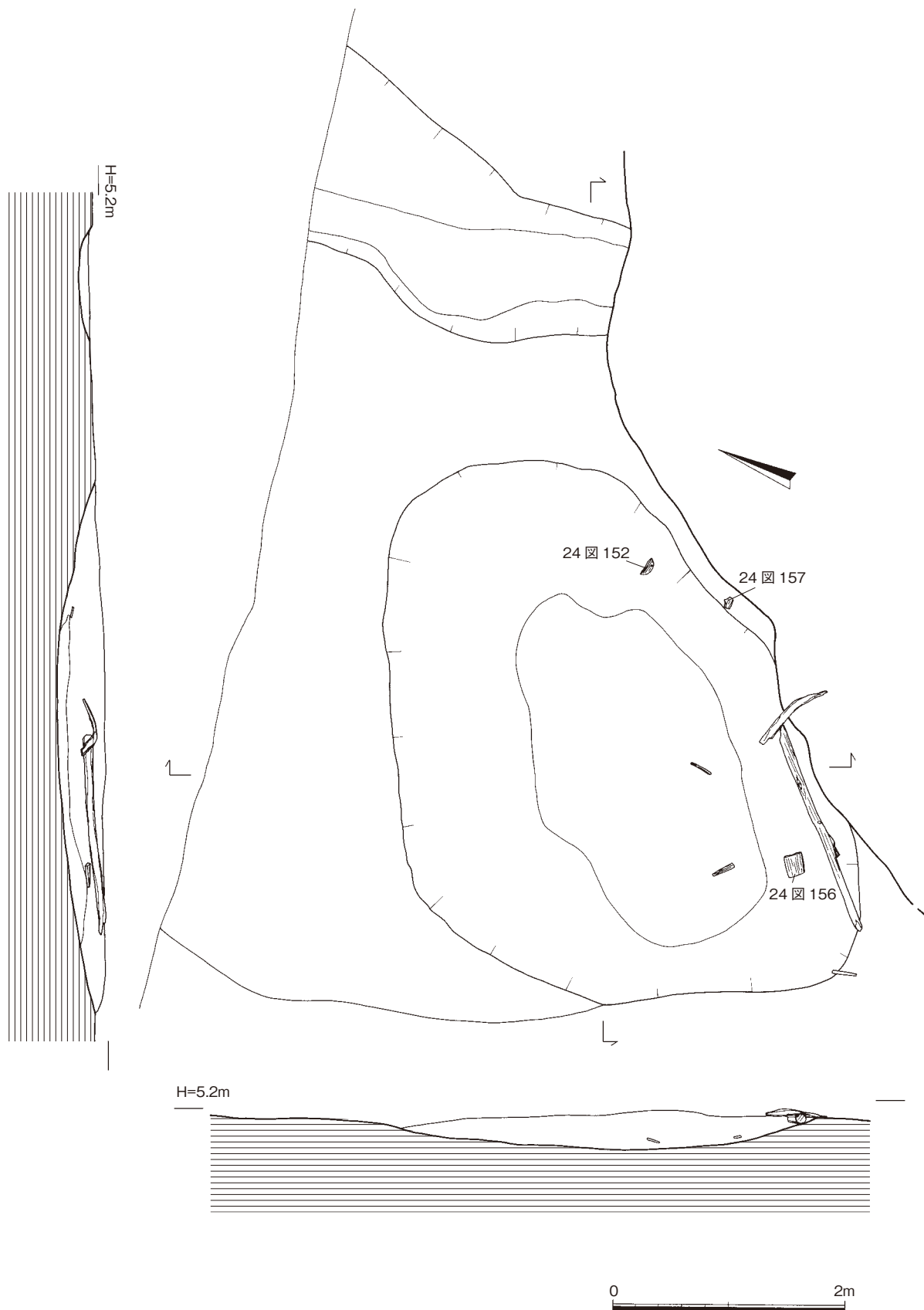


第20図 SD0029 出土遺物実測図(5) (134・135は1/2、136は1/3、他は1/4)

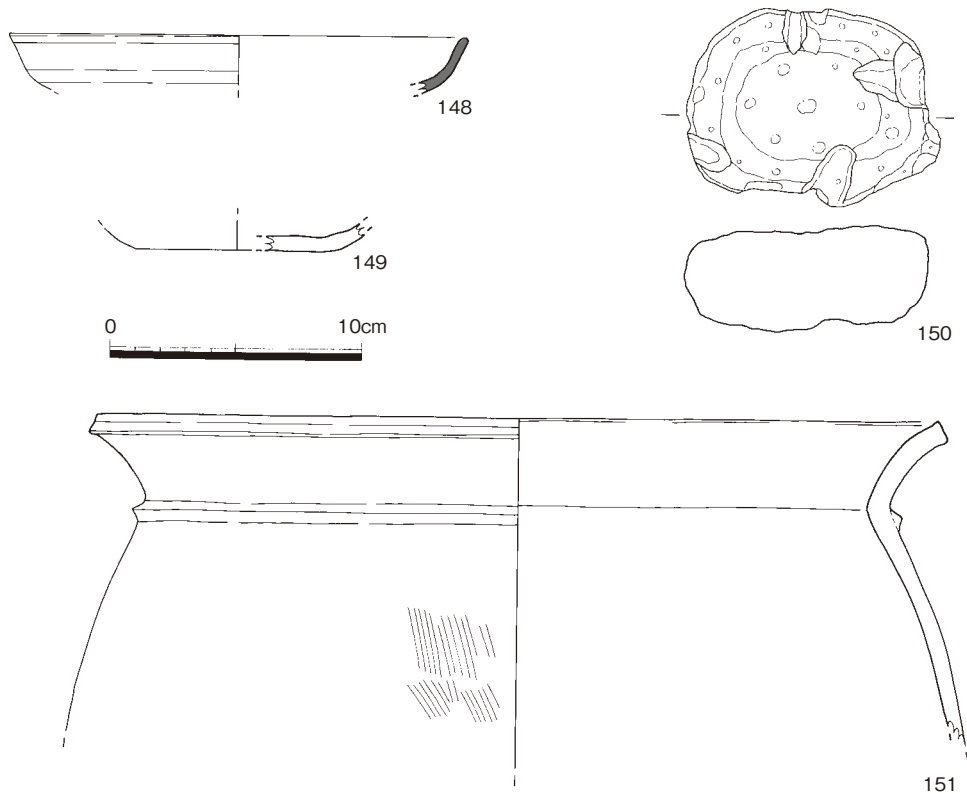


139 SD0001 140・141 SD0002 142～147 SD0029

第21図 SD0001・0002・0029 出土木器実測図(140・141は1/2、147は1/6、他は1/4)



第 22 図 SX0025 実測図 (1/50)



第23図 SX0025 出土遺物実測図(1/3)

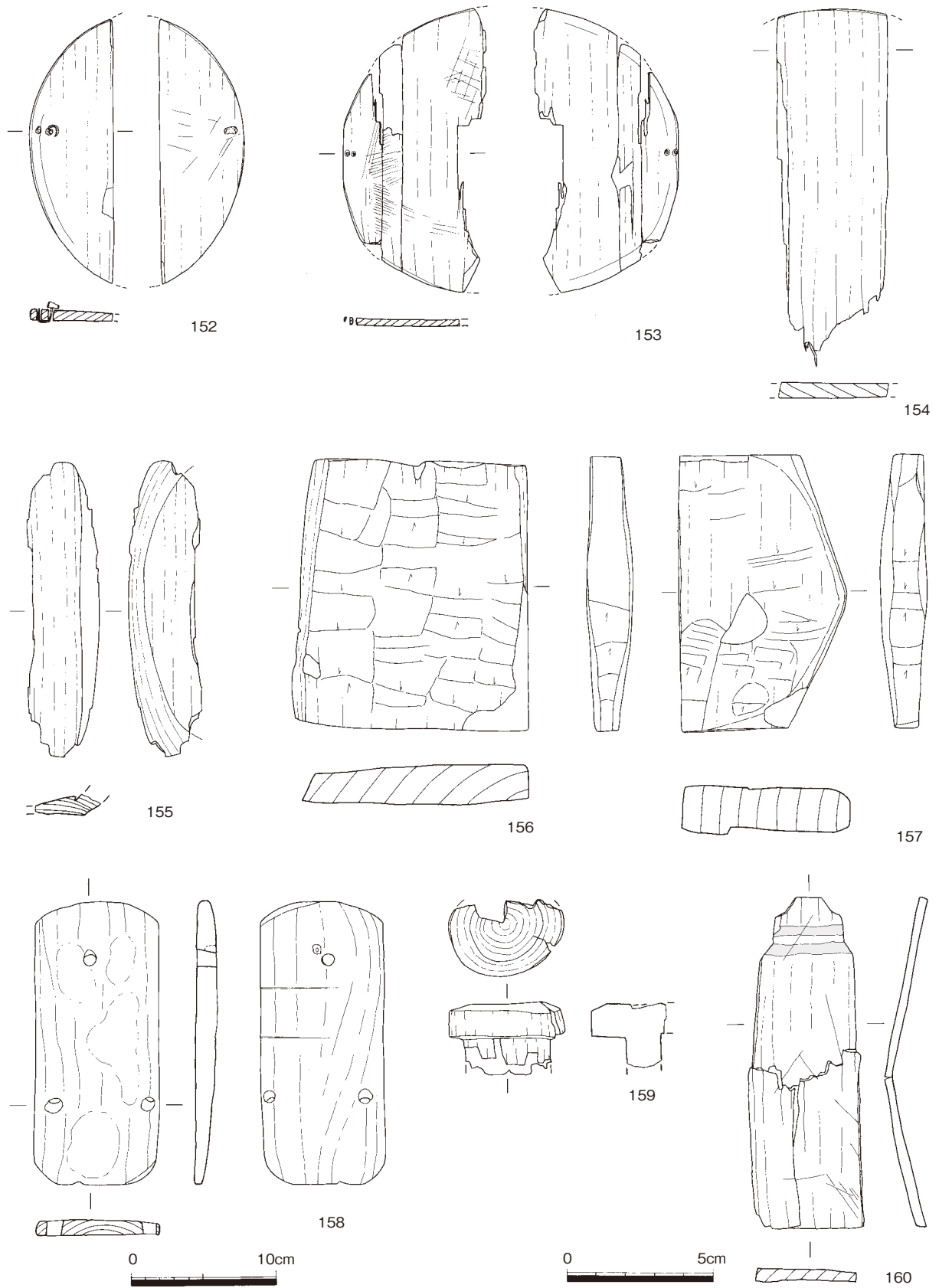
刃に切り込みが入る。木器は、曲物底板(152~154)・刳物容器(155)・板材(156)・板状木製品(157)が出土した。152はヒノキで、綴じ樹皮が遺存し、外面には刃物傷が残る。153もヒノキで、外面には刃物傷が残る。154は針葉樹の曲物底板で、外面に刃物傷が残る。156はスギで、幅4cmほどの鉄製工具で加工したとみられる。157はヒノキで、比較的丁寧に面取して五角形に加工している。下端がわずかに薄く削られており、楔の可能性がある。152・156・157は南のSD0029側に堆積していた(第22図)。この他、弥生時代~古代の土器、獣骨がパンコンテナ2箱分出土した。遺物の時期は8世紀代で、SS0058・0059を切り、SD0029と連続的であるという層位関係から、遺構の時期は8世紀後半と考える。

土坑(SK)

SK0026(第25図) I-4・5区で確認した北西軸の長方形土坑である。残存長1.5m、幅1.4m、深さ20cmを測る。北側では検出を行っていない。埋土は、黒褐色系粘土と細~粗砂の互層状の堆積をなし、底面は細かい凹凸をなす。出土遺物は土器・土師器小片で、詳しい時期比定は困難である。SS0058上に構築されることから(第6図D-E土層3層)、8世紀後半ごろの所産と考える。

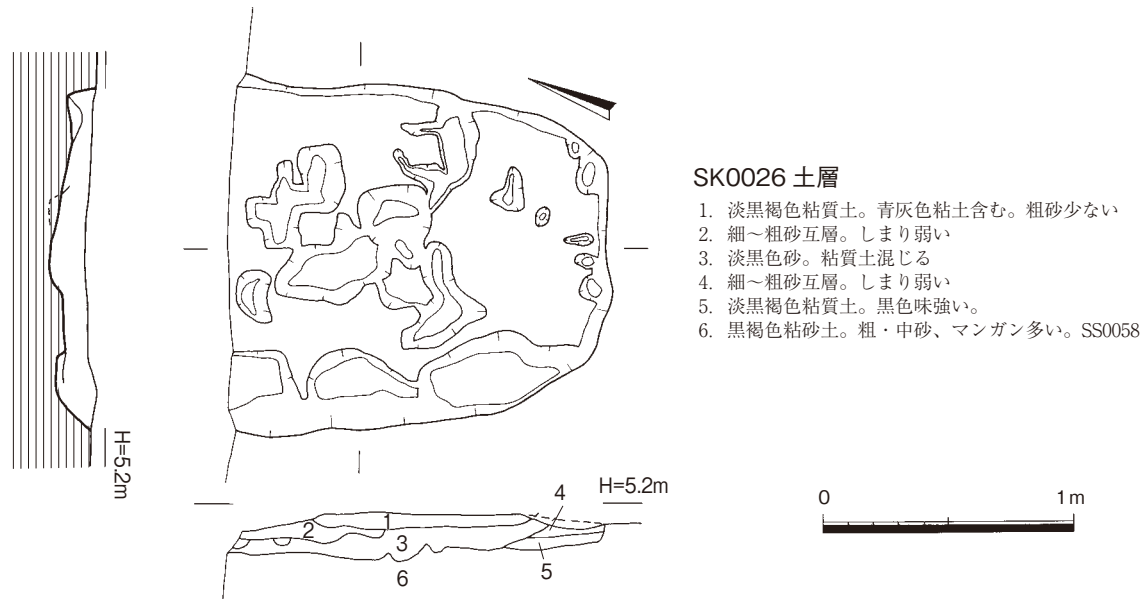
水田(SS)

SS0056~0060(第5~7・26図) G・H・I-3・4・5区で確認したN-60°-E軸の長方形区画水田である。残存長20m、幅6.5mを測る。黄色・白色粗砂で覆われており、耕作土・床土は粘土・中砂の混土で土器小片を多く含む。また、最下層には自然木片が多く含まれ、受熱・炭化したものもある(第6・7図D-E土層4層、F-G土層2層、J-K土層2層)。獣骨も含まれる。全面にヒト・偶蹄類の足跡が残る。SS0057とSS0056の間には幅30~70cm、高さ4~17cmの畦畔が遺存し、



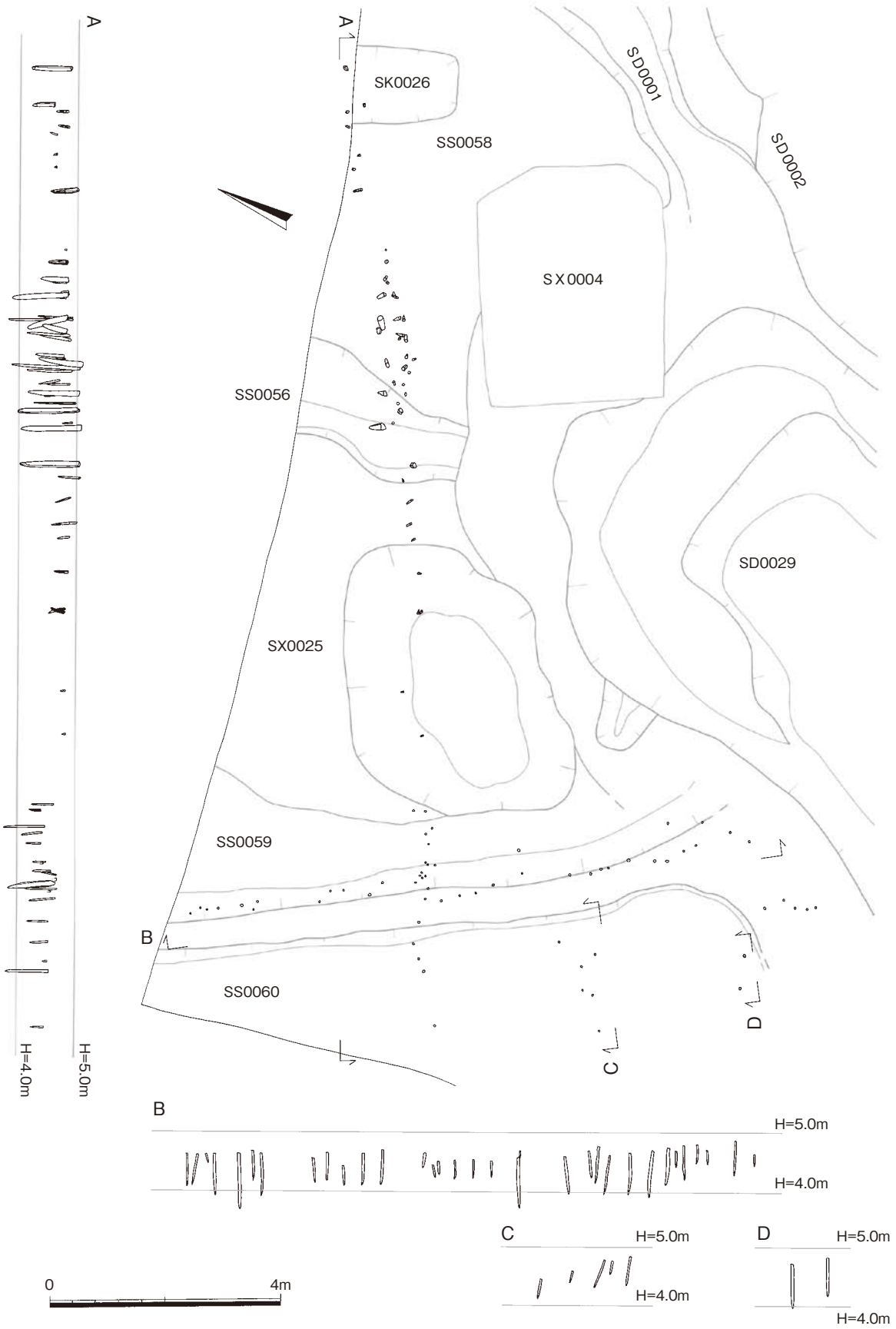
152~157 SX0025 158~160 I-B区検出面

第24図 SX0025 および1面出土木器実測図 (157・160は1/2、他は1/4)

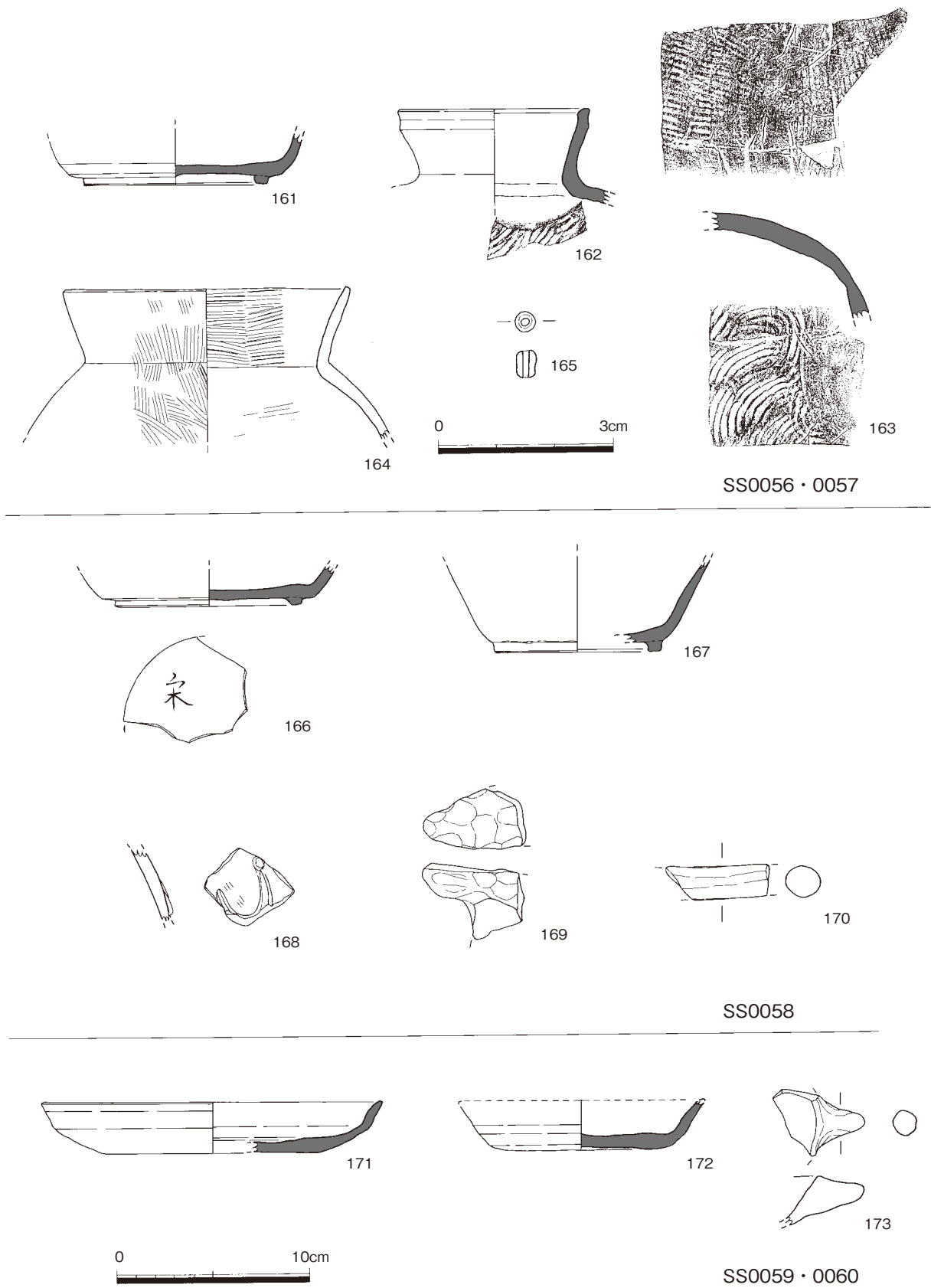


SS0056 と SS0058 との間には杭列 A が遺存する (第 26 図見通し A)。東端は SD0001 に切られる。SS0058 は SD0029・SX0025・SK0026 に切られる。SS0059 と SS0060 の間には幅 120～150 cm、高さ 15 cm の畦畔が遺存し (第 7 図 F-G 土層 3 層、J-K 土層 3 層)、畦畔の東側に平行して杭列 B を検出した (第 26 図見通し B)。SS0059 は SX0025 に切られる。杭列 A は杭列 B に直交・横断して、南西方向へ延びる。また、杭列 C・D も杭列 B に直交して南西方向へ延びている。杭は 100 点を取り上げた。径 1～5 cm の小型丸杭 (72 点、72%)、径 5.5 cm の中型丸杭 (3 点、3%)、径 8.5～11 cm の大型丸杭 (3 点、3%)、幅 2～5 cm・厚さ 1～4 cm の小型割杭 (13 点、13%)、幅 6.5～7 cm・厚さ 3.5～5 cm の中型割杭 (4 点、4%)、幅 8.5～10.5 cm・厚さ 6～7.5 cm の大型割杭 (3 点、3%)、幅 6.5 cm・幅 2 cm の中型板杭 (1 点、1%)、幅 8 cm・厚さ 3 cm の大型板杭 (1 点、1%) で構成される。11 点の樹種同定を行い、小型丸杭-アワブキ属、シキミ、中型・大型丸杭-アワブキ属、小型割杭-ツブラジイ、スダジイ、中型割杭-ツブラジイ、大型割杭-ツブラジイ、スダジイ、中型板杭-ツブラジイ、大型板杭-ツバキ属という結果が得られている。

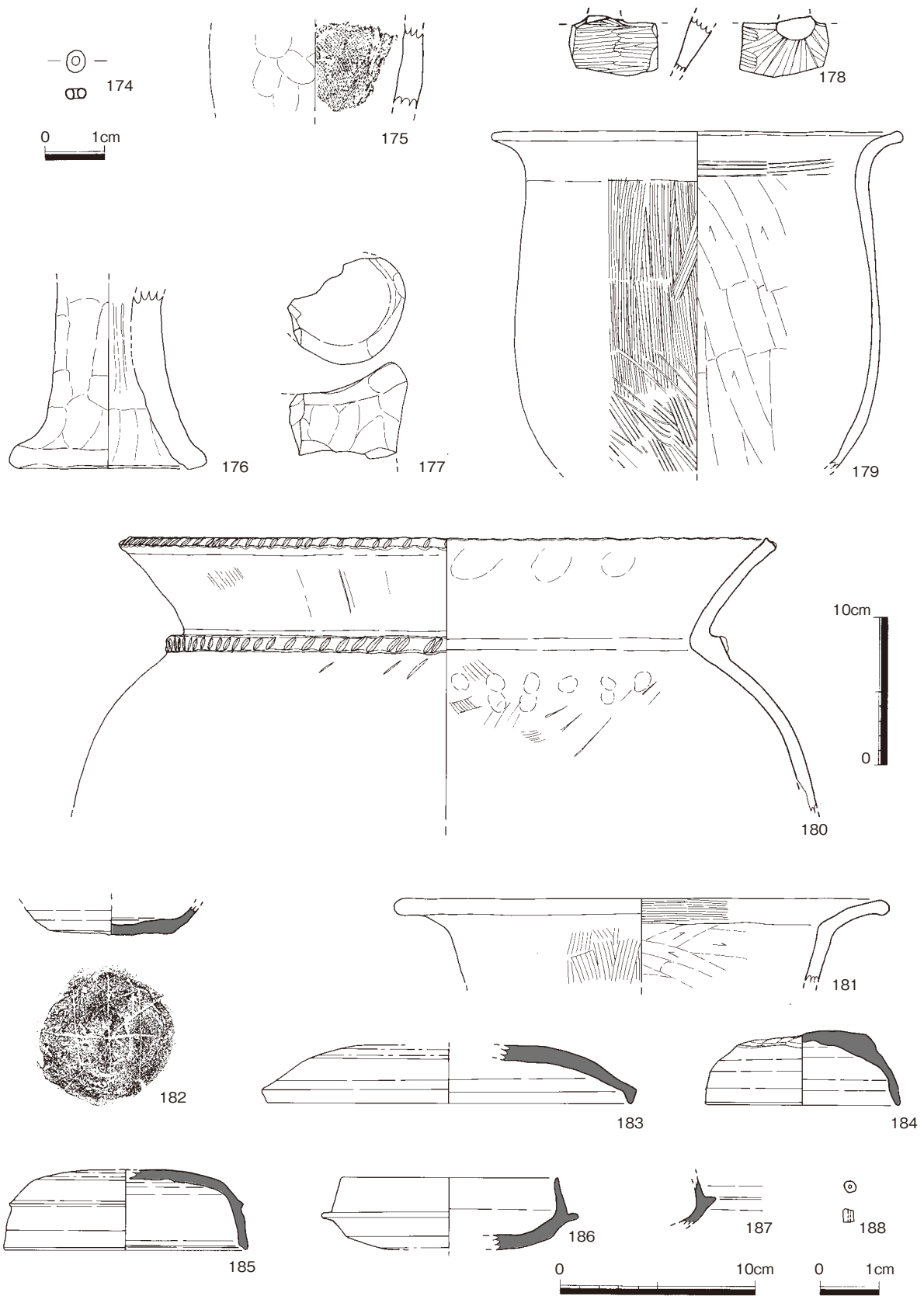
出土遺物 (第 27・29 図) 須恵器の高台坏 (161・166)・高台付椀 (167)・皿 (171)・坏 (172)・横瓶 (162・163)、土師器の甕 (164)、ガラス小玉 (165)、弥生土器甕もしくは壺 (168)・支脚 (169)、匙形土製品 (170・173)、石庖丁未成品 (189)・石庖丁 (191)・石錘 (193・194) が出土した。161 は 8 世紀前半の須恵器高台坏で、外面に墨と思われる黒色付着物が認められる。転用硯であろう。SS0056 と SS0057 で接合した。163 は須恵器横瓶で、SS0056 と SS0057 で接合した。164 は古墳時代の土師器甕である。166 は 8 世紀前半の高台付椀で、底外面に「宋」の墨書がある。167 は須恵器高台付椀で、8 世紀中頃であろう。168 は浮文のある弥生後期土器片である。171 は須恵器皿で、胴部が屈曲する。8 世紀後半と考える。SS0059 と SS0060 で接合した。165 は透明感のある淡青色のガラス小玉で重量 0.078 g、体積 0.032 cm³、比重 2.4375 を測る。193 は花崗岩壘円礫の左右端を粗く打ち欠いている。194 は凝灰岩製の石錘で、上下左右に浅い紐掛け凹みが認められる。この他、弥生時代～古代の土師器・須恵器、玄武岩・砂岩・片岩・花崗岩・軽石片などがパンコンテナ 30 箱分出土した。遺物から遺構の時期は、8 世紀中頃～後半と考える。8 世紀後半の SD0029 に切られる層位関係とも矛盾はない。



第 26 图 杭列实测图 (1/100)

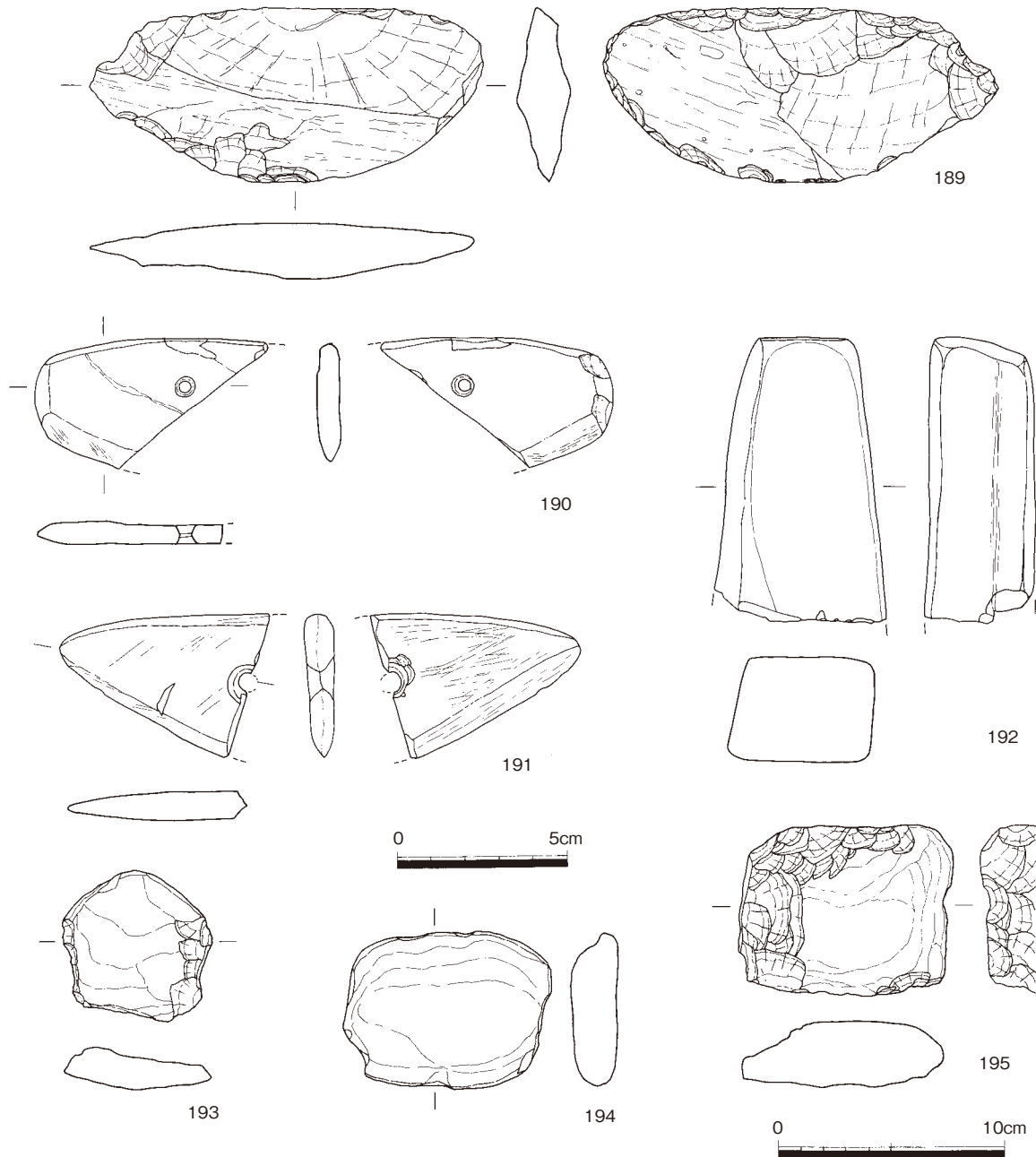


第27図 SS0056～0060 出土遺物実測図 (165は1/1、他は1/3)



174~180 SX0027 181~188 SX0061

第28図 SX0027・0061 出土遺物実測図 (174・188は1/1、180は1/4、他は1/3)



189 SS0058 190・192 SX0061 191 SS0057 193 SS0056 194 SS0060 195 SX0027

第29図 SS・SX出土石器実測図(189~191は1/2、他は1/3)

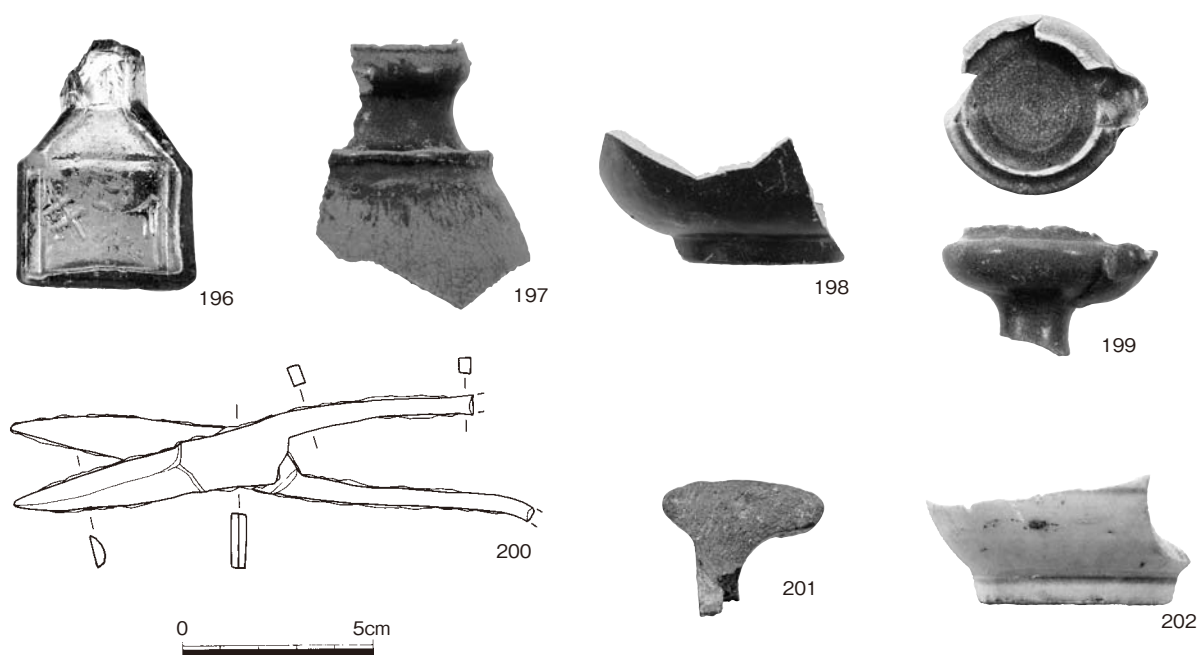
包含層・整地層(SX)

SX0027・0061・0062(第5~7図) F・G-3・4・5区(SX0061)、H-3区(SX0062)、I-4・5区(SX0027)で確認した遺物包含層である。覆土は暗灰褐色~灰褐色混砂粘質土で、径1mm白色砂、土器・木片・炭を多く含む。覆土の由来は河成堆積というよりは、人為的な埋立土の性質をもつ(第6・7図A-B土層11層、F-G土層4層)。SX0061では掘り下げ時に黄褐色中砂を面的に含む部分があったため、堆積過程で水流の影響を受けた可能性もある。SS0056~0060はこの上に構築される。

出土遺物(第28・29図) ガラス小玉(174・188)、製塩土器(175)、土師器の鉢(178)・甕(179)・甑(181)、須恵器の坏(182・186・187)・蓋(183~185)、弥生土器の器台(176)・支脚

(177)・甕(180)、石庖丁(190)・砥石(192)・石錘(195)が出土した。174は透明感のある淡青色ガラスで、重量0.03g、体積0.015cm³、比重2を測る。178は丹塗りで器面を丁寧に磨いている。金属器模倣土師器か。179は8～9世紀の甕である。178・179はSD0001底面の円形落ち込みから出土したため、SD0001に帰属する可能性がある。181は7世紀代の甕である。182は針書須恵器坏で、底外面に縦線3本と横線1本からなる記号が刻まれる。183は8世紀前半の須恵器坏蓋である。184は壺蓋で、ヘラ切り後未調整で7世紀初頭～前半であろう。185は6世紀前半の須恵器坏蓋である。186は須恵器坏身で、6世紀前半である。187は6世紀後半の須恵器坏身である。192は凝灰岩製の砥石で、ほとんど研ぎ減っていない使用頻度の低いものである。195は大型円礫から得られた剥片を部分的に両面二次加工した石器で、石錘と考える。この他、弥生時代～古代の土器・土師器・須恵器、砂岩・軽石片などがパンコンテナ8箱分出土した。SD0001に帰属する可能性のある178・179を除けば、8世紀前半までの遺物が含まれ、上部の水田が8世紀中頃であるという層位関係とも整合的である。6～7世紀の遺物は、埋立土用に近隣丘陵上から搬入された土砂に包含されたものと想定できる。

攪乱・客土出土遺物(第24・30図) I区の攪乱遺物は、E-4・5区のヒューム管掘り方、F-4・H-4・5区の円形土坑、I-4区の方形土坑SX0004、J-3区の井戸、その他検出面に残った上層の盛土・客土中から出土した。木製の下駄(158)・栓(159)・荷札木簡(160)、「インキ」ガラス小瓶(196)、陶磁器類(197～199・201・202)、組み合わせ式の鉄製鋏(200)が出土した。この他、印判陶器片、石炭片が出土した。



196～199 SX0004(攪乱土坑) 200～202 I-B区検出面(客土)

第30図 攪乱・客土出土遺物実測図・写真(200は1/2、他は縮尺不同)

第1表 I区1面出土土器・土製品観察表(1)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
8	1	SD0001	B	須恵器	坏	小片	器高3.1	径1mm程の白色砂粒、黒色粒を少し含む	良好	暗灰色
8	2	SD0001	B	須恵器	坏	1/8	復元底径10	径1mm以下の砂粒を少し含む	やや不良	淡灰色～にぶい橙
8	3	SD0001	A	須恵器	坏	1/6	復元高台径8.4	径1mm程の白色砂粒、黒色粒を少し含む	良好	暗灰色
8	4	SD0001 (SD0003最上層)	B	土師器	坏	ほぼ完形	口径10.6、底径7.4、器高3.7	細砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
8	5	SD0001 (SD0003上面)	B	土師器	坏	1/2	復元底径8.6	細砂粒と赤色粒、黒色粒を含む。稀に径3～4mm程の粗砂粒を含む	良好	灰黄色
8	6	SD0001・0002 Ph.4	B	土師器	坏	小片	底径7.2	精良。細砂粒と赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
8	7	SD0001・0002 +0009	B	土師器	椀	1/8	復元高台径10.6	径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
8	8	SD0001 (SD0003最上層)	B	土師器	椀	1/2	復元口径13、復元高台径7.5、器高4.8	細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
8	9	SD0002最下層黄色砂	B	土師器	壺	1/10	復元口径14	精良。細砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色
8	10	SD0002最下層黄色砂	B	須恵器	坏	1/2	高台径7.4	径3mm以下の白色砂粒、黒色粒を含む	良好	暗灰色
8	11	SD0002最下層黄色砂	B	須恵器	坏	1/6	復元高台径8.8	密。精良。白色砂粒、黒色粒を少し含む	良好	灰色
8	12	SD0002 Ph.39	B	土師器	椀	1/8	復元口径13.4	径2mm以下の砂粒を少し含む	良好	灰白色
8	13	SD0002最下層黄色砂	B	土師器	坏	1/4	復元口径12.4、復元底径7、器高3.2	径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
8	14	SD0002南側底面砂層	B	土師器	坏	1/4	復元底径7.6	径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む。角閃石含む。	良好	外:にぶい橙色 内:灰黄色
8	15	SD0002黄色砂層	B	土師器	椀	1/8	復元口径13.7、復元底径9.2	精良。細砂粒、赤色粒を少し含む	良好	淡赤橙色、にぶい橙色
8	16	SD0002東側地山直上	B	土師器	坏	1/8	復元口径13.9、復元底径9、器高3.5	細砂粒を少し含む	良好	にぶい橙色
8	17	SD0002最下層黄色砂	B	黒色土器A	椀	1/6	復元高台径8	細砂粒を含む	良好	外:浅黄橙色 内:高台内:黒色
8	18	SD0002東側地山直上	B	黒色土器A	椀	1/10	復元口径12.4	精良。細砂粒を少し含む	良好	外:にぶい黄橙色 内:黒色
8	19	SD0022灰色粘土層	A	土師器	椀	小片	高台径7	径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
8	20	SD0002最下層黄色砂	B	須恵器	甕	小片		径3mm以下の砂粒、黒色粒を含む	良好	暗灰色
8	21	SD0002最下層	B	須恵器	甕	小片		白色細砂粒を含む。黒色粒を多く含む	良好	外:灰黒色 内:暗灰色
8	22	SD0002 Ph.38	B	土師質	製塩土器	小片	残存長4、残存幅5.3、厚さ0.9	径2～3mmの粗砂粒。径3mm以下の赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
8	23	SD0002 Ph.11	B	須恵質	平瓦	小片	残存長11、残存幅12.5、厚さ1.6	径1mm以下の白色砂粒、黒色粒を含む	良好	凹面:灰色 凸面:暗灰色
8	24	SD0002最下層黄色砂	B	須恵質	平瓦	小片	残存長7.2、残存幅7.7、厚さ2.3	径3mm以下の粗・細砂粒、黒色粒を含む	良好	灰色
9	25	SD0002 Ph.11+Ph.10	B	弥生土器	壺	1/3	復元口径21	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む。	良好	浅黄橙色～灰白
9	26	SD0001	A	弥生土器	壺	1/10		径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:灰黄褐色内:にぶい黄褐色
9	27	SD0002 Ph.39	B	弥生土器	丹塗 把手	幅2.9、厚1.3		精良。細砂粒と赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
9	28	SD0001	B	弥生土器	丹塗甕	小片		精良。細砂粒を含む。稀に径2mm程の砂粒が見られる	良好	外:丹 内:にぶい橙色
9	29	SD0002 Ph.38	B	弥生土器	甕	小片			良好	にぶい黄褐色
9	30	SD0001・0002	B	弥生土器	甕	小片		径3mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄褐色
9	31	SD0001	A	弥生土器	直口壺	小片		径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む。	良好	にぶい橙色
9	32	SD0002	A	弥生土器	小型壺	ほぼ完形	口径11.6、底径5.4、器高10.2	径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	浅黄褐色
9	33	SD0002 Ph.39	B	弥生土器	甕	1/4	復元口径16.6、底径8.4、器高23.8	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む。	良好	にぶい黄褐色
9	34	SD0001・0002 Ph.3	B	弥生土器	壺	1/3		径2mm以下の粗・細砂粒を含む。粗砂が少ない。	良好	にぶい橙色
9	35	SD0002 Ph.38	B	弥生土器	筒形器台(丹塗)	1/6		精良。細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:にぶい黄褐色 内:灰黄褐色
9	36	SD0001・0002 Ph.4+Ph.3	B	弥生土器	甕	1/6	復元口径44.4		良好	外:橙色 内:灰黄色

第1表 I区1面出土土器・土製品観察表(2)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
9	37	SD0001	A	弥生土器	甕	小片		径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む。	良好	にぶい橙色～黄橙色
9	38	SD0002 Ph.9	B	弥生土器	甕	1/8	復元口径46		良好	赤橙色
9	39	SD0001	A	弥生土器	甕	1/6	復元口径44	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む。	良好	にぶい橙色
10	40	SD0001 Ph.21 R-10	B	弥生土器	甕	1/3	復元口径23.6	径3mm以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙色
10	41	SD0001 Ph.21 R-11	B	弥生土器	壺	1/3	復元胴径30、底径11.8	径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	浅黄橙色
10	42	SD0002 Ph.39	B	弥生土器	甕	1/8	復元口径17.4	径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒をやや多く含む	良好	にぶい黄橙色
10	43	SD0001・0002 Ph.8	B	弥生土器	甕	小片	復元口径14.2	径2mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい橙色
10	44	SD0001 Ph.21 R-12	B	弥生土器	甕	2/3	復元口径13.7、底径5.6、器高11.2	粗。径3mm以下の砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	にぶい黄橙色
10	45	SD0001・0002 Ph.4	B	弥生土器	甕	小片	復元口径13.2	径1mm以下の細砂粒と赤色粒を含む	良好	橙色
10	46	SD0001 黒褐色粘土層	B	弥生土器	壺	1/4	復元口径12	径3mm以下の砂粒をやや多く含む。赤色粒も含む。	良好	にぶい橙色
10	47	SD0001・0002 Ph.7 R-2	B	弥生土器	高坏	1/8～1/4		径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	灰黄色
10	48	SD0001	A	弥生土器	小型鉢	1/3	復元口径17	径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
10	49	SD0001 Ph.21 R-9	B	弥生土器	器台	1/2	上部径11.3、復元下部径14.5、器高17.3	径5mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	橙～にぶい橙
10	50	SD0002	A	弥生土器	器台	1/2	上面径12.7、下面径10.6、器高15	径3mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	にぶい橙色
10	51	SD0002 最下層黄色砂	B	弥生土器	ジョッキ形?	把手	残存長8.4、径2.5	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
10	52	SD0002	A	弥生土器	小型鉢	1/3	復元口径8.3、底径5、器高7.2	径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
10	53	SD0002 Ph.20 R-6	B	弥生土器	小型鉢	完形	口径8.6、器高5	やや粗。径5mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	にぶい黄橙色
10	54	SD0001・0002	B	弥生土器	小型鉢	口縁部一部欠損	復元口径4.5、器高2.5	径4mm以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	灰黄褐色
11	55	SD0001 Ph.20 R-7	B	弥生土器	甕	1/4	復元口径37.4	径3mm以下の砂粒、角閃石(黒色砂粒)、赤色粒を含む	良好	外:にぶい橙色内:浅黄橙色
11	56	SD0001・SD0002 Ph.12	B	弥生土器	甕	小片		径5mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	赤みがかった橙色
11	57	SD0002 Ph.39+Ph.40+Ph.35	B	弥生土器	壺	1/2	復元口径21	径5mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	にぶい黄橙色
11	58	SD0002 Ph.39	B	弥生土器	壺	小片	口径21	径3mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
11	59	SD0002 Ph.39	B	弥生土器	壺	1/4	復元口径21	径3mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
11	60	SD0002 Ph.43	B	弥生土器	壺	1/4	復元凸帯部径28.2	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:灰黄褐色 内:にぶい黄橙色
11	61	SD0001・0002	B	弥生土器	鉢	1/3	復元口径16.6	径4mm以下の砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	にぶい橙色
11	62	SD0001	B	土師器	甕	1/10	復元口径28	径3mm以下の砂粒を含む。稀に4mm大の粗砂粒が見られる	良好	外:黒色 内:にぶい黄橙色
11	63	SD0001・0002 Ph.12	B	土師器	器台	完形	上面径8.8、下面径9.9、器高11.3	径3mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
11	64	SD0001・0002 Ph.6 R-3	B	土師器	器台	下部欠損	上部径16.8	径3mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙～褐色
11	65	SD0002 Ph.10	B	土師器	高坏	1/8		やや粗。径3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙色
11	66	SD0001	A	土師器	壺	小片		径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む。	良好	橙色
11	67	SD0001・0002 Ph.7	B	土師器	高坏	小片	復元脚径9.6	径5mm以下の砂粒をわずかに含む。精選土。赤色粒も含む	良好	灰褐色
11	68	SD0001	A	土師器	高坏	小片	復元径7.6	径3mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
13	79	SD0002 南側底面砂層	B	土製品	土錘	完形	長さ4.9、最大径1.3、孔径0.5、重量8.8	緻密。径0.5mm砂多い	良好	灰白色
16	84	SD0029 SX04 西ベルト	B	須恵器	坏蓋	小片	つまみ径3	径2mm以下の白色砂粒、黒色粒を含む	良好	外:褐色 内:暗灰色
16	85	SD0029 下面清掃	B	須恵器	坏蓋	5/6	口径15.5、つまみ径1.5、器高1.3	径2mm以下の白色砂粒、黒色粒を含む	良好	灰色

第1表 I区1面出土土器・土製品観察表(3)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
16	86	SD0029 下層	B	須恵器	坏蓋	つまみ欠損	口径 16.6	径 2 mm 以下の白色砂粒と黒色粒を含む	良好	外:明灰色 内:灰色
16	87	SD0029 (SX04)	B	須恵器	坏蓋	完形	口径 13.2、つまみ径 2.7、器高 2.8	径 2 mm 以下の白色砂粒を含む	良好	暗灰色
16	88	SD0029 粗砂中	B	須恵器	坏	4/5	口径 12.8、底径 8.8、器高 4.2	密。白色砂粒、黒色粒を含む	良好	灰白色
16	89	SD0029 粗砂中	B	須恵器	坏		口径 13.1、底径 9.8、器高 4	密。白色細砂粒、黒色粒を少し含む	良好	灰白色
16	90	SD0029 粗砂中	B	須恵器	坏	1/3	復元口径 12.6、復元底径 9、器高 3.8	密。白色細砂粒、黒色粒を含む。稀に径 4 mm 大の砂粒混入	良好	灰白色
16	91	SD0030 粗砂中+SX04 水溜状	B	須恵器	坏	3/4	復元底径 9	密。白色細砂粒、黒色粒を含む	良好	灰白色
16	92	SD0029 北区最下層中砂層中 R-2	B	須恵器	高台坏	3/4	口径 15.9、高台径 9.8、器高 5.8	密。白色細砂粒、黒色粒を含む	良好	外:灰黒色 内・外底:灰白色
16	93	SD0029 床面清掃	B	須恵器	高台坏	小片		細砂粒、黒色粒を含む	良好	外:灰色 内:灰黒色
16	94	SD0029 下層	B	須恵器	高台坏	小片	高台径 8.4	径 4 mm 以下の白色粗・細砂粒、黒色粒を含む	良好	暗灰色
16	95	SD0029 SX04 西ベルト+北ベルト粗砂層	B	須恵器	坏	1/4	復元口径 12.6	白色細砂粒、黒色粒を含む	良好	外:暗灰色 内:灰色
16	96	SD0029 (SX04 攪乱直下)	B	須恵器	高台坏	2/3	復元口径 13.8、復元高台径 8.8、器高 3.7	白色細砂粒、黒色粒を含む	良好	口縁~体部外面:灰黒色 その他:灰色
16	97	SD0029 粗砂+ベルト	B	須恵器	坏	4/5	口径 12.2、底径 7.8、器高 3.1	白色細砂粒を含む	良好	外:暗灰色 内:褐灰色
16	98	SD0029 黄褐色粗砂+最下灰色粗砂	B	須恵器	坏	2/3	復元口径 12.8、底径 9.3、器高 3.8	径 1 mm 以下の白色細砂粒、赤色粒、黒色粒を含む	やや不良	口唇部:淡灰色 体部~底部:橙色
16	99	SD0029 ベルト	B	須恵器	坏	3/4	口径 13.7、底径 7.4、器高 4.0	細砂粒、赤色粒を含む	やや不良	内:黒色 外:にぶい黄橙色
16	100	SD0029 粗砂中	B	須恵器	坏	1/8	復元口径 13	密。白色細砂粒、黒色粒を含む	良好	灰白色
16	101	SD0029 最下灰色粗砂層	B	須恵器	坏	2/3	口径 13.4、底径 9、器高 3.4	密。細砂粒、黒色粒を含む	やや不良	内:灰黄色~黒色 外:口縁部付近:黒色 底部:淡灰色
16	102	SD0029 ベルト	B	須恵器	坏	1/6	復元底径 8	密。細砂粒、赤色粒を含む	やや不良	内:橙色 外:灰褐色
16	103	SD0029 粗砂中	B	須恵器	坏	1/6	復元口径 13.6、復元底径 9、器高 3.4	密。白色細砂粒、黒色粒を含む。稀に径 3 mm 大の砂粒混入	良好	灰白色
16	104	SD0029 最下灰色粗砂層	B	須恵器	坏	1/4	復元口径 13.8、復元底径 10、器高 4.1	密。白色細砂粒、黒色粒を含む	やや不良	外:灰色~(底部) 橙色 内:灰色~(底部) にぶい橙色
16	105	SD0029 ベルト	B	須恵器	坏	1/4	復元口径 15.2、復元底径 10.8、器高 4.7	白色細砂粒、黒色粒を含む。雲母目立つ	良好	灰白色
17	106	SD0029 粗砂中	B	須恵器	皿	1/6	復元口径 17.6、復元底径 14.2、器高 1.6	白色細砂粒を含む	良好	暗灰色
17	107	SD0029 粗砂中	B	須恵器	皿	2/3	口径 15.8、底径 12.2、器高 2.7	白色細砂粒、黒色粒を含む	良好	暗灰色
17	108	SD0029 ベルト	B	須恵器	皿	1/3	復元口径 18.6、復元底径 14、器高 2.4	白色細砂粒、黒色粒を含む	良好	淡灰色~暗灰色
17	109	SD0029 (SX04 水溜状遺構)	B	須恵器	椀~皿	小片		白色細砂粒、黒色粒を含む	良好	淡灰色
17	110	SD0029 (SX04 水溜状遺構)	B	土師器	皿	小片		径 2 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
17	111	SD0029 粗砂	B	黒色土器 A	坏	小片		密。細砂粒を含む	良好	内:黒色 外:にぶい黄橙色
17	112	SD0029 東側最下層 灰褐色粘砂土	B	土師器	製塩土器	1/4	復元口径 11.8	径 2~5 mm 大の粗砂粒、赤色粒を含む。稀に径 1 cm 程の粗砂粒が混ざる	良好	外:にぶい黄橙内:にぶい橙
17	113	SD0029 粗砂中	B	須恵器	甕	小片		径 2 mm 以下の白色砂粒を含む	良好	灰色
17	114	SD0029 北区 R-1 最下層+下層+SD0029 西ベルト	B	須恵器	鉢	1/2	復元底径 11.6	径 3 mm 以下の白色砂粒、黒色粒を含む	良好	外:灰色 内:黒灰色
18	115	SD0029 最下灰色粗砂層	B	弥生土器	甕	小片	底径 6	径 3 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい褐色
18	116	SD0029 下層	B	弥生土器	直口壺	1/10	復元口径 17、孔径 0.7	径 3 mm 以下の砂粒を含む。	良好	にぶい黄橙色

第1表 I区1面出土土器・土製品観察表(4)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
18	117	SD0029 粗砂中	B	弥生土器	丹塗壺	1/4	復元口径 25	径 2 mm 以下の砂粒、赤色粒も含む	良好	外:丹 内:橙色
18	118	SD0029 黄褐色粗砂層	B	弥生土器	蓋	小片	上部径 8	径 3 mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
18	119	SD0029 北ベルト粗砂層	B	弥生土器	丹塗筒形器台	1/2	復元口径 11.8、復元胴径 12	精良。径 1 mm 以下の砂粒、赤色粒、黒色粒を含む	良好	外:丹、内:にぶい黄橙、橙色
18	120	SD0029 北ベルト粗砂層	B	弥生土器	甕	2/3	底径 7.8、孔径 2~2.4	径 3 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む。稀に径 5~6 mm 大の粗砂粒が混じる	良好	橙色
18	121	SD0029 +北ベルト	B	弥生土器	甕	小片	底径 9.6、孔径 1.8~2.1	径 3 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:にぶい橙色 内:にぶい黄橙色
18	122	SD0029 粗砂	B	弥生土器	甕	小片	底径 8.2、孔径 1.8~2.2	径 3 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
18	123	SD0029 粗砂直上泥炭状茶褐色粘土	B	弥生土器	壺	1/3	復元口径 20.6	やや粗。径 3 mm 以下の砂粒を含む	良好	橙~浅黄橙色
18	124	SD0029 (SX04 北)	B	弥生土器	器台	2/3	復元口径 12.4、脚径 13、器高 17.9	粗。径 5 mm 以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	にぶい橙色
19	125	SD0029 粗砂中	B	弥生土器	甕	1/3	復元口径 25	径 3 mm 以下の粗・細砂粒を含む	良好	浅黄橙色
19	126	SD0029 北ベルト粗砂層	B	弥生土器	甕	1/3	復元口径 16	やや粗。径 5 mm 以下の粗細砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
19	127	SD0029 粗砂中	B	弥生土器	壺	1/2	復元口径 17.2	やや粗。径 3 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	浅黄橙色
19	128	SD0029 粗砂直上泥炭状茶褐色粘土	B	弥生土器	壺	1/3	復元口径 22	やや粗。径 4 mm 以下の粗・細砂粒を含む	良好	浅い黄橙色
19	129	SD0029 東側最下層 灰褐色粘土	B	弥生土器	大甕	小片	貼付円板径 7.5	径 4 mm 以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	外:にぶい黄橙色 内:橙色
19	130	SD0029 下層	B	土師器	壺	1/8	復元口径 18	径 3 mm 以下の粗・細砂粒をやや多く含む	良好	にぶい黄橙色
19	131	SD0029 最下灰色粗砂層	B	弥生土器	支脚	小片	上面長さ 7、幅 5、孔径 1.8	径 3 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙~橙色
19	132	SD0029 粗砂	B	弥生土器	支脚	小片	上面径 9.7、上面幅約 7、孔径 3~3.5	やや粗。径 4 mm 以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	橙色
19	133	SD0029 ベルト	B	弥生土器	高坏	2/3	復元脚径 19	やや粗。径 4 mm 以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	にぶい黄橙色
23	148	SX0025 下、混砂土、	B	須恵器	高坏or 浅い椀		復元口径 18、残高 2.2、器厚 0.3~0.4	精緻	良好	内:灰 (5 Y,5/1) 外:灰 (5 Y,6/1)
23	149	SX0025 下、混砂土、	B	須恵器模倣土師器	坏		残高 1.1、底径 8	精緻。径 2 mm 以下の石英・長石粒、微粒の赤色粒を少し含む	良好	外:灰 (2.5 Y,6/2) 内:黒 (2.5 Y,2/1)
23	151	SX0025 下、混砂土、	B	弥生土器	甕		口径 33、底径 9.4、器厚 0.5~1.3	2 mm 以下の石英・長石粒多、1 mm 以下の赤色粒を若干含む	良好	外:にぶい黄橙 (10 YR,7/3) 内:浅黄 (2.5 Y,7/3)
27	161	SS0056 最下面 +SS0057 最下面	A	須恵器	高台坏	底部	残高 2.6、底径 9.4、器厚 0.4~0.7	精緻。1 mm 以下の白色粒を若干含む	良好	内:灰白 (5 Y,7/1) 外:ほとんど黒色
27	162	SS0057 最下面	A	須恵器	横瓶	口縁	復元口径 9.8、残高 5.0、器厚 0.5~0.8	精緻。2 mm 以下の白色粒・黒色粒を含む	良好	内:灰色 (N,6/) 外:灰 (7.5 Y,4/1)
27	163	SS0056 下層 西側地山上面 +SS0057 最下面	A	須恵器	横瓶		残高約 8、器厚 0.5~1.0	精緻。1 mm 以下の白色・黒色粒を含む	良好	内:灰白 (2.5 YR,7/1) 外:灰白 (N,7/) やや青味を帯びている
27	164	SS0056 下層	A	土師器	甕		口径 14.3、残高 7.8、器厚 0.4~0.8	2 mm 以下の石英・長石粒多。1 mm 以下の赤色粒少し含む	良好	浅黄 (7.5 YR,8/4)
27	166	SS0058 粗砂	B	須恵器	高台坏		器高 2、底径 9.6、器厚 0.4~0.7	精緻。1 mm 以下の白色・黒色粒を含む	良好	内:灰 (N,6/) 外:灰 (N,5/)
27	167	SS0058 上層粗砂	B	須恵器	椀	底部	残高 4.7、復元底径 8.4、器厚 0.3~0.6	精緻。1 mm 以下の白色・黒色粒を少し含む	良好	内:黄 (2.5 Y,5/1) 外:灰 (N,6/)
27	168	SS0058 下黒灰色粘土層	B	弥生土器	甕・壺		器厚 0.5~0.6	5 mm 以下の石英・長石粒、微粒の雲母を含む	良好	浅黄 (2.5 Y,7/3)
27	169	SS0058 耕作土中層	B	弥生土器	支脚			1 mm 以下の石英・長石粒と褐色粒を多く含む	良好	灰黄褐色 (10 YR,6/2)
27	170	SS0058 耕作土上層 (SX0004 北区)	B	土製品	匙形	把手	残存長さ 5.3 × 1.7 × 1.7	精緻。2 mm 以下の石英・長石粒を含む	良好	にぶい橙 (7.5 YR,7/4)
27	171	SS0059 +下粘土層 +SS0060 最下層	B	須恵器	皿	1/3	口径 17.4、底径 10.7、器高 2.7	径 3 mm 以下の白色砂粒、径 1 mm 程度の黒色粒を含む	やや不良	灰白 (7.5 Y 7/1)

第1表 I区1面出土土器・土製品観察表(5)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
27	172	SS0060 最下層	B	須恵器	坏	1/3	口径12.5、底径80、器高2.6	径2mm以下の白色砂粒をわずかに含む	やや不良	外面-灰(5Y4/1)、内面-灰黄(2.5Y6/2)
27	173	SS0059	B	土製品	匙形	小片		径2mm以下の白色砂粒を多く含む	良好	灰黄(2.5YR7/2)
28	175	SX0027 下層	B	土師器	製塩土器			径1mm以下の砂粒を少し、径3mm以下の赤色粒をやや多く含む	良好	橙色
28	176	SX0027	B	弥生土器	器台		残存高9.5、底径10、器厚1.2~1.5	5mm以下の石英・長石粒を多く含む	良好	灰黄褐色(10YR6/2)
28	177	SX0027 層下	B	弥生土器	支脚	小片		径3mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色
28	178	SP0031	B	土師器	鉢?			細砂粒を含む	良好	やや黄色味があった灰白色
28	179	SP0031	B	土師器	甕		口径28、底径22.8、器厚0.5~0.9	2mm以下の石英・長石粒を多く含む	良好	内:黒色 外:灰白(10YR8/2)、大部分が黒い
28	180	SX0027 南ベルト	B	弥生土器	甕		復元口径43、器高18.3、器厚0.9~1.0	3mm以下の石英・長石粒・雲母を多く含む	良好	灰黄色(2.5Y7/2)
28	181	SX0016 + SX0061 + SX0011	A	土師器	甕 or 甔	1/4	復元口径33.6	径3mm以下の砂粒を含む	良好	橙色~にぶい橙色
28	182	SX0013	A	須恵器	坏	小片	底径6.4	径2mm以下の砂粒を含む。黒色粒を少し含む	良好	やや褐色があった灰色
28	183	SX0011 上面 + SX0061	A	須恵器	蓋		口径18.3、器厚0.5~0.8	精緻。1mm以下の白色粒、黒色粒若干含む	不良	外:灰白(10YR8/1) 内:灰(5Y5/1)
28	184	SX0009	A	須恵器	坏蓋	2/3	口径10、器高3.8	密。径1mm以下の砂粒を含む	良好	暗灰色
28	185	SX0014 + SX0061 + SX0011 R42	A	須恵器	坏蓋		口径12.2、器高4.1、天井径約5、器厚0.35~0.6	精緻。微粒の黒色粒を含む	良好	灰白(2.5Y7/1)
28	186	SX0013	A	須恵器	坏	1/4	復元口径11	径2mm以下の白色砂粒、黒色粒を少し含む	良好	明灰色
28	187	SX0066 上面 (SD05 西)	A	須恵器	坏	小片		密。白色細砂粒と黒色粒を含む	良好	灰色
30	196	攪乱SX0004	B	ガラス製品	小瓶	口縁欠損	幅2.15、奥行2.25、残存高3.1	気泡多いガラス	良好	淡青色透明
30	197	攪乱SX0004	B	陶磁器	小瓶	1/6		黒色微砂わずかに含む	良好	緑色釉。貫入多い
30	198	攪乱SX0004	B	陶磁器	椀	1/6		黒色微砂わずかに含む	良好	黒色釉
30	199	攪乱SX0004	B	陶磁器				黒色微砂わずかに含む	良好	黄褐色釉
30	201	SD0029 ベルト1層(客土)	B	陶器	甕	小片		白色・赤色砂を少なく含む	良好	赤褐色
30	202	西側客土	B	染付	椀	1/6		黒色微砂わずかに含む	良好	白色透明釉

第2表 I区1面出土木器観察表

挿図	番号	遺構	区	層位等	器種	法量 (cm) []は残存法量	木取り	樹種
21	139	SD0001	B	Ph.46	棒状	長さ[24.2]、最大径5	芯持丸木	マツ属複雑管束亜属
21	140	SD0002	B	最下層ベルト	櫛	長さ[2.1]、幅[1.3]	削出	イスノキ
21	141	SD0002	B	最下層 黄色砂	櫛	長さ4.1、幅[2.1]、最大厚0.9	削出 榎目	イスノキ
21	142	SD0029	B	東側最下層	曲物底板	長さ[15]、幅[5]、厚さ0.8、復元径19.1	板目	ヒノキ
21	143	SD0029	B	北区 R6	建築部材	長さ[13.6]、最大幅4.9、最大厚2.5	割材	クリ
21	144	SD0029	B	最下灰色粗砂層	容器	長さ5.8、幅8.1、高5.0	板目	スギ
21	145	SD0029	B	粗砂中	槽	長さ31.2、幅6.、脚長20.3、幅2.4、高2	榎目	スギ
21	146	SD0029	B	砂層	弓	長さ[33]、最大幅2.7、最大厚2.4	芯持丸木	イヌガヤ
21	147	SD0029	B	北区 R-6	建築部材	長さ[209.6]、径8-10、①貫孔(幅4.9、深[4.5]、長さ[8]<)、ほぞ孔②(長さ3.7、幅3、深1.6)、ほぞ孔③(長さ3.3、幅3.1、深2]、②と③の中心点間距離67	芯持丸木	クリ
24	152	SX0025	B	R5	曲物底板	長さ[18.3]、幅5.7、厚さ0.7	榎目	ヒノキ
24	153	SX0025	B	下 暗灰粘土	曲物底板	長さ[19.6]、幅9.7、厚さ0.5	榎目	ヒノキ
24	154	SX0025	B	下 暗灰粘土	曲物底板	長さ[23.6]、最大幅7.5、最大厚1.1	榎目	針葉樹(未同定)
24	155	SX0025	B	下 混砂土	容器	長さ[20.3]、幅[5]、厚さ[1.5]	榎目	スギ
24	156	SX0025	B	R-1	板材	長さ18.9、幅16.3、厚さ2.8	榎目	スギ
24	157	SX0025	B	R4	板状	長さ9.5、最大幅5.8、最大厚1.6	榎目	ヒノキ
24	158	西側埋立土	B		草履	長さ19.5、最大幅8.5、最大厚1.5、孔径0.9~1.2	板目	スギ
24	159	南壁清掃	B		木栓	長さ[5]、幅(頭8、身6)、厚さ(頭[5.3]、身2.5)	芯持丸木	マツ属複雑管束亜属
24	160	南側溝切	B		木筒	長さ11.4、幅3.3-3.7、厚さ0.3-0.5	板目	スギ?(未同定)

第3表 I区1面出土石器・金属器・ガラス製品観察表

*石材の「磁性」はネオジウム磁石による。長さ・幅・厚さはcm。重量はg

挿図	番号	遺構	区	層位等	材質	器種	長さ	幅	厚さ	重量
12	69	SD0001	A	下層	頁岩	石庖丁	5.7	3.5	0.38	15.2
12	70	SD0002	B	最下層黄色砂	片岩	石庖丁	3.9	2.8	0.82	10.3
12	71	SD0002	B	最下層黄色砂	頁岩(暗赤褐色)	石庖丁	5.2	4.6	0.65	31
12	72	SD0002	B	最下層黄色砂	黒褐色砂岩	石庖丁	3.7	5	0.68	15.6
12	73	SD0002	B	南側底面砂層	頁岩(暗赤褐色)	石庖丁	4.79	4.41	0.55	23.1
12	74	SD0002	B	南側底面砂層	黒褐色砂岩	石庖丁	4.79	5.08	0.53	27.6
12	75	SD0002	B	Ph.39 R-13	細粒砂岩(磁性なし)	砥石	15.1	17	10.4	2891.4
12	76	SD0002	B	黄色砂層	細粒砂岩	砥石	10	4.1	2.5	110.3
13	77	SD0002	B	黄色砂	銅銭	和同開珎	2.5		1.5	2.8
13	78	SD0002	B	最下層	青銅器	青銅製鋤先	4.5	4.4	1.1	32.8
13	80	SD0002	B	最下層(ベルト)	鉄器	鉄鏃	8.8	2.6	0.3	9.2
13	81	SD0001・0002	B	ph16 R-1	鉄器	鉄斧	11.2	3.9	2.3	
14	82	SD0022	B	灰色粘土層	透閃石岩(磁性弱)	磨製石斧	16.3	6.9	2.1	337.5
14	83	SD0022	B		凝灰岩(磁性中)	磨製石斧	7.6	3.8	1.2	51.9
20	134	SD0029	B	ベルト地山直上	細粒砂岩	石庖丁	4.6	9	0.5	43
20	135	SD0029	B	最下層灰色粗砂層	輝緑凝灰岩	石庖丁	4	10.1	0.8	51
20	136	SD0029	B	SX04 攪乱直下	泥岩(磁性なし)	砥石	10.8	7.1	3.4	339.1
20	137	SD0029	A	北区最下面R4	花崗岩(磁性弱)	石錘	13.8	10.9	4.5	998.2
20	138	SD0029	A	北区R3	砂岩(磁性なし)	砥石	19.5	18.1	16.2	6270
23	150	SX0025	A	下混砂土	軽石	浮子	7.7	10	4.2	78.5
27	165	SS0056・0057	A	間畦畔	ガラス製品	ガラス小玉	孔径0.121	0.355	0.458	0.078
28	174	SX0027	B	南ベルト	ガラス製品	ガラス小玉	孔径0.17	0.402	0.186	0.03
28	188	SX0061	B		ガラス製品	ガラス小玉	孔径0.05	0.181	0.211	0.01
29	189	SS0058	B	黒灰色粘土層	輝緑凝灰岩(磁性中)	石庖丁未成品	11.55	5.15	1.6	91.3
29	190	SX0061	A	中央部包含層	緑色片岩(磁性強)	石庖丁	6.8	3.8	0.7	23.4
29	191	SS0057	A	下層 東側地山直上	凝灰岩(磁性弱)	石庖丁	5.9	4.35	0.9	24.5
29	192	SX0061	B	中央部包含層	凝灰岩(磁性弱)	砥石	12.5	7.5	4.6	704.8
29	193	SS0056	A	水田1最下面	花崗岩(磁性弱)	石錘	6.6	6.6	1.6	81.8
29	194	SS0060	B		凝灰岩(磁性弱)	石錘	8.6	6.8	2.1	184.8
29	195	SX0027	A	下層	石英斑岩?(磁性なし)	石錘	7.55	9.4	2.9	264.2
30	200	SD0029	A	南ベルト1層	鉄器	鉄鉄	13.8	1.2	0.3	34.5

(2) 2面の調査

掘立柱建物 (SB)

SB0068 (第32図) I-5区で確認した掘立柱建物である。1×1間(3.2×2.35m)を確認したが、東側の調査区外に柱穴が延びる可能性もある。長軸はN-15°-Eだが、東側へ建物が延びていた場合は、桁行き軸E-15°-Sとなる。3つの柱穴にはすべて柱が残っている。ただし、柱205はI-A区南壁際の排水用溝掘削時に検出したため、柱穴掘り方を検出できなかった。SP0030は径35～45cm、深さ40cm、SP0047は推定径50cm、深さ30cmを測る。SP0030・0047はSD0001・0002下で検出し、SD0039・0050(径5cmほどの灰青色・灰黄色シルトブロックを含み鉄分・マンガンの多い灰褐色粘質土と黒灰色粘砂土と黄白色細・中砂の互層)を切っている。

出土遺物(第32図) 203はSP0047から出土した高三瀝式の甕である。204～206はマツ属複雑管束亜属の柱である。幅4～4.5cmほどの鉄製工具で、下端を平坦に加工する。側面についても節や枝の跡を削り取っており、断面が多角形状を呈している。その他、SP0030から弥生後期と思われる暗灰色を呈したハケメ調整の弥生土器片が出土した。遺物から遺構の時期は弥生時代後期前葉である。弥生時代中期後葉のSD0039・0050を切っている層位関係とも矛盾はない。

1面関連遺構・遺物

SD0005 上層 (第44図) G・H-4・5区で検出した北東方向へ湾曲するSD0005の上層流路状堆積である(土層Aの2～5層、土層Bの2～12層、第6図A-B土層の12～15層)。SD0005は大きく上層の粘土～砂の互層部分と下層の灰黒色粘土に分層できるが、平面形としては同一となる。上層についても土層図からは数回の堆積変化を読み取れるが、平面的には認識できなかった。下層遺物の時期が弥生時代後期中葉であるのに対して、上層遺物の時期は古墳時代～古代であり、時代差がある。2面での検出であるが、時期に関しては、1面との関わりで理解すべき堆積と考える。

出土遺物(第33・34図) 須恵器の坏身(207～210、213)・坏蓋(212)・横瓶(211)、製塩土器(214)が出土した。213は7世紀前半ごろの坏身と考えるが、SD0005上層西側の赤褐色粘質土(I-3区)出土である。この赤褐色粘質土は上層のSX0062・0027と近い性格であり、丘陵からの客土を用いた整地層と考えられる。207は内外面に墨とみられる黒色付着物が認められ、転用硯と考えられる。木器は、218がスギの曲物底板で、綴じ樹皮紐が遺存し、内外面に刃物痕が認められる。219はコナラ属アカガシ亜属の組物部品である。220はスギの小型板状木製品で、一端をV字状に加工しており、楔の可能性もある。221はスギの曲物底板片である。222はスギのへら状木製品で、下端が丸く摩滅している。掘串の可能性もある。遺物の時期は8世紀前半に収まると考えられ、上層のSX0061・0062・0027(整地層)の形成時期と大きな時期差はないようである。

SX0008 木器 (第34図) 1面のSS0056を掘り下げるとH-4区で板状木製品が重なって出土した(第31図、図版22-1)。2面での検出ではあるが、本来は1面のSX0061など水田下の埋め立て整地土に関わると考える。215はサワラの大型曲物底板の再加工品である。下端を脚として逆台形に成形し、上端は破損面を面取する。両端は上方に浅い凹み、下方に幅0.2～0.4cm、長さ2cmの切り込みを入れ、中央上方に幅0.9～1.1cm、長さ5.3cmの切り込みを入れる。中央の切り込みには板状の部品を組ませ、両端の切り込みには紐状の部品を引っかけたと考える。216はサワラの大型曲物底板を再加工したもので、左半後面に長軸方向の線状痕がみられる。上端は面取し、下端は折取られたままの状態である。両端には上方に浅い凹み、下方に幅0.3cm、長さ1.6～2.1cmの切り込みが設

けられる。両端の切り込みは215と同様の紐掛け部で、215の中央切り込みに十字に組み合わせて使用されたと考える。出土状況は215と216が十字に折り重なった状態であった(図版22-1)。217はスギの板状木製品で、前面に斜位の線状痕が認められる。曲物の底板を再加工したものであろうか。215・216と共伴する。

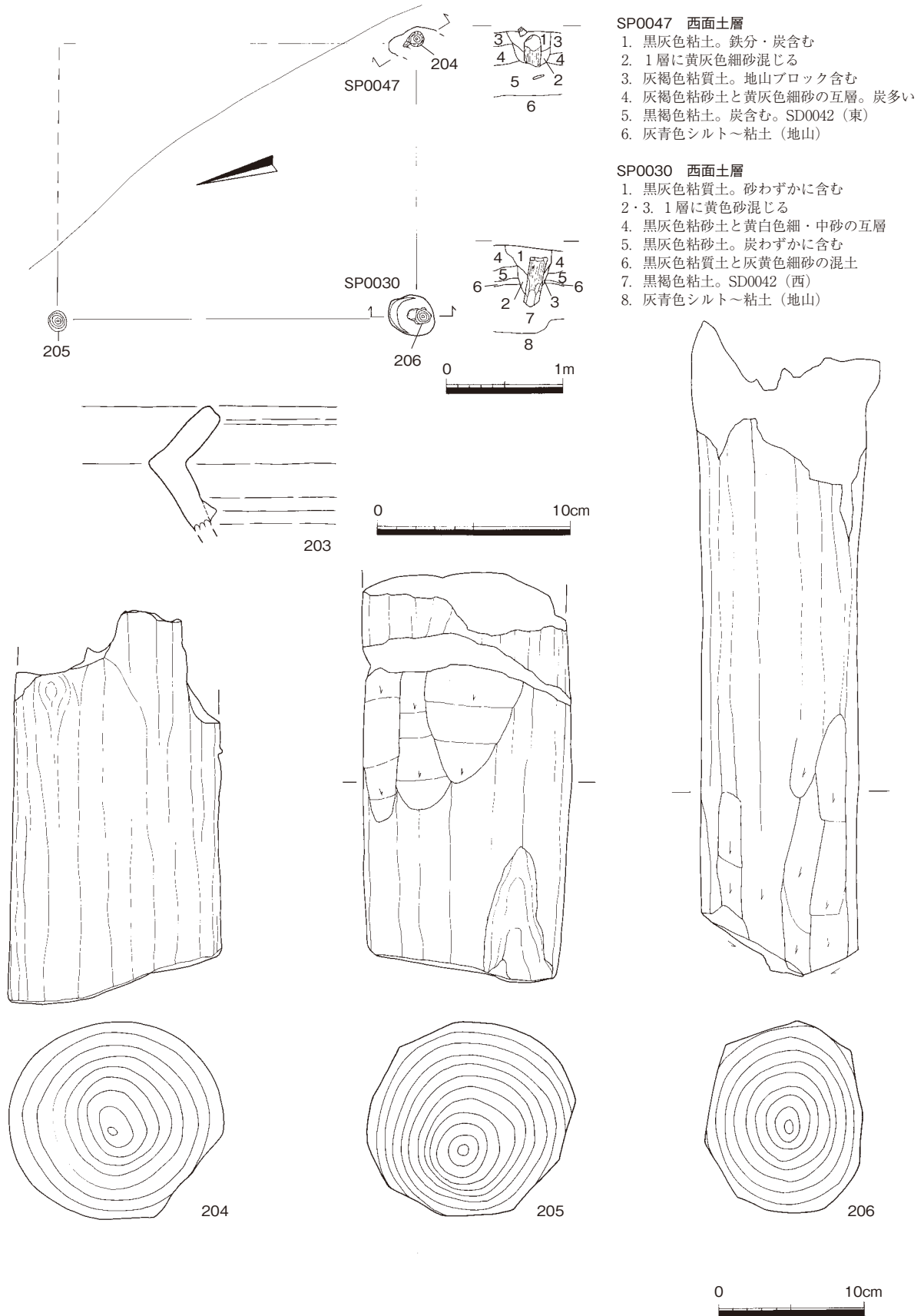
溝・流路(SD)

SD0003(第35図) H~J-4・5区で確認した北東軸の蛇行する溝である。北方向へわずかに傾斜する。幅0.8~1.2m、深さ10~20cmを測る。埋土は、砂・黒色粘土の互層で黄褐色粗砂層に遺物を多量に含む(第6・7図A-B土層21・22層、D-E土層5~7層)。SD0001・0002・SX0027の下で検出し、SD0003以下には複数の流路状堆積が認められる。遺物は2mグリッドごと(1~13)に取り上げた。

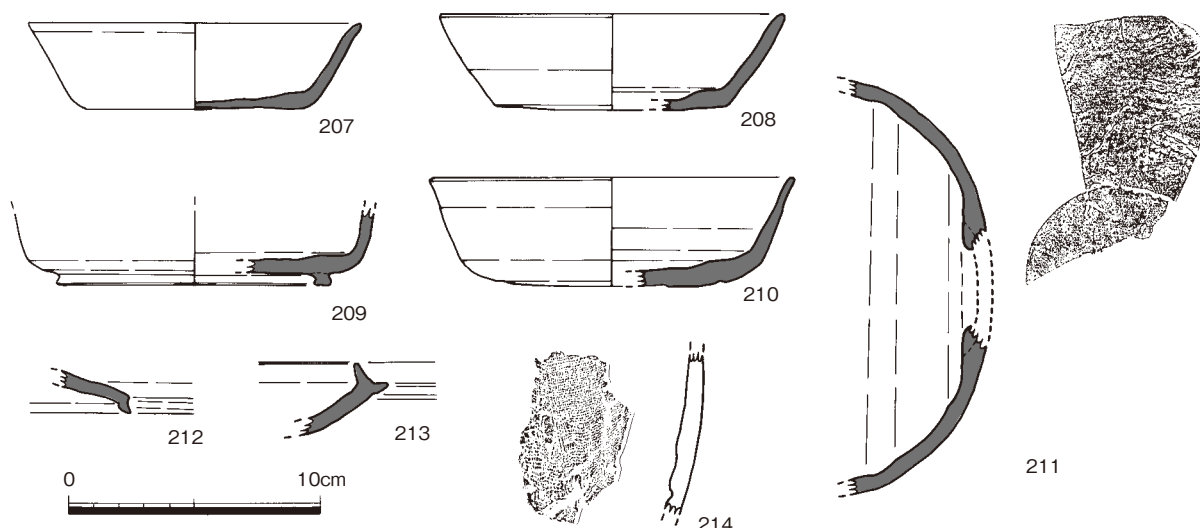
出土遺物(第36~40図) 甕(223~231)・袋状口縁壺(232~236)・鉢(237)・高坏(238~241)・器台(242~246)・ミニチュア鉢(247~251)・外来系壺(252~254)、鐸形土製品(255~257)、線刻土製品(259)、円盤連結木製品(260)、片岩製紡錘車(261)・打製石鏃(262)・磨製石鏃(263)・石庖丁(264~266)・磨石(267)が出土した。230は口縁部端と頸部を強いユビナデで仕上げ、わずかな屈曲を生んでいる。229は口縁部内面で連続刺突状にハケメ工具を押さえつけている。228は口縁部内面にハケメ工具による刺突が対面して2カ所に施される。225・227は、口唇部は強いハケメ・ナデによって上下端を張り出させ、頸部は粘土紐を強くナデつけて細い突帯を作り出す。これらは胴部最大径が上部に位置し、高三瀦式でも古相の特徴を有す。224は甕棺型式の立岩式である。232は外面のハケメ凹部にわずかに丹が残る。233・234は袋状口縁から二重口縁への移行形態を示す。237は内面を粗いハケメ、外面を細かいハケメで調整し、口縁部を丁寧なナデで仕上げる。238は二次的な被熱がみられ、器面が黒色化・剥落している。240は短脚の高坏で、坏部底内面は二次被熱により黒灰色化している。241は丹塗りの短脚の高坏で、外面はタテミガキで仕上げる。一部が二次的な被熱で黒灰色化している。242は成形・調整が粗く、焼成もやや不良である。243はユビ・ヘラナデで丁寧に仕上げられ、焼成も良好である。下部は打ち欠かされている。244・245は小型の器台で、焼成はやや不良である。246は粗いユビナデ・ハケメで仕上げる。252は外来系の壺口縁部片で、胎土は珪質細砂を多く含み、色調は灰黄褐色を呈す。内外面を丁寧なナデで仕上げ、外面にはわずかに斜めの連続ヘラ刻み後に、横位の3本沈線を施す。胎土も在来系土器と異なっており、畿内系の可能性がある。253は二重口縁壺口縁部片で、胎土は細砂をやや多く含み、色調は外面がにぶい黄橙色、内面が橙色を呈す。内外面ともにハケメを丁寧にナデ消している。型式は山陰系土器であるが、胎土は在来系土器と大きく違わない。254は外来系の壺頸部片で、胎土は径1~2mmの白色鉱物、径2~3mmの灰白色粒を多く含み、色調は灰色を呈す。頸部と肩部の境に径5~6mmの粘土粒を貼り付けた珠文と幅約8mmの連続ヘラ刻み文を施す。胎土・色調も在来系土器と大きく異なっており、瀬戸内系統の可能性がある。255は鐸形土製品の舞部片で、外面に丹が残る。SD0001のグリッドPh.42で取り上げているが、下面で接するSD0003に帰属するものとした。256は外面にわずかに丹を残す。中央西側堆積(グリッド10)から出土した(第35図、図版23-1)。257は外面に丹を残す。259は外面に沈線による縦位平行文、S字文が施される。外面上段と中段に穿孔が認められ、器種は蓋の可能性がある。256と同じグリッド10から出土した。260はイスノキの円盤連結木製品で、径5~7.75cmの円盤が連結した形状をなしている。儀器の可能性もあるが、成形が粗い点や、円盤の連結部が幅1~1.6cm、厚さ0.85~1.1cmと脆弱な点から、紡錘車の未成品の可能性が高い



第 31 图 I 区 2 面全体图 (1/200)



第32図 SB0068 実測図 (1/50) および出土遺物実測図 (203は1/3、他は1/4)



第 33 図 SD0005 上層出土遺物実測図 (1 / 3)

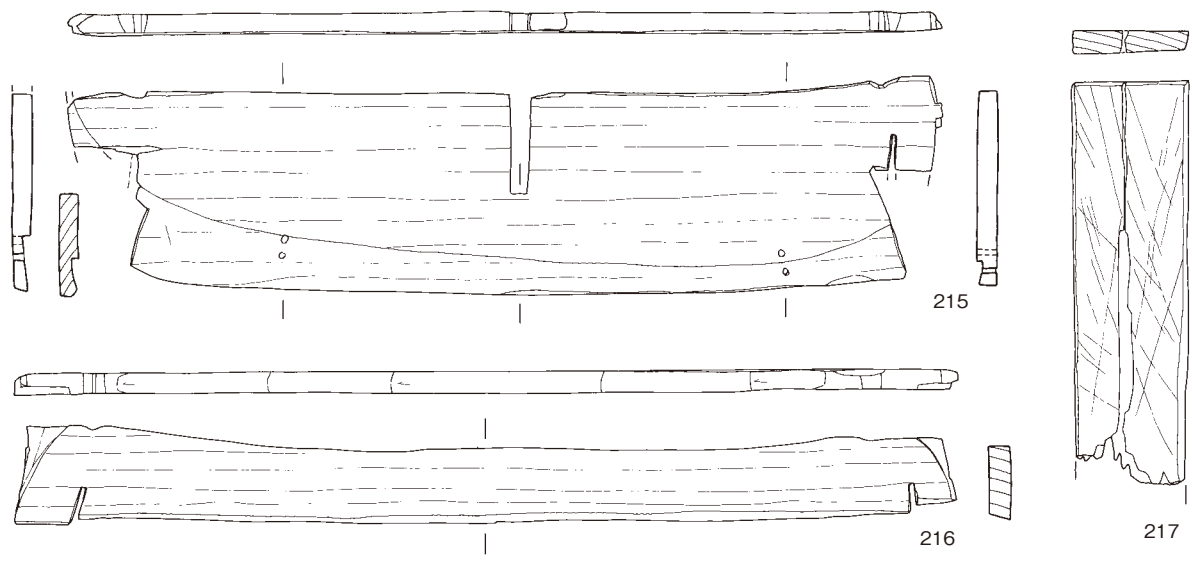
と考える。北側中央から出土した (第 35 図)。

この他、弥生土器、少量の土師器・須恵器、砥石、黒曜石・安山岩・玄武岩・頁岩・砂岩・軽石片、獣骨などパンコンテナ 160 箱分が出土した。遺物から遺構の時期は弥生時代後期前葉・高三瀦式期と考える。

SD0039・0050・0055 (第 6 図 B-C 土層 20~25 層、D-E 土層 8~14 層、42 図 各土層図) I-4・5 区で検出した流路状堆積で、土器が密集して堆積した SD0003 の下層堆積である。SD0003 の東側上層を SD0039、下層を SD0050、SD0003 南端下層を SD0055 として遺物の取上を行ったが、ここでは SD0003 下層流路として一括して報告する。埋土は黒灰色粘質土と黄色砂の互層・混土で、SD0003 と流向を同じくし、SD0042 (西) の上に堆積している。

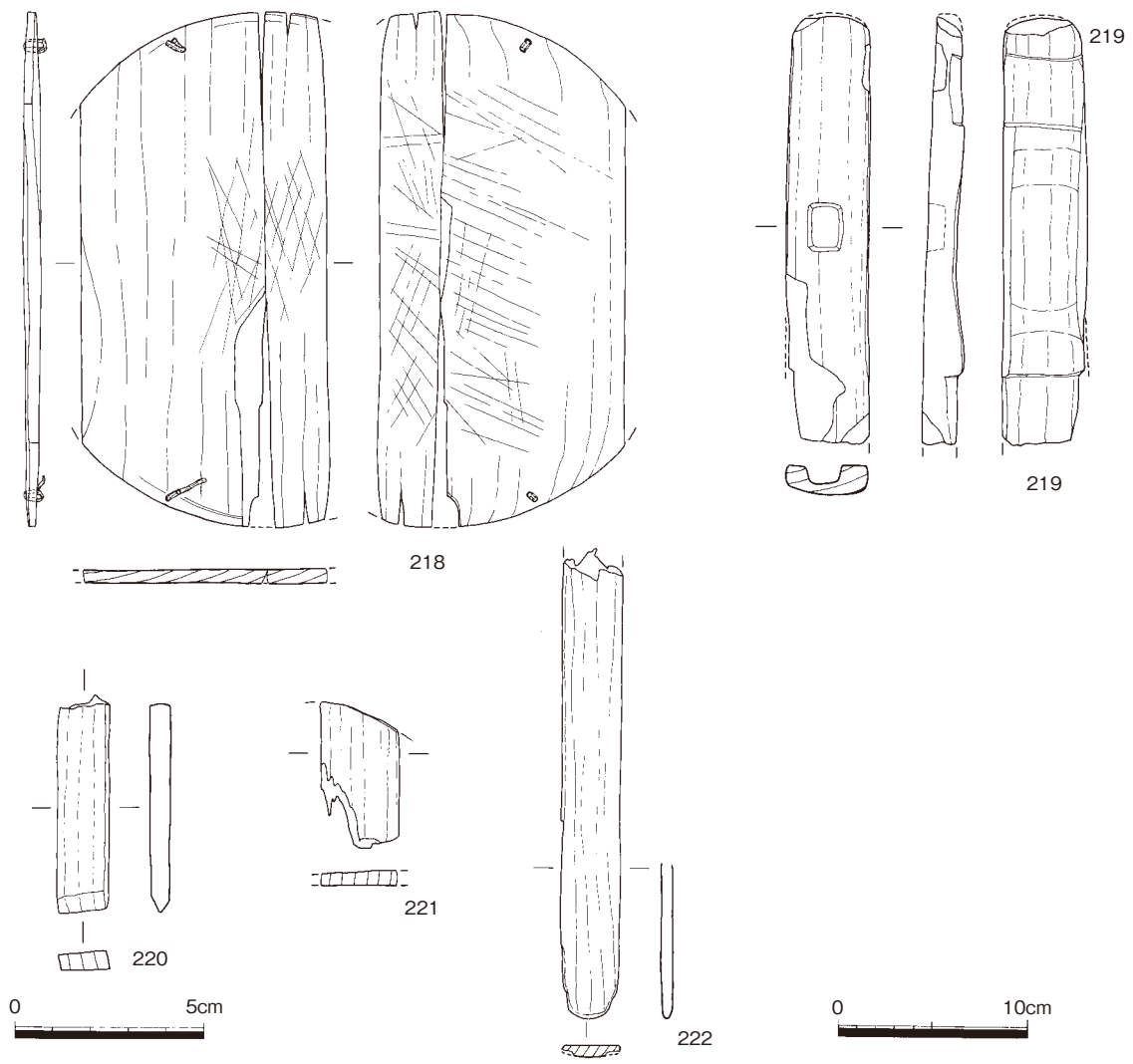
出土遺物 (第 41 図) 甕 (268・269・271~273)、丹塗壺 (270・274) が出土した。この他、弥生土器がパンコンテナ半箱分出土した。遺物は、弥生時代中期中葉・須玖 II 式であるが、上層の SD0003、下層の SD0042 (西) がともに下限が後期前葉・高三瀦式期であるため、SD0003 下層流路についてもこの時期と考えられる。

SD0042 (西) (第 42 図) I-4・5 区で検出した北東軸の溝である。北側は調査区外に延び、南側は立ち上がる。その先は SD0029 に切られていて不明である。幅 2.5~3 m、深さ 35~55 cm を測る。SD0012・SD0042 (東) と平面的に重複し、埋土が類似したため、3 者の遺物取上の混在は否定できない。A 区では SD0003 の下で検出した黒灰色粘土を「SD0003 下層 (黒色粘土)」として掘削し、その西側に堆積した黒灰褐色粘質土を「SD0012」として掘削した。その後、B 区では SD0012 の続きを検出しながら、「SD0003 下層」については「SD0042」と遺構番号を付け直して掘削した。ベルトを残して掘削を進めたところ、下面中央に一段下がった溝を確認し、「SD0042 下層」として遺物を取り上げた。その後、土層ベルトの観察から SD0042 が西と東に分層できることに気が付き、ベルト遺物のみを SD0042 (西) と (東) に分けて遺物取り上げを行った。「SD0042 下層」は SD0042 (西) の下層ということになる。最終的には土層ベルト XY や調査区東壁土層の観察から、中央の SD0042 (西) が SD0012 と SD0042 (東) を切っており、SX0066 より上位で 2 面遺構と位置づけられると結論した。



SX0008

SD0005 上層



第 34 図 SX0008・SD0005 上層出土木器実測図 (220 は 1/2、他は 1/4)



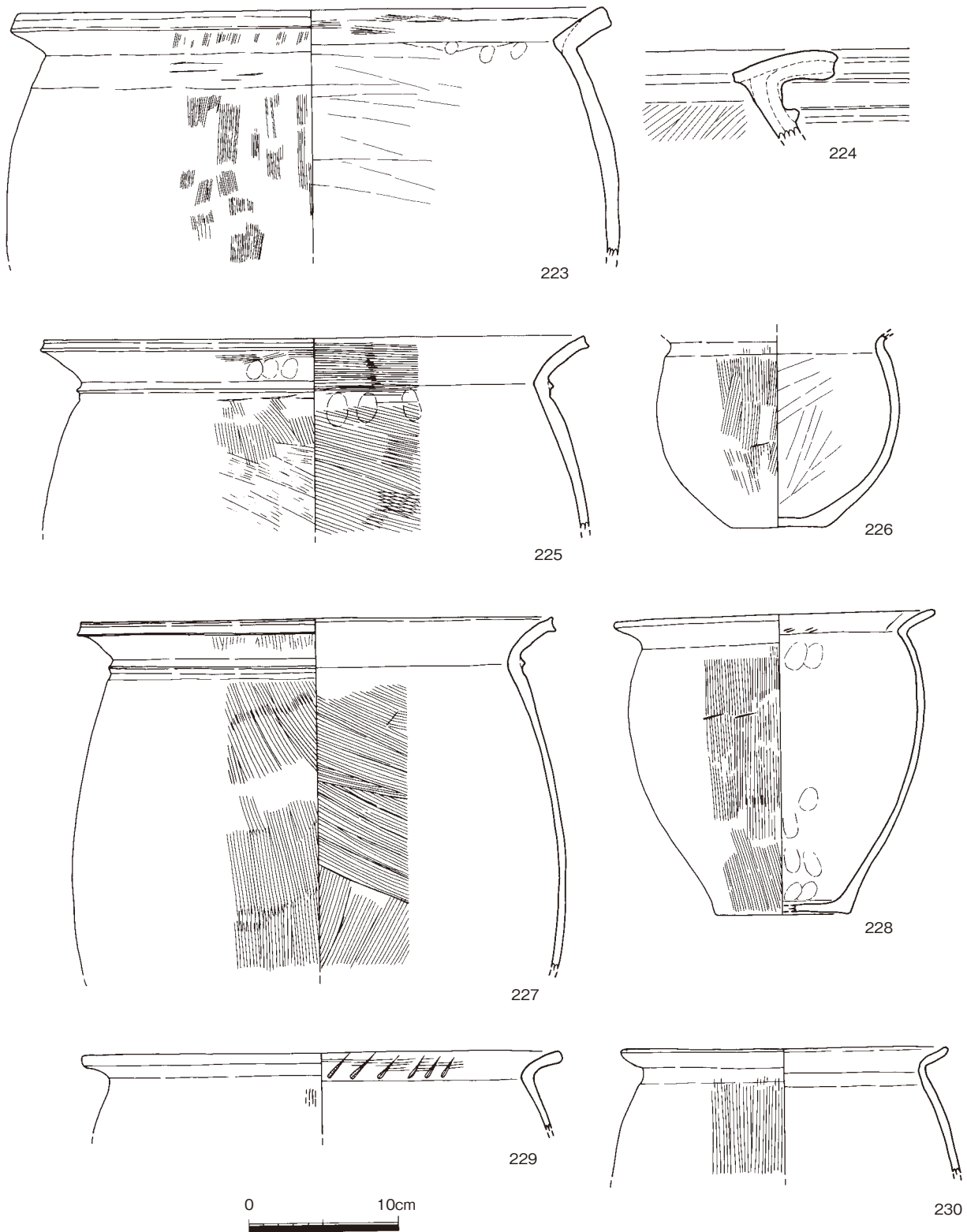
第35図 SD0003実測図(1/100)

よってSD0042の北区・南区・上層として取り上げた遺物はSD0042(西)と(東)の遺物が混在している。なお、形状・埋土・出土遺物の傾向から、南側のSD0053と同一溝になる可能性がある。

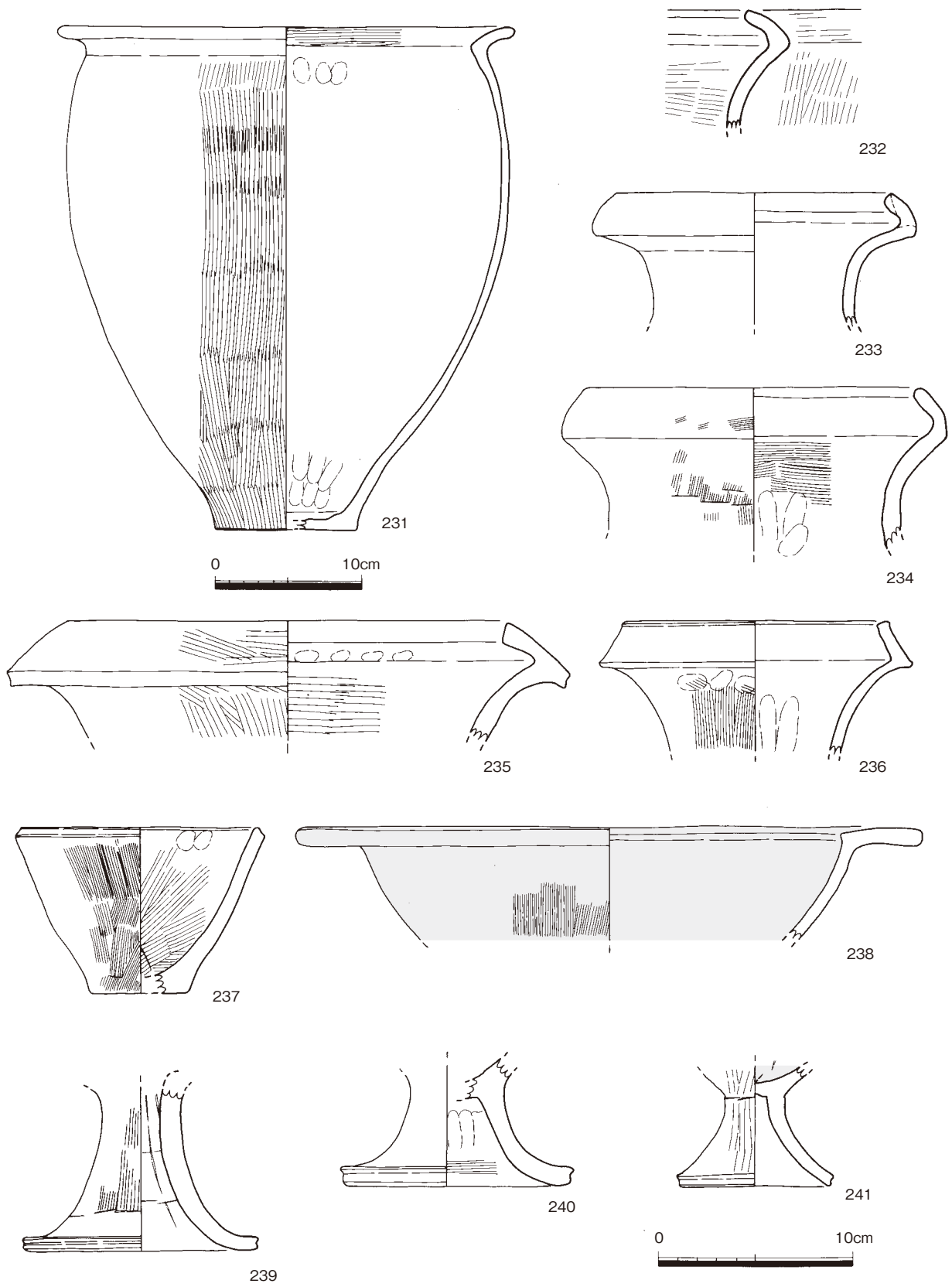
出土遺物(第43図) 丹塗壺(275)・丹塗高坏(276・277)・棒状木製品(278)が出土した。278はコナラ属アカガシ亜属の棒状木製品である。断面は方形、先端は尖って摩滅しており、掘串の可能性がある。この他、弥生土器、獣骨がパンコンテナ半箱分出土した。遺物から遺構の時期は後期前葉・高三瀦式と考えられる。弥生時代中期のSX0066・SD0012・SD0042(東)を切る層位関係とも矛盾はない。

SD0053(第57図) J-2・3区で確認した北東軸の溝である。残存幅2.5m、深さ50cmを測る。東側はSD0029に切れ、西側はⅡ区に延びて、SD0079に連続する。埋土は有機物を含む黒褐色～黒灰色シルト-粘土である(A-B土層21・22層、B-C土層23・24層)。無加工の板材・棒材や獣骨が出土した。SD0032に切られる。層位的な連続は確認できないが、土質・形状・出土遺物の傾向から、SD0042(西)と一連の溝の可能性が高い。

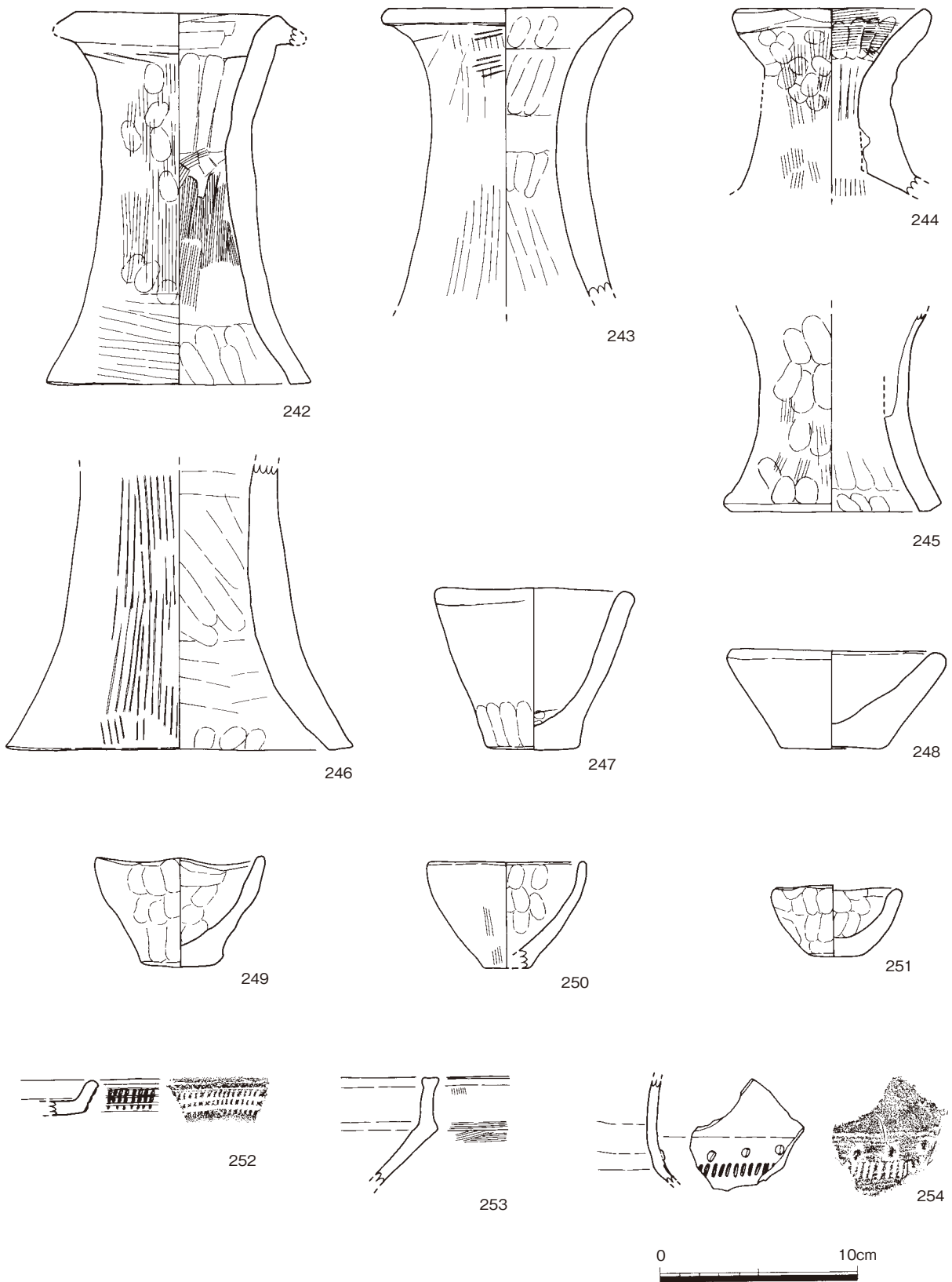
出土遺物(第39・43図) 鐸形土製品(258)、甕(279～281)・壺(282)が出土した。258は舞の



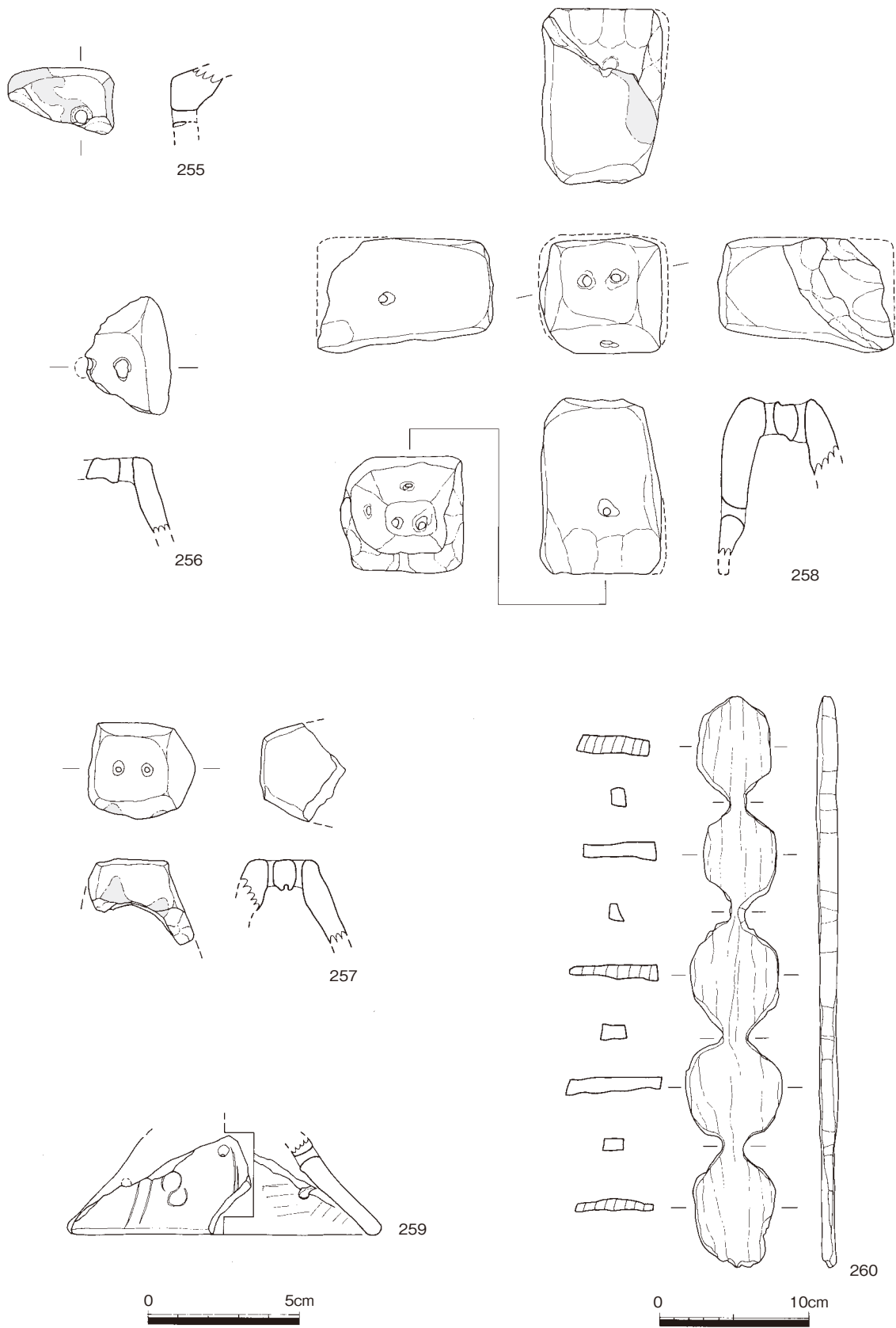
第36図 SD0003 出土遺物実測図(1) (1/4)



第37図 SD0003 出土遺物実測図(2) (231は1/4、他は1/3)



第38図 SD0003 出土遺物実測図(3) (1/3)

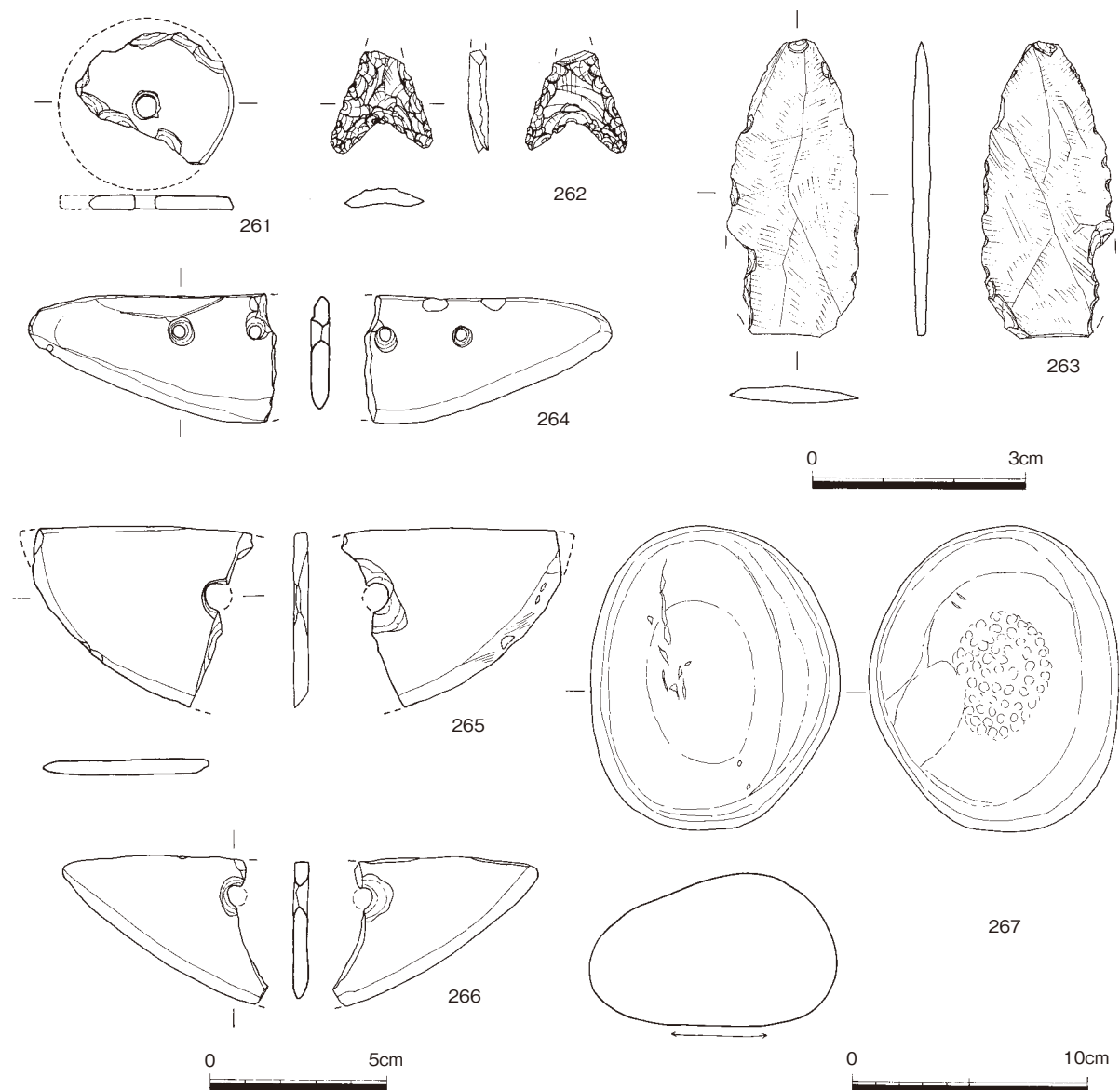


258 SD0053 その他 SD0003

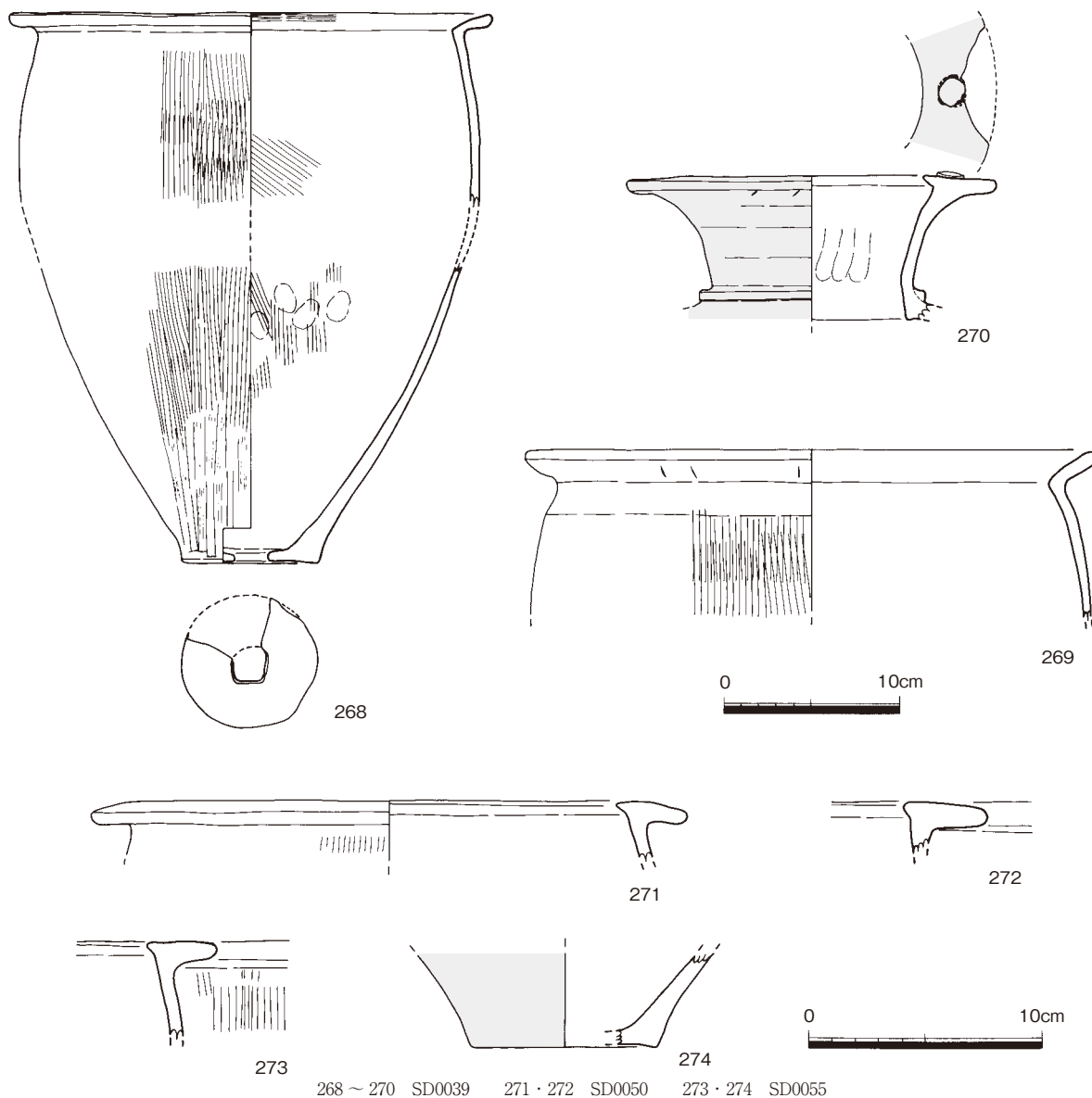
第39図 SD0003・0053 出土遺物実測図 (260は1/4、他は1/2)

2孔の他に、側面4面に下端から2cmに焼成前穿孔が施される。丹の痕跡が残る。279は底外面をヘラナデで仕上げる。282は城ノ越式古相の壺と考える。この他、弥生土器がパンコンテナ半箱分出土した。遺物から遺構の時期は、後期前葉・高三瀦式を下限とする。SD0032に切られる層位関係とも矛盾はなく、SD0042(西)と同一時期である。

SD0005(第44図) G~I-4・5区で確認した東に曲がりながら北東方向へ延びる溝である。北側は調査区外へ延び、南側はすぼまりながら段が一段設けられて立ち上がる。その先はSD0029に切られて不明である。断面形は逆台形で、幅4~5m、深さ1.2mを測る。底面のレベルは標高3.7mでほぼ平坦である。上層からは上述の通り、8世紀前半の遺物が出土する(第33・34図)。中層が有機物層となり、木器が多く出土した。下層は木質・土器の出土が少ない。中層と下層に分けて遺物は取り上げたが、両層間の遺物接合が認められたため、ほぼ同時期の堆積と考える。形状・埋土・出土遺物の傾向から、南側のSD0032と同質の溝と考える。また、南で隣接するSD0029下のSX0049は3面遺構として後述するが、SD0005・0032と連続する可能性も否定できない。

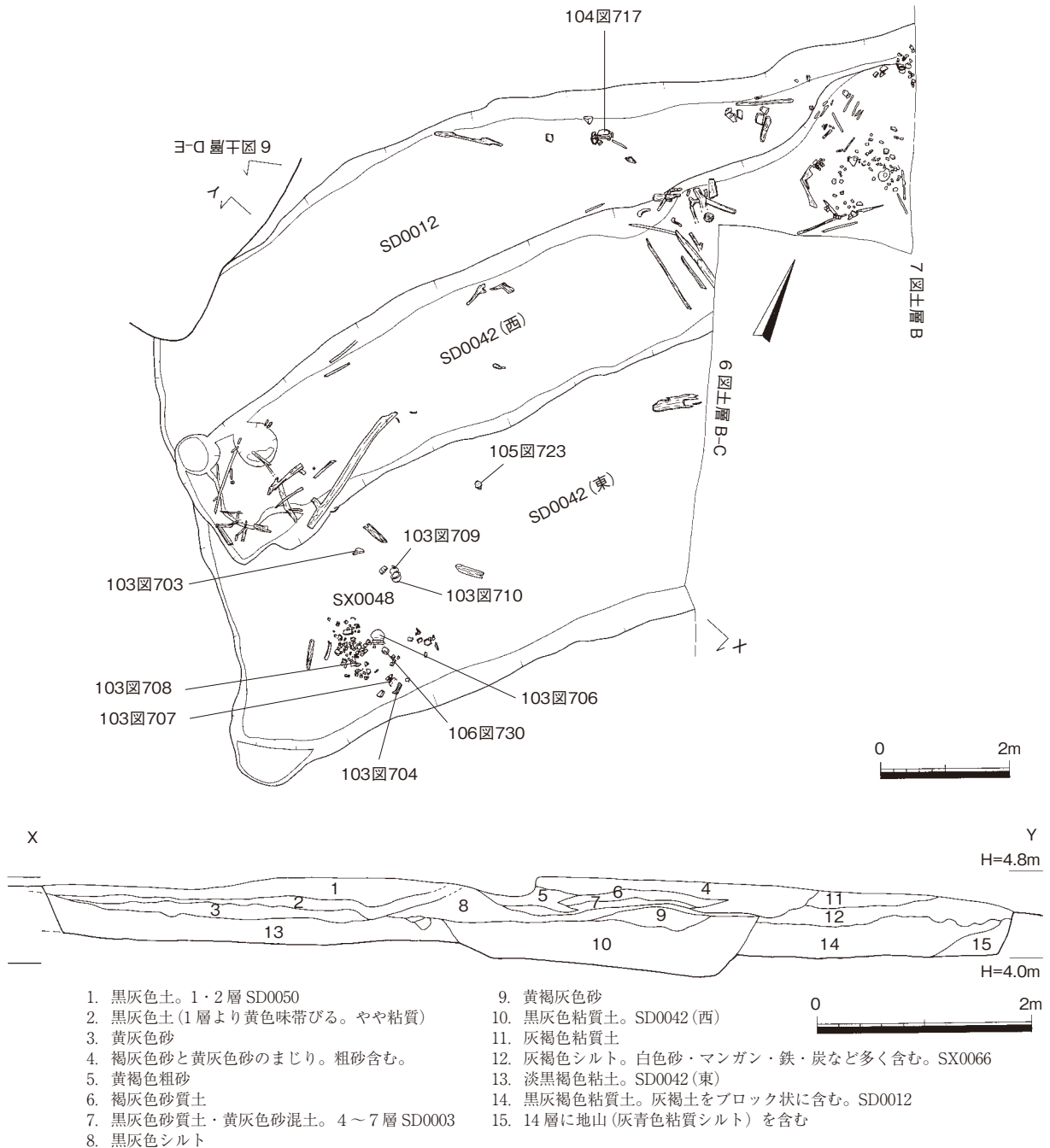


第40図 SD0003出土石器実測図(262・263は1/1、267は1/3、他は1/2)



第41図 SD0039・0050・0055 出土遺物実測図 (268~270は1/4、他は1/3)

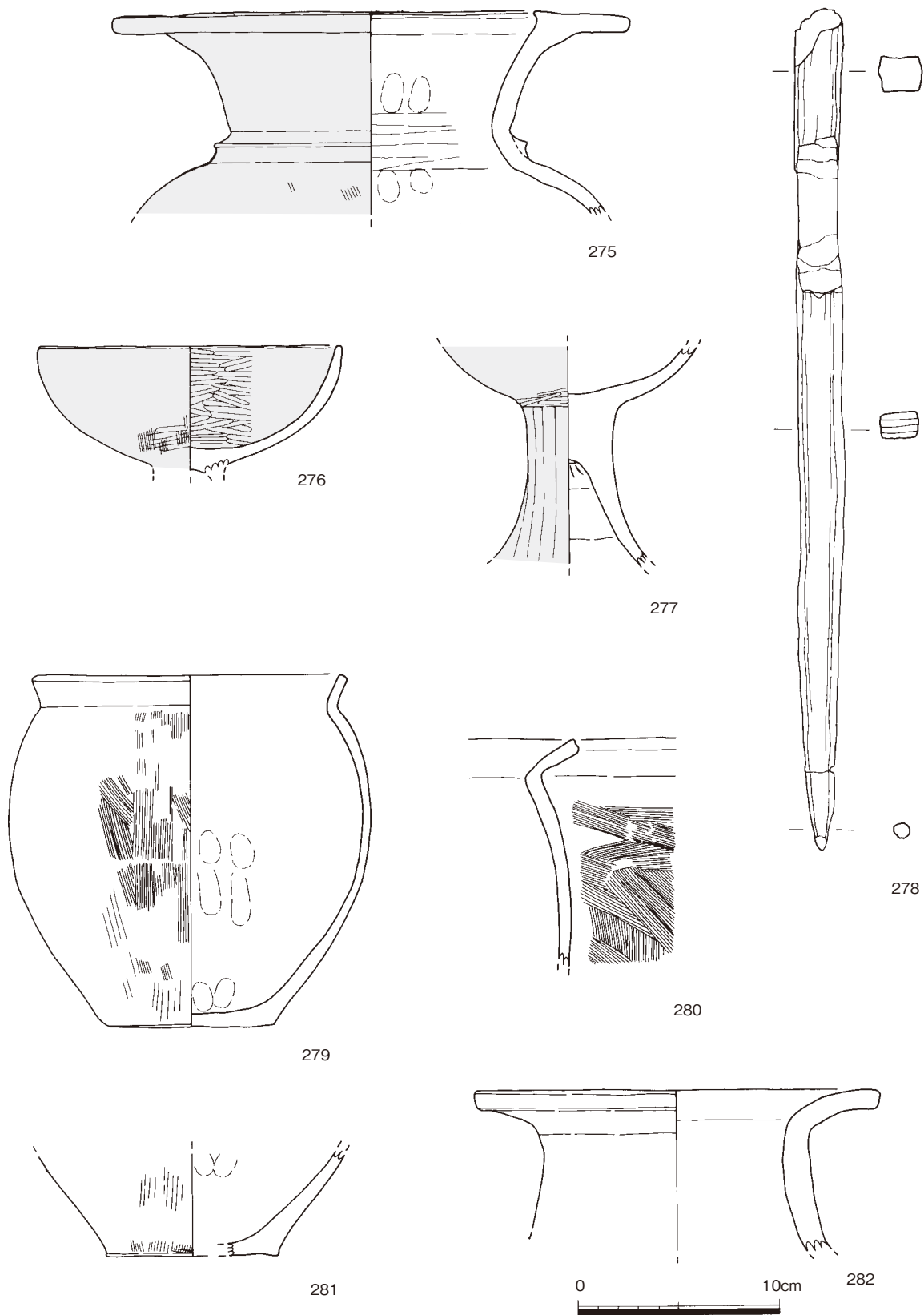
出土遺物(第45~54図) 甕(283~286)・二重口縁壺(287~294)・高坏(295・296)・器台(297・298)・杓形支脚(299)・鉢(300)・小型長頸壺(301・302)・ミニチュア短頸壺(303)、古墳時代前期の小型丸底壺(304~306)、注口土器(307)、匙形土製品(308・309)、土製紡錘車(310)、石庖丁(311~313)・敲石(314)・砥石(315~318)・扁平小型石斧未成品(467)が出土した。287は、頸部のタテハケメが文様的に施される。290はA区下層とB区上層が接合した。294は焼成後底部穿孔が認められる。302は完形品で、全面をタテハケメ後粗いタテミガキで仕上げる。296は内外面にわずかに丹が残る。304~306は上層出土である。307はSD0005の東側壁から出土しており、下層包含層(SX0066)に帰属する可能性もある。310は完形の土製紡錘車で、中央部西端から出土した(第44図)。314は砂岩製の敲石である。4面に敲打痕が認められ、使い込まれている。315は砂岩製の砥石である。砥面には擦痕、敲打痕が認められる。316は、シルト質砂岩製の砥石で、砥面は4面である。317は砂岩製の砥石で、砥面は4面、前面の砥面には斜位の2条の溝が認められ



第42図 SD0042・0012実測図(平面図1/100、土層図1/60)

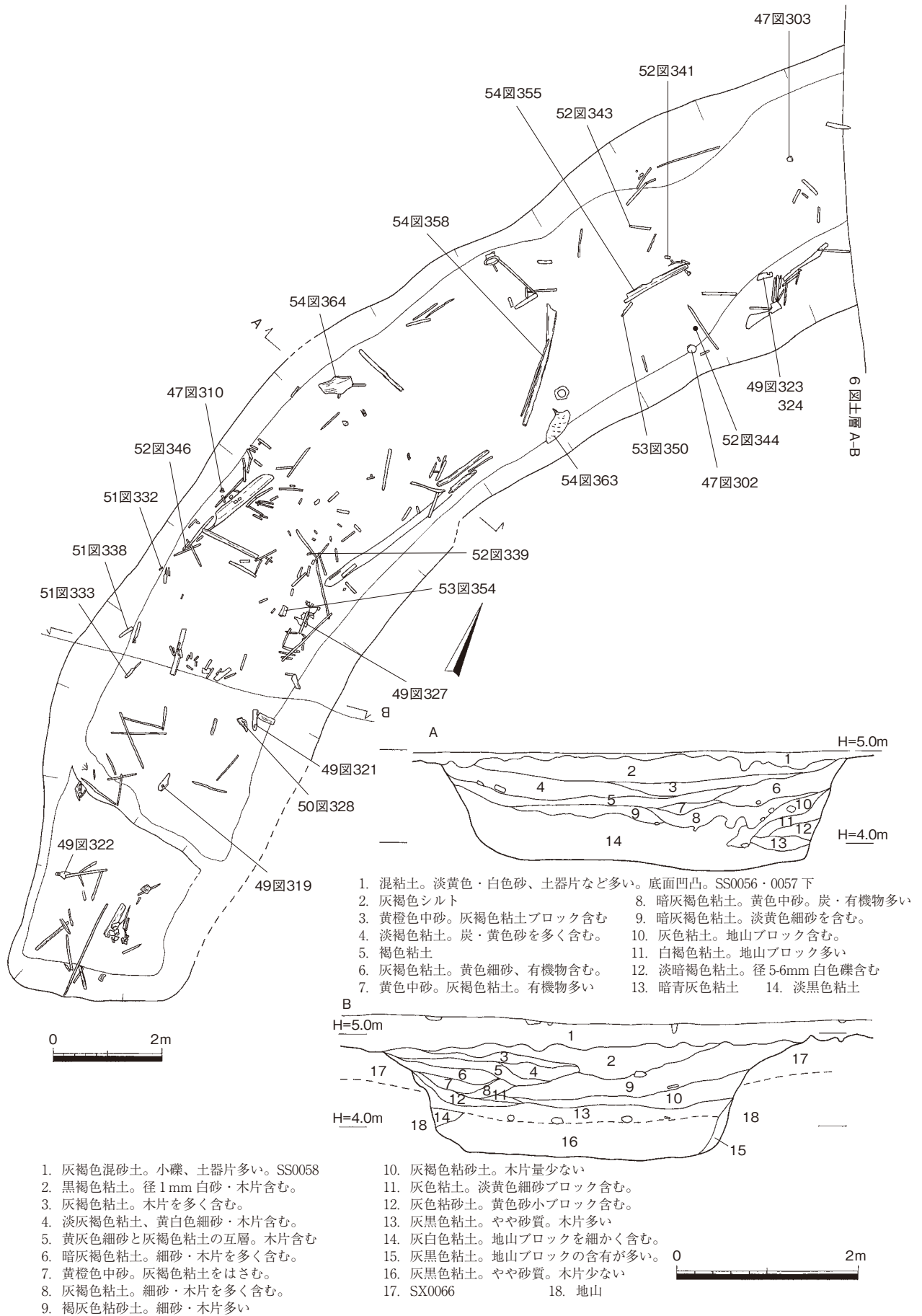
る。318は紐孔が穿たれた携帯用砥石で、上層出土であることから古代の所産と考えられる。

木器(第49～54図)は、鋏(319～327・329・330)・鋤(328)・着柄補助部品(331)・杓子形木製品(332)・横槌(333)・容器もしくは柄杓(334)・棒状木製品(335・337)・ヘラ状木製品(336)・有柄板状木製品(338)・紡錘車(339)・小型板状木製品(340)・円柱状栓(341)・組物部品(342～344)・机脚(345～347)・板状木製品(348～351)・建築部材(352～354・358・359)・板材(355・356)・杭(357)・掘棒(360)・棒材(361・362)・ねずみ返し(363・364)が出土した。319は狭鋏で、下段南端中央から出土した。321は狭鋏の完形品で、下段南端東側から出土した。322は広鋏で、南端上段から出土した。323は基部幅6.8cm、刃部幅13.3cm以上、柄孔幅2.6cmと復元される。

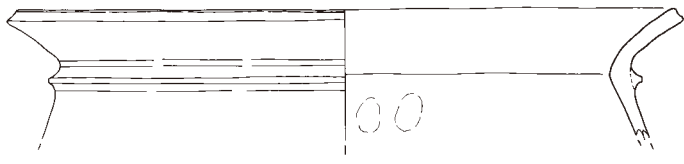


275 ~ 278 SD0042 (西) 279 ~ 282 SD0053

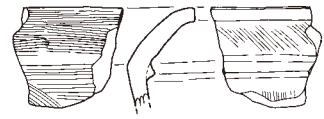
第 43 図 SD0042 (西) · 0053 出土遺物実測図 (1/3)



第44図 SD0005 実測図 (平面図 1/100、土層図 1/60)



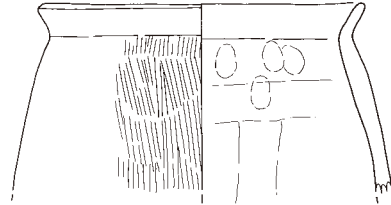
283



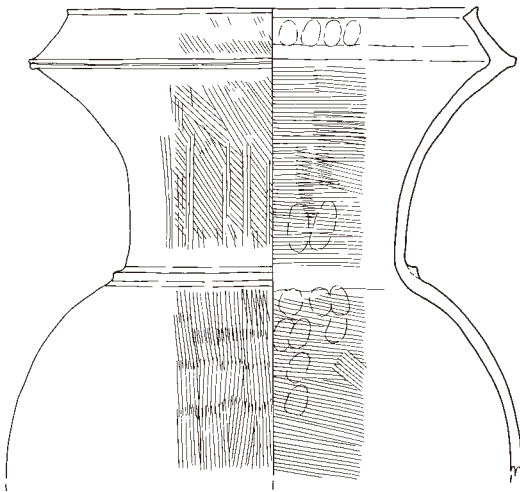
284



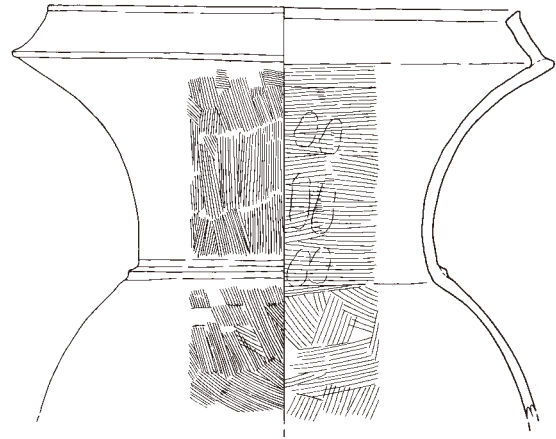
285



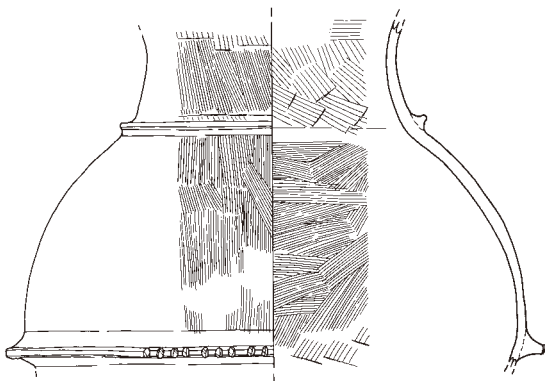
286



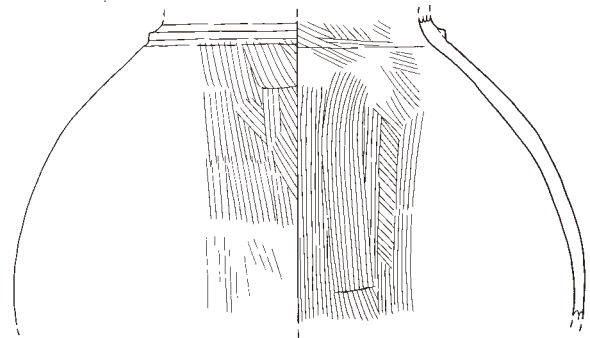
287



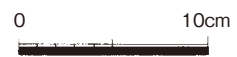
288



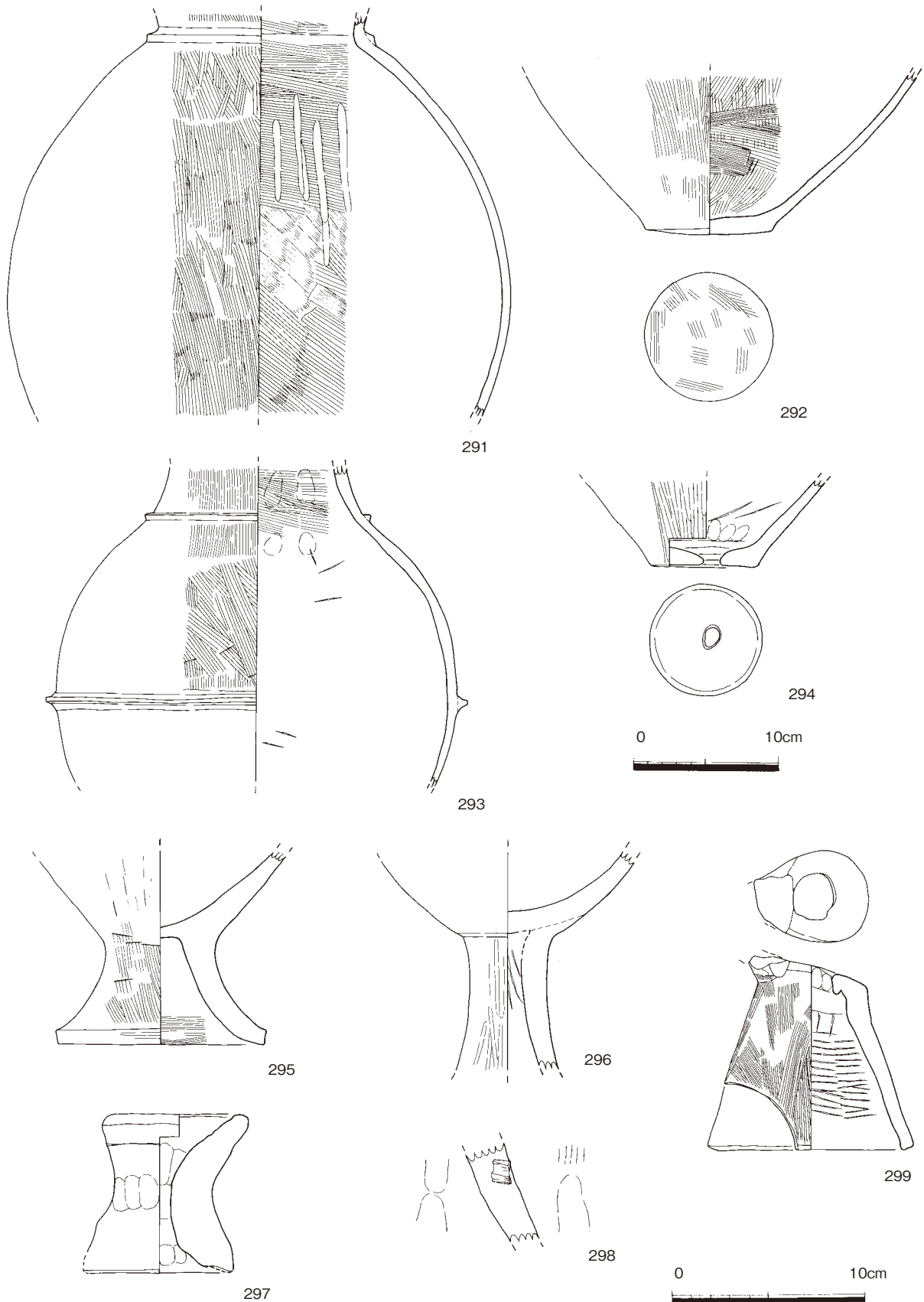
289



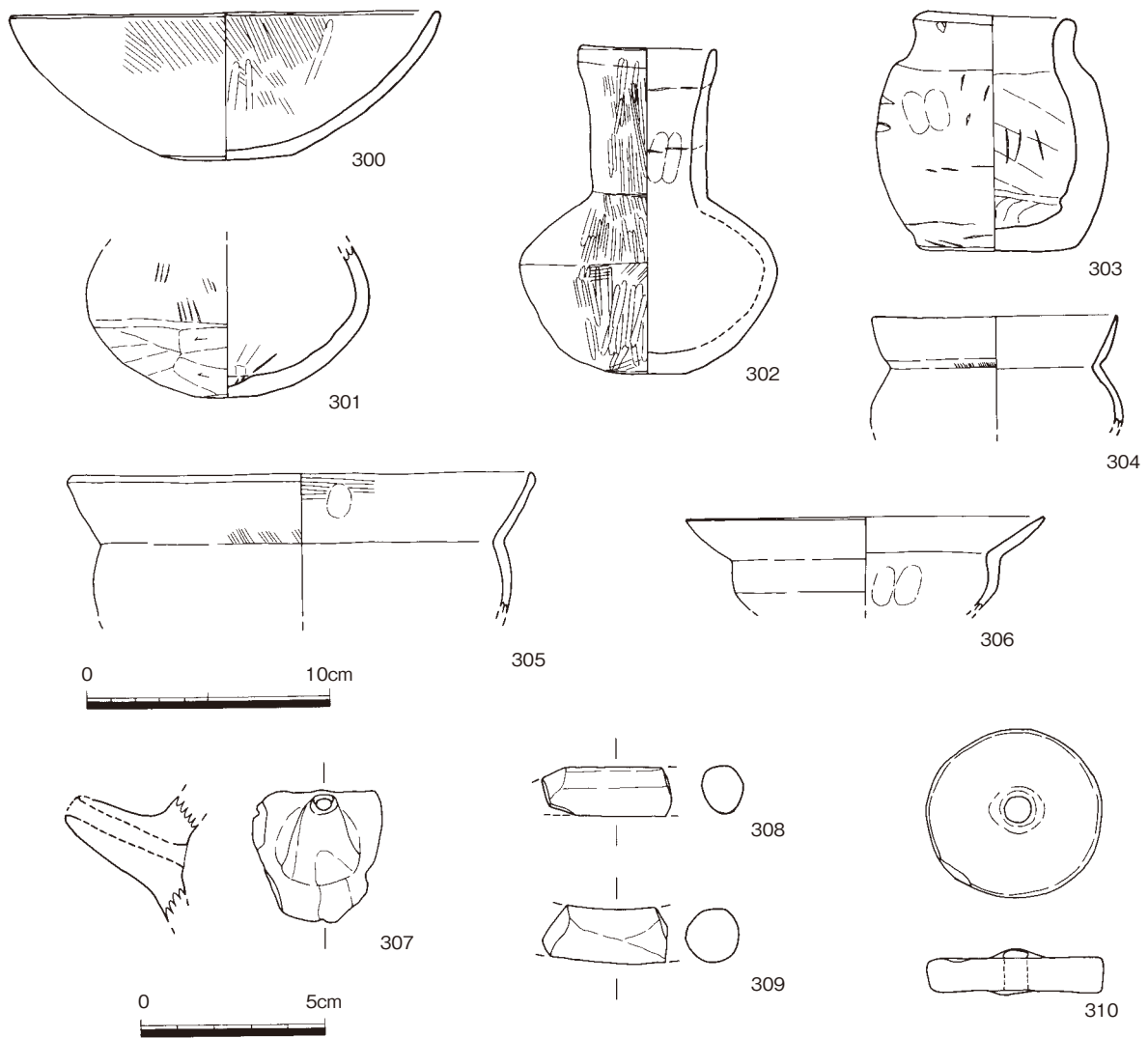
290



第45图 SD0005 出土遺物実測図(1) (1/4)

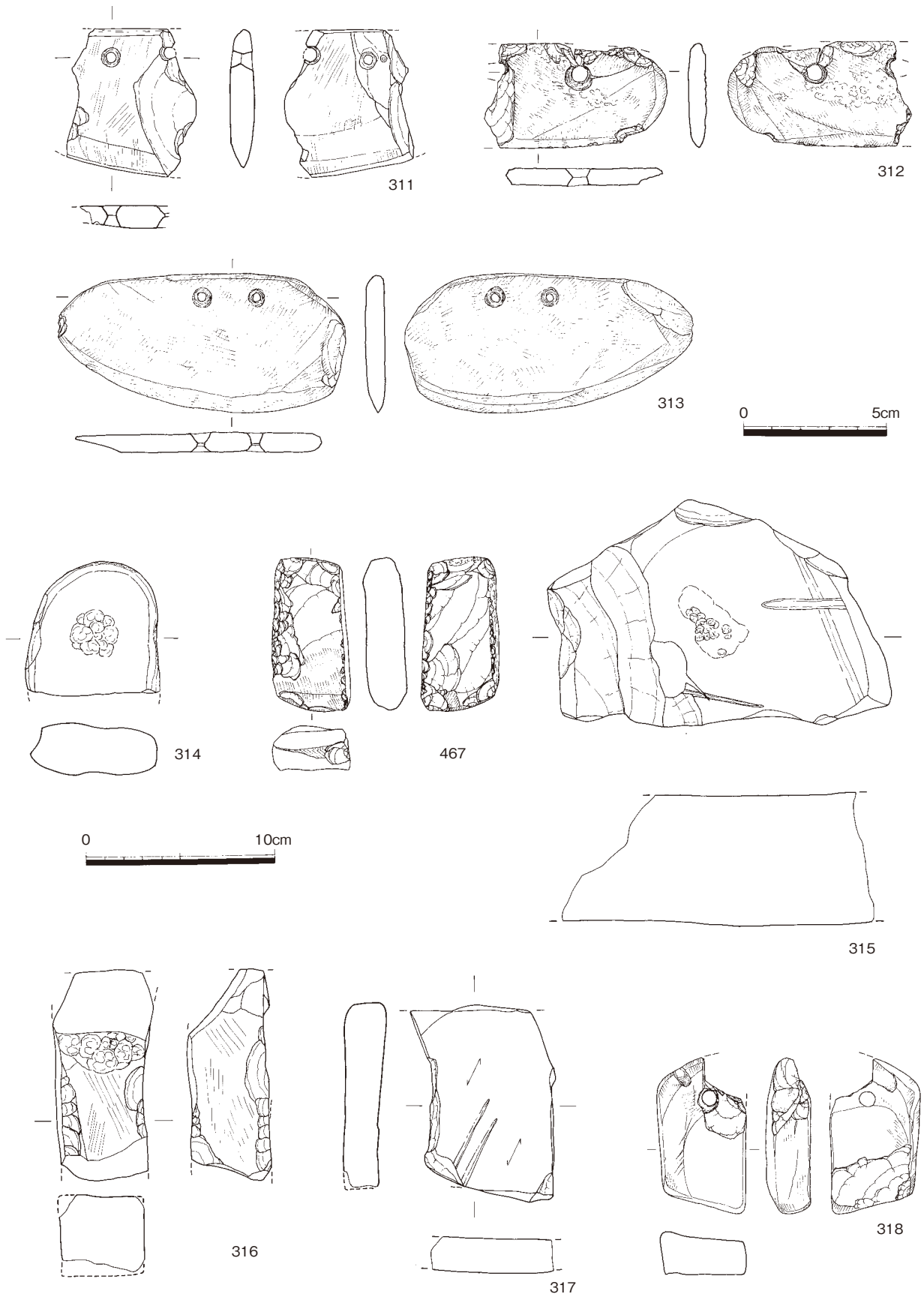


第46図 SD0005 出土遺物実測図(2) (291~294は1/4、他は1/3)

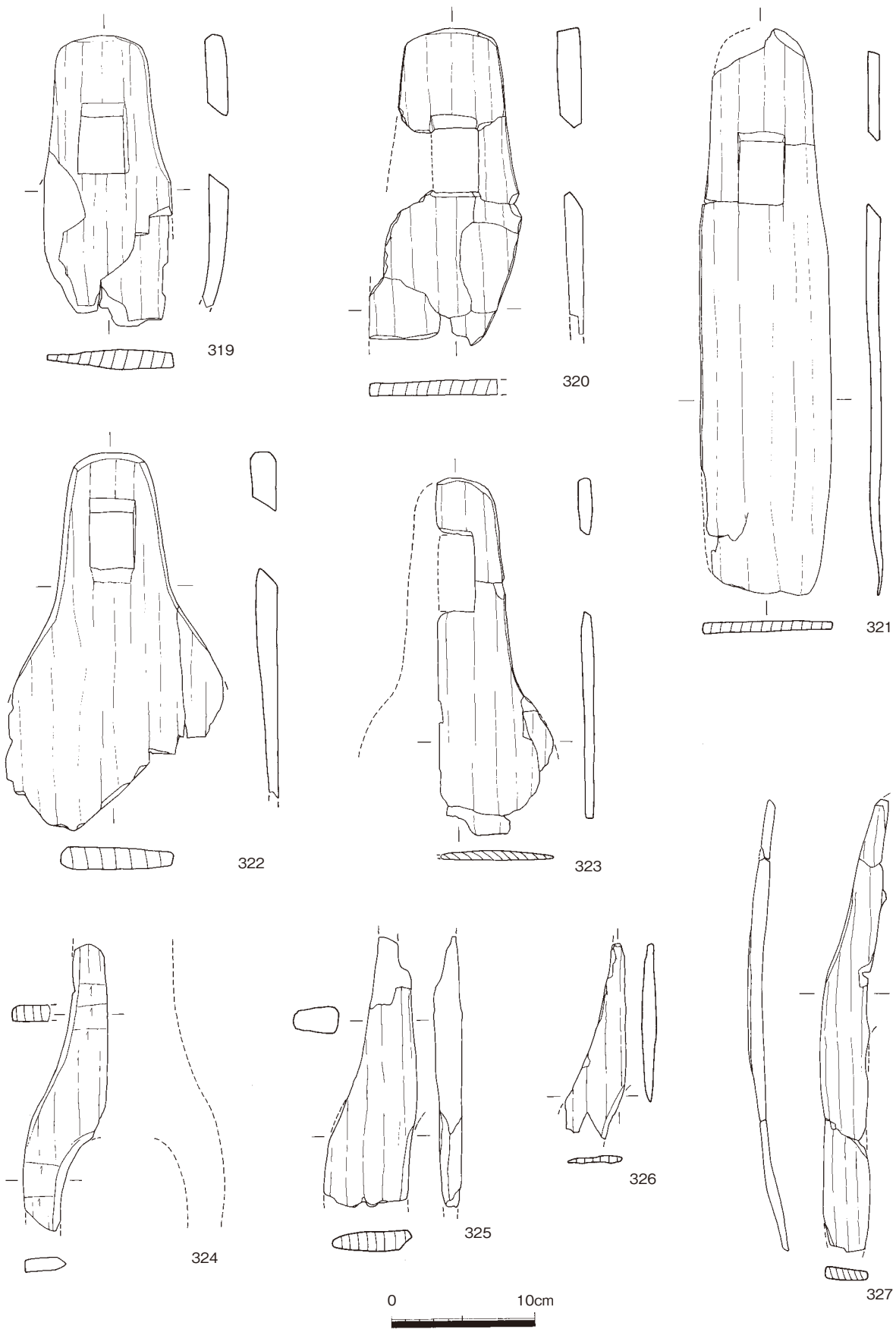


第47図 SD0005 出土遺物実測図(3) (307~310は1/2、他は1/3)

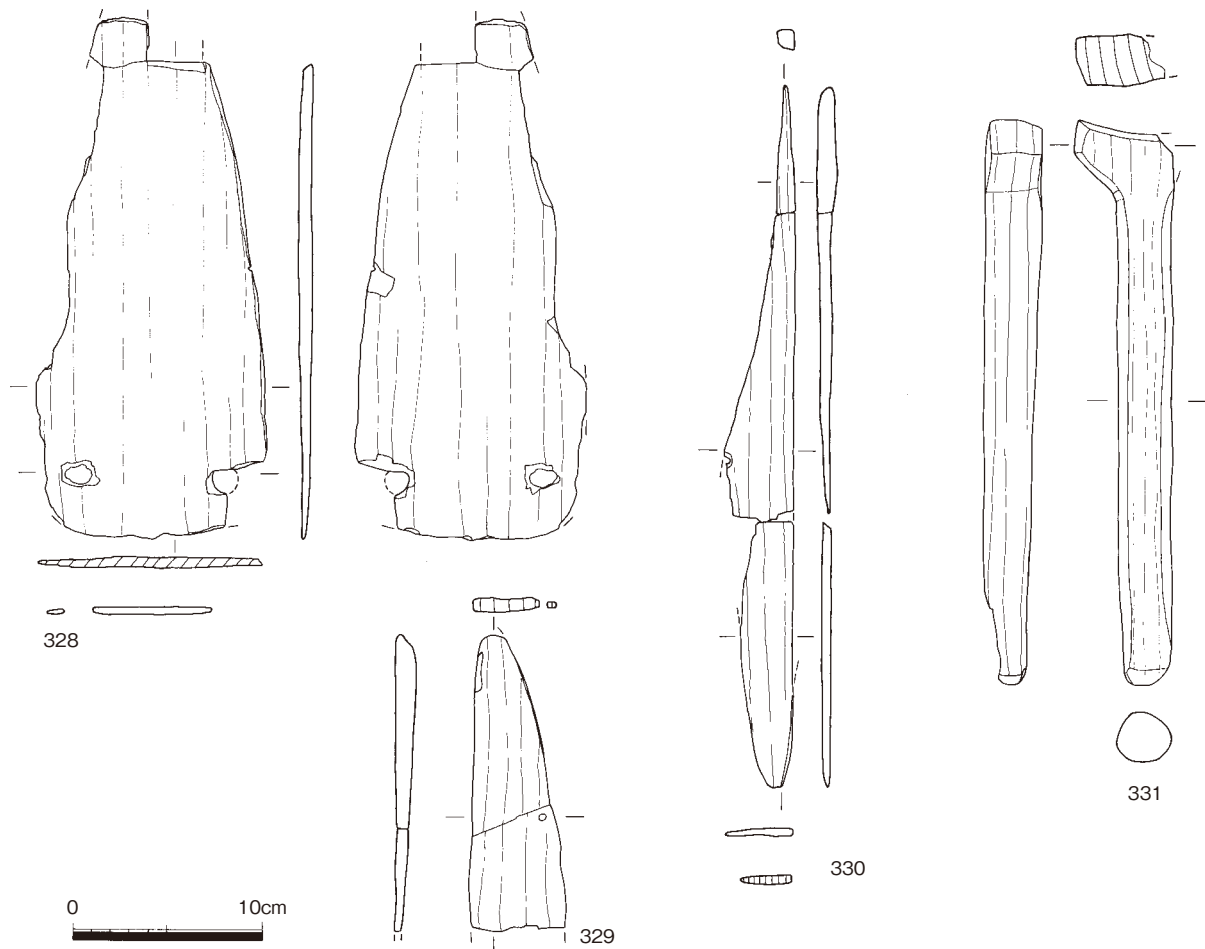
328は上端に柄孔のような痕跡もみられるが、判然とせず、下方に2孔が穿たれて、薄身であることから鋤と考える。下段南端東側から出土した。330は又鋤と考えられるが、上層出土であり、古代の可能性もある。332はスギの杓子形木製品で、下段中南部西側から出土した。333はツバキ属の横槌で、片面が燃焼により著しく炭化している。下段南部西側から出土した。334はスギの木製容器もしくは柄杓である。底外面にはわずかな凹凸と摩滅が認められる。径は11~12cm、器高13.7cm、底部厚2.9cm、器厚0.4cmを測る。正面下方の方形孔は穿孔と言うよりは欠損と考える。底部外面はやや凹凸をなし、摩滅する。北側最下面から出土した。335はスダジイの棒状木器で、先端は未加工だが、使用によって摩滅し丸みを帯びる。掘棒の可能性もある。336はスギの板状木製品で、先端が丸く摩滅している。337はクリの分割棒状木製品である。先端は削っていると言うよりは、摩滅によるもので、掘串の可能性もある。338はスギの板状木製品である。すぼまり、端部を面取加工している部分は持ち手であった可能性もある。340はスギの小型板状木製品である。断面形が平行四辺形に成形され、圧痕と考えられる短辺に平行した線状痕跡が認められるため、楔である可能性がある。339はシャシャンボの紡錘車で、中央部から出土した。341はカヤの円柱状の栓で、北側中央で出土



第48図 SD0005 出土石器実測図 (311~313は1/2、他は1/3)

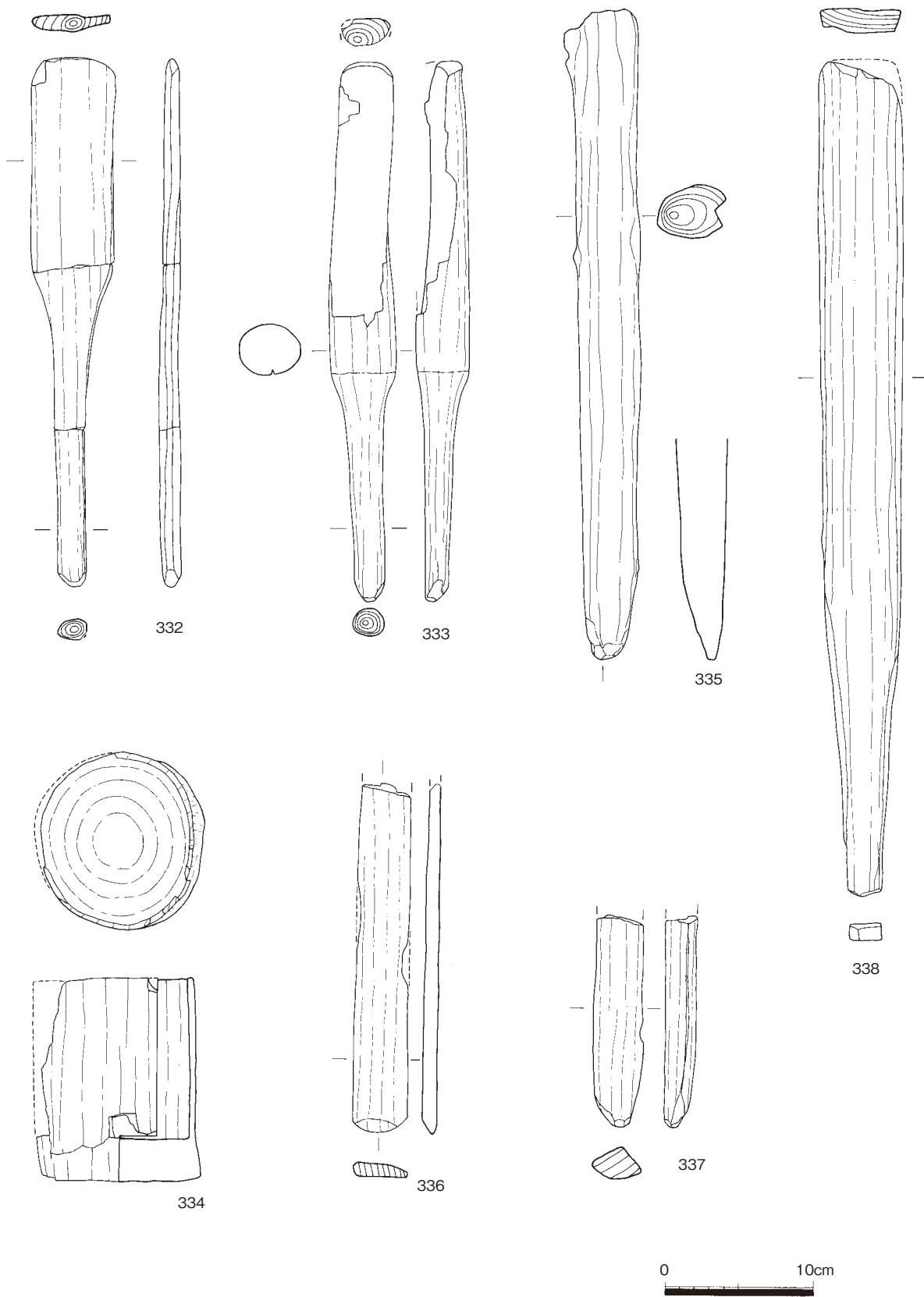


第49图 SD0005 出土木器实测图(1) (1/4)

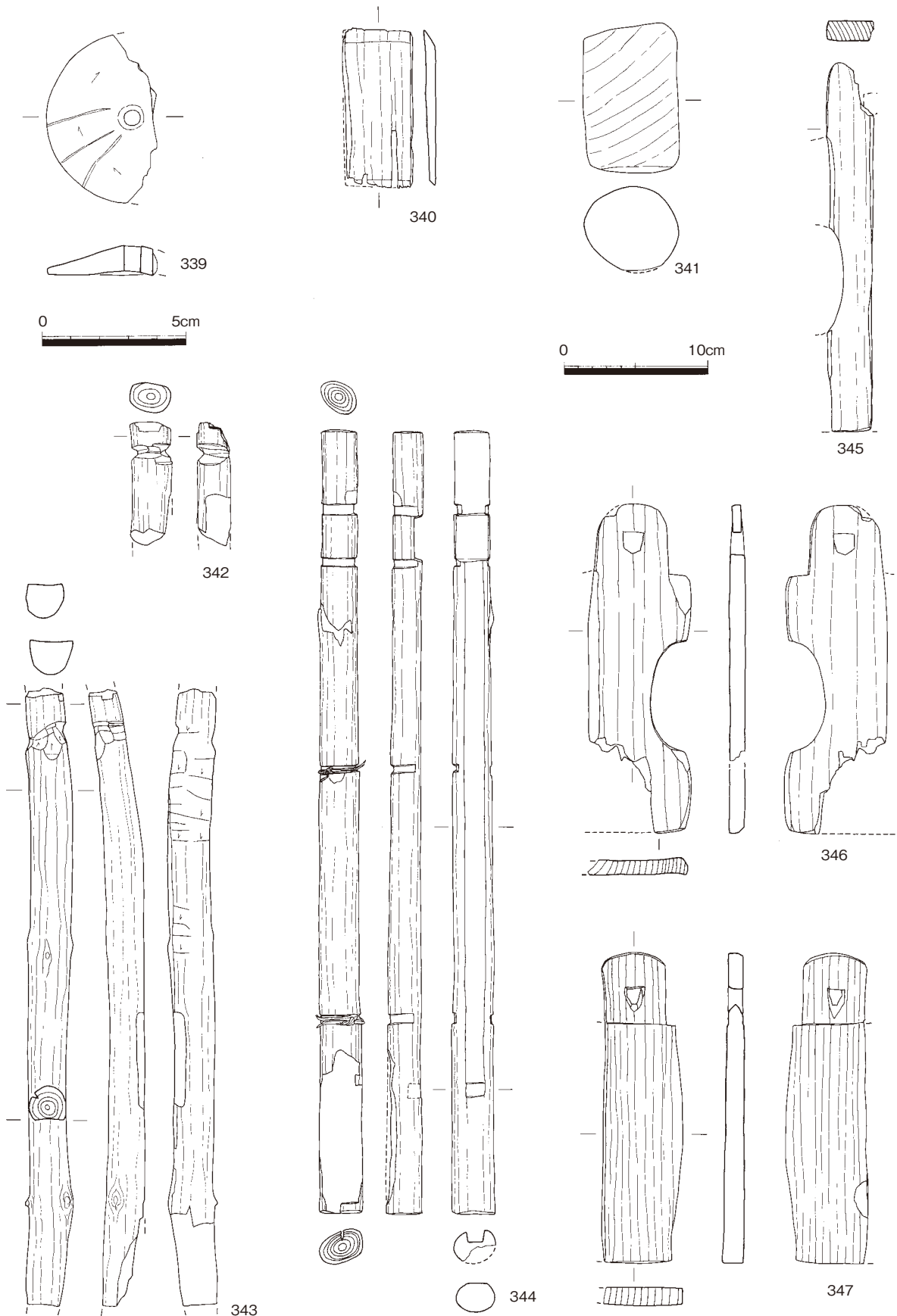


第50図 SD0005 出土木器実測図(2) (1/4)

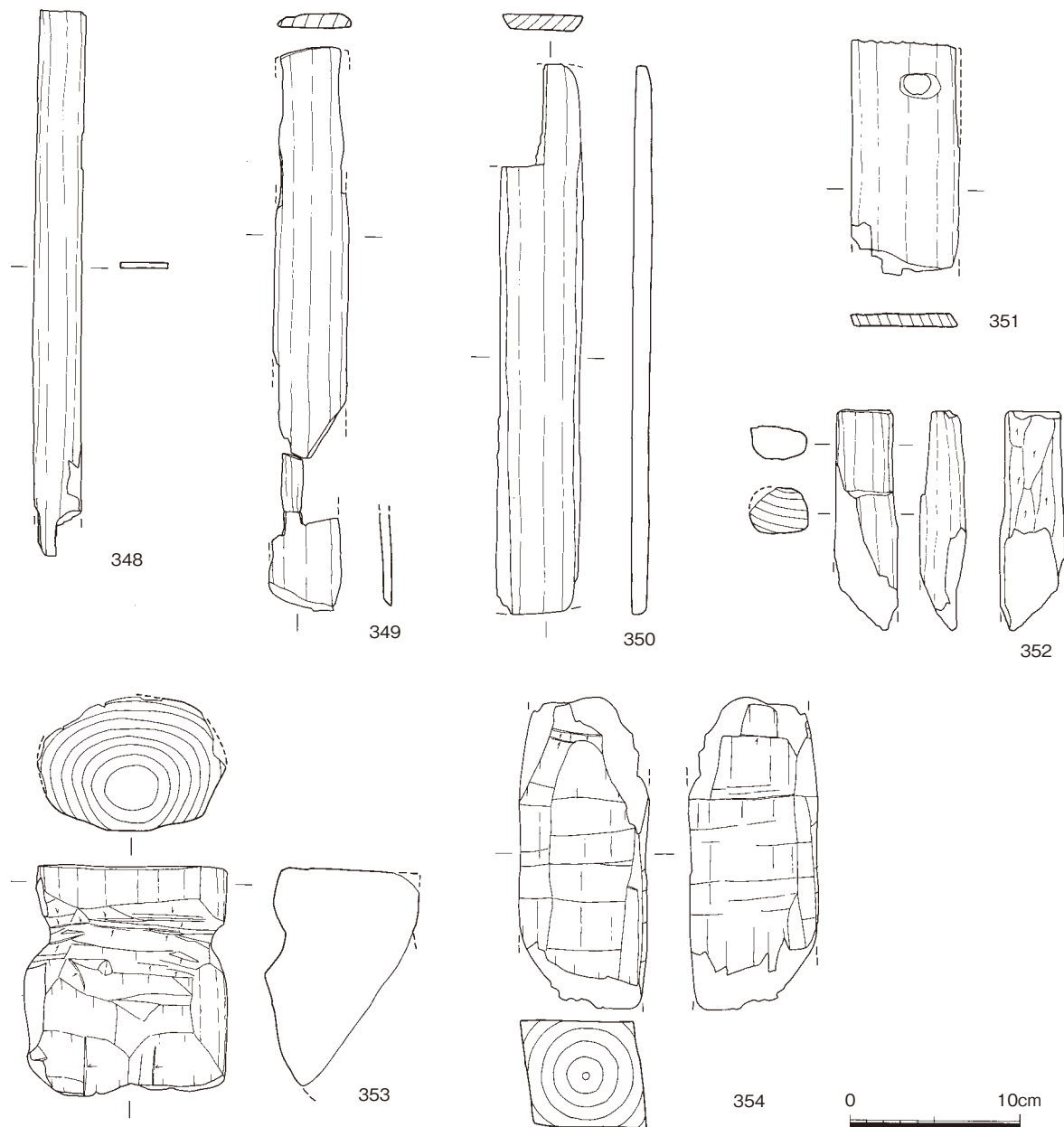
した。342は、シャシャンボの組物部品で、後面は薄く面取され、端部・括れ部は粗い削りで成形される。上層出土で古代の可能性がある。343はイヌガヤの組物部品または弓で、北側中央で出土した。344は組物の一部で、径3cmの芯持丸木に溝や貫穴などの加工を施している。溝に樹皮紐が巻かれた状態で遺存する。樹種はリンボクで、柔らかい。背面の溝とほぞ孔の間は薄く面取している。北部東側で出土した。342～344の組物は織機などが想定される。345～346はスギの机脚である。346は中南部西側から出土した。352はツバキ属の分割材で後面に加工痕が認められる。353はクリの建築材の削り込み部分である。354はマツ属複雑管束亜属の角材片である。上端から約2cm、6cmの部分に平行した線状痕跡が認められる。貫穴等に接合した際の圧痕の可能性もある。下段中央南寄り東側で出土した。355はスギの板材で、北側中央から出土した。358は上端に貫孔と8カ所のほぞ孔が穿たれている。359とは本来同一個体をなしており、総長234cm以上の建築部材である。中央北寄りから出土した。360はツバキ属の棒状木器で、上端は面取して丸く仕上げ、下端は両面を先端側から削って断面V字刃状に成形する。刃部は使用に伴って剥離・摩滅しており、用途は掘棒と考えられる。361はチシャノキ属の分割材で、末端を加工している。362は広葉樹の棒材で、幅2～3cmの鉄製工具で削って末端を処理する。363・364はクスノキのねずみ返しである。中央部の西側と東側で分かれて出土したが、同一個体である可能性を否定できない。この他、弥生時代～古代の土器・須恵器、頁岩・軽石・玄武岩・花崗岩片、獣骨などがパンコンテナ20箱分出土した。中・下層の土器は、



第 51 图 SD0005 出土木器实测图 (3) (1/4)



第52図 SD0005出土木器実測図(4) (339・340は1/2、他は1/4)

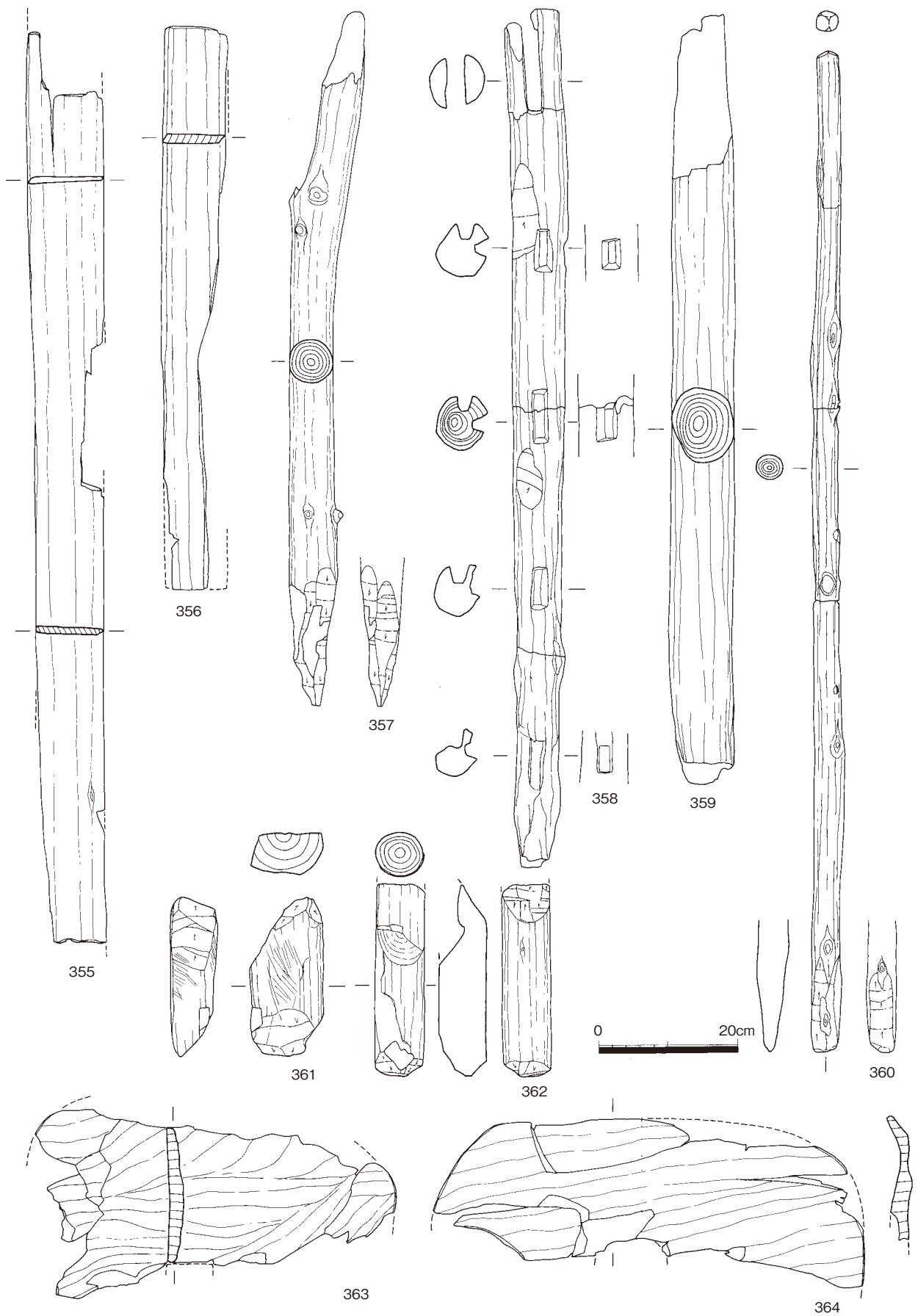


第53図 SD0005 出土木器実測図(5) (1/4)

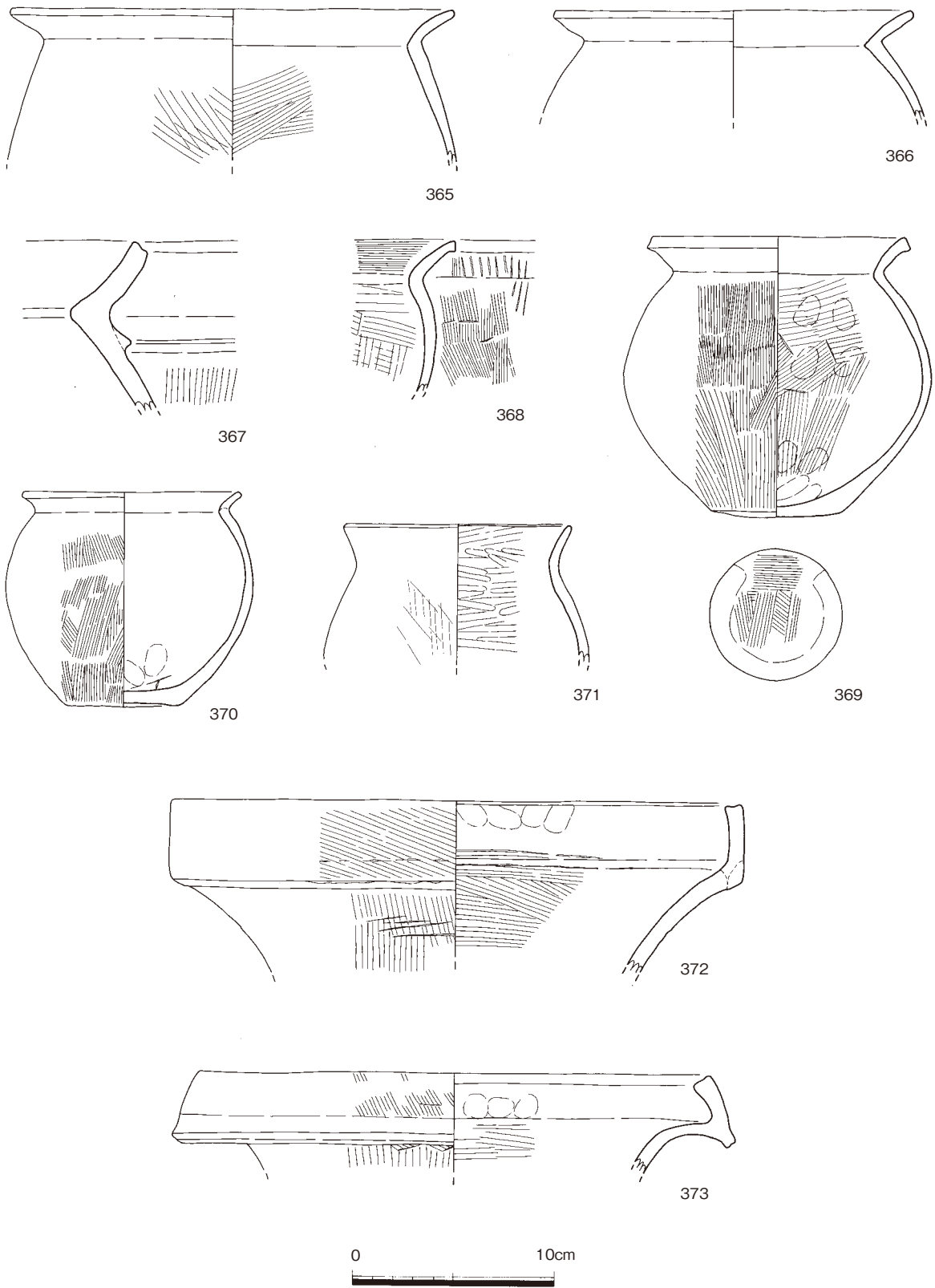
高三瀝式～下大隈式の特徴を示すもので、弥生時代後期中葉に位置づけられる。SD0005は弥生時代後期中葉に掘削された後、古墳時代前期、8世紀前半まで流路・溝として機能していたと考える。

SD0032(第57図) J-3区で確認した北東軸の溝である。残存幅4m、深さ70cmを測る。埋土は暗褐色～黒色粘土である(A-B土層18・19層)。SD0023・0036下で確認し、SD0053を切る。層位的な連続は確認できないが、土質・形状・出土遺物の傾向から、SD0005と一連の溝の可能性が高い。南側はⅢ区へと延び、SD0752下層に対応する。

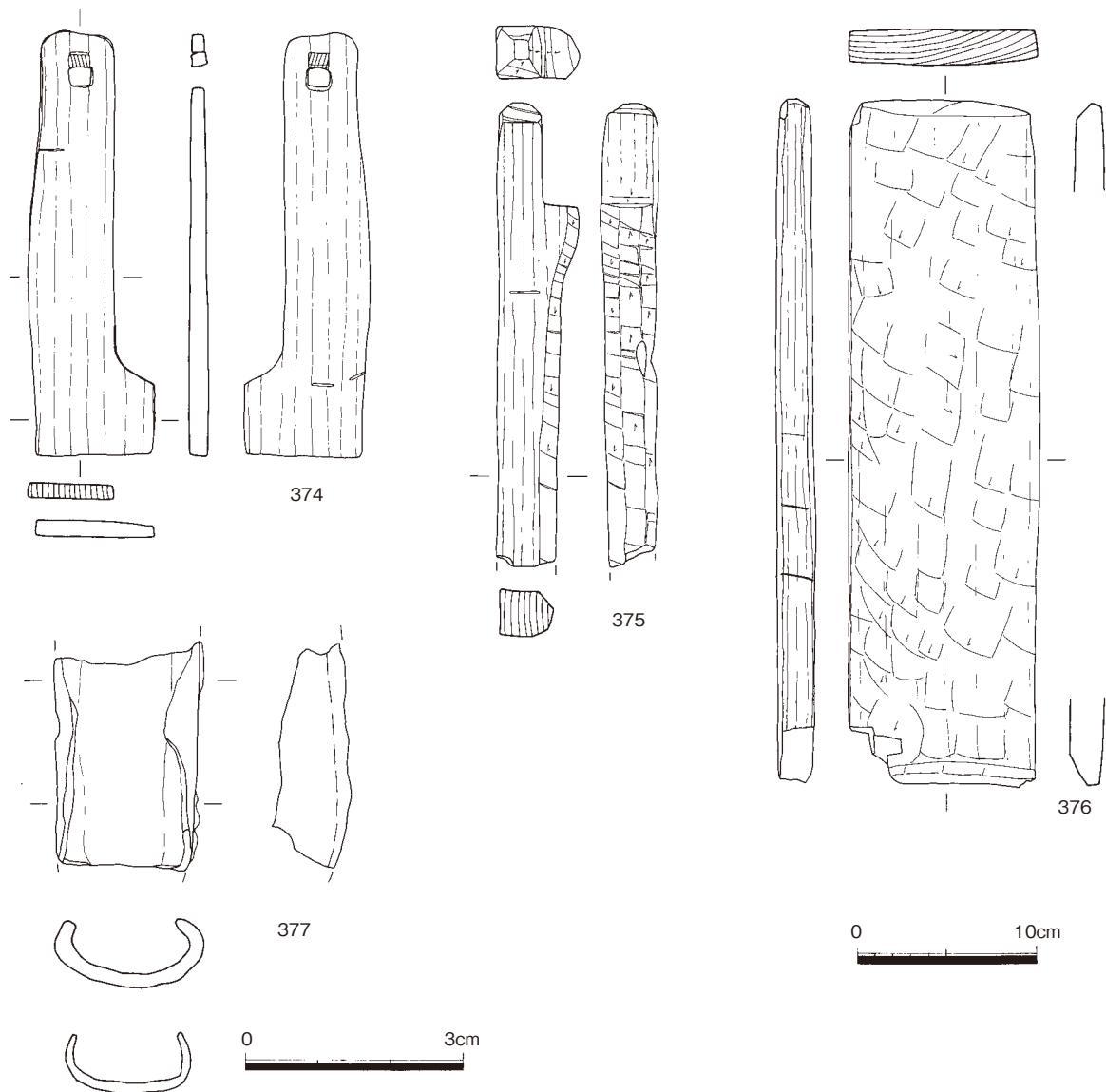
出土遺物(第55・56図) 甕(365～370)、短頸壺(371)、二重口縁壺(372・373)、机脚(374)、鋏着柄補助部品(375)、板材(376)、鉄鑿(377)が出土した。369は底外面縁をヘラナデで仕上げている。374はスギの机脚で、貫穴に方柱状の木製楔が遺存している。中央北寄りから出土した(第57



第54図 SD0005 出土木器実測図(6) (1/8)



第 55 图 SD0032 出土遺物実測図 (1) (1/3)

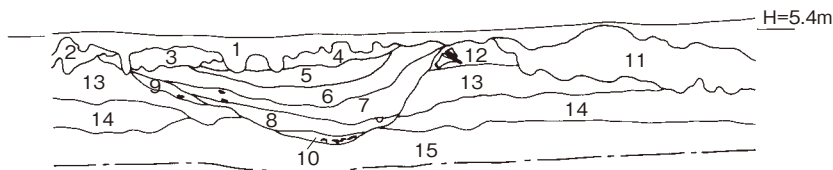


第56図 SD0032 出土遺物実測図(2) (377は1/1、他は1/4)

図)。375はコナラ属アカガシ亜属の鋳着柄部品で、先端は4面を面取りし、体部断面は六角形をなす。全体に丁寧な成形である。376はスギの板材で、木表に幅2~3cmのヤリガンナ加工痕、右側面の3カ所に切痕がみられる。上下端は斜めに面取をして収めている。377は鑿の袋部と想定したが、遺存状態が悪く詳細は不明である。この他、弥生土器、頁岩片、獣骨などがパンコンテナ2箱分出土した。遺物から遺構の時期は弥生時代後期中葉・高三潑式~下大隈式期と考えられ、SD0005下層と同時期である。

SD0033(第57図) J-3・4区で確認した東西軸の溝である。幅2.5m、深さ80cmを測る。西側はSD0029に切れ、東側は調査区外へ延びる。平面では確認できなかったが、調査区西壁土層に同質の溝が確認でき(B-C土層3~10層)、II区SX0066に連続する。埋土は黒灰色粘質土と粗砂の互層である(第57図南壁土層4~10層)。

出土遺物(第58図) 甕(380・381・385)、壺(379・383・388・389)、鉢(384)、高坏(386・

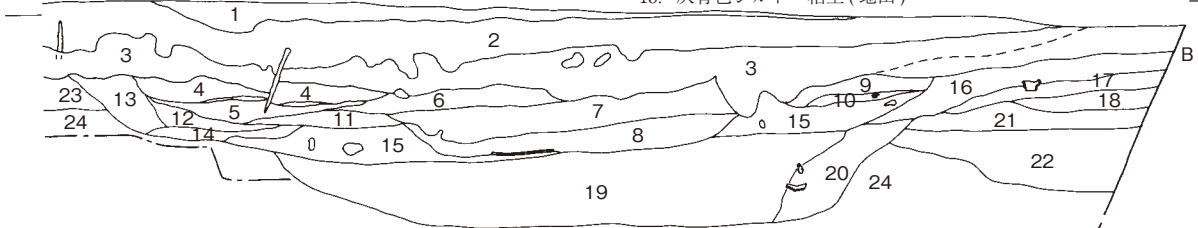


SD0033 調査区南壁土層

- | | |
|-------------------------------------|---------------------------------|
| 1. 淡灰黄砂粘土。粗砂を多く含み、底面が凹凸をなす。 | 8. 暗灰黒粘土。炭・中砂を多く含む。 |
| 2. 灰黄粘砂土。粗砂をあまり含まない。 | 9. 灰褐粘砂土。中砂を含む。 |
| 3. 灰黄粘質土。中砂を含み、黒灰色粘土ブロックを含む | 10. 灰褐中砂。暗灰黒粘土を多く含む。土器片を多く含む。 |
| 4. 黒灰粘土。淡褐粘土の細ブロック・炭含む。4～10層 SD0033 | 11. 暗灰褐砂粘土。径1-3mm白色砂、土器小片を多く含む。 |
| 5. 灰黒シルト。細かい黒色粘土ブロックを含む。 | 12. 淡灰褐シルト。鉄・マンガン多い。土器を含む。 |
| 6. 黒灰粘土。灰黒色の粘土ブロックを細かく含む。 | 13. 灰褐シルト。鉄・マンガン多く含む。しまり強。 |
| 7. 暗灰褐粘土。黒色粘土の細ブロック・中砂・炭含む。 | 14. 黄灰褐シルト。13層より黄味が強い。 |
| | 15. 灰青色シルト～粘土(地山) |

A

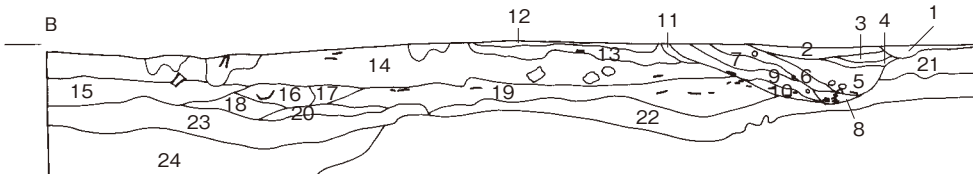
H=5.4m



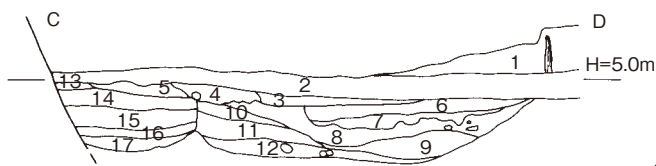
- | | | | |
|-----------------------|------------------------|------------------------|---------------------------|
| 1. 暗褐色粘土 | 2. 灰黄色粗砂 | 10. 9層に黄灰細砂を多く含む。 | 18. 黒褐粘砂土。炭、黄色細砂を多く含む。 |
| 3. 暗灰褐砂粘土。径1-3mm白色砂多い | 11. 灰黄中砂。土器片多い。 | 19. 淡黒色粘質土。炭、鉄分を少なく含む。 | 20. 18層に径2-5cmの地山ブロックを含む。 |
| 4. 暗灰褐色粘砂土。やや砂っばい。 | 12. 黒灰色粘土。炭・鉄分多い。 | 21. 暗褐粘質土。アシ、木を多く含む。 | 22. 黒灰粘土。アシ、木多い |
| 5. 灰黄中砂 | 13. 暗灰褐シルト質。鉄分多い。 | 23. 黄灰褐シルト。13層より黄味が強い。 | 24. 灰青色シルト～粘土(地山) |
| 6. 灰黄褐粗砂。粘土も含む。 | 14. 暗灰粘土。灰青色シルトブロック多い | | |
| 7. 黄灰褐粗砂。帯水層。 | 15. 黒褐粘質土。木質アシ、炭、鉄分多い | | |
| 8. 黒灰粘土、粗砂互層。 | 16. 灰褐砂粘土。白色中～粗砂を多く含む。 | | |
| 9. 黒灰粘質土。鉄分、炭、砂少なく含む | 17. 16層より砂が少ない。 | | |

B

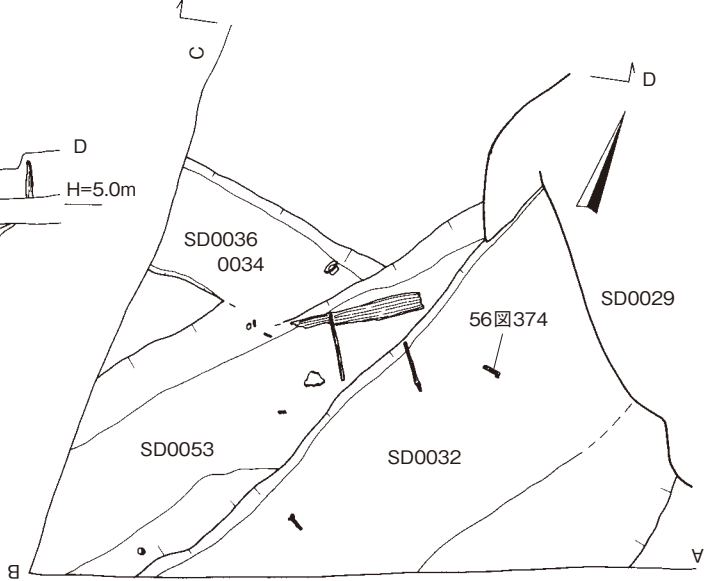
H=5.0m



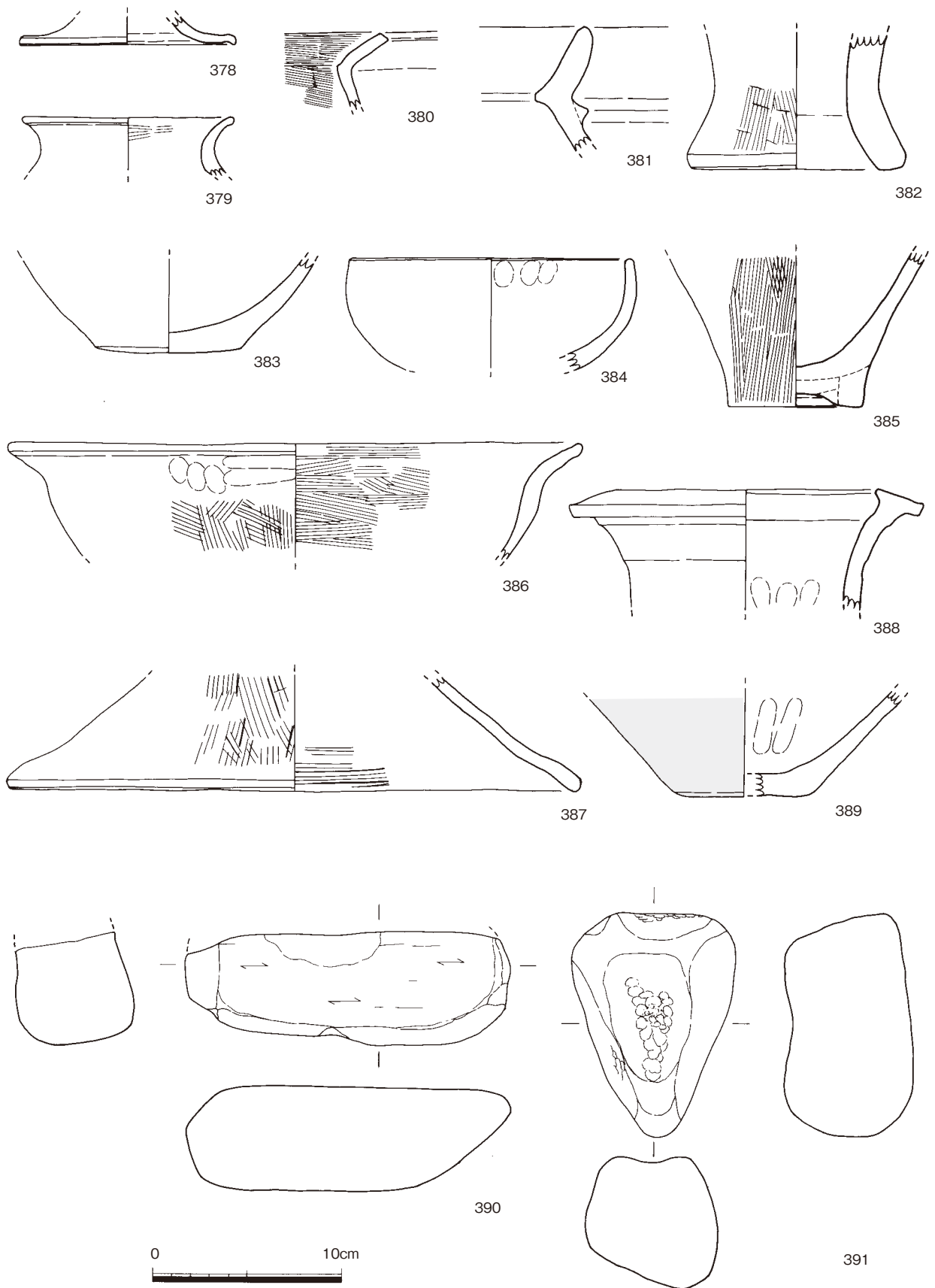
- | | | | | |
|---------------------|---------------------|----------------------|--------------------|--------------------|
| 1. 黒褐色シルト | 2. 灰色細～中砂 | 10. 黄灰色中砂・灰色粘質シルトの混土 | 18. 17層と同質 | 19. 黄灰色中砂 |
| 3. 黄灰色砂 | 4. 黒褐色粘質シルト | 11. 灰色粘質細砂 | 12. 灰色細～中砂 | 20. 黒褐色粘質土。黄灰色砂・炭混 |
| 5. 黄褐色中砂。灰白色・青灰色粘土混 | 6. 黒灰色粘質細砂・黄灰色細砂の互層 | 13. 黄灰色細～中砂 | 14. 灰色砂質粘土 | 21. 薄い黒褐色粘質シルト |
| 7. 黄白・黄灰色細砂 | 8. 黄褐色中砂 | 15. 14層よりやや粘質。炭含む。 | 16. 黄灰色砂。黒褐色砂斑状に含む | 22. 黒灰色粘質シルト。黄灰色砂混 |
| 9. 6層と同質 | | 17. 14層より砂質。黄灰色砂少量混 | | 23. 薄い黒褐色粘質シルト |
| | | | | 24. 黒灰色粘質シルト。地山混 |



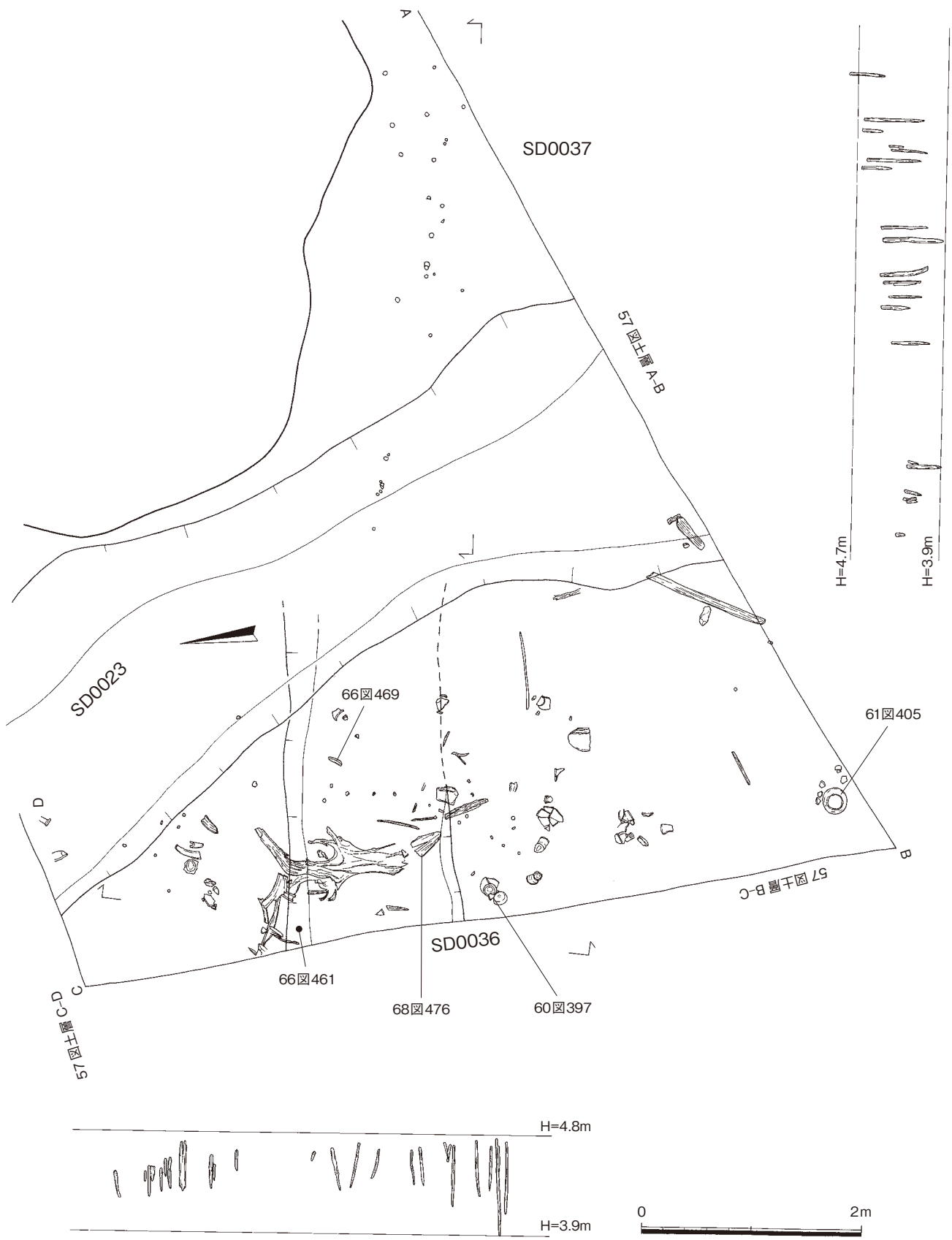
- | | |
|-------------|----------------|
| 1. 灰褐粘砂土 | 9. 黄～灰、中～粗砂互層 |
| 2. 1と同質。炭多い | 10. 暗褐粘砂土 |
| 3. 2と同質。土器少 | 11. 黒灰粘砂土・砂互層 |
| 4. 2に灰黄色細砂混 | 12. 灰～黄、細～粗砂互層 |
| 5. 暗褐粘砂土 | 13. 黒灰粘土 |
| 6. 黒褐粘質土 | 14. 褐色粘砂土 |
| 7. 黄白粗・中砂互層 | 15. 褐色砂粘土 |
| 8. 黒褐粘土。木多い | 16. 暗褐粘土 |
| | 17. 灰黒粘砂土 |



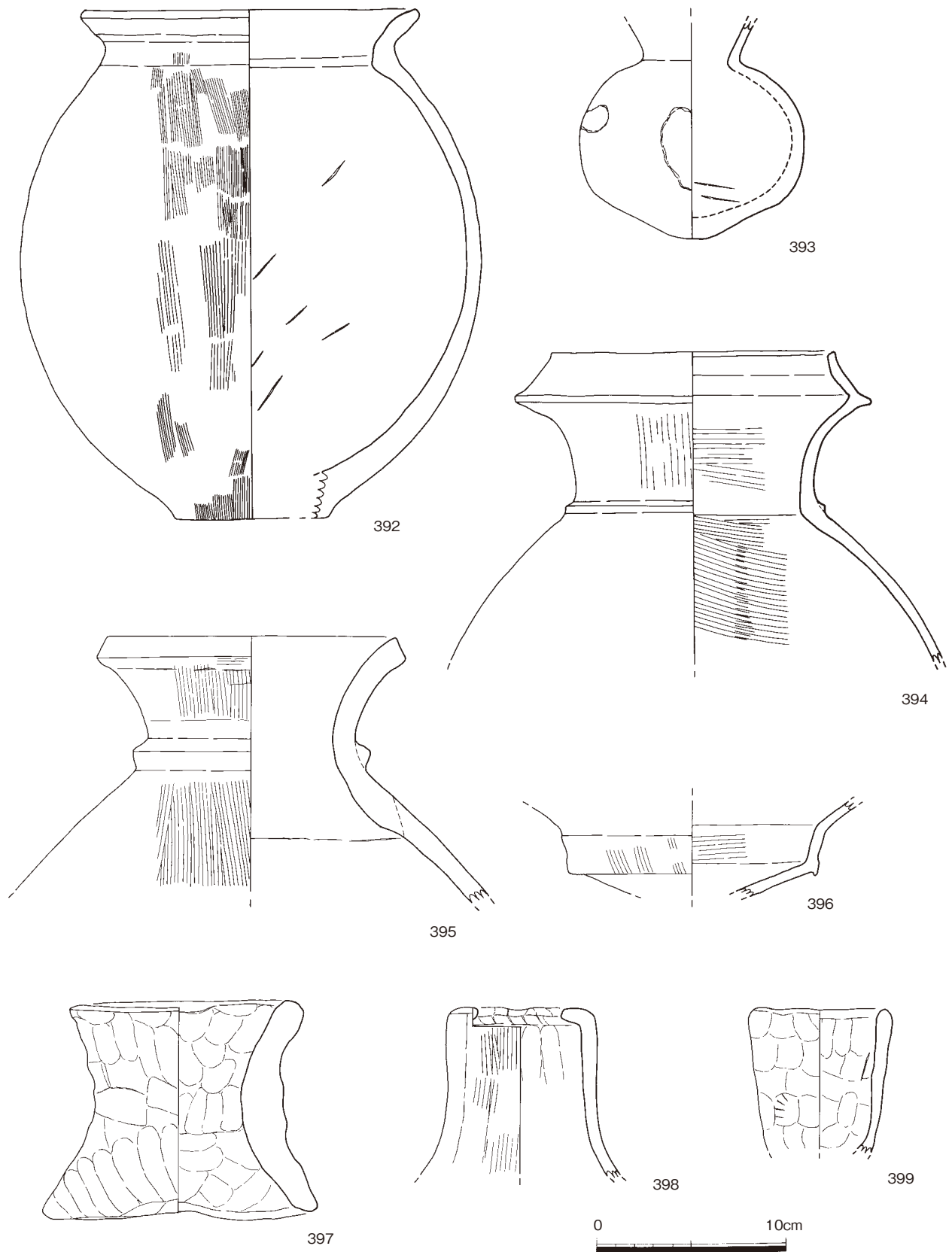
第57図 SD実測図(平面図1/100、土層図1/60)



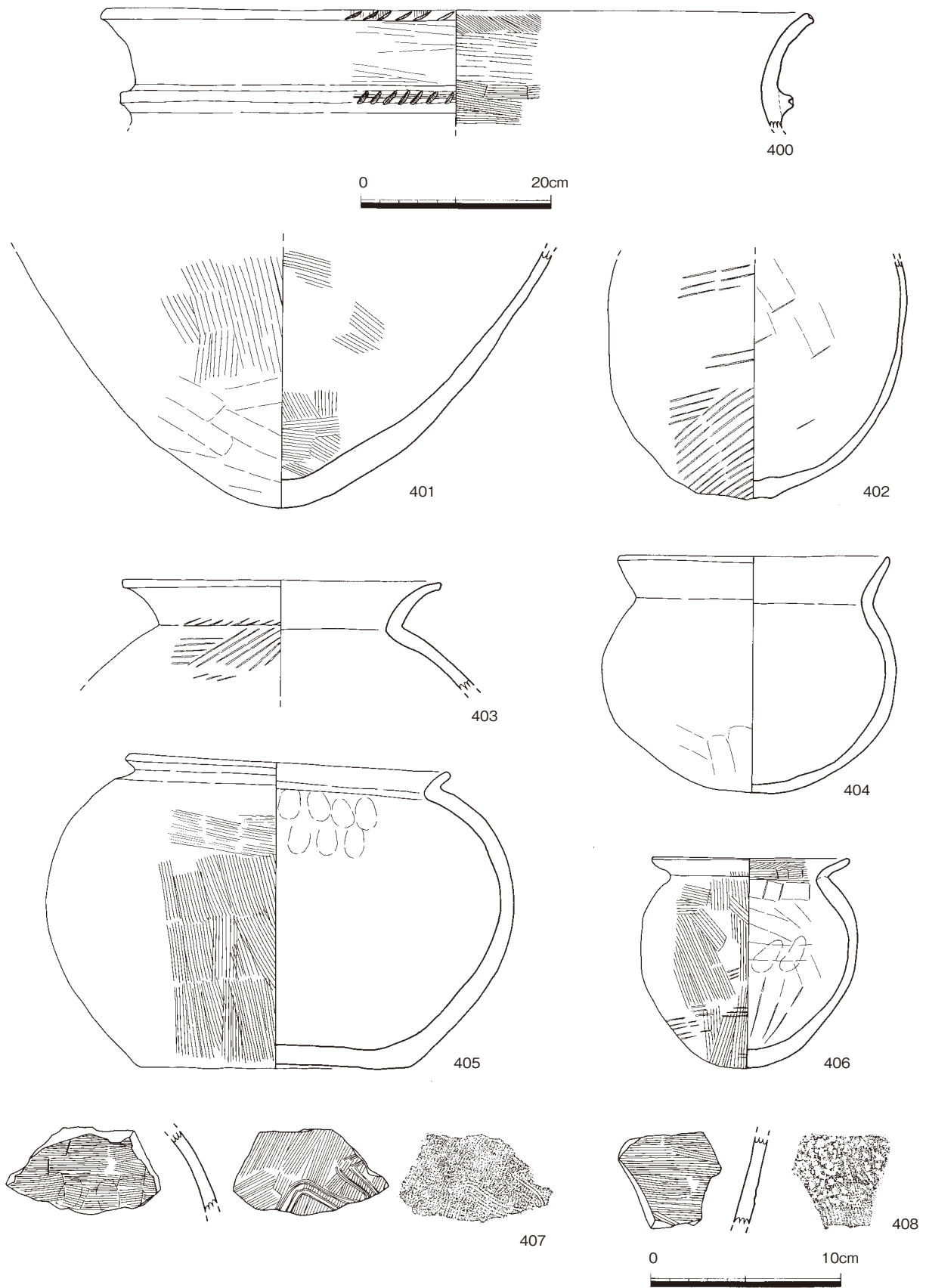
第58図 SD0033 出土遺物実測図(1/3)



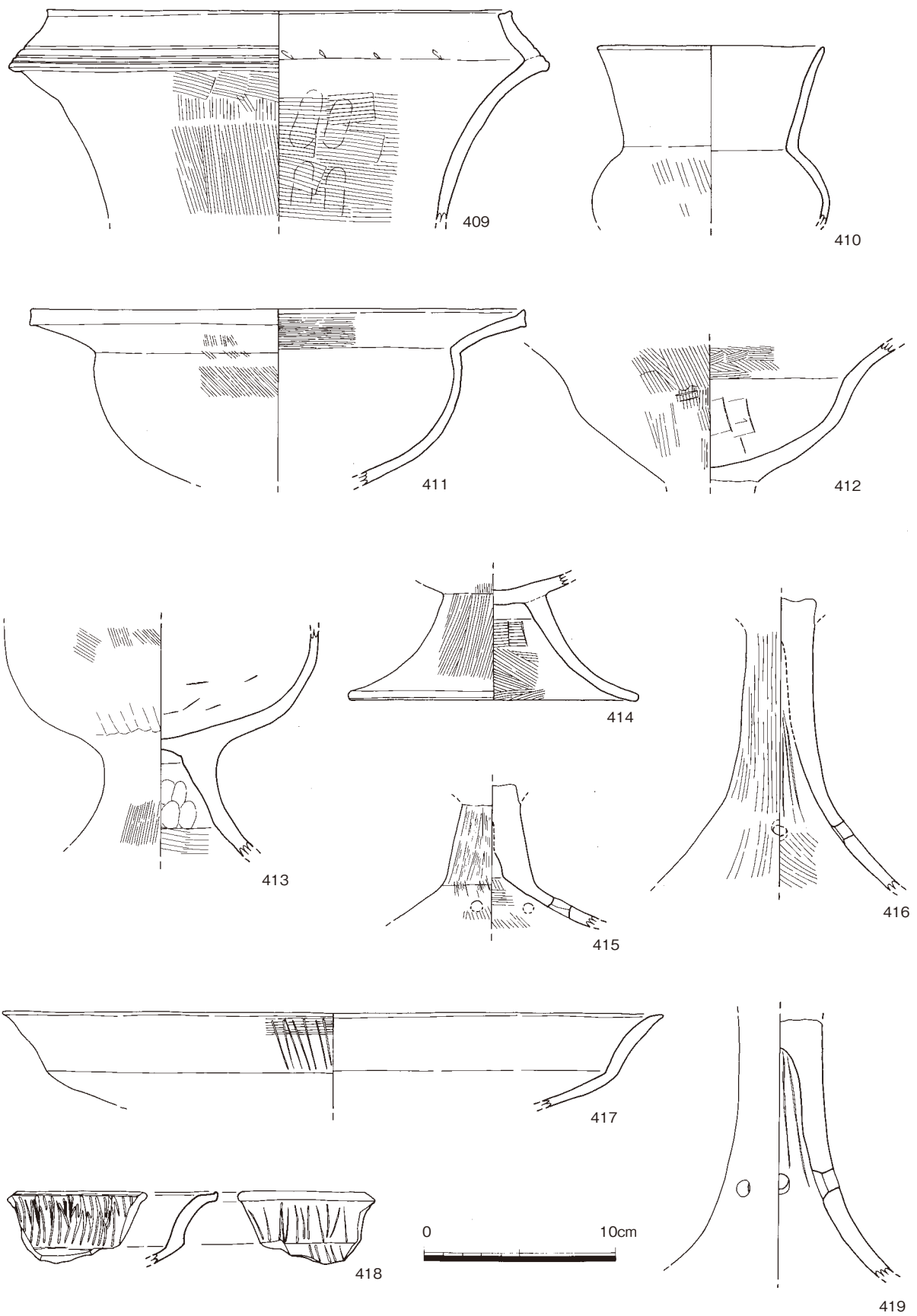
第 59 図 SD0036・0037 杭列実測図 (1/50)



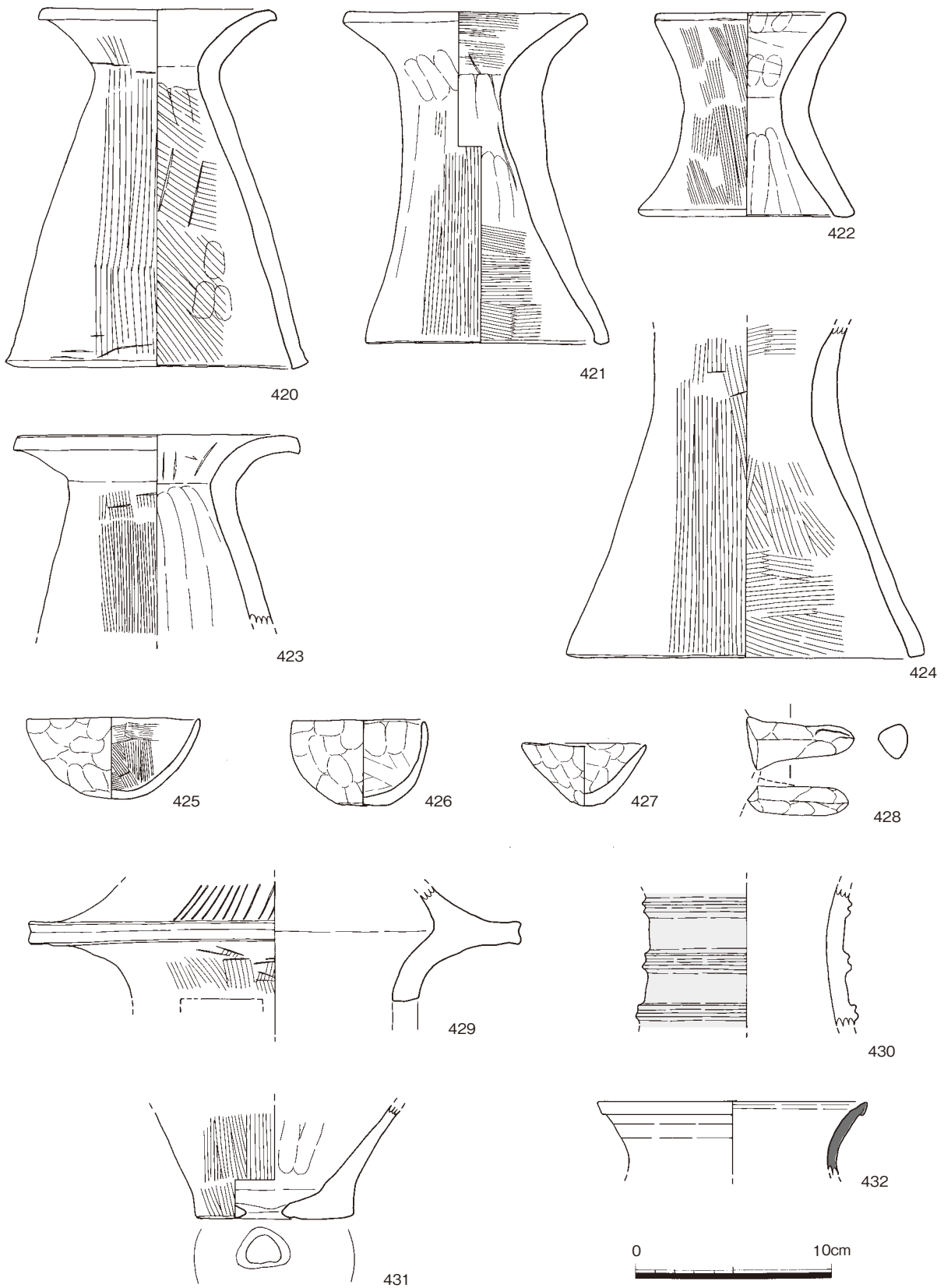
第 60 図 SD0036 出土遺物実測図 (1/3)



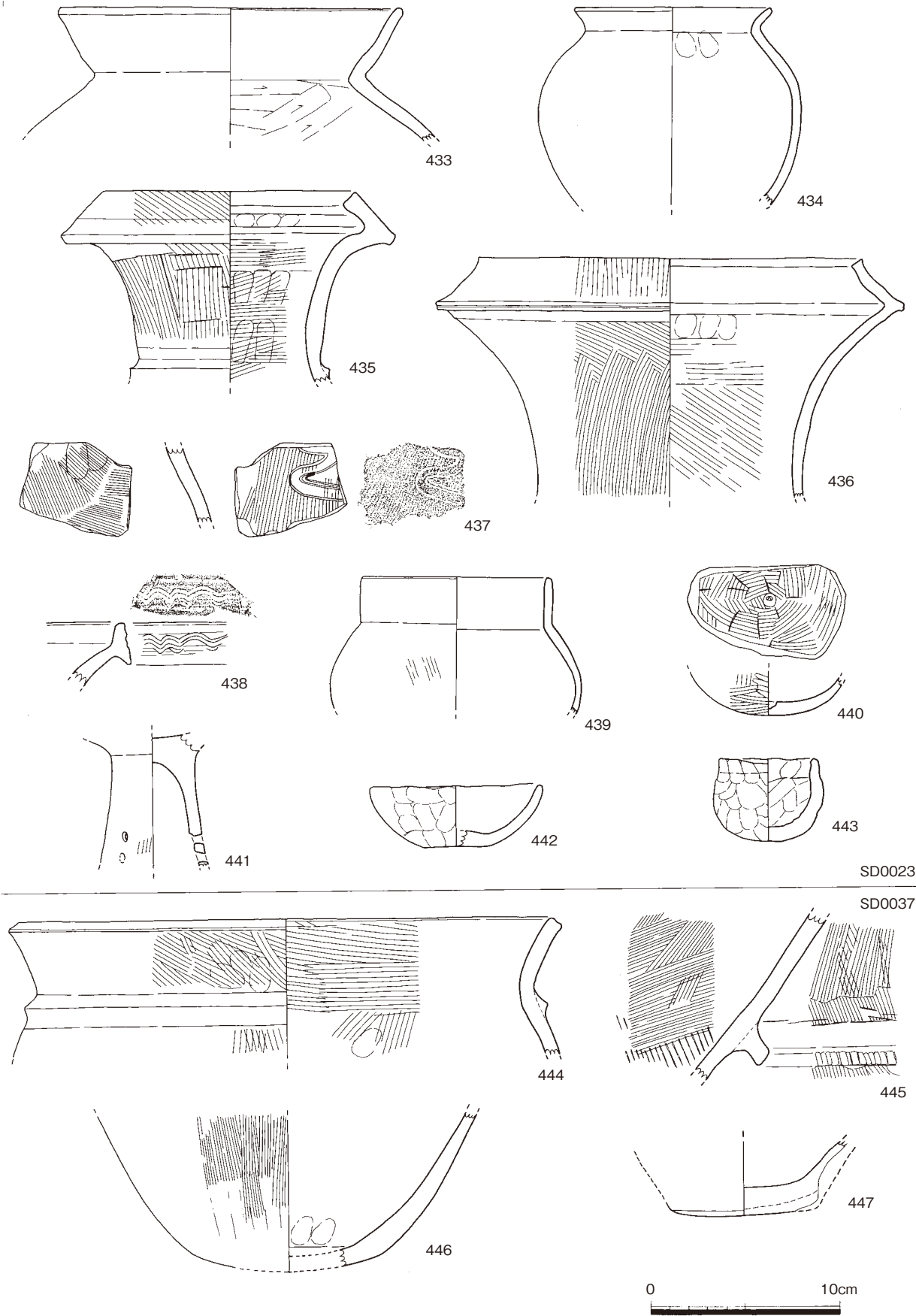
第61図 SD0034 出土遺物実測図(1) (400は1/6、他は1/3)



第62図 SD0034 出土遺物実測図(2) (1/3)

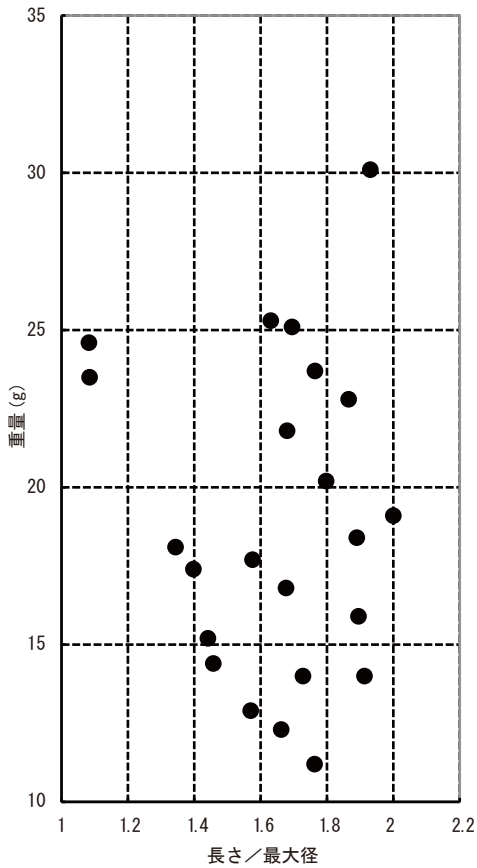


第 63 图 SD0034 出土遺物実測図 (3) (1/3)

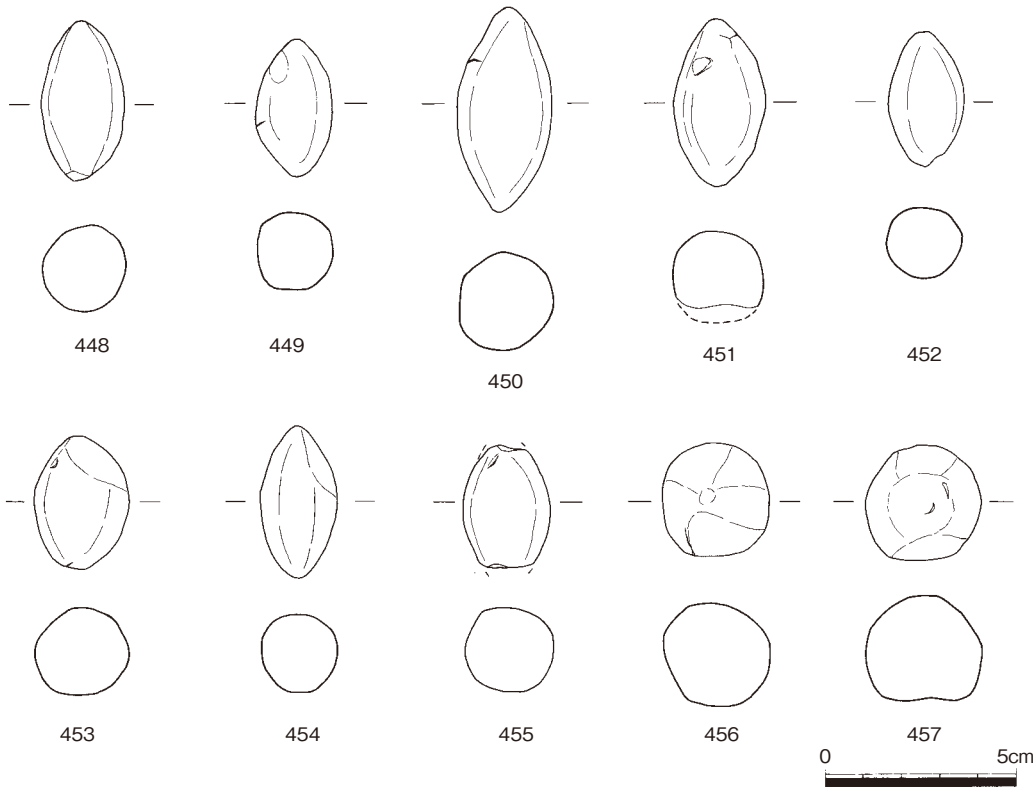


第64図 SD0023・0037出土遺物実測図(1/3)

投弾法量散布図

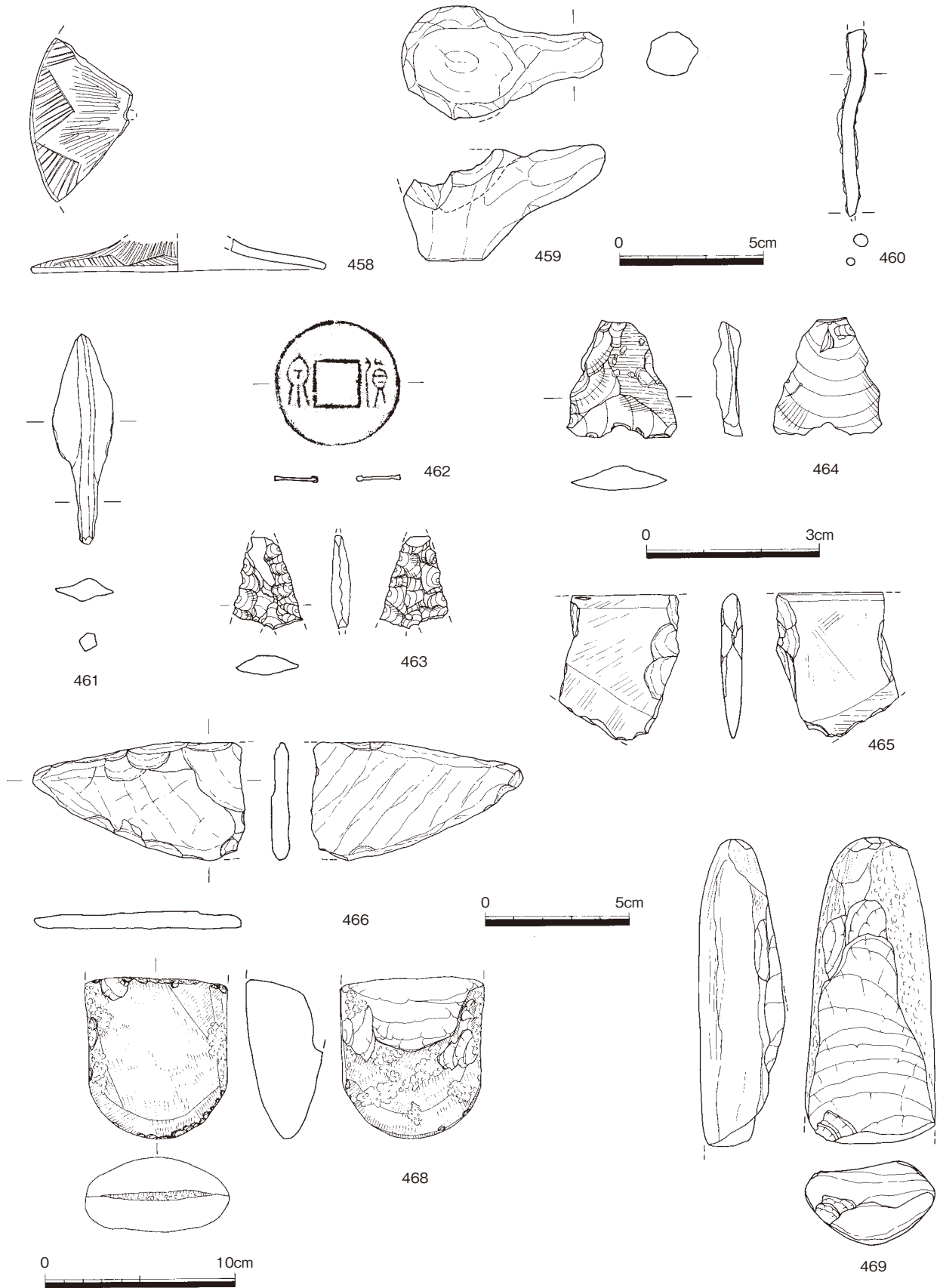


検出面	遺構	挿図番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)
3面	SD0024 (SD0007 西トレンチ A)	448	4.29	2.27	18.4
3面	SD0024 (トレンチ A 南側張出部)	449	3.43	2.38	15.2
3面	SD0012 上層		3.59	2.16	12.3
2面	SD0042 上層1		4.48	2.54	23.7
2面	SD0042 上層2		3.25	2.23	14.4
2面	SX0011	450	5.29	2.74	30.1
2面	SX0013 R-11	451	4.44	2.47	20.2
2面	SD0003 'グリット' 1	452	3.49	1.98	11.2
2面	SD0003 'グリット' 3	453	3.48	2.59	18.1
2面	SD0034 (SD23 西黄色砂層)	454	3.96	2.07	14
2面	SD0034 北区 090226	455	3.27	2.34	17.4
2面	SD0034 北区 090225	456	3.08	2.84	23.5
2面	SD0034 東区	457	3.28	3.03	24.6
2面	SX0066 (SD0002 東)		[4.09]	2.74	[20.5]
2面	SX0066 (SS0059・60 下)		4.57	2.45	22.8
2面	SX0066 (SS0056・57 下)		3.36	2.14	12.9
1面	SD0002		4.15	2.19	15.9
1面	SD0005 上面		4.37	2.68	25.3
1面	SD0029		3.14	1.77	[5.1]
1面	SD0029		4.44	2.62	25.1
1面	SS0057		4.25	2.53	21.8
1面	SS0060		3.87	2.24	14
1面	SX0061 081118		4.48	2.24	19.1
1面	SX0061 081118		3.75	2.38	17.7
1面	調査区南壁		3.94	2.35	16.8



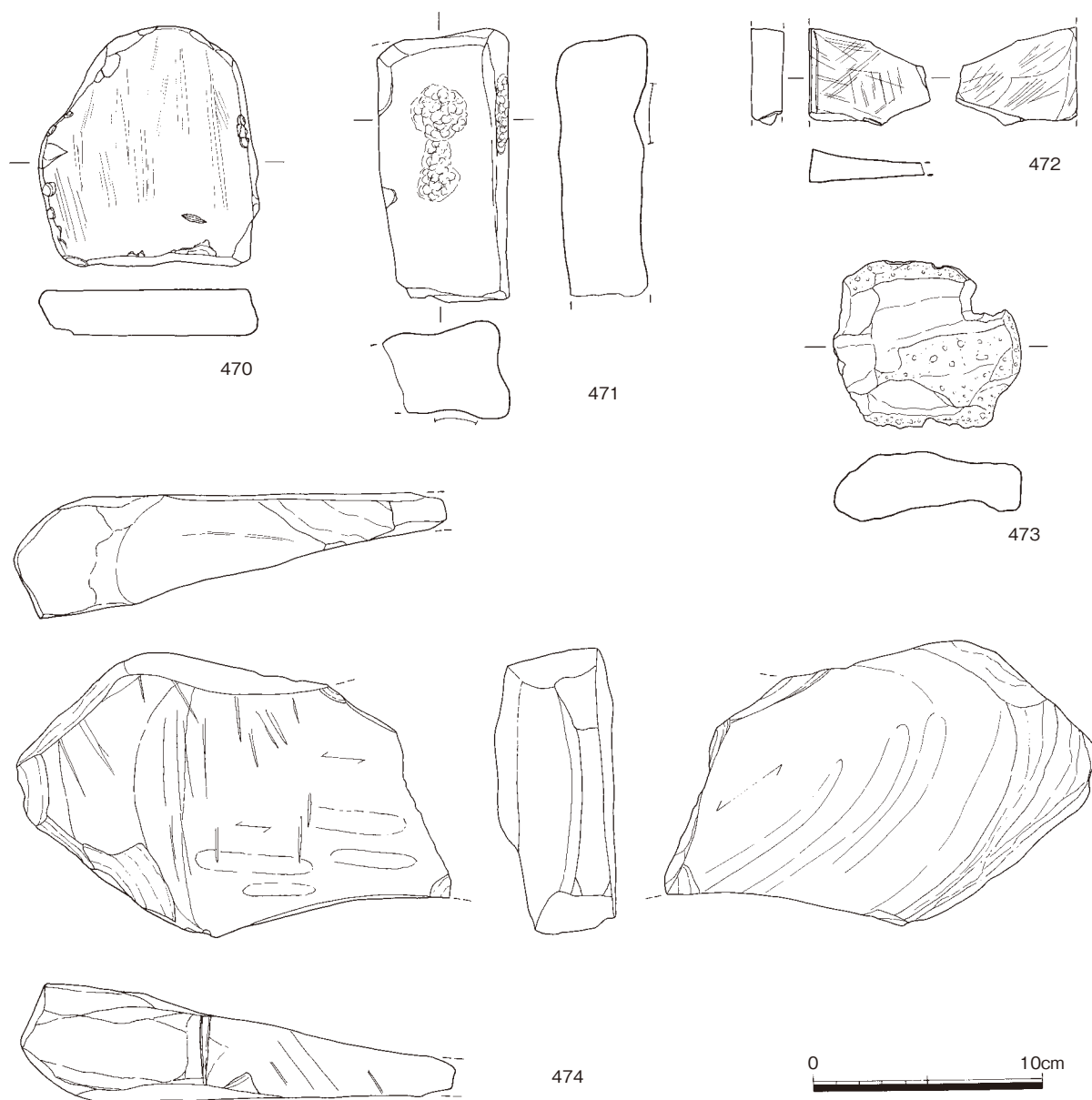
3面：448・449 SD0024 2面：450 SX0011 451 SX0013 452・453 SD0003 454～457 SD0034

第65図 投弾法量散布図および実測図(1/2)



458・459 SD0023 461～463・465・466・469 SD0036 460・464・468 SD0034

第66図 SD0036・0034・0023 出土遺物実測図(461～464は1/1、468・469は1/3、他は1/2)

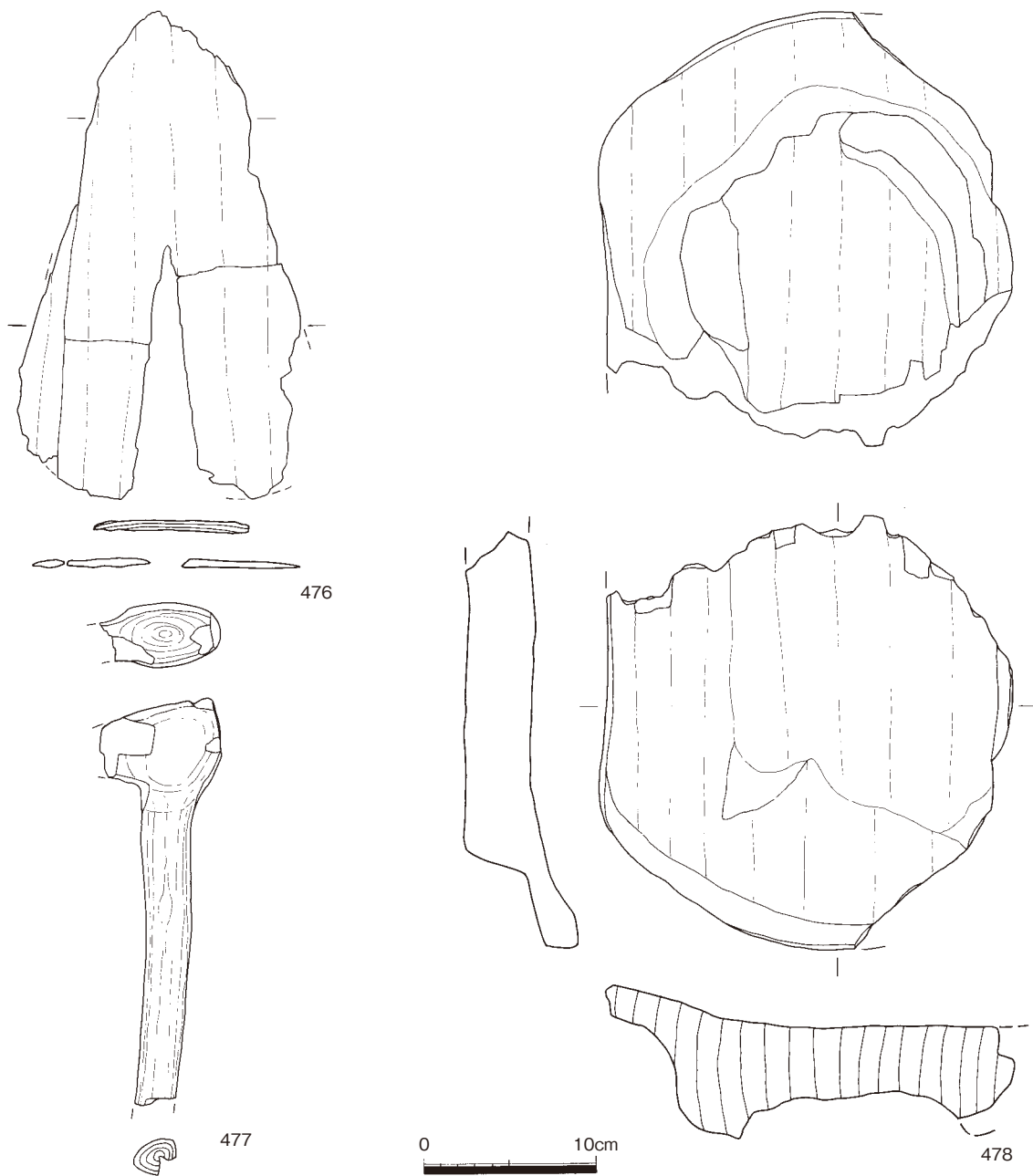


470 SD0034 471 SD0023 472~474 SD0036

第 67 図 SD0036・0034・0023 出土石器実測図 (1/3)

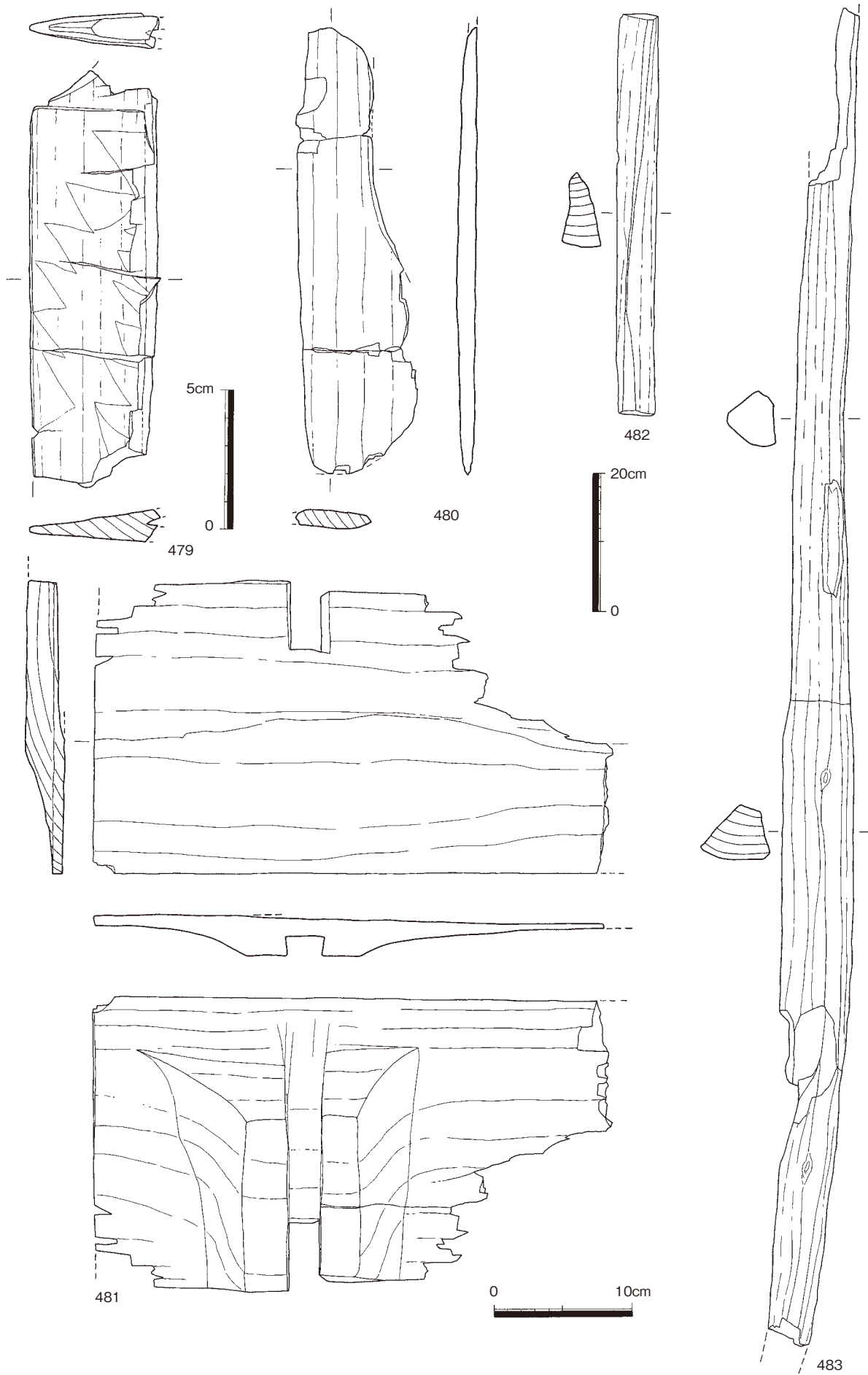
387)、器台 (382) が出土した。380・386 は下層出土で、弥生時代終末期である。その他は、弥生時代中期後半・須玖Ⅱ式土器が含まれる。378 は上層出土の土師器の高坏で 8 世紀前半である。390 は砂岩製砥石、391 は花崗岩製敲石である。この他、弥生土器、頁岩片などがパンコンテナ 1 箱分出土した。溝の掘削時期は下層出土土器から弥生時代終末であり、上層については 8 世紀前半まで埋没しきっていなかったと考える。

SD0023・0037・0034・0036 J-2・3 区では、北西軸の SD0023 を掘削して最下層の粗砂を除去したところで、西側黄色砂層で遺物の集中範囲を検出した。これを SD0034 として、サブトレントを入れながら掘削を進めたが、SD0034 の平面形は把握できなかった。SD0034 の粘土・砂の互層



第68図 SD0036 出土木器実測図(1/4)

状堆積を除去すると、暗色粘土層となったため、これをSD0036とした。SD0036についても平面形を把握することができなかった。SD0036の暗色粘土層を除去すると、黒灰色粘土であるSD0032・0053の平面プランを把握することができ、その北西側で東西軸の流路底面を把握した。一方、SD0023の東側ではSD0037を検出した。翻って調査区南壁(A-B)・西壁(B-C)・北側土層ベルト(C-D)の土層を整理したところ、調査区西壁土層B-Cの3~10層は溝として認識でき、東側のSD0033と断面形・埋土が類似する。掘削時はまったく考慮できなかったが、本来はSD0033がSD0036・0034を切ってここまで延びており、間をSD0023・0029に切られていたと考えておきたい。また、SD0037とSD0023の切り合いは平面では判然としなかったが、南壁土層(A-B土層)によると、SD0037とした溝は上層(4・5層)と下層(12~14層)に分かれ、下層はSD0023に切られるが、



第 69 図 SD0023 出土木器実測図 (479 は 1/2、480・481 は 1/4、他は 1/8)

上層はSD0023上に堆積している。対面するC-D土層をみると、平面で確認できなかったが、SD0023上の6～8層がSD0037上層であった可能性も考えられる。以上より、J-2・3区2面の流路堆積の形成過程を整理すると、SD0053(弥生時代後期前葉)→SD0032(後期中葉)→SD0036(後期末)→SD0034(後期末)→SD0033・0037(後期末)→SD0023(古墳時代初頭)となり、弥生時代後期の複雑な流路形成の状況がうかがえる。

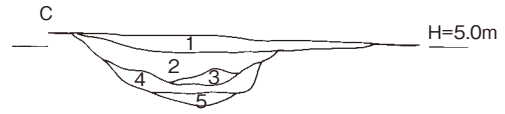
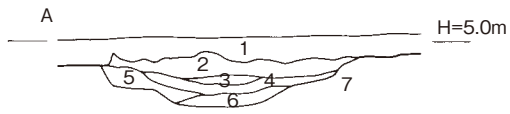
SD0036(第57・59図) J-2・3区で確認した流路状堆積である。東側はSD0023に切られ、西側はⅡ区のSD0078、Ⅲ区のSD0752上層に連続する。深さ40～50cmを測り、平面形が判然としないため幅などの規模は不明である。覆土は黒褐色～灰褐色砂質粘土である(A-B土層15～18層、B-C土層22層)。上にSD0034が、下にSD0032が堆積する。覆土を除去すると最下面で東西方向の底面を確認した。また、南北方向の杭列と、それに直交する位置関係でSD0037へ伸びる東西方向の杭列を検出した(第59図)。杭はSD0037部分も含めて42点を取り上げた。径1.5～5cmの小型丸杭(32点、76.2%)、径5.5～6.5cmの中型丸杭(3点、7.1%)、幅1.5～4.5cm・厚さ1.5～4.5cmの小型割杭(7点、16.7%)から構成される。小型割杭2点の樹種は、サクラ属・スダジイであった。なお、この杭列についてはSD0037・0023・0034覆土下に検出したため、弥生時代流路に伴うものと考えられる。1面検出の水田区画に関わる杭列A～Dとは、列の方向や、大型杭が使用されていない点などが異なっている。

出土遺物(第60・66～68図) 甕(392)・長頸壺(393)・二重口縁壺(394)・壺(395)・高坏(396)・器台(397)・支脚(398)・蛸壺(399)、銅鏃(461)、貨泉(462)、黒曜石製打製石鏃(463)・石庖丁(465)・石庖丁未成品(466)・太形蛤刃石斧(469)・砥石(472・474)・軽石製浮子(473)、板状木製品(476)・斧柄(477)・脚付台(478)が出土した。397は粗い作りで、西新式である。461は標高4.68mから出土した(第59図)。462はSD0036・0023の境界付近から出土した。縁は断面三角形を呈す。469は玄武岩製の今山型石斧で、中央北寄りから出土した(第59図)。476はコナラ属アカガシ亜属の板状木製品である。板目取りであり、器種は不明である。477はサカキの横斧柄で、斧台部と握り部が欠損する。斧台部幅は残存部で2.3cmを測り、1～1.5cmほどの小型鉄斧が装着されたと考えられる。478は、復元径が30cm近い、スギ材の脚付台である。粗い成形で止まっており、未成品の可能性もある。この他、弥生土器、少量の土師器・須恵器、頁岩・砂岩・凝灰岩・玄武岩片、獣骨がパンコンテナ20箱分出土した。遺物から遺構の時期は弥生時代後期終末である。

SD0034(第57図) J-2・3区で確認した流路状堆積である。SD0036と同様に東側はSD0023に切られ、西側はⅡ区のSD0078に、南側はⅢ区のSD0752上層に連続する。平面形を把握できなかったため幅等の規模は不明で、深さは30cmを測る。覆土は粘土・砂の互層、黄褐色細～中砂である(A-B土層9・10層、B-C土層16～20層)。SD0023西で遺物が集中していた(図版25-5)。SD0023・0034・0036は流路状堆積の重複という性格から層境の遺物については明確に分けることができず、層位取上において相互の混在を否定できない。

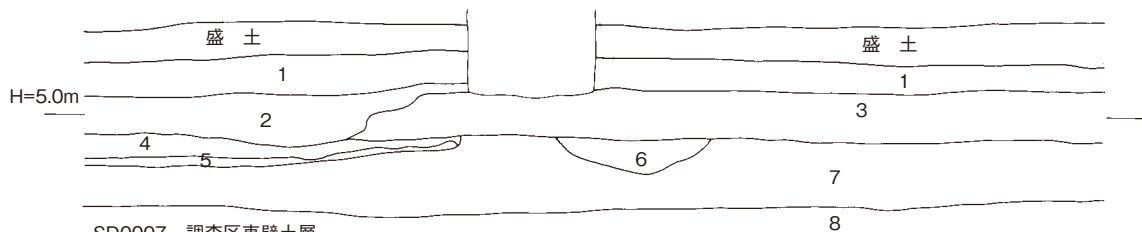
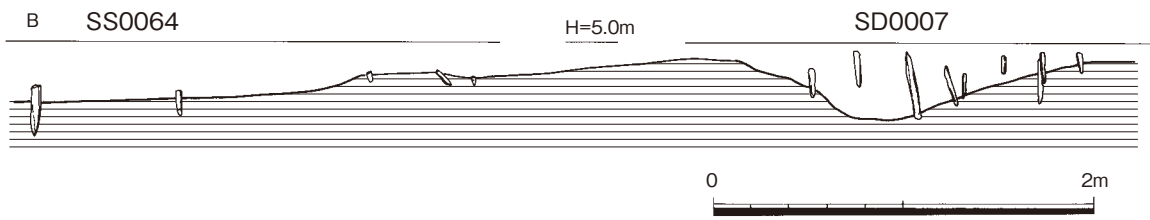
出土遺物(第61～63・66～68図) 甕(400～404・406～408・431)、壺(405・409・410)、高坏(411～419)、器台(420～424)、ミニチュア鉢(425～427)、匙形土製品(428)、筒形器台(429)、丹塗壺(430)、須恵器甕(432)、投弾(454～457)、鉄釘(460)、打製石鏃未成品(464)・太形蛤刃石斧(468)・砥石(470)が出土した。402・403は外面にタタキ痕を残す。405は大きな平底の無頸壺で、形態は特殊と言えるが、胎土・調整は他の土器と変わらない。SD0034下面で出土しており、

SD0007



1. 暗褐色粘土。粗・中砂、炭多く、しまり弱い。SX0061
2. 灰褐色粘土。炭含む
3. 灰褐色粘土。炭、淡黄色細砂含む
4. 灰褐色粘土。淡黄色細砂多い
5. 灰褐色粘土。細砂・炭少ない。しまり強い
6. 淡黄色中砂
7. 灰褐色粘土。径1mm以下炭をわずかに含む。SX0066

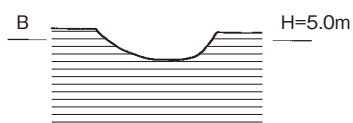
1. 黒灰褐色粘土。炭含む
2. 灰褐色粘土。径1-3mm炭、細砂含む
3. 淡橙色中砂
4. 黄白色細砂。炭をわずかに含む
5. 淡黄色中砂
6. 灰褐色粘土。SX0066



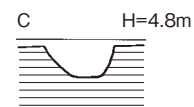
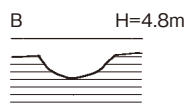
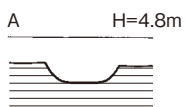
SD0007 調査区東壁土層

1. 灰褐～灰白色・粗～中砂互層
2. 黒灰色粘土、黄・灰白色中砂、淡褐色粘砂土ブロック含む
3. 淡褐色粘砂土。SX0061
4. 灰・黄白中砂層。ラミナをなす。
5. 淡黒色粘土。炭を含む。SS0064
6. 灰褐色粘砂土。SD0007
7. 灰褐色シルト。SX0066
8. 灰青色シルト～粘土（地山）

SD0010



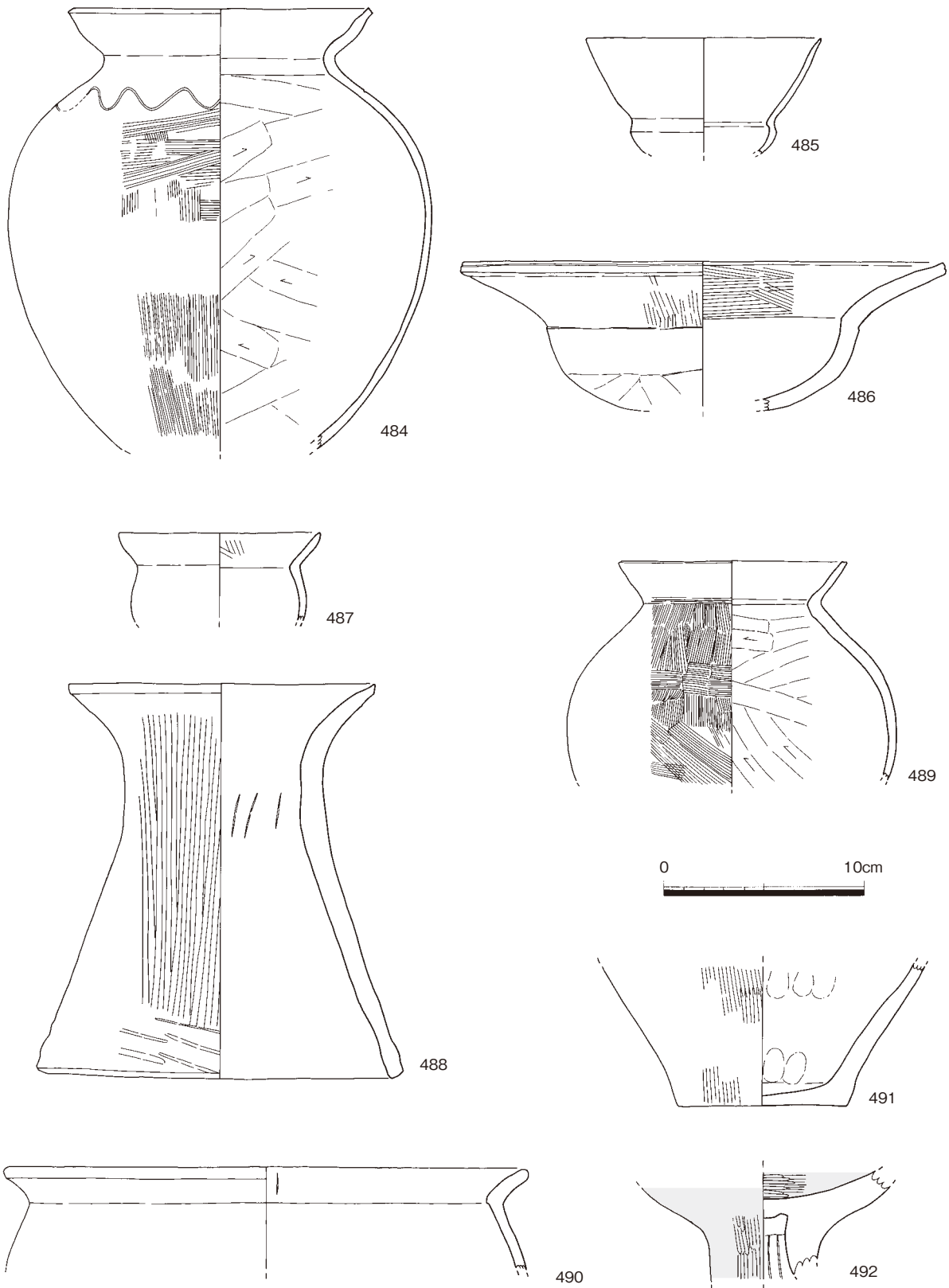
SD0051



※各平面図は第31図

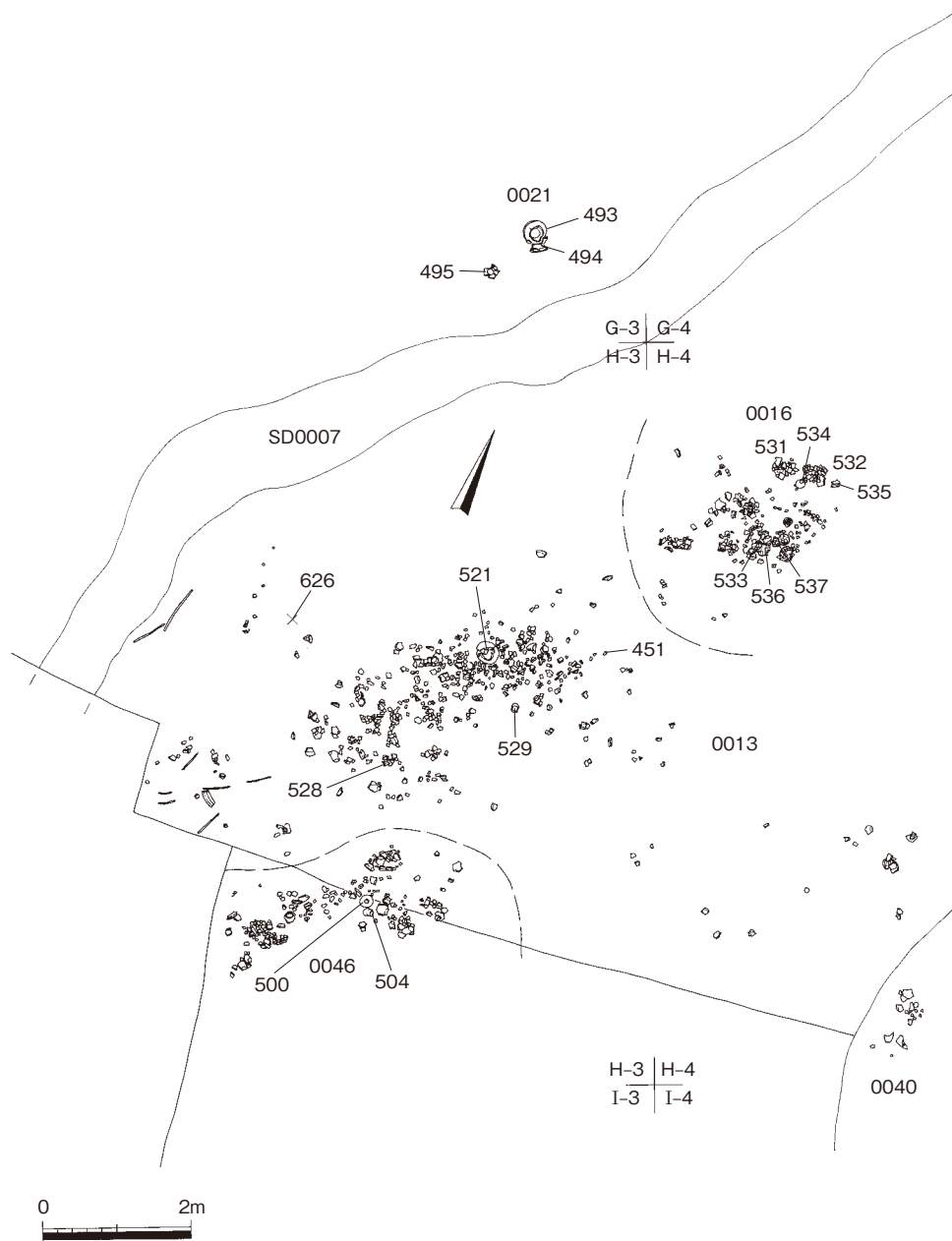


第70図 SD0007・0010・0051実測図（調査区土層図は1/60、他は1/40）



484~486 SD0007 487・488 SD0010 489 SS0064 490~492 SD0051

第71図 SD0007・0010・0051・SS0064出土遺物実測図(1/3)



第72図 SX土器群実測図(1) (1/100)



第73図 SX土器群実測図(2) (1/100)

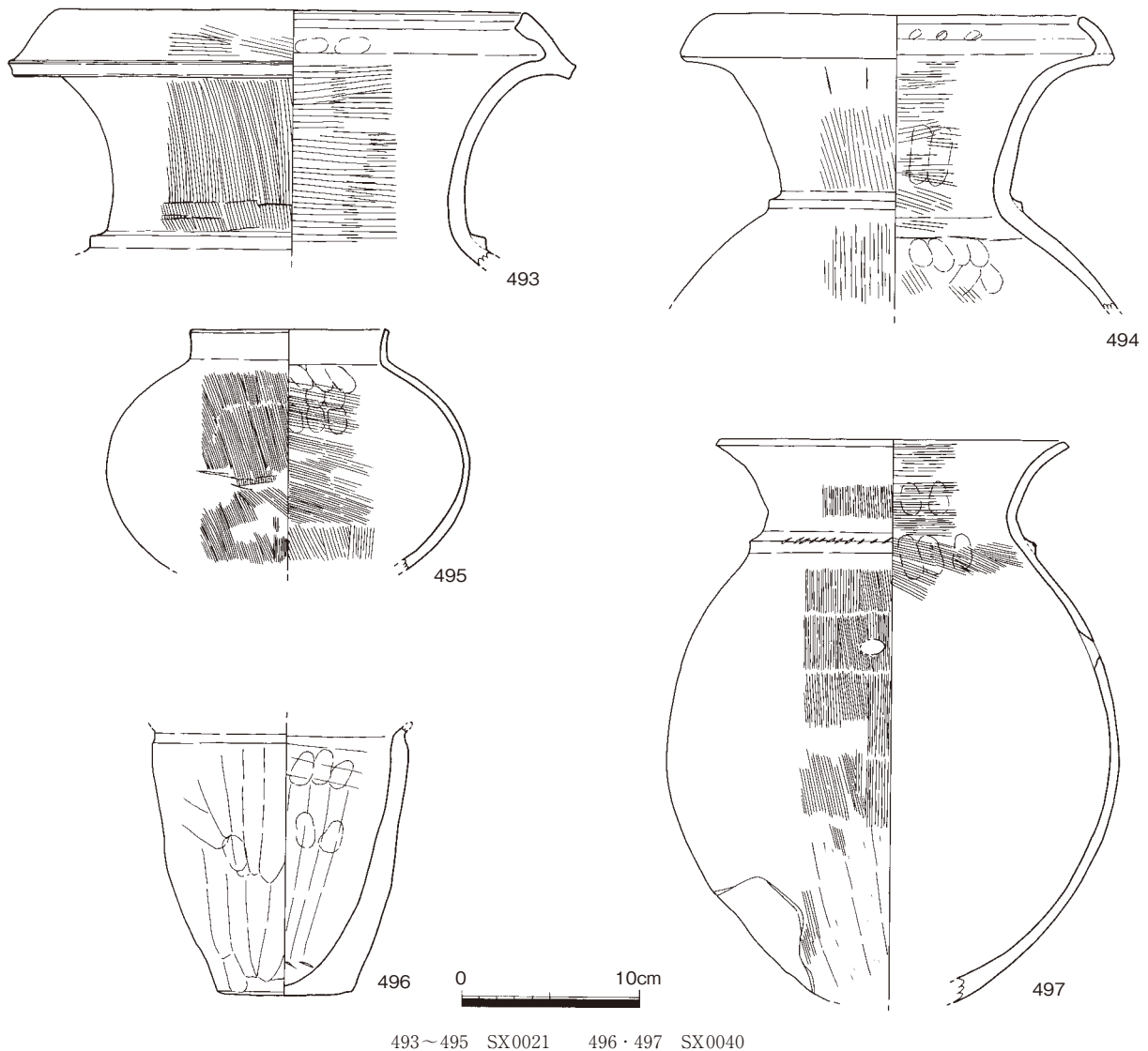
下層のSD0036に帰属する可能性もある。431は焼成後底部穿孔が施される。407は小片で器種不明であるが、甕もしくは壺の肩部付近として図化した。2条沈線で曲線模様が描かれる。SD0023出土の437とは接合しないが、胎土・調整および絵文様の描き方が類似する。408は小片のため器種不明である。外面に格子目タタキ、内面にハケメが残る。409は口縁部外面に3条の沈線が施される。412はSD0023出土破片と接合した。417は口縁部外面に細かい鋸歯状の暗文が施される。418は外面を黒色化させ、口縁部内外面と胴部外面に大ぶりの鋸歯状暗文が施される。SD0023から同一個体と思われる土器片が出土している。423はSD0034東区で取り上げ、SD0034南区取り上げ破片と接合した。432は上層に属する遺物と考える。468は刃端部に潰れ痕がみられ、敲打具や楔に転用されている。

403・431・410・413・415・416・420・421はSD0023西黄色砂層、414・419・422・425・428・407・432・430はSD0034北区、402・409・406・417・424・426はSD0034南区、408・401・400・404・412・411・423はSD0034東区、405・427・429・460はSD0036上層で取り上げている。この他、弥生土器、少量の須恵器、頁岩・砂岩・玄武岩・凝灰岩片、獣骨などパンコンテナ9箱分が出土した。遺物から遺構の時期は弥生時代後期終末と考える。

投弾（第65図） I区では25点の投弾が出土した。出土遺構は異なるが、ここでまとめて報告を行う。出土投弾の法量傾向を示したのが左上の散布図である。X軸が長さ／最大径で、値が1に近いほど球形で、2に近いほど細長い。Y軸が重量で、投弾の大小を示す。形状は長さ／最大径が1.1の球形と、1.3～2の紡錘形に分かれ、紡錘形には11～30gの間で大中小の差がみられると概略できる。3面出土を2点（448・449）、2面出土を8点（450～457）図化した。456・457はSD0034出土で球形をなす。451はSX0013土器集中箇所縁辺から出土した（第72図）。この他、1面出土の11点は、本来は下層の弥生時代遺構に伴うものと考えられる。

SD0023（第57・59図） I・J-3区で確認した北西軸の溝である。幅1.7～2.7m、深さ45cmを測る。南側は調査区外へ延び、北側はII区のSD0067と連続する。埋土は細～粗砂である（A-B土層6～8層、C-D土層9～12層）。SD0034・0036を切る。

出土遺物（第64・66・67・69図） 甕（433）、短頸壺（434）、二重口縁壺（435・436）、直口壺（439）、鉢（440）、高坏（441）、ミニチュア鉢（442・443）、絵文土器（437）、外来系土器の壺（438）、線刻土製品（458）、匙形土製品（459）、敲石（471）が出土した。434は胎土に1辺7mmほどの珪化木を含む。437は小片で器種不明であるが、壺の肩部付近として図化した。2条沈線で曲線模様が描かれる。SD0034出土407に類似する。438は、胎土に雲母を含み、色調はにぶい黄色を呈す。440は底内面に径7mmの軸痕が残る。441は脚部に縦位2穿孔が3カ所に施されていたと考えられる。458は外面をタテミガキで丁寧に調整し、裾に三角形集線文を沈線で描く。器種不明であるが復元中心から1.7cm外側に穿孔がみられるため、蓋としておきたい。459は底が平坦で、口縁部は打ち欠かれる。471は凝灰岩製の3面に凹みをもつ敲石である。木器は、有文布巻具（479）・鋏（480）・机天板（481）・分割材（482・483）が出土した。479はサカキの布巻具端部片で、断面形は三角形で、雄部品差し込み用の切り込みが入る。前面に緩く弧をなす二重の鋸歯文が非常に細く浅い沈線で描かれる。全面が炭化している。480は鋏の肩の形状を残すが、柄孔や刃部が判然としない。481は表面に加工痕、キズ等認められない。裏面の脚板差込部に成形時の刃物痕が残る。木取りは板目で、表面が芯側となる。482・483はコナラ属アカガシ亜属の建築材用割材で、同一個体の可能性



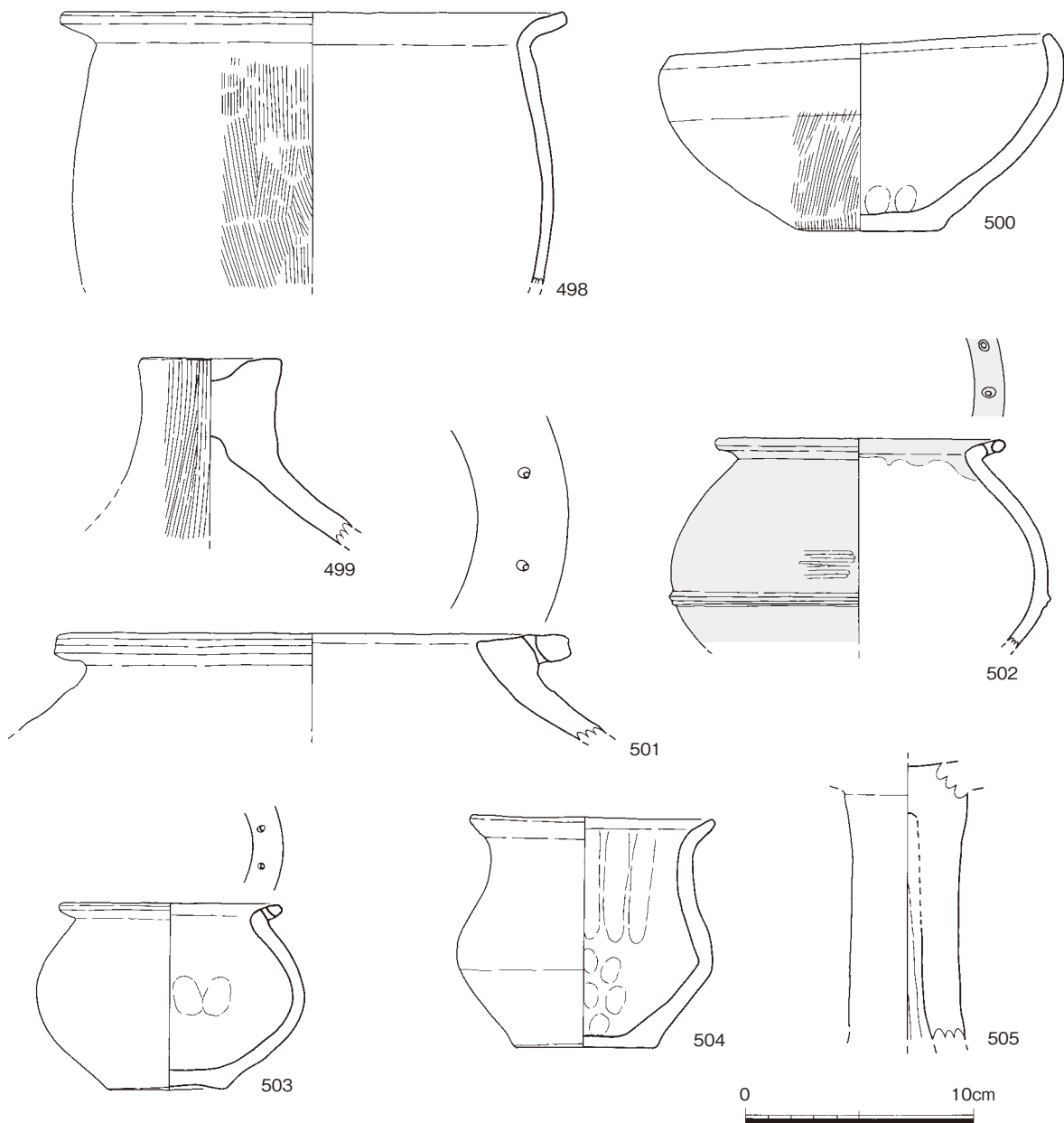
493~495 SX0021 496・497 SX0040

第74図 SX0021・0040 出土遺物実測図(1/4)

がある。この他、弥生土器、少量の須恵器、砂岩片、獣骨などがパンコンテナ 22 箱分出土した。遺物から遺構の時期は弥生時代後期終末～古墳時代初頭と考える。

SD0037(第57図) J-3区で確認した南北軸の溝である。南側は調査区外へ延び、北側はSD0029に切られる。平面形は判然としないが、調査区南壁土層で幅2.5m、深さ45cmを測る。埋土は粘質土と砂の互層で、有機物を多く含む(A-B土層4・5・12~14層)。杭列を伴い、それに有機物が引っかかったような堆積である。杭列はSD0036方向へ延びている。東側は溝の傾斜に合わせて杭下端のレベルも傾斜する。垂直に打ち込まれ、長短の杭が混在する。平面では確認できなかったが、A-B土層からSD0036(15層)→SD0037下層(12~14層)→SD0023(6~8・11層)→SD0037上層(4・5層)という切り合いを想定できる。

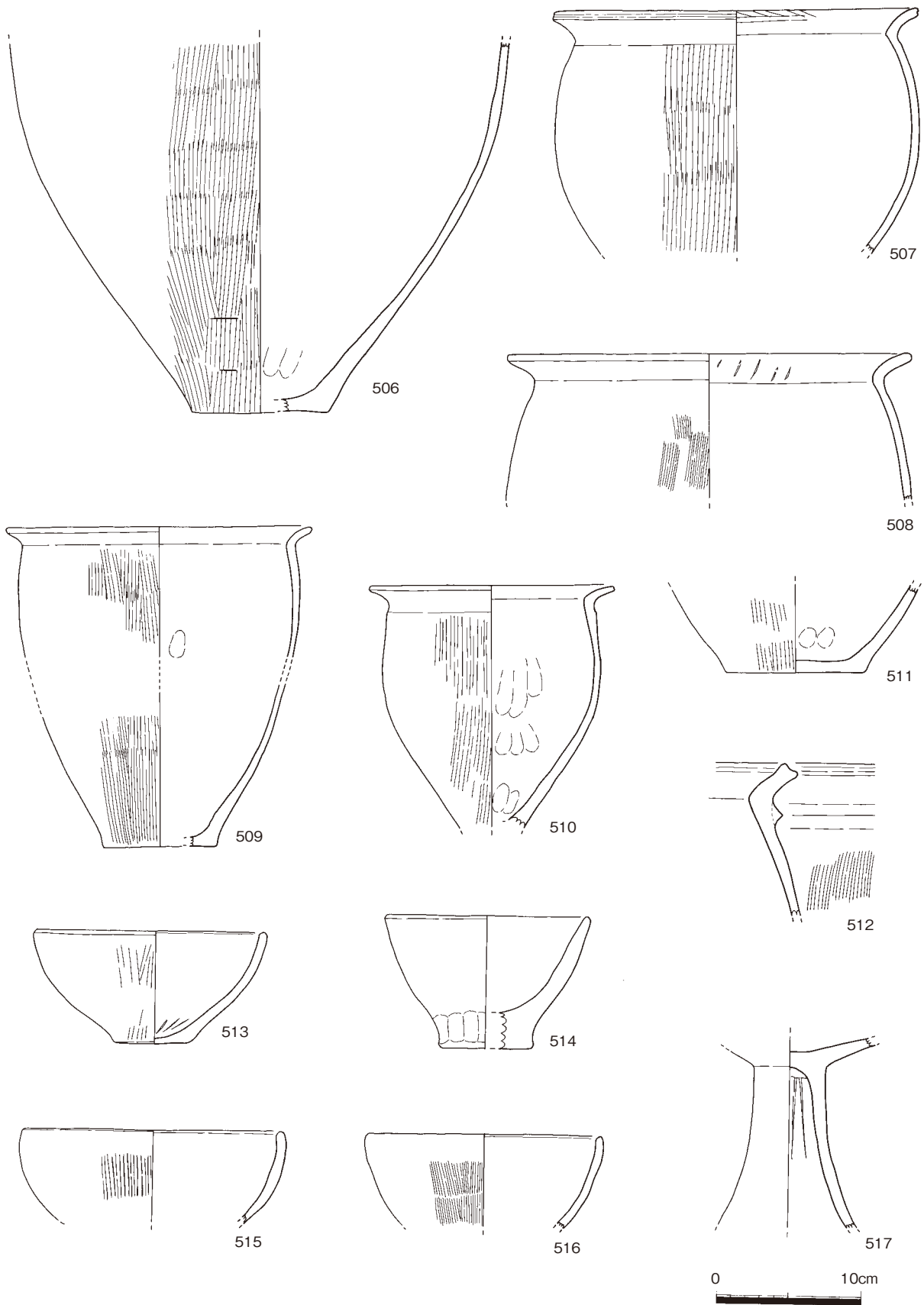
出土遺物(第64図) 甕(444・446・447)、壺(445)が出土した。この他、弥生土器がパンコンテナ半箱分出土した。時期は弥生時代後期終末である。上層についてはSD0023より新しい層位であるが、古墳時代の遺物は確認できなかった。



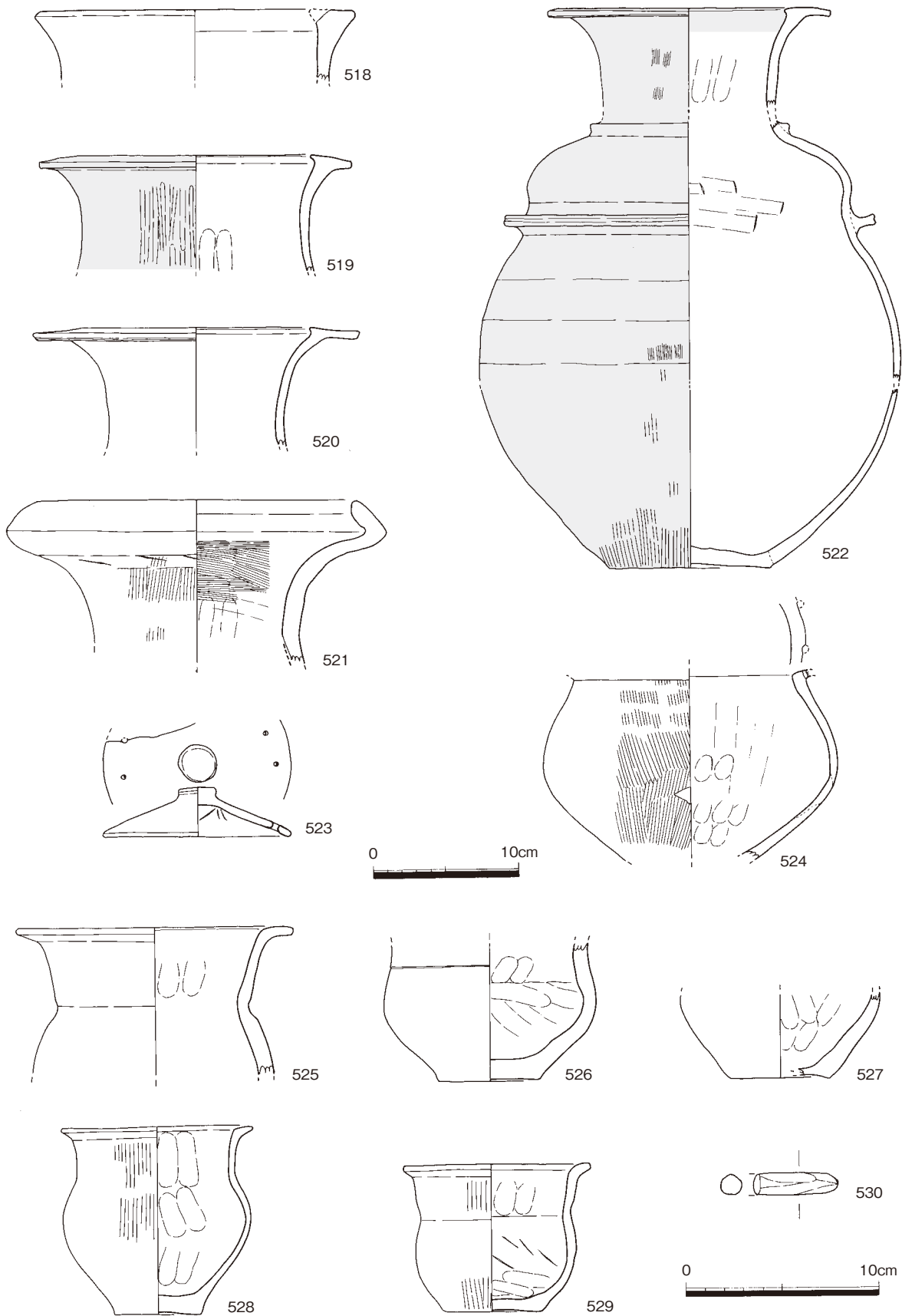
第75図 SX0046 出土遺物実測図(1/3)

SD0007 (第70図) F~H-3~5区で確認した北東軸の蛇行する溝である。断面形は緩やかなU字形で、幅1.5~2m、深さ25~35cmを測る。横断する杭列を伴い、北東方向へわずかに傾斜する。埋土は、下層から青灰色砂・黄色細砂・灰褐色粘土(炭混)・黒色粘土の順で堆積する。SX0061下で検出し、SD0010に切れ、SX0011を切る。横断する杭列が北側のSS0064に連続しており、関連が想定できる。杭は小型の丸杭・割杭で構成され、径2.5~4.5cmの小型丸杭4点、幅4cm・厚さ2cmの半割杭1点を取り上げた。半割杭の樹種はツブラジイであった。

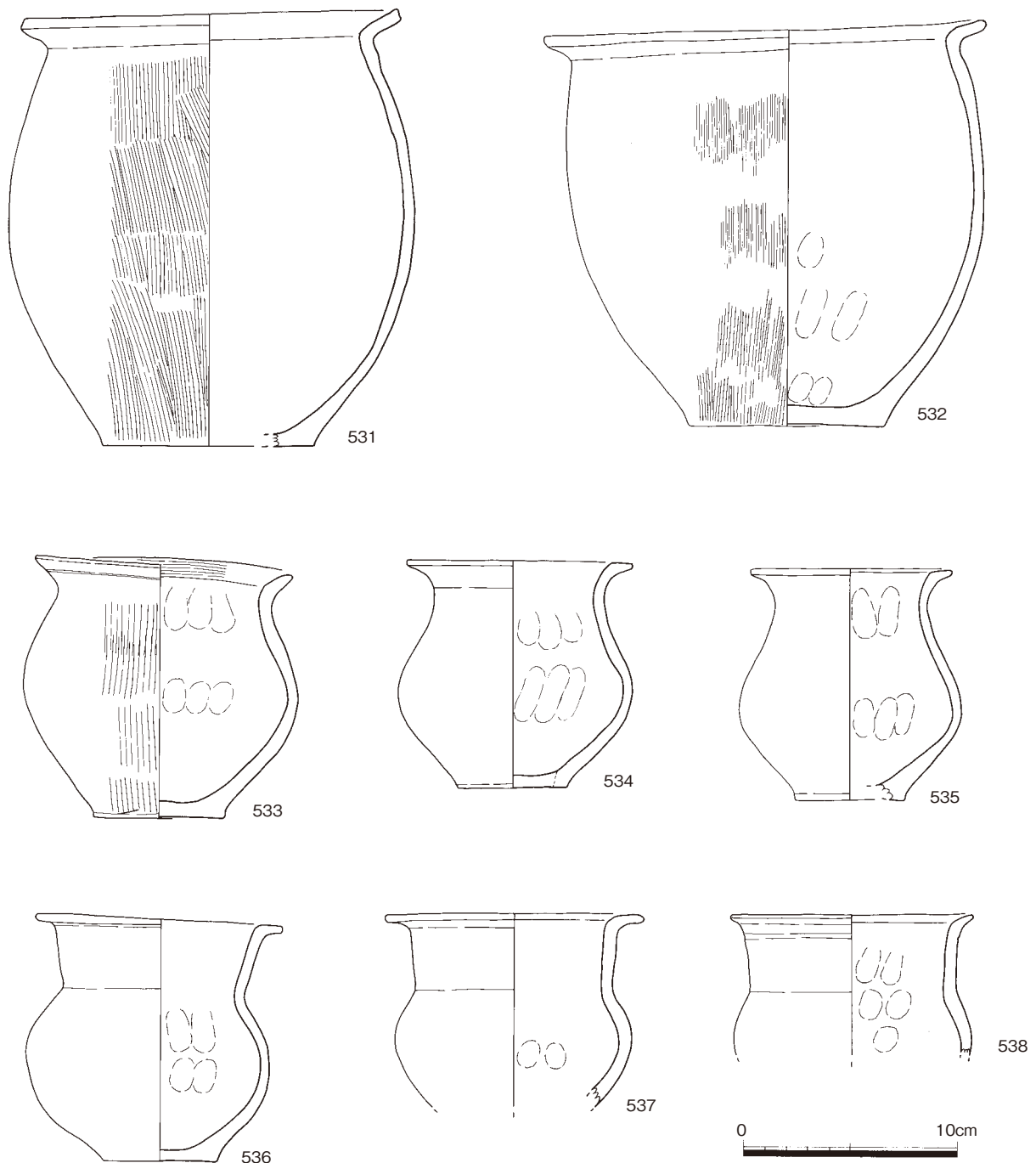
出土遺物(第71図) 甕(484)・高坏(486)・小型丸底壺(485)が出土した。この他、弥生~古墳時代の土器・土師器などがパンコンテナ半箱分出土した。遺物から遺構の時期は古墳時代前期と考える。



第76図 SX0013 出土遺物実測図(1) (1/4)



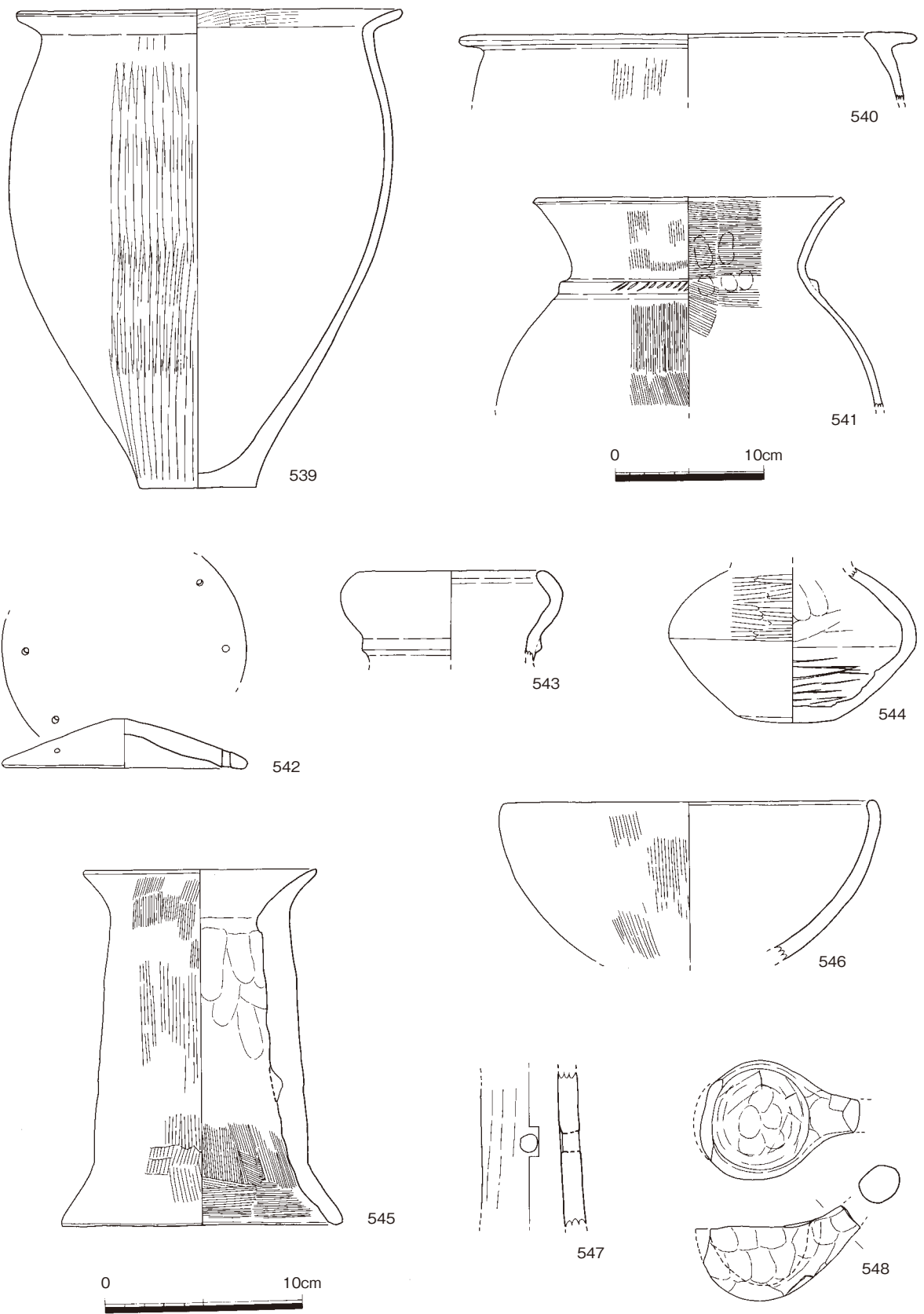
第 77 図 SX0013 出土遺物実測図 (2) (518~524 は 1/4、他は 1/3)



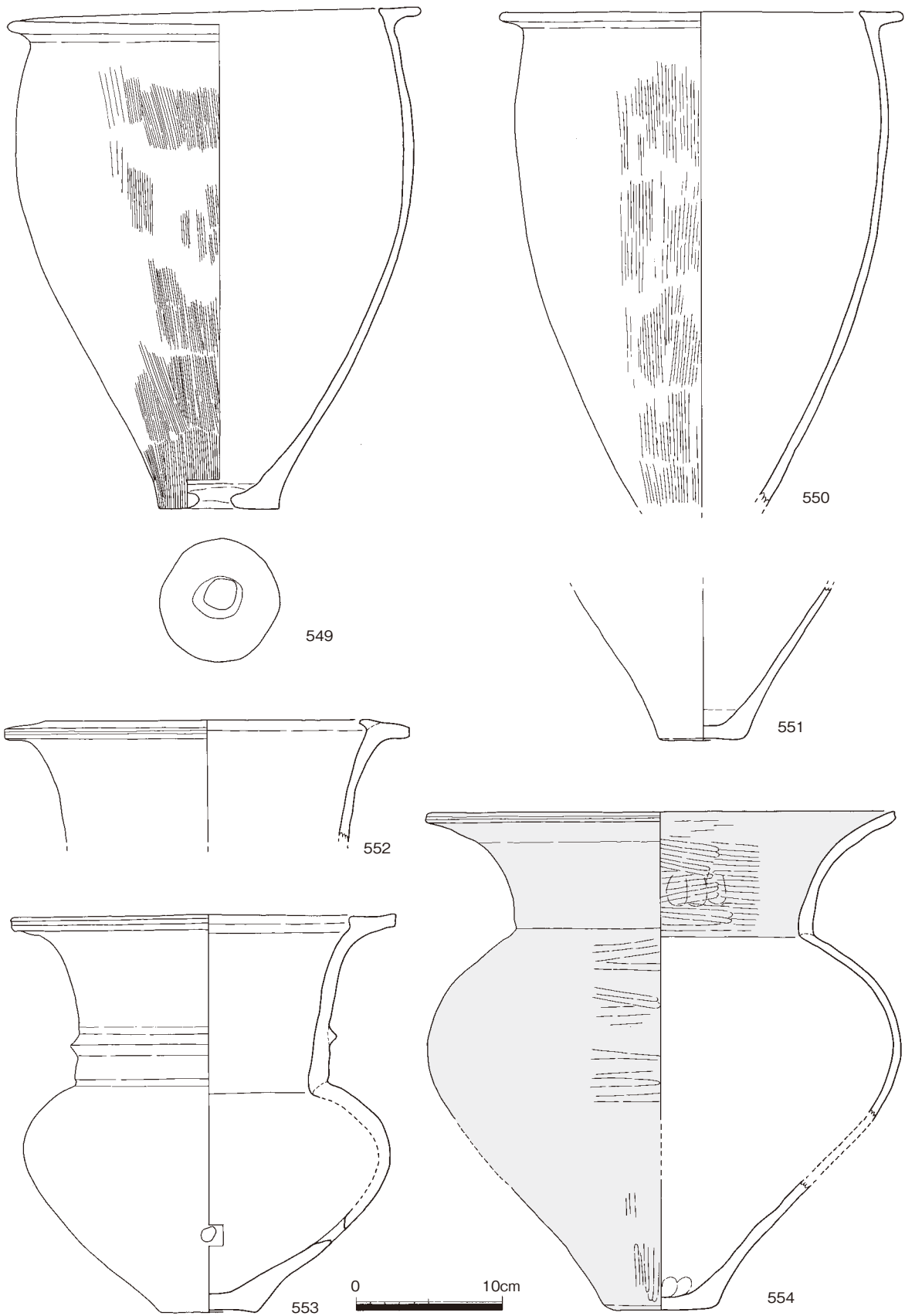
第78図 SX0016 出土遺物実測図 (1/3)

SD0010 (第70図) H-3・4区で確認した北東軸の溝である。断面形は緩やかなU字形で、幅60～80cm、深さ15cmを測り、北東方向へわずかに傾斜する。埋土は黒色粘質土である。横断・併走する杭列を伴う。杭は小型丸杭で構成され、径2～3.5cmの小型丸杭2点を取り上げた。うち1点の樹種はコナラ属アカガシ亜属であった。SS0057下で検出され、SD0007を切る。

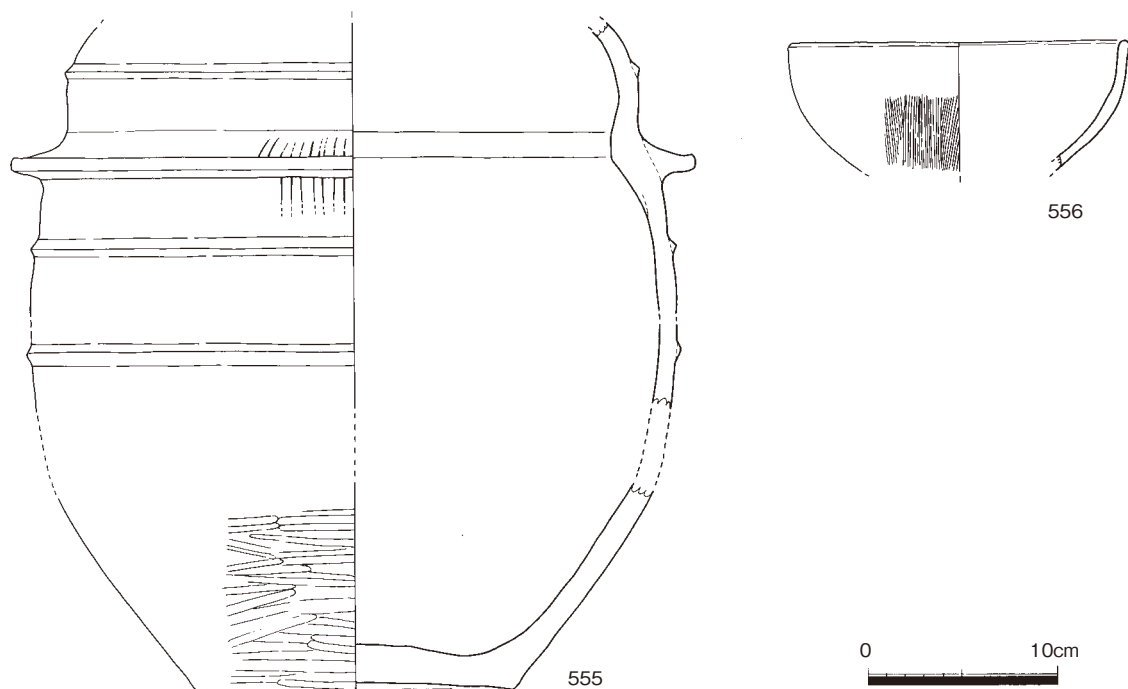
出土遺物(第71図) 小型丸底壺(487)・器台(488)が出土した。この他、弥生～古墳時代の土器・土師器などがパンコンテナ半箱分出土した。遺物は少ないが、SD0007を切る層位関係からも、遺構の時期は古墳時代前期と考える。



第79図 SX0017 出土遺物実測図 (539~541は1/4、他は1/3)



第80図 SX0014 出土遺物実測図(1) (1/4)



第 81 図 SX0014 出土遺物実測図 (2) (1/4)

SD0051 (第 31・70 図) G・H-3～5 区で確認した北北東方向へ蛇行する小型溝である。断面形は逆台形で、幅 25～40 cm、深さ 10～17 cm を測る。埋土は暗褐色シルト質粘土で鉄分・炭を含む。土器群 SX 下面で検出した。

出土遺物 (第 71 図) 甕 (490・491)・丹塗高坏 (492) が出土した。この他、弥生土器がパンコンテナ半箱分出土した。出土遺物は弥生時代中期末～後期初頭・高三瀦式である。次に述べる土器群 SX は弥生時代中期中葉～後期に形成されている。土器群 SX をすべて取り上げた後に SD0051 を検出したが、一部の土器群 SX は SD0051 に本来は切られていたと考えられる。

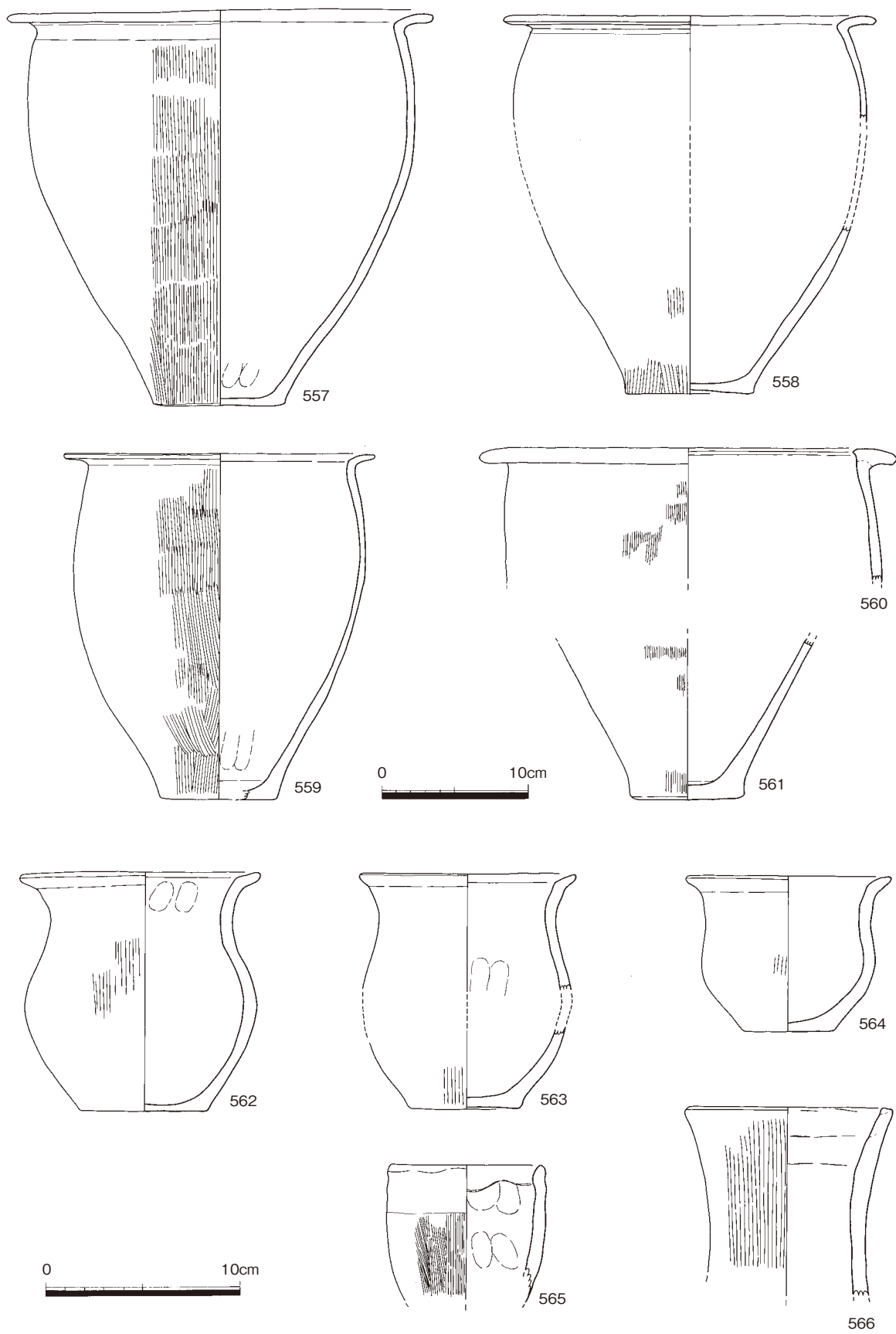
水田 (SS)

SS0064・0065 (第 31・70 図) D～F-4・5 区で検出した水田である。SS0064 と SS0065 は N-75°-E 方向の畦畔で分けられ、SS0064 上面が標高 4.7 m、SS0065 上面が標高 4.5 m で北西側へわずかに傾斜する。畦畔は南側へ延びて SS0064 を東西に分けるとみられるが、遺存が悪く、詳細は不明である。上面を灰・黄白色中砂ラミナ層が覆い、淡黒色粘土の耕作土中には炭化した草木が多く含まれている。SS0064 南側は上に SX0061 が堆積する (第 70 図 調査区東壁土層)。SD0007 から杭列が延びており、関連する可能性がある。

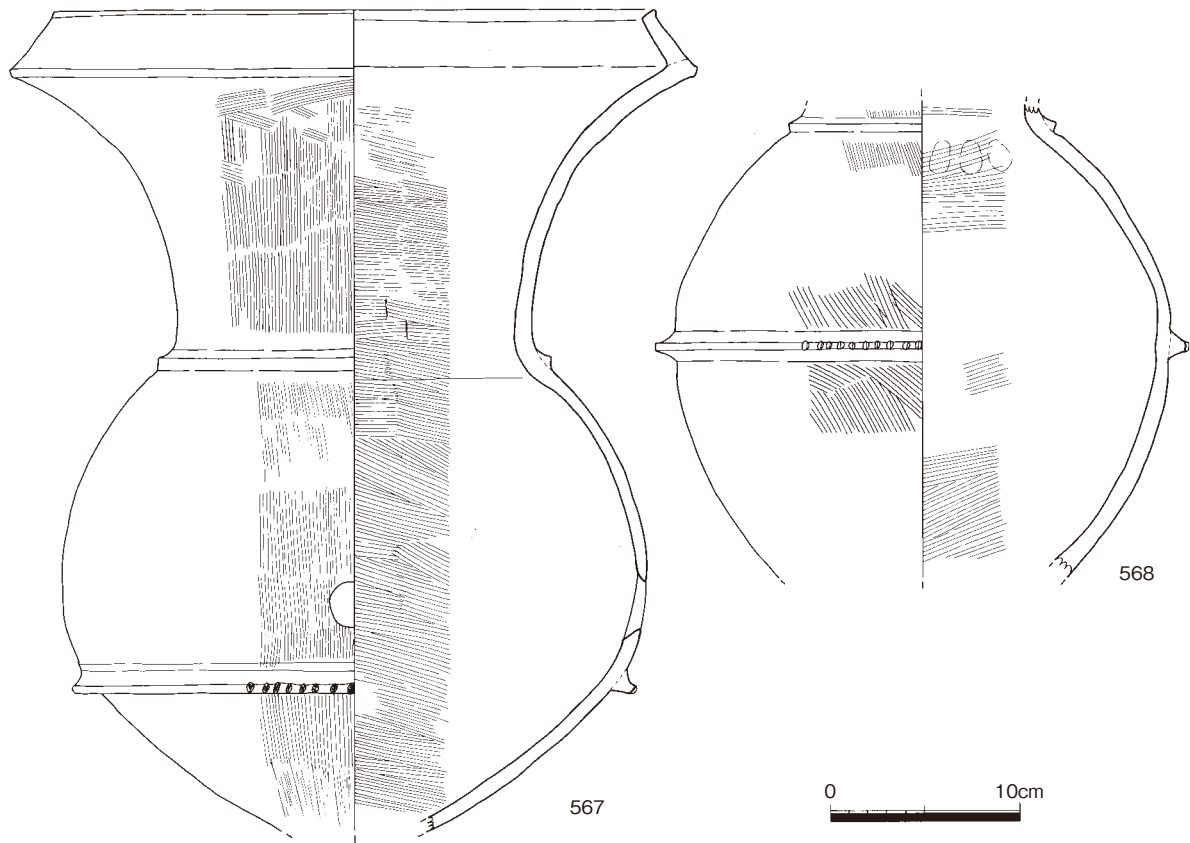
出土遺物 (71 図) 489 は古墳時代前期の甕である。この他、弥生～古墳時代の土器・土師器がパンコンテナ半箱分出土した。SD0007・0010 および SD0005 上層とともに、古墳時代前期の遺構群をなしている。

土器群 SX (第 72・73 図)

G・H-3～5 区で検出した土器片の集中遺構である。包含層 SX0066 上に広く堆積している。遺物



第 82 図 SX0018 出土遺物実測図 (1) (557~561 は 1/4、他は 1/3)



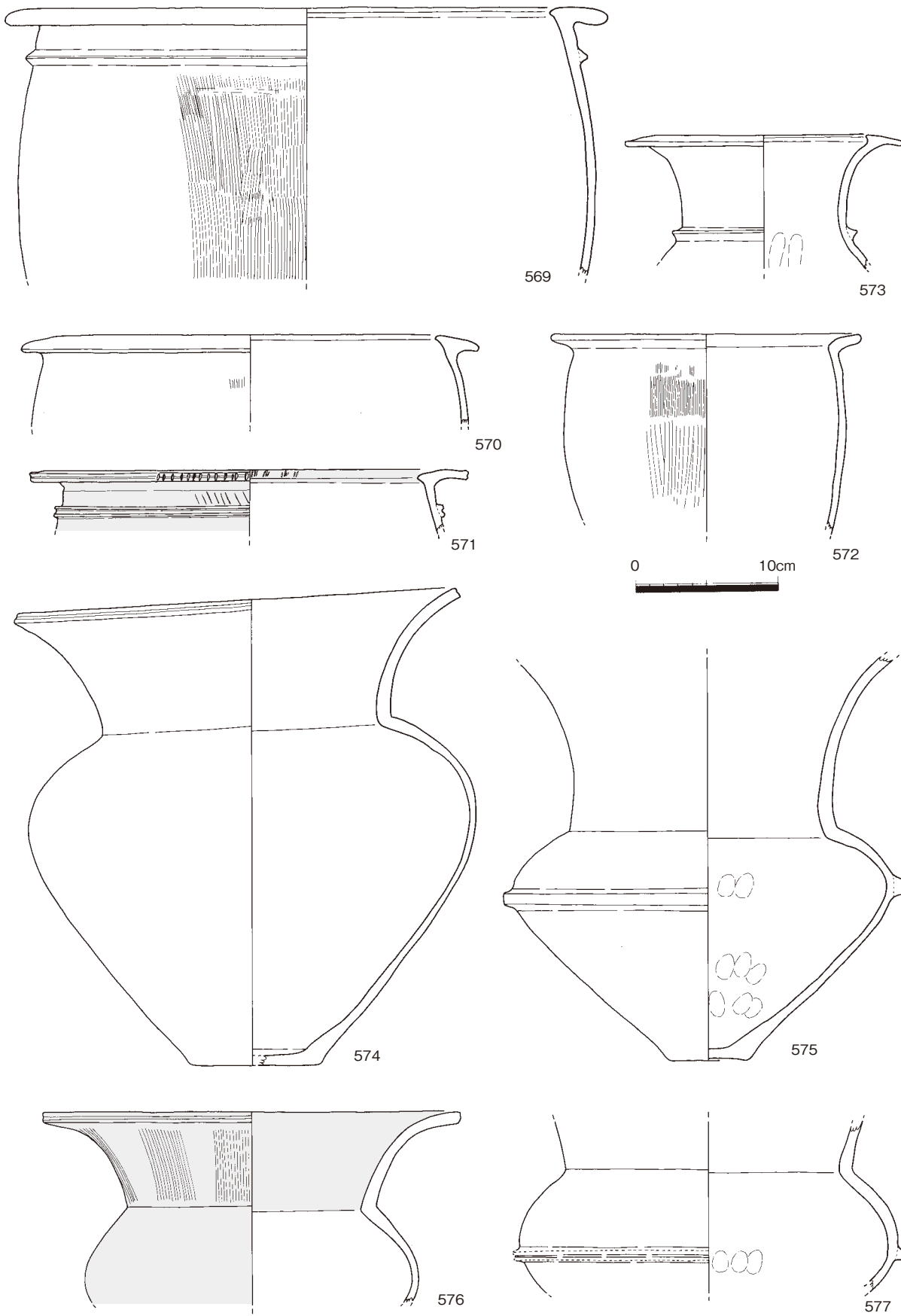
第83図 SX0018 出土遺物実測図(2) (1/4)

はある程度の平面的なまとまりで取り上げ、集中範囲ごとにSX番号を与えた。この区別は平面的なまとまりのみであって、出土遺物の内容等を検討していない便宜的なものである。土器群の部分はわずかに落ち込み、覆土は黄褐色・暗褐色・褐色・灰褐色粘土、黄色砂と炭の混土となるが、土坑や溝として明確に把握できたものはない。出土レベルにも大きな高低差はないため、平坦なSX0066上に土器が投棄され続けて形成された遺構と考える。土器群の東側は調査区外へ延び、西側はⅡ区のSX0085と連続する。以下では、西から順に述べていく。

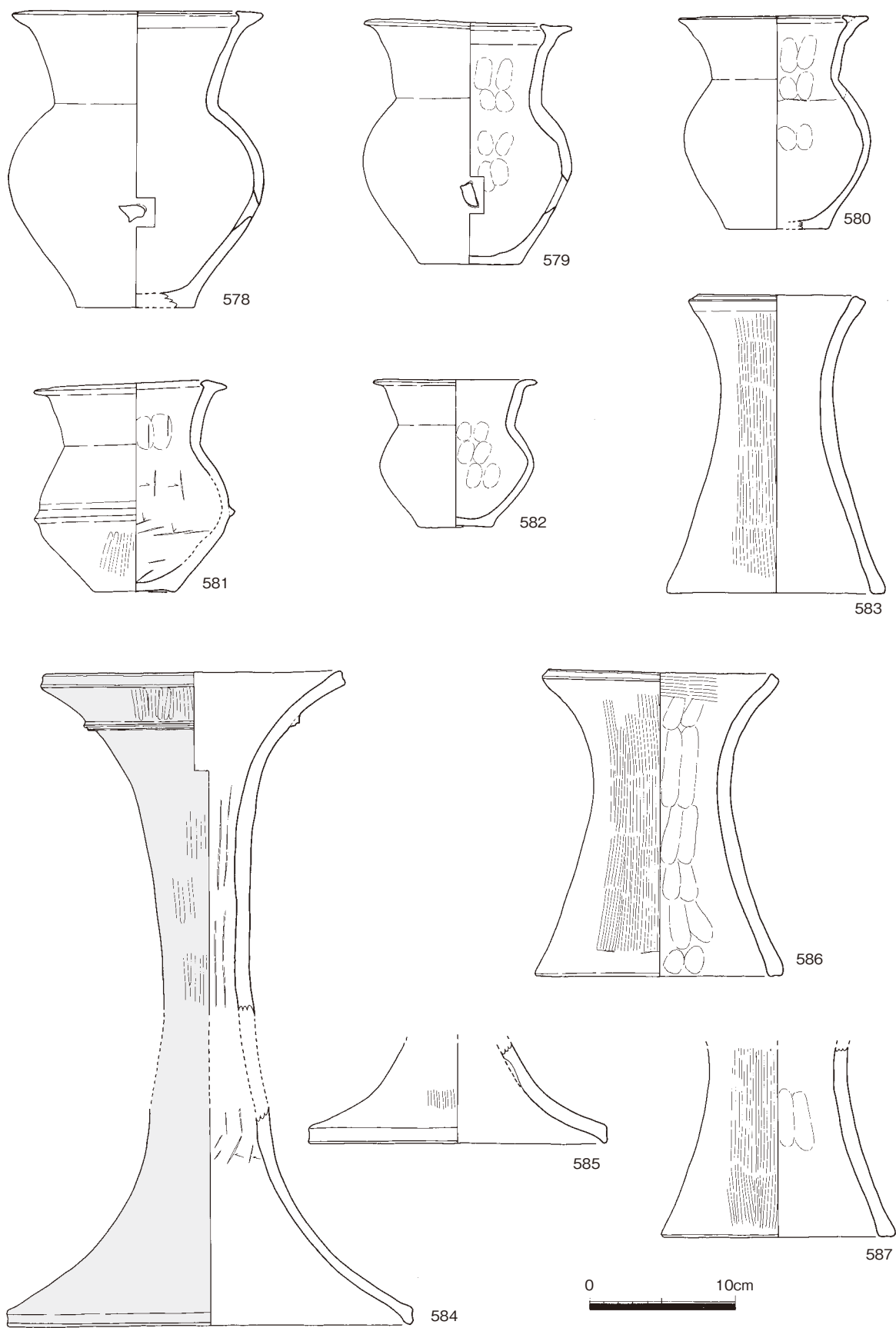
SX0021 (第72・74図) G-3区で検出した。二重口縁壺(493・494)・短頸壺(495)の他、甕・壺・丹塗土器片がパンコンテナ1箱分出土した。弥生時代後期中葉・下大隈式である。

SX0040 (第72・74図) I-4区、SD0005壁面で検出した。小型甕(496)・壺(497)の他、弥生土器が少量出土した。496は粗い成形で形態としては深鉢に近い。497は肩に焼成後穿孔、底部に打ち欠き・剥落の痕跡がみられる。弥生時代後期後葉・下大隈式～西新式である。

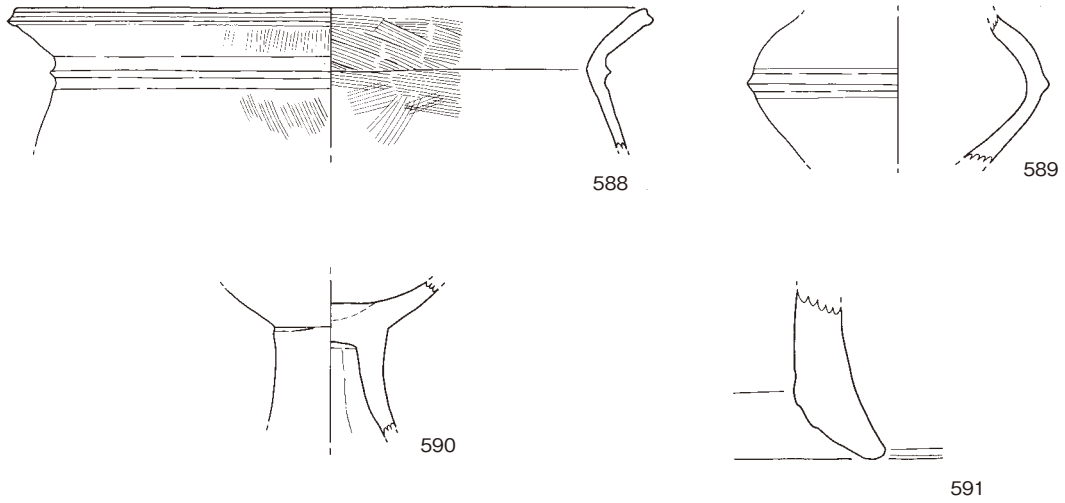
SX0046 (第72・75・88図) H-3区で検出した。覆土は暗褐色粘質土である。甕(498)・蓋(499)・丹塗鉢(500)・大型無頸壺(501)・丹塗無頸壺(502・503)・小型壺(504)・高坏(505)、磨石(597・599)・砥石(598・600)が出土した。598は後面に剥離時の打点・バルブが明確に残っており、意図的な破断が想定される。この他、弥生土器がパンコンテナ2箱分出土した。弥生時代中期中葉・須玖Ⅱ式古段階のセットである。



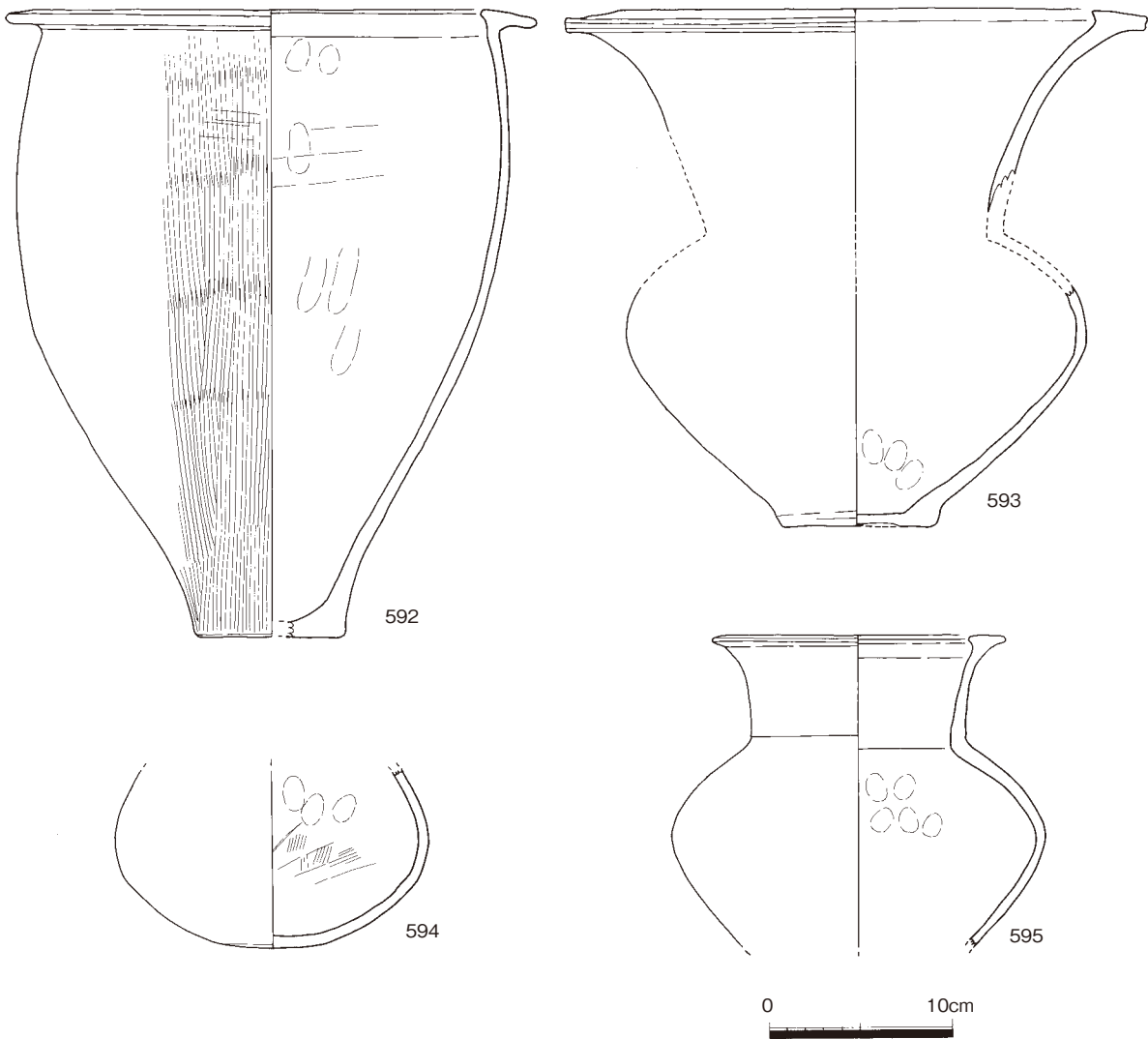
第84図 SX0011 出土遺物実測図(1) (1/4)



第85图 SX0011 出土遺物実測図(2) (1/4)

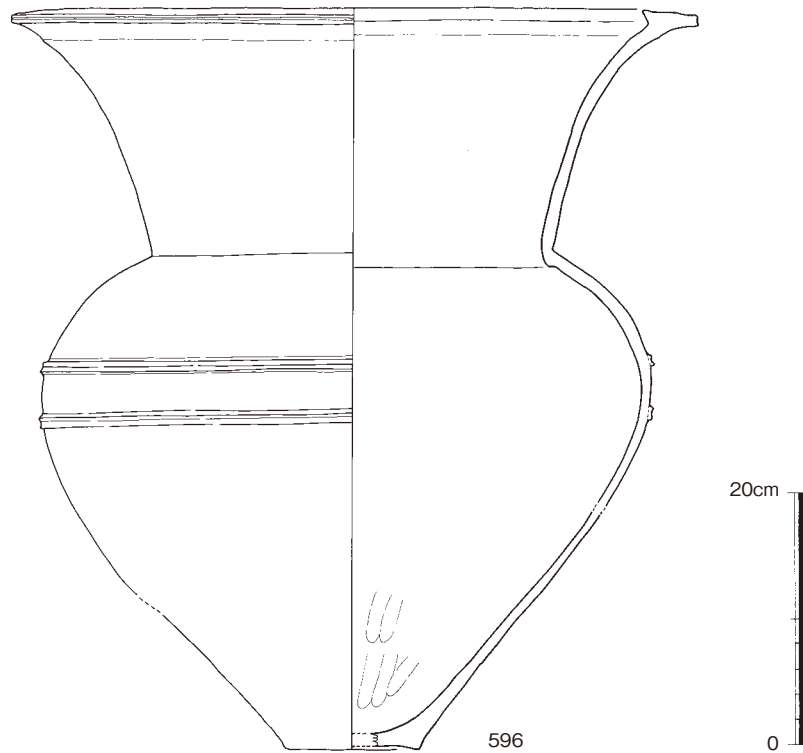


SX0015



SX0009

第 86 図 SX0015・0009 出土遺物実測図 (1/4)



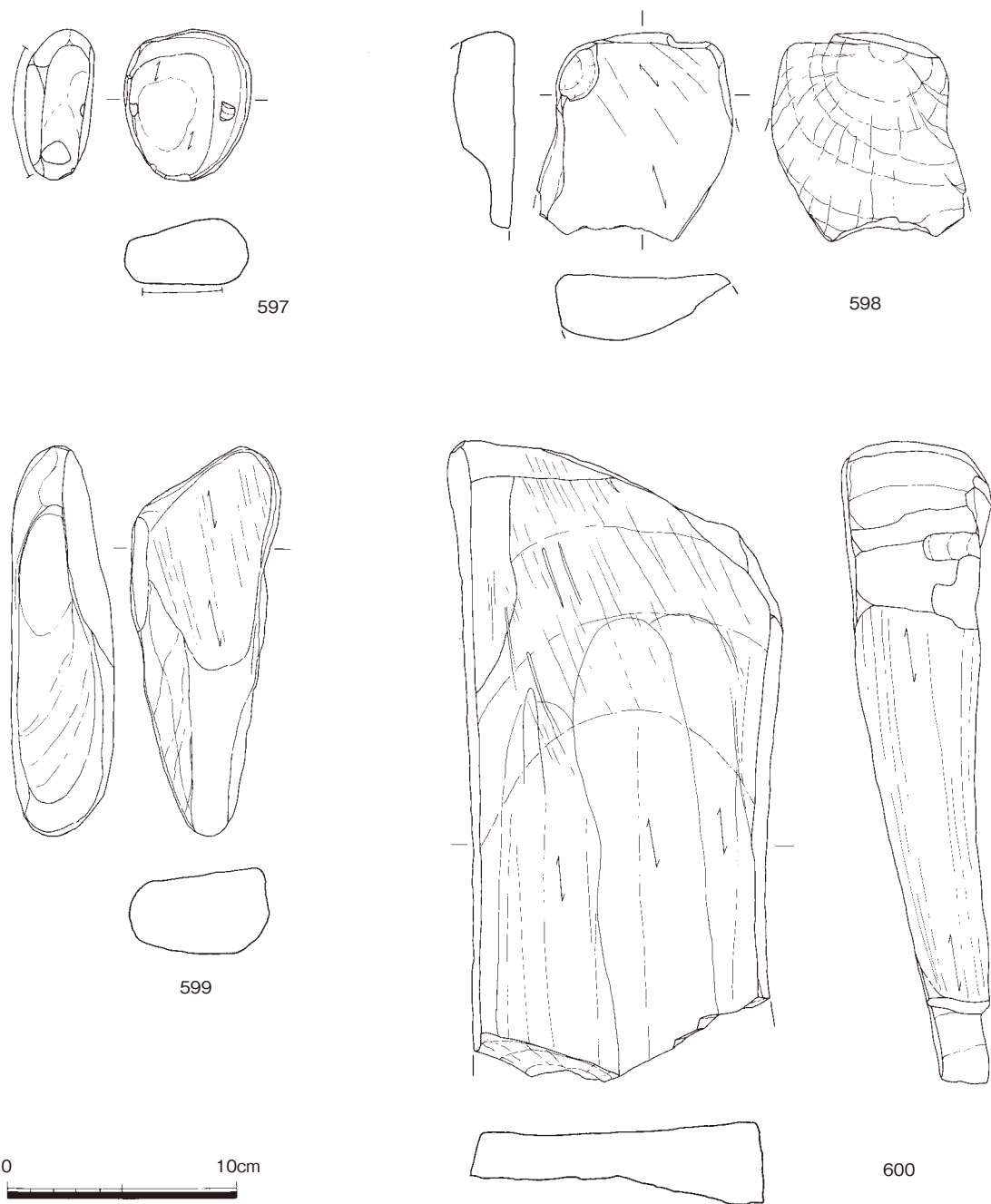
第 87 図 SX0006 出土遺物実測図 (1 / 6)

SX0013 (第 72・76・77 図) H-3 区で検出した。覆土は、ブロック状の灰褐色・暗褐色粘土と鉄分・マンガンを含む。甕 (506～512)・鉢 (513・514)・高坏 (515～517)・壺 (518～520)・袋状口縁壺 (521)・瓢形土器 (522)・蓋 (523)・無頸壺 (524)・小型壺 (525～529)、匙形土製品 (530) が出土した。518 は口唇部上面にわずかに丹が残る。523 は径 2.5 cm、高さ 0.7 cm のつまみがつく。526 は頸部と胴部の境に沈線をめぐらす。この他、弥生土器がパンコンテナ 5 箱分出土した。下限は弥生時代後期前葉・高三瀧式と考える。

SX0016 (第 72・78 図) H-4 区で検出した。甕 (531・532)・小型壺 (533～538) が出土した。533 は口縁部下に浅い沈線がめぐる。この他、弥生土器がパンコンテナ 1 箱分出土した。弥生時代後期前葉・高三瀧式である。小型壺の割合が高い点が特徴である。

SX0017 (第 73・79・89 図) H-4 区で検出した。覆土は赤褐色粘質土で、鉄分・マンガンを多く含む。甕 (539・540)・壺 (541)・蓋 (542)・袋状口縁壺 (543)・長頸壺 (544)・器台 (545)・高坏 (546・547)・匙形土製品 (548)、砥石 (602)・石皿 (604) が出土した。541 は、SD0005 上層と接合した西新式の壺である。547 は有孔の高坏脚である。604 は花崗岩製の小型石皿で、土器群南辺から出土した (第 73 図)。この他、弥生土器がパンコンテナ 1 箱分出土した。弥生時代中期中葉～後期終末の土器が出土した。

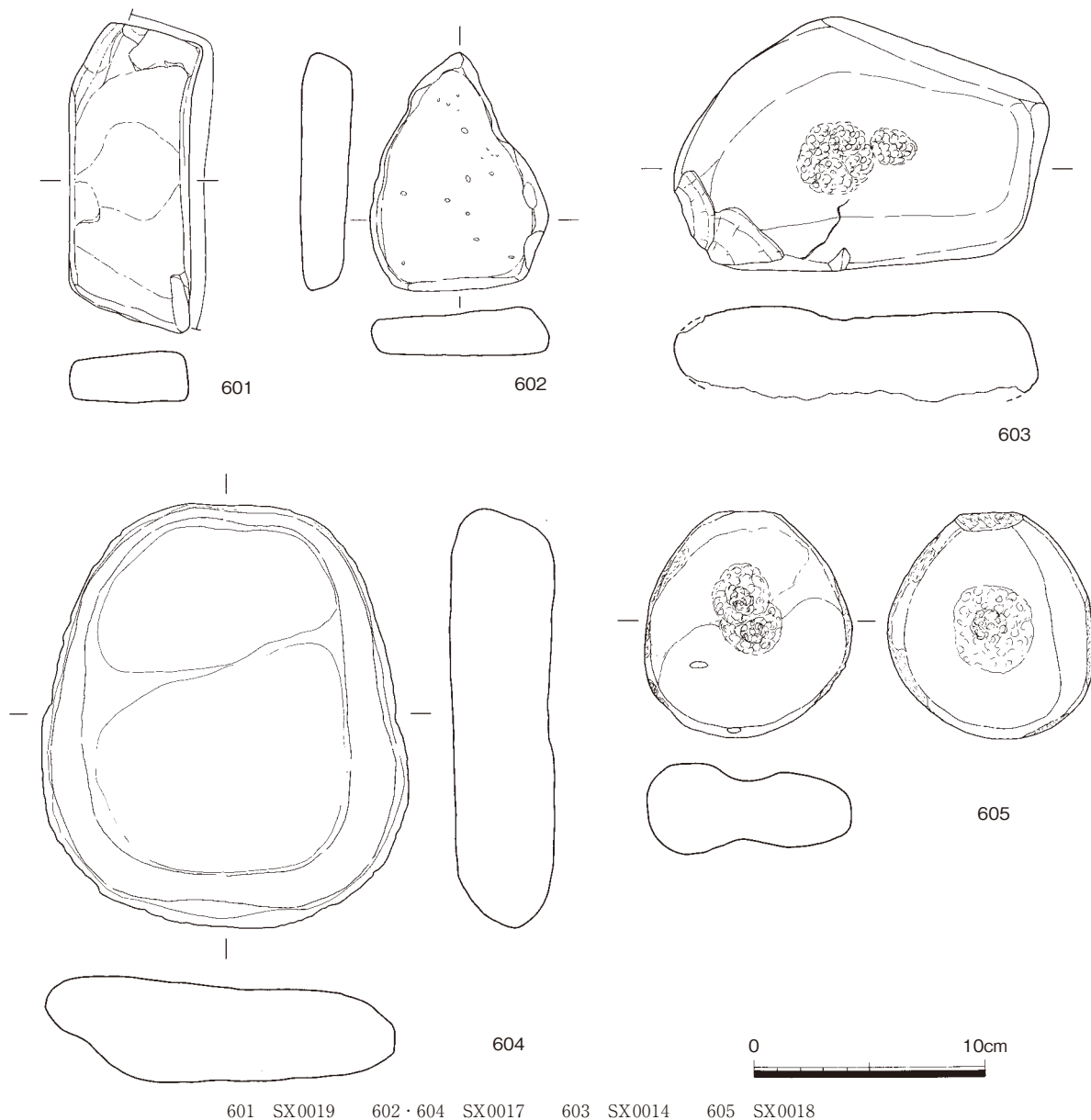
SX0014 (第 73・80・81・89 図) G-4 区で検出した。覆土は灰褐・青灰・黄褐色粘土混土で鉄分・マンガン・炭を多く含む。甕 (549～551)・広口壺 (552～554)・瓢形土器 (555)・高坏 (556)、



第88図 SX0046 出土石器実測図(1/3)

台石(603)が出土した。549は焼成後底部穿孔が認められる。553は胴下部に焼成後穿孔がみられる。554は上半部と底部が接合しないが、同一個体である。555は鏝の上下外面に縦位の暗文が施され、底部外面はミガキで仕上げられる。603は後面の剥落が著しく、打ち欠いている可能性もあるが判然としない。土器群中央から出土した(第73図)。この他、弥生土器がパンコンテナ3箱分出土した。弥生時代中期中葉・須玖Ⅱ式古段階である。

SX0018(第73・82・83・89図) G-5区で検出した。甕(557~561)・小型壺(562~564)・蜻



第 89 図 SX 土器群出土石器実測図 (1/3)

壺 (565)・器台 (566)・二重口縁壺 (567・568)、敲石 (605) が出土した。558 は上半部と底部が接合しないが、同一個体である。560・561 は接合しない同一個体である。567・568 は下大隈式の二重口縁壺である。605 は凝灰岩製の敲石で、敲き・凹みの痕跡も残る。この他、弥生土器がパンコンテナ 1 箱分出土した。弥生時代後期前葉と中葉のセットを含んでいる。

SX0011 (第 73・84・85 図) G-5 区で検出した。覆土は青灰色粘土で砂・炭を含む。甕 (569～572)・壺 (573～577)・小型壺 (578～582)・器台 (583～587) が出土した。571 は口縁部上面にミガキによる暗文を施す。576 は口縁部のタテハケメを等間隔にナデ消して文様効果を出している。584 は接合しない同一個体である。小型壺のほとんどは胴部に打ち欠きの痕跡がみられる。この他、弥生土器、砂岩片などがパンコンテナ 5 箱分出土した。須玖Ⅱ式古段階のセットである。

SX0019 (第73・89図) G-4区で検出した。砥石(601)の他、弥生土器がパンコンテナ半箱分出土した。

SX0015 (第73・86図) H・I-4・5区で検出した。甕(588)・小型壺(589)・高坏(590)・器台(591)が出土した。589は小型壺で、算盤玉形の胴部をなす。SX0006出土破片と接合した。590は丹の痕跡がわずかに残る。この他、弥生土器がパンコンテナ1箱分出土した。弥生時代後期前葉である。

SX0009 (第73・86図) H-5区で検出した。覆土は黄色・褐色粘土と炭の混土である。甕(592)・広口壺(593)・小型壺(594・595)が出土した。この他、弥生土器がパンコンテナ2箱分出土した。弥生時代中期中葉・須玖Ⅱ式古段階である。

SX0006 (第73・87図) H-5区で検出した。596の大型広口壺が逆位で潰れた状態で出土した。浅い掘り込みを伴う。この他、甕・壺・高坏・器台がパンコンテナ半箱分出土した。弥生時代中期中葉・須玖Ⅱ式古段階である。

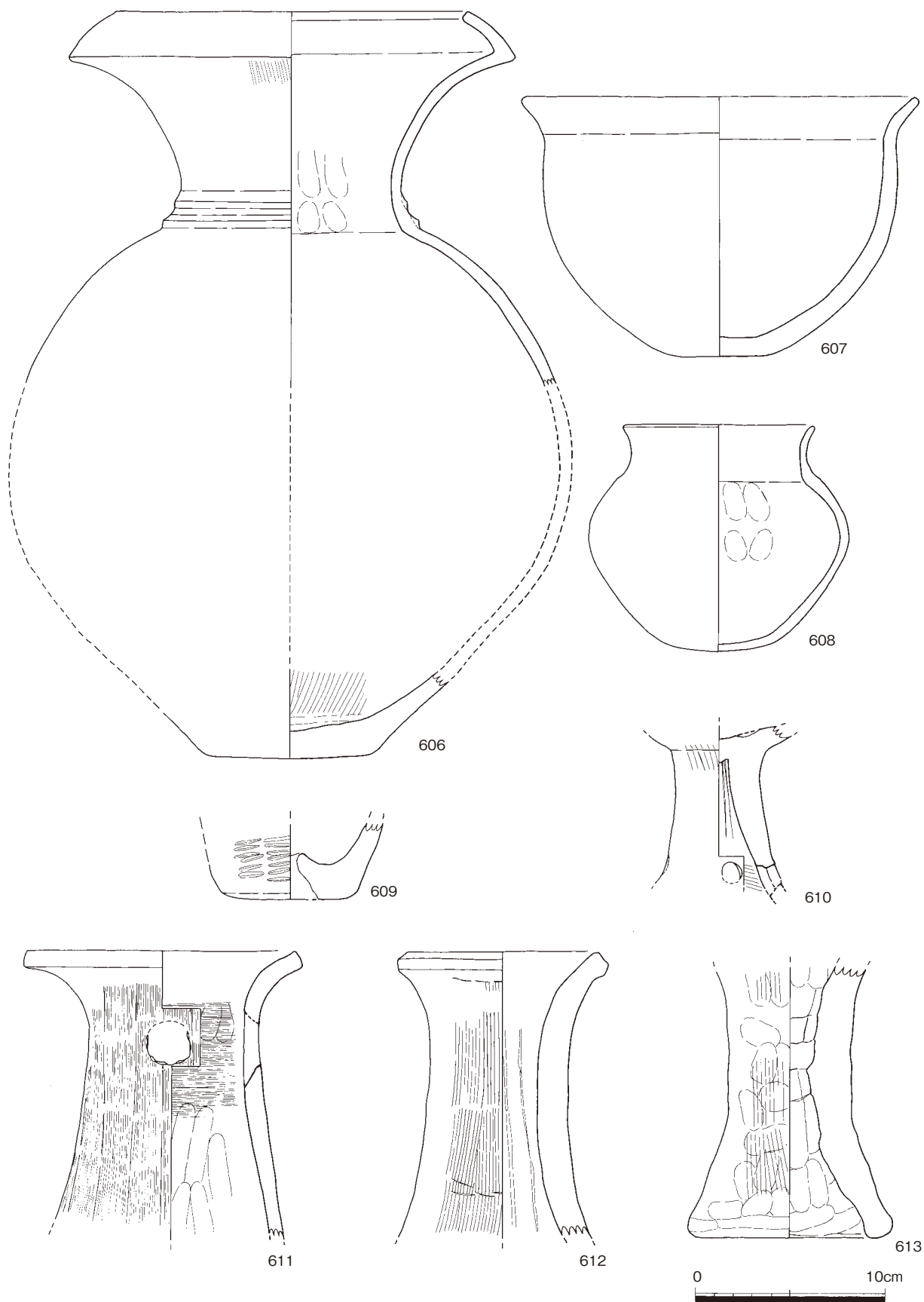
包含層(SX)

SX0067 (第7図F-G土層5層) I-3区、1面のSS0059・0060下で検出した灰褐色シルト質粘土の包含層である。下層のSX0066と同質であるが、SX0066よりもやや暗色粘土が混ざり、土器小片が多いため、別遺構として取り上げた。

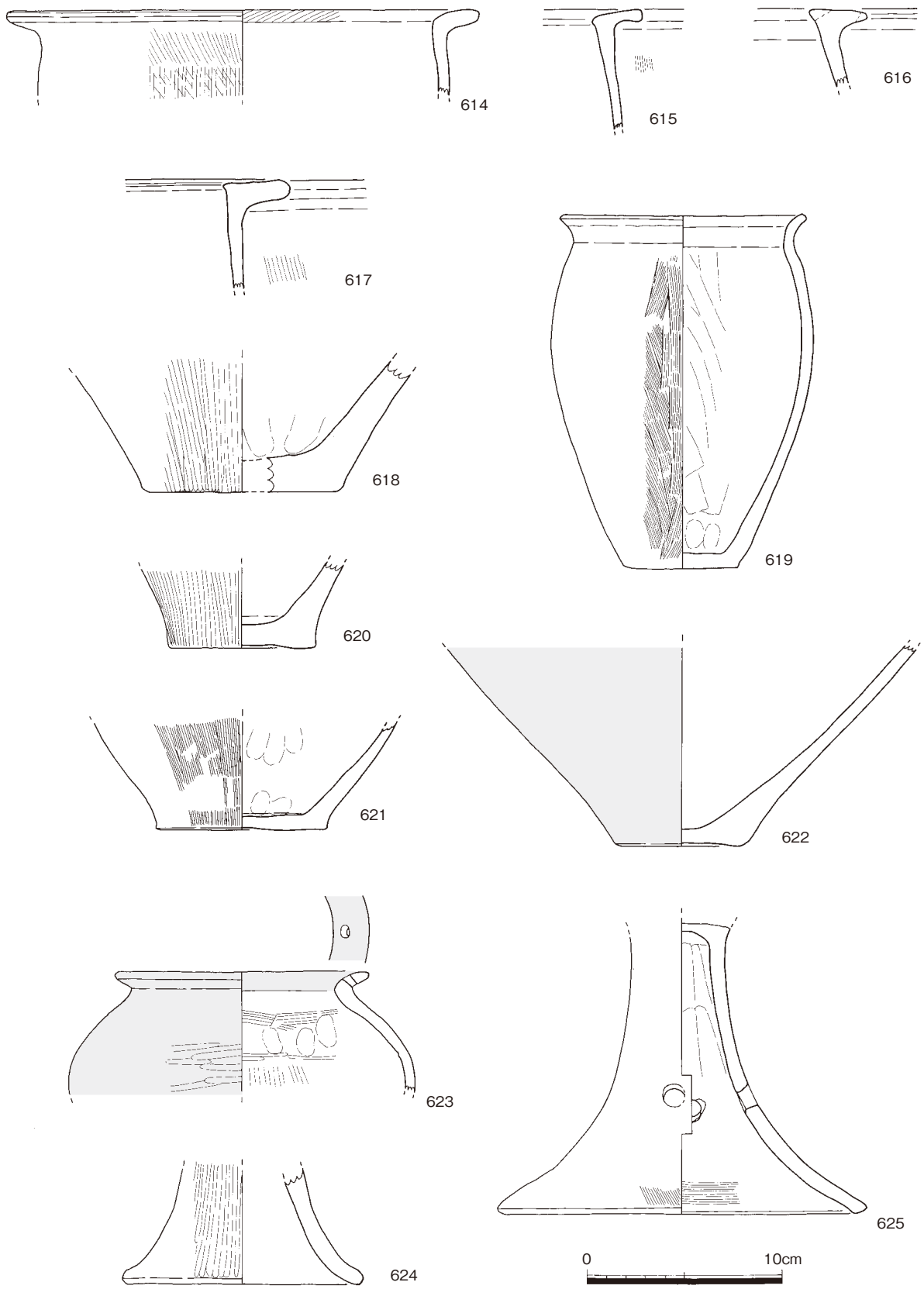
出土遺物(第90図) 二重口縁壺(606)・鉢(607・609)・壺(608)・高坏(610)・器台(611～613)が出土した。609は底部に焼成前穿孔が施され、外面には横方向の平行タタキ痕が残る。606は摩滅が著しく、接合しないが同一個体であるため、図上復元している。610は脚裾に4カ所の焼成前穿孔がみられる。611は上部に打ち欠きがみられ、焼成後穿孔の可能性はある。この他、弥生土器がパンコンテナ2箱分出土した。包含層の堆積時期は、弥生時代後期中葉・下大隈式と考える。

SX0066 2面全体に堆積し、遺構検出面となっている灰褐色シルト質粘土層で遺物を散漫に含む。全面の人力掘削は行えず、下面(3面)検出のためのトレンチ掘削時に遺物を取り上げた。SD0024の土層ベルト(第94図土層A・D)を見ると、SX0066中に細砂の堆積が観察され、本来流路があったようであるが、平面では明確に把握できなかった。

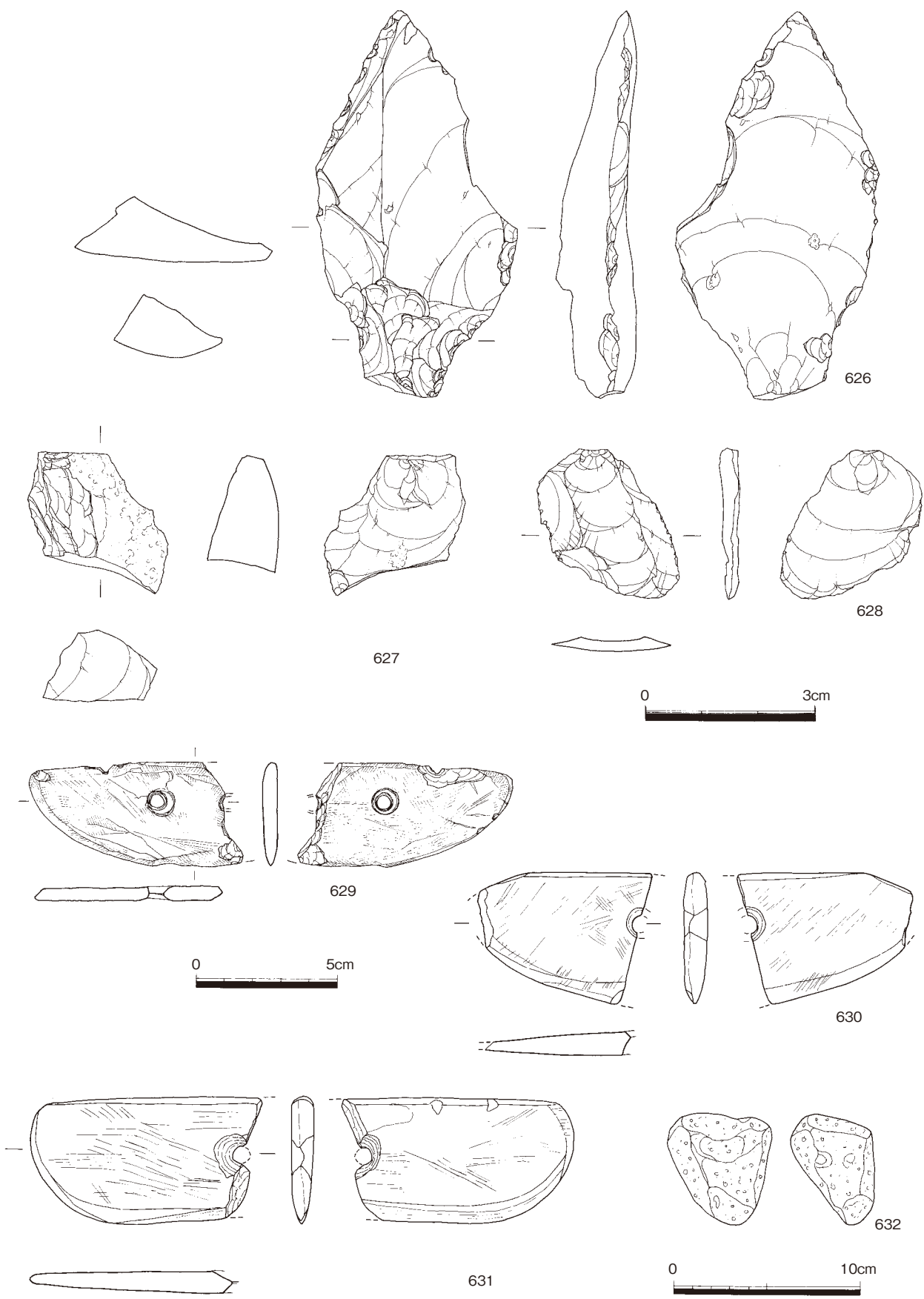
出土遺物(第91・92図) 甕(614～621)・丹塗壺(622)・丹塗無頸壺(623)・高坏(624・625)、剥片尖頭器(626)・石庖丁(629～631)・軽石製浮子(632)が出土した。625は脚部中段部に4カ所の焼成前穿孔が認められる。626はサヌカイト製縦長剥片の打点側への片面調整で基部を作り出し、右辺は素材形状をいかし、左辺に二次加工を加えて切っ先を成形している。旧石器時代遺物の可能性のあるものとしては、赤色チャートの剥片(627・628)と原石(図版40・733)が出土している。627は、自然面を有する剥片で、平坦打面から剥離角106度を測る。下半は折断している。SD0003出土である。628は、小型剥片で、平坦打面から剥離角91度を測る。SD0023出土である。733は、径4.3～7.1cm・重量175.2gの球形亜円礫である。SD0029出土である。632は、明確な加工痕がみられないため、浮子素材といった方がよいかもしれない。この他、弥生土器がパンコンテナ4箱分出土した。包含層の堆積時期は、弥生時代中期中葉～後半・須玖Ⅱ式古段階と考える。



第 90 图 SX0067 出土遺物実測図 (1 / 3)



第91図 SX0066 出土遺物実測図(1/3)



626・629・631・632 SX0066 627 SD0003 628 SD0023 630 SX0067

第92図 2面出土石器実測図(626~628は1/1、632は1/3、他は1/2)

第4表 I区2面出土土器・土製品観察表(1)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
32	203	SP47	B	弥生土器	甕	小片		径4mm以下の白色砂粒を多く含む	良好	灰黄(2.5Y7/2)
33	207	SD05 上層粗砂	B	須恵器	坏	1/6	復元口径13、復元底径8.6、器高3.4	細砂粒、黒色粒を含む	良好	淡灰色
33	208	SD05 下層粘土	B	須恵器	坏	1/6	復元口径13.4、復元底径9、器高3.8	密。白色細砂粒を含む。稀に径3mm程の粗砂粒が混ざる	良好	
33	209	SD05 2区R12	A	須恵器	高台坏	1/4	復元高台径10.8	細砂粒、黒色粒を含む	良好	灰色
33	210	SD05 西側肩	B	須恵器	坏	1/3	復元口径14.4、器高4.3	径2mm以下の砂粒、黒色粒を含む	不良	外:褐灰色 内:に ぶい橙色
33	211	SD05 上面	A	須恵器	横瓶	小片		径2mm以下の白色砂粒、黒色粒を含む	良好	暗灰色。器表面に は自然釉
33	212	SD05 上層	A	須恵器	蓋	小片		細砂粒、黒色粒を含む	やや 不良	灰白～淡灰色
33	213	SD05 西水田下埋立土	B	須恵器	坏	小片		径2mm以下の白色砂粒、黒色粒を含む	良好	暗灰色
33	214	SD05 上層	B	土師器	製塩土器	小片		径4mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
36	223	SD03 グリッド2	B	弥生土器	甕	1/4	復元口径39	径4mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	外:淡橙色 内:灰 褐～黒色
36	224	SD03 グリッド10	B	弥生土器	甕	小片	推定径70	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙～にぶい 黄橙色
36	225	SD03 上面	B	弥生土器	甕	1/6	復元口径36	やや粗。径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:灰黄褐色 内: にぶい黄橙色
36	226	SD03 グリッド10	B	弥生土器	甕	1/2	復元底径6.4	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
36	227	SD03 上面炭化層	A	弥生土器	甕	1/4	復元口径32	粗い。径4mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	にぶい黄橙色
36	228	SD03	A	弥生土器	甕	3/4	復元口径21.4、底径9、器高20.3	径3mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい橙色
36	229	SD03	A	弥生土器	甕	1/8	復元口径32	径3mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
36	230	SD03	A	弥生土器	甕	1/4	復元口径22	径2mm以下の砂粒を含む。赤色粒を少し含む	良好	にぶい橙色
37	231	SD03	A	弥生土器	甕	1/2	復元口径31.2、底径9.6、器高34.4	径5mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
37	232	SD03 グリッド5	B	弥生土器	壺	小片		径1mm以下の砂粒、黒色粒を含む	良好	浅黄橙色
37	233	SD03 グリッド10	B	弥生土器	壺	1/4	復元口径14	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
37	234	SD03 グリッド10	B	弥生土器	壺	1/8	復元口径17	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む。稀に径4～5mm大の粗砂粒が見られる	良好	にぶい黄橙色
37	235	SD03 グリッド9	B	弥生土器	壺	1/4	復元口径22.4	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む。稀に径4～5mm大の粗砂粒が見られる	良好	浅黄橙色
37	236	SD03 グリッド10	B	弥生土器	壺	1/6	復元口径13.6	やや粗。径4mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	浅黄褐色
37	237	SD03 グリッド8	B	弥生土器	鉢	1/4	復元口径12.6、底径4.8、器高8.4	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
37	238	SD03 グリッド1	B	弥生土器	丹塗高坏	1/6	復元口径32	径2mm以下の砂粒を含む	良好	内:丹 外:にぶい 橙色
37	239	SD03 グリッド9	B	弥生土器	高坏	1/2	復元脚径12	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
37	240	SD03 グリッド10	B	弥生土器	高坏	1/6	復元脚径11.6	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	灰黄褐色
37	241	SD03 グリッド8	B	弥生土器	高坏	1/4	復元脚径7.8	径3mm以下の粗・細砂粒、黒色粒、赤色粒を含む	良好	橙色
38	242	SD03 グリッド10	B	弥生土器	器台	1/2	上部径10、下部径13.3、器高18.7	粗。径5mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	やや 不良	にぶい黄橙色
38	243	SD03 グリッド1	B	弥生土器	器台	下部欠損	口径12.6	径5mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙～橙色
38	244	SD03 グリッド10	B	弥生土器	器台	2/3	上部径10	粗。径3mm以下の砂粒を多く含む。赤色粒も含む	やや 不良	暗灰色
38	245	SD03 グリッド10	B	弥生土器	器台	小片	脚径11	粗。径5mm以下の粗・細砂粒を多く含む	やや 不良	にぶい黄橙色
38	246	SD03	A	弥生土器	器台	1/2	復元脚径17.4	やや粗。径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:橙色 内:にぶい 橙色
38	247	SD03 グリッド4	B	弥生土器	小型鉢	1/2	復元口径10	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
38	248	SD03 グリッド6	B	弥生土器	小型鉢	1/2	復元口径11、底径5.5、器高5	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
38	249	SD03 グリッド13	B	弥生土器	小型鉢	1/4	復元口径8.4、底径4.2、器高5.5	径4mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄褐色
38	250	SD03	A	弥生土器	小型鉢	1/8	復元口径8、底径2.4、器高5.4	径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	
38	251	SD03 グリッド1	B	弥生土器	小型鉢	完形	口径6.5、底径2.8、器高3.6	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:にぶい褐色 内:黄灰色
38	252	SD03	A	弥生土器	壺	小片		径1mm以下の砂粒を含む	良好	灰黄褐色

第4表 I区2面出土土器・土製品観察表(2)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
38	253	SD03	A	弥生土器	壺	小片		径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:にぶい黄橙色 内:橙色
38	254	SD03 上面	B	弥生土器	壺	小片		細砂粒、径2mm程の白い石灰(まい)粒、径2~3mmの灰色の粘土のようにやわらかい粒を含む	良好	灰色
39	255	SD01 ph.42	B	弥生土器	鐺形土製品	1/8	舞辺長3.0、孔間1.5	径1-2mm白色砂多い	良好	灰白色
39	256	SD03 西側堆積	B	弥生土器	鐺形土製品	1/6	孔間1.85	径1-2mm白色砂多い	良好	淡黄色
39	257	SD03 081104	A	弥生土器	鐺形土製品	1/3	舞辺長2.4、孔間0.95	緻密。金雲母やや目立つ	良好	灰白~淡黄色
39	258	SD53	B	弥生土器	鐺形土製品	1/8欠	舞辺長2.8、高さ5.9、裾辺長4、孔径0.28、孔間1.0	緻密。径1mm白色砂少なく含む	良好	灰黄色
39	259	SD03 グリッド10	B	弥生土器	線刻土製品	1/6	復元外径10.5cm	径1-2mm白色砂多い	良好	にぶい橙色
41	268	SD39	B	弥生土器	甕	1/3	復元口径27.6、底径7.8	径3mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:橙色 内:灰黒色
41	269	SD39 R1 周辺	B	弥生土器	甕	小片	復元口径32.6	径1mm以下の砂粒、赤色粒を少し含む	良好	浅い黄橙色
41	270	SD39 R1	B	弥生土器	丹塗壺	1/2	復元口径21	密。径1mm以下の砂粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい橙色
41	271	SD50 ベルト	B	弥生土器	甕	1/8	復元口径25.2	径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
41	272	SD50 ベルト	B	弥生土器	甕	小片		径3mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい橙色
41	273	SD55	B	弥生土器	甕	小片		径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:にぶい橙色 内:灰褐色
41	274	SD55	B	弥生土器	丹塗壺	1/4	復元底径7.8	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内・外底:にぶい橙色
43	275	SD42 (西) 南区下層	B	弥生土器	丹塗壺	1/6	復元口径25.4	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい橙色
43	276	SD42 上層ベルト北	B	弥生土器	丹塗高坏	1/3	復元口径15	精良。細砂粒、赤色粒を含む	良好	丹
43	277	SD42 上層ベルト北	B	弥生土器	丹塗高坏	小片		径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 脚部内:橙色
43	279	SD53 南区	B	弥生土器	甕	1/2	復元口径15.4、底径8.2、器高17.2	径2mm以下の砂粒を含む	良好	淡橙色
43	280	SD53	B	弥生土器	甕	小片		径4mm以下の粗・細砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色
43	281	SD53 R-5	B	弥生土器	甕	1/4	復元底径8.4	やや粗。径5mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	浅黄橙色
43	282	SD53 R-4	B	弥生土器	壺	小片	口径20	やや粗。径5mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	にぶい橙色
45	283	SD05 上層ベルト	A	弥生土器	甕	1/10	復元口径34.8	径2mm以下の砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	にぶい黄橙色
45	284	SD05 1区下層	A	土師器	甕	小片		径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む。稀に径5mm大の粗砂粒が混ざる。	良好	外:にぶい橙色 内:橙色
45	285	SD05 上層	A	土師器	甕	1/6	復元口径19.4	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:にぶい橙色 内:にぶい黄橙色
45	286	SD05 1区下層	A	土師器	甕	1/6	復元口径19.4	やや粗。径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
45	287	SD05 2区R31	A	弥生土器	壺	2/3	復元口径21.6	やや粗。径3mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色
45	288	SD05 1区R-6	A	弥生土器	壺	小片	口径24.8mm	やや粗。径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:にぶい橙色 内:にぶい黄橙色
45	289	SD05 上層R-3	B	弥生土器	壺	小片	復元胴部最大径28.5	やや粗。径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:にぶい橙色 内:にぶい黄橙色
45	290	SD05 1区下層+B区上層	A	弥生土器	壺	1/3	復元胴部最大径30	やや粗。径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:にぶい橙色 内:灰黄褐色
46	291	SD05 2区中層+下層	A	土師器	壺	1/6	復元胴部最大径34.8	やや粗。径4mm以下の粗・細砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色
46	292	SD05 1区下層+中層	A	弥生土器	壺	小片	底径8.8	やや粗。径3mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色
46	293	SD05	A	弥生土器	壺	1/4	胴部最大長(凸帯部)28.8	粗。径4mm以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙色
46	294	SD05 上層粗砂	B	弥生土器	壺	小片	底径7.4、孔径1.2×1.8	径3mm以下の砂粒、黒色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
46	295	SD05 1区	A	土師器	高坏	3/4	復元脚径10.6	やや粗。径3mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
46	296	SD05 2区R008	A	弥生土器	高坏	小片		密。径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色。丹が剥落している。丹痕が所々に残る。
46	297	SD05 上層	B	土師器	器台	1/2	復元口径7.4、復元底径7.6、器高8.1	粗。径4mm以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙色
46	298	SD05 上面	A	土師器	器台	小片		径5mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色

第4表 I区2面出土土器・土製品観察表(3)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調		
	46	299	SD05 2区 上層	A	弥生土器	支脚	1/10			径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:にぶい黄橙色 内:にぶい褐色～ 黒色
	47	300	SD05 2区 下層 南壁	A	弥生土器	鉢	1/3	復元口径 17.5		径4mm以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	外:橙色 内:浅黄色
	47	301	SD05 2区 中層	A	弥生土器	壺	1/2	復元胴部最大径 11.4		径2mm以下の砂粒、黒色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
	47	302	SD05 1区 R017	A	弥生土器	壺	完形	口径5.6、胴部最大径 10.4、器高13.4		径2mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色
	47	303	SD05 1区 R29	A	弥生土器	小型壺	ほぼ完 形	口径6.5、底径6.5、器 高9.7		径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	浅黄橙～褐色
	47	304	SD05 上面	A	土師器	壺	1/8	復元口径 10		精良。細砂粒を少し含む	良好	橙色
	47	305	SD05 上層	A	土師器	壺	1/6	復元口径 19		密。径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
	47	306	SD05 上面	A	土師器	壺	1/6	復元口径 14.6		精良。径2mm以下の砂粒、赤色粒を少 し含む	良好	にぶい橙色
	47	307	SD05 1区 東側カベ	A	弥生土器	注口土 器	小片	孔径0.5		密。細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
	47	308	SD05 上面	A	土製品	匙形	柄部	現存長3.5、径1.1×1.3		径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
	47	309	SD05 北側上 面	A	土製品	匙形	柄部	現存長3.4、径1.4		径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
	47	310	SD05 2区 R-25	A	土製品	紡錘車	完形	径4.8、厚さ1.0、孔径 0.7		緻密。雲母やや目立つ	良好	灰白～灰黄色
	55	365	SD32 上面	B	弥生土器	甕	1/8	復元口径 11.8		径3mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色
	55	366	SD32 南区上 面	B	弥生土器	甕	1/4	復元口径 17.4		粗。径4mm以下の粗・細砂粒を多く含 む	良好	浅黄橙色
	55	367	SD32 南区上 面	B	弥生土器	甕	小片			径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:灰黄褐色 内:にぶい黄橙色
	55	368	SD32 北区	B	弥生土器	甕	小片			径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
	55	369	SD32 南壁土 層 R-7	B	弥生土器	甕	1/2	復元口径 12.2、底径 6.4、器高13.7		径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含 む	良好	にぶい橙色
	55	370	SD32 南区上 層	B	弥生土器	甕	5/6	口径10.7、底径5.6、器 高10.5		径2mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙色
	55	371	SD32 北区	B	土師器	壺	1/4	復元口径 11		径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
	55	372	SD32 上面	B	弥生土器	壺	1/8	復元口径 28		やや粗。径4mm以下の粗・細砂粒を多 く含む	良好	
	55	373	SD32 北区	B	弥生土器	壺	1/6	復元口径 25		径3mm以下の砂粒を含む	良好	外:浅黄褐色 内:にぶい黄褐色
	58	378	SD33	B	土師器	高坏	1/8	復元脚径 13.2		密。径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
	58	379	SD33 黒色粘 土	B	弥生土器	壺	1/6	復元口径 11		径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:にぶい褐色 内:橙～にぶい橙 色
	58	380	SD33 下層	B	弥生土器	甕	小片			径2mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄褐色～黒
	58	381	SD33	B	弥生土器	甕	小片			径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
	58	382	SD33 黒色粘 土	B	弥生土器	器台	1/8	復元径 11		やや粗。径3mm以下の砂粒、赤色粒を 含む	良好	にぶい黄褐色
	58	383	SD33	B	弥生土器	壺	小片	復元底径 7.6		径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含 む	良好	外:にぶい黄褐色 内:灰黄褐色
	58	384	SD33	B	弥生土器	鉢	1/6	復元口径 14.8		粗。径3mm以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	にぶい黄褐色
	58	385	SD33 黒色粘 土	B	弥生土器	甕	2/3	復元底径 7		密。径1mm以下の砂粒を含む	良好	外:橙色 内:黒色
	58	386	SD33 下層	B	弥生土器	高坏	1/8			径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
	58	387	SD33	B	弥生土器	高坏	1/8	復元口径 30		径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:にぶい橙色 内:にぶい黄褐色
	58	388	SD33	B	弥生土器	壺	1/6	復元口径 18.4		径5mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
	58	389	SD33	B	弥生土器	丹塗壺	1/2	復元底径 7.4		密。細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
	60	392	SD36 ベルト 北	B	弥生土器	甕	1/3	復元口径 17.6、復元底 径8、器高26.7		やや粗。径5mm以下の粗・細砂粒、赤 色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
	60	393	SD36	B	弥生土器	壺	小片	頸部径5.2、胴部最大径 11.8		やや粗。径5mm以下の粗・細砂粒を多 く含む	良好	浅黄橙色
	60	394	SD36 R2 ②	B	弥生土器	壺	上半部 片	口径 14.8		径4mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
	60	395	SD36 南壁 R-10	B	弥生土器	壺	1/4	復元口径 15		径4mm以下の粗、細砂粒を含む	良好	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄橙～ 黒褐色
	60	396	SD36 ベルト 北	B	土師器	高坏	1/6			径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
	60	397	SD36 R-6	B	弥生土器	器台	完形	上部径12、下部径14.3、 器高11.5		やや粗。径5mm以下の粗・細砂粒を多 く含む	良好	にぶい黄褐色
	60	398	SD36	B	弥生土器	支脚	上部片	上面径7.6、孔径4.5		径5mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
	60	399	SD36	B	弥生土器	蜻壺	1/6	復元口径 7.5		径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
	61	400	SD34 東区	B	弥生土器	甕	1/12	復元口径 74		径4mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
	61	401	SD34 東区	B	弥生土器	甕	小片			やや粗。径3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄褐色
	61	402	SD34 南区 黄褐色中砂	B	弥生土器	甕	胴下部 片			粗。径3mm以下の砂粒を多く含む。赤 色粒も含む	良好	外:にぶい橙色 内:褐灰色

第4表 I区2面出土土器・土製品観察表(4)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
61	403	SD34 (SD23西黄色中砂土器群)	B	土師器	甕	1/6	復元口径 16.6	径 3mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	浅黄橙色
61	404	SD34 東区	B	弥生土器	甕	ほぼ完形	口径 14、器高 12.3、胴部最大径 15.2	径 3mm 以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙色
61	405	SD36 上層 (ベルト)	B	弥生土器	無頸壺	ほぼ完形	口径 16.9、底径 14.2、器高 16.2	径 4mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
61	406	SD34 南区黄褐色中砂	B	弥生土器	甕	1/2	復元口径 10.2、器高 11	径 3mm 以下の砂粒を含む	良好	外:灰黄色 内:黒色
61	407	SD34 北区	B	弥生土器	甕・壺	小片		径 3mm 以下の砂粒を含む	良好	にぶい橙色
61	408	SD34 東区	B	弥生土器	甕	小片		径 3mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
62	409	SD34 南区黄褐色中砂	B	弥生土器	壺	小片	口径 24	径 3mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
62	410	SD34 黄色中砂土器群	B	土師器	壺	1/6	復元口径 11.8、復元胴部最大径 12.2	径 4mm 以下の砂粒を含む。稀に径 8mm 大の粗砂粒混入	良好	橙色
62	411	SD34 東区	B	弥生土器	高坏	1/3	復元口径 25.6	やや粗。径 2mm 以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙色
62	412	SD34 東区+SD23粗砂中	B	弥生土器	高坏	小片		径 3mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	淡赤橙色～橙色
62	413	SD34 黄色砂層	B	弥生土器	高坏	小片		径 2mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
62	414	SD34 北区	B	弥生土器	高坏	1/2	脚径 15	径 2mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
62	415	SD34 黄色砂層	B	土師器	高坏	小片		径 3mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	浅黄橙色
62	416	SD23 西黄色砂層	B	弥生土器	高坏	小片		径 2mm 以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙色
62	417	SD34 南区黄褐色中砂	B	弥生土器	高坏	1/12	復元口径 34.2	細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
62	418	SD23粗砂+西黄色砂層	B	弥生土器	高坏	小片		細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:黒色 内:口唇部 黒色～褐色
62	419	SD34 北区	B	弥生土器	高坏	小片		径 2mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
63	420	SD34 黄色中砂土器群	B	土師器	器台	1/2	復元口径 12、復元脚径 15.2、器高 18.2	径 2mm 以下の砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	外:橙 内:にぶい褐色
63	421	SD34 黄色砂層	B	弥生土器	器台	1/2	復元口径 12.4、復元脚径 12.2、器高 16.8	粗。径 5mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
63	422	SD34 北区	B	弥生土器	器台	完形	上部径 9.6、下部径 10.8、器高 10.4	径 4mm 以下の粗・細砂粒を含む	良好	にぶい橙
63	423	SD34 東区+南区	B	弥生土器	器台	上部片	復元口径 14	やや粗。径 3mm 以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙色
63	424	SD34 南区黄褐色中砂	B	弥生土器	器台	上部欠損	復元底径 18	粗。径 5mm 以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	にぶい橙色
63	425	SD34 北区	B	土師器	小型鉢	ほぼ完形	口径 8.8、器高 4	径 3mm 以下の砂粒を含む	良好	外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色
63	426	SD34 南区黄褐色中砂	B	弥生土器	小型鉢	口縁 1/6 欠損	口径 6.6、底径 2.8、器高 4.4	やや粗。径 2mm 以下の砂粒を多く含む	良好	外:にぶい黄褐色 内:灰黄褐色 底部:黒色
63	427	SD36 中層混砂粘土	B	弥生土器	小型鉢	完形	口径 6.3、器高 3.2	径 1mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
63	428	SD34 北区	B	土製品	匙形柄部		現存長 5.5、最大幅 2.6	密。径 2mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	浅黄褐色
63	429	SD36 上層	B	弥生土器	筒形器台	1/6		径 2mm 以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄褐色
63	430	SD34 北区	B	弥生土器	丹塗壺	1/4		密。径 1mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:橙色
63	431	SD34 黄色砂層	B	弥生土器	甕	小片		密。径 1mm 以下の砂粒を含む	良好	にぶい橙色
63	432	SD34 北区	B	須恵器	甕	1/6	復元口径 13.6	細砂粒と黒色粒を含む	良好	淡灰色
64	433	SD23 粗砂中	B	土師器	甕	1/4	復元口径 18	径 2mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
64	434	SD23 下層粗砂	B	弥生土器	壺	2/3	復元口径 10.2、胴部最大径 13.6	径 2mm 以下の砂粒、赤色粒を含む。稀に径 6mm 大の珪化木が混入	良好	橙色
64	435	SD23 粗砂	B	弥生土器	壺	小片	口径 13.2	やや粗。径 5mm 以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	外:明黄褐色 内:浅黄橙～灰褐色
64	436	SD23 北区最下面	B	弥生土器	壺	1/4	復元口径 20	径 3mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
64	437	SD23 黄色砂	B	弥生土器	壺	小片		やや粗。径 2mm 以下の砂粒を含む	良好	橙色
64	438	SD23 粗砂中	B	土師器	壺	小片		径 1mm 以下の砂粒を含む。稀に径 5mm 程の粗砂粒混入	良好	にぶい黄色
64	439	SD23 粗砂下	B	土師器	直口壺	1/4	復元口径 10	径 3mm 以下の砂粒を含む	良好	外:灰黄色 内:にぶい黄褐色
64	440	SD23 粗砂	B	土師器	鉢、壺	小片		密。細砂粒を含む。稀に径 3mm 大の粗砂粒混入	良好	外:にぶい黄褐色 内:灰褐色
64	441	SD23 粗砂中	B	弥生土器	高坏	小片		径 4mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
64	442	SD23 粗砂中	B	弥生土器	小型鉢	1/4	復元口径 9、復元底径 3.4、器高 2.2	径 3mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色

第4表 I 区2面出土土器・土製品観察表(5)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
64	443	SD23 粗砂中	B	弥生土器	小型鉢	完形	口径5.2、最大径5.8、器高4.4	径2mm以下の砂粒を少し含む	良好	にぶい橙色
64	444	SD37	B	弥生土器	甕	1/8	復元口径29	径2mm以下の砂粒、雲母片を含む	良好	浅黄橙色
64	445	SD37 中層	B	弥生土器	壺	小片		やや粗。径3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙色
64	446	SD37 + 中層	B	弥生土器	甕	小片		径4mm以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	外:灰褐色~橙色 内:黒色
64	447	SD37	B	弥生土器	甕	小片	推定底径8	径3mm以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	灰黄褐色
66	458	SD23 粗砂中	B	弥生土器	線刻土製品	小片	復元径10.2	径1mm白色砂含む	良好	灰黄色
66	459	SD23 粗砂	B	土製品	匙形		長さ7、高さ4	径1-2mm白色砂少なく含む	良好	灰黄色
71	484	SD07 R1	A	土師器	甕	1/3	復元口径15	径3mm以下の粗・細砂粒を含む	良好	外:にぶい黄橙色 内・縁部:にぶい黄橙色 内・胴部:褐色
71	485	SD07	A	土師器	壺		復元口径11.6	径2mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	やや不良	淡橙色
71	486	SD07	A	弥生土器	高坏	1/10	復元口径24	やや粗。径4mm以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙色
71	487	SD10	A	土師器	壺		復元口径10	径3mm以下の粗・細砂粒を含む	良好	外:橙色 内:黒色
71	488	SD10中+上面	A	弥生土器	器台	上半部ほぼ欠損	復元口径15、脚部径18、器高19.5	径4mm以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	にぶい橙色
71	489	SS64、R-1	A	土師器	甕		残高10.2、器厚0.35~0.7	2mm以下の石英・長石粒多、2mm以下の褐色粒を少し含む	良好	内:灰黄褐色(10 YR 4/2) 外:灰黄褐色(10 YR 4/2) + 黒い
71	490	SD51 北区	A	弥生土器	甕	1/8	復元口径26	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
71	491	SD51 北区	A	弥生土器	甕	1/4	復元底径8.4	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
71	492	SD51 南区	A	弥生土器	丹塗高坏	小片		密。径2mm以下の砂粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい黄橙色
74	493	SX21 R2	A	弥生土器	壺	小片	口径26	径3mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙色
74	494	SX21 R1	A	弥生土器	壺	1/2	復元口径20.7		良好	橙色
74	495	SX21 R3	A	弥生土器	壺	1/4	復元口径11.2、胴部最大径20.4	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
74	496	SX40	B	弥生土器	甕	小片	底径7.6	粗。径4mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒を含む	良好	橙色
74	497	SX40+SD05西土器群	B	弥生土器	壺	1/2	復元口径19.3	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
75	498	SX46	A	弥生土器	甕	1/3	口径22、頸部径18.8	径2mm以下の白色砂粒、径1mm以下の金雲母片を少し含む	良好	灰黄(2.5 Y 7/2)
75	499	SX46 一括	A・B	弥生土器	蓋			径2mm以下の白色砂粒を多く含む。径1mm以下の金雲母片を多く含む	良好	淡橙(5 YR 8/4)
75	500	SX46 R-2	A・B	弥生土器	鉢	完形	口径16.3、最大径17.5、底径6.2、器高8.2	径3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	良好	灰白(7.5 Y 8/2)
75	501	SX46 東側	A	弥生土器	壺	1/4	口径22.2、頸部径19.6	径2mm以下の白色砂粒を多く含む	良好	浅黄(2.5 Y 7/3)
75	502	SX46 R-6	A・B	弥生土器	丹塗壺	1/3	口径12.6、頸径10.6、最大径16.3、穿孔外0.6内0.2	微細な金雲母を含む	良好	内面・淡橙(5 YR 8/4) 丹・赤橙(10 R 6/8)
75	503	SX46 東側	A	弥生土器	丹塗小壺	1/2	口径9.6、頸部径8.3、最大径11.6、底部径5、器高8.1	径3mm以下の白色砂粒を含む	良好	にぶい黄橙(10 YR 7/2) 丹・橙(2.5 YR 6/8)
75	504	SX46 R-1	A・B	弥生土器	壺	ほぼ完形	口径10.5、頸部径8.7、最大径10.9、底径6、器高10	径3mm以下の白色砂粒をやや多く含む。微細な金雲母を多く含む	良好	灰白(7.5 Y 8/2)
75	505	SX46上 暗褐色シルト上面	B	弥生土器	高坏	小片		径2mm以下の白色砂粒を含む。微細な黒雲母、金雲母を多く含む	良好	灰白(5 Y 8/2)
76	506	SX13 R6	A	弥生土器	甕	1/3	復元底径9.6	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
76	507	SX13 R16	A	弥生土器	甕	小片	口径25	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
76	508	SX13 R13	A	弥生土器	甕	1/4	復元口径28	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
76	509	SX13 R6	A	弥生土器	甕	1/4	復元口径23、底径7.8	径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
76	510	SX13 R13 ③	A	弥生土器	甕	1/8	復元口径17	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
76	511	SX13 R13	A	弥生土器	甕	1/3	復元底径9.4	径4mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	橙色
76	512	SX13	A	弥生土器	甕	小片		径2mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄褐色
76	513	SX13 R5	A	弥生土器	鉢	1/2	口径16、底径5、器高7.8	粗。径7mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
76	514	SX13 R13 ②	A	弥生土器	鉢	1/4	復元口径14.2、復元底径6.6、器高9.2	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
76	515	SX13 R-2	A	弥生土器	高坏	1/2	復元口径18	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
76	516	SX13 R12	A	弥生土器	高坏	1/3	復元口径16	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
76	517	SX13 R14	A	弥生土器	高坏	小片		密。径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
77	518	SX13 R12	A	弥生土器	壺	1/8	復元口径20	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色

第4表 I区2面出土土器・土製品観察表(6)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
77	519	SX13 R10	A	弥生土器	壺	1/4	復元口径 21.4	密。精良。細砂粒、赤色粒を少し含む	良好	外:丹 内:にぶい黄橙色
77	520	SX13+SX13 R13	A	弥生土器	壺	2/3	復元口径 22.4	精良。密。細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
77	521	SX13 R9	A	弥生土器	壺	小片	口径 22	やや粗。径 3mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	浅黄橙色
77	522	SX13 R11	A	弥生土器	丹塗瓢形土器	口頭部、胴上部、底部	復元口径 19.4、底径 11	口頭部:径 2mm 以下の砂粒を含む 胴上部、下部:精良。径 2mm 以下の砂粒、赤色粒を少し含む	良好	外:丹 内:浅黄橙色
77	523	SX13	A	弥生土器	蓋	3/4	径 12.9、高さ 3.4、つまみ径 2.5	密。径 1mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
77	524	SX13	A	弥生土器	無頸壺	1/3	復元胴部最大径 20.2	径 3mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
77	525	SX13 R12	A	弥生土器	壺	小片	口径 14.2	径 2mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
77	526	SX13 R8	A	弥生土器	壺	小片	底径 5.2	径 2mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:淡赤橙~にぶい橙色 内:橙色
77	527	SX13 R13 ①	A	弥生土器	壺	1/3	復元底径 5	径 2mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
77	528	SX13+SX13 R4	A	弥生土器	壺	1/2	口径 9.8、底径 4.4、器高 9.6	精良。密。細砂粒と赤色粒を含む	良好	橙色
77	529	SX13 R7	A	弥生土器	壺	1/2	口径 9.6、底径 5、器高 7.6	径 3mm 以下の砂粒を含む	良好	外:にぶい黄橙色 内:黒色
77	530	SX13	A	土製品	匙形	柄部	長さ 4.3、径 1	精良。密。細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙
78	531	SX16 R2	A	弥生土器	甕	3/4	復元口径 17.2、復元底径 9.8、器高 15.2	径 4mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
78	532	SX16 R-3	A	弥生土器	甕	1/2	口径 20.5、底径 9、器高 18.8	径 3mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
78	533	SX16 R10	A	弥生土器	壺	1/2	口径 12、底径 6.2、器高 12.1	径 4mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
78	534	SX16 R1	A	弥生土器	壺	完形	口径 10.5、底径 5、器高 10.5	径 3mm 以下の砂粒を含む	良好	にぶい橙色
78	535	SX16 R4	A	弥生土器	壺	1/4	復元口径 9.4、復元底径 5.1、器高 10.8	径 4mm 以下の粗・細砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色
78	536	SX16 R9	A	弥生土器	壺	1/2	口径 11.5、復元底径 5.2、器高 11.4	径 3mm 以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色
78	537	SX16 R8	A	弥生土器	壺	1/2	復元口径 12	径 3mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
78	538	SX16 R18	A	弥生土器	壺	小片	口径 11.2	密。径 1mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
79	539	SX20 R15	A	弥生土器	甕	1/4	復元口径 25.6、底径 7.9、器高 32.2	径 5mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:にぶい橙色 内:灰褐色
79	540	SX17 (SX52)	B	弥生土器	甕	1/8	口径 30.6	径 4mm 以下の白色砂粒を多く含み、微細な金雲母片を含む	良好	にぶい橙 (7.5 YR 7/4)
79	541	SX08 下 +SD05 上・下層	A	弥生土器	壺	1/3	復元口径 20.8	径 3mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
79	542	SX20 (SX14)	A	弥生土器	蓋	完形	口径 12.3、器高 2.5	径 1mm 以下の砂粒を少し含む	良好	橙色
79	543	SX17 (SX52)	A	弥生土器	壺	1/9	口径 9、最大径 11	径 1mm 以下の程度の白色砂粒を多く含む。微細な金雲母片を少し含む	良好	橙 (5 YR 7/6)
79	544	SX17 (SX14) R22	A	弥生土器	壺	小片	最大径 12.4、底径 4.8	径 2mm 以下の砂粒、黒色粒を含む	良好	外:灰黄色 内:灰黄~黒色
79	545	SX17 (SX14) R21	A	弥生土器	器台	1/3	復元上部径 11.6、復元脚径 14、器高 17.8	径 3mm 以下の砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	橙色
79	546	SX20 R13	A	弥生土器	鉢	1/5	復元口径 18.6	径 3mm 以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙色
79	547	SX17 (SX08)	A	弥生土器	高坏	小片		径 2mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
79	548	SD05 付近 R7	A	土製品	匙形	柄欠損	残存長 7.9、最大幅 6	径 3mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
80	549	SX14 R11	A	弥生土器	甕	1/2	口径 28.2、底径 8.2、器高 34.3	径 2mm 以下の砂粒を含む。赤色粒を少し含む	良好	浅黄橙色
80	550	SX14 R8	A	弥生土器	甕	1/2	復元口径 27.6	径 4mm 以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	にぶい橙色
80	551	SX14 R1	A	弥生土器	壺	小片	底径 6	精良。密。細砂粒、赤色粒を少し含む	良好	にぶい橙色
80	552	SX14 R2、R4、R9	A	弥生土器	壺	1/2	復元口径 27.6	径 4mm 以下の粗・細砂粒を少し含む	良好	浅黄橙色
80	553	SX21 R2	A	弥生土器	壺	1/2	口径 26.3、底径 6.6、器高 27.2	径 4mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
80	554	SX14 R11 ②	A	弥生土器	丹塗壺	口縁~胴上部片、底部片	口径 32、底径 7.8		良好	
81	555	SX14 R2 R3	A	弥生土器	瓢形土器	1/3	復元底径 16.8	径 3mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	肩部外:にぶい橙色 底部外:橙色 肩部内:黒色 底部内:灰黒色
81	556	SX08 と SX14 の間	A	弥生土器	高坏	1/4	復元口径 17.6	径 2mm 以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色

第4表 I区2面出土土器・土製品観察表(7)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
82	557	SX18 (SX11) R46	A	弥生土器	甕	1/2	復元口径29、底径9、器高27	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:橙色 内:褐灰~黒色
82	558	SX18 R19	A	弥生土器	甕	1/3	復元口径33.4、底径8.7	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	浅黄橙色
82	559	SX18 (SX11) R45	A	弥生土器	甕	1/2	口径21.1、底径8、器高23.6	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
82	560	SX18 (SX11) R-25	A	弥生土器	甕	3/4	口径28.4	径2mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部外:灰黄褐色 口縁部内:橙色
82	561	SX18 (SX11) R-25	A	弥生土器	甕	小片	底径7.8	径2mm以下の砂粒を含む	良好	底部外:橙色 底部内:灰褐色
82	562	SX18 (SX11) R44	A	弥生土器	壺	1/2	口径12.2、底径6.4、器高12.2	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
82	563	SX18 R25	A	弥生土器	壺	1/2	復元口径11、底径5.6	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
82	564	SX18 (SX11) R42	A	弥生土器	壺	1/4	復元口径10.4、復元底径4.4、器高7.9	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
82	565	SX18 (SX11) R-18	A	弥生土器	蜻壺	1/3	復元口径8	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
82	566	SX18 (SX11) R25	A	弥生土器	器台	上部片	径10.6	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
83	567	SX18 (SX11) R-1	A	弥生土器	壺	1/3	復元口径31.6、孔径2.5	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
83	568	SX18 (SX11) R-3	A	弥生土器	壺	1/2	復元胴部最大径(凸帯部)28	径2mm以下の砂粒を多く含む	良好	外:にぶい橙~褐灰色 内:にぶい黄橙色
84	569	SX11 R-15	A	弥生土器	甕	1/6	復元口径42	径3mm以下の砂粒を含む	良好	外:灰黄褐色 内:黄褐色
84	570	SX11 R23	A	弥生土器	甕	1/3	復元口径32	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
84	571	SX11 R26	A	弥生土器	丹塗甕	1/4	復元口径30.6	密。細砂粒、赤色粒を少し含む	良好	外:丹 内:橙色
84	572	SX11 R14 ①	A	弥生土器	甕	口縁~胴上部片	口径21.6	径3mm以下の砂粒を含む	良好	外:にぶい橙 内:橙色
84	573	SX11 (SD07をまたく)	A	弥生土器	壺	2/3	復元口径19.4	密。径2mm以下の砂粒と赤色粒を少し含む	良好	にぶい黄橙色
84	574	SX11 R14	A	弥生土器	丹塗壺	1/3	復元口径30.7、復元底径9.3、器高33.3、胴部最大径31.2	径5mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
84	575	SX11 R-11	A	弥生土器	丹塗壺	1/2	胴部最大径(凸帯部)28.1	密。径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
84	576	SX11 R-17	A	弥生土器	丹塗壺	1/3	復元口径29.2	密。径2mm以下の砂粒、赤色粒を少し含む	良好	外、内側口頸部:丹 内側胴部:明黄褐色
84	577	SX11 R24 +R37	A	弥生土器	丹塗壺	1/4		径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
85	578	SX11 R23、R24	A	弥生土器	壺	1/2	復元口径17.2、復元底径8、器高20.2	径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:橙色 内:にぶい橙色
85	579	SX11 R35	A	弥生土器	壺	1/2	口径14.2、底径6.9、器高16.7	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
85	580	SX11 R36	A	弥生土器	壺	1/2	口径13、復元口径7、器高14.6	径1mm以下の砂粒、赤色粒を少し含む	良好	橙色
85	581	SX11 R12	A	弥生土器	壺	完形	口径13.3、底径5.6、器高14.5	径3mm以下の砂粒を含む	良好	橙色
85	582	SX11 R41	A	弥生土器	壺	ほぼ完形	口径11.3、底径5、器高10.1	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
85	583	SX11 R27	A	弥生土器	器台	1/3	復元上部径12、復元下部径14.8	径3mm以下の砂粒、細砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
85	584	SX11 R30	A	弥生土器	丹塗器台		受部径20.4、脚径27.4	密。径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい褐色
85	585	SX11 R28	A	弥生土器	器台	1/2	復元脚径20.4	径5mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
85	586	SX11 R34	A	弥生土器	器台	3/4	上部径15.2、下部径17、器高21	径4mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
85	587	SX11 R33	A	弥生土器	器台	下部1/2	復元径16	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙~にぶい黄橙色
86	588	SX15北	A	弥生土器	甕	1/8	復元口径33	径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
86	589	SX06下+SX15	A	弥生土器	壺	1/4		径3mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄褐色
86	590	SX15北	A	弥生土器	高坏	小片		径4mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄褐色
86	591	SX15南	A	弥生土器	器台	小片		径2mm以下の砂粒を含む。径5mm以下の赤色粒を多く含む	良好	橙色
86	592	SX09+SD01	A	弥生土器	甕	1/2	復元口径29、復元底径8.2、器高34.1	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	褐色~黒色
86	593	SX09下面	A	弥生土器	壺	1/2	口径31.8、底径8.2	径5mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙
86	594	SX09	A	弥生土器	壺	1/2	胴部最大径17	やや粗。径4mm以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	にぶい橙色、外面は全体的に黒ずんでいる
86	595	SX09	A	弥生土器	壺	1/2	復元口径16	径5mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:褐色 内:橙~黒色

第4表 I区2面出土土器・土製品観察表(8)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
87	596	SX06	A	弥生土器	壺	口縁～胴部上部、胴部下部～底部	口径53.6、底径10.4、推定高58.4	径5mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
90	606	SX67 ベルト南	B	弥生土器	壺	口縁～胴部1/2、底部片	復元口径18.2、底径8.6	径7mm以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒を含む	良好	外:浅黄橙色 内:褐灰色
90	607	SX67 ベルト南	B	弥生土器	鉢	1/5		径3mm以下の白色砂粒を非常に多く含む	良好	灰白(10 YR 8/2)
90	608	SX67 ベルト北	B	弥生土器	壺	3/4	復元口径10、器高11.8	粗。径3mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙色
90	609	SX67 ベルト北	B	弥生土器	鉢?	底部		径5mm以下の白色砂粒を多く含む	良好	灰黄(2.5 Y 7/2)
90	610	SX67 ベルト北	B	弥生土器	高坏	小片		径4mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
90	611	SX67 ベルト北	B	弥生土器	器台	1/2	復元受部径14	径3mm以下の粗・細砂粒を多く含む	良好	外:橙色 内:にぶい黄橙色
90	612	SX67	B	弥生土器	器台	脚部欠損	受部径10	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
90	613	SX67 ベルト北	B	弥生土器	器台	1/2	復元径10.6	やや粗。径5mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙色
91	614	SX66 (SD29東)	B	弥生土器	甕	1/7	口径23.9	径3mm以下の白色砂粒を多く含む、径1mm程度の金雲母片を少し含む	良好	浅黄橙(10 YR 8/2)
91	615	SX66 上層 SD51 北区周辺 灰褐シルト	A	弥生土器	甕	小片		径2mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙色
91	616	SX66 (SD43 上灰褐シルト)	A	弥生土器	甕	小片		径4mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色
91	617	SX66 (トレ6、SD43 上層)	B	弥生土器	甕	小片		径1mm程度の白色砂粒を少し含む、微細な金雲母を非常に多く含む	良好	赤(10 R 5/6)と暗褐(7.5 YR 3/3)の混じり
91	618	SX66 (トレ6、SD43 上層)	B	弥生土器	甕	1/4	復元底径9.8	径3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	良好	外面-にぶい橙(5 YR 7/4) 内面-褐灰(10 YR 6/1)
91	619	SX66 SD24 トレンチB	A	弥生土器	甕		復元口径12、底径5.6、器高17.9	1mm程の砂(石英等)多い。赤色土粒多く含む	良好	灰白(7.5 YR, 8/2)
91	620	SX66 (SD43 上)	A	弥生土器	甕	1/2	復元口径7.6	径3mm以下の砂粒を含む。赤色粒を少し含む	良好	外:灰黄褐色 底:橙色 内:黒色
91	621	SX66 SD24 トレンチB	A	弥生土器	甕	小片	底径8.6	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
91	622	SX66 SD24 トレンチB	A	弥生土器	丹塗壺	小片	底径6	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:浅黄橙色
91	623	SX66 SD24 トレンチB	A	弥生土器	無頸壺	1/6	復元口径13、孔径 約0.5	径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい橙～灰黒色
91	624	SX66 (トレ6、SD43 上層)	B	弥生土器	高坏	1/5		径3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	良好	浅黄橙(7.5 YR 8/6)
91	625	SX66 南壁土層 R4	B	弥生土器	高坏	2/3	脚径18.6	やや粗。径2mm以下の砂粒を多く含む。赤色粒を含む。	良好	外:淡橙色 内:にぶい黄橙色

(3) 3面の調査

1面の調査時から調査区内の排水と下面の遺構確認を兼ねたサブトレンチ状の溝を調査区壁際に掘削していたが、その際、A区の東と西の灰青色シルト粘土上で黒灰色粘土を埋土とする溝を確認していた。2面の遺構掘削・記録の終盤に、2面全体に堆積した包含層SX0066に対して、下面確認トレンチを数カ所入れたところ、2条の溝(SD0024とSD0043)を確認した。また、SD0012・0042(東)は2面で検出・掘削していたが、土層観察から、SX0066下位と判断した。よって、SX0066の下位、灰青色シルト粘土面(無遺物層・地山)を3面とした。3面については、上層包含層SX0066をバックホーで除去して全面調査とすべきであったが、400～500m³と見積もられた排土を調査区外に置くことは空港内・滑走路隣接地という制限上許されず、また調査区内で処理することもできなかったため、まずは人力掘削のトレンチ調査を行うこととした。トレンチ調査の結果によっては、空港側と協議をもって排土処理を工夫し、全面調査を行う判断も必要との見込みであった。しかし、結果として溝以外の遺構は確認されず、トレンチ調査以上の情報収集・記録は望めないと判断して全面調査は行わなかった。SX0066に対する下面遺構確認は、第93図に示したトレンチのほか、調査区壁際に回らせた排水溝、E-4・5区のヒューム管跡を利用した排水溝、地山まで掘り方が及んでいる1・2面の遺構(SD0002・0022・0029・0005・0023・0032・0042・0053)の壁面で行った。

溝(SD)

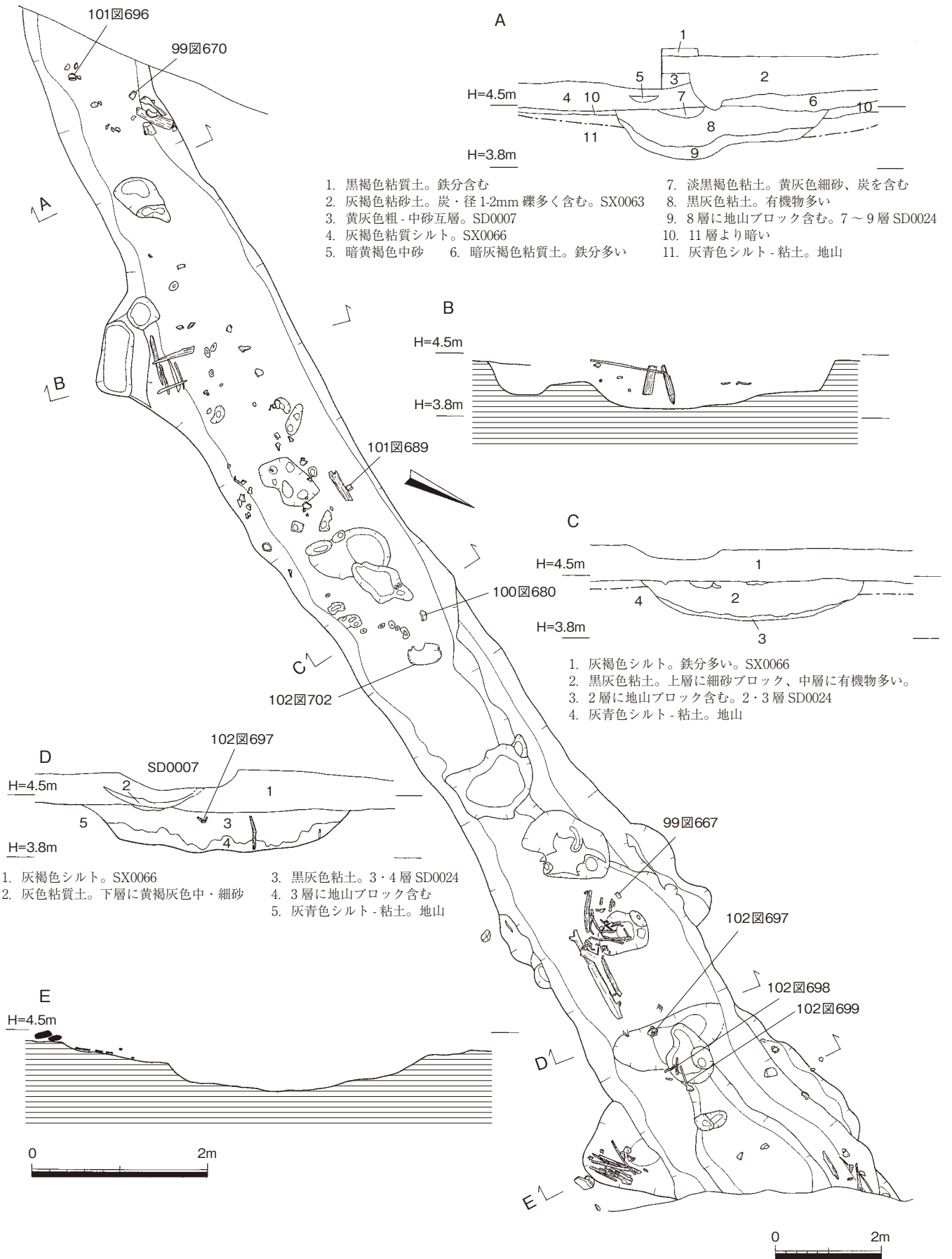
SD0024(第94・95図) F～H-3～5区で確認した北東方向に直進する溝である。断面形は中央が凹む逆台形～緩やかなU字形を呈し、最大幅3.7m、最大深60cmを測る。底面レベルは北東側へわずかに傾斜する。東側は調査区外へ延び、西側はII区のSD0080に連続する。埋土は黒灰色粘土で、中位に有機物を多く含む。底面は凹凸をなす。東側2カ所に平面三角形の張り出し部が設けられる。南側の張り出し部は、溝本流側に付帯施設と考えられる木組みが伴い、張り出し先端が土坑状に窪む。北側の張り出し部には、小児頭大礫と木質・有機物が堆積する。両者には南東側へ分岐するSD0024より小型の溝が設けられていたと考えられる。張り出し部が溝本流部よりも上位に位置することからも、本流から堰等で水量を調整しながらオーバーフローさせた水を張り出し部の先の小型溝へ導水していたと考えられる。SD0024の南東側にはSD0043・0054が走っており、そこへ導水していた可能性も考えられる。

北側では溝に並走する2列の杭列を検出した(第95図)。溝の西側に取り付けられており、溝壁面側の杭列には横に渡された板が遺存していた。横板は溝壁面と杭列の間に渡されており、土留め板と考えられる。横板の北に置かれた径25cmほどの垂角礫も土留めに関連すると考える。杭列間の幅は、50～60cmを測る。杭は54点を取り上げた。形状・法量から丸杭小型(径2～5cm)・中型(径5～7cm)、割杭小型(幅1～5cm・厚さ1～5cm)・中型(幅6～7cm・厚さ3～4cm)・大型(幅12cm・厚さ5cm)、板杭中型(幅6～7cm、厚さ2.5cm)・大型(幅6～7cm、厚さ2.5cm)に分類できる。組成は、小型丸杭(22点、40.7%)：中型丸杭(5点、9.3%)：小型割杭(20点、37.0%)・中型割杭(3点、5.6%)：大型割杭(1点、1.9%)：中型板杭(2点、3.7%)：大型板杭(1点、1.9%)となり、小型丸杭と小型割杭が約78%を占める。先端加工の長さは平均9.8cmである。7点について樹種同定を行ない、スギ-板杭大型、スギ-板杭中型、スギ-割杭中型、クリ-割杭大型、ムクノキ-丸杭中型、センダン-割杭小型、イボタノキ属-丸杭小型という結果を得ている。

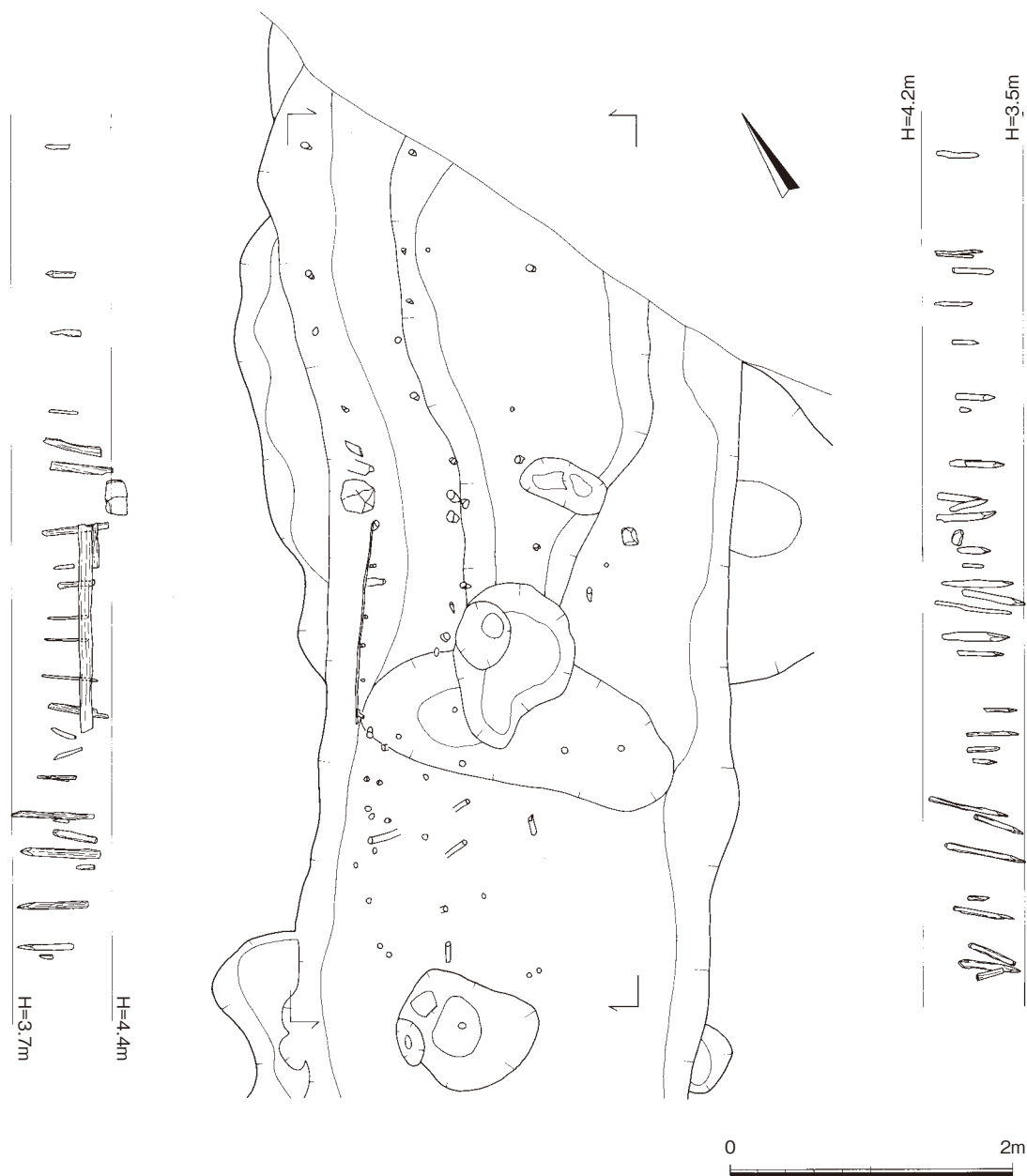
遺物はR番号を付けて個別に取り上げたもの以外は、北からトレンチA～Dに区分けをして取り上げた。トレンチAは土層Dより北側、トレンチBは土層CとDの間、トレンチCは土層AとCの間、



第 93 图 I 区 3 面全体图 (1/200)



第94図 SD0024 実測図(平面図1/100、断面・土層図1/60)

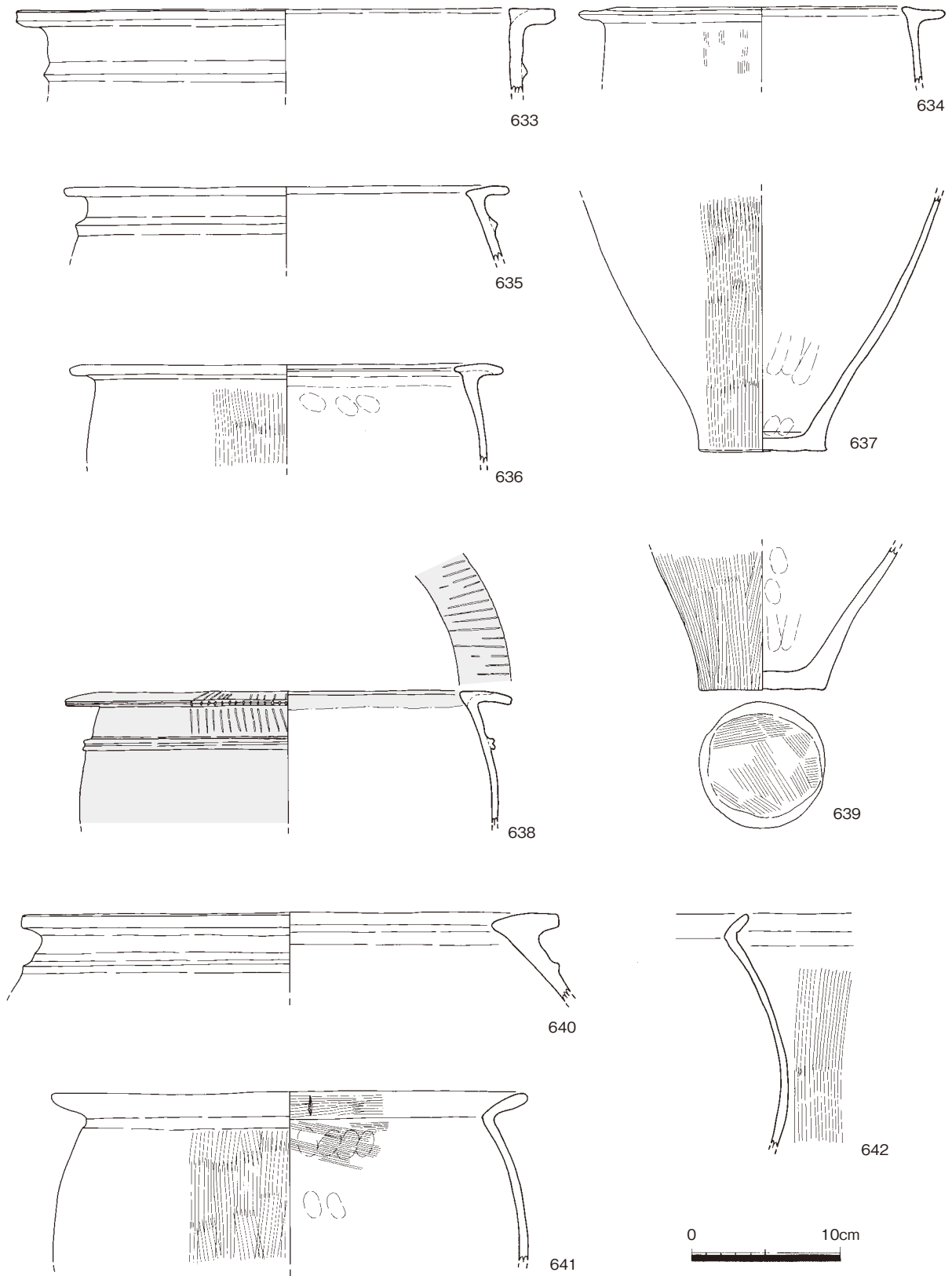


第95図 SD0024 杭列実測図(1/50)

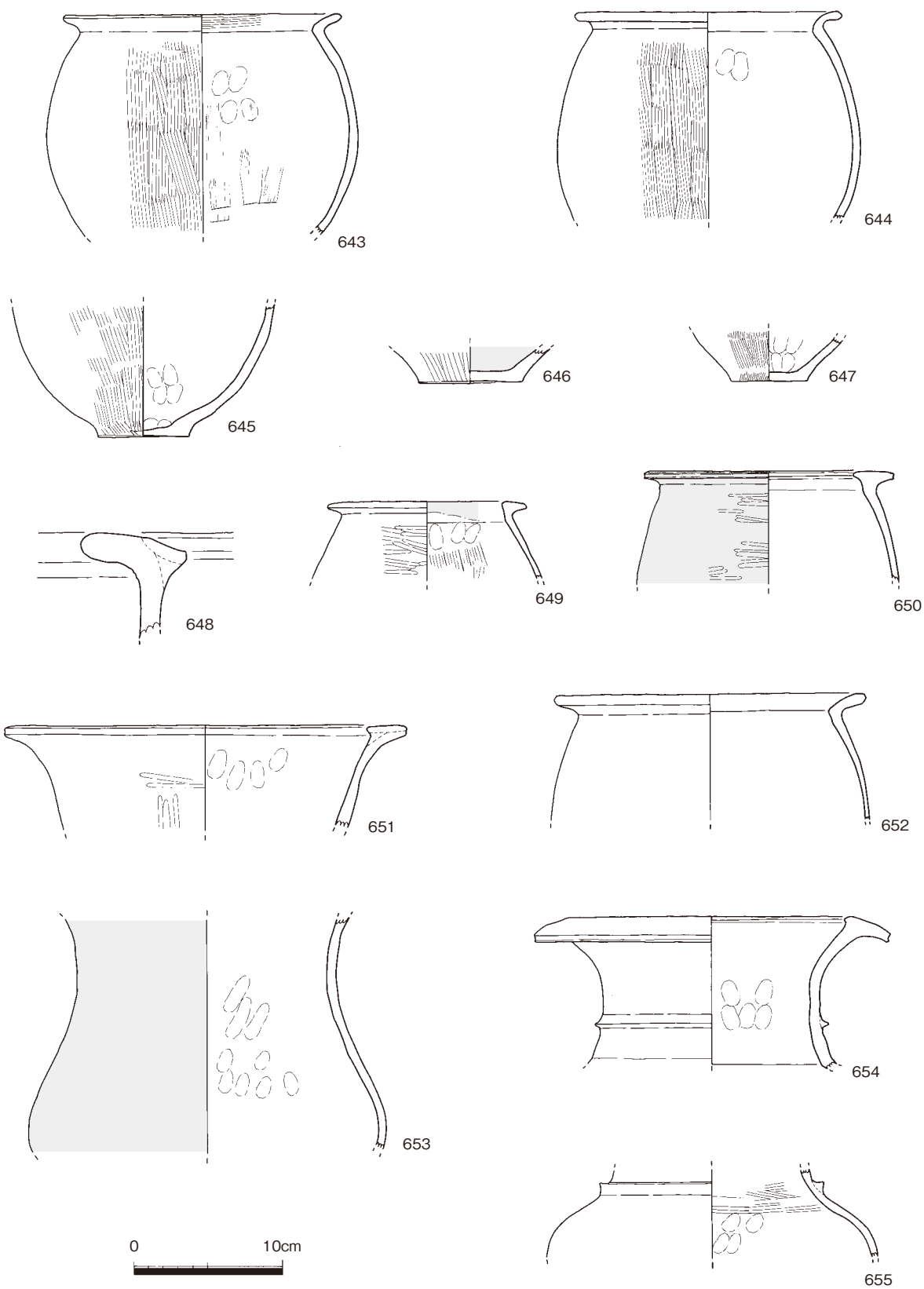
トレンチDは土層Aの南側となる(第94図)。トレンチAでは東側に張り出し部が取り付け、杭列・土留め板が検出され、木製品が多く出土した。トレンチCでは東側に張り出し部が取り付け、丹塗無頸壺が多く出土した。このようにトレンチごとに出土遺物の傾向が異なるため、以下ではトレンチごとに遺物の報告を行う。

出土遺物(第96~102・106図) 甕・壺・鉢・瓢形土器・高坏・無頸壺・蓋・木製品が出土した。土器は丹塗りの比率が高く、特に丹塗りの無頸壺とその蓋が目立つ。石器は石庖丁が出土した程度で出土量は少ない。

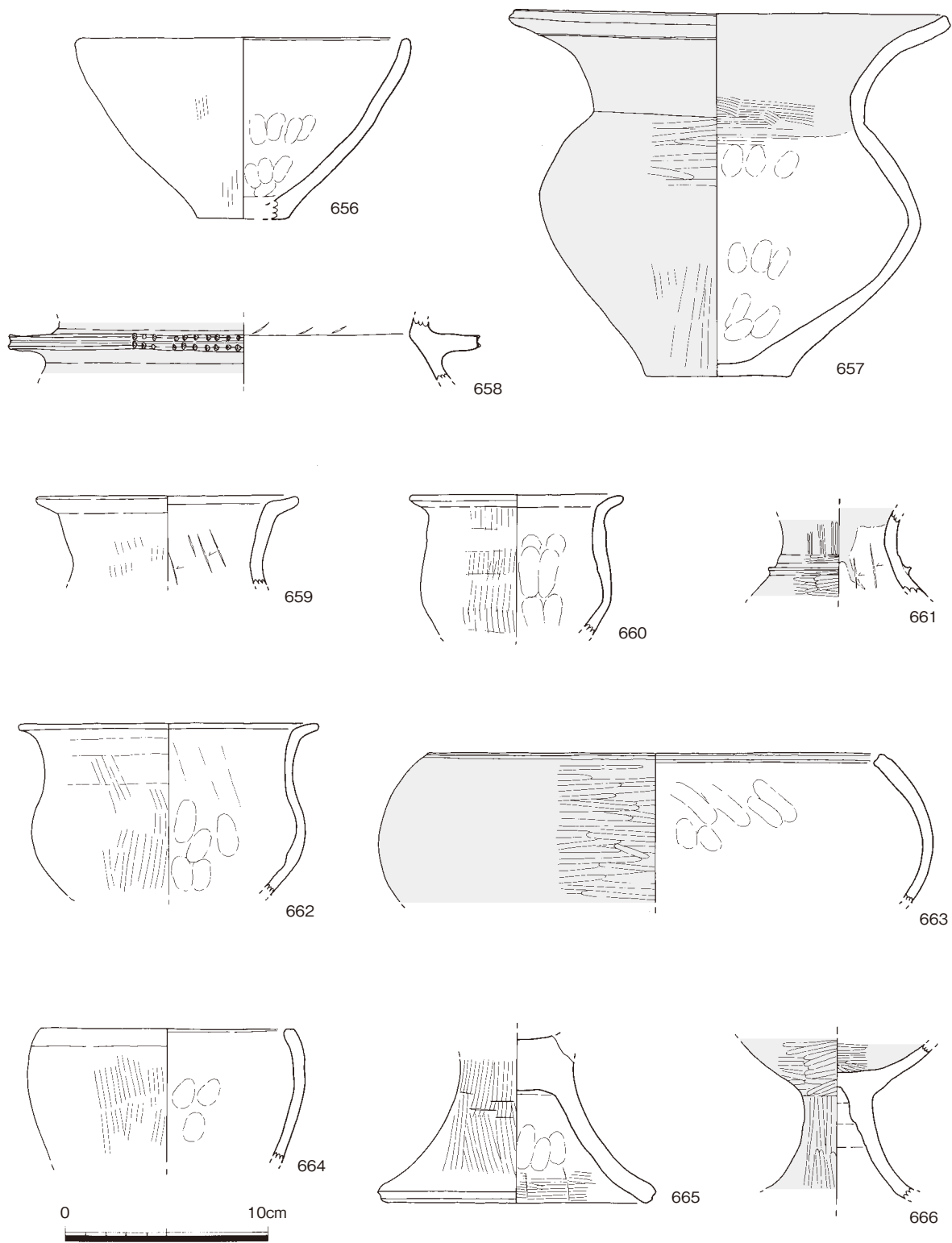
トレンチA出土遺物 甕(633・636・637)・壺(649~651・657)・小型壺(662)・高坏(663・



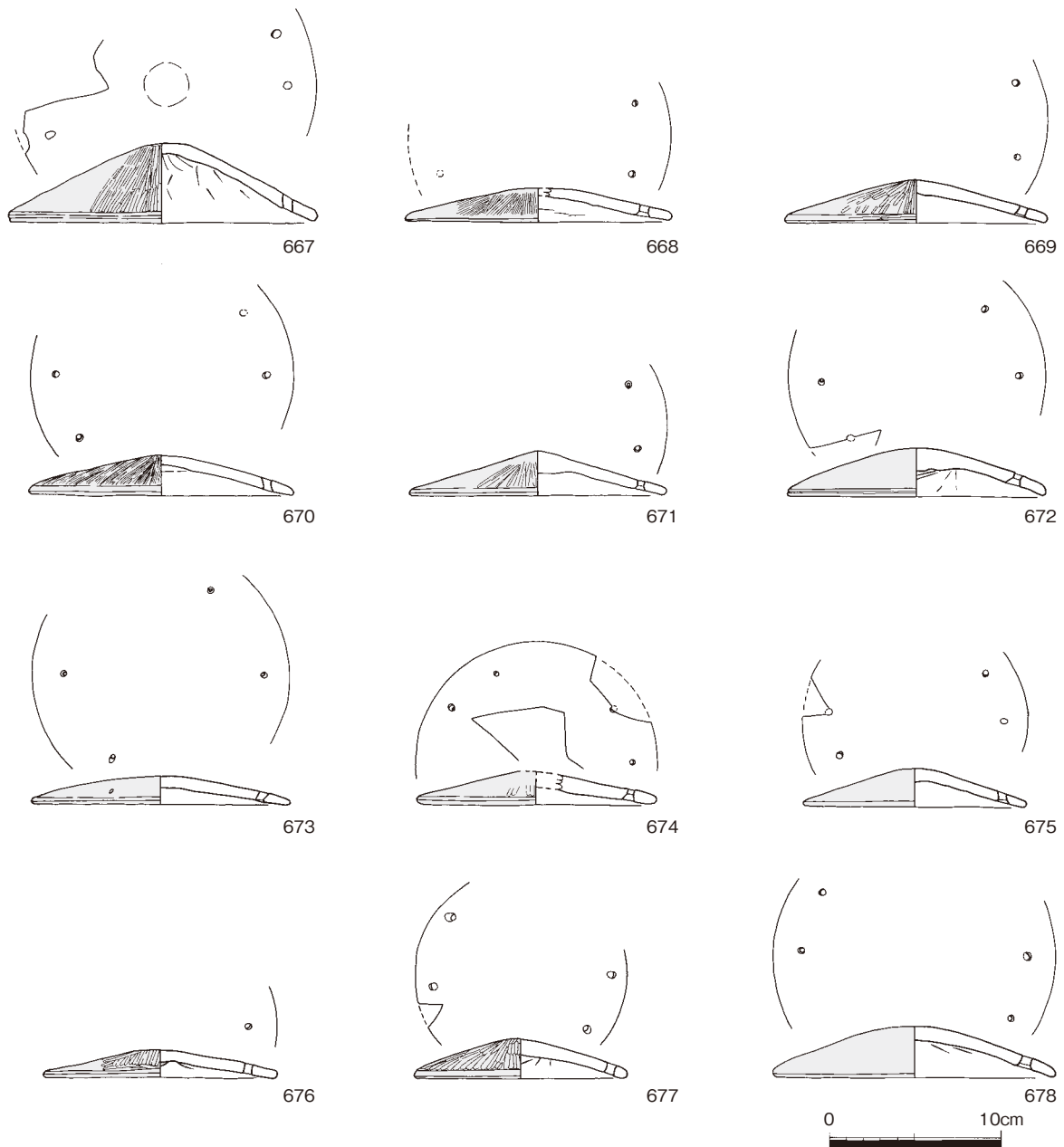
第96図 SD0024 出土遺物実測図(1) (1/4)



第97図 SD0024 出土遺物実測図(2) (1/4)

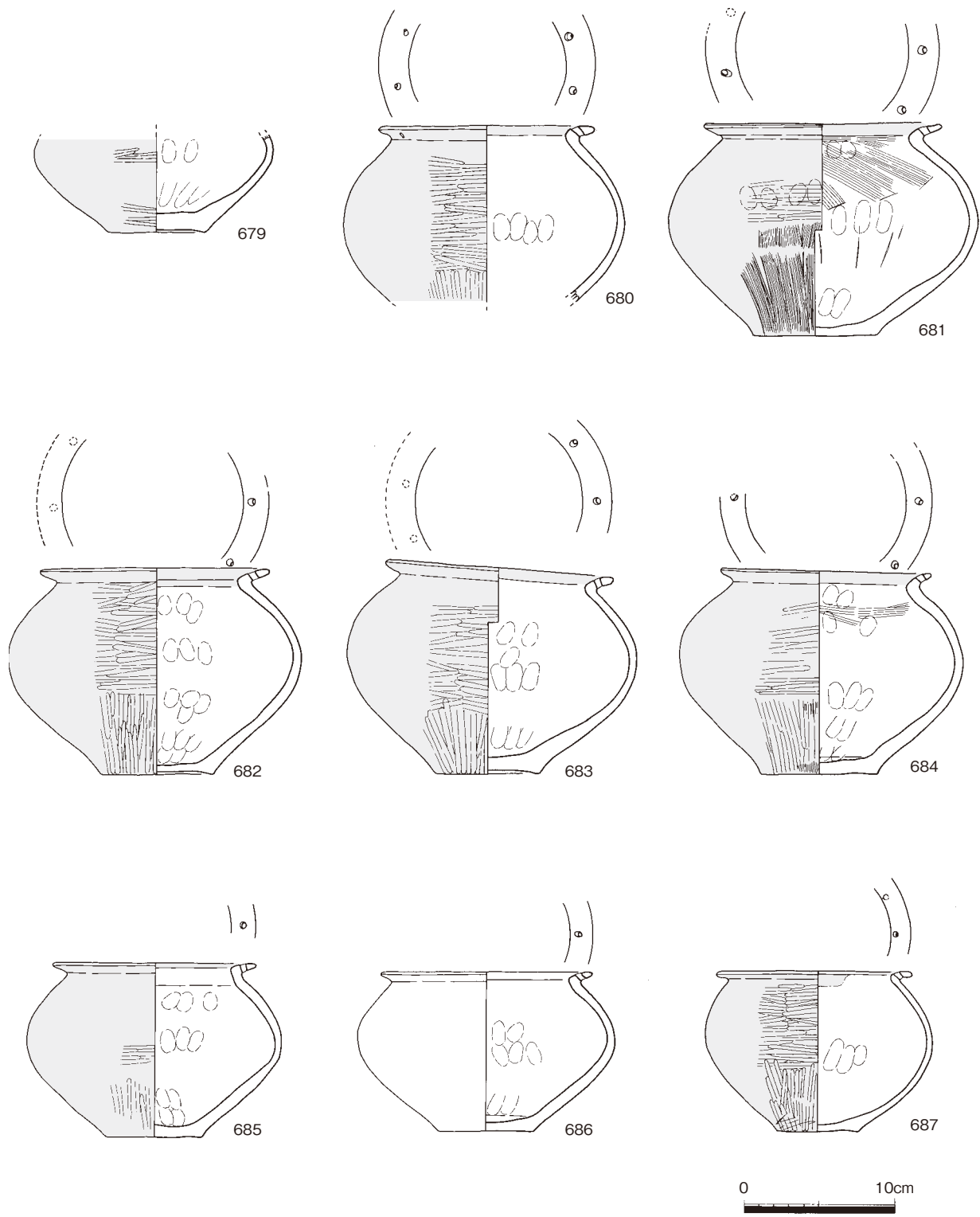


第 98 図 SD0024 出土遺物実測図 (3) (1/3)

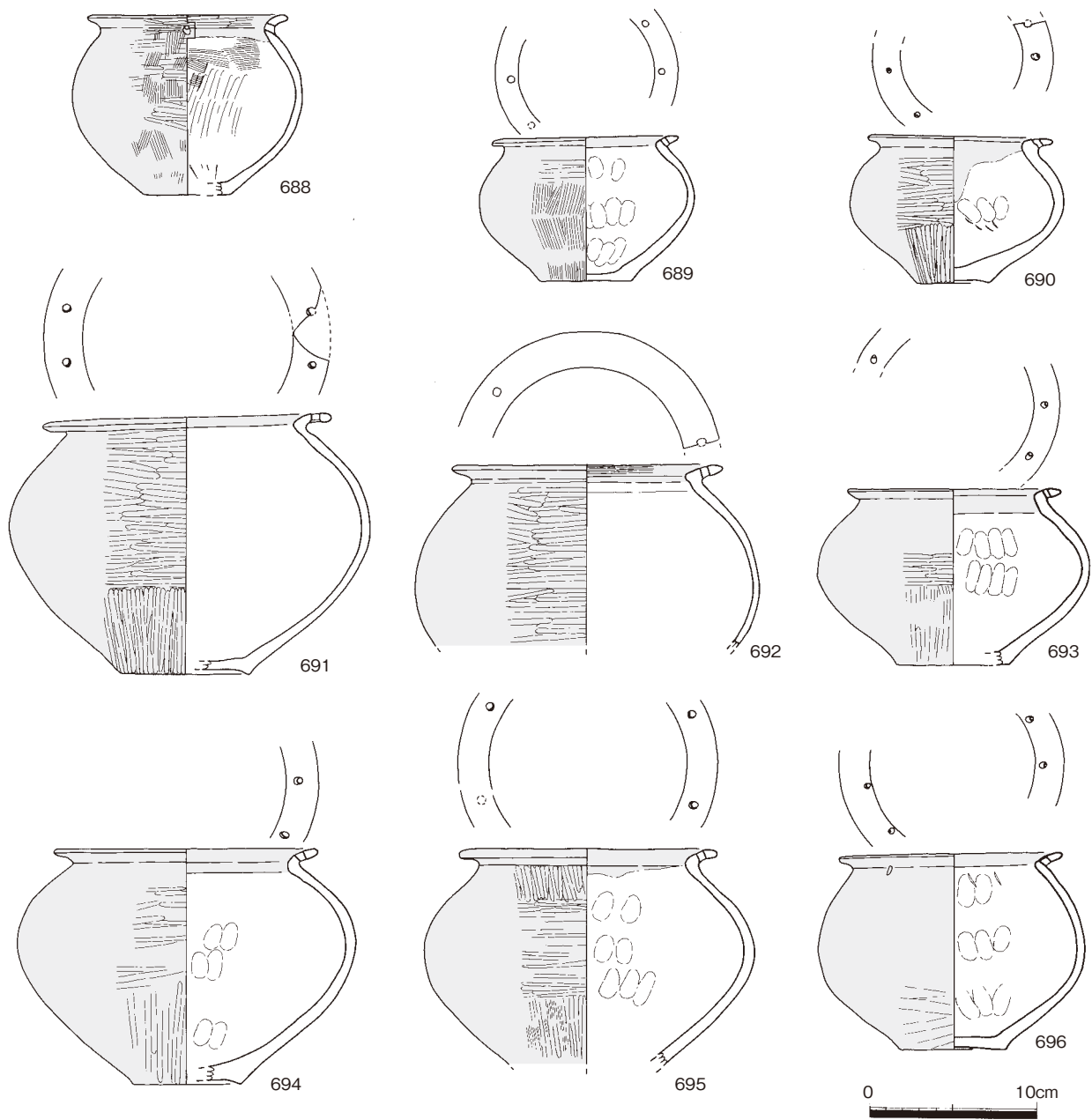


第 99 図 SD0024 出土遺物実測図 (4) (1/4)

665・666)・蓋(667)、木製品(697~701)が出土した。633は中型甕口縁部である。636は甕口縁部である。637は黒塗りの甕底部である。649・650は丹塗りの無頸壺で、胴部は張らない。651は広口壺で、頸部は外傾する。口縁部上面にわずかに丹が残り、外面は黒塗りである。657は丹塗りの中型広口壺で、ほぼ完形である。662は小型壺で、頸部と口縁部の屈曲は意識されながらも明確なものではない。663は丹塗りの高坏坏部である。外面と口唇部に丹が塗られる。665は短い脚部である。666は丹塗りの高坏坏部脚部接合部である。外面と坏部内面に丹が塗られる。663と666は近接して出土したが、復元径や丹塗り箇所が異なるため、別個体である。667は丹塗りの蓋である。以上の土器は須玖I式の特徴を有し、古相を示すものもある。697は、復元径が12~15cmを測るチシャノキ属近似種の把手付高台椀である。幅2~3cmの幅広な工具による削り・削りで成形し、ミガキ等の調整は認められない。A区南ベルトの中央上層から出土した(第94図土層D)。698はコナラ属アカガ



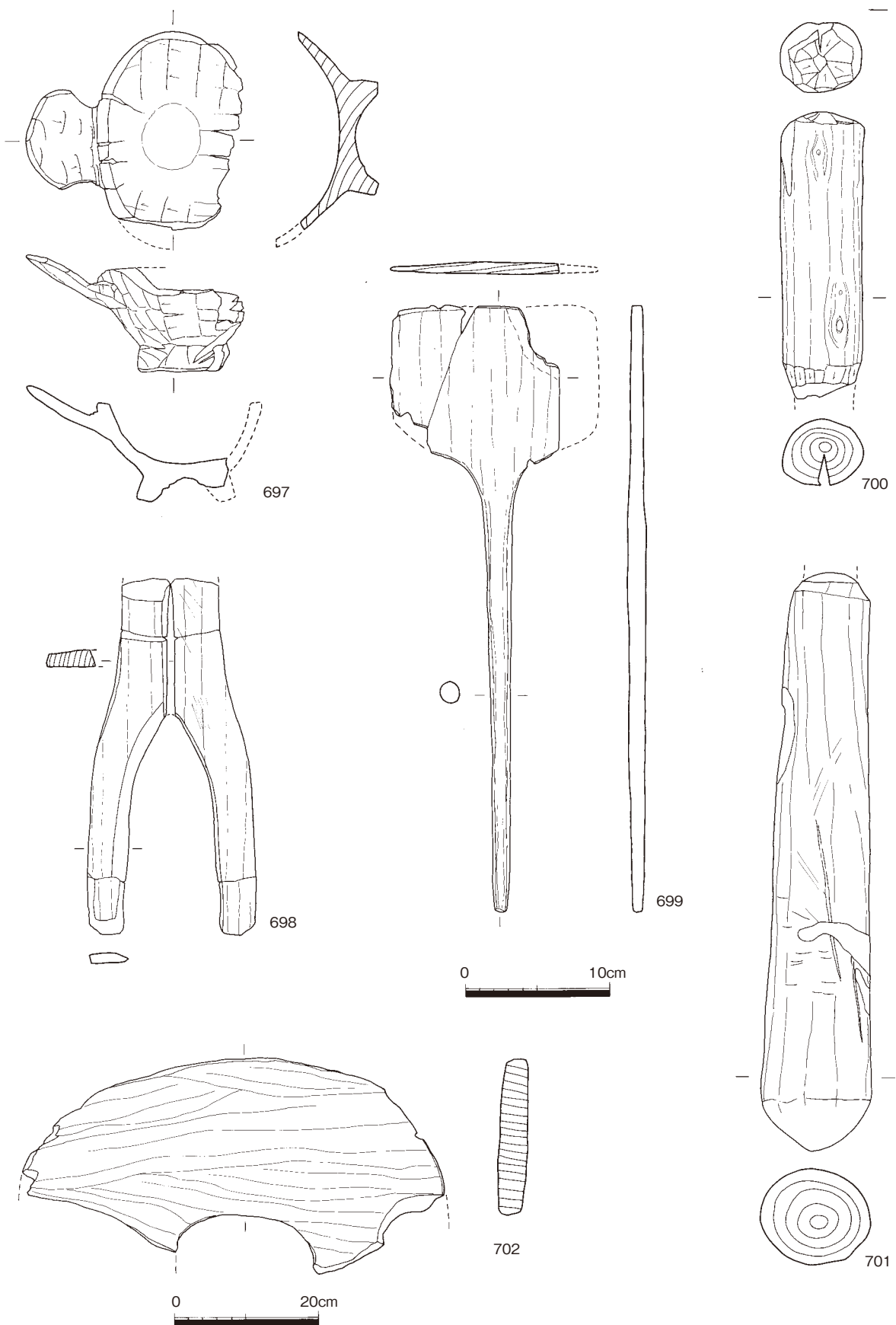
第100図 SD0024 出土遺物実測図(5) (1/4)



第101図 SD0024 出土遺物実測図(6) (1/4)

シ亜属の二又鋏である。A区南側中央から出土した。699はヒノキ科の幅広なへらで、右端は破損し、
 燃烧痕が残る。へら部の先端は断面方形で、左側端は薄く丸みを帯びている。Aトレンチ中央から出
 土した。700・701はコナラ属コナラ亜属クヌギ節の竖杵である。両者は接合しないが樹種が同じで
 近接して出土しており、同一個体の可能性が高い。

トレンチB出土遺物 甕(635・639~641・652)・壺(655)・小型壺(646・647・660)・無頸壺
 (679・680)、ねずみ返し(702)が出土した。635は中型甕の口縁部である。639は甕の底部で胎土
 精良・焼成良好で、ハケメも底部外面まで及ぶ丁寧な作りである。640は中型甕の口縁部である。器
 面の荒れが著しい。641は中型甕の口縁部で、口縁部内面にハケメ工具による刺突が一カ所施される。
 652は甕の口縁部である。646は底部内面に丹が良好に残る。小型壺もしくは鉢の底部であろう。647



第102図 SD0024 出土木器実測図 (702は1/8、他は1/4)

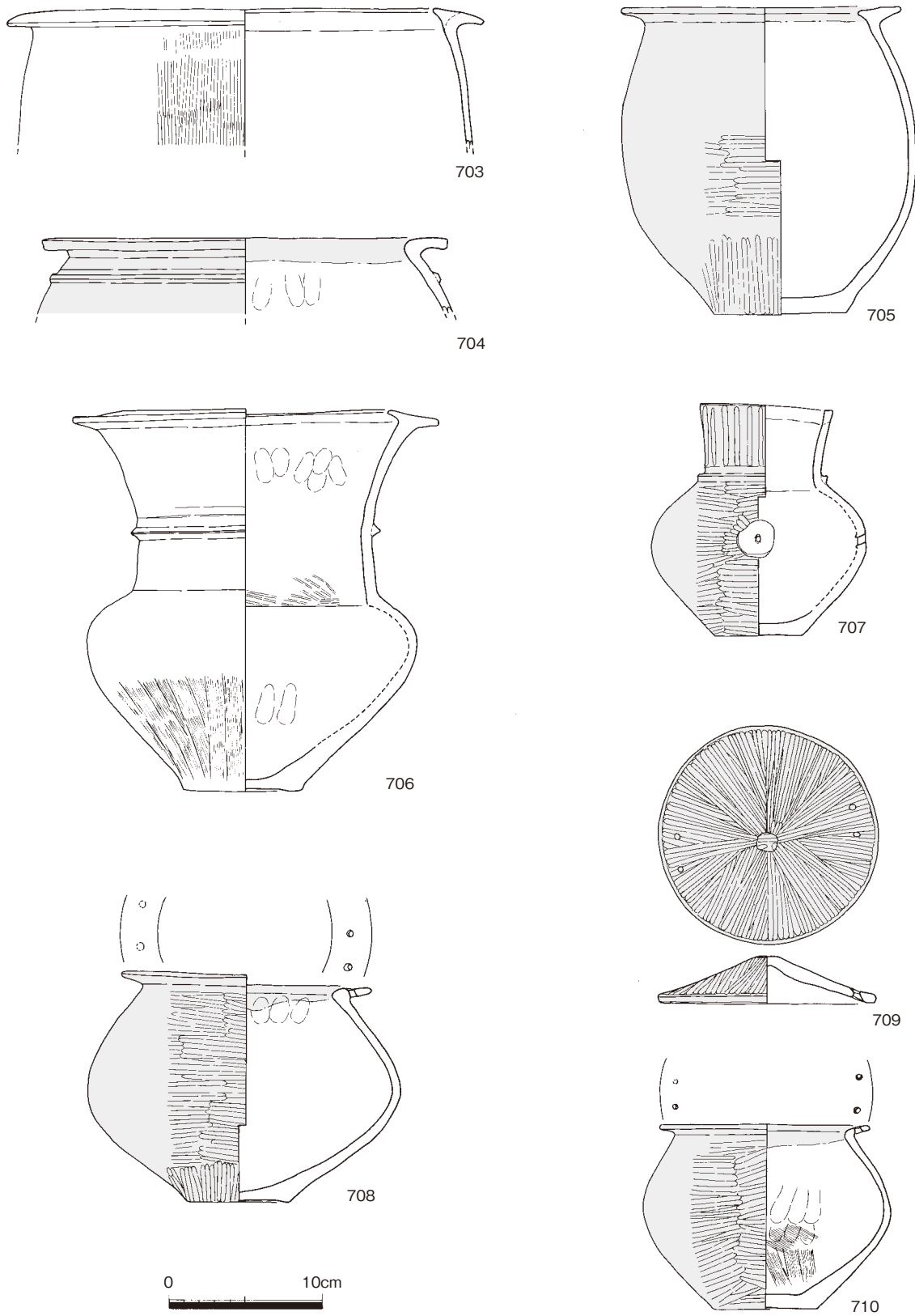
は小型壺の底部である。655は小型壺で、頸部つけ根に断面三角形の細い突帯を貼り付ける。トレンチA上層に同一個体破片がある。660は小型壺で、頸部と口縁部の屈曲は意識されながらも明確なものではない。679は丹塗壺の底部である。680は丹塗無頸壺の上半部で、トレンチC出土破片と接合する。702は、クスノキ製のねずみ返しである。復元法量は外径60cm、貫穴径20cmを測る。土器は須玖I式～II式古段階の特徴を示す。トレンチBの遺物は、取り上げを区別することができなかったが、北側のトレンチA側と南側のトレンチC側で帰属する遺物群が分かれていたものとする。

トレンチC出土遺物 甕(634・638・642～645・648)・壺(653・661)・小型壺(659)・鉢(664)・無頸壺蓋(668～678)・無頸壺(681～691)、石庖丁(726)が出土した。634は中型甕の口縁部で、口縁部平坦面は外側へ傾斜する。638は丹塗甕の口縁部である。口縁部上面、頸部に細線暗文を施す。642は口縁部が短く、胴部が張る壺の形状に近い球形胴甕である。643は球形胴の小型甕で、丁寧な調整で仕上げられる。644は球形胴の甕である。645は甕の底部である。648は、大型甕の口縁部で、甕棺型式の汲田式(K II b～c式)である。653は丹塗壺の肩部で、頸径が広く、肩はほとんど張らない。659は小型壺の口縁部である。661は丹塗長頸壺の頸部付け根で、突帯と頸部の境がタテミガキとヨコミガキの境にもなり、わずかな段をなしている。664は鉢の口縁部である。668～678は丹塗りの蓋である。678はトレンチD・R7と接合した。681～691は丹塗りの無頸壺である。688は同一個体と思われる破片が接合しなかったため、図上復元した。691は、トレンチCのR5・R9・南ベルト下層など複数の取り上げ単位のもの接合した。

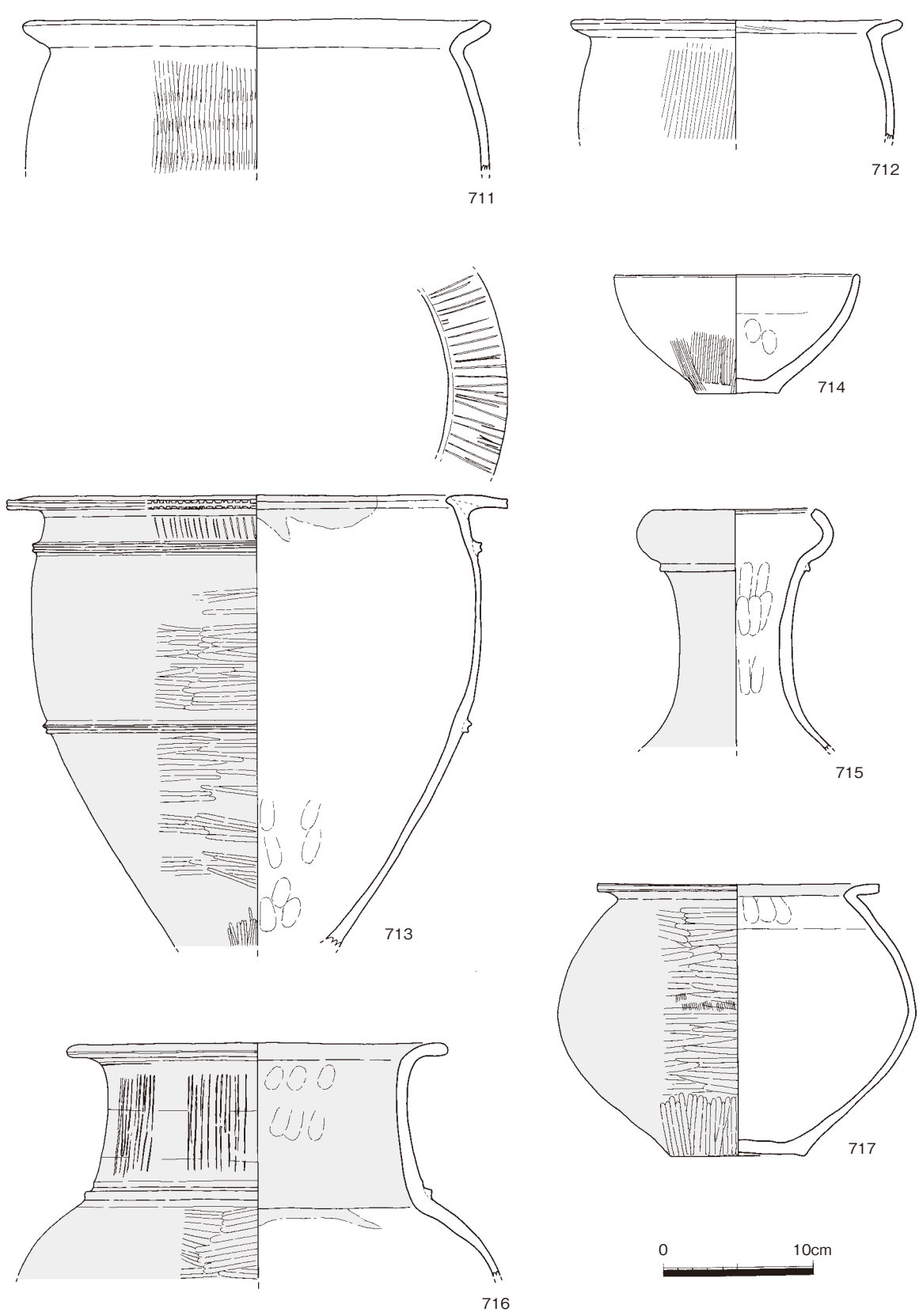
トレンチD出土遺物 壺(654)・鉢(656)・瓢形土器(658)・無頸壺(692～696)が出土した。654は壺である。656は鉢である。658は丹塗瓢形土器の胴部鏝状突帯で、断面形M字の突帯上にヘラ状工具で連続刻みを施す。692～696は丹塗りの無頸壺である。692はR2とR4が接合した。

この他、丹塗土器を含む弥生土器、頁岩片・砂岩片・珪質岩片などがパンコンテナ5箱分出土した。土器は弥生時代中期前葉～後葉・須玖I式～須玖II式古段階に相当する。トレンチAの土器群が須玖I式で古く、トレンチCの土器群が須玖II式古段階で新しい傾向がある。南側のSD0043・0054とともに須玖I式期のI区で最も古い遺構である。

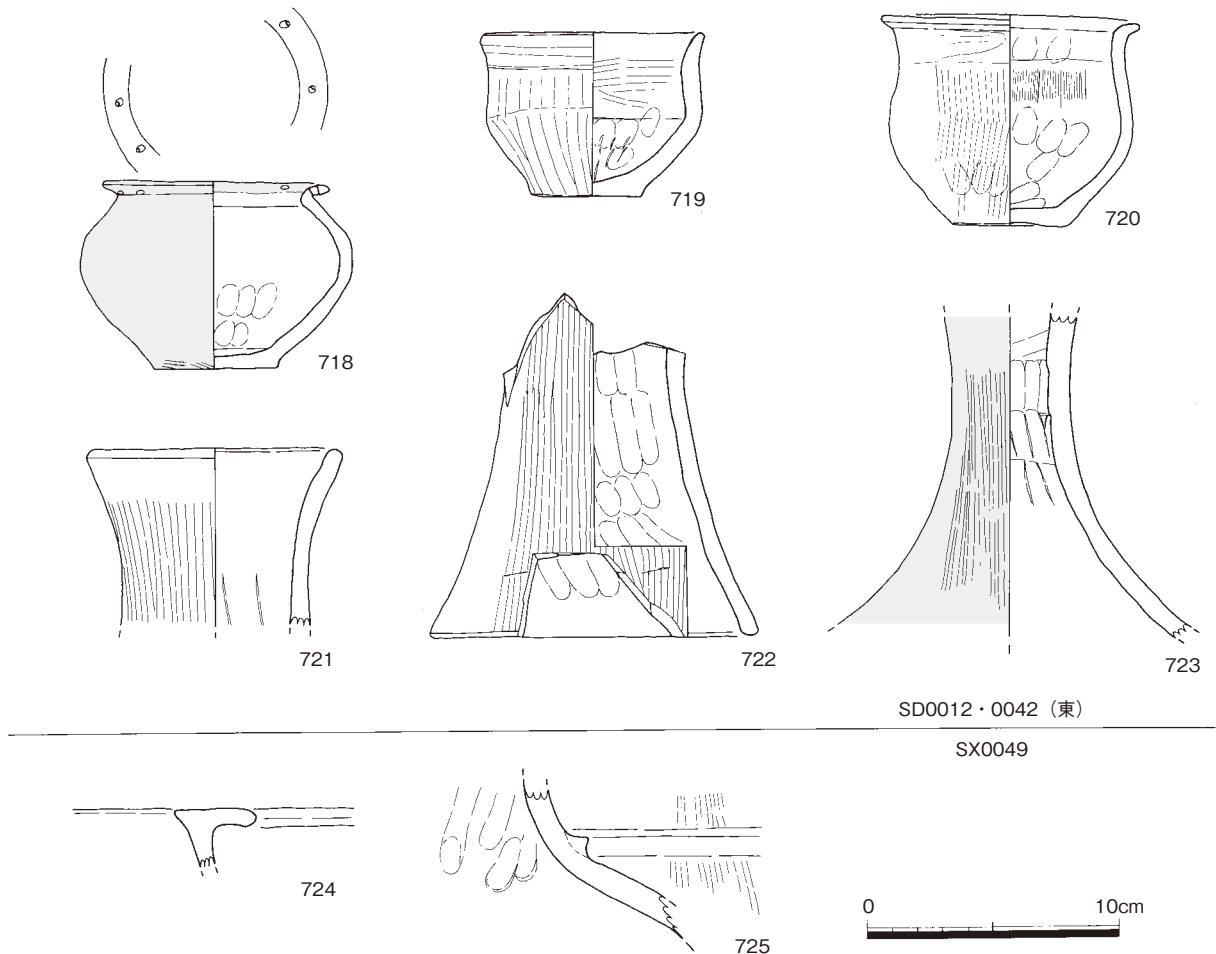
SD0012・SD0042(東)(第42図) H・I～4・5区で確認した南西方向にやや湾曲しながら走る溝である。溝は南側で立ち上がる。その先は1・2面の遺構群が形成されており、不明である。断面形は逆台形を呈し、最大幅8.3m、深さ20～30cmを測る。埋土は淡い黒褐色～黒灰褐色粘土で、底面は凹凸をなす。SX0066下で検出し、SD0042(西)に切られる(第6図D-E土層20～22層、第42図XY土層13～15層)。SD0012とSD0042(東)は掘り方の方向や南側での立ち上がり、底面レベルの類似から同一溝としている。しかし、幅が広く、SD0042(東)とSD0012では埋土の黒味や灰褐色土ブロックの入り方がわずかに異なり、SD0042(西)に切られた部分で両者が切り合っている(別の溝である)可能性もある。後述のSX0049との関連においてもその可能性を考慮する必要がある。SD0042(東)の南端上層に遺物の集中箇所があり、SX0048として取り上げた(図版45-6)。SD0012・0042(東)と2面のSD0042(西)は平面的に重複し、埋土が類似したため、3者の遺物取り上げの混在は否定できない。SD0042(西)の項で既に述べたが、3者の検出・掘削状況について再度記述しておく。A区では2面・SD0003の下で検出した黒灰色粘土を「SD0003下層(黒色粘土)」として掘削し、その西側に堆積した黒灰褐色粘質土を「SD0012」として掘削した。その後、B区ではSD0012の続きを検出しながら、「SD0003下層」については「SD0042」と遺構番号を付け直して掘削した。ベルトを残して掘削を進めたところ、下面中央に一段下がった溝を確認し、「SD0042下層」と



第103図 SX0048 出土遺物実測図(1/4)



第104図 SD0012・0042(東)出土遺物実測図(1/4)

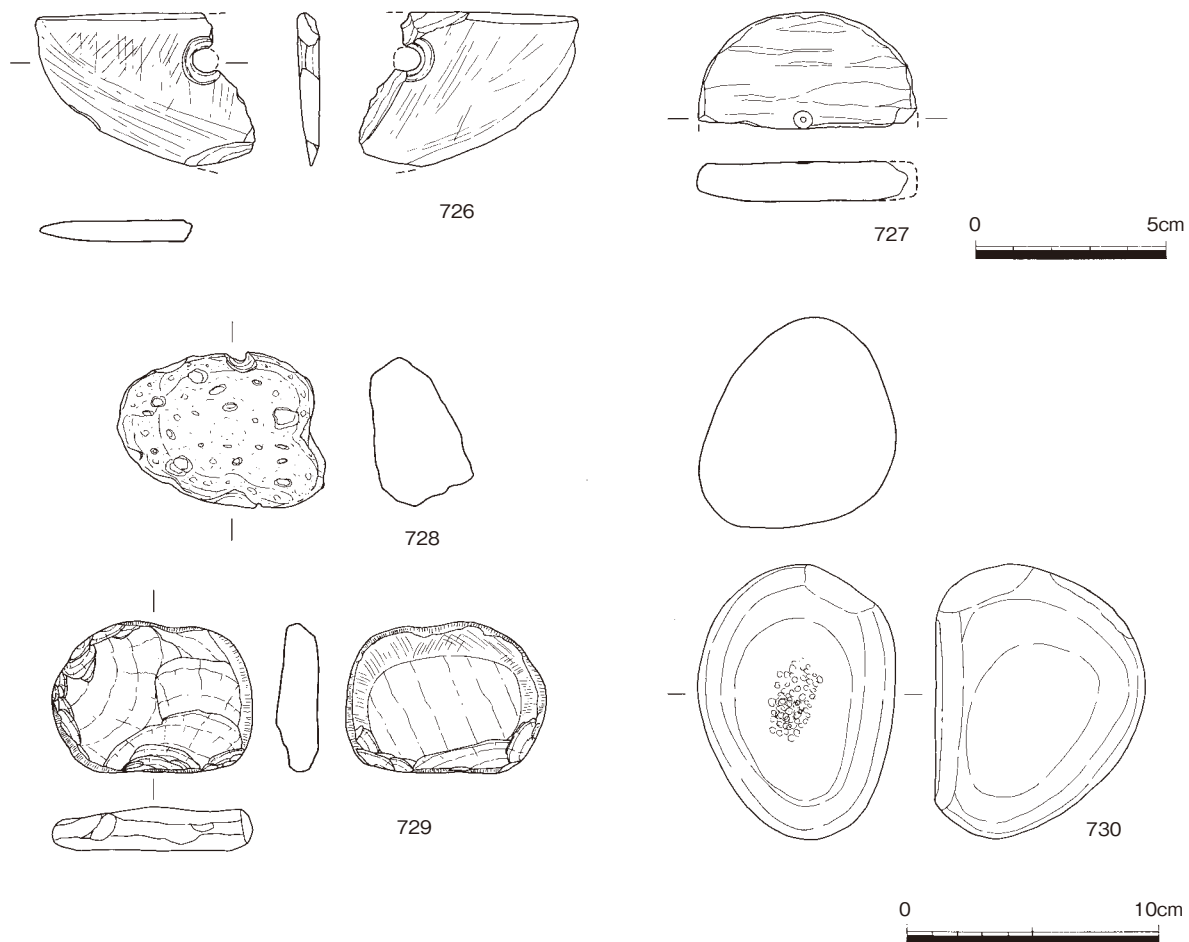


第105図 SD0012・0042 (東)・SX0049 出土遺物実測図 (1/3)

して遺物を取り上げた。その後、土層ベルトの観察からSD0042が西と東に分層できることに気が付き、ベルト遺物のみをSD0042 (西) と (東) に分けて遺物取り上げを行った。「SD0042 下層」はSD0042 (西) の下層ということになる。最終的には土層ベルトXYや調査区東壁土層の観察から、SD0012とSD0042 (東) が中央のSD0042 (西) に切られており、SX0066より下位で3面遺構と位置づけられると結論した。よってSD0042の北区・南区・上層として取り上げた遺物はSD0042 (西) と (東) の遺物が混在している。

出土遺物 (第103～106図) SD0042 (東) の土器群SX0048から、甕 (703・704)・広口壺 (706)・小型直口壺 (707)・丹塗無頸壺 (705・708・710)・丹塗蓋 (709)、敲石 (730) が出土した。704は丹塗りの甕である。705は丹塗りの無頸壺で長胴である。706は完形の広口壺で、土器群中央から出土した。707は胴部に穿孔と円形の剥落痕が認められ、注口がつくと考えられる。頸部には縦位の暗文が施される。730は玄武岩製の敲石で、土器群中央から出土した。これらは須玖Ⅱ式古段階のセットを示す。

甕 (711～713)・鉢 (714)・丹塗袋状口縁壺 (715)・丹塗壺 (716)・丹塗無頸壺 (717・718)・小型壺 (719・720)・器台 (721・722)・丹塗高坏 (723)、石製紡錘車 (727)・軽石製浮子 (728)・石錘 (729) を図化した。なお、711・717・718・727・729はSD0012、712～716・719・720・722はA区SD0003中・下層、721・723・728はSD0042 (東) として取り上げている。713は口縁部上面と頸部に暗文が施され、胴部外面はヨコミガキで丁寧に仕上げられる。715は外面に丹が良好に残る。



726 SD0024 727・729 SD0012 728 SD0042(東) 730 SD0042(東)(SX0048)

第106図 SD0024・0012・0042(東)出土石器実測図(726・727は1/2、他は1/3)

716は頸部に約4cm幅の縦位集線暗文帯がめぐる。717～720は完存する。721はSD0042下層(SD0042(西))と接合した。727は片岩～滑石製で、中央に浅い穿孔痕が残る。紡錘車未成品である。728は上辺部にのみ明確な紐掛け部が削り込まれている。729は縁辺を敲打・荒研磨で円形に成形する。上下の凹みから石錘と考えられる。この他、丹塗土器を含む弥生土器がパンコンテナ3箱分出土した。出土遺物の時期は、弥生時代中期中葉・須玖Ⅱ式古段階である。SD0042(西)に切られるという層位関係とも矛盾はない。

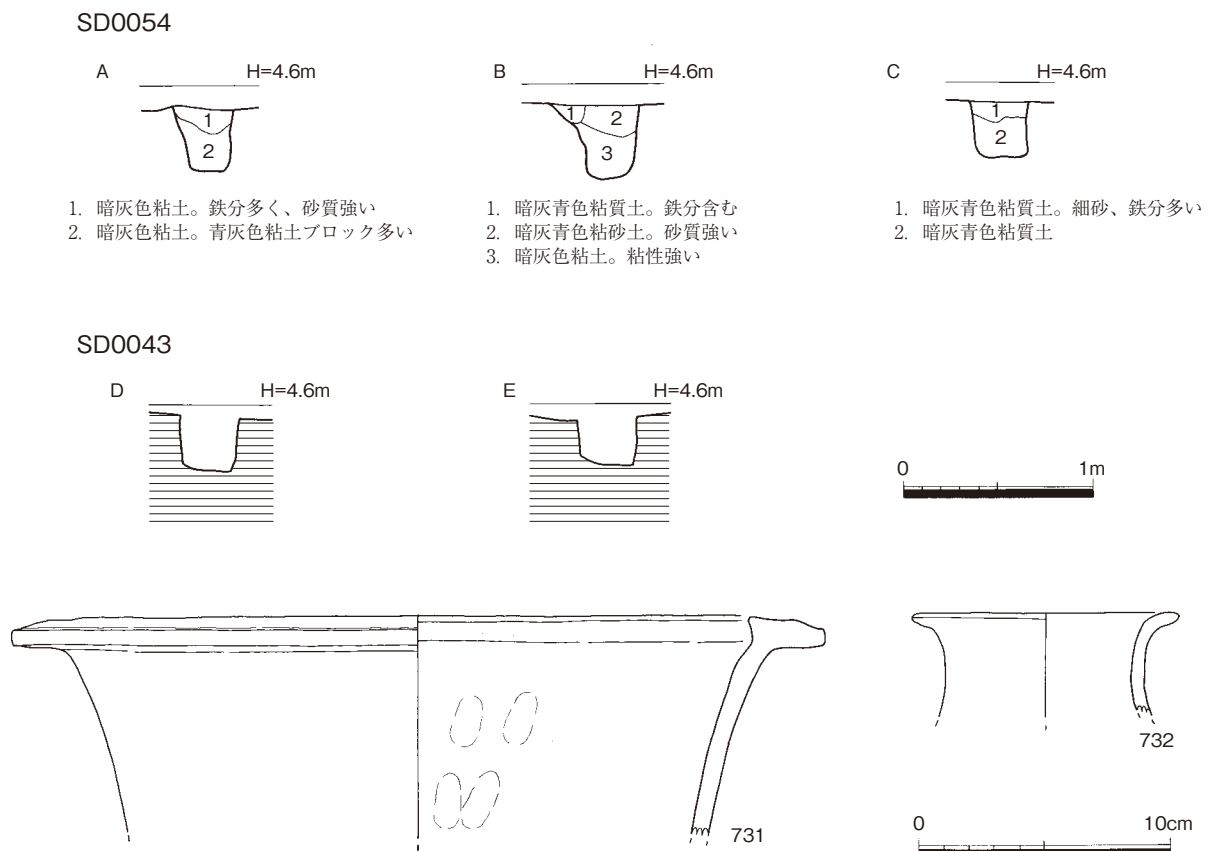
SX0049(第93図) I-4区で検出した断面方形の黒灰色粘土堆積である。1面・SD0029最下面で検出し、SD0029とは異質の堆積であったため、別遺構とした。残存の幅は3.4m、深さは最大20cmである。層位的にはSD0029より古いという以外は、2面と3面のどちらに位置づけられるか判断材料がない。黒灰色粘土の埋土は、2面のSD0042(西)・0053・0005下層・0032、3面のSD0012・0042(東)が類似する。SD0042(西)・0053とは掘り方の方向や幅が異なり、SD0005下層・0032とは底面の断面形状が異なる。SD0042(東)とは位置関係が整合的でないが、SD0012とは掘り方の方向や底面から角度がついて立ち上がる断面形状が類似する。このSD0012との類似性と、出土遺物に須玖Ⅱ式古段階の土器が含まれることから、ここでは3面遺構とした。しかし、上述のようにSD0012が単独の溝であるかどうかは判然とせず、出土遺物も少ないため、明確な根拠とは言え

ない。

出土遺物(第105図) 須玖Ⅱ式古段階の甕(724)・壺(725)が出土した。この他、弥生土器が少量出土した。

SD0043(0054)(第93・107図) H-3~5区で確認した南西方向に蛇行する小型溝である。断面形は方形で、幅30~40cm、深さ30~40cmを測る。東側は調査区外へ延び、西側はⅡ区のSD0081に連続する。埋土は暗灰~灰黒色粘質土で、鉄分を多く含み、下層は地山ブロックを多く含む。北壁が一部オーバーハング気味になる。SX0066下で検出した。

出土遺物(第107図) 丹塗壺(731)と小型壺(732)が出土した。731は口唇部上面にわずかに丹が残る。この他、弥生土器がパンコンテナ半箱分出土した。出土遺物が少ないため断言しにくい、遺構の時期は弥生時代中期前葉・須玖Ⅰ式期としておきたい。SD0024とともにI区で最も古い遺構である。



第107図 SD0054・0043実測図(1/40)およびSD0043出土遺物(1/3)

第5表 I区3面出土土器観察表(1)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
96	633	SD0024 トレンチA	A	弥生土器	甕	1/8	復元口径 36	径 3 mm 以下の砂粒を含む	良好	橙色
96	634	SD0024 トレンチC 南ベルト上層	A	弥生土器	甕	1/4	復元口径 24.6	精良。細砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
96	635	SD0024 トレンチB 南ベルト	A	弥生土器	甕	1/6	復元口径 30	径 4 mm 以下の粗・細砂粒を含む	良好	にぶい橙色
96	636	SD0024 トレンチA 上層	A	弥生土器	甕	1/4	復元口径 29	径 2 mm 以下の砂粒を含む	良好	にぶい褐色
96	637	SD0024 トレンチA	A	弥生土器	甕	1/4	底径 8.6	やや粗。径 3 mm 以下の粗砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	外:浅黄橙色、黒色 内:灰黄褐色～黒色
96	638	SD0024 トレンチC 北下層	A	弥生土器	丹塗甕	1/4	復元口径 30	精良。細砂粒を含む	良好	外:丹 内:橙色
96	639	SD0024 トレンチB R-3+下層	A	弥生土器	甕	底部片	底径 8.6	径 1 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	淡橙色
96	640	SD0024 トレンチB 下層	A	弥生土器	甕	1/8	復元口径 36	やや粗。径 5 mm 以下の粗・細砂粒を多く含む。赤色粒も含む	良好	にぶい黄橙色
96	641	SD0024 トレンチB	A	弥生土器	甕	1/2	復元口径 32	径 2 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
96	642	SD0024 確認トレンチ 1 R-4	A	弥生土器	甕	小片		径 5 mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
97	643	SD0024 トレンチC R-18	A	弥生土器	甕	1/4	復元口径 18.6	径 3 mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
97	644	SD0024 サブトレンチ R-3	A	弥生土器	甕	1/6	復元口径 18	径 3 mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
97	645	SD0024 トレンチC R-12	A	弥生土器	甕	1/2	復元底径 6	径 3 mm 以下の粗・細砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色
97	646	SD0024 トレンチB 下層	A	弥生土器	丹塗壺	3/4	復元底径 7	径 3 mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:淡橙色 内:丹
97	647	SD0024 トレンチB 下層	A	弥生土器	小型壺	底部片	底径 5	径 3 mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙
97	648	SD0024 トレンチC ンチ R-7	A	弥生土器	甕	小片		径 3 mm 以下の粗・細砂粒を含む	良好	外:灰褐色 内:にぶい黄橙色
97	649	SD0024 トレンチA 東側張出部	A	弥生土器	無頸壺	1/6	復元口径 13.4	精良。細砂粒を含む	良好	外:丹 マメツしている 内:にぶい黄橙色
97	650	SD0024 トレンチA 南側張出部	A	弥生土器	無頸壺	3/4	口径 16.8	径 1 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい橙色
97	651	SD0024 トレンチA 上層 R-6	A	弥生土器	広口壺	1/10	復元口径 26.8	径 2 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:黒色 内:灰黄褐色
97	652	SD0024 トレンチB 下層	A	弥生土器	甕	1/8	復元口径 21	径 3 mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
97	653	SD0024 トレンチC R-1	A	弥生土器	丹塗壺	1/8		径 2 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:橙色
97	654	SD0024 トレンチD	A	弥生土器	壺	1/3	復元口径 24	径 2 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
97	655	SD0024 トレンチB 下層	A	弥生土器	壺	1/6		精良。細砂粒と赤色粒を含む	良好	外:にぶい橙 内:灰色
98	656	SD0024 トレンチD	A	弥生土器	丹塗鉢	1/6	復元口径 16.4、復元底径 4.4、器高 8.7	径 2 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹、にぶい橙色 内:丹
98	657	SD0024 トレンチA R-10	A	弥生土器	丹塗壺	完形	口径 21.5、底径 7、器高 17.9	径 3 mm 以下の砂粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい橙色
98	658	SD0024 トレンチD	A	弥生土器	丹塗瓢形土器	小片	凸部径 23	径 3 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい黄橙色
98	659	SD0024 トレンチC 南ベルト下層	A	弥生土器	壺	1/6	復元口径 12.8	径 2 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
98	660	SD0024 トレンチB 下層	A	弥生土器	小型壺	1/6	復元口径 10.4	径 3 mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
98	661	SD0024 トレンチC 南ベルト下層	A	弥生土器	丹塗壺	1/4		径 1 mm 以下の砂粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい黄橙色
98	662	SD0024 トレンチA 南ベルト	A	弥生土器	壺	1/6	復元口径 14.6	径 4 mm 以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
98	663	SD0024 トレンチA 上層+トレンチB 南ベルト R-9	A	弥生土器	丹塗高坏	1/8	復元口径 22	精良。細砂粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい橙色
98	664	SD0024 トレンチC R-12	A	弥生土器	鉢	1/8	復元口径 12.4	径 3 mm 以下の粗・細砂粒を含む	良好	にぶい橙色
98	665	SD0024 トレンチA	A	弥生土器	高坏	底部片	復元脚径 13.5	径 3 mm 以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
98	666	SD0024 トレンチA 上層、トレンチB 南ベルト R-9	A	弥生土器	丹塗高坏	1/8	復元口径 22	細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 脚部内:にぶい橙色
99	667	SD0024 トレンチA R-3	A	弥生土器	丹塗蓋	3/4	口径 17.8、器高 4.6	精良。細砂粒、黒色粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい橙色

第5表 I 区3面出土土器観察表(2)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
99	668	SD0024 トレン チCR-11	A	弥生土器	丹塗蓋	2/3	口径15.6、推定高2	径2mm以下の砂粒を少し含む	良好	外:丹 外底・内: にぶい黄橙色
99	669	SD0024 トレン チCR-5	A	弥生土器	丹塗蓋	1/2	口径15.2、器高1.5	径3mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい 黄橙色
99	670	SD0024 トレン チCR-3	A	弥生土器	丹塗蓋	ほぼ完 形	口径15.4、器高2.4	細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい 黄橙色
99	671	SD0024 上層+ トレC南ベルト +木組下	A	弥生土器	丹塗蓋	1/3	復元口径15、器高2.6	復元口径15、器高2.6	良好	外:丹 内:にぶい 橙色
99	672	SD0024 トレン チC+南上層+ 下層	A	弥生土器	丹塗蓋	ほぼ完 形	口径15、器高2.8	精良。細砂粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい 橙
99	673	SD0024 トレン チC上層	A	弥生土器	丹塗蓋	ほぼ完 形	口径15、器高1.7	精良。細砂粒と赤色粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい 橙~灰黒色
99	674	SD0024 トレC 南ベルト上層 +R-5+R-6	A	弥生土器	丹塗蓋	1/2	口径14、推定高2	径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 外底・内: にぶい橙
99	675	SD0024 トレン チC+南上層+ 南下層	A	弥生土器	丹塗蓋	ほぼ完 形	口径13、器高2.3	精良。径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:橙色
99	676	SD0024 トレC 南ベルト下層	A	弥生土器	丹塗蓋	1/2	復元口径13.6、器高 1.6	精良。細砂粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい 黄橙色
99	677	SD0024 トレン チCR-17	A	弥生土器	丹塗蓋	ほぼ完 形	口径12.4、器高2.3	径4mm以下の粗・細砂粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい 橙色
99	678	SD0024 トレン チDR-7+トレン チCR-5	A	弥生土器	丹塗蓋	完形	口径16.6、器高3	密。細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい 橙色
100	679	SD0024 トレン チB下層	A	弥生土器	丹塗壺	底部片	底径6.4	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 外底・内: にぶい黄橙色
100	680	SD0024 トレB R-1+トレC	A	弥生土器	無頸壺	口縁~ 胴部片	口径14.2、穿孔径 約0.4	精良。径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい 橙色
100	681	SD0024 トレン チCR-4+R-2+ サブトレR2	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	4/5	口径15.8、底径8.2、 器高14.1	径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 外底・内: にぶい橙
100	682	SD0024 トレン チC、R13	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	1/2	復元口径15.2、底径 7.4、器高13.6、穿 孔径0.4	精良。細砂粒を含む	良好	外:丹 外底・内: にぶい橙色
100	683	SD0024 トレ ンチC R-4、 R-10	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	4/5	復元口径15.2、底径 6.8、推定高14.2	精良。細砂粒を含む	良好	外:丹 外底・内: にぶい橙
100	684	SD0024 トレン チC上層+トレン チC+R-15	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	1/2	口径14、底径7.8、 器高13.6、穿孔径0.5	径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 外底:にぶ い橙 内:にぶい 黄橙~灰黒色
100	685	SD0024 トレン チC R-2	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	3/4	復元口径13.4、底径 6.4、器高11.5、穿 孔径0.4	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む赤色 粒を含む	良好	外:丹 外底・内: 橙色
100	686	SD0024 上層 トレC南ベルト	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	1/2	復元口径14、復元底 径6.4、器高10.5	精良。細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹(ほとんど剥 離している) 外 底・内:橙色
100	687	SD0024 トレン チC南下層+南 ベルト下層	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	3/4	復元口径13	精良。径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 外底・内: 橙色
101	688	SD0024 トレン チC	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	1/6	復元口径12、底径5	精良。細砂粒を含む	良好	外:丹 外底・内: にぶい橙~浅黄橙 色
101	689	SD0024 トレン チC R-19	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	ほぼ完 形	口径11.2、底径5.5、 器高8.7	精良。細砂粒を含む	良好	外:丹 外底・内: にぶい橙色
101	690	SD0024 トレン チCR-14	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	4/6	口径11、底径4.4、 器高8.9	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む。稀 に4mm大の粗砂粒を混入	良好	外:丹 外底・内: にぶい橙色
101	691	SD0024 トレン チDR-5 R-9 ト レC南ベルト下 層 サブトレ R-1	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	1/3	口径17.2、底径7.6、 器高15.7	精良。密。細砂粒と赤色粒を含む	良好	外:丹 内・外底: にぶい橙色
101	692	SD0024 トレン チDR-2、R-4	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	1/2	復元口径16.2	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい 黄橙色
101	693	SD0024 トレ ンチDR-9	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	1/2	復元口径12.8、復元 底径6.8、器高10.5	密。細砂粒と赤色粒を含む	良好	外:丹 内・外底: にぶい橙色
101	694	SD0024 トレ ンチDR	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	4/5	口径15.8、復元底径 6.5、器高14	密。細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内・外底: にぶい橙色
101	695	SD0024 トレン チC南ベルト下 層、R-9、トレン チDR-5	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	胴下半 部欠損	口径15.4	精良。細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい 橙色
101	696	SD0024 トレン チDR-8	A	弥生土器	丹塗無 頸壺	ほぼ完 形	口径13.5、底径6.2、 器高11.8	径3mm以下の砂粒を含む	良好	外:丹 外底:にぶ い橙 内:にぶい 黄橙色
103	703	SX0048 R15	B	弥生土器	甕	1/6	復元口径31	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色

第5表 I区3面出土土器観察表(3)

挿図	番号	遺構	区	種類	器種	残存	法量 (cm)	胎土	焼成	色調
103	704	SX0048 R4	B	弥生土器	丹塗甕	1/6	復元口径26.4	精良。密。細砂粒、赤色粒を少し含む	良好	外:丹 内:橙色
103	705	SX0048 R2、R3、R6、下	B	弥生土器	丹塗無頸壺	2/3	復元口径18.3、底径8.6、器高20	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹色 内:浅黄橙色
103	706	SX0048 R13	B	弥生土器	壺	完形	口径23.7、底径7.6、器高24.7	密。径2mm以下の砂粒を含む	良好	外:灰黄褐色~黒褐色 内:にぶい橙色
103	707	SX0048 R7	B	弥生土器	丹塗壺	ほぼ完形	口径8.6、底部5.6、器高15.1	精良。密。細砂粒、赤色粒を少し含む	良好	外:丹 内・外底:にぶい橙色
103	708	SX0048 R14	B	弥生土器	丹塗壺	3/4	復元口径16.4、底径6.6、器高15	精良。密。細砂粒、赤色粒を少し含む	良好	外:丹 内・外底:にぶい黄橙色
103	709	SX0048 R1	B	弥生土器	丹塗蓋	完形	口径14.2、高さ3.1	精良。密。細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:浅黄橙色
103	710	SX0048 R1	B	弥生土器	丹塗無頸壺	完形	口径13.6、底径6.6、器高12	精良。密。細砂粒、赤色粒を含む	良好	(外:丹 内:浅黄橙色)
104	711	SD0012 上面	A	弥生土器	甕	1/3	復元口径31	径4mm以下の粗、細砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙色
104	712	SD0012 (SD03 最下層)	A	弥生土器	甕	1/10	復元口径22	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
104	713	SD0012 (SD03 溝切)	A	弥生土器	丹塗甕	1/8	復元口径33.4	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:橙色
104	714	SD0012 (SD03 中層)	A	弥生土器	鉢	1/2	復元口径16.4、底径5.6、器高7.9	径4mm以下の粗・細砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい黄橙色
104	715	SD0012 (SD03 溝切)	A	弥生土器	丹塗壺	1/4	復元口径10.6	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい橙色
104	716	SD0012 (SD03 最下層+溝切)	A	弥生土器	丹塗壺	口縁部1/3片	復元口径25.2	精良。細砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内:口頭部丹、胴部 にぶい橙色
104	717	SD0012 R-1	A	弥生土器	丹塗無頸壺	ほぼ完形	口径18.8、底径9、器高18.1	径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	外:丹 内・外底:にぶい黄橙色
105	718	SD0012 (SD03 西側下層)	A	弥生土器	丹塗無頸壺	完形	口径9、底径4.9、器高7.4	精良。細砂粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい橙色
105	719	SD0012 (SD03 中層)	A	弥生土器	小型壺	完形	口径8.8、底径4.4、器高6.5	径1mm以下の砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色
105	720	SD0012 (SD03 中層)	A	弥生土器	小型壺	完形	口径10.2、底径4.5、器高8.3	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	浅黄橙色
105	721	SD0042 東ベルト+下層ベルト南	A	弥生土器	器台	1/2	復元口径10	径3mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	浅黄橙色
105	722	SD0012 (SD03 中層)	A	弥生土器	器台	脚部片	脚径13	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色
105	723	SD0042 東 R-1	A	弥生土器	丹塗高坏	脚部片		精良。細砂粒を含む	良好	外:丹 内:にぶい黄橙色
105	724	SX0049 黒灰粘土	B	弥生土器	甕	小片		径3mm以下の白色砂粒を多く含む。微細な金雲母片を多く含む	良好	にぶい橙(10 YR 6/3)
105	725	SX0049 黒灰粘土	B	弥生土器	壺	小片		径2mm以下の白色砂粒を多く含む。微細な金雲母片を多く含む	良好	にぶい橙(5 YR 7/4)
107	731	SD0043	A	弥生土器	丹塗壺	1/8	復元口径32	径2mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	橙色
107	732	SD0043 (54)	A	弥生土器	壺	1/6	復元口径10.6	密。径1mm以下の砂粒、赤色粒を含む	良好	にぶい橙色

第6表 I区2・3面出土木器観察表(1)

挿図	番号	遺構	区	層位等	器種	法量 (cm) []は残存法量	木取り	樹種
32	204	SP0047	A	柱	柱	長さ[27]、φ14-14.5	芯持丸木	マツ属複雑管束亜属
32	205	SD0003	A	R-9	柱	長さ[28.5]、φ13.5~14.5	芯持丸木	マツ属複雑管束亜属
32	206	SP0030	B		柱	長さ[45]、φ11-13.2	芯持丸木	マツ属複雑管束亜属
34	215	SX0008	A	上面R-1	組物部品	長さ[46.1]、幅10.8、厚さ0.9~1.1、穿孔径0.25~0.3、スリットA(長さ5.3、幅10.8、幅0.9-1.1)、スリットB(長さ[2]、幅0.2~0.4)	柁目	サワラ
34	216	SX0008	A	上面R-2	組物部品	長さ49.8、幅4~5.2、厚さ1~1.2	柁目	サワラ
34	217	SX0008	A	上面R-3	板状	長さ[21.3]、幅6.1、厚さ1.1~1.2	板目	スギ
34	218	SD0005	B	西側肩	曲物底板	長さ27.2、幅[13]、最大厚0.9	柁目	スギ
34	219	SD0005	A	西側肩	組物部品	長さ[22.6]、幅4.4、最大厚2.1、ほぞ孔2×2.5	板目	コナラ属アカガシ亜属
34	220	SD0005	A	上面	小型楔	長さ5.5、幅1.4、厚さ0.5	柁目	スギ
34	221	SD0005	A	上面	曲物底板片	長さ[7.7]、幅[4.2]、厚さ0.8	柁目	スギ
34	222	SD0005	B	西側肩	ヘラ状	長さ[24.9]、最大幅3.3、最大厚0.6	柁目	スギ
39	260	SD0003	A		円盤連結状	長さ38、幅5.0~6.4、厚さ0.85、円盤部(φ5.0~7.75)、厚さ0.85~1.2)、連結部(幅1.0~1.6、厚さ0.85~1.2、長さ0.35~1.2)	柁目	イスノキ
43	278	SD0042 (西)	B	南区下層	棒状	長さ[41]、幅2-2.4、厚さ1.7	板目	コナラ属アカガシ亜属
49	319	SD0005	A	下層R-9	鍬	長さ[20.3]、基部(幅8.5、厚さ1.4)、刃部(幅[9]、厚さ[0.9-1.4])、柄孔(長さ5、幅3.1-3.6)、着柄角度53°~52°	柁目	サカキ
49	320	SD0005	A	上面	鍬	長さ[22.1]、柄孔(長さ4.5、幅3.2、厚さ1.7、着柄角44-54°	柁目	コナラ属アカガシ亜属

第6表 I区2・3面出土木器観察表(2)

挿図	番号	遺構	区	層位等	器種	法量 (cm) []は残存法量	木取り	樹種
49	321	SD0005	B	下層R-10	鋏	長さ39.5、基部(幅8.1、厚さ1)、刃部(幅9.1、厚さ0.7)、柄孔(長さ4.4、幅3.1)、着柄角度41.5°	榎目	コナラ属
49	322	SD0005	B	上層最下面R-12	鋏	長さ[26.3]、基部(幅7.5、厚さ1.5)、刃部(幅[15.2]、厚さ0.65-1.1)、柄孔(長さ5、幅3)、着柄角度58°~45°	榎目	コナラ属アカガシ亜属
49	323	SD0005	A	1区R-10	鋏	長さ[24.8]、基部(幅[4.7]、厚さ1)、刃部(幅[7.9]、厚さ0.6)、柄孔(長さ5.3、着柄角度55°-54°)	榎目	コナラ属アカガシ亜属
49	324	SD0005	A	1区R-10	鋏	長さ[19.9]、基部(幅[2.2]、厚さ1.2)	榎目	コナラ属アカガシ亜属
49	325	SD0005	A	1区R-5	鋏	長さ[18.8]、幅[5.9]、厚さ1.8	榎目	コナラ属アカガシ亜属
49	326	SD0005	A	2区	鋏	長さ[10.36]、幅[3.8]、厚さ[1]	榎目	コナラ属アカガシ亜属
49	327	SD0005	A	2区R31	鋏	長さ31.5、幅[3.4]、最大厚1.3	榎目	コナラ属アカガシ亜属
50	328	SD0005	B	下層R-11	鋤	長さ[27.4]、幅12.05、厚さ0.8、柄孔2.8、孔径1.0×1.45	榎目	コナラ属アカガシ亜属
50	329	SD0005	A	1区R14	鋏	長さ[15.7]、幅[5.1]、最大厚1.2	榎目	コナラ属アカガシ亜属
50	330	SD0005	A	上層ベルト	鋏	長さ37.1、幅[3.6]、厚さ1	榎目	コナラ属アカガシ亜属
50	331	SD0005	A	1区中下層	着柄部品	長さ29.8、身幅2.8~3	ミカン割	コナラ属アカガシ亜属
51	332	SD0005	A	2区R27	杓子形	長さ35.9、幅2~5.7、最大厚1.5	榎目・芯持	スギ
51	333	SD0005	A	2区R30	横槌	長さ36.5、身幅4.5、柄幅2.2、身厚さ3.6、柄厚さ1.5	削出	ツバキ属
51	334	SD0005	A	1区最下面	容器	径11~12、器高13.7、底厚さ2.9、器厚さ0.4	芯持丸木	スギ
51	335	SD0005	A	2区	棒状	長さ44.1、φ3-4	芯持丸木	スダジイ
51	336	SD0005	A	2区中層	板状	長さ[23.6]、幅3.8、厚さ1	榎目	スギ
51	337	SD0005	A	1区下層	棒状	長さ[14.3]、幅3.4、厚さ2.2	分割	クリ
51	338	SD0005	A	2区R-16	板状	長さ56.3、幅(身5.8、柄2.3-4)、厚さ(身1.7、柄1.2)	板目	針葉樹 スギ
52	339	SD0005	A	2区R7	紡錘車	復元径6、最大厚0.9、孔径0.6	不明	シャシャンボ
52	340	SD0005	A	1区最下面	板状	長さ11.1、幅4.9、厚さ0.7	榎目	スギ
52	341	SD0005	A	1区R12	栓	長さ10.4、最大径6.6	削出丸木	カヤ
52	342	SD0005	B	上層粗砂	組物部品	長さ[8.5]、φ2.3~2.8	芯持丸木	シャシャンボ
52	343	SD0005	A	1区R16	組物部品	長さ[43.1]、最大幅3.3、最大厚2.4	芯持丸木	イヌガヤ
52	344	SD0005	A	1区R28	組物部品	長さ54.6、幅2.5~3.0、厚さ2.0~2.1、ほぞ孔:長さ1.3、幅1~1.1、深さ0.9、面取部分:長さ46.3、幅1.3-1.4、深さ0.1	芯持丸木	リンボク
52	345	SD0005	B	下層	机脚	長さ25.5、幅[3.3]、厚さ1.4	榎目	針葉樹 スギ
52	346	SD0005	A	2区R26	机脚	長さ22.9、厚さ1.1、貫孔(長さ1.5、幅1.5)、透孔(長さ7.7、幅2.5)、脚部(長さ18、幅[7.2])、頭部(長さ4.9、幅5.15)	榎目	スギ
52	347	SD0005	A	2区下層	机脚	長さ21.6、頭部(長さ5、幅4.4、厚さ1.0~1.1)、貫孔 逆三角形(長さ1.1、幅1.0)、脚部(長さ16.6、幅[5.5]、厚さ1.2-1.5)	榎目	スギ
53	348	SD0005	A	2区中層	板状	長さ[31.8]、幅2.8、厚さ0.3	板目	針葉樹 スギ
53	349	SD0005	A	2区R27	板状	長さ33.2、幅4.4、厚さ0.7	榎目	ヤマグワ
53	350	SD0005	A	1区R-2	板状	長さ32.1、幅4.9、厚さ1	榎目	スギ
53	351	SD0005	A	2区中層	板状	長さ[13.7]、幅6.3、厚さ0.9	榎目	スギ
53	352	SD0005	A	1区下層	部材	最大長さ12.75、最大幅3.75、最大厚2.7	分割	ツバキ属
53	353	SD0005	B	上層R-5	建築部材	長さ[13.5]、幅11.9、最大厚8.5	芯持丸木	クリ
53	354	SD0005	A	2区R17	角材	長さ[17.2]、幅・厚さ6.7~6.3	芯持材	マツ属複雑管束亜属
54	355	SD0005	A	1区R-1	板材	長さ[131.2]、幅11、厚さ0.6~1.2	板目	スギ
54	356	SD0005	B	上層R-1	板材	長さ81、幅9.2、厚さ1.5	板目	スギ
54	357	SD0005	A	1区R11	杭	長さ99.6、径6.2	芯持丸木	マツ属複雑管束亜属
54	358	SD0005	A	1区R-21	建築部材	長さ[123]、径7-8、ほぞ穴①(長さ6.2、幅3.2)②(長さ7.7、幅2.3)③(長さ6.1、幅2.5)④(長さ幅[2.1])⑤(長さ4.5、幅2.6)⑥(長さ4.8、幅3)⑦(長さ幅一)⑧(長さ4、幅2.3)	芯持丸木	スダジイ
54	359	SD0005	A	1区R-21	建築部材	長さ[111]、径9~11	芯持丸木	スダジイ
54	360	SD0005	A	1区下層	掘棒	長さ144.2、径3.9、刃部幅4.2、刃部厚さ1.6~4.4	芯持丸木	ツバキ属
54	361	SD0005	A	2区	棒材	長さ22.7、最大幅10.7、最大厚6.7	半裁木	チシャノキ属
54	362	SD0005	A	1区最下面	棒材	長さ27.5、最大径6.7	芯持丸木	広葉樹
54	363	SD0005	A	1区R9	ねずみ返し	長さ[52.5]、幅[27]、最大厚2、孔の長さ6.5	榎目	クスノキ
54	364	SD0005	A	ベルトR-1	ねずみ返し	長さ[62]、幅[24]、最大厚2.5	榎目	クスノキ
56	374	SD0032	B	R-1	机脚	長さ23.6、頭部(長さ4.6、幅4.15、厚さ0.8)、脚部(長さ19、幅4.75、6.6、厚さ0.9-1.1)、貫孔(長さ1.9、幅1.2)、楔木(幅1.1、厚さ0.75)	削出	スギ
56	375	SD0032	A	南区下層	着柄部品	長さ[25.8]、最大幅3.2、最大厚4.6	榎目	コナラ属アカガシ亜属
56	376	SD0032	B	黒色粘土	板材	長さ38、幅10.6、厚さ2	板目	スギ
68	476	SD0036	B	R-4	板状	長さ[28.2]、幅[16.5]、最大厚0.7	板目	コナラ属アカガシ亜属
68	477	SD0036	B		横斧柄	長さ[23.4]、柄径2-2.5、斧頭幅3.8、斧台幅2.3	芯持丸木	サカキ
68	478	SD0034	B	南灰黒色粘土層上面	脚付台	長さ[25]、幅[23.8]、高さ8.9	榎目	スギ
69	479	SD0023	B	西粗砂	布巻具	長さ[15]、幅[4.6]、厚さ[1.2]	榎目	サカキ
69	480	SD0023	B	ベルト北粗砂上R-1	鋏	長さ[32.15]、基部(幅[5.5]、厚さ1.4)、刃部(幅[8.1]、厚さ1-1.4)	榎目	コナラ属アカガシ亜属

第6表 I区2・3面出土木器観察表(3)

挿図	番号	遺構	区	層位等	器種	法量 (cm) []は残存法量	木取り	樹種
69	481	SD0023	B	粗砂層上層	机天板	長さ[37.5]、幅[21.2]、厚さ(天板0.8、差込部1.5)、脚板厚さ2.5~2.8	板目	スギ
69	482	SD0023	B	ベルト南	割材	長さ58、幅6、高11.2、[原材復元径22]	ミカン割り	コナラ属アカガシ亜属
69	483	SD0023	B	ベルト北粗砂上	割材	長さ[193.8]、幅8~10	ミカン割り	コナラ属アカガシ亜属
102	697	SD0024	A	トレA南ベルトR-1	把手付椀	口径[13.7~10]、高台径[7.9~6]、器高7.2、把手長さ6、高台高1.8	椀目	チシャノキ属近似種
102	698	SD0024	A	トレAR-2	鋏	長さ[23.8]、基部(幅[3.2-3.5]、厚さ1.2)	椀目	コナラ属アカガシ亜属
102	699	SD0024	A	トレAR-1	杓子形	長さ41.9、ヘラ部(長さ11.4、幅[11.7])、柄部φ=1.1-1.8	板目	針葉樹?ヒノキ科
102	700	SD0024	A	トレンチA	堅杵	長さ[19.9]、最大径4.6	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属クスギ節
102	701	SD0024	A	トレンチA	堅杵	長さ[40]、最大径7.6	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属クスギ節
102	702	SD0024	B	トレBR-2	ねずみ返し	長さ[58.5]、幅[30]、厚さ4、貫孔内径19<、復元外径60、貫孔径20	椀目	クスノキ

第7表 I区2・3面出土石器・金属器観察表

*石材の「磁性」はネオジウム磁石による。長さ・幅・厚さはcm。重量はg

挿図	番号	遺構	区	層位等	材質	器種	長さ	幅	厚さ	重量
40	261	SD0003	A	グリッド4	片岩	紡錘車	4.9		0.4	9.9
40	262	SD0003	B	上層	黒曜石	打製石鏃	1.45	1.4	0.3	0.5
40	263	SD0003	B		頁岩	磨製石鏃	4.2	1.9	0.3	2.7
40	264	SD0003	B		凝灰岩(磁性中)	石庖丁	7	3.6	5	22.5
40	265	SD0003	B	グリッド6	頁岩(磁性弱)微細斑晶	石庖丁	6.2	5.1	0.4	20.9
40	266	SD0003	B		細粒砂岩(磁性弱)	石庖丁	5.15	4.05	4	13
40	267	SD0003	B		白色花崗岩(磁性弱)	磨石	12.8	10.5	6.4	1235.5
48	311	SD0005	A	1区中層	凝灰岩(磁性中)	石庖丁	4.55	5.2	0.8	24.3
48	312	SD0005	B		輝緑凝灰岩	石庖丁	3.7	6.5	0.65	25.1
48	313	SD0005	B	上層東肩	頁岩	石庖丁	4.9	10.1	0.7	59.7
48	314	SD0005	A	2区 中層	砂岩	敲石	7	7	2.9	208.4
48	315	SD0005	A	2区 R20	砂岩	砥石	18	11.8	6.9	1686.4
48	316	SD0005	A	上面	シルト質砂岩	砥石	11	5.2	4.1	250
48	317	SD0005	A	北側上面	砂岩	砥石	7.5	9.7	2.1	247.1
48	318	SD0005	B	上層	頁岩	砥石	8.2	4.7	2.4	119.6
56	377	SD0032	B		鉄器	鉄鏝	2		0.9	9
58	390	SD0033	B	黒色粘土	砂岩(磁性なし)	砥石	17	5.9	6.2	848.5
58	391	SD0033	B		花崗岩(磁性微弱)	敲石	11.8	8.5	6.9	950.8
66	460	SD0034	B	(SD36 上面)清掃	鉄器	鉄釘		0.5		4.8
66	461	SD0036	B	L=4.68	青銅器	銅鏃	3.7	1	0.4	3.3
66	462	SD0036・0023	B	境界	銅銭	貨泉	2.2		1.5	2
66	463	SD0036	B	ベルト北	黒曜石	石鏃	1.6	1.25	0.35	0.4
66	464	SD0034	B	東区黄色粗砂	黒曜石	石鏃未成品	2.05	1.9	0.45	1.3
66	465	SD0036	B	南区	細粒砂岩(磁性なし)	石庖丁	5	4.2	0.75	24.1
66	466	SD0036	B	ベルト北	砂岩(磁性なし)	石庖丁未成品	7.35	4.1	0.65	25.3
48	467	SD0005	A	北側上面	玄武岩	磨製石斧	8	4.1	2.3	132.4
66	468	SD0034	A	東区黄色粗砂	玄武岩	磨製石斧	8.4	7.5	3.9	365
66	469	SD0036	A	R-5	玄武岩(磁性強)	磨製石斧	16	6.8	4.5	746.7
67	470	SD0034	A	北区	砂岩(磁性弱)	砥石	15.4	9.5	2	325.4
67	471	SD0023	A	粗砂ベルト南	凝灰岩(磁性弱)	敲石	12	5.6	4.3	448
67	472	SD0036	B	ベルト北	細粒砂岩(磁性なし)	砥石	4.2	5.2	1.4	32.1
67	473	SD0036	B	南区	軽石	浮子	7.2	8.1	3.25	49.3
67	474	SD0036	A	南区	凝灰岩(磁性中)	砥石	18.7	12.2	5.2~1.7	944.8
88	597	SX0046	B	東側	花崗岩(磁性強)	磨石	6.5	5.5	2.9	162.6
88	598	SX0046	B	東側	玄武岩(磁性強)	砥石	9	8.5	2.8	272.8
88	599	SX0046	B	東側	花崗閃緑岩(磁性弱)	磨石	16.9	6.3	3.7	706.6
88	600	SX0046	A	東側	細粒砂岩(磁性なし)	砥石	27.7	14.6	6.5	2681
89	601	SX0019	A		砂岩(磁性なし)	砥石	13.3	5.7	2.4	263.8
89	602	SX0017	B	南	? (磁性中)	砥石	7.6	10.15	2.2	230.4
89	603	SX0014	B	R-5	石英斑岩? (磁性なし)	台石	16	10.8	3.9	898.2
89	604	SX0014	A	R23	花崗岩(磁性中)	石皿	18.1	15.7	4.5	2076.1
89	605	SX0011	A	R4	凝灰岩(磁性強)	敲石	9.6	8.8	3.9	470.5
92	626	SX0066	A	SD10 西側直下	サヌカイト	剥片尖頭器	6.9	3.6	1.4	22.3
92	627	SD0003	B	グリッド10	赤色チャート	剥片	2.45	2.5	1.3	7.5
92	628	SD0023	B	粗砂層下地山清掃時	赤色チャート	剥片	2.6	2.5	0.35	1.8
92	629	SX0066	A	3トレ西拡張	頁岩	石庖丁	3.7	7.6	0.5	21.3
92	630	SX0067	B	下面	凝灰岩(磁性中)	石庖丁	6.2	4.65	0.8	32.8
92	631	SX0066	B	SD0029 東灰褐色シルト	頁岩(磁性弱)	石庖丁	8.2	4.55	0.8	47.7
92	632	SX0066	A	北西スミトレ	軽石	浮子	5.9	4.5	4.5	38.9
106	726	SD0024	A	Cトレンチ	頁岩(磁性なし)	石庖丁	5.75	4.05	0.55	17.5
106	727	SD0012	A	灰黒色粘土	片岩~滑石	紡錘車		5.7	1.1	33.7
106	728	SD0042(東)	B	ベルト	軽石	浮子	6.1	8.2	3.95	36
106	729	SD0012	B	北区	頁岩(磁性弱)	石鏃	5.9	7.9	1.7	131.8
106	730	SX0048	B	R8	玄武岩(磁性強)	敲石	10.8	7.7	8.2	962.3
図版 40	733	SD0029	B	北ベルト粗砂層	赤色チャート	原石	7.1	5.67	4.3	175.2

3) 小結

I区の調査では弥生時代中期前葉から9世紀代にいたる3面の遺構・遺物を確認した。以下では、前節までの調査成果報告を補足しつつ、通時的な整理を行い、小結に代えたい。

弥生時代中期前葉(須玖I式期) 3面のSD0024とSD0043(0054)の水路を検出した。両者はSD0024東側張り出し部から延びていたと想定される溝で連結していた可能性がある。SD0024・0043(0054)は暗色粘土に砂層が混ざる埋土で、断続的に流水する水田用水路と考えられる。自然科学分析でも当該期本地点の性格は丘陵麓の水田域と位置づけられ、この性格は後の弥生・古墳時代、古代を通じて変わらないようである(付編1参照)。集落域は南東側の丘陵上にあつたと考えられる。SD0024は、トレンチAから須玖I式の丹塗りの壺・高坏や甕、木器の出土が目立った。これらの遺物は張り出し部近くの溝の東岸から中央の中層にまよって堆積しており、溝を流れて堆積したというよりは、そこへ投棄された状況と考える。祭祀・儀礼的な意味が付与された行為と想定してよいであろう。

弥生時代中期後葉(須玖II式期) 3面のSD0024とSD0012・0042(東)・SX0049、3面上に広く堆積した包含層SX0066、その上に形成された2面の土器群SX0006・0009・0011・0014・0017・0046を検出した。SD0024では、トレンチCを中心に丹塗蓋付無頸壺に特化した土器投棄が行われており、前時期にトレンチAで行われた遺物投棄との若干の違いがみられる。SD0012・0042東・SX0049はI-4区で立ち上がって、陸橋を設けている。西側で遺構の続きが検出できず、詳細は不明だが、SD0024よりも集落に近い溝(濠)である可能性を指摘しておきたい。溝にはSD0024と同様に丹塗土器の投棄が行われる。器種はSD0042(東)のSX0048で、甕・広口壺・小型直口壺(注口付)・蓋付無頸壺である。

これらの遺構上には、土器小片と炭を散漫に含む灰褐色シルトが厚さ30~40cmで均質に堆積しており、洪水堆積層と考えられる。このSX0066の堆積によって、SD0024・0012・0042(東)の機能は失われたことになる。しかし、SX0066の堆積後、時期差がほとんどない須玖II式の土器群SXが形成されており、洪水堆積により溝を失った後も、同じ空間に継続して土器投棄を行っていることが分かる。

弥生時代中期末~後期前葉(須玖II式新段階~高三瀨式期) 2面の土器群SX0013・0016・0018・0015、SD0051・0042(西)・0053、その上のSD0039・0050・0055、SD0003・SB0068を検出した。土器群SXは、前時期よりも小型壺が多い傾向がある。SD0051は前時期までのSX土器群を切って構築され、SD0042(西)は、洪水堆積層SX0066に覆われてしまったSD0012・0042(東)とほぼ同じ位置に掘削されている。西側は不明瞭ながらもSD0053に続いていると考えるが、間に陸橋を設ける点も、下面溝の形態を踏襲しており、同一集団が、溝を再生させたと考えられる。SD0042(西)・0053では、丹塗土器の投棄量が減少し、鐸形土製品が出土することから、溝への遺物投棄様式の変化をうかがえる。

その後、SD0042(西)は流路状堆積(SD0039・0050・0055)で覆われ、掘立柱建物SB0068が構築されて集落域が広がってくるようであるが、時間を空けずにSD0003が堆積する。SD0003はSD0012・0042(東)・0042(西)と継続された環濠状の溝とは異なり、粘土・砂の互層堆積からなる蛇行する溝で、多量の土器が廃棄される。この中に、少量の丹塗土器・外来系土器・木製紡錘車未成品・線刻土製品・鐸形土製品などが投棄されている。鐸形土製品の投棄は、SD0053から連続する。

弥生時代後期中葉(下大隈式期) 2面の土器群SX0018・0021、SD0005下層・0032を検出した。土器群SXは、少量の穿孔された壺などで構成される。SD0005下層・0032は、前々時期のSD0042(西)・0053を踏襲した形で、近似した位置に陸橋を設け、埋土は黒灰色粘土となる。この溝へは農具から建築部材まで多様な木製品が投棄されており、完形品はほとんどなく、打ち折れたり、燃焼痕がみられたりする。組合式案の脚がSD0005下層から3点、SD0032から1点出土したが、4点とも形態・法量が異なっている。土器は甕・二重口縁壺・高坏・支脚・鉢・小型壺などが出土している。

弥生時代後期終末～古墳時代初頭（西新式期） 2面の土器群SX0017・0040、SD0005上層、SD0036・0034・0033・0037・0023を検出した。土器群SX0017・0040は穿孔された壺などが、SD0005上層と近接した位置に投棄されており、相互の土器接合もみられる。そして、調査区の南に、それまでの北東方向の溝の流路方向と異なり、西～北西方向にSD0036・0034が堆積する。その上にSD0033・0037・0023が形成されるが、これらは西新式の前段階から新段階までの期間に頻りに切り換わる形で堆積している。これらの流路堆積からは多量の土器に混ざって、銅鏃・貨泉・線刻布巻具・絵画土器片・線刻土製品など特殊遺物の投棄が認められる。また、SD0005上層も含めて、溝の埋土は水の盛んな往來をうかがわせる粘土と砂の互層であり、それまでの黒灰色粘土堆積の溝とは性格が異なっている。

古墳時代前期 2面で水田SS0064・0065、SD0007・0010・0005上層を検出した。水田は埋め立て等を行わずに、弥生時代中期後葉の洪水堆積層SX0066上に直接設けている。ただし、炭化有機物を多く含む黒色粘土層であることから火入れ等の処置を行っているようである。水田南側のSD0007・0010・0005上層は小規模な水路として、水田と関わって機能していたと考えられる。SD0007は洪水堆積層SX0066下の須玖Ⅰ～Ⅱ式期SD0024と位置・方向がほぼ一致する。上述の通り、弥生時代以降、前時代を踏襲しながら継続的に遺構が営まれてきているので、下面の溝の存在を伝承的に知っていた可能性もあるが、水田経営上、この位置の水路設置が必然的に選択されたともみられる。水田・溝から甕・小型丸底壺・高坏等が出土しており、ごく小規模な土器投棄が行われたと考えられる。

I区では古墳時代前期に続く5～7世紀の遺構は、確認されなかった。後述する8世紀の整地層に6～7世紀の須恵器が含まれていることから、東側丘陵にはこの時期の遺構があったと予想される。5世紀代については、周辺調査においても空白期となる。

8世紀 2面のSD0005上層、SX0008、1面の整地層SX0061・0062・0027、水田SS0056～0060、SX0025、SK0026、SD0029、SD0001・0002を検出した。古墳時代前期を最後に放棄されていた本地点に対して、SD0005上層、SX0008に8世紀前半と考えられる須恵器・木器が堆積する。その後、丘陵からの客土を用いたと考えられる整地層SX0061・0062・0027が広く堆積し、8世紀後半には水田が構築される。水田面の法量は、畦畔および畦畔の補強杭と考えられる杭列から、SS0057：6.8×21m、SS0056と杭列Aの北側：短辺6.6m、SS0059・0060：短辺12m、杭列AとCの間：2.8m、杭列CとDの間：2.8mを測る。概ね10尺（約3m）を基準とした長方形区画であったと考えられる。水路SD0001・0002と水溜状遺構SD0029、SX0025および水田について、これらが8世紀後半に同時存在したと仮定してその関係を整理すると以下ようになる。SD0001・0002は恒常的に水流のある大溝で、これに隣接して設けられた大型土坑SD0029は、SD0001・0002から導水した水を溜める機能を想定できる。さらにその北西に構築されたSX0025は、SD0029からの水を溜め、北・北西側の水田へ給水する。南から流れてくるSD0001・0002は本地点で東に流向を変えており、その変化点に氾濫の緩衝および水溜めとしてSD0029を設けているとみることも可能である。SD0002からは鏑矢（鉄鏃）や和同開珎が、SD0029からは弓や墨書土器が出土しており、治水祈願に関わる可能性もある。

9世紀 1面のSD0001・0002・0022を検出した。8世紀からのSD0001・0002の流路に沿ってSD0022が大型水路として流れる。その上面は、氾濫原・洪水による粗・中砂の互層状堆積で、遺構面を削った状態であり、本来9世紀以降の水田面も存在したと考えられる。

以上、I区は、弥生時代中期前葉から9世紀代にいたる水田域と位置付けられ、そこで行われた生産活動と祭祀・儀礼行為の一端を垣間見ることができた。SD0003出土の鐸形土製品や外来系土器、後期終末の貨泉・銅鏃・青銅製鋤先（SD0002出土）・絵画土器・線刻土製品・線刻布巻具などの評価、8世紀の官道東門ルート周辺の開発との関わりなど、詳細に検討できなかった点を今後の課題としたい。

3. II区の調査

1) 概要

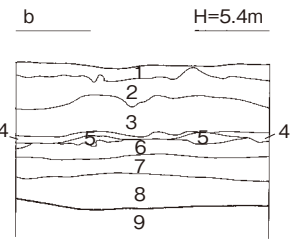
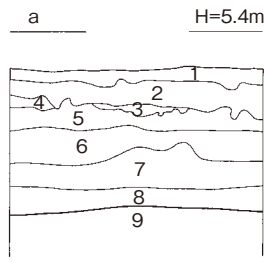
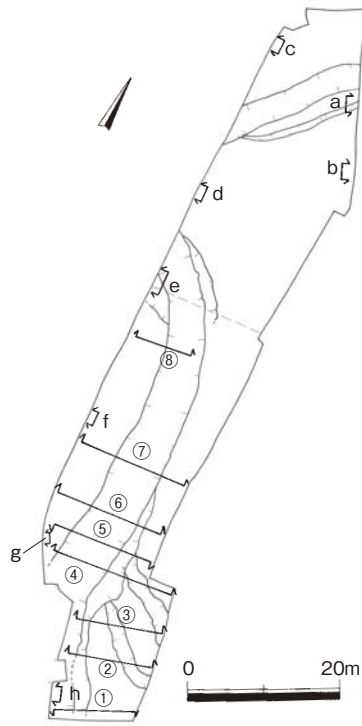
II区は第4次調査範囲の北西部にあたる。南北に長い形となったため、調査中はE区とF区に分けて作業を進めた。グリッドラインDとEの境付近がE区とF区の境界で、南側がE区、北側がF区である。調査期間は平成21年6月～平成22年7月である。以下に調査の経過を記す。

平成21年6月よりE区1面の調査に着手し、8月5日に全景撮影を行った。その後2面への掘り下げを行い、流路、溝、大量の杭列を検出し、10月15日に全景撮影を行った。その後遺構の完掘、杭の断ち割り・実測を行い、それらと並行して11月頃より3面の調査に着手した。平成22年1月20日に3面の全景撮影を行い、その後重機で掘り下げて、標高4.3m付近の青灰色粘土面で遺構の有無を確認した。1月末にはE区の調査を終了し、2月からF区1面の調査に着手した。2月17日に全景撮影を行い、2面への掘り下げが完了した段階で平成22年度の作業を終了した。4月から作業を再開し、5月24日に2面の全景撮影を行った。その後3面への掘り下げを進め、7月に全景写真を撮影してF区の調査を終了した。

II区の基本的な層序と調査時に設定した面を説明する。調査区が広いので、第108～110図に各地点の土層図を掲載している。表土や近現代の盛土層を除去すると、調査区南端では標高5.4m付近で粗砂を検出した。この砂を除去すると足跡や畦状の高まりが確認できたため、この水田面を1面として調査を行った。1面から10～30cm掘り下げると白色粗砂が堆積する流路(SD0065)が検出され、この流路が調査区をほぼ縦断していることから、SD0065が検出できる面を2面として調査を行った。土層観察の結果、調査区南端では2面から20～30cm下にまだ遺構が認められ、調査区北半でも下層に粗砂がかぶった水田面が確認されたため、これらを3面として調査した。調査区南半ではさらに20～40cm掘り下げて地山である青灰色粘土で検出作業を行ったが、明確な遺構は確認できなかったため、3面で調査終了とした。ただし、調査区が広いゆえに複数面あったため、調査区南半と北半とで面の整合がとれていない部分がある。特に3面は異なる時期の遺構を同一面として扱っている。

次に1～3面の概要について説明する。1面は標高5.2m付近の黒褐色粘質シルトを検出面とした。上面にかぶった粗砂を除去し水田面を検出したが、明確な畦や水口は把握できていない。古代以降の水田と考えている。2面では溝、流路、杭列、土堤、水田を検出した。調査区を縦断するSD0065は両岸に大量の杭が打ち込まれ、護岸施設や土堤を構築している。堆積した粗砂中には旧石器、弥生土器、土師器、須恵器、鐸形土製品など多量の遺物が含まれている。その他に貯木遺構と思われる溝もあり、長さ3m以上の部材や木製品が複数出土している。2面は弥生時代終末期～古墳時代後期と考えている。3面では弥生時代中期・後期の溝と土器群、古墳時代前期と思われる水田を検出した。水田面では一部で畦を確認したものの、水口や水田規模は把握できていない。II区の特筆すべき出土遺物としては、ナイフ形石器、鐸形土製品、朝鮮系無文土器、各種木製品等が挙げられる。

SD0065はE区を縦断していたため、土層観察と通路確保のために適宜ベルトを残して掘り下げた。大きく5本のベルト(第108～110図②、④、⑥、⑦、⑧の部分)を設定し、E区を6分割して作業を進めた。南から1区～6区とし、SD0065出土遺物や、包含層出土遺物などはこの区分に則って取り上げている。F区については調査区を分割していない。

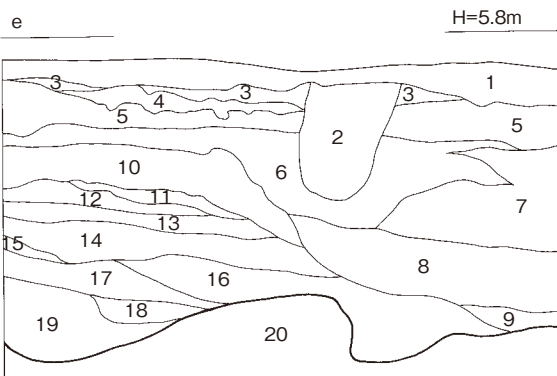


B-5 東壁

1. 黒褐色シルト 硬く締まる
2. 黒褐色シルト 砂粒混じり
3. 白色砂
4. 灰色細砂
5. 灰色細砂と有機物混じり
6. 黒灰色粘土
7. 褐灰色粘質シルト
8. 灰色粘質シルト
9. 青灰色粘土

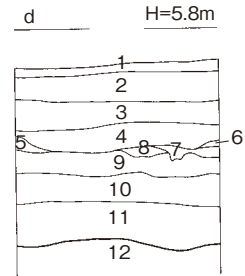
C-5 東壁

1. 黒褐色シルト 硬く締まる
2. 黒褐色シルト 砂粒混じり
3. 黒褐色シルト
4. 灰色シルトと有機物混じり
5. 灰色砂
6. 黒灰色粘土
7. 褐灰色粘質シルト
8. 灰色粘質シルト
9. 青灰色粘土



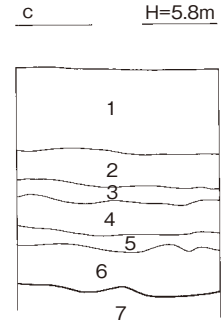
D-3

- | | | |
|-----------|-------------------|--------------|
| 1. 表土 | 8. 白色中砂 | 15. 黄白色中砂～粗砂 |
| 2. 攪乱 | 9. 灰色中砂～粗砂 | 16. 黒褐色粘土 |
| 3. 褐灰色シルト | 10. 黒褐色シルト | 17. 黒灰色砂質シルト |
| 4. 白色粗砂 | 11. 黒褐色粘質土 有機物混じり | 18. 灰色シルト |
| 5. 黒褐色土 | 12. 黄色粗砂 | 19. 白色中砂～粗砂 |
| 6. 黒色細砂 | 13. 黒褐色粘質シルト | 20. 青灰色粘土 |
| 7. 黄白色粗砂 | 14. 黒褐色砂質シルト | |



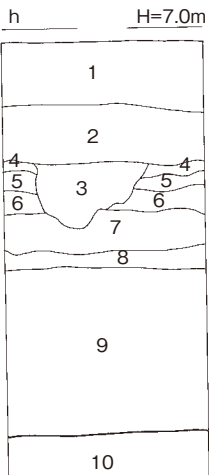
C-3

1. 表土
2. 盛土
3. 灰色シルト
4. 灰色シルトと粗砂混じり
5. 暗灰色シルト
6. 灰色シルト
7. 灰色シルトと砂の混じり
8. 灰褐色シルト
9. 灰色シルトと有機物混じり
10. 黒灰色シルト
11. 灰色シルト
12. 青灰色粘土



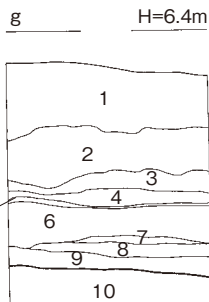
A-4

1. 盛土
2. 黒褐色シルト やや粘質
3. 黒褐色砂質シルト 有機物混じり
4. 黒褐色粘質シルト
5. 灰褐色粘質シルト
6. うすい灰色シルト
7. 青灰色粘土



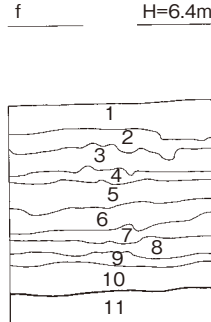
J-1

1. バラス・碎石
2. 盛土
3. 攪乱
4. 明黄褐色土
5. 褐灰色粘質シルト
6. 黄褐灰色シルト
7. 灰色粗砂
8. 黒灰色粘土
9. 白色粗砂 SD0065
10. 青灰色粘土



H-1

1. 盛土
2. 黄灰色土
3. うすい黒褐色シルト
4. 灰褐色シルト
5. 黒褐色土
6. 灰色砂質土
7. 白色細砂
8. 褐灰色砂質土
9. 灰色粘土
10. 青灰色粘土

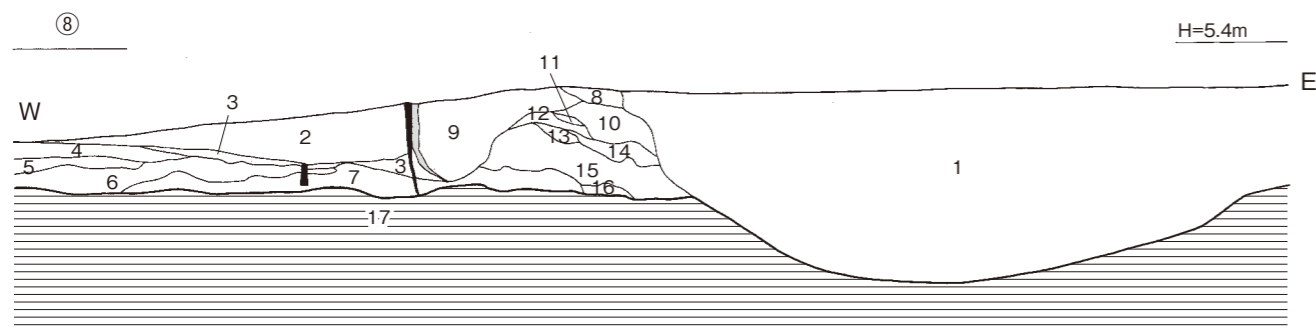


F-2

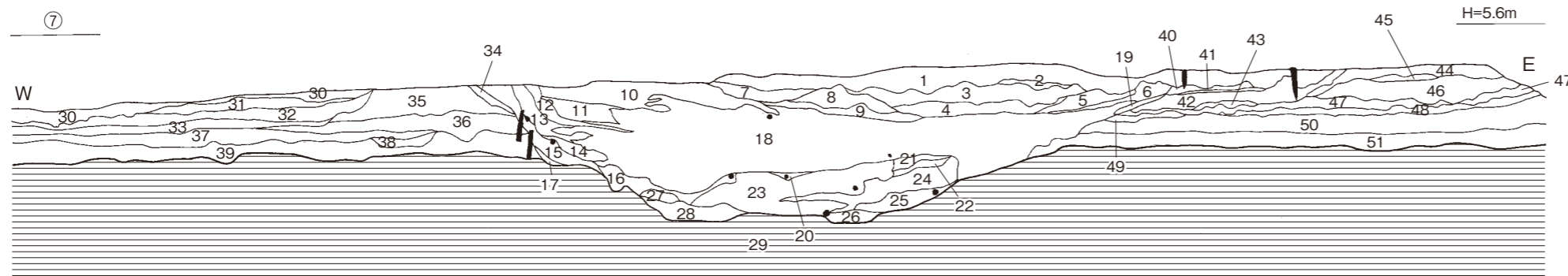
1. 盛土
2. 白色砂
3. うすい黒褐色シルト
4. 黒褐色シルト
5. うすい黒褐色シルト
6. 黄白色砂
7. 黒褐色シルト
8. うすい褐灰色砂質土
9. 褐灰色シルト
10. 灰色粘土
11. 青灰色粘土



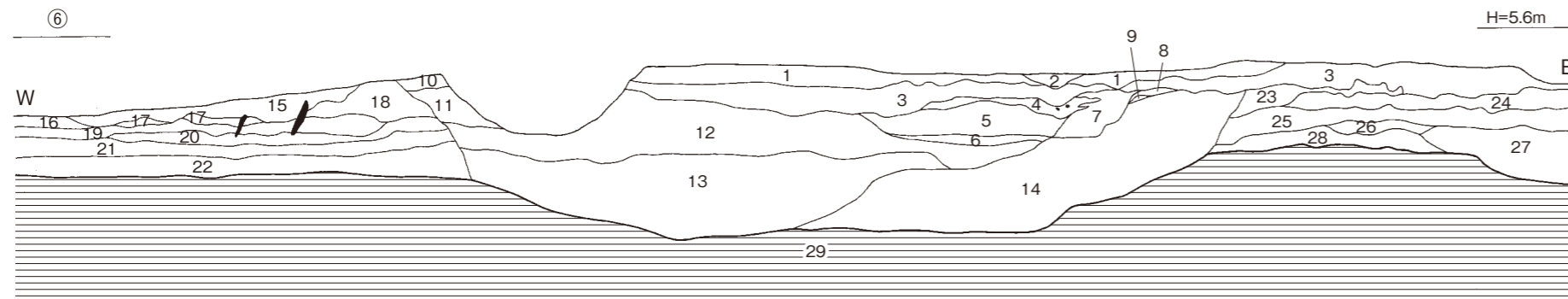
第108図 土層実測地点および東壁・西壁土層図(1/60、1/1000)



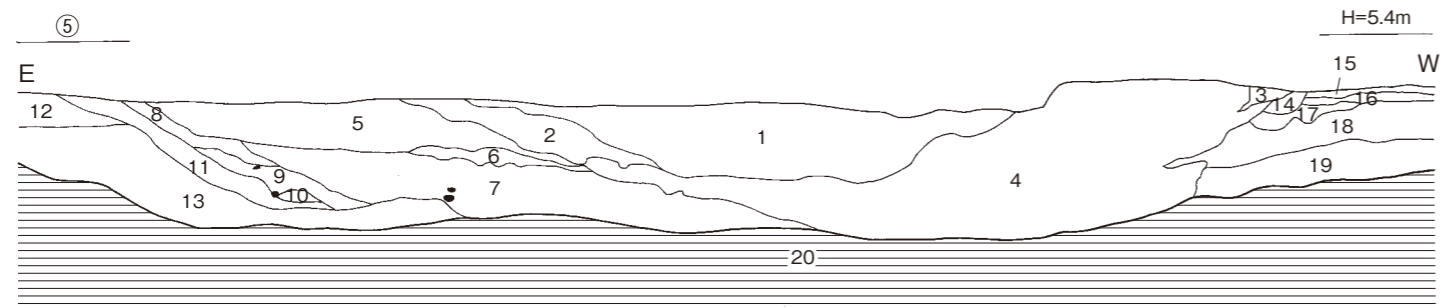
- 1. 白色砂 (SD0065)
- 2. 灰白色粗砂
- 3. 黒灰色粘質シルト
- 4. うすい黒色シルト
- 5. うすい褐色シルト
- 6. 灰色粘土 (鉄分沈着)
- 7. うすい黒灰色粘土
- 8. 黒灰色細砂
- 9. 黒色土 (土器片含む埋め土 SX0075)
- 10. 灰褐色粘質シルト (かたく締まる)
- 11. 白色中砂
- 12. うすい黒褐色シルト
- 13. 灰褐色粘質シルト
- 14. 黒色砂と白色砂の混じり
- 15. 灰色粘質シルト (6と似る)
- 16. 黄灰色中砂
- 17. 青灰色粘土



- 1. 黒褐色シルト (砂混じり)
- 2. 黄白色砂
- 3. 黒褐色シルト (砂少ない)
- 4. 白色砂と黒色砂の混じり
- 5. 黄白色砂
- 6. 黒褐色細砂
- 7. 黒褐色シルト
- 8. 白色砂
- 9. 黒色細砂
- 10. 黒色砂と白色砂の混じり
- 11. 黒色細砂
- 12. うすい黒色細砂
- 13. 黒色砂
- 14. 黄色砂
- 15. 黒褐色粘質シルト
- 16. 黒色粘土
- 17. 黄色砂
- 18. 黄白色砂
- 19. 黒色細砂
- 20. 黒色砂
- 21. 黒色粘土
- 22. うすい黒色粘土
- 23. 黄白色砂
- 24. 黒色粘土
- 25. 黄白色砂
- 26. 黒色粘土
- 27. 黄色砂
- 28. 黒色粘土
- 29. 青灰色粘土
- 30. 黒褐色シルト (砂混じり)
- 31. 白色粗砂
- 32. 黒褐色シルト
- 33. うすい褐色シルト
- 34. 黄灰色シルト
- 35. 灰色粘質シルト
- 36. 灰褐色シルト
- 37. うすい黒褐色シルト
- 38. 黄灰色シルト
- 39. 黒褐色粘質シルト
- 40. 黒褐色シルト (砂少ない)
- 41. 黄灰色砂
- 42. 黒褐色シルト
- 43. 黄色砂
- 44. 黒褐色シルト
- 45. 灰褐色砂
- 46. うすい暗褐色砂
- 47. 黒褐色シルト
- 48. 灰オリーブ色シルト
- 49. 褐色シルト
- 50. 灰色粘質シルト (51よりかたく締まる)
- 51. 灰褐色粘質シルト

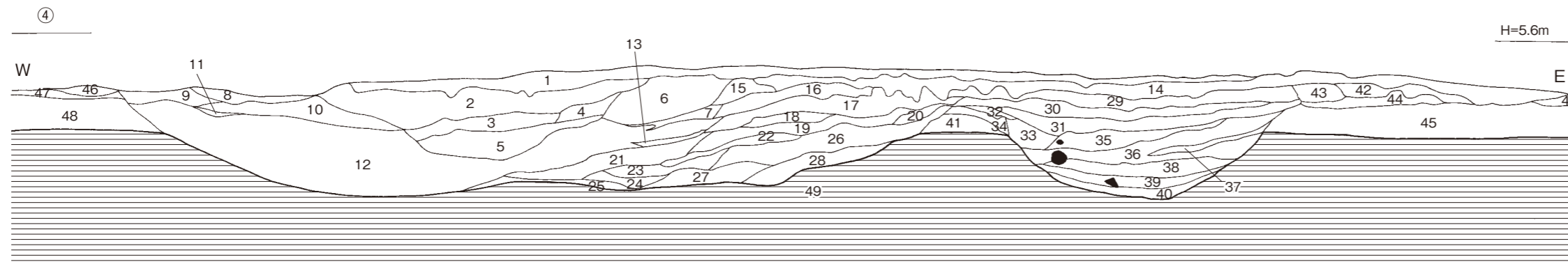


- 1. 灰色粘質シルト
- 2. うすい黒灰色砂質シルト
- 3. 黒灰色砂質シルト
- 4. 黒褐色粘質シルト
- 5. 黄灰色粗砂
- 6. 黒色砂
- 7. 黒褐色砂質シルト
- 8. 黒褐色粘質土
- 9. 灰白色粗砂
- 10. 灰色シルト
- 11. 黒灰色砂と白色砂の互層
- 12. 黄灰色～赤褐色粗砂
- 13. 白色粗砂
- 14. 黒色粘土 (SD0073)
- 15. 灰色シルト (砂粒混じり)
- 16. 黒灰色粘質シルト
- 17. 灰白色粗砂
- 18. 灰色～黄灰色シルト
- 19. うすい黒褐色粘質シルト
- 20. 黒褐色砂質土
- 21. 灰色粘質シルト
- 22. うすい黒灰色粘質シルト
- 23. 黄灰色シルト
- 24. 黒褐色シルト
- 25. うすい黒褐色シルト (砂混じり)
- 26. 褐色シルト
- 27. 灰褐色粘質土 (SD0080)
- 28. 黄褐色灰色シルト
- 29. 青灰色粘土



- 1. 黒色砂質土
- 2. 黒色中砂～細砂
- 3. 黒色細砂
- 4. 黄白色粗砂
- 5. 黒褐色粘質シルト
- 6. 黄灰色砂
- 7. 黒色粘質土
- 8. 灰色砂
- 9. 黒灰色砂 (炭・木質含む)
- 10. 白色砂
- 11. 黒褐色砂質土 (木質含む)
- 12. 灰褐色粘質シルト
- 13. 黒褐色粘質土 (炭混じり、SD0080)
- 14. 黒灰色細砂
- 15. 黄灰色シルト～細砂
- 16. うすい褐色シルト
- 17. 褐色粗砂
- 18. 黒褐色粘土
- 19. 黒灰色粘土
- 20. 青灰色粘土

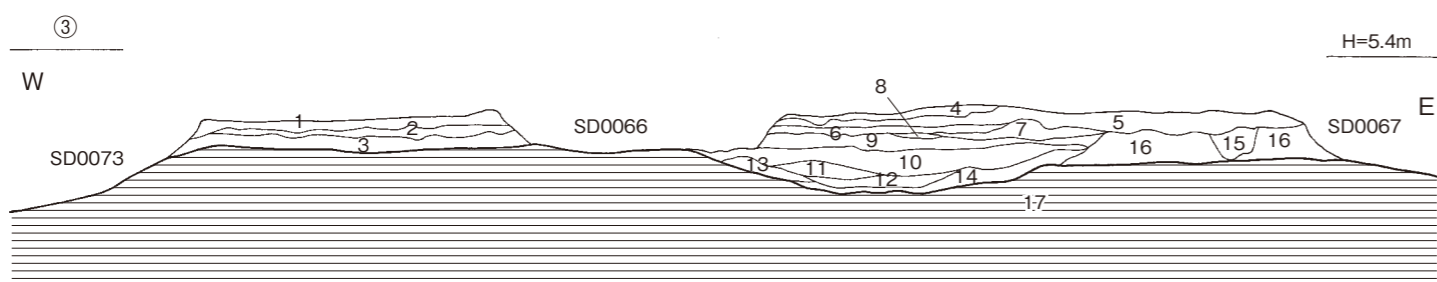




H=5.6m

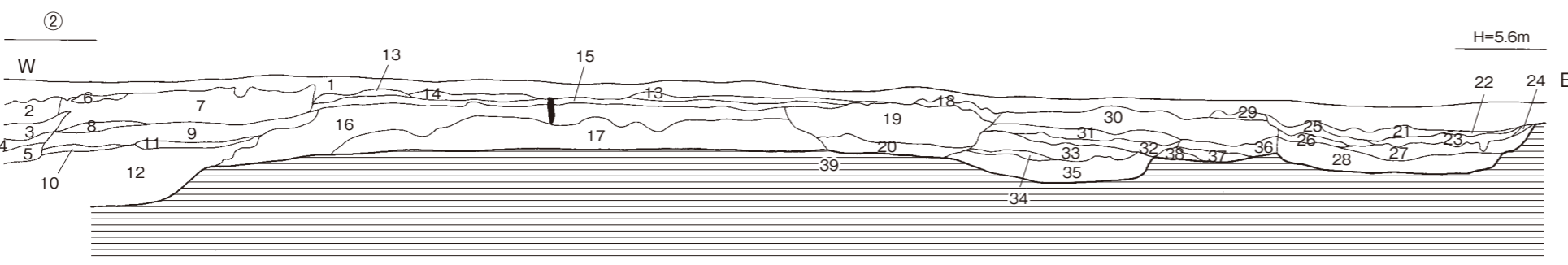
- 18. 黄灰色粗砂
- 19. 黒色細砂 (粘性あり)
- 20. 白色砂
- 21. 黒色粘土 (炭含む)
- 22. 黄色砂
- 23. 黒色粘土
- 24. 黒色粘土と地山土の混じり
- 25. 黒灰色粘土
- 26. 黒色シルト～中砂
- 27. 黒灰色粘土 (炭・木質含む)
- 28. 黄白色粗砂
- 29. 黒褐色シルト
- 30. 灰褐色シルト
- 31. 黒褐色シルト
- 32. 黄色砂
- 33. 黒色シルト
- 34. 青灰色シルト
- 35. 褐色砂
- 36. 黒褐色細砂 (粘性あり)
- 37. 白色砂
- 38. 黄褐色粗砂
- 39. 灰白色粗砂 (木質含む)
- 40. 黒褐色粘土
- 41. 灰色粘質シルト
- 42. うすい黒褐色シルト
- 43. 黄色土
- 44. 灰褐色シルト
- 45. うすい灰色シルト
- 46. 赤褐色砂質土 (SX0068)
- 47. 黒灰色土
- 48. 灰色粘質シルト
- 49. 青灰色粘土

- 1. 黒褐色シルト (1面)
- 2. 黒褐色粘質シルト
- 3. 黒色砂質土
- 4. 黒色砂
- 5. 黒灰色粗砂
- 6. 黒色と白色砂の互層
- 7. 黒色細砂
- 8. 黒色砂
- 9. 黒色細砂
- 10. 灰色粗砂
- 11. 黒色粘土
- 12. 黄白色砂
- 13. 灰色粘質シルト
- 14. うすい褐色砂質土
- 15. 黒色細砂 (粘性あり)
- 16. 黒褐色シルト
- 17. 黒褐色シルト



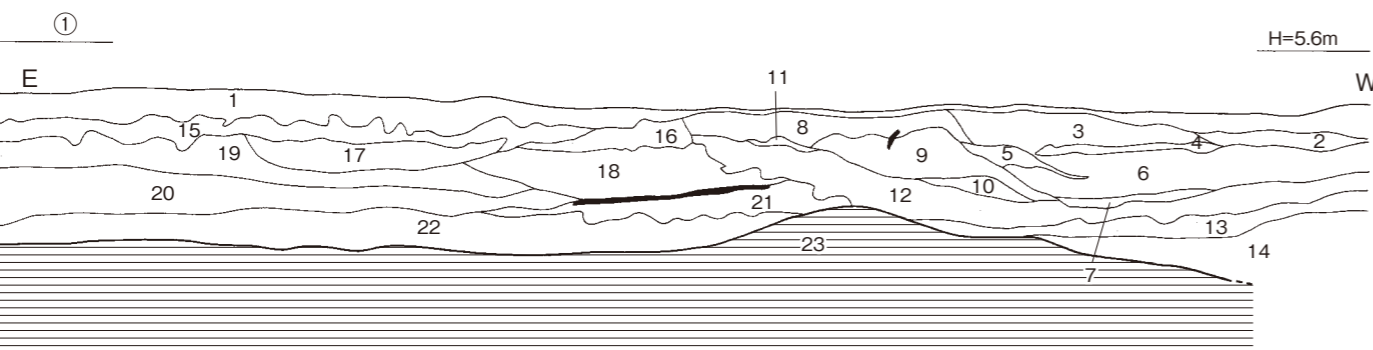
H=5.4m

- 1. うすい黒褐色シルト
- 2. 黒灰色シルト
- 3. 灰色シルト
- 4. 褐色細砂
- 5. 黄灰褐色シルト
- 6. 褐色砂質シルト
- 7. 褐色シルト
- 8. 黄色砂
- 9. 灰褐色シルト
- 10. 黄色砂 (遺物多く含む)
- 11. 黒褐色砂質シルト
- 12. 黒褐色粘質シルト (木質含む)
- 13. 黒褐色粘質シルト
- 14. 黒褐色シルトと地山土の混じり
- 15. 黒褐色土
- 16. うすい灰色シルト
- 17. 黄灰色シルト



H=5.6m

- 1. 黒褐色シルト (1面)
- 2. 黒褐色細砂
- 3. 黄灰色中砂～細砂
- 4. うすい黒灰色中砂～細砂
- 5. 灰白色粗砂～中砂
- 6. 灰色粗砂～中砂
- 7. 黒褐色シルト (粘性あり)
- 8. 灰色粗砂
- 9. 黒褐色粘土
- 10. 黄灰色粗砂
- 11. 赤褐色粗砂
- 12. 黒褐色粘質土
- 13. うすい黒褐色シルト
- 14. 褐色粗砂～中砂
- 15. 黒褐色シルト
- 16. うすい褐色粘質シルト
- 17. 灰色～黄灰色シルト
- 18. うすい灰色砂質シルト
- 19. 白色砂、灰色砂、橙褐色砂の互層
- 20. 橙褐色粗砂 (遺物多く含む)
- 21. 黒色砂 (木質含む)
- 22. 黒色砂質シルト
- 23. 白色砂と黒色砂の混じり
- 24. 黒色シルト
- 25. うすい黒色砂
- 26. 黒色砂
- 27. 黒色砂質シルト (木質含む)
- 28. 黄褐色粗砂～中砂
- 29. 黒褐色シルト
- 30. うすい褐色シルト
- 31. 黄褐色砂 (遺物多く含む)
- 32. 黒褐色シルト
- 33. 褐色土 (黄色砂混じり、遺物多量)
- 34. 黒褐色砂質土
- 35. 黒褐色粘質土
- 36. 黒褐色シルト
- 37. 黒褐色土 (遺物含む)
- 38. 黒色土
- 39. 黄灰色シルト



H=5.6m

- 1. 黒褐色シルト (1面)
- 2. 灰色砂
- 3. 灰オリーブ色粗砂
- 4. 暗灰色粘質土
- 5. 灰色シルト
- 6. 灰黄色粗砂～中砂
- 7. 灰色シルト
- 8. 灰色細砂 (木質含む)
- 9. 黒灰色砂と白色砂の混じり
- 10. 黒色砂
- 11. 暗灰色粗砂
- 12. 明黄褐色粗砂
- 13. 灰色粗砂～中砂
- 14. 黒灰色粘質土
- 15. 明黄褐色シルト
- 16. 黄灰色シルト
- 17. うすい褐色シルト (SD0077)
- 18. 灰色シルト
- 19. 明るい灰褐色シルト
- 20. 灰褐色シルト (木質含む)
- 21. 灰色シルト (木質多く含む)
- 22. 黒褐色粘質土 (木質含む)
- 23. 青灰色粘土



2) 遺構と遺物

(1) 1面の調査

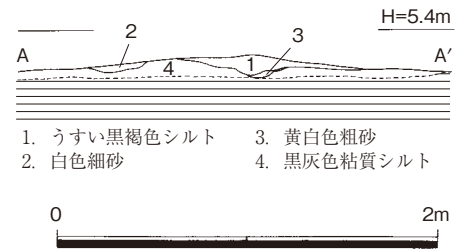
標高5.2m付近の粗砂をかぶった水田面を1面とした。E-2・3・4、F-2・3は表土剥ぎの際に下げ過ぎてしまい、一気に3面水田面を検出してしまった。1面で検出した遺構は畦数条と水田である。出土遺物がほとんどないため時期決定が困難であるが、古代以降の水田と考えている。

①水田(SS)

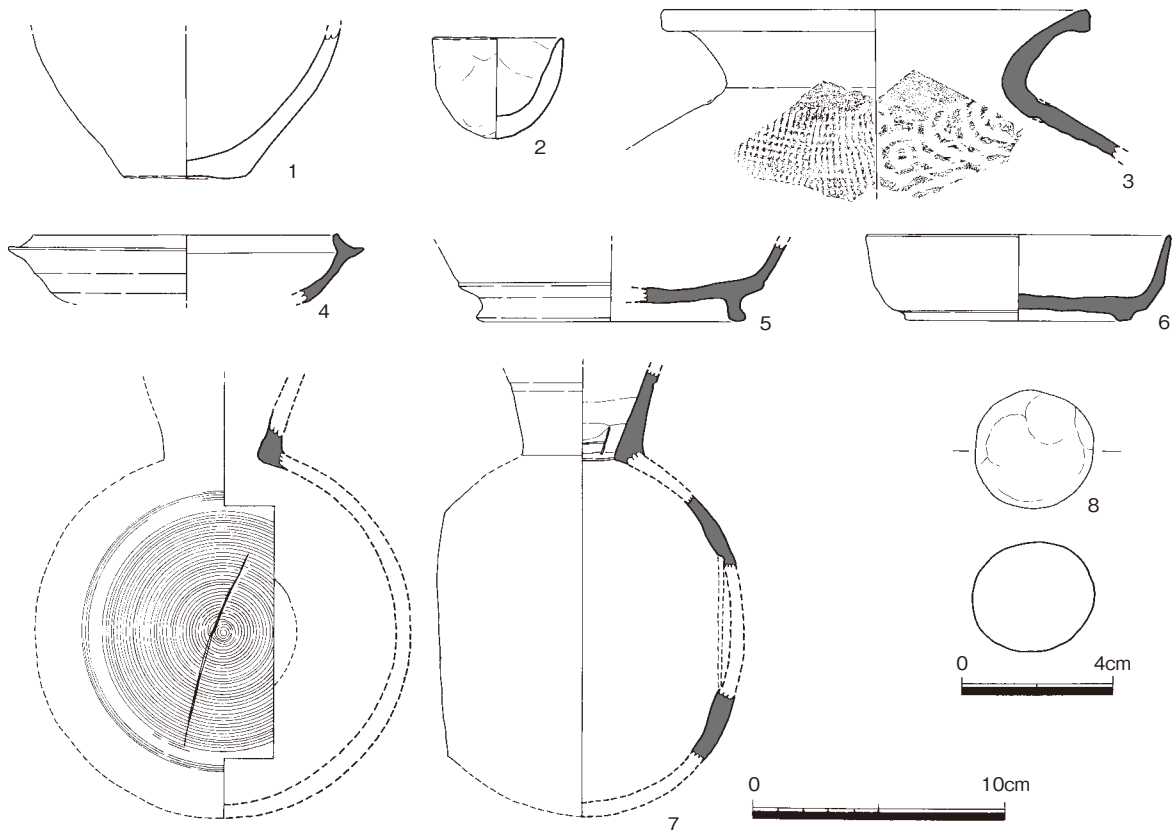
ほぼ全面で水田面を確認した。I・J-2、B・C-3・4付近は上面に粗砂がうすく堆積し、検出は容易であったものの、畦はほとんど把握できなかつた。検出した畦状の高まりも部分的で遺存状況は悪く、水田区画や規模、水口などを把握するには至らなかつた。調査区南端で検出した畦状の高まりは幅1m前後、高さ10cm程度の緩やかなもので、周囲の水田土壌とほぼ同質である。部分的な検出であったことから、確実に畦とするには心許ない。東西方向畦の主軸はN-64°-Eで、下月隈C遺跡で検出された条里方位とはややずれている。I・J-2・3付近ではヒトや偶蹄類の足跡、稲株痕と思われる凹みが多数確認できたが、明瞭に歩行の痕跡を追えるものはなかつた。

②その他の遺物(第112図)

1面下の遺物包含層掘り下げ時に出土した遺物である。1・2は弥生土器、3～7は須恵器である。3は甕の口縁から肩部、4は杯身、5・6は高台付杯身である。7は小破片であったが、提瓶として図上復元した。8は土製投弾である。



第111図 1面畦土層断面図(1/40)



第112図 1面出土遺物(8は1/2、他は1/3)

(2) 2面の調査

1面より10～30cm下で、調査区を南北に貫くSD0065を検出できる高さを基準とした。検出面は標高5m前後の黒褐色粘質シルトで、上面にわずかに砂をかぶっている部分もあったが、大半の部分では明確に分層できているわけではない。検出した遺構は溝、流路、杭列、土堤、水田、貯木遺構等である。Ⅱ区出土遺物の大半は2面からの出土で、大量の弥生土器、土師器とともに木製品や旧石器が出土した。

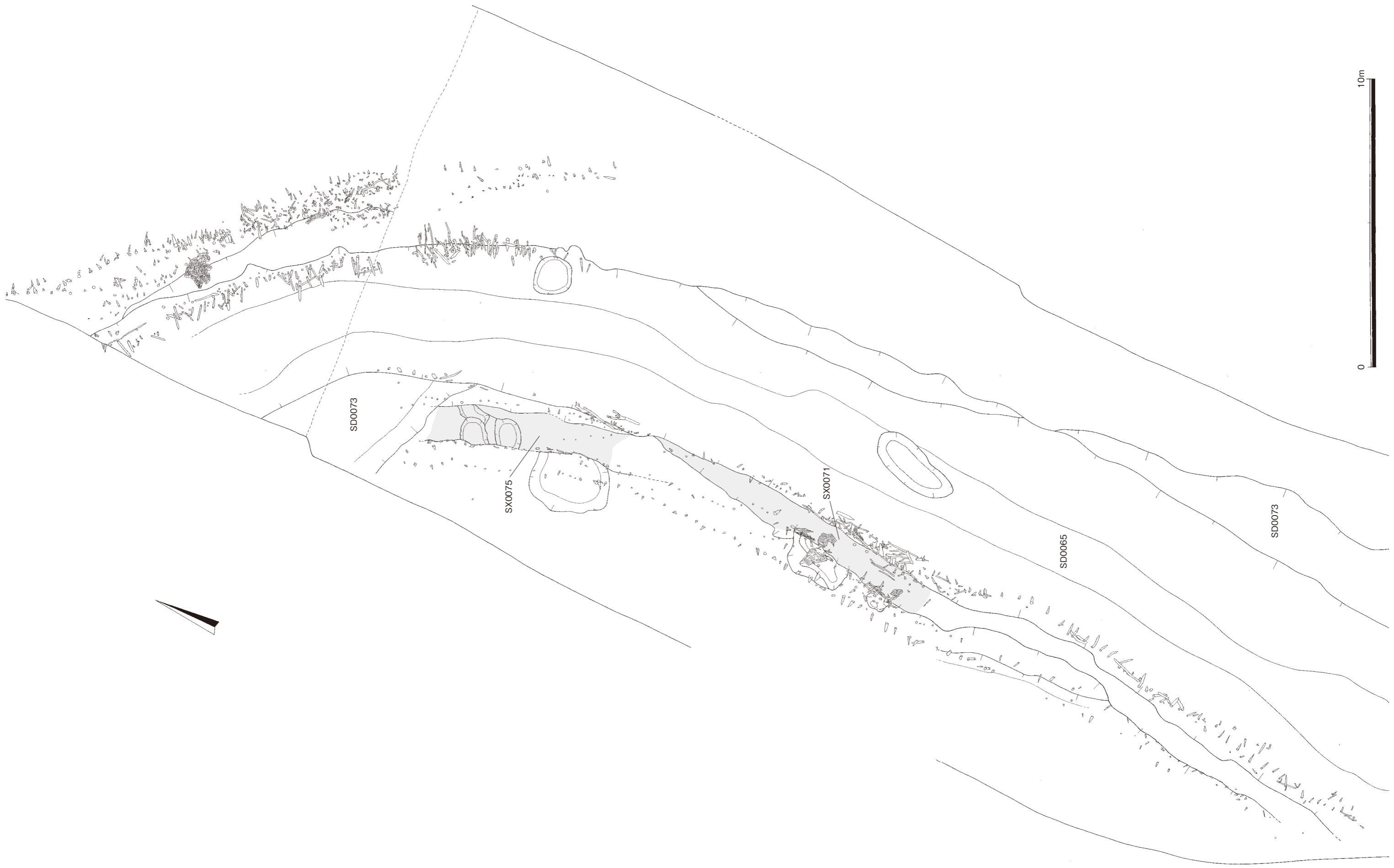
①溝・流路(SD)

SD0065(付図2、第113～116図) Ⅱ区南半を南北に貫く流路で、南端はJ-1・2、北端はD-3で調査区外西側へと延びていく。南側はⅣ区北西端へ続く。幅5～7m、深さ1.3～1.5mを測り、ほぼ洪水砂で埋まる。断面形は緩いU字状で、東岸の立ち上がりは緩いが、西岸はやや急である。後述するようにSD0073と重複しているため、図版55-6や56-1に見られるように、東岸は地山ではなく黒色土(SD0073)となっている。東岸の湾曲部分(D・E-3付近)及び西岸(E-3、E・F・G・H-2、G・H-1)には杭が大量に打ち込まれている。また、西岸のE-3、F-2には多量の杭・横木とともに黒色土で埋め固めた部分(SX0071・0075)があり、土堤を構築したと思われる。杭が深く、崩落のため全てを図化できなかつたことが悔やまれる。土堤より西側には粗砂をかぶる黒褐色粘質シルトがあり、水田面と思われる。

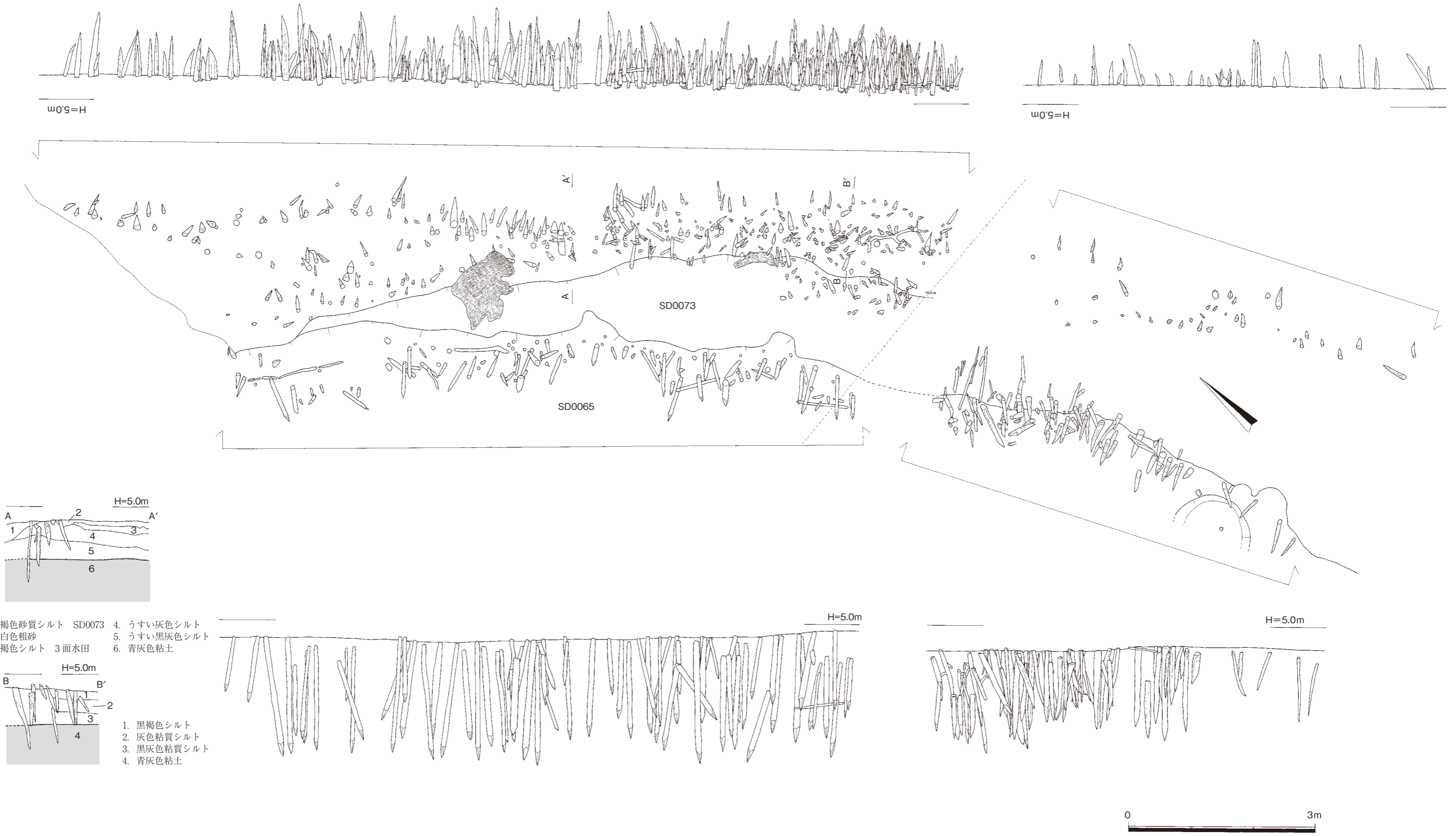
D・E-3の東岸には長い杭が密集して打ち込まれ、なかには長さ2m以上のものも見られる。径10cm前後の丸木杭と割材が混在しており、樹種同定結果によるとスダジイ、クスノキ、ツブラジイ、ショウベンノキ科が使用されている。樹種同定を行ったのは資料のごく一部であるため、その他の種類の木が利用されている可能性は大いにある。これらは流路の湾曲地点に打ち込まれたもので、水流による浸食を防ぐための護岸杭と思われる。また、岸から2m程離れたところにも杭列が見られ、複数の並びがあるように思われるが、杭が密集しているため把握が困難で、それぞれの帰属を明確にすることができない。

東岸の杭については、上面から打ち込まれた杭が混じっている可能性も考慮し、杭の先端レベルで分類し、位置の把握を試みた(第119図)。杭先端が標高4.10m以下のもの、標高4.11～4.30mのもの、標高4.31m以上のもの、の三種類に分類している。SD0065に接する西端の杭列はほとんどが長い丸木杭で構成されており、壁に向かって斜めあるいは水平に打ち込んでいるものも見られる。SD0065の東側にはSD0073と思われる上端ラインがあり、その上端に沿った杭列も見られるが、長い杭と短めの杭が混じっている。東端の杭列中央は密集度が激しいものの、短い杭がほとんどである。その南側も同様に短い杭が多い。一方、東端杭列の北端は長い杭が多いことから、東端杭列は複数の並びが重複しているものと思われる。杭先端が標高4.10m以下のものは、西端杭列とほぼ平行することから、SD0065に伴う可能性がある。後述するSX0071・0075のような土堤を設けていたのであろうか。また、西壁から4m程のところでは、樹皮のようなものが検出された。土堤構築の際に補強のために埋めたものであろうか。

西岸にはおよそ40mにわたって三列の杭が打ち込まれている。中央の杭列と東側の杭列は、SD0065西岸の土堤を挟むように打ち込まれているが、西端の杭列は全体的に杭が短く、同時期のものか確証はない。しかし、いずれもSD0065の流れと並行していることから、SD0065に伴うものと考えている。発掘調査中は、西端の杭列をSX0072、中央列をSX0074として断ち割り、実測、写真撮影を行っている。スダジイ、ツバキ属、シキミなどが利用され、ミカン割り材と芯持丸木材が混在している。東岸杭と同様、樹種同定を行ったのはごく一部である。先述の東岸杭に比べて、等間隔に



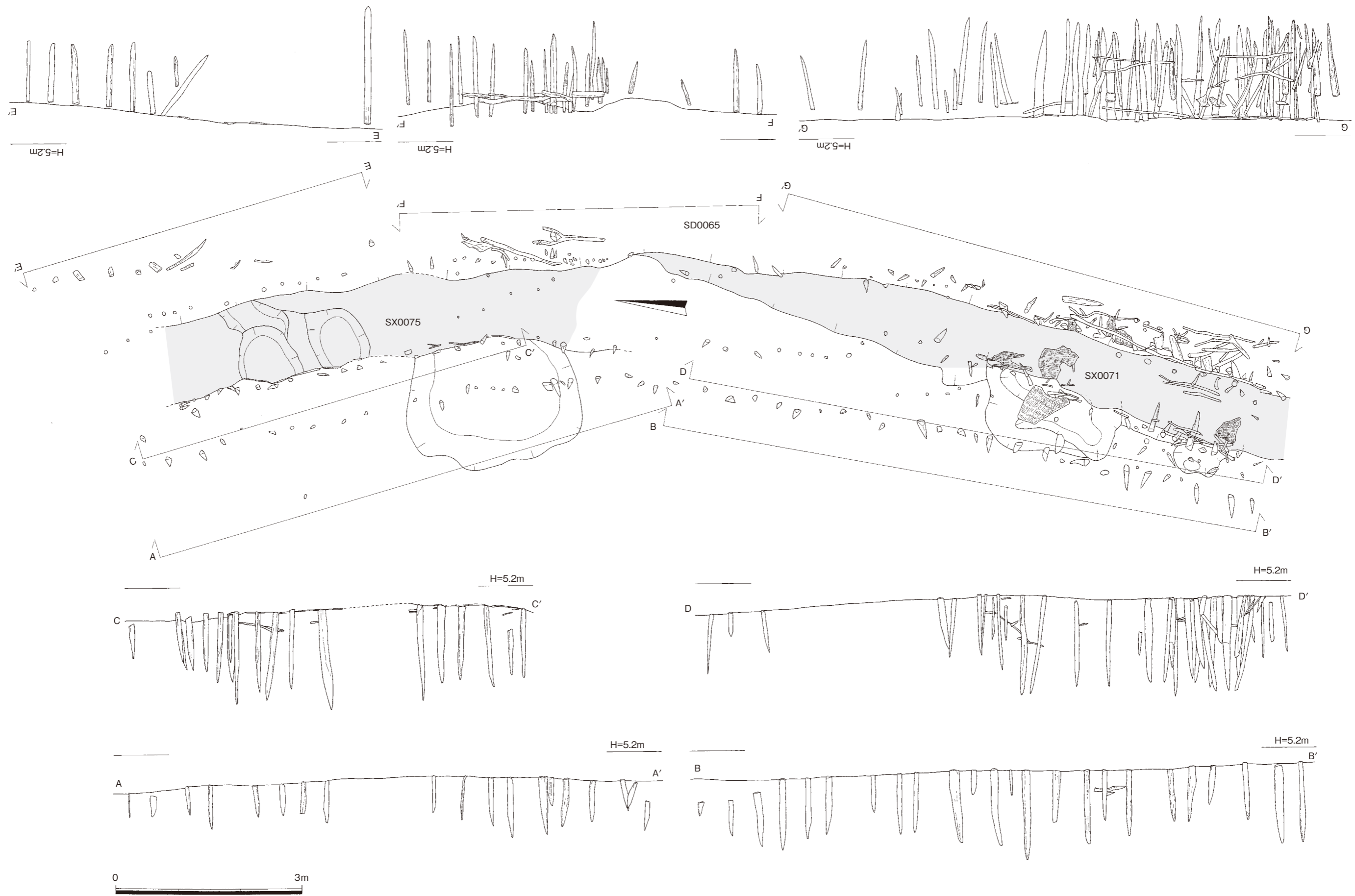
第 113 图 SD0065 杭全体图 (1/120)



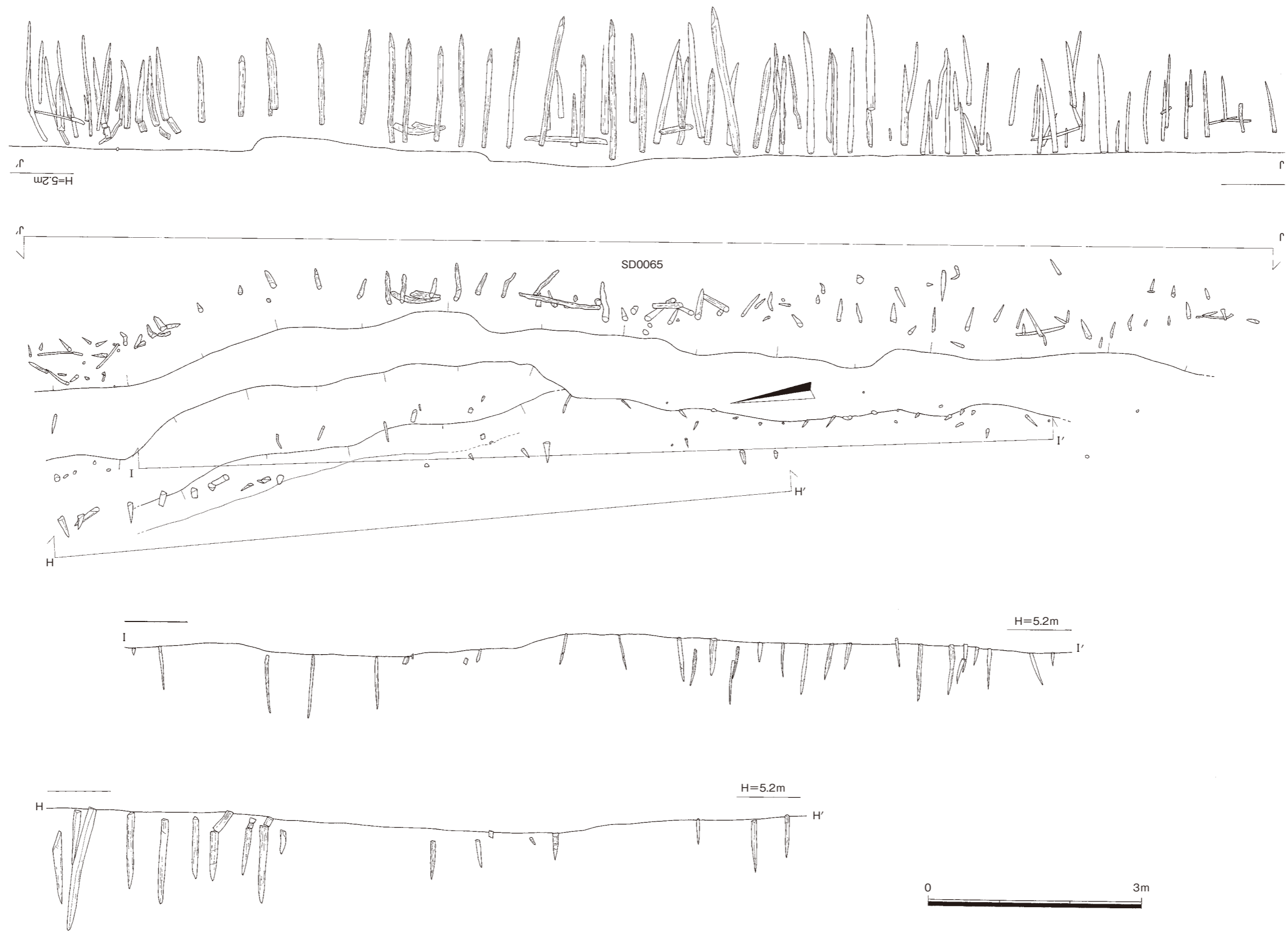
- 1. 黒褐色砂質シルト SD0073
- 2. 灰白色粗砂
- 3. 黒褐色シルト 3面水田
- 4. うすい灰色シルト
- 5. うすい黒灰色シルト
- 6. 青灰色粘土

- 1. 黒褐色シルト
- 2. 灰色粘質シルト
- 3. 黒灰色粘質シルト
- 4. 青灰色粘土

第114図 SD0065 東岸杭実測図 (1/60)



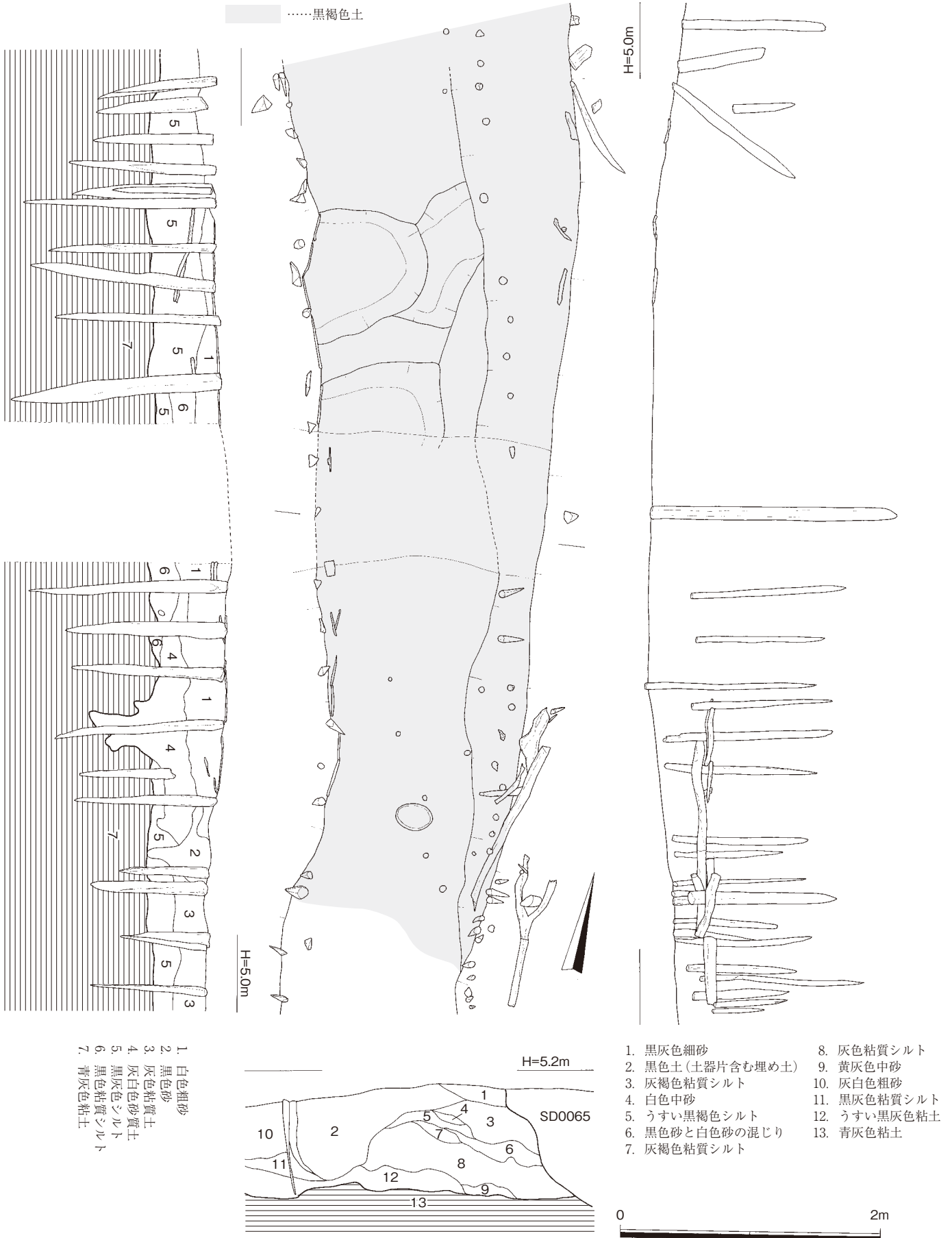
第 115 图 SD0065 西岸杭实测图 (1) (1/60)



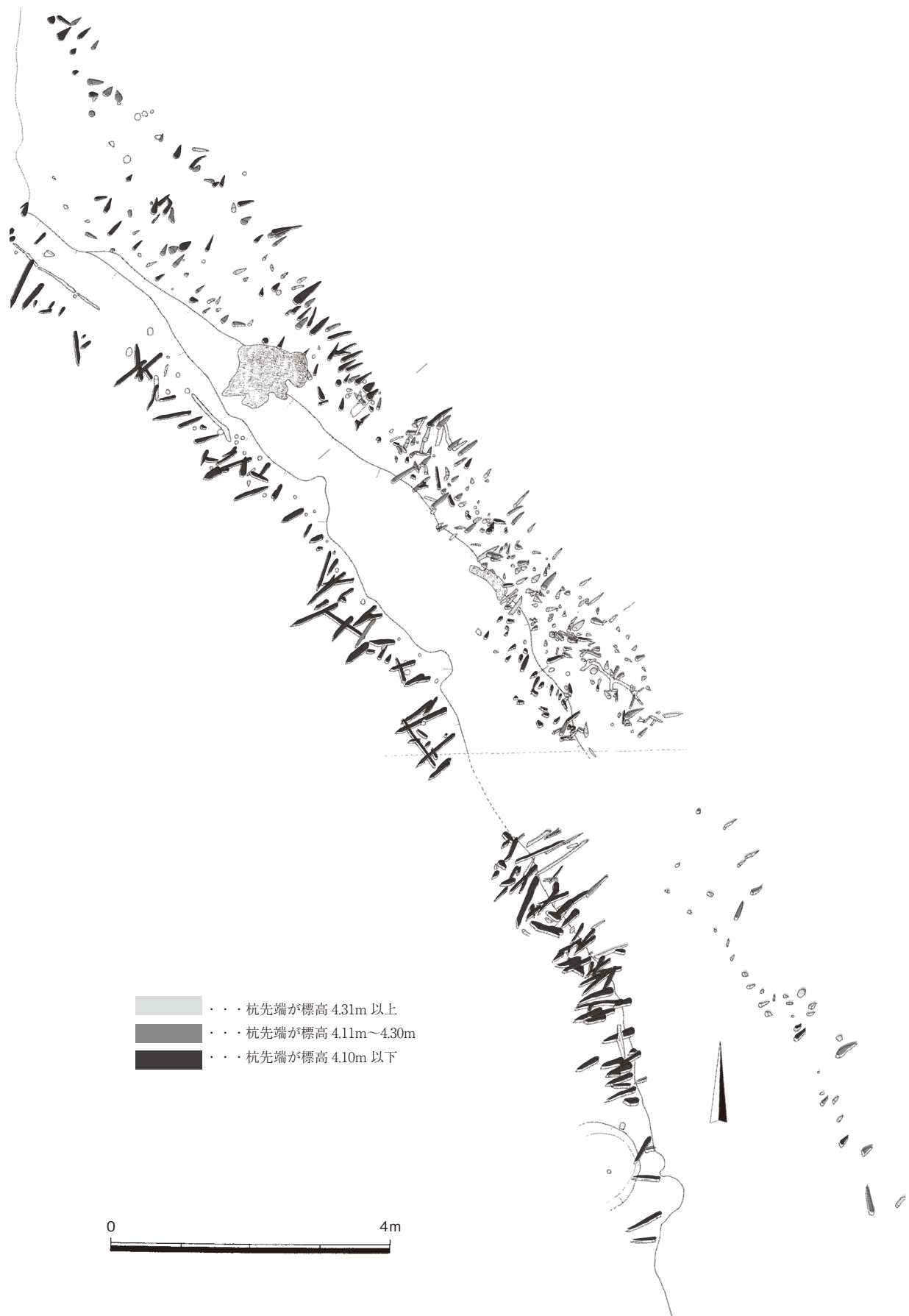
第 116 图 SD0065 西岸杭实测图 (2) (1/60)



第117図 SX0071実測図(1/40)



第118図 SX0075 実測図 (1/40)



第 119 図 SD0065 東岸杭 (1/80)

打ち込まれている印象を受ける。ただし、西岸のF-2とE-3には、他の地点に比べて杭が密集し、黒色土で埋め固めた部分がある。F-2のものをSX0071、E-3のものをSX0075として掘削・記録を進めた。これらは崩れた土堤を補修したものと考えている。

SX0071(第117図)は長さ約10m、幅1mの範囲を黒色土で埋めた部分である。SD0065の西岸に形成された灰色シルトの自然の高まりに付け足すように土堤を構築している。SX0071部分の灰色シルトは大きく崩れている。黒色土の厚さは約60cmで、両側は大量に打ち込んだ杭と横木で土留めを施している。特に東側は杭の密集が激しいが、調査中に崩落した部分が多い。黒色土内や底面には樹皮のようなものが複数検出された。構築の際に補強のために敷き込んだものと思われる。黒色土には弥生土器・土師器の小片が含まれている。

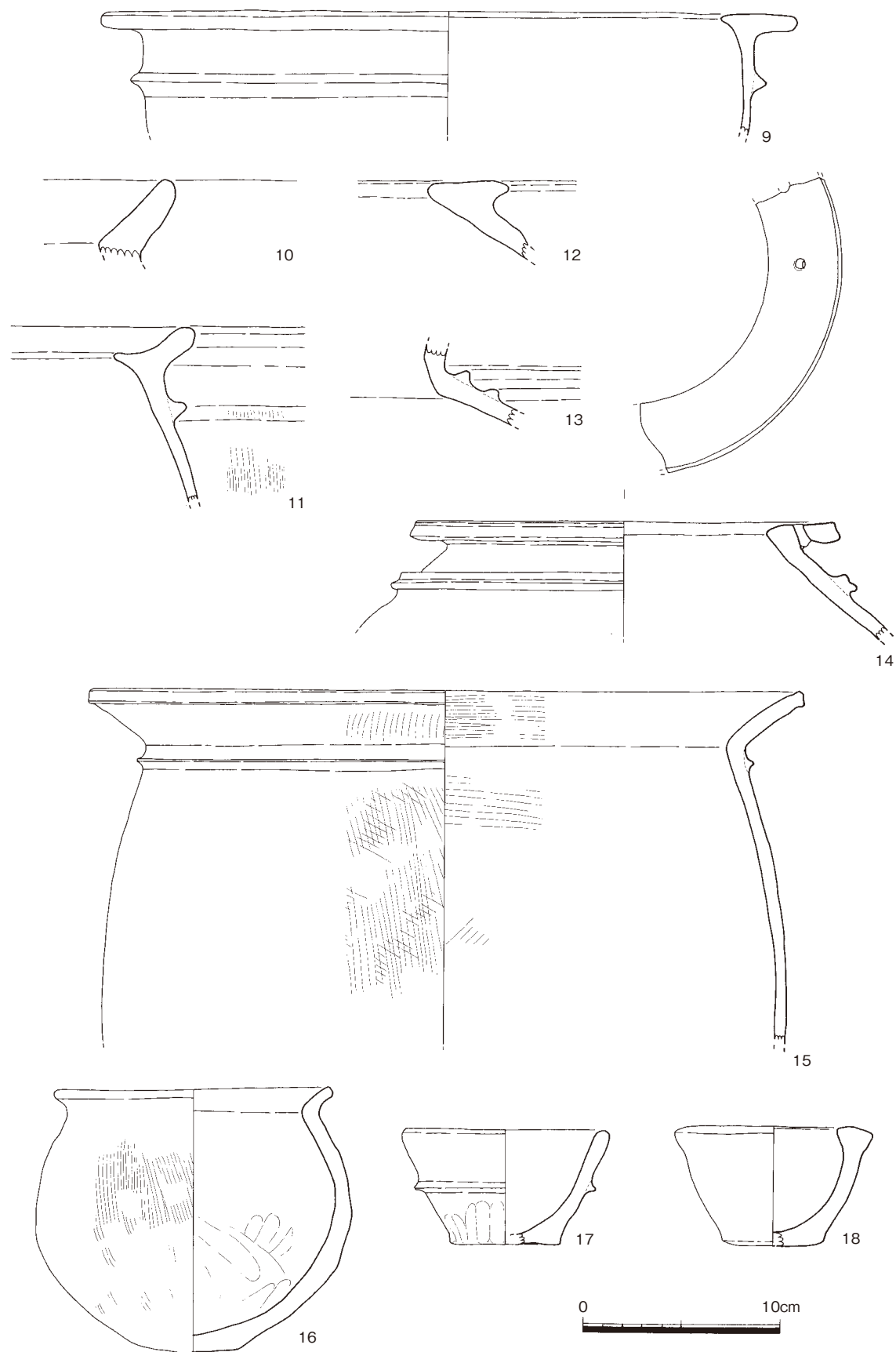
SX0075(第118図)は長さ7m、幅1.5m程の範囲をSX0071と同様の黒色土で埋めた部分である。南から延びる土堤の続きを構築したものと思われ、両側は杭と横木で土留めを施している。SX0071と比べると杭の密度は低い。黒色土の厚さは20～60cmである。黒色土を除去すると底面は凸凹で、窪みのひとつからは加工したヒョウタン(105)が出土した。

SD0065は調査区を縦断する大きな流路であったため、適宜ベルトを残して通路を確保しながら、六分割して掘削した。湧水が非常に激しく、遺物の出土位置の記録などはほとんど行えていない。SD0065の上層・中層には遺物は少なく、底面付近からの出土土器が大多数を占める。出土遺物の大半が弥生土器であるため、当初は弥生時代中期・後期の溝に思えたが、土師器・須恵器も確実に含まれている。その他に鐔形土製品、石器、木器、種実、獣骨などが出土している。古墳時代後期～古代に埋没したものと思われる。

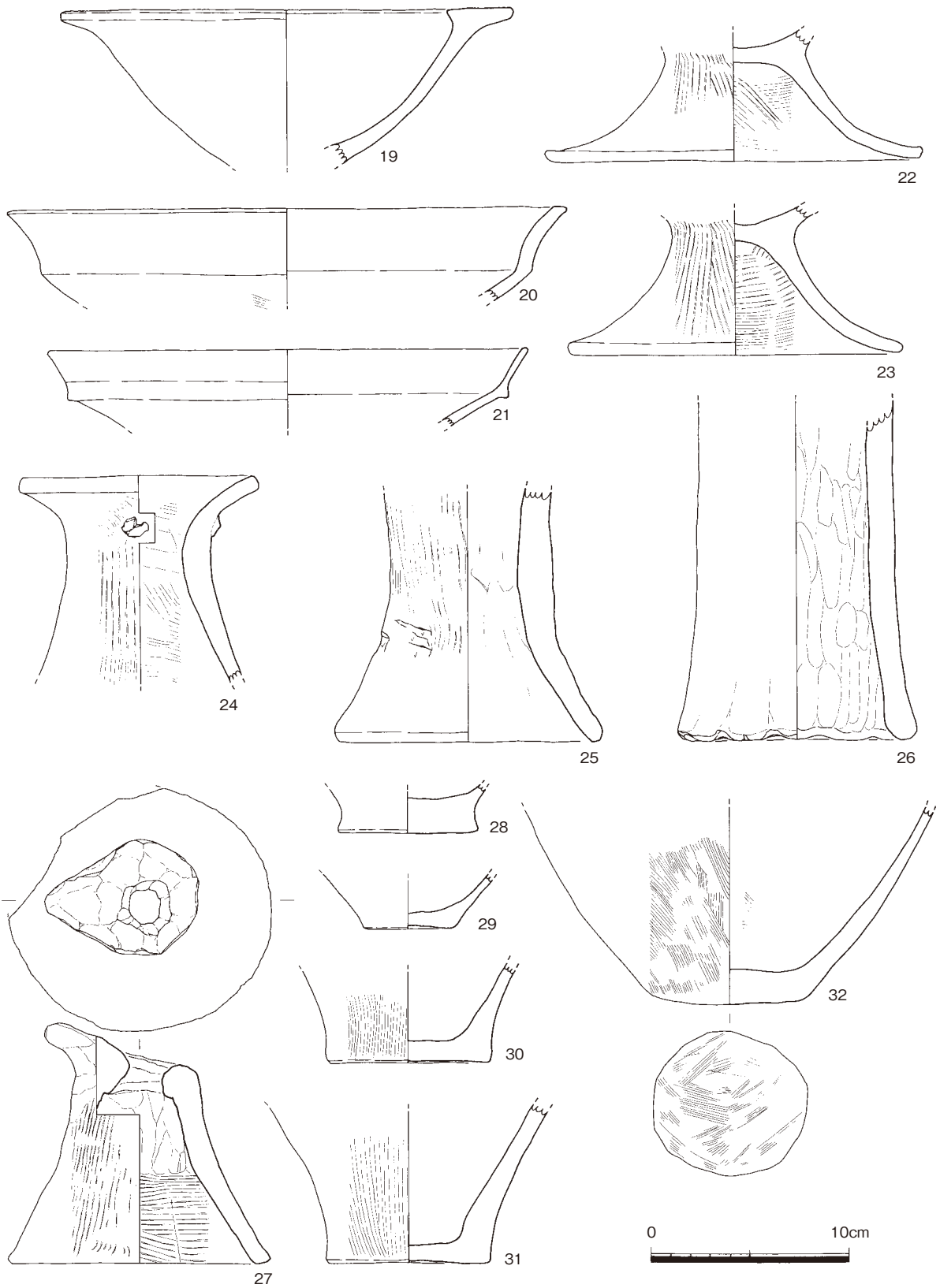
出土遺物(第120～131図) 第120～129図はSD0065出土遺物、第130・131図はSD0065、SX0071・0075出土遺物である。

9～32は弥生土器である。9～12・14は中期の甕で、14は口縁部に二孔を有する。13は甕あるいは壺の肩部で、二条の断面三角突帯が巡る。15は後期の甕である。くの字状口縁で、頸部には断面三角突帯が巡る。外面にはタテハケ、内面にはヨコハケを施す。胴部外面中位には煤が付着している。16は球形の胴部の鉢で、口縁は短く外反する。胴部外面はタテハケ、内面はナデ調整である。口径14.0cm、器高13.2cmを測る。底部はやや膨らみ気味である。17・18は小型の鉢である。17は胴部中央に突帯を有し、18は膨らみ気味の底部である。19は中期の高杯、20・21は後期の高杯である。22・23は脚付鉢の脚部で、外面にはタテハケ、内面にはヨコハケを施す。24～26は器台である。26は直線的な器形で、裾端部が波状になっている。27は支脚、28～32は弥生土器底部である。32は後期土器の底部で、底部外面にもハケメが残る。

33～36は土師器甕である。33は直立する口縁で、頸部のしまりは弱い。胴部外面にはタテハケが密に残り、内面はケズリを施す。復元口径14.2cm、残存器高8.4cmを測る。34は大きく湾曲してひらく口縁で、口縁部内外面はナデ調整、頸部内面はケズリ調整である。復元口径17.2cm。35はくの字状に外反する口縁で、胴部外面には横方向のタタキを施す。内面下位はケズリ、上位はハケ調整である。復元口径15.0cm、残存器高11.0cmを測る。36は甕底部で、外面にはケズリを施す。37・38は小型の丸底壺である。37は球形の胴部にやや長めの口縁を有する。外面には細かいハケ調整、胴部内面にはケズリ調整を施す。復元口径8.6cm、器高10.6cmを測る。38は扁球形の胴部に短い口縁で、口縁端部が外反する。胴部外面下半はケズリ、上半はヨコハケを施す。39は平底気味の壺である。40は扁球形の胴部に径7mmの孔を有する。碌の胴部か。土師質である。41～46は鉢形土器である。41・42は平底で、器壁が厚い。43は椀形で、外面には細かいハケメが残る。44・45は外面が

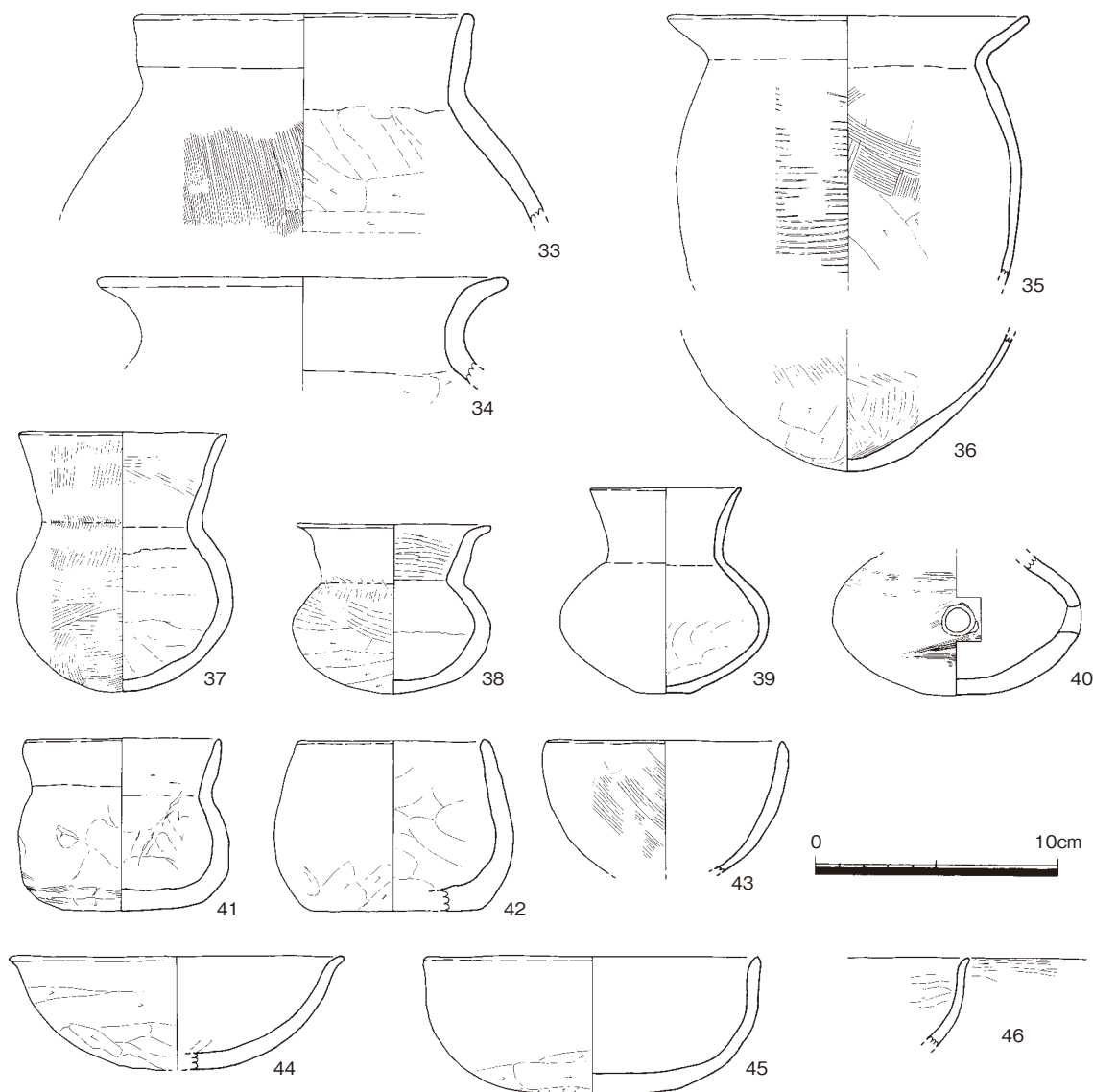


第120図 SD0065 出土土器実測図(1) (1/3)



第121図 SD0065 出土土器実測図(2) (1/3)

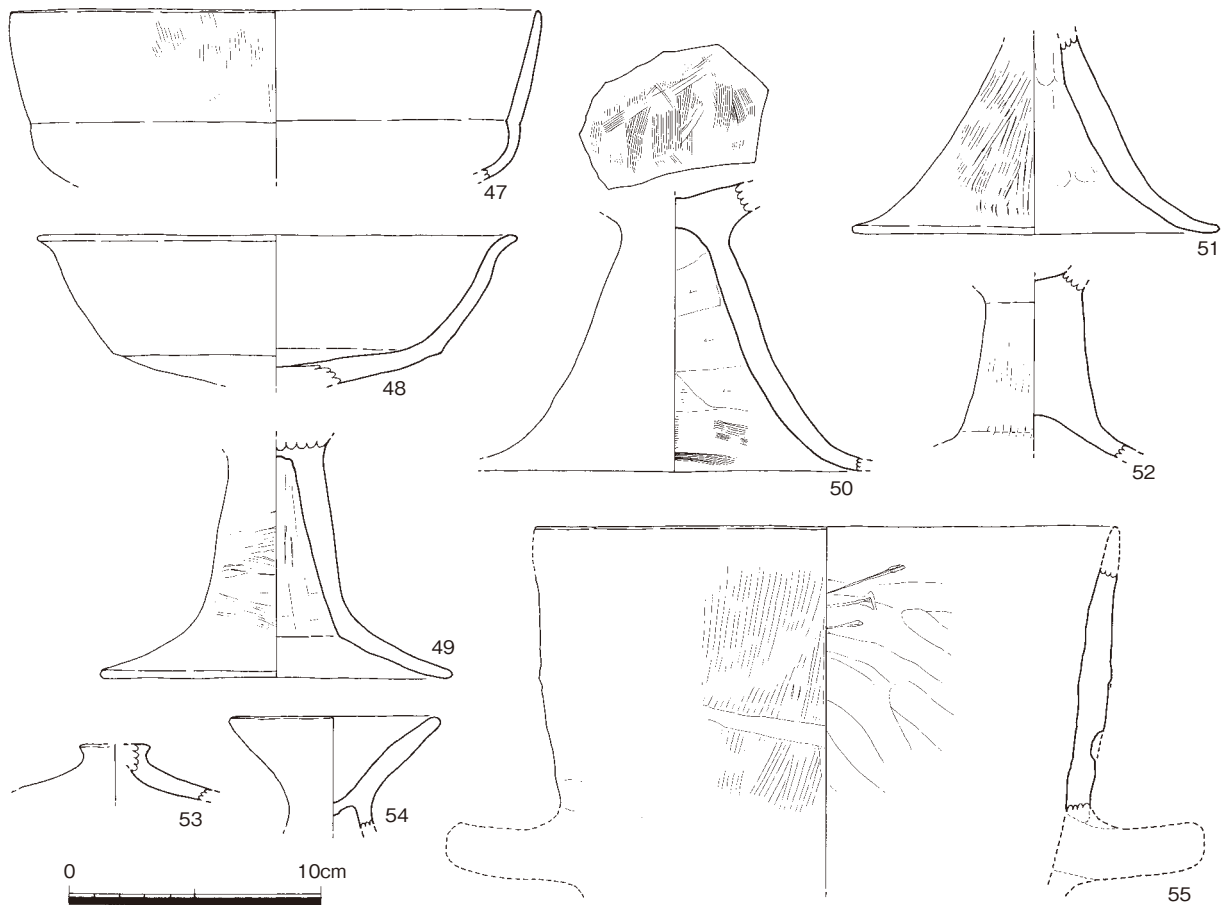
ケズリ状で、内面はナデである。46は内外面にミガキを施す。47は土師器の鉢と思われる。口径20.5cmに復元しているが、小片のため不正確である。胴部内外面には強い稜線が見られる。口縁部



第122図 SD0065 出土土器実測図(3) (1/3)

外面はタテハケ、内面には斜め方向のヘラミガキを施す。48は土師器高杯の杯部で、屈曲部には段を有し、口縁端部は外にひらく。復元口径19.1cm、残存器高6.0cmを測る。内外面とも丁寧なナデ調整である。49～52は高杯脚部である。49の筒部は細く、裾部は屈曲して広がる。復元裾部径14.0cm、残存器高9.5cmを測る。50は杯部内面にハケメを施す。51の裾部はラッパ状に広がる。裾部径14.5cm、残存器高8.7cmを測る。53は蓋のつまみ部分か。54は天地が定かではなかったが、器台とした。55は口縁から胴部の破片であるが、把手を有する甑を想定した。外面はタテハケ、内面には強いナデを施し、器面が凸凹になっている。復元口径23.1cm。

56～58は口縁部に粘土を貼り付けた甕形土器である。56・57は貼り付けた粘土を指でつまむようにおさえているため、口縁部外面及び上面が波状になっている。56は胴部外面も強いナデのために凹凸が見られる。復元口径17.2cm、残存器高5.8cmを測る。58は口縁部上面に貼り付けた粘土は波状になっているが、口縁部外面は整っている。これらは弥生土器の口縁部に粘土を貼り付けたような印象である。同様の土器はSD0073からも出土している。59は壺の口縁と思われ、端部に二箇所凹みを施す。60は内側にすぼまる口縁で、口縁下に沈線を有する。口縁端部は厚く、丸みをおびる。61・



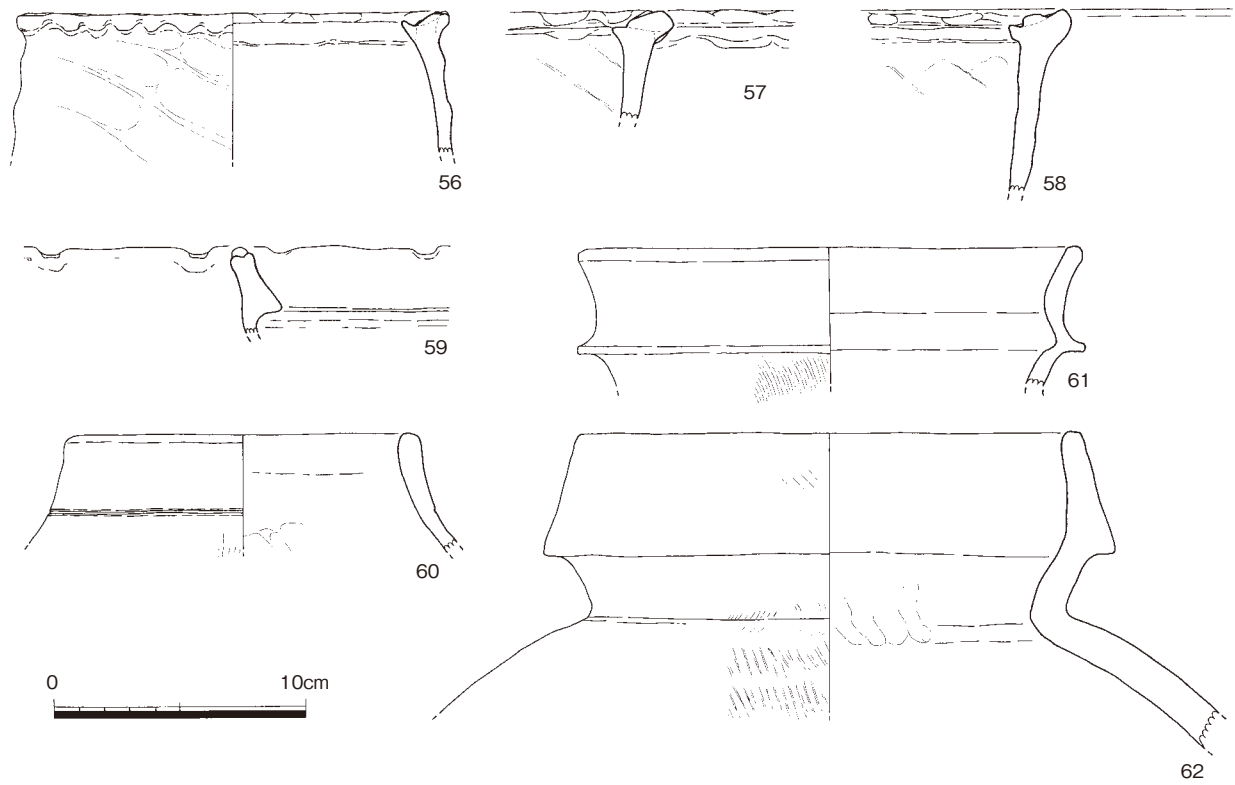
第123図 SD0065 出土土器実測図(4) (1/3)

62は壺口縁である。

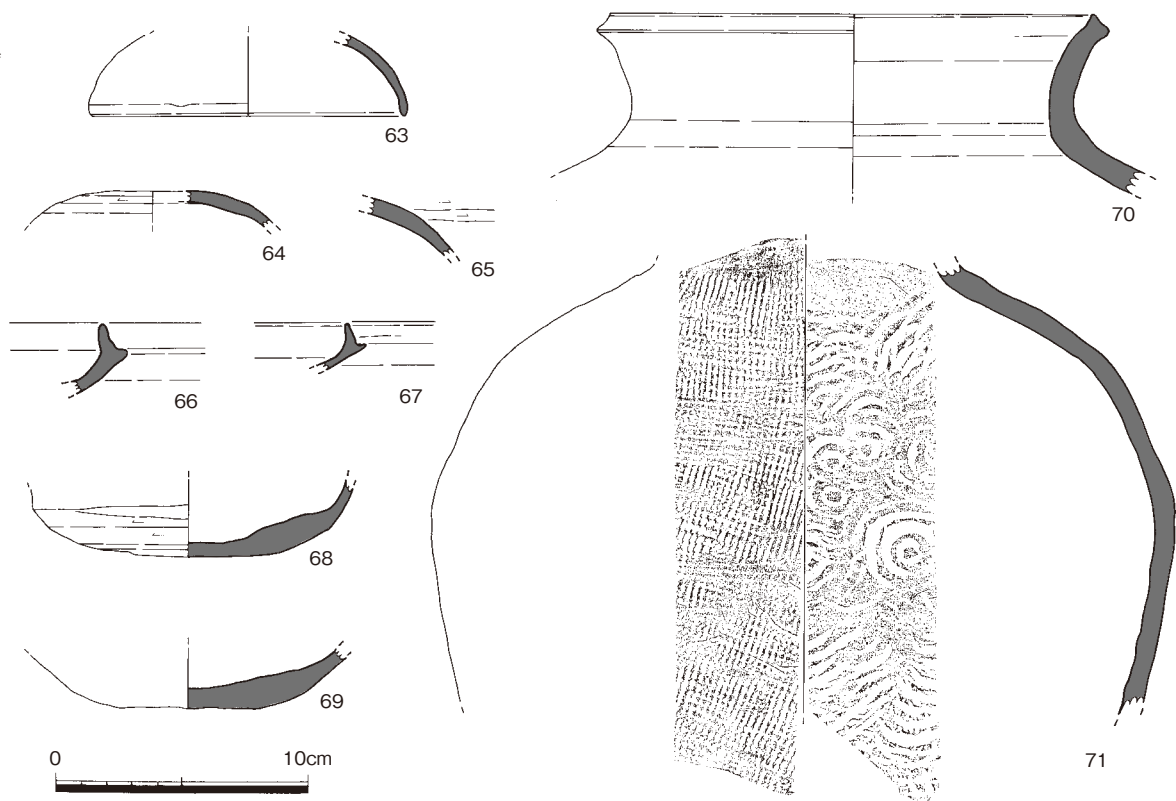
63～71は須恵器であるが、71以外は小片ばかりである。63～65は杯蓋、66・67は杯身である。68・69は底部付近である。70は甕口縁で、内外面ともに横ナデを施す。71は甕胴部であるが、傾きに不安が残る。外面には格子目タタキ、内面には同心円文の当て具痕が残る。

72～76は土製品である。72はE-3で出土した鐸形土製品で、約1/3の遺存である。無鈕式裁頭円錐型で、舞の幅は4.9cm×4.9cm(復元)、器高8.3cm、裾部復元径は13.4cmを測る。舞には焼成前に上面から2孔を穿つ。外面には細い筋状に擦過痕のようなものが見られる。73も鐸形土製品であるが、72に比べて小さく、全体的に丸みを帯びる。無鈕式の釣鐘状の形態で、舞には紐通しのための2孔を穿つ。高さ4.7cm、幅3.6cmで、約1/2の遺存である。F-2・3で西岸杭検出時に出土した。74は球形の投弾で、直径3.0～3.4cm。75は紡錘形の投弾で、長さ3.7cm。76は円盤状土製品で、径3.8cm、厚さ1.2cmを測る。

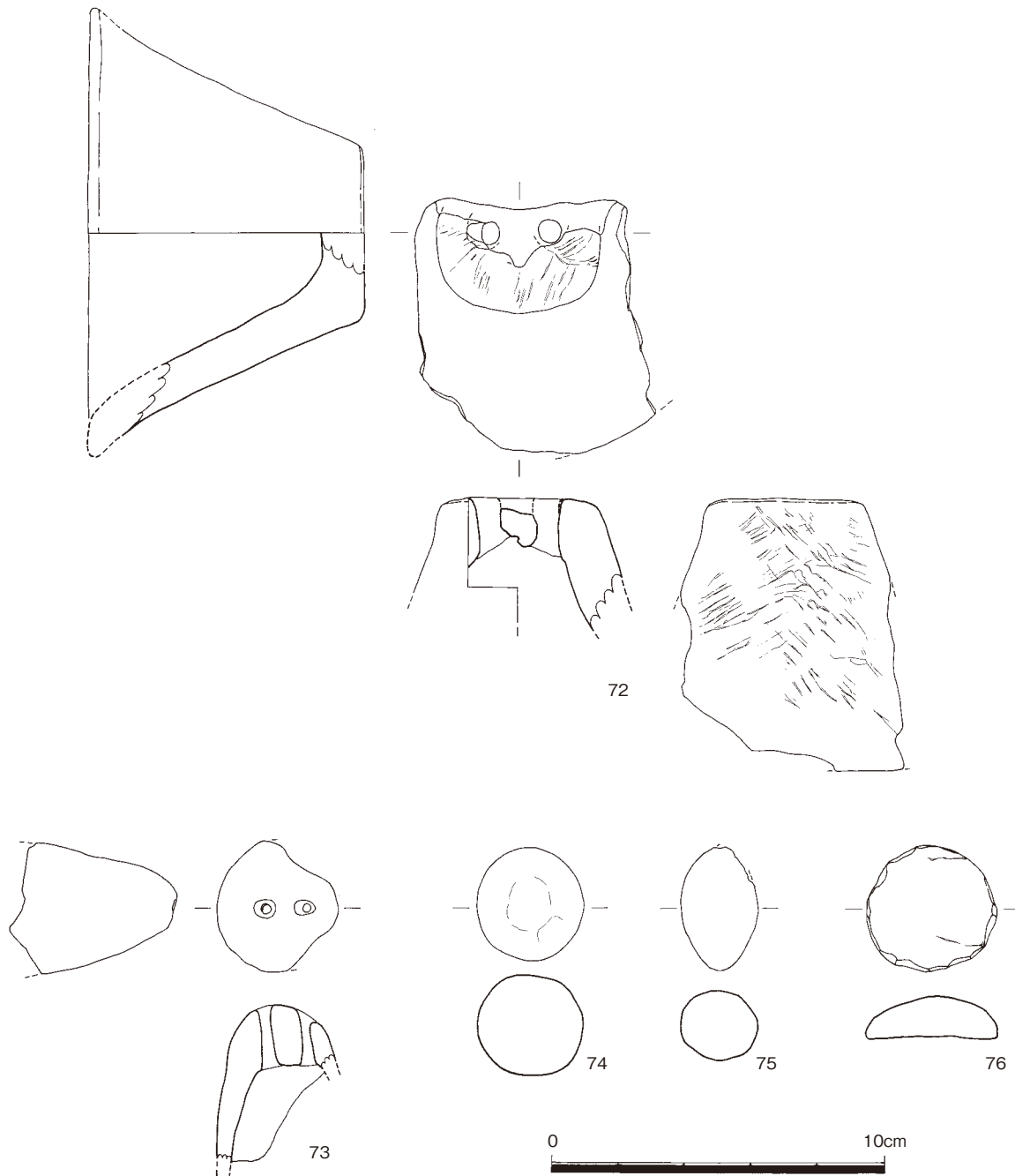
77～93は石製品である。77は安山岩製の打製石鏃で、器長3.5cm、幅2.1cm、最大厚0.5cmを測る。基部には幅0.6cm、長さ0.8cmの抉りを施す。重さ2.6g。78・79は黒曜石製の使用痕剥片で、ともに側縁に剥離が見られる。78は器長2.4cm、幅3.7cm、最大厚0.9cm、重さ6.31g、79は器長3.3cm、幅1.6cm、最大厚0.7cm、重さ2.98gを測る。80～84は旧石器時代～縄文時代の石器と思われる。80は器長4.3cm、幅4.3cm、最大厚1.0cm、重さ12.8gの剥片石器で、石材は古銅輝石安山岩である。E-3からの出土。打面・主要剥離面などを大きく残す不定形剥片を素材とし、左側縁の基部近くに主要剥離面から二次加工を加えている。81は古銅輝石安山岩製の削器で、器長7.2cm、



第124図 SD0065 出土土器実測図(5) (1/3)

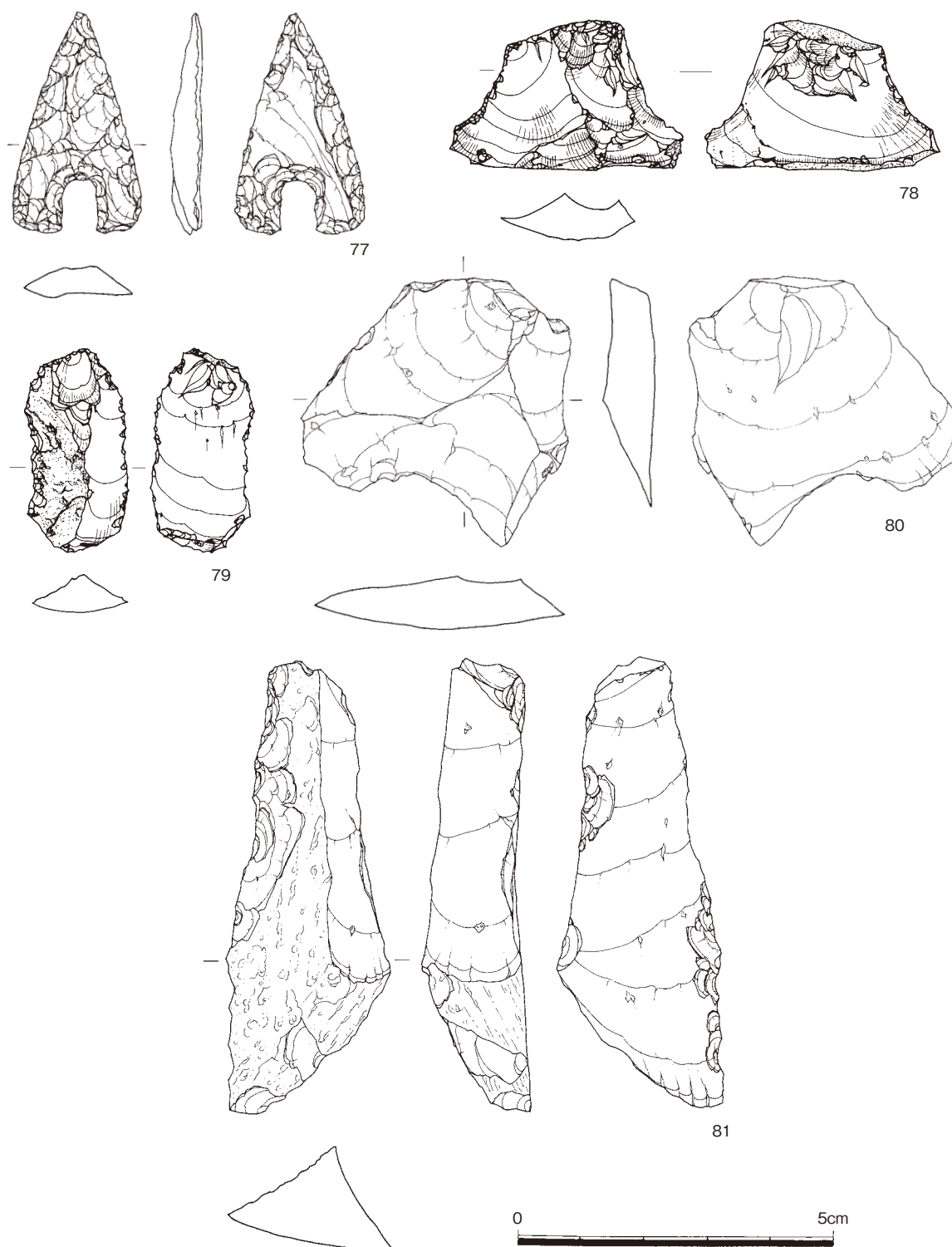


第125図 SD0065 出土土器実測図(6) (1/3)



第126図 SD0065 出土土製品実測図(1/2)

幅2.7cm、最大厚1.7cm、重さ21.3gを測る。表皮近くの長めの剥片の左側縁に、主要剥離面と表面から二次加工を加えて刃部を作り出している。断面三角形を呈する。82・83は打面・主要剥離面・表皮を残す縦長状剥片で、ともに古銅輝石安山岩製である。82はJ-1・2からの出土で、器長7.6cm、幅2.8cm、最大厚1.1cm、重さ12.7g、83は器長6.8cm、幅3.5cm、最大厚0.8cm、重さ9.4gで、扁平な剥片である。84は堆積岩ホルンフェルス製の不定形剥片で、器長4.4cm、幅3.1cm、最大厚0.9cm、重さ7.9gを測る。85～88は石包丁である。89は石製紡錘車の完形品で、直径4.5～4.6cm、厚さ0.6cmを測る。重さは23.2g。滑石片岩製である。90も紡錘車の破片、91は滑石片岩製の有孔円盤である。器長2.8cm、幅3.0cm、最大厚0.6cm、重さ7.8gで、2孔を有する。92は扁平打製石

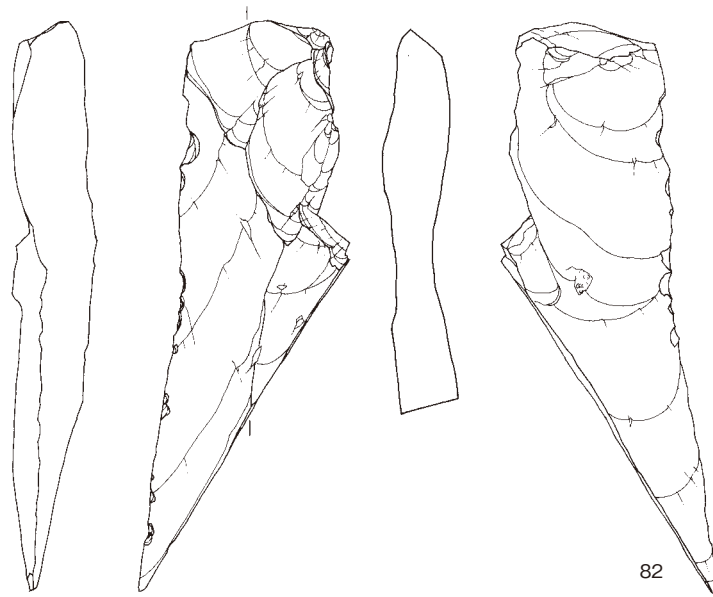


第127図 SD0065 出土石器実測図(1) (1/1)

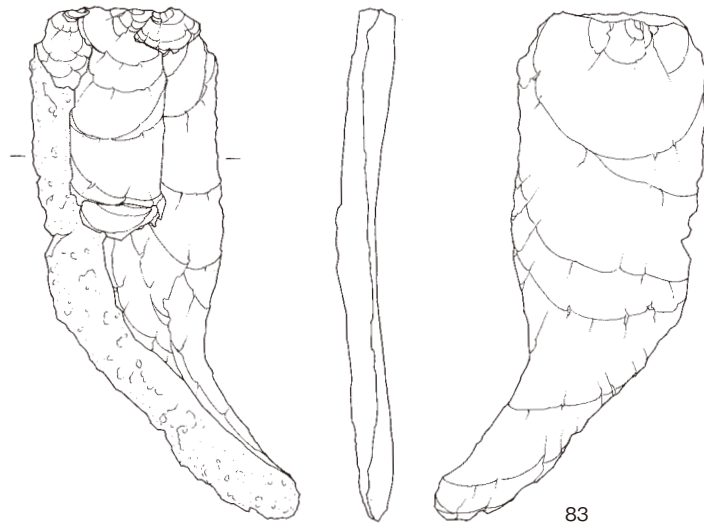
斧の破片で、器長8.0cm、幅5.1cm、厚さ0.9cm、重さ50.7gを測る。石材は片岩か。93は凝灰岩製の砥石で、器長8.4cm、幅4.9cm、最大厚3.8cmを測る。3面を砥面として使用している。

94は砂層から出土した木製品で、器長24.6cm、幅17.7cm、最大厚1.2cmの板材である。スギの板目取り材である。

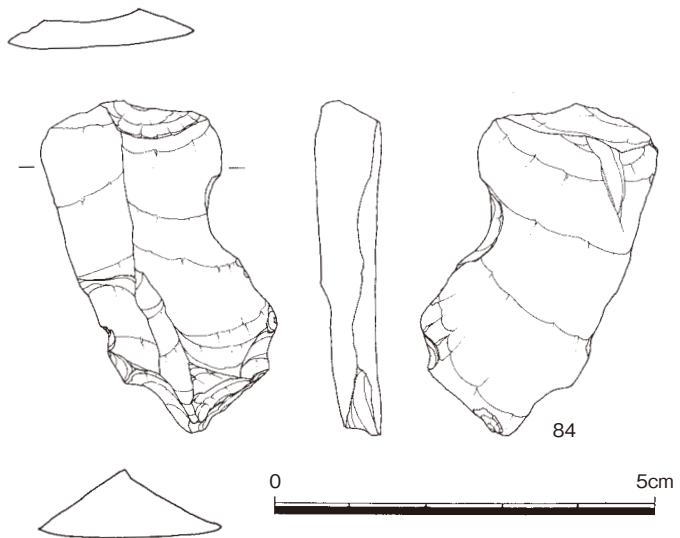
96～99はSX0071の黒色土掘り下げ中に出土した遺物である。96は弥生時代中期の鋤先口縁の壺



82

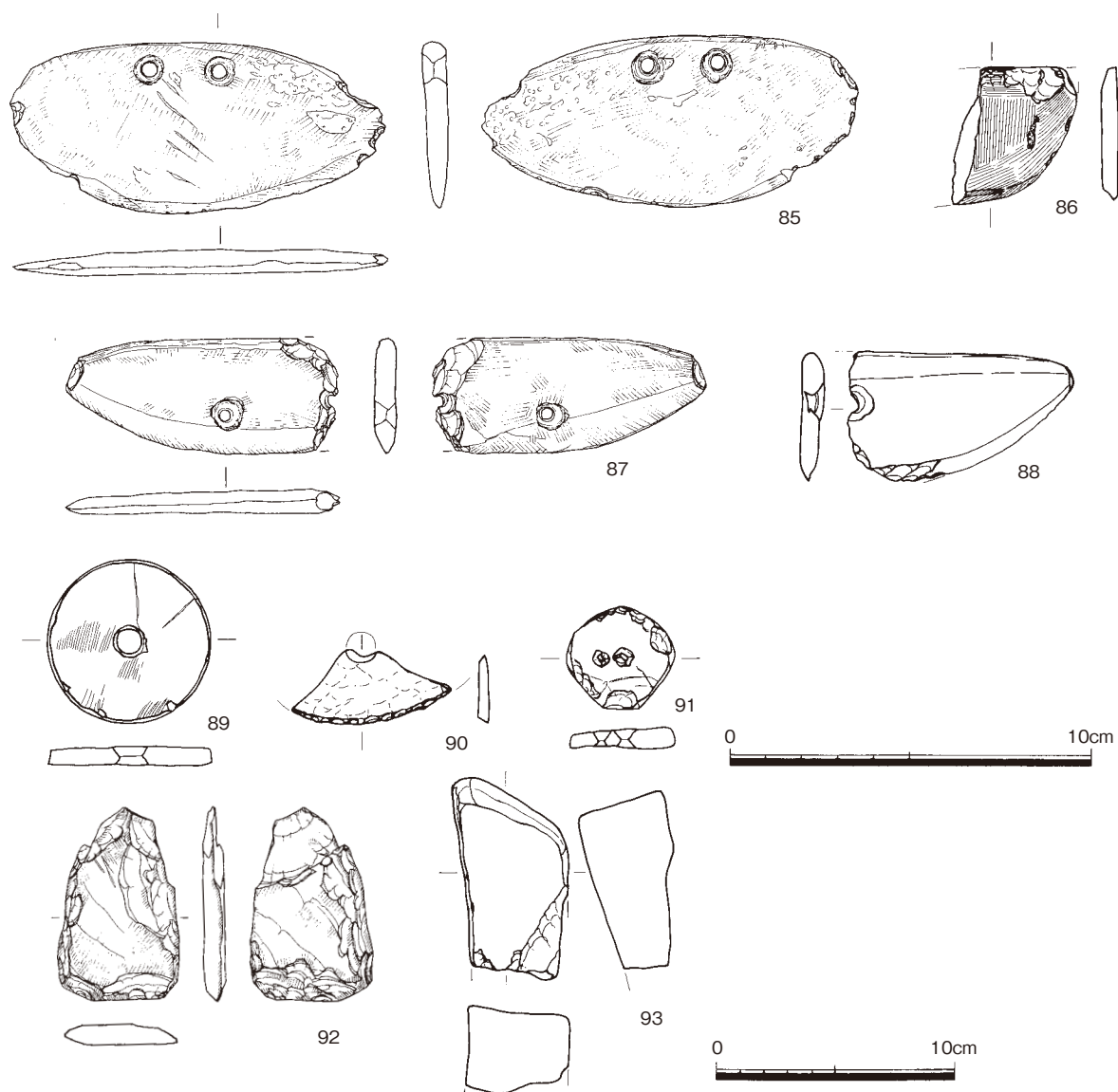


83



84

第128图 SD0065出土石器实测图(2)(1/1)

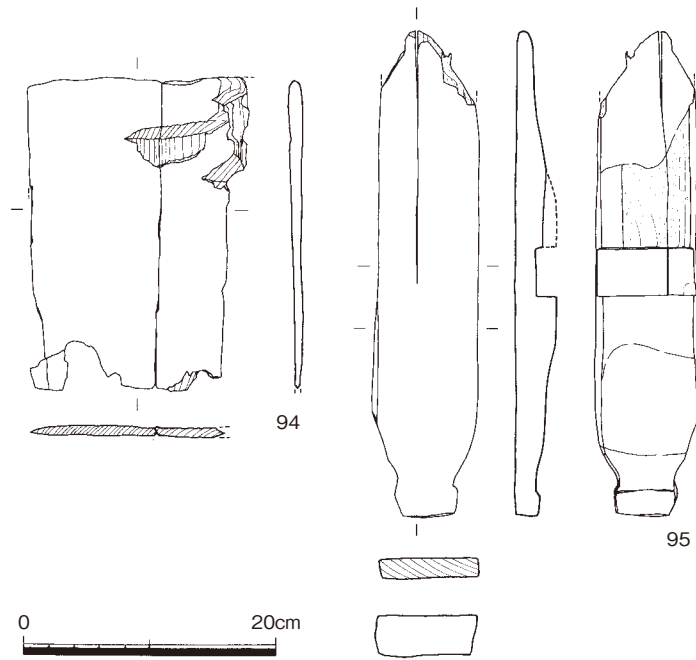


第129図 SD0065 出土石器実測図(3) (92・93は1/3、他は1/2)

で、復元口径23.7cm、残存器高4.4cmを測る。97は短頸壺で、口縁部には穿孔を施す。98は土師器の高杯基部、99は石包丁の破片である。出土遺物は非常に少なく、掲載した遺物が遺構の時期を示すものではない。

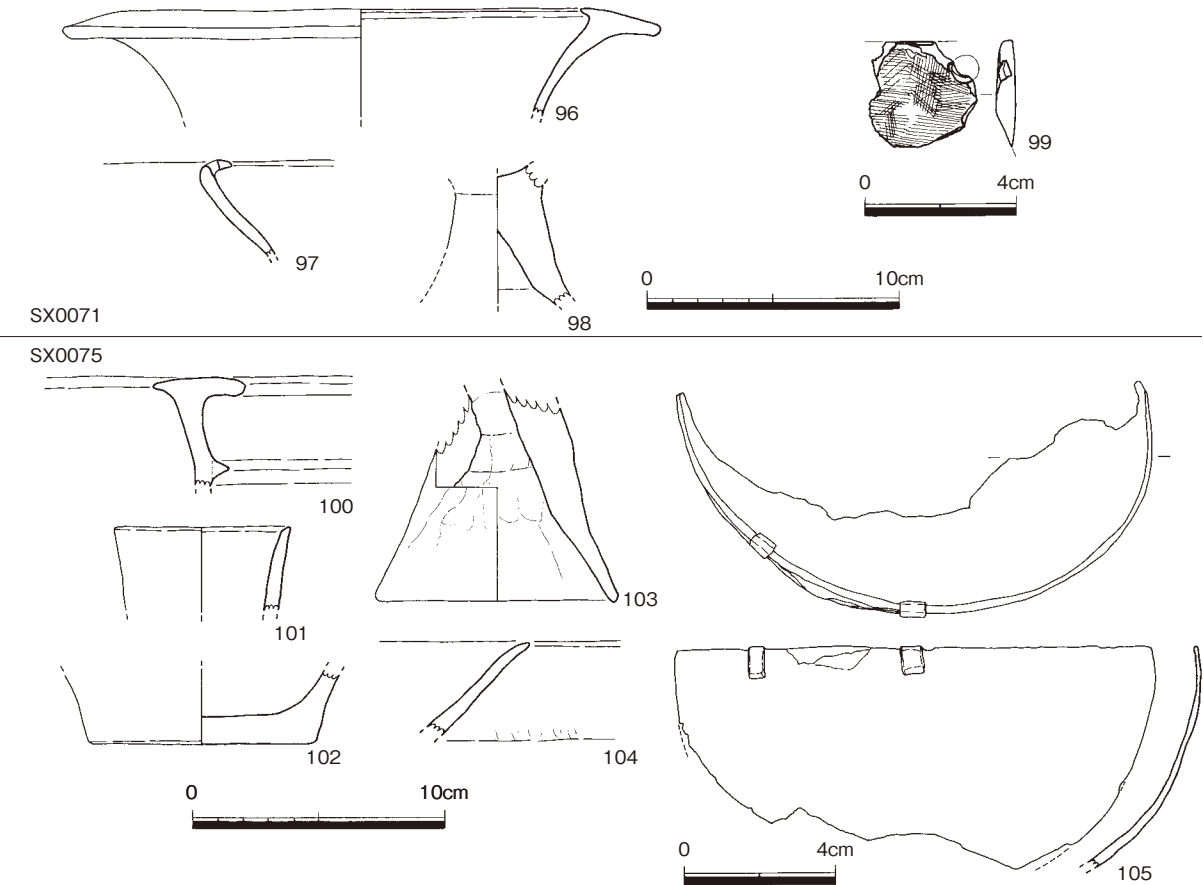
95、100～105はSX0075出土遺物である。95は黒色土掘り下げ時に出土した板材である。長さ39cm以上、幅8.5cm、最大厚3.2cmで、スギの斜め取り材を利用している。大足の踏み板と考えた。端部には杵を固定するための造り出しを持ち、中央裏面には横木を組み合わせるための幅3.8cmの抉りを施す。100は弥生時代中期の鋤先口縁甕で、外面には断面三角突帯が巡る。102は弥生時代中期甕の底部、103は支脚である。104は土師器高杯の口縁部である。105はヒョウタンを割って容器としたものである。変形しているため正確な大きさは不明だが、直径12cm程度と思われる。非常に薄く、脆い状態であった。縁には樹皮で留めたような部分が2ヶ所見られる。

SD0073(付図2) SD0065に切られる古い流路で、SD0065とほぼ同じ位置を流れる。推定幅は6～7m、深さ1.3mである。第109図⑤、⑥や第110図④に見られるように、SD0065の東側に重なるように検出したが、E・F-3付近では確認できない。西岸については、E-3では西へ折れる部分が検出

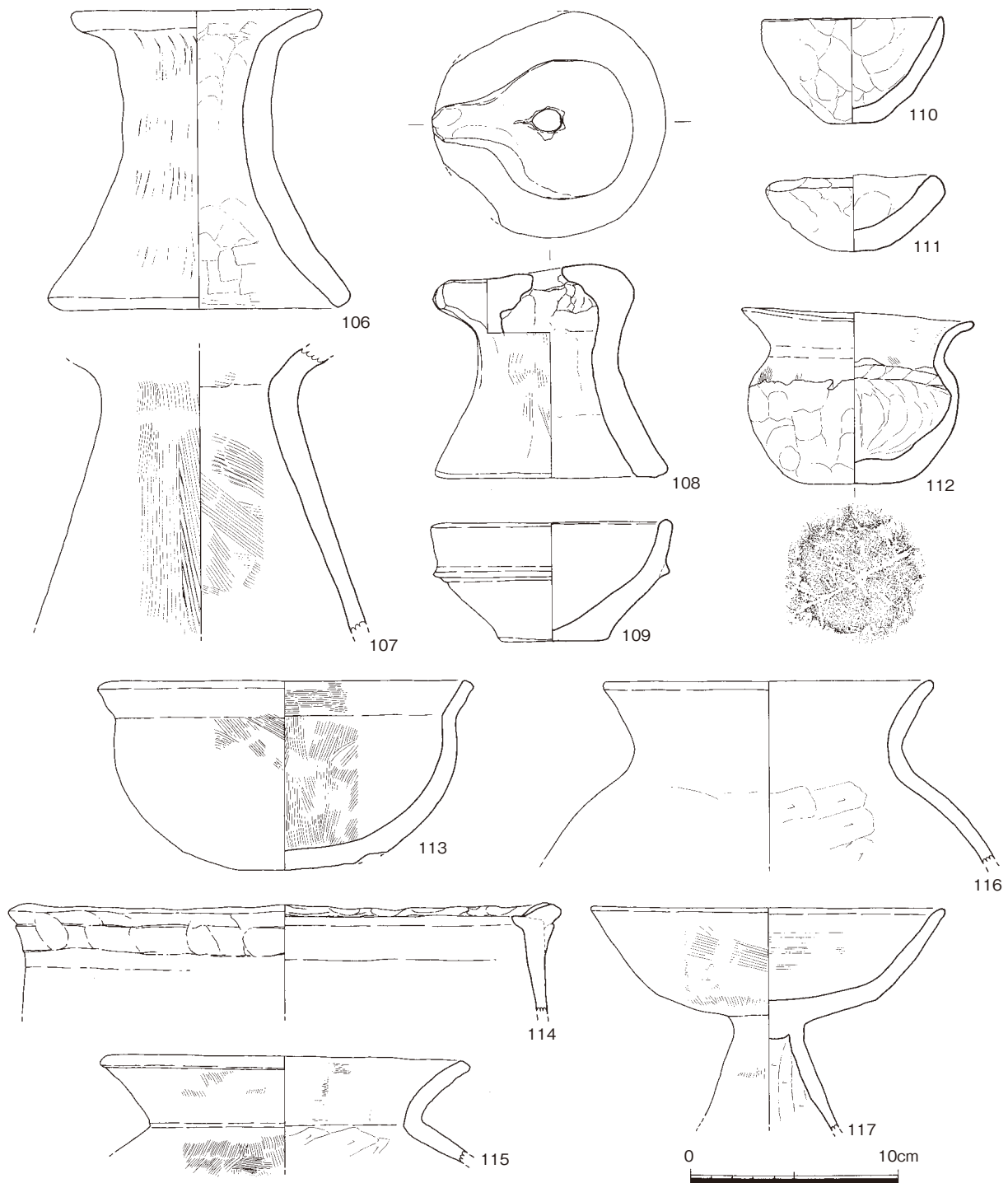


第130図 SD0065・SX0075 出土木器実測図(1/3)

できたが、F・G-2、H-1ではD0065に切られて確認できない。SD0065と同様に西へ曲がるが、D・E-3では幅が広くなり、西壁際では幅10mになることが分かる。埋土は黒色粘土が主で、下層には黒



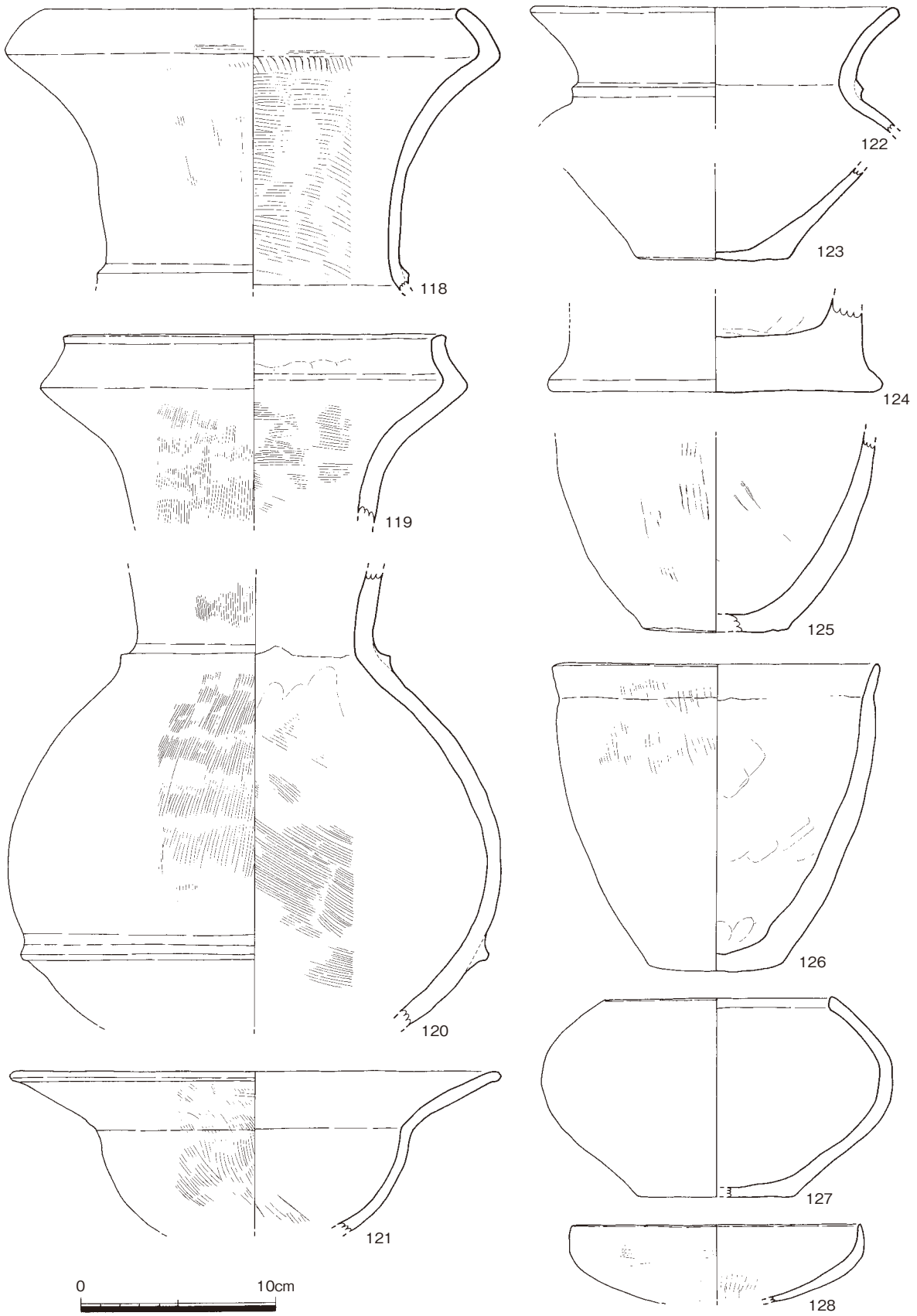
第131図 SX0071・0075 出土遺物実測図(99・105は1/2、他は1/3)



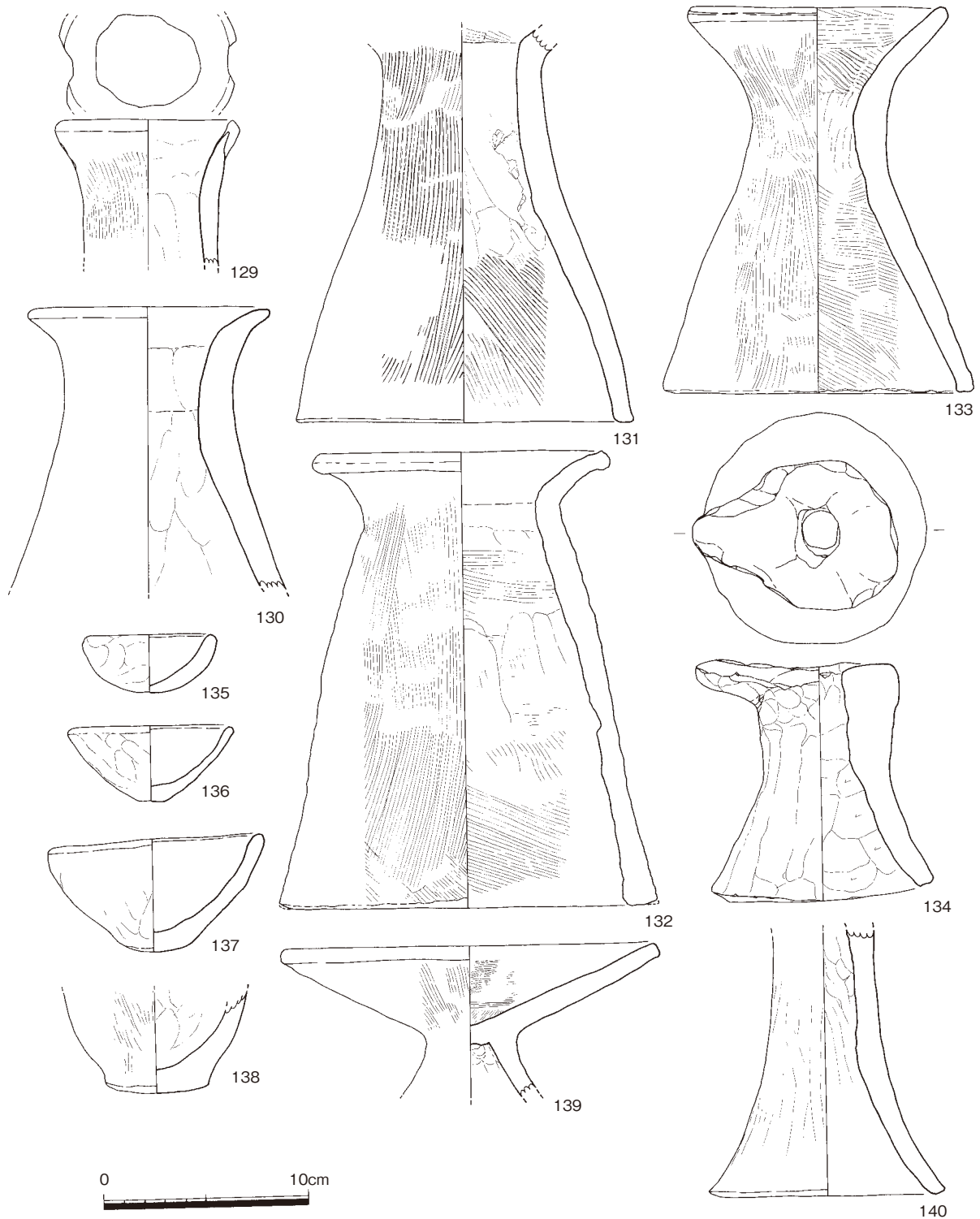
第132図 SD0073 出土土器実測図(1) (1/3)

色粗砂が堆積している。埋没後にSD0065に切られ、E-3ではSD0065西岸との境に板杭が打ち込まれている。SD0065と同じく出土遺物の大半は弥生土器であるが、土師器も一定量出土している。須恵器は1点しか出土しておらず、混入の可能性もある。その他に木製品があり、机の天板や槽、扉などが出土した。また、少量ながら旧石器時代の遺物も混じっている。古墳時代中期頃の流路と考えている。

出土遺物(第132～143図) 第132図は黒色粘土から出土した遺物である。106・107は弥生土器の器台、108は支脚である。109～111は小型の鉢形土器である。109は平底で、胴部に断面三角突

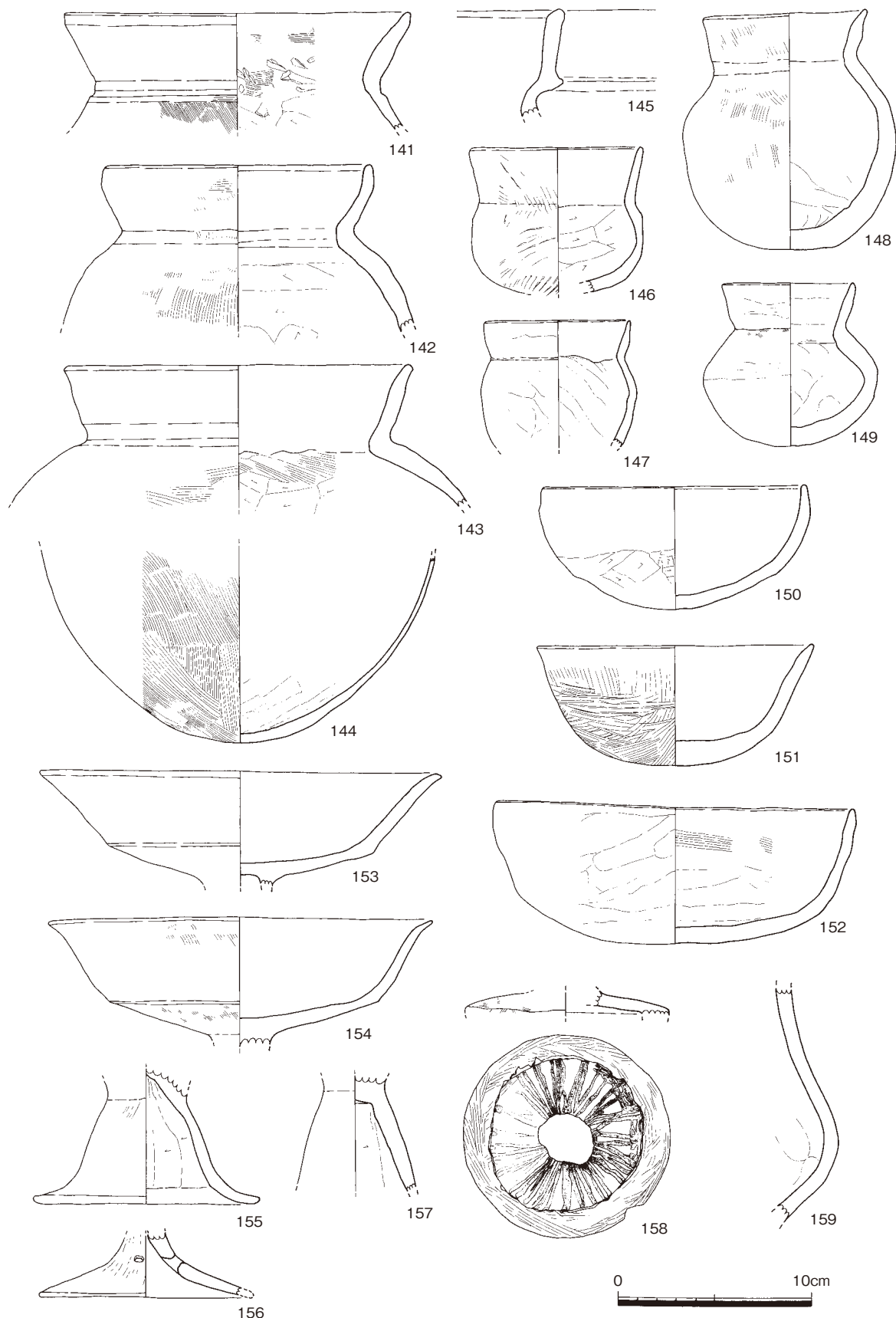


第133图 SD0073出土土器实测图(2) (1/3)

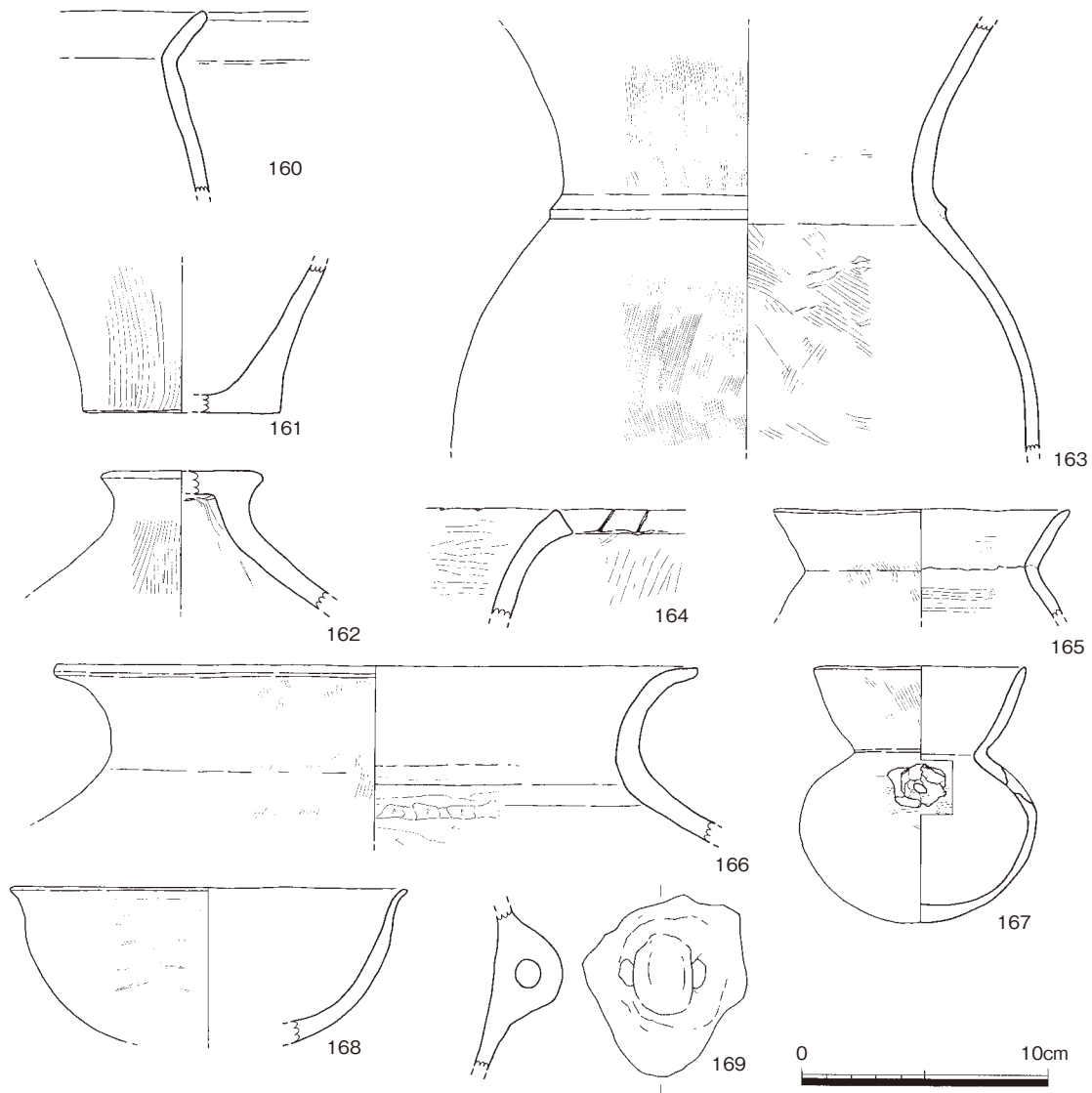


第134図 SD0073 出土土器実測図(3) (1/3)

帯を有する 110・111 は手捏ねで、指頭の痕跡が残る。112 は平底気味の鉢あるいは壺で、底部外面には土器製作の際に敷いた葉の痕跡が残っている。113 は復元口径 18.0cm の鉢で、口縁は外反する。114 は口縁部上面及び口縁部下位外面に粘土を貼り付けた甕形土器である。口縁部上面は指頭による窪みで波状になっている。口縁部内面には強いヨコナデが見られるが、これは外面の粘土帯を貼り付けた際のものか。復元口径 26.8cm。SD0065 で出土した 56～58 と似ている。朝鮮系無文土器の影響



第 135 图 SD0073 出土土器实测图 (4) (1/3)

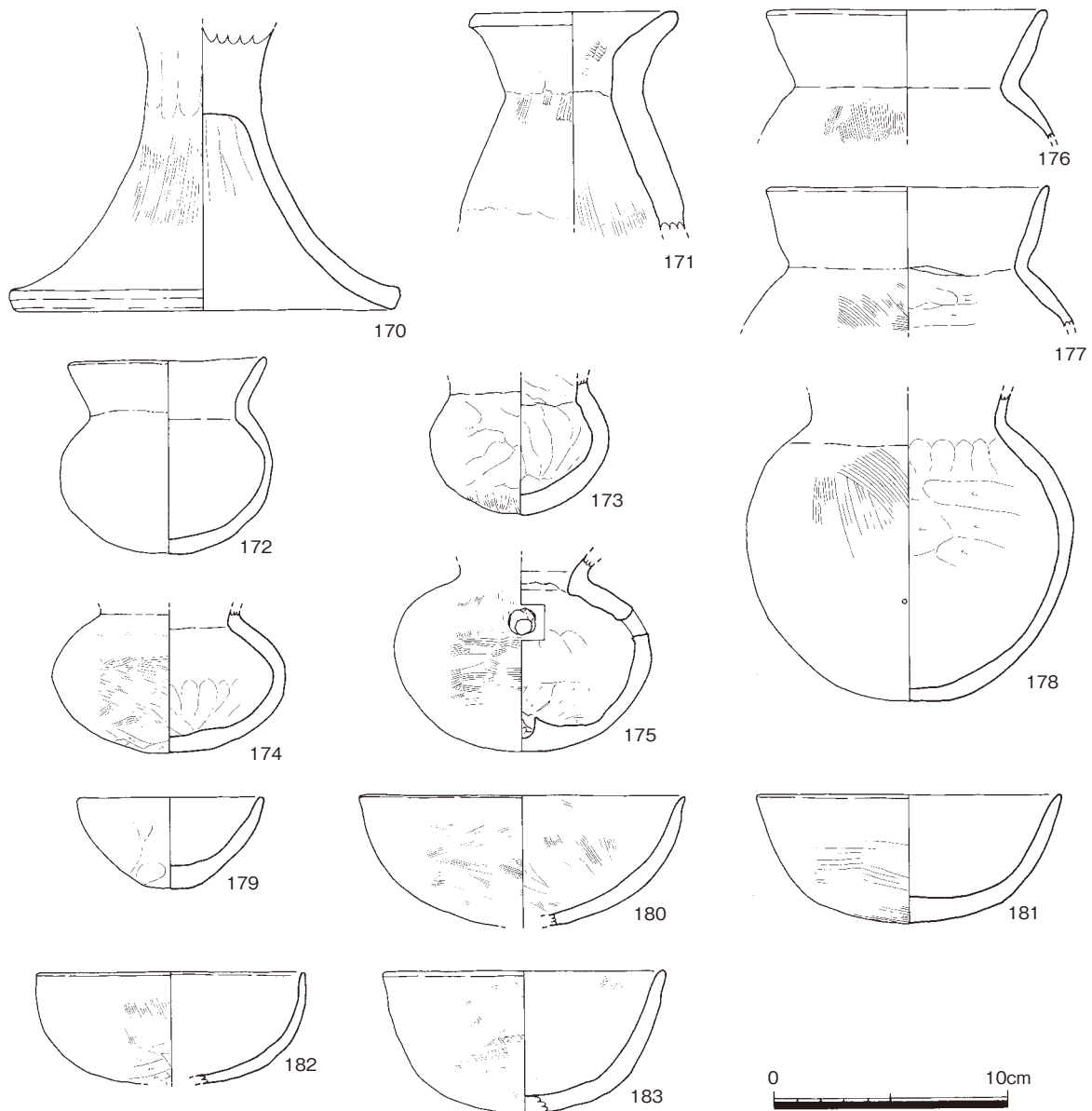


第136図 SD0073 出土土器実測図(5) (1/3)

によるものであろうか。115は土師器の甕で、外面はハケとナデ、内面にはケズリを施す。117は土師器高杯で、復元口径18.0cm、残存器高10.8cmを測る。口縁部内外面ともヨコハケが残る。

第133・134図は下層(砂層)出土の弥生土器である。118・119は後期の複合口縁壺である。118は外面の調整は不明瞭であるが、内面にはヨコハケが明瞭に残る。頸部には断面三角突帯が巡る。119は復元口径19.6cmを測り、口縁端部がわずかに外へひらく。120は壺の胴部で、頸部と胴部下位に突帯を有する。121は鉢形土器で、半球形の胴部から直線的に外へひらく口縁である。復元口径25.2cmを測る。122は弥生後期の甕口縁、123～125は底部である。126は鉢形土器で、底部はわずかに膨らみ気味である。127は扁球形の胴部を有する鉢である。口径11.7cm、器高10.3cmを測る。128は鉢あるいは器台か。129～133は器台である。129は口縁の相対する2ヶ所を打ち欠いている。134は支脚の完形品である。135は手捏ね土器、136～138は小型の鉢である。139は器台であろうか。体部は直線的で、厚みもある。脚部は欠損しており、高さ不明である。140は高杯脚部である。

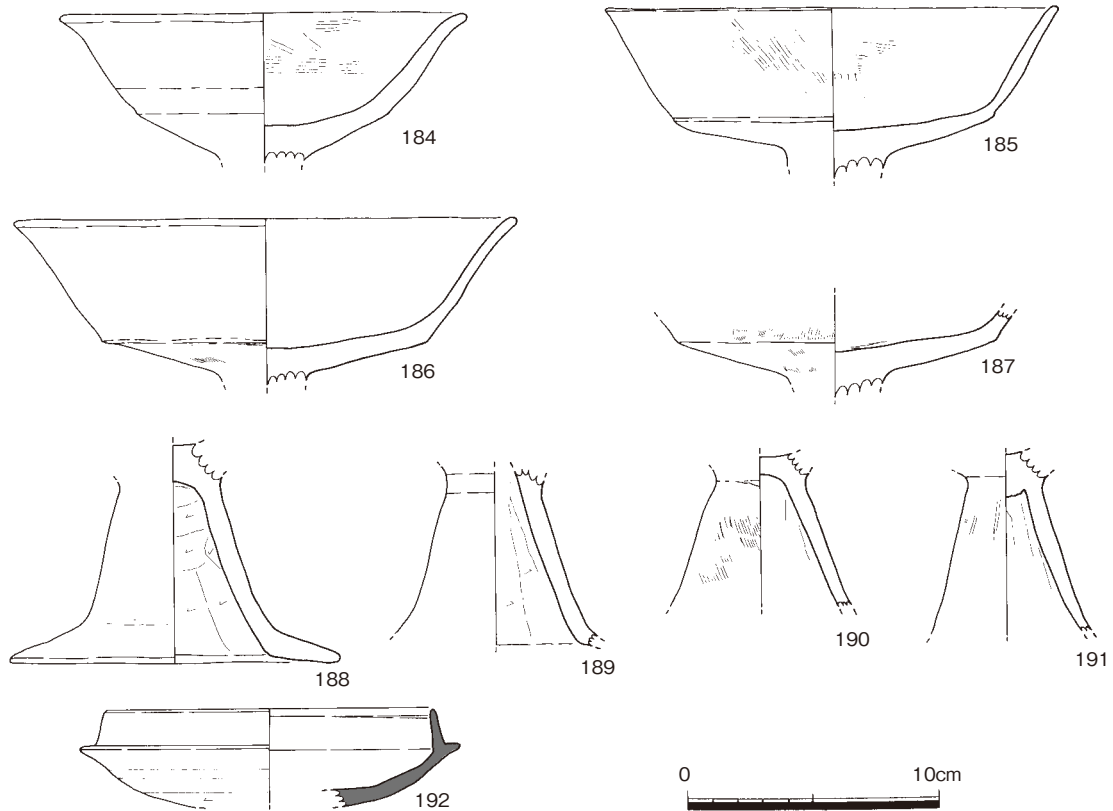
第135図は下層(砂層)より出土した土師器等である。141～143は甕口縁～胴部で、いずれも外面はハケメ、内面にはケズリを施す。144は甕の胴部～底部である。外面には細かいハケメ、内面には



第137図 SD0073 出土土器実測図(6) (1/3)

ケズリが見られる。器壁は薄い。145は壺口縁、146～149は小型丸底壺である。150～152は鉢形土器である。150は復元口径13.6cm、器高6.3cmを測り、外面にはケズリを施す。151はほぼ完形で、口径14.3cm、器高6.2cmを測る。胴部外面には多方向に粗いハケメを施している。152は大型の鉢あるいは盤の完形品で、口径18.4cm、器高7.1cmを測る。内外面ともにナデで、やや粗雑な器面である。153・154は高杯杯部である。153は口径20.7cm、154は口径19.9cmで、ともに屈曲部には段を有する。155～157は高杯・器台の脚部である。158は壺の肩部であろうか。頸部と胴部が剥がれたものと想定した。内面は放射状にヘラミガキを施し、その上に幅2mm前後の黒色顔料が塗られている。159は胴部の破片と思われるが、天地、傾きは心許ない。湾曲しながら膨らむ。

第136図はD-3付近、SD0073が西へ折れる部分から出土した遺物である。160～162は弥生時代中期の土器、163は後期の壺、164は弥生時代終末期の甕口縁である。165・166は土師器甕口縁、167はほぼ完形の小型丸底壺である。口径8.4cm、器高10.4cmを測り、胴部には穿孔を有する。168



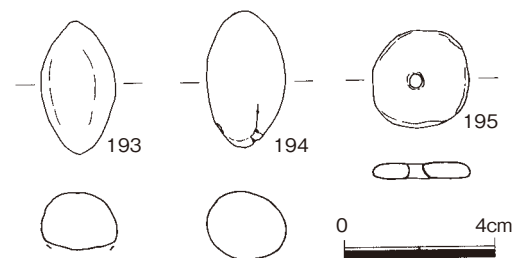
第138図 SD0073 出土土器実測図(7) (1/3)

は土師質の鉢形土器で、口縁端部は外へひらく。非常に丁寧なミガキ、ナデを施す。169は把手で、横方向に孔を有する。

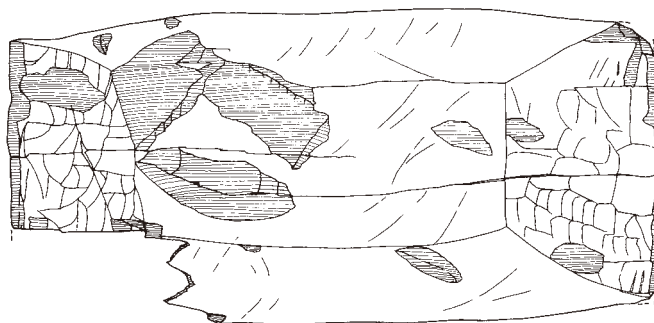
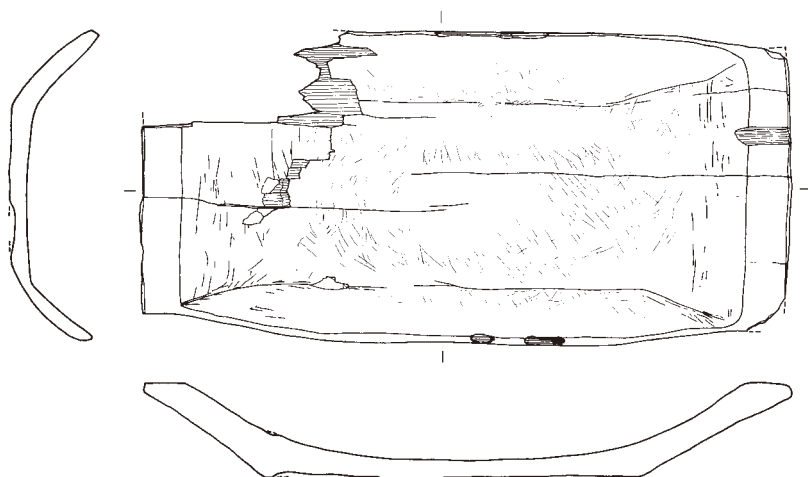
第137・138図は層位不明土器であるが、大半は上層の黒色粘土からの出土と思われる。170は弥生土器の脚部、171は器台である。172～174は小型丸底壺である。175は隰の胴部か。やや扁球形の胴部で、底部中央には粘土が盛り上がった部分がある。穿孔を施す際に工具が底部まで達したものか。176・177は土師器甕の口縁で、胴部外面はハケ、内面にはケズリを施す。178は甕胴部で、球形を呈する。179～183は鉢形土器、184～187は土師器高杯の杯部である。184はやや小型で杯部の屈曲は弱い。185・186は脚部との接合面で剥がれている。188～191は高杯の脚部である。192は須恵器杯身で、立ち上がりが高い。SD0073からの須恵器の出土はこの1点のみである。

193・194は紡錘形の土製投弾、195は土製有孔円盤である。紡錘車か。

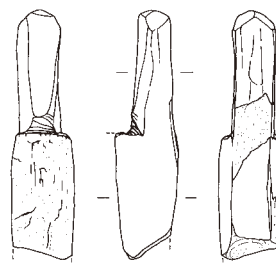
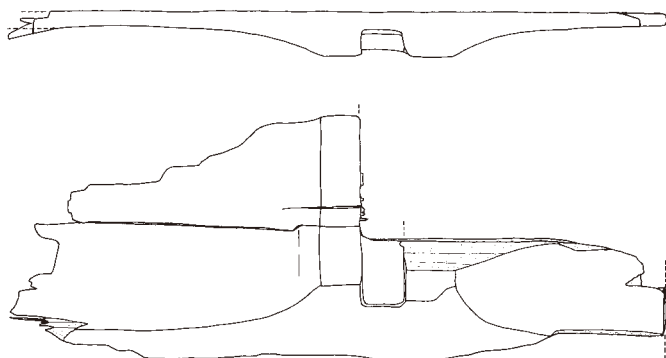
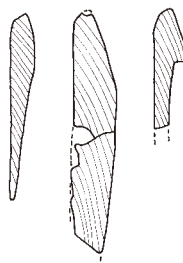
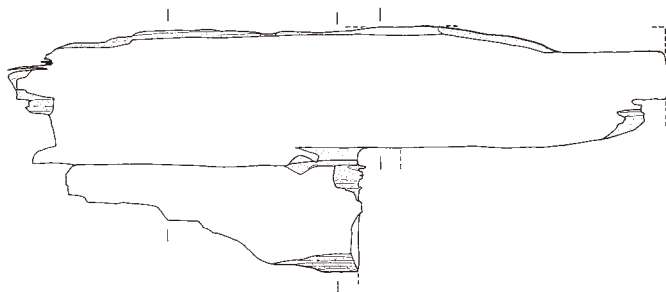
第140・141図は木製品である。196はI-1・2付近の黒色粘土層から出土した槽である。モミの柾目取り材を利用しており、長さ52.0cm、幅25.0cm、高さ7.5cmを測る。平面形は中央がやや膨らむ長方形で、底面に突起は見られず、平底である。丁寧に削り加工を加えて仕上げている。197はH・I-2から出土した机天板で、長さ53.0cm、幅19.6cm、最大厚3.6cmを測る。スギの板目取り材を利用している。裏面には脚をはめ込むための溝が設けられている。198はG-2・3からの出土で、部材の端部と思われる。柱受けの部分であろうか。スダジイの分割材を利用している。



第139図 SD0073 出土土製品実測図(1/2)

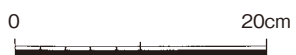


196

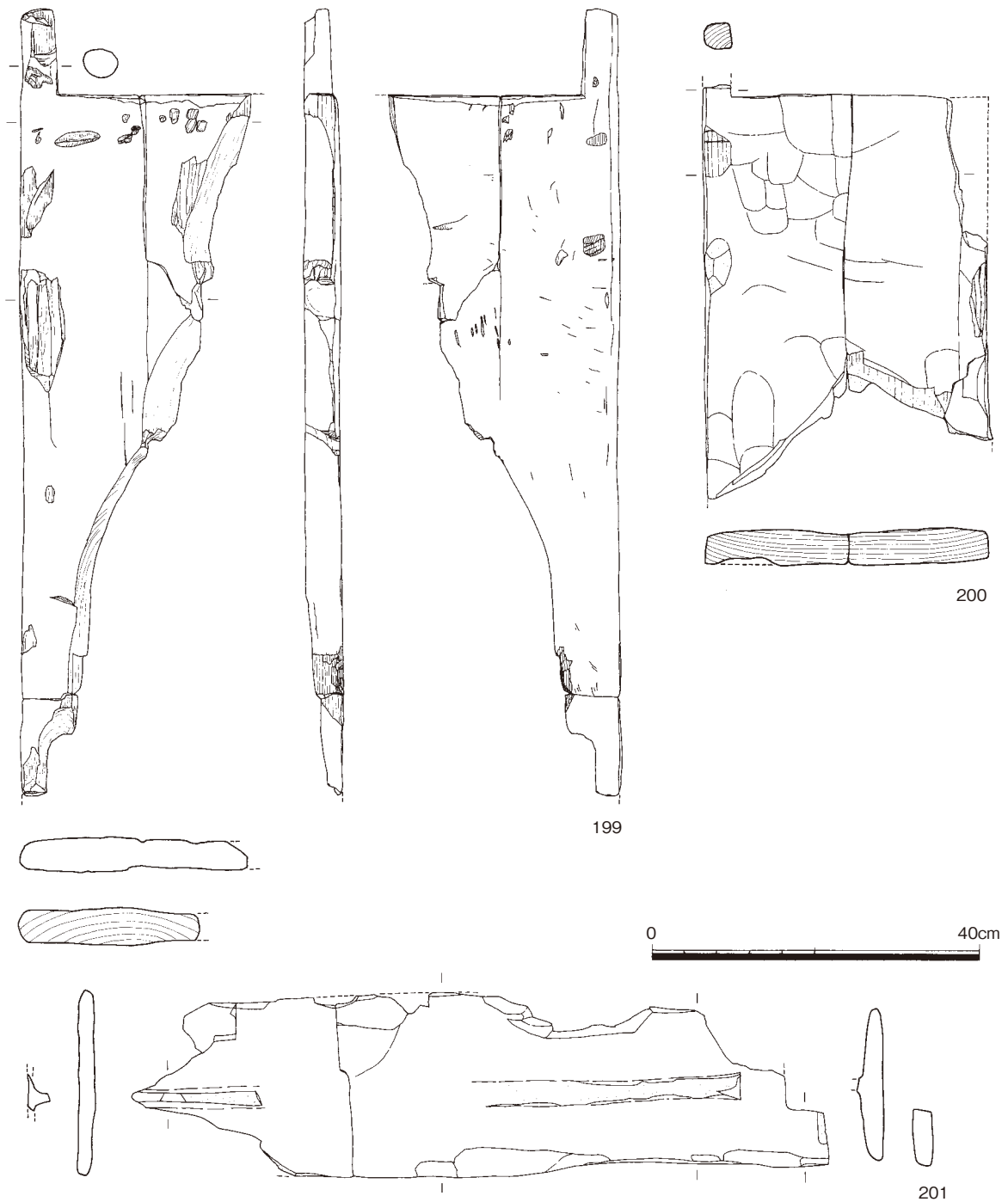


198

197



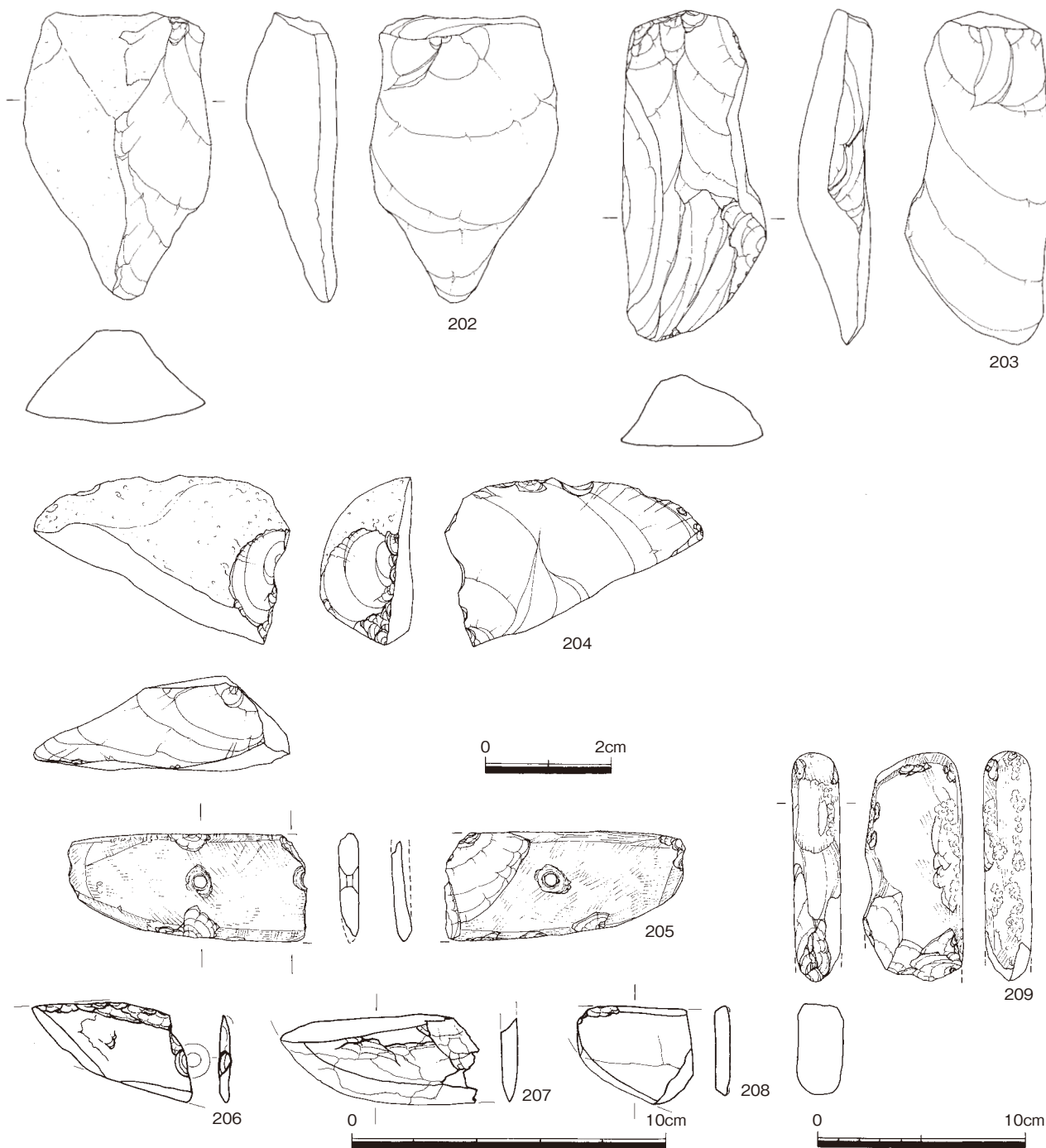
第140图 SD0073 出土木器实测图(1) (1/6)



第141図 SD0073 出土木器実測図(2) (1/8)

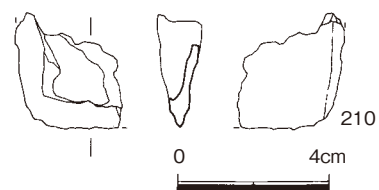
199・200は扉で、ともにスダジイの板目取り材を使用している。199はD-3の西壁際で出土した。残存長98.8cm、残存幅28.6cm、最大厚4.7cmを測る。片側には軸を上下に削り出している。200はG-2・3の下層から出土した扉で、遺存状態は悪い。残存長51.8cm、幅36.0cm、最大厚4.8cmを測る。201はG-2・3の下層から出土した板状木製品である。成形板であろうか。残存長86.5cm、幅23.0cm、最大厚3.5cmを測る。クスノキの板目取り材で、中央部分が筋状に盛り上がっている。

202～204は旧石器時代のもと思われる剥片である。202・203は打面・主要剥離面などをそのまま残す剥片で、風化が著しい。202は安山岩製で幅広の打面をもち、先端は尖る。器長4.5cm、幅

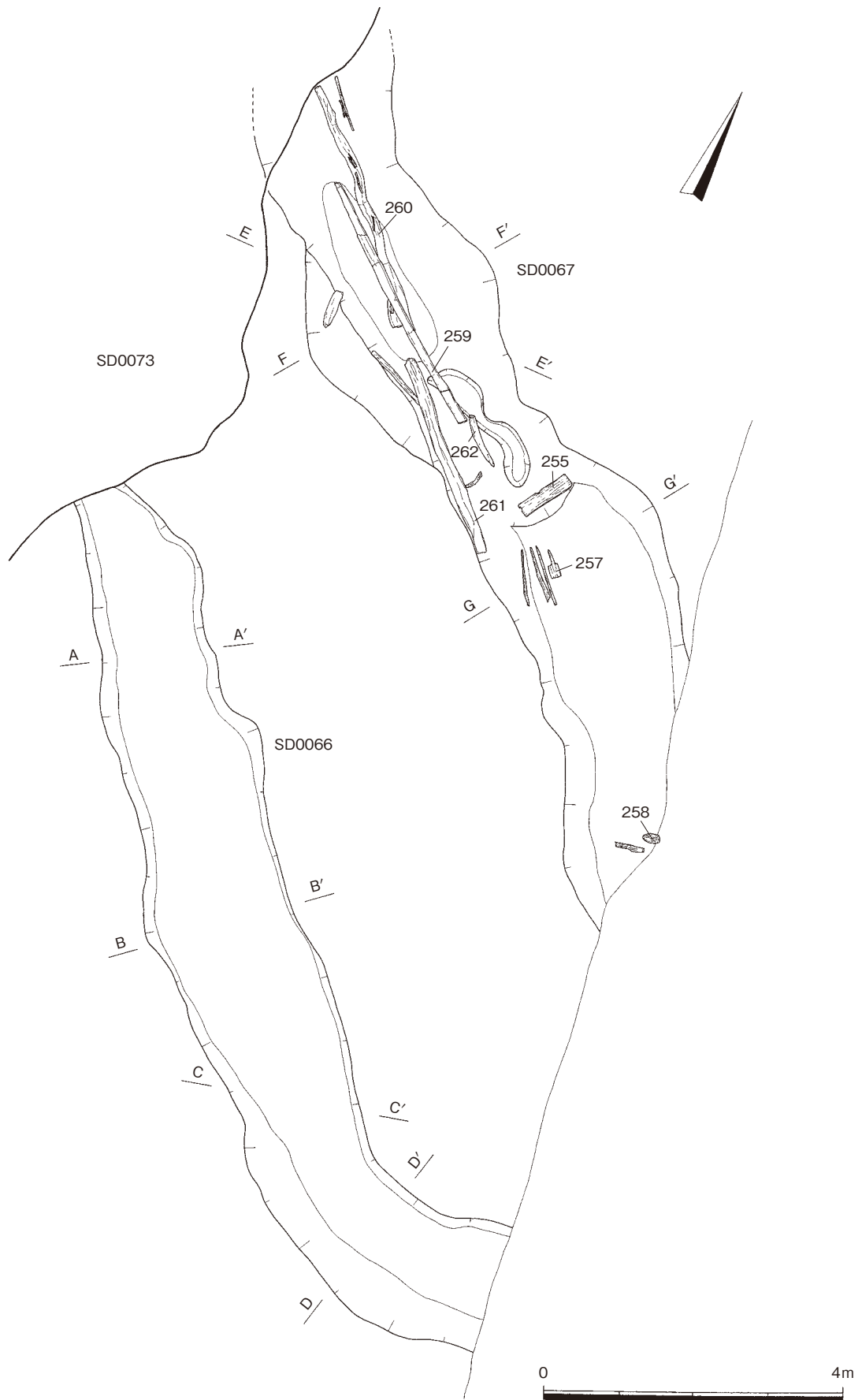


第142図 SD0073 出土石器実測図 (209は1/3、202・203・204は1/1、他は1/2)

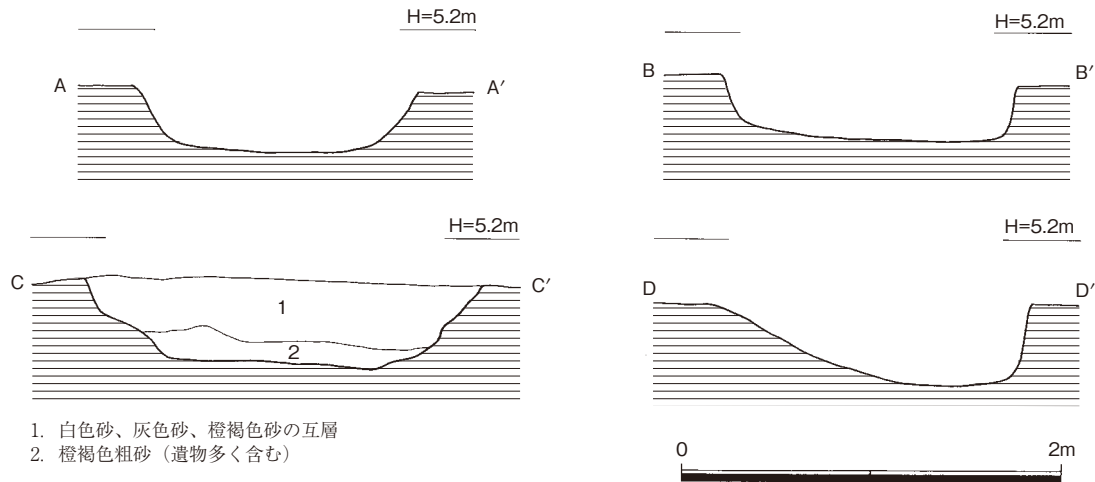
3.0cm、最大厚1.5cm、重さ13.9gを測る。H-2の黒色粘土層から出土した。203は頁岩製で、器長5.3cm、幅2.3cm、最大厚1.2cm、重さ9.5gを測る。H・I-2の下層から出土した。204は頁岩の分割材で、表皮を大きく残す。器長2.7cm、幅4.1cm、最大厚1.5cm、重さ10.4gを測る。I・J-2の黒色粘土から出土した。205～208は石包丁である。いずれも破片で、遺存状況はよくない。209は柱状片刃石斧で、器長10.9cm、幅2.3cm、最大厚4.8cmを測る。挾部を有するが、刃部を欠損している。重さ223.0g。210はH・I-2から出土した鉄



第143図 SD0073 出土金属器実測図 (1/2)



第144図 SD0066・0067 実測図 (1/80)

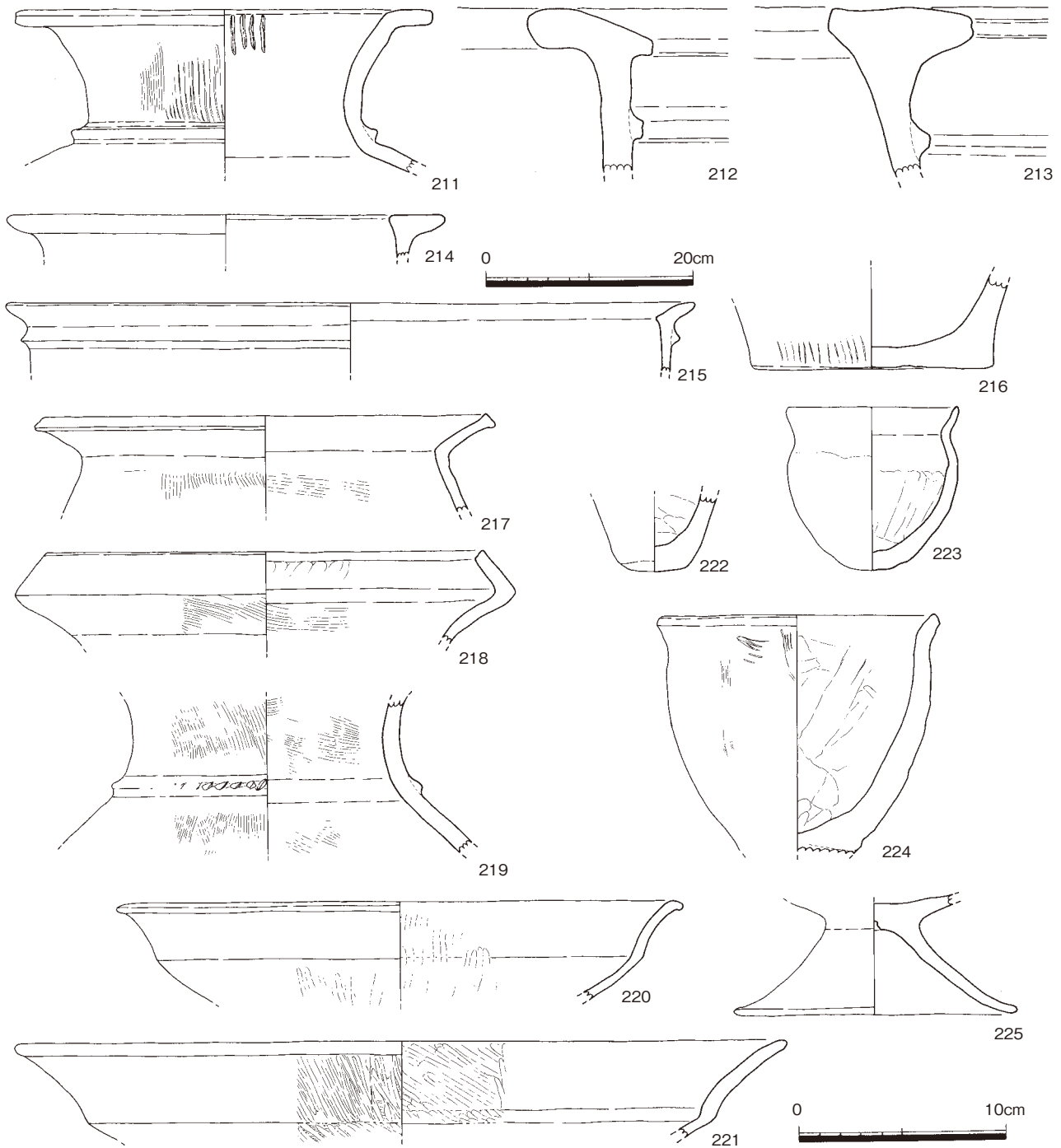


第 145 図 SD0066 土層断面実測図 (1/40)

斧片である。器長 3.0cm、幅 2.8cm、最大厚 1.2cm を測る。

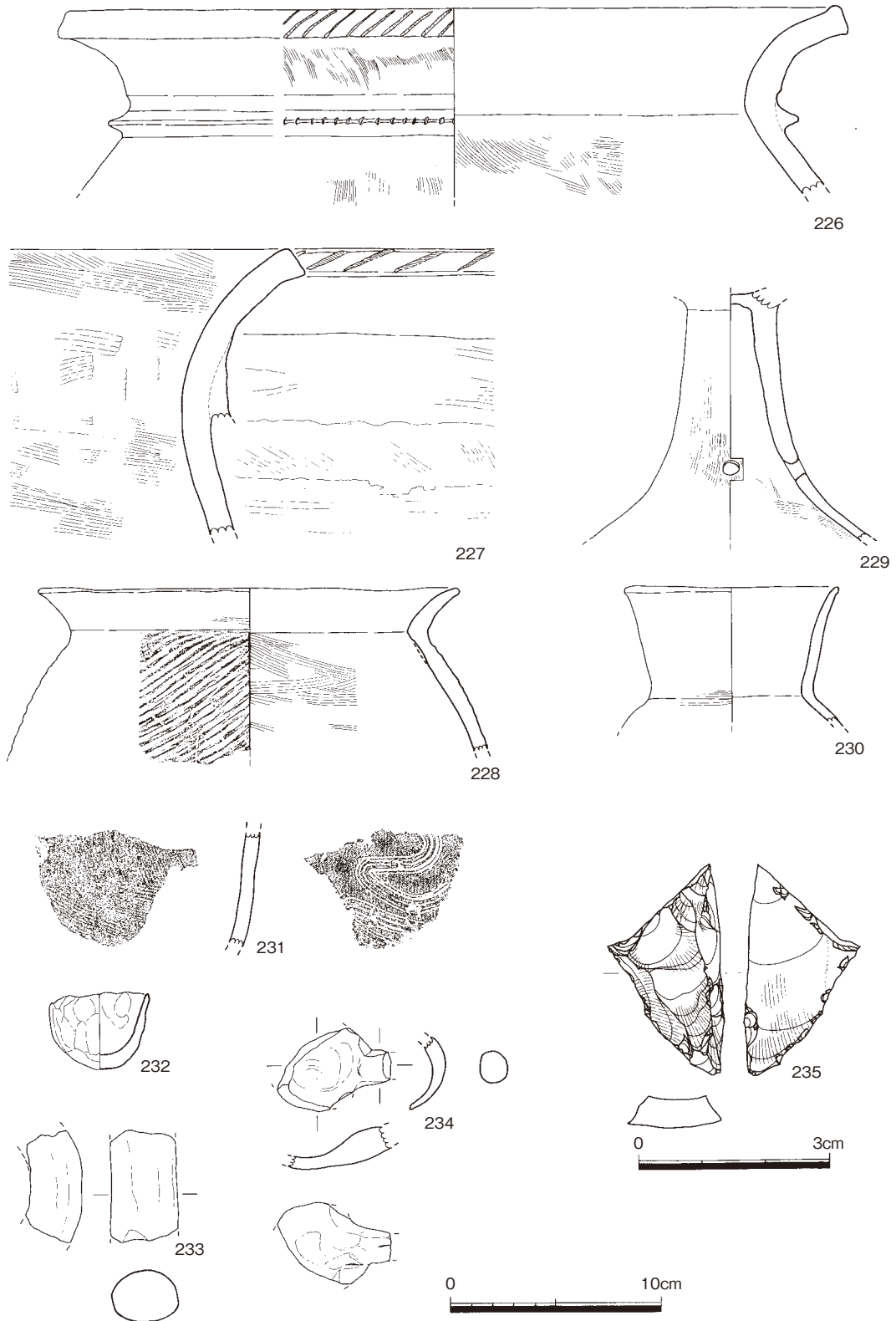
SD0066 (第 144・145 図) I-2 で検出した、幅 1.8~2.0m、深さ 30~40cm の溝である。北端は次第に細く浅くなり、SD0073 付近で境界が不明瞭となる。SD0073 に切られるものと思われる。緩い L 字形にカーブしており、I 区 SD0033 へと繋がる。断面形は緩い逆台形状を呈し、底面は平坦気味である。上層は白色・灰色・橙褐色砂の互層で、下層は橙褐色砂で遺物を多量に含む。弥生時代中期~後期の土器が大半を占めるが、終末期の甕や、内面に削りを施す甕胴部片も少量ながら出土しており、弥生時代終末期~古墳時代前期まで下るものと思われる。須恵器は出土していない。

出土遺物 (第 146・147 図) 211 は弥生時代中期の壺である。頸部には断面三角突帯が巡り、外面には縦方向のヘラミガキと丹塗りを施す。口縁部内面には線刻状の溝が 4 本見られる。復元口径 20.0cm。212~215 は甕の口縁である。212 は大甕で、厚い口縁が内側に大きく張り出す。口縁下位には断面台形の突帯が巡る。213 も大甕口縁である。214 は逆 L 字形口縁の甕で、復元口径 21.0cm を測る。215 は復元口径 66.0cm の大甕であるが、器壁は薄い。口縁は斜めに立ち上がり、内面には鋭い稜線が巡る。口縁下位には断面三角突帯が貼り付けられている。216 は弥生時代中期の甕底部である。平底で、外面には粗いタテハケが残る。底径 11.6cm。217 は弥生時代後期の甕である。くの字状の口縁で、端部は面取りをしている。外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。復元口径 22.0cm。218・219 は複合口縁壺である。218 は復元口径 21.0cm で、口縁部下位には内外面ともにヨコハケが残る。口縁端部内面には指オサエの痕が見られる。219 は複合口縁壺の頸部で、口縁部を欠く。外面には縦方向、内面には横方向の細かいハケメが見られる。頸部には低い断面三角突帯が巡り、刻みを施している。220・221 は弥生時代後期の高杯である。220 は内外面ともに縦方向のヘラミガキがかすかに認められる。杯部の屈曲は弱く、口縁端部は外反気味に外へひらいている。復元口径 27.0cm。221 は杯部の屈曲が明瞭で、鋭い稜線が見られる。外面はヨコハケのち縦方向のヘラミガキ、内面は斜め方向にヘラミガキを施す。内外面ともに丁寧な研磨である。口径 37.0cm に復元したが、歪みのため若干変動する可能性がある。222~224 は鉢形土器である。222 は小型鉢の底部で、内面ナデの痕跡が見られる。223 は復元口径 8.3cm、器高 7.8m の鉢で、内面調整はヘラ状工具によるナデと思われる。224 は復元口径 13.5cm、残存器高 11.2cm の鉢で、外面にはかすかにタテハケが残る。内面調整は板状工具によるナデと思われる。胴部下端は粘土接合面で剥離している。225 は脚付鉢の脚部である。内外面ともにナデている。226~228 は弥生時代終末期の甕である。226 は頸部に断面三角突帯



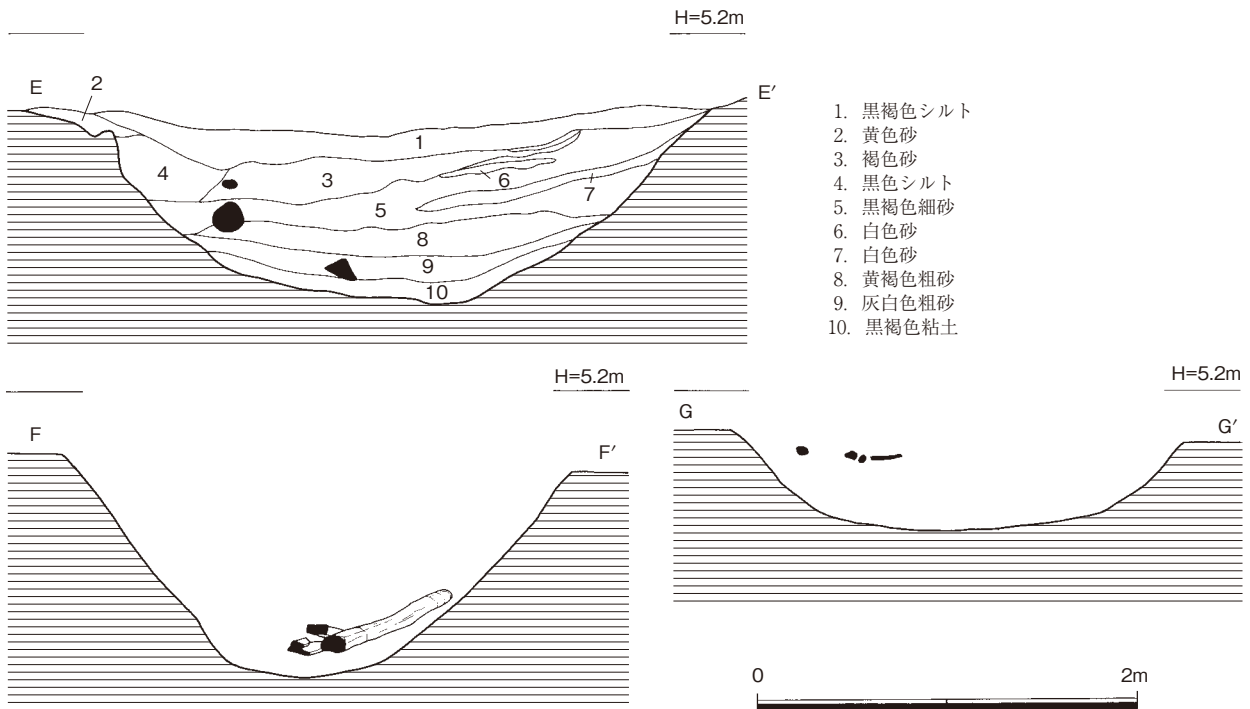
第146図 SD0066 出土遺物実測図(1) (215は1/6、他は1/3)

を持ち、ヘラ状工具による刻み目を施す。口縁端部にも斜位の刻み目がある。復元口径36.0cm。227は大型甕である。頸部の突帯は欠失しており、幅3cm程の帯状に器面の剥落が認められる。口縁端部には刻み目を施し、内面にはヨコハケが明瞭に残る。228は外面に斜め方向のタタキを施す甕である。口縁部は尖り気味のくの字状で、復元口径19.8cmを測る。胴部内面にはヨコハケが見られる。229は弥生時代終末期の高杯脚部である。外面はタテハケ、裾部内面はヨコハケ調整である。二箇所に孔を穿つ。230は直口縁の壺である。復元口径10.1cm、残存器高6.7cm。231は文様を有する胴部片で、天地不明である。ハケ調整のあとに櫛描波状文を施す。内面はハケ調整である。232はミニチュア土



第147図 SD0066 出土遺物実測図(2) (235は1/1、他は1/3)

器の完形品である。口径4.8cm、器高3.6cm。内外面ともに指頭の痕跡が顕著である。233は把手の一部、234は杓子形土製品である。235は黒曜石製の使用痕剥片である。左側縁に使用によると思われる微細剥離が認められる。器長3.3cm、幅1.8cm、最大厚0.9cm、重さ3.19gを測る。

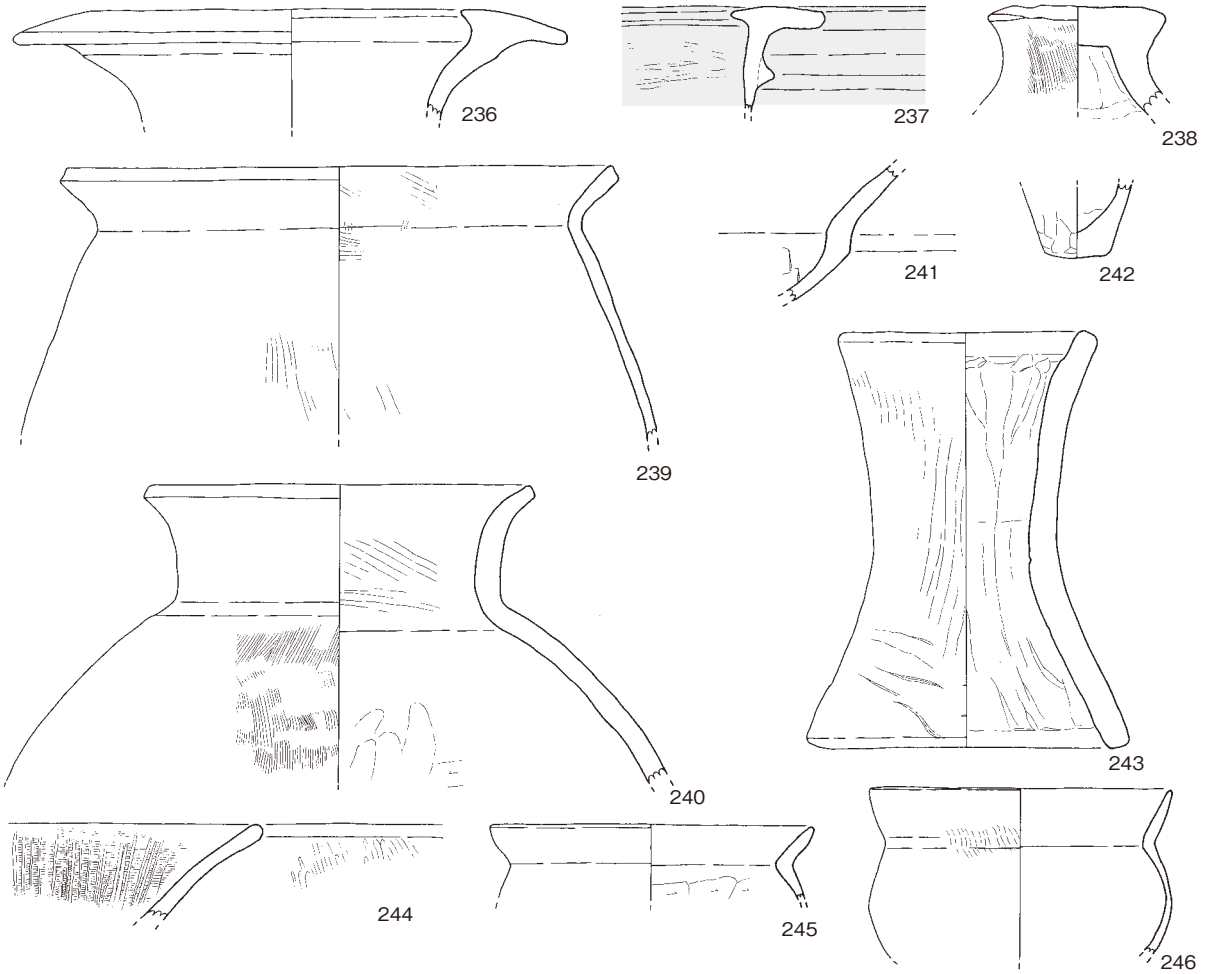


第148図 SD0067 土層断面実測図 (1/40)

SD0067 (第144・148図) H-2・3、I-3で検出した、幅1.8～2.6mの溝である。I区SD0023と一連の溝で、I区から続く東半部は深さ50cm程度であるが、西半部はさらに80cmほど深くなる。落ち込み部分の長さは約6.6mで、そこから長さ3m以上の木材が出土していることから、貯木遺構と思われる。落ち込み部分では湧水が見られる。上層は黒褐色シルト～細砂が主で、下層は灰色～黄褐色粗砂、底面には黒褐色粘土が堆積する。西端は立ち上がり始めるが、SD0073に切られるため、行方を把握できなかった。東半の浅い部分は黒色粘土と白色粗砂で埋まる。弥生土器が主体を占めるが、上層には土師器も含まれている。落ち込み部分からは長さ3m前後の部材3本の他に、机天板も2点出土している。東半の浅い部分からは木製鋤が出土した。

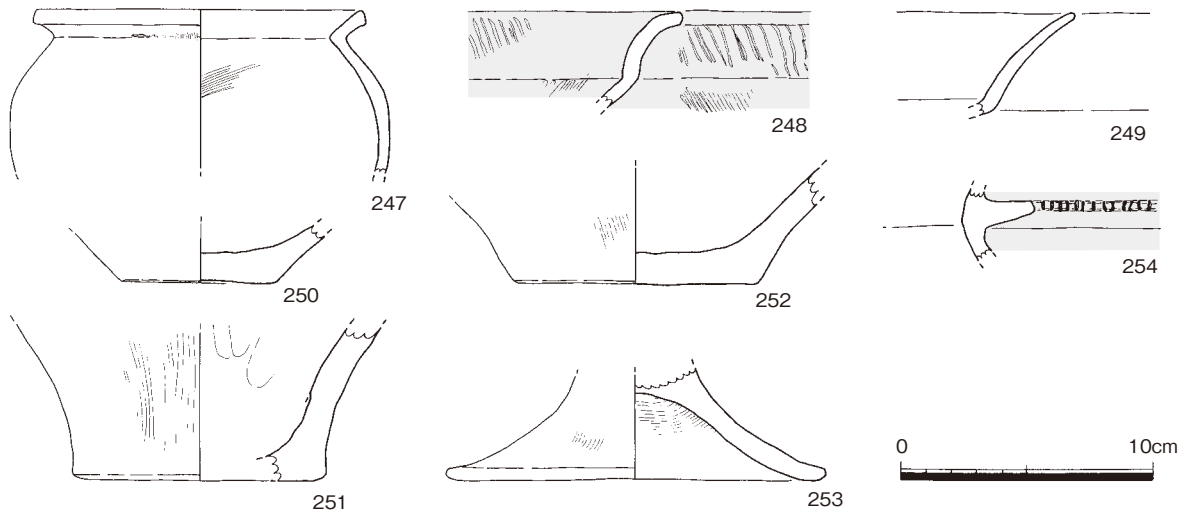
出土遺物 (第149～152図) 236は弥生時代中期の壺で、垂れ気味の鋤先口縁を有する。復元口径22.0cm。外面には赤色顔料が一部残っている。237は鋤先口縁の甕で、口縁下位には断面三角突帯が巡る。内外面に丹を塗っている。238は蓋である。239は弥生時代後期の甕で、くの字状の口縁である。内外面ともにハケ調整である。復元口径22.2cm。240は壺で、外面には細かいタテハケ、内面には粗いハケを施す。241は鉢の胴部片、242は鉢底部である。243は器台で、口径10.2cm、裾部径12.8cm、器高16.4cmを測る。外面は粗いタテハケ、内面は縦方向のナデ状の調整である。244は弥生時代終末期の高杯で、杯部の外反は長い。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のハケ調整の後にヘラミガキを施している。245・246は土師器の壺である。245は胴部内面にケズリ調整が見られる。復元口径12.8cm。246は摩滅のため調整不明瞭である。

247～253は下層出土土器である。247は短頸壺で、復元口径13.2cm、残存器高6.5cmを測る。内外面ともにハケ調整のあとにナデを施している。248・249は弥生時代後期の高杯である。248は丹塗りの高杯で、口縁部は湾曲しながら外反する。杯部には密にヘラミガキを施し、口縁部内外面は暗文状に研磨している。249は248に比べて口縁の外反が長く緩やかである。内外面ともにナデ調整。250～252は弥生時代中期の底部で、いずれも平底である。253は脚付鉢の脚部である。器壁が剥落



上層

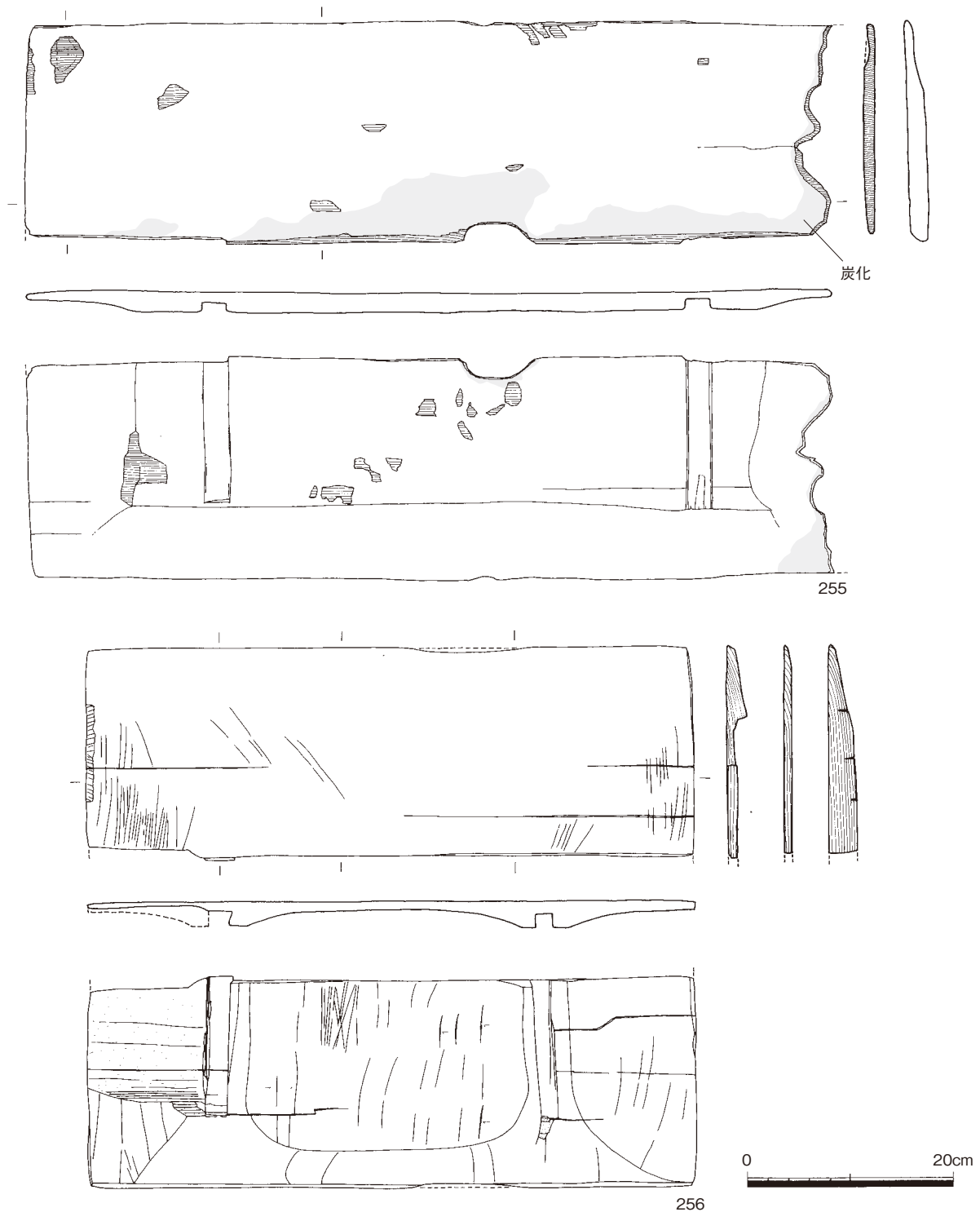
下層



第149図 SD0067 出土土器実測図(1/3)

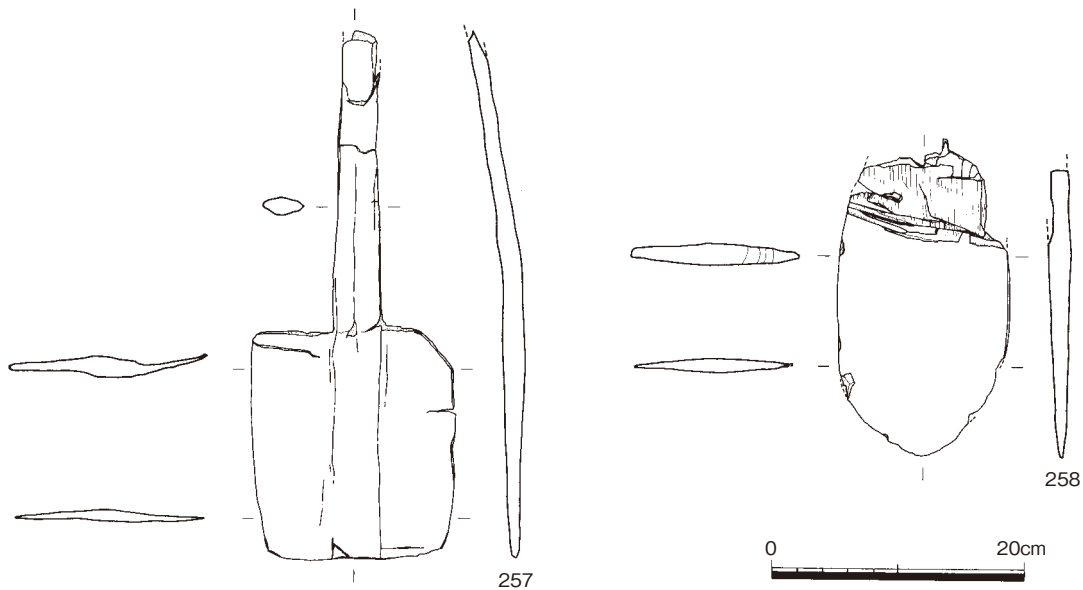
しており、外面調整は不明瞭である。内面はヨコハケを施し、裾部はナデている。254は筒形器台の鏝部と思われる。鏝の端部には刻目を施し、外面には丹を塗っている。

255～258は木製品である。255はSD0067の中央付近で検出した机の天板で、長さ79.0cm、幅21.9cm、最大厚2.0cmを測る。スギの柾目取り材を用いる。縁は炭化している部分が多い。裏面には脚をはめ込むための溝を2ヶ所設けており、溝と溝の間は平坦で、同じ厚さにしている。256も机



第150図 SD0067 出土木器実測図(1) (1/6)

の天板である。落ち込み部分の中央、259・260の上から出土した。長さ59.6cm、幅20.9cm、最大厚2.6cmを測る。スギの板目取り材を用いている。255に比べて小さく、裏面の溝と溝の間は削られ、組み合わせ部のみ肥厚させている。表面、裏面ともに細い筋状の痕が残っている。257・258は平鋤で、ともにカシの柁目取り材を用いている。257は長さ42.7cm、幅16.2cm、最大厚1.8cmを測る。土中で圧縮され、薄く変形している。柄の部分はやや湾曲する。258は長さ25.4cm、幅13.9cm、厚



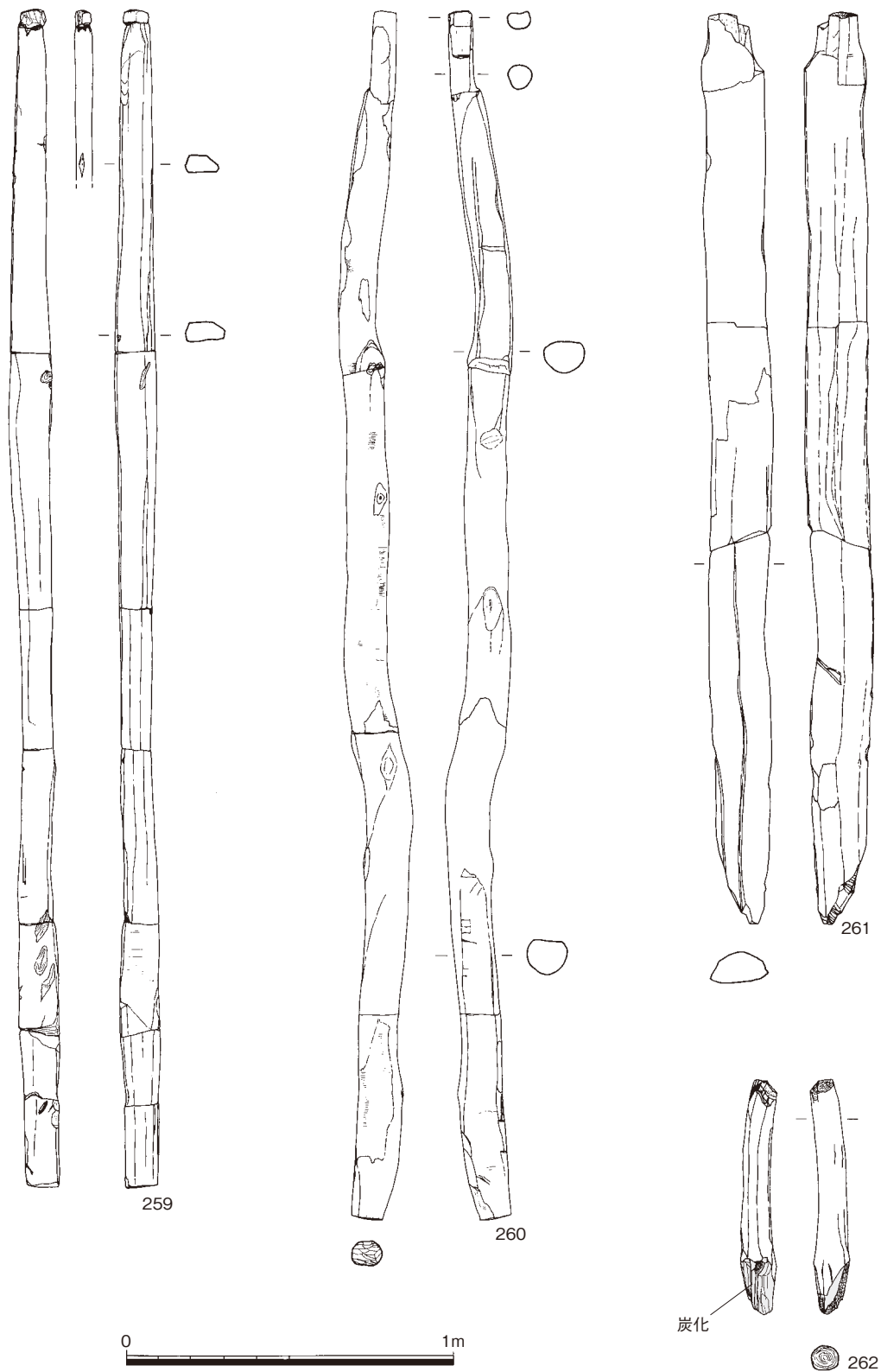
第151図 SD0067 出土木器実測図(2) (1/6)

さ1.8cmを測る。楕円形の形状を呈する。

259～262はSD0067の北半、落ち込み部分から出土した部材である。259はコナラ属アカガシ亜属で、長さ3.6m、最大幅13.0cm、厚さ7.0cmを測る。ミカン割材を利用している。いずれの面もきれいに加工しており、断面台形状を呈する。端部は削り出して加工している。260はツバキ属の芯持丸木材で、長さ3.7m、最大幅14.0cm、厚さ11.0cmを測る。自然木の片側だけを削っており、断面は半円形になっている。端部は径8.0cm程度の円形に削り出し、先端は片面を削って平坦面を作っている。部材をはめ込むためのものか。261はコナラ属アカガシ亜属で、長さ2.78m、最大幅18.0cm、厚さ10.0cmを測る。自然木を半裁しており、断面は半円形で、外面には樹皮が残っている。262はツバキ属の芯持丸木材で、長さ71.0cm、最大幅10.0cmを測る。自然木をそのまま利用しており、樹皮が全面に残る。端部は焼け焦げている。

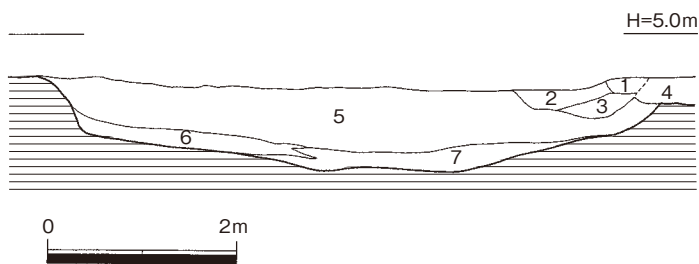
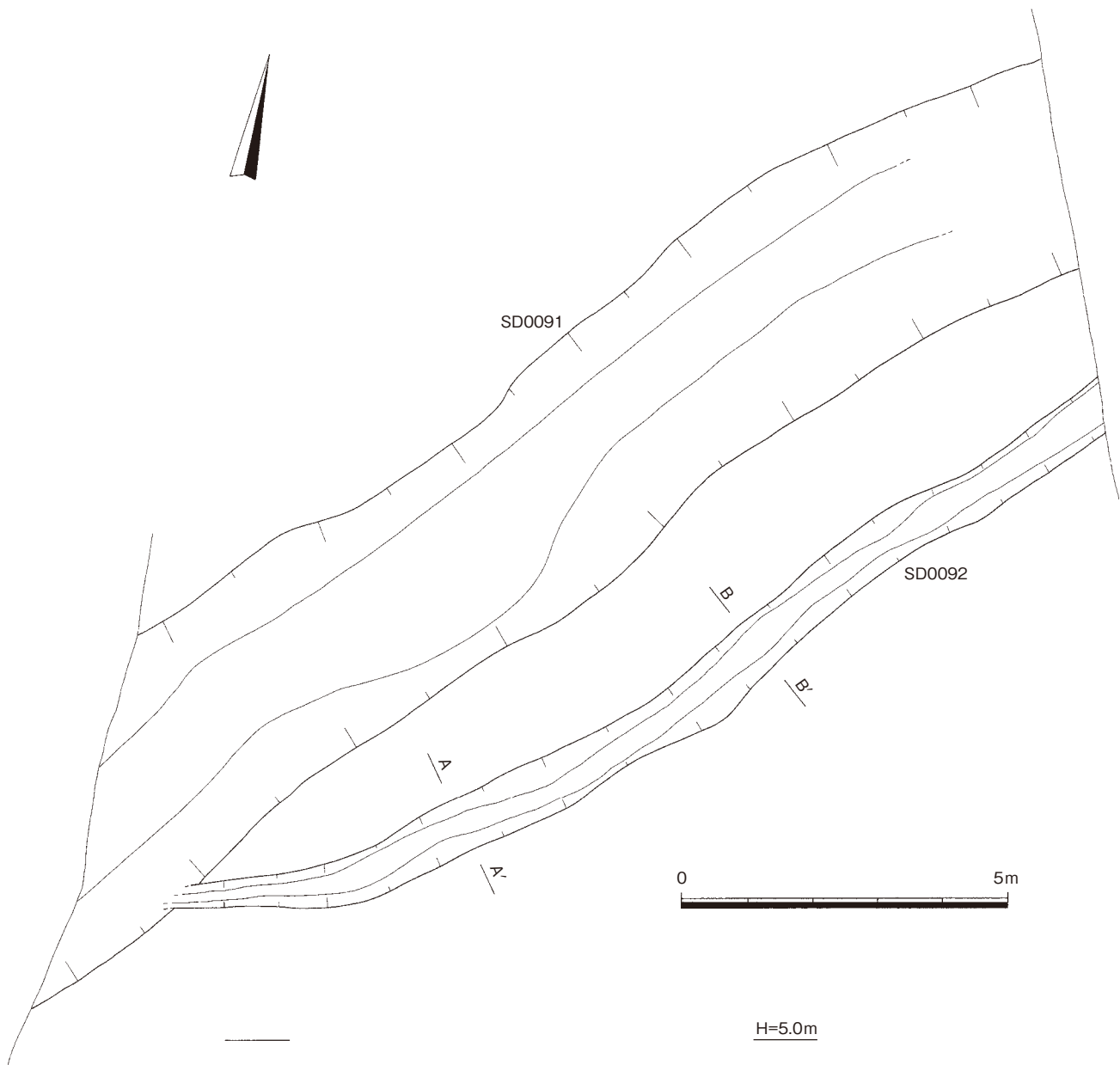
SD0091(第153図) A-5、B-4・5で検出した、幅3.0～3.5m、深さ1.4mの流路である。底面はわずかに西へ傾斜していることから、北東から南西に向けて流れたものと思われる。断面形は緩いU字形であるが、水流による侵食のため壁面は大きく抉れている。抉れた部分は崩落の危険があるため、上端を残した状態で断面図を作成することができなかった。また、湧水が非常に激しく、毎日ポンプ排水しながらの作業であったため、分層しながらの遺物取り上げは困難で、出土位置も記録できていない。検出面から底面付近までほぼ白色粗砂で埋まり、最下層には黒色～褐色砂がうすく堆積している。遺物は底面付近に集中しており、弥生土器、土師器が大量に出土した。弥生土器は中期の甕が多く見られ、後期の土器は比率としては少ない印象を受ける。土師器小型丸底壺は完形品あるいは完形に近いものが多い。土器の他に網杵材や棒状木製品も出土しており、出土遺物はコンテナケース約20箱分である。出土遺物より、SD0091が埋没したのは古墳時代中期と思われる。下層遺物として取り上げた土器は弥生時代終末期までのものであるが、SD0091埋没前の時期を示すものではないと思われる。

出土遺物(第154～158図) 第154・155図は白色粗砂から出土した弥生土器である。263は弥生時代中期の鋤先口縁の甕である。口縁端部には刻みを施し、口縁下位にはM字突帯が巡る。復元口径30.0cmを測る。264は鋤先口縁の壺である。平坦気味の口縁で、頸部には断面三角突帯が巡る。復元口径26.2cm。265・266は器台である。265は器高9.9cm、厚めの器壁である。266は器高14.6cm

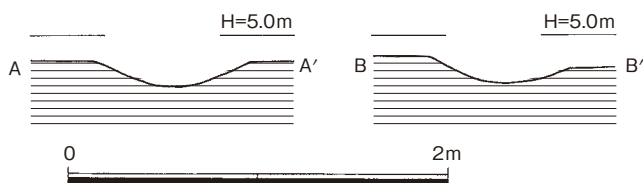


第152図 SD0067 出土部材実測図 (1/20)

で、内面にはシボリ痕が見られる。267は高杯の脚部で、脚部上端には断面台形の突帯が巡る。残存器高25.4cm。外面にはかすかに赤色顔料が残る。268は袋状口縁壺である。口縁下位には低い突帯が貼り付けられている。269は丹塗りの壺である。口縁は直口気味で、頸部には断面三角突帯が巡る。



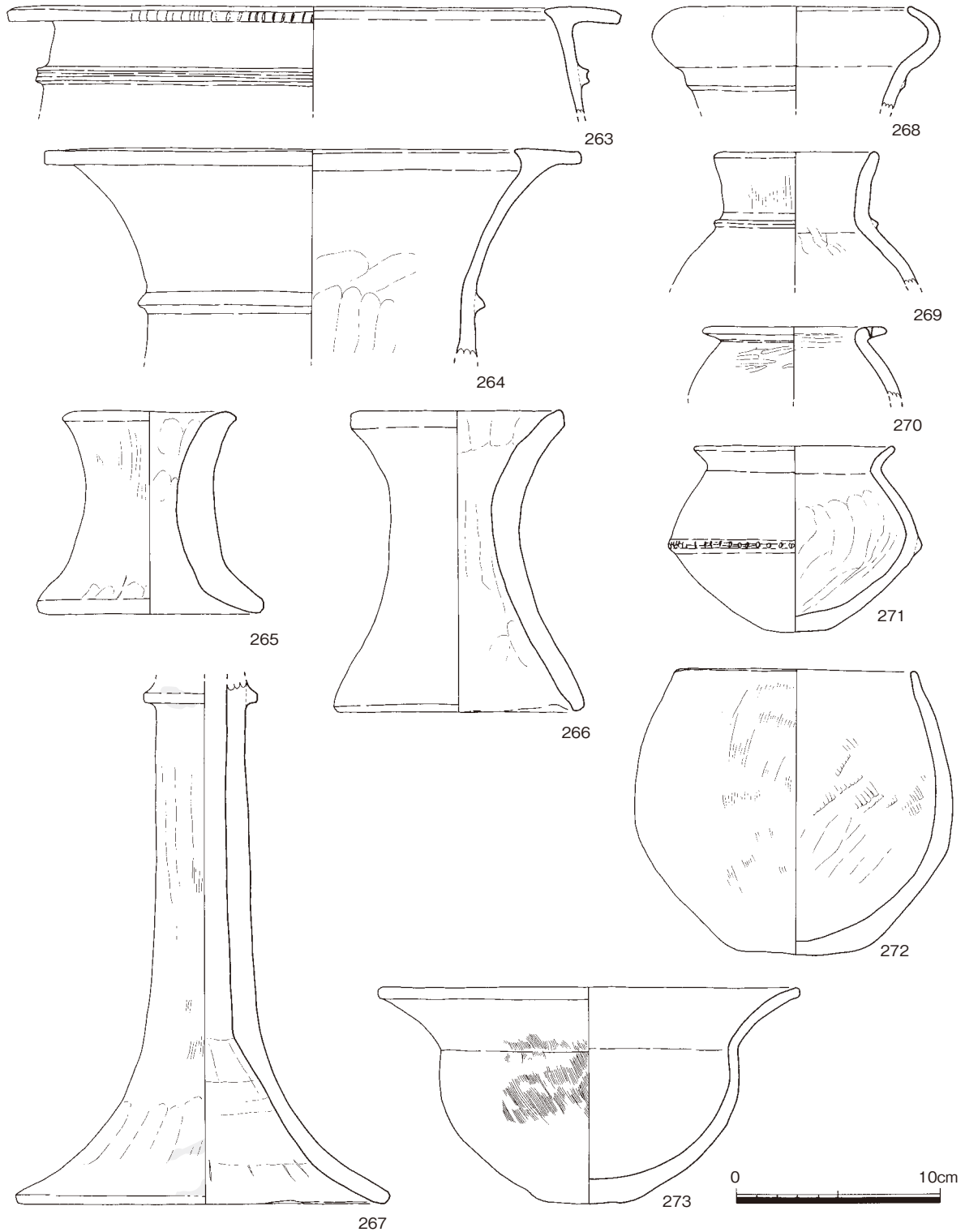
1. 灰色細砂
2. 黒褐色シルト
3. 黒色粗砂
4. 灰褐色シルト
5. 白色中砂～粗砂
6. 黄灰色細砂～中砂
7. 黒褐色粗砂



第 153 図 SD0091・0092 実測図 (1/40、1/80、1/100)

口縁部外面には縦方向のヘラミガキを施す。270は短頸壺である。口縁部内外面には横方向のヘラミガキを施し、口縁部上面には紐通しの孔が見られる。271は小型の鉢である。胴部中位には突帯が巡り、刻み目を施す。底部はコイン状の平底である。272はほぼ完形の鉢形土器である。口径11.8cm、器高13.1cmを測る。やや膨らんだ胴部がすぼまり、そのまま口縁となる。内外面ともにタテハケの痕が残る。273は半球形の胴部に、外へひらく口縁をもつ鉢である。胴部外面には細かいタテハケが残る。復元口径20.6cm、器高10.6cmを測る。底部はやや膨らみ気味の平底である。274～276はくの字状口縁を有する弥生時代後期の甕である。274は復元口径23.2cmで、外面にはタテハケ、内面にはヨコハケを施す。275の胴部外面調整は斜め方向のタタキ、内面は粗いハケ調整である。復元口径17.1cm。276は復元口径17.1cmで、外面は斜め方向のタタキのちタテハケ、内面はナナメハケを施す。277～280は壺である。277は口縁屈曲部に緩い稜をもち、頸部には低い断面三角突帯が巡る。278は複合口縁壺で、頸部は短い。頸部外面はタテハケ、口縁部外面はヨコハケを施す。復元口径15.0cm。279は頸部の長い複合口縁壺である。頸部外面には明瞭なタテハケが残り、屈曲部端部には刻みを施す。内面はヨコハケ調整である。280は大型の壺頸部である。器壁は厚い。281は支脚で上面に一孔を穿つ。282は器台である。残存器高15.0cmで、外面にはタテハケが明瞭に残る。内面にはヨコハケやヘラ調整の痕が見られる。283は弥生時代後期の高杯で、杯部の外反が短めである。外面にはヨコハケを施す。284は弥生時代終末期の高杯で、杯の外反部分が長く伸びる。285は脚付鉢で、口径14.8cm、残存器高9.2cmを測る。外面にはタテハケ、内面にはヨコハケが明瞭に残る。286は直口の鉢である。外面にはタテハケ、口縁部内面には粗いヨコハケが見られる。復元口径13.1cmを測る。

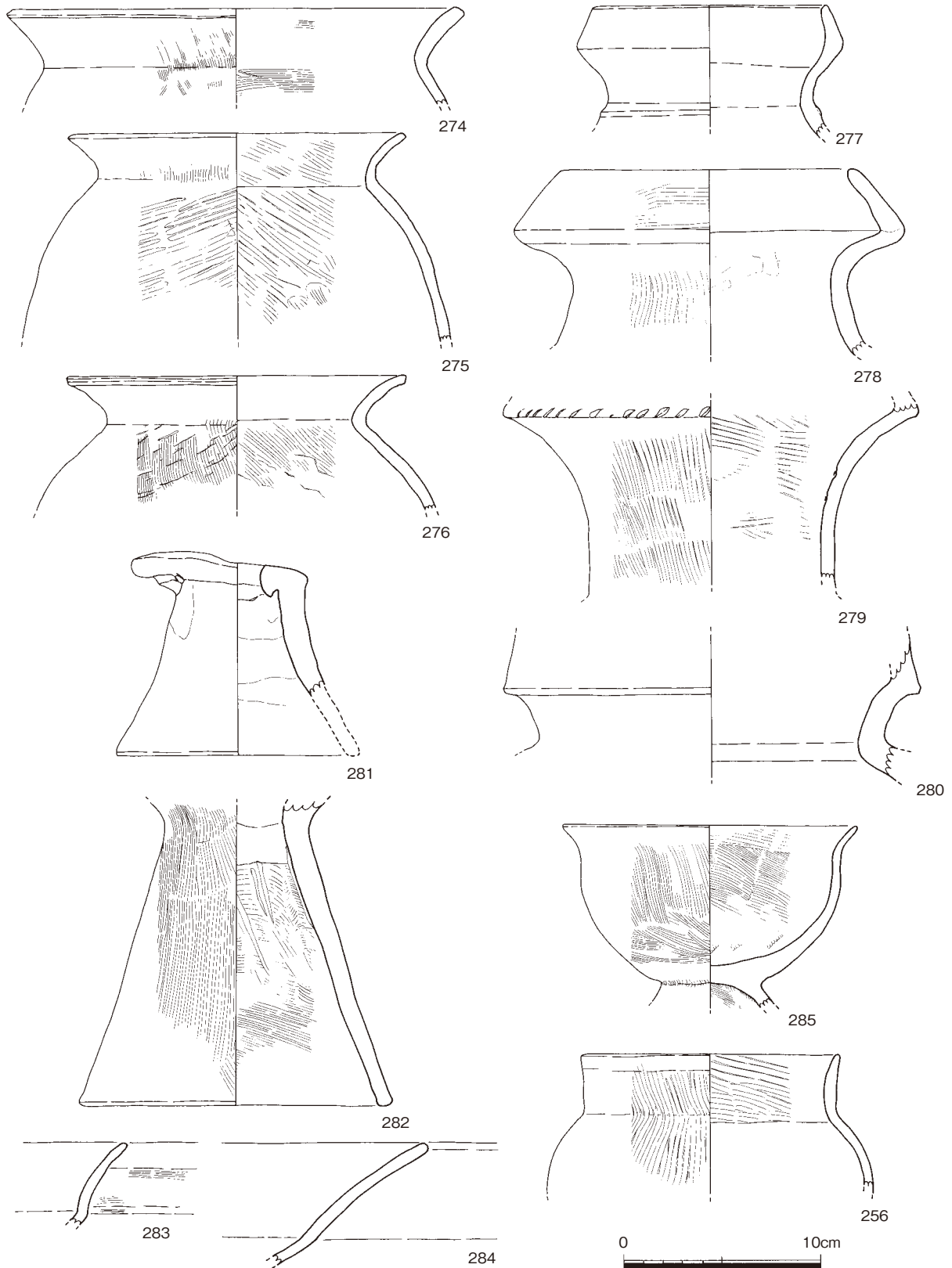
第156図は白色砂から出土した土師器等である。287～297は丸底の壺で、残りの良いものが多い。287は完形で、口径11.4cm、器高10.7cmを測る。外反する口縁で、胴部外面はハケメ、胴部内面はケズリ調整である。288は直立気味の口縁で、扁球形の胴部である。胴部内面は細かいハケメ、口縁部内面は粗いハケメを施す。289～291は外反する口縁で、いずれも外面はハケメ、内面はケズリ調整である。291は底部に穿孔を施す。292は扁球気味の胴部に、直立する口縁である。293は球形の胴部で、外面下半にはハケメが残る。胴部内面は強くナデており、底部付近はケズリ状である。294は二重口縁気味で、口径9.1cm、器高12.6cmを測る。胴部外面はハケのちナデ、内面はケズリ調整である。295はやや大きく、復元口径9.8cm、器高16.0cmを測る。外面にはタテハケを密に施している。内面は横・斜め方向のケズリである。296・297は小型の壺である。ともに頸部付近の外面にはハケメが残るが、胴部下半はケズリ状である。内面は斜め方向に強くナデており、ナデの跡が窪んでいる。298は口縁部がくの字状を呈する土師器の甕で、胴部外面にはタテハケ、胴部内面にはケズリを施す。頸部内面には指頭の痕跡が残る。復元口径16.0cm。299は高杯の杯部である。復元口径18.0cm。口縁端部はわずかに外反する。300・301は高杯脚部である。300は直線的な脚部で、裾部径は13.4cmを測る。内面はケズリ状である。残存器高9.8cm。301はわずかに膨らみ気味の脚部で、内面はナデ調整である。裾部径14.8cm、残存器高10.5cmを測る。302は平底の鉢形土器である。ほぼ完形で、口径7.6cm、器高9.4cmを測る。内面には下から上へ強くナデた痕跡が見られる。口縁部周辺の器面は粗雑で、凹凸が著しい。303・304は完形の丸底鉢である。303は内外面に指頭の痕跡が明瞭に残り、器面の凹凸が著しい。口径12.0cm、器高5.8cmを測る。304は丁寧なナデ調整を施す。口径10.1cm、器高5.0cm。305はやや平底気味の鉢である。完形で、口径12.3cm、器高5.4cmを測る。底部外面はケズリ状、口縁部内外面は丁寧なヨコナデを施す。外面及び口縁部内面は黒色～褐灰色、内面は灰黄褐色を呈する。306は土師質の鉢あるいは杯の底部である。外面にはケズリ調整



第154図 SD0091 出土土器実測図(1) (1/3)

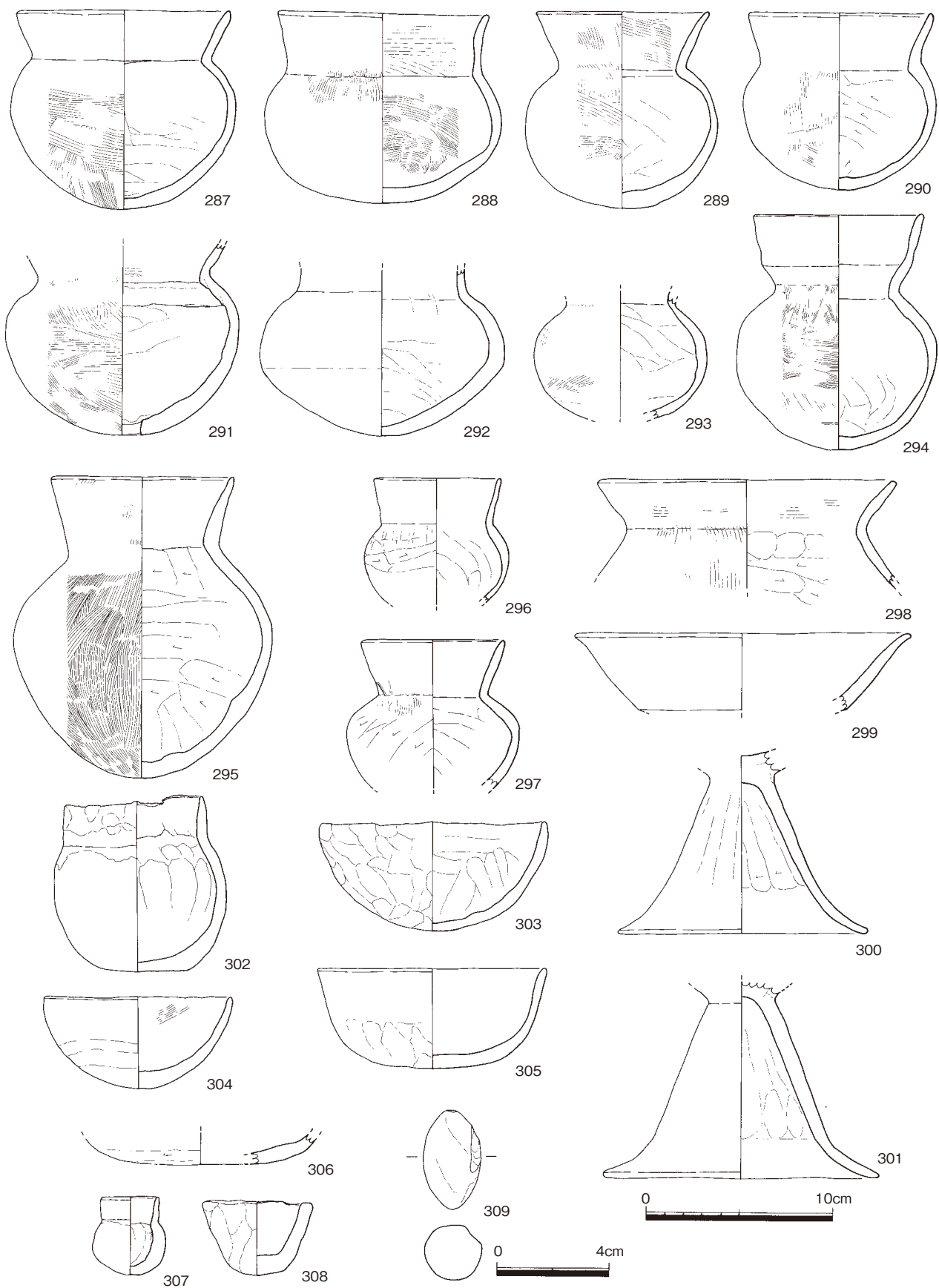
が見られる。307・308はミニチュア土器、309は紡錘形の土製投弾である。

第157図は下層の黒色砂より出土した土器である。310は弥生時代中期の甕である。鋤先口縁を有し、口縁部内面は尖り気味である。復元口径32.2cmを測る。311・312は弥生時代終末期の甕である。311は復元口径30.0cm、残存器高9.6cmで、頸部には低い断面台形突帯が巡る。外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整である。312は復元口径37.6cm、残存器高8.2cmを測る。頸部の突帯は剥落し

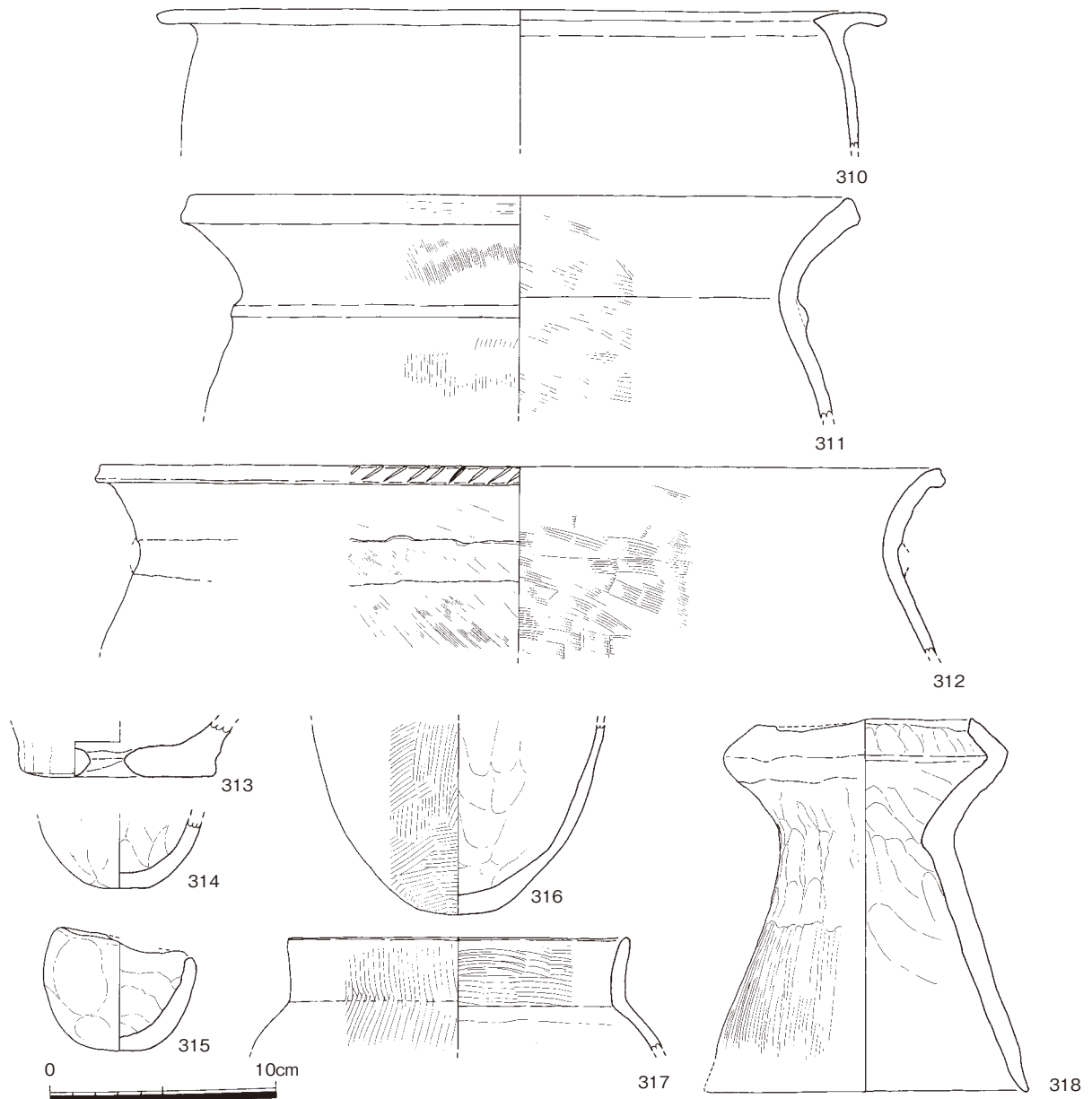


第155図 SD0091 出土土器実測図(2) (1/3)

ているが、本来は幅1.5~2.0cmの突帯を貼り付けている。外面はナナメハケ、内面はヨコハケ調整で、口縁端部には刻み目を施す。313は底部に穿孔を有する甕底部、314・315は鉢形土器である。



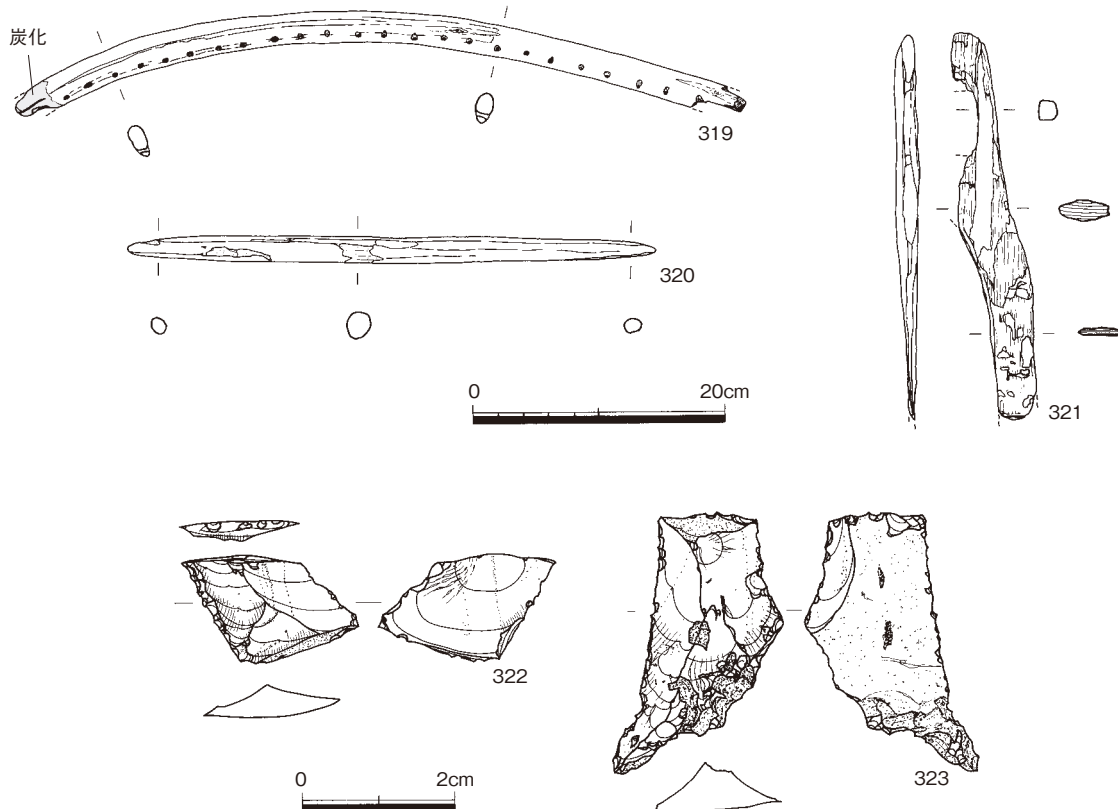
第156図 SD0091 出土土器実測図(3) (309は1/2、他は1/3)



第157図 SD0091 出土土器実測図(4) (1/3)

316は丸底気味の甕底部で、外面にはタテ・ヨコの粗いハケメが見られる。内面には指頭によるナデの痕跡が残る。317は弥生時代終末期頃の鉢である。復元口径15.2cmで、外面にタテハケ、内面にはヨコハケを施す。318は袋状の口縁をもつ器台である。ほぼ完形で、口径9.4cm、高さ16.6cmを測る。外面はタテハケ、内面には粘土をなでつけた跡が見られる。

319はたも網の杵材で、イヌガヤの分割材を利用している。現存長59.0cm、幅2.7cm、最大厚1.6cmを測る。1本の材を曲げて円形にし、端部を結合させるものと思われる。実測図左端の加工は差し込む部分か。内側には径4mm前後の孔が23個並び、左端部及び裏面の1/3が炭化している。320は棒状の木製品で、長さ42.5cm、最大幅2.2cmを測る。樹種はイスノキで、削り出して棒状にしている。先端は細く尖る。モリ・ヤスの可能性もある。321は鍬破片である。アカガシの柁目取り材を利用している。長さ31.2cm、最大幅4.5cm、厚さ1.9cmを測る。柄を差し込む孔は方形である。三又鍬と思われる。



第158図 SD0091出土木器・石器実測図(322・323は1/1、他は1/6)

322・323は白色砂から出土した黒曜石である。ともに使用痕剥片で、側縁に微細な剥離が認められる。322は器長1.4cm、幅2.4cm、最大厚0.4cm、重さ1.02g。323は白い不純物が混じる黒曜石で、器長3.4cm、幅2.3cm、最大厚0.7cm、重さ3.76gを測る。上面、腹面には自然面が残る。

SD0092(第153図) B-4・5で検出した、残存長16m、幅0.7~1.0m、深さ15cm程度の溝状の浅い凹みである。SD0091の南側にほぼ並行する。覆土は周囲の土に比べてやや黒いシルト質土で、底面には砂がうすく堆積している。西端でSD0091と交わるが、重複部分にちょうど攪乱も重なり、切り合いは把握できなかった。出土遺物よりSD0092が新しいと考えている。遺物は非常に少量であるが、須恵器小片が2点出土した。古墳時代後期の遺構と考えられる。

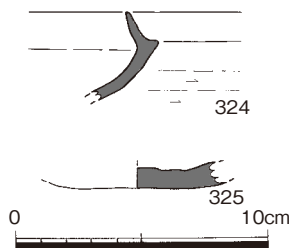
出土遺物(第159図) 324は須恵器杯身の口縁部である。外面には回転ヘラケズリを施す。口縁の立ち上がりはやや高い。325は須恵器杯身の底部である。

②水田(SS)

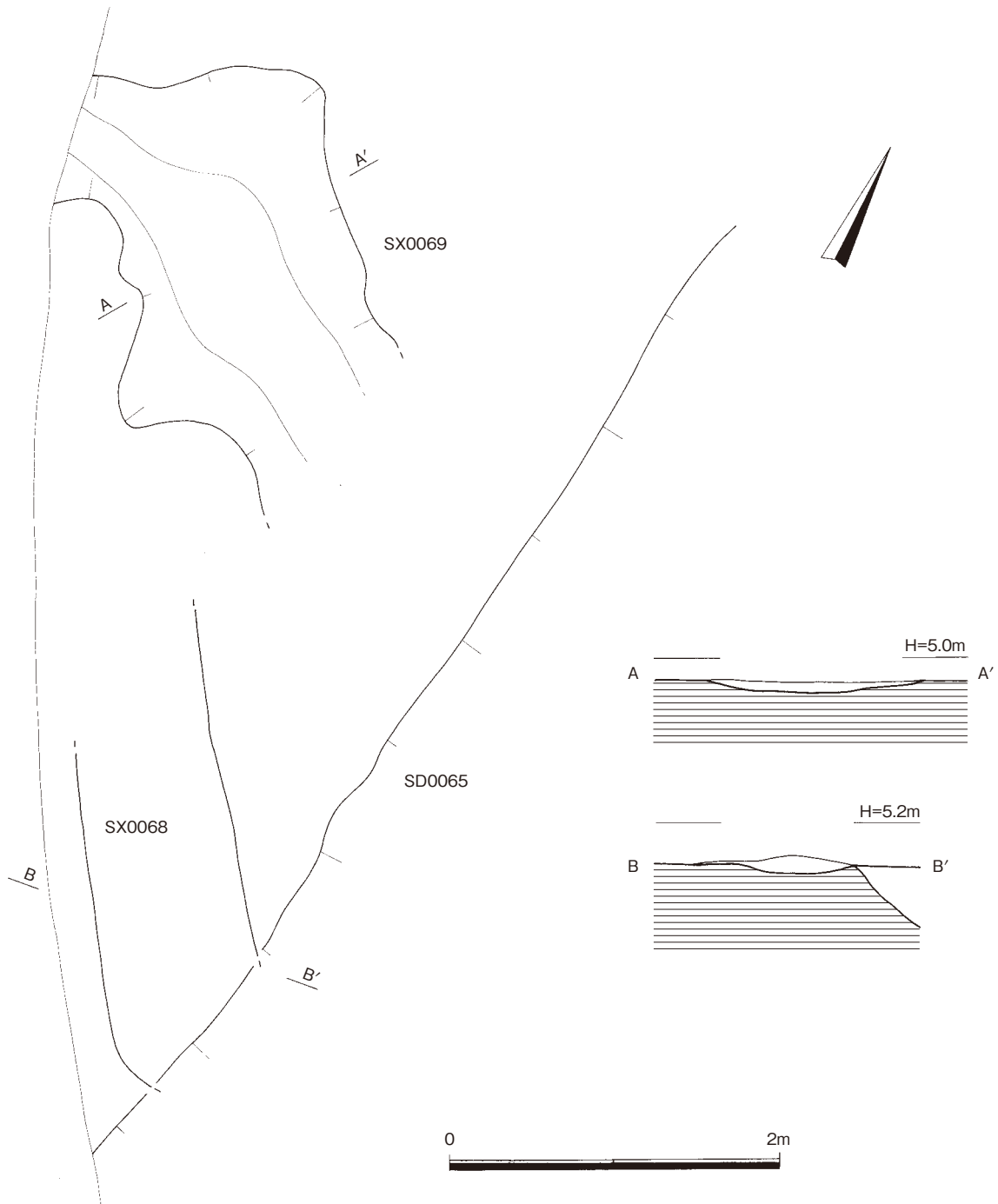
SS0086(付図2) SD0065の西側、E・F-2、G-1・2、H-1・2で水田面を検出した。SD0065西岸には杭列とともに築かれた土堤があり、その西側は粗砂をかぶった黒褐色シルトが広がる。調査区西壁までの狭い範囲であるため詳細は不明であるが、SD0065に伴う水田と考えている。畦や水口などは確認できない。

③不明遺構(SX)

SX0068(第160図) H-1で検出した遺物包含層で、SD0065西岸土手の上に堆積している。厚さ5~10cmで土器と粗砂が混在し、固く締まっていた。表土剥ぎの際に把握できず、北西と南東の広がり



第159図 SD0092出土土器実測図(1/3)

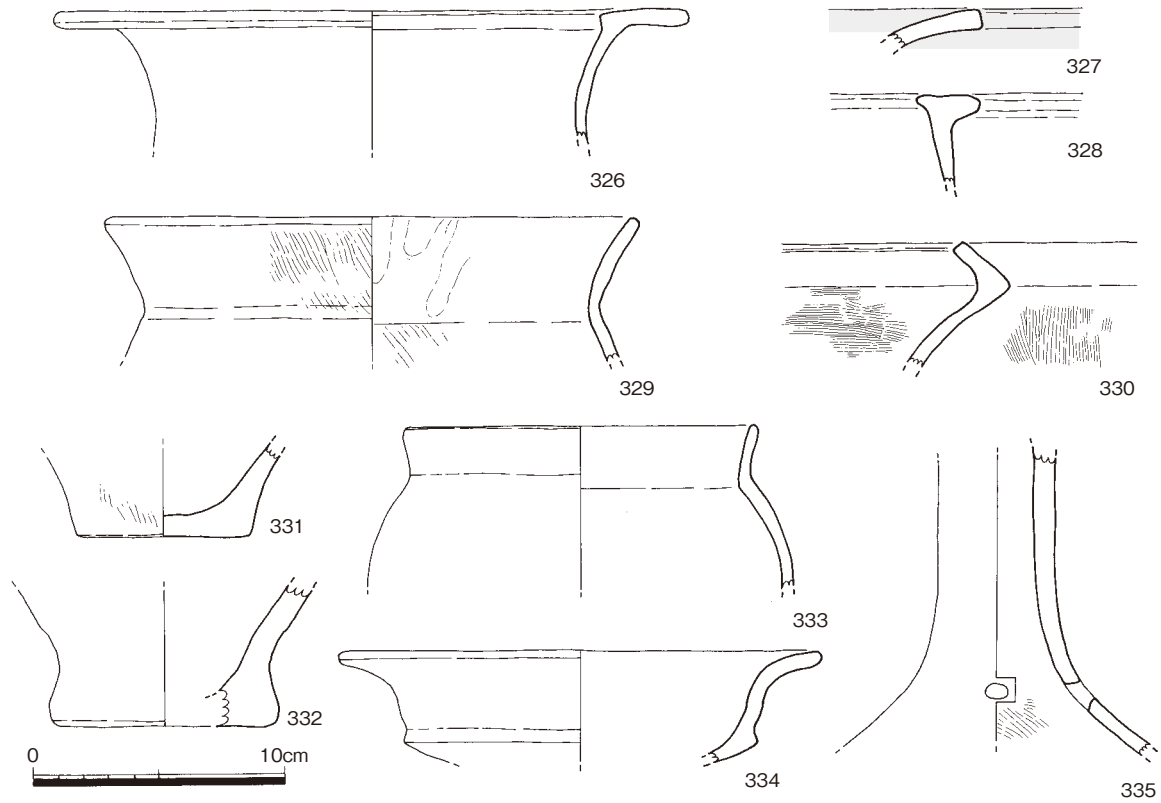


第160図 SX0068・0069 実測図 (1/40)

握ることができなかった。SD0065の上に乗るものと思われるが、確証はない。調査区の端にかかっているため詳細は不明である。出土遺物は弥生土器が大半であるが、掲載した遺物がSX0068の時期を示すわけではない。

出土遺物(第161図) 326は弥生時代中期の鋤先口縁壺、327は広口壺である。328は弥生時代中期の甕口縁、329は後期の甕口縁である。330は複合口縁の壺で、外面にはタテハケ、内面にはヨコハケを施す。331・332はともに平底の甕底部である。333は直口の鉢、334は口縁が大きく外にひらく高杯で、屈曲部には突帯状の段を有する。335は弥生時代終末期の高杯脚部である。裾部に穿孔を施す。

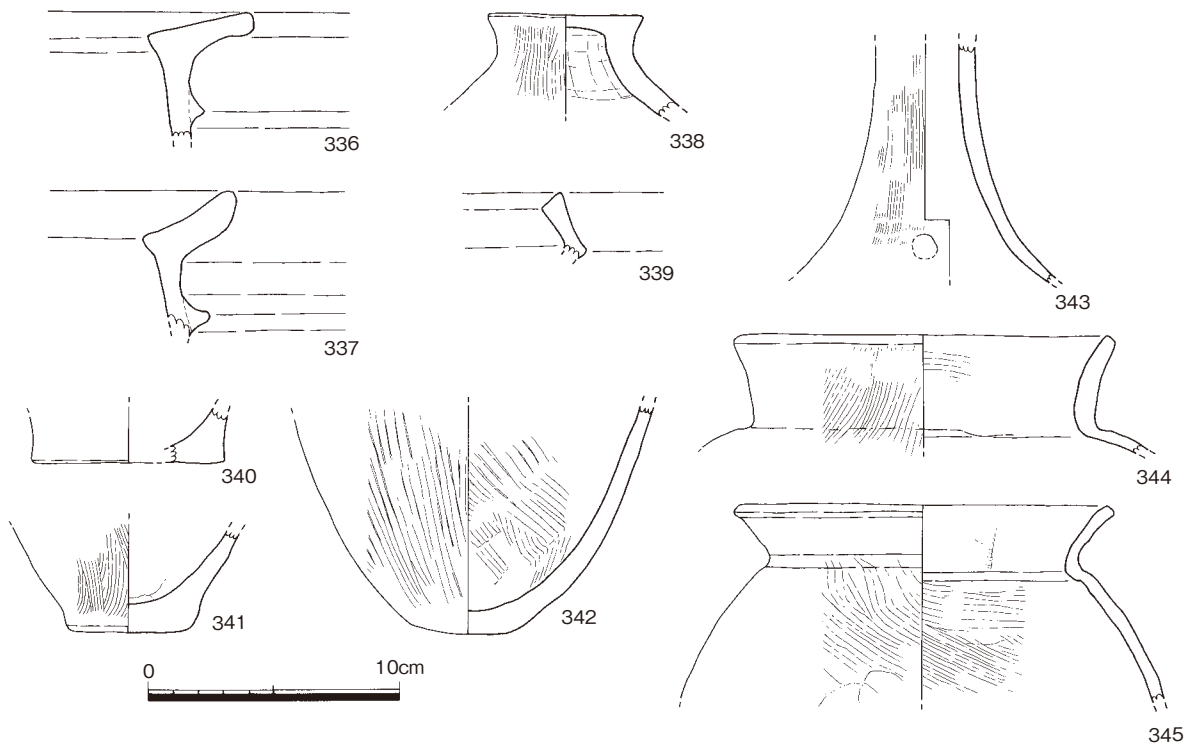
SX0069(第160図) G-1で検出した、溝状の不整形な窪みである。埋土は赤茶色粗砂で、土器



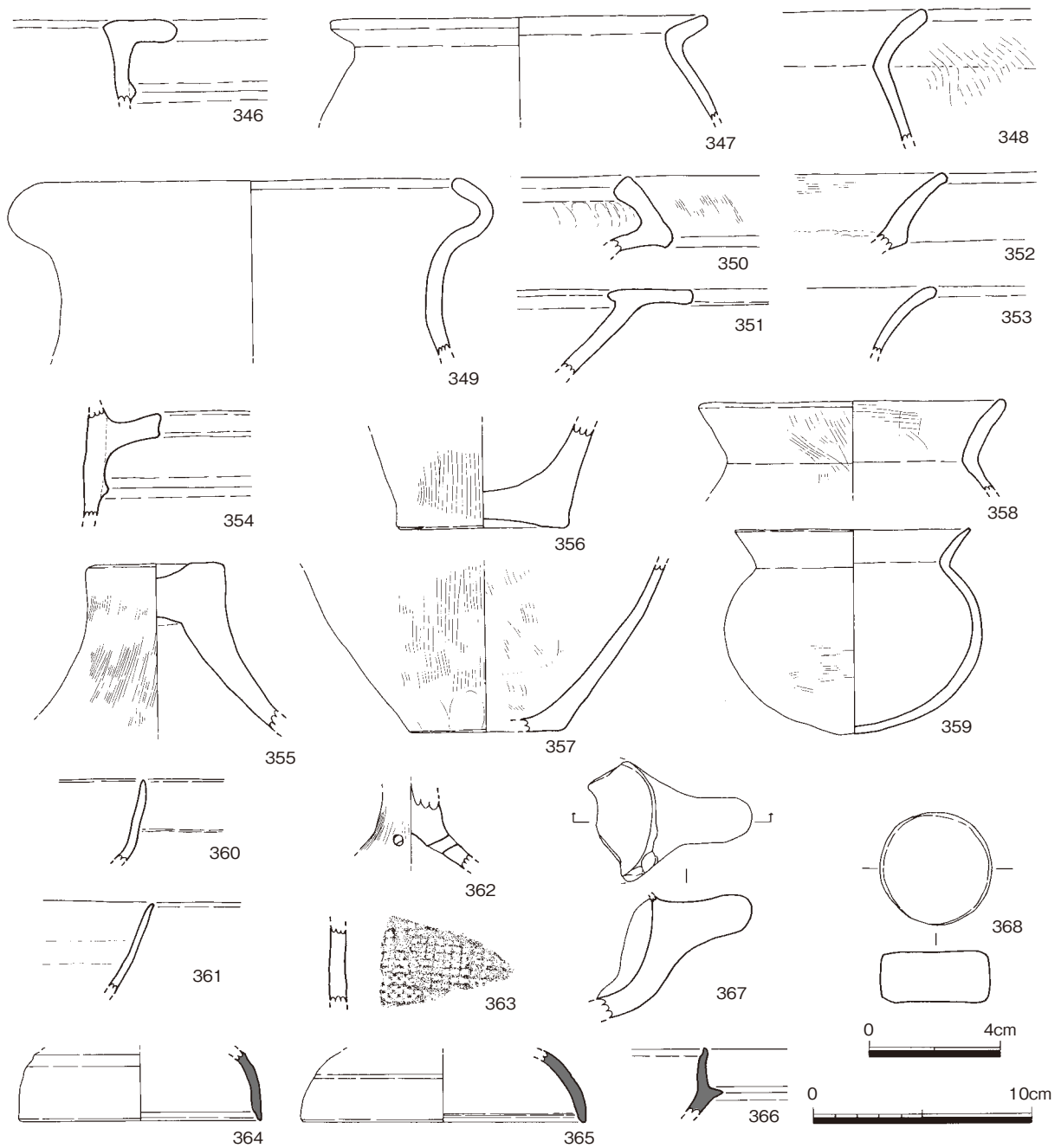
第161図 SX0068 出土土器実測図(1/3)

小片を多量に含む。検出したのは長さ2.4m、幅1.0～1.7mの範囲のみで、調査区外に広がるため詳細不明である。SX0068と同様に弥生土器が主体を占めるが、SX0069の時期を示すわけではない。

出土遺物(第162図) 336・337は弥生時代中期の甕である。336は直線的な口縁、337は湾曲気味の口縁で、ともに口縁下位に断面三角突帯が巡る。338は蓋、339は後期の複合口縁壺である。340～



第162図 SX0069 出土土器実測図(1/3)

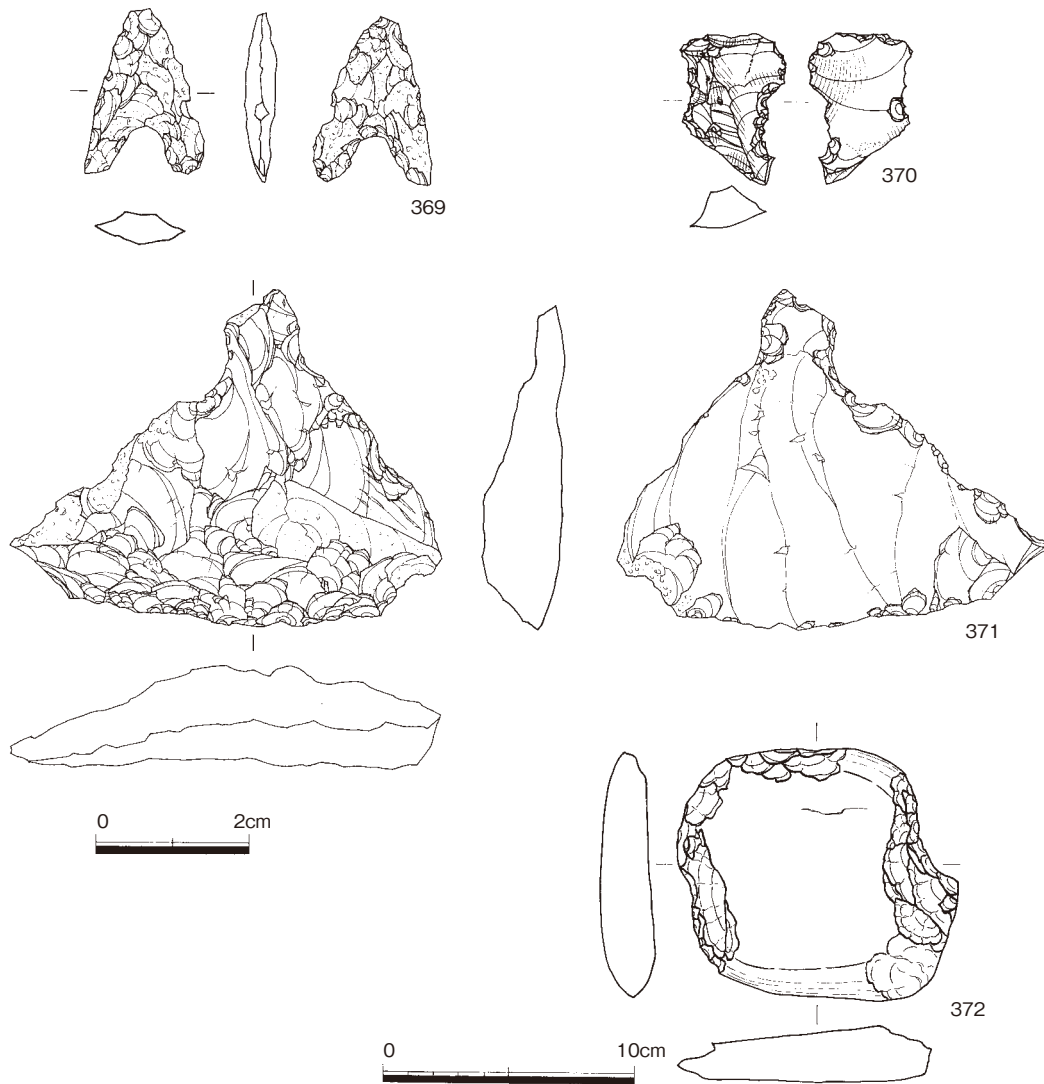


第163図 2面出土土器実測図(368は1/2、他は1/3)

342は弥生時代中期・後期の底部、343は高杯脚部である。344・345は甕で、内外面にハケメを施す。

④その他の遺物(第163・164図)

2面検出時及び2面下の遺物包含層掘り下げ時に出土した遺物を報告する。346～348は弥生土器の甕、349・350は壺、351～353は高杯口縁部である。354は筒形器台の鏝部か。355は弥生時代中期の蓋である。356・357は弥生土器底部、358・359は土師器甕である。360・361は土師器鉢の口縁か。362は土師器脚部、363は外面に格子目状のタキを有する小片である。天地は判断できなかった。364・365は須恵器杯蓋、366は須恵器杯身である。いずれも端部に段を有し、やや古相を示す。364・366は2面水田検出時の出土である。367は杓子形土製品である。368は直径3.5cm、厚さ1.6cmの土製品である。G-2グリッドでトレンチ掘削時に出土した。この他に、図化はできなかった



第164図 2面出土石器実測図(372は1/3、他は1/1)

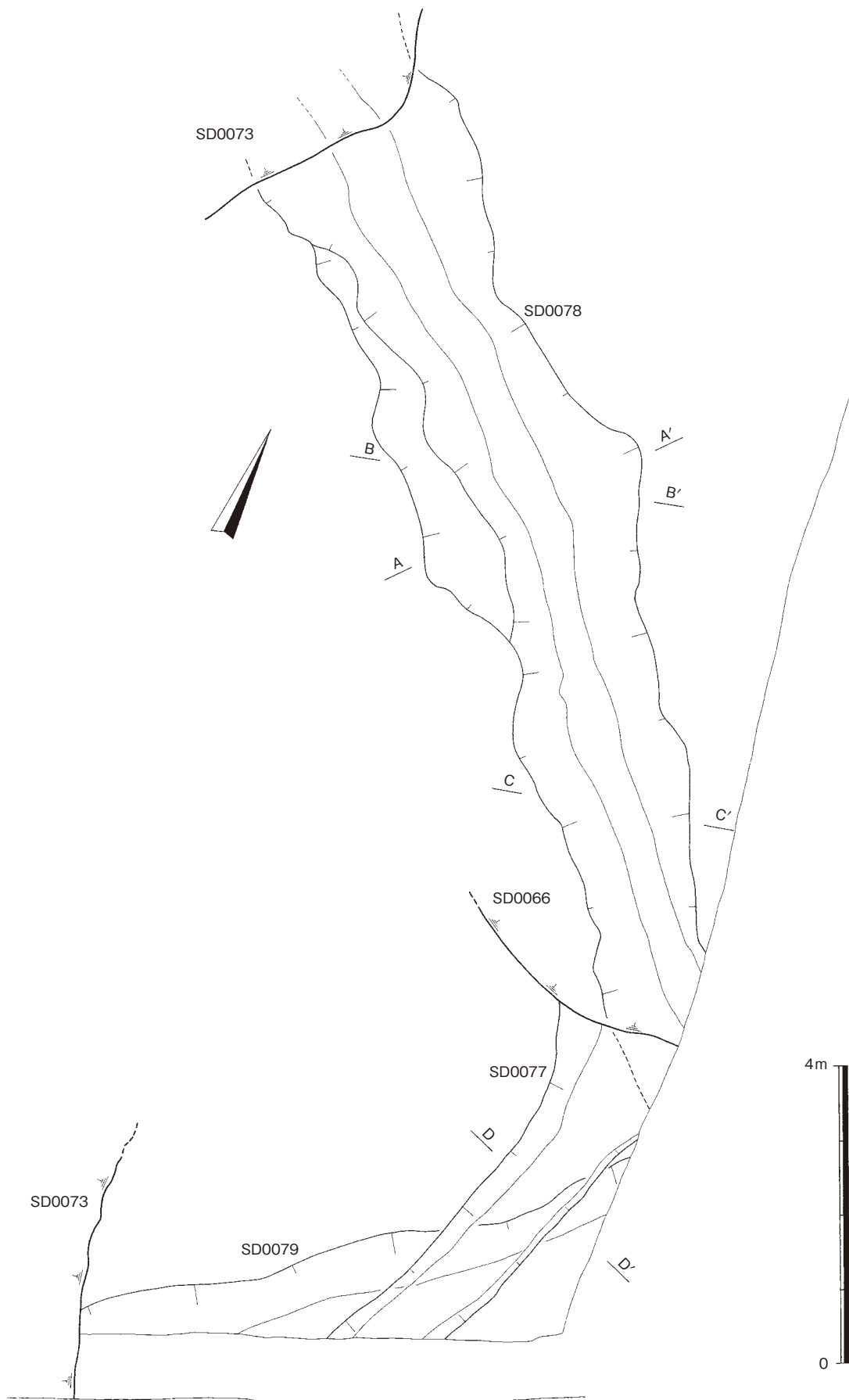
が弥生時代前期と思われる土器底部片も出土している。

369は打製石鏃で、器長2.2cm、幅1.6cm、最大厚0.4cm、重さ1.0gを測る。風化が著しく、剥離は不明瞭である。片岩製か。370は黒曜石製の抉入削器である。器長2.0cm、幅1.4cm、最大厚0.6cmを測る。右側縁には剥離調整による抉りを施す。重さ1.44g。371は黒曜石製のスクレイパーである。大きな剥片を素材とし、下縁に剥離調整を加えて刃部を作り出している。つまみ部も両側から加工している。器長4.5cm、幅5.7cm、最大厚1.3cm、重さ17.6g。372は安山岩製の石錘である。三方に打ち欠きを施し、紐掛け部を作り出している。器長9.9cm、幅11.1cm、最大厚2.4cm、重さ393.31g。

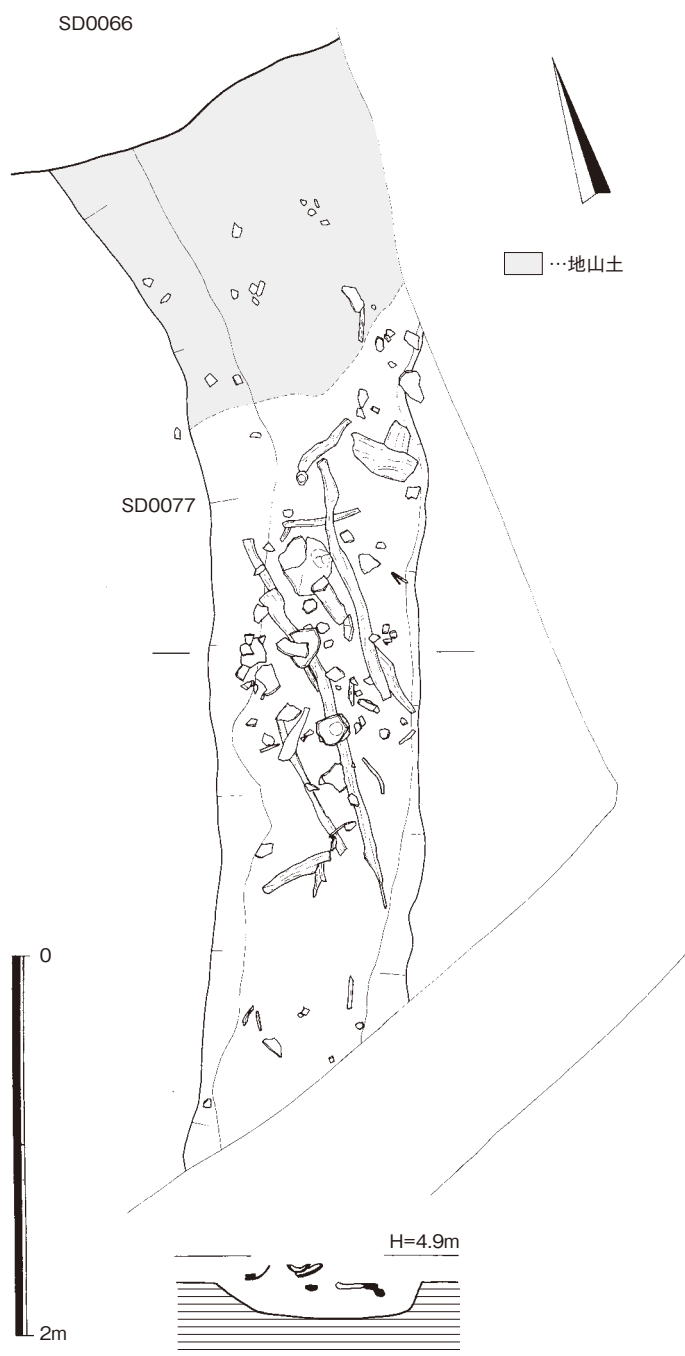
(3) 3面の調査

調査区南半では、2面より20～30cm下層のうすい灰色～褐灰色シルトを基準に3面を設定した。調査区北半では2面下に粗砂を挟む水田層があり、これを3面とした。標高は4.5m～4.6mである。調査区中央付近では明瞭な遺構は確認できない。便宜的に3面としているが、南半で検出した溝と北半の水田とは同時期に存在したものではない。検出した遺構は、溝、水田、畦等である。

①溝(SD)



第165図 SD0077・0078・0079 実測図 (1/80)



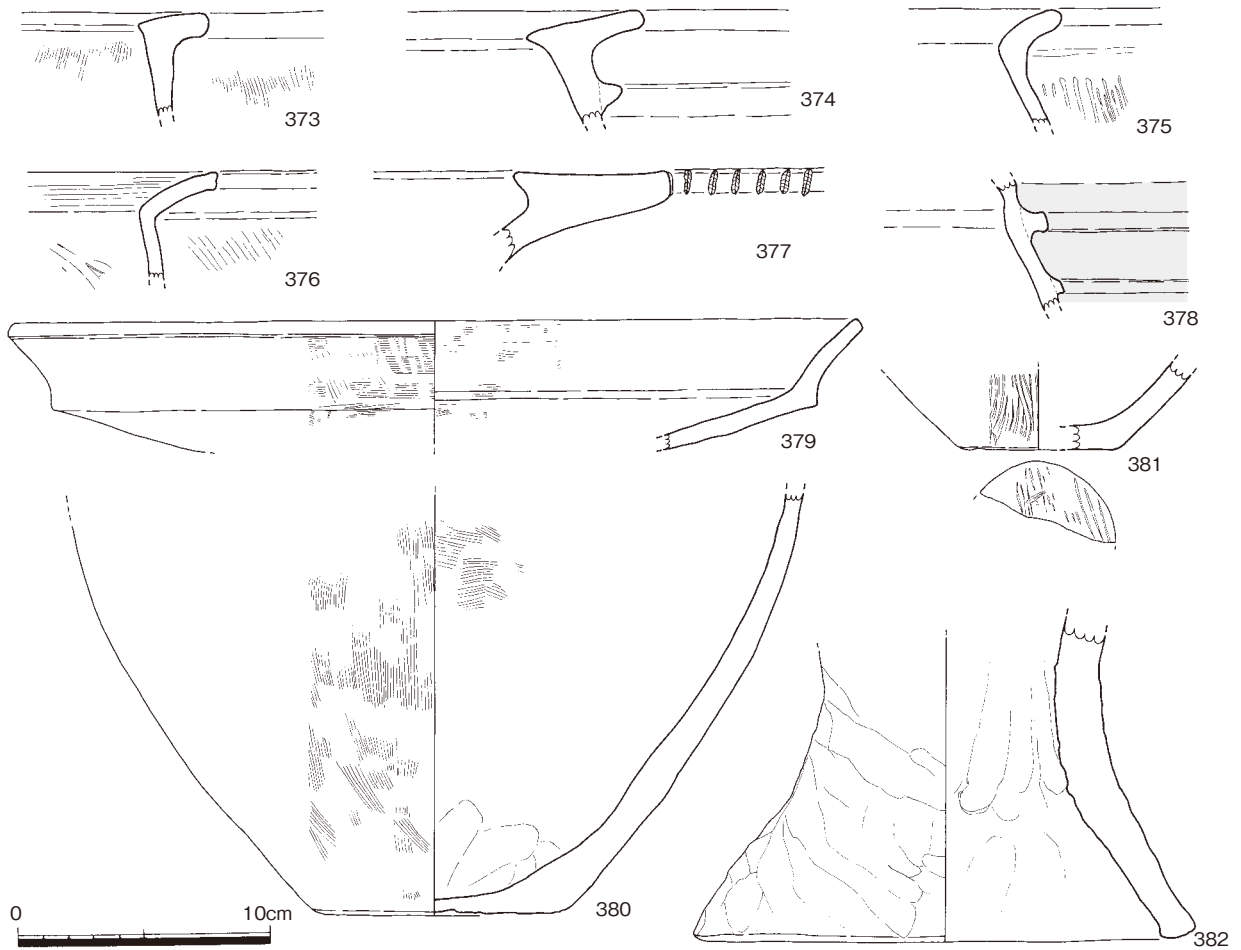
第166図 SD0077 遺物出土状況実測図 (1/40)

外面はヨコハケのち縦方向のヘラミガキ、内面はヨコハケのち斜め方向のヘラミガキを施す。屈曲部の稜は強く、外面屈曲部より下位はやや雑なナデ調整である。380・381は弥生土器底部である。380は平底気味の底部で、底部径9.7cm、残存器高16.6cm。外面にはタテハケ、内面にはヨコハケが残る。381も平底で、胴部及び底部外面にハケメが残っている。ハケメは粗い。ともに弥生時代後期前半頃のものか。382は器台である。外面には斜め方向の、内面には縦方向の強いナデの痕跡が残る。裾部径20.0cm、残存器高12.8cmを測る。

383～388は、北端に堆積した黄灰色地山土より出土した土器である。383は弥生時代中期の鋤先

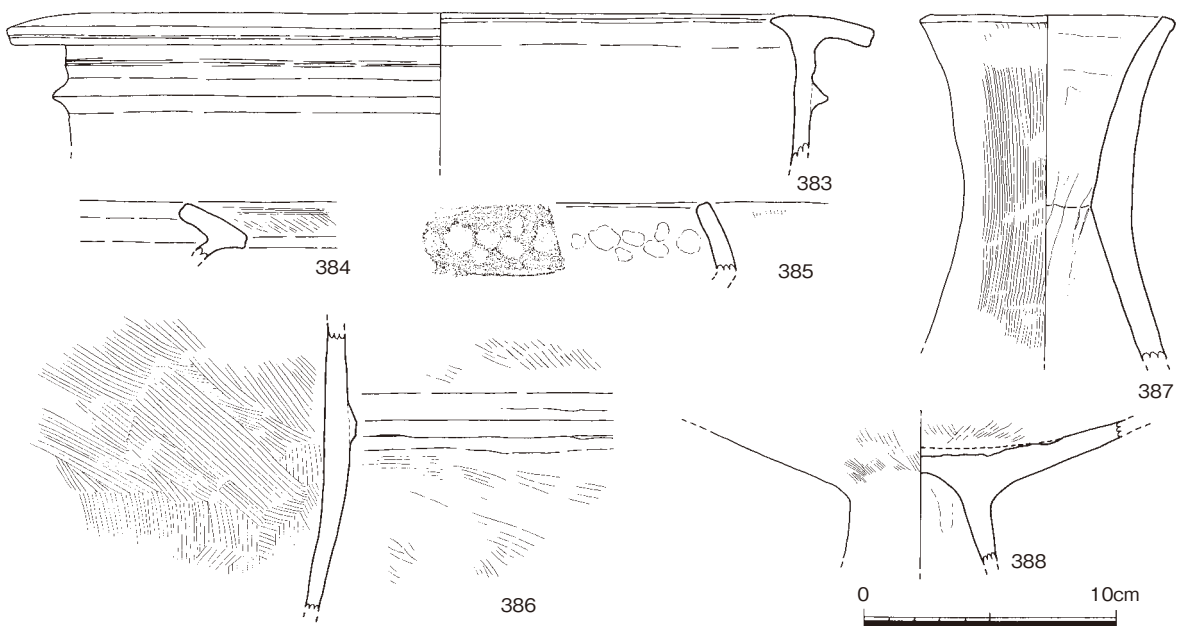
SD0077 (第165・166図) J-2で検出した、幅1.1mの溝である。ほぼ南北方向に延びる。周辺は溝の切り合いが著しく、I区検出の溝と繋がるのか不明である。覆土は灰色粘質シルト、深さは20cm程で浅いが、検出面付近で弥生土器がまとまって出土した。SD0078と重なるが、平面で切り合いを把握することはできなかった。遺物の先後関係より、SD0078に切られると思われる。北端1m程の範囲には厚さ10cm程度の黄灰色地山土が堆積している。意図的に埋めたものであろうか。弥生時代後期の所産と思われる。

出土遺物 (第167・168図) 373～375は弥生時代中期の甕である。373は逆L字形の短い口縁で、内外面にタテハケを施す。374は鋤先口縁で、口縁端部は長く伸び、口縁内面にも張り出す。口縁下には断面三角形の突帯を貼り付ける。375は逆L字形の口縁で、外面はタテハケが残る。376は弥生時代後期の甕で、くの字に屈曲する。胴部内外面には斜め方向のハケメ、口縁部内面にはヨコハケのちヨコナデを施す。377は弥生時代中期の鋤先口縁の壺である。口縁部上面はわずかに窪み、口縁端部には刻目を施す。378は瓢形土器の肩部で、2条のコの字形突帯が巡る。外面には丹塗りを施す。379は弥生時代後期の高杯で、復元口径33.8cm、残存器高5.2cmを測る。屈曲部から湾曲しながら外へひらき、口縁端部は面取りを施す。

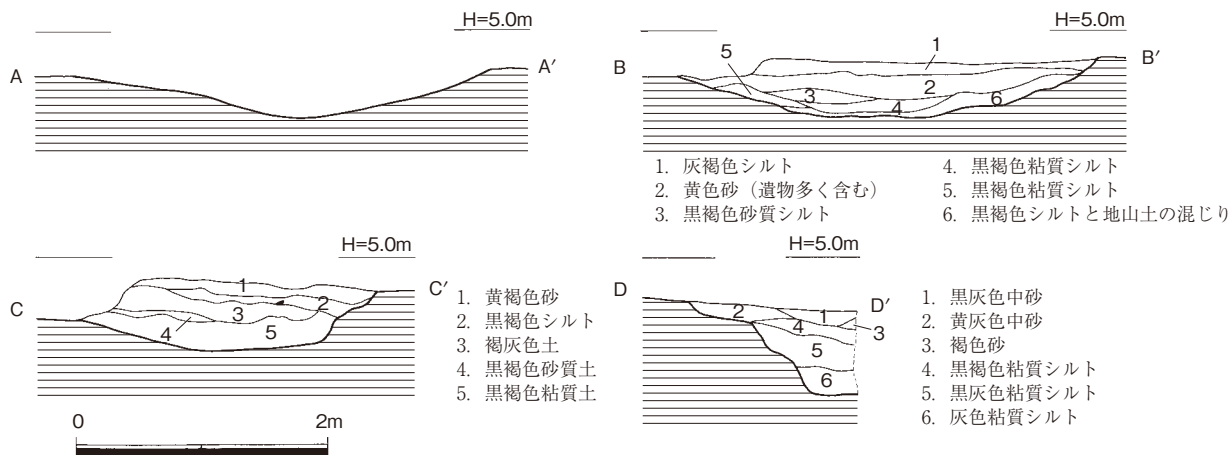


第167図 SD0077 出土土器実測図(1) (1/3)

口縁の甕で、復元口径34.4cm、残存器高6.0cmを測る。口縁下には断面三角突帯が巡る。384は弥生時代後期の複合口縁壺である。外面には斜め方向のハケメが残る。385は小片のため心許ないが、



第168図 SD0077 出土土器実測図(2) (1/3)

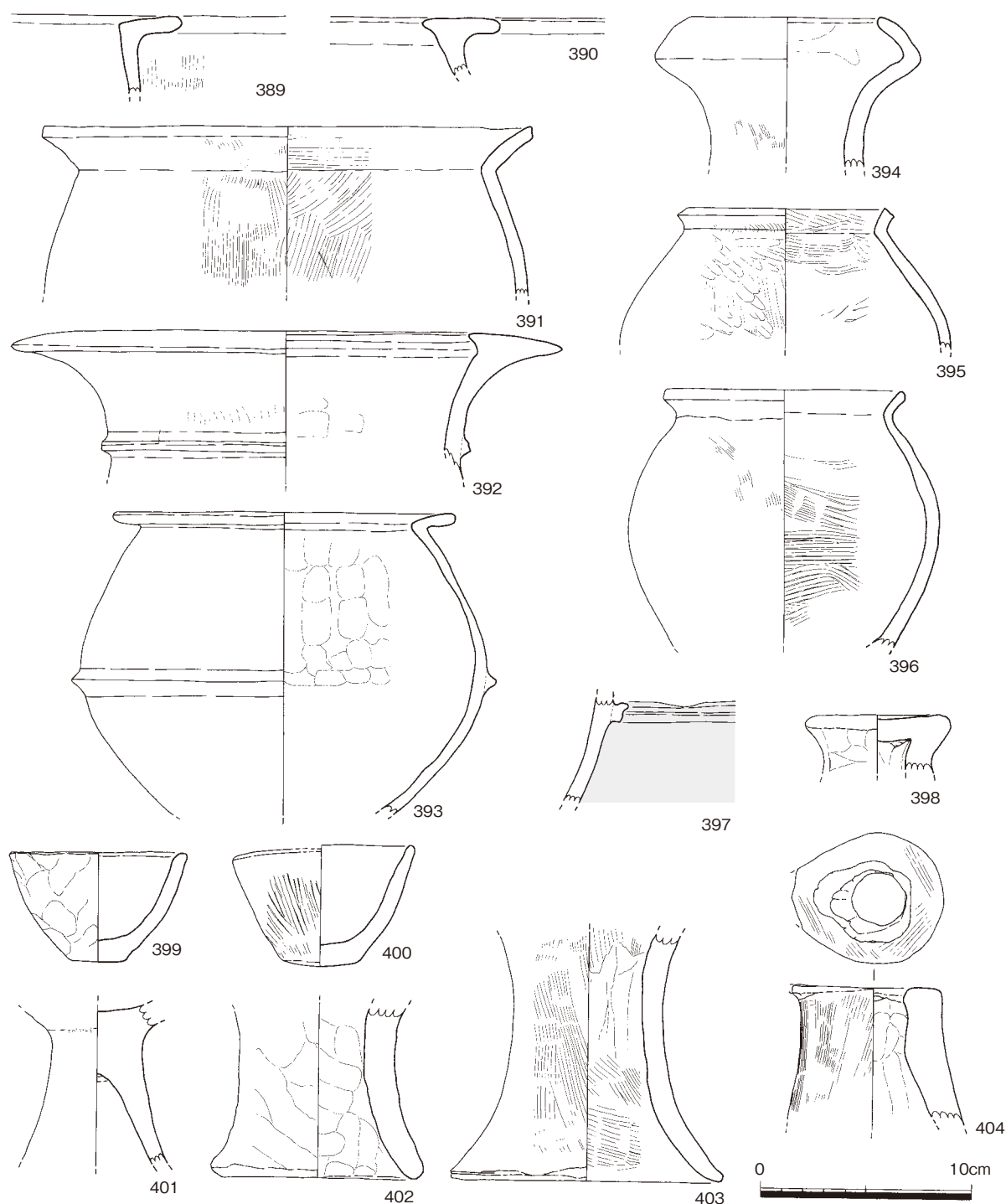


第 169 図 SD0078・0079 土層断面実測図 (1/60)

複合口縁壺とした。内面には指頭のような凹みが複数見られる。386は弥生時代後期の壺胴部である。外面は縦・斜め方向のハケメを施したあとに、低い台形状突帯を貼り付けている。内面には斜め方向のハケメが明瞭に残る。387は器台で、復元口径10.0cm、残存器高12.6cmを測る。外面にはタテハケが残る。388は高杯で、一部剥落しているが、内外面にヘラミガキの痕跡が認められる。

SD0078 (第165・169図) I・J-2で検出した、残存長13m、幅1.8~3.2mの溝である。深さは40~50cmで、上層は黄褐色砂、下層は黒褐色砂質土~粘質土で埋まる。断面形はゆるやかなU字形であるが、北端では立ち上がりが緩くなり、上端・下端が次第に不明瞭になる。北端はSD0073に切られている。I区SD0034・0036と同一の溝と思われる。出土遺物は非常に多く、特に上層に多く含まれている。上層は弥生時代中期から後期の土器が多いが、量は少ないものの土師器も含まれている。下層は弥生時代中期の土器が主体を占める。また、遺存状況が悪いものの、動物遺存体が多く含まれていた。

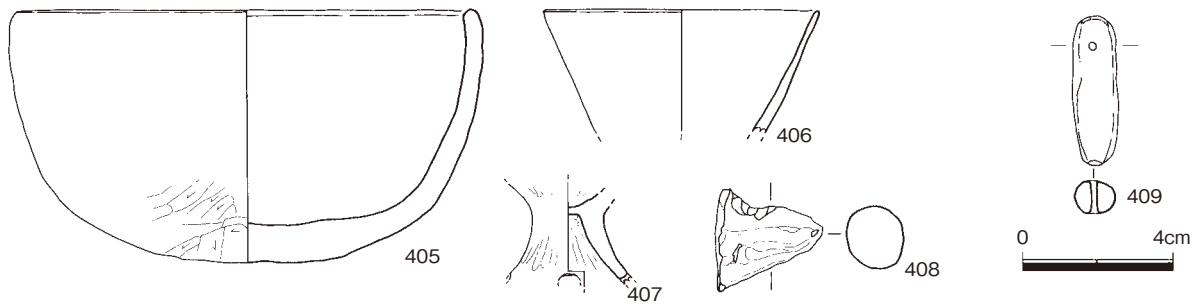
出土遺物 (第170~172図) 389~409は上層出土遺物である。389・390は弥生時代中期の甕である。389は逆L字形の口縁で、外面にはタテハケを施す。390は鋤先口縁で、口縁部内外面はヨコナデ調整である。391は弥生時代後期の甕口縁で、復元口径23.2cm、残存器高7.0cmを測る。内外面にハケメが明瞭に残る。口縁内面はヨコハケのちヨコナデを施す。392は弥生時代中期の鋤先口縁の壺で、口縁先端はやや尖り気味である。復元口径26.0cm、残存器高7.0cmを測る。頸部中位にはM字状突帯が巡り、丹が塗られている。393は球形の胴部をもつ短頸壺である。復元口径16.1cm、残存器高14.2cmを測る。胴部最大径部分には断面三角形の突帯が巡り、内面には突帯貼り付けの際の指オサエの痕跡が残る。394は袋状口縁の壺で、口縁部外面にはゆるい稜が見られる。外面はタテハケのちナデ、内面にはヨコナデを施す。395・396は短いくの字状口縁をもつ鉢形土器である。ともに丸みのある胴部を有する。395の外面にはタテハケの後にヘラミガキを施し、口縁部内面にはヨコハケが見られる。396は復元口径11.4cm、残存器高11.2cmで、胴部内面にはヨコハケが残る。397は弥生時代中期の壺胴部で、外面には断面M字突帯を貼り付け、丹塗りを施している。398は弥生時代中期の蓋のつまみ部である。399・400は小型の鉢形土器である。399は平底で、外面には指頭の痕跡が残る。復元口径8.4cm、器高5.2cm。400はやや膨らみ気味の底部で、外面にはタテハケを施す。口径8.6cm、器高5.7cm。401は高杯脚部だが、摩滅のため調整不明である。402・403は器台である。402は内外面にナデの痕跡が明瞭に残り、器壁の凹凸が著しい。底部径10.1cm。403は内外面にハケメが残る。外面はタテハケ、内面はヨコハケである。復元底部径12.8cm、残存器高11.9cmを測る。404は支脚で、口径6.2~7.1cm、下半を欠失する。上面はほぼ平坦でハケメが残る。外面



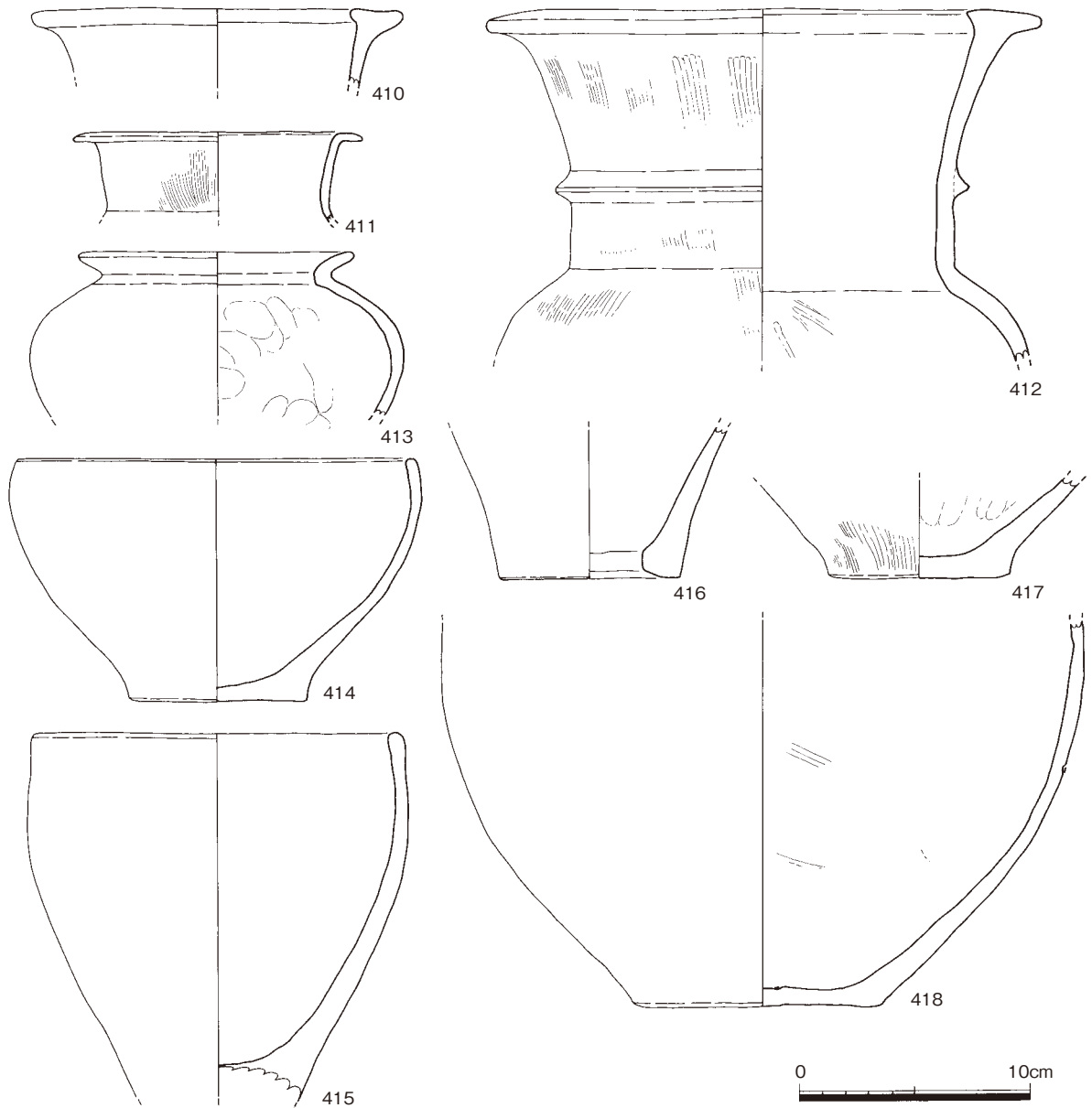
第170図 SD0078 出土土器実測図(1) (1/3)

はタテハケ、内面はナデ調整である。405は半球形の鉢形土器で、復元口径18.4cm、器高20.0cmを測る。底部外面はケズリ状の調整で、胴部内外面はナデを施す。器壁は厚く、土師質である。406は土師器壺口縁である。胎土は細かく精緻で、器壁が薄い。丁寧なナデを施す。復元口径11.0cm。407は土師器高杯で、脚部に穿孔を有する。現存で3孔認められるが、本来は4孔か。胎土は精緻で、内外面にヘラミガキを施す。408は断面円形気味の把手である。409は長さ4.0cm、幅1.2cmの土製品で径2mmの孔を有する。

410～418は下層出土土器である。410は鋤先口縁の壺で、内外面ともにナデ調整。復元口径

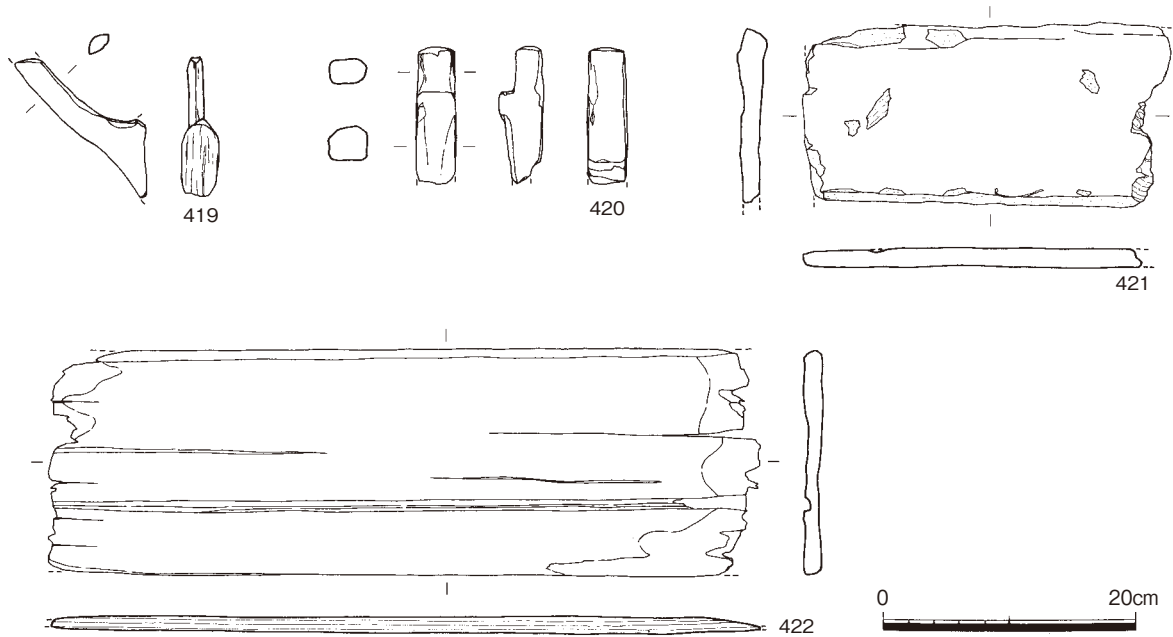


下層



第171図 SD0078 出土土器実測図(2) (409は1/2、他は1/3)

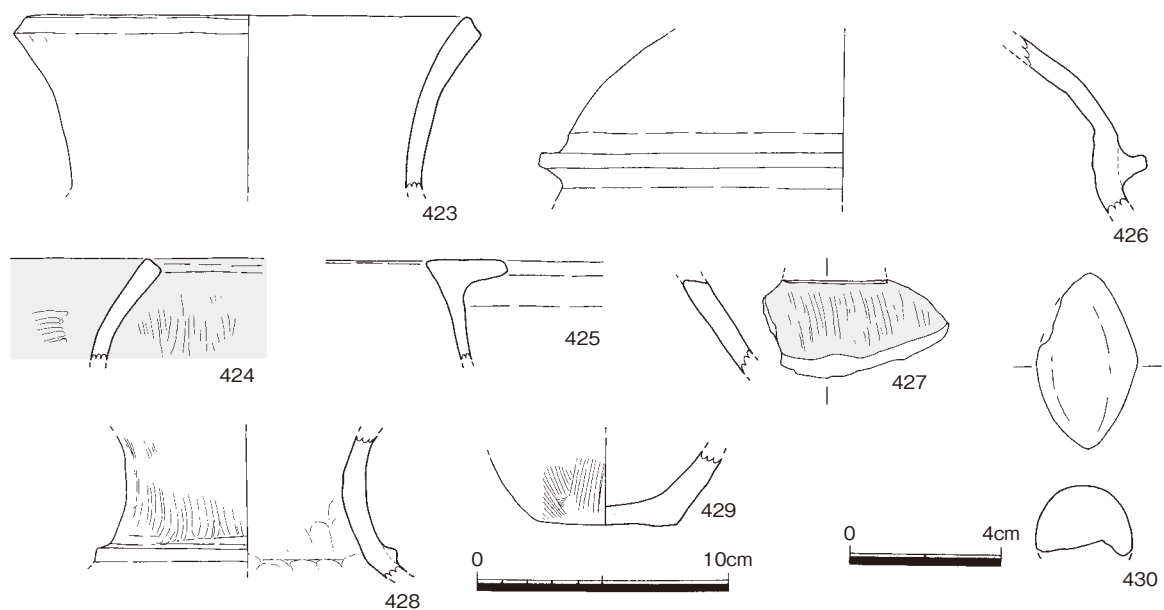
16.0cm。411は直立気味の頸部に逆L字状口縁を有する壺である。外面にはタテハケを施す。412は鋤先口縁の壺で、口径23.9cm、残存器高15.4cmを測る。頸部中位に断面三角形の突帯が巡る。全体的に器壁が摩滅しており調整不明瞭だが、突帯より上には暗文の痕跡が認められる。413は短頸壺である。扁球形の胴部にきつくすばまる頸部、短く外反する口縁部を有する。復元口径11.8cm、残



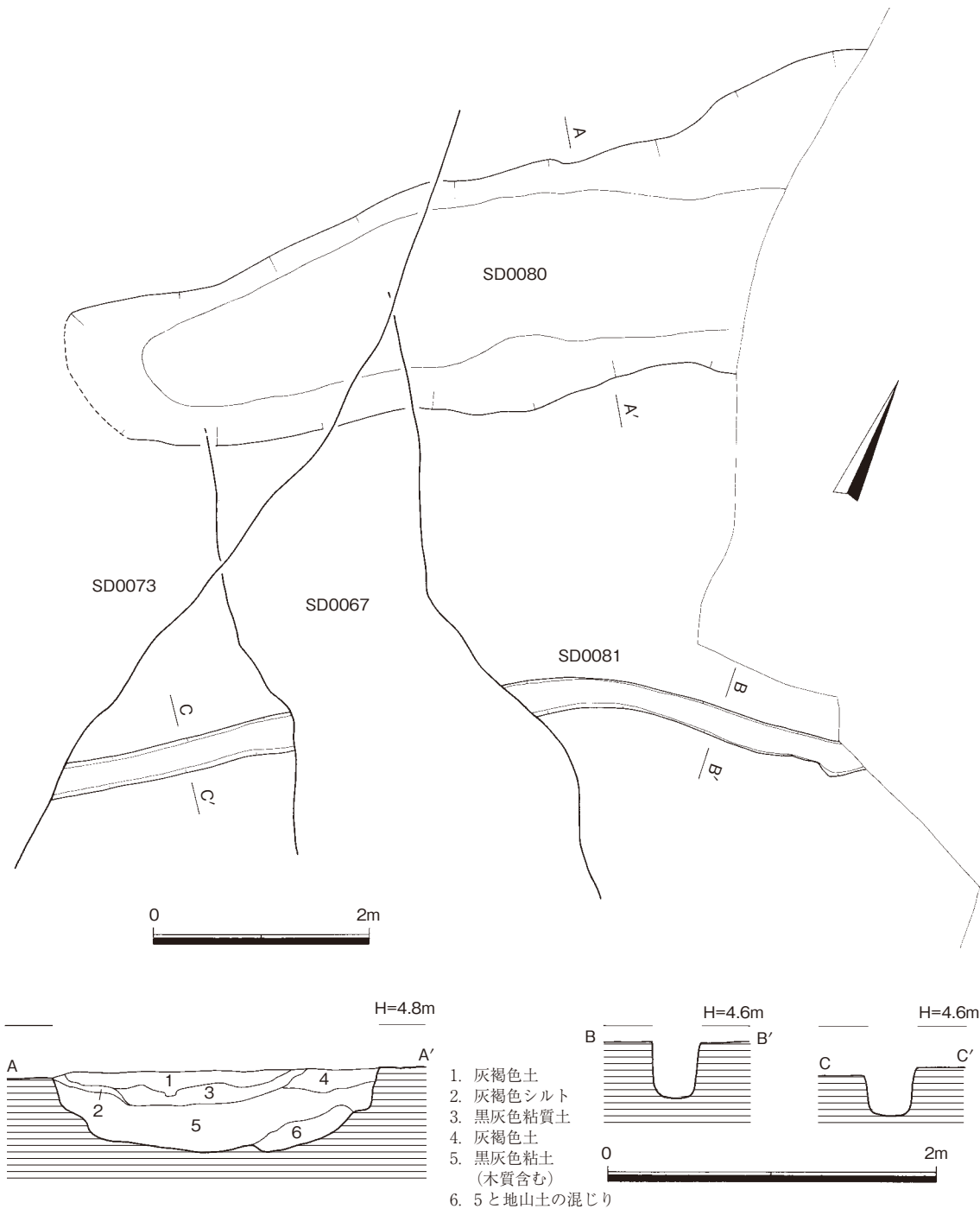
第172図 SD0078 出土木器実測図(1/6)

存器高7.1cmを測る。器面が剥落しており、外面の調整は不明である。内面には指頭痕跡が残る。414は半球形の胴部に平底の鉢である。復元口径17.1cm、器高10.4cmを測る。内外面ともにナデ調整を施す。415は414に比べて長い胴部の鉢で、復元口径16.0cm、残存器高15.9cmを測る。内外面ナデ調整である。416は弥生時代中期の甕底部であるが、底部に粘土が充填されていない。417は平底の壺底部である。418は球形に大きく膨らむ胴部で、底部は平底である。底径10.8cm、残存器高16.7cmを測る。

419～422は木製品である。419は不明木製品である。樹種はスダジイで、柁目取りである。把手のようなものであろうか。420は器長11.0cm、幅3.0cmの部材である。断面方形で、樹種はチシャノキ属である。鉤取付具か。421は板材で、器長29.5cm、幅15.0cm、厚さ1.5～2.0cmである。ス



第173図 SD0079 出土土器実測図(430は1/2、他は1/3)

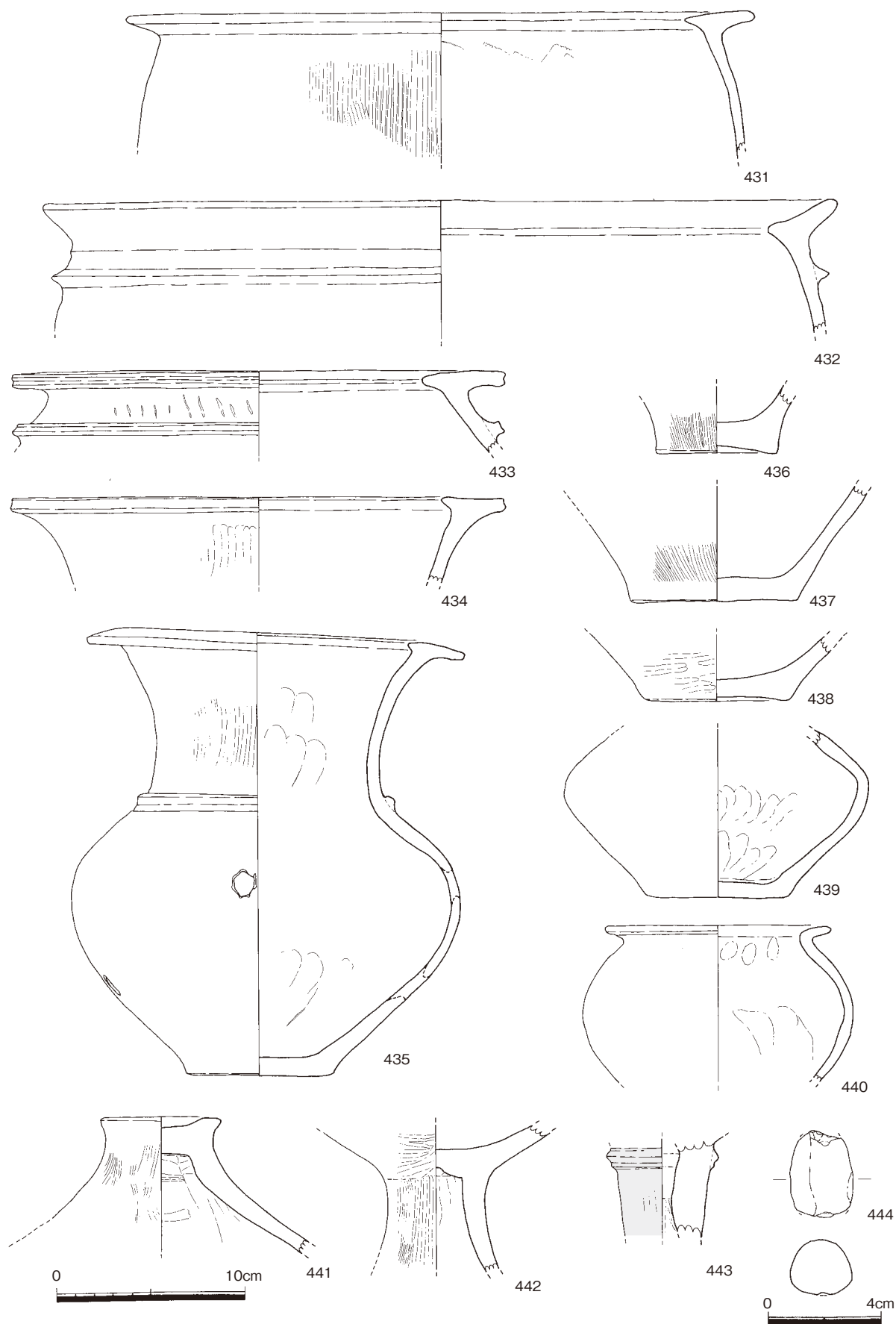


第 174 図 SD0080・0081 実測図 (1/40、1/60)

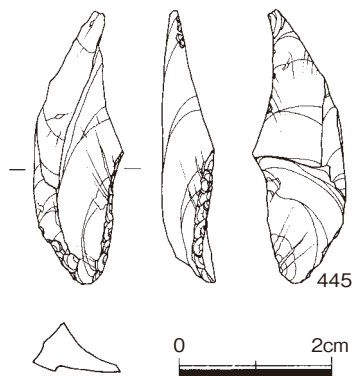
ギ材で、柁目取りである。422 も板状木製品で、器長 56.0cm、幅 18.0cm、最大厚 1.5cm の遺存である。樹種はスギで、柁目取りである。421 は下層、その他は上層からの出土である。

SD0079 (第 165・169 図) J-2 で検出した、調査区南端を東西に横切る溝である。I 区 SD0053 と同一の溝と思われ、SD0077 に切られる。上層は黒灰色～褐色砂、下層は黒褐色～灰色粘質土である。II 区では部分的にしか検出できなかったため、詳細は不明である。遺物の出土量は少ない。弥生時代中期後半～後期前半頃か。

出土遺物 (第 173 図) 423・424 は弥生時代中期の広口壺の口縁部である。423 は内外面ともにナデ調整で、復元口径 18.4cm。424 の外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを施す。



第175図 SD0080 出土土器実測図(444は1/2、他は1/3)



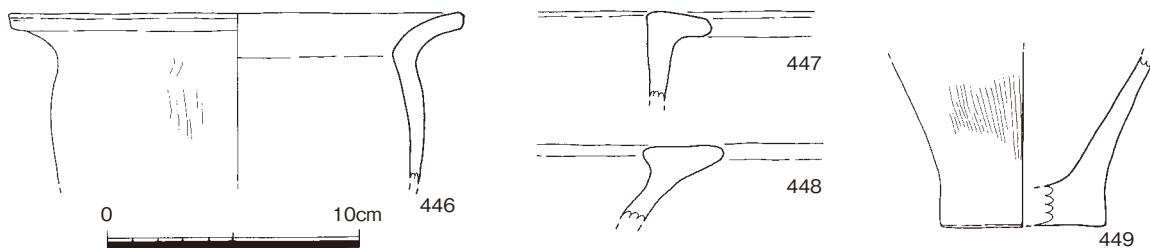
第 176 図 SD0080 出土石器
実測図 (1/1)

内外面ともに丹が塗られている。425 は弥生時代中期の鋤先口縁甕である。426 は瓢形土器で、肩部には断面コの字状の高い突帯が巡る。内外面ともにナデ調整である。427 は筒形器台の裾部、透かしの下部と想定した。外面にはヘラミガキを施し、丹が塗られている。428 は弥生時代後期の壺頸部で、断面三角形の突帯が巡る。外面はタテハケ、内面はナデ調整で指頭の痕跡が残る。429 は弥生土器底部で、外面にはタテハケを施す。底部径 5.6cm で、やや膨らみ気味の平底である。430 は紡錘形の土製投弾で、長さ 4.6cm、幅 2.6cm を測る。

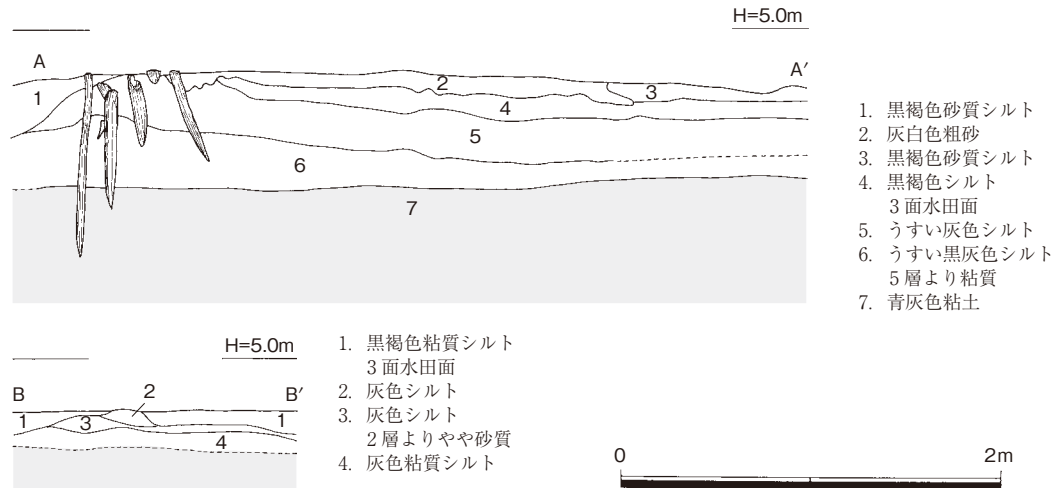
SD0080 (第 174 図) H-2・3 で検出した、調査区を横切る溝である。I 区 SD0024 と同一の溝で、幅 2.5m、深さ 50m を測る。2 面の SD0065、0067、0073 に切られるため調査区の中央付近は

全く残っておらず、調査区西壁の屈曲部 (H-1) で延長部分を確認した。埋土は灰褐色～黒灰色粘質土で、種実が大量に含まれていた。出土遺物は少ない。弥生時代中期後半の所産か。弥生土器とともに旧石器時代のナイフ形石器が一点出土した。

出土遺物 (第 175・176 図) 出土土器はいずれも弥生時代中期のものである。431 は鋤先口縁の甕で、復元口径 33.1cm、残存器高 7.9cm。外面はタテハケ調整、内面はハケの後にナデを施す。432 も甕であるが、口縁部は上に広がり、口縁下位には断面三角突帯が巡る。復元口径 42.0cm。433 は水平な鋤先口縁で、口縁下には断面コの字形の突帯が巡る。口縁と突帯の間には縦方向の沈線が見られる。復元口径 26.0cm、残存器高 4.4cm。口縁から外面には丹が塗られている。434・435 は鋤先口縁壺である。434 は復元口径 26.1cm、外面には縦方向のヘラミガキを施す。435 はほぼ完形で、口径 20.0cm、器高 23.5cm を測る。器壁が摩滅しており不明瞭だが、頸部外面には縦方向のヘラミガキ、内面には指頭によるナデの痕跡が残る。肩部には低い突帯がつき、胴部には穿孔が見られる。436・437 は甕底部である。436 はやや上げ底で、外面には細かいタテハケを施す。復元底径 6.4cm。437 は底径 8.9cm、残存器高 6.1cm で平底である。外面はタテハケ、内面はナデ調整である。438 は壺の底部で、外面には横方向のヘラミガキを施している。439 は壺胴部である。胴部は扁球形で、やや尖り気味である。摩滅のため外面調整は不明瞭で、内面には縦方向にナデつけた痕跡が見られる。440 は短頸壺で、底部を欠く。復元口径 12.0cm、残存器高 8.4cm を測る。外面調整は摩滅のため不明、内面はナデ調整である。441 は蓋である。つまみ部の径は 6.4cm。外面はタテハケ、内面はヘラ状工具によるナデか。442・443 は丹塗りの高杯である。442 は内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す。脚部内面はナデ調整である。443 は脚部上端に M 字状突帯を有する。外面調整はヘラミガキ、内面にはシボリ痕が見られる。444 は長さ 3.1cm、幅 2.2cm の歪な土製品である。投弾か。445 は旧石器時代のナイフ形石器である。器長 3.6cm、幅 1.2cm、最大厚 0.7cm、重さ 1.9g を測る。石核調整の際



第 177 図 SD0081 出土土器実測図 (1/3)



第178図 3面畦土層断面実測図(1/40)

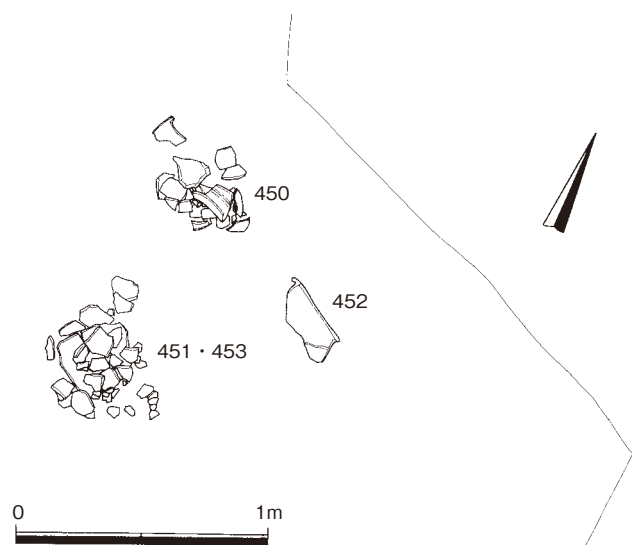
に生じた不定形の削片を素材とし、素材石核の打面調整面を左側、素材打点を潰すような形で加工を加えて右側の基部としている。西北九州(星鹿半島)産黒曜石製か。

SD0081(第174図) 調査区を東西方向に横切る細い溝である。幅30cm、深さ30~40cmを測り、断面U字形を呈する。I区SD0054と同一の溝で、SD0065、0067、0073に切られる。調査区西壁土層では確認できず、どこまで延びるのか把握できなかつた。埋土は黒灰色シルトである。II区での出土遺物は少ないが、弥生時代中期中頃の所産と思われる。

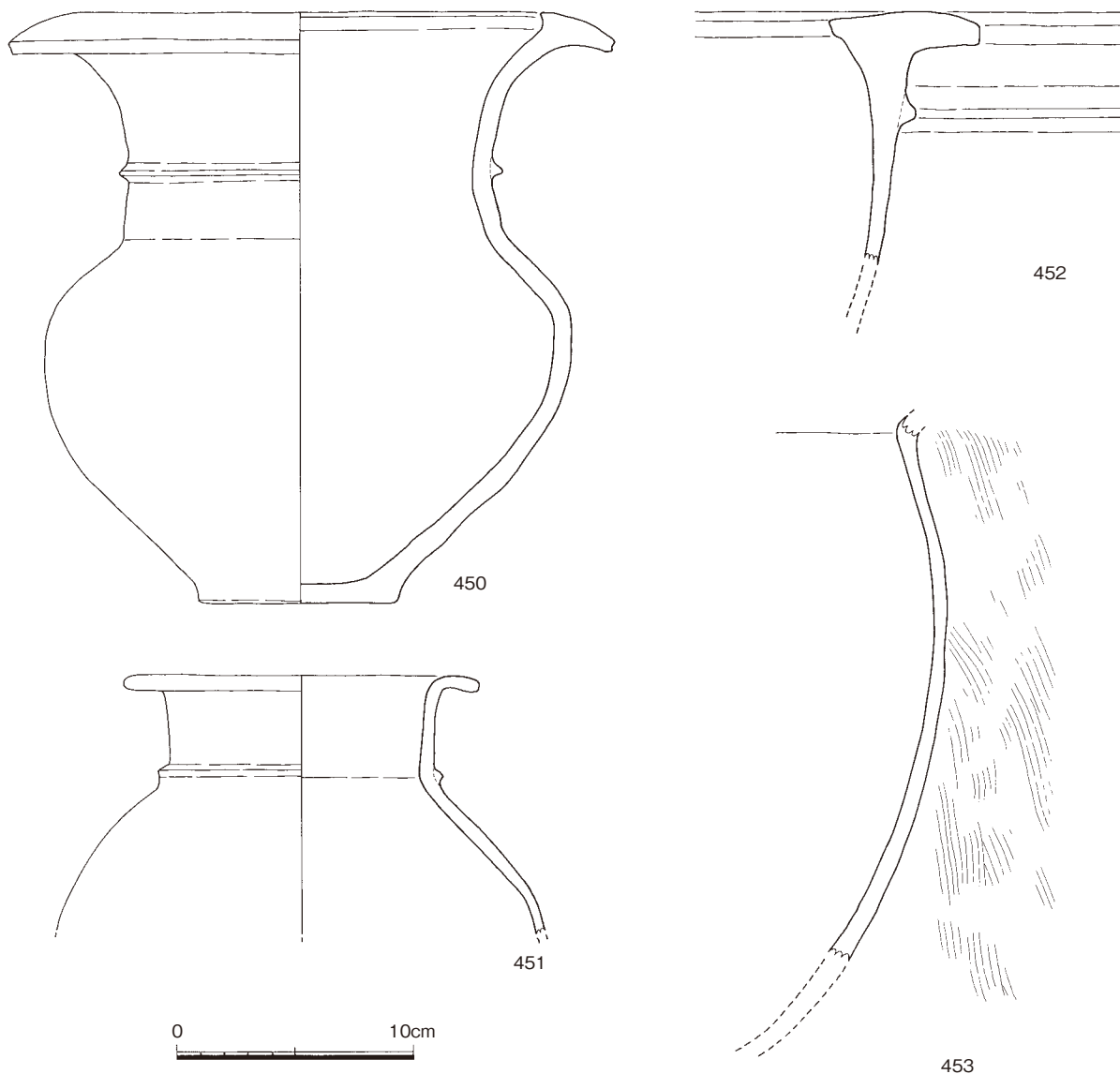
出土遺物(第177図) 446は甕で、復元口径18.0cm、残存器高6.8cmを測る。外面にはタテハケ、内面にはナデを施す。447は逆L字形口縁の甕、448は鋤先口縁壺である。447・448ともに口縁部が短く、やや古相を示す。449は甕底部である。底部は水平でやや厚い。外面にはハケメが残る。

②水田(SS)(付図3、第178図)

SD0065・0073の東側、A~Fで水田面を検出した。C-4・5、D-4では水田面の上に粗砂がかぶっており検出は容易であったが、その他の部分では明確に識別できなかつた。第108図の東壁土層や第178図に示すように、3面水田(第108図の6層、第178図の4層)上に広がる砂層とほぼ同じレベルに有機物混じりの黒色~灰色シルト層があり、この層を鍵層として検出作業を進めた。砂がかぶっていた部分では足跡や稲株痕も確認できたが、歩行の痕跡を追えるものは見つけれなかつた。D-3・4では東西方向の畦畔を検出した。これはI区より延びる畦で、西側はSD0065・0073に切られて途切れる。畦畔の北側をSS0087、南側をSS0088とした。検出できたのはこの畦だけであるため、SS0087・0088の水田規模は把握できていない。畦は灰色シルトで、実測終了後に断ち割ったが、畦構築時の状況は確認できなかつた。第178図土層では畦の高まりに杭が見られるが、これは



第179図 SX0085遺物出土状況実測図(1/30)



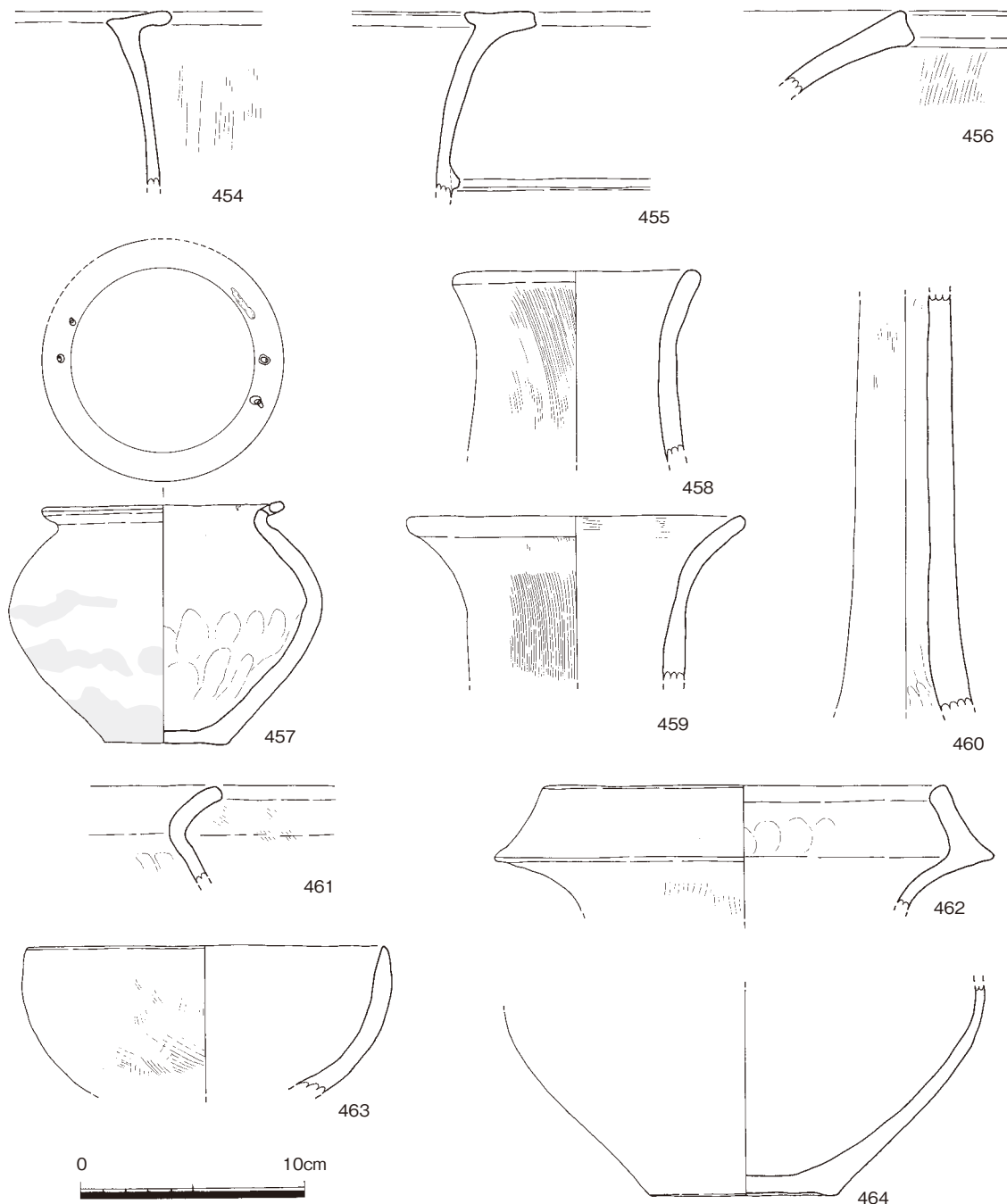
第180図 SX0085 出土土器実測図(1/3)

2面で検出したSD0065に伴うもので、3面の畦に打ち込まれたものではない。Ⅱ区の調査では水口なども検出できず、時期の決め手となる遺物も確認できなかった。Ⅰ区の調査では古墳時代前期の遺物が出土しており、これを水田の時期と考えている。古墳時代後期頃のSD0065に切られていることと矛盾しない。

③不明遺構(SX)

SX0084 J-2で検出した遺物集中地点である。SD0078とSD0079の間、東壁際で検出した。黄褐色砂に土器小片が多量に混じる。SD0077・0078・0079が切り合っている場所でどの溝に伴うものか判断できなかったため、独立した遺構番号を付した。黄褐色砂の広がりや溝の方向と一致しないように見え、全く別の遺構の可能性もある。土器はいずれも小片で図化できるものはなかったが、時期は弥生時代中期～後期のものと思われる。また、埋土中からは動物遺存体が多量に出土している。遺存状態が悪いものが多いが、鹿角や猪の牙などが出土している。

SX00085 (第179図) H-3で検出した土器集中地点である。SD0081のすぐ南側に位置する。Ⅰ区では大量の弥生土器が面的に広がって出土しているが、その土器群(SX0046)の続きをⅡ区東端で



第181図 3面出土遺物(1/3)

わずかながら確認した。標高4.6～4.8m付近で土器が見えたが、平面で掘り込みなどを把握することはできなかった。これ以上西には土器群は広がらないようである。

出土遺物(第180図) 450は弥生時代中期後半の鋤先口縁壺である。口縁を一部欠くものの、ほぼ完形で、復元口径25.4cm、器高25.0cmを測る。頸部は湾曲しながら立ち上がり、口縁端部は垂れ気味となる。頸部中位には断面三角突帯が巡る。摩滅のため全体的に調整不明瞭である。451は直線的な頸部に逆L字形口縁を有する壺で、肩には低い断面三角突帯が巡る。内外面ともにナデ調整か。口径14.9cm、残存器高11.0cmを測る。452は鋤先口縁の大型甕である。口縁部は厚く、口縁下位には断面三角突帯が巡る。内外面の調整は摩滅のため不明瞭である。453は甕の胴部で、外面には粗い

タテハケを施す。小片のため傾きに不安が残る。

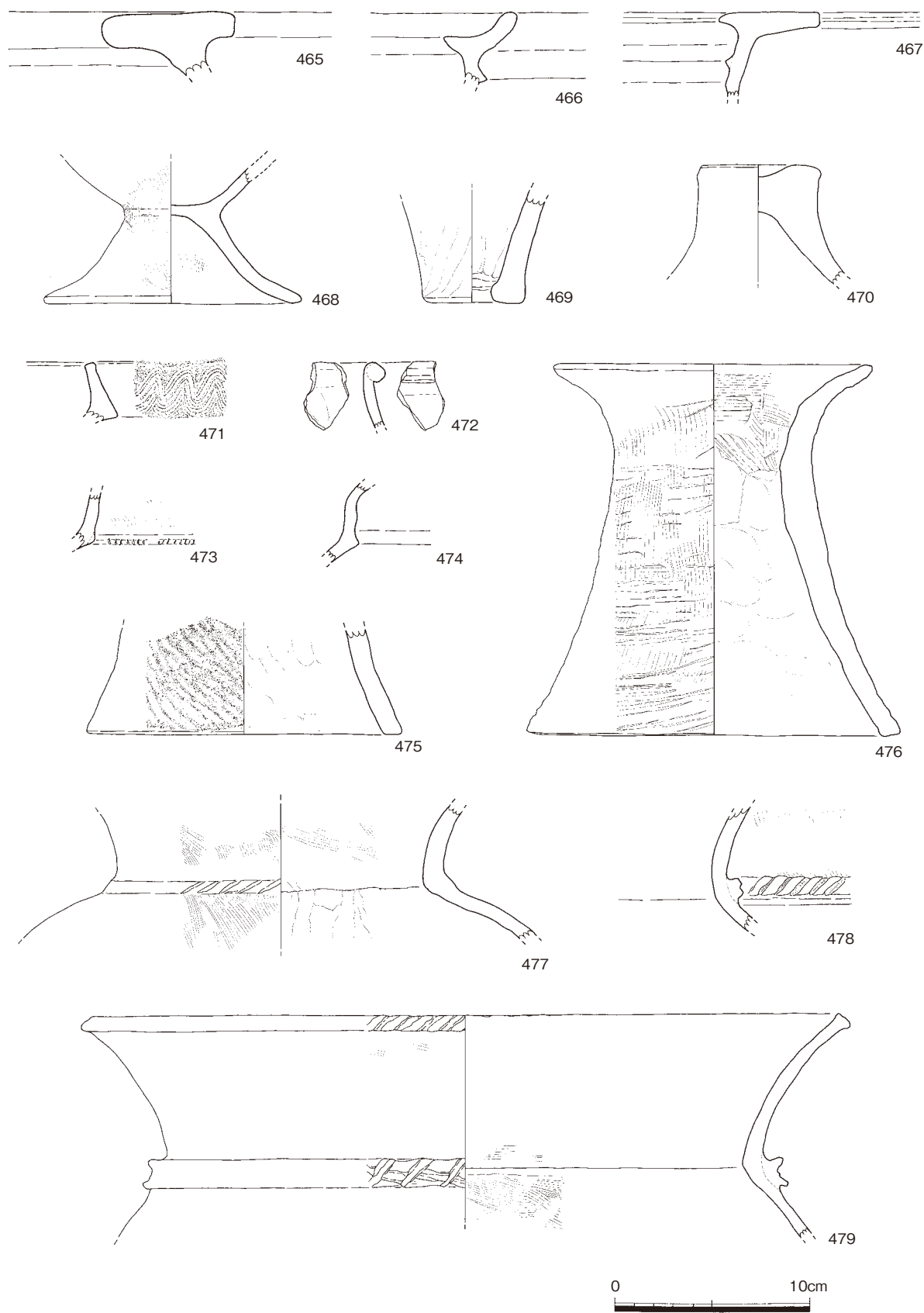
④その他の遺物(第181図)

3面下の遺物包含層掘り下げ時に出土した遺物を報告する。弥生時代中期・後期土器が主である。454は鋤先口縁の甕で、外面にはタテハケを施す。455は鋤先口縁の壺である。長い頸部に断面台形状の突帯が巡る。456は広口壺の口縁で、外面には縦方向のヘラミガキを施す。外面には丹が塗られている。457はほぼ完形の短頸壺である。口径10.8cm、器高10.7cmを測る。口縁には紐通しの孔が4箇所あり、外面には赤色顔料が塗られている。内面の胴部下半は指頭による縦方向の調整、胴部上半はヨコナデである。G-3グリッドから出土した。458・459は器台で、ともに外面には細かいタテハケを施す。459は天地逆の可能性もある。460は高杯脚部で、外面はヘラミガキ、内面にはシボリ痕が見られる。外面には赤色顔料が塗布されている。461は弥生時代後期のくの字状口縁の甕である。462は複合口縁壺で、復元口径17.8cmを測る。頸部外面はタテハケ、口縁部内外面はヨコナデである。口縁部内面には指頭の痕跡が残る。463は鉢形土器である。復元口径16.0cm、残存器高6.5cm。厚めの器壁で、胎土には2mm程度の砂粒を多く含む。外面は不定方向のハケ、内面はナデ調整である。464は壺底部である。平底で、外面には赤色顔料が一部残っている。底径8.2cm、残存器高9.3cmを測る。

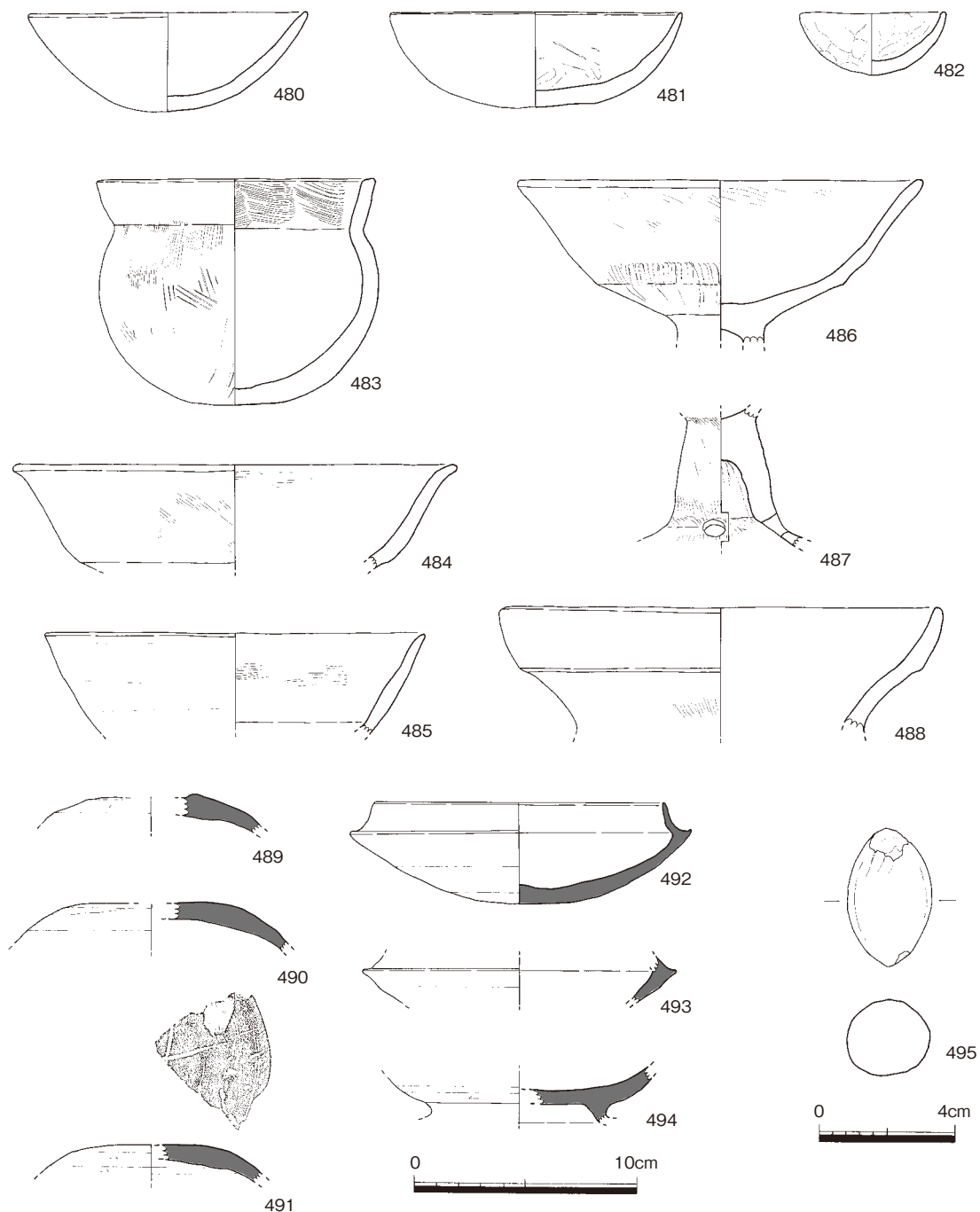
(4) その他の出土遺物(第182～184図)

出土地点や層位が不明な遺物、トレンチ出土遺物等をまとめて報告する。

465は弥生時代中期の大甕である。口縁部が内面に大きく張り出す。466も弥生時代中期の甕で、口縁部は湾曲しながら立ち上がり、内面にも張り出す。口縁下には断面三角形の突帯を貼り付けている。467も弥生時代中期の壺口縁である。平坦な鋤先口縁で、口縁部内面に断面三角突帯を有する。I-2グリッドでトレンチ掘削時に出土した。468は弥生時代後期の脚付鉢である。裾部径13.0cm、残存器高7.4cm。外面はタテハケのちナデ、胴部内面はナデ、脚部内面はタテハケを施す。469は弥生土器底部である。平底で、中央には径2cmの穿孔を有する。I-2からの出土。470は蓋で、頂部は凹む。471は壺口縁部で、外面に波状文を施す。472は朝鮮系無文土器の口縁部片である。口縁端部に断面円形の粘土帯を貼り付けている。口縁端部内外面はヨコナデ、内面には指オサエの痕跡が見られる。内外面ともに灰白色で、胎土は精緻である。残存高3.5cm。J-2グリッド掘り下げ中に出土したが、層位は不明である。473は鉢の胴部か。湾曲する胴部下半に低い三角突帯を貼り付け、小さく浅い刻み目を密に施している。外面にはタテハケが見られる。474は高杯の杯部か。屈曲部に段を有し、湾曲しながら立ち上がり、口縁は外へひらく。475・476は器台である。475は外面には斜め方向のタタキ、内面には指オサエの痕跡が残る。復元底径16.0cm。476の外面は粗いタテハケの後に横方向のタタキを施す。口縁部内面は横方向のハケ、裾部内面はナデを施す。復元口径16.2cm、器高19.1cm。477～479は弥生時代終末期の甕である。いずれも頸部に刻みを施した突帯を持つ。477は復元頸部径17.6cm。突帯は低く、外面及び頸部内面にはハケメが残る。478は台形状の突帯に斜めの刻み目を施す。479は復元口径39.4cm、残存器高11.2cmで、台形状の高い突帯に斜格子状の刻みを施す。口縁は頸部から外反して長く伸び、端部にも刻みを有する。480・481は鉢形土器である。480は復元口径12.6cm、器高4.4cmの椀形で、器壁はやや薄い。内外面ともにナデ調整である。481は復元口径13.0cm、器高4.2cmで、やや平底気味の底部である。底部は雑な成形である。内面にはヘラ調整の痕跡が残る。器壁はやや厚めである。482は手捏ね土器である。口径6.6cm、器高2.8cmで、ほぼ完形である。内外面には指頭の痕跡が明瞭に残る。483は土師質の壺で、口径12.5cm、器

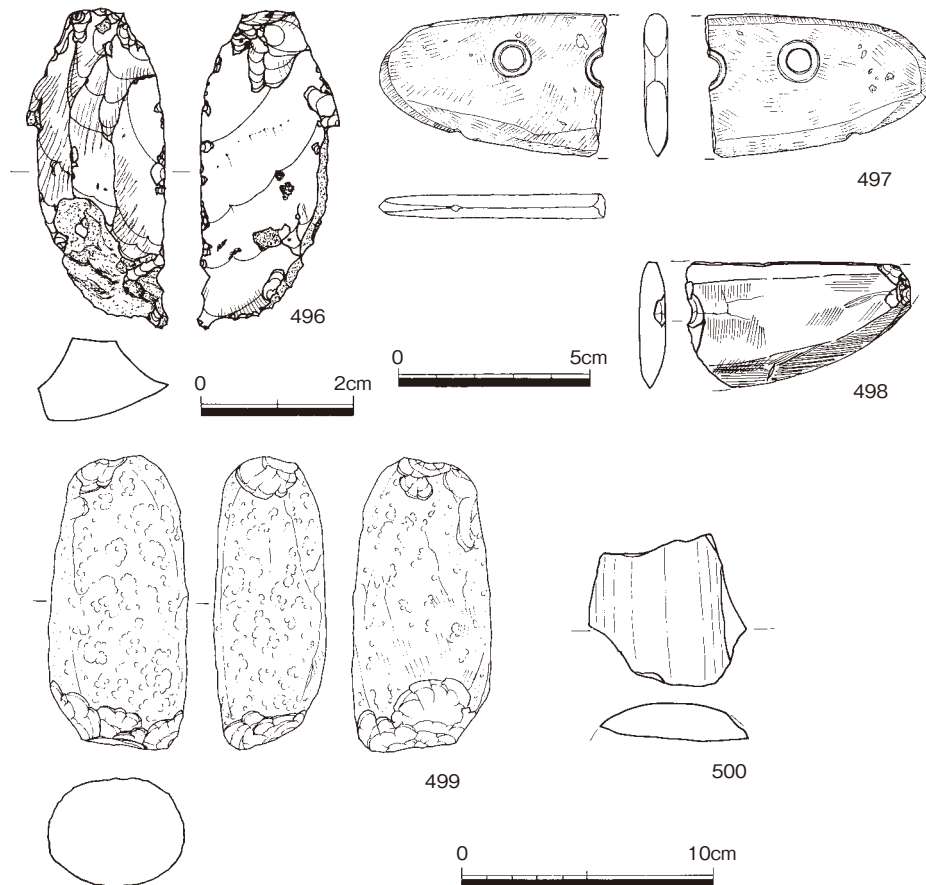


第182図 その他の出土土器実測図(1) (1/3)



第183図 その他の出土土器実測図(2) (495は1/2、他は1/3)

高10.0cmを測る。外面には細かいタテハケと粗いハケメが見られる。口縁部内面はヨコハケを施し、胴部内面はナデ調整である。器壁はやや厚めである。484～486は土師器高杯の杯部である。いずれもI-2グリッドのトレンチ掘削時出土した。484は復元口径20.0cmで、屈曲部にはゆるい稜線が見られる。屈曲部から直線的に広がり、口縁端部はわずかに外反する。外面は斜め方向のハケのちナデ、内面はヨコハケのちナデを施す。485はやや内湾する口縁で、復元口径17.0cmを測る。口縁端部は丸くおさめる。外面はナデ、内面はヨコハケのちナデを施す。486は口径18.2cm、残存器高7.3cmを測る。杯部は完形である。屈曲部には段があり、口縁は外傾しながら直線的に伸びる。口縁端部は丸くおさめる。屈曲部にはタテハケが残り、口縁部内外面は斜め方向のハケの後にヨコナデを



第184図 その他の出土石器実測図（496は1/1、497・498は1/2、499・500は1/3）

施す。487は土師器高杯脚部である。やや膨らみ気味の筒部で、裾へと広がる屈曲部には穿孔を有する。摩滅しているが、外面にはわずかにハケメが残る。488は土師質の壺口縁部である。復元口径19.8cm、残存器高5.7cm。頸部にはタテハケが残り、口縁部内外面にはヨコナデを施す。口縁下部には段を有する。I-2グリッドのトレンチより出土した。489～491は須恵器杯蓋である。いずれも頂部付近はヘラケズリを施す。491は外面に×印状のヘラ記号を有する。492・493は須恵器杯身である。492は口径12.9cm、器高4.5cmで、約1/2の遺存である。返りはやや高い。外面には淡黄色の付着物が見られる。G-2・3のトレンチ掘削時に出土した。494は須恵器高台付杯である。高台端部は欠損しているが、やや高めの高台である。須恵器は調査区西壁際に設定した排水溝掘削時の出土が多い。495は紡錘形の土製投弾である。長さ6.2cm、幅3.8cm。排水溝掘削時に出土した。

496はE-2・3付近で出土した黒曜石製の使用痕剥片である。器長4.2cm、幅1.9cm、最大厚1.1cm、重さ7.01gを測る。右側縁に使用による微細剥離が見られる。497はSD0077・0078付近から出土した石包丁で、約1/3を欠失している。安山岩製で、器長3.8cm、現存幅6.0cm、最大厚0.5cm、重さ23.5gを測る。498は杭断ち割り時に出土した、凝灰岩製の石包丁である。1/2弱の遺存で、現存長3.3cm、幅5.9cm、最大厚0.7cm、重さ18.9gを測る。499は地山である青灰色粘土面への掘り下げ中に出土した石斧である。全体に敲打痕が見られ、刃部を欠損している。一部に研磨した面が残っており、磨製石斧を転用したものと思われる。現存長11.6cm、幅5.5cm、最大厚4.5cm、重さ452.9gで、断面扁球形を呈する。500は玄武岩製太型蛤刃石斧の破片である。現存長5.9cm、現存幅6.3cm、最大厚1.8cm、重さ66.5gである。I-2グリッドから出土した。

3) 小結

Ⅱ区の調査では、複数の時代の溝や流路、杭列、水田が検出された。水が湧きやすい低湿地であるため、木製品や自然遺物が良好に残っていた。調査は3面で実施し、検出した遺構は弥生時代中期～古代のものである。

まず遺構の変遷についてまとめる。今回の調査では旧石器も出土しているが、遺構として最も古いものは弥生時代中期のSD0080・0081、土器群SX0085である。いずれもⅠ区より続く遺構である。SD0080・0081はⅡ区中央でSD0065に切られているが、SD0080は調査区西壁で延長部分を確認できたことから、さらに西へ延びることが判明している。続いて弥生時代後期にはSD0077・0078・0079が見られるが、Ⅱ区で検出したのは一部であるため、詳細不明である。これらは調査区南端に密集している。弥生時代終末期～古墳時代前期頃には、SD0066・0067があり、部材等の貯木遺構が確認された。また、3面北半ではⅠ区より続く水田(SS0087・0088)と畦が見られる。古墳時代中期頃にはSD0073・0091が流れ、古墳時代後期～古代には洪水砂で埋まったSD0065がある。SD0065の岸には護岸施設や土堤(SX0071・0075)が築かれ、その西側は水田面(SS0086)となる。古代以降にはほぼ全面が埋没して黒褐色シルトで覆われ、水田として利用される。

次にⅡ区の特徴的な遺構・遺物について列記し、まとめとしたい。まず特筆されるのは、SD0065の両岸で検出された護岸施設や土堤である。SD0065東岸は直線的な部分には杭は無く、北端のカーブ部分にのみ密集して杭を打ち込んでいる。これは水流による壁面の浸食を防ぐためと思われる。一方、西岸は3列の杭が約40mにわたって打ち込まれている。これは土堤の幅を広げて補強したものであろうか。また、黒色土を埋めて土堤を付設した部分(SX0071・0075)も見られる。土堤の中には樹皮のような植物質のものが敷き込まれており、下月隈C遺跡第7次・第8次調査でも同様の例が見られる。土堤の構築方法について細かく記録をとりたかったが、崩落のため不十分な内容になったことが悔やまれる。

SD0065出土遺物の中には、大量の弥生土器・土師器等に混じって鐸形土製品が2点含まれていた。鐸形土製品はⅠ区とⅢ区からも出土しており、この第4次調査により福岡市内での出土例が一気に増加した。また、久保園遺跡第3次調査や、周囲の席田大谷遺跡、下月隈C遺跡からも出土しており、月隈丘陵付近に分布の集中が見られることは注目される。

また、2面のSD0065・0073、3面のSD0080からはナイフ形石器や剥片などの旧石器が数点出土している。いずれも弥生・古墳時代の溝や流路からの出土で、上流や丘陵部から流されてきたものと思われる。

SD0067は弥生時代終末期～古墳時代前期頃の貯木遺構と思われ、長さ3m以上の部材や木製品が出土している。部材の中には端部を加工したものもあることから、解体した住居の梁などを仮置きしていたものであろうか。

久保園遺跡の集落の中心は空港東側の丘陵部にあり、南東のⅢ区・Ⅳ区・Ⅴ区では掘立柱建物や土坑が検出され、居住域として利用されていたことが分かる。今回調査を実施したⅡ区ではそれらの生活遺構は見られず、様相が大きく異なる。今回の調査では集落縁辺部の低地利用の状況を窺うことができた。

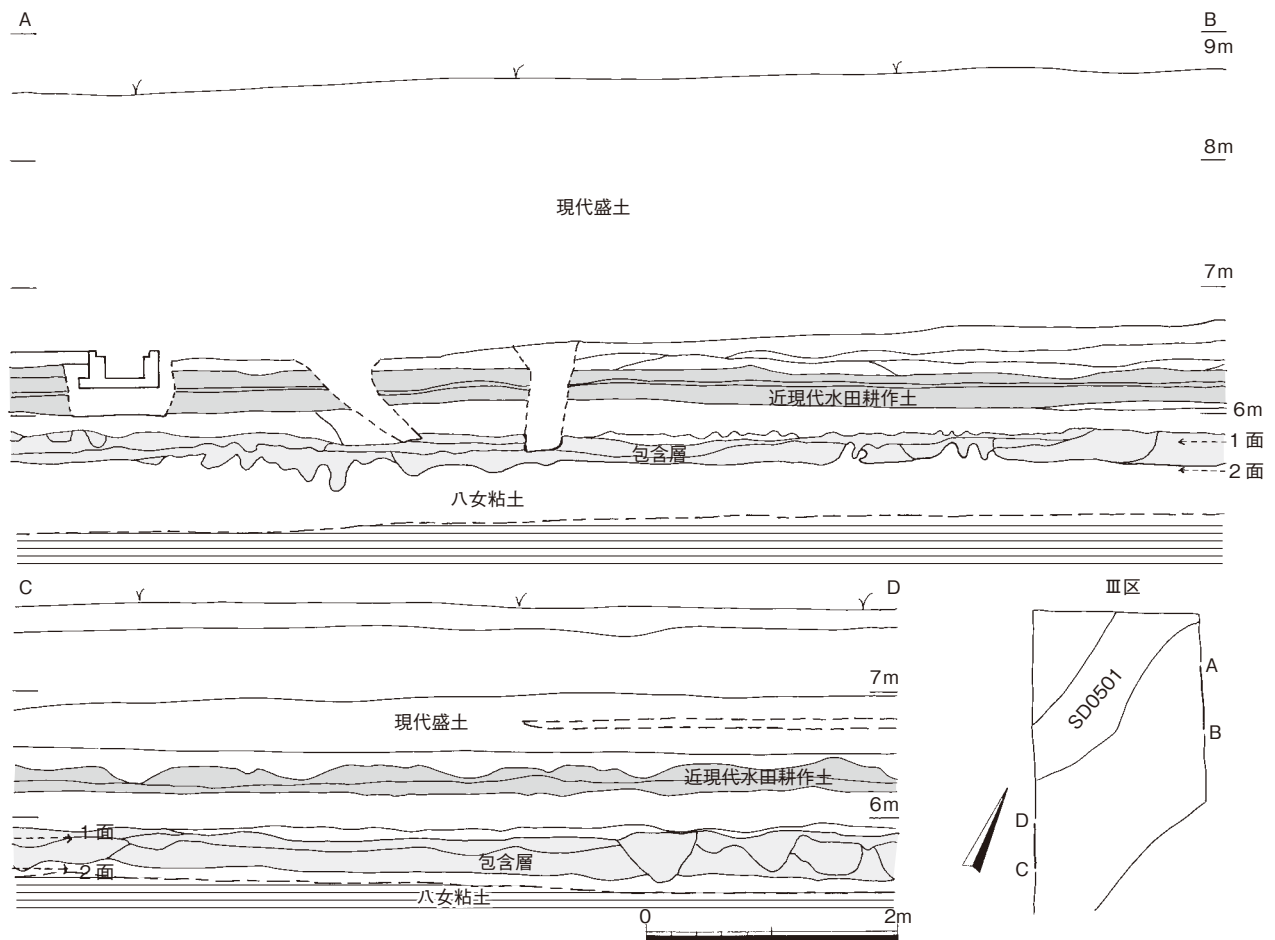
4. Ⅲ区の調査

1) 概要

調査時に使用していたC区大半の呼称を、本報告ではⅢ区とする。調査対象地の東南部分に当たる。旧B・C区をの間にヒューム管の配水管が通っており、その保護のために残したベルトを北の区境とし、北西部の旧河川SD0501、西側を旧周回道路による未着手部分のV区(旧D区)を除く範囲である。

空港の東脇を走る主要地方道福岡空港線を挟んだ東側には月隈丘陵があり、そこから派生した小丘陵の西側末端部に当たる。V区の遺構面とは一連のものである。SD0501の北西側が低地となり、水田あるいはそれに伴う溝などの遺構であるのに比べ、Ⅲ・Ⅳ区では水田は見られず掘立柱建物群が顕著であり、水田耕作を行うための作業または生活スペース的性格の場であろう。

層序は次の通りである。基盤は八女粘土で標高5.6mの面でほぼ水平を保ち、その上面に多量の土器を含む黒褐色粘質土が20cmの厚さで堆積する。包含層の水平な堆積状況と、包含層中の遺物の混在の状況から、弥生最終末期前後に造成整地がなされたものと思われる。遺構検出面は包含層中とその最下面で確認でき、それぞれ1面、2面として調査対象とした。さらにこの上面には標高6.2～6.4mのレベルに近現代水田面があり、空港供用前には水田が広がっていたことがわかる。この水田面の直上には、米軍基地に由来すると思われるコンクリート基礎や側溝、焦土層等が検出されているが、その後の空港整備による造成で、西側で標高7.7m、東壁で8.7mの高さまで埋められている。



第 185 図 Ⅲ区土層図および調査面の設定 (1/60)

2) 遺構と遺物

1 面の調査 (第 186 図、図版 75・78)

黒褐色粘質土遺物包含層直上までの表土除去後、精査を開始した、ほぼこの段階から包含層掘り下げの段階で検出した遺構群である。ほぼ条里の線に沿って、近現代水田を画し水路として機能したと思われる小さな護岸杭が打ち込まれた、幅 3 m の溝に一部遺構は壊されているものの、多くの遺構が検出されている。北西側を大きな古代の旧河川 SD0501 が在り、その東南部平坦面に遺構は広がる。この面で特徴的な遺構は浅く幅の狭い環状の溝が切り合っていることであり、それは V 区にまで広がっている。中には同心円で二重に重なっている例も見られる。ピット群も多く検出され、数棟の掘立柱建物も確認できる。また SD0501 への昇降通路と思われる遺構も見られる。

2 面の調査 (第 187 図、図版 76・77)

黒褐色粘質土遺物包含層除去後、ほぼ八女粘土上面で検出した遺構面である。おびただしいピットが検出され、1 間×2 間、1 間×1 間の小規模な掘立柱建物が相当数復元できる。これらの掘立柱建物の柱穴には柱そのものや礎板が遺存するものが相当数見られる。

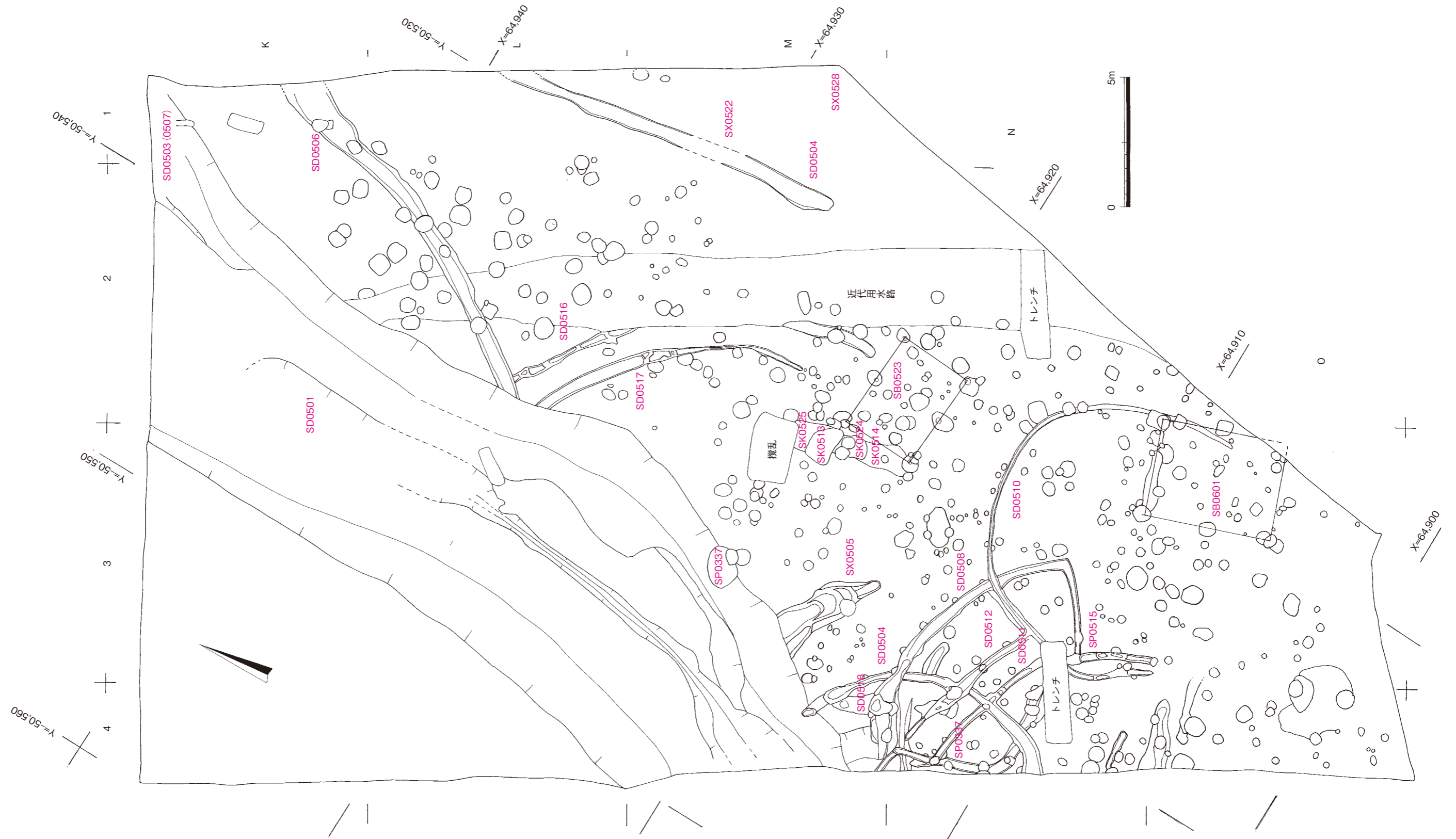
以下それぞれの遺構の性格によってグルーピングし、各遺構とその出土遺物について述べる。

①旧河川

SD0501 (第 186・188・189 図、図版 77)

調査区西北側を区切る古代の人工河川である。V 区側に伸びるが、II 区側では検出されておらず、北東側では II、III 区境の埋設管保全土手付近で調査区外に伸びていくものと思われる。川の上端の最大幅は 9.8 m、最もせまい部分で 7.5 m を計る。断面は底が平らで壁がやや立ち上がる浅いボウル状の形状をもち、比高差は 0.7 m 程である。底面の中央部に幅 20～30 cm、深さ約 10 cm 程の小さな水路が掘り込まれている。土層 (第 188 図、図版 79 (5)) の観察によると、この小さな水路は、河川に土砂がある程度堆積した段階で、再度その中央部付近に掘り込まれたものである。水流の方向は北東から南西方向である。環状溝や掘立柱建物を切っており、それらよりも新しい。しかしながら、環状溝と同じ 1 面でこの川への昇降通路と思われる SX0505 が取り付いており、また北東端部では古式土師器等がまとまって流れ込むような遺構 SX0503・0507 がある。状況からすると環状溝が営まれた後、古墳時代初頭に人工的な水路として掘り込まれ、さらに平安時代初めに再度手を加えられ、拡幅整備されたものと思われる。

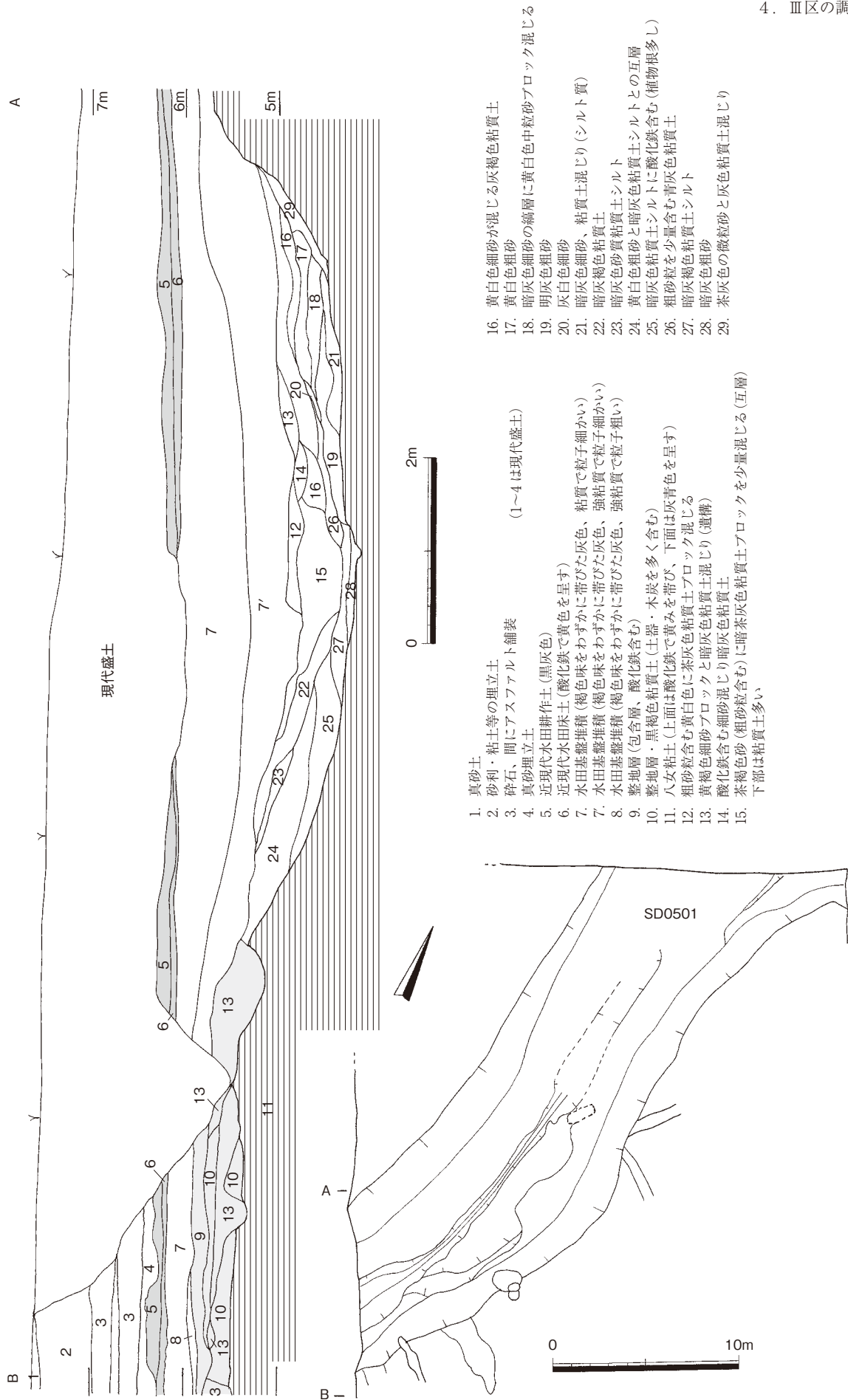
この河川北東部の底面付近に流れ込んだ礫が集中しており、この中に遺物がまとまって出土している。第 189 図に示した遺物について述べる。1～5 は土師器の坏である。ほぼ同形同大でいずれもヘラ切り離しである。3 は口縁部にタール、煤の付着があり灯明皿として使用されたものである。5 は体部外面に「金」の墨書があり、また口縁の一部を打ち欠き、その部分に煤が付着している。灯明皿として使用されたものである。これらの土師器の坏はほぼ 9 世紀前半代、に位置付けられ、河川の拡幅整備の時期を示すものである。6 は滑石製石鍋の破片である。7 は輝緑凝灰岩製の石包丁である。8 は粒の粗い砂岩礫を用いた凹石で、上下両面に叩打による凹みを持つ。側縁全周にも叩打痕があり、叩石としても使用されていたものである。9 は滑石扁平礫の 4 側面に抉りを加えたもので石錘であろう。10 は玄武岩製の太形蛤刃石斧であるが刃部を欠く。全体にローリングによる摩耗があるが、上端部に比較的新しい破面があり、古代の段階で叩打具として再利用されたものであろう。11～13 は金属器である。11 は雁股の鉄鎌である。精緻で遺存状態も良好である。全長 19 cm、最大幅 5.5 cm の大型で、先端部は内側に鋭い刃部を作り出している。茎は四角柱に整形されている。12 は鉄鎌で



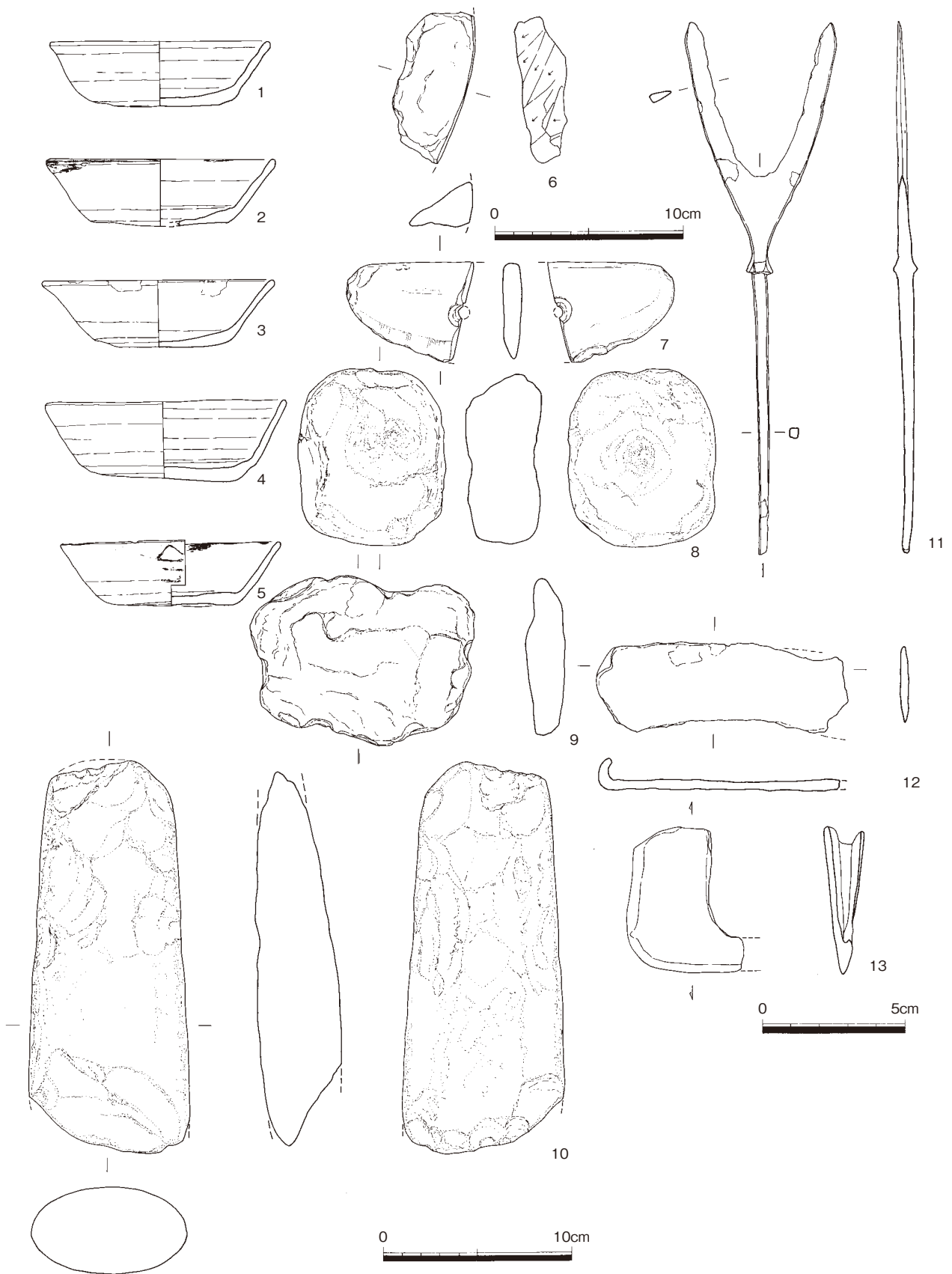
第186図 Ⅲ区1面全体図(1/150)



第 187 图 Ⅲ区 2 面全体图 (1/150)



第188図 SD0501土層断面図(1/60)および位置図(1/300)



第189図 SD0501 出土遺物実測図 (7・11~13は1/2、1/3)

ある。右端が欠損している。左端に折り返しがあり、下端部に刃部が作り出されている。13は銅製鋤先である。縦半分に割れている。刃部は使用による摩耗が顕著である。

この礫集中部分のさらに北東隅には、SX0507からの流れ込みの弥生時代後期を中心とした土器堆積(SX0502)があるが、小破片であり図示していない。

②小溝

SD0504 (第186図、図版79(1))

1面、L5グリッドからM4にわたって約13mが確認された浅い溝である。直線的に伸びるが削平により遺存状態は悪く、遺物も土器小片が少量出土したにすぎない。

SD0506 (第190・191図)

1面、K5グリッドからL4にわたって約15mが確認された。西南端はSD0501に接し、東北端部は調査区外に伸びる。幅0.5～0.8m、削平により遺存状態は悪く深さ10cm程の浅い溝である。やや湾曲し直線に近くに伸びる。周辺ピット群を切っており、掘立柱建物よりも新しい。出土遺物は古式土師器、弥生後期の土器破片があるが、須恵器片も混じっており、古墳時代に掘り込まれたもので、古段階のSD0501に流下する溝であったと思われる。第190図に示した14は銅製鋤先の破片である。縦半分に割れている。刃部は使用による摩耗が顕著である。

③環状小溝

III区1面の遺構群の中でもきわめて特徴的なもので、V区側にも広がりを見せる。

SD0516、0517 (第192図)

III区中央部L～M4グリッドに約14mが確認された。溝幅はSD0516が10～15cm程度、SD0517が最大幅50cmを持つが、いずれも浅い。SD0516は近現代用水路によって途中を削平されているが、両遺構は幅約1mの間隔を保ち、同心円の平行関係が看取できる。南半部で検出されている環状小溝群の径よりも遙かに大きい。SD0516の北側はSD0506によって切られ、SD0517はSD0501に切られている。南端は造成による削平で自然消滅している。遺物は少量であるが古式土師器、弥生後期の土器破片がある。

SD0508、0509、0510、0511、0512、0515、0518、0519 (第190・193・194図、図版78)

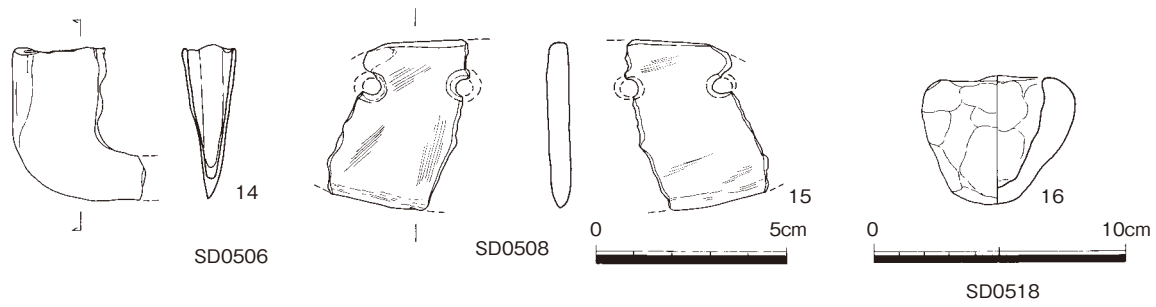
III区南半部N2～4からM2グリッドにかけてこれらの環状小溝が集中して確認された。

SD0510 (第193・194図、図版78(1))

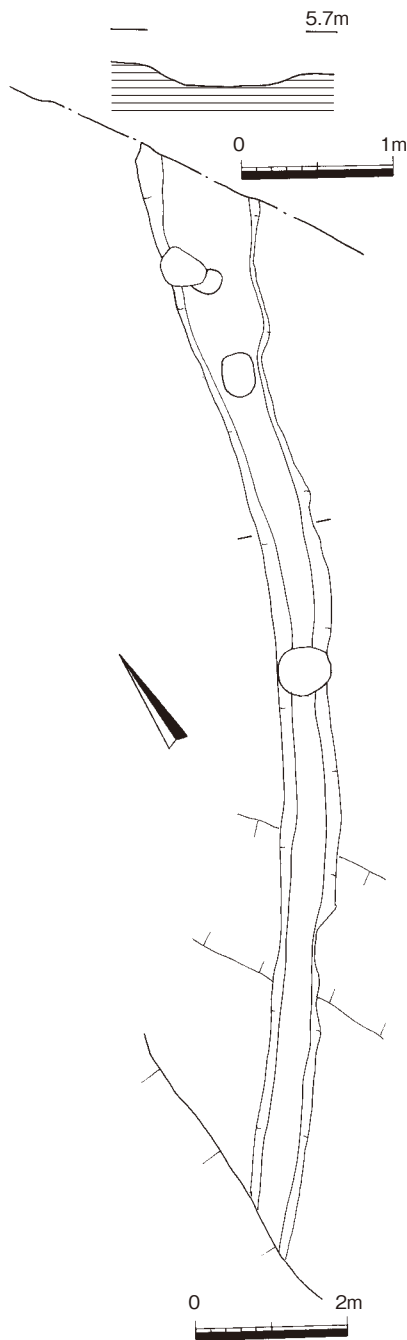
SD0510はこれらの中でも比較的全体形状が推定できるものであろう。南側の約1/3程度は造成により削平されていると思われ、本来は径10.5m程のほぼ正円形をなしていたものと思われる。溝幅は15cm、最大でも35cmと狭く、深さも10cm程度と浅い。通常まとまった形での遺物の出土は見られないが、SD0510では(第194図)に示すように3個体の古式土師器が安定した状況で出土している。原位置を保っているのであれば、祭祀に関わる可能性も考えられる。いずれも器壁は荒れており、二次被熱を受けたものかもしれない。

SD0508 (第190・193図)

SD0510とほぼ同規模の径を持つが、東南端で鋭角に西に曲がる。北西端は地形の傾斜により自然消滅している。最大幅約40cmほどであるが、深さは10cm程度と浅い。第190図15に図示した遺物は輝緑凝灰岩製の石包丁で両端を欠く。このほか少量の古式土師器、弥生後期の土器破片等がある。



第190図 SD0506、0508、0518 出土遺物実測図 (1/2、1/3)



第191図 SD0506 実測図 (1/100、断面 1/50)

SD0509 (第193図)

前二者とほぼ同規模の径を持つ。南端西に曲がV区側に伸び、北西端はSD0501に切られて消滅している。最大幅約60cmほどであるが、北側では地形の傾斜により15cm程に狭くなる。深さは最深で18cm程度である。少量の古式土師器、弥生後期の土器小片がある。

SD0511、0512、0515 (第193図)

両者は約0.9mの間隔を持って、ほぼ同心円状に並行しているが、SD0512の南端はSD0510につながり収束しており、SD0511は途中試掘トレンチによって寸断されているものの、SD0510を越しSD0515とつながっているものと思われる。両者ともに30cm程の幅を持ち、深さは10~15cm程度である。遺物は少量の古式土師器、弥生終末期の土器小片が見られるのみである。

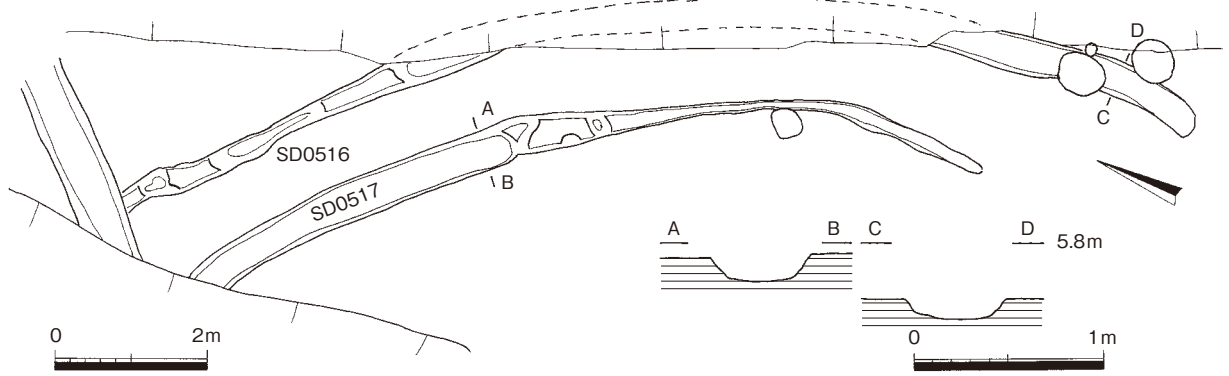
SD0518 (第190・193図)

SD0508の北側に接する小溝である。出土遺物は微量であるが、16に図示した遺物は手づくね土器で、石英粒を多く含む粘土を使用し、焼成が甘く赤褐色の発色をしている。祭祀に伴うものであろうか。

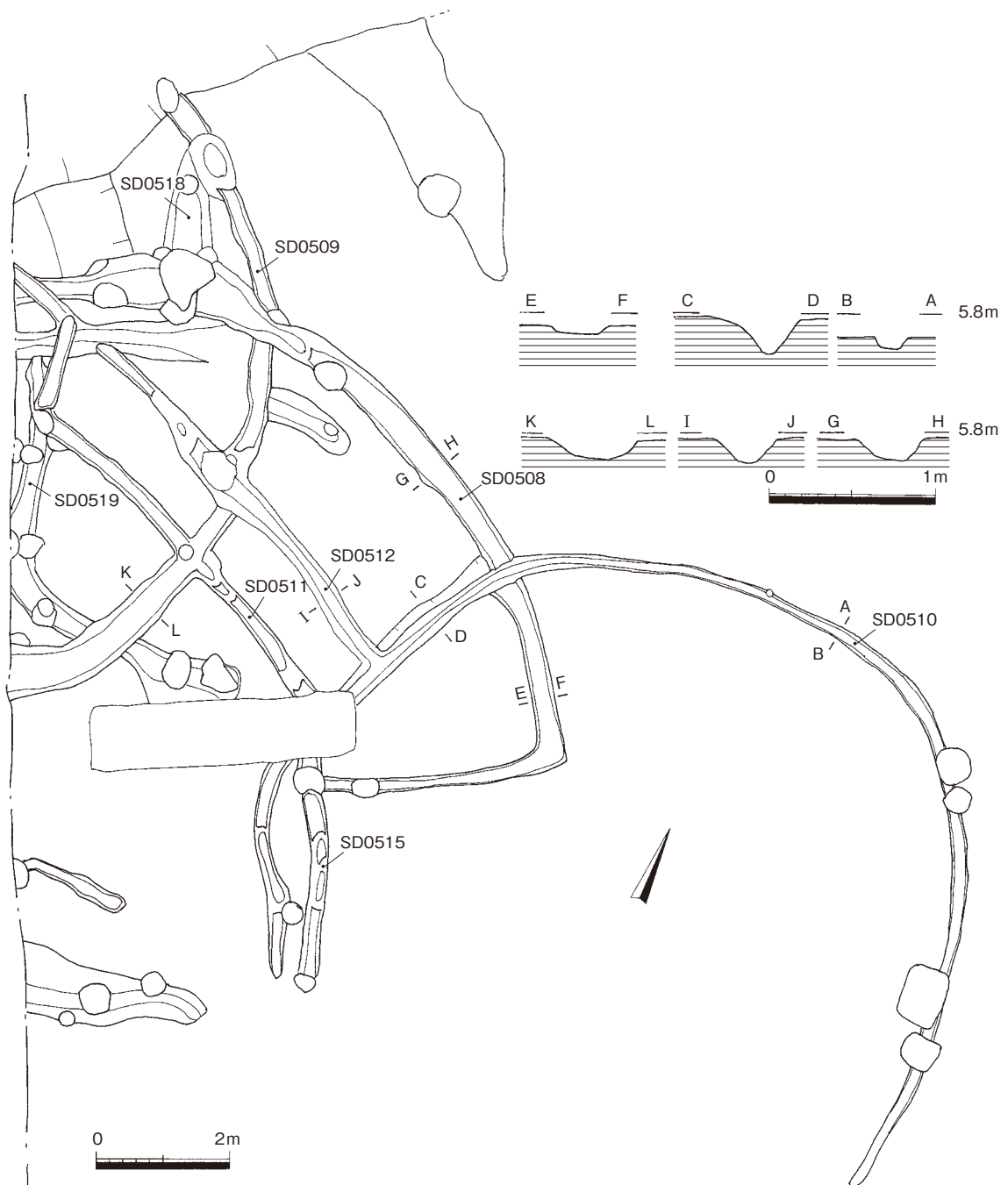
SD0519 (第193図)

一連の環状小溝とは違い直線的に伸びる。V区でその延長が検出されている。出土遺物は微量である。

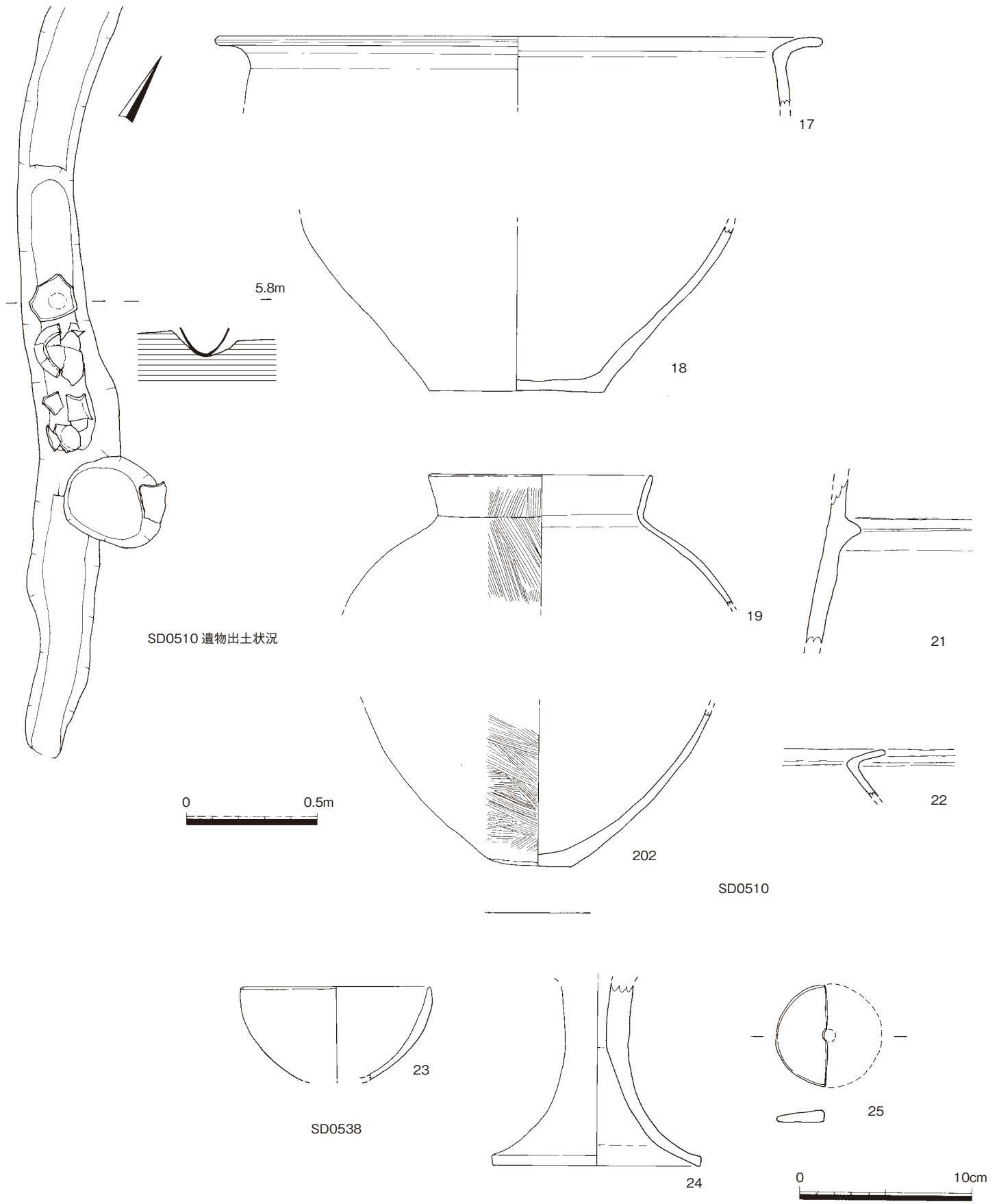
これら一連の環状小溝の機能については、上面の削平もあり全容もつかみにくく、現段階では断じがたいところが多い。溝の中に意図的な柱穴列もなく柵列とは考えられない。単なる水路とも考えにくく、環状小溝の内側に明確な施設が認められるわけでもなく、あるいは、円形竪穴住居の雨落ち溝の可能性もあるかもしれないが、半径の大きなSD0516、0517ではそれも



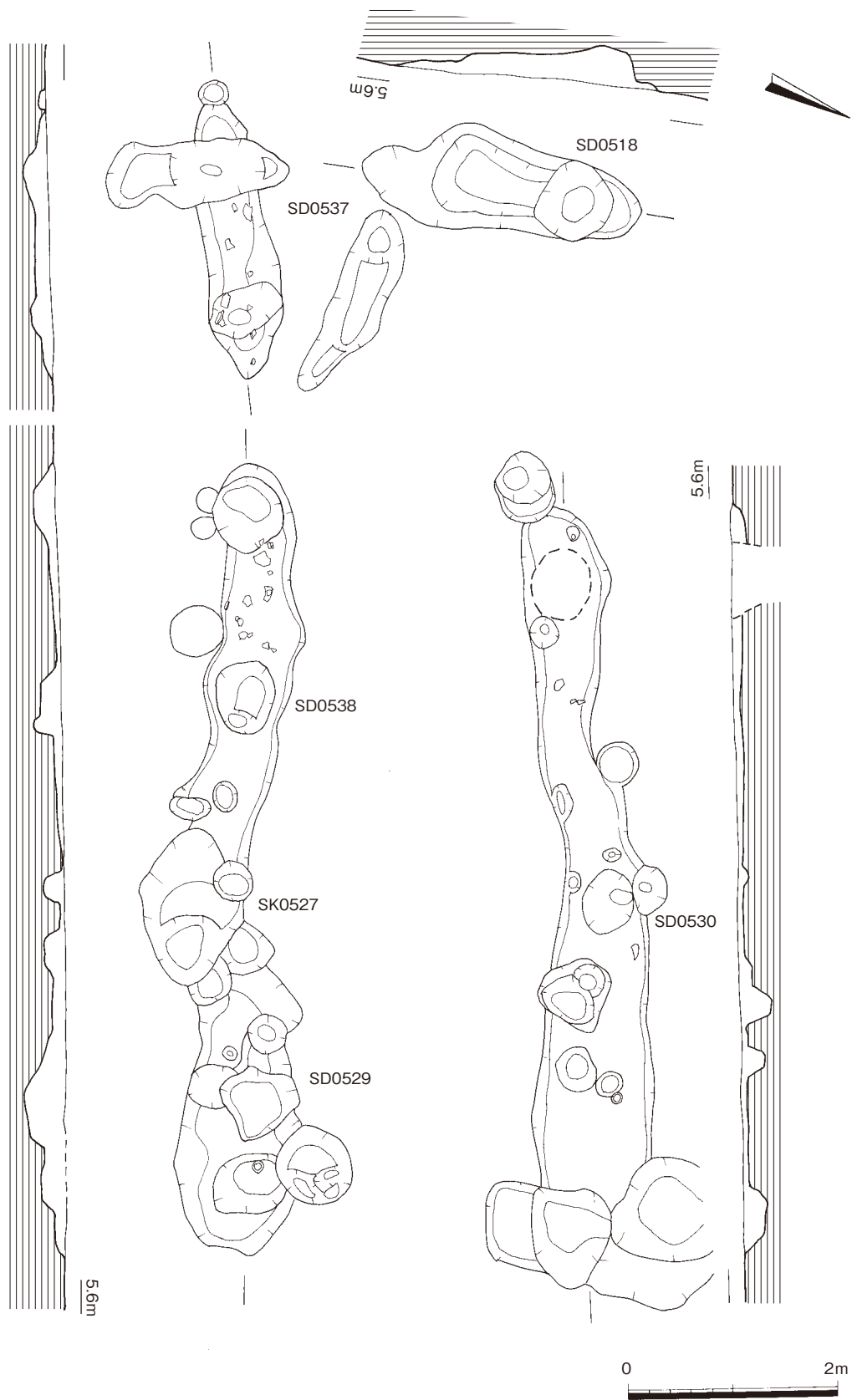
第192図 SD0516、0517実測図(1/100、断面1/40)



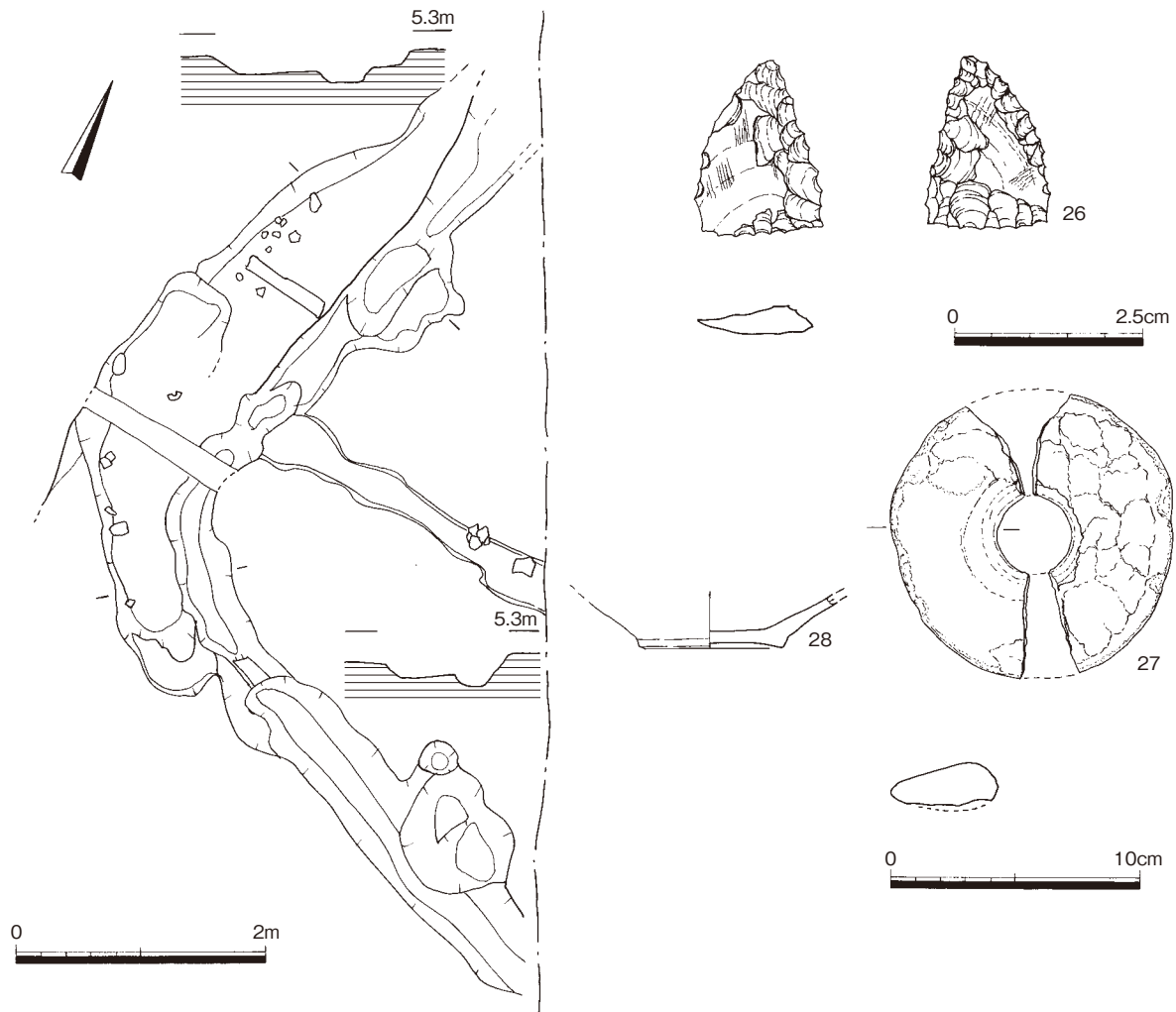
第193図 SD0508、0509、0510、0511、0512、0515、0518、0519実測図(1/100、断面1/40)



第194図 SD0510 実測図(1/20) およびSD0510、0538 出土遺物実測図(1/3)



第195図 SD0518、0529、0530、0537、0538 実測図 (1/60)



第196図 SD0540実測図(1/60)およびSD0540出土遺物(1/1、1/3)

想定しにくい。祭祀的なことに関わる単なる結界を示すものであるかもしれない。同心円状に平行を保った例も多く案外そのあたりにヒントがあるのかもしれない。後で改めて考察したい。

④溝

SD0518、0529、0530、0537、0538(第194・195図、図版79(2))

Ⅲ区の中央部、M～N3グリッド2面で検出した溝である。いずれも確認段階では非常に浅く、上面が削平されている可能性が高い。SD0538と0529は途中SK0527で分断されているが一連のものであろう。また、西側のSD0537もほぼ直線上に延びており、本来はSD0529、0538、0537同一の溝であったと思われる。これらの総延長は約11mである。北側にはこれらと約3mの幅を持って併行して延びる溝SD0530があり、その長さは約7mである。この西側には約2mの間隔を空けて、ほぼ直交するように現存長約2mのSD0518がある。これらの溝にはピットが見られるが、1面から掘り込まれたものも多く、溝と直接関係あるかどうかは不明である。しかしながら、これらの溝はほぼ古式土師器段階のであり、同一時期に営まれたものであれば道路の可能性も考えられる。しかしながら削平により硬化面など道路とする確証は無い。第194図に示した遺物はSD0538出土で、23が高坏の坏部または鉢である。体部は丸みを持つ。24は高坏脚部で下端は明確な段を持つ。25は土製紡

錘車である。

SD0540 (第196図、図版79(3・4))

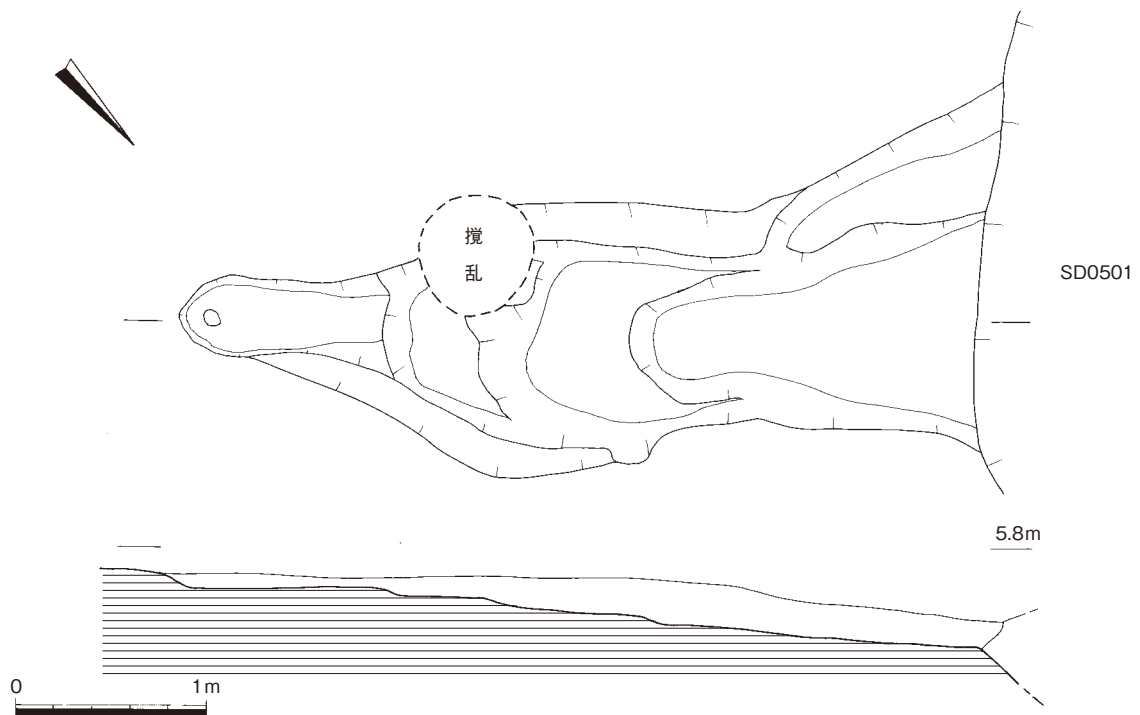
III区中央部東側最下面で検出した溝である。両端は調査区外に伸び、全容は不明である。中央部でほぼ直角に折れ曲がる。北東側は二段構造を持ち内側が狭くて深く、幅約15cm、最深部約30cmで、外側の浅い段は幅約1.0m、深さ約10cmと浅い。南東側は浅い段が見られず、幅約30cm、深さ約20cmで、SK0539に切られている。北東部上段には遺存状態は良好でないが、長さ70cm、幅15cmの板材が横に置かれ、小破片であるが突帯文土器が見られた。26は黒曜石製石鏃で上下面ともに主要剥離面が残されたままである。27は安山岩製の環頭石斧である。一面は研磨が行われ滑らか、もう一面は二次被熱により表面の一部には剥離が生じている。本来は全面磨製であろう。側縁は使用による敲打痕、剥離が残る。中央の穿孔部は丁寧な研磨が行われている。約半分が残っており、推定径11.3cm、穿孔部径3cmである。28は壺底部と思われるが、器壁が荒れ遺存状態は悪い。また、溝の一部からは炉壁の一部かと思われる焼土ブロックも見られた。本遺構はIII区での最も古い遺構の一つである。

⑤昇降通路遺構

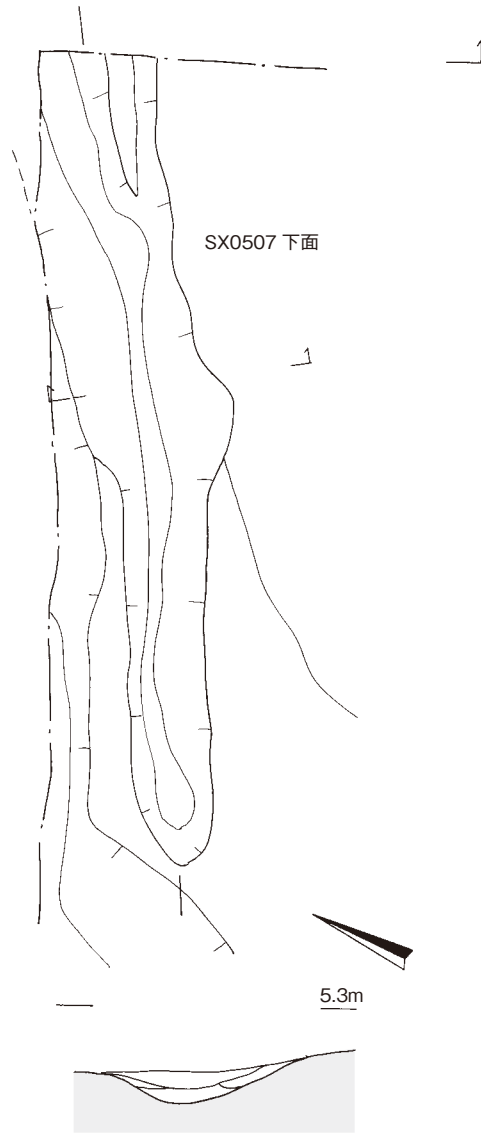
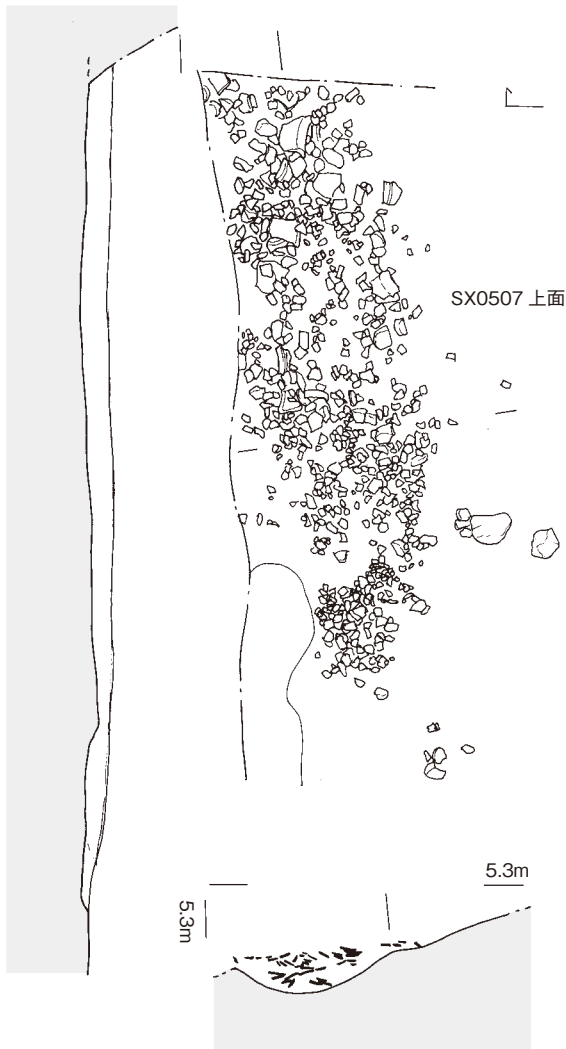
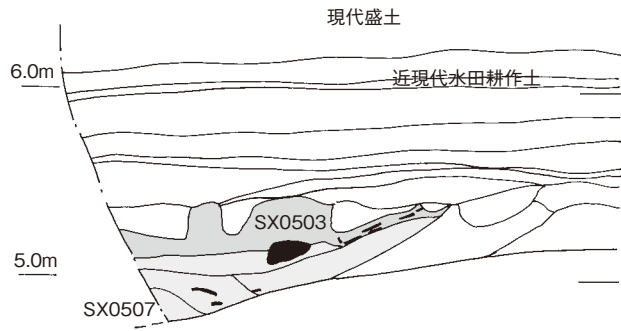
SD0501への昇降用通路と思われる遺構が2カ所確認されている。

SX0505 (第197図)

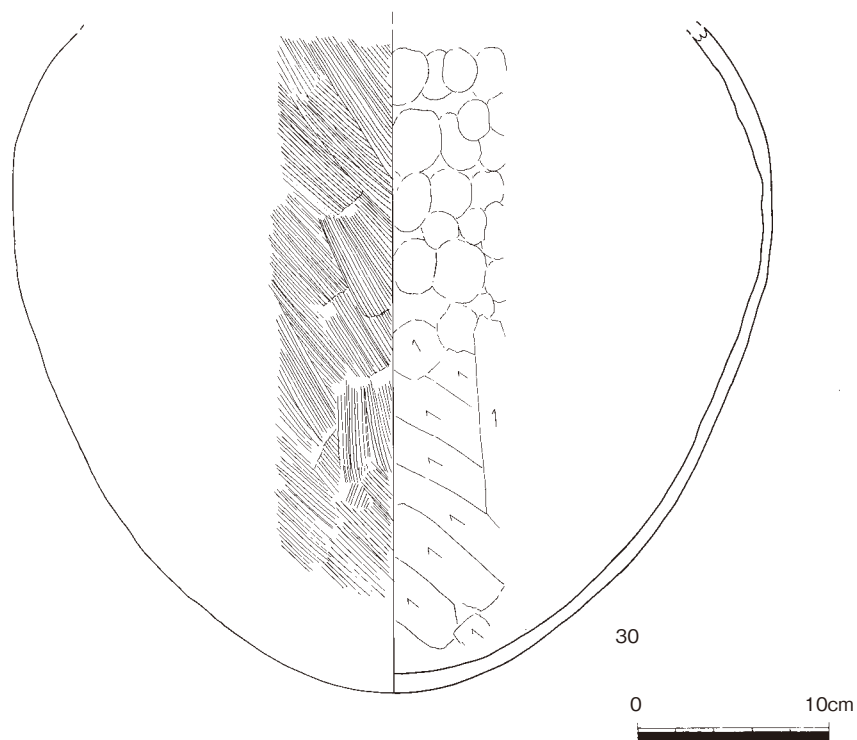
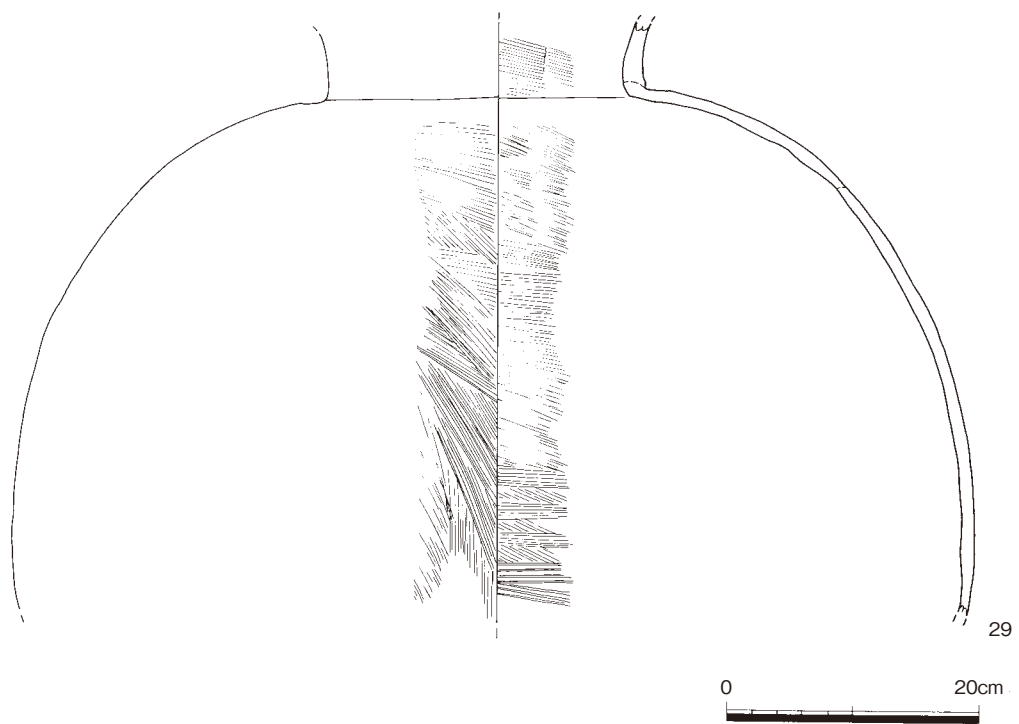
M3グリッドで1面で検出したものである。東端を頂点として西側に逆三角形に広がりつつつながりかな傾斜で下っていく溝状の遺構である。本来はさらに西側に低く伸びていたものと思われるが、SD0501の拡幅改修によって西端を切られている。この溝状遺構底部には硬化面があり、通路として使用されたことがうかがえる。



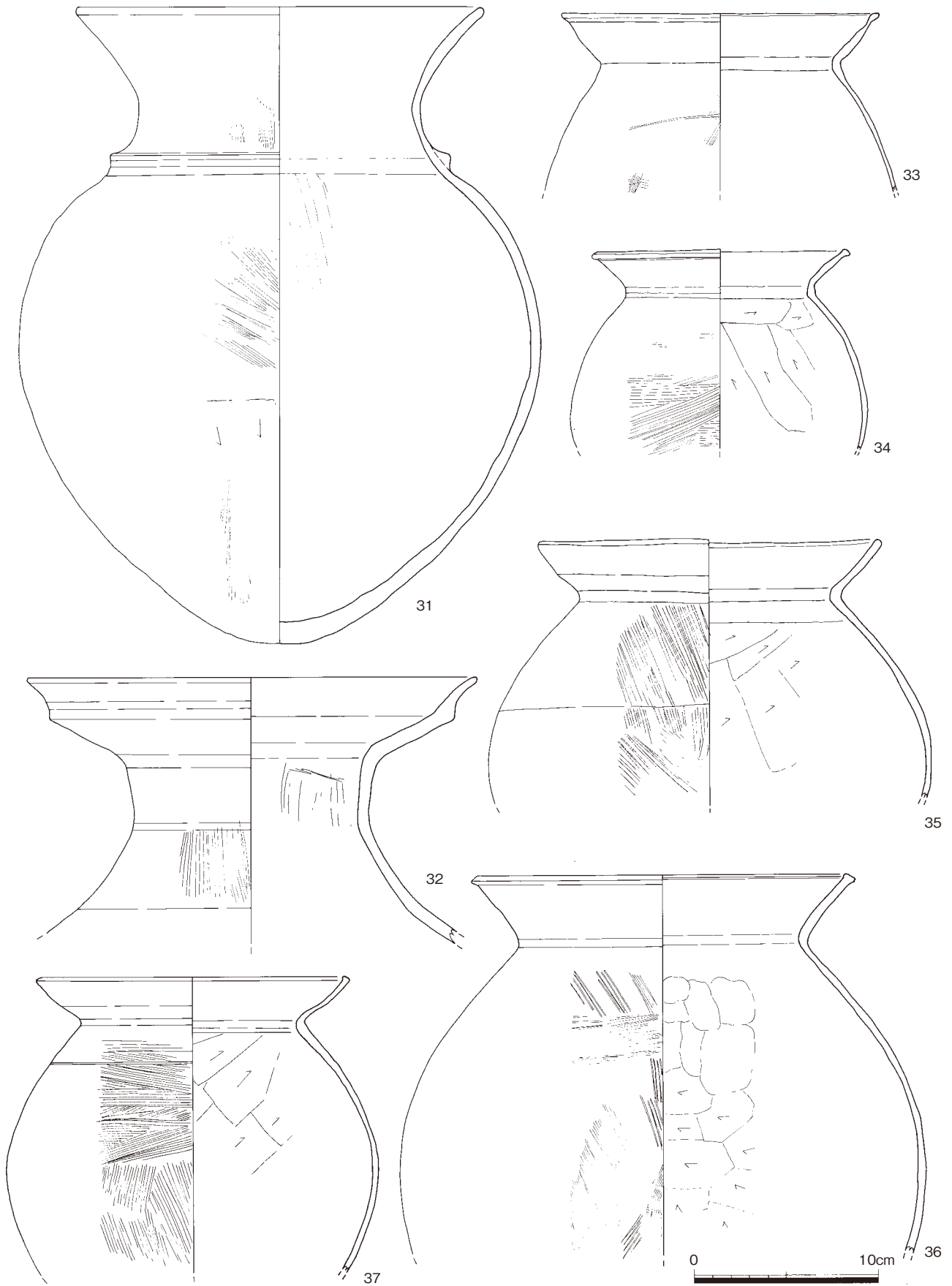
第197図 SX0505 実測図(1/40)



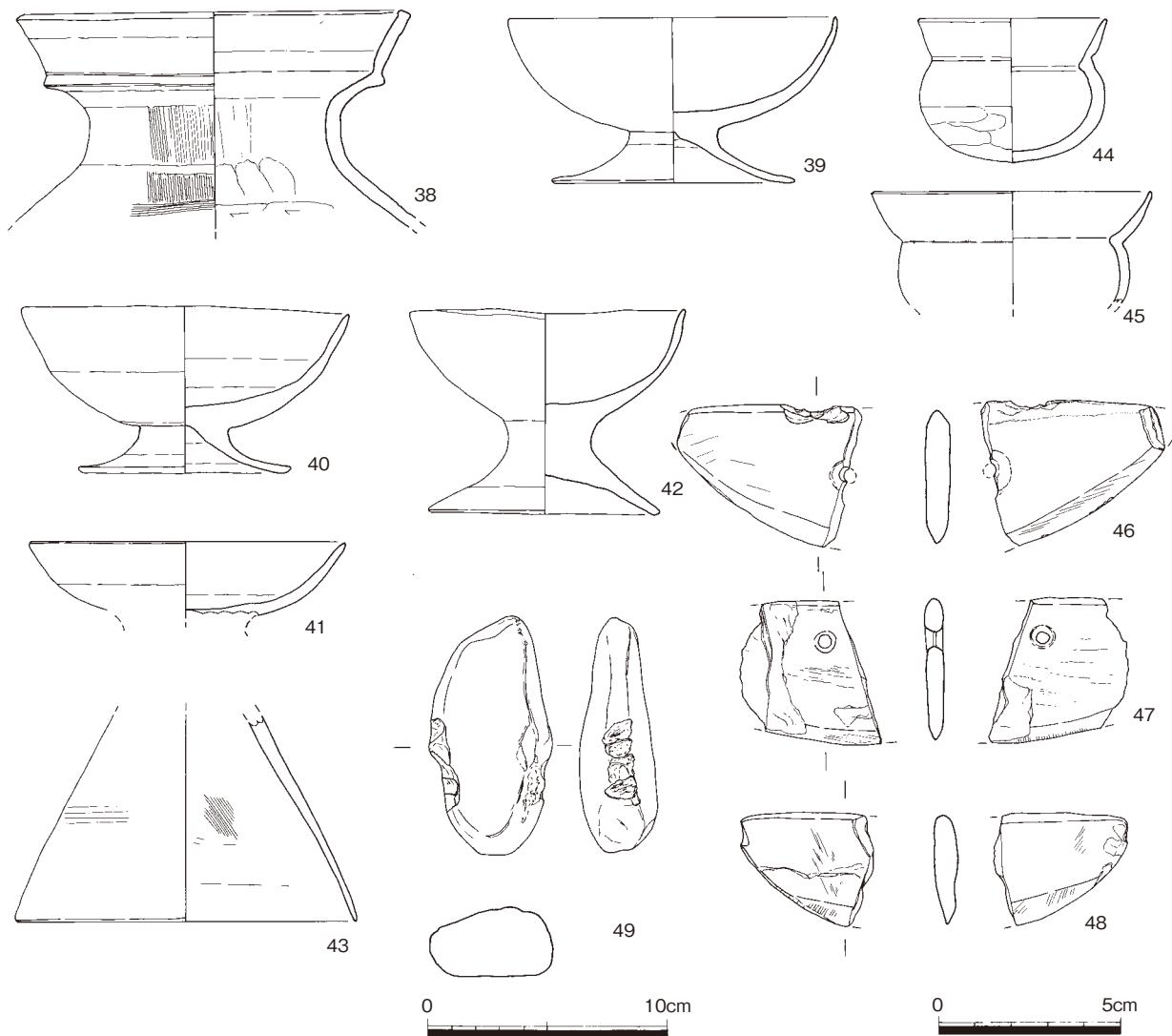
第198図 SX0503、0507 実測図 (1/40)



第199図 SX0503、0507 出土遺物実測図(1) (1/6、1/4)



第 200 図 SX0503、0507 出土遺物実測図 (2) (1/3)



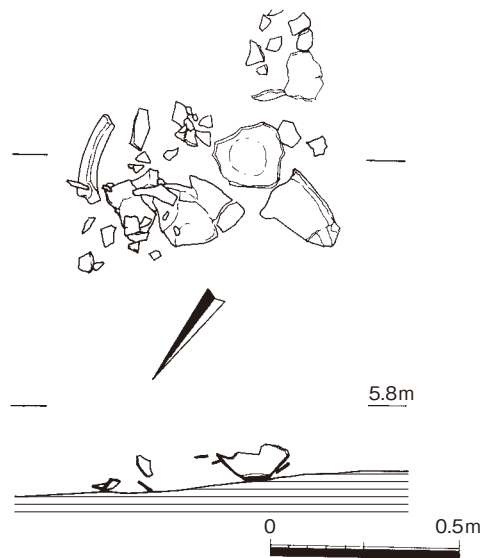
第201図 SX0503、0507 出土遺物実測図(3) (1/3、46~48は1/2)

SX0503・0507 (第198~201図、図版80(1・2))

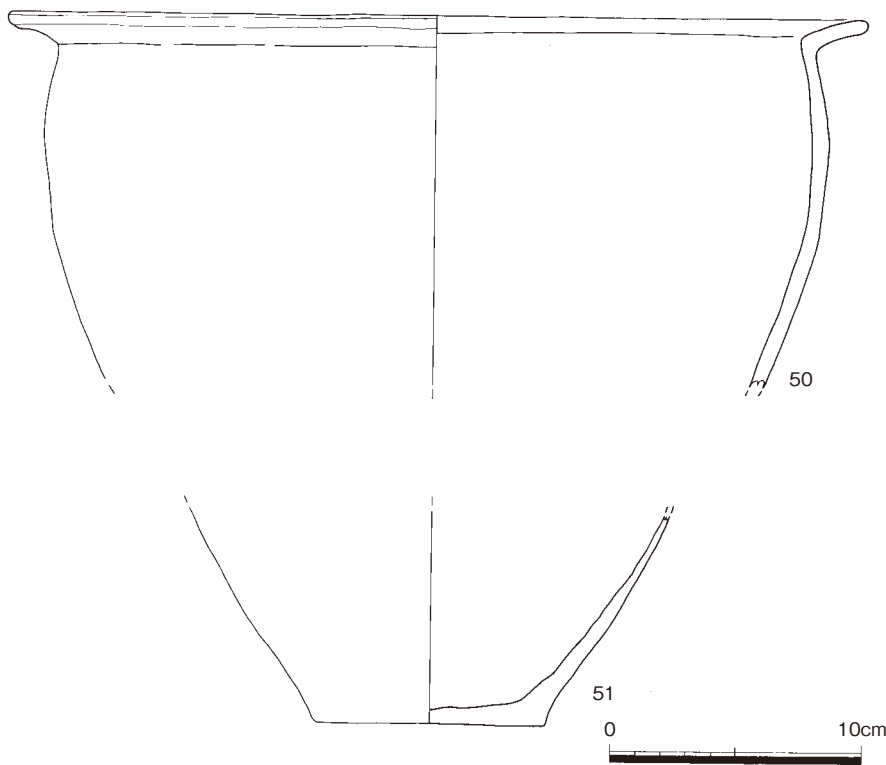
Ⅲ区北東隅、K4~5グリッドで検出したものである。東側は調査区外に伸び、北側は埋設管保全のための未掘部分に接し全容は不明である。当初、東側壁面付近で大型甕破片を中心とした土器堆積を検出し、これをSX0503と称したが、さらにその下面にも溝状に堆積する土器群があり、これをSX0507とした。しかしながら遺物整理の段階で両者間に多くの接合関係が見られることから、堆積の時間的な前後関係を示すだけのことであり、基本的に同一遺構として扱う。

SX0505と同様にSD0501に通じるもので、最下面では幅約40cm程の溝状をなし、確認長は約4mである。東端部と西端部の底のレベル差は約20cmで、SD0501側に向かってなだらかに下る。この溝底部には硬化面が見られることから、本来SD0501への昇降用通路として使用されていたものと思われるが、周辺の整地による流れ込み、土器等の廃棄によって形状が変化していったものと思われる。西端部の標高はSD0501底面との極端な差はなく、古代におけるSD0501の拡幅改修による影響は見られないものと思われる。ここでは古式土師器を中心とした大量の土器片と礫が堆積している。図示した遺物について述べる。29は復元最大胴径77cmにもなる大型の甕である。SX0503段階

で廃棄されているもので、調査区外に破片の多くが含まれており全体形は明瞭でないが、茶褐色を呈し内外面を丁寧な刷毛目調整を施す。頸部の立ち上がりは見られるが上面は確認できない。複合口縁になるものであろうか。吉備等中国系の土師器であろうか。30は最大胴径40cmの甕である。外面斜め刷毛目調整で内面上半には当て具痕が残り、下半はヘラ削り調整を行う。白味の強いベージュ色を呈す。四国系の土師器であろう。31は弥生土器の系統を引く壺の器形である。頸部下端に突帯をめぐらす。外面頸部下半と胴部状半は刷毛目調整、下半はヘラ削りで部分的に縦刷毛目が残る。内面



は縦のヘラナデを行っている。32・38は複合口縁の壺上半部である。38の体部上面には三条の沈線が施されている。33～38はいずれも布留・庄内系の甕である。外面刷毛目調整、内面ヘラ削りで、器壁は薄い。36の体部上半には一条の波状沈線が施されている。39～41は高坏で浅く丸みを持った坏部に薄く低い高台を付けるもので、41は脚を欠損している。何れも赤褐色の発色をしており、二次被熱により器壁が荒れている。42も小型の高坏であるが、手づくね風で口縁部は波立ち、高台は中空でなく柱状である。43も高坏の脚部であるが、直線的に下方に開くものである。44・45は小型丸底壺で外面は刷毛目調整後、ヘラ磨きを行っている。46～48は石包丁破片である。46は凝灰岩製で上面に抉り状の加工痕、刃部には使用痕が残る。47は目の細



かい砂岩製、48は輝緑凝灰岩製で刃部に使用痕が残る。49は緑泥片岩の礫を使用した叩き石で2側縁に使用による敲打痕が明瞭に残されている。また上端部にもアバタ状の敲打痕が明瞭に残り、様々な使用方法が考えられるものである。

この遺構の西側延長上SD0501の底部付近には、散漫な遺物の分布を見せるSX0502があるが、SX0503、0507の遺物の流れ込みであろう。

第202図 SX0522実測図(1/20)および出土遺物実測図(1/3)



第 203 図 SX0528 実測図 (1/40)

⑥遺物集積遺構

Ⅲ区ではSX0503、0507のほか、人為的なものか、自然の流れ込みによる堆積か明瞭でなく、大小はあるが、数カ所土器の集積または堆積した遺構がある。

SX0522 (第202図、図版80(4))

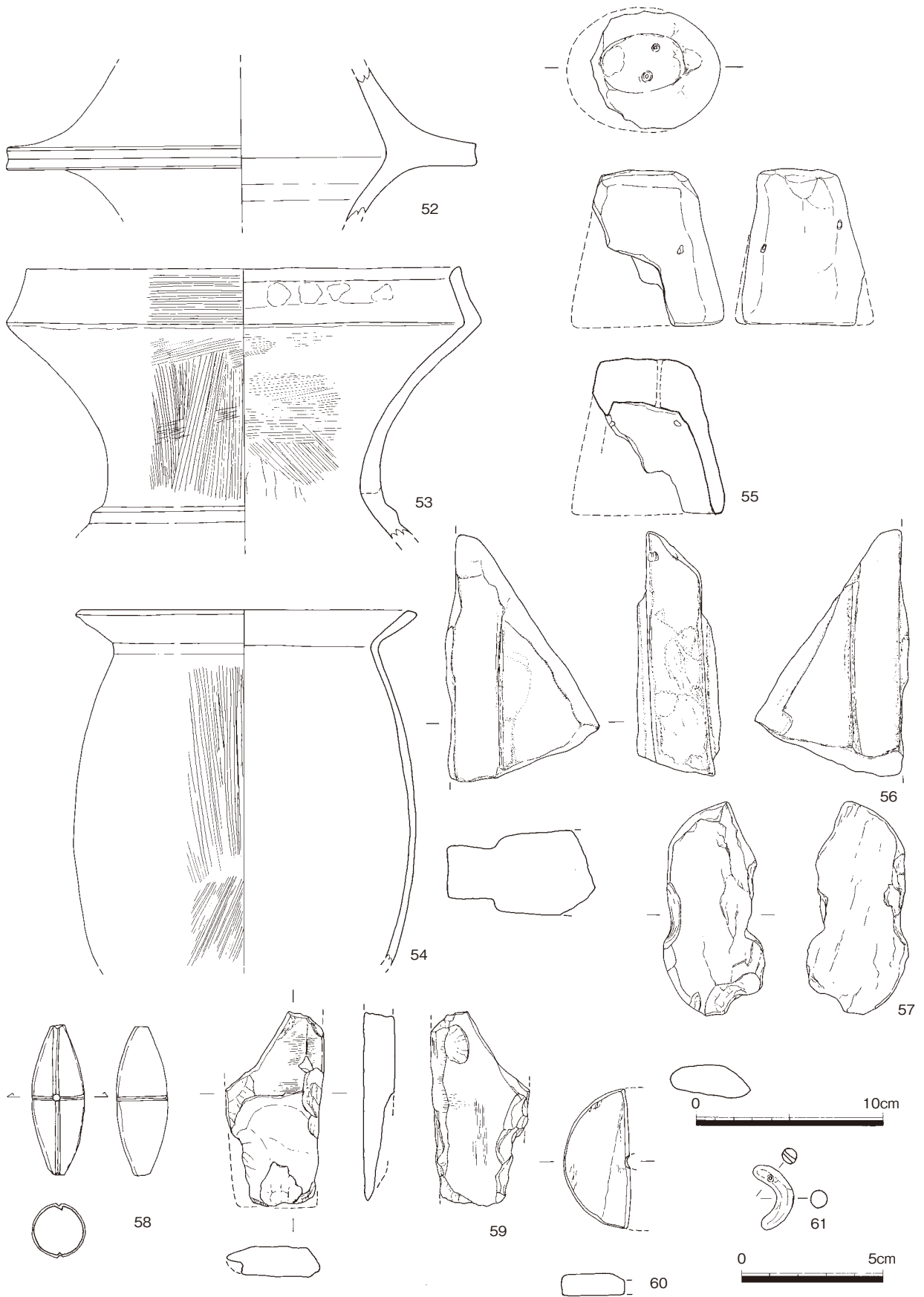
M5グリッド、1面で黒褐色の遺物包含層中に比較的大きな土器破片が重なっていたもので、明瞭な遺構は確認できない。通例包含層中の遺物は散乱して出土するが、意図的に集積されたものであろうか。図示した遺物は、弥生後期の壺底部破片である。

SX0528 (第203～205図、図版80(3))

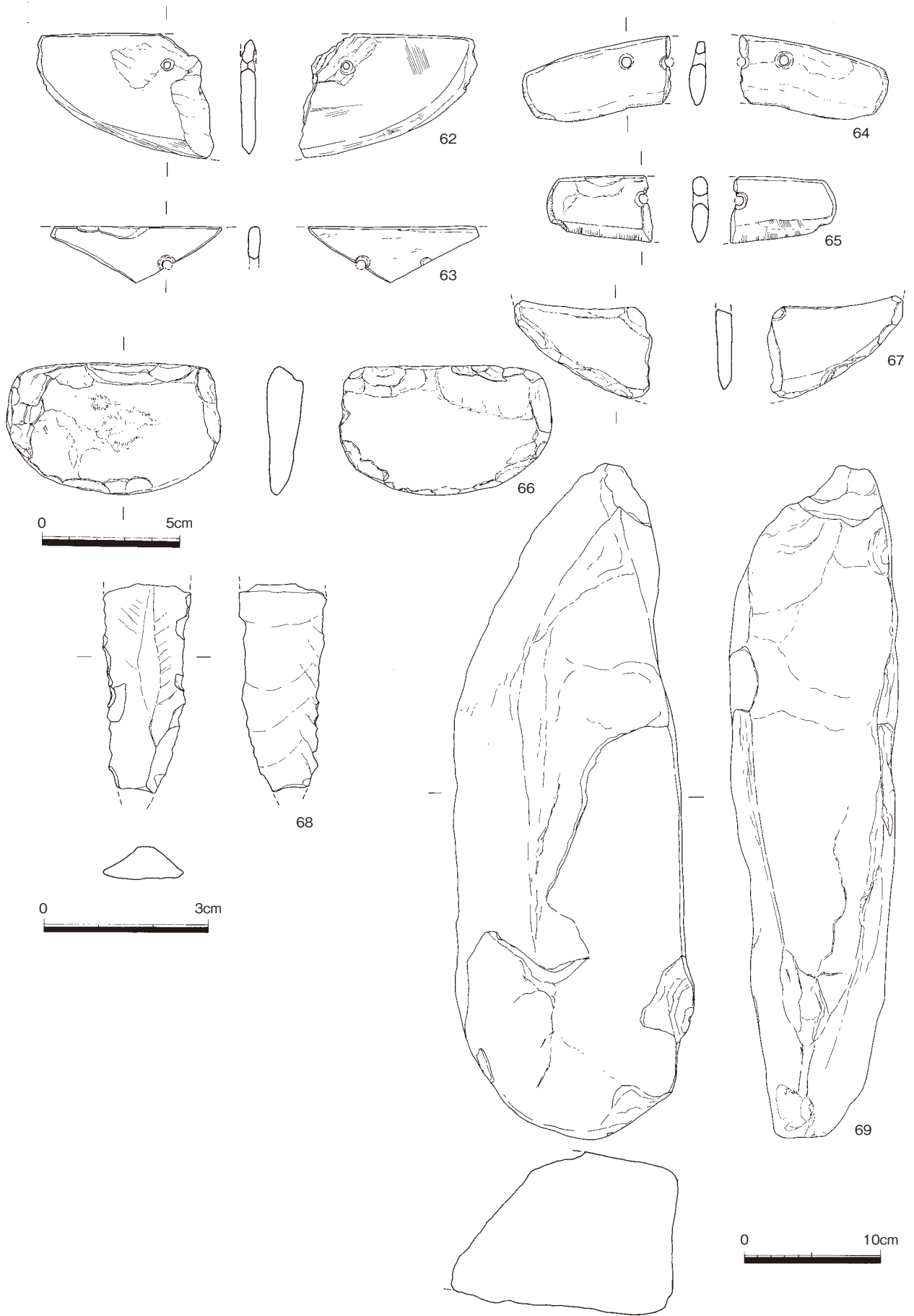
Ⅲ区中央部東隅M～N5グリッドに位置する。SD0501の南東部に位置するⅢ・V区全体が、弥生時代最終末期前後にはほぼ平坦に整地され、その面直上に、土器片を多く包含する厚さ20cm前後の黒褐色の包含層が次第に形成されていった。SX0528の南および東側は調査区外に伸びており、その全体形は不明であるが、SX0528は人為的な掘り込みではなく、このような平坦面造成時に取り残された自然地形の窪地であったのであろう。土層断面東側が4m以上、南東側で8m以上の規模の窪みであり、またその最深部は約60cmである。この遺構は整地された時に遊離した遺物が、全体に形成された包含層と同様に多量流れ込んだものと考えられ、遺物自体も各時代混在する。コンテナボックス40箱ほどの遺物がある。

図示した遺物について述べる(第204・205図)

52は弥生時代中期の大型筒形器台破片で、側縁を「M」字状に窪ませる鏝の部分である。器壁が荒れてはいるが、丹の付着が観察される。出土遺物中には中期の甕棺破片も多く含まれ、造成前には周囲に甕棺墓地の存在がうかがえ、52はそれらの祭祀に使われたものであろう。53は弥生時代後期後葉に位置づけられる複合口縁の壺の頸部破片で、口縁は小さく内湾する。外面頸部は縦刷毛目、端部は横刷毛目調整、体部との境には鈍い突帯をめぐらしている。54も53とほぼ同時期の所産と思われる甕である。外面縦刷毛目調整、内面は器壁が荒れて調整痕不明である。55は鐸形土製品である。全体に裁頂楕円錐というべき形状で、器高8.4cm、頂部最大径4.4cm、最小径3.2cm、底部推定最大径8.2cm、同最小径6.6cm。手づくねによる成形で天井部は2.2cmと厚い。天井部には上面から細い棒状のもので2カ所の穿孔があり、体部の両側面にもそれぞれ同様に2カ所の穿孔が施されている。56は砂岩製のきわめて特徴的な用途不明石製品である。大半を欠失しており、全体の形状は不明である。欠損部をのぞきすべての面が研磨、あるいは砥面として使用されており、滑らかである。とりわけ側面は上下両面から段状に研ぎ出され、ほぞのような断面形をしている。特殊な砥石と考えるべきか、あるいは全く違う用途を持つものか。57は滑石に近い緑泥片岩の、摂理の目立つ扁平礫を利用したもので、側縁に抉り状の窪みを設けたものである。石錘であろう。58は緑泥片岩をラグビーボール形に丁寧に整形し、胴部と周縁部に浅い溝を彫った石錘である。溝の交点には途中まで穿孔を試みたと思われる小さな窪みが見られる。長さ5.2cmである。59はきめの細かい安山岩質の石材を用いた扁平片刃石斧である。上下両面は丁寧に研磨され一部二次的剥離が煮られるが、下端の刃部には使用痕が観察できる。60は復元径5cmの滑石製紡錘車を二次加工したものである。厚さ8mmで重量感がある。半切したものを切断面をさらに丁寧に研磨している。装飾品などへの転用を意図したものであろうか。61は土製勾玉である。最大長2.3cm、径7mmと小型である。手づくねで胎土精良、焼成良好。62～65は石包丁破片である。62は黒色粘板岩を使用したもの。63は砂質粘板岩製。64・65は粘板岩を用いたもので、両者接合し同一個体であることが確認された。刃部の使用痕が明瞭である。66は目の粗い輝緑凝灰岩製である。穿孔はされていないが石包丁のバリエィショ



第204図 SX0528 出土遺物実測図(1) (58~61は1/2、1/3)



第 205 图 SX0528 出土遺物実測図 (2) (1/1、1/2、1/4)

ンの一つであろう。周縁を打割により成形し、上端および上下両面は研磨されている。一面には穿孔を意図したと思われる敲打による窪みが見られ、未製品ともいえるが刃部には使用による摩耗が見られじゅうぶんに使用には耐えたものであろう。67は安山岩製石包丁の破損品である。角の一部に穿孔部の痕跡があり周縁に成形痕があり、一部研磨がなされているが、製作途中で破損し使用はされなかったものと思われる。68はサヌカイト製のブレイドである。上下端を折断し形を整えている。長さ3.8cm。69は安山岩系の大礫を使用した、長さ49.5cm、厚さ12.5cmの大型の砥石で2面に砥面がある。二次被熱により剥落が目立つ。その大きさからして据え付け式の使用のされ方であったと思われる。

⑦掘立柱建物

Ⅲ区の遺構のあり方を特徴付けているのは436個に及ぶ多くのピットが広く分布していることである。全域に分布しているが特にⅢ区中央部から北半にかけて濃密に分布している。包含層の薄い地域では、1面精査時から検出されているが、2面で検出したものが多い。これらのピットの中には柱そのものが遺存するもの、礎板が残るもの、土層断面で柱抜き取り痕が観察できるものなどが大半で、掘立柱建物の柱穴であったと判断できる。しかしながら、ピットの密集する中で発掘中に掘立柱建物を構成する柱穴の把握は困難で、数棟が確認できたに過ぎない。整理段階で再度検討の結果、以下に述べる22棟の掘立柱建物が想定できた。しかし、明らかに柱穴でありながら組織的に把握できないものも多く、実際にはさらに多くの建物の存在したことが伺える。2間×2間、1間×2間、1間×1間の小規模な掘立柱建物に限られる。SD0501の拡幅改修で、柱穴の最下の一部を残して削平されたものもあり、SD0501拡幅改修以前の遺構であることは明らかである。2間×2間、1間×2間の建物は倉庫の可能性も考えられ、1間×1間の建物は一帯が造成により削平を受けていることを考えれば、竪穴式住居の支柱穴との見方もできるが、それぞれの重複が激しいことを考慮すれば、竪穴式住居支柱穴というより小規模な倉庫もしくは作業小屋的なものとするのが妥当であろう。

以下各遺構について述べる。

SB0523 (第206図、図版81・82(1・2))

N3、N～M4グリッド、1面で検出された1間×2間の掘立柱建物である。東西に長く、主軸はN-78°-Wの方向を撮りSB0599、0603と重複する。梁行1間(2.93m)、桁行2間(3.8m)、床面積11.134m²の規模である。柱間距離は梁行が292cm、桁行がほぼ190cm間隔である。柱穴の基底部分は標高4.9～5.1mで、SP0056を除き他の5個の柱穴(SP0113、0114、0118、0117、0110)には径12～18cmの柱が遺存している。SP0056は柱は遺存していないものの、底を一段掘りくぼめ、柱を据えた痕跡がある。SP0114の柱下面には小振りな板状の礎板が置かれている。SP0113、0114、0117の柱材の樹種同定を行っており、いずれもスギの芯持ち丸木材を用いたものである。

SB0581 (第206図、図版82(3)～84(3))

K～L4グリッド、2面で検出された2間×2間の掘立柱建物である。南北に長く、主軸はN-4°-Eの方向を取る。梁行2間(2.96m)、桁行2間(3.55m)、床面積10.51m²の規模である。柱間距離は梁行がSP0405、0250間で155cm、SP0250、0251間は141cmとやや狭くなる。桁行がほぼ180cm間隔である。西側柱穴列(SP0403、0404、0405)はSD0501の法面で検出され、河川の拡幅改修で、柱穴の下部を残して削平されているが、側柱柱穴の基底部分は標高4.3～4.5mを保っている。梁行中央のSP0250、0294はやや浅く、標高4.8m前後である。SP0403、0404、0405、0077(下面)、0258は径6～7cmの棒を半裁し、中央部の両側面を削ったものを礎板とし、下端にコの字状の

溝を掘った柱を組み合わせるもので、いずれも柱の一部と礎板が出土している。樹種同定の結果、SP0403の柱はのコナラの芯持ち丸木材を用いたもので、礎板は半裁されたチシャノキ属の材を用い、SP0405の礎板は同じく半裁されたチシャノキ属の材である。SP0294は礎板として1本の横木が使用されているが、嵌め込み式の柱かどうかは不明である。このほかSP0250は3本の棒を並べ礎板としており、SP0251は下に3本の棒を並べ、その上に2本の棒を井桁に並べ礎板としたものである。SP0077からは古式土師器片が出土している。SB0582、0583、0584と一部重複する。SP0251はSB0583を構成するSP0372を切っており、同じくSP0077(下面)も大きな板状礎板を持つSP0077(上面)を切り込んでおり、SB0581がSB0583より新しい。

SB0582(第207図)

K~L4グリッド、2面で検出された1間×1間の掘立柱建物である。南北に長く、主軸はN-3°-Eの方向を取る。東西柱間2.13m、南北柱間2.85m、床面積6.07m²の小さな規模である。柱穴の基底部分は標高4.3~4.5mを保っている。柱穴に柱は遺存していないが、SP0253、0255の土層断面に柱抜き痕跡が観察できる。

SB0583(第207図、図版84(4)~85(2))

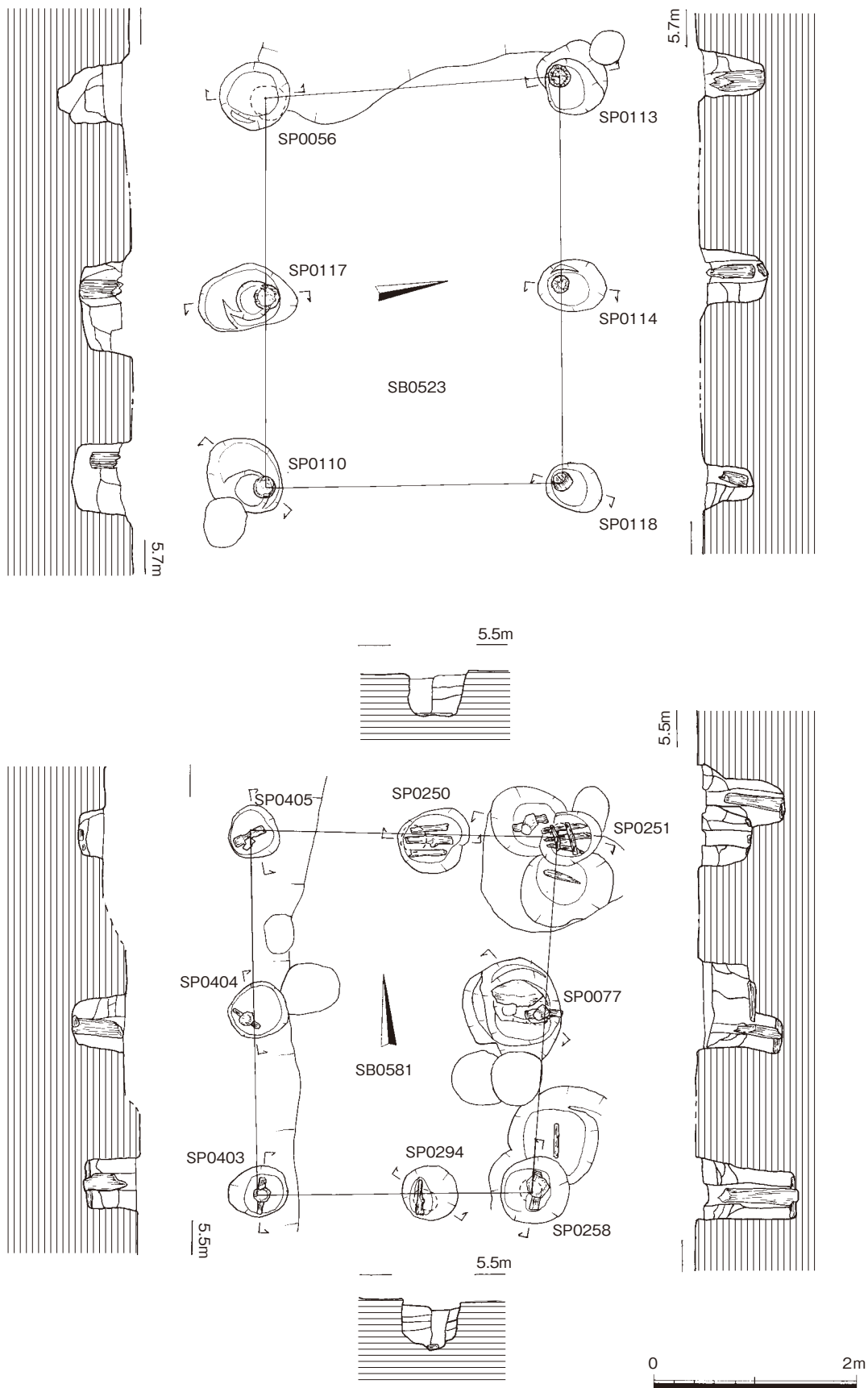
K~L4グリッド、2面で検出された1間×1間の掘立柱建物である。東西にやや長く、主軸はN-84°-Wの方向を取る。SP0372、0077(上面)の柱間1.9m、SP0372、0254の柱間2.15m、床面積4m²強の小さな規模である。柱穴の基底部分は標高4.8~4.5mを保っている。SP0372は礎板として1本の横木が使用される嵌め込み式の柱で60cmが遺存していた。SP0077(上面)は柱は遺存していないが大きな板状礎板を持つもので、SB0581のSP0077(下面)を掘り込む際に半分ほどが壊されているものと思われる。柱穴に柱は遺存していないが、SP0254は棒状の礎板を持つものであるが柱は遺存していない。SP0262も柱は遺存していないが、土層断面に柱痕跡が観察できる。切り合いからSB0583→SB0581の順となる。

SB0584(第207図)

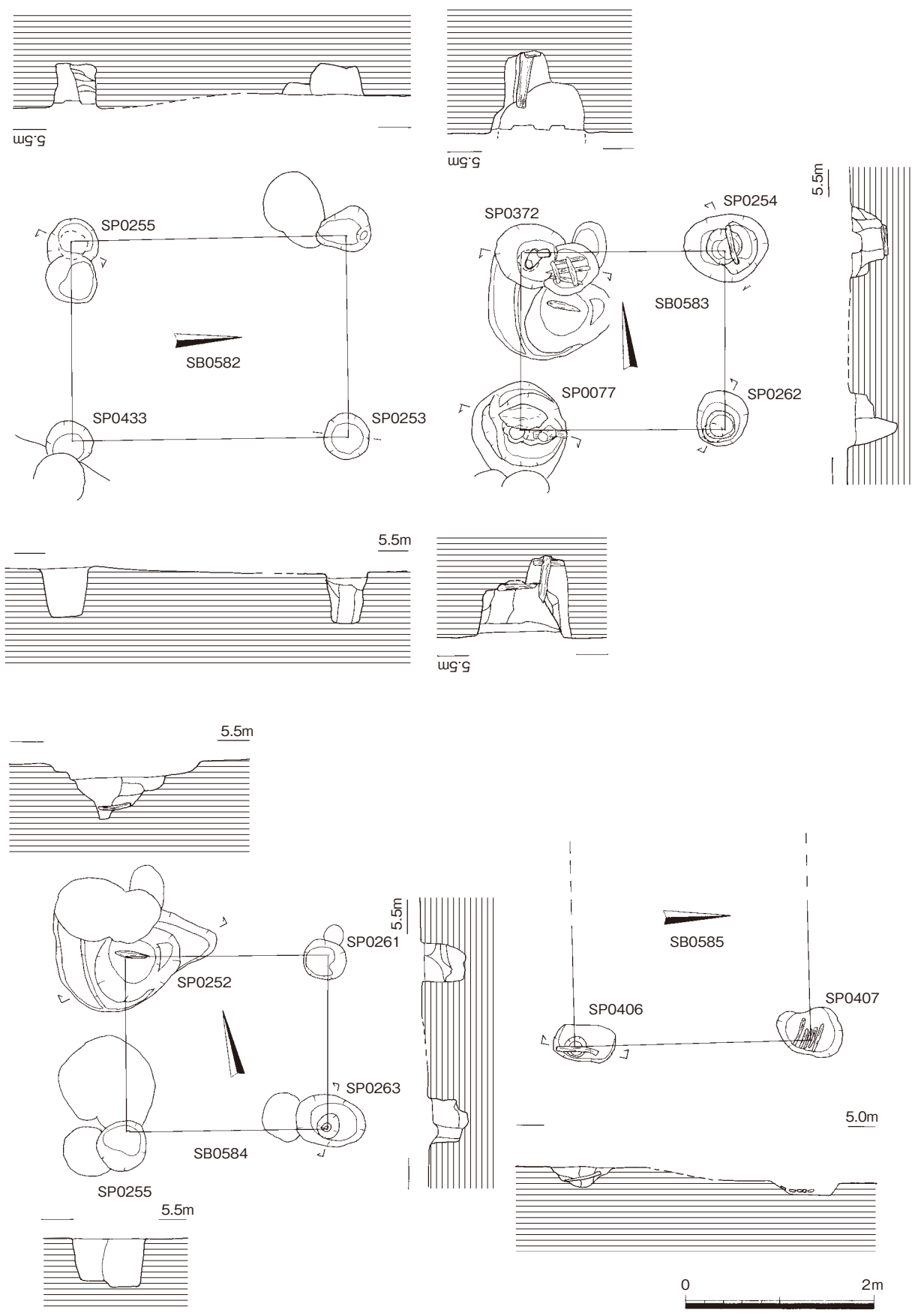
K~L4グリッド、2面で検出された1間×1間の掘立柱建物である。東西にやや長く、主軸はN-82°-Wの方向を取る。SP0252、0261の柱間2.13m、SP0261、0263の柱間1.82m、床面積3.88m²の小さな規模である。柱穴の基底部分は標高4.9~4.7mを保っている。SP0252はミカン割りをしたヤマグワの1本の横木を礎板として使用している。柱は遺存していないが、礎板の脇に小さな掘り込みがあり嵌め込み式の柱であったかもしれない。他の3個の柱穴には柱、礎板は遺存していない。SP0263は1面検出のSD0506に切られている。SP0252はSB0581を構成するSP0372、SP0251に切られており、がSB0584→SB0581の順となる。

SB0585(第207図)

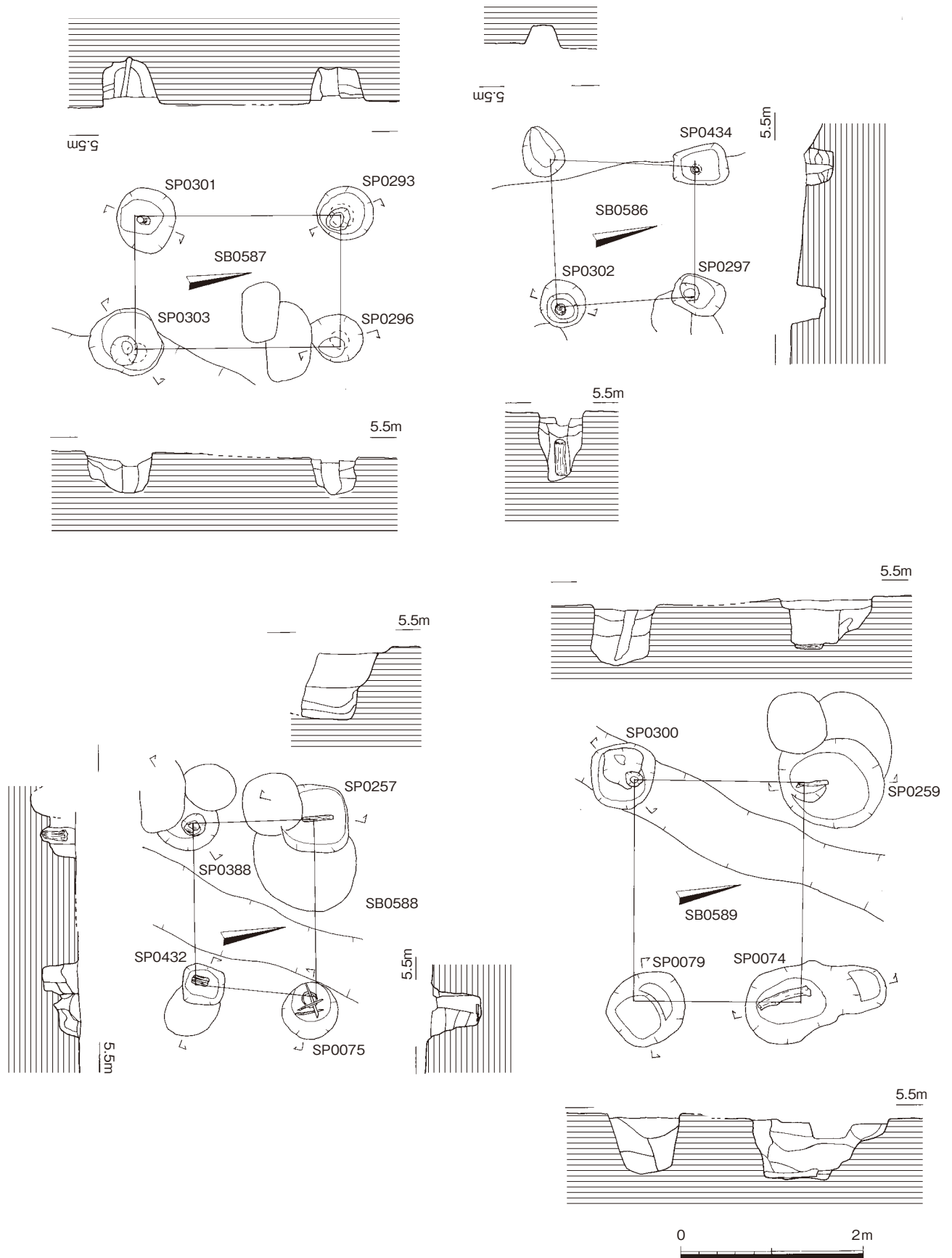
K~L4グリッド、2面、SD0501の東側法面で検出された掘立柱建物である。SD0501の拡幅改修で削平された最下部のみを残す2個の柱穴SP0406、0407からなる。SP0406、0407の柱間2.5mである。柱穴の基底部分は標高4.4~4.3mである。これらの柱穴に対応する柱穴が東側平坦面に確認できず、本来西側に延びていたものがSD0501に削平されたものであろう。SP0406はミカン割りをしたヤマグワの1本の横木を礎板として使用している。柱は遺存していないが、礎板の脇に小さな掘り込みがあり嵌め込み式の柱であったかと考えられる。SP0407は長さ30~35cmの5本の棒状木片を平行に並べて礎板としたもので、材はSP0406と同じくミカン割りをしたヤマグワである。SD0501拡幅改修以前の遺構であることは明らかである。



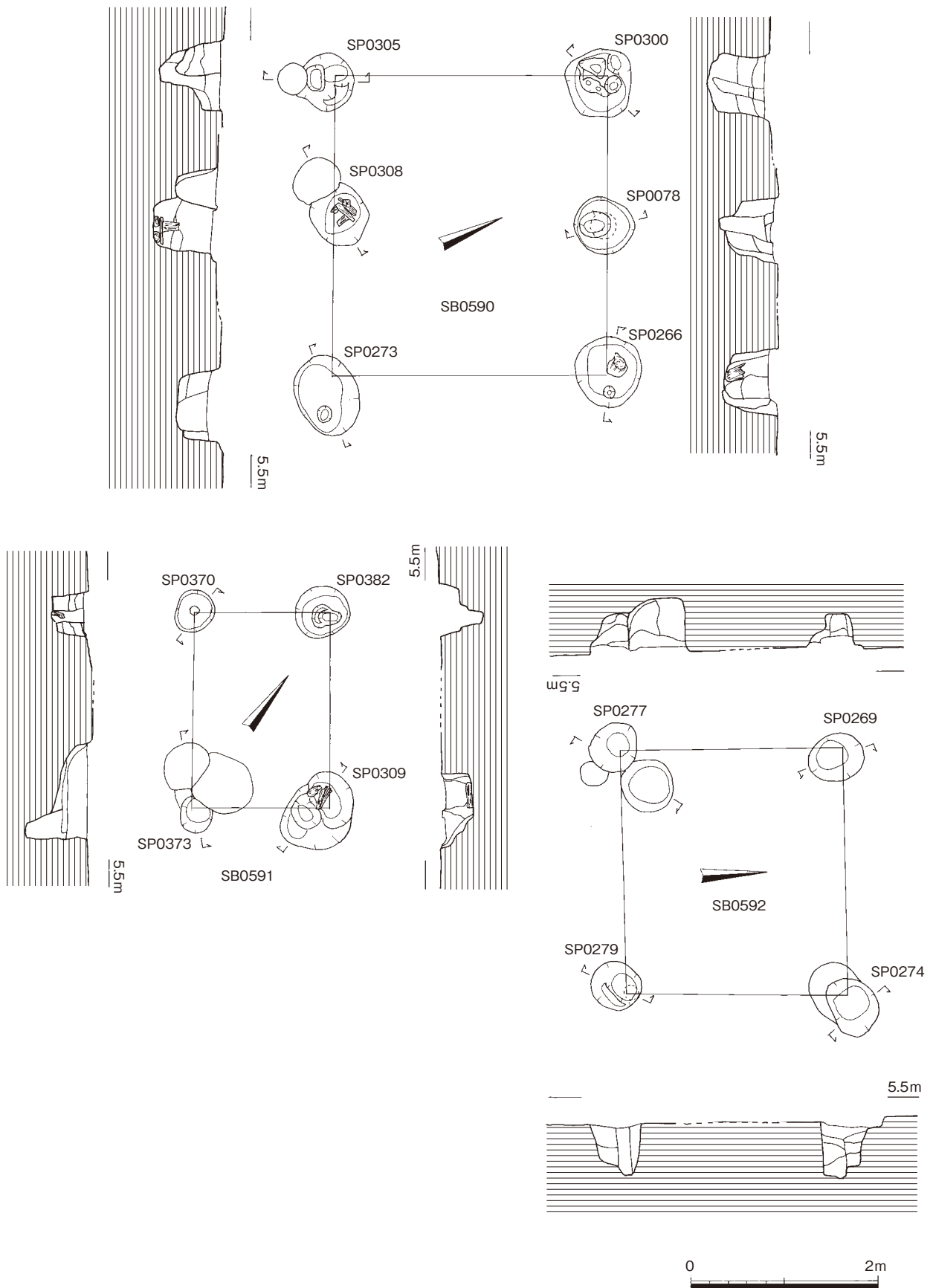
第206図 SB0523、0581実測図(1/60)



第 207 図 SB0582、0583、0584、0585 実測図 (1/60)



第 208 図 SB0586、0587、0588、0589 実測図 (1/60)



第 209 図 SB0590、0591、0592 実測図 (1/60)

SB0586 (第208図、図版85(3・4))

L4グリッド、2面、SD0501の東側法面に接し検出された1間×1間の掘立柱建物である。西角の柱穴(無番)はSD0501の拡幅改修で上面を削平されている。SP0302、0297の柱間1.5m、SP0297、0434の柱間2.3mで正方形で非常に小規模である。床面積3.45m²である。柱穴の基底部分は標高4.9~4.7mである。SP0302には径12cmの柱が40cm程遺存している。樹種同定の結果、SP0302の柱はニッケイ属の芯持ち丸太材である。SP0297は柱は遺存していないが、柱を据える小さな凹みが底に掘り込まれている。SB0587と軸線は平行で、面的に重複するが前後関係は不明である。

SB0587 (第208図)

L4グリッド、2面で検出した1間×1間の掘立柱建物で、SB0586と面的に重複し、軸線は平行であるが前後関係は不明である。主軸はN-10°-Eの方向を取る。SP0301、0303の柱間1.4m、SP0301、0293の柱間2.3mの長方形で非常に小規模である。床面積3.22m²である。柱穴の基底部分は標高4.9~4.8mである。何れの柱穴も柱は遺存していないが、柱を据える小さな凹みが底に掘り込まれており、土層断面で柱痕跡が確認できる。SP0301は近代用水路に接しており、その護岸のための杭が打ち込まれている。

SB0588 (第208図、図版85(5)~86(1))

L4グリッド、2面で検出した1間×1間の掘立柱建物で、SB0589と面的に重複し、軸線は平行である。主軸はN-82°-Wの方向を取る。SP0388、0257の柱間1.25m、SP0388、0432の柱間1.85mの長方形で非常に小規模である。床面積2.31m²である。柱穴の基底部分は標高4.8mである。SP0388は礎板を持たない直据えで30cm程柱が遺存している。SB0587を構成するSP0296に切られている。SP0257は1本の横木を礎板として使用している。SB0581を構成するSP0258に切れ、SB0589を構成するSP0259を切っている。SP0075は3本の棒を「キ」形に並べ礎板としたもので土層断面で柱痕跡が確認できる。SP0432は板材を礎板としている。

柱穴の切り合いから、SB0589→SB0588→SB0581、SB0588→SB0587の順となる。

SB0589 (第208図、図版86(2~4))

L4グリッド、2面で検出した1間×1間の掘立柱建物で、SB0588と面的に重複し、軸線は平行であるがSB0589が古い。主軸はN-78°-Wの方向を取る。SP0300、0259の柱間1.85m、SP0300、0079の柱間2.4mの長方形である。床面積4.44m²である。柱穴の基底部分は標高4.8~4.6mである。SP0300はSB0590の柱穴と重なるが、底の柱痕跡が複数あり、SB0590建築時に切り込んだものであろう。SP0259は35cm程の長さの細い1本の横木を礎板として使用しているが、SP0074は60cm程の太い棒材を礎板としている。

SB0590 (第209図、図版86(5))

L4グリッド、2面で検出した1間×2間の掘立柱建物で、SB0591と一部重複している。軸線は北側建物群よりわずかにずれ。主軸はN-66°-Wの方向を取る。梁行き1間で梁間はSP0300、0305間で2.95mと幅広く、桁行きは2間(3.2m)でSP0305、0308の柱間が1.7m、SP0308、0273の柱間1.7mの長方形である。床面積5.44m²である。柱穴の基底部分は標高4.9~4.7mである。SP0300はSB0589の柱穴と重なるが、底の柱痕跡が複数あり、SB0590建築時にSB0589の柱穴を切り込んだものであろう。SP0259はSP0306に、SP0308はSP0307に切られている。SP0308は底に2本の横木を置き、その上に直交するようにさらに2本の横木を置いて礎板としたもので15cm程柱材が遺存していた。SP0266は柱を直に据えるもので柱材が20cm程遺存している。SP0078は土層断面で柱痕跡が確認できる。

SB0591 (第 209 図、図版 87 (1・2))

L4 グリッド、2 面で検出した 1 間×1 間の掘立柱建物で、SB0590 と一部重複している。軸線は SB0590 よりさらに北に傾き、主軸は N-39°-W の方向を取る。梁間は SP0370、0382 間で 1.45 m と狭く、桁行き柱間は SP0370、0382 間で 2.1 m の長方形で小規模である。床面積 3 m² 強である。柱穴の基底部は標高 5.0～4.7 m でばらつきがある。SP0370 は柱材が状況不良ながら遺存している。SP0309 は底に 3 本の厚い角材を置き、礎板としたものである。

SB0592 (第 209 図)

L～M4 グリッド、2 面で検出した 1 間×1 間の掘立柱建物である。軸線は北側建物群に近い。主軸は N-88°-W の方向を取る。SP0277、0269 の間で 2.35 m と広く、SP0277、0279 の柱間も 2.6 m の長方形でやや規模が大きい。床面積 6.11 m² である。柱穴の基底部は標高 4.9～4.8 m である。いずれの柱穴にも柱は残っていないものの、底に柱を据える凹みがあり、土層断面で柱痕跡が確認できる。

SB0593 (第 210 図、図版 87 (3～5))

L～M4 グリッド、2 面で検出した 1 間×2 間の掘立柱建物で、SB0590、0591、0594 と一部重複している。軸線は北側建物群に近い。主軸は N-84°-W の方向を取る。梁行き 1 間で梁間は SP0313、0267 間で 2.9 m と幅広く、桁行きは 2 間 (3.6 m) で SP0313、0315 の柱間が 1.8 m、SP0315、0366 の柱間 1.8 m の長方形である。床面積 10.44 m² で規模が大きい。柱穴の基底部は標高 4.9～4.7 m でばらつきがある。SP0267 は柱材の一部が底に残り、土層断面で柱痕跡が確認できる。SP0369 は SB0591 を構成する SP0569 を新たに切り込んだものである。SP0270 は底に 3 本の棒材が敷かれているが折れており、いくつかのピットが切り合っていると思われる。SP0315 は土層断面で柱痕跡が確認できる。

SB0594 (第 210 図)

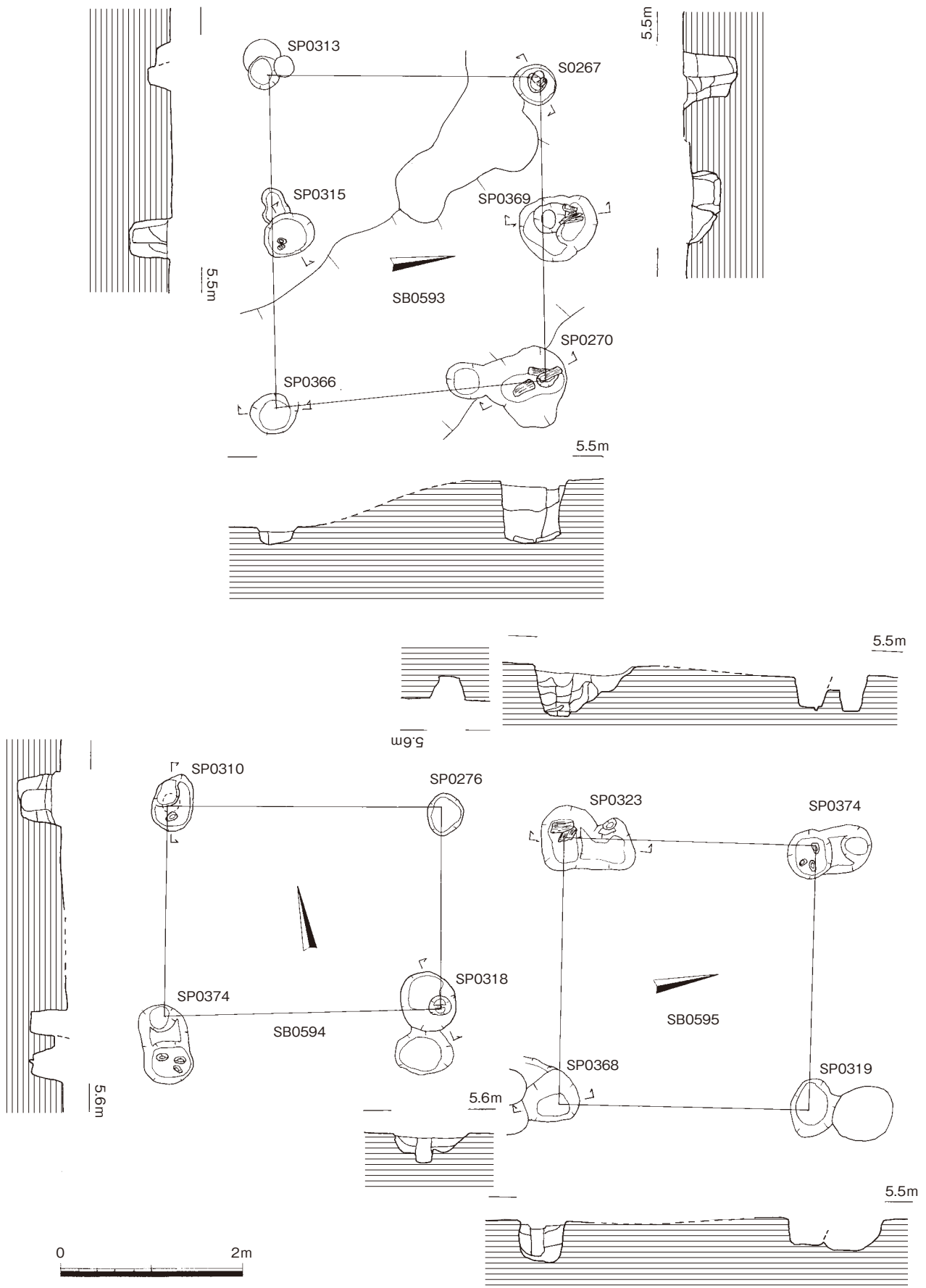
L～M4 グリッド、2 面で検出した 1 間×1 間の掘立柱建物で、SB0593 と一部重複している。軸線は SB0593 とほぼ同様で、主軸は N-81°-W の方向を取る。柱間は SP0276、0318 間で 2.28 m、SP0276、0310 間で 3.0 m の長方形である。床面積 6.84 m² である。削平により柱穴の残り具合は浅い。柱穴の基底部は標高 5.1～5.0 m である。柱、礎板は遺存していないが、SP3010、0318 の土層断面では柱痕跡が確認できる。

SB0595 (第 210 図、図版 87 (5・6))

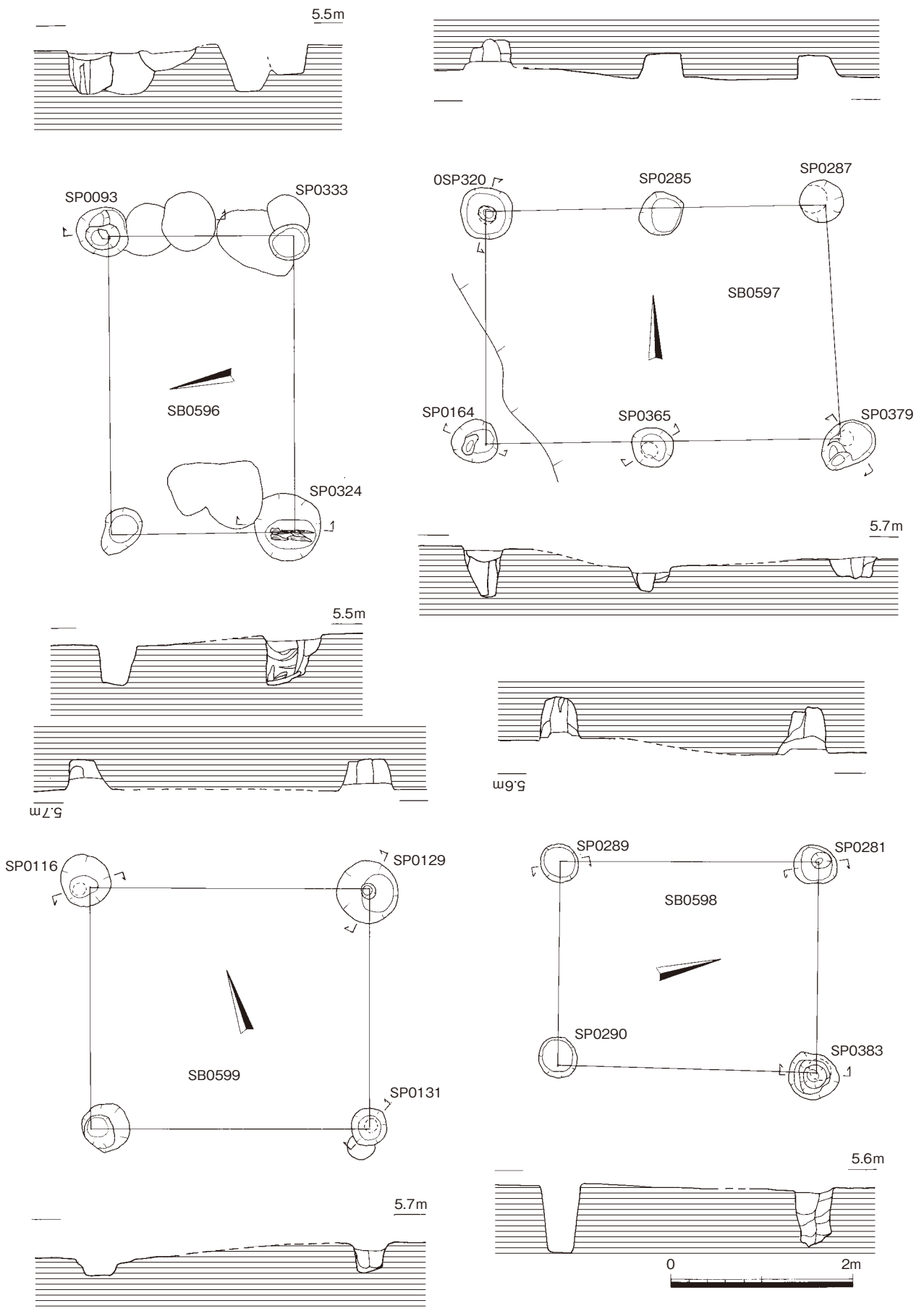
M3～4、L4 グリッド、2 面で検出した 1 間×1 間の掘立柱建物で、SB0596 と一部重複している。軸線は SB0593 とほぼ同様で、主軸は N-77°-W の方向を取る。柱間は SP0323、0324 間で 2.7 m、SP0323、0368 間で 2.9 m で正方形に近い。床面積 7.83 m² である。柱穴の基底部は標高 5.1～4.9 m である。柱、礎板は遺存していないが、SP0323、0368 の土層断面では柱痕跡が確認できる。SP0323 は底近くに礎板と思われる 2 枚の木質があり、また土層断面で柱痕跡が確認できる。SP0368 の土層断面でも柱痕跡が確認できる。

SB0596 (第 211 図)

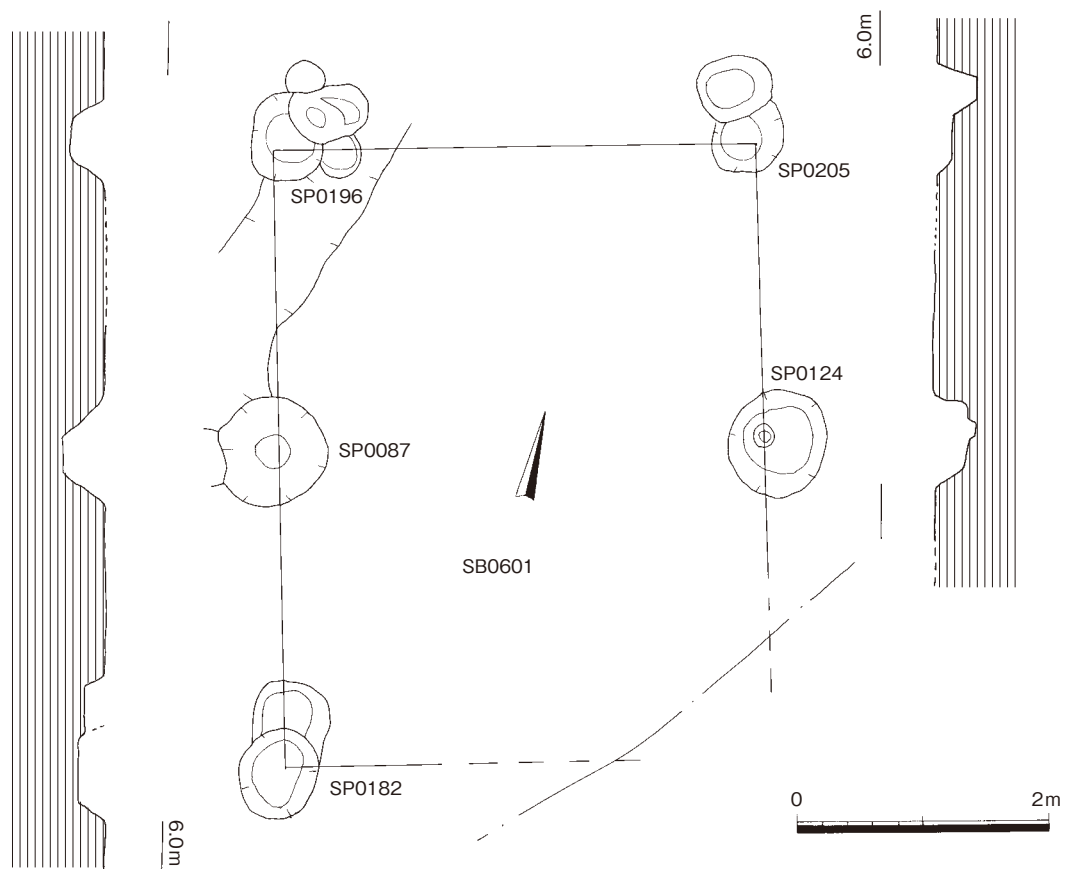
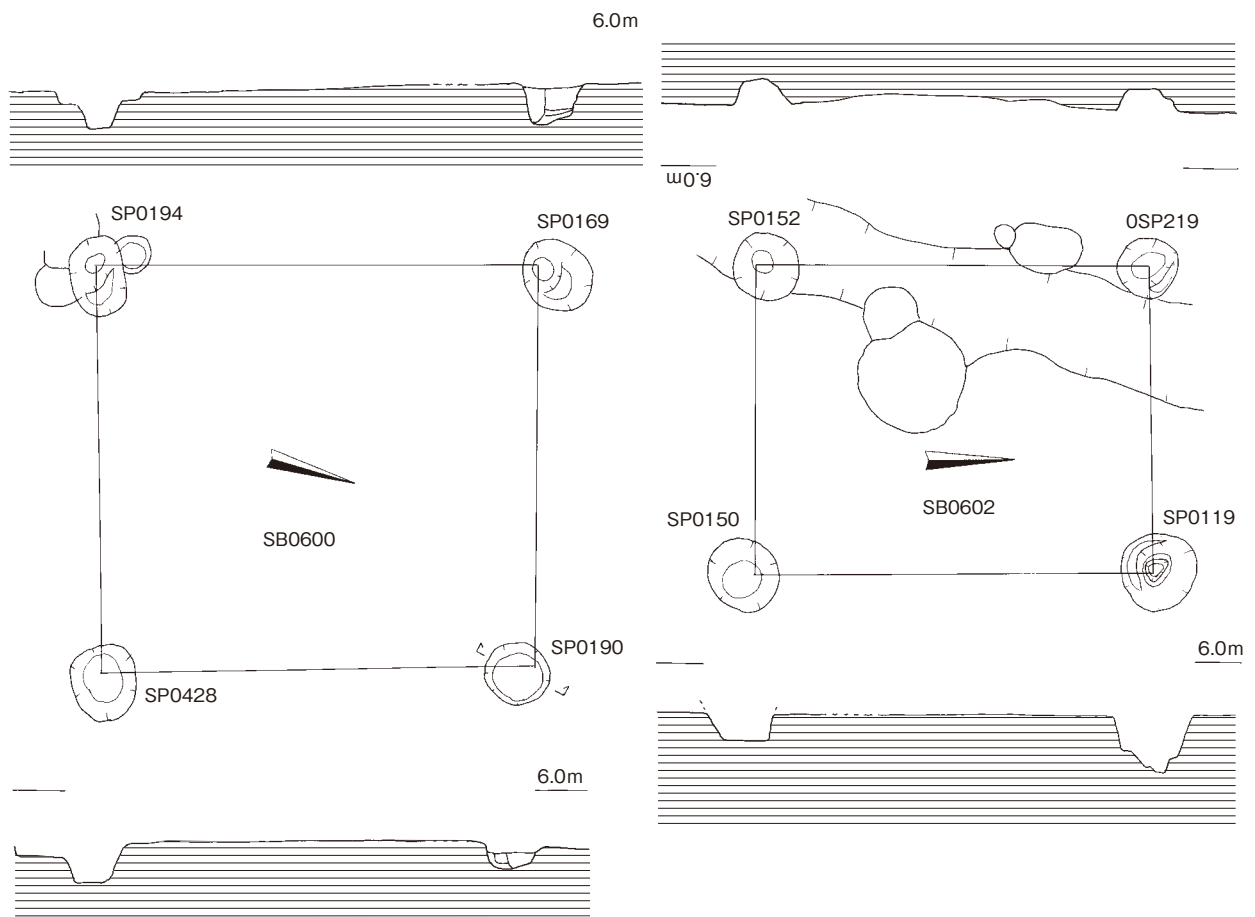
M3～4 グリッド、2 面で検出した 1 間×1 間の掘立柱建物で、SB0595 と一部重複している。軸線は SB0593～0595 とほぼ同様で、主軸は N-79°-W の方向を取る。柱間は SP0093、0333 間で 2.0 m、SP0333、0324 間で 3.25 m の長方形である。床面積 6.5 m² である。柱穴の基底部は標高 4.9 m である。SP0093 には遺存状態は良くないが、柱が約 30 cm が残っている。SP0324 には底に 4 本の棒状の木材が平行に置かれ、礎板に使われている。この上面には遺存状態は良くないが、柱材の一部が立った状態で出土している。



第210図 SB0593、0594、0595実測図(1/60)



第 211 图 SB0596、0597、0598、0599 实测图 (1/60)



第212図 SB0600、0601、0602実測図(1/60)

SB0597 (第 211 図)

M4 グリッド、2 面で検出した 1 間×1 間の掘立柱建物で、SB0598 と一部重複している。軸線は SB0593～0596 よりやや西に振れ、主軸は N-88°-W の方向を取る。梁行きは 1 間で、柱間は SP0320、164 間で 2.55 m、桁行きは 2 間 (3.9 m)、柱間は SP0320、0285 間で 2.0 m、SP0285、0287 間で 1.9 m の長方形である。床面積 9.69 m² である。柱穴の基底部は標高 5.2～5.15 m である。柱、礎板は検出されていないが、SP0320、0164、0365、0379 では土層断面で柱痕跡が確認できる。

SB0598 (第 211 図)

M4 グリッド、2 面で検出した 1 間×1 間の掘立柱建物で、SB0597 と一部重複しているが切り合いはない。南北に長い、軸線は SB0593～0596 とほぼ平行する。主軸は N-15°-E の方向を取る。柱間は SP0281、0383 間で 2.25 m、SP0281、0289 間で 2.85 m の長方形である。床面積 6.41 m² である。柱穴の基底部は標高 4.9～4.8 m である。SP0289 の底部には遺存状態は良くないが、柱材の一部が立った状態で出土している。SP0281、0383 では土層断面で柱痕跡が確認できる。

SB0599 (第 212 図)

Ⅲ区中央部、M3～4 グリッド、1 面で検出した 1 間×1 間の掘立柱建物で、SB0523 と一部重複しているが切り合いはない。軸線は SB0523 とほぼ平行する。主軸は N-73°-W の方向を取る。柱間は SP0129、0131 間で 2.6 m、SP0129、0116 間で 3.0 m の長方形である。床面積 7.8 m² である。柱穴の基底部は標高 5.1 m で、それぞれ 20～30 cm 程度の残り具合である。SP0116、0129、0131 では土層断面で柱痕跡が確認できる。

SB0600 (第 212 図)

N3～4 グリッド、1 面で検出した 1 間×1 間の掘立柱建物で、SB0601 に接し、軸線は SB0601 と平行する。柱間は SP0169、0190 間で 3.2 m、SP0169、0194 間で 3.5 m の正方形に近い長方形である。床面積 11.2 m² である。柱穴の基底部は標高 5.3 m で、Ⅲ区北側掘立柱建物群よりも柱穴基底面は 1 m 程高くなっている。柱穴の残りは非常に浅く、このことは平坦面造成前の自然地形を知る上での材料となろう。SP0169、0190 では土層断面では辛うじて柱痕跡が確認できるのみである。

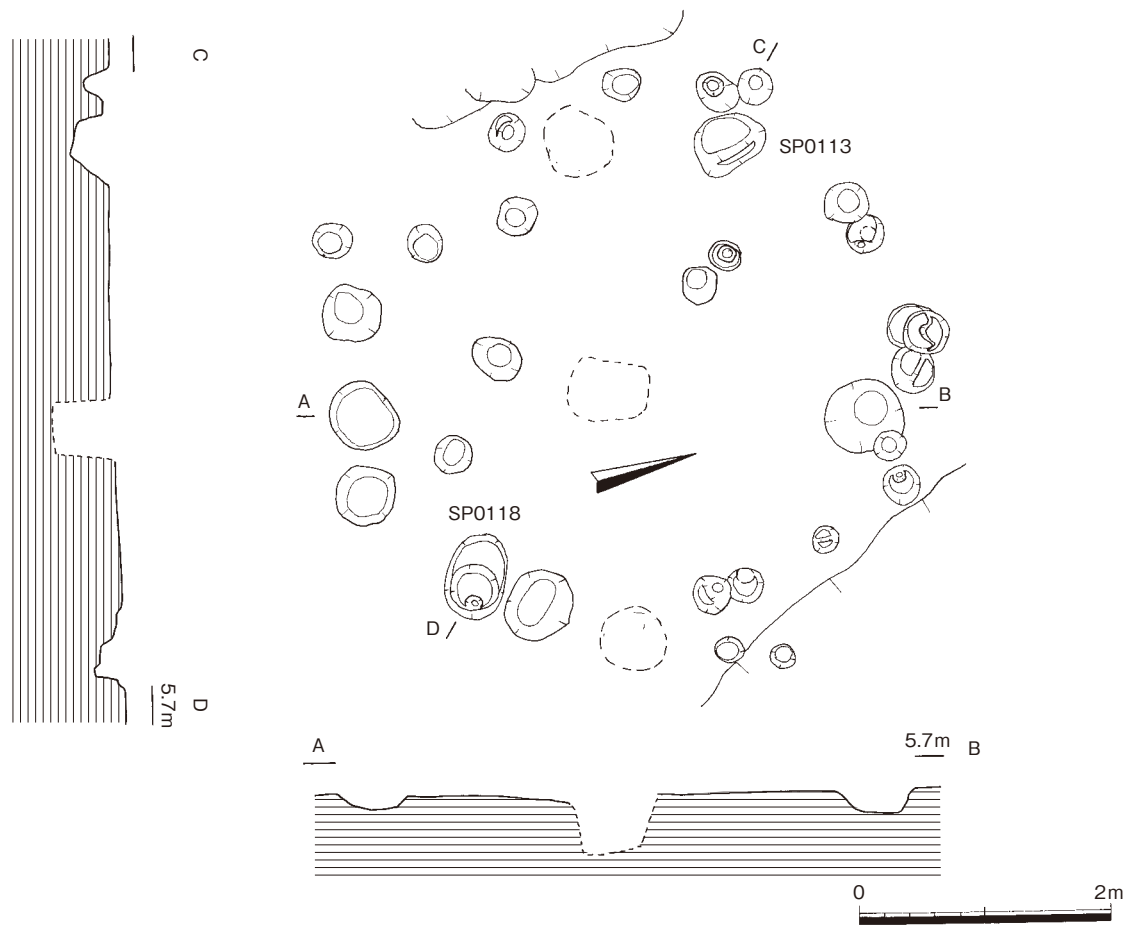
SB0601 (第 212 図)

N3 グリッド、1 面で検出した掘立柱建物で、SB0602 と一部重複しているが切り合いはない。東南角の柱穴は調査区外にあると想定され、1 間×2 間の規模であろう。南北に長く、軸線は隣接する SB0600 とほぼ平行する。主軸は N-14°-W の方向を取る。梁行き 1 間で、梁間は SP0196、0205 間で 3.25 m、桁行きは 2 間 (5.05 m) で SP0196、0087 の柱間が 2.5 m、SP0087、0182 の柱間 2.55 m の長方形である。床面積 16.41 m² で規模が大きい。柱穴の基底部は標高 5.4～5.2 m で、柱穴の残りは非常に浅い。SP0124 の底部には柱を据える凹みが確認できる。

SB0602 (第 213 図)

N3 グリッド、1 面で検出した 1 間×1 間の掘立柱建物で、SB0597 と一部重複しているが切り合いはない。南北に長く、軸線は SB0600 とほぼ平行する。主軸はほぼ磁北の方向を取る。柱間は SP0281、0383 間で 2.25 m、SP0281、0289 間で 2.85 m の長方形である。床面積 6.41 m² である。柱穴の基底部は標高 4.9～4.8 m である。SP0289 の底部には遺存状態は良くないが、柱材の一部が立った状態で出土している。SP0281、0383 では土層断面で柱痕跡が確認できる。

以上、現段階で想定できる掘立柱建物について述べてきたが、柱や礎板、あるいは柱痕が残り、明らかに柱穴であると判断できるものの中にも、相互の関連性がかめられないものも多くあり、全容が把



第 213 図 SC0603 実測図 (1/60)

握できる状況にはない。特にN3～4、O3～4グリッド付近の柱穴は浅く、平坦地造成時に相当の削平を受けているものと判断できる

⑧円形柱穴列

SC0603 (第 213 図)

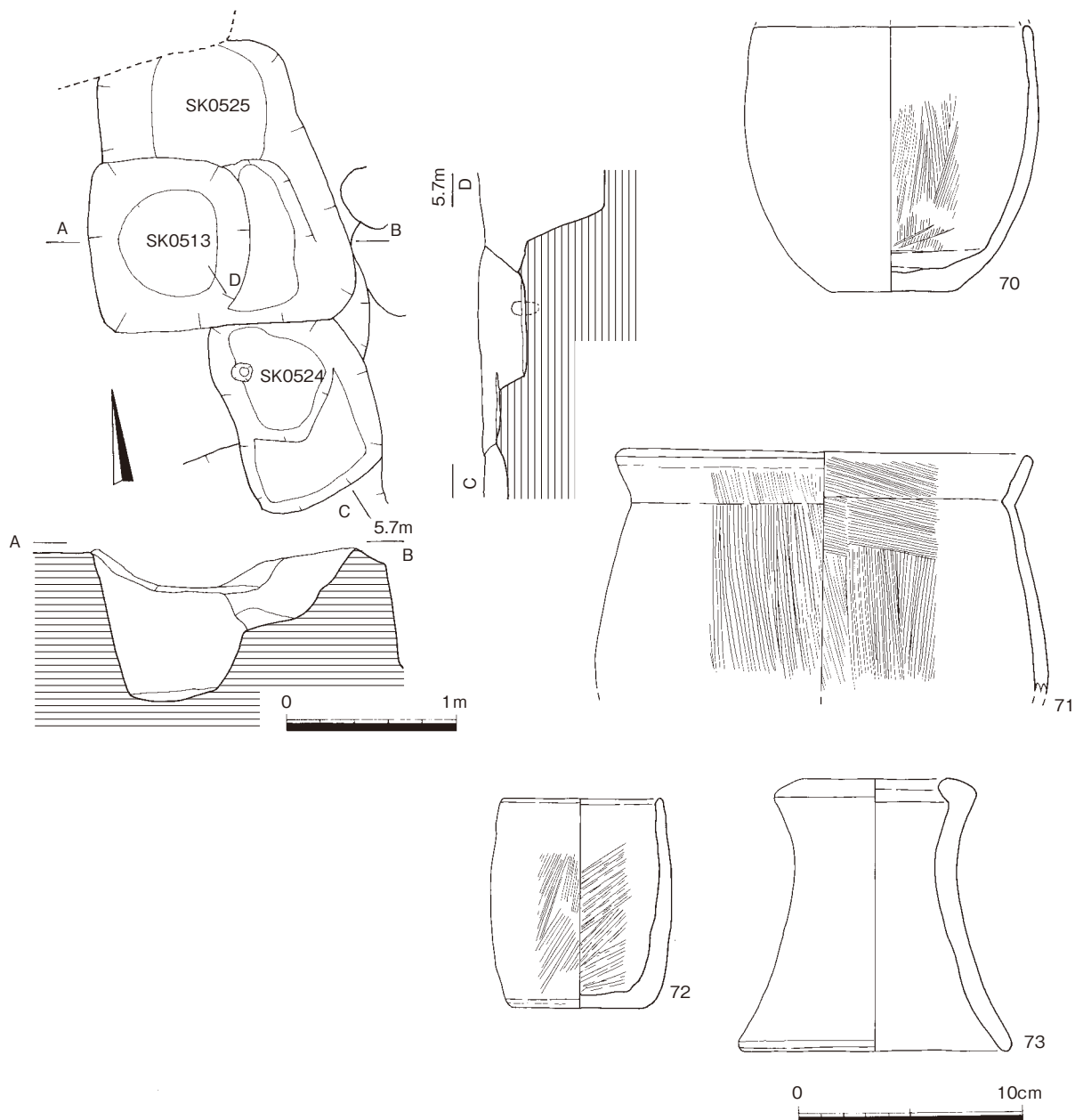
M、N4グリッド、2面で、図面上で想定した径約4.0m程に、20～30cm程の小振りなピットが並ぶ円形柱穴列である。SB0523と面的に重複している。SP0113、0114、0118はSB0523の北側桁行き柱穴列であり、本遺構とは直接関係はない。小振りなこれらのピットの中には、底に径10cm程の凹みを持つものも多く、木質は遺存していないがあるいは「円形杭列」と呼ぶべきかもしれない。何れのピットも削平により下部のみが遺存しているのみである。円形堅穴状居の周堤部分が削平され、屋根持ち材のピットだけが残ったものとも考えられるが、支柱穴と想定される柱穴はない。

⑨土坑

III区では柱穴、溝等の遺構は多いものの、人為的に掘り込まれたいわゆる土坑は少なく、SKの符号を付したものは0513、0514、0525のみである。

SK0513 (第 214 図)

M3グリッド、1面検出の土坑である。SB0523の北側桁行きの西側に接しているが切り合いはな



第214図 SK0513実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

い。SD0530 東端とSK0525、0534 を切っている。遺構の残り具合は良く、上面は1.5m×1.0mの長方形で東側に段を持ち、西側掘り込みは一辺1.0mのやや丸みのある正方形で、底は0.58m～0.63mの円形に近い。底の標高は4.75mである。立ち上がりから90cm程掘り下げられ、八女粘土層を掘り抜いている。このため水気が多く、埋土は黒色土で粘質が強く、この中にコンテナボックス二箱ほどの弥生時代終末～古墳時代早期のまとまった土器が投棄されていた。

図示した遺物について述べる。70は鉢または甕である。平底で体部は丸みを持ちつつやや直線的に立ち上がる。器壁が荒れ外面の調整は不明、また外反する口縁が付くのか、現況で収束するのか不明瞭である。内面体部下半は細かい縦刷毛目調整である。71は甕で短い口縁が外に開き、体部は直線的に下に伸びる。外面は縦方向の細かい刷毛目、内面は下方が縦方向、上半から口縁部にかけては斜め横方向の細かい刷毛目調整である。外面には煤が付着している。72は底部が広く安定した円筒

形の鉢である。体部は厚く、手づくねのようであるが内面は斜め方向の粗い刷毛目調整を行い、外面も同様の粗い刷毛目が見られる。73は器台である。厚い体を持ち、二次被熱により赤褐色を呈す。下端から胴部上半にかけてくびれ、体部上半から外反し、口縁部はさらに鏝状に短く内湾する。

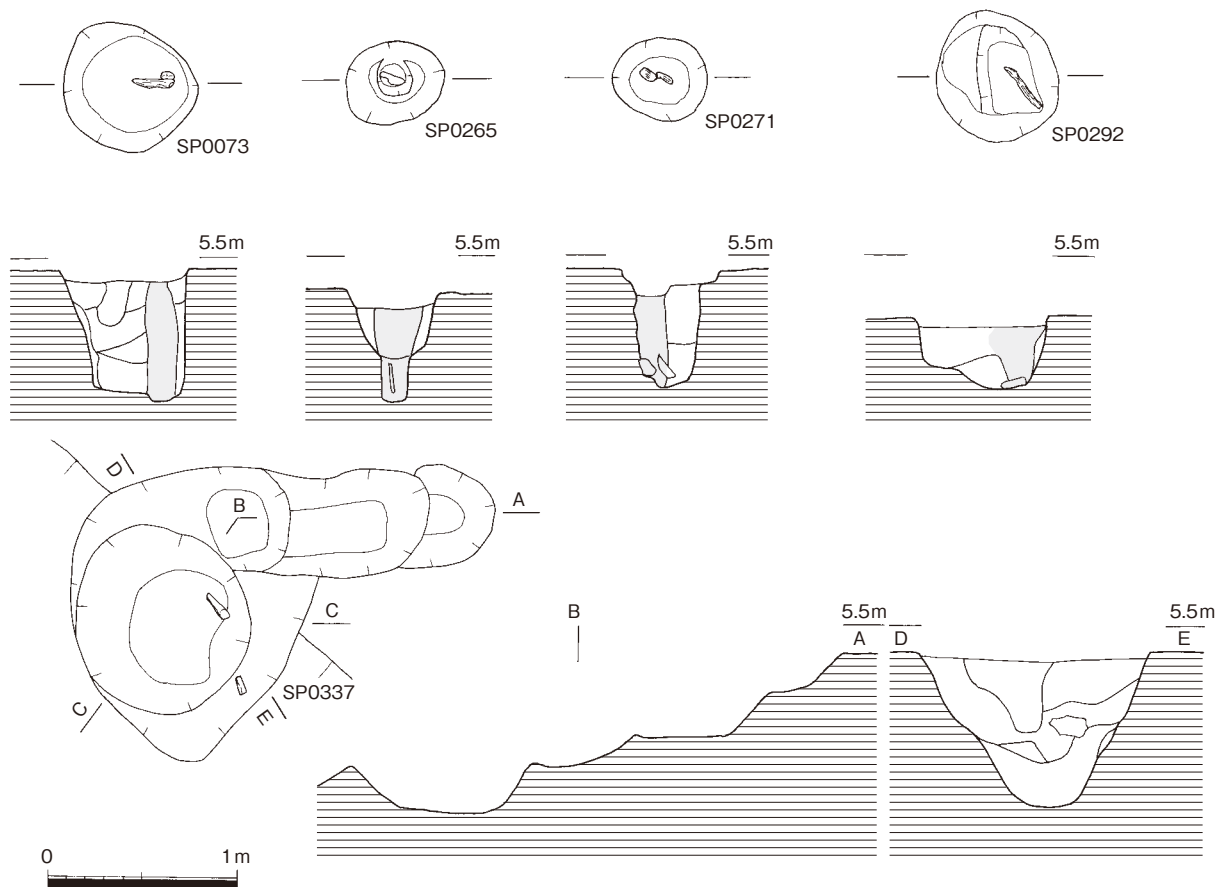
SK0525、0534はSK0513に切られているが、両者ともに床面標高は近く、本来は一連の溝状遺構であったかもしれない。

⑩柱穴

Ⅲ区で検出した柱穴およびピットは総数456個におよび、きわめて高密度である。そのため発掘段階で限られた時間の中で掘立柱建物の柱穴間の関連性を把握することは困難で、その段階で確認できた建物は数棟に過ぎない。先述したように、整理段階で約20棟の建物を想定することができたが、礎板、柱が検出され柱穴であることは明らかであるにもかかわらず、関連性が把握できないものも多い。ここでは柱が検出されたそれら単独の柱穴、特徴的な遺物を含んだ柱穴、ピットについて述べる。

SP0073 (第215図)

L4グリッドの1面、掘立柱建物群の東端部で検出している。70 cm × 60 cmの楕円形の掘方を持つ。検出面からの深さは70 cmである。土層断面で観察できるように底の片側に偏し柱が置かれる。この柱痕跡の最下面に横に置かれた礎板の棒状木質があり、その脇に柱の一部と見られる長さ10 cm程の木片が縦に置かれていた。



第215図 SP0073、0265、0271、0292、0337 実測図 (1/40)

SP0265 (第 215 図)

L4 グリッドの 2 面、掘立柱建物の集中部で検出している。SB0588、0589 と重複する。55 cm × 42 cm の楕円形の小さな掘方を持つ。検出面からの深さは 55 cm である。土層断面で観察できるように深い鉢状の掘り込みの底にさらに柱部分だけを掘り下げている。この柱痕跡の最下面に柱の一部と見られる長さ 15 cm 程の木片が縦に立った状態で検出された。

SP0271 (第 215 図)

L4 グリッドの 2 面、掘立柱建物の集中部東南側で検出している。SB0592 と重複する。50 cm × 38 cm の楕円形の小さな掘方を持つ。検出面からの深さは 65 cm である。掘方の南側に偏して柱痕跡があり、この柱痕跡の最下面に柱の一部と見られる長さ 15 cm、10 cm 程の木片が 2 点縦に立った状態で検出された。

SP0292 (第 215 図)

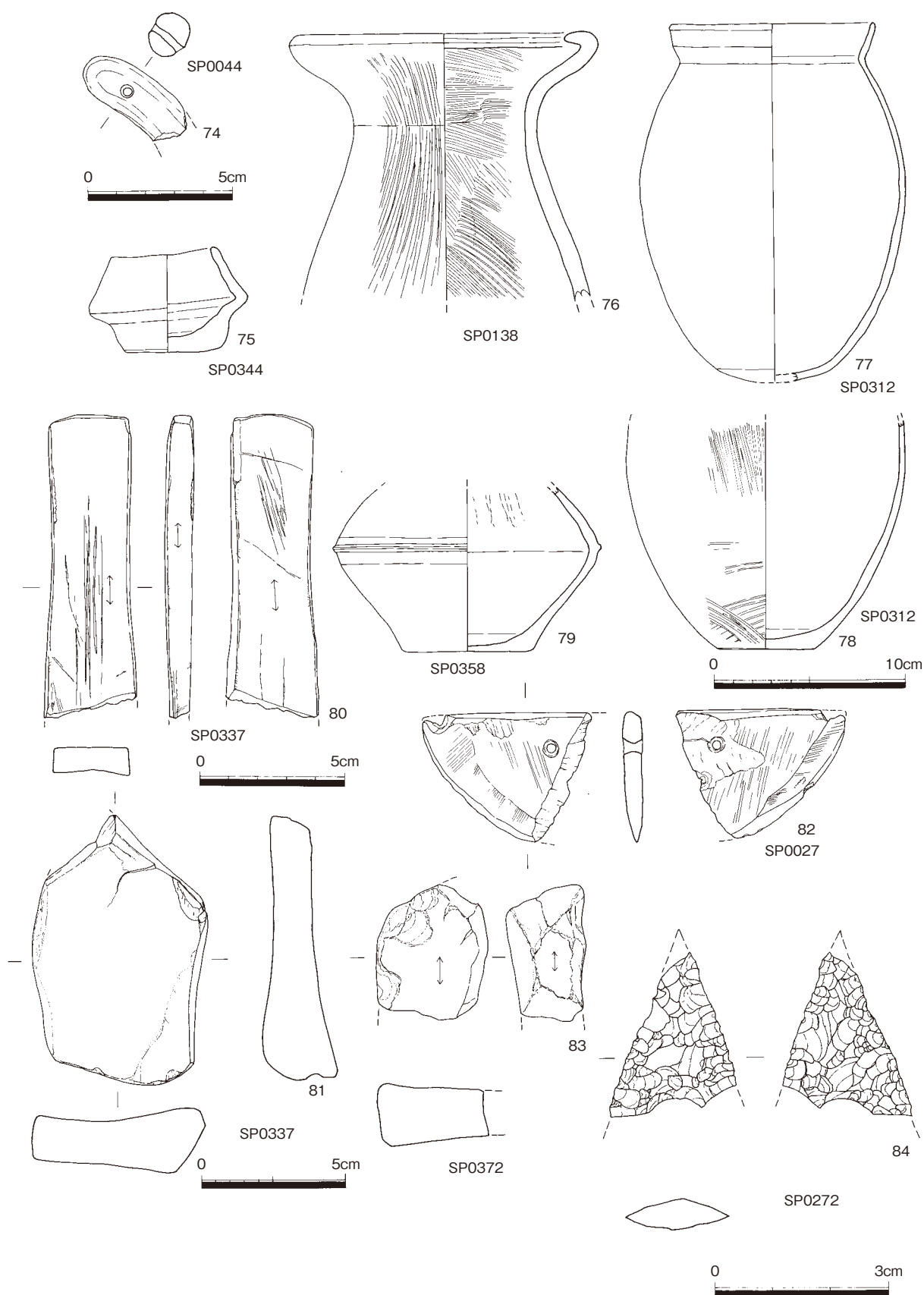
K・L4 グリッドの 2 面、掘立柱建物の集中部東南側で検出している。SB0581 と重複する。70 cm × 60 cm の楕円形で二段の掘方を持つ。検出面からの深さは 38 cm と浅いが、検出面のレベルが低かったため、基底面標高は 4.8 m で周辺の柱穴と大差ない。掘方の最下面に長さ 30 cm の横木があり、礎板として使用されたものである。この柱痕跡の最下面に柱の一部と見られる長さ 15 cm、10 cm 程の木片が 2 点縦に立った状態で検出された。

SP0337 (第 215・216 図)

M3 グリッド 1 面検出遺構である。遺構検出時に柱穴の遺構記号を付したためこの項で述べるが、整理段階で別の機能を持つ事が明らかになった。SP0337 は辺 1.6 m、1.3 m の不整三角形の形状をしており北東側に本体部底と 20 cm ほどの比高差を持つ段を持っている。この段に接する SP0102 と段との比高差は約 10 cm、SP0102 とそれに接する SP0101 との比高差 25 cm である。すなわちこれらの遺構は一連のもので、SP0101 から SP0337 へと降りる階段状の通路と考えられる。先述した SX0505 同様に SD0501 の拡幅造成により一部削られている。SP0337 では小破片のため図示していないが古式土師器が含まれる。図示した 80・81 はいずれも砥石である。80 は粘板岩製で短冊状に整えられ、上下両面、両側面が砥面として使用されている。下面が一部欠損しているが、現存長 10.5 cm、最大幅 3.2 cm、厚さ 0.9 cm の小型品である。81 は硬質砂岩を用いたもので一部欠損しているが、現存長 18.8 cm、最大幅 12.0 cm、5.3 cm である。上下両面、及び全側面が砥面として使用されているが、特に上下両面は使用により大きく凹んでいる。砥石が 2 点まとまって出土したことは、河川 SD0501 に近い SP0337 が研ぎに関わる作業場で、SP0101、0102 はそこに降りる通路であったと思われる。

以下第 216 図に図示したピット出土遺物について述べる。

74 は N3 グリッド 1 面、SP0044 (0178 と同一) で出土した土製勾玉の頭部破片である。SP0044 は環状小溝 SD0510 の西南端部、古式土師器集積のすぐ南に位置し (第 194 図)、SD0510 の下位で検出された。焼成良好な手づくねで、頭部に穿孔されている。75 は M4 グリッド 2 面検出の SP0344 から出土した手づくねの小型土器である。分厚く平坦で安定感のある底部から急激に外反しさらに体部は口縁部にかけて直線的に内傾する。口径 5.5 cm、胴部最大径 8.2 cm、底径 5.5 cm で、ゆがみがあり、器高 5.5 cm である。器壁はあれている。祭祀用土器であろうか。76 は M4 グリッド 1 面検出の、環状小溝 SD0516・0517 の間に所在する、SP0138 出土の器台である。体部上半は外反し、口縁部は丸を帯びるが急激に内湾している。二次被熱により胎は赤化し、脆くなっているが、器壁調整痕は明瞭である。外面は縦方向の刷毛目、内面は上部が横方向、下半が斜め方向の刷毛目である。77・78



第 216 図 ピット内出土遺物実測図 (84 は 1/1、74、80、82、83 は 1/2、1/3、81 は 1/4)

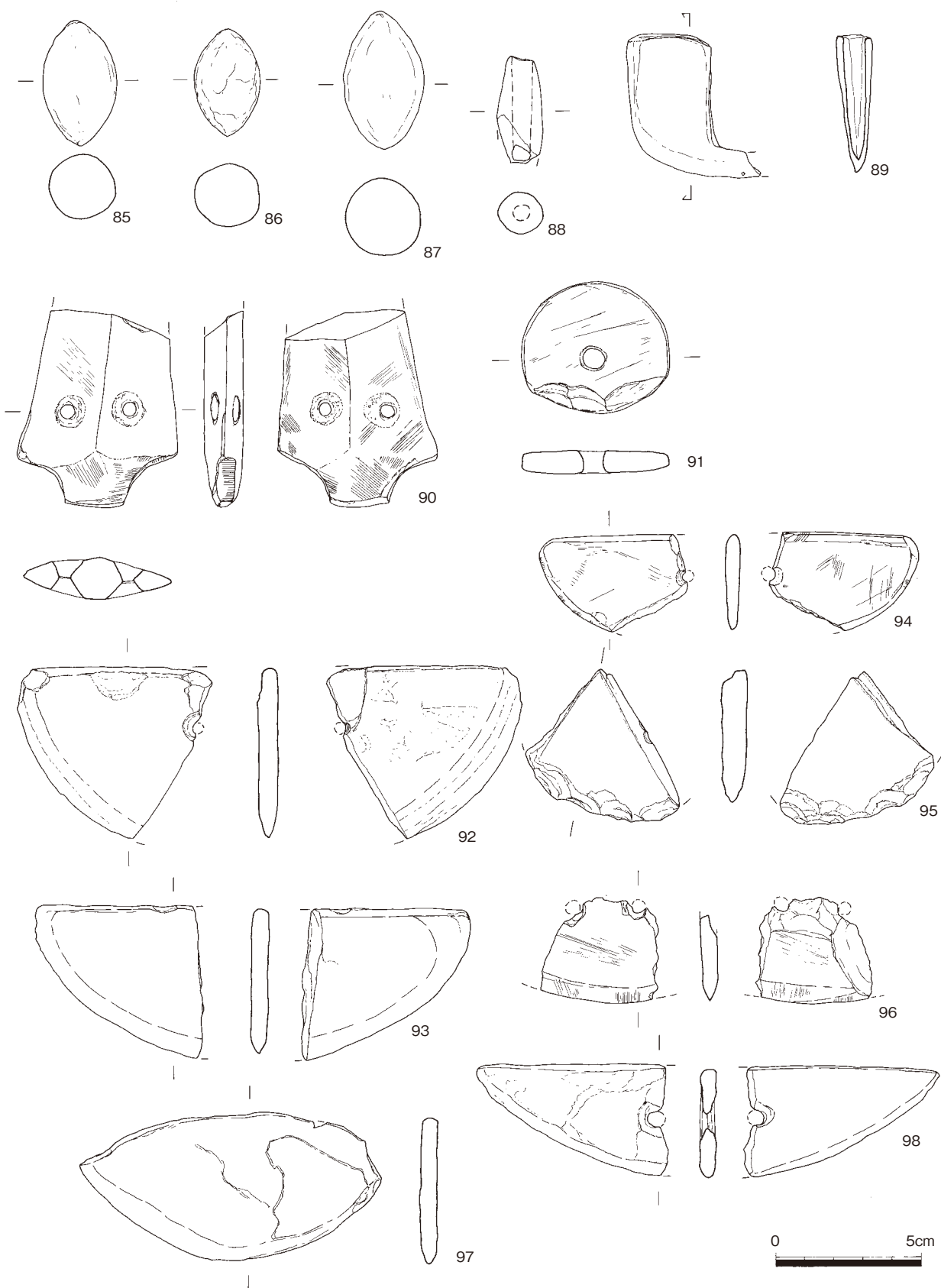
はSP0312出土の甕である。SP0312はL4グリッド2面検出で、同グリッドの掘立柱建物群の西側に所在し、西側がSD0501に接する。このピットは二段掘り柱痕跡も明らかに残っているが、これに関わるピットは周辺に見られない。SD0501の改修掘削で一連の柱穴は欠失したものであろう。78は上半を欠失しているが、77とともに同形の甕であろう。細長い胴で、77の口縁部は斜め外方に開く。二次被熱により器壁は荒れ調整痕は不明である。78も二次被熱により器壁は荒れているものの、外面の調整痕は観察できる。上半は細かい縦方向の刷毛目、下半は横及び斜めの荒い刷毛目である。弥生後期後葉に位置づけられよう。79はN3グリッド、2面検出のSP0358出土の小型壺である。胴部最大径14.2cmと小振りである。体部上半以上を欠くが広口壺であろう。胴部に一条の突帯を巡らす。器壁が荒れ調整痕は明瞭でないが、外面下半にはヘラ磨きの痕跡が見られる。77・78同様弥生後期後葉に位置づけられよう。82はM2グリッド1面で検出したSP0027出土の石包丁である。輝緑凝灰岩製で刃部と背は丁寧に研磨されているが、平坦面は主要剥離面が残り研ぎは荒い。SP0027は径40cm、現存深さ40cmで、底に半月状の礎板があり柱穴であるが、関連する柱穴は確認できない。SD0501側に広がっていたものか。83はK4グリッド2面検出のSP0372で出土した砥石破片である。砂岩を用い、上下両面と側面の一部を砥面としている。SP0372はSB0581を構成する柱穴の一つであり、差し込み式の柱と礎板を持つものである。84はL4グリッド2面で検出したSP0272出土の石鏃である。黒曜石製で両面丁寧に剥離を施す。有脚であるが脚部と先端を欠損している。

①遺構外出土遺物

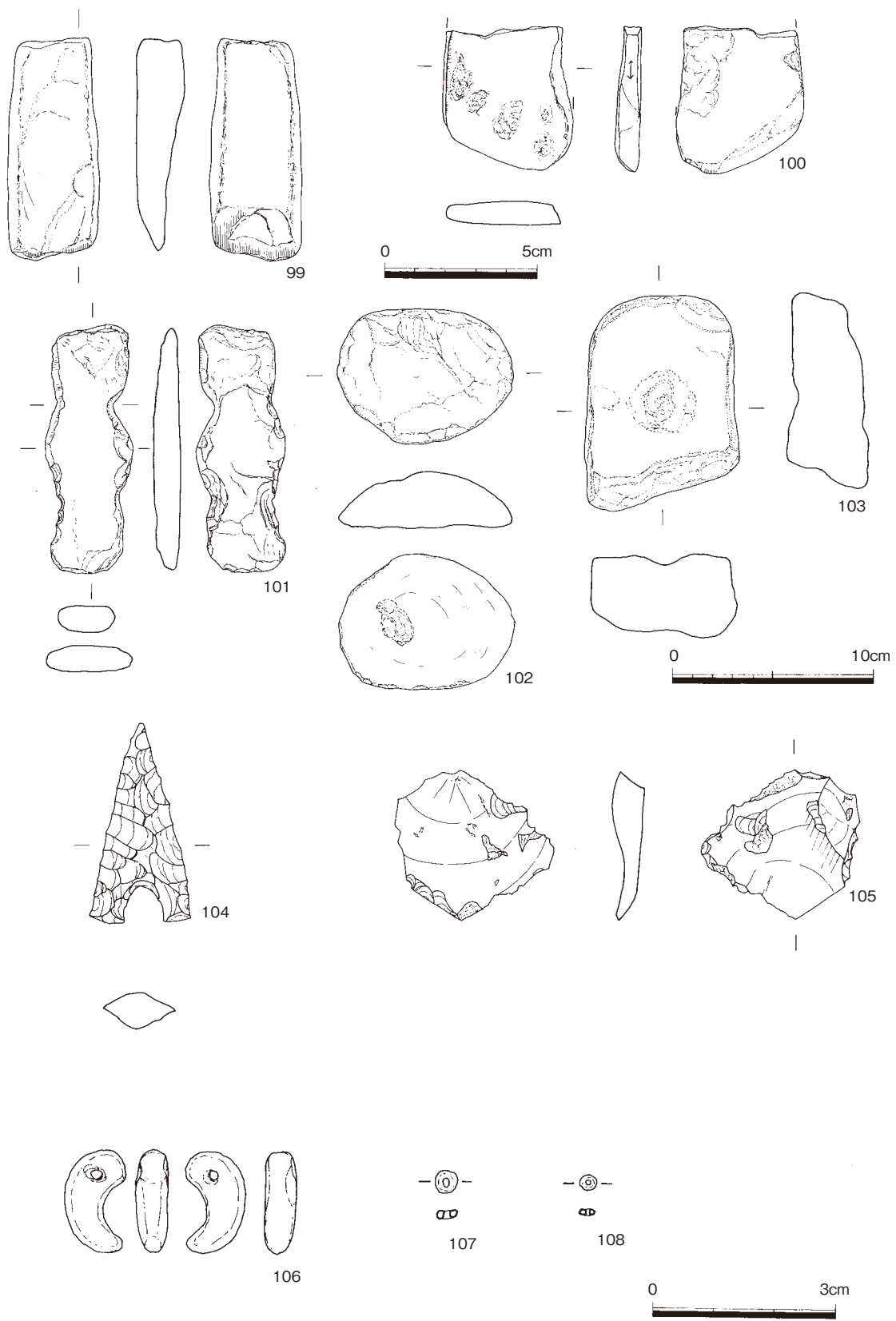
Ⅲ区では弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて、大規模な造成事業によって平坦面が形成されている。この平坦面のほぼ全域を10～20cm程の厚さで黒褐色の包含層が覆い、この中に造成によって掘り起こされた遺物や平坦面を使用した後世の遺物が混在する。遺構検出面は包含層中とその最下面で確認でき、それぞれ1面、2面としている。ここでは遺構に伴わない遺物のうち、特徴的なものについて取り上げることとする。

1 面出土遺物 (第217～219図)

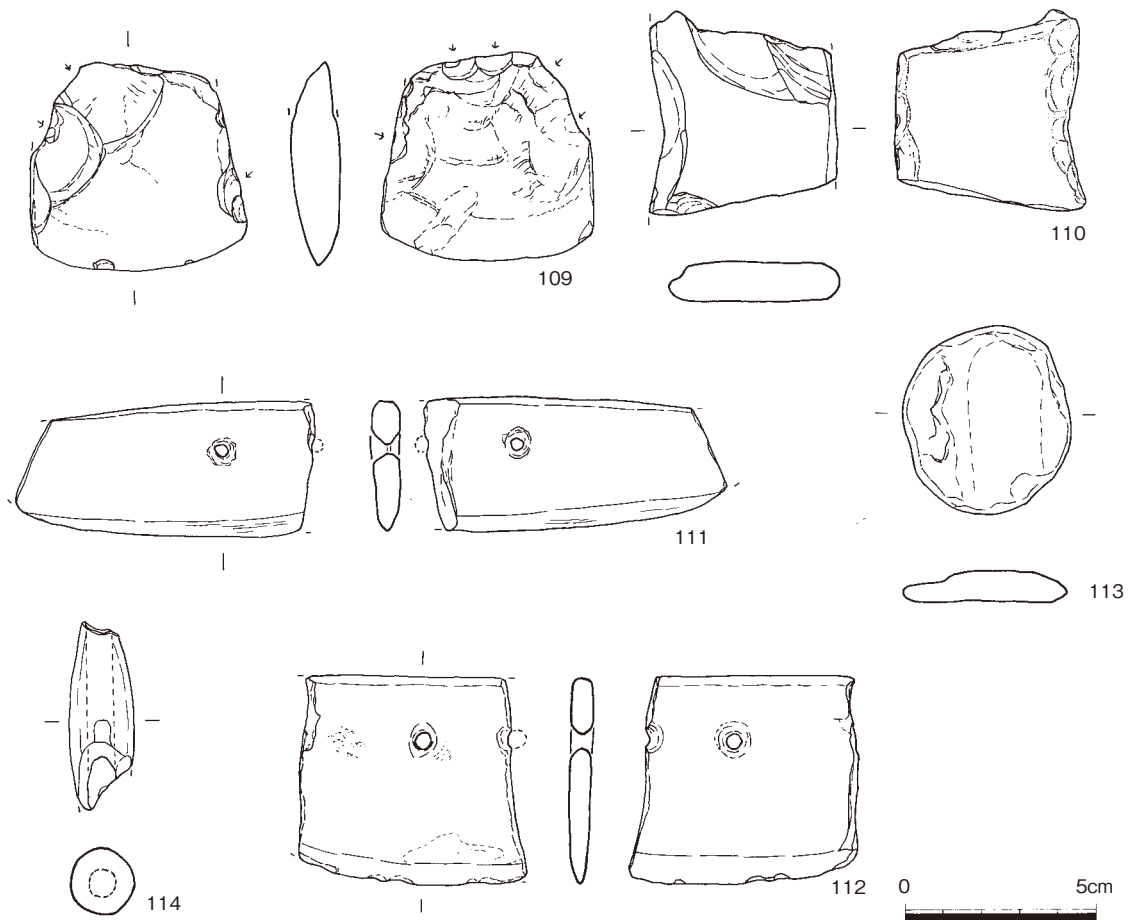
85～87はラグビーボールの形状をした土製投弾で、長さ3.7～4.8cm、胴径2.3～2.6cmと大きさには若干の差がある。二次被熱もしくは焼成不良のため表面は荒れている。いずれもL3グリッド検出である。88は土錘である。一端を欠くが、孔の部分には条痕が残り、棒状のものに土を巻き付け、引き抜いたことが観察できる。N3グリッド出土である。89は青銅製鋤先で、刃部は長期の使用により摩耗しておりほぼ中央部で折れている。N3グリッド出土である。90は石戈である。きめの細かい硬質砂岩が使用されている。先端部は欠損している。両面丁寧に研ぎ分けられ、鋭い刃部を形成し、断面は菱形を呈す。関部分には細かい擦痕が観察され、丁寧に削りにより挟り込み、短い茎部を形成する。2個の穿孔があり、いずれも上下両面からの回転によるものである。M5グリッドの出土である。91は滑石または片岩を用いた紡錘車である。上下両面と側縁を丁寧に研磨している。厚さ0.75cmで、中心に両面からの回転による径0.8cmの穿孔がある。本来直径5.1cmの正円形であったものであるが、一端を破損し、破損部分を再度研磨している。L4グリッド出土である。92～98はいずれも石包丁である。92は薄い節理が目立つ粘板岩製で、器壁は風化し研磨痕は不明である。M3グリッド出土である。93は安山岩製で、風化が甚だしく研磨痕は不明である。M4グリッド出土である。94は緑泥片岩製で、両面丁寧に研磨が行われ、刃部の研ぎ出し痕も明瞭に観察される。O3グリッド出土である。95は砂質粘板岩製で、両端を欠いており全体形は不明である。上下両面とも研磨痕跡は見られないものの、下端部分には刃部を作り出すための双方向からの加工が見られる。石



第217図 1面出土遺物実測図(1) (1/2)

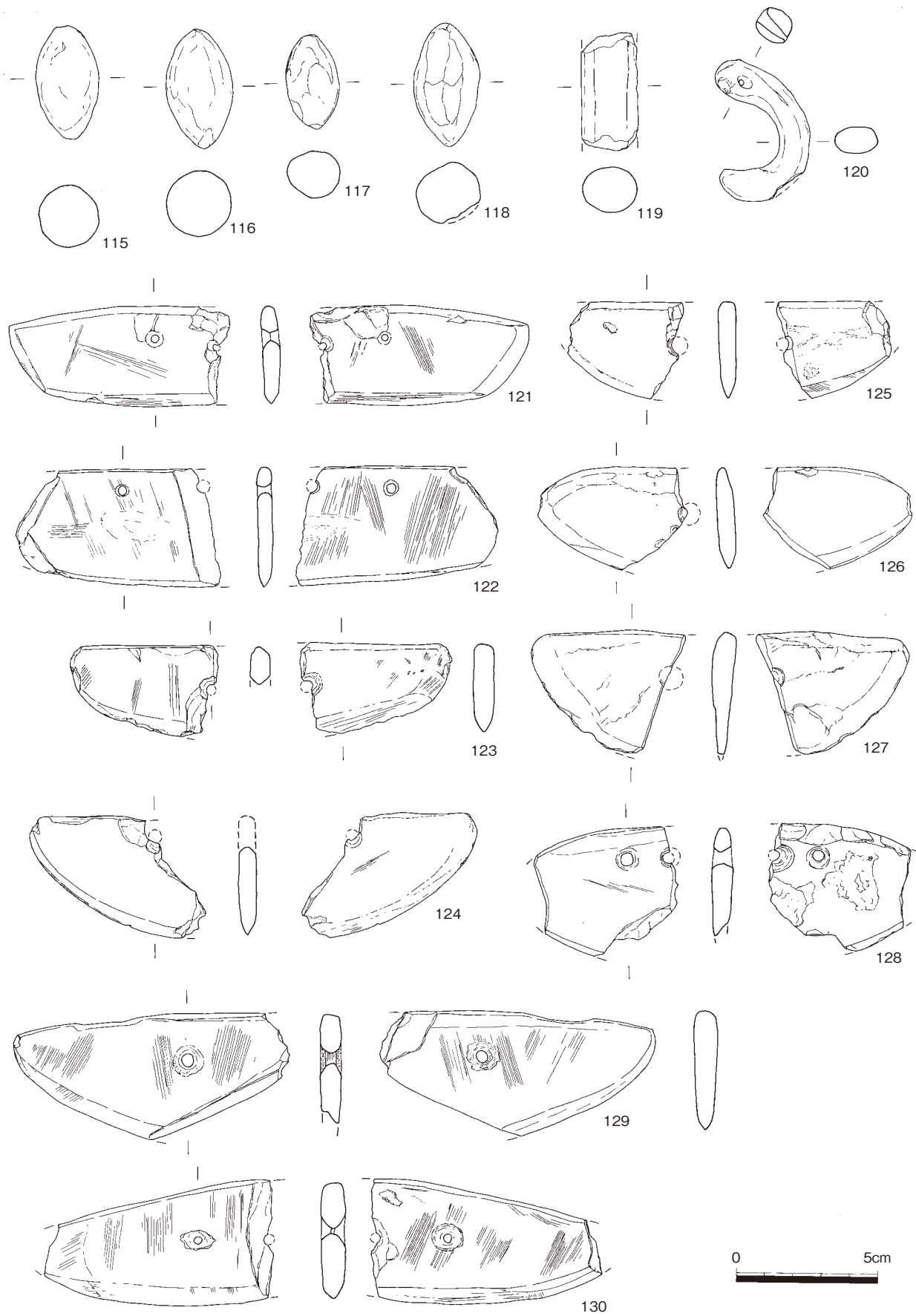


第 218 図 1 面出土遺物実測図 (2) (1/1、1/2、101~103 は 1/3)

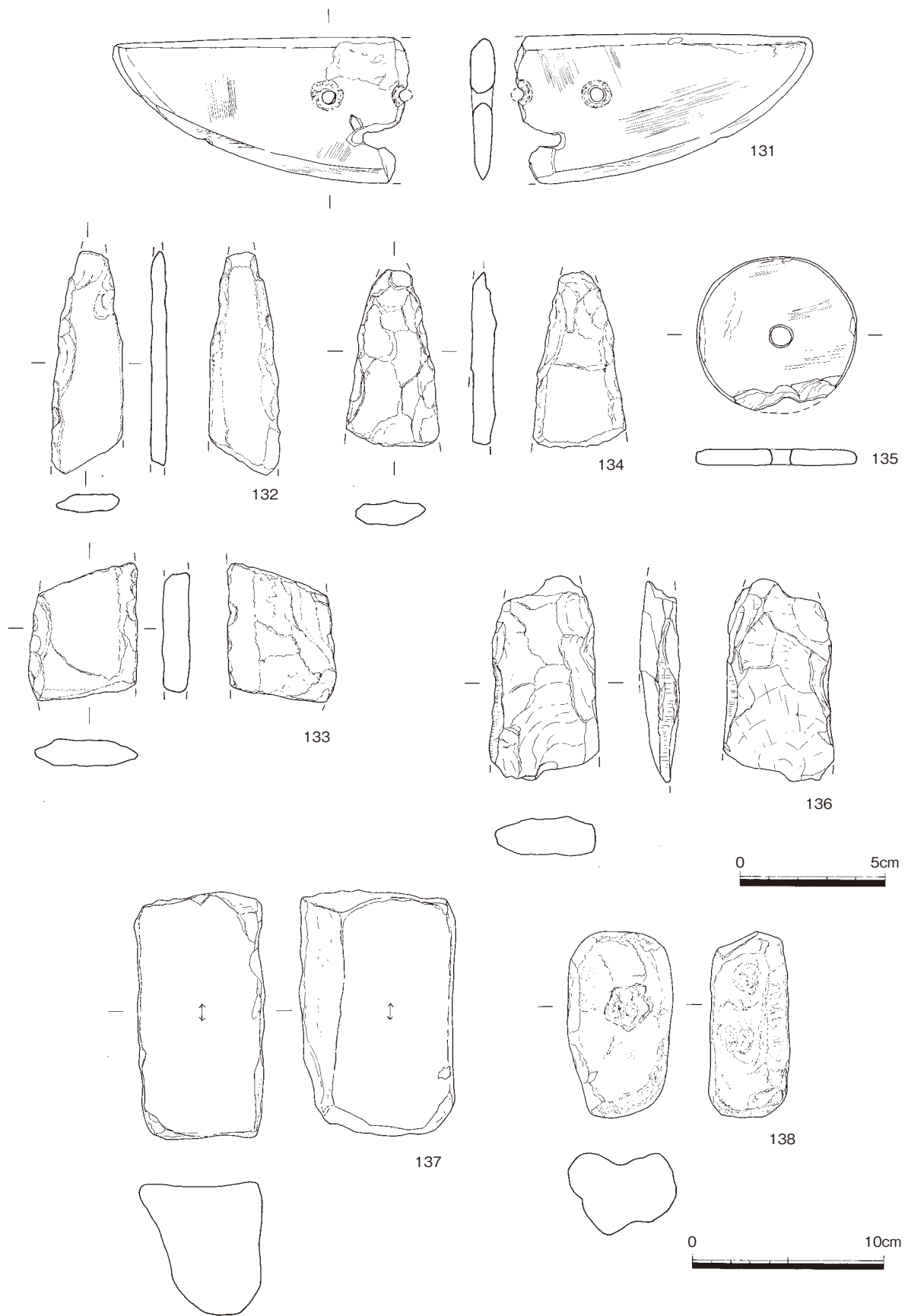


第219図 1面出土遺物実測図(3) (1/2)

包丁製作過程で破損し廃棄されたものであろう。M4グリッド出土である。96は小豆色の輝緑凝灰岩製上面及び両側を欠損しているが、上端に2箇所の穿孔が観察される。両面丁寧な研磨が行われ、刃部の研ぎ出し痕も明瞭に観察される。M4グリッド出土である。97は節理の目立つ砂質粘板岩製である。表面は風化により明灰色を呈するが、破面は黒灰色である。上下両面とも節理による剥離面がそのまま研磨は見られず、穿孔も見られないが、刃部は研ぎ出されており石包丁の未製品であろう。M4グリッド出土である。98は明灰色の片岩と思われる石材を使用したもので、二次被熱による剥離が目立ち、器壁が荒れ研磨痕跡は明瞭でない。99は片岩を用いた長さ7.4 cm、幅3.0 cm、最大厚1.6 cmの小型の磨製石斧である。垂角柱状の礫の一端を研磨し、両刃の刃部を形成している。しかしながら片面は大きく面的に研磨しているものの、他面刃部はわずかに研磨するのみで、片刃に近い。M4グリッド出土である。100は安山岩を用いた石器で、上下両面ともに滑らかな研磨がなされており砥面と考えられる。片側の砥面上には刺突状の敲打痕跡が数カ所残っている。また片側の側面は破面となっており不明であるが、他の側面と下端一部も滑らかな研磨がなされている。下端の先端部には刃部を研ぎ出した痕跡も見られる。本来扁平片刃石斧であったものが、一部破碎したことにより砥石に転用され、さらに工作台、敲石としても使用されたものであろう。M5グリッド出土である。101は緑泥片岩を使用した異形の石器である。長さ13.0 cm、最大幅4.25 cm、厚さ1.3 cmで、上下面には節理による剥離面が残る。両側面の対峙した位置に2箇所のくびれが作られている。この挟り



第220图 2面出土遺物実測図(1) (1/2)



第 221 図 2 面出土遺物実測図 (2) (1/2、1/3)

ははじめ敲打による剥離で大まかなくびれを作り、その後鋭い縁辺を持つものに直角に当てることによって滑らかなくびれを作り出している。そのためくびれ部には線状の敲打痕が残されている。用途については明確にしがたい。M5グリッド出土である。102は安山岩円礫の剥離したものを再加工し、縁辺部に刃部を作り出したものである。チョッパー的な機能を持つものであろう。礫自然面には敲打痕が残されており、本来はハンマーとして使用されたものが剥落し、再加工されたものであろう。O3グリッド出土である。103は凹石である。節理で半折した礫岩または粗い砂岩の垂角礫を用いたもので、上下両平坦面に敲打による凹みが残る。側縁の一部に敲打による剥離も見られ、敲石としての機能も備えていたものである。O2グリッドの出土である。104は黒曜石製の石鏃である。長さ3.4cmと大型である。丁寧な剥離をしているが、分厚い仕上がりになっている。L4グリッド出土である。105は加工のある黒曜石剥片である。上下面で剥離の方向が逆になっている。M5グリッド出土である。106～108は玉類である。106はクロム白雲母と思われる石材を使用した勾玉である。濃緑色であるが部分的に灰白色、黒色の筋が入る。全長17.25mmと小型である。F2グリッド出土である。107・108はガラス小玉である。107は青紺色の色調で、最大径3.90mm、最小径3.76mm、厚さ1.68mmの小さなものである。N3グリッド出土である。N3グリッド出土である。108は淡緑色の色調で、最大径2.84mm、最小径2.59mm、厚さ1.21mmとさらに微細なものである。109は磨製石斧の刃部破片に二次加工を加えたものである。石材は硬質粘板岩である。表面は風化しているが刃部は両面からの研磨により作り出されており両刃である。刃部を除く3方向、上下両面から打撃を加え形を整えている。N3グリッド出土である。110はやや目の粗い粘板岩で上下を欠損している。上下面ともに節理による平坦面が残るが、両側縁は敲打による調整が行われている。これに類似する132～134などの石器があり、石剣の未製品とおもわれ、製作途中に破損したものであろう。O3グリッド出土である。111は灰色の片岩を用いた細長の石包丁である。研磨痕跡が明瞭に残されている。112は砂岩を用いた幅広の石包丁で、両端を欠く。風化が進み表面は荒れている。刃部に欠損が目立つ。Ⅲ区中央部を南北に流れる近現代用水溝からの出土である。113は滑石の扁平礫を用いた円盤形の石器である。5.0cm×4.4cmの楕円形で厚さ0.8cmである。周縁を敲打により整形し、周縁全体を研磨したものである。114は土錘で一端を欠く。上部攪乱土から出土したものである。

2面出土遺物(第34・35図)

115～118はラグビーボールの形状をした土製投弾である。長さ3.3cm～4.4cm、径1.7cm～2.3cmと大きさは様々である。全体に二次被熱による器壁の荒れが目立つ。115はL5グリッド、118はM3グリッド出土である。119は手づくねの楕円柱形棒状土製品である。上下両端を欠き全体形、用途もともに不明である。120は手づくねの土製勾玉である。釣り針状で細長く、頭部は丸味を持ち片側からの孔が開けられているが、胴部はやや扁平である。胎土が粗く、また焼成が甘いため表面は荒れ、一部剥落も見られる。121～131は石包丁である。121はやや明るい小豆色の輝緑凝灰岩製石包丁である。刃部、平坦面ともに丁寧な研磨痕が残る。O4グリッド出土である。122は暗灰色の粘板岩製石包丁である。刃部、平坦面ともに丁寧な研磨痕が残る。穿孔は敲打痕が見られず、回転穿孔だけで行っている。123は片岩と思われる石材を使用している石包丁である。小振りであるが分厚い。刃部、平坦面ともに丁寧な研磨痕が残る。124は輝緑凝灰岩製石包丁である。刃部、平坦面ともに丁寧な研磨痕が残る。125はやや明るい小豆色をした輝緑凝灰岩製石包丁である。表面に刺突状の敲打痕跡が残っている。O3グリッド出土である。126は緑泥片岩製石包丁である。表面の風化が進んでいる。127は緑泥片岩製石包丁である。上下両面ともに節理による主要剥離面が残され、未研磨部分が多く残る。128は凝灰岩製石包丁である。一部主要剥離面が残され、未研磨部分が残るが、全体的

に滑らかな研磨が施されている。129は灰色できめの細かい砂質粘板岩製の石包丁である。背の部分に意図的に施されたと思われる凹みが見られる。刃部、平坦面ともに丁寧な研磨痕が残る。孔には敲打痕が明瞭に見られ、敲打によって深い凹みを作り最終段階だけ回転穿孔を行っている。130は小豆色をした輝緑凝灰岩製石包丁である。刃部、平坦面ともに丁寧な研磨痕が残る。O3グリッド出土である。131は輝緑凝灰岩製石包丁である。刃部、平坦面ともに丁寧な研磨痕が残る。孔には敲打痕が明瞭に見られ、敲打によって深い凹みを作り最終段階だけ回転穿孔を行っている。石材中に挟雑物があり破損したものである。132～134は石剣の未製品と考えられる石器である。132は粘板岩製で風化が進んでいる。幅2.5cm、厚さ5mmの細長い板状礫の側片を加工し先端部を細くする。しかし上端と下半は欠失している。現存長7.5cmである。形状からすると石剣を意図して製作の途中、破損して廃棄したものと思われる。M4グリッド出土である。133は目の粗い粘板岩を道板もので表面の風化が進んでいる。厚さ9mm、幅3.8cmの扁平礫の側縁を加工したものである。上下を欠き全体形は不明であるが、本来は上下に長く延びるものであったと思われる。現存長7.2cmである。132と同様に石剣を意図して製作の途中、破損して廃棄したものと思われる。L・M4グリッド出土である。134もやや目の粗い粘板岩を用いたもので厚さ8mm、現存最大幅3.2cm、現存長6.1cmである。両側縁からの敲打による剥離で全体を整形している。上下を欠くが上部を尖らせようとする意図が推察できる。背面には折損時に生じた節理による大きな剥離面がある。研磨痕は見られないが、132・133と同様に石剣制作中の破損により廃棄されたものであろう。L4グリッド出土である。135は片岩製の紡錘車である。直径5.6cm、孔形0.7cm、厚さ0.5cmの有孔円盤形で、平面形は正円形である。一端を欠くが、上下両面、側縁は丁寧に研磨されている。136は粘板岩製の打製石器で、上下を欠損しているため全体形は不明である。上下面ともに側縁からの敲打による剥離で成型されているが、裏面は下端の折損時に生じた大きな剥離痕が残る。側縁には軸に直交する線状の敲打痕が残り滑らかになっている。器形調整のための敲打であろうか。打製石斧の一部、もしくは132～134のような石剣未製品の可能性も考えられる。137は粗い粒の砂岩を用いた砥石で、長さ12.5cm、最大厚8.0cmを測る。二面を幅の広い砥面として用いている。138は片岩の垂角礫を使用した、長さ10.1cm、5.4cm、厚さ4.1cmの敲打石、凹み石である。4側面に敲打による凹みを持つ。2箇所凹みを持つ面もある。上下端を含めた側縁部には敲打痕が残り、ハンマーとしても使用されたものである。

3) 小結

以上Ⅲ区の1面、2面検出遺構と遺物について述べてきたが、簡単にその概要をまとめておきたい。

Ⅲ区の調査面積は1,290m²で、出土遺物の総量はコンテナ326箱に及ぶ。出土量は少ないものの弥生時代初頭突帯文土器の時期から遺物はみられ、中期の土器片は出土するものの遺構は伴わない。弥生後期～古墳時代初頭の遺物が遺構を伴い大量に出土する。この時期地形の改変を受け微高地は削平され平坦面が形成される。この造成面には弥生終末期～古墳時代初頭の溝、環状小溝、1間×1間または1間×2間の小規模な掘立柱建物が多くみられる。石庖丁の多さなどから、稲作集団の作業用のスペース(集落)であろう。この面には造成によって破碎、遊離した遺物が整地層、包含層として堆積している。古代に至ってI・II区で検出されているような水田のさらなる拡大整備のために、Ⅲ区西側を流れるSD0501は拡幅整備されたものであろう。

5. IV区の調査

1) 概要

調査対象地を東西に横断し、現在も使用されている排水ヒューム管を保護するために土塁状に残し、これを調査区のひとつの境界とした。北側がⅠ・Ⅱ区、南側がⅢ～Ⅴ区である。Ⅳ区は南側調査区のうち、古代の用水路であるSD0501によって南東部を区画された北西角地部分で、グリッド名称ではK・L3～5、M4・5にあたる。

Ⅳ区の東側半分はⅢ区調査の段階で表土掘削を行っていたが、Ⅰ・Ⅱ区調査の排土置き場として使用したため調査には着手せず、Ⅲ区調査終了後、西側周回道路の切り替え後の平成21年12月に西側を拡幅し表土掘削を開始し、翌22年1月から併せて調査をすることとした。

東南部をSD0501、北西部をSD0541の2条の古代の水路に挟まれた狭い範囲で、面積は314m²程である。近現代水田の基盤土までをバックホーで除去し、以下を精査した。上下2面で遺構を検出し、それぞれ1面、2面とした。なお、定期異動で担当者の交代があったため、1面、2面の発掘調査、整理報告者は異なる。

1面では古代の水田(相当)面と、大量の弥生終末～古墳時代初頭の土器を廃棄した土坑が検出され、2面では古代水路に分断されてはいるものの、Ⅲ区の掘立柱建物群につながる建物の一部が検出されている。

2) 遺構と遺物

(1) 1面の調査

1面の調査(第222図、図版95)

先述したとおりⅣ区は、Ⅲ区の調査が終了した後、新しい周回道路の運用され始めてから、旧周回道路跡を拡幅し、Ⅴ区と並行して調査を開始した。近現代水田耕作土基盤層である黒褐色粘質土までをバックホーで除去し、その直下を1面として精査した。

東側をSD0501、西側をSD0541の、ほぼ平行して流れる2条の古代の水路に挟まれた幅10m強の、幅が狭い馬の背状の地形となっている。

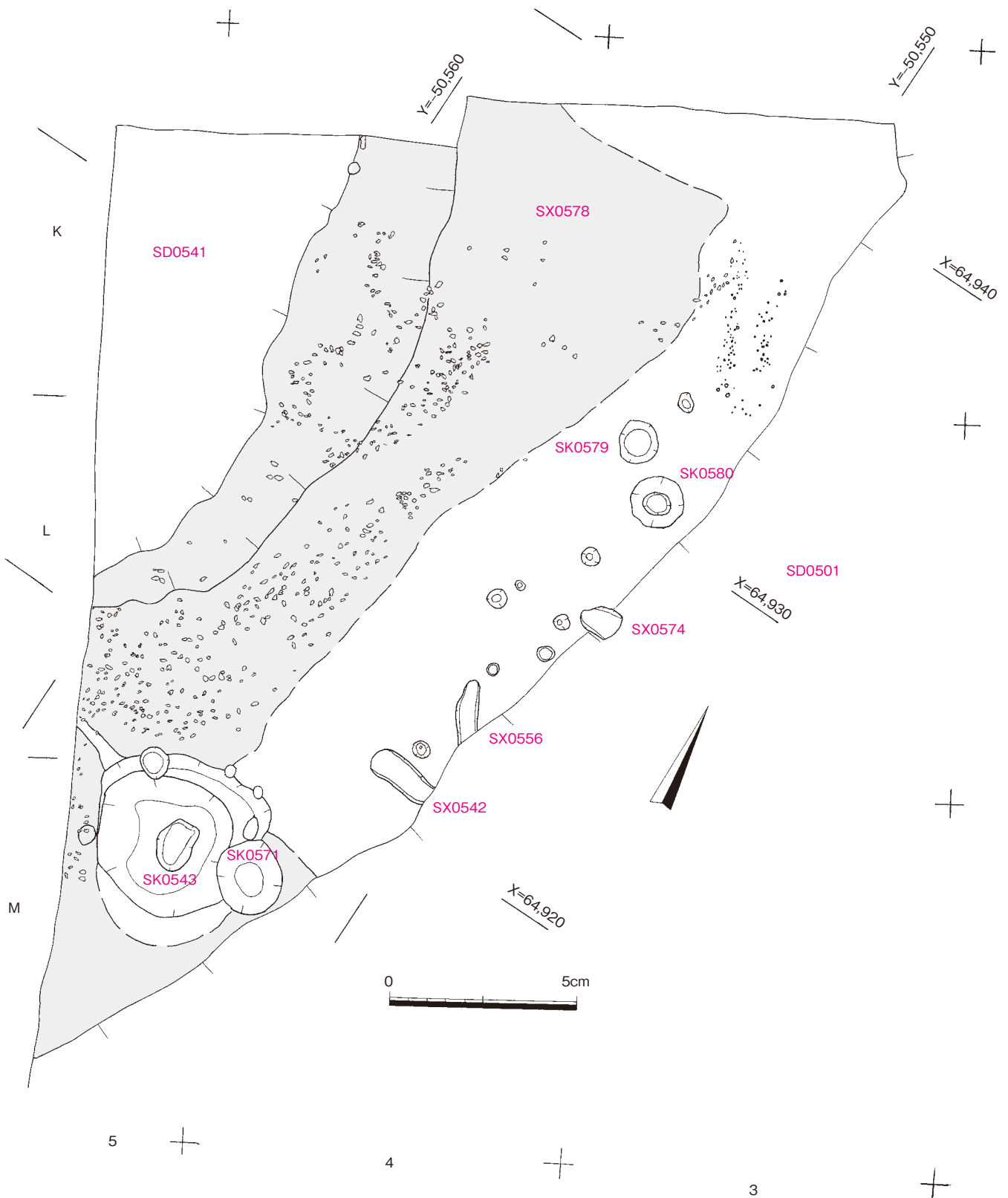
馬の背の東側緩斜面北側には小規模な近現代用水路の護岸と思われる杭が、現代地形にも反映されている条里と同じ方向に並んでいる。一部近現代の水田耕作や水路整備、空港整備にかかる掘削等により、古代水田面や包含層が削平されており、下面(2面)相当の遺構も検出されている。便宜上、これらの遺構についても1面検出遺構として報告し、個別の記述の中でその旨を記すこととする。

以下それぞれの遺構の種類ごとにまとめて述べる。

①水田(もしくはそれに近接する通路)

SX0578(第222図、図版95)

南北に細長い馬の背状の西半分にあたる部分で、小さな凹みの中に砂が堆積している小遺構が多数検出された。先述の通り東側では後世の削平等で確認できない。通例の水田遺構で検出される足跡と同様の検出状況で、不明瞭なものが大半であるが、なかにはヒトの足跡のほか牛と思われる偶蹄類の足跡も確認されている。しかしながら、畦畔など水田に関する遺構は確認できておらず、また緩やかな傾斜面であり完全に水平ではないこと、傾斜面の上部(標高5.3m)から下部(標高4.8m)までまんべんなく足跡が分布していることから、水田遺構そのものとは考えにくい状況で、水田に近接した作業用通路的な位置関係にあるのではないかと考えられる。Ⅰ区、Ⅱ区で検出されている古代水田



第 222 図 IV区 1 面全体図 (1/150)

と調査区西側に広がっていると想定されるに水田に関連するものであろう。この面での出土遺物は少なく、大半が下層に由来する遺物の小片であるが、古代に下る須恵器破片があり、この時期の遺構面と把握できる。

②溝

SD0541 上層 (図版 97 (1))

IV区の西側を区切る溝である。西側立上りは調査区外にあってその幅は明確でない。東側の立ち上がりはSD0501のように急峻ではなく、東側尾根頂部からなだらかに傾斜している。表土掘削の段階で白色粗砂の厚い堆積がみられ溝(水路)であることが確認できた。また、この白色粗砂の上部は遺物が含まれていなかったために機械で一定程度除去し、遺物が確認出来た段階から人力での精査を開始した。この溝の粗砂中位(標高4.5m付近)からは遺存状態は良好ではないものの、動物骨が検出された。マンガンが付着し青味を帯びている。SD0541の下層については2面調査の項に譲る。

③土坑

1面の調査ではSK0543、0571、0579、0580の4つの土坑が検出されているが、いずれも表土掘削の段階でSX0578に見られる様な白色砂が見られず、近現代の水田耕作や水路整備、空港整備にかかる掘削等により、古代遺構面が削平されている。そのため調査面としては表土除去直後の1面としているが実際的には2面の上部遺構に相当するものである。

SK0543・SK0571 (第223～229図、図版97(3～6))

IV区の中央部を南北に延びる馬の背状地形の南側、M4・5グリッドで検出されたきわめて多量の遺物を含む大型の土坑である。遺構平面形は径約5mの不整形円で、遺構検出当初大きなひとつの土坑として認識していたが、調査が進行していく段階で、別途SK0571がSK0543を切り込む形で営まれていることがわかった。両遺構ともに多量の土器を包含しており、上面ではSK0543として遺物を取り上げ、両遺構が区別できた段階でSK0571の遺物と区別して別々に遺物を取り上げた。またSK0571がSK0543を掘り込んでいたために遺物が混ざり込み、両遺構出土遺物間には接合関係が多く見られる。

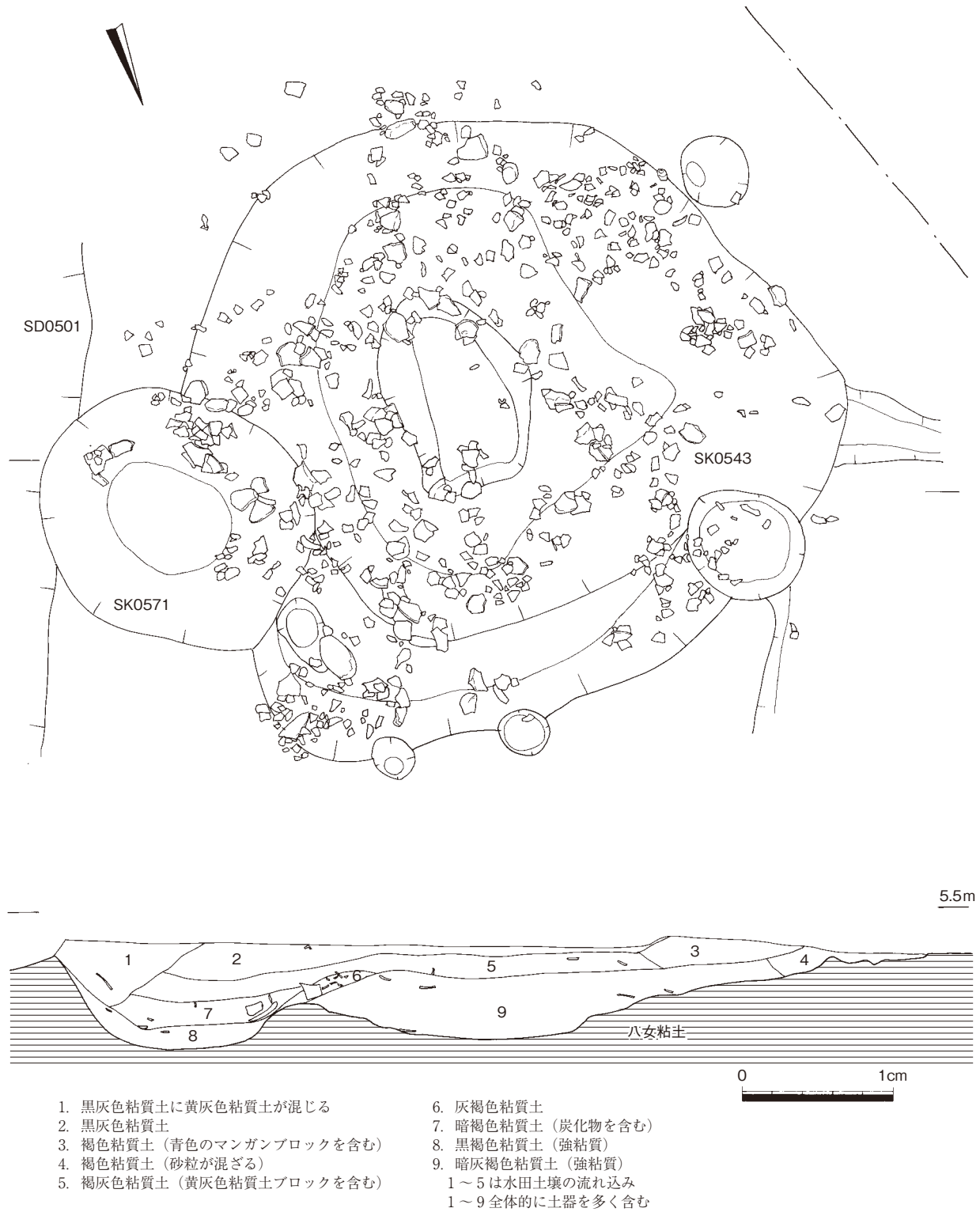
土層堆積の状況から見ると、SK0543の二段掘りをしたなだらかな傾斜の皿状の凹みが、ある程度埋没した段階でSK0571が掘り込まれ、さらにSK0571がある程度埋まった段階で、両遺構の凹み全体に周辺水田土壌が流れ込んで堆積した様子が見える。

SK0543の床面レベルは標高4.65m、法最上面は5.2m、SK0571は平面形ほぼ径1.5mの円形で断面形は逆台形、床面レベルは4.58mである。

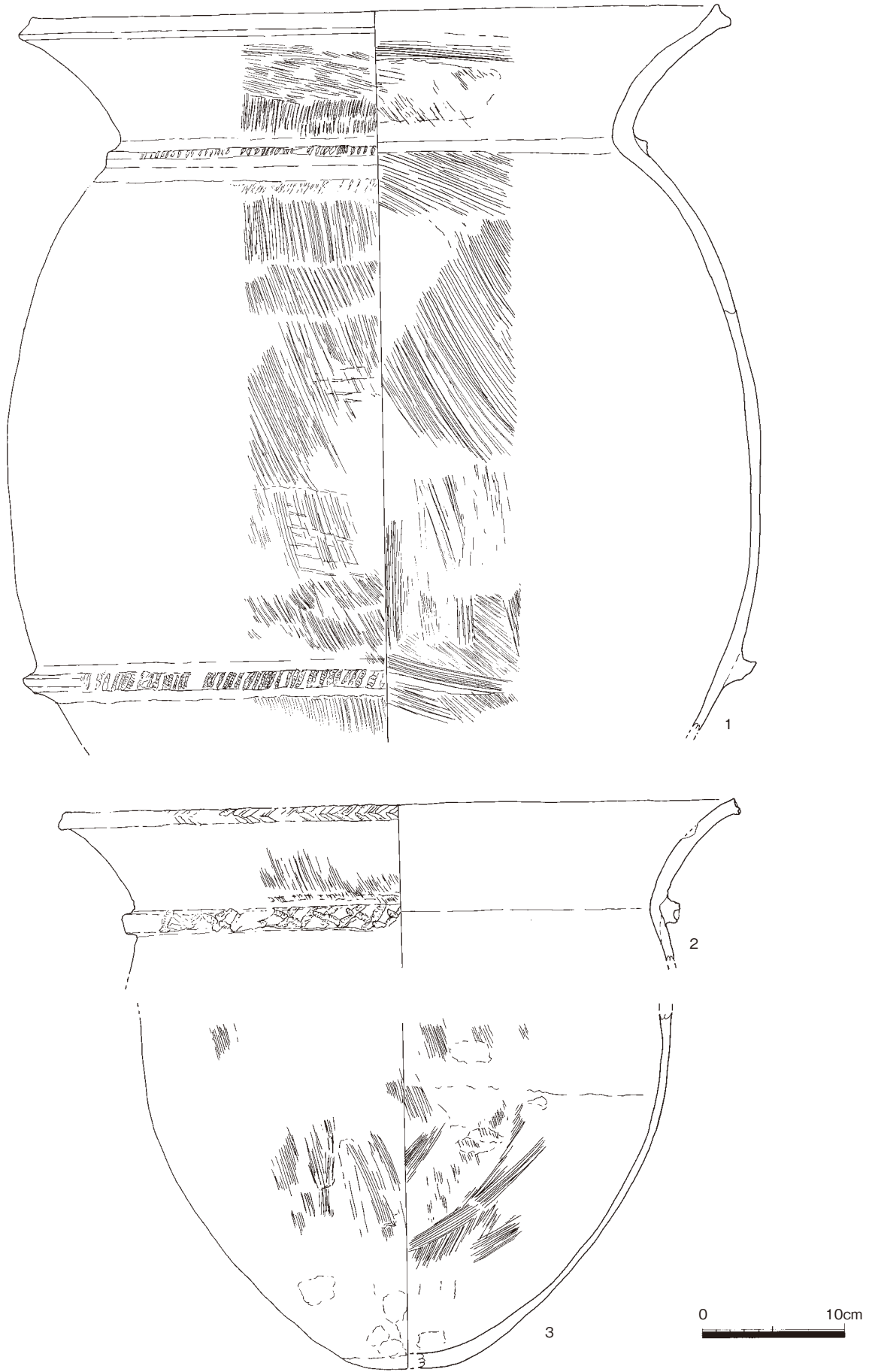
以下図示した遺物について述べる。

SK0543 出土遺物 (第225～228図)

1は口径50cm胴部最大径53cmの大型の甕である。体部は丸みを持ち頸部は開きつつ外反し、端部を平坦にする。内外面を細かい刷毛目調整し、頸部に断面三角の突帯を、胴部下半に台形の突帯をめぐらせ、それぞれの突帯の上面に刷毛目調整具の木口を押しつけて施文している。SK0571下層出土土器と接合したものである。2は口径48cmの大型の甕の頸部で、1とはほぼ同様の器形であるが、口縁部平坦面に刷毛目調整具の木口を押しつけて綾杉状の細かい施文を行い、頸部にめぐらした断面四角形の突帯には、同様の方法で斜め格子の施文を行っている。内外面刷毛目調整を行っている。SK0571出土土器と接合したものである。3は同じく大型の甕の下半部で胴部最大径37cmである。



第 223 図 SK0543、0571 実測図 (1/40)

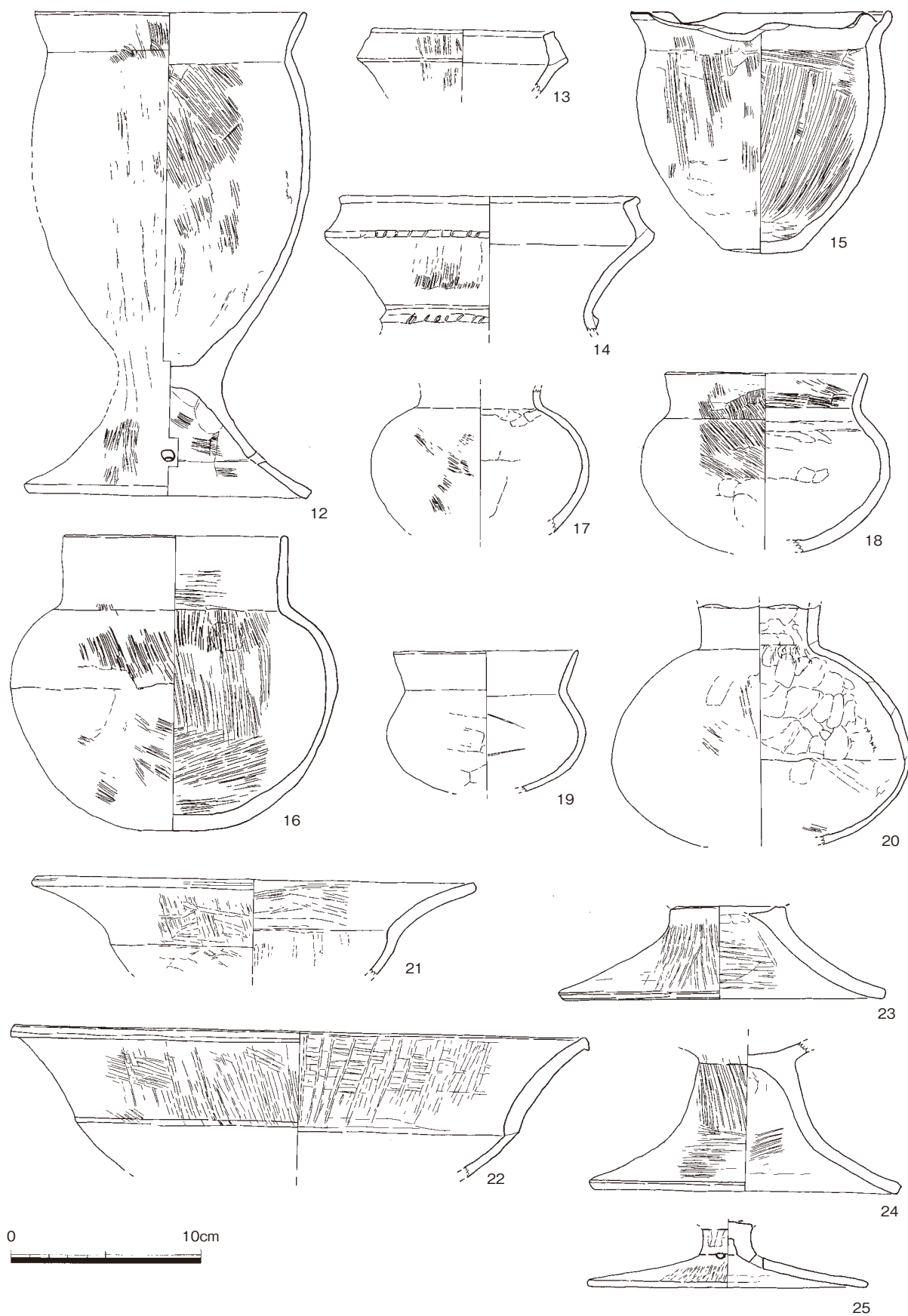


第 224 図 SK0543 出土遺物実測図 (1) (1/4)

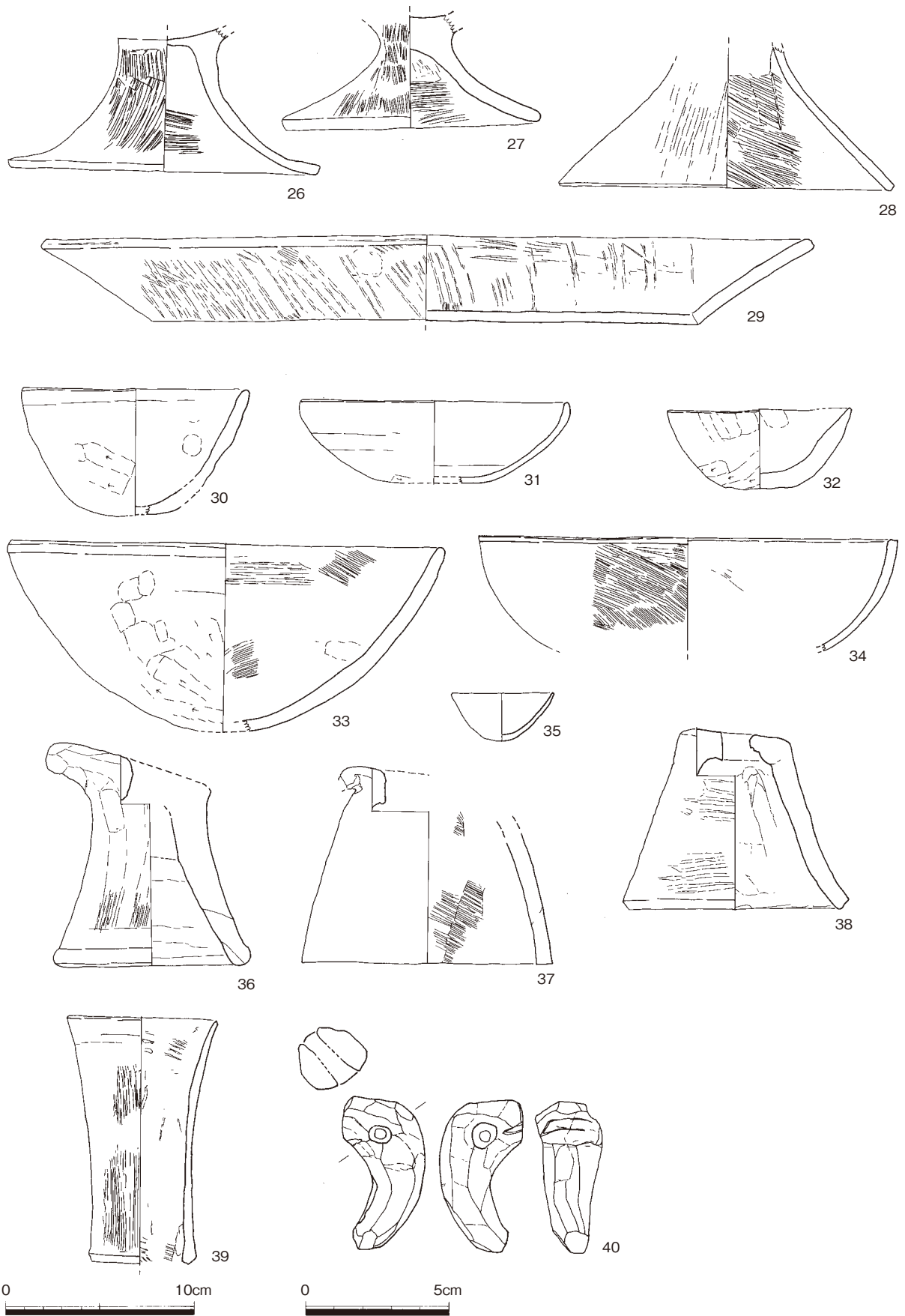
器壁は薄く、丸みを帯びた底部のみやや厚い。内外面刷毛目調整を行っている。4は口径21.4cmの甕である。内外面全体に刷毛目調整を行っている。頸部内側は横方向の調整である。5は口径29cmで器壁の厚い甕である。外面体部下半にはヘラ削り痕がのこり、上半はほぼ縦方向の刷毛目調整を行っている。内面も体部下半はヘラ削り調整痕がのこり、上半はほぼ斜め方向の刷毛目調整を行っている。6は口径15cm、胴部最大径18.4cmの小振りの甕で、器壁が厚い。外面体部全体にヘラ削り調整痕がのこり、その上に縦方向の刷毛目調整が行われている。7は同じく甕の体部下半で胴部最大径24cmをはかり器壁は薄い。内外面ともに縦方向のヘラ削り調整の後縦方向の刷毛目調整を行っている。内面下半には一部横方向の刷毛目が見られる。8は口径28.5cmの甕である。胴部は丸みを持ち大きく膨らむ。頸部直下に断面三角の突帯をめぐらす。内外面ともに縦方向の刷毛目調整を行うが、外面体部下半にはヘラ削り痕跡がある。SK0571出土土器と接合したものである。9は同じく甕の下半部で現状最大径21cmをはかる。外面は細かい刷毛目調整で、内面には目の粗い刷毛目調整痕が残り、底部周辺には指頭圧痕が残っている。10は口縁部内径21cmをはかる頸部の長い壺で、上端に内径する粘土帯を貼り付ける。外面頸部は縦方向の、上面は横方向の刷毛目調整を行い、頸部内面は斜め方向の刷毛目調整を行っている。また粘土帯接合部内面には指頭圧痕が残されている。11は口径17cmをはかる。肩が大きく張っているところから甕というより壺であろう。外面は縦、斜め方向の刷毛目調整を行っており、内面頸部は横方向の刷毛目調整、体部は横方向のヘラ削り調整を行っている。12は脚付きの甕で、口径14.2cm、器高25.4cmをはかる。外面体部は縦方向の刷毛目調整の後、縦方向のヘラ研磨を行っており表面は滑らかで、丁寧な整形がおこなわれている。内面は縦、斜め方向の刷毛目調整を行っている。脚との接合部にはヘラ削り痕が残っている。脚部外面は縦方向の刷毛目調整を、内面は横方向のヘラ削りの後、横方向の刷毛目調整を行っている。脚部中位には外方向からの4ヶ所の穿孔があり、内面にはそのレベルに一条の沈線がめぐっている。SK0571出土土器と接合したものである。13は口径9.8cmの小振りの壺の口縁部で、頸部上部には内傾する分厚い口縁を貼り付けている。外面には縦方向の刷毛目調整がみられる。14は口径16cmの壺頸部である。頸部上部に内傾する口縁を貼り付けているが、端部を外反させている。頸部外面は縦方向の刷毛目調整をおこない、頸部上端の突起部分と下端の断面三角突帯上に刷毛目調整具木口を利用した斜めの刺突文が施されている。15は口径13.6cm、器高12.4cmの小型の甕で、口縁の一部を欠損しているがほぼ完形である。外底はほぼ平坦である。器壁は厚く重量感がある。ヘラ削りによる調整が行われておらず、外面には叩き締めによる板の平坦面が残され、その上に縦方向の刷毛目調整が施されている。内面体部には一気になで上げられた粗い縦方向の刷毛目が見られる。16は口径12cm、器高16cmの丸底壺で直立した頸部を持つ。外面中位の粘土接合部分には板状叩き具による叩き目痕跡があり、その上に斜め方向の刷毛目が見られる。内面は底部周辺が横方向の刷毛目調整、上半が縦方向、頸部は横方向の刷毛目調整である。17は胴部最大径11.4cmの小型丸底壺である。内面の頸部、胴部の粘土接合面には指頭圧痕が残り、体部外面は斜め方向の刷毛目調整が行われている。18は口径10.6cm、胴部最大径13cmの小型丸底壺である。頸部はやや外反する。内面の頸部粘土接合面にはヘラ押さえ痕跡が残り、胴部の粘土接合面には指押さえ痕跡が残る。頸部内面は横方向の刷毛目調整である。外面下位には板状叩き具による平坦面が観察でき、体部上半には斜め方向の刷毛目調整が施される。19は口径9.8cm、胴部最大径10.4cmの小型丸底壺で頸部はやや外反する。薄手で、内面は器壁が荒れているがナデ調整、外面は横方向のヘラ研磨が行われている。20は径6cmほどの細い頸部を持つ壺で、胴部の最大径は15.6cmである。胴部中位に粘土接合面があり、下半は器壁が薄く斜めの刷毛目調整が行われ、上半は器壁が厚く指押さえ痕跡が全面に残されている。頸部は短



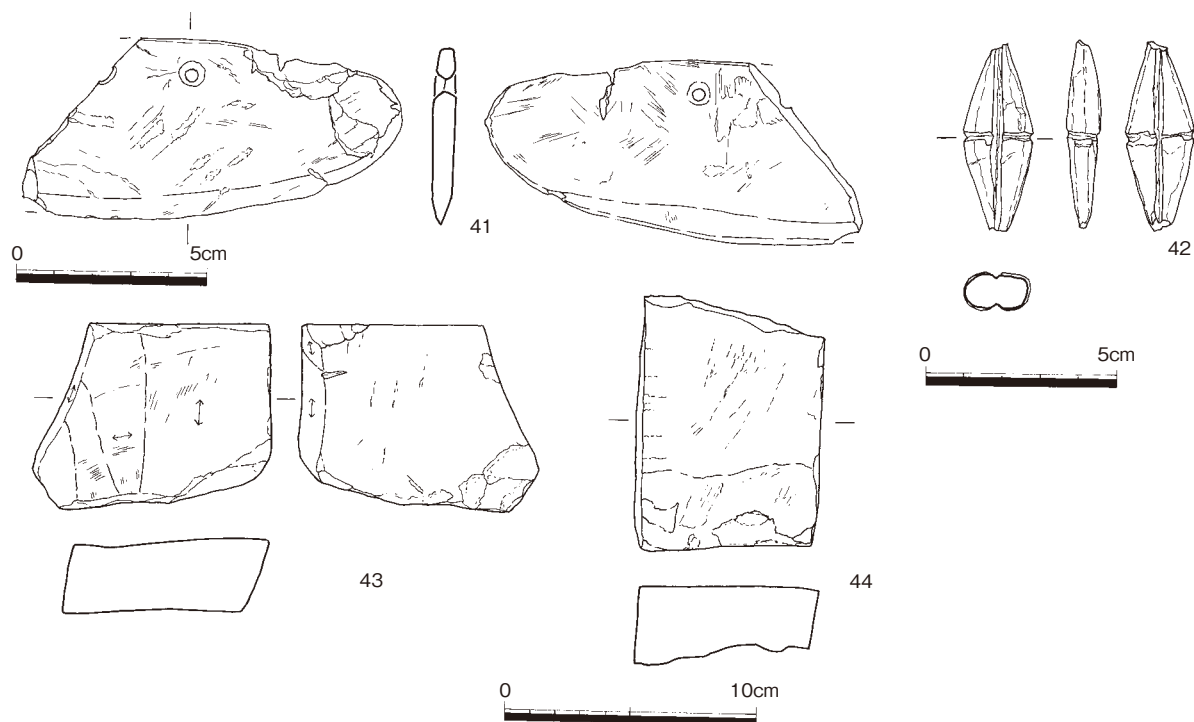
第 225 図 SK0543 出土遺物実測図 (2) (1/3)



第226図 SK0543 出土遺物実測図(3) (1/3)

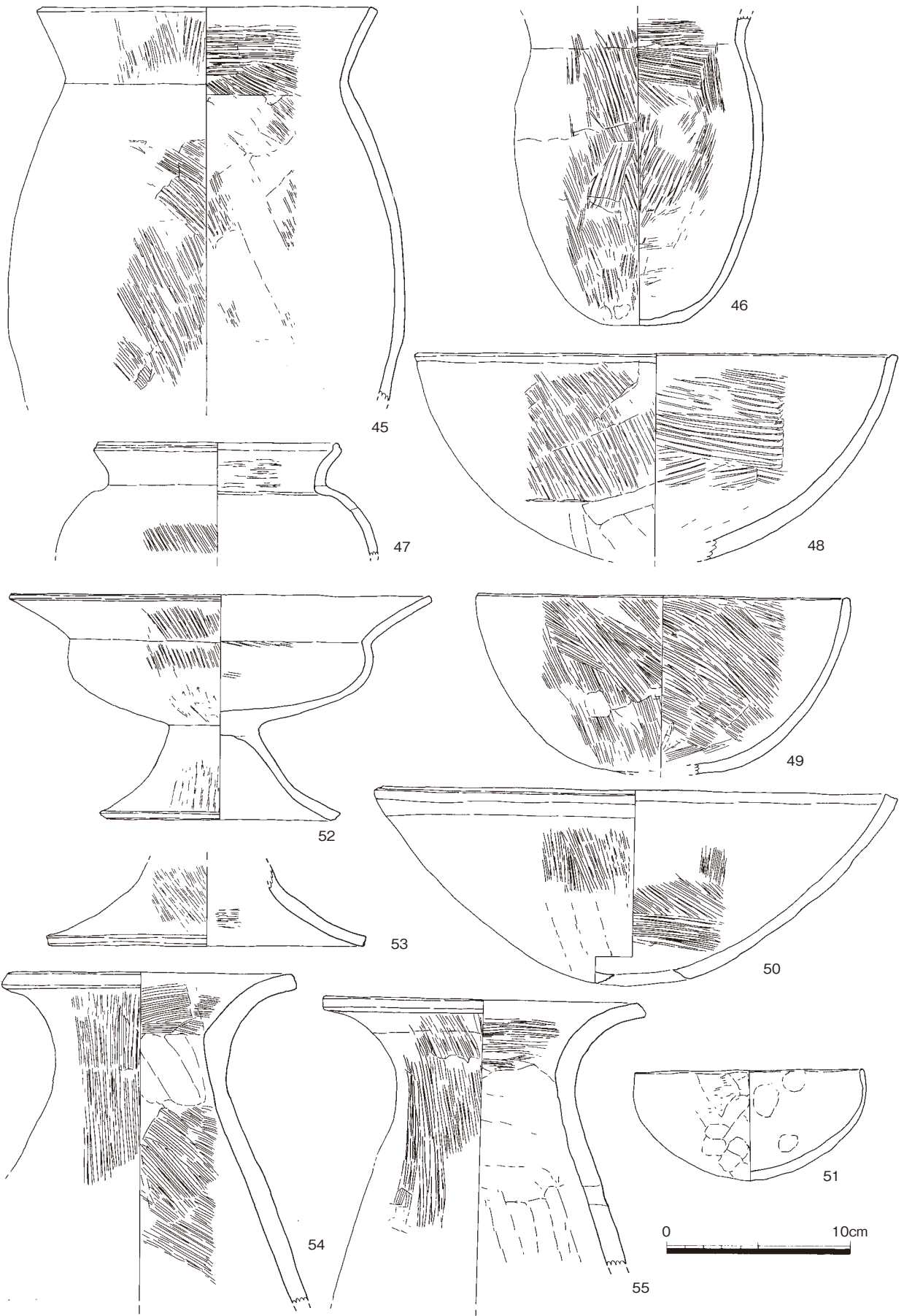


227 图 SK0543 出土遺物実測図(4) (1/2、1/3)



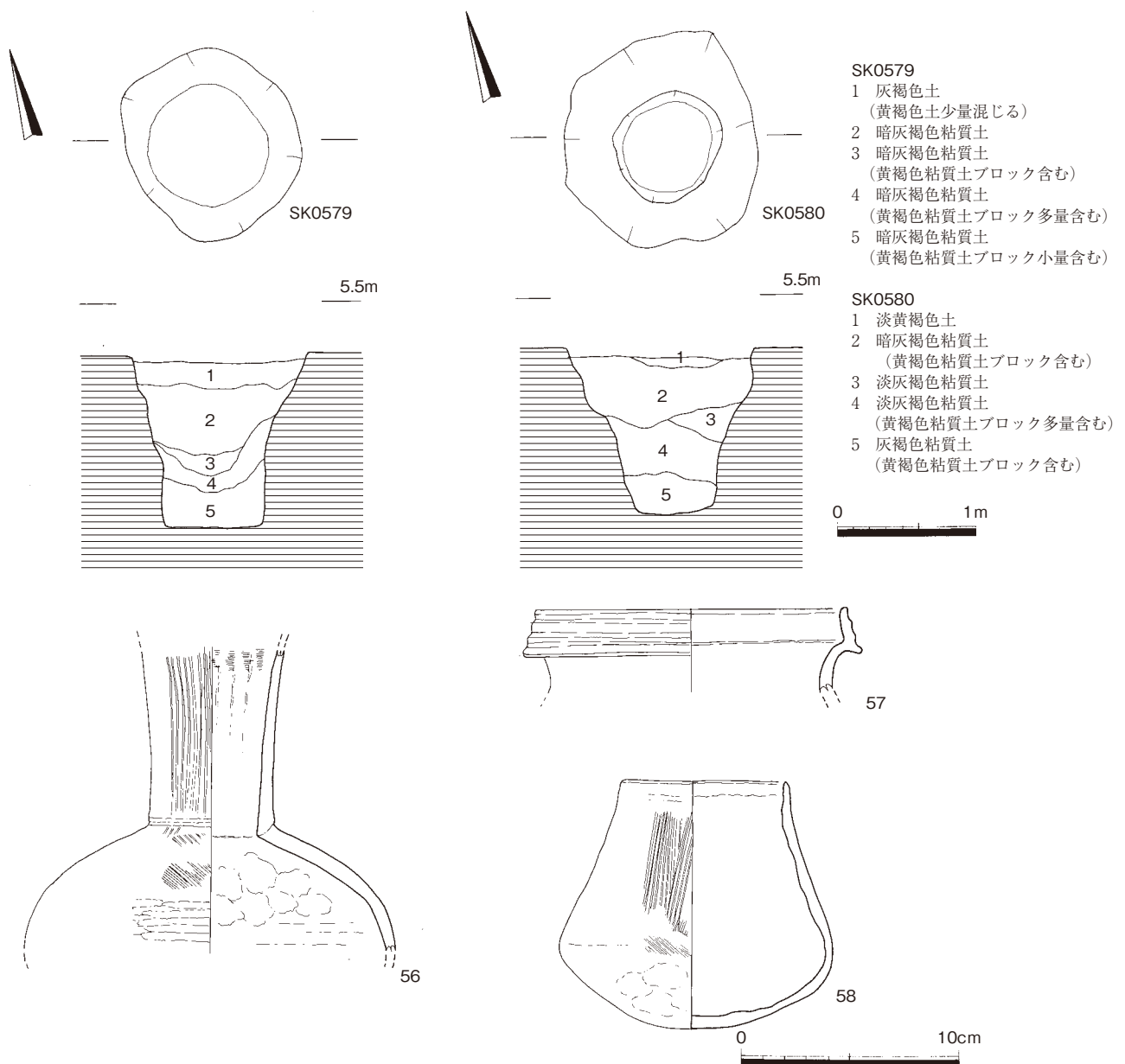
第228図 SK0543 出土遺物実測図(5) (1/2、1/3)

い立ち上がり部分にさらに筒状の粘土帯を付け足したもので、接合面には指紋が残っている。外面は粘土接合面に叩きによる平坦面が観察でき、上半はヘラ磨きが行われている。21は復元口径23.4cmの高坏の坏部破片である。口縁部は肥厚し大きく外湾する。器壁が荒れているが、遺存状況のいい部分では黒灰色を呈しており、本来はきめの細かい表面であったと思われる。口縁部内面は粗い横刷毛目調整の後、横のヘラ研磨が施され、内底は縦方向のヘラ研磨が施されている。外面上半は縦方向の粗い刷毛目調整の後、横方向のヘラ研磨が行われ、下半は横方向のヘラ研磨が行われている。22は復元口径30.6cmの大型の高坏で、赤褐色の発色である。口縁部は肥厚し大きく外湾する。内面上半は横刷毛目調整の後、縦方向のヘラ研磨、内底はヘラ研磨により滑らかである。外面上半は横刷毛目調整の後、縦方向のヘラ研磨、外底は器壁が荒れているものの縦方向のヘラ研磨が施されている。23は底径16.8cmの高坏脚部である。坏部を欠くが、脚部高5cmと低い。外面を粗い縦方向の刷毛目調整を施し、外底内を同じく粗い横方向の刷毛目調整を施したものである。一部二次被熱により赤化し、器壁が荒れている。24は底径16cmの高坏脚部である。坏部を欠くが、脚部高7cmでやや高い。外面の脚部上半に粗い縦方向の刷毛目調整を施し、その後下半に横方向の刷毛目調整を施す。外底内も同じく上半に粗い縦方向の刷毛目調整を施し、その後下半に横方向の刷毛目調整を施す粗い横方向の刷毛目調整を施したものである。SK0571出土土器と接合したものである。25は底径14.8cmの高坏脚部である。坏部を欠くが、脚部高3.1cmで低い。胎土は石英粒を少量含むが精良であり、また器壁も薄く精製品である。肌色の発色をする。脚柱部の直下には、焼成前に開けられた3ヶ所の穿孔がある。外面の脚部上半には求心的に細かい丁寧なヘラ研磨が施され、外底内も横方向の細かい丁寧なヘラ研磨が施されている。滑らかな表面には、急激な温度変化が起きた際に生じる小さなあばた状の剥落痕が多数観察され、二次被熱を受けたことが明らかである。26は底径13cmの高坏脚部である。坏部を欠くが、脚部高4cmでやや低い。外面の脚柱部上端から下方に向け粗い縦方向の刷毛目調整を施し、その後さらに下端まで縦方向の粗い刷毛目調整を施す。外底内は下半に横方向の粗い

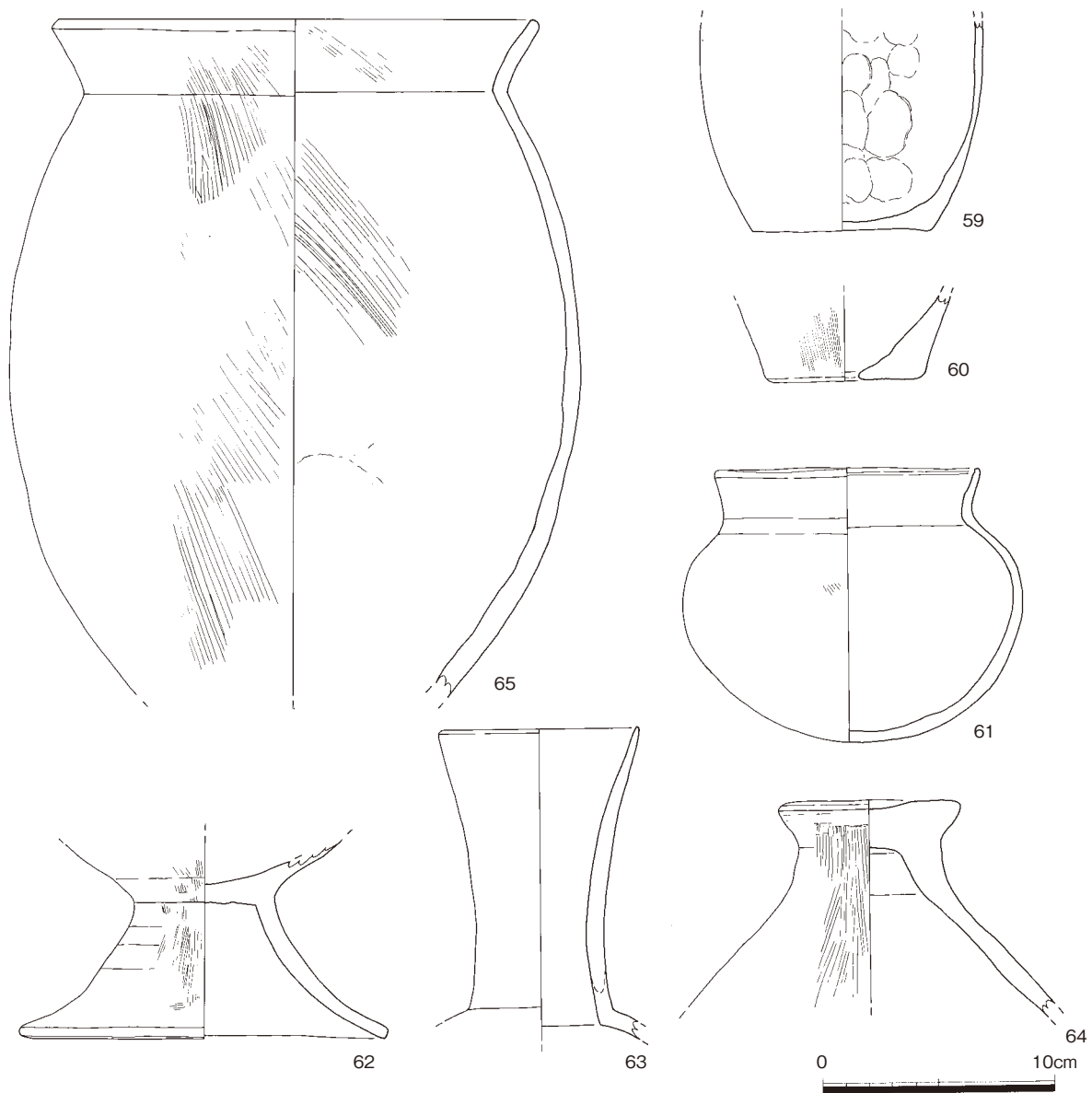


第 229 図 SK0571 出土遺物実測図 (1/3)

刷毛目調整を施す。石英粒を多く含み胎は粗い。27は底径16cmの高坏脚部である。坏部を欠くが、脚部高7cmでやや高い。外面の坏部下面から下方に向けに粗い縦方向の刷毛目調整を施す。外底内はほぼ全面に横方向の粗い刷毛目調整を施す。大粒の石英粒を多く含み胎は粗く器壁も厚い。28は底径17.6cmの高坏脚部である。坏部を欠く。高台は坏部に向かって直線的に収束する。外面は縦方向に細かいヘラ磨きを施す。外底内は全面に斜め外方に向けて細かい刷毛目調整が施されている。金雲母を多く含むが、胎は精良で丁寧な造作を行った精製品である。29は復元口径40cmの大型の口縁部破片である。外面は指押さえ後縦方向のヘラ研磨、内面は横方向の刷毛目調整の後縦方向のヘラ研磨を行っている。30は口径12cmの小振りの鉢で内面指押さえ、外面下半はヘラ削り整形を行っている。31は口径14cmの小振りの鉢で、器高4.2cmと浅い。内外面は指ナデによる調整で、外底



第230図 SK0579、0580 実測図(1/40)およびSK0579、0580 出土遺物実測図(1/3)



第 231 図 SX0542 出土遺物実測図 (1/3)

のみヘラ削りを行っている。薄い器壁を持つ。32は口径9.8cmの小振りの鉢で、内外面は指ナデによる調整で、外底のみヘラ削りを行っている。器壁が厚い。33は底の尖った23cmの大型の鉢で、外面上部は指押さえで、下半はヘラ削りを行っている。内面は指押さえの後、横、斜め方向の刷毛目調整を行っている。器壁が厚い。34は復元口径22cmの大型の鉢で、体部は丸みを持ち、外面は斜め方向の細かい刷毛目調整を行っている。内面は指ナデで器壁が薄い。35は口径5.5cm、器高2.5cmの小型の鉢で、器壁も非常に薄い。胎土は精良で指ナデによる成形である。36～38は器台である。何れも胎は厚く、傾斜した天井部分に穴が空けられている。36は底径10.5cm、器高11.8cmで傾斜した最高位に大きな突起部を作り出している。外面は縦方向のナデの後、縦刷毛目調整を行っている。内面は横ナデである。37は底径13.2cm、器高10.3cmで傾斜した最高位に小さな突起部を作り出している。外面は器壁が荒れ調整不明であるが、内面は斜め方向の刷毛目調整を行っている。38は底径10.2cm、器高9.5cmで突起部を作り出さないものである。外面は粗い叩き痕が残さ

れ、内面は指によるナデ調整である。39は細首の壺頸部で口径8 cmをはかり、外面は細かい縦方向の刷毛目、内面は横の粗い刷毛目が残る。40は軽石を用いた勾玉模造品で全長5.4 cm、最大幅2.9 cm、最大厚2.4 cmの大きさである。全体を粗く面取り整形し、頭部側面に3条の沈線を刻み、中央に両側面から大きな穿孔を施している。41は頁岩製の石包丁で一端を欠く。丁寧な研磨により器面全体を整形し、鋭い刃部を研ぎ出している。42は滑石製の錘で、やや扁平な長菱形の長軸と短軸に十字型にヒモ通し用の溝を彫り込んだものである。長さ5 cm、幅1.8 cm、厚さ0.7 cmである。43は花崗岩質の砂岩を使用した砥石で、下端を破損しているが、上下両面と他の3側面を砥面として使用している。残存縦長7.4 cm、幅9.4 cm、最大厚3.2 cmである。44は凝灰岩を用いた砥石で、上端部と下面を欠損しているが、上面と両側面を砥面として使用している。残存縦長10.2 cm、幅7.5 cm、残存最大厚3.3 cmである。

SK0571 出土遺物 (第229図)

45は22.4 cmの甕で、外面体部は斜め、口縁は縦方向の刷毛目調整を行い、内面体部は指ナデ後、斜め、口縁は横方向の刷毛目調整を行う。46は胴部最大径13.4 cmの甕で、外面体部は斜め、口縁は縦方向の刷毛目調整を行い、内面体部は指ナデ後、斜め、口縁は横方向の刷毛目調整を行う。47は肩の張った短い頸部の付く甕で、口径13 cmをはかる。頸部はわずかに外反し、端部を小さく立ち上げる。口縁部外側に一条の沈線を巡らしている。外面体部は斜め方向の刷毛目調整、内面は頸部が横刷毛目、体部がナデによる調整である。48は復元口径26 cmの大型の鉢である。器壁が厚く、口縁部上端に一条の段を作る。外面は上半が斜め刷毛目調整で、下半はヘラ削りを行う。内面は横方向の刷毛目調整を行っている。49は同じく復元口径20.2 cmの鉢である。下半に丸味を持つ。内外面ともに全面斜め刷毛目調整を行っている。50は口径28.2 cm、器高10.6 cmの大型の鉢で底部はやや尖り、体部は直線的に延び上端は肥厚し、平坦面にはわずかな凹みを巡らす。外面上半は縦方向の刷毛目調整、下半は縦方向のヘラ削りを行う。内面は縦、斜め、横方向の刷毛目調整を行う。底部に上部からの敲打による径3.5 cmほどの孔が開けられている。51は口径12.4 cm、器高5.9 cmの小型の鉢で器壁は薄く、上端はわずかに内湾する。整形は手づくねで内外面ともに指頭圧痕が残っている。52は口径22.8 cm、器高12.2 cmの高坏である。坏部の下半は丸味を持ち、口縁部は大きく外に開く。坏部の外面下半はヘラ削りを行っているが、上半から口縁部にかけては縦方向の刷毛目調整を行い、脚部も縦方向の刷毛目調整を行う。内面は器壁が荒れ調整は明確でないが、横方向の刷毛目痕跡がわずかに残っている。53は同じく復元底径17.2 cmの高坏脚部である。外面は斜め方向の刷毛目調整を、外底内面は横方向の刷毛目調整を行う。54・55は同形の器台である。それぞれ口径は15.9 cm、17.5 cmである。ともに外面は縦方向の刷毛目調整を、内面上端は横方向の刷毛目調整、上半は指押さえによる整形を行うが、54は下半が斜め方向の刷毛目調整、55は縦方向のヘラ削りを行っている。

これらSK0543、0571出土遺物は、当初の遺構確認の段階で峻別ができなかったこともあるが、SK0571がSK0543の一部に掘込んでいることから、両者間に同一個体の破片が分散している。両遺構から出土した土器は、弥生時代終末期から古墳時代初頭に含まれるものであり、SK0543が切り合い関係から古いといえるが、その時間差についてはごく短期間であると思われる。

SK0579 (第230図)

L3グリッド北西部でSK0580と隣接して検出された。検出レベルは標高5.2 mでSK0543の検出面より20 cmほど低い。上面の土層が一部除去されたためである。1面検出遺構であるが、実質的には2面の上部である。上部平面形は1.1～1.2 mのほぼ正円形で、深さが1.05 m、床面は平坦で、標

高4.15 mである。掘方上半はやや広がっているが上面からの土壌剥落によるものであろう。ほぼ円柱状の掘方であるが、土層堆積には柱の痕跡は見られない。

56は下層から出土した胴部最大径17.2 cmの球形の胴部に下端を面取した筒状の頸部を貼り付けた長頸壺である。外面頸部は縦方向の細かな刷毛目調整、肩部は斜めの細かな刷毛目、中位は横方向のヘラ研磨を行っている。内面頸部上端には横方向の刷毛目が残るが、以外はナデによる調整である。薄手で精巧な作りである。

SK0580 (第230図)

SK0579と隣接して検出された。上部平面形は1.2～1.3 mのほぼ正円形で、深さが1.05 m、床面は平坦で、標高4.15 mである。検出状況とその形状はSK0579とほぼ同様である。

57は下層検出で、復元口径14.5 cmの二重口縁の壺で、やや内傾して立ち上がる口縁外面に浅い3条の沈圈線が巡る。二次被熱により赤化し、器壁が荒れて調整は不明瞭である。58も下層検出で、口径7.4 cm、胴部最大径12.6 cm、器高11.5 cmの鉢である。下半は丸味を帯びて上半はすぼまりつつ直線的に延びる。外面上半は縦方向の刷毛目内外面の下半は指押さえによる整形である。

④通路遺構 (SX0542、0556、0574)

東側のSD0501への昇降用通路と考えられる小規模な溝状遺構が3条検出されている。Ⅲ区でも同様の遺構が検出されているが、Ⅳ区検出の遺構はいずれもそれらより小規模である。SD0501は古代に大きく拡幅整備されているが、それ以前の段階でも小規模ながら水路としての機能を果たしていたもので、これらの通路遺構は拡幅整備される以前のSD0501への昇降路である。

SX0542 (第222図、図版97(2))

幅0.6 m、長さ1.8 m程の浅い平坦な溝状の遺構で東側に向かってわずかに傾斜する。床面に硬化面があり通路と推察される。ここでは埋没段階堆積した以下の土器が検出された。

59は平底の鉢である。胎土は精良で器壁は薄く、内面は指頭圧痕が明瞭である。60は外面刷毛目、内面指押さえの土器で底部に穿孔がある。あるいは器台か。61は口径11.2 cm、器高12 cmの丸底壺である。器壁が荒れ調整は明瞭でない。口縁内部直下に微細な沈線が巡る。62は底径16.2 cmの高坏である。器壁が荒れ調整不明瞭であるが、脚部の一部に赤色顔料が観察される。本来全面に塗布されたものか。63は長頸壺の頸部である。内外面とも器壁が荒れ調整不明瞭である。頸部下半に粘土の継ぎ目が残っている。64は蓋と思われるもので、外面は縦の刷毛目調整、内面はナデにより滑らかで黒味を帯びる。65は口径20.4 cmの甕である。内外面とも器壁が荒れているが、いずれも刷毛目調整である。

以上の通り、Ⅳ区1面の調査では古代の水田に関連する通路状の性格が想定できた。また一部2面相当部の遺構も調査した。弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構、遺物群が確認できた。周辺調査区成果と併せて評価したい。

(2) 2面の調査

2面は、1面の水田層の下の黄褐色シルト層を検出面とした。検出面の標高は4.9～5.2mを測る。検出した主な遺構は、掘立柱建物4棟、溝6条、土坑6基、不明遺構2基、その他ピット数十基である。この黄褐色シルト層は少量の遺物を含む包含層であるため、調査終了後に一部の確認調査を行ったが、下層から遺構は確認できなかった。

①掘立柱建物 (SB)

掘立柱建物の柱穴と考えられるピットがいくつか検出されたが、復元できた建物は4棟のみである。

SB0789 (第233図) K-3に位置する1間(柱間2.2m)×1間(柱間2.65m)の掘立柱建物である。総床面積は5.8m²である。主軸方位はN-34°-Eを示す。柱穴は平面円形を呈し、直径25～40cm、残存の深さは約15～25cmを測る。P2は中段にテラスを設ける。P2から弥生土器片が少量出土したが、小片のため図示できなかった。弥生時代後期の所産であろう。

SB0790 (第233図) L-2に位置する1間(柱間2.5m)×1間(柱間2.8m)の掘立柱建物で、総床面積は7m²である。主軸方位はN-30°-Wを示す。柱穴は平面円形を呈し、直径45～55cm、残存の深さは約50cmを測る。埋土は暗灰色粘質土である。P3には柱木が底面から約10cm残り、P2・P4は柱木が粘土化する。

すべての柱穴から弥生土器片が少量出土し、P2から出土した遺物のみ図示した。弥生時代後期の所産と考えられる。

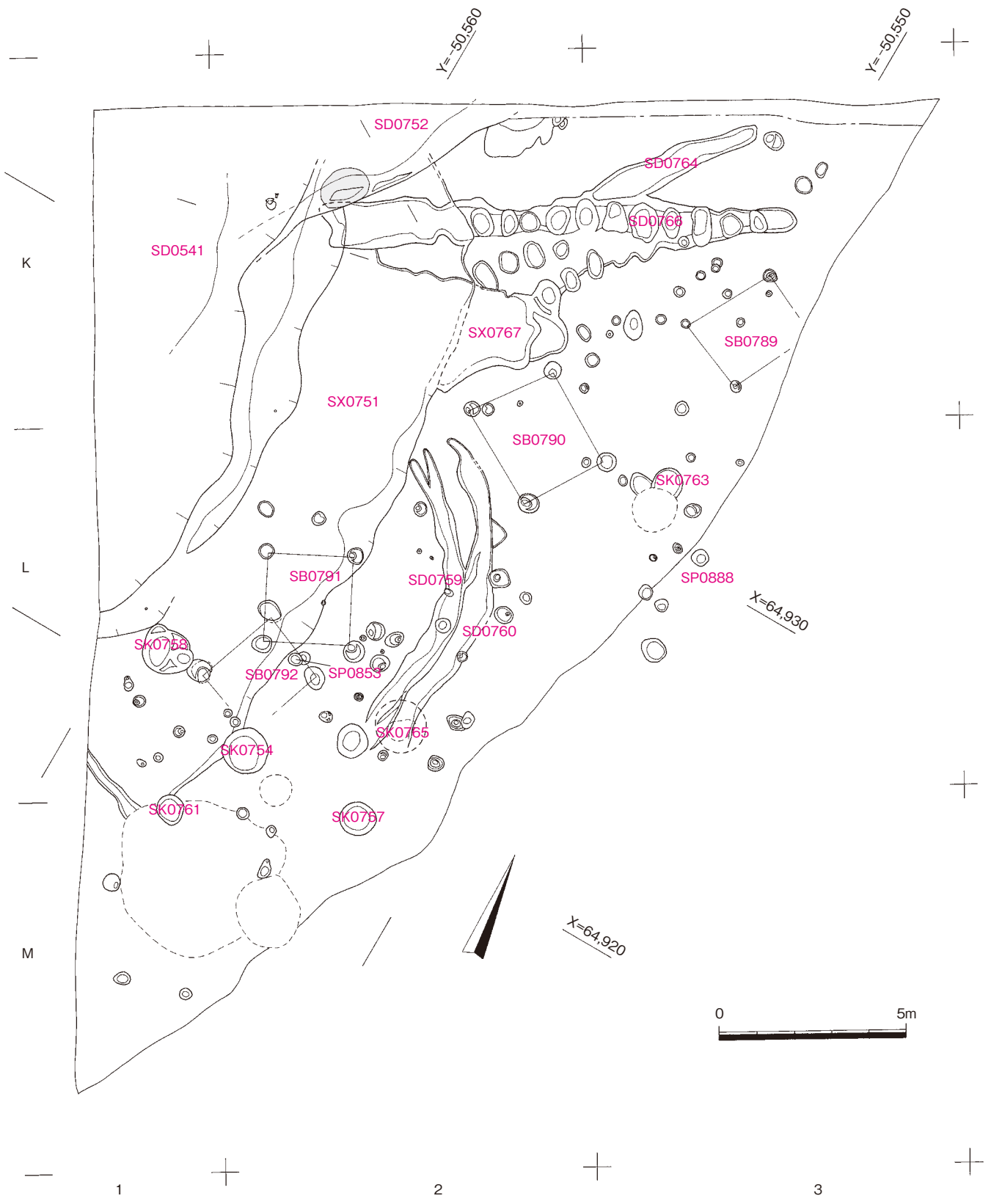
出土遺物(第235図) 105はP2出土の甕の口縁部である。鋤形口縁の内側は突出する。にぶい橙色(5YR7/4)を呈す。

SB0791 (第234図) L-2に位置する1間(柱間2.5m)×1間(柱間2.5m)の掘立柱建物である。総床面積は6.25m²である。主軸方位はN-20°-Wを示し、他の建物とは方位を異にする。柱穴は平面円形を呈し、直径は約50cm、残存の深さは約20～50cmを測る。埋土は暗灰色粘質土である。

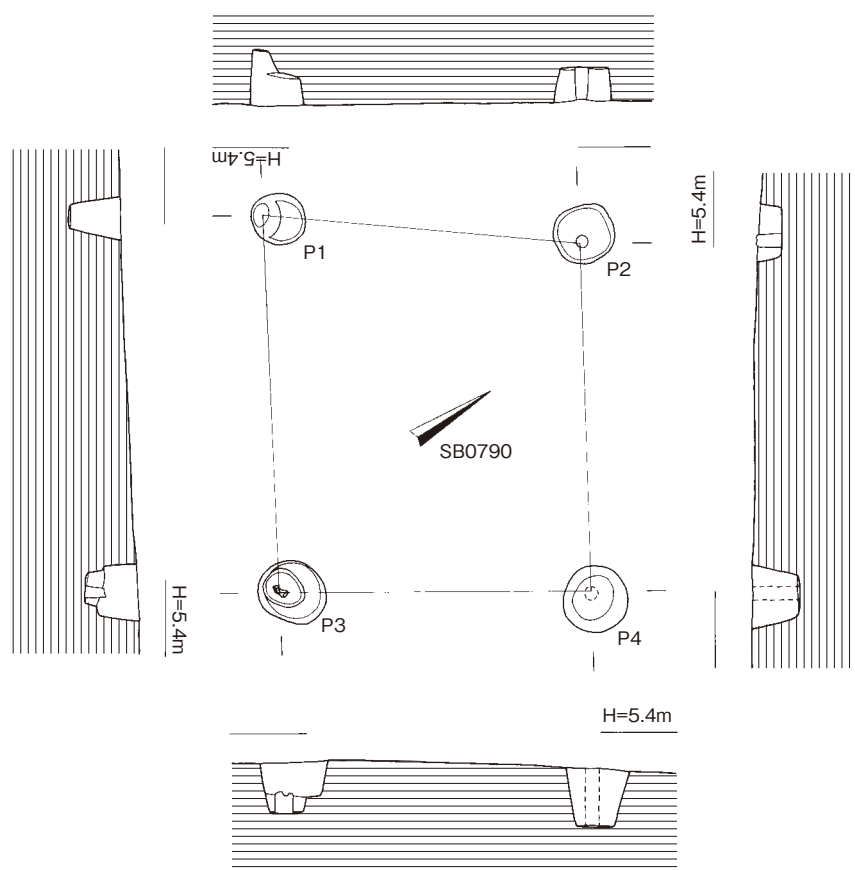
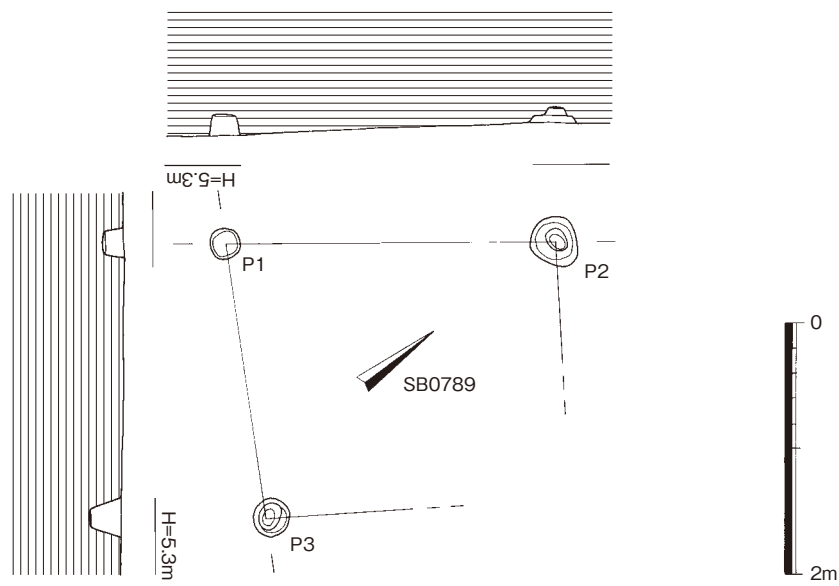
すべての柱穴から弥生土器片が少量出土し、P2・P4から出土した遺物のみ図示した。後期の所産と考えられるが、SD0759・0760を壁周溝とする竪穴住居跡の支柱穴であった可能性もある。

出土遺物(第235図) 101は鋤形口縁の甕である。口縁部の平坦面はやや外傾し、内側に突出する。胴部は丸みを持ち、口縁部のやや下で最大径を測る。外面は縦位のハケ目を残す。にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、復元口径は22.0cmを測る。102は屈曲口縁甕の口縁～胴部である。口縁部は外傾し、端部は稜をなす。胴部は丸みをもちながら、中位で最大径を測る。外面は縦位のハケ目、内面は横位のハケ目を残す。にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈し、復元口径は15.8cmを測る。103は鋤先口縁の壺の口縁～頸部片である。平坦面はやや内傾し、内側に強く突出する。口縁部外縁には密に刻目を施す。にぶい橙色(5YR7/4)を呈す。復元口径19.4cmを測る。104は壺の胴～底部である。底面は厚い円盤状を呈す。胴部は球形状で丸みを帯びる。褐灰色(5YR5/1)を呈し、底径5.0cmを測る。

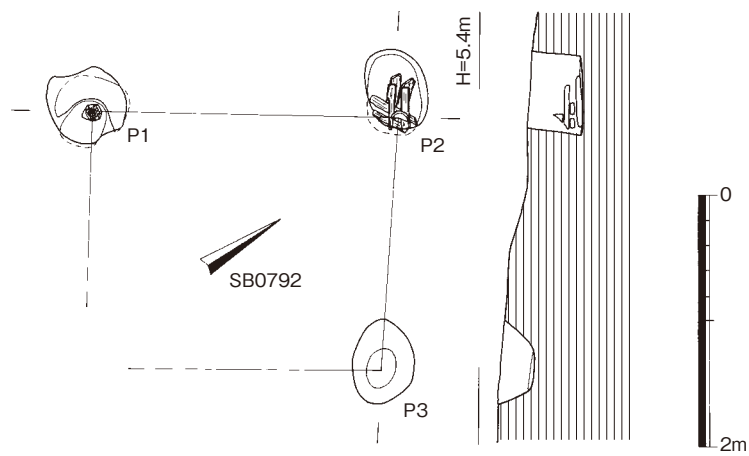
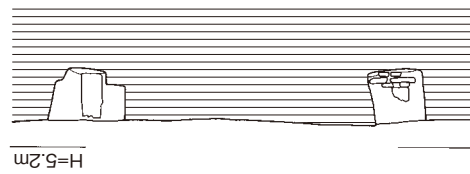
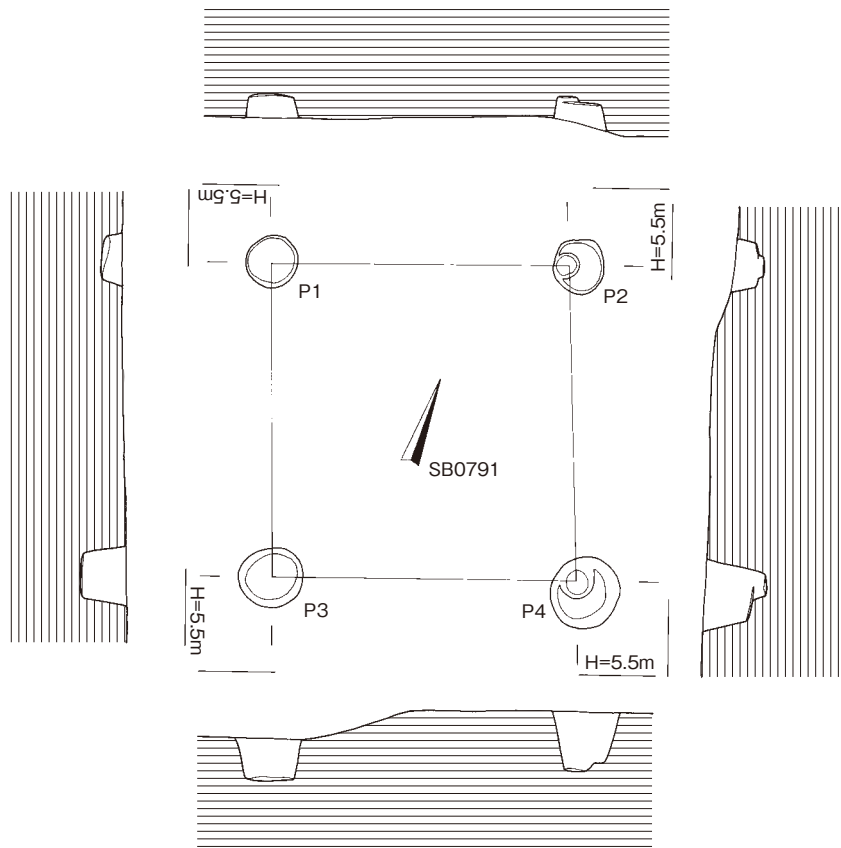
SB0792 (第234図) L-2に位置する1間(柱間2.0m)×1間(柱間2.5m)の掘立柱建物である。総床面積は約5m²、主軸方位はN-58°-Wを示す。柱穴は平面楕円形を呈し、直径50～70cm、残存の深さは約50cm、埋土は暗灰色粘質土である。P1・P2は壁面が直立し底面は平坦で、柱木や



第 232 图 IV区 2 面全体图 (1/150)



第 233 図 SB0789・0790 実測図 (1/60)



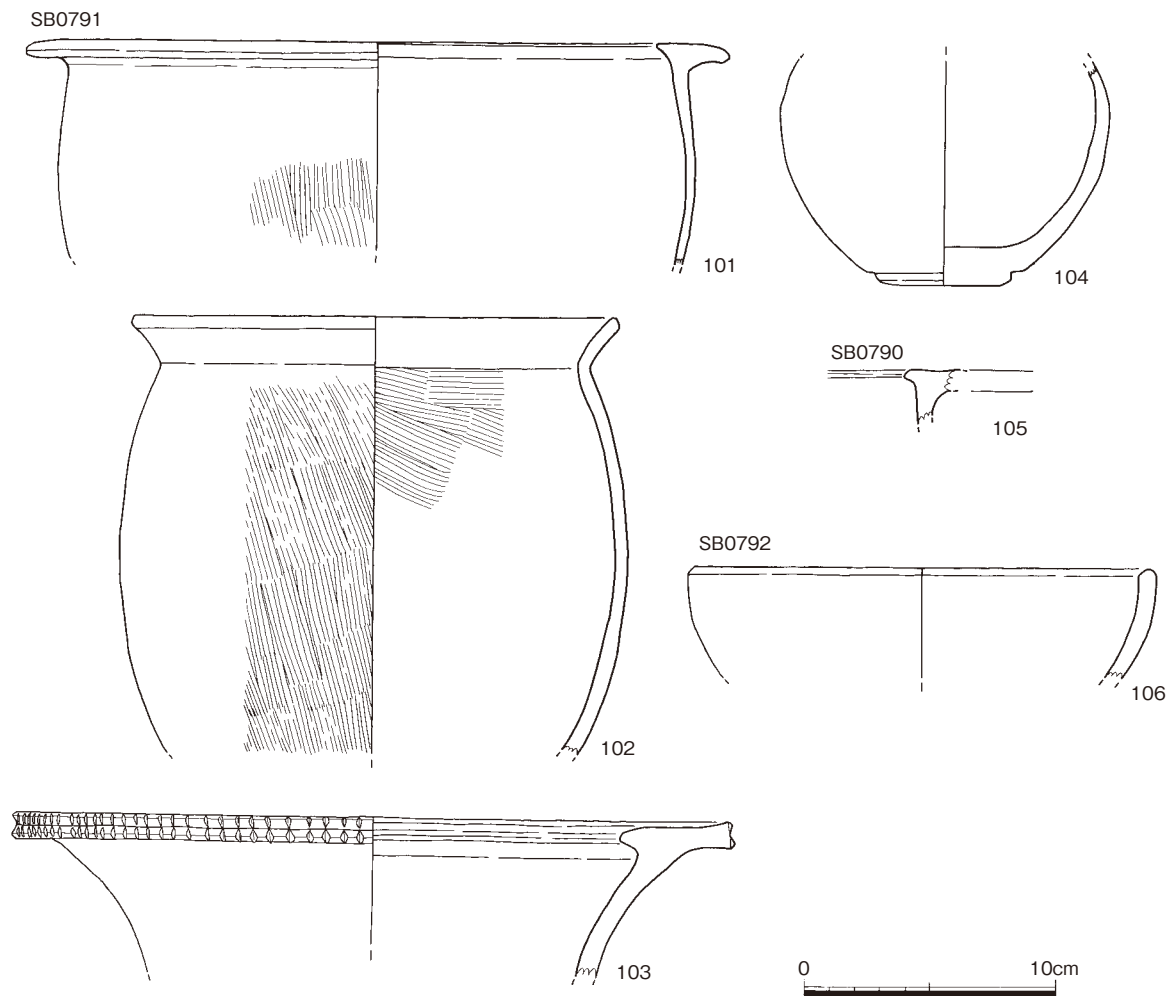
第 234 図 SB0791・0792 実測図 (1/60)

礎板が出土した。P3は壁面が外傾し、柱が抜き取られた可能性もある。P1ではコナラ属コナラ亜属コナラ節の芯持丸木を利用した柱木が据えられたままの状態で見出された。P2では礎板および柱木が見出された。礎板は長さ50cm、幅10cm、厚さ5cmほどの細長い板で、2本ずつを十字に交差させて3段、計6本を積み上げる。樹種はすべてコナラ属アカガシ亜属で、ミカン割り材や半裁材を使用する。柱木は最上段の礎板に密着した状態で見出された。柱木の設置面は平坦に仕上げる。樹種はスダジイである。

すべての柱穴から弥生土器片が少量出土し、P2から出土した遺物のみ図示した。弥生時代後期の所産と考えられる。

出土遺物(第235図) 106は直口鉢の口縁部片である。口縁端部は丸く仕上げ、胴部はやや丸みを帯びる。橙色(2.5 YR6/8)を呈し、復元口径16.8cmを測る。

その他、L-2に位置するSP0853からも礎板と考えられる木片が出土した。樹種はイスノキで、木取りは不明である。うまく長方形の柱穴配置に復元できない柱穴については、2支柱の竪穴住居跡なども想定できるが、掘り方や貼床の痕跡がなく、詳細は不明である。



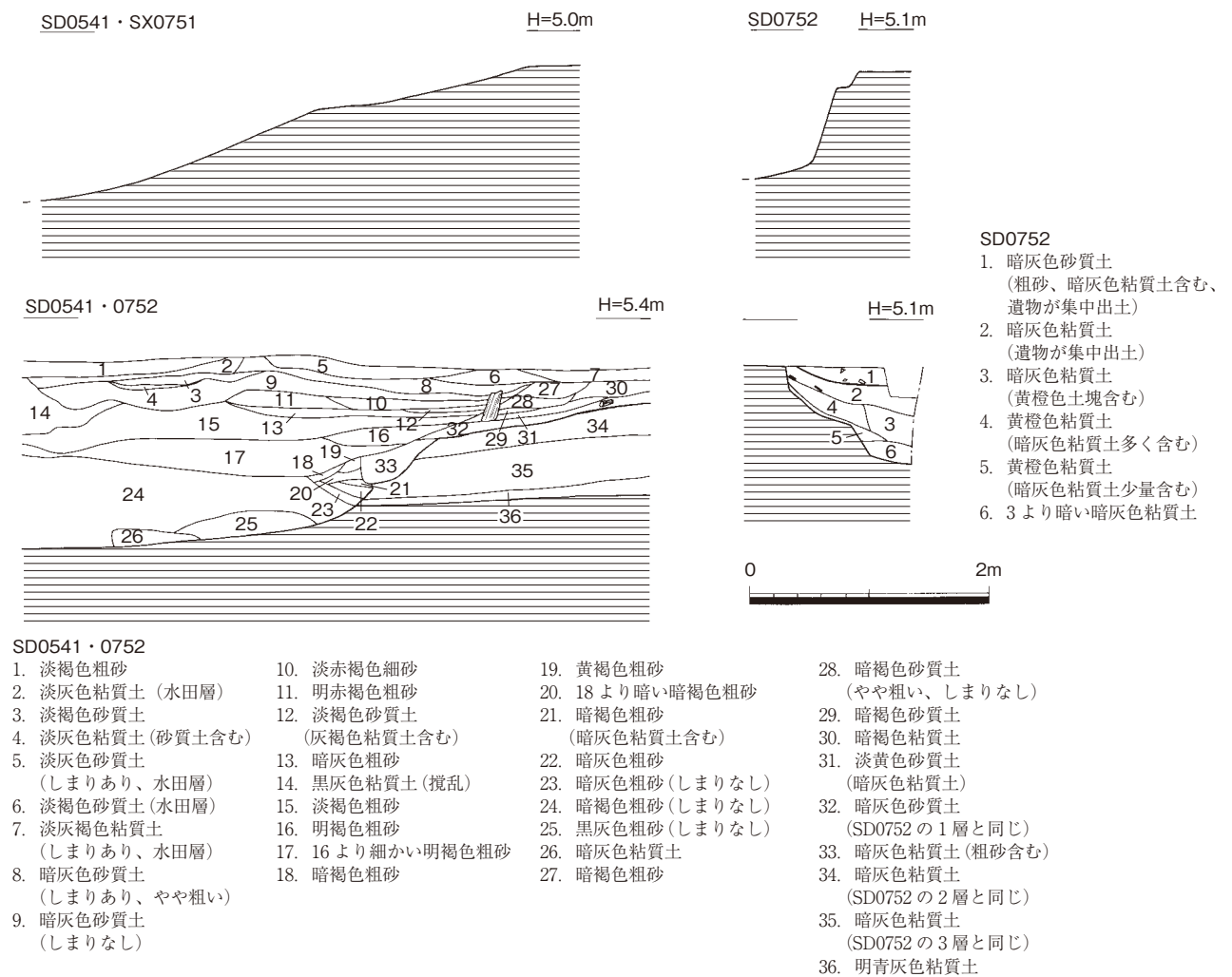
第235図 SB0790～0792 出土遺物実測図(1/3)

②溝 (SD)

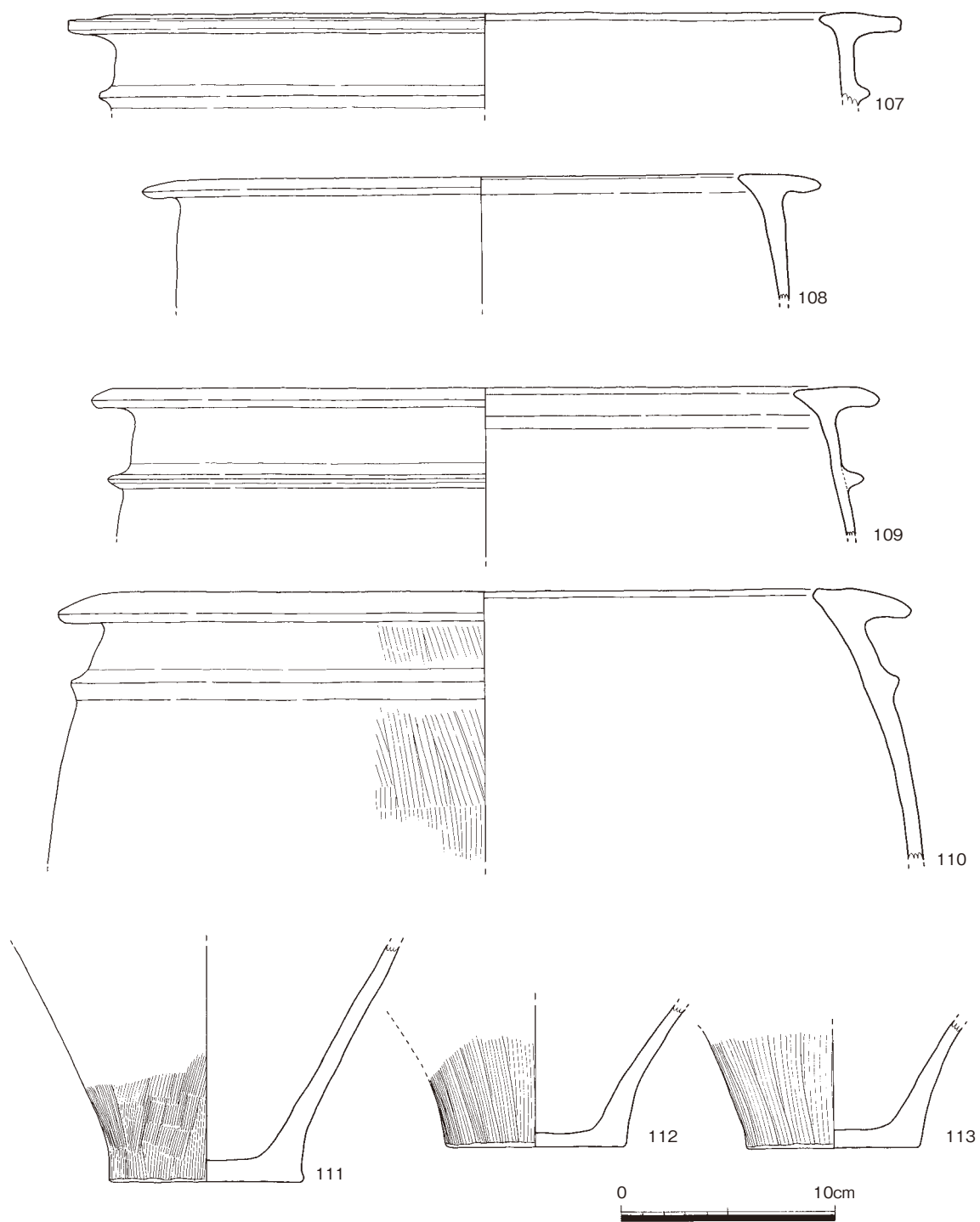
SD0541 (第 232・236 図) K-1・2～L-1 にかけて検出した南北方向の溝で、溝の大部分は調査区外へ延びており、本調査区では東側の肩のみが検出された。検出した長さ約 15m、幅 7m 以上、残存の深さ 1.5cm を測る。K-2 付近で SD0752 を切る。当初は両者の関係性が不明瞭であったため、トレンチで切り合いを確認したが、その際に両者の遺物を混同して取り上げた可能性がある。また、南側には包含層 SX0751 が堆積し、K-2 付近では SD0766 が直結する。調査区の北隅の壁面はこの溝の埋土にあたるが、埋土にしまりがなく、さらに湧水も著しかったため、壁面の崩壊を防止する養生を優先して調査せざるをえなかった。そのため、溝の最底面まで掘削できた面積は非常に狭い。

第 236 図左は調査区北西壁面の土層断面図で、SD0541・SX0751・SD0752 の関係性を示す。1～7 層は上面の水田層、8～26・33 層 (粗砂主体) は SD0541、27～30 層 (暗褐色粘質土主体) は SX0751、32～36 層 (暗灰色粘質土主体) は SD0752 の埋土で、SD0752 → SX0751 → SD0541 の順に堆積する。SX0751 は SD0541 の肩に沿うような形状をしており、両者は一連の遺構である可能性が高い。

溝の底面には暗灰色粘質土が溜まり、その上は暗褐色・黄褐色の粗砂 (13～25 層)、その上には比較的目の細かい砂質土層 (8～12 層) がレンズ状に堆積する。また、壁面付近では 18～23 層のよう



第 236 図 SD0541・0752 土層断面実測図 (1/60)

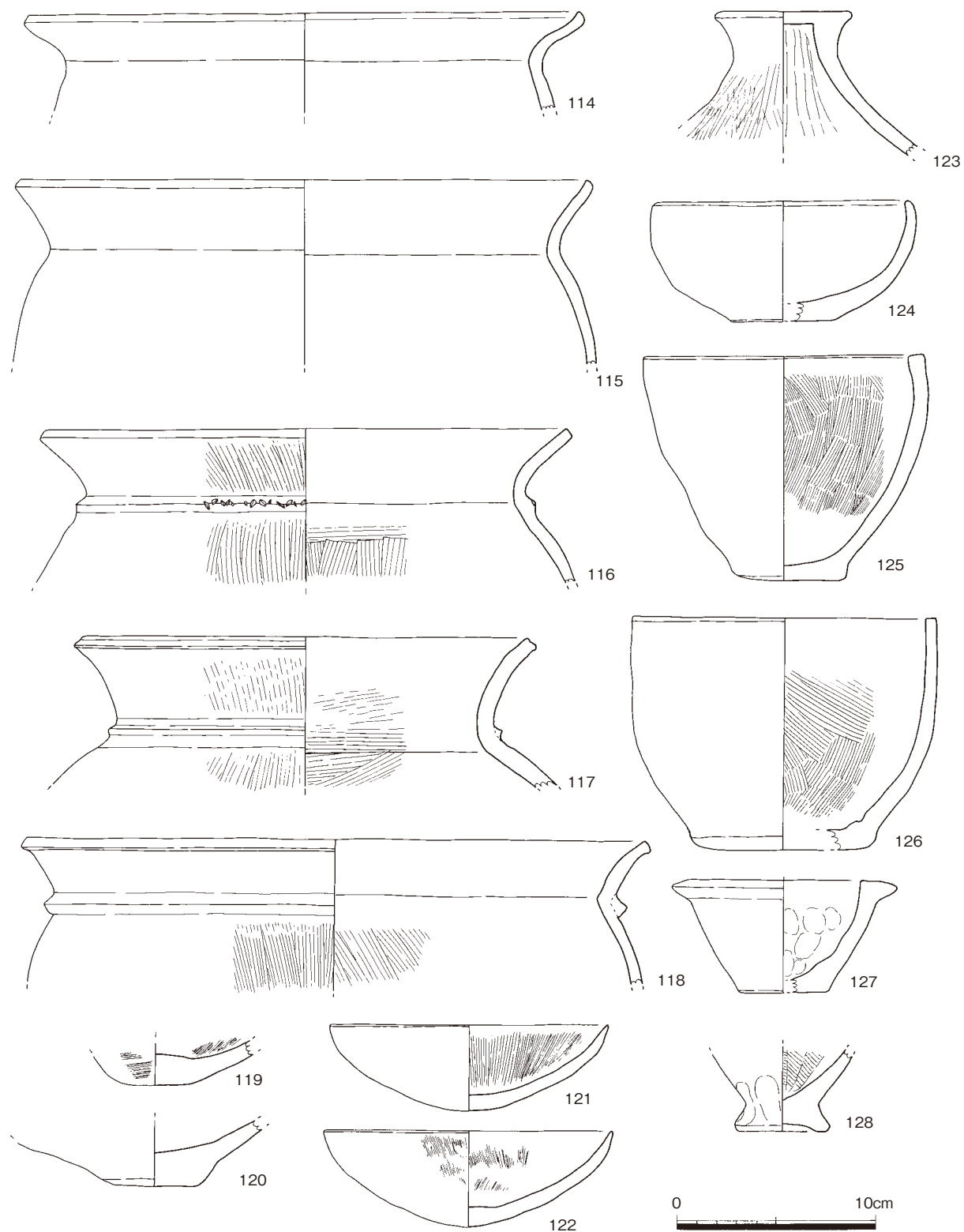


第 237 図 SD0541 出土遺物実測図 (1) (1/3)

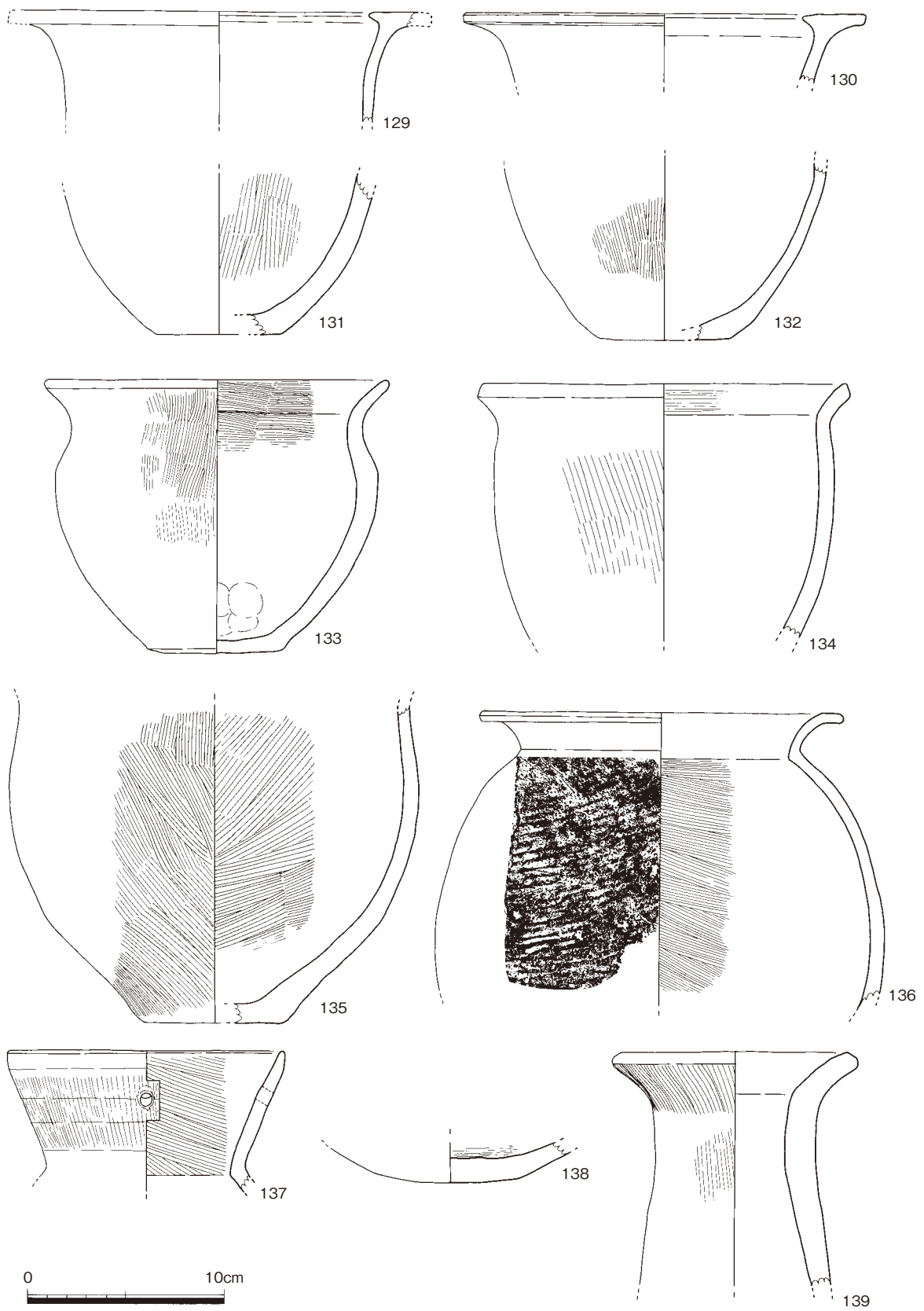
に粗砂が外傾して堆積し、またその上位にはSD0752の埋土と思われる暗灰色粘質土(33層)がブロック状に落ち込むなど、層位の乱れが確認できる。

出土遺物は弥生時代中期後半から古墳時代初頭頃の土器が大部分であるが、一部に須恵器(151・152)や軒丸瓦状の土製品(258)を含むことから、この溝は古代の所産と考えられる。

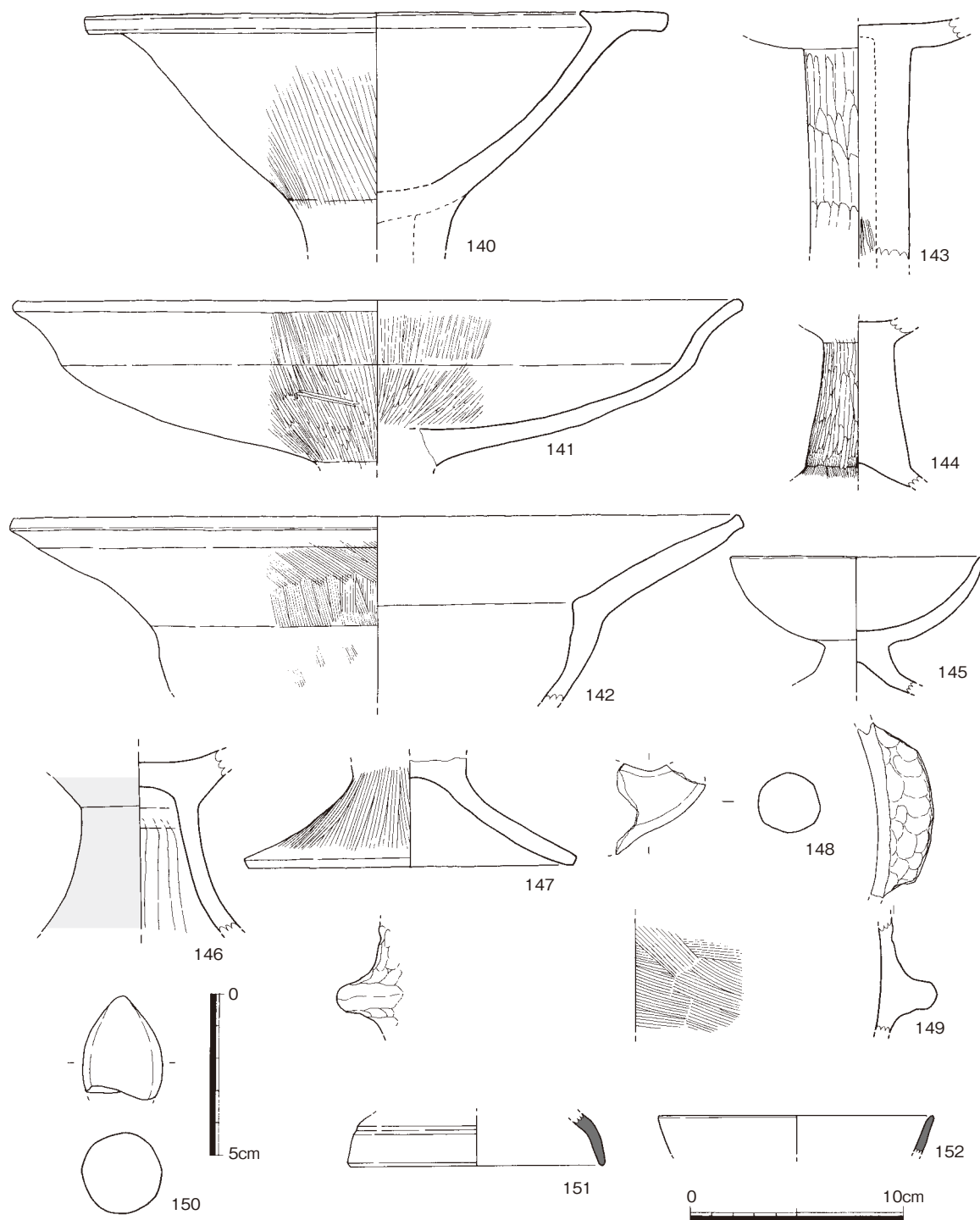
出土遺物(第237~240図) 107~147は弥生土器である。107~110は鋤形口縁の甕である。107は平坦面の内側が断面三角形に突出し、口縁端部は角張る。口縁部やや下に断面三角形の突帯をめぐらす。褐灰色(5YR5/1)を呈し、復元口径31.0cmを測る。108は口縁の平坦面内側が突出し、端部は細くすぼまる。橙色(2.5YR6/6)を呈し、復元口径23.8cmを測る。109は口縁の平坦面内側が強く突出し、端部は丸く仕上げる。口縁部やや下位に断面三角形の突帯をめぐらす。橙色(5YR6/6)を呈し、復元口径28.4cmを測る。110は胴部から口縁部にかけて内湾し、口縁部の平坦面はやや外傾する。外面には縦位のハケ目を残し、口縁部やや下位に断面三角形の突帯を貼り付ける。橙色(7.5YR6/6)を呈し、復元口径30.4cmを測る。111~113は甕の底部である。いずれも外面に縦位のハケ目を残す。111は褐灰色(10YR6/1)を呈し、底径8.8cmを測る。112は橙色(5YR6/6)を呈し、底径8.0cmを測る。113はにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈し、底径7.8cmを測る。114~118は屈曲口縁甕の口縁部である。114は跳ね上げ口縁で、にぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、復元口径27.6cmを測る。115は口縁部がやや直立気味で、肩がやや張る。外面は灰褐色(5YR6/2)、内面はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、復元口径24.0cmを測る。116~118は後期後半頃の大型甕で、頸部に断面三角形の突帯をめぐらす。116は口縁が直線的に外傾し、端部が角張る。突帯の頂部にランダムな刻目、内外面ともに縦位のハケ目を残す。明褐色(7.5YR5/8)を呈し、復元口径20.8cmを測る。117は口縁部が直立気味に外反し、端部は角張る。外面は縦位、内面は横位のハケ目を残す。橙色(2.5YR6/8)を呈し、復元口径17.0cmを測る。118は内外面に縦位のハケ目を残す。褐灰色(10YR4/1)を呈し、復元口径26.0cmを測る。119・120は後期後半頃の甕の底部。119は小さな平底で、外面に平行タタキを施す。橙色(5YR6/6)を呈す。120は、レンズ状気味のやや厚い平底である。明黄橙色(10YR6/8)を呈し、底径4.0cmを測る。121・122は後期後半頃の浅い鉢で、口縁部は尖る。いずれも縦位のハケ目を残し、橙色(5YR6/8)を呈す。121は復元口径13.8cm、器高4.3cm、122は復元口径14.0cm、器高4.8cmを測る。123は甕蓋である。天井部から一度大きく内湾し、外へ開く。内底面は平坦である。外面はハケ、内面は工具ナデを施す。橙色(2.5YR6/8)を呈し、天井部径6.4cmを測る。124~128は中期末から後期前半頃の鉢である。124は胴部に丸みを持ち、口縁部は直立する。外面は橙色(2.5YR6/6)、内面はにぶい黄橙色(10YR7/3)を呈す。復元口径12.1cm、は器高6.0cm、復元底径5.0cmを測る。125・126は器壁が厚く、口縁端部に平坦面を持ち、内面にはハケ目を残す。125は胴部に丸みをもつが、126は直線的に立ち上がる。125は外面が赤色(10YR5/6)、内面が灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、口径12.4cm、器高11.2cm、底径5.3cmを測る。126は外面が橙色(5YR6/6)、内面が褐灰色(5YR5/1)を呈す。復元口径14.0cm、器高11.5cm、復元底径8.6cmを測る。127は口縁端部に平坦面をもち、外側に突出する。外面は橙色(5YR6/6)、内面は褐灰色(5YR5/1)を呈し、復元口径9.6cm、器高5.6cm、復元底径4.2cmを測る。128は底部と胴部の境がくびれ、灰黄褐色(10YR6/2)を呈す。復元底径4.4cmを測る。129・130は中期末頃の鋤先口縁の壺である。平坦面の内側は突出し、外端部は角張る。129は復元口径15.0cm、130は13.8cmを測る。131・132は壺の底部である。131は内面に縦位のハケ目を残す。灰褐色を呈し、復元底径6.4cmを測る。132は外面に縦位のハケ目を残す。橙色(7.5YR7/4)を呈し、底径6.6cmを測る。133~135は後期前~中



第 238 図 SD0541 出土遺物実測図 (2) (1/3)



第 239 图 SD0541 出土遺物実測図 (3) (1/3)



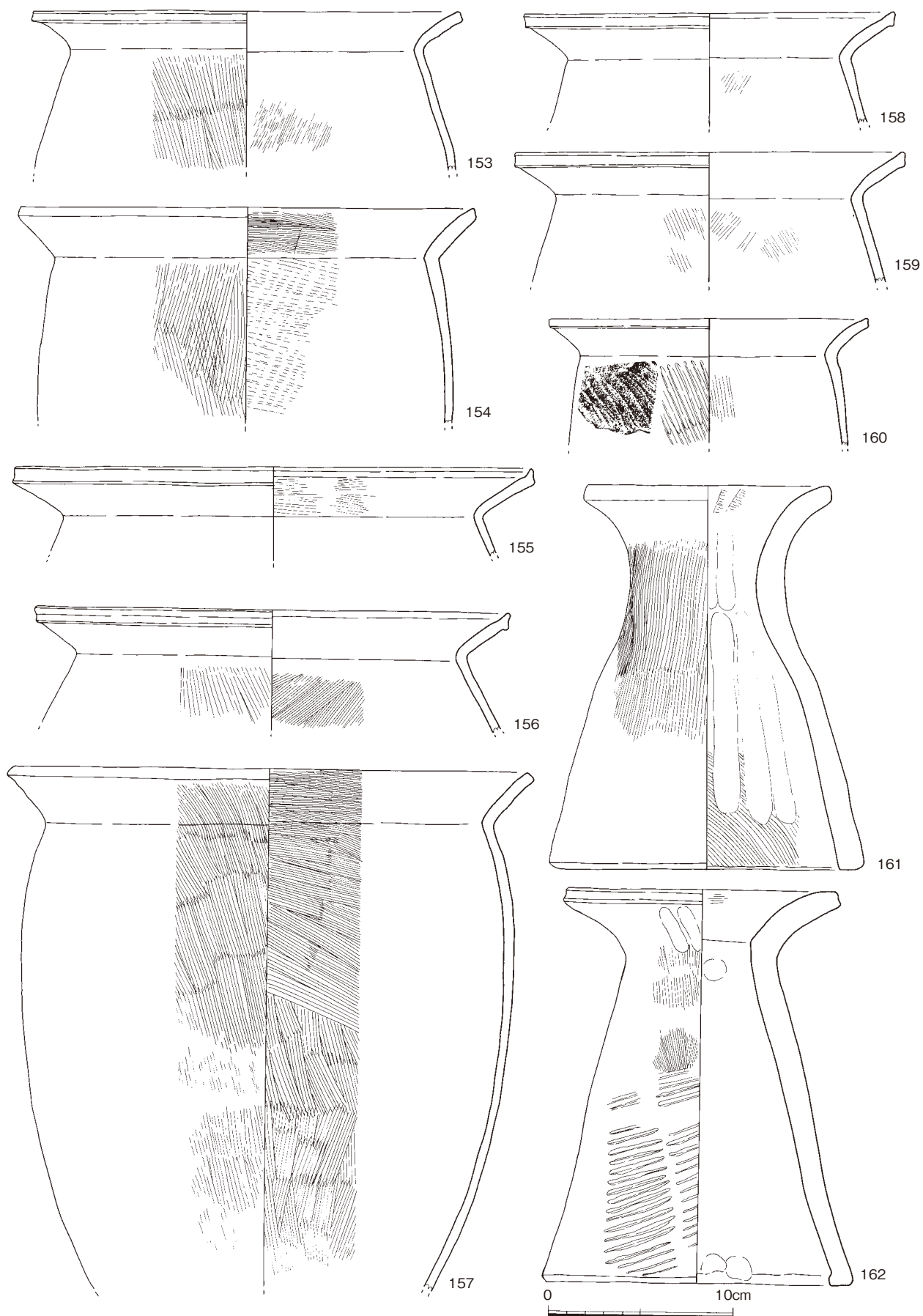
第240図 SD0541 出土遺物実測図(4) (150は1/2、他は1/3)

葉頃の鉢で、内外面に縦位のハケ目を残す。133は口縁部が外傾し、肩が張る。明赤褐色（5 YR5/6）を呈し、復元口径16.6 cm、器高13.7 cm、底径6.6 cmを測る。134は口縁部が短く外傾し、ナデ肩で胴部の張りが無い。外面は灰黄褐色（10 YR6/2）、内面は明黄褐色（10 YR7/6）を呈し、復元口径17.8 cmを測る。135は壺の胴～底部片である。内外面ともに縦位に目の粗いハケ目を残すが、内面下位のハケ目は目が細かい。外面は橙色（7.5 YR6/6）、内面は黒褐色（7.5 YR3/1）を呈し、底径6.8 cmを測る。136は甕の口縁～胴部片である。口縁は外反し、端部はさらに屈曲して平坦面をなす。外面は平行タタキ、内面は横位のハケ目を残す。にぶい橙色（5 YR7/4）を呈し、復元口径12.8 cmを測る。137は壺の口縁部である。頸部は直線的に伸び、口縁は丸く収める。頸部上位に孔を1箇所穿つ。外面は縦位のハケ目のちヨコナデ、内面は斜位のハケ目を残す。外面はにぶい黄褐色（10 YR4/3）、内面は明黄褐色（10 YR6/6）を呈し、口径13.4 cmを測る。138は甕の底部である。ややレンズ状を呈し、内底部にはハケ目を残す。にぶい橙色（7.5 YR4/3）を呈す。139は器台である。口縁部は短く外反し、胴部は直線的に内傾する。外面は縦位のハケ目をナデ消す。明黄褐色（10 YR6/6）を呈し、復元口径11.6 cmを測る。140～142は高坏の坏部、143～147は脚部である。140は鋤先口縁の平坦面がやや外傾し、内側は鋭く突出する。灰黄色（2.5 Y6/2）を呈し、復元口径19.0 cmを測る。中期末。141は口縁部がゆるやかに外反し、体部は丸みを帯びつつも浅い。内外面ともに縦位の研磨を密に施す。橙色（2.5 YR6/8）を呈し、口径33.6 cmを測る。後期後半。142は体部中位で屈曲して口縁部が長く直線的に外に開き、体部は丸みを帯びる。にぶい橙色（5 YR6/4）を呈し、口径33.4 cmを測る。古墳時代初頭。143は直線的な筒部で、内部は中空である。外面を縦位に研磨する。橙色（7.5 YR6/6）を呈す。144は筒部が円柱状で脚部へ明確に屈曲する。明赤褐色（5 YR5/8）を呈す。145は坏部が丸みをもち、脚部は大きく外反する。橙色（5 YR6/6）を呈し、復元口径11.6 cmを測る。後期後半。146は脚部で、筒の径が大きく、外面に赤色顔料を施し、赤褐色（2.5 YR4/8）を呈す。147は器高が低い高坏脚部で、外面は縦位のハケ目を残す。にぶい褐色（7.5 YR6/3）呈し、復元底径15.0 cmを測る。148は土製杓子の把手。断面は円形で、径約3 cmを測る。にぶい橙色（7.5 YR6/4）を呈す。149は把手。長さ7.8 cm、幅2 cm、厚さ1.5 cmの広く平たい把手が水平に取り付き、内面は横位のハケ目を残す。褐灰色（7.5 YR4/1）を呈す。150は紡錘形の投弾である。橙色（7.5 YR6/6）を呈し、残存長3.1 cm、径2.5 cm、重量14.4 gを測る。

151・152は須恵器である。151は蓋の口縁部である。青灰色（5 BG5/1）を呈す。口径12.0 cmを測る。小田編年IV B期か。152は坏の口縁部。青灰色（5 BG5/1）を呈し、口径12.8 cmを測る。

SD0752（第232・236図） K-2に位置する北東-南西方向の溝で、西側をSD0541に切られる。溝の大部分は調査区外にあり、片側の肩のみが検出された。検出した長さは約7.5 m、幅2 m以上、残存の深さは約90 cmを測る。底面にはグライ化した暗灰色粘質土（6層）、その上位に黄橙色粘質土（4・5層）、暗灰色粘質土（3層）、粘性の強い暗灰色粘質土（2層）、暗灰色砂質土（1層）がいずれもレンズ状に堆積する。遺物は、1・2層を中心に弥生時代中期末から古墳時代初頭までの弥生土器・初期土師器や木製品（259・260）のほか、動物骨が出土した（付編5参照）。木製品や動物骨は粘性の強い粘質土（2層）に保護されて残存したものと考えられる。

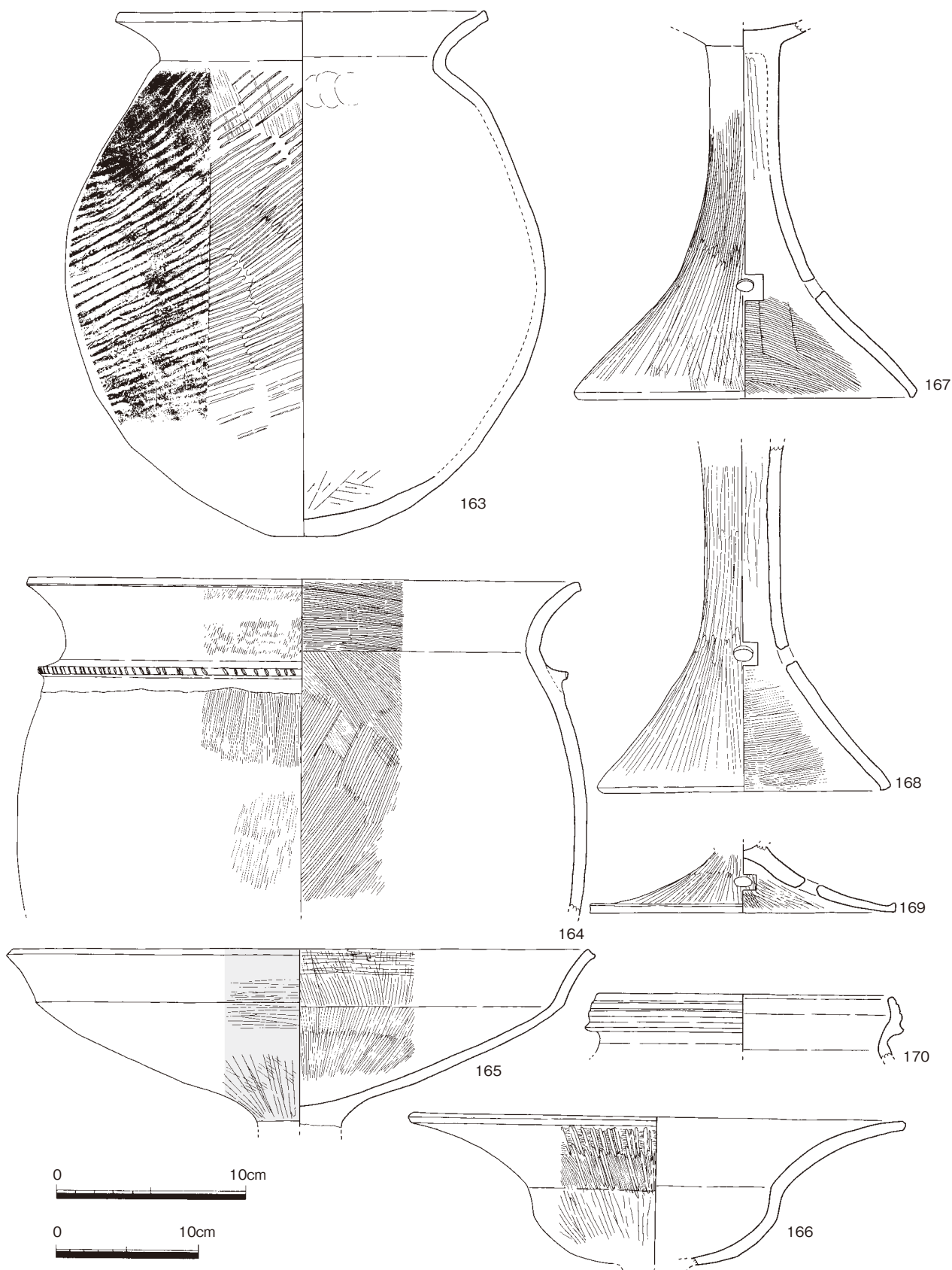
この状況は隣接するI区SD0034・0036と類似することから、一連の遺構である可能性が高い。また、3層以下からは遺物がほとんど出土せず、埋土の状況も1・2層とは異なる。このSD0752の方向や3層以下の堆積状況は、先述のI区SD0034・0036に切られるSD0032（後期前葉）と類似しており、両者は一連の遺構である可能性がある。



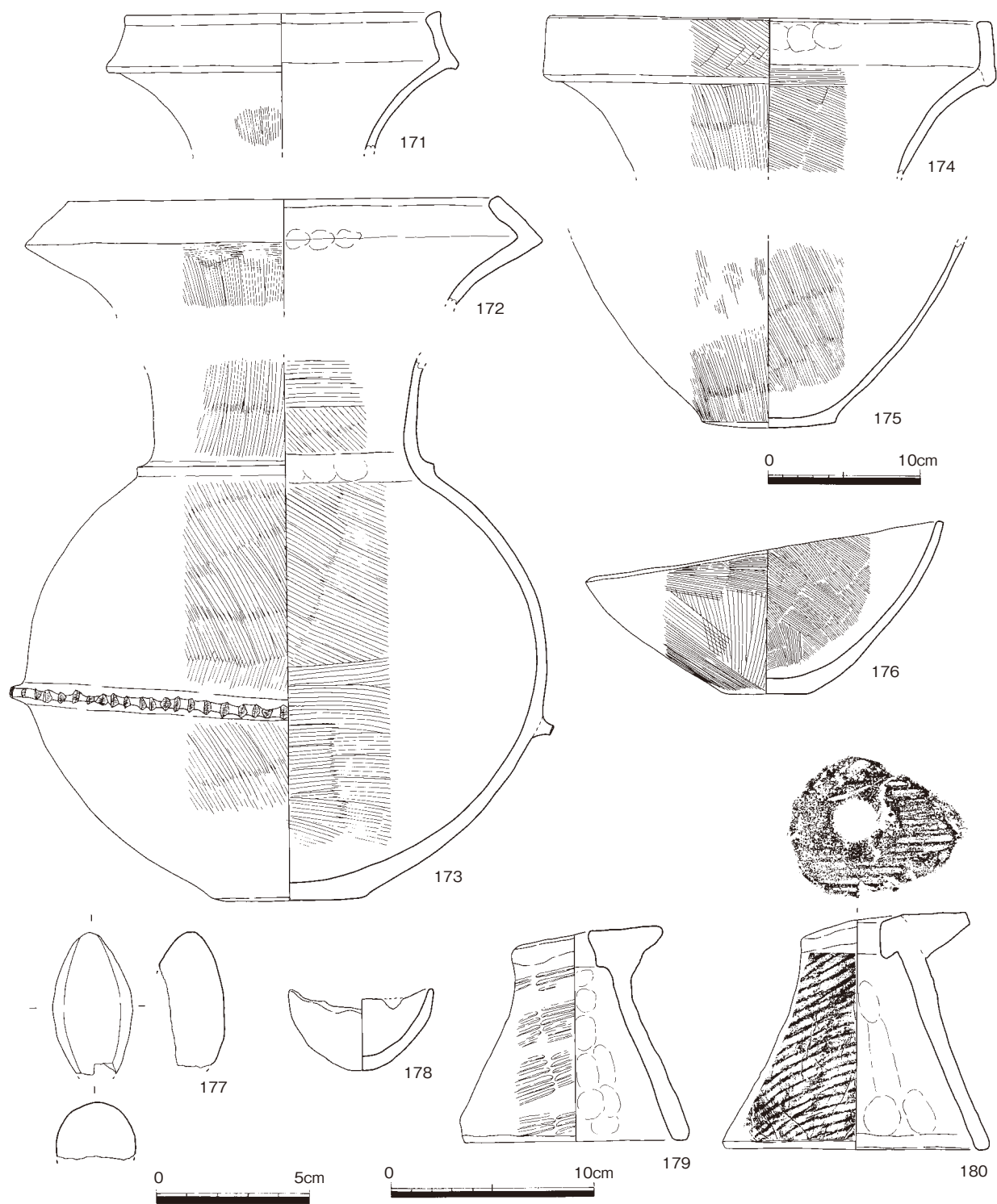
第241図 SD0752 出土遺物実測図(1) (1/3)

このことから、このSD0752は上・下層で別々の遺構である可能性が高く、その埋没時期は下層が後期前葉頃、上層が弥生時代後期末～古墳時代初頭頃と考えられる。

出土遺物(第241～243)すべて上層から出土した。153～160は屈曲甕の口縁～胴部である。胴部が球形状を呈すもの(153・155・156)と砲弾形を呈すもの(154・157～160)がある。160は平行タタキ、その他は縦位のハケ目を残す。154・157は外面にススが付着する。いずれも焼成が良好で、色調は褐色系(7.5 YR2/1～4/4)を呈す。復元口径は小さいもので18.0 cm(153)、大きいもので27.6 cm(157)を測る。161・162は器台である。161は頸部が強く湾曲し、中位で段を付けながら脚部は直線的に開く。内外面ともにハケ目を残し、内面は縦位にナデを施す。灰黄褐色(10 YR6/2)を呈し、口径12.6 cm、器高20.5 cm、底径16.0 cmを測る。162は口縁部が外反し、頸部から脚部へ直線的に開く。外面は縦位のハケ目の上から、平行タタキを施す。褐灰色(7.5 YR6/1)を呈し、復元口径14.4 cm、器高21.2 cm、底径16.2 cmを測る。163は完形の甕である。SD0541との境界付近で出土したが、おそらくこの溝に伴うものであろう。口縁部は外反気味で、頸部から胴部へ丸みを帯びて膨らみ、胴部中位で最大径を測る。底部は丸底である。外面は縦位のハケ目の上から、平行タタキを施す。灰色(5 Y5/1)を呈す。口径19.0 cm、器高27.5 cmを測る。164は大型甕の口縁～胴部である。口縁部はゆるやかに外反し、肩部で胴部最大径を測る。頸部やや下位に断面三角形の突帯を巡らし、細かい刻目を施す。外面・胴部内面は縦位、口縁部内面は横位のハケ目を残す。にぶい黄橙色(10 YR6/4)を呈し、復元口径31.2 cmを測る。165・166は高坏・坏部である。165は口縁部がゆるやかに外反し、口端部が角張る。体部はやや直線的である。ハケ目の上から、密な研磨と赤色顔料を施す。にぶい橙色(7.5 YR7/4)を呈し、復元口径30.0 cmを測る。166は長い口縁が大きく外反し、体部は丸みを帯びる。外面は縦位のハケ目を縦位の研磨で消し、内面はナデ調整する。灰褐色(7.5 YR6/2)を呈し、復元口径12.0 cmを測る。167～169は高坏・脚部である。167・168は筒部が中空で、脚部中位で大きく開き、1孔を穿つ。外面は縦位のハケ目を縦位の研磨で消す。内面は筒部に絞り痕、裾部は横位のハケ目を残す。橙色(7.5 YR7/4)を呈し、底径は167が17.6 cm、168が14.8 cmを測る。169は器高が低く、脚部中位に1孔を穿つ。外面に暗文、内面にハケ目を残す。外面はにぶい赤褐色(5 YR5/3)、内面は橙色(5 YR5/8)を呈す。復元底径16.0 cmを測る。170は吉備系甕の口縁部片である。口縁部は突出し、口唇部に2条の凸線文を巡らす。焼成は硬質で、外面は明褐色(7.5 YR5/8)、内面は褐色(7.5 YR4/6)を呈す。復元口径15.3 cmを測る。171～175は壺。171・172は口縁が複合化し、174は直立する。171は明褐色(7.5 YR6/8)、復元口径14.0 cm、172はにぶい橙色(7.5 YR6/4)、復元口径20.0 cm、174は外面が褐灰色(10 YR6/1)、内面が灰黄褐色(10 YR6/2)を呈し、口径27.0 cmを測る。173は頸部～底部片である。頸部は直立気味で、胴部は球形に近く、底部は平底である。頸部には断面三角形の突帯をめぐらし、胴部中位の断面台形の突帯には木製工具で刻目を施す。外面は斜位～縦位、内面は斜位～横位のハケ目を残す。胴部上半には黒斑を残す。灰白色(10 YR8/2)～橙色(7.5 YR7/6)を呈し、底径7.6 cmを測る。175はレンズ状気味の平底で、外面は黒褐色(5 YR3/1)、内面はにぶい橙色(5 YR6/3)を呈す。底径8.7 cmを測る。176は直口縁の鉢である。外部は外傾し、口縁端部は角張る。内面は目の細かいハケ目、外面は目の細かいハケ目と粗いハケ目の2種類を残す。にぶい黄橙色(10 YR6/4)を呈し、口径17.0 cm、器高8.4 cm、底径4.2 cmを測る。177は砲弾形の投弾である。器壁は平滑で、明赤褐色(5 YR5/6)を呈し、残存長4.6 cm、径2.6 cm、重量23.0 gを測る。178は小型の坏である。指押さえにより成形する。にぶい褐色(7.5 YR5/3)を呈し、口径6.6 cm、器高4.0 cmを測る。179・180は鳶口の支脚。いずれも天井部に1孔を穿ち、体部に平行タタキを施す。にぶい橙色(7.5 YR6/4)



第 242 図 SD0752 出土遺物実測図 (2) (164 は 1/4、他は 1/3)



第 243 図 SD0752 出土遺物実測図 (3) (177 は 1/2、174・175 は 1/4、他は 1/3)

を呈し、179は器高10.4 cm、底径10.8 cm、180は器高11.5 cm、復元底径12.0 cmを測る。

SD0759 (第244図) L-2に位置する弧状の溝で、両端は削平により消滅し、東側のSD0760を切る。残存の長さ8.7 m、幅50~90 cm、残存の深さ20~30 cmを測り、底面の標高は北西側に向かって低くなる。埋土は暗灰色粘質土がレンズ状に堆積し、遺物は主に1層から出土した。

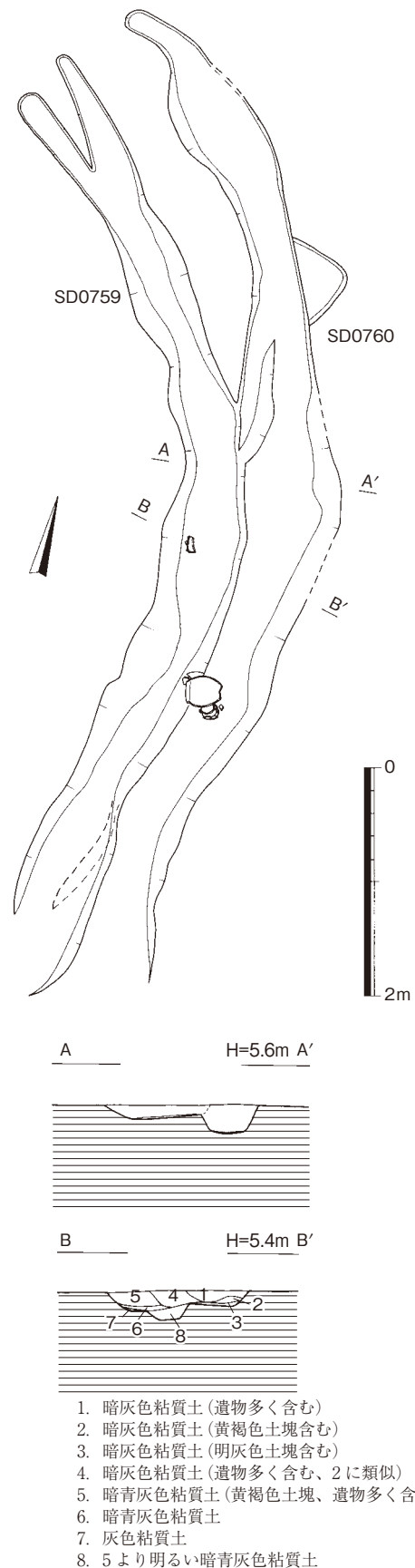
弥生時代中期末から後期終末頃までの土器が出土したことから、この遺構は弥生時代後期終末頃の所産と考えられる。

出土遺物 (第245図) 181は甕の口縁部である。鋤先口縁の平坦面は水平で、内側に突出する。橙色(2.5 YR6/8)を呈し、復元口径20.2 cmを測る。182は複合口縁壺の口縁~頸部片である。口縁部内面を指で押さえ、頸部外面には縦位のハケ目を残す。明褐色(5 YR5/6)を呈し、復元口径14.6 cmを測る。183は高坏の脚裾部で、摩滅が著しい。明褐色(5 YR5/8)を呈し、復元底径15.8 cmを測る。184は丸底の直口鉢で、半球形を呈す。丁寧な指押さえで成形される。外面全体に黒斑が及び、黒褐色(7.5 YR3/1)、内面はにぶい橙色(7.5 YR6/4)を呈し、口径7.2 cm、器高3.0 cmを測る。185は小型丸底壺である。頸部径が大きく口縁部にかけて直立する。にぶい橙色(5 YR6/4)を呈す。

SD0760 (第244図) L-2に位置するSD0759と同様の弧状の溝で、それに切られる。両端は削平により消滅し、検出した長さ9 m、幅40~80 cm、残存の深さ10 cmを測る。SD0759とは南側部分で重なり、西側の肩を切られる。規模・形状ともに類似することから、SD0759はSD0760の掘り直しと考えられる。埋土は、地山由来の暗青灰色粘質土と暗灰色粘質土がレンズ状に堆積する。

遺物は弥生時代中期末頃の土器が少量出土したものの、SD0759と同様に後期終末頃まで下る可能性もある。また、SB0792を支柱穴とする竪穴住居跡の壁周溝である可能性もある。

出土遺物 (第245図) 186は甕の口縁部である。



第244図 SD0759・0760実測図(1/60)

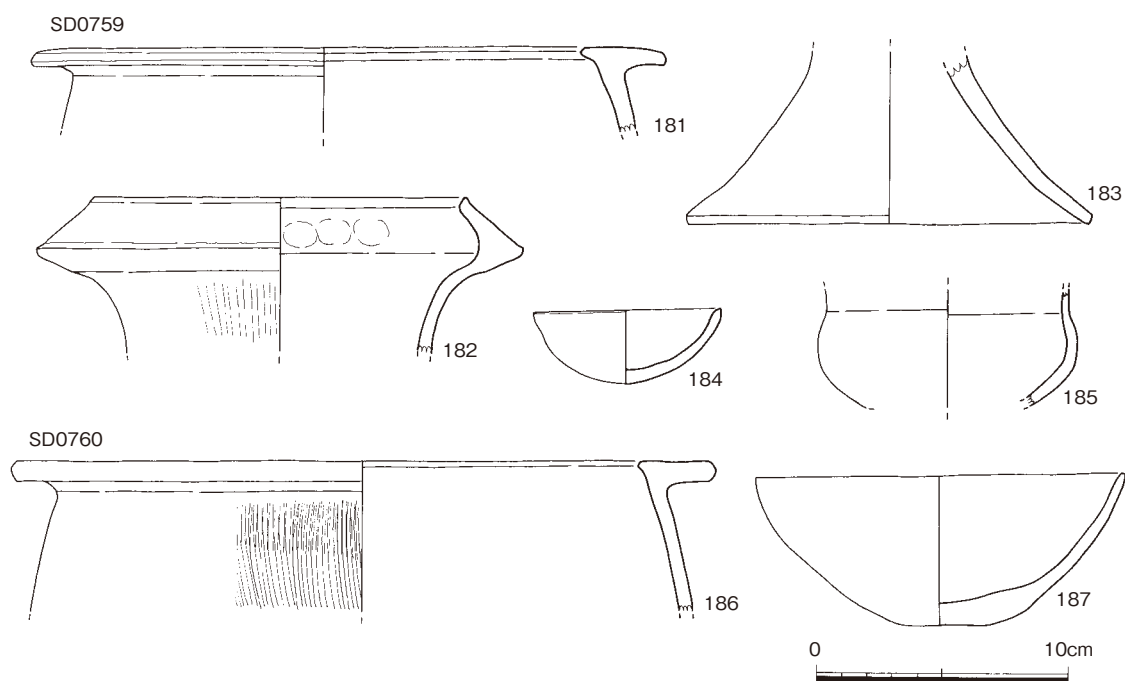
鋤先口縁の平坦面は厚く水平で、内側の突出は弱い。外面には縦位のハケ目を残す。にぶい赤褐色(2.5 YR5/4)を呈し、復元口径21.8 cmを測る。187は直口鉢である。体部は直線気味に外傾し、底部は平底である。褐灰色(5 YR4/1)を呈し、口径14.2 cmを、器高6.0 cm、底径4.0 cmを測る。

SD0764 (第246図) K-3に位置する直線状の溝で、南西部分はSD0766に切られる。検出した長さ4.7 m、幅50~90 cm、残存の深さ10~15 cmで、方位はN-38°-Eを指し、北東から南西に向かって傾斜する。埋土は暗灰色粘質土を主体とする。

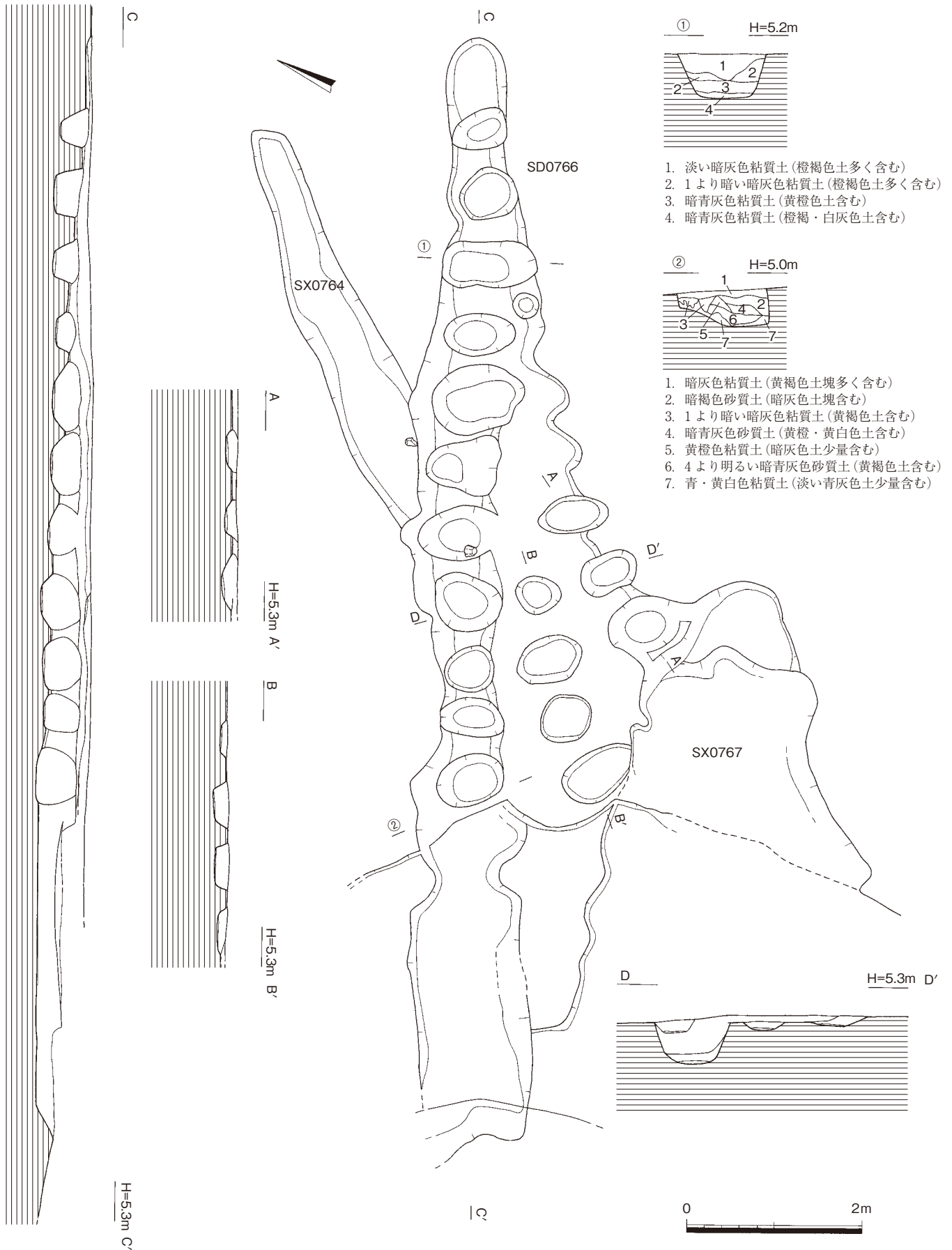
遺物は弥生土器が少量出土したが、後述のSD0766との関連性からみて、時期が下る可能性もある。

出土遺物(第247図) 188は弥生時代後期後半頃の甕の口縁部である。屈曲して外傾する口縁は直線的で、胴部の肩は張らない。頸部外面に縦位のハケ目を残す。明赤褐色(2.5 YR5/8)を呈し、復元口径15.2 cmを測る。189は甕の底部である。189はややレンズ状を呈し、外面にタタキの痕跡を残す。橙色(7.5 YR6/6)を呈す。復元底径8.0 cmを測る。190は壺の底部で、橙色(2.5 YR6/8)を呈し、底径8.4 cmを測る。

SD0766・SX0767 (第246図) K-2・3に位置する溝状遺構で、西側のSX0751・SD0541に向かって下りつつ、幅が広がる。SX0751の底面からも検出されたことから、SX0751に切られる、あるいは併存したものと考えられる。検出した長さ12.5 m、幅0.6~3 m、残存の深さは最深で60 cmを測り、方位はN-38°-Eを指す。底面には10~20 cmおきに幅約50 cmの土坑が連なり、C-C'を主軸に、A-A'、B-B'の方向にも土坑が連続している。各断面をみると、底面の標高が南西側に向かって低くなるのがわかる。いずれもSX0751・SD0541へ向かって下っていく道のように見える。地山は検出面では黄灰色シルトだが、壁面の中位以下はグライ化した青灰色粘質土へと変化する。埋土は下層では粘性の強い暗青灰色粘質土で、地山土に近い。上層は暗灰色粘質土で鉄分を多く含む。



第245図 SD0759・0760 出土遺物実測図(1/3)

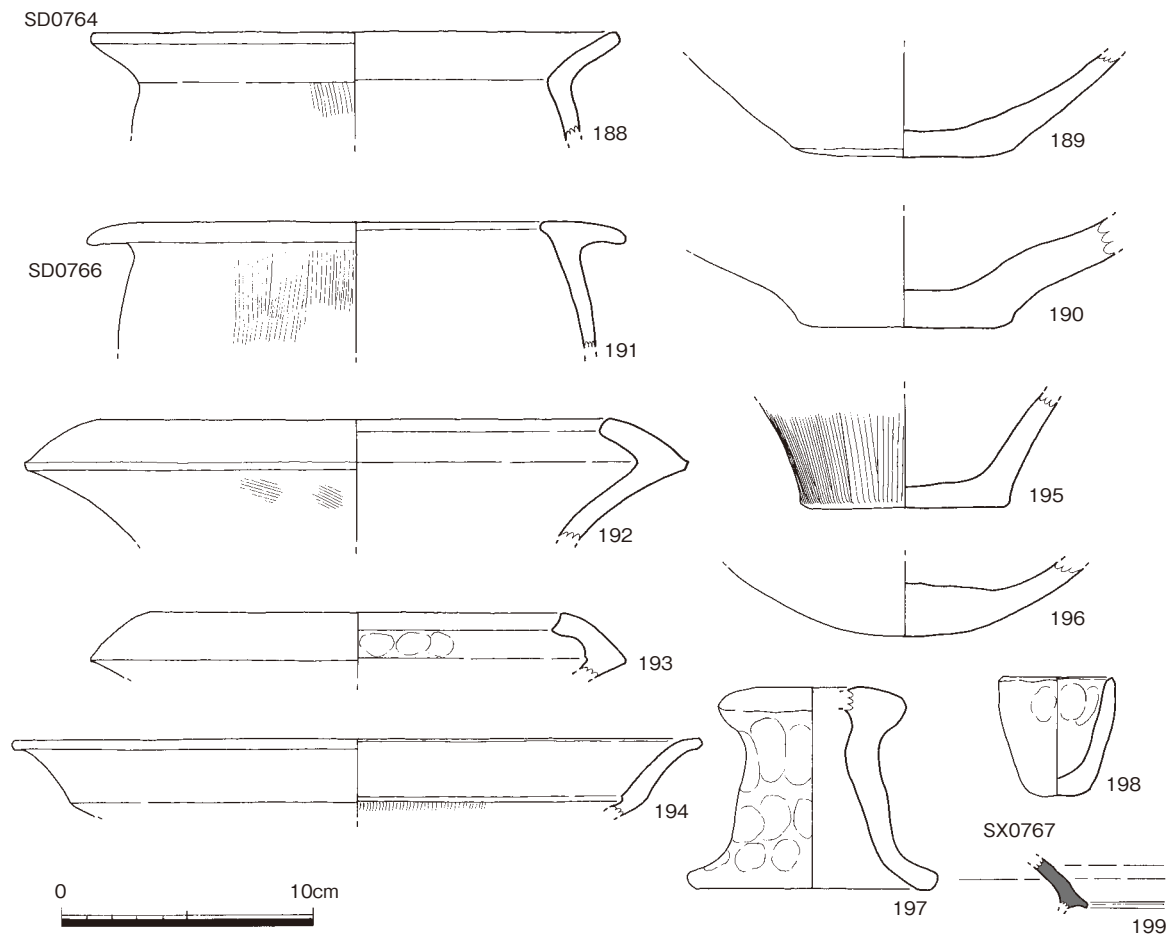


第246図 SD0764・0766、SX0767実測図(1/60)

SX0767はSD0766とSX0751の間にある浅いくぼみで、性格は不明であるが、SD0766と一連の遺構と考えられる。

遺物は弥生時代中期後半～後期終末頃のものが多いが、SX0767から須恵器が出土したことから、SD0766・SX0767の時期は古代以降と考えられる。

出土遺物(第247図) 191～198は弥生土器である。191は鋤先口縁の甕である。平坦面はやや外傾し、内側にわずかに突出する。橙色(2.5 YR6/8)を呈し、復元口径14.4 cmを測る。192・193は複合口縁壺である。192は頸部に横位のハケ目を施すが、ナデ消される。橙色(5 YR6/8)を呈し、復元口径19.2 cmを測る。193は口縁部内面に指頭圧痕を強く残す。橙色(5 YR7/6)を呈し、復元口径15.2 cmを測る。194は高坏の口縁部である。口縁部は外反し、屈曲部内面が沈線状になる。内面に縦位のハケ目を残す。橙色(2.5 YR6/6)を呈し、復元口径26.8 cmを測る。195・196は甕の底部である。195は平底で、外面に縦位のハケ目を残す。橙色(5 YR6/6)を呈し、底径8.2 cmを測る。196は丸底に近い底部で、外面は灰褐色(5 YR4/2)、内面はにぶい赤褐色(5 YR5/4)を呈す。197は支脚である。全体に指頭圧痕を残す。橙色(5 YR6/8)を呈し、器高8.0 cm、復元底径9.8 cmを測る。198はミニチュアの鉢である。全体に指頭圧痕を残す。橙色(7.5 YR6/6)を呈し、復元口径4.2 cm、器高4.7 cm、底径2.4 cmを測る。199は須恵器・蓋の口縁部である。返りは欠損するが、下に伸びるタイプであろう。外面は灰色(N8/1)、内面は明青灰色(5 B7/1)を呈す。小田編年IV B期か。



第247図 SD0764・0766、SX0767 出土遺物実測図(1/3)

③土坑 (SK)

SK0754 (第 248 図) L-2 に位置する平面円形の土坑である。長軸 1.18 m、短軸 1.18 m、残存の深さ 50 cm を測る。壁面は傾斜し、底面は比較的平坦である。地山は黄灰色粘質土だが、壁面の中位以下は灰色粘質土へと変化する。埋土は、最下層 (11 層) には地山由来の暗黄灰色シルト、下層 (6～10 層) には黒灰色粘質土～シルト、中層 (4・5 層) には暗灰色シルト、上層 (1～3 層) には地山土を多く含む暗黄橙色シルトがレンズ状に堆積する。

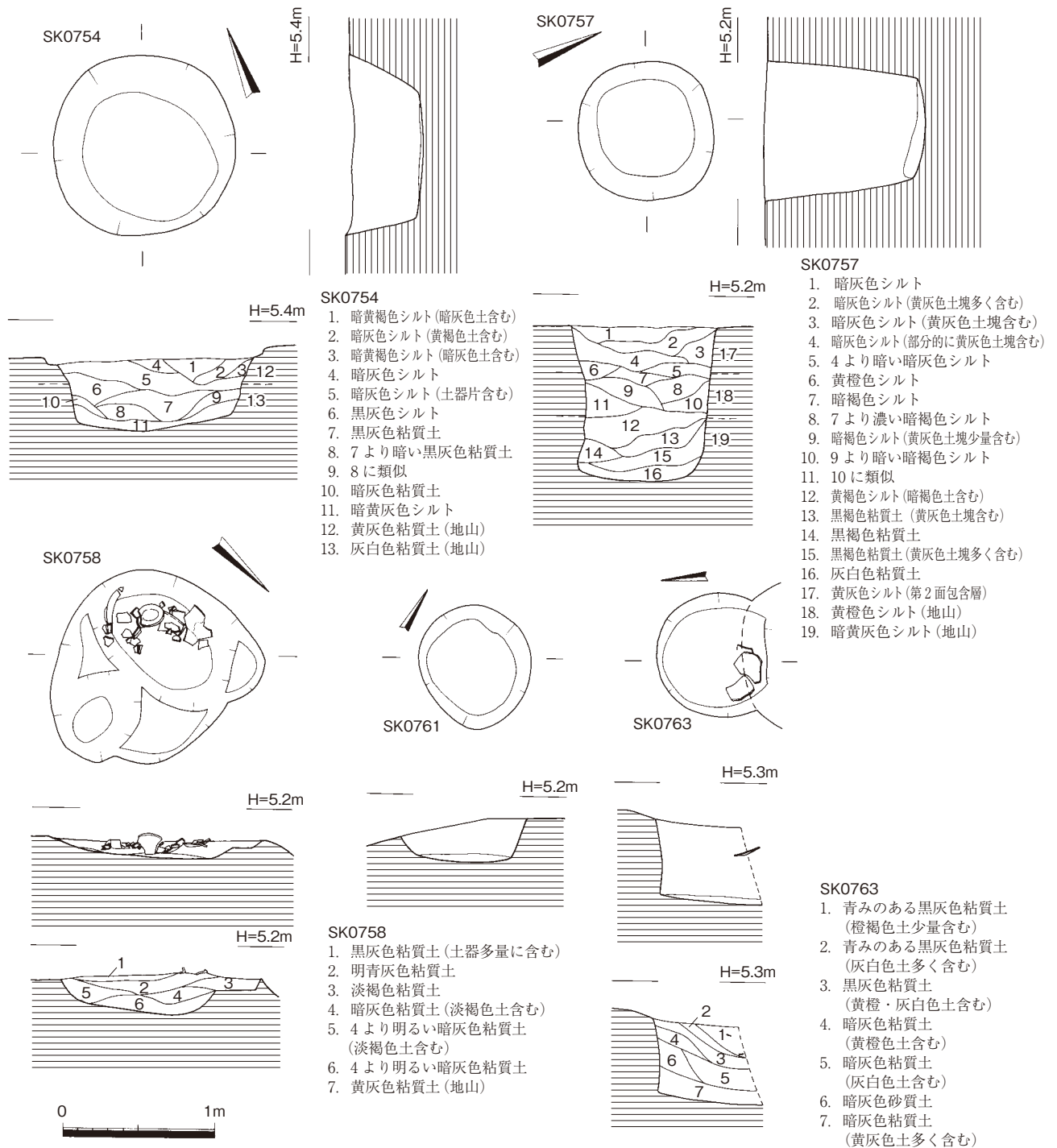
遺物は弥生土器が下層を中心に出土したが、量は多くない。弥生時代後期の所産と考えられる。

出土遺物 (第 249 図) 200 は甕の口縁部である。屈曲する口縁は直線的に外傾する。外面は縦位、肩部内面は斜位、口縁部内面は横位のハケ目を施す。外面は橙色 (2.5 YR6/8)、内面は赤灰色 (2.5 YR4/1) を呈し、復元口径は 22.8 cm を測る。201 は壺の口縁～胴部である。全体をナデ調整し、肩部内面には指頭圧痕を残す。外面はにぶい黄橙色 (10 YR7/3)、内面は灰白色 (10 YR8/2) を呈し、復元口径 6.0 cm を測る。202・203 は甕の底部で、いずれも外面に縦位のハケ目が残る。202 は端部からやや内湾しながら大きく開く。灰赤色 (2.5 YR5/2) を呈し、復元底径 6.0 cm を測る。203 は器壁が厚く、底面はやや丸みを帯びる。にぶい橙色 (7.5 YR7/4) を呈し、底径 5.2 cm を測る。

SK0757 (第 248 図) M-2 に位置する平面円形の土坑である。長軸 0.91 m、短軸 0.88 m、残存の深さ 1 m を測る。壁面は直立し、底面は比較的平坦である。地山は黄灰色シルトから、壁面中位で黄橙色シルト、下位で暗黄灰色シルトへと変化する。埋土は、最下層 (16 層) に灰白色粘質土、下層 (13～15 層) に黒褐色粘質土、中層 (12 層) に黄褐色シルト、上層 (7～11 層) に暗褐色シルト、最上層 (1～6 層) に暗灰色シルトがレンズ状に堆積する。底面からは弥生時代後期終末頃の完形の長頸壺 (212) が出土しており、祭祀行為が行われた可能性が高い。

その他にも弥生時代中期末から後期にかけての土器が多く出土した。遺構の時期は、弥生時代後期終末頃と考えられる。

出土遺物 (第 249 図) 204・205 は鋤先口縁の甕である。204 は平坦面がやや外傾し、内側へ突出する。橙色 (5 YR6/8) を呈し、復元口径 23.2 cm を測る。205 は平坦面がやや外反し、内側へ短く突出する。赤灰色 (2.5 YR4/1) を呈し、復元口径 22.2 cm を測る。206 は甕の底部である。端部がやや突出し、外面には指頭圧痕と縦位のハケ目が残る。橙色 (5 YR6/6) を呈し、底径 11.0 cm を測る。207 は鉢の口縁～胴部である。鋤先口縁の平坦面は内側へ厚く突出し、端部は丸みを帯びる。口縁部やや下方に断面三角形の突帯をめぐらす。全体をヨコナデ成形し、外面に赤色顔料を施す。明赤褐色 (2.5 YR5/6) を呈し、復元口径 10.8 cm を測る。208 は甕蓋の天井部である。底面は器壁が厚く、端部から大きく屈曲して外方へ開く。外面に縦位のハケ目を残す。にぶい橙色 (5 YR6/4) を呈し、天井部径 6.4 cm を測る。209・210 は鋤先口縁の壺である。平坦面は水平で、内側へ突出する。口縁端部は角張る。橙色 (2.5 YR6/8) を呈し、口径 16.0 cm を測る。210 は口縁端部に刻目を施す。明赤褐色 (5 YR5/8) を呈し、復元口径 19.6 cm を測る。211 は壺の胴～底部である。胴部は球形で、底面はレンズ状を呈す。外面は単位が長いハケ目を残し、内面は丁寧にナデ調整される。にぶい橙色 (5 YR7/3) を呈し、底径 6.6 cm を測る。212 は底面から出土した完形の長頸壺である。頸部は直立気味で、口縁部へむかってやや外反する。端部は丸く収める。胴部は算盤形を呈し、中位より下寄り度で胴部最大径を測る。丁寧にヨコナデを施すが、外面の一部に横位のハケ目を残す。明褐色 (5 YR7/1) を呈し、口径 7.3 cm、器高 11.3 cm、底径 4.4 cm を測る。213 は甕の底部で、底面はレンズ状を呈す。外面に縦位のハケ目を残す。橙色 (5 YR7/6) を呈し、底径 6.6 cm を測る。



第 248 図 SK0754・0757・0758・0761・763 実測図 (1/40)

SK0758 (第 248 図) L-1 に位置する平面不整形の土坑である。長軸 1.42 m、短軸 1.25 m、残存の深さ 27 cm を測る。壁面はゆるやかに傾斜し、底面はレンズ状である。埋土は下層 (3~6 層) に暗褐色粘質土、中層 (2 層) に明青灰色粘質土、上層 (1 層) には黒灰色粘質土がレンズ状に堆積する。

遺物は、特に 1・2 層から弥生土器が集中して出土した。何らかの廃棄行為が行なわれたのであろうか。遺構の時期は、弥生時代中期後半の所産と考えられる。

出土遺物 (第 250 図) 214 は甕の蓋である。体部は直線的にのびて口縁部付近で外反し、端部は

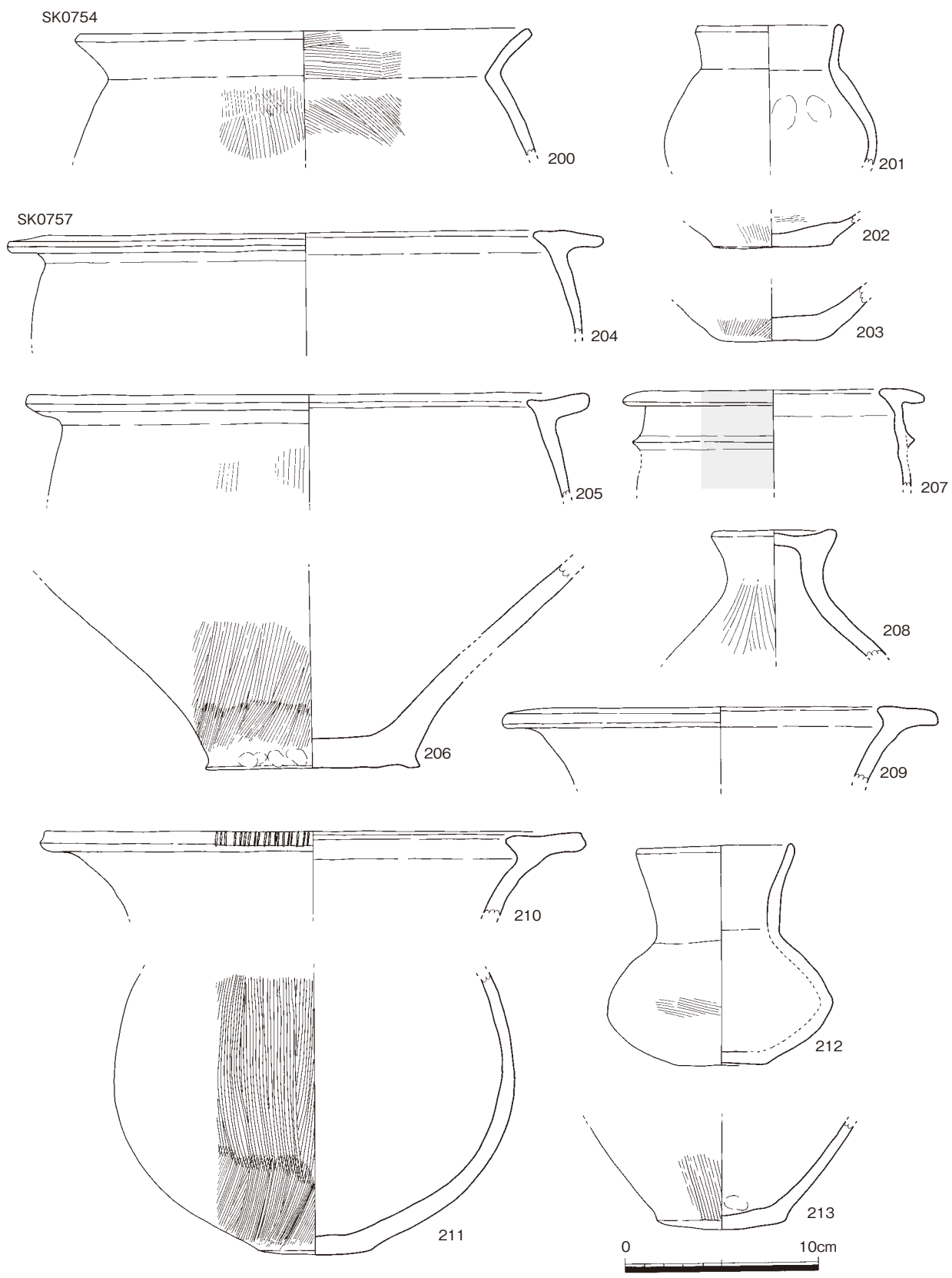
稜をなす。口唇部は断面三角形を呈す。外面は縦位、内面は横位のハケ目を残す。橙色（5 YR7/4）を呈し、復元口径31.4 cmを測る。215・216は鋤先口縁の甕である。口縁部の平坦面は外傾し、内側に強く突出する。外面に縦位のハケ目を残す。215は褐色（7.5 YR3/3）を呈し、復元口径23.2 cmを測る。216は橙色（2.5 YR6/6）を呈し、復元口径25.4 cmを測る。217は甕の胴部片である。胴部の上位で最大径を測り、底部にむかって内湾しながらすぼまる。外面に下方向へのハケ目を残す。外面にススが付着する。褐色（7.5 YR4/3）を呈す。218は甕の底部である。外面に縦位のハケ目、内面に指頭圧痕を残す。外面はにぶい赤褐色（2.5 YR5/4）、内面は褐灰色（5 YR4/1）を呈し、復元底径8.6 cmを測る。219は大型甕の口縁～胴部である。鋤先口縁の平坦面はやや外傾し、内側に突出する。口縁部下に断面三角形の突帯を巡らす。胴部は中位で最大径をはかり、全体的に丸みを帯びた形態である。外面に縦位のハケ目を残す。外面は橙色（5 YR7/6）、内面は灰白色（7.5 YR8/2）を呈し、復元口径35.6 cmを測る。220は壺の口縁である。鋤先口縁の平坦面は外傾し、内側に断面三角形状に突出する。全体はナデ調整される。外面は灰白色（7.5 YR8/2）、内面は淡橙色（5 YR8/3）を呈し、復元口径13.0 cmを測る。221は壺の頸部～胴部である。頸部はやや外反し、胴部は扁平な球形を呈す。胴部中位に断面三角形の突帯がめぐり、全体的に摩滅が著しいが、肩部内面に指頭圧痕を残す。橙色（5 YR6/6）を呈す。222は口縁部片。鉢か。口唇部は指押さえにより波状を呈し、口縁部下に断面M字の突帯がめぐり、にぶい橙色（7.5 YR6/4）を呈す。223は器台の口縁部である。外面は縦位のハケ目を残し、端部付近はヨコナデ、あるいは指押さえで仕上げる。外面は灰黄褐色（10 YR5/2）、内面はにぶい黄橙（10 YR6/3）を呈す。復元口径9.6 cmを測る。224は丹塗磨研高坏の脚部である。筒部は器壁が厚く、内面に絞り痕を残す。脚裾部は大きく外湾し、端部は角張り明確な稜をなす。外面は縦位の研磨と赤色顔料を残す。外面は明赤褐色（2.5 YR5/8）、内面は橙色（5 YR7/6）を呈し、底径17.2 cmを測る。225・226は坏である。口縁部は内湾し、内側に強いナデ跡を残す。口縁端部はやや肥厚し、丸く収める。体部も丸みを帯びる。225はにぶい黄橙色（10 YR7/3）を呈し、復元口径16.8 cmを測る。226は外面が橙色（2.5 YR6/8）、内面が黒褐色（5 YR2/1）を呈し、復元口径14.6 cmを測る。

SK0761（第248図） M-1に位置する平面円形の土坑である。長軸0.8 m、短軸0.7 m、残存の深さ0.3 mを測る。壁面は直立気味で、底面はややレンズ状を呈す。遺物は出土しなかった。

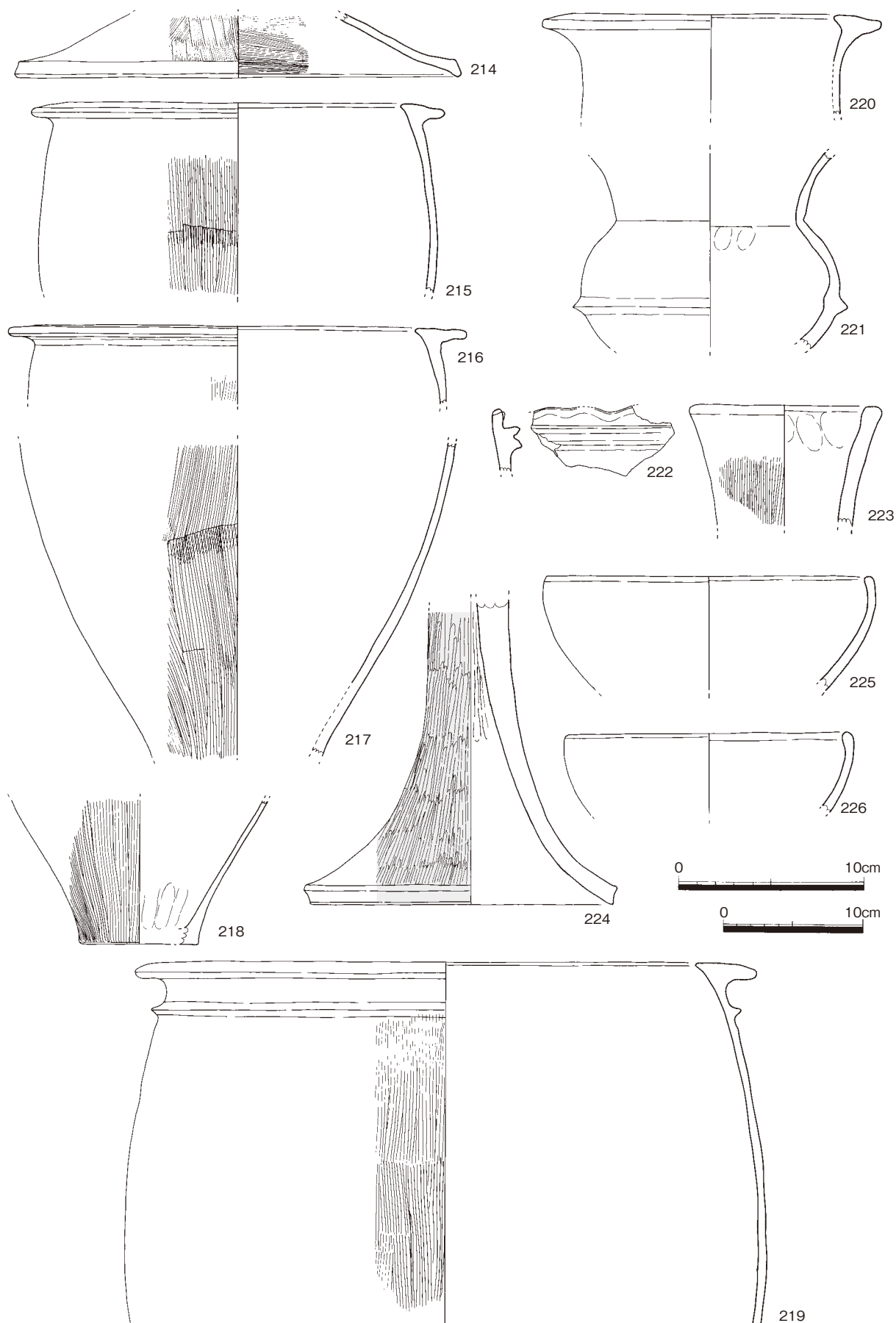
SK0763（第248図） L-3に位置する平面円形の土坑である。南側はSK0580に切られる。長軸0.8 m、短軸0.7 m以上、残存の深さ0.6 mを測る。壁面は直立し、底面はややレンズ状を呈す。埋土は下層（4～7層）に暗灰色粘質土、上層（1～3層）に黒灰色粘質土がレンズ状に堆積する。

遺物は弥生時代中期後半から後期終末頃の弥生土器が出土した。遺構の時期は弥生時代後期終末頃と考えられる。

出土遺物（第252図） 227は甕の口縁部である。鋤先口縁の平坦面はやや外傾し、内側へつよく突出する。胴部の上位で最大径を測る。外面に縦位のハケ目を残す。橙色（2.5 YR6/8）を呈し、復元口径17.8 cmを測る。228は甕の頸部～胴部である。頸部に断面三角形の突帯がめぐり、肩が張る。外面は頸部に縦位のハケ目、肩～胴部は平行タタキ、肩部内面は斜位のハケ目を残す。橙色（2.5 YR7/6）を呈す。229は高坏の脚部である。器高が低く、筒部は径が大きい。脚裾部は大きく開き、端部は角張る。外面に縦位のハケ目、内面に縦位→横位のハケ目を残す。にぶい橙色（7.5 YR7/4）を呈し、底径13.8 cmを測る。230は壺の底部である。平底で、体部は大きく開き、



第 249 图 SK0754 · 757 出土遺物実測図 (1/3)



第250図 SK0758 出土遺物実測図 (214~219は1/4、他は1/3)

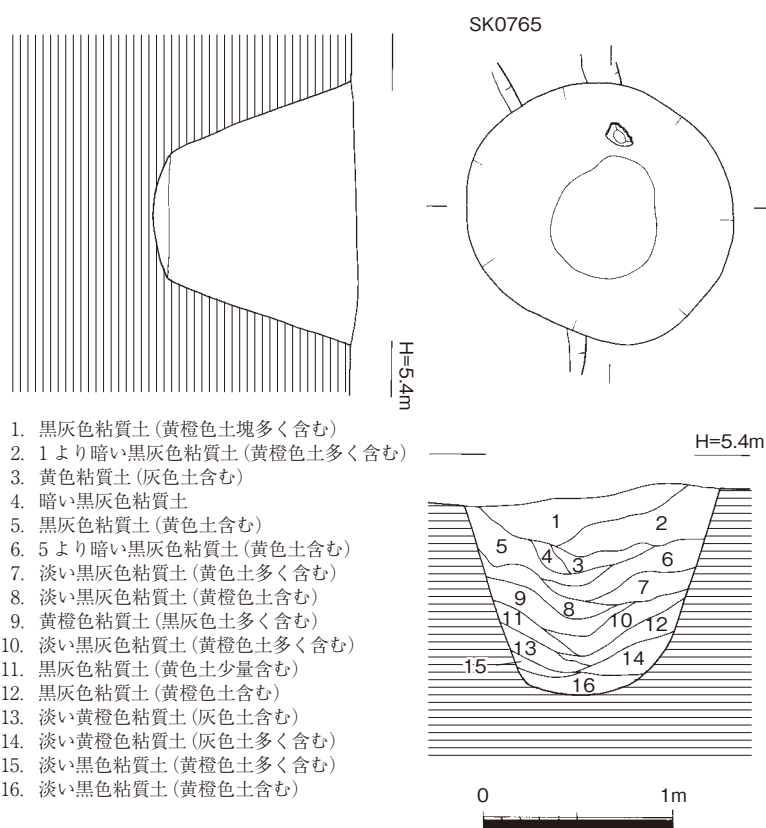
全体をナデ調整する。にぶい橙色（7.5 YR7/4）を呈し、底径5.0 cmを測る。231は器台である。口縁端部はやや肥厚しながら角張り、体部はゆるやかに湾曲する。外面に縦位のハケ目を残す。橙色（2.5 YR7/6）を呈し、復元口径8.4 cmを測る。

SK0765（第251図） L-2に位置する平面円形の土坑である。長軸1.42 m、短軸1.36 m、残存の深さ110 cmを測る。壁面は傾斜して底面に向かってすぼまり、底面はレンズ状を呈す。埋土は、基本的には黒色～黒灰色粘質土のレンズ状堆積であるが、13・14層、9層、3層のような地山由来の黄色粘質土を主体とする間層がみられ、最上層（1・2層）にも黄色土ブロックが多量に含まれる。また、14～15層付近で湧水が確認された。

遺物は弥生時代中期後半に属する土器が多く出土し、遺構の時期もその時期と考えられる。

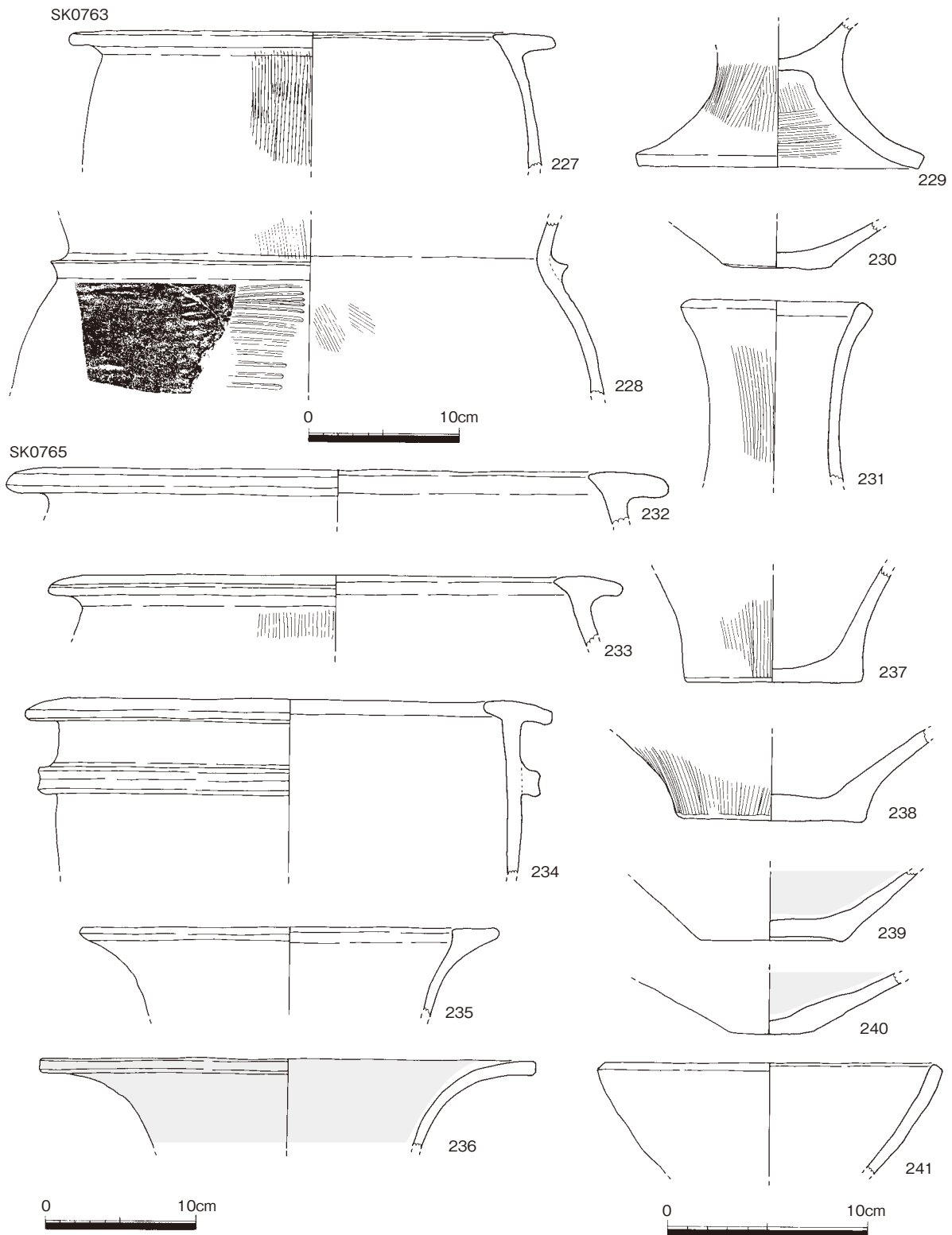
出土遺物（第252図） 232・233は甕の口縁部である。いずれも鋤先口縁の平坦面は外傾し、内側に断面三角形状に突出する。外面に縦位のハケ目を残す。橙色（5 YR7/6）を呈し、復元口径24.8 cmを測る。233は橙色（5 YR7/6）を呈し、復元口径21.4 cmを測る。234は甕の口縁～胴部である。平坦面は外傾し、断面台形状に大きく突出する。口縁下部には断面M字状の突帯がめぐり、全体をヨコナデ調整する。外面はにぶい赤褐色（2.5 YR4/3）、内面は灰赤色（2.5 YR5/2）を呈し、復元口径19.2 cmを測る。235は壺の口縁部である。頸部から口縁端部まではなだらかに伸び、鋤先口縁の平坦面は水平をなす。内側は強くなでて短く突出させる。橙色（2.5 YR6/8）を呈し、復元口径16.0 cmを測る。236は広口壺の口縁部である。頸部はラッパ状に大きく開き、口縁部はさらに外

反し端部は角張る。内外面に赤色顔料を残す。橙色（2.5 YR6/8）を呈し、復元口径32.8 cmを測る。237・238は甕の底部である。238は平底で、内面にコゲが付着する。外面に縦位のハケ目を残す。明赤褐色（2.5 YR5/6）を呈し、底径8.6 cmを測る。238は平底で体部は大きく外傾する。にぶい橙色（5 YR7/3）を呈し、復元底径9.2 cmを測る。239・240は丹塗磨研壺の底部で、内外面に赤色顔料が残る。239は平底で、体部にむかって直線的に開く。明赤褐色（2.5 YR5/8）を呈す。底径7.0 cmを測る。240は底径が小さい平底で、体部にむかって直線的に開く。明



1. 黒灰色粘質土（黄橙色土塊多く含む）
2. 1より暗い黒灰色粘質土（黄橙色土多く含む）
3. 黄色粘質土（灰色土含む）
4. 暗い黒灰色粘質土
5. 黒灰色粘質土（黄色土含む）
6. 5より暗い黒灰色粘質土（黄色土含む）
7. 淡い黒灰色粘質土（黄色土多く含む）
8. 淡い黒灰色粘質土（黄橙色土含む）
9. 黄橙色粘質土（黒灰色土多く含む）
10. 淡い黒灰色粘質土（黄橙色土多く含む）
11. 黒灰色粘質土（黄色土少量含む）
12. 黒灰色粘質土（黄橙色土含む）
13. 淡い黄橙色粘質土（灰色土含む）
14. 淡い黄橙色粘質土（灰色土多く含む）
15. 淡い黒色粘質土（黄橙色土多く含む）
16. 淡い黒色粘質土（黄橙色土含む）

第251図 SK0765 出土実測図（1/40）

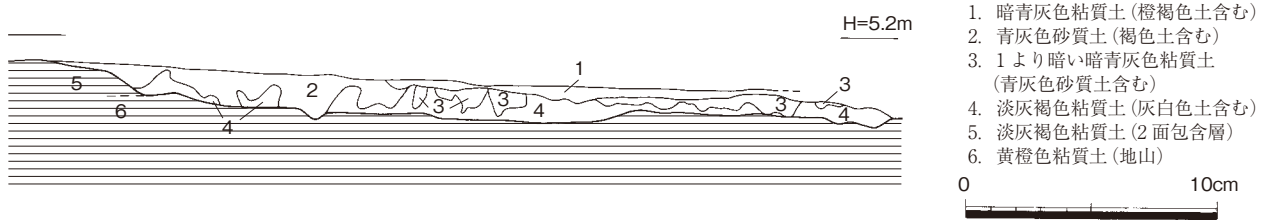


第252図 SK0763・0765・0769出土遺物実測図(228・236は1/4、他は1/3)

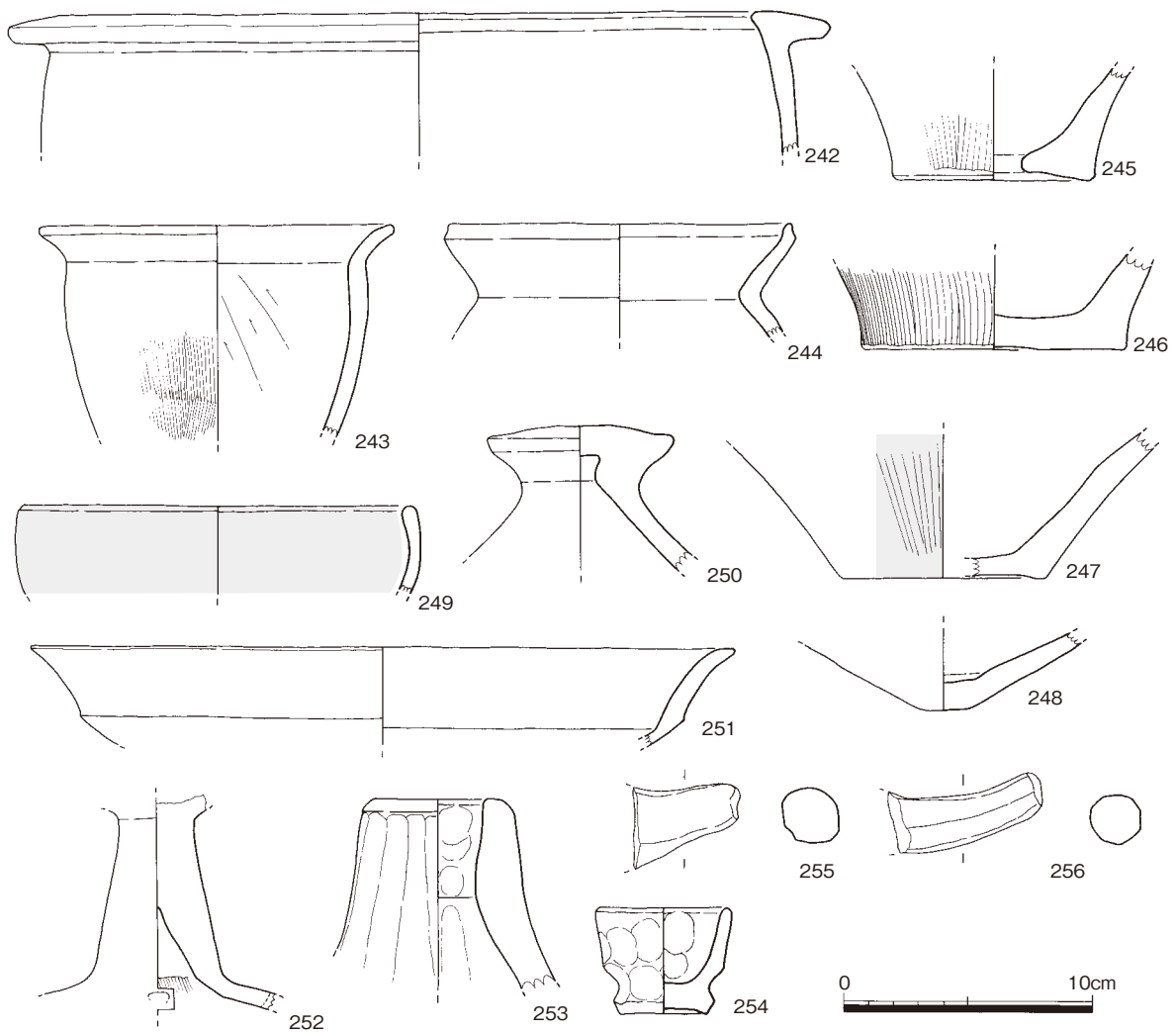
赤褐色 (2.5 YR5/8) を呈す。復元底径 4.0 cm を測る。241 は直口鉢である。口縁端部は角張り、体部は直線的である。橙色 (2.5 YR6/8) を呈す。復元口径 16.0 cm を測る。

④不明遺構 (SX)

SX0751 (第 253 図) K-2・L-1・2 に位置し、SD0541 に沿うように走る浅瀬状の包含層である。南側は削平のため消滅する。検出した長さは約 20 m、幅は約 4~6 m、残存の深さは約 20 cm を測る。



第 253 図 SX0751 実測図 (1/60)

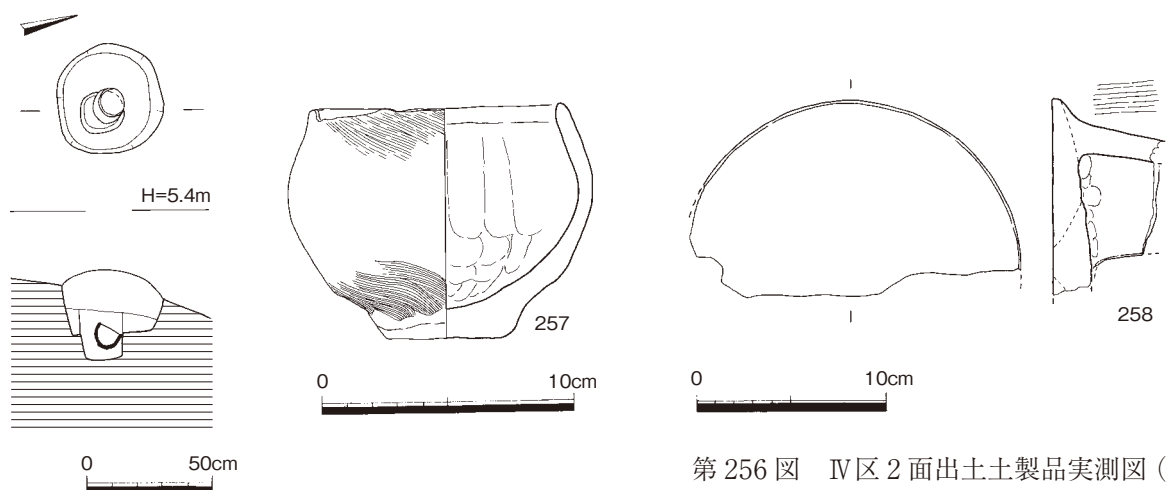


第 254 図 SX0751 および出土遺物実測図 (1/60、1/3)

埋土は淡灰褐色粘質土の上位に暗青灰色粘質土が堆積するが、層位はかなり乱れており動植物の影響が考えられる。

遺物は弥生中期後半から後期終末にかけての土器が多く出土したが、この包含層の形成はSD0541に関連するものと推測され、古代の所産と考えられる。

出土遺物(第254図) 242は甕の口縁部である。鋤先口縁の平坦面は外傾し、内側へゆるやかに突出する。にぶい赤褐色(5 YR5/4)を呈し、復元口径26.4 cmを測る。243は小型甕の口縁～胴部である。口縁部はゆるやかに外傾し、頸部付近から胴部にむけてすぼまる。外面は縦位のハケ目、内面は斜位のケズリ調整を施す。にぶい褐色(7.5 YR6/3)を呈し、復元口径13.8 cmを測る。244は長胴甕の口縁部である。口縁部は直線的に外傾し、端部は跳ね上げる。にぶい橙色(7.5 YR7/4)を呈し、復元口径13.4 cmを測る。245・246は甕の底部である。245は底部中央に焼成前穿孔を施し、外面に縦位のハケ目を残す。にぶい橙色(7.5 YR7/4)を呈し、復元底径8.0 cmを測る。246は大型甕か。外面に縦位のハケ目を残す。橙色(2.5 YR6/6)を呈し、復元底径10.4 cmを測る。247は丹塗壺の底部である。外面に縦位のハケ目と赤色顔料を残す。赤褐色(2.5 YR4/8)を呈し、底径8.0 cmを測る。248は甕の底部で、丸底に近い。にぶい橙色(5 YR7/4)を呈す。249は坏の口縁部である。口縁下を強くナデて端部を肥厚させ、丸く収める。内外面ともに赤色顔料を施す。赤褐色(2.5 YR4/8)を呈し、復元口径14.6 cmを測る。250は甕蓋の天井部である。天井部は中央がやや盛り上がり、端部から強く内湾したのち、体部へ直線的に伸びる。内底部に絞り痕を残す。明赤褐色(5 YR5/6)を呈し、天井径7.4 cmを測る。251は高坏の口縁部である。体部中位で屈曲して、口縁部はゆるやかに外反する。端部は細くすぼまり、丸く収める。にぶい橙色(2.5 YR6/4)を呈し、復元口径28.0 cmを測る。252は高坏の脚部片である。筒部は円柱状に直線的にのび、脚部中位でほぼ直角に屈曲して外へ開く。裾部に1孔を穿つ。にぶい黄橙色(10 YR7/4)を呈す。253は支脚である。円筒形を呈し、口縁部内面を強く押さえる。外面は縦方向のナデ調整を施す。明赤褐色(2.5 YR5/6)を呈す。口径3.6 cmを測る。254はミニチュアの坏である。全体を手捏ねで成形し、体部は直線的に伸び、口縁部は丸く仕上げる。外面はにぶい黄橙色(10 YR7/2)、内面は明黄褐色(10 YR6/6)を呈す。復元口径5.0 cm、器高4.2 cm、底径3.4 cmを測る。255・256は土製匙の把手である。255は全体を指ナデで丸く仕上げる。にぶい褐色(7.5 YR5/4)を呈す。全長4.2 cm、径



第256図 IV区2面出土土製品実測図(1/4)

第255図 SP0888実測図および出土遺物実測図(1/30、1/3)

2.2 cmを測る。256は指ナデで長軸方向に面取りする。にぶい橙色(2.5 YR6/4)を呈し、全長6.1 cm、径2.0 cmを測る。

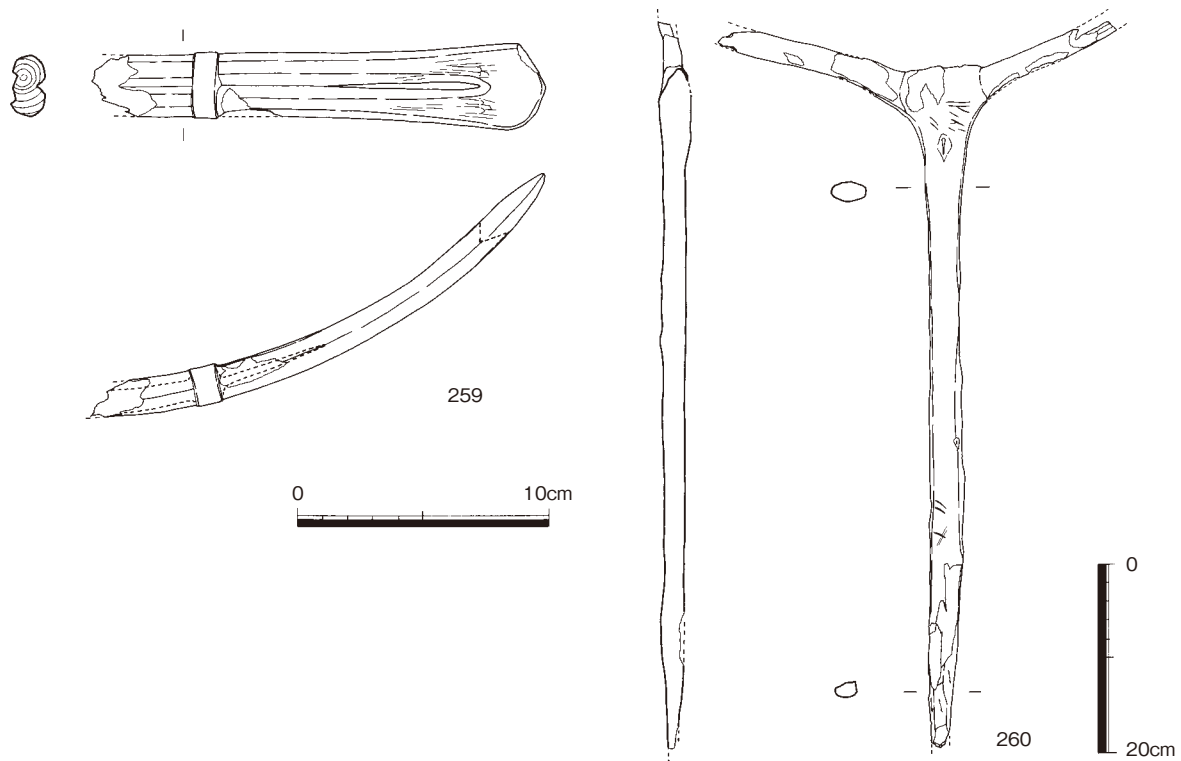
⑤ピット (SP)

SP0888 (第255図) L-3に位置する平面円形のピットである。長軸45 cm、短軸40 m、残存の深さ40 cmを測り、Ⅲ区の溝SD0510に上面を斜めに切られる。壁面は直立し、中位付近でテラスを設け、2段掘りになる。底面は比較的平坦である。中央から弥生時代の完形の鉢(257)が出土した。人為的に投げ込まれたものと考えられる。先述のようにSD0510に切られるため、実際の遺構配置は不明だが、掘立柱建物の柱穴である可能性もある。

出土遺物(第255図) 257は直口鉢である。体部は球形をなし、口縁部にかけて内傾し、端部は丸く仕上げる。底部はハケ状工具で下から斜め方向に調整し、体部との境は内湾する。外面は胴部ではハケ目がナデ消され、内面は縦方向に丁寧にナデ上げる。焼成は良好で、灰黄褐色(10 YR6/1)を呈す。口径9.0 cm、器高9.3 cm、底径4.2 cmを測る。

⑥その他の遺物

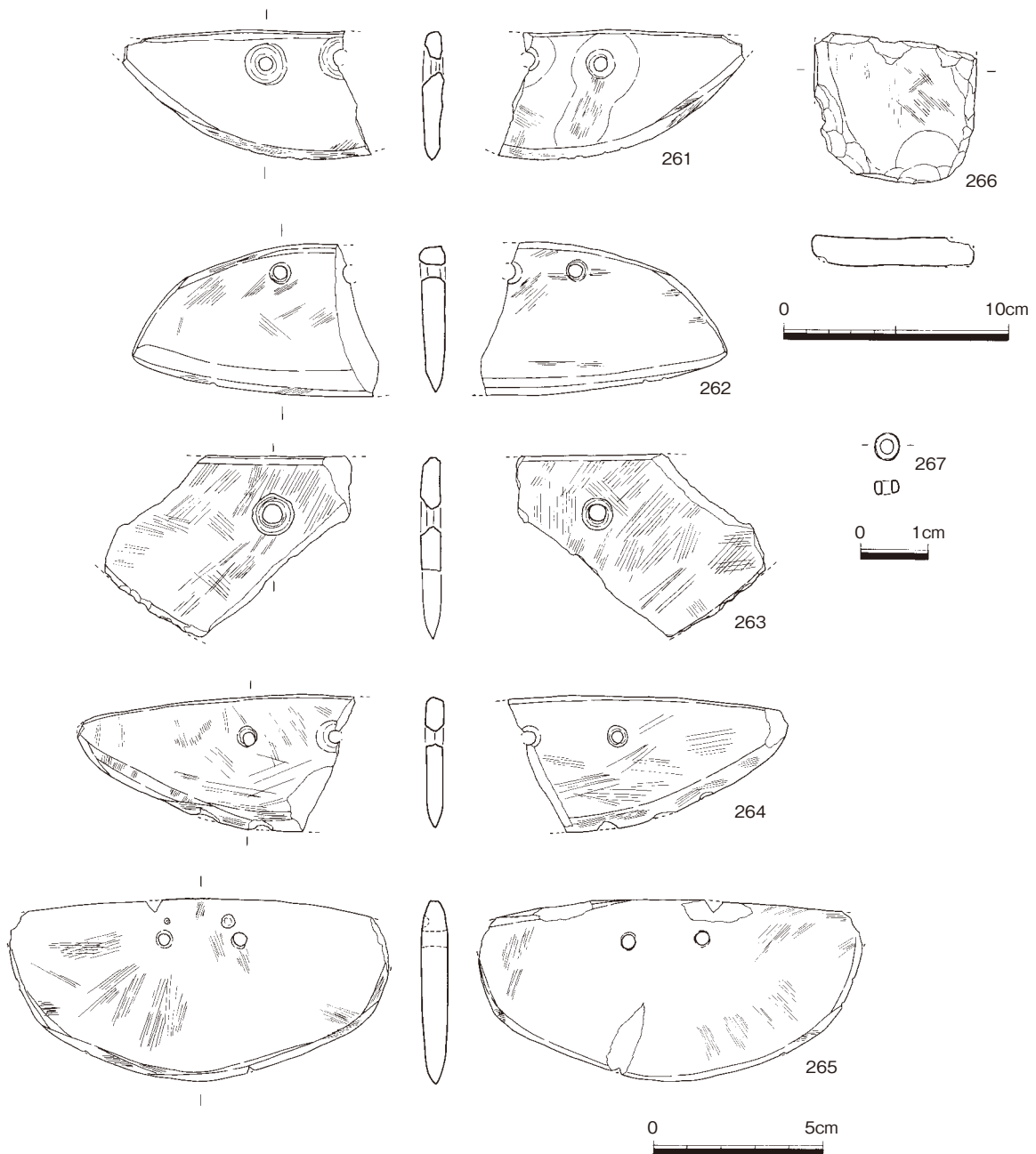
土製品(第256図) 258は軒丸瓦状土製品である。SD0541の斜面の地山直上から出土した。直径約18 cmの円形の粘土板上に円筒形の粘土が接合されるが、筒部は半裁され、側面にケズリの痕跡が残る。筒部の外面は縦方向にハケ状工具で平滑にされ、内面は丁寧なナデ調整を施し、接合部には指頭圧痕を明瞭に残す。円形の粘土板は中央部がやや厚く、外面は平滑にナデ調整され、裏面は指頭圧



第257図 IV区2面出土木製品実測図(259は1/3、260は1/8)

痕を残す。この土製品の器種については、筒部が半裁されていること、内側部分を内底面としたときに調整が丁寧でないことなどから、平底の容器とは考えにくく、軒丸瓦の可能性が高いと考えた。しかし、丸瓦部凹面に布目圧痕を残さないこと、凸面にハケ状工具を使用することなど、一般的な軒丸瓦の製作技法とは全く異なる。また、焼成は硬質で、明黄褐色(10 YR7/6)を呈し、胎土に砂粒を多く含まず、質感が弥生土器とは異なる。古代の遺物として報告するが、今後の資料増加を待ちたい。

木製品(第257図) 259は杓子の柄である。SD0541との境界付近のトレンチ掘削時に、SD0752の下層(後期前葉頃に埋没)から出土した。柄は中央に溝とスリットを入れ、1本の棒を折り曲げて結



第258図 IV区2面出土石器および玉類実測図(265は1/3、266は1/1、他は1/2)

東部で止めるような表現がなされる。樹種はイヌガヤで、年輪は緻密で硬度もある。表面全体を縦方向に細かくケズリ、光沢を出している。柄の残存長は20.3 cm、幅2.4～3.4 cm、厚さ1.2 cm、結束部は長さ0.9 cm、幅2.5 cm、厚さ1.5 cmを測る。山田昌久氏（首都大学東京）の所見によると、この木製品は、1本の金属を折り曲げて金具で結束した柄を持つ中国の青銅製杓子の忠実な模倣品で、儀器の可能性があるといる。260はたも網の柄～杓部であるが、杓部の上半部と柄の基部は欠失する。SD0752上層（弥生時代後期終末～古墳時代初頭）から多量の土器や木質、動物骨などとともに出土した。スイカズラ属近似種の芯持材で、枝部分を杓として利用する。柄の部分は、長軸方向へのケズリ加工で成形される。残存長は76.2 cm、柄の幅は3.6 cm、厚さは2.7 cmを測る。

石器（第258図） 261～265は石庖丁である。261・264・265は外湾刃半月形で、262は直線刃半月形である。261は残存長7.4 cm、幅3.8 cm、厚さ6.5 mm、重量25.7 gを測る。凝灰岩製。SD0752トレンチ出土。262は残存長7.2 cm、幅3.5 cm、厚さ8 mm、重量33.1 gを測る。凝灰岩製。SD0766上層出土。263は残存長7.3 cm、残存幅5.1 cm、厚さ6 mm、重量28.0 gを測る。頁岩製。SX0767出土。264は残存長8.1 cm、残存幅4.0 cm、厚さ5 mm、重量23.9 gを測る。シルト質頁岩製。SP0782出土。265は長さ11.3 cm、幅5.3 cm、厚さ7 mm、重量68.9 gを測る。頁岩製。SX0751出土。266は頁岩製の砥石である。上部が欠損するが、四方に打ち欠きがあり、石錘として再利用された可能性がある。残存長7.1 cm、幅6.6 cm、厚さ1.3 cm、重量114.9 gを測る。SD0766上層出土。

玉類（第258図） 267はSD0541から出土したガラス製小玉である。直径3.8～4.0 mm、孔径1.7～2.0 mm、厚さ1.8～2 mm、重量0.033 g、比重は4.7143を測る。淡青色を呈し、透明感がある。

3) 小結

IV区の調査区は、東を古代に拡幅掘削された水路であるSD0501に区画され、それ以西の三角形の形状を呈しているが、西側に同じく古代の水路であるSD0542が流れ、陸地部分は、2本の水路に挟まれた南北に長い幅10 m強の馬の背状の地形である。久保園遺跡4次調査区全体からすると極狭い面積であり、その内容については全体の関わりでみる必要がある。

1面の調査では、尾根部から西側緩傾斜面にかけて、2本の古代水路の氾濫由来する白色粗砂が地表面の窪みに堆積する、水田での足跡検出例に類似するヒト、ウシ等偶蹄類の足跡が多数検出された。地形的に水田とは考えられず、I・II区で検出されている古代水田と南側に広がると想定される水田との通路部分に相当するのではないかと思われる。また、2面で検出されたSD0766は、SD0542・SX0751へと下る道状遺構と考えられる。溝の底面に連続する土坑状のくぼみは、検出された足跡や歩幅から考えて、ウシ等の歩行痕である可能性が考えられる。

2面では弥生時代中期後半、後期前半、後期終末～古墳時代初頭の掘立柱建物や土器廃棄土坑が検出された。掘立柱建物はIII区と同様の小規模な作りで、古代水路SD0501により分断されているものの、本来III区とつながる同一平坦面の建物群である。III・IV区では弥生時代終末期、古墳時代初頭の水田は検出されておらず、西側に所在すると思われる当該期水田での耕作を行った人たちの集落（倉庫、作業小屋的施設）であろう。また、SK0757など湧水が確認される井戸状の土坑もあるため、沖積地との境界部で低地特有の地理的条件も有効活用しながら、集落が営まれたものと推測される。

6. V区の調査

1) 概要

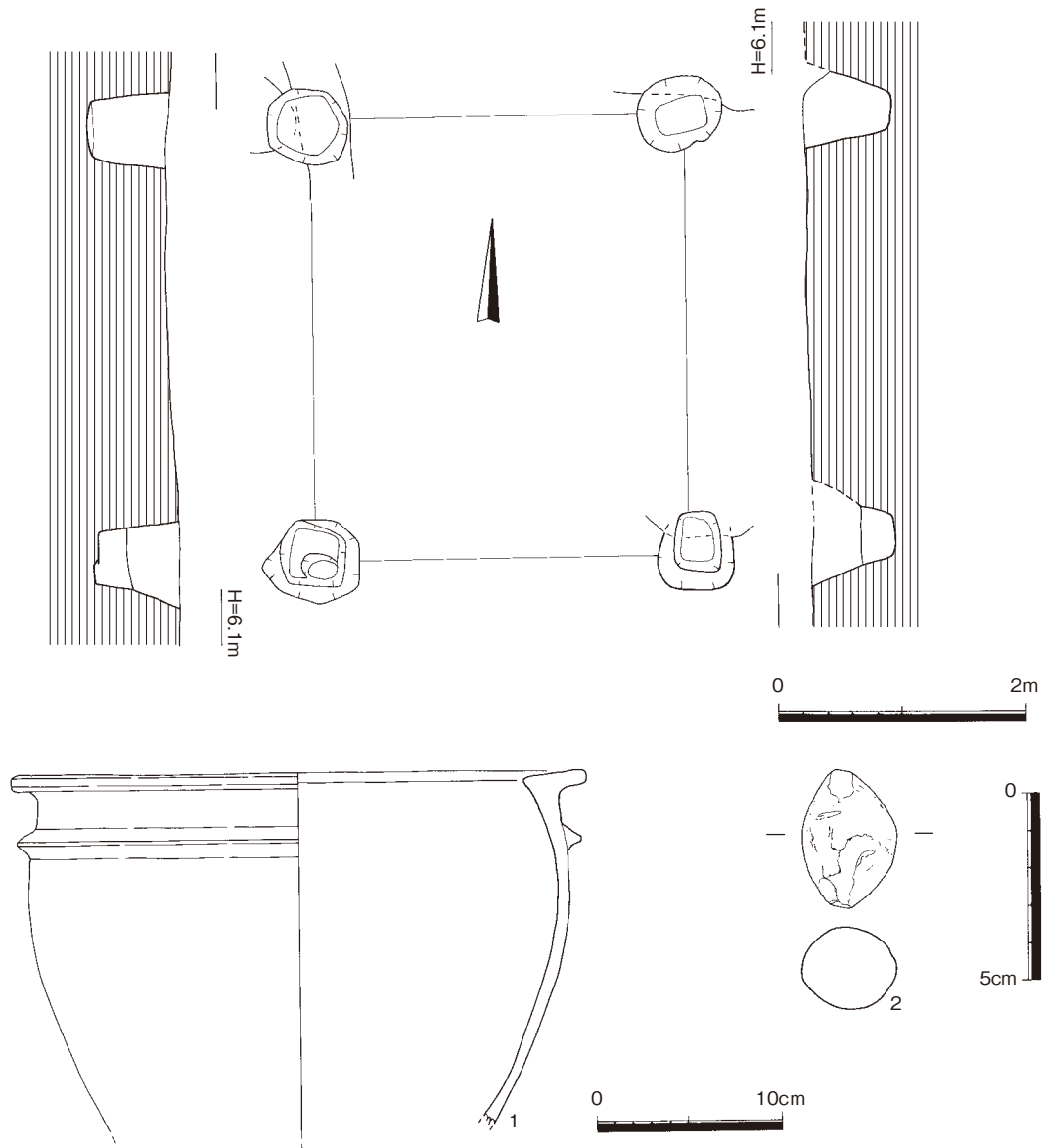
「1. 調査の概要」述べたようにここで報告するV区は、調査時にD区と呼称していた調査区の内、同区の北側を北東－南西方向に横断するSD0501を含む南側部分に相当し、4次調査地全体の南端部にあたる。調査区の形状は「L」字状をなし、V区の北西側にIV区、東側にⅢ区が隣接する(第4図)。

V区はⅢ区同様に月隈丘陵から西側に派生する支丘の先端部に位置する。第3図の旧地形図によると幅広の丘陵部が沖積地に埋没する境界部分に相当し、戦前には水田化されている。各調査区の遺構面の状況からSD0501付近が丘陵部と沖積層のほぼ境となり、V区の大半は丘陵部に占地している。

調査前の状況は、西側は空港外周道路、その東側は緩衝緑地となり、標高は約7mであった。層序は、基本的にⅢ区同様に上層から空港整備時の造成土、近代の水田面となり、暗褐色土の遺物包含層に達する。包含層上面までを重機によって除去し、以下は人力による作業を進めた。この包含層は弥生時代中期から後期の遺物を含む標高5.8m前後の面をなす層で、調査区西側を主体に広がる。また、この包含層上面から掘り込まれる遺構が確認できたことから、まずこの面を1面として調査した。その調査対象は、包含層の拡がりとはほぼ同一で、第259図の1面全体図に示したN・0-1・2グリッドの範囲にはほぼ相当する。なお、この範囲以外の調査区の南側から南東部では、削平により地山が露出する。1面の調査では、古代のSD0501を除き、弥生時代後期から終末期の遺構が主体を占め、掘立柱建物や溝、土坑等が検出できた。この包含層は厚さ約0.2mを測り、この層を除去すると、黄褐色土の地山層に至る。この土層は、西側では粘性がやや強く、東側では部分的に砂礫が混じり、弱い粘性がある。なお、この黄褐色土は、月隈丘陵の西側斜面を構成する花崗岩風化土の再堆積に由来するものであろう。この地山面の標高は5.6～5.8mで、東側の丘陵側が高く、西側の沖積地に向かって緩く傾斜する。また、この面でも遺構が検出できることから、包含層除去後に2面目の調査を実施した。なお、2面とした調査範囲は、削平により地山がすでに露出していた南側から南東部を含むV区全域である。遺構は弥生時代中期から後期にかけての時期が主体となり、掘立柱建物や井戸、土坑、溝を確認できた。なお、包含層が厚くないことから、1面調査時に重複する2面遺構の一部を掘削した可能性がある。また、2面目の調査では、1面の検出遺漏の遺構や削平前の包含層上面より掘り込まれる遺構を多分に含むことが予測される。よって、今回設定した上下の2面は、やや便宜的な調査面となったことは否めないものの、以下では各調査時の記録に沿った報告を行う。

V区の発掘調査はIV区と併行して、平成21(2009)年12月1日に着手した。まず、重機による表土剥ぎ取りを実施し、壁面の清掃および養生、トラバース杭の設定等を行い、1面目の遺構検出を開始した。その後、検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ等の作業を順次進めた。1面遺構の掘削作業がほぼ終了した平成22年5月21日にセスナ機によって同面の全体写真を空撮した。その後、人力によって包含層を剥ぎ取り、同様に2面目の調査を進めた。7月30日に同様にセスナ機によって同面の全景を撮影し、V区の調査を終えた。同区の調査面積は596m²で、出土遺物量はコンテナケースにして142箱である。なお、同区が4次調査の最終調査区であったことから、その後、外柵の撤去や壁面養生用の土嚢の除去、リース器材の返却、プレハブ事務所解体や敷地の清掃等を行い、8月27日をもって第4次調査を完了した。

調査時の遺構番号は、501から1113の通し番号を遺構の種類に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっては、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述するが、3桁の遺構番号については、頭に0を追加し、4桁に統一を図った。



第260図 SB0582 実測図(1/60)および出土遺物実測図(1は1/4、2は1/2)

2) 遺構と遺物

(1) 1面の調査(第259図)

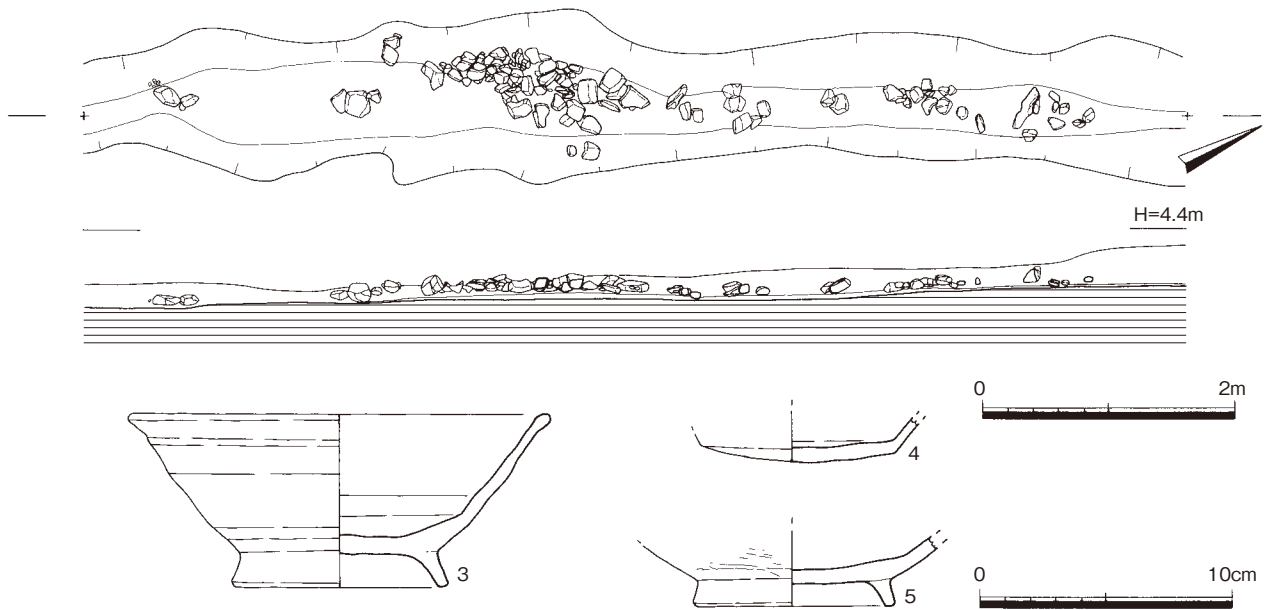
先述したとおり、調査区西側を対象とした包含層上面での調査である。

①掘立柱建物(SB)

1面調査区の南西部では比較的大きな柱穴が認められたが、今回復元できたのは1棟のみである。

SB0582(第260図・図版111-1) O-1・2に位置する1間×1間の建物で、建物方位はN-4°-Wとほぼ磁北である。なお、北西隅の柱穴は弥生時代終末期のSP0575や溝状遺構に切られており、実際の掘削は2面で行った。また、北東隅の柱穴はSD0551・0552に、南東隅の柱穴はSP0691に切られる。建物の柱間は、南北の桁行が3.6m、東西の梁間が3.0mを測る。各柱穴はやや不整な隅丸方形を呈し、1辺0.5~0.7m、深さ約0.7mである。覆土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物(第260図) 1は南東隅の柱穴から出土した復元口径31.2cmを測る弥生土器の甕である。やや内傾する逆「L」字状の口縁下には断面三角形の高い突帯を貼付し、胴部は張る。内外面共に



第261図 SD0501実測図(1/60)および出土遺物実測図(1/3)

器面が風化する。2は北西隅の柱穴出土の土製投弾の完形品で、長さ3.7cm、径2.6cm、重量17gを測る。断面は不整な円形で、色調は淡黄橙色を呈する。他にも各柱穴から弥生土器が出土している。先述した遺構の前後関係や出土遺物から弥生時代中期中頃から後期前半の建物と推定される。

②溝(SD)

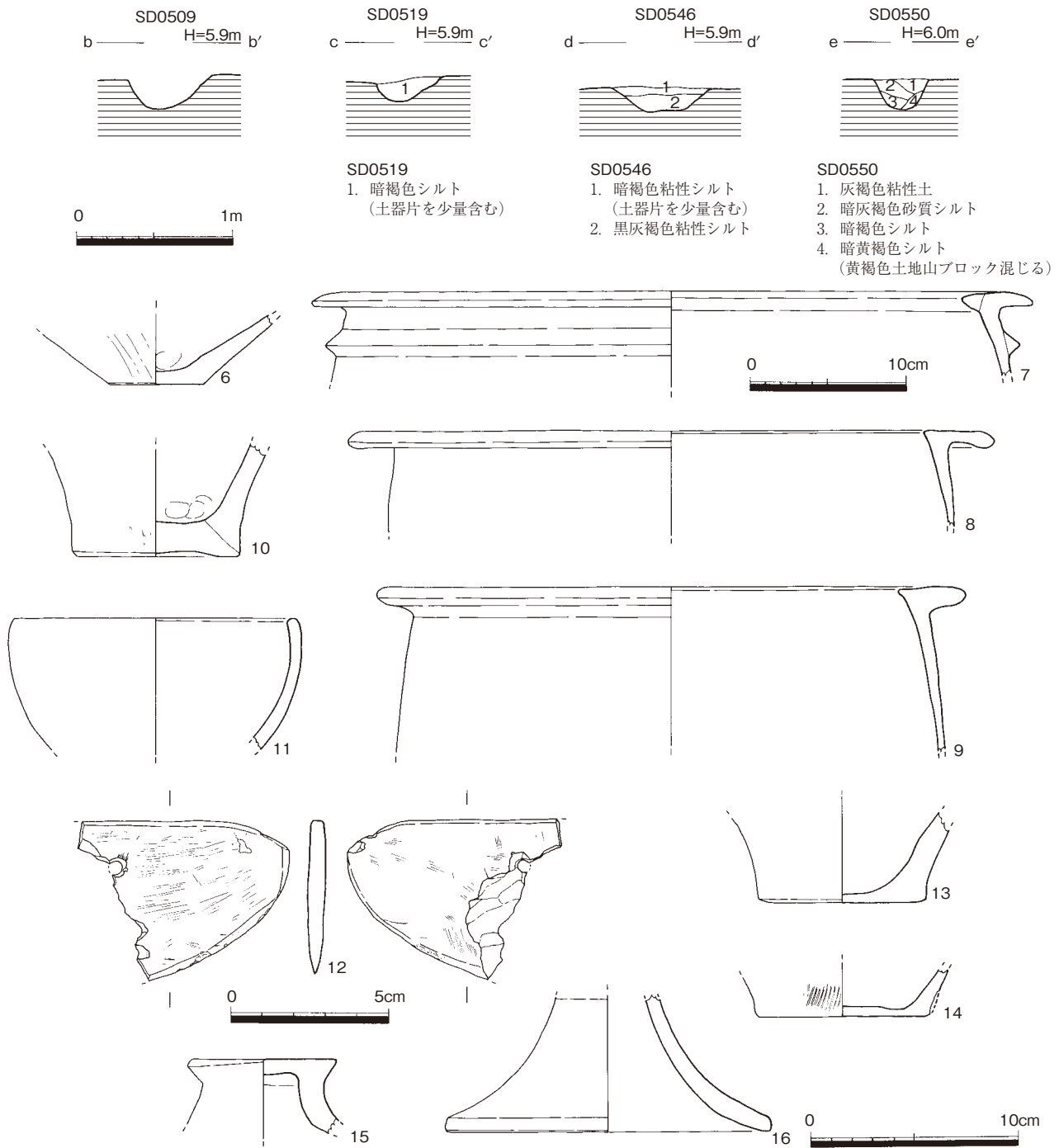
Ⅲ区同様、弧状を呈する溝や蛇行しながら延長する弥生時代後期から終末期頃の溝が重複して検出された。総じてこれらの溝の幅や深さは規模が小さい。

SD0501(第259・261図、図版111-2・3) 調査区北西端のM・N-1・2に位置する。この溝のみ古代の所産で、Ⅲ区から南西方向に延長する幅7.5m前後、長さ約11m部分をV区で調査した。溝全体や土層の所見はⅢ区で前述したとおりで、本区でも底面の中央部に掘り直しに伴う小溝の延長部が検出できた。この溝は、灰褐色粘性土で覆われ、底面では第261図に示したように拳大からやや大きめの角礫が集中して出土した。石材は花崗岩、礫石、珪化木等であった。上面から底面までの深さは約1.5mで、溝底は南西方向に緩く傾斜する。

出土遺物(第261図) 3・4は土師器で、3は碗、4は坏である。3の体部は直線的で、僅かに口縁部が外反する。外側に開く高めの細い高台を貼付する。内外面をヨコナデ調整し、内底部にはナデを加える。復元口径16.6cm、器高6.8cmを測る。4の外底部は回転ヘラ切りで、体部との境界にはやや鈍い稜が巡る。色調は黄灰色を呈する。5は黒色土器B類の碗である。体部の内外面はヘラ研磨、高台部はヨコナデ調整を施す。これらの遺物は上述した小溝より上層で出土したもので、9世紀中頃に位置付けられよう。他に弥生土器等が出土している。

SD0509(第262図) N-1・2で検出した溝で、北側を囲むように弧状に延びる。北西側はⅢ区に延長し、両端部はSD0501に切られる。また、他の遺構との前後関係は、SD0557・0577、SK0576に後出し、SD0519・0546に先行する。幅約0.25m、深さ約0.2mを測り、断面は逆台形状をなす。覆土は褐色粘性土を主体とする。

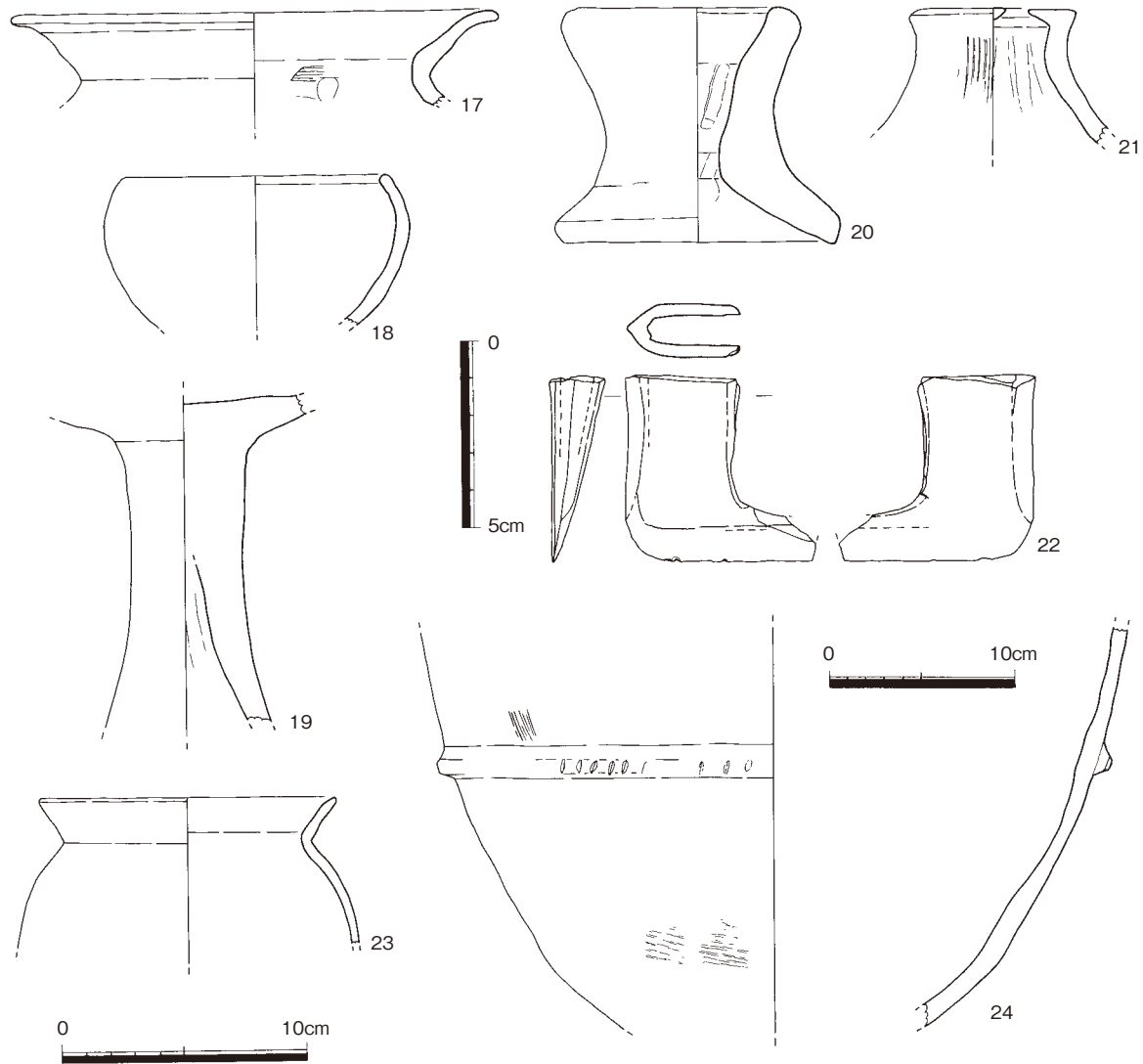
出土遺物(第262図6~12) 6~11は弥生土器で、いずれも器面が風化し、調整が不明瞭である。6は壺で、小振りの底部から体部が大きく開く。外面に縦方向の調整が認められるが、工具や単位は



第262図 SD0509・0519・0546・0550 実測図(1/40) および
SD0509・0519 出土遺物実測図(12は1/2、7は1/4、他は1/3)

不明である7~10は甕である。7は鋤形の口縁下に断面三角形の突帯が巡る。8・9は逆「L」字状の口縁を呈し、8は器壁が薄い。10は底部片で、内面に指オサエの痕跡が認められる。11は素口縁の鉢で、体部は外湾する。上面は鈍い面をなす。12は安山岩質の石庖丁で、径0.5cmの穿孔が両面から施される。他に弥生土器器台等の細片が出土している。弥生時代中期の土器が多いが、Ⅲ区の延長部では後期以降の遺物が出土している。

SD0519(第262図、図版111-4) SD0509同様にN-1・2に位置する溝で、北側を囲むように



第263図 SD0546・0550 出土遺物実測図（22は1/2、24は1/4、他は1/3）

弧状に延び、北西側の一部がⅢ区に延伸している。両端部は、現状ではSD0501の南側で途切れるが、削平によるものと思われる。幅0.3～0.4m、深さ0.2m前後で、断面は逆台形状を呈する。覆土は暗褐色でややシルト質である。また、SD0546に切られ、SD0509・0552・0557・0577を切る。

出土遺物（第262図13～16） いずれも弥生土器である。13・14は平底の甕底部で、器面が荒れるが、14の外面には縦方向の刷毛目が残る。15は蓋で、天井部は平坦である。内面はヘラ状の工具により調整を行う。16は高坏の脚部で、端部は面取りを施す。器面の風化により調整は不明である。他にも弥生土器片が少量出土している。

SD0546（第262図、図版111-4・112-1） N-1・2で検出した。緩やかな弧を描くものの、ほぼ直線的な溝である。両端部は調査区外に延長するが、北側はⅢ区との境界付近でSD0501に切られる。現存での延長約14m、幅0.6～0.8m、深さ約0.2m前後を測る。断面は逆台形を呈し、溝底の標高差は顕著ではないものの、僅かに北側が低い。覆土は褐色系の粘性シルトを主体とする。また、重複する大半の遺構に後出し、報告遺構では、SD0509・0519・0581、SK0573、SP0614を切る。

出土遺物（第263図17～22） 17～21は弥生土器である。17は壺の口縁部で、端部を外反させ、

丸味をもって納める。頸部内面に刷毛目を残すが、他はヨコナデ調整を施す。頸部の稜は内外面共に鈍い。18は外湾する素口縁の鉢で、口縁端部はやや丸味を帯びる。器面の風化が進む。19は高坏の脚部である。内面にシボリ痕が認められる。20は器高9.5cm、受部径9.6cmを測る器台である。外面は風化するが、内面はナデおよび指オサエによる調整が残る。21は蓋である。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデを施す。平坦な天井部には楕円形状の二次的穿孔が認められる。22は青銅製鋤先の欠損品である。全長5.0cm、袋基部厚さ1.5cm、袋部内法長さ4.1cmを測る。片刃状の刃長は1cm程度と短い、全面に使用痕は観察できない。また、隅丸を呈する刃部は直線的であるが、僅かに刃こぼれする。袋部の上面は粗く研ぎ上げを施すものの、内側の側面は鑄放しである。また、内部の底面には中子砂が残る。器面には気泡が見られ、淡緑色を呈する。他に弥生時代中期の土器片が多いものの、17などより終末期から古墳時代初頭の溝に位置付けられよう。

SD0550(第262図、図版111-5・112-2) O・P-1・2で確認した周溝状の溝で、南側は削平により、一部が途切れ、西側は調査区外に位置する。SD0557に後出する。また、SB0582の柱筋と交差するが、直接の重複がなく、前後関係は不明である。内径約9mの規模で、幅0.3~0.5m、深さ0.1~0.2mを測る。断面は「U」字形で、覆土は褐色シルトを主体とする。底面の標高は北側に比して、南側が浅い。

出土遺物(第263図23・24) 23は弥生土器もしくは土師器の小形壺である。器壁は薄く、胎土には砂粒を多く含む。器面が風化するため、調整は不明である。24は弥生土器甕の下半部で、断面台形状の突帯が巡り、ヘラ状工具によって刻目を押し引きするが、一部は剥落する。器面が荒れるが、下位に叩きと思われる横位の調整が残る。他に弥生時代中期の土器片が出土しているが、遺物量は少ない。

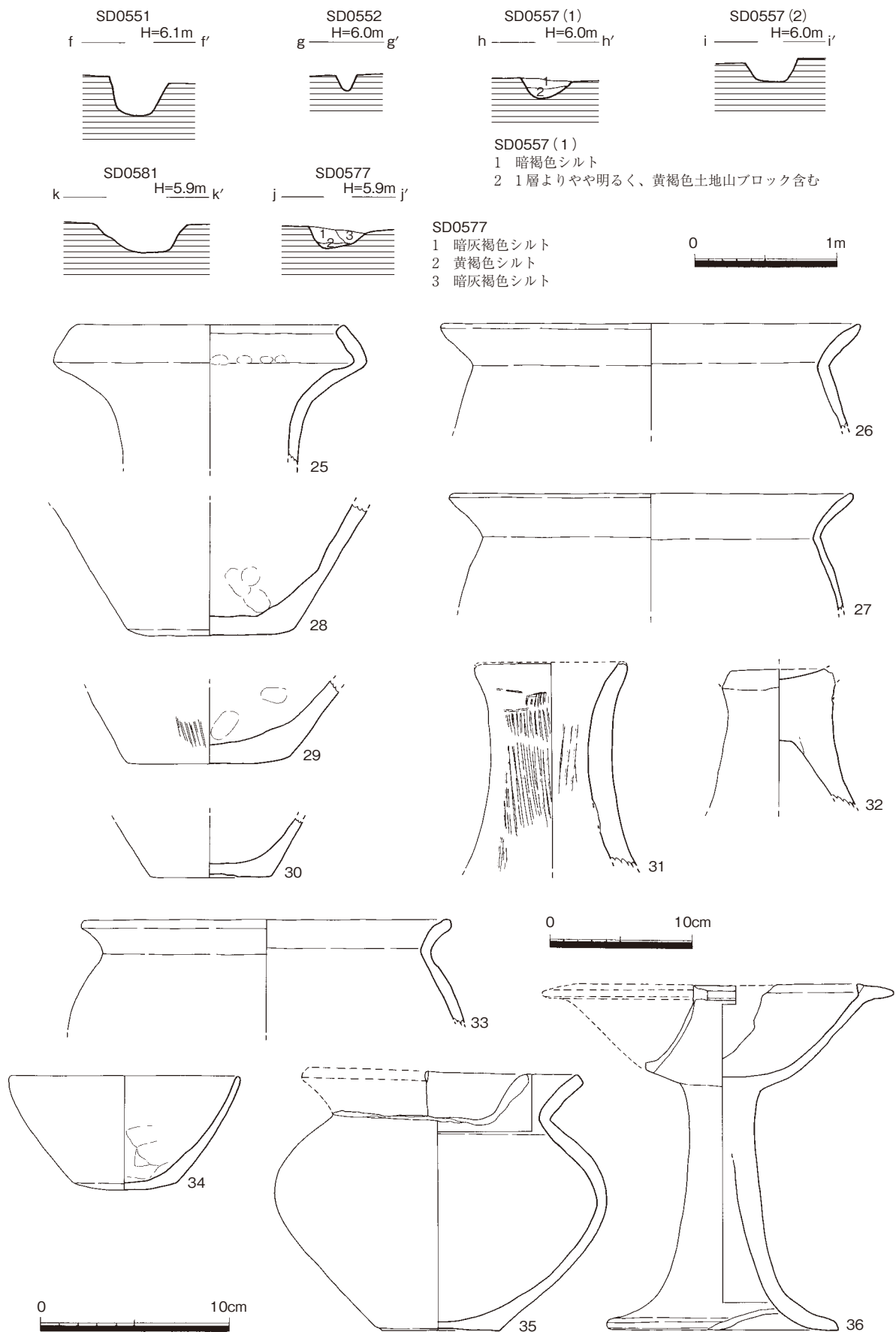
SD0551(第264図) O-2に位置する延長約6.5mの東西方向の溝である。僅かに蛇行し、部分的に立ち上がる。SD0552・0557およびSB0582の北東の隅柱を切る。幅は0.3~0.4m、深さは0.2~0.3mで、断面「U」字形を呈する。覆土は褐色粘性土が主体をなす。

出土遺物(第264図25~31) 全て弥生土器である。25は複合口縁壺で、頸部がしまる。口縁屈曲部の稜は明瞭で、内面には不明瞭ながら指オサエによる調整が残る。器面の大半が剥落する。26~30は甕である。26・27は「く」字状の口縁部で、順に口径は22.0、21.2cmを測る。共に薄手の器壁で、頸部の稜はやや鈍い。調整は器面の風化により不明である。28~30は底部である。平底であるが、胴部との境界は丸味を有する。全体に器面が荒れるが、外面には刷毛目、内面には指オサエの痕跡が僅かに認められる。31は裾部を欠損する器台である。外面は縦方向の刷毛目、内面には棒状の工具によるナデを施す。以上から弥生時代後期中頃の溝と考えられる。

SD0552(第264図、図版111-6) N・O-2で検出した。南北方向に直線的に延び、北側で北西に折れる溝である。南端付近でSD0551に切られ、SB0582の北東隅の柱穴を切る。また、北端部では、SD0519に切られる。幅0.2~0.3m、深さは0.1m程度と浅い。覆土は褐色粘性シルトを主体とする。

出土遺物(第264図32) 弥生土器の高坏の脚部片である。器面は著しく風化する。他に弥生土器が少量出土しているが、細片である。

SD0557(第264図、図版111-5・111-6・112-3) N・O-2で確認した延長15m以上の溝で、「S」字状に緩く蛇行する。幅は中央部では幅約0.5mを測るが、他は0.2~0.3mである。断面は逆台形状を呈し、深さは0.1~0.2mである。北端部は削平により浅くなっており、Ⅲ区には延長しない。また、南端はSK0717に切られる箇所ですぐ途切れる。他遺構との前後関係は、SD0509・0519・0550・0551・0577、SK0574・0717およびSP0660に切られ、SD0581を切る。出土遺物は弥生土器が少量で、いずれも細片であるため図化していないが、他遺構の切り合い関係から弥生時代中期後半頃の溝



第 264 図 SD0551・0552・0557・0577・0581 実測図 (1/40)
 およびSD0551・0552・0577・0581 出土遺物実測図 (33・36は 1/4、他は 1/3)

と推定される。

SD0577 (第264図、図版111-6・112-4) N・O-2に位置し、「L」字形に屈曲する溝である。幅0.3～0.5m、深さ0.1～0.15mを測り、断面は逆台形を呈する。覆土は暗灰褐色シルトを主体とする。SD0509・0519に先行し、SD0557に後出する。

出土遺物(第264図33・34) 共に弥生土器で、33は「く」字状の口縁部を呈する甕である。外面の頸部の稜は鈍く、張りのある胴部へと続く。調整は口縁部にヨコナデが認められるが、他は器面が剥落するため、不明である。復元口径は26.0cmを測る。34は完形の鉢で、凸レンズ状の底部に開く体部を有する。その境界は比較的明瞭である。器面の風化が著しいが、内面には指ナデの痕跡が残る。口径12.2cm、器高6.0cmを測り、淡黄白色を呈する。弥生時代後期中頃に位置付けられよう。他に弥生時代中期の土器片等が出土している。

SD0581 (第264図) N・O-1・2で検出した東西方向のほぼ直線的な溝である。幅0.4～0.6m、深さ0.1～0.2m、長さ9m以上を測る。東側では端部を確認できたが、西側は調査区外に延長する。また、西側ではSD0546、SK0548に、東側ではSD0552・0557、SK0574に切られる。

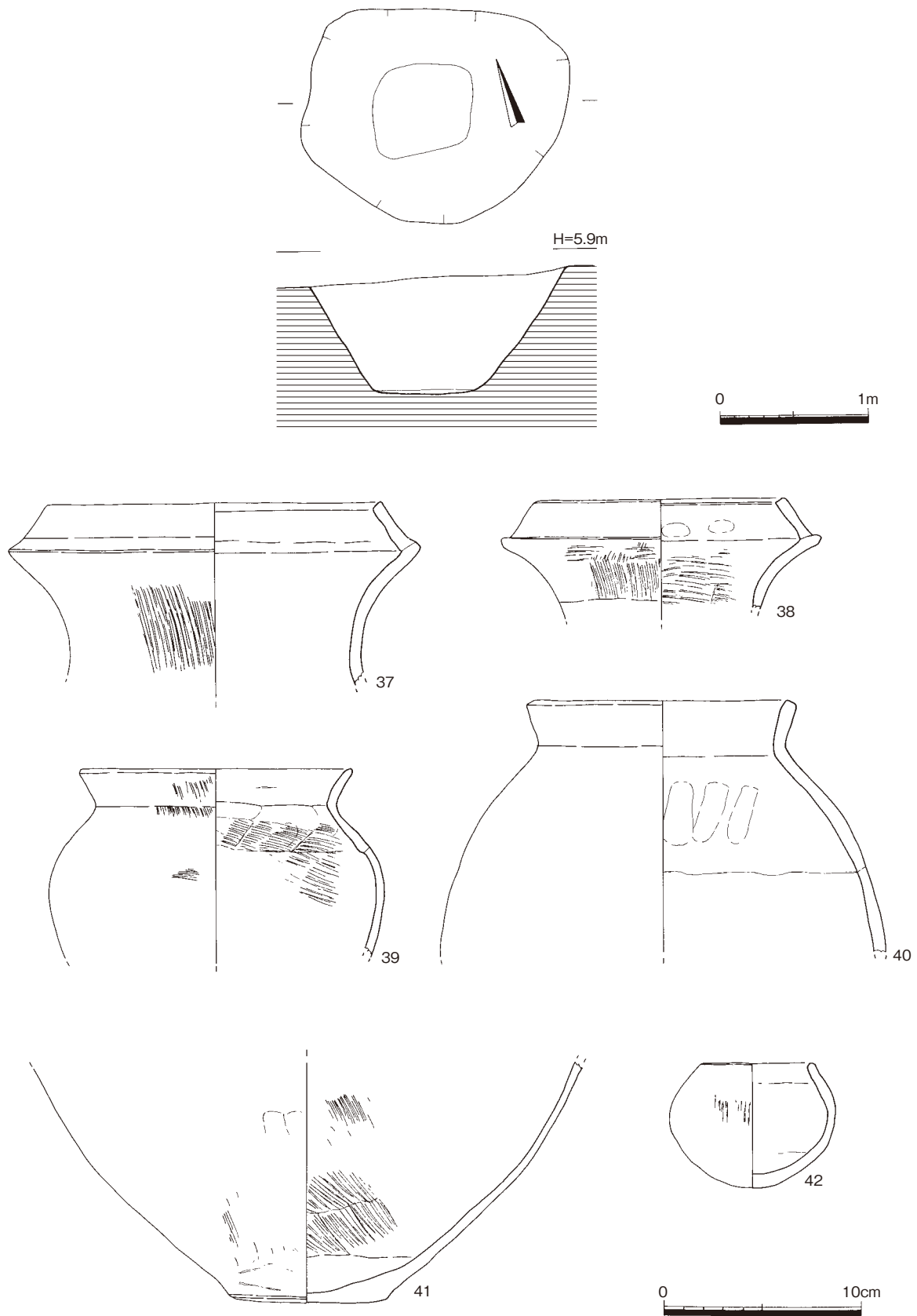
出土遺物(第264図35・36) 共に東端部で出土した弥生土器である。35は短頸の広口壺で、長めの口縁部に張りのある胴部が付き、底部は平底である。口縁端部は面取りを施す。口縁部の2/3を欠損するが、他は完存し、復元口径14.7cm、器高13.9cmを測る。器面は剥落が進む。36は高坏で、幅の狭い鋤形の口縁部は僅かに外傾する。外器面は風化が著しく調整が不明であるが、内面の脚柱部はシボリ痕、裾部には横方向の刷毛目が認められる。坏部の約1/2、裾部の一部を欠失する。復元口径24.8cm、器高24.5cmである。他に弥生土器甕等の細片が少量出土している。これらの出土遺物から弥生時代中期中頃の溝に比定できよう。

③土坑(SK)

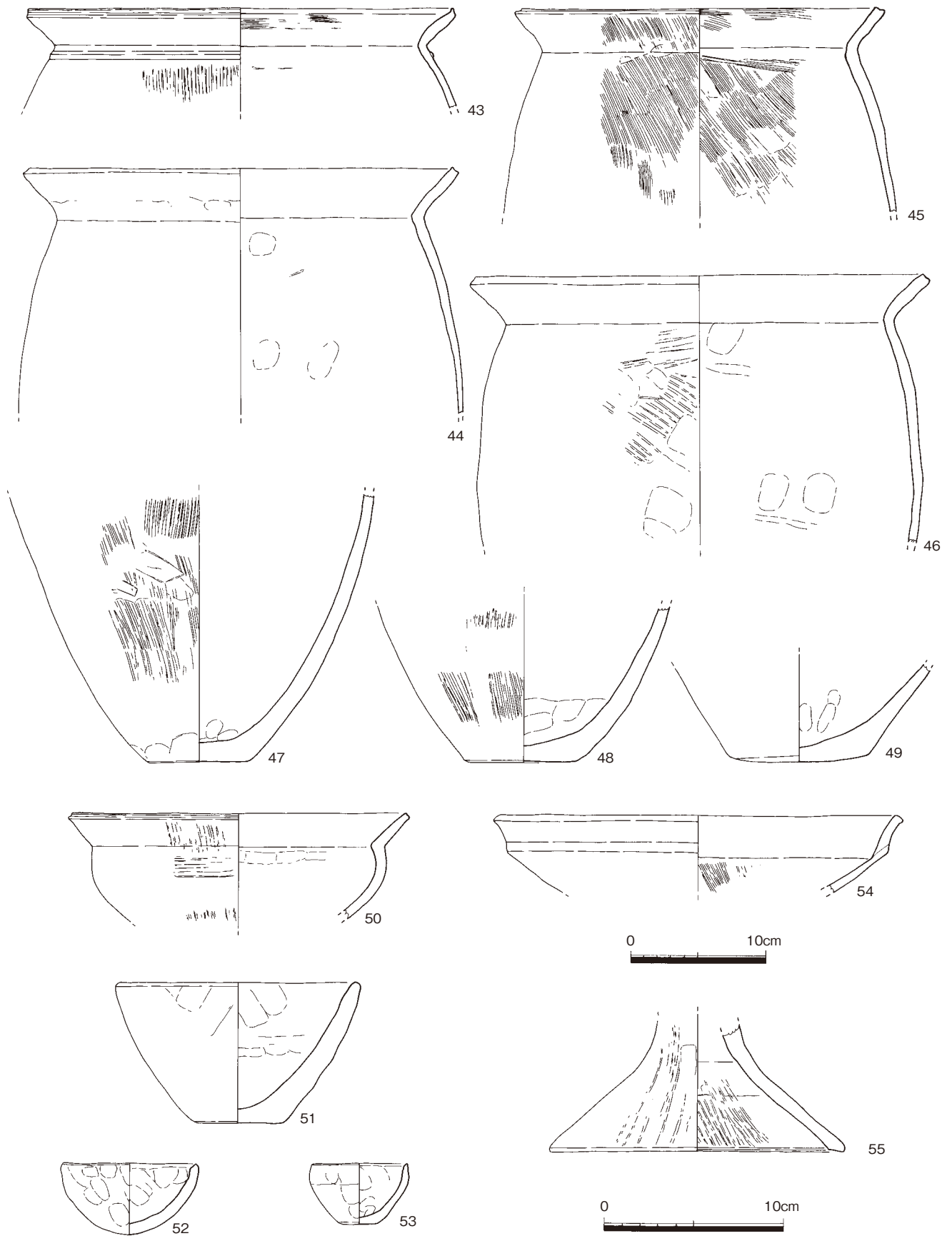
全て弥生時代中期から終末期にかけての土坑で、以下6基を報告する。

SK0548 (第265図、図版112-5) N-1に位置する不整な隅丸方形の土坑で、SD0581を切る。長さ1.7m、幅1.4m、深さ0.85mを測り、断面は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で、覆土は暗褐色粘性土を主体とする。上面から深さ約0.3mまでの西側を主体に比較的遺存状況の良好な弥生土器の甕や器台が出土し、これらを上層遺物、以下を下層遺物として取り上げた。

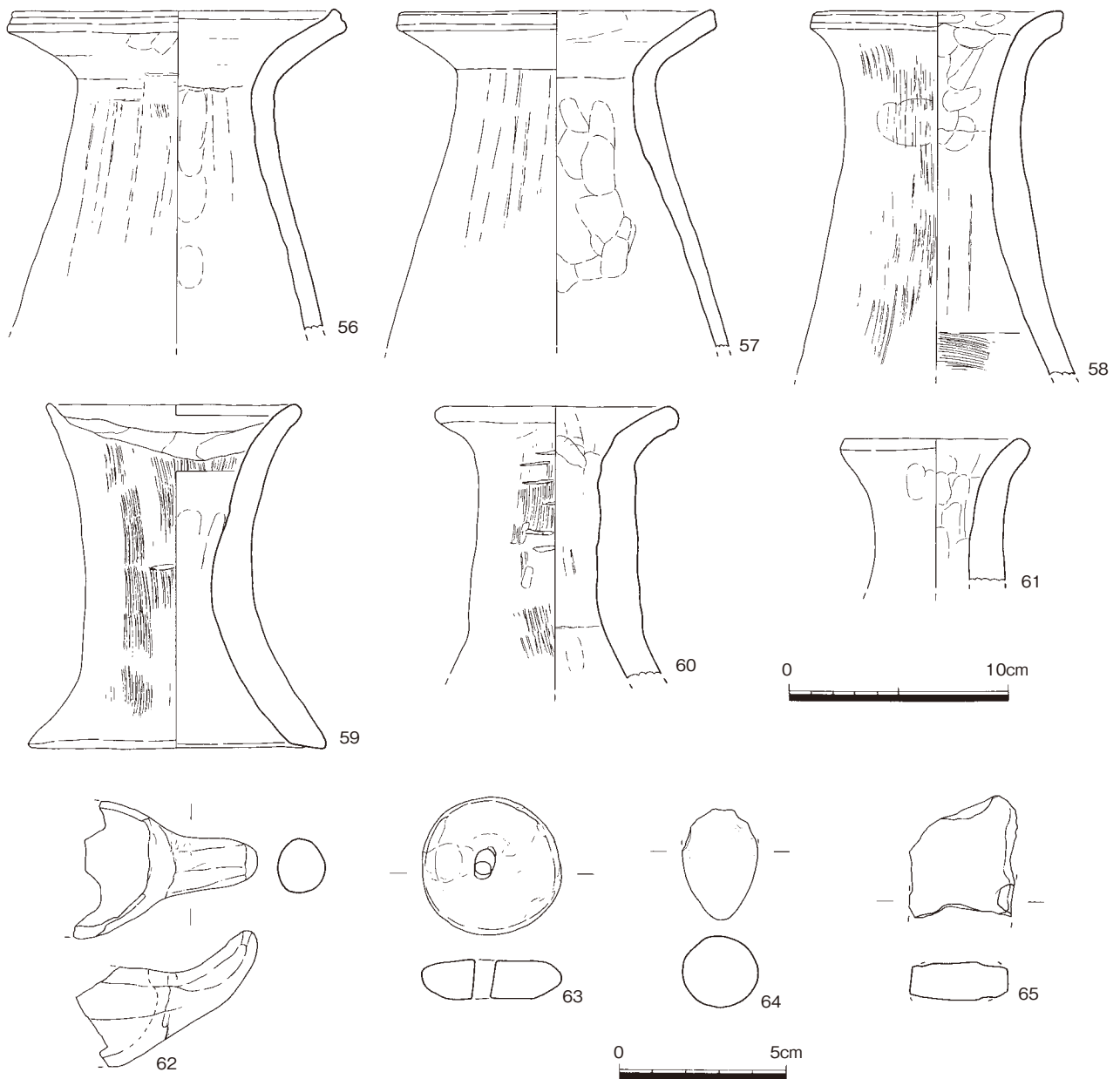
出土遺物(265～267図) 37～41は壺で、40のみ上層、他は下層出土である。37・38は複合口縁を呈するもので、口縁端部を面取りする。37の内傾する口縁上部は僅かに内湾する。器面が風化するが、口縁上部は内外面ヨコナデ、頸部外面には刷毛目調整が残る。復元口径16.6cmを測る。38の直線的な口縁上部は下部のやや内側にのるため、屈曲部が突出する。口縁上部はヨコナデ、下部から頸部にかけては、条線幅の広い刷毛目工具による調整を行う。色調は淡褐色を呈し、復元口径12.6cmである。39・40は短頸の壺で、39は外反する短い口縁部に球形の胴部を有する。口縁部は刷毛目後、ヨコナデを加えるが、体部は刷毛目を残す。40は復元口径13.6cmを測る直口壺で、ナデ肩の胴部を呈する。器面の風化が進むが、胴部内面には指オサエが残り、その下位には明瞭な接合痕が認められる。僅かに丸味のある底部を有する41は、色調や胎土から37と同一個体の可能性が高い。胴部の内外面には刷毛目調整を施し、外面にはナデを加える。また、外底部にも刷毛目を残し、内底部はナデを行う。42はミニチュアの無頸壺で、丸底ながら僅かに面を有する。口縁部を僅かに欠失するが、ほぼ完形で、口径5.4cm、器高6.2cmを測る。外面は風化するが、縦方向の刷毛目が残り、内面はヨコナデを施す。43～49は甕で、44・46・49は上層、他は下層出土である。43～46は「く」字状口縁を呈するもので、43は口縁端部を僅かにつまみ上げ、頸部には低い断面三角形の



第265図 SK0548 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(1/3)

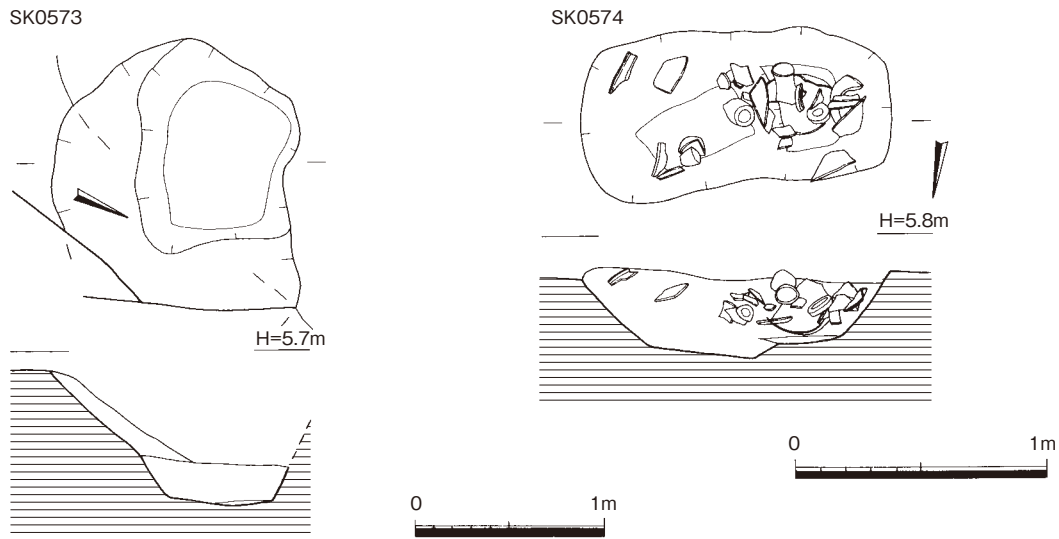


第 266 図 SK0548 出土遺物実測図 (2) (43・54 は 1/4、他は 1/3)



第267図 SK0548 出土遺物実測図(3) (63~65は1/2、他は1/3)

突帯が巡る。口縁部外面はヨコナデ、内面は横方向の刷毛目、体部外面は刷毛目を施すが、内面は器面が荒れる。44は器面の風化が著しいが、内面に指オサエが認められる。45は内外面に刷毛目を施すが、口縁部内面にはナデを行う。また、口唇部は強いヨコナデにより窪む。外面には煤が付着する。46は器面が風化するが、外面に刷毛目が残る。また、45同様に口唇部は凹面を呈する。47~49は胴部下半から底部が遺存する個体である。48は平底、47・49はやや丸味を帯び、49を除き、胴部の立ち上がりは外湾気味である。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデもしくは指オサエを施す。50~53は鉢で、51を除いて下層出土である。50は皿形の体部に外反する口縁部が付くもので、復元口径18.8cmを測る。器面は淡黄白色を呈し、風化する。外面に刷毛目の痕跡が僅かに残る。51は素口縁で、体部は僅かに外湾する。内面はナデ、外面は器面が風化するが、底部はヘラナデ調整が認められる。厚手の器壁である。復元口径13.0cm、器高7.8cmを測る。52・53は手捏ねで、指オサエが顕



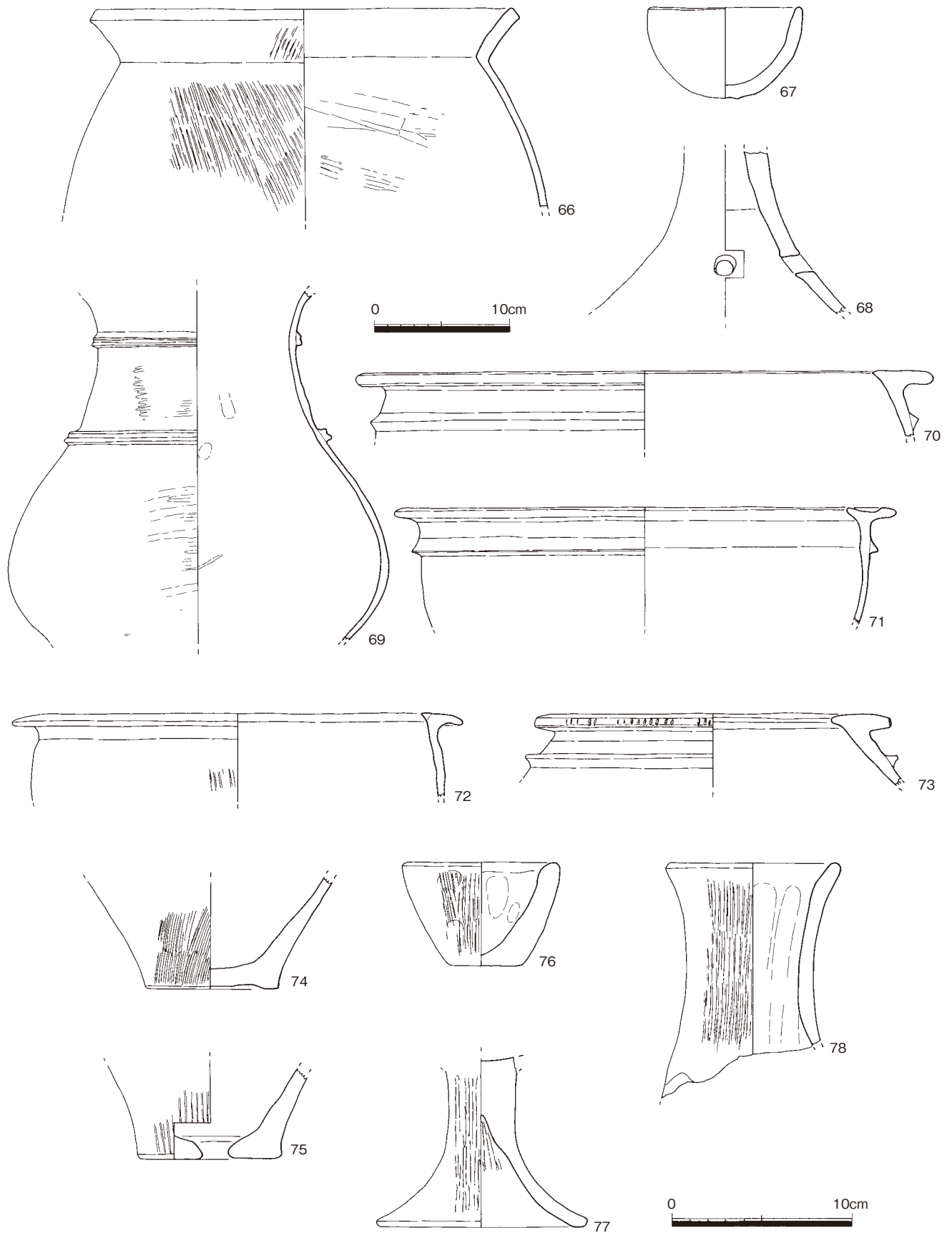
第 268 図 SK0573・0574 実測図 (SK0573 は 1/40、SK0574 は 1/30)

著である。52の底部は丸底、53は不安定ながら面を有する。54・55は高坏である。上層出土の54は屈曲して口縁部が外反する坏部で、端部は面をなす。内外面共に器面の風化が著しい。55は下層出土の脚部で、端部はヨコナデが施された明瞭な面を呈する。

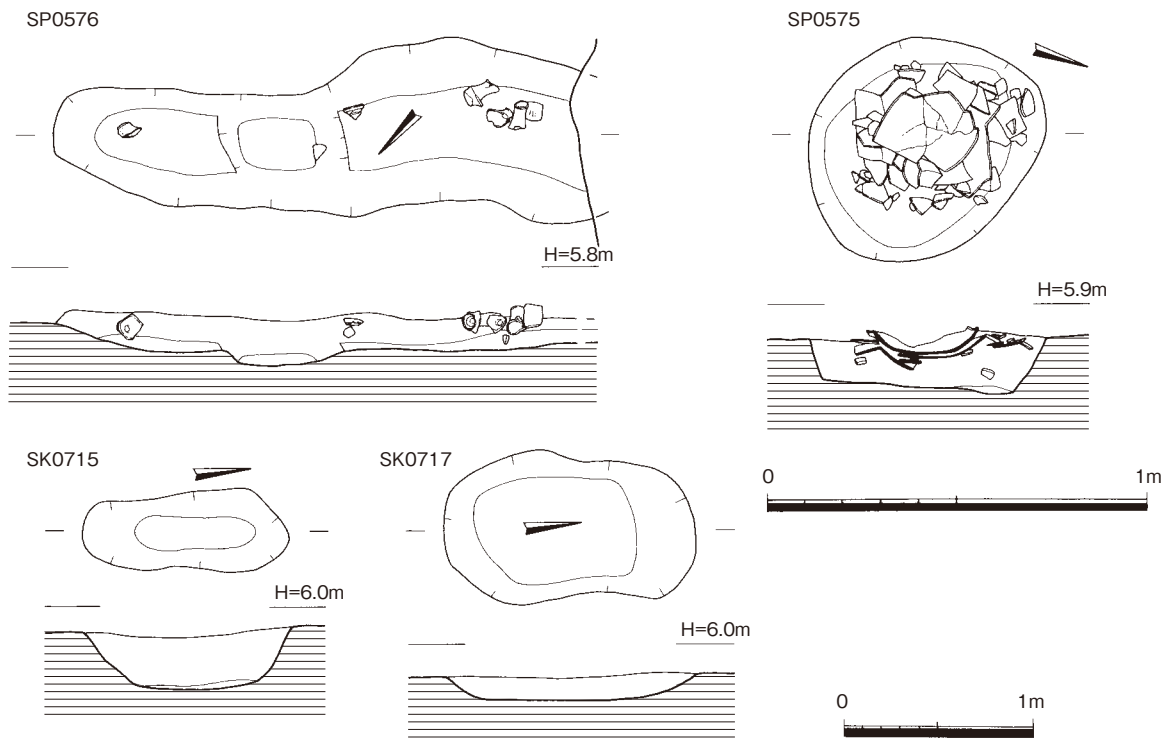
外面は縦方向のヘラ研磨、内面は刷毛目調整後、上半にはヨコナデを加える。56～61は器台で、全て上層出土である。56・57は受部と脚部の境界が比較的明瞭なもので、56は口縁端部をヨコナデによってつまみ上げ、口唇部は凹面を呈する。脚部の外面はヘラナデ、内面は指オサエによって調整する。57は外面の風化が進むが、縦方向の粗い刷毛目が残りに、内面は指オサエを施す。口唇部は面取りにより明瞭な稜を有する。58～61は受部と脚部の境界が緩く屈曲するものである。58は厚手の器壁で、外面は刷毛目、内面の上位は指オサエ、中位はナデ、下位には横方向の刷毛目を施す。口縁端部はヨコナデを加えるが、口唇部の面は鈍い。59は口径11.6cm、器高15.5cmを測り、外面は細かい刷毛目、内面は風化するが、指オサエやシボリ痕が認められる。裾端部には幅広の面を有する。60はやや粗い整形を行うもので、口縁部が歪む。外面は刷毛目、内面は指ナデ調整を行う。胎土には砂粒が多く含まれる。61は脚部の大半を欠失するもので、指オサエやシボリ痕が内面に見られる。口縁端部は丸く納める。62～64は土製品で、いずれも上層出土である。62は杓子形をなし、緩く屈曲する断面楕円形の柄を有する。丁寧なナデによる調整を施す。63は完形の紡錘車で、径4.2cm、孔径0.4cm、厚さ1.2cm、重量23.2gを測る。やや不整な円形を呈し、ナデによって整形を行う。64は端部を欠損する投弾で、径2.3cmを測る。器面の風化が進む。65は鉄製品で、幅3.2cm、厚さ1.2cmを測る断面方形の欠損する基部に平面台形状の先端部が付く。端部は先尖りで薄く仕上げられる。これらの出土遺物から弥生時代後期中頃の土坑と考えられる。

SK0573(第268図、図版112-6) M・N-2で確認した土坑である。西側をSD0501に、東側をSD0546に切られるため平面プランは不明確であるが、壁面の中位に段を有し、内部に不整な隅丸方形の掘り込みが認められた。底面は平坦で、上面からの深さ0.7mを測る。覆土は暗灰茶褐色土である。

出土遺物(第269図66～68) 全て弥生土器である。66は「く」字状口縁の甕で、頸部の稜は明瞭である。内外面は刷毛目調整で、胴部内面にはナデ、口縁部にはヨコナデを加え、口唇部は面取りが施される。外面には煤が付着する。底面付近で出土した。67は外湾して立ち上がる素口縁のミニチュ



第269図 SK0573・0574 出土遺物実測図 (69~73は1/4、他は1/3)



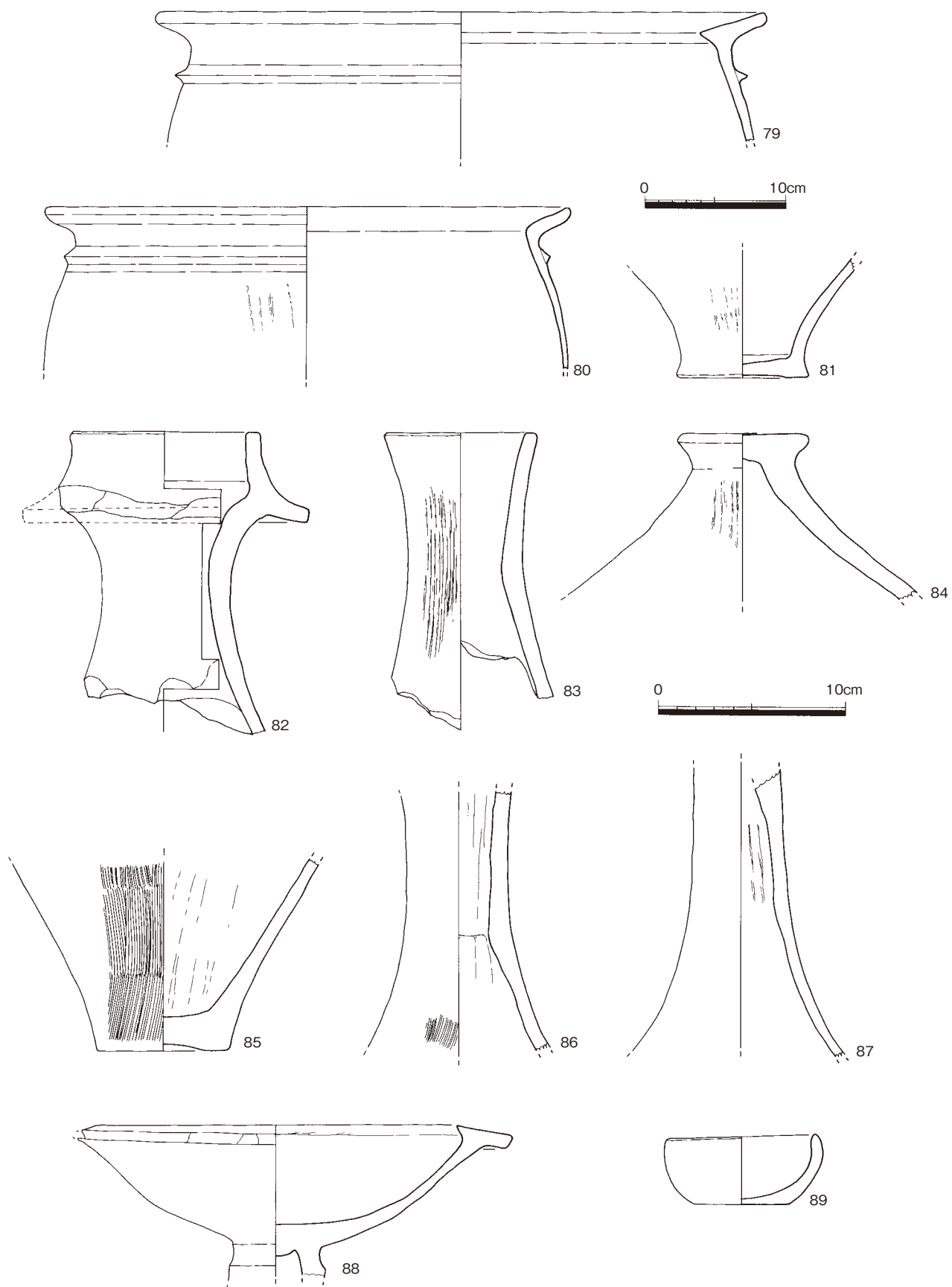
第270図 SK0576・0715・0717、SP0575実測図 (SP0575は1/20、他は1/40)

アの鉢で、底部は丸底である。器高5.0cmを測る。器面の風化により調整は不明である。68は高坏の脚柱部で、円形の透かしが2箇所遺存するが、その位置関係から従来4箇所の透かしを有するものと考えられる。内外面共に器面が荒れる。出土遺物や重複関係から、弥生時代後期後半頃の遺構と推定される。他に弥生時代中期の土器片が少量出土している。

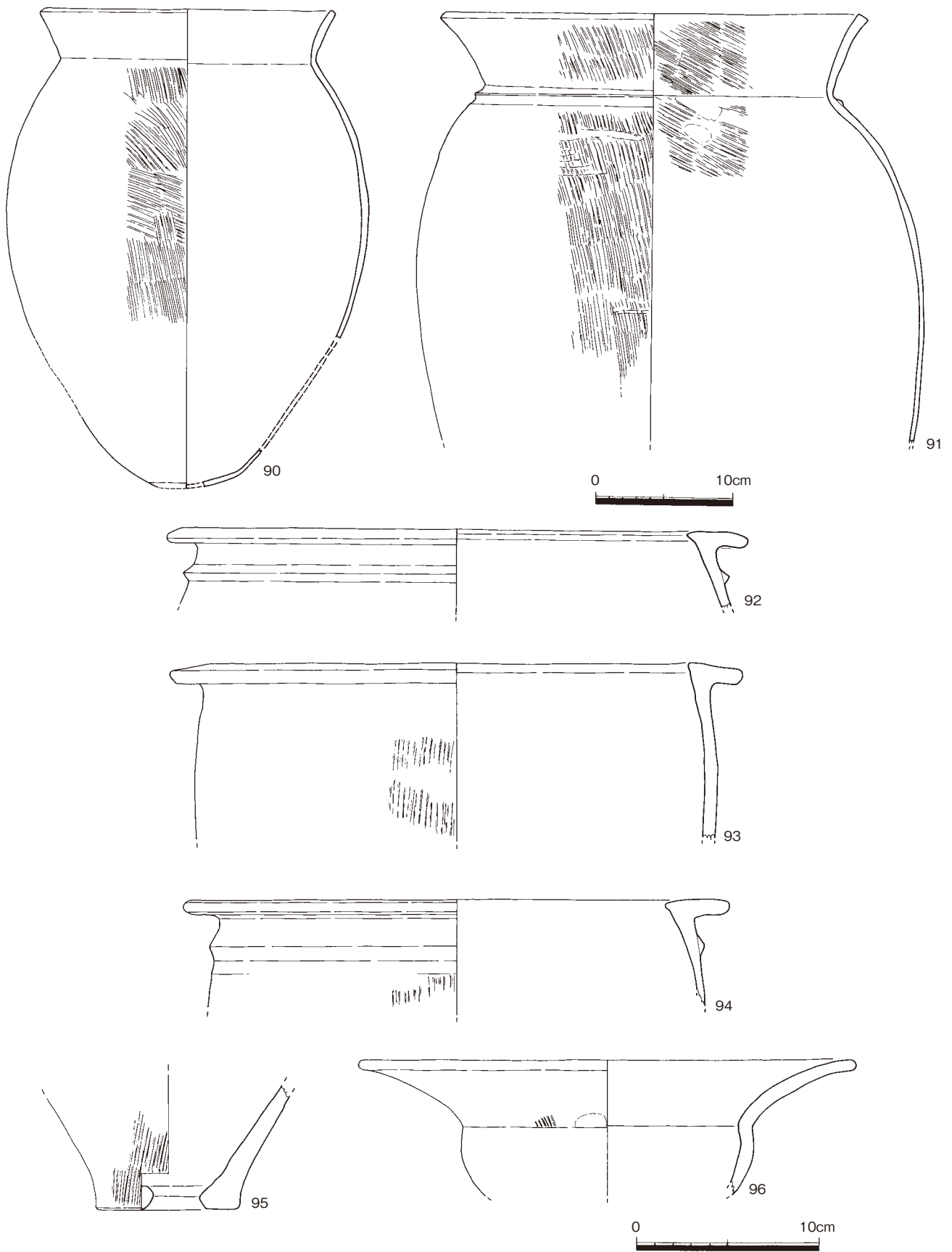
SK0574 (第268図、図版113-1) O-2で検出したやや不整な隅丸長方形の小形土坑で、弥生時代後期のSD0557・0581を切る遺構として調査したが、以下の出土遺物から前後関係を誤認したものと思われる。長さ1.2m、幅0.65m、深さ0.3mを測り、西側には平坦面が認められた。覆土は暗褐色粘性土を主体とする。弥生土器の壺、甕、器台等が上層に廃棄される。

出土遺物(第269図69~78) 69は壺で、袋状口縁が付くものと思われる。やや太目の頸部から下膨れの胴部へと続き、その境界と頸部に「M」字状の突帯が巡る。器面が風化するが、外面には赤色顔料が残り、突帯部分はヨコナデ調整を施す。70~75は甕である。70~73は鋤形の口縁を呈するもので、72を除いて口縁下に断面三角形の突帯を1条貼付する。大半の個体の器面は荒れるが、71の突帯部分にヨコナデ、72の胴部外面に不鮮明ながら刷毛目が残る。72は口縁部と体部の境界に口縁部の強いヨコナデによるものと推定される鈍い稜が認められる。73の口唇部は面取りされ、板小口による刻目が施される。74・75は外面に縦方向の刷毛目調整を行う底部片である。74の外底部は輪状を呈する。75は底部のほぼ中央に焼成後の穿孔がなされる。条線の広い刷毛目工具が用いられている。76は小形の完形の鉢で、口径8.7cm、器高5.7cmを測る。厚手の器壁で、体部は直線的に開く。外面は刷毛目、内面は指オサエで調整する。77は高坏の脚部で、外面は板状工具によるヘラナデ、内面にはシボリ痕が認められる。78は円筒形の器台で、脚部と受部の境界は不明瞭である。外面は刷毛目、内面は指オサエを施す。以上の出土遺物から弥生時代中期後半の土坑に位置付けられよう。

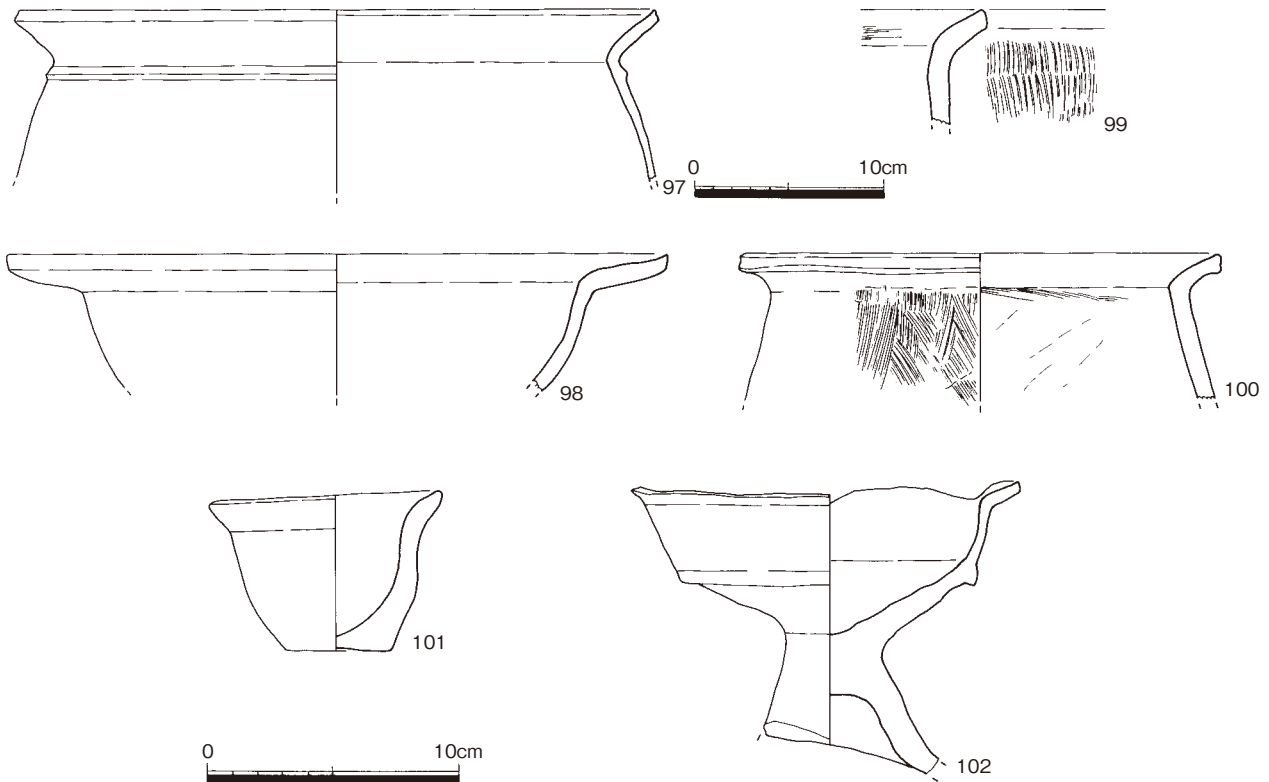
SK0576 (第270図、図版113-2) N-1・2に位置する溝状の土坑で、北西側をSD0509に切ら



第271図 SK0576・0715・0717 出土遺物実測図(79・80は1/4、他は1/3)



第 272 図 SP0575・0611・0614・0625・0643 出土遺物実測図 (90~92 は 1/4、他は 1/3)



第273図 SP0660・0691・0696・0704・0710・0712 出土遺物実測図(97は1/4、他は1/3)

れる。長さ2.7m以上、幅0.9mを測る。底面の中央部にピット状の浅い掘り込みを有し、上面からの深さは0.25mである。覆土は褐色粘性土を主体とし、底面から浮いた同一レベルで弥生土器の甕や器台等が出土した。

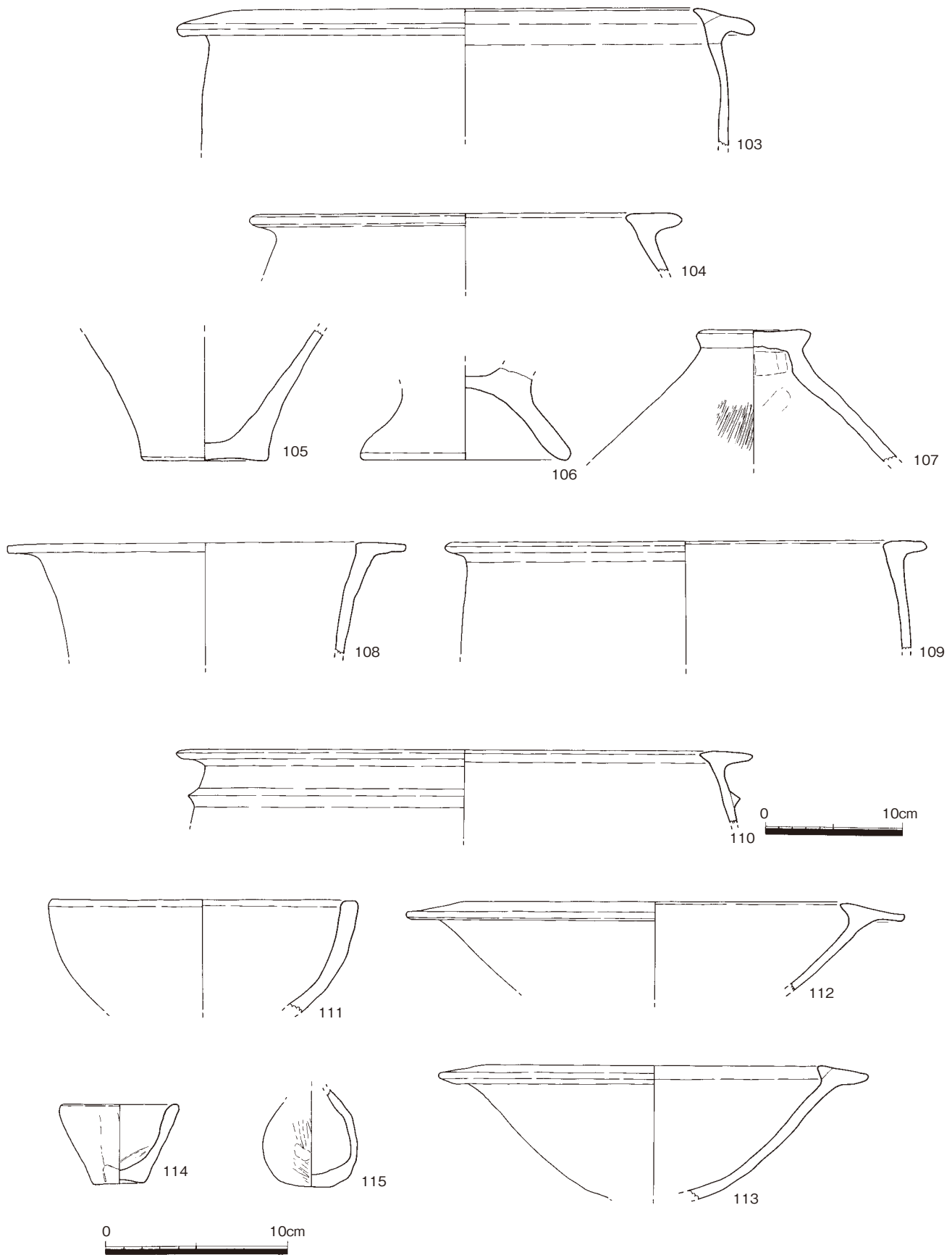
出土遺物(第271図79～84) 79～81は甕である。外面に僅かに刷毛目調整が見える程度で、いずれも器面が風化する。79は鋤形、80は逆「L」字状の口縁部を呈し、共に内傾する。また、口縁下に断面三角形の突帯が巡る。81は底部で、端部がやや突出する。82・83は器台である。82は口径10.1cmを測る筒形器台で、垂下気味の鐔を有する。器面が著しく荒れ、赤色顔料は認められない。口縁および鐔の端部は面をなす。83は上下に緩く開く円筒形を呈するもので、外面には刷毛目が施される。84は蓋で、天井部は断面逆台形状を呈し、厚みはない。上面はナデ、外面の一部に刷毛目が残る他は、調整が不明瞭である。以上から弥生時代中期末の遺構と考えられる。

SK0715(第270図) O-2で確認した土坑である。当初、SD0550の延長部と考えたが、深さが異なり、土器がまとまって出土したことから、別遺構として登録した。平面プランは楕円形で、長径1.1m、短径0.4m、深さ0.3mを測る。断面は逆台形で、暗褐色土を覆土とする。

出土遺物(第271図85～87) 全て弥生土器で、85は甕、86・87は高坏である。85の外底部は僅かに窪み、外面は細かい刷毛目、内面は指ナデを施す。86・87は器面の大半が剥落するが、外面の一部に刷毛目残り、内面にはシボリ痕跡が認められる。

SK0717(第270図) SK0715に隣接する不整な長方形プランの土坑で、同様にSD0550の延長と考えたが、削平を受けた箇所にもかかわらず幅員が広いことから、別遺構として認識した。長さ1.3m、幅0.8m、深さ0.1mを測り、壁面の立ち上がりは緩い。SD0557に後出する。

出土遺物(第271図88・89) 共に弥生土器で、88は高坏である。坏部は浅く、口縁部は外傾する



第274図 1面包含層および1面検出面出土遺物実測図(110は1/4、他は1/3)



第 275 图 V 区 2 面全体图 (1/150)

鋤形を呈する。脚部の大半を欠損するが、境界部に突帯と思われる隆起の一部が認められる。器面が風化するが、口縁部内面の一部に赤色顔料が残る。89は平底で体部が外湾する小形の鉢である。口径8.0cm、器高3.8cmを測る。内面の器面は剥落が進むが、外面はナデ調整を施す。他に弥生時代中期の甕の細片が少量出土している。

④ピット (SP) (第272・273図)

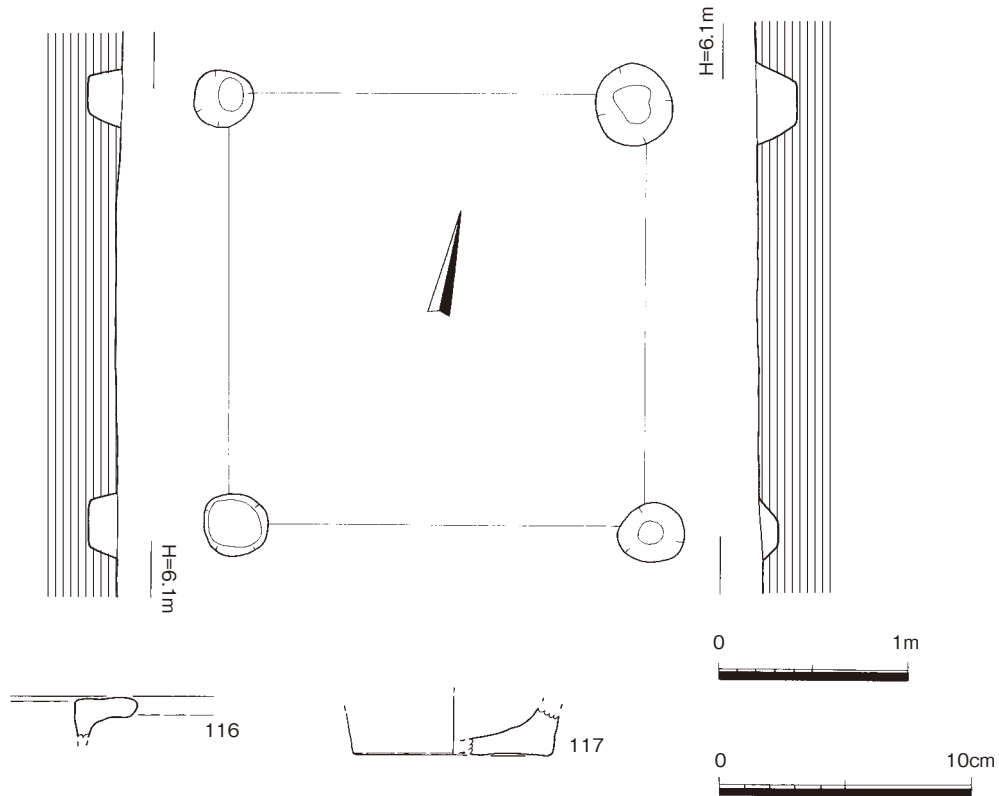
ここでは単独の1面ピット出土遺物を取り上げ、報告を行う。以下は全て弥生土器である。

90・91はO-1のSP0575(第270図、図版113-3)から出土した甕である。1/2以下の遺存状況である2個体の甕が内面上向き状態で重なって出土した。共に「く」字状口縁を呈する。90が上位の甕で、直線的な口縁部の端部は面取りがなされ、体部は卵形をなす。丸底の底部は上半と直接の接合箇所を持たないが、色調や砂粒の多い胎土から同一個体と推定されたため、図上で復元した。内面は器面の荒れが著しいが、体部外面には斜方向を主体とする刷毛目が施される。91は復元口径31.1cmを測る大形のもので、90同様に口唇部はシャープな面をなす。頸部には断面三角形の低い突帯を貼付し、その内面の稜は明瞭である。内外面を刷毛目で調整し、器壁は薄手である。弥生時代終末期の遺構であろう。なお、SP0575はSB0582の北西隅の柱穴を切る。92はN-1に位置するSP0611出土の甕で、鋤形口縁の口唇部は丸く納める。口縁下には断面三角形の突帯が巡る。器面が風化する。93・94はN-1で検出したSD0546に切られるSP0614出土の甕である。共に端部を丸く納める逆「L」字状の口縁部で、93はやや外傾する。94は口縁下に断面三角形の極低い突帯を貼付し、ヨコナデを施す。共に外面は刷毛目、内面はナデを施す。95はN-2に位置し、SD0519に切られるSP0625出土の甕底部である。底部には焼成後の穿孔が認められる。器面の大半が剥落するが、外面の一部に縦方向の刷毛目が残る。96はO-1の調査区壁際で確認したSP0643出土の高坏の坏部もしくは鉢である。丸味のある体部に長く外反する口縁部が付く。その境界は明瞭であるが、内外の稜は鈍い。器面が風化する。97はO-2に位置し、SD0557を切るSP0660出土の甕である。「く」字状の口縁下には、断面三角形の低い突帯が巡る。口縁端部はヨコナデによってつまみ上げる。器面が著しく荒れる。98はO-2で確認したSP0691出土の高坏で、内傾する口縁部に丸味のある体部が付く。器面の大半が風化するが、体部内面に刷毛目状の擦過が認められる。なお、この遺構はSB0582の南東隅の柱穴に後出する。99はO-2で検出したSP0696出土の如意形口縁甕である。口唇部は鈍く面取りが施され、刻目はない。外面には縦方向、口縁部内面には横方向の刷毛目調整を行う。100はO-1に位置するSP0704出土の甕で、99同様の如意形の口縁部を呈する。口唇部はヨコナデによって鈍い凹面をなす。胴部外面は刷毛目、内面は刷毛目をナデ消す。胴部はやや張りがあり、外面には煤が付着する。101もO-1で検出したSP0710出土の小形鉢の完形品で、緩く外反する口縁部を有する。底部は平底で、口径9.2cm、器高6.3cmを測る。器面が風化するため、調整は不明である。102もO-1検出のSP0712出土の高坏である。坏部の中位で屈曲し、外反する口縁部に続く。脚部裾は欠損するが大きく開く。器面の風化が著しい。

⑤その他の遺物 (第274図)

ここでは、1面遺構が掘り込まれる暗褐色土の包含層および1面遺構検出時に出土した遺物の一部を報告する。以下は全て弥生土器である。

包含層(103~107) 103~105は甕である。103・104は鋤形口縁を呈するが、104は内側の張り出しが鈍い。103は外傾、104はほぼ水平である。共に器面が風化する。105は底部で、外底部は浅い輪状をなす。器面の剥落が進み、調整は不明である。106は台付の鉢もしくは壺であろうが、台形状に広がる脚部のみが遺存する。胎土には砂粒が多く含まれ、器面が荒れる。107は蓋で、天井部は



第276図 SB0812実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

薄い。外面は刷毛目、内面には指オサエが残る。

1面遺構検出面(108~115) 108は広口の壺の頸部上半から口縁部で、上面が平坦な口縁部は内側へやや突出し、口唇部は丁寧な面取りを施す。外面の口縁部下にはヨコナデが残るが、他は器面が風化する。109・110は甕である。109は逆「L」字状、110は鋤形の口縁で、110の口縁下にはシャープな断面三角形の突帯を貼付する。共に器面の風化が進む。111は復元口径16.8cmを測る素口縁の鉢で、端部は面をなす。112・113はやや外傾する鋤形口縁の高坏の坏部である。112の口縁部は薄く、器面が剥落していない内面の一部には赤色顔料が認められる。113は器面が荒れ、調整が不明である。114・115は手捏ね土器で、114は口径6.5cm、器高4.4cmを測る鉢完形品である。指ナデによる整形がなされ、底部は歪む。115は丸底に近い底部を有する壺で、口縁部を欠損する。外面には粗いヘラ研磨を施す。

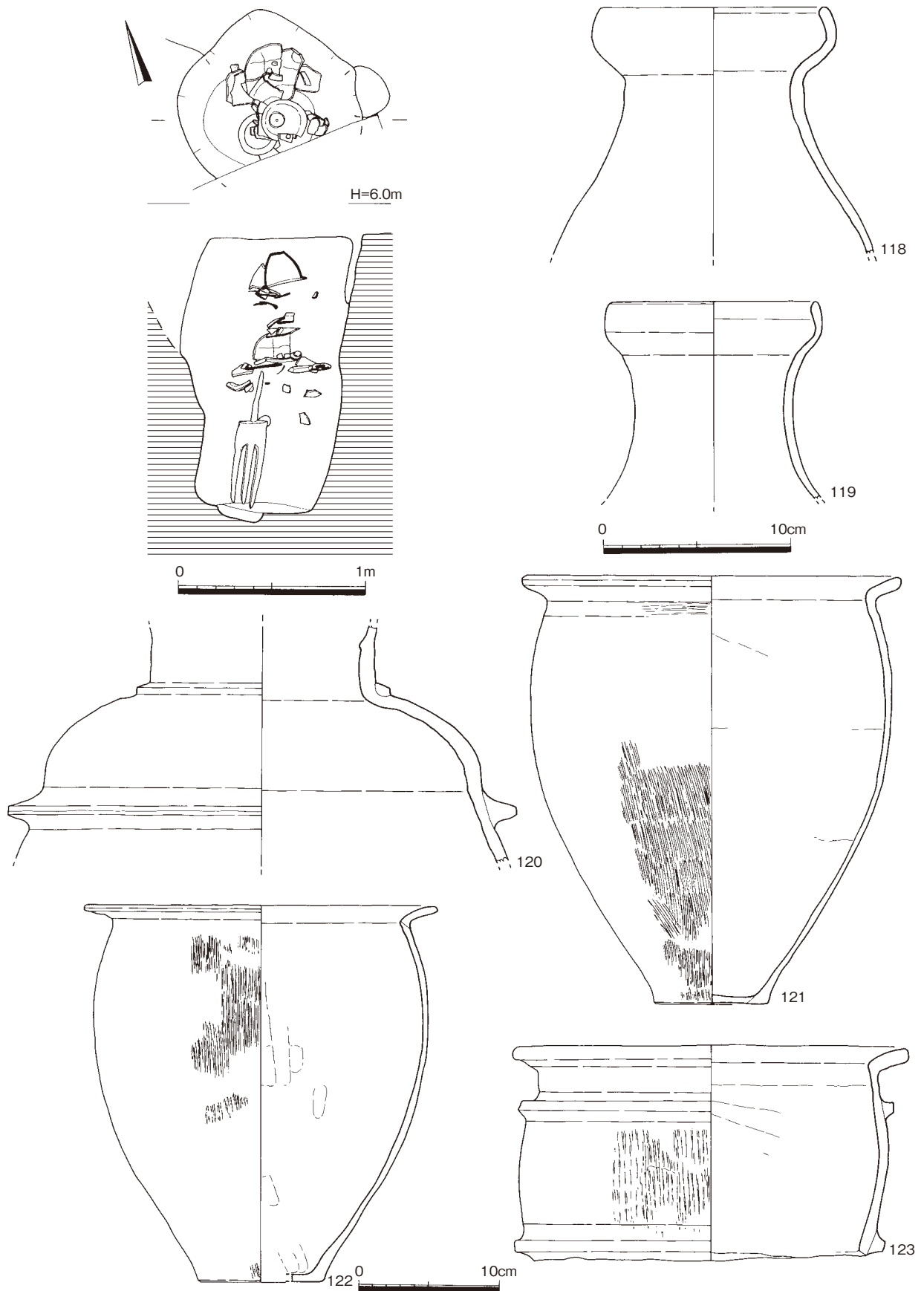
(2) 2面の調査(第275図)

「6.-1) 概要」で述べたように1面調査後、暗褐色土の包含層を除去し、標高5.6~5.8mを測る黄褐色土上面で実施した調査である。また、2面の調査対象範囲はV区の全域で、同区北西部のみに認められた包含層を対象とした1面の調査範囲とは異なる。

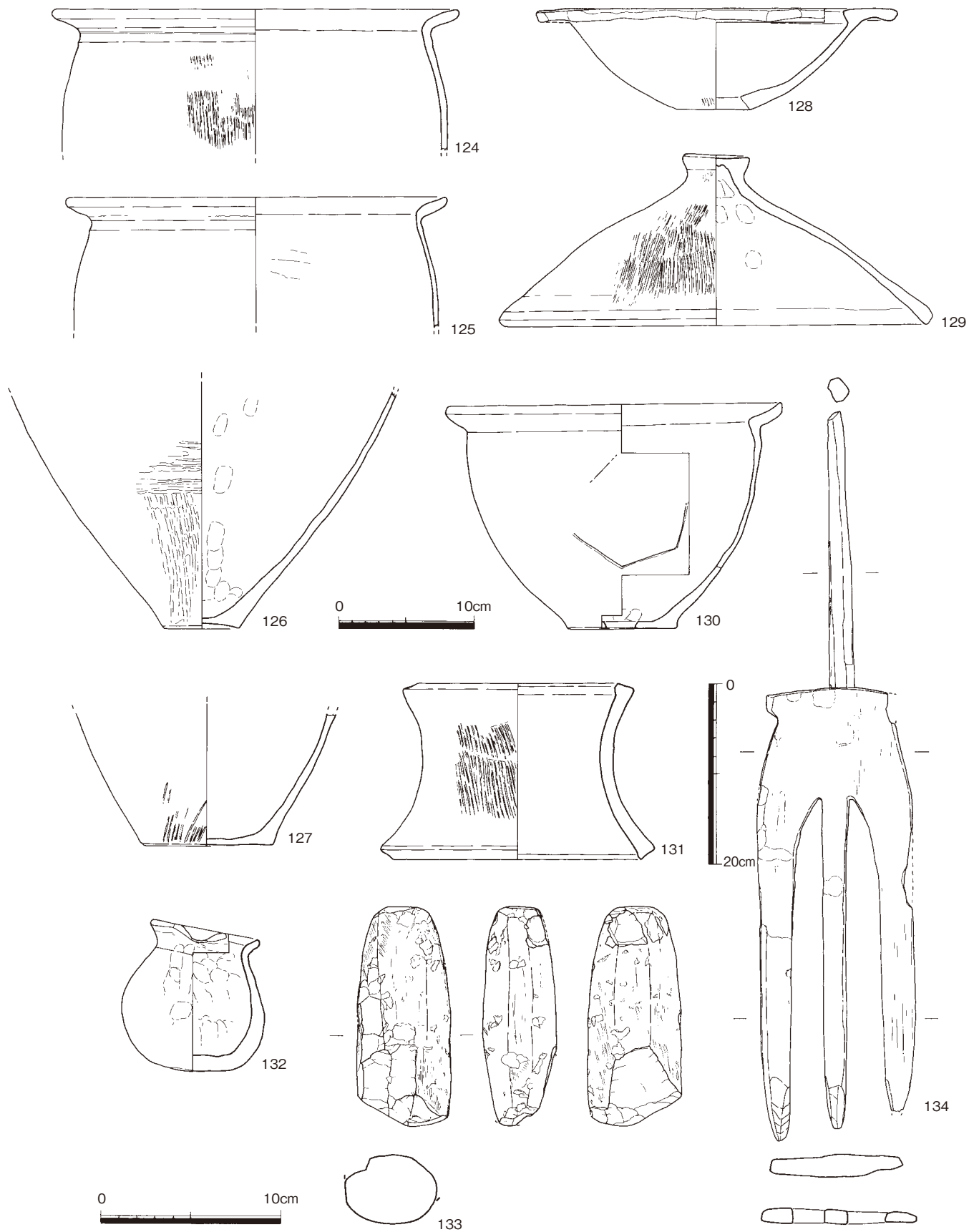
①掘立柱建物(SB)

主に調査区南側から南東側にかけてピットが分布するが、今回掘立柱建物としてまとめることができたのは1棟である。

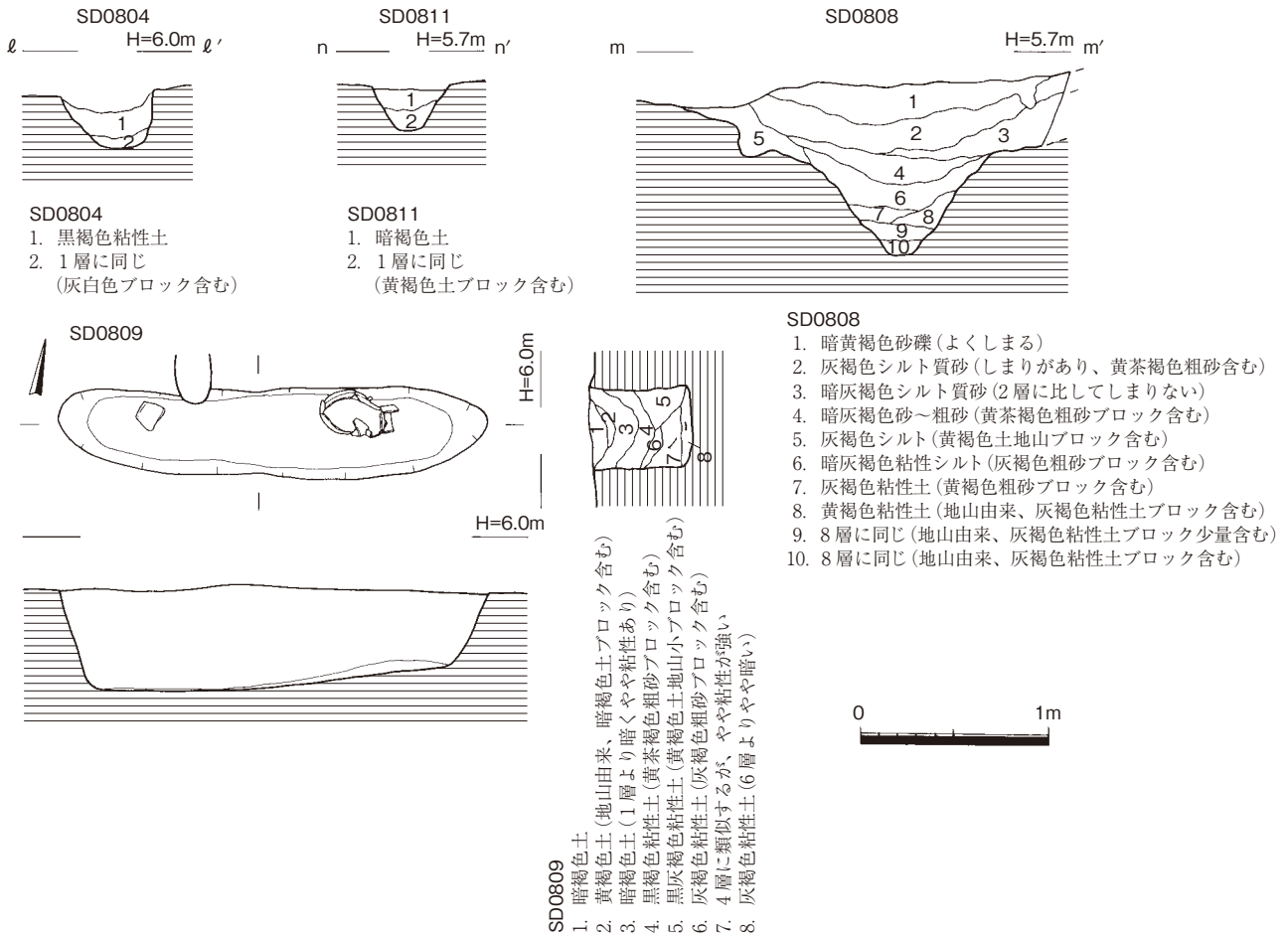
SB0812(第276図) P-2・3で検出した1間×1間の建物で、建物方位をN-12°-Wに有する。建物の柱間は、南北桁行2.3m、東西梁間2.2mで、正方形に近い柱の配置である。各柱穴は、ほぼ



第 277 図 SE0803 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1) (118~120 は 1/3、他は 1/4)



第 278 図 SE0803 出土遺物実測図 (2) (127・132・133 は 1/3、134 は 1/6、他は 1/4)



第 279 図 SD0804・0808・0809・0811 実測図 (1/40)

円形を呈し、径0.3～0.5m、深さ0.1～0.2mを測る。覆土は暗褐色土を主体とする。

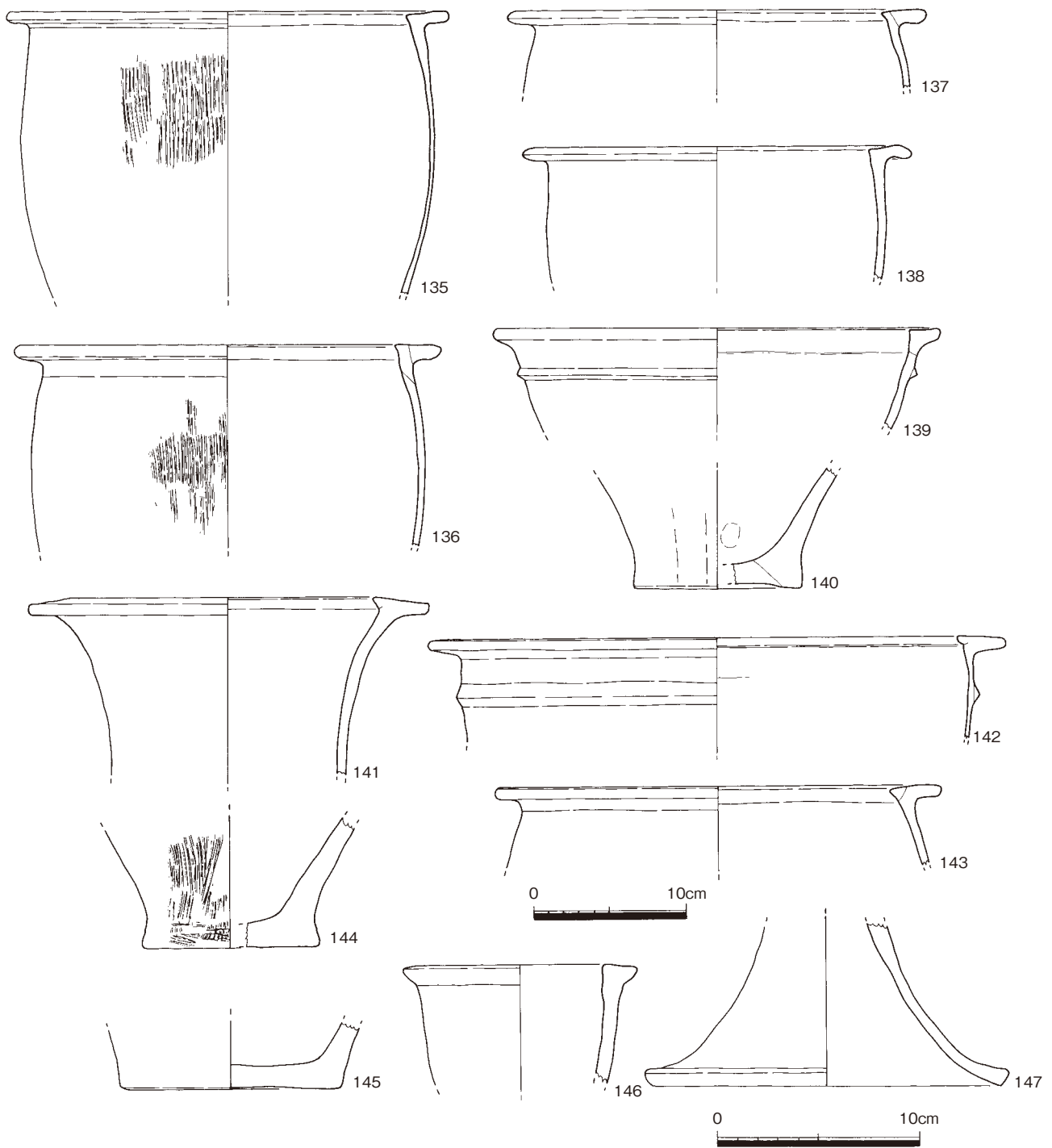
出土遺物(第276図) 116・117は南西隅の柱穴から出土した弥生土器の甕細片である。116は逆「L」字状口縁を呈し、端部は丸く納める。117は平底の底部で、共に器面が風化する。他に北西隅の柱穴から弥生土器甕の細片が1点出土している。弥生時代中期中頃以降の建物であろう。

②井戸(SE)

井戸として確認できたのは1基のみである。

SE0803(第277図、図版113-4・5) 調査区南西端のQ-1に位置し、西側上部をSK0801に切られる。南半部は調査区外に位置するが、現況での平面プランは不整な円形を呈し、径約1mを測る。壁面の傾斜は急で、直立に近い。底面までの深さは1.4mで、やや西寄りに浅いピット状の掘り込みがあり、僅かに湧水する。覆土は大きく上層、下層に分かれ、前者は上面から約0.9mまでの暗褐色粘性土で、多数の弥生土器壺や甕、蓋、磨製石斧等が出土した。また、後者は底面までの灰色粘性土で、土器類は少量であったが、三又鋤(134)が底面にほぼ直立した状態で出土した。

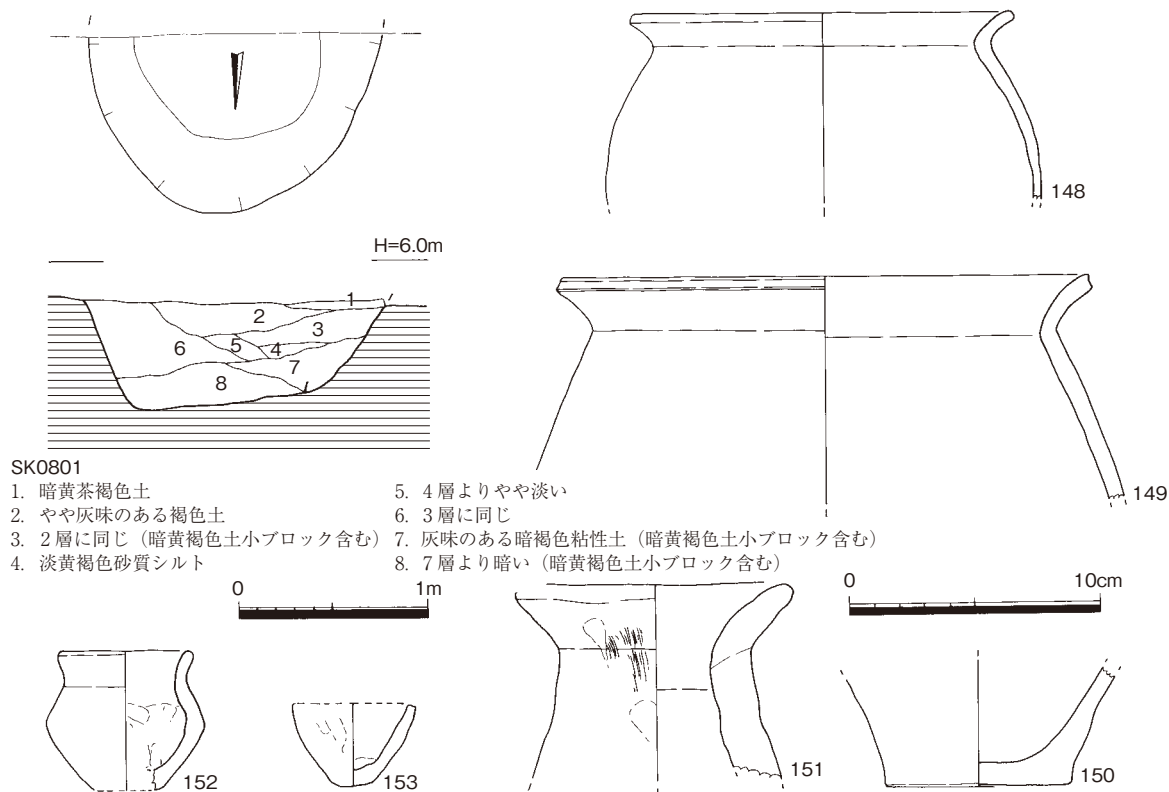
出土遺物(第277・278図) 132および上述した134を除いて上層出土の遺物である。118～132は弥生土器で、118・119は袋状口縁の壺である。口縁下に突帯はなく、頸部へと続く。共に器面の剥落が進む。120は瓢形土器である。直立する頸部と胴部の境界に断面三角形状の低い突帯を有し、胴部には断面台形の突帯を貼付する。器面の大半が剥落するが、外面の極一部に赤色顔料が残る。121～127は甕である。121～125の口縁部は内傾する逆「L」字状を呈し、端部を丸く納める。屈曲



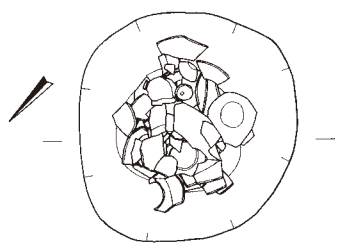
第280図 SD0809・0811 出土遺物実測図(140・141・144～147は1/3、他は1/4)

部内面の稜は122・123を除いてやや鈍い。また、123を除いて胴部に張りがある。121は復元口径27.0cm、器高30.4cmを測り、口縁部はヨコナデ、外面は器面が風化する上半を除き、刷毛目、内面はナデ調整を施す。外面の口縁下には強いヨコナデによる突線が認められる。外面の胴部下半には煤が付着する。122は内面に指オサエ、ナデを施し、器面が剥落していない胴部上半には刷毛目調整や煤が残る。復元口径25.2cm、器高26.9cmである。123は器壁が厚手で、口縁下と胴部に断面「コ」字形の突帯が巡る。残存状況から胴部突帯以下は打ち欠きの可能性がある。外面の調整は突帯間

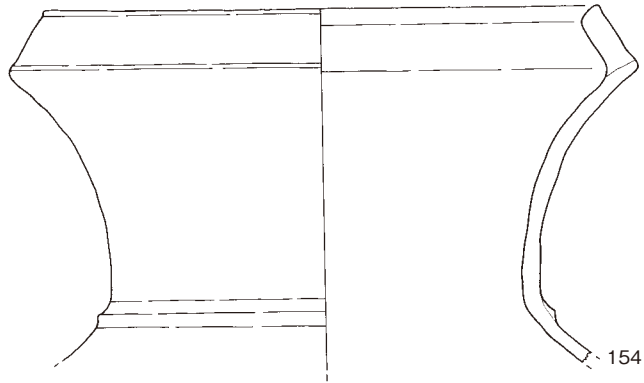
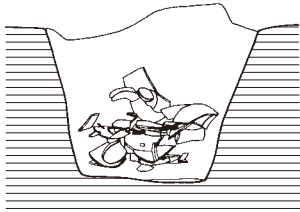
を粗い刷毛目調整、他はヨコナデを加え、内面は口縁部に横方向の刷毛目が残りに、体部はナデを行う。124・125は色調が異なるが、類似した形態である。124は外面の口縁下にヨコナデによって生じたと思われる低い段状の沈線が認められる。器面の大半が風化するが、胴部外面の一部に刷毛目が残る。125は121同様の突線が認められるが、器面の摩滅により鈍い。126・127は底部である。126は胴部下半が強くすぼみ、小振りで僅かに上げ底となる底部に続く。胎土は精良で、器面が剥落するものの、外面には横および縦方向のヘラ研磨を施し、赤色顔料が塗布される。内面には指オサエが認められる。127の外面は刷毛目調整である。128は鋤形口縁の高坏で、脚部を欠損する。全体に器面が風化するが、外面には刷毛目や赤色顔料が見られ、平滑な内面はヘラ研磨調整と推定される。129は口径32.1cm、器高12.7cmを測る蓋で、体部は笠形を呈する。つまみは小振りで、天井部の器壁は薄い。口縁端部はヨコナデによる面取りを施す。体部外面はやや粗い刷毛目、内面はナデ調整を行う。130は最上層から出土した鉢で、強く内傾する口縁部の内面は内湾し、口唇部は鈍い面をなす。屈曲部の外面には稜を有する。底部は径が大きく、中央に径約2cmの焼成後の穿孔が認められる。内面下半を除き、器面の剥落が著しい。口径24.9cm、器高16.7cmを測る。131は鼓形を呈する器台で、受部径17.0cm、器高13.0cmを測る。受部端部は内面に突出する。外面に縦方向の刷毛目を残す他は、器面が剥落する。132は手捏ね土器の壺で、下層出土である。球形の胴部に外反する口縁部が付き、底部は不安ながら面を有する。口径6.1cm、器高8.3cmである。133は刃部の大半を欠損する玄武岩製の磨製石斧で、長さ12.1cm、幅5.1cm、厚さ4.1cmを測る。基部は平坦で、断面は楕円形を呈する。134は柁目材を用いた一木造りの三又鋤で、先述したように最下層から出土した。断面方形状を呈する柄の上部を欠失し、残存長82.0cmを測る。身部の長さは50.8cmで、基部の両側に突起を作り出すが、欠損している。断面長方形の3本歯は先端を細く削り出し、歯長は38.4cmである。



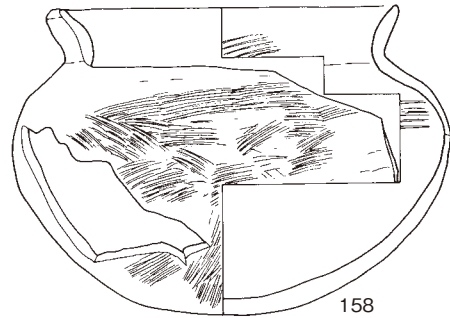
第281図 SK0801実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)



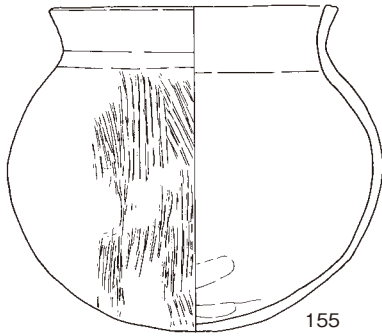
H=5.9m



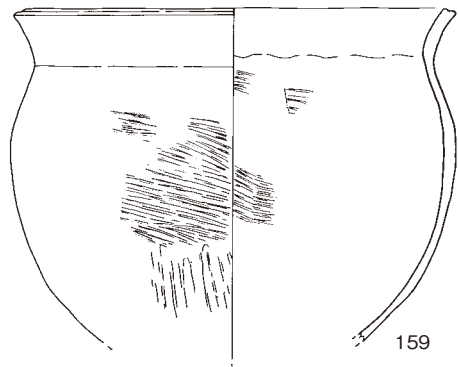
154



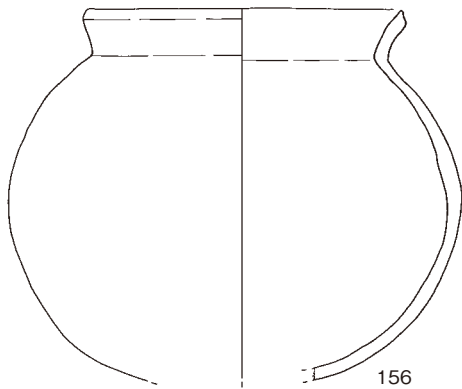
158



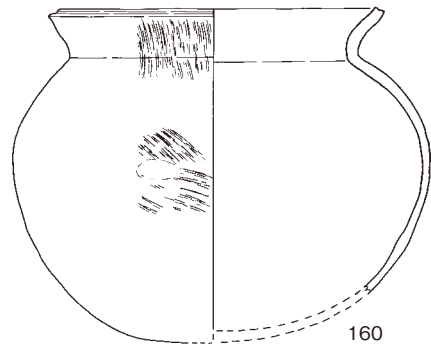
155



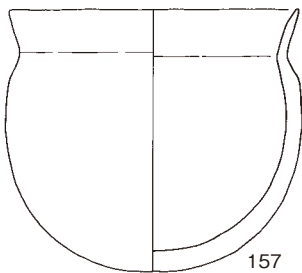
159



156



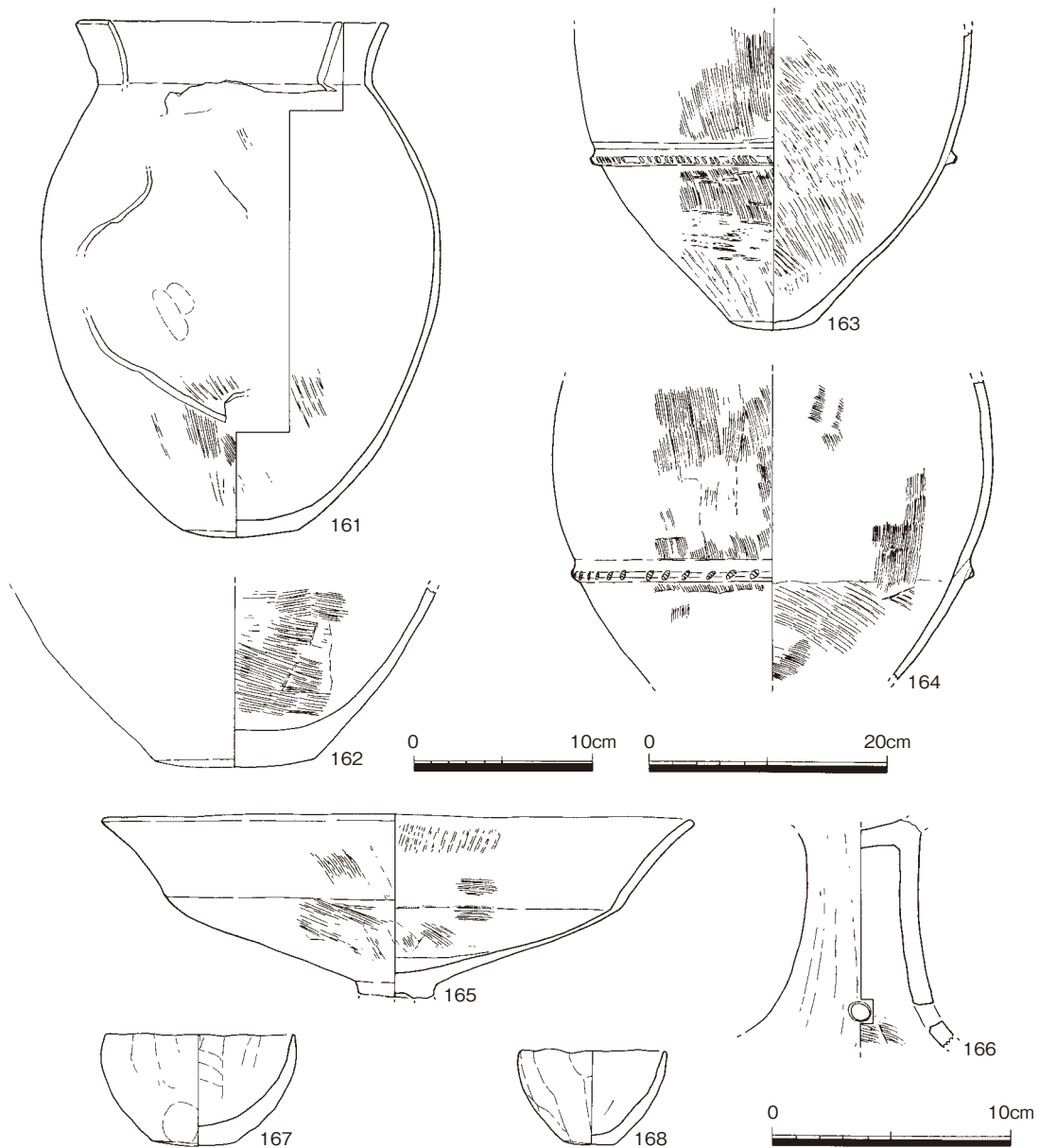
160



157



第282図 SK0805 実測図(1/30)および出土遺物実測図(1)(1/3)



第283図 SK0805 出土遺物実測図(2) (163・164は1/6、166～168は1/3、他は1/4)

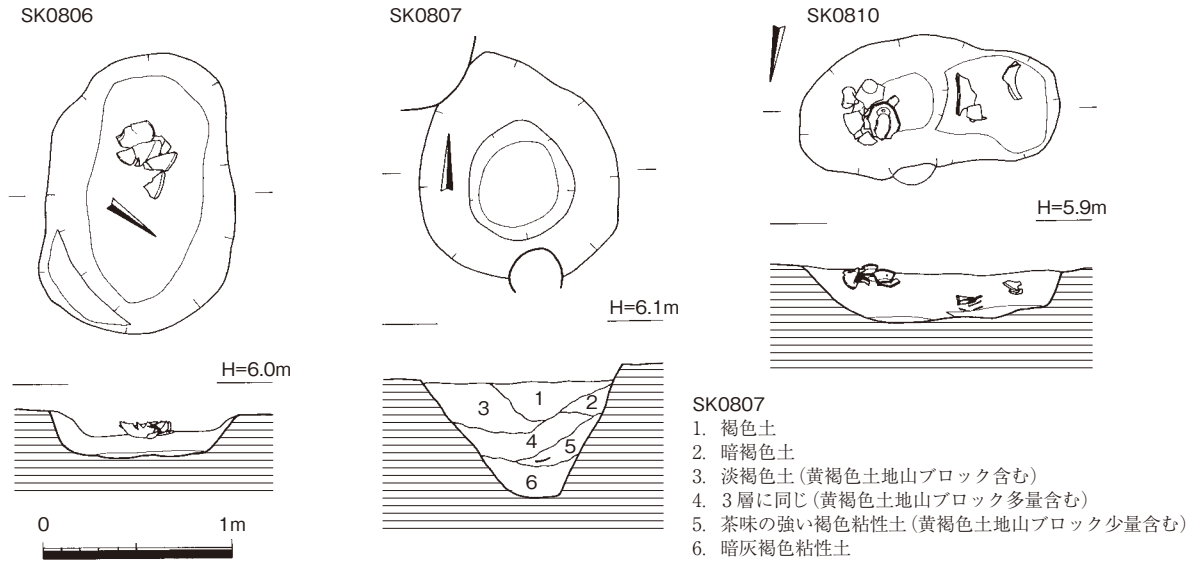
樹種はイチイガシである(付編1参照)。以上の出土遺物から弥生時代中期末の井戸と考えられる。

③溝(SD)

1面と異なり、延長が短い溝が大半で、少数である。なお、SD0808は環濠の可能性を有する。

SD0804(第279図、図版113-6) P-1・2に位置する東西方向の直線的な溝で、長さ3.8m、幅0.4～0.5mを測る。深さは0.2～0.4mで、西側から東側に向かって傾斜して深くなる。断面は逆台形状を呈し、南側に比して北側の壁面の傾斜が急である。覆土は黒褐色粘性土を主体とする。出土遺物には弥生時代中期後半の甕や蓋等があるが、細片が多い。

SD0808(第279図、図版114-1・2) 調査区の東端のO・P-3で検出した断面「V」字形の溝で、西側の肩を確認することができた。東側の肩は調査区外にあるため詳細は不明であるものの、西側壁面の状況から東側を囲むような弧状を呈するものと推定される。掲載した土層図は最も遺構の遺存する北端部で作成したもので、該地では幅2.3m以上、深さ0.9mを測る。西側壁面では下位の傾斜が



第 284 図 SK0806・0807・0810 実測図 (1/40)

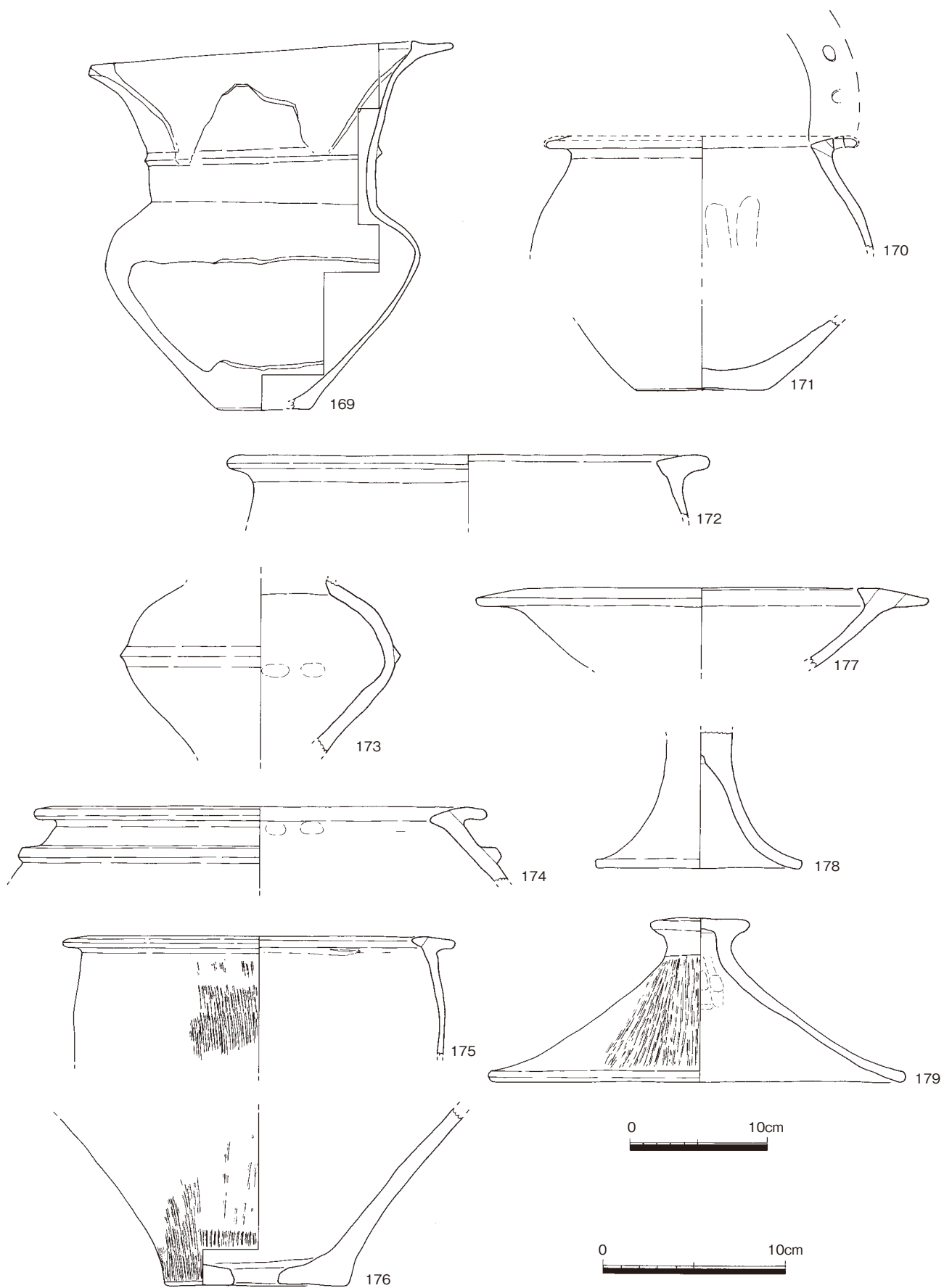
急になるため、中位に段を有する。また、上位には階段状のステップが掘り込まれるが、北側が調査区外に延びるため、明確ではない。一方、東側壁面では同様の高さで傾斜が変化し、平坦面が認められた。覆土の上層はしまりのある砂礫が、中層では砂やシルトが、下層では地山が崩落した黄褐色粘性土が主体となる。なお、底面は、青灰色弱粘性土の地山まで掘削される。溝の埋没後にはSP0978をはじめ、複数のピットが掘り込まれる。出土遺物には土器類は1点もなく、珪化木や自然礫が出土したのみである。周辺遺構に先行して掘削された溝であろう。

SD0809 (第 279 図、図版 114-3) P-2 で確認した土坑状の溝で、長さ 2.3m、幅 0.5m を測る。断面は端正な方形を呈し、壁面は直立して立ち上がる。深さは 0.4~0.6m で、底面は東側から西側に向かって緩く傾斜して深くなる。

出土遺物 (第 280 図 135~140) 全て弥生土器で、139 は鉢、他は甕である。いずれも口縁部は逆「L」字形を呈し、口唇部は丸味をもつ。135~137 はヨコナデにより内面が僅かに突出する。器面が風化するものが多いが、135・136 は外面に縦方向の刷毛目が認められる。東側の中層より出土した 135 は精良な胎土で、器壁が薄い。139 は外面の口縁下に断面三角形の突帯を貼付する。140 は平底の底部である。他は細片であるが、甕が多い。以上の出土遺物から弥生時代中期中頃の遺構と考えられる。

SD0811 (第 279 図、図版 114-4) N-1・2 に位置する東西方向の溝で、西側を 1 面SK0548 に切られ、約 2m が遺存する。幅 0.4~0.5m を測り、断面は逆台形を呈するが、壁面は北側が急で、南側は緩い。底面は中央部に低い段落ちがあり、深さは東側で 0.3m、西側は 0.2m である。その段落ち部の上面近くで弥生時代の甕棺胴部上半片が出土した。なお、この破片は、後述する南約 20m で検出したSX0802 出土の甕棺 (第 286 図 180) と接合した。

出土遺物 (第 280 図 141~147) 全て弥生土器で、器面が荒れるものが多い。141 は広口壺で、外傾する鋤形口縁から胴部に向かってすぼむ頸部が続く。口唇部は面取りを行う。器面の大半が剥落するが、口縁部上面にはヨコナデが残る。142~145 は甕である。142 の口縁部内面は鋤形状に突出するが、端部は丸味がある。口縁下の突帯は低い。逆「L」字状口縁の 143 は、胴部に張りがある。144・145 は底部で、144 の外面は刷毛目を施す。146 は小形の鉢で、口縁部は断面三角形を呈する。復元口径は 11.4cm を測る。147 は高坏の脚部で、端部を面取りする。これらの出土遺物から弥生時



第 285 図 SK0806・0810 出土遺物実測図 (169・174・175・179 は 1/4、他は 1/3)

代中期中頃の溝に位置付けられよう。

④土坑 (SK)

SK0801 (第 281 図、図版 114-5) 調査区南端の Q-1 で検出したが、南半部は調査区外に位置する。東側の SE0803 を切る。現況で径 1.5 m の円形を呈し、深さ 0.5 m を測る。断面は逆台形をなし、覆土は全体的に類似した褐色系である。

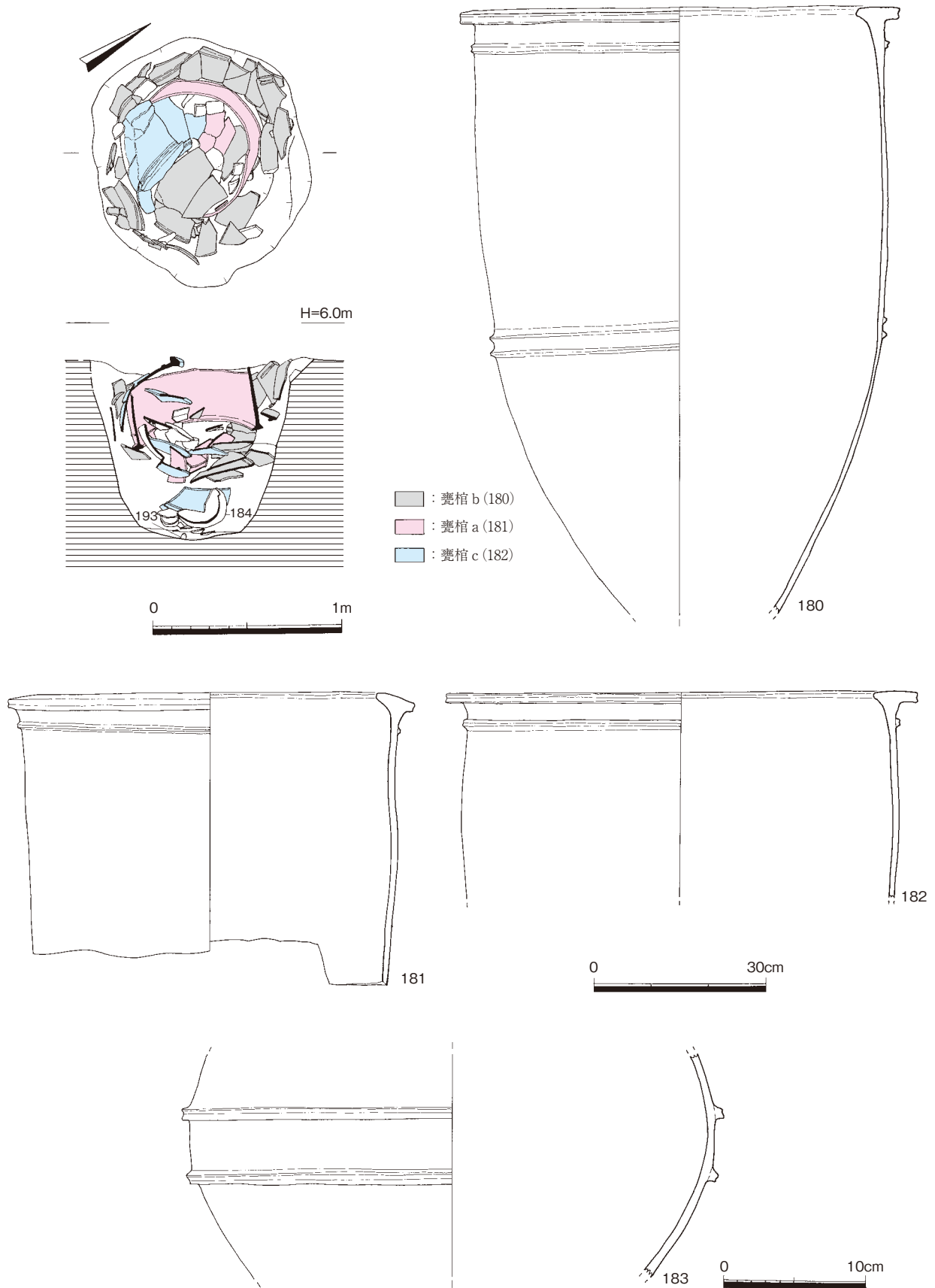
出土遺物 (第 281 図) いずれも弥生土器で、器面の風化が進む。153 を除き、破片資料である。148～150 は甕である。「く」字状口縁の 148・149 の口唇部は面をなし、内面屈曲部の稜はやや鈍い。150 は平底の底部である。151 は器台の受部と思われる。外面の一部に刷毛目が残る。152・153 は手捏ね土器で、152 は壺、153 は鉢である。152 は算盤玉状の胴部に短く外反する口縁部を有する。153 は口縁部の一部を欠損する。底部は不安定ながら面がある。他に弥生時代中期後半の土器片が目立つが、以上の出土遺物から後期の遺構と推測される。

SK0805 (第 282 図、図版 114-6) P-2 で確認した円形土坑で、径 0.9 m 前後を測る。深さは 0.7 m で、断面は逆台形を呈する。覆土の中層部分に厚さ 0.15 m の炭化物が堆積し、その下層の灰茶褐色粘性土から弥生土器が多数重なって出土した。丸底の短頸壺が多い。

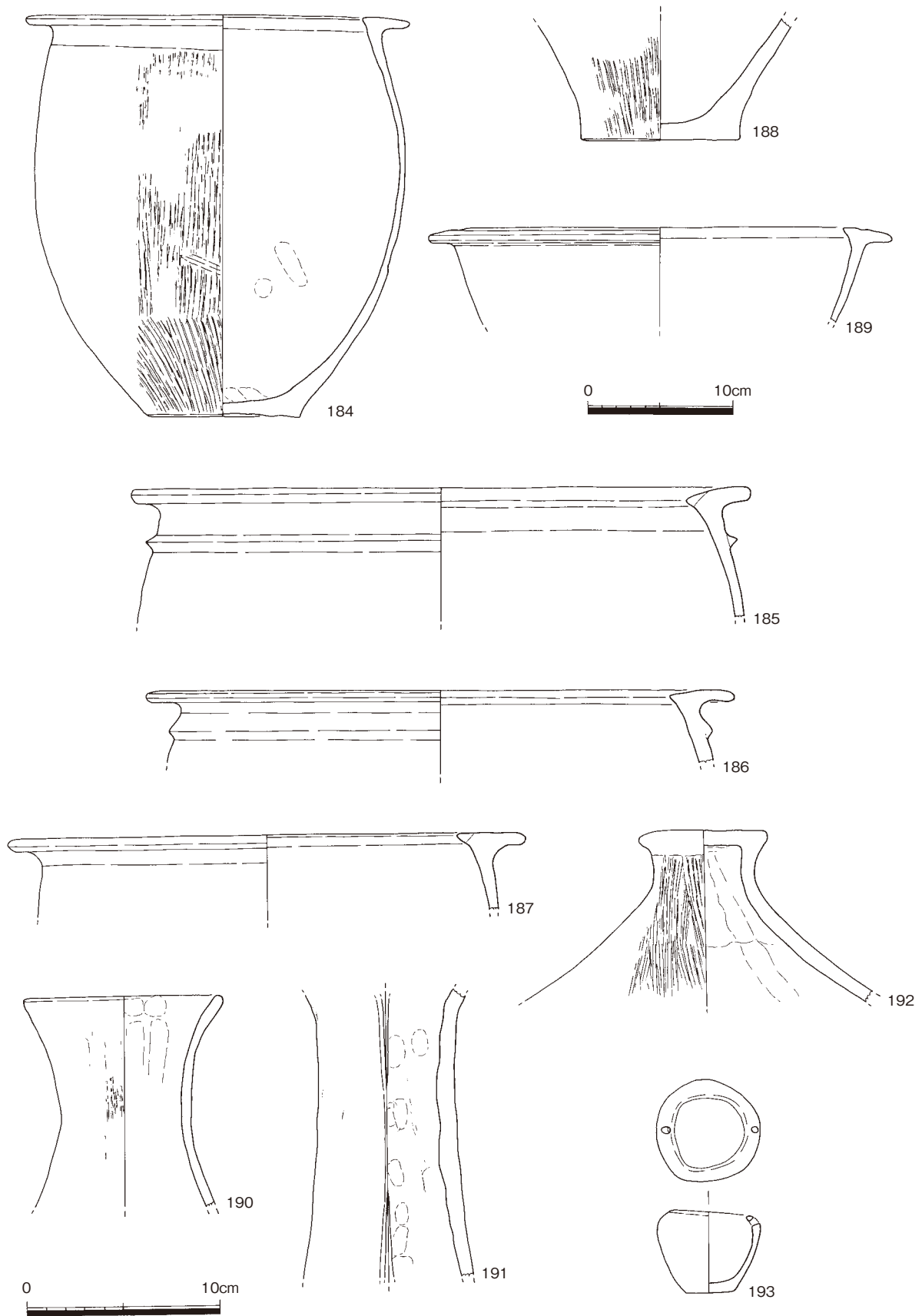
出土遺物 (第 282・283 図) 156 のみ炭化物層の上層、他は下層からの出土である。154～160 は壺で、154 は複合口縁壺である。内傾する口縁上部は直線的で、端部は鈍い面をなす。また、口縁屈曲部内面は丸味がある。頸部と胴部の境界には断面三角形の低い突帯が巡る。器面の剥落がすすみ、調整は不明である。155～160 は短頸壺で、いずれも「く」字状に折れる短い口縁部を呈し、157・158 を除き、口唇部に面を有する。胴部の形状は、158・160 は扁球状、他は球状に近い。また、157・158 は頸部のくびれが弱い。底部が遺存するものは全て丸底である。155 は口縁部の一部を欠損する程度で、遺存状況が良好である。口径 11.4 cm、器高 12.8 cm を測る。器面が風化するものが多いが、外面は刷毛目、内面は刷毛目もしくはナデ調整を施す。161～164 は甕である。161 は「く」字状の口縁部に長胴の胴部が付き、境界の稜は鈍い。底部は凸レンズ状を呈し、胴部との境界はやや不明瞭である。器面が荒れるが、内外面に刷毛目調整が認められる。口径 17.6 cm、器高 28.9 cm を測る。162 は厚手のレンズ底の底部で、161 に比して安定感がある。内面は横方向の粗い刷毛目、内底部はナデを施し、煤が付着する。外面は風化のため、調整不明である。163・164 は大形品の胴部片から復元図化したものである。胴部下半に断面台形状の突帯を貼付し、163 はヘラ状工具、164 は板小口によって斜方向の刻目を施す。163 の底部は小さな凸レンズ状を呈し、鈍いながら胴部との境界には稜を有する。内外面に刷毛目が顕著であるが、外面下半の一部に横位の叩きが残る。164 の刷毛目工具は細かいが、内面下半のみ条線の粗い刷毛目調整を斜方向に施し、煤が付着する。165・166 は高坏である。165 は坏部の中央に屈曲部があり、口縁部は外反して大きく開く。器面の大半は風化するが、細かい刷毛目が残る。166 は脚部下半に円形の透かしを 3 箇所を施す。外面はヘラナデ、内面はナデ調整であるが、下端には刷毛目が認められる。167・168 は手捏ね土器の鉢で、不安定ながら底部には面を有する。以上の出土遺物から弥生時代終末期の土坑と考えられる。

SK0806 (第 284 図、図版 115-1) P-2 に位置する不整な隅丸方形形状の土坑である。長さ 1.5 m、幅 1.0 m、深さ 0.2 m を測る。断面は逆台形を呈し、覆土は黄褐色土ブロックを僅かに含む褐色土を主体とする。東側に狭いテラスを有する。西側の上層より壺 (169) が出土した。

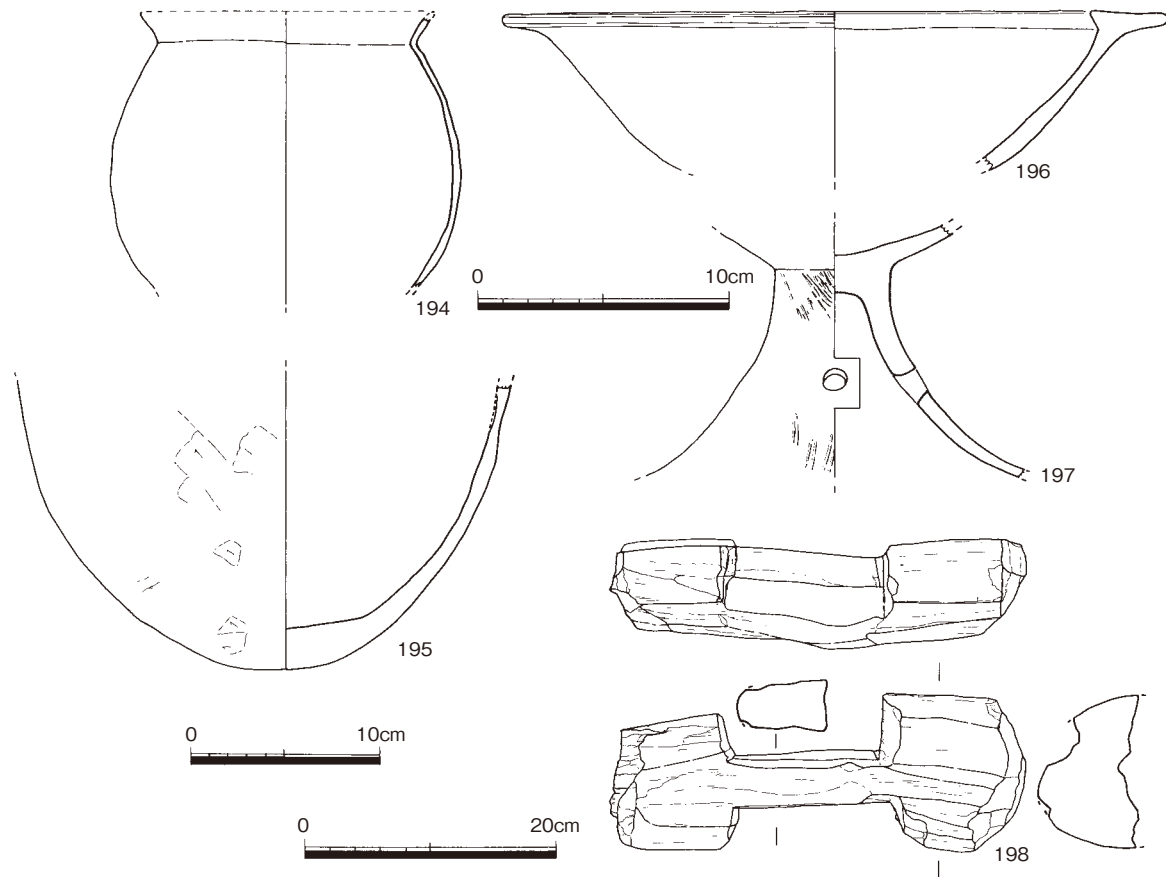
出土遺物 (第 285 図 169～172) いずれも弥生土器で、169～171 は壺である。169 は鋤形口縁の広口壺で、頸部の下半に断面三角形の突帯を配する。胴部はやや肩が張り、下半部は直線的にすぼむ。器面は著しく荒れる。170 は口縁部が屈折する無頸壺で、口縁部上面には焼成前の穿孔を有する。全



第 286 図 SX0802 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1) (183 は 1/4、他は 1/10)



第 287 図 SX0802 出土遺物実測図 (2) (184~186・189・191 は 1/4、他は 1/3)



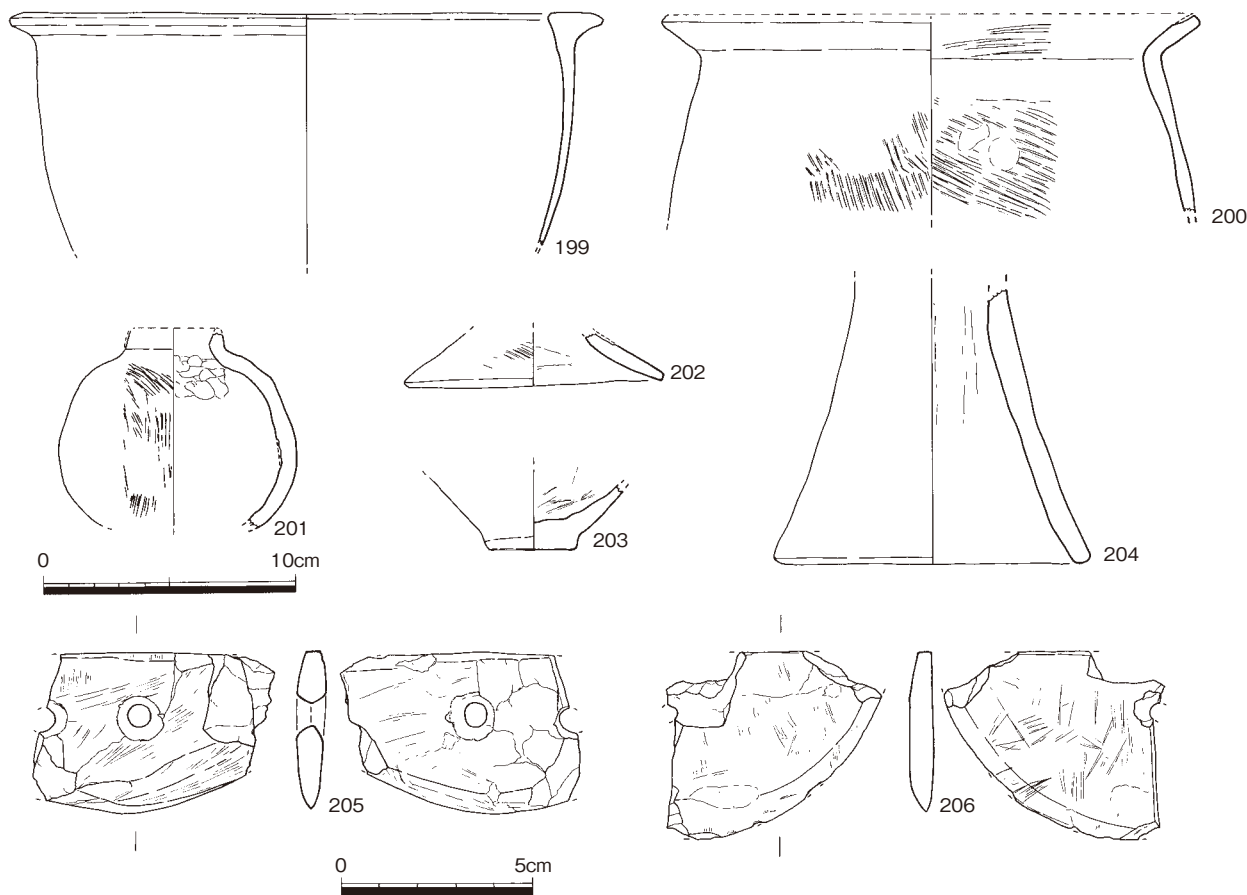
第288図 SP0978・1005・1056・1057・1096 出土遺物実測図（195は1/4、198は1/6、他は1/3）

体に器面が風化するが、内面に指オサエが残る。171は平底の底部である。172は逆「L」字状口縁の甕で、器面が剥落する。これらの遺物から弥生時代中期後半の土坑に比定されよう。

SK0807（第284図、図版115-2）O・P-1で検出した。平面プランは不整な円形を呈し、径約1.1mを測る。断面は播鉢状にすぼみ、壁面の中位に段がある。深さは0.7mで、覆土の中層にはブロックを多く含む。出土遺物には弥生時代中期から後期の土器が少量あるが、細片である。

SK0810（第284図、図版115-3）O-2で確認した不整な隅丸長方形の土坑で、長さ1.4m、幅0.7mを測る。底面は西側がやや高く、テラス状を呈する。東側での深さは0.3mである。覆土は暗褐色粘性土を主体とし、黄褐色土ブロックを僅かに含む。東側の上層および西側の下層でまとまって弥生土器が出土した。

出土遺物（第285図、173～179）173は壺で、算盤玉状を呈する胴部最大径位置に断面三角形の低い突帯が巡る。器面が風化する。174～176は甕である。174は胴部が大きく張り出し、やや内傾する屈折口縁を有する。口縁下には断面台形状の突帯を1条貼付する。175は鋤形口縁のもので、口縁部をヨコナデ、体部外面を刷毛目、内面をナデによって調整する。176の底部には径約3cmの穿孔は焼成後に施される。器面が荒れるが、外面の下端には刷毛目が残る。177・178は高坏である。177は鋤形口縁の坏部で、器面の風化が進む。178は脚部で同様に器面が荒れるが、外面に赤色顔料が僅かに残る。179は復元口径30.0cm、器高12.0cmを測る蓋である。つまみの上部はほぼ平坦で、器壁が薄い。外面は刷毛目、内面は器面が風化するが、上位に指オサエが認められる。以上の出土遺物から弥生時代中期後半の遺構と考えられる。



第 289 図 2 面検出面出土遺物実測図 (205・206 は 1/2、他は 1/3)

⑤その他の遺構 (SX)

SX0802 (第 286 図、図版 115-4~6) 調査区南西端の P・Q-1 に位置する。径約 1.2 m、深さ 0.9 m を測る円形の掘り方の上位に弥生時代中期の甕棺の下半部を打ち欠いた上半部を倒置し (甕棺 a)、その外側に人為的に割った別個体の破片 (甕棺 b) を敷いて固定を図ったと考えられる特異な土坑である。また、前二者と別個体の甕棺上半部半周 (甕棺 c) が甕棺 a の上部を覆うような状態で確認できた。倒置した甕棺 a の内部から掘り方底面にかけては、甕棺 a~c の破片の他、弥生土器の壺、甕、ミニチュア土器等が出土した。しまりのない暗褐色土が流入していたことから、当初は空洞であったことが窺われる。また、甕棺 a の外側は地山ブロックを多量に含む人為的な埋め土で、甕棺 a の下端部から掘り方の壁面に立て掛けるように甕棺 b の破片が外面を上向きにして敷き詰められていた。これらの甕棺を復元したものが、180 (甕棺 b)、181 (甕棺 a)、182 (甕棺 c) で、順に灰色網掛け、赤色網掛け、青色網掛けで出土状況図に色分けを行った。掘り方内の下層には甕棺 c の口縁部片が認められ、出土状況と併せると、従来甕棺 c は半周の上半部を正置した状態で、甕棺 b の破片群と共に甕棺 a の外側に据えられていたものと推定される。また中層には主に甕棺 a・b の破片が出土しており、遺構の上部を削平された際に当時空洞を保っていた同層付近に落ち込んだものと思われる。なお、人骨は検出できなかった。

出土遺物 (第 286・287 図) 180~182 は須玖式の甕棺である。180 は甕棺 b を接合したもので、口縁部や胴部の一部を欠損するが、4/5 程度が遺存する。なお、底部はない。また、前述したように、N-1・2 に位置する SD0811 出土の胴部上半片が接合した。口径 76.9 cm、残存器高 106.5 cm を測り、

口縁部はやや外傾した「T」字状を呈する。口縁下には断面「コ」字形の突帯を1条貼付し、上面を強くヨコナデすることによって凹面をなす。砲弾形をなす胴部の下半には断面台形状の突帯を2条巡らせ、その位置から底部に向かってすぼむ。胴部外面に刷毛目と思われる工具端部の痕跡が残る他は、器面は全体に風化が進み、調整は不明である。181は下半を打ち欠いた甕棺aである。口縁端部の一部を欠損するが、上半のほぼ全周が遺存する。強く外傾する「T」字形の口唇部はヨコナデにより凹面を呈し、口縁下には断面台形状の低い突帯を配する。胴部の上半は直線的である。180同様に器面が荒れており、調整は不明である。口径71.8cm、残存器高51.5cmを測る。182は甕棺cを復元したもので、上述の通り、約半周のみが残る。また、遺存する胴部の高さが揃っており、下半部も打ち欠いたものと推測され、口径83.0cm、残存器高36.3cmを測る。やや外傾する口縁部は鋤形に近く、内唇部は鈍く先尖りとなる。口縁下には180と類似した突帯を付し、遺存する胴部上半はやや張りが認められる。器面が剥落する。183は中層と下層出土したものが接合した広口壺の胴部で、1/3程度が遺存する。胴部最大径位置に断面「コ」字形の突帯が2条巡り、ヨコナデにより両端部をつまみ出す。器面の大半が風化するが、突帯部分のヨコナデ調整が残る。184～188は甕である。184は下層出土で、樽形を呈する。逆「L」字状の口縁部から張りのある胴部、底径の広い底部が続く。口縁部はヨコナデ、体部外面は粗い刷毛目、内面はナデおよび指オサエを施す。口径26.4cm、器高27.8cmを測る。185～187は鋤形口縁を呈し、187を除き、口縁下に断面三角形の突帯を貼付する。いずれも器面が荒れる。185は下層、186・187は甕棺aの外側出土である。185は約1/3、他は小片からの復元である。188は中層出土の底部で、外面に刷毛目調整を施す。189は甕棺aの内部より出土した鋤形口縁の鉢で、器面が剥落する。190・191は器台である。190は精良な胎土を用い、器壁が薄い。器面が剥落するが、外面の一部に赤色顔料が僅かに残る。下層出土である。191は甕棺a内部より出土した筒形器台の一部を復元したもので、方形透かしの両面が遺存する。風化する器面の外面には赤色顔料が一部認められ、内面には指オサエが施される。192は蓋で、甕棺aの内部から出土した。外面は刷毛目調整を行い、内面にはシボリ痕が見られる。193は底面直上から出土したミニチュア土器の無頸壺の完形品である。外湾して納める口縁部には焼成前の2箇所穿孔が対面し、底部は平底である。口径4.0cm、器高4.3cmを測る。以上の出土遺物から弥生時代中期中頃の遺構に位置付けられる。

⑥ピット (SP) (第288図)

ここでは単独の2面ピット出土遺物を取り上げ、報告を行う。

194はP-1のSP1057出土の土師器甕で、球形の体部に外反する口縁が付き、器壁は薄い。器面が荒れるが、内面にはヘラ削りによるものと思われる砂粒の動きが認められる。なお、SP1057は後述のSP1056を切る。195は弥生土器の壺底部で、器面が著しく荒れるが、外面に板状工具による擦過の痕跡が残る。丸底で器壁が厚い。P-3のSP1005から出土した。196・197は弥生土器高坏である。196は鋤形口縁を呈する坏部で、SP1057に先行するP-1のSP1056から出土した。197はO-1に位置するSP1096出土で、脚部の中位に円形の透かしが3箇所認められる。器面が荒れるが、外面に刷毛目が残る。198はO-1で検出したSP0978から出土した木製品である。同ピットは1辺約0.5m、深さ0.5mを測り、SD0808に後出する。木製品は底面に横置き状態で据えられており、柱材と組み合わせる横木と考えられる。ほぼ中央部に欠き込みを削り出し、柱下部を組み合わせたとの想定されるが、柱材は確認できなかった。

⑦その他の遺物 (第289図)

最後に2面遺構検出時に出土した遺物の一部を報告する。以下の土器類は全て弥生土器である。

199・200は甕である。199は断面三角形を呈する口縁部を有し、胴部はやや張りがある。器面の剥落が進む。200の口縁部は「く」字形をなし、屈曲部の内外面に鈍い稜をもつ。口縁部外面はヨコナデ、他は刷毛目調整を施す。201はミニチュアの壺で、直立する短い口縁部に球形の胴部が付く。口縁部はナデ、胴部外面は刷毛目によって調整し、内面には指オサエが顕著に残る。202は脚台のみが遺存し、上部に鉢が付くものであろう。器面が荒れるが、外面の一部に刷毛目が認められる。203は小振りな底部を作り出すもので、鉢であろうか。外面はナデ、内面にはヘラ状の工具による調整が施される。204は器台の下半部である。外面は器面が風化するが、内面は指ナデ調整を行う。205・206は凝灰岩質の外湾刃石庖丁の折損品である。205は径0.6cmの穿孔を両面から2孔施す。206は刃こぼれが認められる。

3) 小結

ここでは、V区で検出した遺構や出土遺物の時期的な変遷をまとめておきたい。当初に述べてように今回設定した調査面は便宜的なものであるため、以下では遺構面に囚われずに記述を行う。

まず、時期的に最も遡る遺物として、弥生時代前期後半に位置付けられるもの(99・100)があるが、弥生時代中期から後期のピットへの混入遺物である。該期の明確な遺構は検出できていないが、可能性のあるものとして、SD0808を挙げておく。同遺構での出土遺物はないが、周辺に展開する中期から後期の遺物を覆土に全く含んでいないことから、既に埋没を終えていたことが推察できる。また、断面が「V」字形であることから弥生時代前期の環濠として消極的ながら提示しておきたい。

続いて、弥生時代中期中頃には、SB0812、SD0581・0809・0811、SX0802等の明確な遺構が出現しており、以降に継続する集落の端緒になる。この内、SX0802は甕棺を用いた特異な遺構であるが、出土状況から埋葬遺構としての位置付けは困難である。また、該期の墓地群は東側の月隈丘陵の尾根上もしくは支丘上に設けられることも否定の材料となろう。なお、甕棺aを井側へ転用したものとも考えたが、近接するSE0803と比して掘削深度が浅く、井戸としての機能についても疑問が残る。類例を待って検討を加えたい。

弥生時代中期後半代には、SK0574・0576・0806・0810、SE0803、SD0804等があり、出土遺物には筒形器台や袋状口縁壺、瓢形土器等の精製器種が認められる。また、遺構の前後関係からSD0557も該期に位置付けられよう。木製農具を含むSE0803は中期末に比定される井戸で、器種が豊富である。

弥生時代後期から終末期には出土遺物や切り合い関係から1面で検出した弧状を呈する細長い溝の大半が含まれるものと思われる。この内、SD0551・0577は後期中頃、SD0546は終末期の遺物が出土している。SD0509・0519は前二者を切り、後者に切られることから、この間の時期に掘削されていることが窺い知れる。また、SD0552は前二者のそれぞれと前後関係にあることから、ほぼ同時期であろう。これらの溝状遺構は、時期的に継続して掘削されているようであるが、配置に規則性は看取されない。各時期における排水の目的で任意に設置されたものであろうか。これらの溝以外にSK0548は後期中頃、SK0573は後期後半、SK0805は終末期に比定される。なお、ほぼ該期で集落の機能は失われ、後述する平安時代前期まで古墳時代以降の遺構は確認できていない。

時期を大きく隔てた最新の遺構として、9世紀中頃のSD0501がある。地形境界ともなる位置に掘削された同溝は、Ⅲ区の調査所見では古墳時代初頭に設置がなされた溝を踏襲して改修された水路であることが判明している。周辺沖積地の水田化に伴って灌漑用水路としての機能を果たしたものと想定される。

IV. 結語

第4次調査は久保園遺跡の北西端にあたり、月隈丘陵から西に派生する支丘の先端部から沖積地にかけて調査を行った。今回の調査では弥生時代初頭～古代の遺構が確認され、調査区によって2面または3面の調査を実施した。丘陵に近いⅢ・Ⅴ区と、沖積地のⅠ・Ⅱ・Ⅳ区とでは遺構・遺物が大きく異なり、集落の生活遺構と縁辺部の生産遺構の様相を把握することができた。ここでⅠ区～Ⅴ区の調査成果を総合して、まとめとしたい。巻頭図版に掲載しているように大きく上面と下面に分け、各区の全体図を合成した(第290・291図)。上面は概ね古墳時代から古代、下面は弥生時代を主体(一部古墳時代前期を含む)としているが、厳密に分離できているわけではなく、上面と下面で整合が取れていない部分もある。

1. 下面(第290図)

一部古墳時代前期のものを含むが、弥生時代を主体とする遺構群である。Ⅳ区とⅢ・Ⅴ区を区切る平安時代の水路(SD0501)が調査区を大きく横切り、これを境に北と南で様相が大きく異なる。丘陵側のⅢ区・Ⅴ区では黒褐色の遺物包含層が広がり、その包含層を切り込む遺構を1面、包含層を除去した黄褐色土で検出できる遺構を2面として報告している。Ⅲ区・Ⅴ区の報告でも述べられているように、1面と2面はやや便宜的な区分となっていることから、ここでは下面として一括して扱っている。ただし、1面は弥生時代後期から終末期、2面は弥生時代中期から後期に概ね区別することができ、当該期の集落が継続して営まれたことが分かる。

弥生時代中期には土坑、溝、井戸などの明確な遺構が見られ、以降に継続する集落の端緒になる。Ⅴ区南端では素掘りの井戸(SE0803)が検出され、井戸下位からは遺存状態の良好な三又鋤が出土した。また、特筆すべき遺構として、弥生時代中期の甕棺を利用した土坑(SX0802)が挙げられる。SE0803の西側で検出したもので、甕上半部を倒立させて埋置し、その周囲を土器片で固めている。甕棺を井側へ転用した可能性もあるが、現時点で機能は判断できない。弥生時代後期から終末期には、土坑と井戸の他に、掘立柱建物と弧状を呈する細い溝が多く見られるのが特徴的である。掘立柱建物はⅢ区北半とⅣ区の一部に集中して認められ、柱穴からは柱材や礎板が確認できたものが多い。礎板は、板を敷くだけのものや柱材と組み合わせるもの等があり、並べ方や組み方にバリエーションが認められる。周溝状の遺構はⅢ区・Ⅴ区の南端に集中し、重複が著しく、同心円状に二重に巡るものもある。これらは排水を目的としたものであろうか。また、弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器を大量に廃棄した土坑(SK0543・0571)も検出されている。

また、Ⅲ区南東端の最下面で検出された溝状遺構(SD0540)からは、突帯文土器や黒曜石製打製石鏃、環状石斧が出土しており注目される。第4次調査のなかで唯一弥生時代初頭に遡る遺構である。なお、Ⅴ区東端で検出したSD0808は出土遺物が皆無いため時期不明であるが、周囲の遺構の状況から勘案すると、弥生時代前期に遡る可能性がある。断面V字形で、丘陵の裾を取り囲むように巡っており、環濠の一部の可能性もある。

一方、沖積地側のⅠ区・Ⅱ区では弥生時代中期から後期の溝状遺構がほとんどで、柱穴や土坑などの生活遺構は認められず、湿地のような状態であったと思われる。溝のひとつには複数の部材が出土したことから貯木遺構(SD0067)と思われるものもある。また、Ⅰ区を中心として弥生時代中期の祭祀土器集中部が見られる。丹塗りの無頸壺が多く、水辺の祭祀に用いたものであろうか。Ⅳ区北端の溝(SD0752)からはイヌ一頭分の骨が良好な状態で出土した。

2. 上面 (第 291 図)

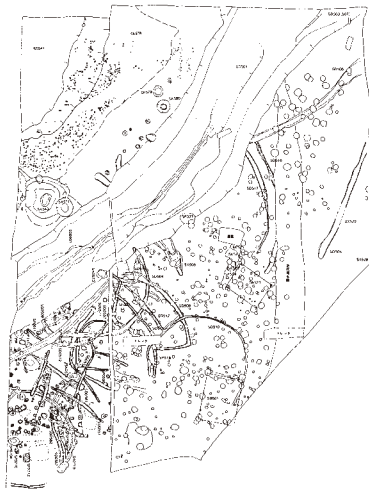
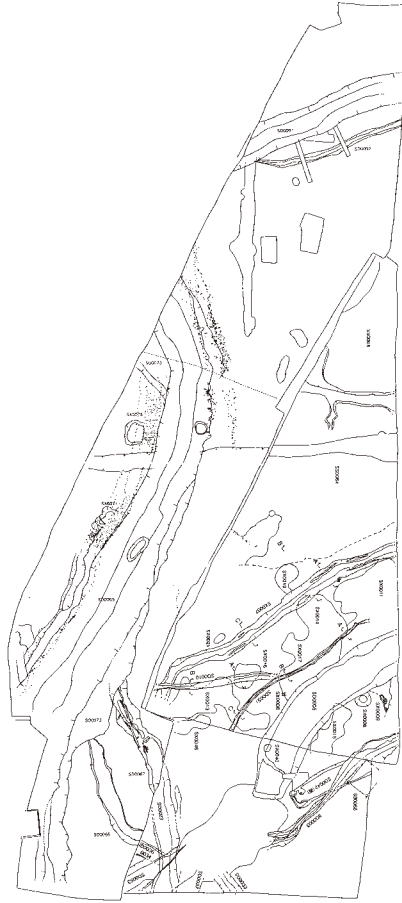
古墳時代から古代の遺構が主体である。下面と同様、SD0501 を境に様相が異なる。Ⅰ区及びⅡ区では 1 面と 2 面が古墳時代から古代に相当するが、時期差や分層が不明瞭な部分もあるため、ここでは上面として一括して扱っている。SD0501 より北側は水田や流路で、Ⅰ区では古代条里方向に合致する畦畔や粗砂に覆われた足跡が良好に検出された。また、旧河川から続く水路や溜井を検出し、水田までの一連の水利施設と思われるものを確認した。Ⅱ区では水田区画や畦などは明確に把握できなかったが、多量の護岸杭を伴う流路 (SD0065) を検出し、崩れた土堤を補修した部分も見られた。流路の杭は一様に打たれているわけではなく、湾曲部分や補修箇所集中的に見られる。また、補修箇所には樹皮のようなものを敷き込んで構築する工法が見られた。流路からは大量の弥生土器・土師器、少量の須恵器とともに、木製品や旧石器も出土している。Ⅰ区・Ⅱ区の北半では古墳時代前期の水田面と畦も確認されている。Ⅳ区でも古代水田面と流路が検出され、時期は不明確であるが、流路への昇降施設と思われる階段状遺構 (SX0766) が確認された。

一方、SD0501 より南側のⅢ区・Ⅴ区では、弥生土器を大量に含む古代の整地層が検出されたものの、遺構は認められない。丘陵に近いⅢ区では整地層は厚いが、Ⅴ区では次第に不明瞭となっている。第 4 次調査区を斜断する SD0501 はこの古代水田と整地層をともに切っており、9 世紀頃の灌漑用水路と思われる。

第 4 次調査の結果、周辺では弥生時代中期から集落化が始まったことが判明し、また、古墳時代から古代の水田利用の変遷を追うことができた。調査区内では古墳時代以降の生活遺構は確認されなかったものの、水田は古代まで継続して営まれていることから、付近の丘陵部に集落が存在するものと思われる。久保園遺跡の中心は東側の月隈丘陵にあるが、今回の調査で遺跡の西端の状況、すなわち丘陵裾に広がる集落と低地の水田の状況を把握することができた。月隈丘陵の端部は福岡空港敷地内まで張り出していることから、空港内は水田遺構だけでなく生活関連遺構の存在にも注意を払う必要がある。久保園遺跡はまだ調査例が少なく、そして空港敷地内という特殊な条件下にあるが、今後の調査で遺跡の様相が明らかになることを期待したい。



第 290 図 第 4 次調査下面全体図 (1/800)



第 291 図 第 4 次調査上面全体図 (1/800)

付編 1 久保園遺跡第 4 次調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

久保園遺跡第 4 次調査区は、月隈丘陵の西端、丘陵部と低地部の境に立地し、標高約 5 m を測る。本報告では、弥生時代や古墳時代、中世とされる溝跡の堆積環境や周辺の高木生について検討するために、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。また、木製品・杭・柱材等の樹種を明らかにするための樹種同定、植物利用状況を検討するための種実同定を実施する。なお、本報告では調査区区割りは旧小区 A～F 区を用いており、新小区との対応は、A・B 区→Ⅰ区、E・F 区→Ⅱ区、D 区→Ⅳ区となる。

Ⅰ. 溝跡の堆積環境と周辺の高木生

1. 試料

A 区の溝跡 4 条と B 区の溝跡 1 条から採取された土壌試料 5 点を珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析に用いる。すなわち、A 区では 8 世紀前半とされる SD0005 上層、古墳時代前期とされる SD0007 下層、弥生時代後期中葉とされる SD0005 下層、弥生時代中期前葉とされる SD0024、B 区では弥生時代中期後半とされる B 区 SD0042 である。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で 7 g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4 時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後にプレウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する。化石の少ない試料はこの限りではない。種の同定は原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991 a, 1991 b）、渡辺ほか（2005）、小林ほか（2006）などを参照し、分類基準は Round, Crawford & Mann（1990）に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は柳沢（2000）に従う。

同定された種類を中心類（Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は更に無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms; 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae）に分ける。また有縦溝類は単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性については Vos & de Wolf（1993）を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は Lowe（1974）に従って真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に類別する。また貧塩性種については更に細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。産出個体数 100 個体以上の試料では、産出率 2.0% 以上の種類について主要珪藻化石群集の層位分布図を作成するほか、淡水生種の生態性についても 100 個体以上の試料について図示する。産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。

堆積環境の解析にあたり、淡水生種(貧塩性種)については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については渡辺ほか(2005)の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料約 10 g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重 2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス(無水酢酸 9:濃硫酸 1 の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出する。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1 g あたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物 1 g あたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各種類の含量は 10 の位で四捨五入し(100 単位に丸める)する。合計は各種類の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表 1、図 1 に示す。珪藻化石の産出頻度は、A 区 SD0007 下層が他の試料と比較して少ないが、それ以外の 4 点は珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は試料によって異なるが、40~70%の範囲である。産出分類群数は、合計で 44 属 154 分類群である。以下に、珪藻化石群集の特徴を記す。

B 区 SD0042 と A 区 SD0024 は、珪藻化石群集が近似している。完形殻の出現率(以下、完形率と言う)は、50~60%である。産出種を塩分濃度に対するカテゴリーで類別すると淡水域に生育する水生珪藻が優占し、全体の約 70%を占める。これに次いで、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好气的環境に耐性のある陸生珪藻が約 20%産出する。淡水生種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性)は貧塩不定性種、好+真アルカリ性種、流水不定性種と好+真流水性種が優占あるいは多産することを特徴とする。主要種は、流水性で中~下流性河川指標種の *Planothidium lanceolatum* が 5~15%、流水不定性で付着性の *Navicula trivialis* が 10~20%と多産し、流水不定性で付着性の *Gomphonema parvulum*などを伴う。陸生珪藻では、耐乾性の高い陸生珪藻 A

表 1. 溝跡の珪藻分析結果 (1)

分類群	生態性			環境 指標種	A 区				B 区
	塩分	pH	流水		SD0005 上層	SD0007 上層	SD0005 下層	SD0024	SD0042
Bacillariophyta (珪藻植物門)									
Centric Diatoms (中心型珪藻類)									
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	1	-	-	2	-
<i>Aulacoseira crassipunctata</i> Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	1	-	-	-
<i>Aulacoseira italica</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	ind	l-ph	U	-	-	-	1	-
<i>Melosira varians</i> Agardh	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U,	-	-	1	1	-
<i>Orthoseira roeseana</i> (Rabh.) O' Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-	-	-
Araphid Pennate Diatoms (無縦溝羽状珪藻類)									
Araphidineae (無縦溝類)									
<i>Catombas obtusa</i> (Pantocsek) Snoeijs	Meh				-	-	-	-	3
<i>Ctenophora pulchella</i> (Ralfs ex Kuetz.) Williams & Round	Meh				-	-	-	-	1
<i>Pseudostaurosira brevistriata</i> (Grun.) Williams & Round	Ogh-hil	al-il	l-ph	U	2	-	-	-	-
<i>Staurosira construens</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	-	-	-	-
<i>Staurosira venter</i> (Ehren.) H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	2	1	-	1	-
<i>Staurosirella pinnata</i> (Ehr.) Williams & Round	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	-	-	-	-
<i>Staurosirella leptostauron</i> (Ehr.) Williams & Round	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	3	-
<i>Synedrella parasitica</i> (W.Smith) Round	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Ulnaria ulna</i> (Nitzsch) Compere	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	1
Raphid Pennate Diatoms (有縦溝羽状珪藻類)									
Monoraphid Pennate Diatoms (単縦溝羽状珪藻類)									
<i>Achnanthes inflata</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	1	-	-	-
<i>Lemnicola hungarica</i> (Grunow) Round & Basson	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	71	1	8
<i>Planothidium frequentissimum</i> (Lange-B.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	6	-	1	-	1
<i>Planothidium lanceolatum</i> (Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	12	-	-	12	33
<i>Planothidium rostratum</i> (Oestrup) Round et Bukhtiyarova	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	-	-	-	-
<i>Cocconeis disculus</i> (Schumann) Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	1	-	-	1
<i>Cocconeis euglypta</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	1	-	-	-
<i>Cocconeis lineata</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	1	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	3	-	-	2
Biraphid Pennate Diatoms (双縦溝羽状珪藻類)									
<i>Amphora fontinalis</i> Hustedt	Ogh-Meh	al-il	ind		1	-	-	-	-
<i>Amphora copulata</i> (Kuetz.) Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	12	1	-	9	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	32	-	10	3	4
<i>Amphora normanii</i> Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	1	1
<i>Anomoeoneis sphaerophora</i> (Kuetz.) Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind		-	-	-	1	-
<i>Cymbella tumida</i> (Breb.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	-	-	1
<i>Encyonema lange-bertalotii</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	-	-
<i>Encyonema mesianoy</i> (Kholnoky) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	1	-	-
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	1	-	-
<i>Placoneis clementis</i> (Grun.) E.J.Cox	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-	-	-
<i>Placoneis elginensis</i> (Greg.) E.J.Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	1	-	1	-	-
<i>Placoneis elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krasske) H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	4	-	-	1	-
<i>Placoneis palaelginensis</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	-	-	1
<i>Gomphonema rhombica</i> (Fricke) Merino et al.	Ogh-ind	ind	r-bi	J	-	-	-	1	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	1	-	-	3
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	4	-	-	1	2
<i>Gomphonema augur</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	1
<i>Gomphonema clevei</i> Fricke	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	-	-	-	4
<i>Gomphonema contraturis</i> Lange-B. & Reichardt	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	2	4
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	-	-	3
<i>Gomphonema lagenula</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	r-ph	S	-	-	-	-	1
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	6	2	10	12	19
<i>Gomphonema pseudoaugur</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	1	3
<i>Gomphonema pumilum</i> var. <i>rigidum</i> E.Reichardt et Lange-B.	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	1	5
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	1	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	2	21	1	1	1
<i>Diploneis parma</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-
<i>Geissleria decussis</i> (Oestrup) Lange-B. et Metzeltin	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	2	-	-	-	-
<i>Hippodonta capitata</i> (Ehr.) Lange-B., Metzeltin et Witkowski	Ogh-Meh	al-il	r-ph	U	1	-	-	2	1
<i>Navicula capitata</i> var. <i>elliptica</i> (Schulz) Cl. Eu.	Ogh-Meh	al-il	ind		1	-	-	1	-
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	6	-	10	2	-
<i>Navicula ariensis</i> Okuno	Ogh-ind	ac-il	ind		-	1	-	-	-
<i>Navicula arvensis</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	U	1	-	-	-	-
<i>Navicula bryophila</i> J.B.Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	RI,U	1	-	-	-	-
<i>Navicula cryptocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Navicula jaagii</i> Meister	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1	-
<i>Navicula kotschyi</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		11	-	3	-	-
<i>Navicula lapidosa</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	-	1
<i>Navicula menisculus</i> Schumann	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-

表 1. 溝跡の珪藻分析結果 (2)

分類群	生態性			環境 指標種	A 区				B 区
	塩分	pH	流水		SD0005 上層	SD0007 上層	SD0005 下層	SD0024	SD0042
<i>Navicula notanda</i> Pantocsek	Ogh-ind	al-il	ind		2	-	-	-	-
<i>Navicula oppugnata</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	8	1
<i>Navicula pseudolanceolata</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-	-	-
<i>Navicula rhynchocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	1
<i>Navicula rostellata</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	1	-	1	2	-
<i>Navicula subminuscula</i> Manguin	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	1	-	-
<i>Navicula symmetrica</i> Patrick	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	2	-	1
<i>Navicula tenelloides</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	r-ph	J,U,RI	1	-	-	-	-
<i>Navicula trivialis</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	17	-	9	41	19
<i>Navicula viridula</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1	-	-	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-
<i>Plagiotropis lepidoptera</i> var. <i>proboscidea</i> (Cleve) Reim.	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	1	-
<i>Gyrosigma procerum</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	4	5
<i>Gyrosigma scalproides</i> (Rabh.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	7	-	3	7	2
<i>Gyrosigma</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	1
<i>Craticula ambigua</i> (Ehr.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	1	-	-
<i>Craticula cuspidata</i> (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	2	-
<i>Craticula halophila</i> (Gran. ex V.Heurck) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	-	-
<i>Craticula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	2	-
<i>Stauroneis lauenburgiana</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-
<i>Stauroneis nobilis</i> Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	1	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U	1	-	-	-	1
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	1
<i>Stauroneis smithii</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	-	1	-	-
<i>Stauroneis tenera</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-	1	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	1	-	2
<i>Diadesmis biceps</i> Arnott ex Grunow in Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	9	4	-	2	3
<i>Diadesmis brekkaensis</i> (J.B.Petersen) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	-	-
<i>Diadesmis confervacea</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RBS	1	-	6	2	6
<i>Diadesmis contenta</i> (Grun. ex Van Heurck) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	3	-	2	-	-
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RAS	9	14	13	10	7
<i>Neidium affine</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ind	l-bi		-	-	-	1	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	ind	RA	1	-	-	-	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	-	-	2
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2	-	1	-
<i>Caloneis aerophila</i> Bock	Ogh-ind	ac-bi	ind	RA,S	1	-	-	-	1
<i>Caloneis angustivalva</i> Boye P.	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1	-	-	1
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	1	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	5	1	1	-
<i>Caloneis minuta</i> (Grunow) Ohtsuka et Fujita	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	1	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		2	-	-	3	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> var. <i>turgidula</i> Grunow ex Cleve	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	2	1	-	1
<i>Pinnularia divergens</i> W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	1
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	-	-	-	1	1
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.) W.Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1	-	1	-	1
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	-	1	1	2
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia ornata</i> H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	1
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	1	1
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1	1	-	-
<i>Pinnularia Schroederii</i> (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	8	-	4	1
<i>Pinnularia silvatica</i> Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RBS	-	-	-	1	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> var. <i>paucistriata</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	U	4	-	-	1	-
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	1	-	2	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	4	-	-	-
<i>Sellaphora laevissima</i> (Kuetz.) Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	1	-
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	3	-	-	2	1
<i>Sellaphora seminulum</i> (Grun.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RB,S	1	-	-	-	-
管縦溝類									
<i>Bacillaria paxillifer</i> (O.F.Mull.) Hendey	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	-	-	-	1	2
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	5	10	31	16	9
<i>Nitzschia sigma</i> (Kuetz.) W.Smith	Euh-Meh			E2	-	-	-	1	1
<i>Nitzschia lorenziana</i> Grunow	Meh			E2	1	-	-	-	-
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	-	-	1
<i>Nitzschia inconspicua</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	1	-	2	1	-
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.) W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	-	-	1	1	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	3	-	-

表 1. 溝跡の珪藻分析結果 (3)

分類群	生態性			環境指標種	A 区				B 区
	塩分	pH	流水		SD0005 上層	SD0007 上層	SD0005 下層	SD0024	SD0042
<i>Nitzschia angustata</i> (W.Smith) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	1
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-	-	-	-
<i>Nitzschia linearis</i> (W.Smith) W.Smith	Ogh-ind	al-bi	r-bi	U	3	-	-	3	3
<i>Nitzschia nana</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	1	-
<i>Nitzschia tubicola</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	1
<i>Nitzschia umbonata</i> (Ehr.) Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	1	-
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	1
<i>Tryblionella coarctata</i> (Grun.in Cleve & Grun.) D.G.Mann	Euh-Meh				1	-	-	-	-
<i>Tryblionella calida</i> (Grunow) D.G.Mann	Meh				-	-	-	1	-
<i>Tryblionella constricta</i> W.Gregory	Meh				-	-	-	2	-
<i>Tryblionella hungarica</i> (Grunow) D.G.Mann	Meh			E1	-	-	-	1	1
<i>Tryblionella levidensis</i> W.Smith	Meh			S	2	-	1	5	2
<i>Tryblionella plana</i> (W.Sm.) Pelletan	Meh				-	-	-	1	-
<i>Tryblionella salinarum</i> (Grunow) Pelletan	Meh			U	-	-	-	1	-
<i>Tryblionella littralis</i> (Grunow) D.G.Mann	Meh				-	-	-	1	-
<i>Tryblionella debilis</i> Arnott	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	2	-	1	-	-
<i>Epithemia adnata</i> (Kuetz.) Brebisson	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	-	-	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	1	3	1	-	2
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.) O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	1
翼管縦溝類									
<i>Cymatopleura solea</i> (Breb.) W.Smith	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	1	3
<i>Surirella minuta</i> Brebisson	Ogh-ind	ind	r-ph	U	1	-	1	1	1
<i>Surirella tenera</i> Gregory	Ogh-hob	al-il	l-ph	U	-	-	1	-	1
<i>Surirella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-
短縦溝類									
<i>Eunotia arcus</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ind	ind	U	-	-	-	1	-
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-bi	ind	U	-	-	1	-	3
<i>Eunotia minor</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	2	-	1	1	6
<i>Eunotia monodon</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	-	-	1
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1	-	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	-	-	-	1
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> (Ehren.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	10	-	-	-
海水生種					0	0	0	0	0
海水～汽水生種					1	0	0	1	1
汽水生種					3	0	1	12	7
淡水～汽水生種					11	3	14	9	6
淡水生種					203	104	188	186	196
珪藻化石総数					218	107	203	208	210

凡例

HR: 塩分濃度に対する適応性	pH: 水素イオン濃度に対する適応性	C.R: 流水に対する適応性
Euh-Meh: 海水生種～汽水生種	al-bi: 真アルカリ性種	l-bi: 真止水性種
Meh: 汽水生種	al-il: 好アルカリ性種	l-ph: 好止水性種
Ogh-Meh: 淡水～汽水生種	ind: pH 不定性種	ind: 流水不定性種
Ogh-hil: 貧塩好塩性種	ac-il: 好酸性種	r-ph: 好流水性種
Ogh-ind: 貧塩不定性種	ac-bi: 真酸性種	r-bi: 真流水性種
Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種	unk: pH 不明種	unk: 流水不明種
Ogh-unk: 貧塩不明種		

環境指標種群

E1: 海水泥質干潟指標種, E2: 汽水泥質干潟指標種 (以上は小杉, 1988)

J: 上流性河川指標種, K: 中～下流性河川指標種, N: 湖沼沼沢湿地指標種, O: 沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)

S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上は Asai and Watanabe, 1995)

R: 陸生珪藻 (RA:A 群, RB:B 群, RI: 未区分, 伊藤・堀内, 1991)

群の *Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica* などに伴う。

A 区 SD0005 下層は完形率が約 70% で、化石の保存状態が良い。水生珪藻が約 60%、陸生珪藻が約 30%、淡水～汽水性種が約 10% 産出する。淡水生種の生態性は貧塩不定性種、好+真アルカリ性種、流水不定性種の優占が特徴である。流水不定性で付着性の *Lemnicola hungarica* が約 35% と優占し、淡水～汽水性で付着性の *Navicula veneta*、流水不定性で付着性の *Gomphonema parvulum*、*Navicula trivialis* などに伴う。陸生珪藻では陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys* が約 15% と多産し、同じく A 群の *Luticola mutica*、*Amphora montana* などに伴う。

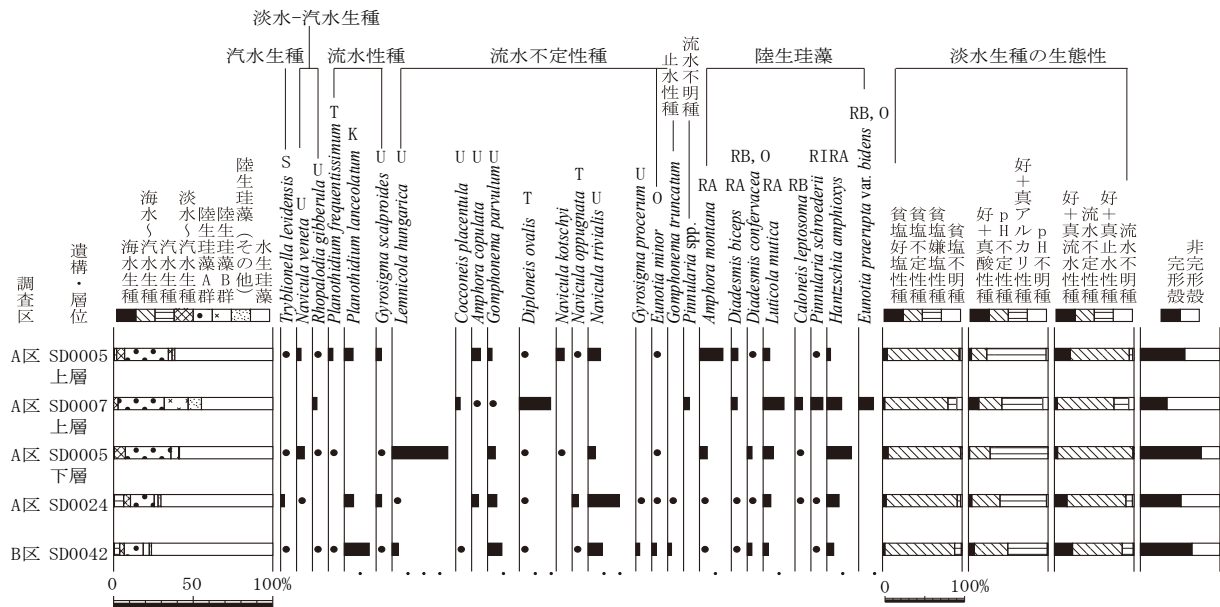


図1. 溝跡の主要珪藻化石群集

海水～汽水～淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満の産出を示す。
 (環境指標種, K: 中～下流性河川指標種, O: 沼沢湿地付着生種, S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種, RA: 陸生珪藻A群, RB: 陸生珪藻B群, RI: 未区分陸生珪藻)

A区SD0007下層は、完形率が約40%で化石の保存状態が悪い。陸生珪藻の産出割合が、水生珪藻を上回る。陸生珪藻A群の*Luticola mutica*、*Hantzschia amphioxys*、水域にも乾いた環境にも生育する陸生珪藻B群の*Eunotia praerupta* var. *bidens*、未区分陸生珪藻の*Pinnularia schroederii*であり、10%前後の産出である。水生珪藻では、流水不定性で付着性の*Diploneis ovalis*が約20%と多産する。

A区SD0005上層は水生珪藻が約60%、陸生珪藻が約30%、淡水～汽水性種が約10%産出する。淡水生種の生態性は、貧塩不定性種、好+真アルカリ性種、流水不定性種と好+真流水性種が優占または多産することが特徴である。陸生珪藻A群の*Amphora montana*が約15%、流水不定性で付着性の*Navicula trivialis*が約10%と多産する。これに付随して、流水性で中～下流性河川指標種の*Planothidium lanceolatum*、好流水性の*Gyrosigma scalproides*、流水不定性種の*Amphora copulata*、*Navicula kotschy*、陸生珪藻A群の*Diadesmis biceps*、*Luticola mutica*などを伴う。

(2) 花粉分析

結果を表2、図2に示す。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめる。全体的に花粉化石の産出状況は良好であるが、A区SD0007下層は定量解析を行えるだけの個体数を得ることが出来なかった。

B区SD0042とA区SD0024は花粉群集組成が類似しており、木本花粉の割合が高い。木本花粉を見ると、コナラ属コナラ亜属が最も多く産出し、マツ属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属-ムクノキ属も比較的多く認められる。その他では、スギ属、シイ属、ニレ属-ケヤキ属、イボタノキ属などを伴うほか、栽培の可能性のあるサクラ属、カキノキ属も検出される。草本花粉ではイネ科が多く産出し、カヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属などを伴う。わずかではあるが、水生植物のミズアオイ属も認められる。

A区SD0005下層とA区SD0005上層は、B区SD0042やA区SD0024で多産していたコナラ亜属

表2. 溝跡の花粉分析結果 (1)

分類群	調査区 遺構・層位	A区				B区
		SD0005 上層	SD0007 上層	SD0005 下層	SD0024	SD0042
木本花粉						
マキ属		2	-	2	2	2
モミ属		3	2	12	2	4
ツガ属		4	2	1	1	2
トウヒ属		-	-	-	1	-
マツ属複維管束亜属		23	-	34	27	37
マツ属(不明)		72	10	82	26	29
スギ属		2	1	13	4	6
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		-	-	1	-	-
ヤマモモ属		2	-	-	3	2
サワグルミ属		-	-	-	1	-
クマシデ属-アサダ属		3	-	1	4	2
カバノキ属		-	-	-	1	1
ハンノキ属		-	1	-	1	1
ブナ属		-	-	1	1	1
コナラ属コナラ亜属		13	5	8	79	79
コナラ属アカガシ亜属		33	2	18	51	31
クリ属		1	2	1	2	1
シイ属		5	-	2	7	5
ニレ属-ケヤキ属		-	-	1	4	2
エノキ属-ムクノキ属		4	-	19	18	27
イスノキ属		1	-	-	-	-
サクラ属		5	-	2	-	1
コクサギ属		3	-	-	-	1
キハダ属		1	-	1	5	1
アカメガシワ属		-	-	-	1	-
ウルシ属		-	-	1	1	-
モチノキ属		2	-	-	1	-
ニシキギ属		-	-	-	1	-
ブドウ属		-	-	1	-	-
ツタ属		26	-	-	2	1
ノブドウ属		18	-	3	2	1
グミ属		9	1	1	1	1
ウコギ科		7	-	4	2	3
ツツジ科		1	1	-	-	-
カキノキ属		-	-	1	4	1
エゴノキ属		-	-	1	-	-
イボタノキ属		1	-	2	2	5
トネリコ属		1	-	-	1	-
スイカズラ属		3	-	-	2	2
草本花粉						
ガマ属		-	1	-	-	-
サジオモダカ属		1	-	-	-	-
イネ科		77	37	174	111	56
カヤツリグサ科		7	19	3	7	-
ミズアオイ属		1	-	1	1	-
クワ科		-	-	18	8	7
ギシギシ属		1	-	-	-	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節		6	-	2	5	4
アカザ科-ヒユ科		1	-	1	3	1
ナデシコ科		1	-	-	-	1
キンボウゲ属		1	-	-	-	-
キンボウゲ科		2	-	1	-	-
アブラナ科		2	-	-	1	1
ワレモコウ属		1	-	-	-	-
バラ科		7	-	4	2	1
マメ科		1	-	-	-	-
セリ科		1	-	-	1	-
オオバコ属		-	-	1	-	-

表2. 溝跡の花粉分析結果 (2)

分類群	調査区 遺構・層位	A区				B区
		SD0005 上層	SD0007 上層	SD0005 下層	SD0024	SD0042
ゴキヅル属		-	-	1	-	-
ヨモギ属		2	-	7	14	2
オナモミ属		-	-	4	3	-
キク亜科		1	4	3	-	2
タンポポ亜科		-	1	-	3	2
不明花粉		22	4	14	9	3
シダ類孢子						
ヒカゲノカズラ属		-	-	-	-	1
デンジソウ属		1	-	-	-	-
ゼンマイ属		-	-	-	1	1
イノモトソウ属		1	2	4	-	2
ミズワラビ属		1	-	-	-	-
他のシダ類孢子		91	40	112	41	75
合計						
木本花粉		245	27	213	260	249
草本花粉		113	62	220	159	78
不明花粉		22	4	14	9	3
シダ類孢子		94	42	116	42	79
総計 (不明を除く)		452	131	549	461	406

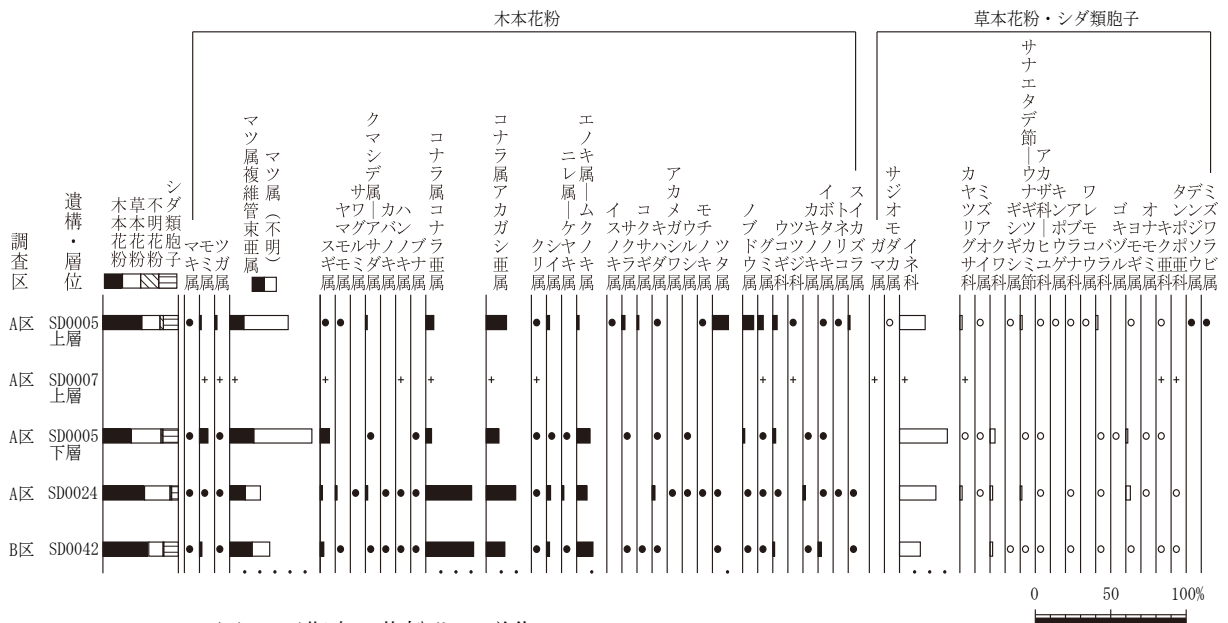


図2. 溝跡の花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

の割合が低くなり、マツ属が多産する。その他ではモミ属、スギ属、アカガシ亜属、エノキ属-ムクノキ属、ツタ属、ノブドウ属、グミ属、ウコギ科などを伴い、サクラ属、カキノキ属も認められる。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、バラ科、ヨモギ属などを伴う。その他では、サジオモダカ属、ミズアオイ属、ゴキヅル属、デンジソウ属、ミズワラビ属などの、水湿地生植物に由来する花粉・孢子も産出する。

花粉化石の産出が少なかったA区SD0007下層を見ると、木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、クリ属など、草本花粉ではガマ属、イネ科、カヤツリグサ科、キク亜科、タンポポ亜科が、各々わずかに検出されるのみである。

なお計数していないが、各溝のイネ科には栽培植物であるイネ属もわずかに含まれる。

表 3. 溝跡の植物珪酸体含量 (個/g)

分類群	調査区 遺構・層位	A 区			B 区
		SD0005 上層	SD0007 上層	SD0005 下層	SD0024 SD0042
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属		900	500	4,400	1,300
タケ亜科ネザサ節		2,400	1,200	500	600
タケ亜科		10,400	8,900	4,500	11,600
ヨシ属		700	1,000	200	700
ウシクサ族ススキ属		900	2,500	500	900
イチゴツナギ亜科		1,100	1,300	1,700	400
不明キビ型		6,800	8,700	5,400	3,700
不明ヒゲシバ型		700	1,900	800	600
不明ダンチク型		1,300	2,500	1,300	4,600
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属		4,300	1,900	12,100	400
タケ亜科ネザサ節		1,000	500	1,000	1,000
タケ亜科		2,400	3,900	3,900	1,600
ヨシ属		100	1,300	500	700
ウシクサ族		1,000	500	1,200	700
不明		8,000	6,900	7,400	6,100
合計					
イネ科葉部短細胞珪酸体		25,200	28,400	19,300	24,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体		16,800	15,000	26,000	10,700
総計		42,000	43,400	45,200	35,100
珪化組織片					
イネ属穎珪酸体		**	**	***	**
イネ属短細胞列		*	*	**	*
イネ属機動細胞列		-	-	-	*
樹木起源珪酸体					
第Ⅲグループ		*	-	*	-
第Ⅳグループ		*	*	*	-

含量は、10の位で丸めている（100単位にする）
 合計は各分類群の丸めない数字を合計した後丸めている
 -：未検出，*：検出，**：多い，***：非常に多い

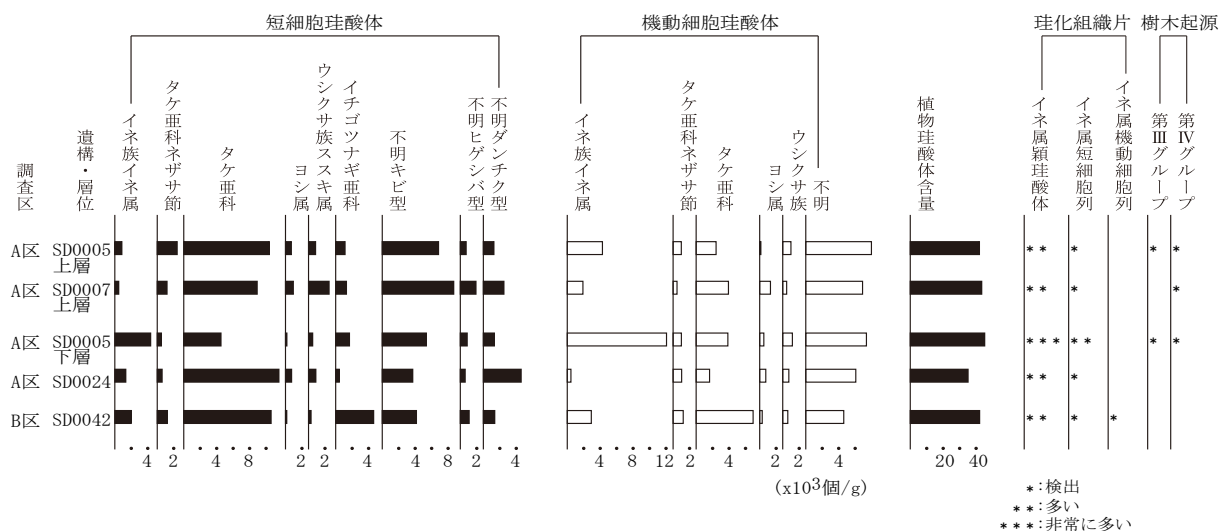


図 3. 溝跡の植物珪酸体含量

堆積物 1 g あたりに換算した個数を示す。また、珪化組織片と樹木起源珪酸体の産状を*で示す。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表 3、図 3 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

B区SD0042とA区SD0024では、産状が異なる。B区SD0042では、ネザサ節を含むタケ亜科と

共にイチゴツナギ亜科の産出も目立つ。また栽培植物であるイネ属も産出する。その含量は、短細胞珪酸体が約 2,000 個/g、機動細胞珪酸体は約 2,900 個/gである。イネ属には籾(穎)に形成される穎珪酸体、葉部に形成される短細胞列や機動細胞列も見られる。一方、A区SD0024ではネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが見られる。イネ属も産出し、穎珪酸体、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。このうち、短細胞珪酸体の含量は約 1,300 個/g、機動細胞珪酸体は約 400 個/gであり、B区SD0042よりも少ない。また、イネ属の短細胞列も見られる。

A区SD0005下層では、イネ属の産出が目立つ。短細胞珪酸体が約 4,400 個/g、機動細胞珪酸体は約 12,000 個/gであり、穎珪酸体の産出も目立つ。この他、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが見られる。またイネ科起源の他に、樹木起源珪酸体の第Ⅲグループや第Ⅳグループ(近藤・ピアスン, 1981)もわずかに検出される。

A区SD0007下層ではネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、樹木起源珪酸体の第Ⅳグループなどが見られる。イネ属も検出され、短細胞珪酸体が約 500 個/g、機動細胞珪酸体は約 1,900 個/gである。また穎珪酸体や短細胞列も見られる。

A区SD0005上層でもネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、樹木起源珪酸体の第Ⅲグループや第Ⅳグループなどが見られる。またイネ属も検出され、その含量は短細胞珪酸体が約 900 個/g、機動細胞珪酸体が約 4,300 個/gである。穎珪酸体や短細胞列も見られる。

4. 考察

(1) 溝の堆積環境

弥生時代とされる溝跡のうち、中期後半とされるB区SD0042や中期前葉とされるA区SD0024は同様な珪藻化石群集であり、同様な埋積環境と考えられる。いずれも流水不定性種が多産し、中～下流性河川指標種を含む好+真流水性種が比較的多く産出したことが特徴である。発掘調査所見によれば、A区SD0024では埋積物中に幅の狭い黄色砂が挟在し、層相からも流水の影響が想定される。これらの点を考慮すれば、今回得られた群集は溝内に流水があったことを反映すると考えられる。なお多産した*Navicula trivialis*は電解質がやや多い富栄養水域に生育する種で、高-中腐水域まで耐性がある(Lange-Bertalot, 2001)。また伴出種の中にも中腐水域を好む広域適応性種が多かった。そのため、溝内は中腐水域の影響を受けていたと考えられる。

後期中葉のA区SD0005下層では、流水不定性種が優占した。特に優占種の*Lemnicola hungarica*は付着性で中汚濁耐性種(小林ほか, 2006)とされ、池や流れの弱い川などで浮葉植物の葉に付着して生育することから、溝内に水流があった可能性がある。また陸生珪藻も比較的多かった点から、水流が無くなり内部が乾いた時に陸生珪藻が生育したことや溝内に周囲の乾いた場所から土壌が流入したことなどが想定される。

古墳時代前期とされるA区SD0007下層では陸生珪藻が水生珪藻を上回って多産しており、耐乾性の高い陸生珪藻A群とされるものが多かった。なお、水生珪藻として多産した*Diploneis ovalis*は湿気が多い所や一時乾いた場所にも生育する(Vesela and Johansen, 2009; 伊藤・堀内, 1991)。これより、本種は陸生珪藻として好气的環境に成育した種と判断される。そのため、珪藻化石群集の中で陸生珪藻が約80%を占めたと考えられる。現在の陸生珪藻の分布調査(伊藤・堀内, 1991)に基づけば、陸生珪藻の占める割合が70%以上であれば、陸上の好气的環境で堆積した可能性が高い。した

がって、下層が堆積した頃の溝内は、普段は水の無い状態であったと考えられる。

8世紀前半とされるA区SD0005上層では流水不定性種が優占し、流水指標種を含む好+真流水性種が多産した。なお止水性種が極めて少なかったことから、流水不定性種は流水域に生育した種群と判断される。埋積物中に黄灰色の細粒～中粒砂を含むことも考慮すれば、溝内に流水があったと考えられる。その水質は広域適応生種の割合が高かったことから、幾分か汚濁した中腐水域の影響を受けていたと考えられる。

(2) 溝周辺の植生

溝の花粉分析結果をみると、草本植生は各時期でイネ科が優占しており、その中にはネザサ節をはじめとして、ススキ属やイチゴツナギ亜科などが含まれていたと推定される。植物珪酸体の産状からは弥生時代中期後半に、タケ亜科とともにイチゴツナギ亜科が多かった可能性がある。この他にカヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、バラ科、ヨモギ属なども生育していたと思われる。

また後述するように調査区内から出土した種実遺体にも、つる性草本のカナムグラ、ハスノハカズラ、スズメウリ、オオカラスウリ近似種などが検出される。これらの分類群は開けた明るい場所を好む種を含むことから、周辺にはこれらの草本類が生育していたと推測される。

さらに水湿地生植物として、ガマ属やサジオモダカ属、ミズアオイ属、ゴキヅル属、デンジソウ属、ミズワラビ属などの花粉・孢子、ヨシ属の植物珪酸体、ウキヤガラやホタルイ属などの種実遺体が認められた。そのため、当時の溝内やその周囲、集水域周辺の水湿地に、これらの水湿地植物が生育していたと考えられる。

ところで、各溝からはイネ属の植物珪酸体が検出され、イネ属花粉もわずかに見られた。水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当り5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている(杉山, 2000)。8世紀前半とされるA区SD0005上層での機動細胞珪酸体の含量は約4,300個/g、弥生時代後期中葉とされるA区SD0005下層では約12,000個/g、弥生時代中期後半とされるB区SD0042では約2,900個/gであった。また調査区の西方に位置する雀居遺跡第3次調査のⅡ区では、9世紀代の水田および下位層でイネ属が検出され、機動細胞珪酸体全体に対するイネ属の占める割合(出現率)が70～20%であり、長期間の稲作が行われていた可能性が指摘されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1998)。今回の分析結果におけるイネ属の出現率を求めると、A区SD0005上層の約25%、SD0005下層が約47%、B区SD0042で約18%であり、溝内では水田層よりも多いあるいは同等の含量が推定される。珪藻化石の産状からはA区SD0007を除いて、溝内に水流があったとされる。そのため、検出されたイネ属は溝の上流域あるいは周辺から稲作耕土と共に流入したものと思われ、弥生時代中期後半以降に調査区内や溝の上流域に稲作地が広がっていた可能性がある。

なおA区SD0005下層で優占した珪藻*Lemnicola hungarica*は水田稲作地からも出現する種である(田中, 2002・小林ほか, 2006・伊藤, 2007)。そのため、溝内に稲作地からの水や耕土が流入した可能性が考えられる。また、B区SD0042やA区SD0024、A区SD0005上層には珪藻化石の産状から富栄養化した中腐水域からの水の流入が示唆される。水田稲作が行われた場合には耕作に伴って水質が富栄養化する場合がある。

(3) 遺跡周辺の森林植生

森林植生を反映する木本類を見ると、弥生時代中期に当たるSD0024やSD0042では木本花粉でコナラ属コナラ亜属が多く産出し、マツ属やコナラ属アカガシ亜属なども多く認められた。さらにコナ

ラ亜属やエノキ属-ムクノキ属、サワグルミ属、クマシデ属-アサダ属なども見られた。木製品や種実遺体には、常緑高木のスギ、ヤマモモ、アカガシ亜属、クスノキ、落葉高木のコナラ亜属、ムクノキ、クリ、落葉小高木のアカメガシワ、エゴノキ、クサギ、落葉低木のイヌザンショウ、サンショウ属、落葉籐本のブドウ属やノブドウなどが認められた。これらは明るい林地を好み、林縁や河畔、谷筋などに生育する種類を多く含み、これらの種類が遺跡周辺に生育していたと考えられる。ここに挙げた種類の中にはハンノキ属やトネリコ属のように湿地に強い種類やコナラ亜属のように成長が早く、萌芽による再生能力に優れた種類も多い。遺跡の立地環境から見ても、このような景観は妥当と言える。またアカガシ亜属はシイ属、ヤマモモ、クスノキなどと共に暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素であり、これらが後背の丘陵地等を中心に安定した森林を構成していたと考えられる。

マツ属は、海岸植生としても生育していた可能性がある。本遺跡周辺の分析事例を見ると、下月隈C遺跡で弥生時代～古墳時代の花粉分析が実施されており、弥生時代～古墳時代中期はアカガシ亜属を主体とした森林が、古墳時代後期以降はシイ類を中心とした森林が、それぞれ成立したとされている(鈴木, 2006)。この調査例と比較すると、本遺跡ではコナラ亜属の割合が高い点を除き花粉群集の種類構成に大差がない。そのため、河畔林要素をより反映する群集組成であると推測され、当時の周辺の森林植生は基本的にアカガシ亜属やシイ属が主体であったと考えられる。

弥生時代後期中葉とされるSD0005 下層などでは、弥生時代中期と同様な木本花粉、樹種、種実遺体が見られる。なお木本花粉では多産していたコナラ亜属の割合が低くなり、マツ属が増加する傾向が認められる。増加するマツ属のうち、亜属まで同定できたものは全て複雑管束亜属であった。マツ属複雑管束亜属(いわゆるニヨウマツ類)は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また極端な陽樹であり、痩せた裸地などでもよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。マツ属が多い傾向は、花粉化石の産状が悪かった古墳時代前期(SD0007 上層)や8世紀前半(SD0005 上層)でも認められる。なお木製品や種実遺体には、弥生時代中期や後期と同様な分類群が見られる。

九州各地の遺跡や沖積平野の花粉分析結果をみると、アカガシ亜属やシイ属を主体としていた植生が衰退し、マツ属花粉が急激に増加し始めるのは弥生時代中期～古墳時代(約2,000-1,500年前)とされている(例えばHatanaka, 1985; 畑中ほか, 1998など)。これらの点を考慮すれば、本遺跡周辺では弥生時代後期頃から周辺植生への人為干渉が活発化した可能性がある。特に8世紀には林縁要素のイヌザンショウ、アカメガシワ、ツタ属、ノブドウ、グミ属などに由来する花粉化石や種実遺体が見られ、周辺の森林に明るい空間が増加した可能性も想定される。

II. 出土種実から見た植物利用

1. 試料

試料は、弥生時代中期前葉～古代(9世紀)の遺構覆土などから採取された65点である。なお、同一遺構から複数の試料が採取されており、65点の中で遺構が重複する試料がある。

2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体をピンセットで抽出する。種実遺体の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等との対照より実施し、個数を数えて一覧表で示す。分析後は、種実遺体を種類別に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸し、保管する。

3. 結果

種実遺体の出土状況を時期別に示す(表4)。この表では、試料が採取された遺構毎に結果を整理している。

全試料を通じて、裸子植物1分類群(針葉樹のイヌガヤ)4個、被子植物48分類群(広葉樹のヤマモモ、オニグルミ、コナラ亜属、アカガシ亜属、コナラ属、ムクノキ、カジノキ、クスノキ、サクラ亜属、スモモ、モモ、アブラギリ近似種、アカメガシワ、カラスザンショウ、イヌザンショウ、サンショウ属、センダン、ムクロジ、ブドウ属、ノブドウ、ウドカズラ-ヤブガラシ、ブドウ科、クマノミズキ、エゴノキ、クロキ、チシャノキ、クサギ、ガマズミ属、草本のイネ、アゼスゲ節、スゲ属、ウキヤガラ、ホタルイ属、カナムグラ、ボントクタデ近似種、タデ属、キケマン属、ハスノハカズラ、クサネム近似種、アズキ類、メロン類(雑草メロン型、マクワ・シロウリ型、モモルディカメロン型)、ヒョウタン類、トウガン、スズメウリ、オオカラスウリ近似種、オナモミ属)1293個、計1297個の種実が抽出同定された。種実遺体以外では、木の芽、木材、炭化材、植物のトゲ、不明植物片、菌類の菌核、昆虫、骨片、昆虫類、動物、土器片、土粒、不明などが確認された。

栽培種は、スモモの核が24個(疑問符を付した17個を含む)、モモの核が47個、炭化したイネの胚乳が5個、ハトムギの苞鞘が6個、炭化したアズキ類の種子が1個、ヒョウタン類の種子が25個、トウガンの種子が2個、メロン類の種子が37個(雑草メロン型1個、マクワ・シロウリ型26個、モモルディカメロン型7個を含む)、計147個が確認され、種実遺体群の約1割を占める。各栽培種の出土時期は、マクワ・シロウリ型が弥生時代中期前葉以降、雑草メロン型が後期前葉、ほかは中期後半以降である。

栽培種を除いた分類群は、木本は、常緑樹5分類群(高木のヤマモモ、アカガシ亜属、クスノキ、小高木のクロキ、低木のイヌガヤ)153個、常緑または落葉樹2分類群(高木のコナラ属、小高木～低木のガマズミ属)19個、落葉樹20分類群(高木のオニグルミ、コナラ亜属、ムクノキ、カジノキ、サクラ亜属、アブラギリ近似種、カラスザンショウ、センダン、ムクロジ、クマノミズキ、チシャノキ、小高木のアカメガシワ、エゴノキ、クサギ、低木のイヌザンショウ、サンショウ属、籐本のブドウ属、ノブドウ、ウドカズラ-ヤブガラシ、ブドウ科)302個の、計474個が確認された。弥生時代と8世紀後半の遺構で多産するが、時代別の樹種構成に大差は認められない。

草本は、13分類群676個が確認され、古墳時代後期～古代の5区ベルト③と古墳時代後期頃?の5区ベルト⑧から出土した抽水植物のウキヤガラが3/4(514個)を占める。その他に、アゼスゲ節、スゲ属、ホタルイ属、ボントクタデ近似種、クサネム近似種などの水湿地生植物と、タデ属、キケマン属、オナモミ属、つる植物のカナムグラ、ハスノハカズラ、スズメウリ、オオカラスウリ近似種などのやや乾いた場所に生育する分類群が、主に弥生時代と8世紀後半の遺構より確認された。

4. 考察

種実遺体群のうち、スモモ、モモ、イネ、ハトムギ、アズキ類、ヒョウタン類、トウガン、メロン類は古くより大陸から渡来した栽培種とされる。これらの栽培種は種実遺体群全体の1割を占め、マクワ・シロウリ型が弥生時代中期前葉以降、雑草メロン型が後期前葉、ほかは中期後半以降の出土である。これらの栽培種の可食部である種実が弥生時代中期前葉～9世紀代とされる各遺構より出土したことから、当該期の利用と遺構内への廃棄などの人為的行為が推定される。イネとアズキ類は炭化していることから、火を受けたと推定される。またメロン類は、大粒種子のモモルディカメロン型、中粒種子のマクワ・シロウリ型、小粒種子の雑草メロン型が確認されたことから、複数の品種が利用

されていた可能性がある。本遺跡に比較的近い下月隈C遺跡でも、栽培種の種実が弥生時代～古代の遺構より多く出土しており（鈴木，2004；佐藤ほか，2005；新山，2005；新山・植田，2006）、周辺域での普遍的な利用が示唆される。

また栽培種以外で種実が食用可能な分類群として、堅果類のオニグルミ、アカガシ亜属、ヤマモモ、ムクノキ、カジノキ、ムクロジ、ブドウ属などが挙げられる。これらの出土種実に利用痕跡は認められないが、当該期の周辺域に分布した森林より採取され、利用された可能性は残される。

Ⅲ. 木製品・建築部材の樹種

1. 試料

試料は、出土した木製品や建築部材など175点である。このうち、試料番号96（線刻布巻具）は、全面炭化していることから、炭化部分を用いて同定を行う。

2. 分析方法

木製品の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。試料番号96は、自然乾燥させた後、3断面の破断面を作製し、走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料で観察された特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995，1996，1997，1998，1999）を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果は、木器一覧と共に示す。木製品・建築部材は、針葉樹9分類群（マツ属複維管束亜属・モミ属・スギ・コウヤマキ・ヒノキ・サワラ・ヒノキ科・イヌガヤ・カヤ）と広葉樹27分類群（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・イチイガシ・コナラ属アカガシ亜属・コナラ属・クリ・ツブラジイ・スダジイ・ムクノキ・ヤマグワ・シキミ・クスノキ・ニッケイ属・クスノキ科・ツバキ属・サカキ・ヒサカキ・イスノキ・リンボク・サクラ属・センダン・アワブキ属・ミツバウツギ科・シャシャンボ・イボタノキ属・チシャノキ属・スイカズラ属近似種）に同定された。なお、試料番号55は広葉樹であるが、保存が悪く、種類は不明である。

4. 考察

木製品および建築部材には、合計36分類群が認められた。各分類群の材質をみると、針葉樹のマツ属複維管束亜属は、軽軟であるが、強度・保存性が高く、加工は容易である。モミ属は、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易であるが保存性は低い。スギは木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。コウヤマキ、ヒノキ、サワラ、ヒノキ科は、木理が通直で割裂性・耐水性が高く、加工は容易である。イヌガヤとカヤは、針葉樹としては重硬・緻密で強度・耐水性が高い。広葉樹は、重硬で強度が高い材質の種類が多い。

木製品の時期は、弥生時代中期前葉、弥生時代中期後半、弥生時代後期、弥生時代後期前半、弥生

弥生時代後期では、ヘラ、横槌、小型楔?、鋏・鋤、掘棒、紡錘車、たも網?、容器、机脚、組物部品、板等がある。広葉樹の利用が多い傾向がある点は、弥生時代中期と同様であるが、板状の資料を中心にスギなどの針葉樹の利用も目立つ。主な器種についてみると、鋏・鋤は、柄と考えられる鋏部品も含めて14点中12点がアカガシ亜属であり、弥生時代中期と同様の木材選択が後期でも行われていたことが推定される。横槌はツバキ属で、弥生中期とは樹種が異なるが、重硬な木材を利用している点は同様である。掘棒は、クリ、スダジイ、ツバキ属で、比較的強度の高い木材を利用する傾向がある。柱は、3点ともマツ属複雑管束亜属であり、中期とは木材利用が異なる。一方、ねずみ返しは、2点ともクスノキであり、中期と同様の木材利用が認められる。

弥生時代終末では、横斧柄、線刻布巻具、鋏、容器、机天板、割材がある。容器と机天板を除いて広葉樹であり、弥生時代中期・後期と同様に広葉樹を中心とした木材利用が認められる。

(2) 古墳時代～古代の木材利用

古墳時代～古代にかけての木製品器種別種類構成を表6に示す。古墳時代前期の資料は杭2点であったことから、古墳前・中期の資料に含めて集計した。古墳時代の資料は22点あり、前期・中期5点、後期か6点、古墳か11点である。広葉樹の利用が多く、針葉樹が少ない点は、弥生時代の資料と似た傾向を示す。一方、古代の資料では、器種構成が異なることから、単純な比較はできないものの、針葉樹の利用が多くなる傾向がある。

時期別に見ると、古墳時代前・中期では、二又鋏、網杵材、棒材、丸杭がある。二又鋏は、アカガシ亜属であり、弥生時代と同様の木材利用が見られる。網杵材はイヌガヤであり、強靱で耐水性の高い木材を利用したことが推定される。棒材は、用途不明であるが、イスノキが利用されており、強度を要する用途に利用された可能性がある。

古墳時代後期かでは、槽、机天板、扉、建築部材?、部材?がある。机天板にスギが利用されている

表6. 古墳時代～古代の木製品器種別種類構成

分類群\時期・器種	古墳前・中期				古墳後期か				古墳か				古墳後期～古代		8世紀後半												9世紀		合計								
	二又鋏	網杵材	棒材	丸杭	槽	机(天板)	扉	建築部材?	部材?	鋤	机(天板)	建築部材	杭	大足	踏み板	板材	ヘラ状	小型楔?	弓	曲物底板	曲物底板転用	容器	容器脚	建築部材	組物部品	板	板状楔?	部材		分割杭	櫛	棒材					
<針葉樹>																																					
マツ属複雑管束亜属																																			1	1	
モミ属					1																															1	
スギ						1					2			1		1	1	1		3		1	2				2									15	
ヒノキ																				3								1								4	
サワラ																					2															2	
イヌガヤ		1																	1																	2	
<広葉樹>																																					
アカガシ亜属	1			1						2	3																										8
クリ																								1					2							3	
ツブラジイ				1										2																				4		7	
スダジイ						2	1					1		5																			2			11	
シキミ														1																			1			2	
クスノキ									1																											1	
クスノキ科																1																				1	
ツバキ属											2			1																			1			4	
サカキ																																	1			1	
イスノキ			1																															1		2	
アワブキ属																																	3			3	
ミツバウツギ科												1																								1	
合計	1	1	1	2	1	1	2	1	1	2	2	5	2	1	10	1	1	1	1	1	6	2	1	2	1	1	2	1	2	1	2	12	1	1	69		

他は、全て広葉樹である。扉と建築部材?は全てスダジイである。スダジイは、暖温帯常緑広葉樹林の主構成種であり、現在の遺跡周辺の丘陵地にもよく見られる種類である。古墳時代前・中期の杭材にツブラジイ、古墳かの杭にスダジイが認められることから、遺跡周辺に生育していたことが推定され、入手が容易な樹木を利用したことが推定される。

古墳かでは、鋤、机天板、建築部材、杭がある。鋤は2点ともアカガシ亜属であり、弥生時代から継続してアカガシ亜属が利用されていたことが伺える。机天板は、2点ともスギであり、古墳時代後期かと同じ樹種が利用されている。机天板については、弥生時代終末の資料もスギであり、板状加工が容易な木材としてスギがよく利用されていたことが推定される。建築部材は、アカガシ亜属とツバキ属であり、強度の高い木材が利用されたと考えられる。

古墳時代後期～古代の資料は、大足の踏み板、杭、板材がある。大足の踏み板と板は、いずれもスギであり、板状加工が容易な木材が利用されている。一方、杭はスダジイ・ツブラジイを中心に5種類の広葉樹が利用される。いずれも暖温帯常緑広葉樹林の構成種である。杭は、芯持丸木、ミカン割、柁目板状の資料がある。多く見られたスダジイは、杭の形状・加工法に関わらず利用されている。ツブラジイは、2点ともミカン割の杭であった。ツバキ属、クスノキ科、シキミは、各1点ではあるが、全て芯持丸木であり、樹種によって利用状況が異なる傾向がある。

8世紀後半の資料は、ヘラ状、小型楔?、弓、曲物底板、容器、容器脚、建築部材、組物部品、板、板状、部材、分割杭がある。板状の資料を中心にスギを主とした針葉樹の利用が多い。曲物底板では、スギとヒノキが認められるが、曲物底板転用ではサワラも認められ、少なくとも3種類が曲物として利用されていたことが推定される。一方、建築部材や杭では広葉樹の利用が多い。杭には、丸杭、分割杭、半割杭がある。スダジイ・ツブラジイはいずれも分割杭あるいは半割杭であり、丸杭には利用されない。丸杭では、サカキ、シキミ、アワブキ属が認められ、杭の形状・加工法によって樹種が異なる傾向がある。9世紀の資料は櫛と棒材であり、櫛にイスノキ、棒材にマツ属複雑維管束亜属が認められた。

本遺跡周辺では、板付遺跡、比恵遺跡、雀居遺跡で弥生時代を中心とした木製品、下月隈C遺跡において弥生時代から近代に至る幅広い時期の木製品について樹種同定が行われている(嶋倉, 1978, 1981、福岡市教育委員会、1986、1990、1991、1992、2003; 三村・高橋, 2005; パリノ・サーヴェイ株式会社, 2006)。その結果をみると、古代の資料にスギを主とした針葉樹が多く利用されている点、鋤・鋤類にアカガシ亜属が利用されている点など、共通点が多く、既存の調査結果とも調和的である。

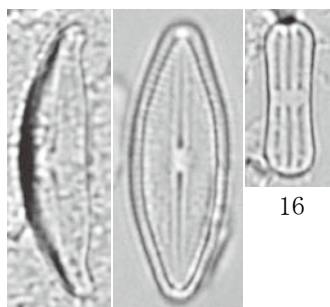
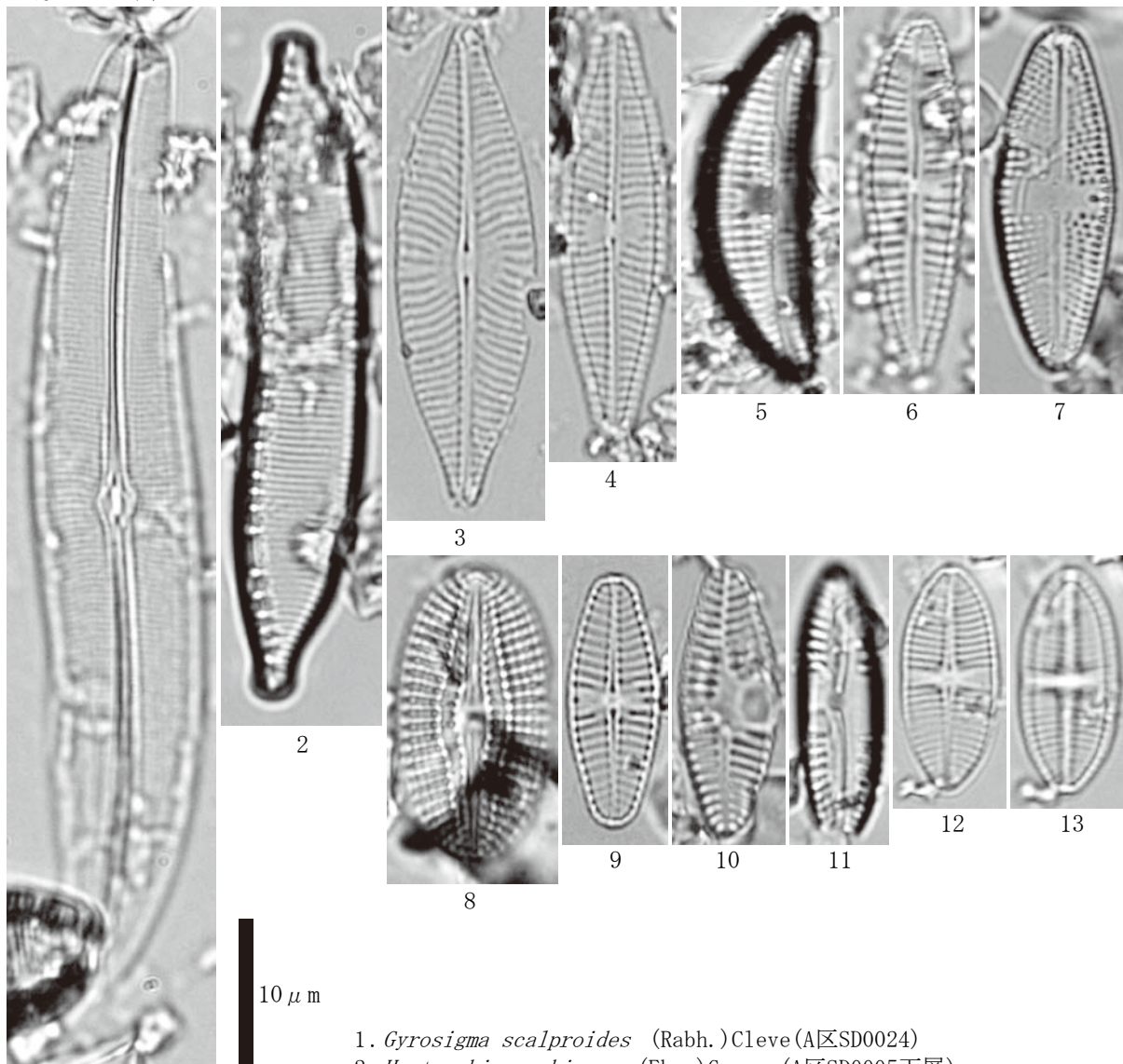
引用文献

- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35-47.
- 福岡市教育委員会, 1986, 福岡市博多区 比恵遺跡 -第6次調査・遺構編-. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第130集, 117 p.
- 福岡市教育委員会, 1990, 比恵遺跡群(9). 福岡市埋蔵文化財調査報告書第227集, 140 p.
- 福岡市教育委員会, 1991, 比恵遺跡群(10). 福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集, 246 p.
- 福岡市教育委員会, 1992, 比恵遺跡群(11). 福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集, 180 p.
- 福岡市教育委員会, 2003, 福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告 雀居9. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第748集, 222 p.
- 原口和夫・三友清史・小林 弘, 1998, 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, 527-600.
- Hatanaka, K., 1985, Palynological studies on the vegetational succession since the Wurm glacial age in Kyushu and adjacent areas. Journal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University, 18, 29-71.

- 畑中健一・野井英明・岩内 明子, 1998, 九州地方の植生史. 安田喜憲・三好教夫(編著)「図説 日本列島植生史」, 朝倉書店, 151-161.
- Hustedt, F., 1937-1939, Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. *Archiv für Hydrobiologie, Supplement*, 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:638-790, 16:1-155, 16:274-394.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328 p.
- 伊藤良永, 2007, 水田の形態別(乾田、半湿田)違いに基づく珪藻植生の基礎的研究. 徳永重元博士献呈論集, 299-319.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, 23-45.
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五, 2006, 小林弘珪藻図鑑 第1巻. 株式会社内田老鶴圃, 531 p.
- 近藤錬三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ペドロジスト, 48, 46-64.
- 近藤錬三・ピアスン友子, 1981, 樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について. 帯広畜産大学研究報告, 12, 217-229.
- 小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- Krammer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. *BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26*, J. CRAMER, 353 p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. *Suesswasserflora von Mitteleuropa Band 2/1*, Gustav Fischer Verlag, 876 p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. *Suesswasserflora von Mitteleuropa Band 2/2*, Gustav Fischer Verlag, 536 p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991 a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. *Suesswasserflora von Mitteleuropa Band 2/3*, Gustav Fischer Verlag, 230 p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991 b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritsche Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. *Suesswasserflora von Mitteleuropa Band 2/4*, Gustav Fischer Verlag, 248 p.
- Lange-Bertalot, H., 2001, Navicula sensu stricto 10 genera separated from Navicula sensu lato, Frustulia. Lange-Bertalot, H. (ed.) *Diatoms of Europe: Diatoms of the European Inland Waters and Comparable Habitats 2*, A. R. G. Gantner Verlag K. G., Ruggell, 526 p.
- Lowe, R. L., 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. *Environmental Monitoring Ser*, EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati, 334 p.
- 三村昌史・高橋 敦, 2005, 第6次調査出土材の樹種からみた木材利用. 「下月隈C遺跡Ⅴ -福岡空港周辺整備工事に伴う下月隈C遺跡第6次発掘調査報告- 本文編」, 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第839集, 福岡市教育委員会, 221-230.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642 p.
- 新山雅宏, 2005, 第6次調査出土の大型植物化石. 「下月隈C遺跡-福岡空港周辺整備工事に伴う下月隈C遺跡第6次発掘調査報告-本文編-」, 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第839集, 福岡市教育委員会, 211-217.
- 新山雅宏・植田弥生, 2006, 第7次調査出土の大型植物化石. 「下月隈C遺跡Ⅵ -福岡空港周辺整備工事に伴う下月隈C遺跡第7次発掘調査報告-本文編-」, 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第881集, 福岡市教育委員会, 242-256.
- パリオ・サーヴェイ株式会社, 1998, 雀居遺跡第3次調査自然科学分析. 「雀居遺跡Ⅳ -福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告-」, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第565集, 福岡市教育委員会, 63-75.
- パリオ・サーヴェイ株式会社, 2006, 第7次調査出土材の樹種. 「下月隈C遺跡Ⅵ -福岡空港周辺整備工事に伴う下月隈C遺跡第7次発掘調査報告- 本文編」, 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第881集, 福岡市教育委員会, 257-268.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G., 1990, The diatoms. *Biology & morphology of the genera*, Cambridge University Press, Cambridge, 747 p.
- 佐藤洋一郎・柴内佐知子・那須浩郎, 2005, 第6次調査出土イネ種子およびその他の植物遺体の分析. 「下月隈C遺跡 -福岡空港周辺整備工事に伴う下月隈C遺跡第6次発掘調査報告-本文編-」, 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第839集, 福岡市教育委員会, 205-210.
- 嶋倉巳三郎, 1977, 福岡市板付遺跡H-5地点から出土した木質品の樹種について. 「板付周辺遺跡調査報告書(4)」, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集, 福岡市教育委員会, 111-114.
- 嶋倉巳三郎, 1981, 福岡市板付E-5・6地区出土の木質遺物の樹種. 「板付 板付会館建設に伴う発掘調査報告書」, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集, 福岡市教育委員会, 76-77.
- 杉山真二, 2000, 植物珪酸体(プラント・オパール). 辻 誠一郎(編著)「考古学と自然科学3 考古学と植物学」,

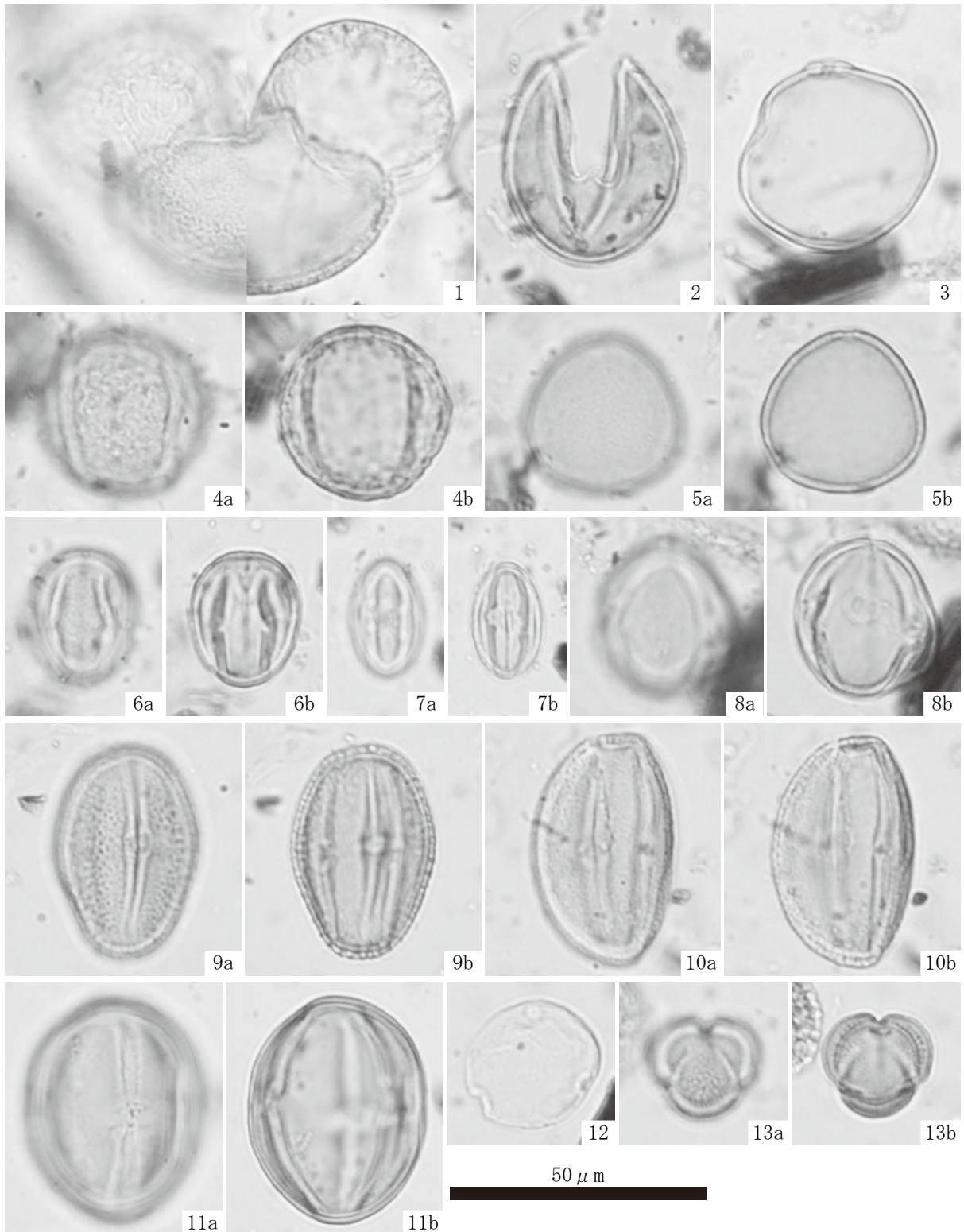
- 同成社, 189-213.
- 鈴木 茂, 2004, 土壌分析 (大型植物化石・種実). 「下月隈C遺跡Ⅳ -福岡空港周辺整備工事に伴う下月隈C遺跡第5次発掘調査報告-本文編-」, 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第795集, 福岡市教育委員会, 175-186.
- 鈴木 茂, 2006, 第7次調査出土試料の花粉化石. 「下月隈C遺跡Ⅵ-福岡空港周辺整備工事に伴う下月隈C遺跡第7次発掘調査報告 本文編-」, 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第881集, 福岡市教育委員会, 226-230.
- 田中正昭, 2002, 日本淡水産動・植物プランクトン図鑑. 584 p.
- Vesela J. & Johansen J. R., 2009, The diatom flora of ephemeral headwater streams in the Elbsandsteingebirge region of the Czech republic. *Diatom research*, 24, 2, 443-477.
- Vos, P. C. & H. de Wolf, 1993, Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. *Hydrobiologica*, 269/270, 285-296.
- 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子, 2005, 淡水珪藻生態図鑑. 株式会社内田老鶴圃, 666 p.
- 柳沢幸夫, 2000, II-1-3-2-(5) 計数・同定. 「化石の研究法 -採集から最新の解析法まで-」, 化石研究会, 共立出版株式会社, 49-50.
- 吉崎昌一, 1992, 古代雑穀の検出. 考古学ジャーナル, 355, ニューサイエンス社, 2-14.

図版1 珪藻化石



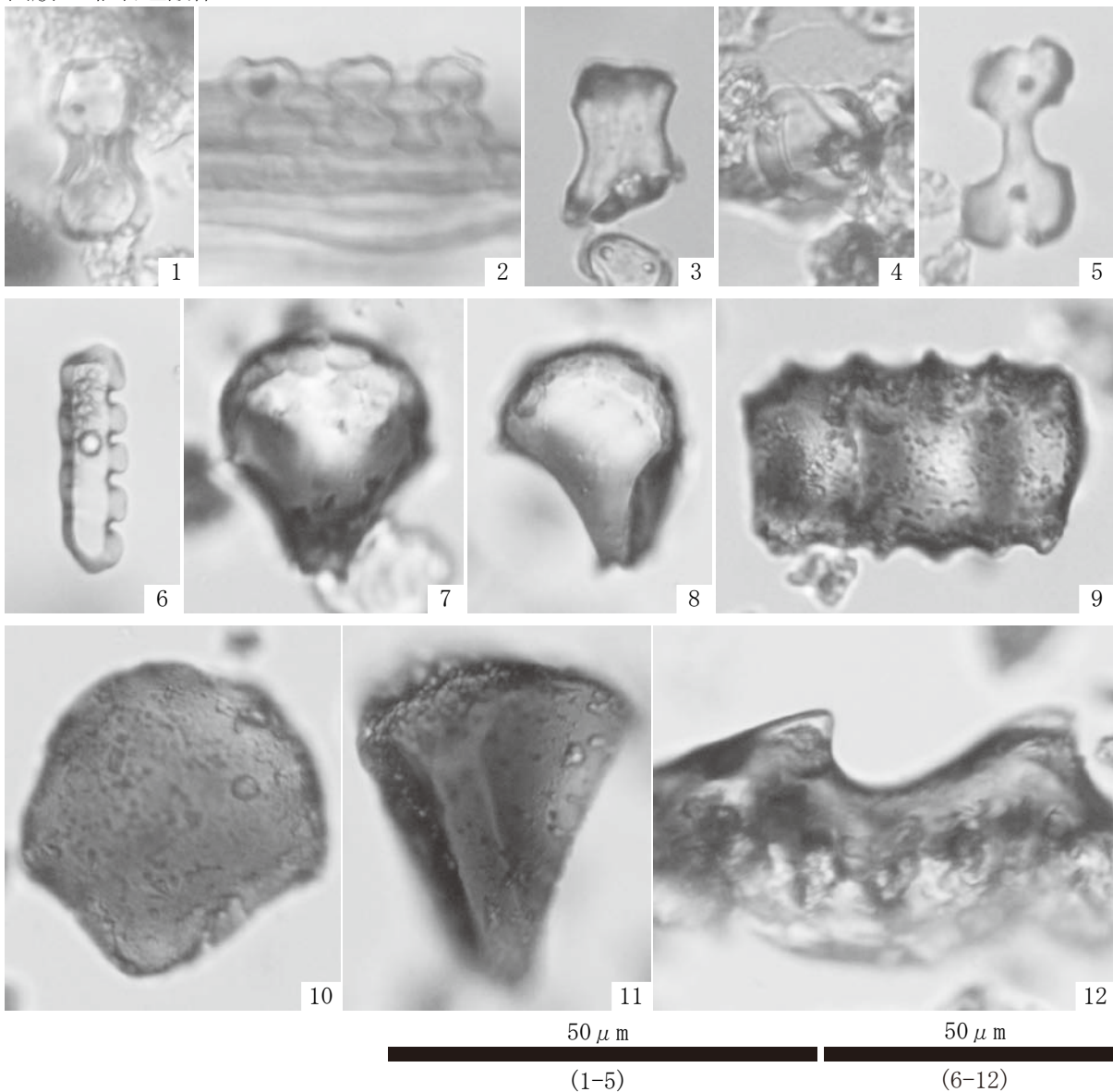
1. *Gyrosigma scalproides* (Rabh.) Cleve (A区SD0024)
2. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (A区SD0005下層)
3. *Navicula trivialis* Lange-Bertalot (A区SD0005上層)
4. *Navicula veneta* Kuetzing (A区SD0005上層)
5. *Amphora copulata*
(Kuetz.) Schoeman et R. E. M. Archibald (A区SD0005上層)
6. *Gomphonema parvulum* (Kuetz.) Kuetzing (A区SD0005上層)
7. *Luticola mutica* (Kuetz.) D. G. Mann (A区SD0007)
8. *Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve (A区SD0024)
9. *Planothidium lanceolatum*
(Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot (縦溝殻:A区SD0024)
10. *Planothidium lanceolatum*
(Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot (無縦溝殻:B区SD0042西)
11. *Pinnularia schroederii* (Hust.) Krammer (A区SD0007)
12. *Lemnicola hungarica*
(Grunow) Round & Basson (縦溝殻:A区SD0005下層)
13. *Lemnicola hungarica*
(Grunow) Round & Basson (無縦溝殻:A区SD0005下層)
14. *Amphora montana* Krasske (B区SD0042)
15. *Diadesmis confervacea* Kuetzing (A区SD0024)
16. *Diadesmis biceps* Arnott ex Grunow in Van Heurck (A区SD0005上層)

図版2 花粉化石



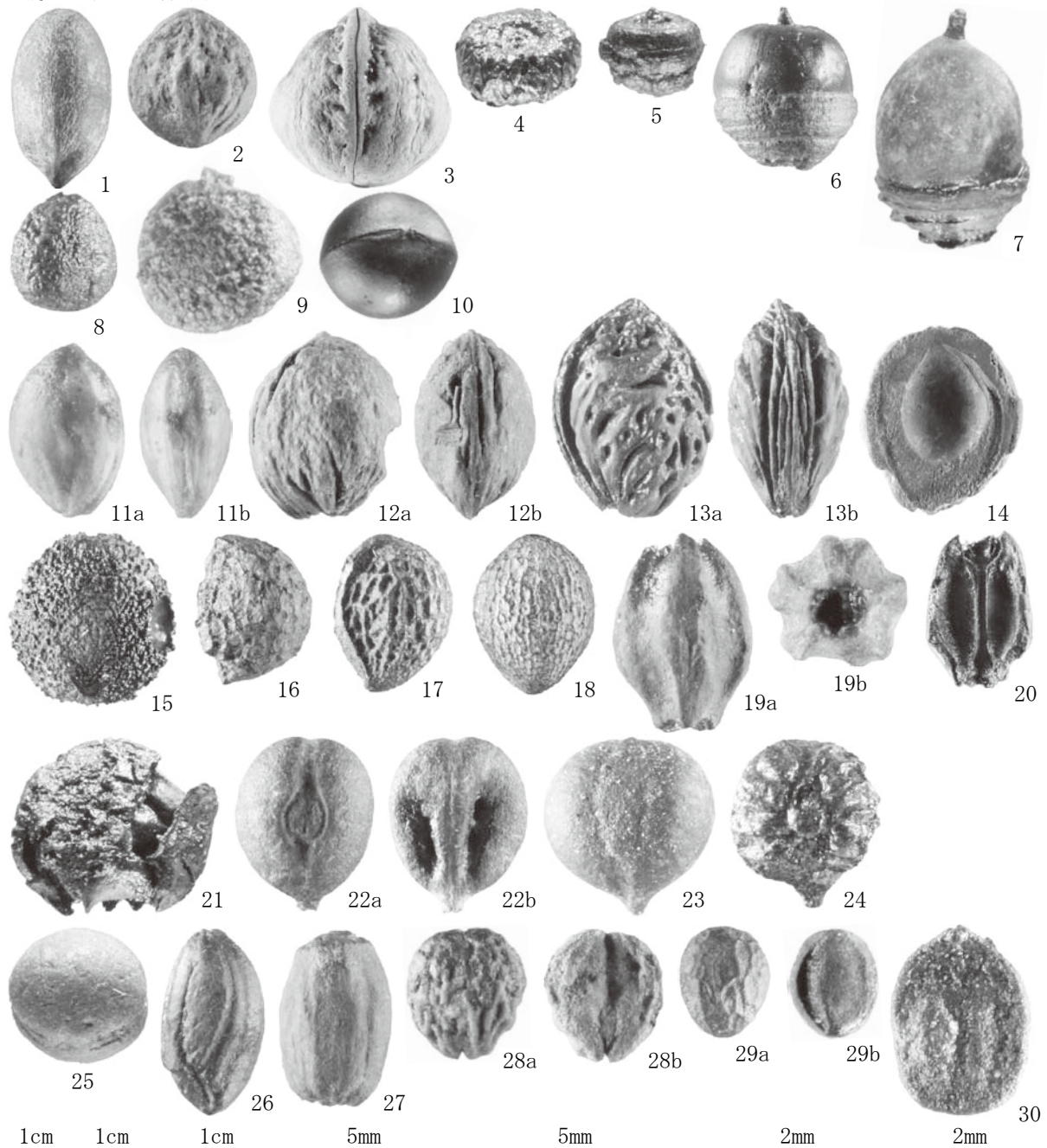
- | | | |
|--------------------------|----------------------------|----------------------|
| 1. マツ属 (B区SD0042) | 2. スギ属 (B区SD0042) | 3. イネ科 (B区SD0042) |
| 4. コナラ属コナラ亜属 (B区SD0042) | 5. エノキ属—ムクノキ属 (A区SD0005下層) | |
| 6. コナラ属アカガシ亜属 (B区SD0042) | 7. シイ属 (B区SD0042) | 8. サクラ属 (A区SD0005下層) |
| 9. ツタ属 (A区SD0005上層) | 10. ノブドウ属 (A区SD0005上層) | 11. カキノキ属 (A区SD0024) |
| 12. クワ科 (A区SD0024) | 13. ヨモギ属 (A区SD0024) | |

図版3 植物珪酸体



- | | |
|-----------------------------|--------------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体 (A区SD0005上層) | 2. イネ属短細胞列 (A区SD0005下層) |
| 3. ネザサ節短細胞珪酸体 (A区SD0005上層) | 4. ヨシ属短細胞珪酸体 (A区SD0007) |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体 (A区SD0007) | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (A区SD0005下層) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体 (A区SD0005上層) | 8. イネ属機動細胞珪酸体 (A区SD0005下層) |
| 9. ネザサ節機動細胞珪酸体 (A区SD0005上層) | 10. ヨシ属機動細胞珪酸体 (A区SD0007) |
| 11. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (A区SD0007) | 12. イネ属穎珪酸体 (A区SD0005下層) |

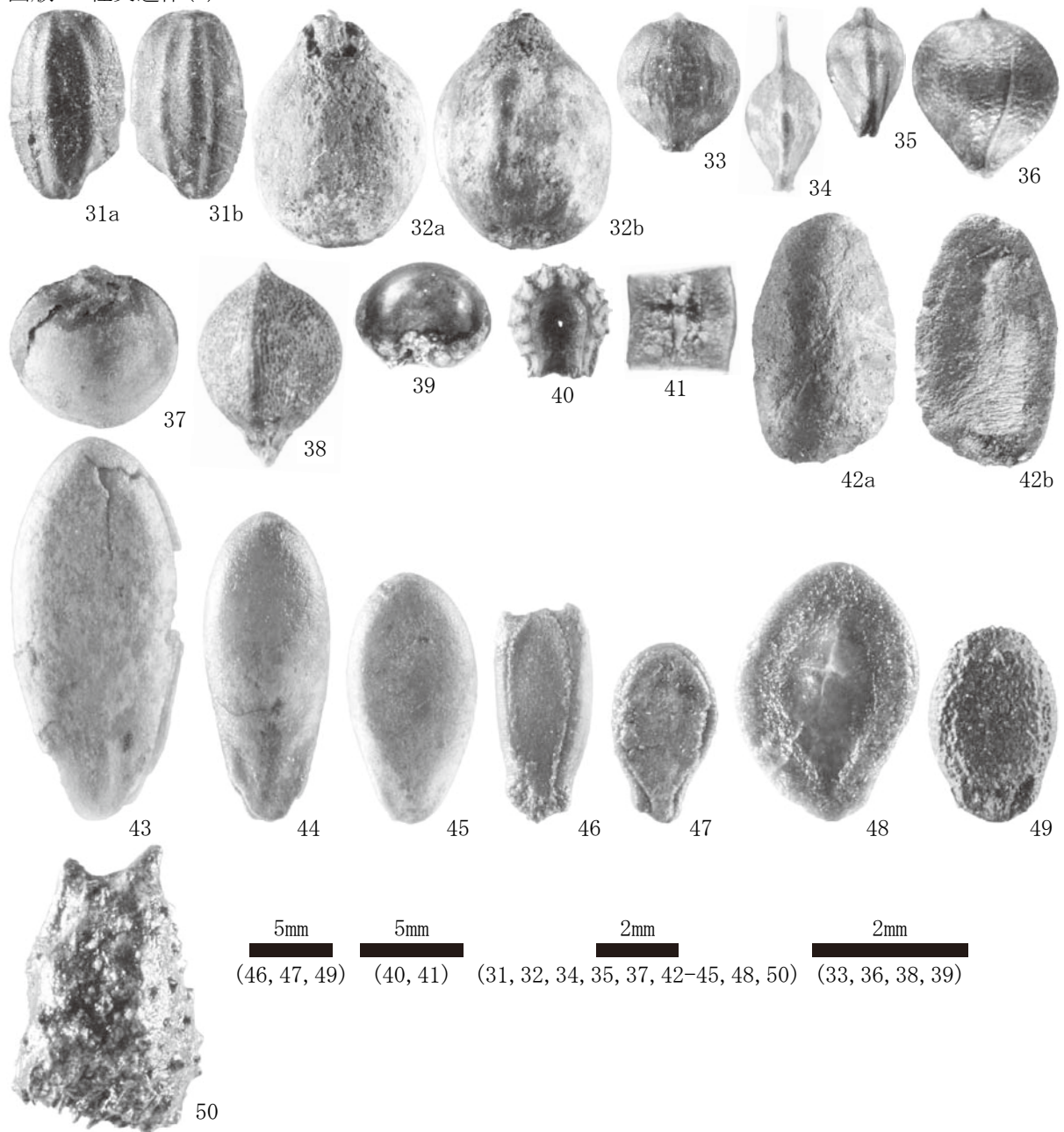
図版4 種実遺体(1)



(13) (3, 14) (1, 6, 12, 20) (4, 7, 19, 21, 26) (2, 5, 8, 10, 11, 27, 29, 30) (16, 18, 22-25, 28) (9, 15, 17)

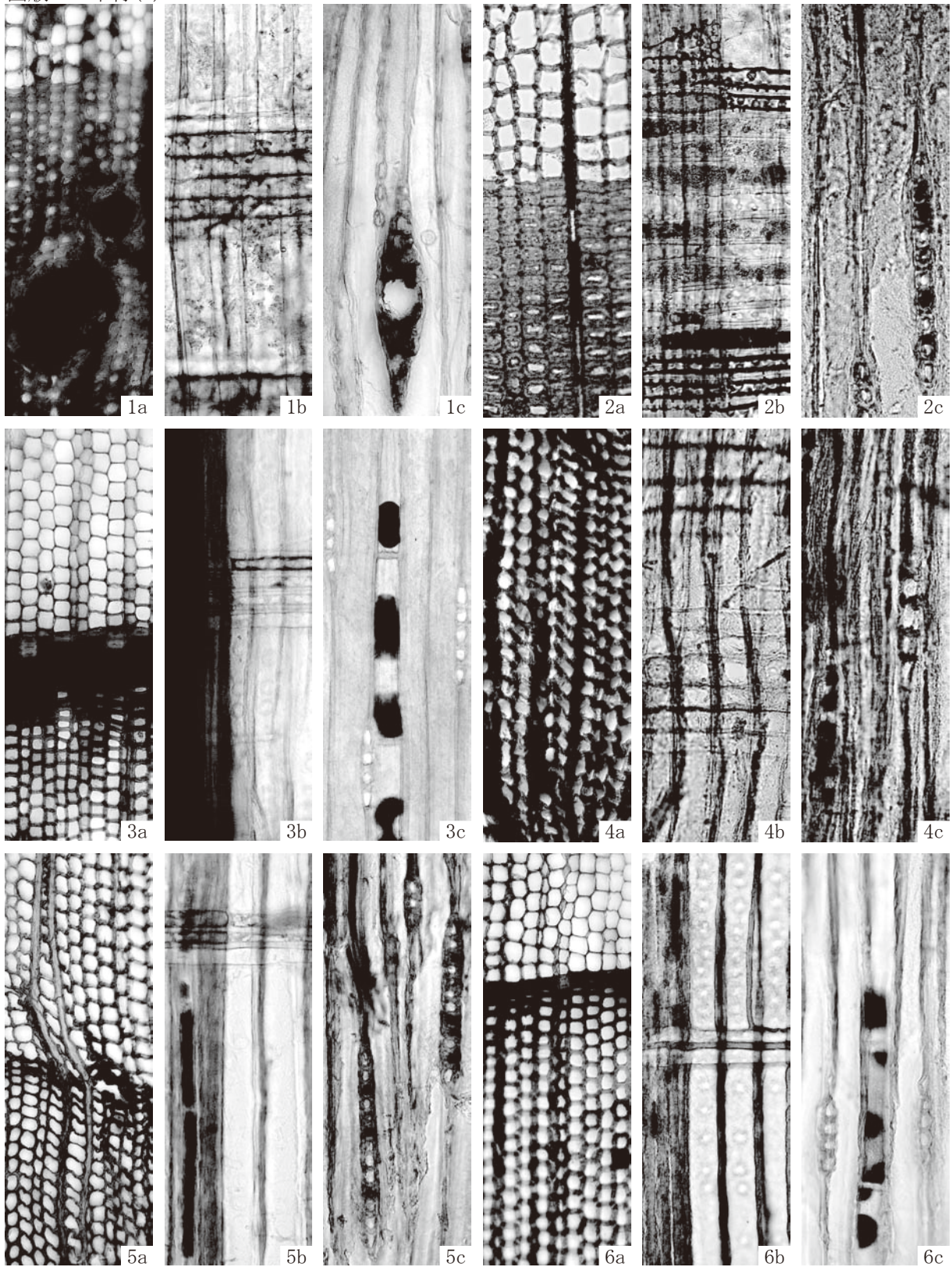
- | | |
|---------------------------|------------------------------|
| 1. イヌガヤ 種子(E区SD0065) | 2. ヤマモモ 核(E区SD0080) |
| 3. オニグルミ 核(F区第3面) | 4. コナラ亜属 幼果(A区SD0024) |
| 5. アカガシ亜属 幼果(A区畦畔1) | 6. アカガシ亜属 果実・殻斗(E区SD0065) |
| 7. アカガシ亜属 果実・殻斗(A区SS0057) | 8. ムクノキ 核(A区SD0024) |
| 9. カジノキ 核(A区SD0024) | 10. クスノキ 種子(E区5区ベルト⑨) |
| 11. サクラ亜属 核(A区SD0024) | 12. スモモ 核(食痕)(D区SD0752) |
| 13. モモ 核(B区SD0034) | 14. モモ 核(E区第2面5区西側) |
| 15. アカメガシワ 種子(E区5区ベルト⑩) | 16. カラスザンショウ 種子(B区SD0042) |
| 17. イヌザンショウ 種子(E区5区ベルト⑩) | 18. サンショウ属 種子(A区畦畔1) |
| 19. センダン 核(A区SS0057) | 20. センダン 種子(E区第1面) |
| 21. ムクロジ 種子(A区SS0057) | 22. ブドウ属 種子(A区SD0005上層) |
| 23. ノブドウ 種子(B区SD0042) | 24. ウドカズラーヤブガラシ 種子(B区SD0042) |
| 25. クマノミズキ 核(A区SS0057) | 26. エゴノキ 種子(A区SS0057) |
| 27. クロキ 核(B区SD0042) | 28. チシャノキ 核(A区SD0024) |
| 29. クサギ 核(B区SD0042) | 30. ガマズミ属 核(A区SS0057) |

図版5 種実遺体(2)



- | | |
|-----------------------------------|-----------------------------|
| 31. イネ 胚乳(B区SD0042) | 32. ハトムギ 苞鞘(B区SD0042) |
| 33. アゼスゲ節 果実(E区5区ベルト③) | 34. スゲ属 果実(E区5区ベルト③) |
| 35. ウキヤガラ 果実(E区5区ベルト③) | 36. ホタルイ属 果実(E区5区ベルト⑧) |
| 37. カナムグラ 核(B区SD0032) | 38. ボントクタデ近似種 果実(B区SD0032) |
| 39. キケマン属 種子(B区SD0032) | 40. ハスノハカズラ 核(B区SD0042) |
| 41. クサネム近似種 果実(A区畦畔1) | 42. アズキ類 種子(B区SD0042) |
| 43. メロン類(モモルディカメロン型) 種子(B区SD0032) | 46. ヒョウタン類 種子(B区SD0042) |
| 44. メロン類(マクワ・シロウリ型) 種子(B区SD0032) | 48. スズメウリ 種子(B区SD0042) |
| 45. メロン類(雑草メロン型) 種子(B区SD0032) | 49. オオカラスウリ近似種 種子(B区SD0042) |
| 47. トウガン 種子(B区SD0042) | 50. オナモミ属 総苞(B区SD0042) |

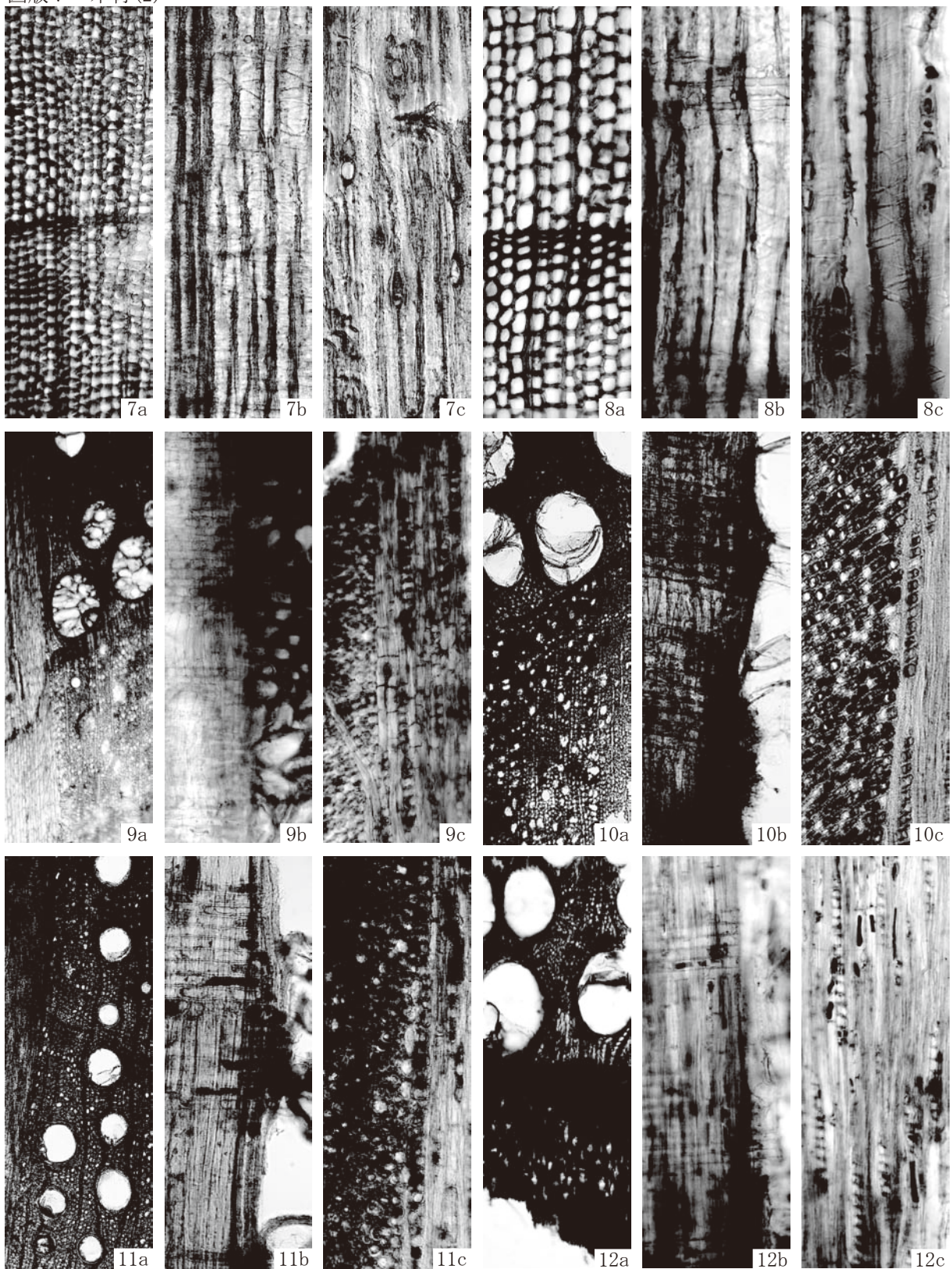
図版6 木材(1)



1. マツ属複維管束亜属(試料番号60)
 2. モミ属(試料番号143)
 3. スギ(試料番号66)
 4. コウヤマキ(試料番号175)
 5. ヒノキ(試料番号10)
 6. サワラ(試料番号20)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目




200 μ m: a
 100 μ m: b, c

図版 7 木材(2)

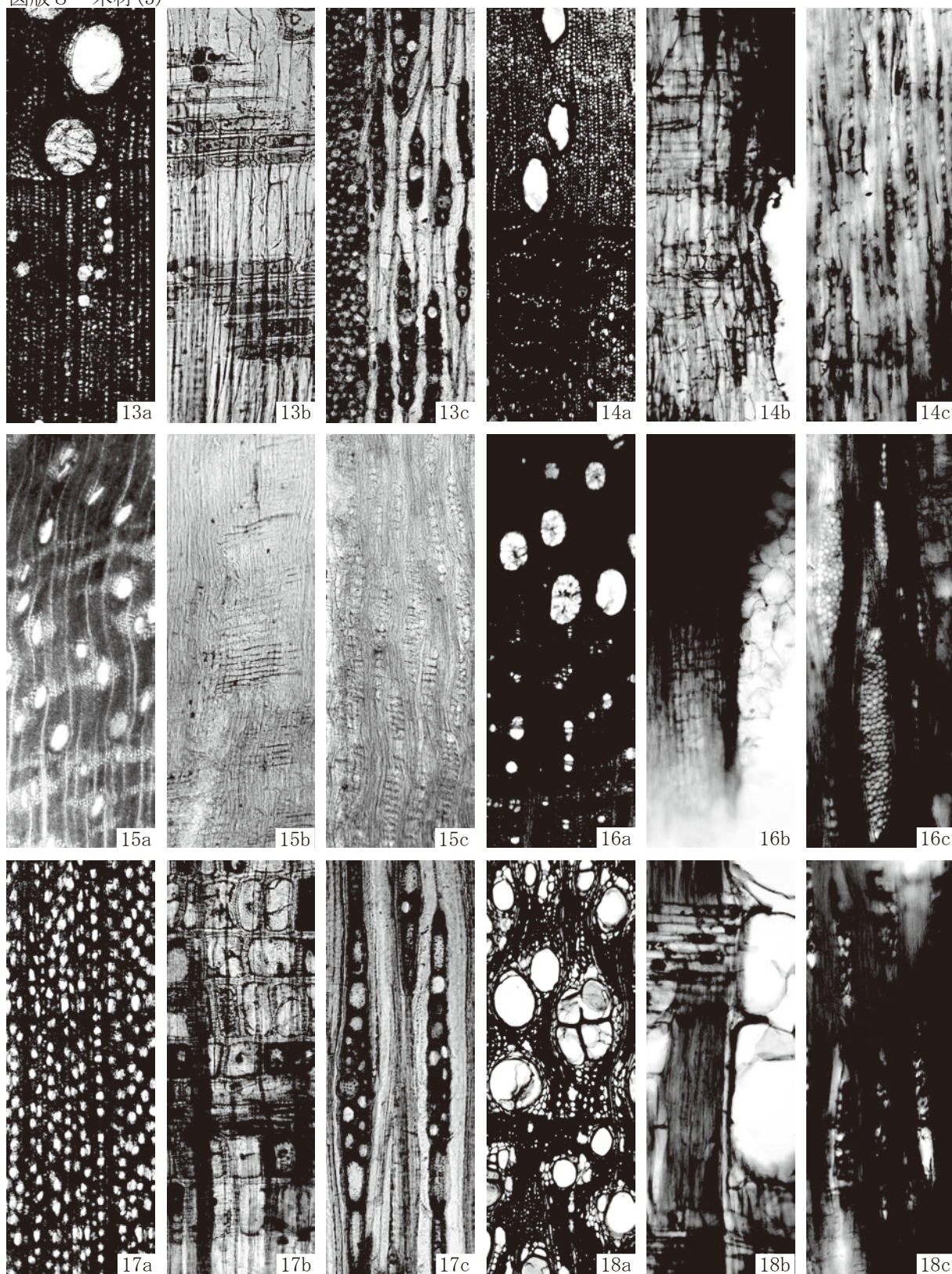


- 7. イヌガヤ(試料番号46)
- 8. カヤ(試料番号74)
- 9. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(試料番号105)
- 10. コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料番号165)
- 11. コナラ属アカガシ亜属(試料番号132)
- 12. クリ(試料番号28)

a: 木口, b: 柾目, c: 板目

 500 μm: 9-12a
 200 μm: 7-8a, 9-12b, c
 100 μm: 7-8b, c

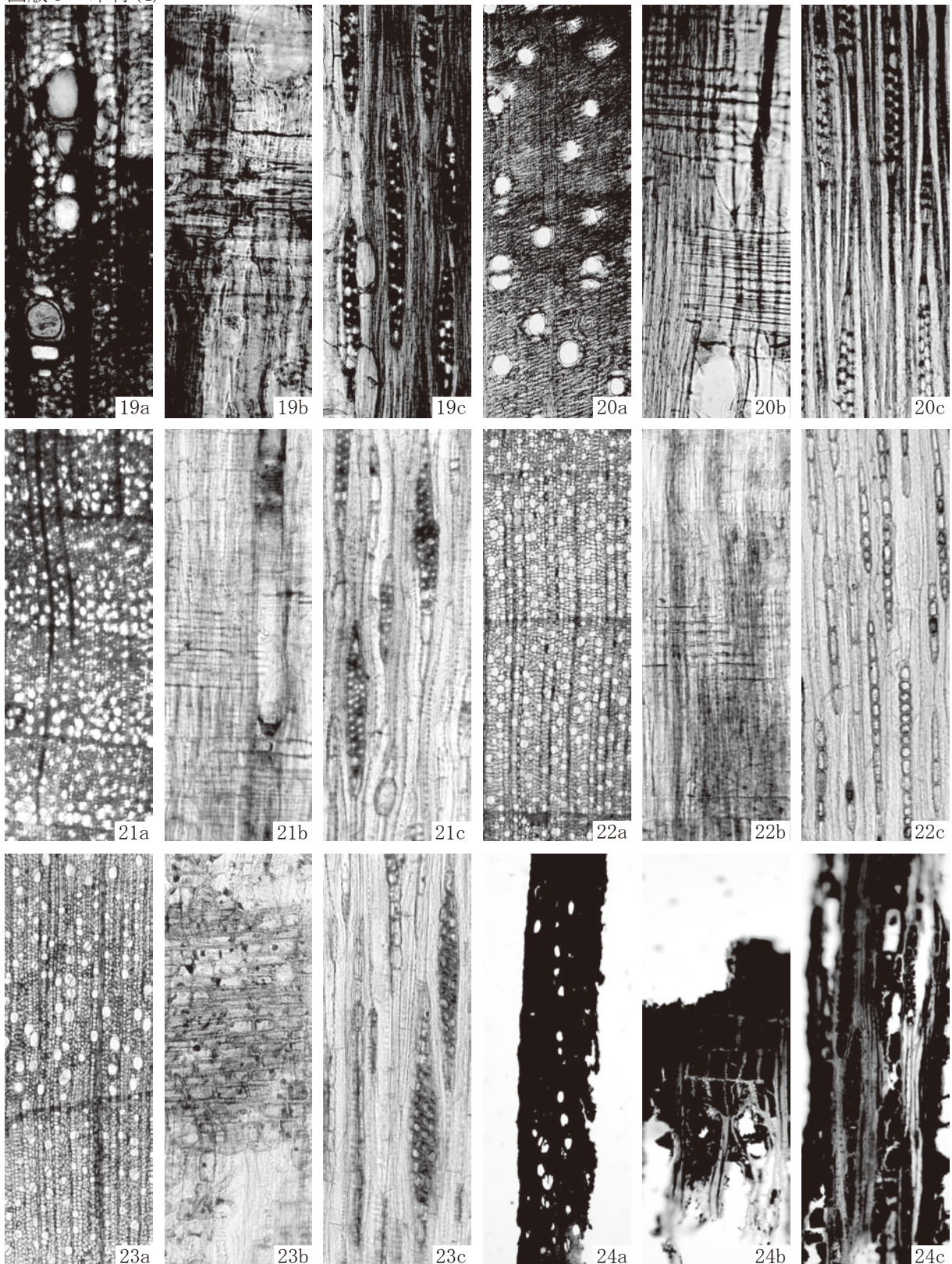
図版8 木材(3)



13. ツブラジイ (試料番号120)
 14. スダジイ (試料番号48)
 15. ムクノキ (試料番号113)
 16. ヤマガワ (試料番号63)
 17. シキミ (試料番号121)
 18. クスノキ (試料番号107)
 a: 木口, b: 柀目, c: 板目

500 μm: a
 200 μm: b, c

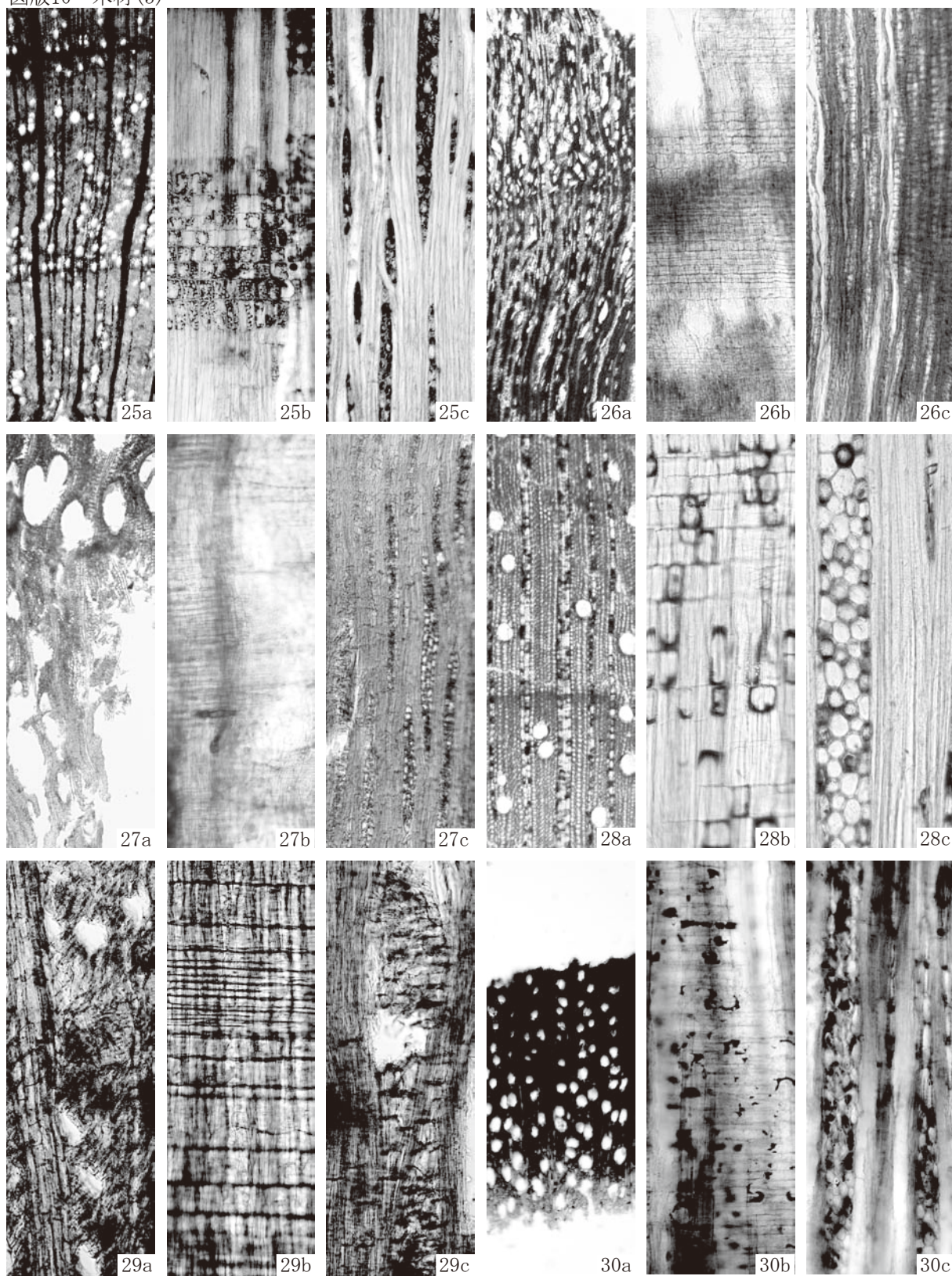
図版 9 木材(4)



19. ニッケイ属(試料番号156)
 20. クスノキ科(試料番号118)
 21. ツバキ属(試料番号36)
 22. サカキ(試料番号9)
 23. ヒサカキ(試料番号94)
 24. イスノキ(試料番号2)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

500 μ m: a
 200 μ m: b, c

図版10 木材(5)



25. リンボク(試料番号49)
 26. サクラ属(試料番号92)
 27. センダン(試料番号114)
 28. アウブキ属(試料番号32)
 29. ミツバウツギ科(試料番号137)
 30. シヤシャンボ(試料番号73)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

500 μm: a
 200 μm: b, c

付編 2 那珂川・御笠川流域における弥生土器および粘土の胎土分析

石田智子¹・米村和紘²・足立達朗³・中野伸彦³・小山内康人³・田中良之¹¹九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座²九州大学大学院比較社会文化学府³九州大学大学院比較社会文化研究院地球変動講座

1. はじめに

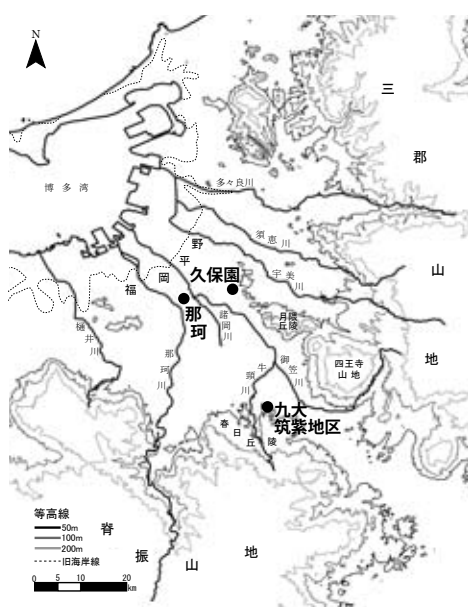
日本考古学には、形態的特徴・製作技法・文様から細かな時期差や地域性を把握する膨大な土器研究の蓄積があるが、自然科学的手法を用いた胎土分析は、土器物質そのものに直接アプローチする方法として注目される。胎土分析の方法は、化学組成と偏光顕微鏡観察による構成鉱物の検討に大別できるが、鏡下観察では区分できないほど近接した粘土産地同士の識別には、微量元素分析が有効である(三辻 1983 ほか; Renfrew&Bahn 2004 など)。三辻利一氏は、集約的に生産された窯跡出土須恵器を基礎資料として、汎日本的に共通して地域差を示す微量元素(特に K・Ca・Rb・Sr)に基づく地域識別を進めてきた。しかし、基本的に各集落での自給生産・消費が想定される弥生土器に関しては、最も日常的な近隣集落間の土器移動現象、さらには地域性発現プロセスの解明のために、小地域レベル(半径約 5 km 圏)の地域差を析出する分析精度が求められる。

現在筆者らは、地球科学的高精度分析手法を用いて、特徴的胎土や型式ではない日常土器を対象に、地質環境に即した細かな差異の析出を可能とする胎土分析方法を開発中である(石田ほか 2011)。本稿では、福岡市教育委員会からご提供いただいた久保園遺跡・那珂遺跡出土弥生土器および那珂遺跡採取白色粘土(阿蘇-4 火砕流堆積物)の分析結果の報告を行うことで、北部九州地域の弥生社会を研究する上で重要な那珂川・御笠川流域における基礎データを提示する。

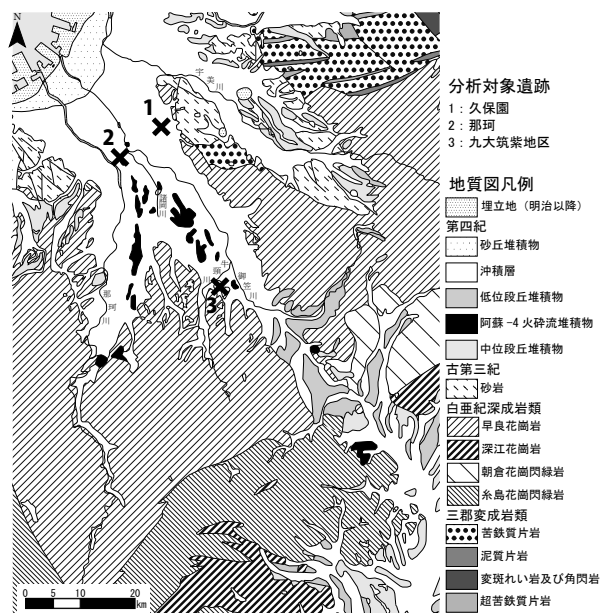
2. 分析対象資料

(1) 対象遺跡の立地と地質環境(第 1・2 図)

福岡平野は、花崗岩を主体とする地質帯および沖積地で構成される地域である。久保園遺跡は、三



第 1 図 福岡平野の地形および遺跡立地



第 2 図 福岡平野の地質環境

第1表 分析対象土器観察表

No	Sample ID	遺跡名	遺構名	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	胎土				色調		調整		焼成	備考
							石英	長石	金雲母	赤色粒子	外面	内面	外面	内面		
							量 (mm)	量 (mm)	量 (mm)	量 (mm)						
1	KBZ01	久保園4	F区SD091_砂層	甕	[31.4]	6.8+	◎ 1~2	◎ 1~2	△ 1<	— —	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR6/2	ハケメ	ナデ	やや不良	*
2	KBZ02	久保園4	F区SD091_砂層	甕	[30.2]	4.7+	◎ 1~3	◎ 1~3	△ 1<	△ 1~2	橙 5YR7/6	にぶい橙 5YR6/4	ナデ	ナデ	良好	*
3	KBZ03	久保園4	F区SD091_砂層	甕	[31.0]	6.2+	◎ 1~3	◎ 1~3	△ 1<	△ 1~5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	ナデ	ナデ	良好	*
4	KBZ04	久保園4	F区SD091_砂層	甕	[40.0]	5.5+	◎ 1~5	◎ 1~5	· 1<	— —	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/3	ナデ	ナデ	良好	*
5	NAK01	那珂130	SK14	甕	[39.0]	3.3+	● 1~3	● 1~3	· 1<	— —	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	ナデ	ナデ	良好	*
6	NAK02	那珂130	SK14	甕	[25.0]	1.9+	△ 1~2	△ 1~2	· 1<	· 1	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	ナデ	ナデ	良好	*丹塗?
7	NAK03	那珂130	SK14	甕	[35.0]	2.6+	● 1~5	● 1~5	— —	— —	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	ナデ	ナデ	良好	*
8	QKS01	九大筑紫地区	8B区_SK101	甕	[26.0]	6.0+	◎ 1~3	◎ 1~3	— —	· 1	にぶい橙 5YR7/4	橙 7.5YR7/6	ナデ	ナデ	良好	
9	QKS02	九大筑紫地区	8B区_SK101	甕	[30.4]	5.5+	◎ 1	◎ 1	◎ 1≤	— —	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/3	ナデ	ナデ	やや不良	*
10	QKS03	九大筑紫地区	8B区_SK101	甕	[33.0]	7.5+	◎ 1~5	◎ 1~5	— —	△ 1	にぶい赤褐 5YR5/3	にぶい赤褐 5YR5/3	ナデ	ナデ	良好	*
11	QKS04	九大筑紫地区	8B区_SK101	甕	[48.0]	10.2+	◎ 1~5	◎ 1~5	◎ 1~5	◎ 1~3	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい橙 7.5YR7/4	ナデ	ナデ	良好	

【復元値】 復元値 ●：非常に多量/◎：多量/○：並/△：少量/·：微量/—：なし

*器面摩滅

那珂成岩類が貫入する月隈丘陵の西側斜面にある。また、那珂遺跡は、那珂川と御笠川の間に散在する阿蘇-4火砕流堆積物からなる台地上に位置する。沖積地に立地する両遺跡の対照資料として、早良花崗岩で構成される春日丘陵から派生した段丘上に位置する九大筑紫地区遺跡を扱う。なお、遺跡間距離は、久保園-那珂は約4.0km、那珂-九大筑紫地区は約7.2km、久保園-九大筑紫地区は約8.4kmである。

(2) 弥生土器 (第1表・第3図)

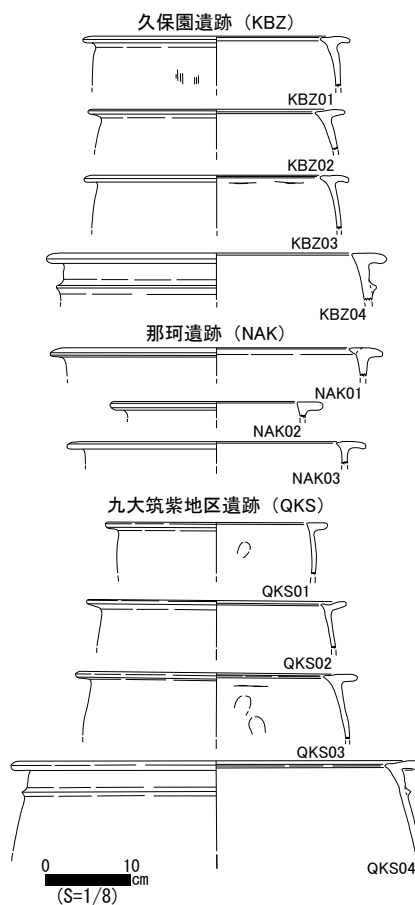
久保園遺跡 (略称：KBZ) は、第4次調査F区SD091溝砂層から出土した弥生土器4点を対象とする。遠賀川以西系須玖式土器の中型の甕形土器である。弥生時代中期後半 (須玖Ⅱ式古段階) にあたる。

那珂遺跡 (略称：NAK) は、第130次調査SK14土坑から出土した弥生土器3点を対象とする (石田ほか2012)。遠賀川以西系須玖式土器の中型の甕形土器である。時期は、弥生時代中期中頃~後半 (須玖Ⅰ式新段階~須玖Ⅱ式古段階) に相当する。

また、上記二遺跡の対照資料として、九大筑紫地区遺跡 (略称：QKS) の8B区SK101土坑出土の弥生土器4点を扱う。遠賀川以西系須玖式土器の中型の甕形土器である。時期は、弥生時代中期前半~中頃 (須玖Ⅰ式古段階~新段階) である。

(3) 阿蘇-4火砕流堆積物 (白色粘土)

粘土は、福岡市教育委員会から、那珂遺跡第130次調査地点のSE019井戸 (七世紀後半頃) の最下面 (標高約5.5m) で検出された白色粘土 (略称：NAK-C) の提供を受けた。白色粘土は、輝石角閃石デイサイト溶結凝灰岩及び非溶結のガラス火山灰・軽石で構成される阿蘇-4火砕流堆積物である。阿蘇-4火砕流堆積物は、風化した場合の色調変化が著しく、地下水面上は黄橙色あるいは暗赤褐色軽石質火山灰 (鳥栖ローム層)、地下水面以下は乳白色粘土 (八女粘土層) と区別される (下山1989; 久保ほか1993; 唐木田ほか1994)。



第3図 分析対象土器実測図

3. 分析方法

土器は、口縁部直下胴部付近（2 cm四方程度）の試料を採取し、内外面の風化部分を研削した後、洗浄した。まず、水道水を用いて5分間超音波洗浄、続いてイオン交換水を用いて2度超音波洗浄を行った。次に、110℃で48時間以上乾燥させた。粘土は、付着物のない均質面を出すため、洗浄したプラスチックナイフを用いて、15 cm角粘土塊の表面から3～5 cmを削った。トリミングした粘土塊を110℃の恒温乾燥機で一週間乾燥させた。

乾燥した土器および粘土は、ステンレス製乳鉢を用いて粗く粉碎し、さらにタングステンカーバイド製振動ミルで150秒間細砕した。得られた粉末試料約6 gを秤量済みの磁製るつぽに計りとり、110℃の恒温乾燥機で12時間乾燥させた。次に、880℃のマッフル炉で2.5時間強熱乾燥させた。得られた減量分をそれぞれ、 H_2O および H_2O^+ とした。

乾燥後の粉末から、ガラスビード試料を作成した（中野ほか2009）。ガラスビード作成には、融剤は $Li_2B_4O_7=20\%$ 、 $LiBO_2=80\%$ の混合試薬（Johnson-Matthey 社製 Spectro flux 100 B）、剥離剤は無水ヨウ化リチウムを用いた。まず、電子天秤を用いて試料 1.8000 g と融剤 3.6000 g（混合比 = 1 : 2）を正確に秤量しメノウ乳鉢で混合した。この際、試料の粒度ができるだけ細くなるよう留意した。混合後、粉末を残らず白金るつぽに移し、ビードサンプラー（東京科学社製 NT-2120）を用いてガラスビードを作成した。ビードサンプラーの融解条件は、予備加熱は 800℃ で 60 秒、本加熱は 1200℃ で 180 秒、騒動加熱は 1200℃ で 330 秒（揺動）で行なった。揺動中に剥離剤をマイクロスペーテル 1 杯分加えた。溶融後、白金るつぽから試料を取り出せない場合は、剥離剤をマイクロスペーテル 1 杯加え、再溶融させた。

ガラスビード試料を用いて、各元素の測定を行った。測定には、九州大学比較社会文化研究院所有の蛍光 X 線分析装置（XRF）およびレーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計（LA-ICP-MS）を用いた。蛍光 X 線分析装置（リガク製 ZSX primus II）では、主要 10 元素 [$SiO_2 \cdot TiO_2 \cdot Al_2O_3 \cdot Fe_2O_3 \cdot MnO \cdot MgO \cdot CaO \cdot Na_2O \cdot K_2O \cdot P_2O_5$]（wt%）および微量 12 元素 [V・Cr・Zn・Ga・Ni・Cu・Rb・Sr・Y・Zr・Nb・Ba]（ppm）を測定した。レーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計（レーザー：New Wave Research 製 UP-213；ICP-MS：Agilent 7500 cx）では、希土類元素 [La・Ce・Pr・Nd・Sm・Eu・Gd・Tb・Dy・Ho・Er・Tm・Yb・Lu] および Hf・Ta・U・Pb・Th（ppm）を測定した。標準試料には SRM-612（National Institute of Standard and Technology 製ガラス標準試料）を使用し、定量値の正確度は JB-3 ガラスビード（地質調査所粉末標準試料）を用いてチェックした。内標準には、XRF による Y の定量値を使用した。詳細な測定条件は、XRF は中野・角縁ほか（2009）および中野・小山内ほか（2012）、LA-ICP-MS は Nakano et al.（2010）および中野・小山内ほか（2012）を参照されたい。

4. 分析結果および考察

（1）弥生土器の分析結果（第 2 表）

多元素測定を行い、地質環境に応じた適切な地域（遺跡）区分の指標となる元素を選択した。特に、レアアース（希土類元素；rare earth element：REE）に着目した。レアアースは、風化・変質による元素移動や地下水への溶解度が小さいなど胎土そのものの元素組成を保持し、その組成は地質環境によって異なることから、各胎土の特徴を正確かつ敏感に示す。この特徴は、埋没環境の影響が不可避である埋蔵文化財資料を分析する上で非常に有効である。また、胎土の微量元素の中でも、二次作用で移動しにくい微量元素（特に HFS 元素；Rollinson 1993）は明瞭な地域差を示す指標となりうる。ここでは、安定した基準軸の設定のために、レアアースと地域に特徴的な微量元素を組み合わせること

第2表 分析対象試料元素測定結果

	KBZ01	KBZ02	KBZ03	KBZ04	NAK01	NAK02	NAK03	QKS01	QKS02	QKS03	QKS04	NAK-C
(wt%)												
SiO ₂	64.82	63.47	60.74	63.50	60.89	55.90	68.39	60.62	55.16	58.64	55.04	45.86
TiO ₂ ●	0.76	0.77	0.79	0.85	0.70	0.80	0.76	0.77	0.87	0.59	0.88	1.22
Al ₂ O ₃	21.50	21.75	22.99	23.01	21.30	25.71	18.47	20.75	23.65	20.58	19.59	33.63
Fe ₂ O ₃	5.68	6.22	5.27	4.04	5.04	4.00	1.84	4.19	4.64	4.30	7.00	4.29
MnO	0.07	0.05	0.07	0.04	0.04	0.03	0.01	0.10	0.09	0.10	0.05	0.04
MgO	0.72	0.61	0.77	0.88	0.41	0.26	0.22	0.33	0.84	0.43	0.47	0.50
CaO	0.89	0.86	1.06	1.19	0.79	1.15	0.25	0.67	0.80	0.36	0.78	0.88
Na ₂ O	1.77	1.79	2.05	2.46	1.83	2.45	0.78	1.93	1.65	0.64	1.55	0.60
K ₂ O	2.83	2.76	2.61	2.52	2.60	1.98	2.72	2.61	2.15	2.63	2.45	0.34
P ₂ O ₅	0.16	0.30	0.71	0.29	0.34	0.79	0.53	2.48	2.41	2.95	4.01	0.09
H ₂ O+	0.85	1.27	2.39	1.25	5.64	6.10	5.48	4.16	6.49	6.41	5.92	11.60
H ₂ O-	0.19	0.27	0.40	0.24	0.60	1.18	0.72	1.05	1.16	2.04	0.63	0.76
Total	100.23	100.12	99.85	100.27	100.17	100.34	100.16	99.65	99.91	99.67	98.39	99.81
(ppm)												
V	61.9	60.2	56.4	64.2	60.7	49.3	60.9	46.5	69.6	53.0	90.8	51.1
Cr	48.3	43.6	36.4	43.5	32.9	42.3	53.2	28.5	29.5	27.5	48.2	9.4
Ni	2.49	4.85	7.57	4.65	13.62	7.95	7.37	7.98	15.87	11.10	19.03	4.74
Cu	8.03	6.21	14.20	15.34	12.75	9.76	8.89	13.18	21.22	11.24	124.33	7.86
Zn	81.1	85.6	93.3	101.9	82.3	59.8	31.9	67.9	149.5	90.9	106.4	139.0
Ga	26.4	27.0	28.9	29.4	25.8	32.8	23.8	28.8	30.6	26.3	25.3	33.9
Rb	108.1	105.9	102.9	103.4	97.5	71.4	99.9	116.4	111.6	112.3	135.6	20.9
Sr	176	181	205	210	166	214	98	257	224	145	236	166
Y ●	19.1	20.2	22.5	24.8	16.0	16.3	15.7	24.9	22.5	17.4	23.2	46.3
Zr ●	250	228	302	322	225	376	293	272	291	242	228	485
Nb ●	17.0	16.7	18.7	18.2	15.9	23.9	16.7	35.0	25.6	21.3	20.6	25.0
Ba	702	767	854	691	616	484	661	1080	969	997	1354	1514
La ●* 1	26.73	24.91	27.78	26.16	21.09	42.81	27.67	43.78	39.83	39.33	29.14	54.42
Ce ●* 1	49.61	42.34	54.86	52.38	41.87	81.16	52.25	85.85	84.55	79.31	56.37	122.93
Pr ●* 1	5.68	5.02	6.06	5.96	4.76	8.82	5.72	9.19	8.87	7.89	6.73	15.77
Nd ●* 1	21.54	19.69	23.63	22.55	18.08	31.60	21.11	33.14	32.70	28.40	26.04	61.07
Sm ●* 1	4.01	3.74	4.59	4.42	3.52	5.22	3.75	6.23	6.25	4.76	5.35	12.55
Eu ●*	0.87	0.79	0.99	0.99	0.78	0.86	0.56	1.46	1.42	0.89	1.33	2.88
Gd ●* 2	3.55	3.54	3.90	3.85	3.03	3.89	3.00	5.16	4.87	3.67	4.64	9.88
Tb ●* 2	0.52	0.49	0.56	0.55	0.46	0.50	0.47	0.76	0.71	0.60	0.74	1.49
Dy ●* 2	3.16	3.25	3.33	3.29	2.77	2.87	2.63	4.39	4.11	3.01	4.42	9.01
Ho ●* 2	0.64	0.69	0.65	0.64	0.55	0.56	0.56	0.81	0.76	0.54	0.85	1.79
Er ●* 2	1.87	1.87	1.86	1.81	1.58	1.62	1.59	2.27	2.15	1.67	2.49	5.30
Tm ●* 2	0.28	0.30	0.28	0.27	0.24	0.25	0.28	0.35	0.33	0.26	0.39	0.80
Yb ●* 2	1.95	1.97	1.87	1.82	1.68	1.82	1.78	2.38	2.21	1.80	2.58	5.78
Lu ●* 2	0.29	0.30	0.29	0.28	0.25	0.29	0.28	0.35	0.33	0.31	0.42	0.86
Hf ●	7.92	7.29	7.93	7.13	6.86	10.64	8.35	8.69	9.25	8.42	7.51	13.15
Ta ●	1.92	1.48	1.63	1.43	1.67	2.23	1.59	3.07	1.95	1.90	1.86	2.42
Pb ●	23.36	21.66	22.35	17.93	21.73	25.09	25.42	34.23	27.72	27.67	27.06	37.98
Th	13.25	12.21	11.90	10.12	12.03	19.82	15.38	16.68	16.76	17.43	12.60	25.89
U	1.89	1.58	1.78	1.64	1.80	2.56	1.97	5.04	3.45	2.75	3.07	4.59

*希土類元素：1 軽希土類元素 (light rare earth element : LREE) ・2 重希土類元素 (heavy rare earth element : HREE) / ● HFS 元素

で、相対的な割合を検討した(第4図)。弥生土器の分析結果は、以下三点である。

①地域内でも、基本的に遺跡ごとに元素分布がまとまる。特に、KBZは集中度が高い。また、QKSも集中度が高く、約8km離れたKBZとQKSは、LaとCrで明瞭に区分可能である。なお、Crは三郡山地の苦鉄質片岩に、Laを含む希土類元素は那珂川上流域を中心とする脊振山地の早良花崗岩に濃集して分布する(今井ほか2004・2010; 柚原2010)ことから、土器の元素組成は遺跡が立地する地質環境を反映する点が指摘できる。

②NAKは、特定の集中を示さず、分布がばらつく点の特徴である。これは、1) 那珂遺跡が御笠川・諸岡川の合流地点および那珂川に挟まれた台地上に位置することから、複数の河川上流域に由来する地質構成物質が土器に含まれている可能性、2) ヒトの動きの集約点として近隣集落間で土器が移動した可能性、の二つの可能性を示唆しており、遺跡の性格と立地条件を考慮する必要がある。

③遺跡ごとのまとまりから外れる個体 (KBZ03・QKS04 など) が認められる。これは、近隣集落間のヒトの移動の結果持ち運ばれた土器である可能性も指摘できるが、分析資料を増やして、各遺跡および周辺環境の特徴を把握した上で評価する。

(2) 粘土の分析結果

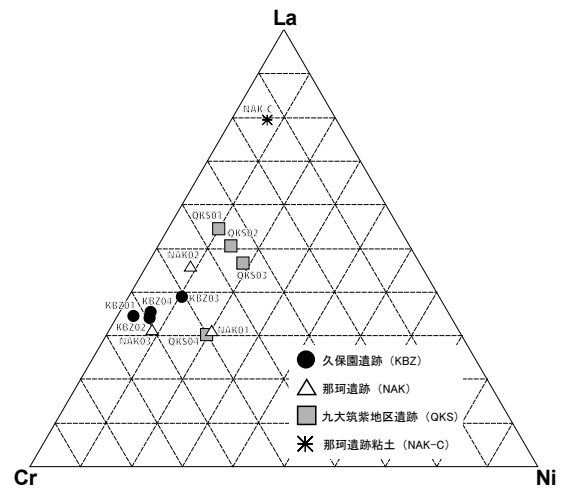
弥生土器の原材料を検討するために、弥生土器と那珂遺跡採取粘土の元素組成および希土類元素存在度 (REE) パターンを比較した。粘土の分析結果は、以下三点である。

①土器と粘土の重希土類元素存在度 (HREE) パターンが整合する (第5・6図) ことから、土器の材料として阿蘇-4火砕流堆積物を使用した可能性が高い。しかし、各遺跡出土弥生土器と粘土の元素組成を比較する (第4図) と、1) 粘土だけでは土器の値と一致しない点、2) 遺跡単位で差異が見られる点から、土器の元素組成に混和材の種類・配合量が大きく影響することが指摘できる。

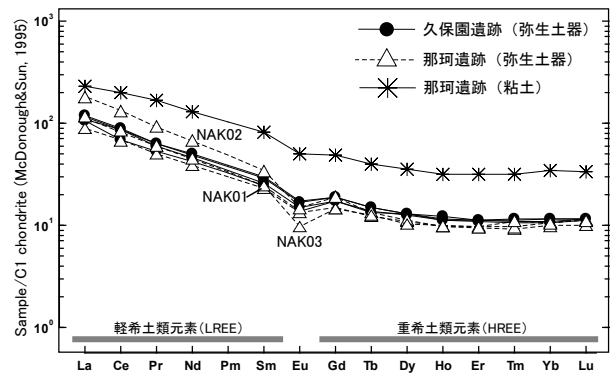
②混和材の種類としては、1) 一定量中に占める希土類元素の割合が土器は低くなる点、2) 軽希土類元素存在度 (LREE) パターンが粘土と弥生土器で異なる点から、周囲の花崗岩に由来するレアアースを含まない石英粒を混入したことが想定される。さらに、CrやNiを含む角閃石などの鉱物を混和した可能性も指摘できる (第4図)。

③弥生土器のREEパターンを比較すると (第5・6図)、KBZおよびQKSは遺跡ごとに類似したまとまりのあるパターンを示し、明瞭に区分することができる。しかし、NAK02はLREEに富み、NAK03はEuが少ないなど、NAKは多様なパターンを示す (第5図)。

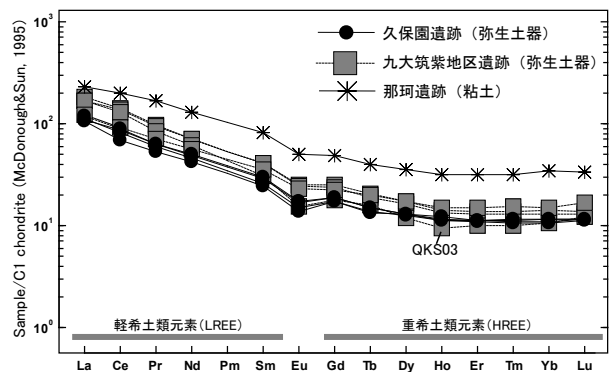
なお、鐘ヶ江賢二氏は、土器の原材料を明らかにするために、比恵・那珂遺跡群出土弥生土器と阿蘇-4火砕流堆積物の主成分元素を対象とした蛍光X線分析による化学組成、偏光顕微鏡観察に基づく鉱物組成の検討を行った (鐘ヶ江 2002・2007)。その結果、遺跡の基盤をなす阿蘇-4火砕流堆積物と那珂川・御笠川流域の花崗岩の双方を土器の材料とした可能性、さらにFe (鉄) や角閃石・輝石を含む土器鉱物組成に基づいて塩基性岩由来の粘土 (鉱物) を混和した可能性を指摘している。これは本稿の分析結果とも整合する見解であるが、いずれも可能性の指摘に留まるため、今後継



第4図 遺跡別元素分布 (Cr-La-Niの相関)



第5図 REE パターンの遺跡間比較 (KBZ-NAK)



第6図 REE パターンの遺跡間比較 (KBZ-QKS)

続して粘土を収集し、さらなる検討を行う必要がある。

5. おわりに

今回の分析では、本研究手法を用いることで、約 10 km 圏レベルの近隣集落間の土器移動現象にアプローチできる見通しを得た。今後は、対象地域を広げて元素分析を多く実施するとともに、研磨薄片による岩石の構成鉱物（偏光顕微鏡）、鉱物化学組成（EPMA）、粘土鉱物化学組成（LA-ICP-MS）を複合的に分析することで、元素組成の差異が生じる要因を検討し、これまでに得られた仮説を検証する。さらに、胎土分析結果を考古学的研究成果と統合することで、特に生産と移動に関する土器動態に基づく地域内/間交流の実態解明が期待される。

主要参考文献

- 今井登・寺島滋・太田充恒ほか（2004）『日本の地球化学図』、産業技術総合研究所地質調査総合センター。
- 今井登・寺島滋・太田充恒ほか（2010）『海と陸の地球化学図』、産業技術総合研究所地質調査総合センター。
- 石田智子・米村和絃・足立達朗・中野伸彦・小山内康人・田中良之（2011）希土類元素による胎土分析、『考古学と地球科学—融合研究の最前線—』、九州考古学会・日本地質学会西日本支部合同大会, pp.20-22.
- 石田智子・米村和絃・足立達朗・中野伸彦・小山内康人・田中良之（2012）弥生土器および粘土の胎土分析, 板倉有大編『那珂63』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1158 集, 福岡市教育委員会, p.26.
- 鐘ヶ江賢二（2007）『胎土分析からみた九州弥生土器文化の研究』, 九州大学出版会。
- 鐘ヶ江賢二・三辻利一・上野禎一（2002）比恵・那珂遺跡群出土弥生土器の胎土分析, 『人類史研究』13, 人類史研究会, pp.137-153.
- 唐木田芳文・富田宰臣・下山正一・千々和一豊（1994）『福岡県の地質』地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）, 地質調査所。
- 久保和也・松浦浩久・尾崎正紀・牧本博・星住英夫・鎌田耕太郎・広島俊男（1993）20 万分の 1 地質図幅「福岡」, 地質調査所。
- 三辻利一（1983）『古代土器の産地推定法』, ニューサイエンス社。
- 中野伸彦・角縁進・小山内康人・米村和絃・桑原義博（2009）低希釈率ガラスビードを用いた主成分・微量・軽希土類元素の定量, 『比較社会文化』第 15 巻, 九州大学大学院比較社会文化学府, pp.1-15.
- 中野伸彦・小山内康人・足立達朗・米村和絃・吉本紋・Setiawan, N.（2012）蛍光 X 線分析装置・レーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計を用いた低希釈率ガラスビードの主成分・微量・希土類元素の迅速定量分析, 『比較社会文化』第 18 巻, 九州大学大学院比較社会文化学府, pp.81-94.
- Nakano, N., Osanai, Y., Adachi, T.（2010）Major and trace element zoning of euhedral garnet in high-grade (> 900 ° C) mafic granulite from the Song Ma Suture zone, northern Vietnam. *Journal of Mineralogical and Petrological Sciences*. 105 : 268-273.
- Renfrew, C., Bahn, P.（2004）*Archaeology : Theories, Methods, and Practice, the Fourth Edition*. Thames & Hudson, London.
- Rollinson, H.R.（1993）*using geochemical data : evaluation, presentation, interpretation*. Longman Group, UK.
- 下山正一（1989）福岡平野における縄文海進の規模と第四紀層, 『九州大学理学部研究報告（地質学）』16（1）, 九州大学理学部, pp.37-58.
- 脇田浩二・井川敏恵・宝田晋治編（2009）『20 万分の 1 日本シームレス地質図 DVD 版』数値地質図 G-16, 産業技術総合研究所地質調査総合センター。
- 柚原雅樹（2010）福岡県内の地球化学図, 『福岡大学研究部論集 C : 理工学編』Vol.2, 福岡大学研究推進部, pp.91-107.

図版出典

第 1 図：国土地理院発行の数値地図 50 m メッシュ（標高）、国土交通省発行の国土数値情報（河川・海岸線）を使用し、ArcGIS9.3.1 で作成。第 2 図：20 万分の 1 日本シームレス地質図（脇田ほか編 2009）、国土交通省発行の国土数値情報（河川）を使用し、Adobe IllustratorCS2 で作成。第 4～6 図：PetroGraph Version2 beta で作成。第 3 図および第 1・2 表：筆者作成。

謝辞

久保園遺跡・那珂遺跡出土土器の資料収集および報告にあたっては、福岡市教育委員会の板倉有大氏・今井隆博氏に御協力いただきました。また、九大筑紫地区遺跡出土土器の資料収集および報告にあたり、九州大学埋蔵文化財調査室の田尻義了氏に便宜を図っていただきました。末筆ながら記して感謝の意を表します。

本研究は、平成 22・23 年度九州大学教育研究プログラム研究拠点形成プロジェクト（P&P）「高精度元素・同位体分析システムを用いた原始古代人口移動・物流ネットワークの研究」（代表：田中良之）の成果の一部である。

付編 3 福岡市の遺跡にみられる古代律令期の灌漑水利

朝岡俊也 (福岡大学人文学部)

福岡市内の遺跡では、水田跡や堰などの水利施設が多く検出されており、灌漑技術を通史的に考える上で重要な地域であるが、律令期の事例は多くない。しかし、久保園遺跡をはじめとした席田地域の遺跡からは当該期の良好な資料が発見されており、注目される(表1)。

古代の「席田郡」に含まれる久保園遺跡・雀居遺跡・下月隈C遺跡の各遺跡では、水田跡が検出されている。いずれも8～9世紀を中心として大規模に展開するため、これらの水田は条里制の下で整備された可能性が高い。また、周辺の東那珂遺跡でも8世紀代の水田が検出されている(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』(以下、『市報』)959集)。

下月隈C遺跡では、近世の「屏風返し」に類似する護岸施設(『市報』932集)や、粗朶・藁などを敷き込んだ土堤や畦(『市報』881集)などの新たな技術がみられる。その出現背景には、付近に大宰府と鴻臚館を結ぶ官道が通ることや、席田郡の成立に新羅人が関与した可能性があること(日野2005)などとの関連が考えられる。

福岡市周辺遺跡の事例からみると、堰や護岸の構造において、縦杭の間を縫うように細い横木を重ねる「しがらみ」とよばれる方式が律令期以降に増加する傾向があり、下月隈C遺跡(『市報』932集)や戸原麦尾遺跡(『市報』217集)などで類例がある。この方式は、百済羅城では土留めとして(山本2009)、日本の中世期では盛り土や水利施設などで幅広く活用された。今回の報告で畦と推測された杭列(I区1面杭列A～D)も、この構造の一部が遺存したものである可能性がある。

また、今回の調査では貯水遺構(I区SD0029)も検出された。水田に伴う貯水遺構には、灌漑用に湧水を得るための「溜井」(例：三苦永浦遺跡—『市報』476集)や、水田に直接導水するには冷たすぎる水を溝や土坑で一旦温める「ぬるめ」(例：梅林遺跡—『市報』789集)、畦の補強とともに施肥を行う「置簀」(例：三筑遺跡—『市報』69集)などの機能が想定される。SD0029は、主に河川からの導水で取水したと想定されるため溜井とは考えにくく、また、ぬるめは一般的に浅いため性格を異にする。置簀とするにも、類例と比較するとSD0029の規模はやや大きすぎる。同時期にSD0029と同規模の貯水遺構は市内の遺跡に類例がみられないが、やや規模は小さいものの、那珂深ヲサ遺跡で検出された8世紀代の第1号堅穴(『市報』82集)は水田に伴う貯水施設であった可能性があり、墨書土器が出土する点で今回の調査成果と共通し、注目される(註)。

城南区の梅林遺跡では、現代の溜池の堤の下から、古代にまで遡りうる溜池の堤が検出されている。洪水被害の記事は文献にも多く残るが、それに伴う人々の移動は、戸籍を用いて人民を管理しようとする国家体制の確立・維持に障害となったに違いない。そこで、中央政権による国家的な大規模灌漑・治水事業が開始された時代、それがまさに古代律令期である。

人々がどのように水を制御し、現代のような水利システムを完成させていったのか。今後の事例増加と、畿内など他地域との比較を通じて、さらなる研究の進展が期待される。

(註) 下月隈C遺跡や雀居遺跡、井相田C遺跡などでも水田に伴って墨書土器が出土している。

参考文献

日野尚志 2005「比恵・那珂遺跡群を中心にして諸問題を考える」『那珂 38』福岡市埋蔵文化財調査報告書 842 集
山本孝文 2009「百済羅城出土木製施設の土木技術史的検討」『木・ひと・文化』出土木器研究会

表 1. 福岡市内の古代水田・灌漑遺構検出遺跡一覧（7～10世紀）

遺跡名	所在地	水田層	畦	堰	護岸	その他 杭列	貯水施設	報告書
那珂深ヲサ遺跡	博多区那珂	○※					ぬるめ？	市報 82
那珂君休遺跡	博多区那珂			○		○ (護岸？)		市報 208
東那珂遺跡	博多区東那珂	○	○					市報 959
板付遺跡	博多区板付	○						市報 83
井相田C遺跡	博多区井相田	○	○	?※ (板組)				市報 152・519
仲島遺跡	博多区井相田			○				市報 1037
雀居遺跡	博多区雀居	○	○			○ (護岸？)		市報 322・565・ 746・747・748
下月隈C遺跡	博多区月隈	○	○	○	○	○	置簀？	市報 566・750・ 795・839・881・ 932
久保園遺跡	博多区東平尾	○				○ (畦？)	○	今回報告
野多目前田遺跡	南区野多目				○			市報 85
井尻B遺跡	南区井尻	○※						市報 736
笠拔遺跡	南区横手南町					○ (堰?護岸?)		市報 1071
柏原M遺跡	南区柏原			石積み 堰？				市報 191
下山門遺跡	西区生の松原					○※		市報 23
拾六町ツイジ遺跡	西区拾六町	○	○					市報 92
野方久保遺跡	西区野方	○※	○※					市報 348
橋本一丁田遺跡	西区福重					○ (護岸？)		市報 816
十郎川遺跡	西区十郎川団地					○ (護岸？)		住宅・都市整備公 団『十郎川』
吉武遺跡群	西区飯盛					○※ (水口)		市報 675
城田遺跡	西区金武	○※						市報 1016
野芥大藪遺跡	早良区賀茂			○				市報 581
梅林遺跡	城南区梅林	○	○	?	?		溜池※ ぬるめ？	市報 648・698・ 789
元岡・桑原遺跡群	西区桑原	○※	○※		○	○		市報 722・860
能古島遺跡	西区能古						溜池	市報 354

※印は時期が異なる可能性がある。

付編 4 久保園遺跡第 4 次調査出土玉類に関する保存科学的調査

西澤千絵里 (福岡市埋蔵文化財センター)

はじめに

久保園遺跡第 4 次調査からは、緑色勾玉 1 点とガラス小玉 7 点が出土している。福岡市埋蔵文化財センターではこれまで福岡市内から出土したガラス関連資料や石製玉類について、自然科学的調査を実施しており、そのデータの蓄積と報告を継続的におこなっている〔比佐・片多ほか 2000、比佐 2007 ほか〕。久保園遺跡第 4 次調査出土の玉類についても、分析機器を使用した製作技法と材質の調査を試みた。調査は、実体顕微鏡を用いた表面観察、蛍光 X 線分析装置を用いた材質の同定をおこなった。実体顕微鏡を用いた観察では、遺物表面とガラス小玉の内部に見られる気泡の状況を観察した。蛍光 X 線分析装置を使用した材質調査は完全非破壊の定性分析をおこなった (エダックス社製 Eagle μ probe/対陰極:モリブデン (Mo)/検出器:半導体検出器/印加電圧・電流値:(緑色勾玉:30 kv・420 μ A) (ガラス玉:20~25 kV・440~615 μ A) /測定雰囲気:真空/測定範囲 0.3 mm ϕ /測定時間 120 秒)。

1. 勾玉の調査

勾玉は濃い緑色を呈し、表面の一部には灰白色や黒色の筋が確認できる石製の玉である。

蛍光 X 線分析の結果、勾玉からはアルミニウム、ケイ素、カリウム、チタン、クロム、鉄、ルビジウムの元素が明瞭なピークとして検出できた。クロムの検出が特徴的で、クロムが検出される玉類の石材には、クロム白雲母と硬玉が挙げられる。クロム白雲母は、個体によって濃淡の差はあるものの緑色で、一部に白や黒、灰色の夾雑物を持つものがある石材である。硬玉は鮮やかな緑色や緑色に白色、灰色の混じるもの、緑色でないものもある石材で、蛍光 X 線分析ではナトリウムが微量ながらも反応するという点でクロム白雲母と違いがある〔比佐 2007〕。このほか比重についても、クロム白雲母は 2.8 前後、硬玉は 3~3.5 と差があり、本資料についても比重の測定をおこなった。その結果、勾玉の比重は 2.8495 であった。ナトリウムが見られない点や比重、外見的特徴から考えると、本資料の材質はクロム白雲母であると思われる。

2. ガラス小玉の調査

ガラス小玉は赤橙色のもの以外は極めて小型で、色調から淡青色 3 点・青紺色 1 点・黄緑色 2 点・赤橙色 1 点の 4 種類に分けることができた。比重の測定についてもおこなったが、非常に小さく軽量のため計測不能のものもあり、全ての計測はできなかった。資料数も少ないため数値の信頼性に欠けるが、比重は淡青色の小玉は平均 3.0626、青紺色の小玉は 2.0625 であった。

顕微鏡観察、蛍光 X 線分析の結果は、以下に色調ごとにまとめることにする。

① 淡青色ガラス小玉

淡青色のガラス小玉は、顕微鏡で観察すると透明感が強く、内部の気泡の状況が観察できた。気泡は単独の大きなものや孔部に平行して列状に並ぶ状況が確認できる。列状の気泡は、ガラスを引き伸ばした際に出来る気泡筋を加熱することによってあらわれる痕跡である。気泡列はさらに加熱されると気泡同士が集まり、大きな気泡になることがわかっており、淡青色のガラス小玉は引き伸ばし技法で玉をつくり、切断後に再加熱して玉を整形したものと思われる〔小瀬 1987〕。

これら淡青色のガラス小玉からは蛍光X線分析によって共通して、アルミニウム、ケイ素、カリウム、カルシウム、チタン、鉄、銅、鉛が検出された。カリウムの反応が強く、銅の反応も強く現れており、銅を着色材にしたカリガラスであると思われる。

②青紺色ガラス小玉

青紺色のガラス小玉は1点のみの出土である。顕微鏡観察では、黒色と赤褐色の混和物のほか、細長く伸びる気泡筋や単独の気泡が確認でき、このガラス小玉も引き伸ばし法製作の後に再加熱されたものと思われる。蛍光X線分析では、アルミニウム、ケイ素、カリウム、カルシウム、チタン、マンガン、鉄、コバルトが検出され、淡青色ガラス小玉と同様にカリガラス製であった。淡青色カリガラスと色調が異なるのは、マンガンの不純物に含むコバルトを着色剤にしていることによる。

③黄緑色ガラス小玉

他の色調の玉に比較してさらに小型の玉が2点出土している。1点はあまり厚みのない扁平な小玉で、もう一点は厚みが径より上回り、側面の一部が瘤状に隆起している資料である。2点とも透明感が淡青色・青紺色ガラスより低い。顕微鏡観察をおこなうと内部には、黒色～茶褐色の混和物と気泡が観察できた。厚みが径を上回る資料には大きな単独の気泡が複数確認できた。もう一点の厚みのない資料には、孔の方向に対し若干斜方向にのびる気泡列が数条確認できた。気泡は球形で銀色の金属光沢のあるものが確認でき、これまでのガラス製品内部に見られる気泡が大きさや位置に関わらずガラスと同系色で確認できていたのに対し、この資料の気泡部分はガラスとは異なる色調で、光の当て方を変えても銀色の光沢を持っていた。単独の気泡と気泡列の状況から、これらのガラス小玉も引き伸ばし技法による製作で、再加熱をおこなったものであると思われる。

球形の金属光沢の部分は電子顕微鏡を使用して観察と分析と試みた。電子顕微鏡は実体顕微鏡より高倍率での観察が可能で、さらに蛍光X線分析の最小照射範囲も実体顕微鏡に比較するとより小さく、ピンポイントで金属光沢部分の分析が可能であろうと考えた。しかし、電子像画像上では金属光沢部分は明瞭に写らず観察は出来なかった。また、蛍光X線分析もガラス部分の分析チャートと変化がない状況であった。蛍光X線分析の結果がガラス部分の分析結果と変化がない理由については、金属光沢部分はただの気泡である可能性や、うまく内部にX線が照射されなかった可能性、ガラスを構成する材質の金属が固化化したもので定性分析では明瞭な差が出なかった可能性などが考えられる。古墳時代の玉の中には鉄の塊が不純物として混じっていることがあるが、その場合鉄は塊状で黒く錆びた状態でガラス内に残っており、本資料の状況とは異なり、この金属光沢の要因を明らかにすることは出来なかった。

蛍光X線分析では、いずれの資料もナトリウム、マグネシウム、アルミニウム、ケイ素、カリウム、カルシウム、チタン、マンガン、鉄、銅、鉛のピークが検出された。カルシウムの反応がカリウムより強く現れており、また、ナトリウムの反応が微弱ながら確認できる点からソーダ石灰ガラスであると思われる。

④赤橙色ガラス小玉

ガラス小玉は半分を欠損しており、孔部が露出、黒褐色の金属線が残存している。顕微鏡観察では、小玉の表面に孔部の方向に対して垂直方向に筋が多数見られ、熔けたガラスを巻きつけてガラスを製作する巻き付け技法の痕跡と思われる。

蛍光X線分析では、アルミニウム、ケイ素、カリウム、カルシウム、鉄、亜鉛が検出された。このような元素を検出するガラス製品は近年福岡市では博多遺跡群を中心に数例見られるようになっていく資料で、近世のガラスであるカリ石灰ガラスであると思われる〔比佐ほか2010〕。金属線について

も分析をおこなった結果、鉄製であることが明らかになった。

まとめ

久保園遺跡第4次調査出土玉類は調査の結果、勾玉はクロム白雲母製、ガラスは全てアルカリ珪酸塩ガラスであることが明らかになった。クロム白雲母は九州で材質分析によって事例が増加しており、市内でも縄文時代後期末～晩期前半、古墳時代中期～後期の時期と思われる資料が出土しているが、多くが縄文時代の石製装身具に見られる〔比佐 2007〕。勾玉の出土した遺構は弥生時代以降の遺物が多く、石材が多く使用されている時期と若干ずれがある状況で、勾玉の形態からの検討では時期を明らかにすることが出来なかったが、久保園遺跡3次調査でも本資料とほぼ同形の勾玉が出土しており、他の出土事例などと比較をおこなうことで、より詳細を明らかにすることを今後試みたい。

ガラスは、引き伸ばし技法で製作された2種類のカリガラスとソーダ石灰ガラス、巻き付け技法製作のカリ石灰ガラスであった。青紺色カリガラス・淡青色カリガラス・黄緑色ソーダ石灰ガラスは出現時期は若干異なるもののいずれも弥生時代後期ごろに盛行しているガラスで、本遺跡出土のガラスは近世のガラス1点を除くと弥生時代後期のガラスの様相であった〔肥塚 2003a・b、肥塚ほか 2010〕。金属光沢の見られる気泡については、類例調査や別の方法での分析等も試みることで明らかにしたいと考える。

【参考文献】

- 肥塚隆保 2003a 「日本出土ガラスから探る古代の交易—古代ガラス材質の歴史の変遷—」『遺物の保存と調査』クバプロ
- 肥塚隆保 2003b 「日本出土ガラスの考古学的研究—古代ガラス材質の歴史の変遷—」『考古科学の総合的研究研究成果報告書』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター
- 肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010 「材質とその歴史の変遷」『月刊文化財 566号』文化庁文化財部
- 小瀬康行 1987 「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』第73号第2号 日本考古学会
- 比佐陽一郎 2007 「4.元岡・桑原遺跡群第27次調査出土石製小玉の石材について」『元岡・桑原遺跡群9』福岡市埋蔵文化財調査報告書第963集 福岡市教育委員会
- 比佐陽一郎・石井千絵里 2010 「博多遺跡群第172次調査出土のガラス関連資料について」『博多135』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1086集 福岡市教育委員会
- 比佐陽一郎 2011 「石製玉類の分析—九州地方の事例を中心として—」『古代の玉—最新の保存科学的研究の動向—』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

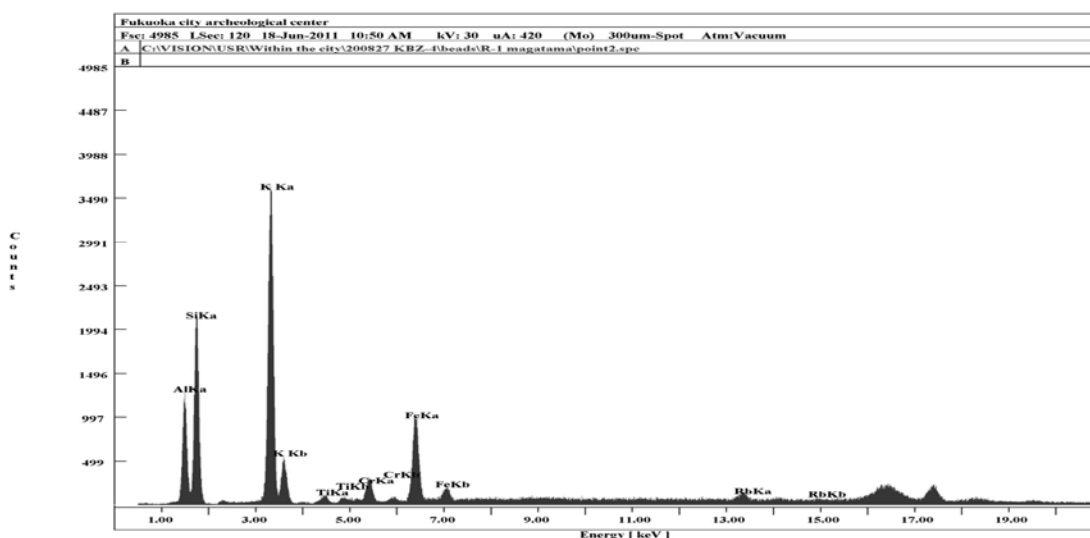


図1：緑色勾玉の蛍光 X 線分析チャート

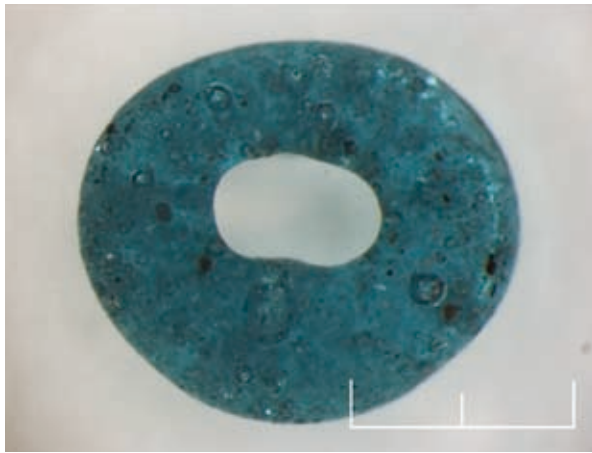


図2：Ⅰ区 SX0027 出土淡青色ガラス小玉
(倍率約 25 倍)

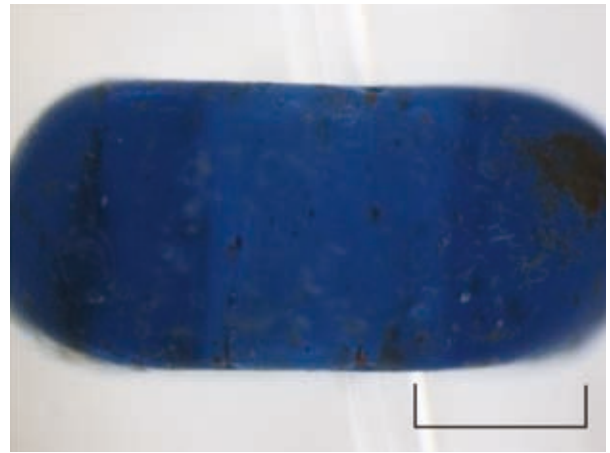


図3：Ⅲ区 F-6 出土青紺色ガラス小玉
(倍率約 40 倍)



図4：Ⅲ区 E-7 出土黄緑色ガラス小玉
(倍率約 32 倍)



図5：Ⅲ区 E-7 出土黄緑色ガラス小玉
(倍率約 40 倍)

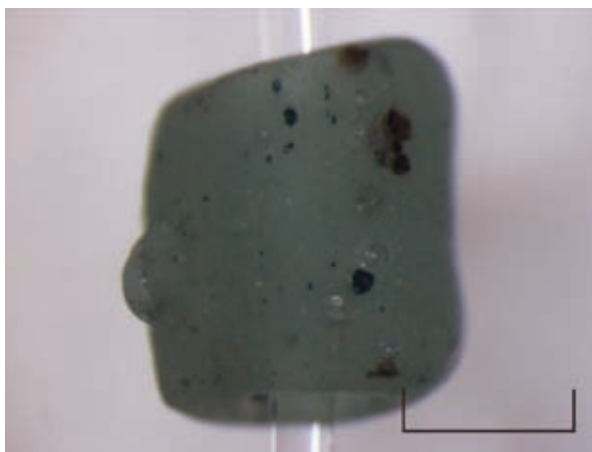


図6：Ⅰ区 SX0061 出土黄緑色ガラス小玉
(倍率約 40 倍)

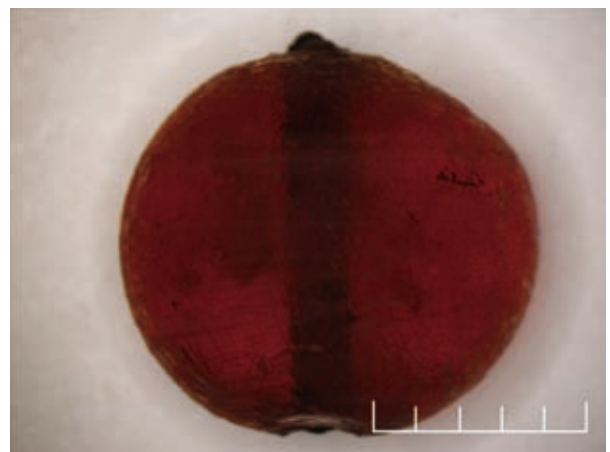


図7：Ⅰ区表採赤橙色ガラス小玉
(倍率約 10 倍)

付編5 久保園遺跡第4次調査出土の動物遺存体について

福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課 屋山 洋

1. 久保園遺跡は現在の福岡空港の東側に位置し、福岡平野の東を限る月隈丘陵とその西側に広がる沖積平野に立地する遺跡である。今回の4次調査地点は遺跡西側に位置し、南東部では丘陵端部、北西側では沖積地となり、遺構面の標高は約5～6mを測る。

各区とも出土した動物遺存体は遺存状態が悪く、地下水に含まれる鉄分と骨に含まれる燐が反応してピビアナイトが析出しており、骨の多くが取り上げ後に細片化している。そのため種を確定できた骨は少なく、確定できた骨も解体痕や被熱痕の有無について観察できた資料は少ない。同定の際は取り上げ時に1点として取り上げたものに関しては現在細片化したものでも1点とした。

今回の調査で動物遺存体の取り上げに際しては篩による選別等は行っておらず、目視により確認したものを取り上げたものである。

2. I (A・B) 区出土の動物遺存体

I区は4次調査区の北東部、標高4.5～5mの沖積低地上に位置する。遺構は、1面(8世紀後半～9世紀)、2面(弥生時代中期中葉～古墳時代前期)、3面(弥生時代中期前葉～中葉)に分かれる。1面では水路・水溜状遺構・水田が検出され、集落域から離れた生産域(水田)と位置づけられる。2面では溝のほか掘立柱建物や土器の集中投棄地点が検出されることから、一部は集落域でもあったと考えられる。3面では溝のみが検出されている。動物骨が出土した遺構は、1面の水路SD0001・0002・0005上層、水溜状の大型土坑SD0029、落ち込みSX0025、水田SS0056～0060、2面の外来系土器片や鐔形土製品が出土したSD0003、木質遺物が多く出土した黑色粘土を埋土とする溝SD0042(西)・0053・0005・0032、絵画土器片・銅鏃・貨泉・木製有文布巻具などが出土した粘土と砂の互層を埋土とする流路SD0036・0034・0023、土器群SX0013、3面の丹塗土器が多く出土した黑色粘土を埋土とする溝SD0024・0012・0042(東)・SX0049である。

動物骨が出土した遺構の時期は弥生時代中期～後期と8世紀後半～9世紀の2時期に分かれる。このうち弥生時代の動物骨は55点で、SX0013の1点以外が溝からの出土である。動物種は腹足類(カワニシ?)が1点出土した他は、全て哺乳類である。腹足類(カワニシ?)は溝で自然死した個体の可能性があるものの、殻頂部と殻口部が欠損しており身を取り出した可能性も考えられる。ただ表面の遺存状態が悪く破損が人為的なものか否かは不明で、また被熱痕等は観察できなかった。哺乳類はイヌが2点、イノシシが12点、シカが18点、イノシシ・シカが8点、その他不明が13点である。イヌは大腿骨が1点、橈骨が1点とどちらも四肢骨で、大腿骨は化骨化が終了した成獣である。解体痕はみられない。橈骨は両端が欠損しており表面の遺存状態も悪く、年齢や解体痕の有無は不明である。イノシシは12点のうち9点と2/3以上が頭骨及び下顎である。年齢が推定できる5点のうち3点は若い個体である。シカについても18点のうち頭骨と角が6点、下顎及び下顎歯が4点と頭部が半数を超え、特にSD0042(西)からは同一個体と思われる頭骨と左右の下顎が出土している。年齢は年齢が推定できる骨のうち4点は若い個体である。

8世紀後半～9世紀の遺構から出土した動物遺存体は110点で、こちらも頭斧類が1点出土している他は哺乳類である。頭斧類は殻長が3.3cmと小型である。哺乳類はイノシシ、シカ、イルカ・クジラ類の野生動物(イノシシについてはブタの可能性もあるが)とウシ、ウマが出土した。動物種の割合はイノシシが4点(3%)、シカが5点(5%)、イノシシ・シカが2点(2%)、ウシが9点(8%)、ウマ

表1 I (A・B) 区出土動物遺存体(弥生時代)

地区	遺構番号	大分類	小分類	部位名	左右	部分1	部分2	成長度	切痕	火熱	備考	時代	
001	A区 SD0003	哺乳類	シカ	角		基部のみ		若獣	なし?	不明	自然落角か 傘部の差 2.7cmと細い	弥生時代後期前葉	
002	A区 SD0003	哺乳類	シカ	脛骨		近端関節面		骨化済み	不明	不明	イノシシ・シカの大きさ	弥生時代後期前葉	
003	A区 SD0003	哺乳類	シカ	長骨		細片化		不明	不明	不明		弥生時代後期前葉	
004	A区 SD0003	哺乳類	シカ	長骨		幹部		不明	不明	不明		弥生時代後期前葉	
005	A区 SD0005 1区	哺乳類	イノシシ・シカ	肩胛骨		小片		不明	不明	不明	肩口ややすバイララ状を呈す	細片化 弥生時代後期前葉	
006	A区 SD0005 2区 R28	哺乳類	イノシシ	前頭骨	左	額骨突起		若獣	不明	不明	遺存不良 ビビアナイト折出	弥生時代後期中葉	
007	A区 SD0005 2区 下層	哺乳類	イノシシ	指骨(末節骨)		遠端欠損		骨化済み	不明	不明	遺存不良	弥生時代後期中葉	
008	A区 SD0005 2区黒色粘	哺乳類	イノシシ・シカ	長骨		幹部		不明	不明	不明	ビビアナイト 遺存不良	弥生時代後期中葉	
009	A区 SX0013 R2	哺乳類	シカ	下顎骨		M1かM2				不明	歯冠高13.2mm	弥生時代中期後半	
010	A区 SD0024 トレC	哺乳類	イノシシ	頭骨		額部		不明	なし	不明		弥生時代中期後半	
011	A区 SD0024 トレC	哺乳類	イノシシ・シカ	上腕骨	左	遠位部		不明	なし	不明	遺存不良	弥生時代中期後半	
012	A区 SD0024 トレC	哺乳類	シカ	長骨		幹部		不明	不明	不明	遺存不良	弥生時代中期後半	
013	A区 SD0024 トレC	哺乳類	シカ	頭骨小片		外後頭隆起部		不明	不明	不明	遺存不良	弥生時代中期後半	
014	A区 SD0042(西) (SD03) R7	哺乳類	シカ	下顎	右			切歯なし	成獣	なし	歯冠高M3 8.8mm、M2 6.3mm、M1 5.2mm、P3 6.1mm、P2 6.1mm、P1 5.8mm	弥生時代後期前葉	
015	A区 SD0042(西) (SD03) R8	哺乳類	シカ	下顎	左			切歯なし	成獣	なし	下顎体の舌側M1下中央付近に径6mmの孔あり。人為的な孔か。	弥生時代後期前葉	
016	B区 SD0042(西) (SD03) R9	哺乳類	イノシシ・シカ	肋骨	左	近位欠損		骨化済み	内面に切痕	なし		弥生時代後期前葉	
017	B区 SD0003	哺乳類	イヌ	大腿骨	左	大頭骨頭欠損		骨化済み	なし	不明	細片化 Bd 20.9mm	弥生時代後期前葉	
018	B区 SD0003	哺乳類	イヌ?	脛骨	左	近端欠損		不明	不明	不明	表面遺存不良	弥生時代後期前葉	
019	B区 SD0003	哺乳類	シカ	腕骨	右	遠位欠損		近位部骨化済み	なし	不明	浸蝕イヌ咬痕。 Bp36.1mm。 ビビアナイト細片化	弥生時代後期前葉	
020	B区 SD0003	哺乳類	シカ?	脛骨	左	幹部のみ		骨化済み	なし	不明	全体にイヌ咬痕。 小型	弥生時代後期前葉	
021	B区 SD0003 北ベルト	哺乳類	イノシシ・シカ	上腕骨	右	遠位部		遠端関節部欠損	不明	なし		弥生時代後期前葉	
022	B区 SD0003 グリット1・2	哺乳類	イノシシ	肩胛骨	左	近位部欠損		細片化	骨化済み	不明	遺存不良	弥生時代後期前葉	
023	B区 SD0003 グリット1・2	哺乳類	シカ	脛骨		根元部欠損		成獣	なし	不明	加工痕なし 細片化	弥生時代後期前葉	
024	B区 SD0003 グリット10	哺乳類	シカ	脛骨	左	完形		骨化済み	なし	不明	GL35.6mm、GW(Dn) 19.8mm	弥生時代後期前葉	
025	B区 SD0003 グリット12	哺乳類	イノシシ	歯		細片						弥生時代後期前葉	
026	B区 SD0003 上面	哺乳類	イノシシ	上顎歯 1本	左	M2					前側が少し咬痕	弥生時代後期前葉	
027	B区 SD0003 ベルト	哺乳類	イノシシ	上顎歯	左	M3					咬痕わずか	弥生時代後期前葉	
028	B区 SD0003 ベルト	哺乳類	シカ	長骨		小片		不明	なし	不明		弥生時代後期前葉	
029	B区 SD0005 下層	哺乳類	イノシシ(オス)	下顎犬歯(牙)		細片				不明	ビビアナイト折出	弥生時代後期前葉	
030	B区 SD0023 東パフン・黄色砂層	哺乳類	シカ	脛骨	右	一部のみ		骨化済み	不明	不明	ビビアナイト折出 細片化	弥生時代後期末	
031	B区 SD0032 R2	哺乳類	シカ	角		細片化		不明	なし	不明		弥生時代後期中葉	
032	B区 SD0032 南区下層	哺乳類	イノシシ	頭骨		前頭骨		不明	不明	不明	赤変	遺存不良	弥生時代後期中葉
033	B区 SD0032 南区下層	哺乳類	シカ	肩胛骨	右	近位部で折れ		骨化済み	不明	なし	HS 146mm、LG 25.7mm、GLP 33.9mm、BG22.1mm ビビアナイト折出 細片化	弥生時代後期中葉	
034	B区 SD0032 南区上面	哺乳類	イノシシ	脛骨	左			骨化済み	あり	不明		弥生時代後期中葉	
035	B区 SD0032 南区上面	哺乳類	シカ	肩胛骨	右	細片化		骨化済み	近位部内面に切痕	不明	LG 30.1mm、GLP 34.8mm、BG 26.8mm	弥生時代後期中葉	
036	B区 SD0032 南区上面	哺乳類	シカ	角				なし	不明	不明	細片	弥生時代後期中葉	
037	B区 SD0034 黄色砂層	哺乳類	不明	長骨		幹部		不明	不明	不明		ビビアナイト折出 細片化	弥生時代後期末
038	B区 SD0034 (SD23 西側) 土器群	哺乳類	イノシシ	下顎切歯		細片						弥生時代後期末	
039	B区 SD0036 SX34 下層	哺乳類	不明			骨小片						弥生時代後期末	
040	B区 SD0036 下層褐色粘	哺乳類	シカ?	下顎		関節突起		未骨化?	不明	不明	遺存不良	弥生時代後期末	
041	B区 SD0036 下層ベルト	哺乳類	不明	長骨		幹部		不明	不明	不明	ビビアナイト折出 細片化	弥生時代後期末	
042	B区 SD0036 ベルト北	哺乳類	カワニシ?	腕骨		腕部		不明	不明	不明	遺存不良	弥生時代後期末	
043	B区 SD0036 ベルト北	哺乳類	シカ	左 上顎歯		1本					遠端と幾口欠損	弥生時代後期末	
044	B区 SD0036 ベルト北	哺乳類	不明	下顎の一部							遺存不良	弥生時代後期末	
045	B区 SD0036 ベルト北	哺乳類	不明	長骨		幹部小片					ビビアナイト小片化	弥生時代後期末	
046	B区 SD0042(東) (SX42) R1	哺乳類	シカ?	上腕骨	左	近位部欠損		遠端関節部欠損	不明	不明	小型	弥生時代中期前葉	
047	B区 SD0042(西) (SX42) R2	哺乳類	シカ	頭蓋骨				成獣	なし	なし	出土時は完形に近かったと思われるが、出土後ビビアナイト折出により細片化	弥生時代後期前葉	
048	B区 SD0042(西) 南区R4	哺乳類	イノシシ・シカ	肋骨		遠位部		遠端欠損	不明	なし		弥生時代後期前葉	
049	B区 SD0042(西) 南区R4	哺乳類	イノシシ・シカ	肋骨		近位部		近端欠損	不明	不明		弥生時代後期前葉	
050	B区 SX0049 SD29 下黒色粘土上面	哺乳類	イノシシ	下顎	左	下顎角		不明	不明	不明	遺存不良	弥生時代中期後半	
051	B区 SX0049 SD29 下黒色粘土上面	哺乳類	不明	長骨		幹部 小片		不明	不明	不明	遺存不良	弥生時代中期後半	
052	B区 SD0053	哺乳類	シカ	上腕骨	左	近位関節部未骨化		若獣	あり	不明	近位部イヌ咬痕、 Bd 40mm	弥生時代後期前葉	
053	B区 SD0053 R6	哺乳類	シカ	長骨		幹部小片				不明	イヌ咬痕あり 遺存不良	弥生時代後期前葉	
054	B区 SD0053 R7	哺乳類	イノシシ・シカ	肋骨	右	近端欠損		不明	あり	なし		弥生時代後期前葉	
055	B区 SD0053 R8	哺乳類	シカ	長骨		幹部小片		不明	なし	なし	ビビアナイト 細片化	弥生時代後期前葉	

が2点(2%)、ウシ・ウマが8点(7%)、イルカ・クジラなどの海獣類が3点(3%)、その他不明が20点(18%)を占める。イノシシは溝から出土しており、部位は下顎と下顎歯、肩甲骨、寛骨で、ここでも頭骨が出土している。シカは水田から出土しており、頸椎が2点の他に角、距骨、中手骨が1点ずつ出土した。いずれも表面の遺存状態が悪く、角に刃物痕らしき傷がある他は解体痕は確認できなかった。イノシシが溝から、シカが水田から出土する傾向があるが、出土した骨の点数が少なく、またイノシシとシカを区別できなかった骨があるため詳細は不明である。ウシは溝から多く出土しているが、出土部位は脛骨が1点出土している他は、手根骨や指骨など四肢の先端部分の解体時に廃棄されやすい部位が出土していることから、イノシシやシカ等も含めた解体・廃棄場所であった可能性が高いと思われる。ウマは2点のうち部位が特定できたのは大腿骨の1点のみ、しかも骨頭部分である。年齢は骨化が終了した成獣で、表面の残りが悪く、解体痕は不明である。イルカ・クジラ類は椎骨の横突起が1点と肋骨片が2点で横突起と肋骨のうち1点に切痕らしき刃物痕がみられる。イルカ・クジラ類は市内のこれまでの調査では古代の出土例は少なく、また遺跡の立地が海に面していないことから狩猟や分配について考える上で貴重な資料といえる。出土した部位は椎骨と肋骨で頭蓋骨や前鰭部分は出土していない。時期は異なるが古代末～近世の博多遺跡群で出土するイルカ・クジラ

表2 I (A・B) 区出土動物遺存体 (古代)

地区	遺構番号	大分類	小分類	部位名	左右	部分1	部分2	成長度	切痕	火熱	備考	時代
056	A区 SS0056(水田1) 下層	哺乳類	ウシ・ウマ	上腕骨		骨頭関節面のみ		化石化済み	なし	なし		8世紀後半
057	A区 SS0056(水田1) 下層	哺乳類	不明	下顎骨		上縁部	歯槽とその周辺	不明	不明	不明	イノシシ大 遺存不良	8世紀後半
058	A区 SS0056(水田1) 下層	哺乳類	不明	不明				不明	不明	不明	棒状 長さ6.4cm イルカ類か?	8世紀後半
059	B区 SD0001 黒褐色粘土層	哺乳類	不明	下顎の一部				不明	なし	不明		8世紀後半~9世紀
060	B区 SD0001	哺乳類	イノシシ	腕骨	左	腕骨白濁辺のみ		化石化済み	不明	不明		8世紀後半~9世紀
061	B区 SD0001	哺乳類	イノシシ	下顎	左?	M2~M3 近辺		不明	不明	不明	M2・M3 はかなり既耗している	8世紀後半~9世紀
062	B区 SD0001	哺乳類	ウシ	手根骨		semi-lunaire		化石化済み	なし	不明		8世紀後半~9世紀
063	B区 SD0001	哺乳類	不明	肩胛骨?		内側の一部か		不明	不明	不明		8世紀後半~9世紀
064	B区 SD0001	哺乳類	ウシ	手骨	左	遠位部欠損		化石化済み	不明	不明	遺存不良	8世紀後半~9世紀
065	B区 SD0002 ph24	哺乳類	ウシ・ウマ	肋骨 数点		細片化		不明	不明	不明	全て同一個体か不明	8世紀後半~9世紀
066	B区 SD0002 ph47	哺乳類	ウシ・ウマ	肋骨		細片化		不明	不明	不明	切痕の一部は調査時のものか	8世紀後半~9世紀
067	B区 SD0002 最下層黄色砂層	哺乳類	ウシ・ウマ	肋骨		小片		不明	不明	不明		8世紀後半~9世紀
068	B区 SD0002 最下層黄色砂層	哺乳類	ウシ・ウマ	肋骨		小片		不明	不明	不明		8世紀後半~9世紀
069	B区 SD0002 最下層黄色砂層	哺乳類	ウマ?	大腿骨	左	大腿骨頭のみ		化石化済み	不明	不明	遺存不良	8世紀後半~9世紀
070	B区 SD0002 最下層黄色砂層	哺乳類	不明	長骨		小片		不明	不明	不明	大型獣	8世紀後半~9世紀
071	B区 SD0002 南壁最下層(粗砂層)	哺乳類	ウシ・ウマ									8世紀後半~9世紀
072	B区 SD0002 東側地山直上	哺乳類	ウシ・ウマ	脛骨		遠位端関節面		化石化済み	不明	不明		8世紀後半~9世紀
073	B区 SD0002 東側地山直上	哺乳類	ウシ・ウマ	大腿骨		遠位部顆間窩		不明	不明	不明		8世紀後半~9世紀
074	B区 SD0002 東側地山直上	哺乳類	不明	長骨							大型獣	8世紀後半~9世紀
075	B区 SD0002 南側底面砂層	哺乳類	イルカ・クジラ類?	肋骨		小片		不明	不明	不明		8世紀後半~9世紀
076	B区 SD0002 南側底面砂層	哺乳類	イルカ類?	椎骨		横突起のみ		不明	あり	なし	小型種	8世紀後半~9世紀
077	B区 SD0002 南側底面砂層	哺乳類	不明					不明	不明	不明	大型種	8世紀後半~9世紀
078	B区 SD0002 南側底面砂層	哺乳類	不明								痕痕多数あり	8世紀後半~9世紀
079	B区 SD0005 上層	哺乳類	不明									8世紀前半
080	B区 SD0005 上層(粗砂)	哺乳類	不明	不明				化石化済み	不明	不明	細片化	8世紀前半
081	B区 SD0005 上層粗砂	哺乳類	ウシ・ウマ	中手・足骨		細片化		不明	不明	不明		8世紀前半
082	B区 SD0005 上層東側	哺乳類	イノシシ・シカ	長骨		幹部		不明	なし	不明	割れ口やヤスバイラル状を呈す	8世紀前半
083	B区 SD0005 西側	哺乳類	シカ	角?		角枝分岐部		不明	切痕か	不明		8世紀前半
084	B区 SD0029 SX04 西ベルト	哺乳類	ウシ	中手骨	左			化石化済み	不明	不明	真ん中で折れている 遺存不良	8世紀後半
085	B区 SD0029 水溜状遺構	哺乳類	不明	趾骨?		小片		不明	不明	不明	イノシシ・シカ大	8世紀後半
086	B区 SD0029 水溜状遺構	哺乳類	シカ	頸椎(軸椎)		前側の一部のみ		化石化済み	なし	不明		8世紀後半
087	B区 SD0029 下面清掃	哺乳類	ウシ?	上顎		上縁の一部		不明	不明	不明	遺存不良	8世紀後半
088	B区 SD0029 下面清掃	哺乳類	ウシ?	上顎		上縁の一部		不明	不明	不明	遺存不良	8世紀後半
089	B区 SD0029 下面清掃	哺乳類	不明	長骨		膝窩筋近辺		不明	不明	不明	遺存不良	8世紀後半
090	B区 SD0029 北ベルト上層粗土	哺乳類	ウシ	中手骨	右			化石化済み	不明	不明	取り上げ時完形だったがビビアナイト析出	8世紀後半
091	B区 SD0029 最下灰色粗砂層	哺乳類	不明					なし	なし	なし	1.5 x 6.5cmでほぼ平坦	8世紀後半
092	B区 SD0029 粗砂	哺乳類	イノシシ	下顎骨 1本		C(牙)					細片化	8世紀後半
093	B区 SD0029 粗砂中	哺乳類	不明			小片		不明	不明	不明	イノシシ・シカ大	8世紀後半
094	B区 SD0029 粗砂直上	哺乳類	ウシ	脛骨	右	近位端関節面の一部欠損		化石化済み	不明	不明	細片化	8世紀後半
095	B区 SD0029 粗砂直上泥炭状茶褐色粘土層	哺乳類	イノシシ	肩胛骨	左	遠位部		化石化済み	不明	不明	遺存不良	8世紀後半
096	B区 SD0029 粗砂直上泥炭状茶褐色粘土層	哺乳類	シカ?	頸椎(軸椎)		後側1/2欠損	横突起欠損	化石化済み	なし	なし	BFer 49.7mm	8世紀後半
097	B区 SD0029 粗砂直上泥炭状茶褐色粘土層	哺乳類	不明	腕骨?				化石化未了	なし	なし		8世紀後半
098	B区 SD0029 粗砂直上泥炭状茶褐色粘土層	哺乳類	不明	長骨		幹部		不明	不明	不明	遺存不良	8世紀後半
099	B区 SD0029 ベルト	哺乳類	ウシ	中足骨	右	近位部		化石化済み	不明	不明	細片化	8世紀後半
100	B区 SD0029 ベルト	哺乳類	不明	小片 4点				不明	不明	不明		8世紀後半
101	B区 SD0029	哺乳類	イルカ類?	肋骨		中央部		不明	不明	不明	切痕?	8世紀後半
102	B区 本田畦畔 黒灰色粘土層	哺乳類										8世紀後半
103	B区 SS0058(水田5) 足跡	哺乳類						不明	不明	不明		8世紀後半
104	B区 SS0058(水田5) 耕作土上層	哺乳類										8世紀後半
105	B区 SS0058(水田5) 耕作土上層SX04北区	哺乳類	ウシ	指骨	右			化石化済み	不明	不明	遺存不良	8世紀後半
106	B区 SS0058(水田5) 耕作土上層SX04北区	哺乳類	シカ	趾骨	右?	小片		不明	不明	不明	遺存不良	8世紀後半
107	B区 SS0058(水田5) 耕作土上層SX04北区	哺乳類	シカ	中手・足骨		幹部小片		不明	不明	不明	遺存不良	8世紀後半
108	B区 SS0058(水田5) 耕作土上層SX04北区	哺乳類	不明	大腿骨	左	遠位端関節面	内側顆欠損	化石化済み	不明	不明	大きさいヌ程度	8世紀後半
109	B区 SS0058(水田5) 耕作土上層	哺乳類	不明	不明		小片		不明	不明	不明		8世紀後半
110	B区 SS59・60(水田6・7) SD28・38 周区下灰褐色シルト上層	哺乳類	イノシシ・シカ	椎骨		小片 5点		不明	不明	不明	複数個体混じりか	8世紀後半

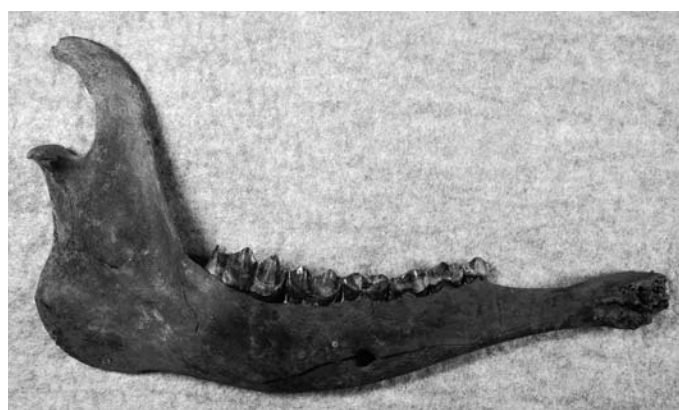


図1 シカ左下顎 (015) 舌側



図2 015穿孔部

類は連結した椎骨と細切れの肋骨片が出土することが多く、胴部は輪切りの状態で流通していたと考えられている。I 区のイルカ・クジラ類の出土状況はそれに似ていることから、海岸付近でイルカ・クジラ類を捕獲・解体したものが内陸の集落に持ち込まれたものと考えられる。

3. IV (D) 区出土動物遺存体

4次調査地点のうちIV区は丘陵から沖積地へ下る丘陵端部に位置し、上面で古代の水田層、下面では弥生時代中期から後期の集落が確認された。動物骨は、調査区北端で検出したSD752の暗灰色粘質土層上面から出土した。共伴遺物には多量の弥生土器のほか、木製品や自然木などの有機質遺物がある。有機質遺物は、グライ化した粘性の強い粘質土にパックされることで残存したものと考えられる。時期は、弥生時代後期終末頃と考えられる。骨はビビアナイトが全体に析出して劣化が著しく、下顎や上腕骨、橈骨などは細片化が進行している。そのため頭蓋骨、下顎骨や上腕骨、橈骨など体高の復元に必要な部位については、細片化を遅らせるためにバインダーを使い保存処理を行った。

動物遺存体はSD752から出土した46点で、このうち種不明の3点を除く全てがイヌの骨である。

この43点のイヌの骨は部位にダブリがないことや、いずれも化骨化が終了した成獣であることから、同一個体の骨である可能性が高いと考えている。種不明の骨の1点が陰茎骨でイヌ程度の大きさであることから、オスの可能性がある。矢状隆起は低いものの頭頂の全長にわたってみられ、ストップは小さく、鼻骨凹陷深は5mm前後である。頭蓋長は約15cmで、柴犬程度の大きさである。

調査担当者によると、骨は弥生時代終末に埋没した河川堆積層上層の流木の下から出土しており、木材同様に流されてきた可能性を述べている。出土状況(図4)をみると頭骨と下顎、尺骨、橈骨が河川堆積層から顔を出しているが、この骨を取り上げると下から次々と骨が出土したと述べており、河川堆積土中に散乱した状態ではなく、狭い範囲にまとまり、ある程度上下の高低差をもって埋没していたと考えられる。骨の取り上げは目視で確認した骨を取り上げており、周辺土壌の篩選別はおこなっていない。また、下層から出土した骨が関節が連結していたか否かは不明である。

写真1に関しては頭骨と下顎が元の位置関係に近く、その横では左右尺骨と橈骨が接して出土していることから、多少は元の位置関係を保っており、たとえ流されたとしても距離はわずかなものであったと推定される。骨には調査時についた擦痕が多く見られるが、それ以外に埋没前に付いた可能性がある切痕が数カ所あるため、このイヌは埋葬されたものではなく、解体後に廃棄されたものと思われる。出土部位は表4と図3で示した通り、四肢と頭骨～頸椎が主に出土しており、脊椎のうち胸椎から尾椎までと寛骨などの内臓を囲む部位の多くは出土していない。肋骨も半分程度である。その他に手根骨や足根骨、指骨等の手足先端の骨もほとんど出土していない。手足先端の骨は小さいため調査時に見逃したと考えられが、右側腓骨が完全に残るなど他の骨の遺存状況の良さから考えると、椎骨や寛骨については消滅や見逃しではなく、意図的な取捨選択の結果を示していると考えられる。出土状況からは頭骨と下顎、上腕骨と尺骨が連結状態に近い形で出土していることから、解体されたとしても完全にバラバラにはされておらず、頭と手足を切り落とし、胴体部分は他所に持ち去ったものと思われる。取捨選択の理由は不明であるが、筋肉が多い四肢骨部分と内臓では利用法が異なった可能性がある。

4. II (E) 区出土の動物遺存体

II (E) 区は4次調査の北西部に位置し、集落周縁部の低地にあたる。遺構の時期は弥生時代後期～古代である。各時期の遺構の性格は、弥生時代後期は溝とそこに投棄された土器群で、古墳時代以降は溝・貯木施設。流路・杭列・水田である。動物遺存体は3面調査区南半の溝とその周辺から多く出土しており、それらの溝からは生活に使用された甕などの土器が出土するとともに、木製品も出土している。遺物は弥生時代後期の土器が主体を占めるが、一部土師器も混じって出土する。

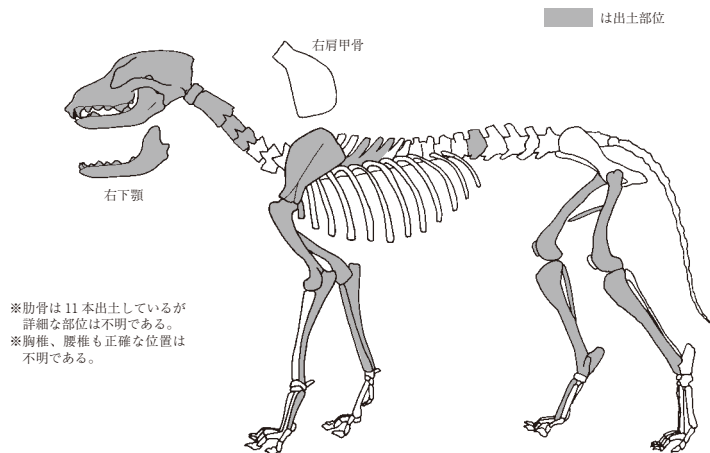
II (E) 区出土の動物遺存体の多くは取り上げ後に細片化しつつあり、切痕や被熱痕を観察できたものはほとんど無かった。II (E) 区から出土した動物遺存体は41点で、半分以上が溝から出土した。

表3 IV (D) 区出土動物遺存体

地区	遺構番号	大分類	小分類	部位名	左右	部分1	部分2	成長度	切痕	火熱	備考	時代
111	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	頭蓋骨		左側頰骨欠損		若~成獣	なし		歯は左側がP3のみ、右M2のみ	弥生時代終末
112	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	下顎骨	右	内突起先端をわずかに欠損		若~成獣	舌側復縁部	不明	Id-Goc 12.14cm, Cr-Gov 5.41cm P4とM2が歯冠まで残存、M1は歯根のみ	弥生時代終末
113	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	下顎骨	左	下顎枝欠損	歯はM2のみ	若~成獣	なし	不明	Id-Goc 12.11cm	弥生時代終末
114	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	上腕骨	右	遠端のみ		骨化済み	なし	不明		弥生時代終末
115	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	上腕骨	左			骨化済み	内側中央部	なし	GL13.1cm, Bp2.45cm, Bd2.44cm	弥生時代終末
116	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	尺骨	左	近位端欠損		骨化済み	内面中央部	一部黒色化?		弥生時代終末
117	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	尺骨	右			骨化済み	遠位部内面	不明	GL15.45cm	弥生時代終末
118	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	橈骨	右			骨化済み	なし	不明	GL13.32cm, Bp1.44cm, Bd1.92cm	弥生時代終末
119	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	大腿骨	右			骨化済み	後面中央近位寄り(調査時?)	不明	GL14.25cm, Bp2.98cm, Bd2.48cm	弥生時代終末
120	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	大腿骨	右			骨化済み	後面中央近位寄り(調査時?)	不明	GL14.32cm, Bd2.52cm	弥生時代終末
121	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	脛骨	右			骨化済み	内面(調査次?)	不明	GL13.92cm, Bp2.81cm, Bd1.83cm	弥生時代終末
122	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	脛骨	左	近端関節面の一部欠損		骨化済み	近位部側面	不明		弥生時代終末
123	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	腓骨	右			骨化済み	なし	不明	GL13.03cm	弥生時代終末
124	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	肩胛骨	左	近位部のみ		骨化済み	不明	若干多乳孔	GLP2.48cm	弥生時代終末
125	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	VC1(環椎)		左側の外側突起の一部を欠損		骨化済み	なし	不明		弥生時代終末
126	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	VC2(軸椎)				骨化済み	なし	不明	LCDe 3.94cm, LAPa 4.08cm	弥生時代終末
127	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	頭椎		横突起先端を欠損		骨化済み	なし	なし		弥生時代終末
128	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	頭椎		横突起と棘突起先端を欠損		骨化済み	なし	なし		弥生時代終末
129	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	胸椎		椎窩の舌側1/4を欠損		骨化済み	なし	多孔質		弥生時代終末
130	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	胸椎				骨化済み	なし	骨多乳孔		弥生時代終末
131	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	VT12 or13 (胸椎)		椎体左側後方から椎窩の一部欠損		骨化済み	なし	なし		弥生時代終末
132	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	腰椎		両横突起先端を欠損		骨化済み	下面にかすかな切痕	多孔質		弥生時代終末
133	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	肋骨	左?			骨化済み	なし	多孔質		弥生時代終末
134	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	肋骨	右?	遠位端欠損		骨化済み	なし	なし		弥生時代終末
135	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	肋骨	左?	遠端わずかに欠損		骨化済み	なし	多孔質		弥生時代終末
136	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	肋骨	不明	遠位部欠損		骨化済み	なし	なし		弥生時代終末
137	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	肋骨	右?	遠位部欠損		骨化済み	前面	なし		弥生時代終末
138	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	肋骨	左?			骨化済み	なし	なし		弥生時代終末
139	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	肋骨	右?			骨化済み	なし	多孔質		弥生時代終末
140	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	肋骨	左?			骨化済み	なし	なし	2つに折れている	弥生時代終末
141	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	肋骨	右?			骨化済み	遠端切痕らしき凹みあり	多孔質	遺存不良	弥生時代終末
142	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	肋骨	右?			骨化済み	なし	多孔質		弥生時代終末
143	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	肋骨	左?			骨化済み	なし	多孔質		弥生時代終末
144	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	不明	不明			不明	なし		イノシシ・シカの肋骨か	弥生時代終末
145	140と接合したので欠番											
146	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	踵骨	右			骨化済み	なし	不明	GL3.53cm, GB1.42cm	弥生時代終末
147	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	中手骨(Me IV)				骨化済み	なし	多孔質	GL5.34cm	弥生時代終末
148	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	中足骨(Mt II)				骨化済み	なし	不明	GL5.38cm	弥生時代終末
149	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	頭蓋骨		左側頰骨のみ		骨化済み	切痕?	不明		弥生時代終末
150	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	頭蓋骨		側頭骨	鼓室胞のみ	不明	なし	不明		弥生時代終末
151	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	長骨		幹部のみ		不明	擦痕あるが時期不明	なし	解れ口はスパイラル状を型すイノシシ・シカの四肢骨か	弥生時代終末
152	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	陰茎骨?		遠端を欠損		不明	なし	なし	大きさはイヌ程度	弥生時代終末
153	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	肩胛骨	イヌ?	近位部後角近辺の小片		不明	なし	なし		弥生時代終末
154	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	椎骨	イヌ?	横突起先端のみ		不明	擦痕あるが時期不明	なし		弥生時代終末
155	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	椎骨	イヌ?	棘突起先端のみ		不明	なし	なし		弥生時代終末
156	D区	暗灰粘質土層底面	哺乳類	上腕骨	イヌ?	幹部のみ	細片化	不明	切痕あるが時期不明	不明		弥生時代終末

表4 出土部位一覧

部位	本来の数	出土数
頭蓋骨	1	1
下顎	2	2
頸椎	7	4
胸椎	13	3
腰椎	7	1
仙骨	3	0
尾椎	16~23	0
寛骨	2	0
肩胛骨	2	1
上腕骨	2	2
尺骨	2	2
橈骨	2	1
手根骨		0
中手骨	5	1
指骨	15	0
大腿骨	2	2
脛骨	2	2
腓骨	2	1
踵骨	2	1
距骨	2	0
足根骨		0
中足骨	5	1
指骨	13	0
肋骨	左右で23本	11本



※肋骨は11本出土しているが詳細な部位は不明である。
 ※胸椎、腰椎も正確な位置は不明である。

図3 IV区イヌ出土部位

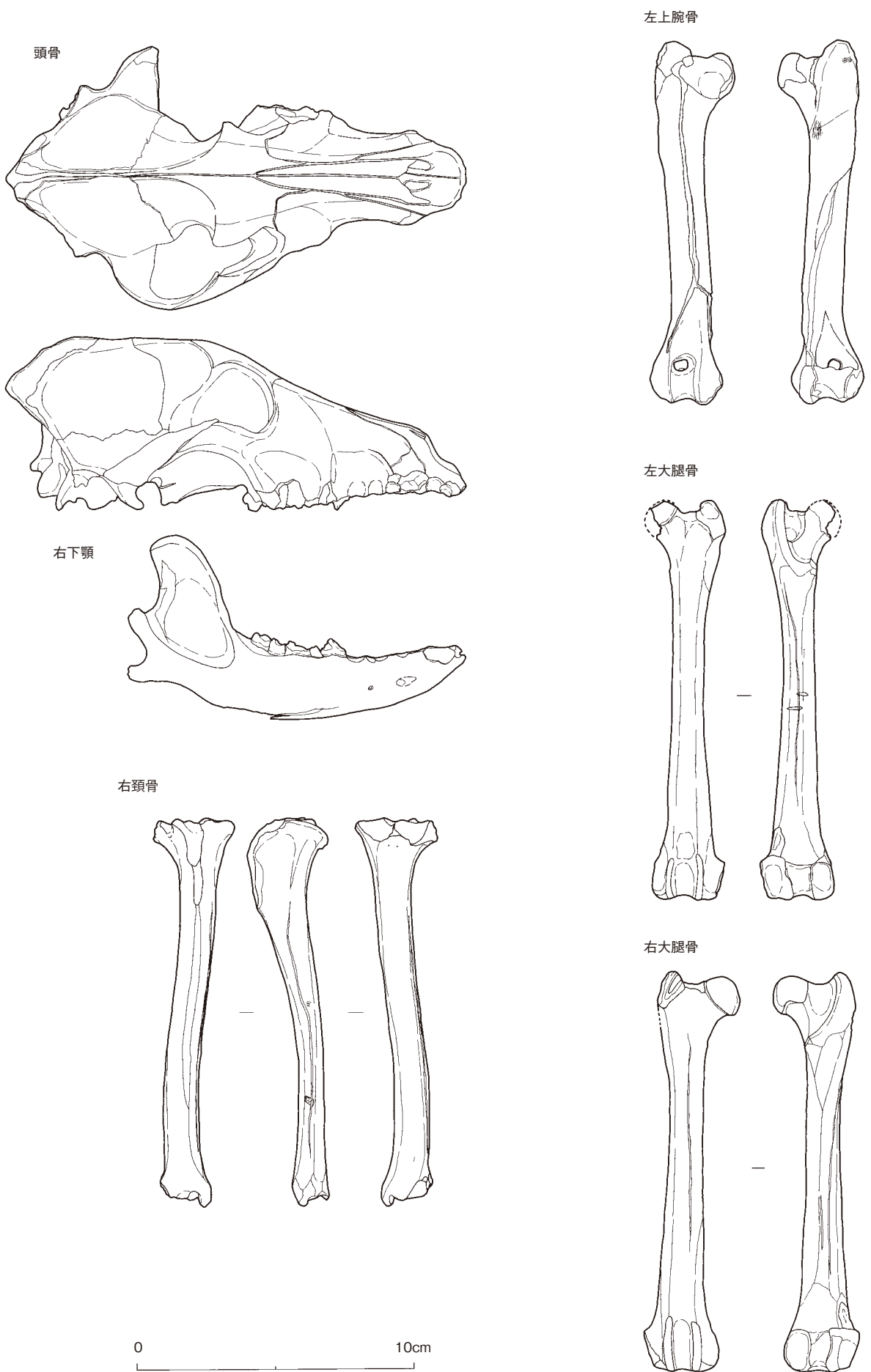


図4 IV(D)区 出土イヌ実測図(1/2)

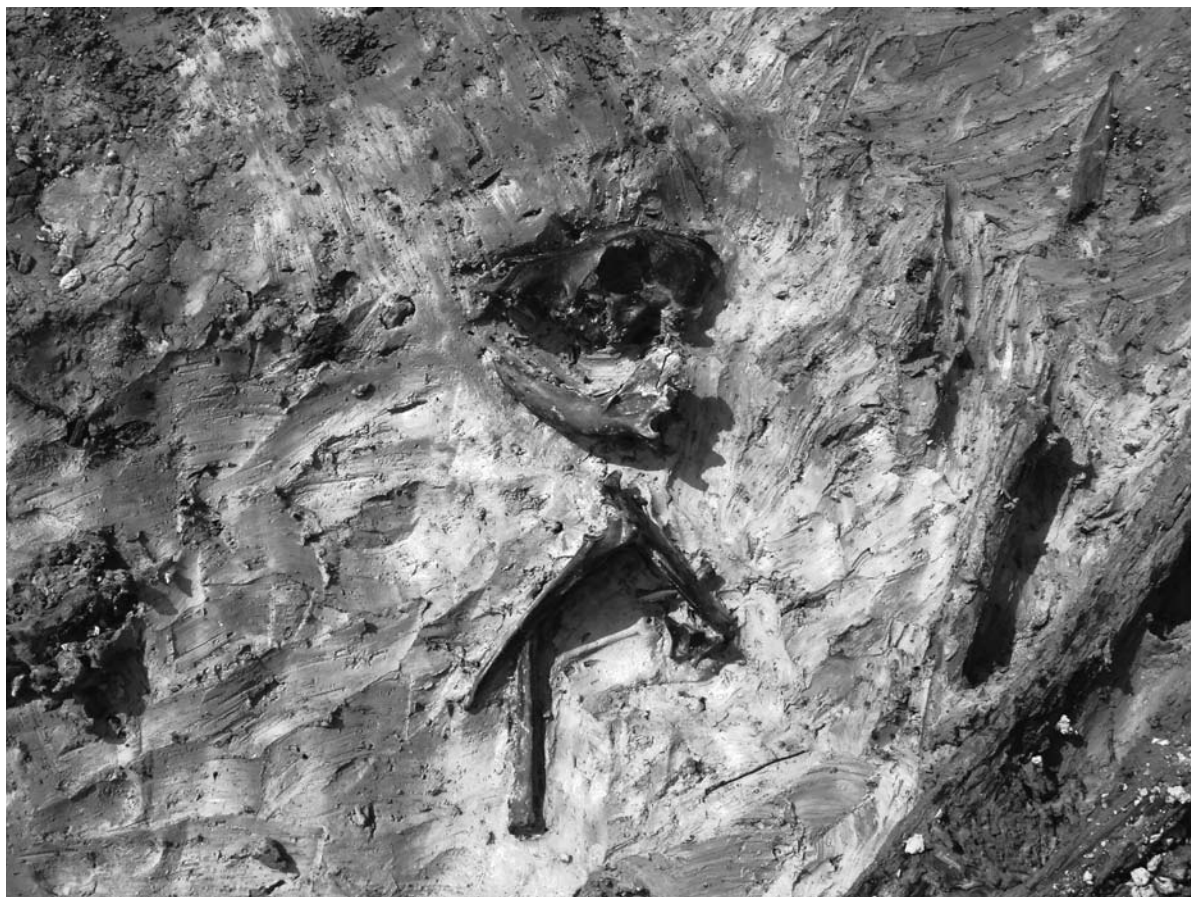


図5 IV (D) 区 イヌ出土状況



図6 イヌ頭骨左側面



図7 イヌ尺骨解体痕

時期は弥生時代後期と弥生時代後期～古墳時代前期を主とし、一部古墳時代後期を含む。

出土した動物遺存体はイノシシとシカである。出土した点数は弥生時代後期～古墳時代前期がイノシシ 12 点、シカ 5 点、古墳時代後期がイノシシ 1 点、シカ 2 点と弥生時代後期～古墳時代前期ではイノシシの割合が多い。出土部位はイノシシが頭骨、下顎、歯で 12 点中 8 点を占め、残りは肩甲骨（左右 1 点ずつ）、上腕骨（右遠位部が 2 点）である。シカも頭骨片と角で 3 点を数える。角の 1 点は自然落角したもので、骨角器の素材として持ち込まれたものと思われる。

5. 小結

4 次調査出土の動物遺存体の時期は大きく弥生時代後期～古墳時代と 8～9 世紀の 2 時期に分かれ

表5 II (E) 区出土動物遺存体

地区	遺構番号	大分類	小分類	部位名	左右	部分1	部分2	成長度	切痕	火熱	備考	時代
157	II区 SD065 5区	哺乳類	シカ	上腕骨	左	遠位部		化石化済み	不明	不明	Bd 3.95cm 細片化	古墳後期
158	II区 SD066	哺乳類	イノシシ	肩甲骨	左	遠位部	関節上結節欠損	化石化済み	不明	不明	遺存不良	弥生終末～古墳前期
159	II区 SD066	哺乳類	イノシシ	下顎	左	M3 周辺部	歯はM3のみ	M3 萌出中	不明	不明	表面遺存不良	弥生終末～古墳前期
160	II区 SD066	哺乳類	イノシシ	下顎歯	右	M3のみ		咬耗ほとんどなし	不明	不明	表面遺存不良	弥生終末～古墳前期
161	II区 SD066	哺乳類	シカ	肩甲骨	右	遠位部	肩甲棘欠損	化石化済み	あり	不明	GLP約4cm、LG約3.2cm 表面遺存不良	弥生終末～古墳前期
162	II区 SD066 1区	哺乳類	イノシシ	歯小片		M2 or M3		咬耗弱 成獣	不明	不明		弥生終末～古墳前期
163	II区 SD073 3区	哺乳類	シカ	角	右	根元部分	遠位部欠損	成獣	不明	不明	表面遺存不良	古墳中期～後期
164	II区 SD077	哺乳類	不明	上腕骨		遠位部	遠位部欠損	不明	不明	不明	大きさイヌ程度	弥生後期
165	II区 SD077	哺乳類	イノシシ	上顎歯	左	M1		少し咬耗している	不明	不明	L2.19cm、B1.67cm	弥生後期
166	II区 SD077	哺乳類	不明	長骨		幹部小片		不明	不明	不明	遺存不良	弥生後期
167	II区 SD077(掘り過ぎか)	哺乳類	イノシシ	側頭骨	右	小片		不明	不明	不明	遺存不良	弥生後期
168	II区 SD077	哺乳類	イノシシ・シカ	脛骨	左	近位側幹部		不明	不明	不明	表面遺存不良	弥生後期
169	II区 SD078 1区上層	哺乳類	シカ	上腕骨	右	遠位部		化石化済み	不明	不明	遺存不良	弥生後期～古墳前期
170	II区 SD078 1区上層	哺乳類	不明	不明								弥生後期～古墳前期
171	II区 SD078 1区上層	哺乳類	不明	不明								弥生後期～古墳前期
172	II区 SD078 上層	哺乳類	イノシシ	肩甲骨	左	遠位部	遠位部欠損					弥生後期～古墳前期
173	II区 SD078 下層	哺乳類	不明	不明								弥生後期～古墳前期
174	II区 SD078 2区上層	哺乳類	イノシシ	上腕骨	右	遠位部	遠位部欠損	不明	不明	不明	表面遺存不良	弥生後期～古墳前期
175	II区 SD078 2区上層	哺乳類	不明	長骨		幹部	径の1/2欠損	不明	不明	不明		弥生後期～古墳前期
176	II区 SD078 2区上層	哺乳類	イノシシ・シカ	上腕骨?		遠位部	遠位部欠損	不明	不明	不明	遺存不良	弥生後期～古墳前期
177	II区 SD078 2区上層	哺乳類	不明	脛のみ				不明	不明	不明	大型獣 細片化	弥生後期～古墳前期
178	II区 SD078 2区上層	哺乳類	シカ?	角?		細片		不明	不明	不明	遺存不良	弥生後期～古墳前期
179	II区 SD078 2区上層	哺乳類	イノシシ・シカ	長骨		幹部		不明	不明	不明	表面遺存不良	弥生後期～古墳前期
180	II区 SD078 2区下層	哺乳類	イノシシ	上腕骨	右	遠位部		化石化済み	不明	不明	遺存不良	弥生後期～古墳前期
181	II区 SD078 2区下層	魚類	不明	主上顎骨?	不明	遠位部?	径の1/2欠損	不明	なし	なし		弥生後期～古墳前期
182	II区 SD078 2区下層	哺乳類	不明	長骨		幹部	細片化	不明	不明	不明	表面遺存不良	弥生後期～古墳前期
183	II区 SD078 2区下層	哺乳類	イノシシ・シカ	腰椎		椎体のみ		椎端板未化石	不明	不明	表面遺存不良	弥生後期～古墳前期
184	II区 SD079	哺乳類	イノシシ・シカ	上腕骨		遠位部	1/2欠損	不明	不明	不明	遺存不良	弥生後期
185	II区 SX084	哺乳類	シカ	角		根元部分	小片	成獣	不明	不明	自然落角 遺存不良	弥生後期か
186	II区 SX084	哺乳類	イノシシ	歯の小片		M2 or M3		咬耗強 成獣	不明	不明	なし	弥生後期か
187	II区 SX084	哺乳類	シカ?	頭骨	左	側頭骨		化石化済み	不明	不明	遺存不良	弥生後期か
188	II区 SX084	哺乳類	イノシシ・シカ	長骨		幹部小片	径の2/3欠損	不明	なし	なし	イヌの咬痕あり	弥生後期か
189	II区 SX084	哺乳類	イノシシ・シカ	腰椎		椎体のみ		前後椎端板未化石	不明	不明	遺存不良	弥生後期か
190	II区 SX084	哺乳類	イノシシ・シカ	長骨		遠位部		遠位部面未化石	なし	不明	遺存不良	弥生後期か
191	II区 SX084	哺乳類	イノシシ・シカ	脛骨	左	両端欠損	不明	不明	不明	不明	遺存不良	弥生後期か
192	II区 SX084	哺乳類	イノシシ	歯		点					遺存不良	弥生後期か
193	II区 SX084	哺乳類	イノシシ	下顎 牙		細片化						弥生後期か
194	II区 SD091	哺乳類	不明	脛のみ				不明	不明	不明	遺存不良	古墳前・中期
195	II区 2～3面掘り下げ 2区	哺乳類	イノシシ	上腕骨	左	遠位部	遠位部欠損	不明	不明	不明	表面遺存不良	古墳後期
196	II区 SD077と078の間 2区	哺乳類	不明	長骨		幹部		不明	不明	不明	遺存不良 太さイノシシ・シカ程度	弥生後期か
197	II区 6区西側水田	哺乳類	不明	脛のみ				不明	不明	不明	遺存不良	古墳後期

る。

弥生時代後期の遺構からはイノシシ、シカ、イヌが出土した。イノシシ、シカはI (A・B) 区、II (E) 区とも頭骨と下顎の割合が高いのが注目される。特にI 区SD0042 (西) からは頭骨と下顎が揃って出土した他、下顎体 (表1 015) には舌側のM1付近に径6mm程の穿孔が施されており、祭祀に使用された可能性が高いと思われる。同じく福岡空港内の低地部分に位置する雀居遺跡ではイノシシ下顎骨の下顎枝部分に穿孔したものが出土しており、祭祀に使用されたと推定される (『雀居9 (別冊) 福岡市埋蔵文化財調査報告書748集 2003』)。ただ、シカの距骨など足の末端に近く解体時に廃棄されやすい部位も出土していることから、解体・廃棄場所も兼ねていたものと思われる。

イルカ・クジラ類は市内では13世紀頃から多く出土するようになるものの、8世紀頃の出土例は少ない。中世同様、海岸部で水揚げされた後、胴部を輪切りにしたブロック状で持ち込まれたものである。ウシは手足の先端の骨も出土しており、解体・骨の廃棄場所であったと考えられる。

IV (D) 区出土のイヌは主要な四肢骨が残っており、体高復元等が可能である。ただバインダー処理を行ったものの現在も細片化が進行しているため将来的に残すのは困難である。

イヌはI (B) 区の弥生時代後期の溝からも出土している。IV (D) 区出土のイヌの骨には解体痕らしき切痕が残る。骨端部が化石化して間もない若い成獣で、食料として飼われていた可能性がある。

※文中における各調査区の時期や遺構の説明は各調査担当者による記述である。

※骨の計測法は『A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES』ANGELA VONDEN DRIESCH 1976による。

※骨の同定には独立行政法人奈良文化財研究所環境考古学研究室の現生資料を使用すると共に研究室の方々からは多くの助言を得た。

報告書抄録

ふりがな	くぼぞのいせき4 - だい4じちょうさほうこく -							
書名	久保園遺跡4							
副書名	—第4次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1148集							
編著者名	榎本 義嗣(編) 池崎 讓二 今井 隆博 板倉 有大 比嘉 えりか							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092 - 711 - 4667							
発行年月日	2012年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
くぼぞのいせき 久保園遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくひがしひろお 博多区東平尾	40132	020083	33° 35' 01"	130° 27' 21"	20080714 ～ 20100827	5140.0	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
久保園遺跡	集落 田畑	弥生時代 古墳時代 古代	掘立柱建物、溝、井戸、 土坑、水田、水路	弥生土器、土師器、須恵 器、黒色土器、土製品、 木製品、石製品、青銅製 品、鉄製品、獣骨、種実		弥生時代中期から後期にか けての大規模な集落を検出 した。また、古墳時代から 古代にかけての水利施設を 伴う水田の変遷が明らかと なった。		
要約	<p>久保園遺跡は、福岡平野の東を限る月隈丘陵とその西側に広がる沖積平野に立地する遺跡である。今回の調査地点は遺跡西側に位置し、南東部では丘陵端部、北西側では沖積地となり、遺構面の標高は約5～6mを測る。</p> <p>丘陵裾部では、上層の一部に古代の整地層が認められ、下面では弥生時代中期から後期の集落が広がる。井戸や祭祀土坑、礎板を用いた掘立柱建物、周溝上の溝が検出できた。</p> <p>沖積地では、弥生時代中期から後期の溝や水利施設を伴う古墳時代前期から古代の複数の水田面を確認した。弥生時代の溝は丘陵部と沖積地の境界部に設置され、多量の木製品が出土した。水田関連遺構では、古代糸里方向に合致する畦畔や木杭による護岸を伴う用水路、粗砂に覆われた足跡が良好に検出できた。</p> <p>今回の調査では、弥生時代中期から集落化が本格的に始まり後期まで継続することや、古墳時代から古代にかけて継続した水田経営が行われていたことが判明した。</p>							

くぼぞの
久保園遺跡 4

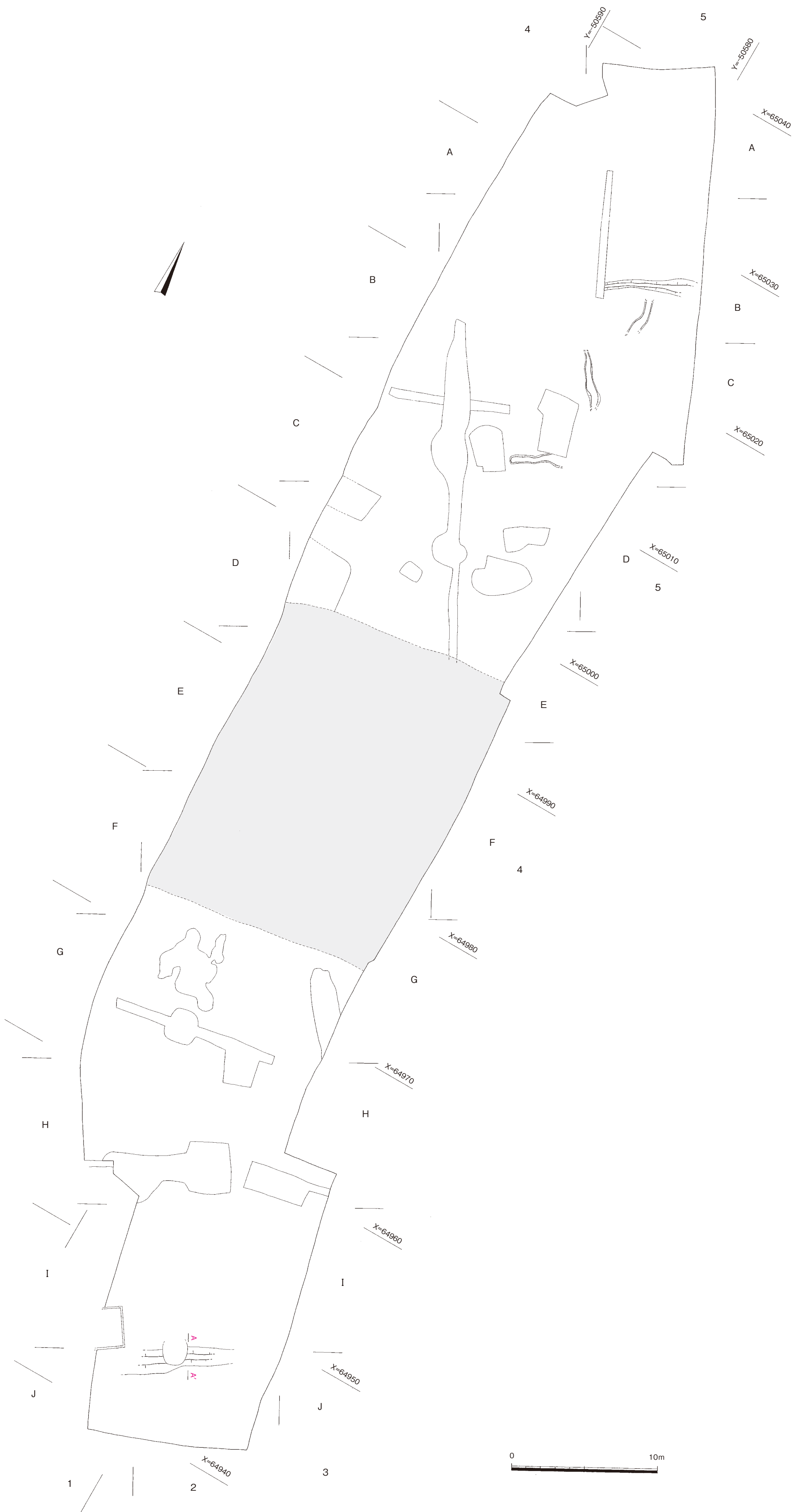
—第4次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1148集

<本文編>

2012(平成24)年3月16日

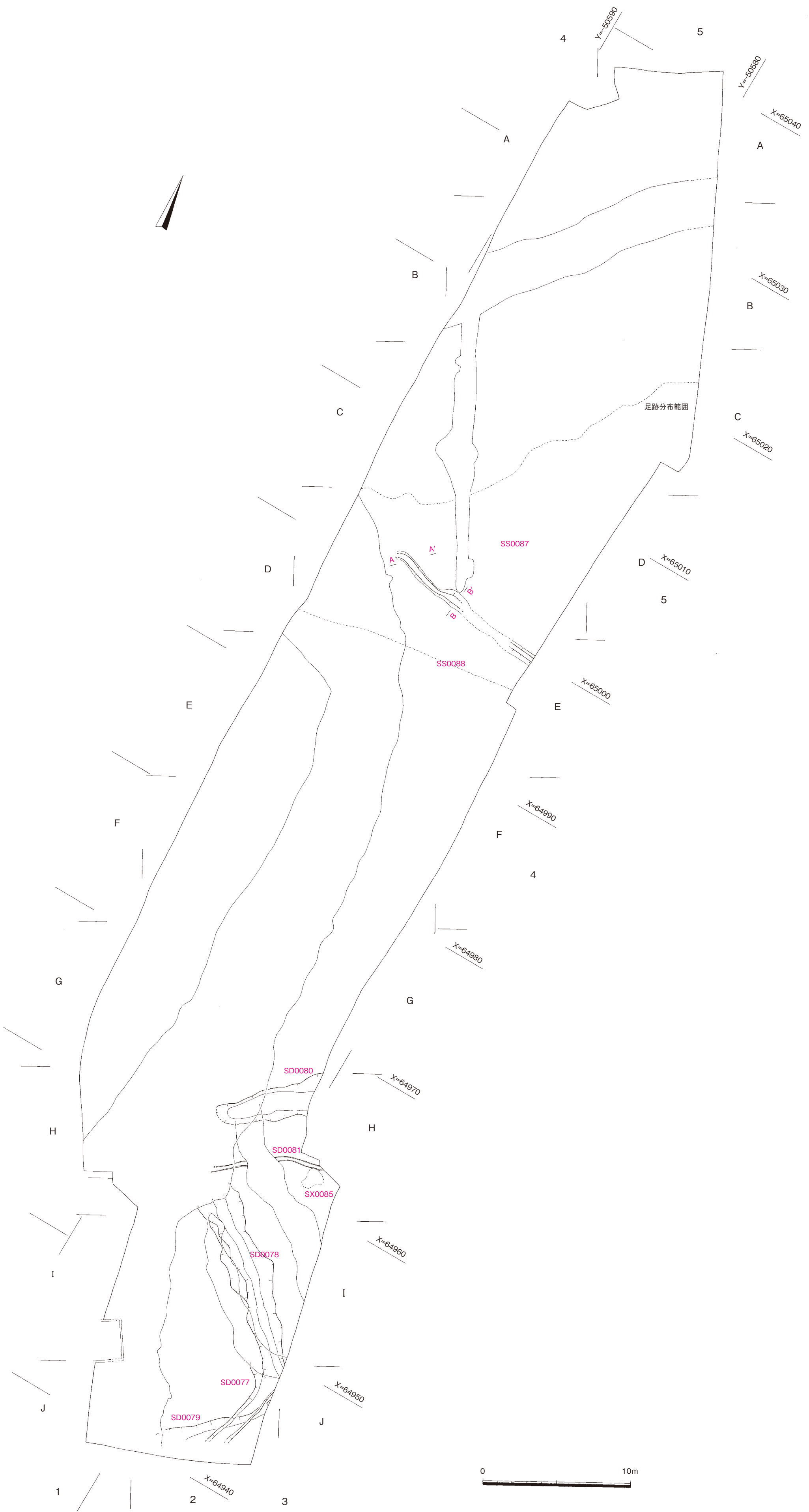
発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092) 711 - 4667
印刷 秀巧社印刷株式会社
福岡市南区向野2-13-29
(092) 541 - 5671



付図1 II区1面全体図 (1/200)



付図2 II区2面全体図(1/200)



付図3 II区3面全体図(1/200)